

仮面ライダーディナ

黒井福

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遺伝子……それは人類を次のステップに引き上げる可能性を持つ希望であり、同時に世界を滅ぼしかねない災厄を持つ。

迂闊に手を出してはならぬ、正しく現代のパンドラの箱。

そのパンドラの箱に手を出す者達が居た。世界的な大手製薬会社である『傘木社』、そしてその尖兵にして悪意の産物である『ファッジ』。

社会の裏で蠢き、人々の安寧を脅かす怪物の存在に、人々は密かに恐れを抱いていた。そんな世界で、希望を掴む為に戦う者が居た。

彼の名は『門守 仁』。またの名を仮面ライダー……『仮面ライダーデイナ』。災厄を

振り払い、希望を掴み取る探究者。

「さて、検証の時間だ」

今ここに、進化の扉は開かれる！

追記

R—18版始めました（<https://syosetu.org/novel/260388/>）

*2021/4/21：タイトル及び主人公の変身するライダー名を一部変更しました。

目次

番外編：真夏の愛のカミングアウト

1

登場人物

ライダーデータ

第1話：扉、開かれる時

第2話：進化の始まり

第3話：テイク・オフ

第4話：ゲノムチェンジ

第5話：執念が齎すもの

第6話：獅子の目覚め

第7話：出会う者達

223

195

168

137

114

76

50

40

32

第8話：彼は全てを受け入れる

252

第9話：亜矢の気持ち

第10話：決意の選択

第11話：避けられぬ敵

第12話：失われた半身

第13話：君のだから

第14話：蜘蛛の強襲

第15話：亜矢の知らない亜矢

469

第16話：彼女はずっとそこに居た

496

第17話：眠り続ける兄

534

434

404

369

343

306

278

第18話：電光石火の頭脳	—	554
第19話：動き出す司法	—	587
第20話：見通す者、その名はスコープ	—	612
第21話：悪魔の発明	—	640
第22話：勝利の為のシェイクハンズ	—	662
第23話：告げられる想い	—	700
第24話：輝きを増す瞬間	—	729
第25話：暗闇から迫るもの	—	755
第26話：真矢の抱える孤独	—	775
第27話：太古からの贈り物	—	808
第28話：2人だけの研究発表会	—	—
第29話：近づく再誕	—	831
第30話：鍵の完成	—	856
第31話：危険な産声	—	906
第32話：遺伝子の反乱	—	932
第33話：畏怖の視線	—	958
第34話：亀裂の入った関係	—	978
第35話：亜矢の涙	—	1006
第36話：呼び覚まされる力	—	1033
第37話：鍵が開く時	—	1054
第38話：大きな一歩	—	1085
第39話：親子そっくり	—	1118
第40話：母は強し	—	1146

第 4 1 話：不完全な協和	1169
第 4 2 話：彼女達は 2 人で 1 人	
第 4 3 話：親を知る時	1196
第 4 4 話：流れ、変わる時	
第 4 5 話：供物にされる者達	
第 4 6 話：狙われた仁	
第 4 7 話：来るべき時	
第 4 8 話：開く扉	
第 4 9 話：新たななる生命の誕生	1367
第 5 0 話：雌雄が揃う	
第 5 1 話：風は寒く、心は温かく	1391

第 5 2 話：可能性を秘めた遺伝子	1416
第 5 3 話：欲するもの	1435
第 5 4 話：遺伝の法則	
第 5 5 話：あまりにも苦すぎる味	1519
第 5 6 話：生命の力	
第 5 7 話：本当の居場所	
第 5 8 話：愛するが故に	
第 5 9 話：力は相応しき者の手に	1612
第 6 0 話：希望の一步	1634
第 5 8 話：愛するが故に	1583
第 5 7 話：本当の居場所	1559
第 5 6 話：生命の力	1538
第 5 5 話：あまりにも苦すぎる味	1493
第 5 4 話：遺伝の法則	1468

第 6 1 話：十数年越しの親孝行

1663

第 6 2 話：終わりと始まり

第 6 3 話：聖夜を越えて

第 6 4 話：破滅の不死鳥、降臨

1745

第 6 5 話：生存競争

最終話：海原を越えて未来へ

特別編『Next game at s

ea』

第 1 話：時は流れて

第 2 話：2年越しの悪意

第 3 話：受け継がれる母は強し

18501836

18201783

17201686

第 4 話：Good luck

1881

番外編：真夏の愛のカミングアウト

季節は夏。暑い日差しに湿った空気と、気が滅入る人も多いこの季節だが楽しみがない訳ではない。夏祭りにキャンプ、花火大会と楽しいイベントが目白押しだ。

海水浴も忘れてはならない。夏の気温と強い日差しのこの季節でしか味わえない、広々とした海で過ごす一時は何物にも代えがたい娯楽の一つだろう。

とは言え仁にとってはそれも特に興味のない事。卒論研究に加えて仮面ライダーとしての戦いがある彼と亜矢には、海水浴などに現を抜かしている余裕はない。

そんな彼らに、薫が声を掛けてきた。

「実はな、ウチの教授が他の研究室の連中も誘って海水浴に行かないかって話をしてたんだよ」

「何でまた？」

「山根教授って結構金持ちでさ、この季節になると他の研究室の連中も纏めて日頃の研究の疲れを労うって名目で海とかキャンプに連れてってくれるんだよ」

そう言えば去年、この時期に研究棟がやけに静かだったことを思い出した。その頃はまだ研究室に所属していなかった為あまり気にしてはいなかったが、ここで漸くその理

由を知った。

「門守も一緒に来ねえか？ 何時も研究とかばつかで大変だろ？ 偶にはハメ外して遊

ぼうぜ！」

「ん〜……でもなあ……」

薫は誘われた際、最初仁は同行を渋った。そもそも海水浴に興味はなかったし、自分が抜けるとファッジ絡みの事件が起きた際に対処が遅れるかもしれないからだ。

しかし次の薫の言葉に仁は大きく心を揺さぶられた。

「でもお前もさ、双星さんの水着姿とか見たいと思わねえ？」

「……………思う」

亜矢はこの季節でも露出の少ない恰好をしている。流石に生地は薄く多少は体のラインが見える服装になっているとは言え、それでも極力肌が見えない服装をしている事が多かった。

仁も唸るほどのスタイルの良い亜矢の水着姿。最愛の恋人の普段は見れない水着姿に、興味が無いと言えればそれは嘘になった。

沈黙の果てに頷いた仁に、薫は楽しそうに笑みを浮かべた。

「よっしゃ！ 門守と双星さんも参加な。山根教授には伝えとくから、当日を楽しみに待ってろよ！」

薫は笑顔で手を振って仁から離れて行く。彼を見送った仁は平常を装っていたが、その頭の中は来る海水浴で亜矢がどんな水着を見せてくれるのかと期待に胸を膨らませていた。

そして海水浴当日。仁と亜矢は指定された海水浴場に近い場所の駅に到着していた。

周りには同様に山根研究室に呼ばれ、海水浴に参加する学生達がチラホラ居た。

その中には美香の姿もあり、彼女は亜矢と談笑していた。

「やつほ！ 亜矢も来たんだ？」

「折角のお呼ばれですし、偶にはって思ってた」

「ふくん……愛しの門守君を誘惑する準備はオツケーって事？」

「ゆ、誘惑って——!?!」

美香の言葉に亜矢は顔を赤くするが、彼女の言葉は間違っていないかった。

遡る事数日前。まだ山根研究室からの海水浴への招待の声が掛かるよりも前に、亜矢

はこつそり水着を用意していた。言わずもがな、仁を海水浴に誘う為だ。

割と真剣な真矢との協議の結果、亜矢はワンピースタイプの水着を選んだ。真矢としては本当はビキニタイプを選びたかったが、よくよく考えれば亜矢のお腹には過去の事故とその治療の結果残った傷跡がある。仁ならともかく、他の何も知らない連中にまで見せたいものではない。

それでも亜矢は、緊張半分自信半分で仁に水着姿を披露する時を楽しみにしていた。自分の水着姿を見た時、仁はどんな反応を見せてくれるかと。

彼女の水着姿を楽しみにしているのは仁だけではなかった。この場には山根研究室の学生に招待されて他の研究室の学生も来ているのだが、その人数が嫌に多い。その大半は男子学生だが、彼らの狙いは言うまでも無く亜矢であった。

実を言うと山根研究室の学生が呼んだのはこれよりもっと少ない人数だったのだが、どこからか亜矢も参加するという話が漏れると多くの男子学生が集まってきたのだ。普段見る事の叶わない、亜矢の水着姿を目に収める為に。

「ふ、ふ、ふ………双星さんの水着姿——！」

その中には以前仁にこつてり絞られた筈の貞助の姿もあった。彼もまた噂を聞きつけて、人知れず集まってきていたのだ。

物陰から亜矢の姿を見て怪しい笑みを浮かべる貞助の姿に、近くに居る者達は顔を顰

めて視線を外す。

そうこうしていると、山根教授が到着し移動の時間となった。仁と亜矢を含んだ明星大学の学生一同はそろそろと教授の後に続いて海水浴場へと向かう。

海水浴場に到着した仁達は、専用の更衣室で男女に分かれて水着に着替える。男子学生の人数が多く、男子更衣室がぎゅうぎゅう状態での着替えに流石の仁も少々辟易したがそれでも仁を含め男衆は早々に着替え終わった。

後は女子が出てくるのを待っただけ。仁や薫は更衣室の外でチラホラと出てくる女子をじっくり待っていた。

「期待してるか、門守？」

「亜矢さんの水着姿？ まあ……ね」

「いや、ダチとしてお前に女が出来てくれた事が俺は嬉しいよ。うん」

本心の言葉だ。薫は自分の事を棚に上げて、仁に彼女が出来た事を心の底から安堵していた。

「そういう五十嵐はどうなのさ？ 仲の良い女子とかいないの？」

「ん、生憎と出会いに恵まれなくてなあ。ま、俺には化石ちゃんが居るから寂しくないがね」

「ま、そっちがそれで良いなら俺からは何も言わないよ」

他人の色恋に口出しするのは野暮な話。仁はそれ以上薫の人間関係に突っ込む事無くその話題を終わらせた。

仁と薫の話題が一段落したその時、周囲の男子がにわかになぎわつき始めた。何事かと周囲を見渡すと、男子の視線が更衣室の方に向いていた。

釣られて仁と薫がそちらに目を向けると――

「あ、あの、仁くん……」

更衣室から出てきた亜矢が美香と共に立っていた。周囲からの男子の視線に居心地が悪いのか、若干顔を俯かせながらも頬を赤く染めて仁の顔をチラチラ見ている。

「ど、どうですか?」

亜矢が身に付けているのは青いワンピースタイプの水着だった。ビキニに比べれば露出の少ないワンピースタイプの水着だが、しかし胸元は大きく開いており豊満な亜矢の胸の谷間が丸見えだ。更に、彼女は水着の上からパーカーを羽織っているので分かり辛いが、背中が大きく開いており後ろはうなじから腰まで丸見えだった。

何より普段露出の少ない服装をしている彼女が、健康的な肌を惜しげも無く曝け出していると言う所に男子は全員視線を釘付けにされていた。

そんな男子の視線を一身に集める亜矢の視線を独り占めする仁は、暫しの間彼女の水着姿に見惚れていた。

「あ、あの、仁くん？」

「ん？ あ、いや……似合ってるよ。凄く」

「あ、ありがとうございます！」

若干不安そうな顔をした亜矢に再起動した仁は素直に亜矢の水着姿を褒めた。

言つては何だが、彼は彼女とは既に肌を重ねた身なので、彼女の素肌も見慣れたものだった。しかしそれはそれとして、水着姿の彼女はまたそれとは違う魅力があり仁も思わず見惚れてしまったのだ。

甘酸っぱい雰囲気醸す2人に美香は満足そうに頷き、そつと2人から距離を取つた。愛し合う2人にとって、自分は邪魔にしなければならない。

しかし折角美香が気を利かせても、状況が2人だけの空間にする事を許してくれなかった。

「双星さん！ 折角だから俺と一緒に泳いでくれないか！」

「いや、是非俺と！」

「ふ、双星さん——！」

「ええい邪魔だお前ら!!? 双星さん、俺と一緒に!!」

美香が亜矢の傍から離れた瞬間、男共は仁を押し退けて亜矢に殺到した。その勢いは仁も思わず啞然としてしまう程だ。

「え!? え、あ、あの……」

今し方亜矢が仁にのみ感想を聞いた事も忘れ、自分に群がつてくる男共に亜矢もタジタジとなつてしまう。本当は仁ともっと触れ合いたかったのだが、群がる男達の所為でそれも儘ならない。

騒ぎはそのまましばらく続き、山根教授の制止でとりあえずの落ち着きを取り戻し一団は浜へと向かつて行つた。

浜へと到着してから、彼らは思い思いに海を楽しんでいた。海に入つて海水を掛け合う者達も居れば、少し沖の方まで遠泳を楽しむ者達も居るし、浜でビーチボールでビーチバレーに興じる者も居た。

亜矢もその例に漏れず、久々の海を美香たち友人達と共に楽しんだ。

仁はと言うと、どうにも気分が乗らないのでパラソルの下で海を楽しむ亜矢達の様子を眺めていた。時折仁の視線に気付いた亜矢が、笑みを浮かべて手を振つて来るの hands を振り返して応える。

その時、仁の耳に近くで休んでいる男子の声が響いた。

「いや、予想しちゃいたけどやっぱ双星さんヤベエ体してるよな?」

「ほんとほんと。服の上からでもデカいだろうとは思つてたけど予想以上だよ」

「あの水着姿を拝めただけでも来て良かったって思うぜ」

「全くだ」

横から聞こえる男子達の会話に、仁はムスツとした顔になる。彼らだけでは無いのだ。先程から似たような会話を何度も聞いて、その度に仁は心にモヤモヤした物を感じていた。

彼らは何も分かっていない。確かに亜矢はスタイルは素晴らしい。しかし彼女の魅力はそれだけではないのだ。それを理解しようともせず、体だけで彼女を褒めているのが仁にはどうにも気に入らなかつた。

仁が珍しく一人不機嫌になっていると、一頻り遊んで疲れた薫が彼の隣に腰掛けた。

「ふい〜。ん？ どうした門守？ 随分と御機嫌斜めじゃないか？」

「ん…………かもね」

「…………愛しの双星さんと遊ばなくて拗ねてんのか？」

「…………当たらずとも遠からじってとこ」

「なるほどね…………」

仁の応対に、薫は仁も存外独占欲が強い事を知り失礼ながら笑みを浮かべた。研究一筋だと思っていた友人の、人間らしい一面を知れて面白いのだ。

「他の連中に声かけられて面白くないならぶつちやけちまえばいいのに。双星さんは門守の女だつてさ」

「ん〜……でも亜矢さんを縛り付けるような事はしたくないし……」

仁としては亜矢にはのびのびとして欲しい。そう思うと、自分と亜矢が付き合っている事を大つぴらにして外堀を埋めるような真似はあまりしたくなかった。

そんな彼に対し、薫は溜め息を吐いた。

「お前の気持ちは何となく分かった。言いたい事も分かるし、俺自身女と付き合った事ないから分かんねえけど……少しくらい我が儘言ってもバチ当たらんと俺は思うぞ？」

「我が儘？」

「そうそう」

薫の言葉に、仁は少し考え込んだ。何だかんだで恋愛に関してはまだ手探りな仁の、悩む姿に薫は肩を竦めクーラーボックスからジュースを取り出して喉を潤した。

一方の亜矢だが、彼女は彼女で色々面白くなかった。

理由は単純で、時折興味もない男子が声を掛けてくるのだ。それも明らかに彼女に性的な目を向けている。

亜矢は勿論、真矢もその事が面白くなく、今にも噴火しそうなレベルだった。

「う〜〜〜……」

「ま、真矢、落ち着いて……ね？」

【そうは言うけどさ、亜矢は良いの？ さっきから仁君以外の野郎に声掛けられて】

「それは……」

どいつもこいつも、近付いて来ては亜矢の体を上から下まで舐めるように眺めて鼻の下を伸ばす。仁に魅力的に見てもらうならともかく、それ以外の男に性的に見られるのは気分が良いものではない。

「やあ双星さん！ どうだい、俺と一緒に少し沖の方まで泳いでみないかい？」

またしても1人の男子学生が亜矢に声を掛けてきた。カッコいいと思っているのか、気障つたらしく歯を見せて笑みを浮かべている。

もう何度見たかというその顔と似たり寄ったりな言葉に、遂に真矢が亜矢の制御を振り払い表に出た。

「ああ、もうしつこい!!」

「うおっ!? ええ?」

「わわわっ! ちょっと、ま、亜矢落ち着いて!」

【真矢ストップストップ!?!】

遂に不満が爆発した真矢。他の男子達からすれば突然亜矢の雰囲気が変わった様しか見えず、事情を知る美香は慌てて真矢を宥めようとした。

亜矢と美香の制止を振り払い、真矢は心の内を思いつきりぶちまけた。

「さつきから黙ってれば好き放題声掛けてきて！ いい、よく聞きなさい！ 私はね――」

【真矢お願いだからちよつと待って!!】

「もう付き合ってる人が居るのよ!!」

真矢が口にした爆弾発言に、海水浴場の時間が止まった。美香はあちやあと顔に手当て、声を掛けてきた学生は目を見開いて固まる。彼だけでなく、海水浴に来ていた学生が全員固まっていた。

そんな中で、真矢は離れた所から見ている仁に手を振った。

「仁くーん！ こっち来てー!」

呼ばれた仁は、至って平静に立ち上がりパラソルの下から出て亜矢の元へと向かった。

仁が近くに来ると、真矢は彼の腕に抱き着き満足そうに笑みを浮かべた。

「私、仁君と付き合ってるの。そう言う訳だから私の事は諦めてね」

真矢はそう言つて男子学生にウインクした。真矢の存在が白日の下に晒された訳だが、学生の多くは彼女のキャラが代わつた事よりも彼女が仁と付き合っている事実に衝撃を受けておりそれどころではなかった。

一方の仁は、真矢の事で騒がれないかと心配になりつつも彼女と触れ合っている事に満足そうにしていた。そして先程、薫に言われた事を思い出す。

「我が儘……か」

「仁君？」

「ん？ ううん、何でもない」

思わず口を突いて出た言葉に真矢が首を傾げたので、仁は適当に誤魔化すと周りにアピールするかのよう^ピに彼女の肩を抱いた。

その姿に美香は笑いを堪え、薫は仁に向けサムズアップをしてみせる。

「か、門守？ お前本当に、双星さんど？」

「うん。俺達付き合ってるから」

今度こそ明星大学の学生——取り分け男子学生諸子には衝撃が走つた。無理もない。大学のマドンナと、大学一の変人が付き合っていると言うのだ。ある意味で美女と野獣な組み合わせに、男子学生の多くは絶望に膝をついた。

対照的に沸いたのは女子生徒の方だ。何だかんだで色恋に飢えた年頃の女性、それも話題の中心が男子学生注目目的である亜矢でその相手が大学一の変人となれば興味を抱かない筈が無かった。

女子を中心に一気に騒がしさを取り戻す海水浴場。

しかしフラれた男子学生の全てが絶望に膝をついた訳ではなかった。

「門守ッ!!」

「ん?」

「勝負しろッ!!」

「……………何で?」

訳も分からぬまま仁は男子学生達から勝負を挑まれた。彼らとしては、このまま大人しく引き下がる訳にはいかなかったのだろう。

「言っておくけど、ここで俺に勝てたからって亜矢さんの気持ちは変わらないよ?」

「五月蠅いッ! とにかく勝負だ勝負!」

何となくだが仁には彼らの魂胆が見えた。ここで仁を負かして憂さを晴らすと同時に、仁に亜矢との決別を迫るつもりなのだろう。

「仮に俺が負けても亜矢さんとは別れるつもりないからね」

「おま、それで良いのか!？」

「うん。だってこの勝負の勝敗と俺と亜矢さん関係無いし」

とは言え仁には負けるつもりも無かった。どうせ勝負をするのであれば、折角だから彼女に良い所を見せたい。

「ま、勝負はしてあげるよ。それで、何で勝負する?」

「ふ、ふん! 余裕ぶっていられるのも今の内だ!」

「最初の勝負はスイカ割りだ!」

男子の1人が指差した先には、ビニールシートの上にスイカが二つ置かれていた。この為に態々二つ用意したらしい。

「ルールは簡単だ。どっちが先に、且つ綺麗にスイカを割れるか勝負だ!」

言うが早いかわ彼らは準備に取り掛かった。仁と男子学生の1人が、目隠しをしてバットを手にしたされる。その状態で2人はバットの柄頭を額に当て、バットを中心に十回回転する。

「さあ、いざ勝負開始だ!」

その言葉を合図に、周囲の学生達は一斉に声を上げた。学生、取り分けほとんどの男子は仁の相手をしている学生の味方であり、彼を勝たせるべくスイカへと誘導する。

「右だ右！」

「いいぞ、そのまま真つ直ぐ！」

「行き過ぎだ、ちよい左！」

仁の相手をする学生は、いくつもの誘導する声に導かれふら付きながらもスイカへと向かって行く。

対する仁には亜矢が声援を送っていた。

「仁くん！ 右です右！ そうです、そのまま前に！」

周りの声援にかき消されそうになりながら、それでも聞こえてくる亜矢の声援に仁は着実にスイカへと近付いていった。その速度は相手方の学生よりも早い。

ズンズンとスイカへと進む仁に、相手方の学生の味方をしている学生達は焦りの声を上げる。

「おい何してんだ急げ！」

「前だ前！ そのまま一気に進め！」

そうは言われても、実際視界を塞がれた状態なのでどうしても及び腰になってしま

このまま行けば仁は普通にスイカに辿り着いて割っていただろう。しかしここでは仁は、思わぬ行動に出た。

なんとスイカに向かって一直線に走り出したのだ。

「はあああつ!？」

「おい門守の奴本当に見えてないのか!？」

普通の人間であれば視界が塞がれた中で、平衡感覚も狂った状態では外野からの声だけを頼りにスイカに辿り着くしかない。

しかし仁は、亜矢からの声援と肌を感じる日差しへの向き、風向き、そして直前の脳内に焼き付いた景色を統合して脳内に正確なナビを作り出していたのだ。

仁は脳内ナビを信じてスイカに向けて突き進む。回転によって発生している平衡感覚のズレも、様々なデータを基に補正を完了している。

あつという間にスイカに近づく仁の姿に最初驚く亜矢だったが、直ぐに気を取り直すと今彼が最も求める声を掛けるべくタイミングを見計らう。

そして――

「仁くん、今です!」

亜矢の声が響いた瞬間、仁はバットを振り下ろす。振り下ろされたバットは見事にスイカを捉え、木端微塵に粉碎した。

確かな手応えに、仁は満足そうに目隠しを外した。

「ん、ジャストミート」

「仁くん！」

相手方の学生に大差をつけての勝利に、仁は抱き着いてきた亜矢と共に勝利のスイカの味を噛み締める。

その姿に他の男子学生は嫉妬に目から血の涙を流す。

「ぐぬううううっ!?!」

「次だあッ!?! 次の勝負ッ!?!」

「遠泳だッ!?! 次は遠泳で勝負しろ!?! 水泳部員の俺が相手だあッ!?!」

勝負は白熱し、次は遠泳で勝負する事になった。

ところ変わって、傘木社の特別研究区画のオフィスにて……。

「何? ベクターカートリッジが紛失した?」

「はい、申し訳ありません。移送中にコンテナの一部が対向車と接触して損傷し、そこから零れ落ちたものが一つあったらしく……」

アデニンがオフィスで部下からの報告を受けていた。内容は移送したベクターカートリッジの数が合わないと言うものであり、調べた所移送用コンテナの一部に損傷個所がありそこから落ちたものがあつたらしい。

「紛失したベクターカートリッジが何なのかは分かっているのか？ 物によっては大問題だぞ」

「それについては、既に調べが付いています。オクトパスベクターカートリッジが紛失したようです」

オクトパスベクターカートリッジ……ベクターカートリッジとしては下級に当たるベクターカートリッジだ。精製は特に難しい事も無く、作ろうと思えば直ぐに次が作れる。

仮に誰かが拾って使ったとしても、だから何だと言うのが彼の率直な感想だった。見ず知らずの誰かが使ったとしても、怪物騒動が起きるだけで会社の事が明るみになる事は無い。それに起こった問題はきつと仮面ライダーが始末してくれる。

結論

「放っておけ。紛失に関しては適当にこちらで理由を付けておく」

「分かりました。失礼します」

仁とその他男子学生による遠泳対決は、思っていた以上に接戦だった。流石水泳部員と言う事もあり、相手方の学生の泳ぐ速度はなかなか速い。

しかし仁も決して負けてはいなかった。追い越しはしないが、つかず離れずの距離で追従していた。何か切っ掛けがあれば直ぐに逆転されてもおかしくはない。

「仁くっくん!!」

遠くで泳ぐ仁に向けて、亜矢が声援を送る。輝く笑顔で仁に声援を送るその姿に、一部の男子学生はそれだけで敗北感に膝をついていた。

そんな彼女を、物陰から見ているのは貞助だった。相も変わらず亜矢に傾倒している彼は、しかし以前仁に懲らしめられた事もあって彼女に近づく事が出来ずにいた。仮に近付いたとしても、その時は真矢が表に出てきて追い払われていただろう。

「はあ、双星さん……どうして……」

貞助は亜矢が仁と付き合っていると言う事実を未だ認められずにいた。だが彼がどう思おうと、亜矢が微笑みを向けているのは仁だけ。貞助はその事に大きく溜め息を吐いた。

その時、彼の視線の先に波の中で揺れるベクターカートリッジが映った。傘木社が紛失したオクトパスベクターカートリッジだ。落下したベクターカートリッジは蹴られるかして海に落ちた後、海流に乗ってここに流れ着いたのだ。

それを見た瞬間貞助は目を輝かせた。今なら仁は遠くにいるし、ここは海辺。ドライバーもカートリッジも更衣室に置きっぱなしの状況なら、仁も変身することは出来ない。

貞助は迷わず海に入りベクターカートリッジを取ると、起動させて自分に使用した。

〈OCTOPUS〉

貞助の体はあつという間に変異し、オクトパスファッジへと変わった。ファッジに変異した彼は振り返ると、未だ彼に気付かず沖に居る2人に声援を送っている学生達に近付いていく。

「ウウウウウウ……」

「ん？ げっ!!? 亜矢、ファッジ!!」

「えっ!?!」

一早く気付いた真矢の言葉に亜矢もオクトパスファッジの存在に気付いた。こちらに向かつてくるオクトパスファッジを見ると、彼女は慌てて周りの学生達に声を掛けた。

「皆逃げてください!!」

「え? 何、何の事?」

「お、おいあれ!? 怪物ツ!」

亜矢の言葉の多くの学生は怪訝な顔をしたが、彼女の視線の先に居たオクトパスファッジに気付いた一部の学生の言葉を合図に瞬く間にパニックが伝染していき、学生達は慌てて海水浴場から逃げ出した。

「慌てないで、こっちへ!」

慌てふためき逃げ惑う学生達の中で、亜矢は懸命に一人避難誘導に勤めている。彼の身の安全が第一だし、ギャラリーが居ては変身できない。

幸いな事に気付いたのが早かったこともあり、また亜矢以外にもファッジの脅威を知っている美香や山根研究室の学生達の協力もあり避難は直ぐに終わった。砂浜には亜矢とオクトパスファッジだけが残され対峙する。

「双、星サン——!」

「ねえ亜矢、これもしかしてアイツじゃない? あの狼の」

言われて亜矢はあの時の事を思い出した。仁が間に合ってくれたから良かったようなものの、危うかったあの時の事は今でも思い出したくはない。

「もう一度懲らしめる必要がありますね!」

仁が戻って来るまでにはまだ時間が掛かる。亜矢は1人ルーナに変身して戦おうとして――

【ちよつと待つて亜矢、何持つてるの!?!】

「――え?」

真矢に言われて亜矢は自分の手の中にある物を見た。そこにあつたのは、サンオイルなどを入れておく小さいポーチ。

そこで亜矢は思い出した。ベクターカートリッジとデイナドライバーは更衣室の中だ。

「あ――」

不味いと思った時にはもう遅かった。オクトパスファツジは亜矢に襲い掛かり、体中の触手で彼女の体を絡め捕った。

「きやああああああつ?!」

全身に絡みつく触手と吸盤の感触に亜矢は悲鳴を上げる。絡みついてきた触手は亜矢の体を水着越しに撫でまわし、全身を触手が這い回る感触に亜矢は全身に鳥肌が立つ

のを感じた。

「いや、ちよ、や!? 離してください!」

「双星サン、双星サアアアン!!」

オクトパスファツジは元となっている貞助の欲望を反映してか更に激しく亜矢の体を弄る。そして遂に、触手の一部が水着の中に入ってこようとしてきた。

「ひっ!? いや、助けて仁くん!」

思わず亜矢が仁に助けを求めた、その瞬間戻ってきた仁が物凄い勢いで海から上がりそのままの勢いでオクトパスファツジを蹴り飛ばした。

「亜矢さんに何してんだお前——!」

「オオオツ!」

亜矢に夢中になっていたオクトパスファツジは背後から蹴り飛ばされ、仰け反りながら吹っ飛び砂浜に頭から突っ込む。その際に亜矢は解放され、自由になった亜矢を仁が受け止めて抱きしめた。

「お待たせ、亜矢さん」

「仁くん——!」

危うい所で助けてくれた仁に、亜矢は安堵の笑みを浮かべ彼に抱き着く。

亜矢の悲鳴に猛烈な勢いで浜まで戻った仁に遅れて、水泳部員は息も絶え絶えに浜に

上がった。

「な、何だよ門守の奴、途中から急に速度上げやがって……」

「悪いけど勝負どころじゃないみたいだよ」

「え？」

「ほらあれ」

仁が指差した先では、頭から浜に突っ込んだオクトパスファッジが起き上がろうとしていた。その姿に水泳部員も悲鳴を上げて逃げ出した。

「うおわあああつ!?」 蛸の化け物おおツ!?」

逃げる水泳部員と入れ替わるように仁と亜矢に近付くのは、事情を知っている美香と薫の2人だった。2人は急いで更衣室に戻ると、仁達の荷物からデイナドライバーとベクターカートリッジを持ってきてくれたのだ。

「門守これッ!」

「亜矢! 忘れ物!」

「ん、ありがとう」

「助かりました!」

2人は受け取ったデイナドライバーを腰に装着し、ベクターカートリッジを起動させる。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

仁と亜矢の2人がデイナとルーナに変身すると、オクトパスファツジが触手を振り回して2人に襲い掛かる。先程は見事にこの触手に絡め捕られてしまった亜矢だが、今度は変身している。変身していれば彼女にはあの触手を寄せ付けられない武器があるのだ。

「アイ ハヴ コントロール！」

人格を真矢に交代し、両腕にアームブレードを展開して迫る触手を次々と切断した。自慢の触手を断ち切られて、オクトパスファツジが思わず怯む。

「ガアアアアアツ?!」

「お前本当にいい加減にしろよ」

武器である触手が無くなった瞬間を狙ってデイナが迫り、何発も正拳突きを叩き込む。オクトパスファツジは両腕を振り回して抵抗するが、破れかぶれの攻撃ではデイナを振り払う事も出来はしない。

「はっ」

「フンッ！」

「デイナの正拳突きの手連打で体力を削られ棒立ちとなったオクトパスファアツジを、デイナとルーナが同時に放った回し蹴りで蹴り飛ばす。砂浜に叩き付けられたオクトパスファアツジに、2人は同時にトドメの一撃を放った。

〈ATP Burst〉

「ハアアアアアツ!!」

「グアアアアアアツ?!」

2人の放ったダブル・ノックアウトクラッシュを喰らい、オクトパスファアツジは爆散し元の姿に戻る。排出されたベクターカートリッジは、空中でデイナがキャッチしそのまま握り潰した。

「ふう……」

ファアツジを倒し、一息つくときデイナとルーナは変身を解除する。戦いが終わったのを見て、美香と薫が2人に近付いて来た。

「やったな!」

「亜矢、大丈夫?」

「はい。ありがとうございます」

「2人のお陰で助かったよ」

「気にすんなよ。それよりコイツ……」

薫は気絶した貞助の顔を見た。最初誰かは分からなかったが、よくよく見るとそれが他の学生に紛れていた1人である事に気付く。

「あ！ コイツ今日ついて来てた奴の1人じゃねえか!？」

「うっそ、ホント!？」

「亜矢さん目的でついて来てたんだらうね。コイツ、前にもファッジになって亜矢さん襲ってたんだ。あの時に懲らしめてやったつもりだったんだけど」

「やだ、マジ? 最低」

貞助が前科持ちであると知って、美香が露骨に軽蔑した目を貞助に向ける。薫も顔を顰め、亜矢が仁の後ろに隠れたので仁は彼女の肩を優しく抱く。

「……………こいつどうする? 警察に突き出すか?」

「温いわ。亜矢を酷い目に遭わせたんだもの。いつその事こいつがさっきの怪物だった他の連中にバラしちやっただ方が良いんじゃない?」

「そ、それは流石にちよつと……………」

「警察に突き出そうにも、目撃者が俺達だけな上に証拠の品が無いから逮捕しようがないし……………」

何よりネット私刑に等しい罰を与える事は気が引けた。だがこのまま無罪放免でお咎めなしとするのも……………。

「はいはい！ それなら私に良い考えがあるわ！」

どうするかと仁達が頭を悩ませた時、真矢が表に出て手を上げた。全員の視線が集まったのを見て、真矢は笑みを浮かべると貞助に与える罰を口にした。

彼女の提案を仁達は満場一致で可決し、即座に行動に起こすのだった。

その後、騒動が収束したのを見て一団は帰路についた。ファツジ出現で最後の最後で大騒ぎになったが、結果的に見れば仁と亜矢も存分に夏の海を楽しめた。何より、結果論だが周りの人間に仁と亜矢の仲を報せるいい切っ掛けとなってくれた。

敗北感に打ちひしがれ、嫉妬に駆られて自棄になって仁に勝負を挑んだ学生達ももう何も言うつもりは無い。何しろファツジに亜矢が1人囚われていた時、彼女を助けたのは仁だけだったのだ。その事は水泳部の部員が証言してくれた。

こうして今までよりはのびのびと一緒に居る事が出来るようになった仁と亜矢。その2人は今、遊び疲れたのか電車に揺られて肩を寄せ合って眠っている。

幸せそうに眠っている仁と亜矢の2人を、美香は優しく見守っていた。

一方、事件を起こした貞助は1人砂浜に残されていた。

彼は仁達によつて首から下を砂浜に埋められており、満ちてきた潮に顔を蒼褪めさせ必死に助けを求めている。

「誰か、誰か助けてええええッ!」

潮が満ちてきた事で砂の下に隠れていた蟹が出てきて、彼の顔の周りを這い回っている。中には恐れ知らずなのか、貞助の顔に這い上がる蟹も居た。

「来るな、蟹来るな!」 潮が上がってくる!」 誰かああああッ!」

念の為言っておくと、海面が貞助の顔を沈める事は無い。そこまでは来ない場所を計算して埋めてあるからだ。

しかし貞助本人にその事を知る術はない。

必死に助けを求める貞助だったが、先の騒動により海水浴場には誰も居ない為彼を助けに来てくれる者は誰も居ない。もし助けられるとすれば、この後海辺に散歩に来た近

隣住民か見回りの警察官くらいだろう。

「もう悪い事しないから!! だからお願い、誰か助けてええええええッ!!」

空と海が赤く染まりつつある海水浴場に、貞助の助けを求める声が空しく響き渡るのだった。

登場人物

主人公：門守かどもり 仁じん

明星大学の大学生。年齢21歳。

黒髪を雑に切っている為、髪型は結構ボサボサ。後述する無茶の所為で目の下には隈が絶えず、一見すると不健康そうだがやはり後述する理由により体は鍛えられている為結構元気。

基本的に興味のない事に対しては無頓着であり、他人の事も気にしない性質だが決して無感動なのではなく、反応が淡泊なだけで相手の事は意外と見ている。

常々自分に小言を言ったりする亜矢の事は、何だかんだで大切に思っているのか彼女に対してだけは時々感情を露にする。

遺伝子工学の学者となるべく日々様々な知識を貪欲なまでに学ぶ男。一度熱中すると寝食を忘れる程のめり込む。父親である門守 真司はマサチューセッツ工科大学にスカウトされるほどの研究者であり、父に憧れて彼も研究者としての道を歩んだ。

その父は何年も前にアメリカで暴漢に襲われ命を落としており、彼はその事を今でも悲しんでいる。

未だ学生の身分だが研究者としてのプライドは高く、他人のでも地道に行われている研究を無意味と断じられたり馬鹿にされるのをとても嫌う。

大学にスパイダーファツジが出現し暴れた時、襲われそうになっていた亜矢を守ろうとして重症を負い、ファツジの撃退と傷の治療の為にデナドライバーで仮面ライダーデイナに変身し戦う事になった。

かなり無理をする方だが、彼自身自分が無理している自覚はあり、その無理に耐えられるようにと言うのと父の身に起こった不幸を考えて空手を習い体を鍛えている。

食事に関しては結構無頓着で、しかも腹に入れば一緒と考え何でもかんでもごちゃ混ぜにして食べようとする。

決め台詞

『さて、検証の時間だ』『レポートは纏まった』

ヒロイン：双星ふたほし 亜矢あや

明星大学の大学生。年齢21歳。

奥ゆかしい性格で、大学のマドンナ的存在。双子の姉妹で真矢が居たが、三年前に2人揃って交通事故に遭い真矢の方は他界している。

誰に対しても礼儀正しく、親切に接する為、男女問わず人気がある。

また普段は露出の少ない服を好んで切る為分かり辛いですが、スタイルは抜群であり夏場に薄着で登校すると男性陣（仁を除く）の視線を集める。

前述した通り大学ではマドンナとして扱われるが、本人はその事をあまり快くは思っていない。

愛する双子の姉妹が他界してからは命をととても大切にしている。それが健康管理の徹底にも繋がっており、健康度外視で不摂生な生活態度の仁の事が放っておけずにいる。

基本的に常識人だが、こと健康管理にはかなり敏感でありあまりにも不健康すぎる生活態度を見ると黙ってははいられない。言うまでも無く行き過ぎた無茶をする仁はしよつちゆう彼女から説教を受けており、彼女に対しては頭が上がらない。

仁の事は放っておけない人物として一緒に居る事が多いが、行動を共にする理由の半分は彼が彼女の事を特別扱いせず普通に接するから。大学生になってからと言うもの妙にチャホヤされる事に辟易していたので、いたって普通に接してくれる仁と共に居ると心が落ち着くと言う理由で講義が被る時などは傍に居る事が多い。

・ ふたほし 双星 まや 真矢

亜矢の双子の姉妹。三年前に亜矢共々交通事故に遭い、命を落とす。その際、同じく

事故に遭った亜矢が臓器移植を必要としていた為まだ無事だった真矢の臓器を亜矢に移植している。

当時の性格は亜矢とは打って変わって猫の様に気まぐれで自由、だがそれでいて亜矢同様包容力のある優しさを持っていた。基本的に亜矢よりアクティブで思った事をズバリと口にする。

亜矢より運動神経が優れており、高校時代はキックボクシングを習っていた。

・かじもり 門守 かなえ 香苗

仁の母親で、世界中を駆け回る冒険家。年齢42歳。

仁以上に自分の好奇心に正直で、興味が湧けば例え危険が待っていようと首を突っ込まずにはいられない。

冒険家と言うが、それでも研究者の端くれであり冒険に赴くのも様々な調査依頼を受けての事。その仕事の性質上日本に居ない事も多く、司が存命していた頃は彼に仁の世話を任せて冒険に出掛けていた。

それでも司が死去してからは精神的に滅入っていたのと、仁を一人にする訳にはいかないと冒険に出る事を長らく止めて仁との時間を過ごす事を優先していた。

インディージョーンズに匹敵する危険を伴う冒険を何度も経験したからか、かなり度

胸があり多少の危険であれば自力で切り抜けてしまえるほどの技術がある。

・白上しらがみ源五郎げんごろう

明星大学に籍を置く教授。年齢48歳。

とても温厚な人物であり、常に杖を手にしているとところなどからジェントルマンと呼ばれる事も少なくない。と言うか、研究室外の者は本人が居ない所で彼の事を普通に紳士教授と呼んでいる。その事は彼自身知っているが、特に自分を悪くすることも無くそれどころかハンチング帽にパイプまで啣えたりするなど更に紳士らしさを表に出すノリの良さを持つ。

その一方で行動には謎な部分が目立ち、デイナドライバーとそれに付随するベクターカートリッジの開発に始まり、大学内に自分のラボを作るなど不審な行動が多い。

実は過去に傘木 雄成と共に超万能細胞の開発に携わっていたが、超万能細胞が扱いを一步間違えるととんでもない事態に発展する事に気付き研究破棄について雄成と対立し決別した過去を持つ。

彼が英国紳士と呼ばれる理由の一端には、毎日三時に必ずティータイムを設けるところも関係している。かなり本格的なティーセットでティータイムを楽しんでおり、仁や亜矢達も付き合わされている。

・権藤 宗吾ごんどう そうご

S. B. C. T. の隊長。年齢35歳。

仮面ライダースコープの変身者。

ファッジに対抗する為に警察内で独自に組織された特殊部隊『S. B. C. T.』の隊長を務める。見た目は厳ついが性格は気さくで部下想い。妻子をファッジに殺されており、その関係でファッジとその製造に携わる傘木社を憎んでいる。

当初はスコープドライバーが開発途中だった為部下と共に通常装備での戦闘を余儀なくされていたが、後に完成したスコープドライバーを用いて仮面ライダースコープに変身して戦う。

ファッジとそれに関わるベクターカートリッジを等しく憎んでいる為、仁が変身するデイナも当初は疑って掛かり敵視していた。

だが仁と直接話し、その人となりを理解してからは彼と手を取り合い共に傘木社と戦う仲間となる。

・傘木 雄成かさぎ ゆうせい

傘木社の社長。善良な一企業の社長の仮面を被り、裏で世界征服を企む。年齢50

歳。

影で非道な人体実験を繰り返し、さらに強力なファッジの製造の為のデータ収集を行っている。

元は彼も一研究者で白上教授と共に超万能細胞の研究を行っていたが、一步間違えれば世界に混乱を巻き起こすどころではないという事で研究の破棄を唱える白上教授と対立。

その後彼は研究成果を元に独自の企業を立ち上げ、あらゆる手段を用いて会社を急成長させその影響力でファッジに関する研究を行っている。

・志村^{しむら}希美^{のぞみ}

元・傘木保安警察の幹部の1人であった女性。年齢25歳。

嘗てはチミンと言う名前を名乗り、スパイダーファッジとなって何度も仁と亜矢の前に立ち塞がったが、度重なる敗北の末に死に掛けた事で幹部の座から降ろされ実験動物にまで身を墮とす。

仁に敗北後、再強化手術を施され実験動物となつてからは恐竜ベクターカートリッジの実験台にされたが、同じく恐竜ベクターカートリッジの力で変身したデイナに徹底的に敗北した事でプライドが砕け散りそれ以前の高慢さが無くなった。

その後はまるで別人のように覇気のない人間となり、ブレイドライバーで仮面ライ

ダーヘテロとなり仁達の前に強敵として立ち塞がる。

再強化手術の影響で常人を遥かに超える強靱な肉体と驚異的な回復力を手に入れたが、代償としてカロリーの消費が激しくなり常人の倍以上の食料を欲する体になってしまった。

ライダーデータ

『仮面ライダーダイナ』

仁が変身する仮面ライダー。デйнаドライバーで変身するライダーであり、基本形態のネイキッドフォームの他に様々な生物のDNAを用いたベクターカートリッジを用いて強化された形態を持つ。

ベクターカートリッジには相性があり、相性が良いとエヴォリクション（進化）となり大幅にスペックが上昇し、相性が悪いとミューテーション（変異）となりエヴォリクションに比べると能力は低い。その分ミューテーションは能力の組み合わせの幅が広く、臨機応変な対応が可能。

変身ベルト『デйнаドライバー』

白上教授が開発した、デйнаに変身するのに必要な装備。右側にL字を逆さにした様なグリップ『レセプタースロットル』が付いており、上部から二つのベクターカートリッジを装填しグリップを引く事でベルト中央にあるセントラルドグマがカートリッジに合わせて変色する。

変身の際は使用したベクターカートリッジに対応した色の二重らせん『スーパークイ

ル』が飛び出し、周囲の敵を弾き飛ばす事が可能。

尚カートリッジが無くても変身自体は可能であり、その場合は所謂素体とも言えるネイキッドフォームとなる。

ベクターカートリッジを使用して変身した状態で再びグリップを引くとベクターカートリッジ内の超万能細胞が活性化しATPを大量に産生する『ATPバースト』が発動。必殺技が発動できる。

元々はDNAドライバーと言う名前だったが、呼び辛いという理由で仁によりデイナドライバーと呼ばれるようになった。

専用装備『ハイブリッドアームズ』

仮面ライダーデイナが使用する武器。大型の武器であり、大剣・ハルバード・ライフルの三つの形態に変形可能。またドライバー同様ベクターカートリッジを装填可能なソケットを備えており、形態に関係なくベクターカートリッジを用いてATPバーストにより必殺技を発動可能。

専用バイク『トランスポゾン』

デイナ専用のバイク。全体に白を基調としているが、非戦闘時は任意の車体カラーに変更して偽装できる。

モデルはFF7ACに登場するクラウドの愛車・フェンリル。

コンソールを操作する事で様々な機能を発揮でき、自動操縦や飛行形態への変形、武器の収納などを可能とする。

『仮面ライダーデイナ・ネイキッドフォーム』

ベクターカートリッジを使用せずに変身した形態であり、スペックはデイナのどのフォームよりも低い。だがその分全身の細胞の活性化による超回復力があり、瀕死の状態であっても変身すれば全快する。

グレーのアンダースーツに同色のプロテクターを装着している。

仮面は非常にシンプルでアンテナすらなく、複眼は保護ゴーグルの様に左右が繋がった緑色をしている。

『仮面ライダーデイナ・バッファローヒューマンフォーム』

デイナのエヴォリューション形態にして基本形態。白いアンダースーツに赤い堅牢な装甲を身に付けた力強い形態。頭部はクラッシュャー部分を除く部分が赤く、クラッシュャー部分が白で、額の左右からはバッファローの様な湾曲した角が伸びている。

デイナが白上教授の作ったバッファローベクターカートリッジとヒューマンベクターカートリッジでエヴォリューションした姿で攻守にバランスの取れた性能を持つ。

バッファローの強靱な筋力と人間の柔軟な動きを合わせた形態。仁のお気に入り。

必殺技はATPバーストで強化された筋力で放つ錐揉み回転しながらの飛び蹴り『ノックアウトクラッシュ』。

『仮面ライダーデイナ・ドッグホエールフォーム』

デイナの形態の一つ。射撃に特化した形態で、優れた嗅覚で敵を追跡しエコーロケーションで正確に敵を狙い撃つ。また水中での活動にも優れており、水中を自在に行動可能。

また特殊攻撃としてエコーロケーションで使用する音波を一点に集束して衝撃波の様に放ち相手を吹き飛ばす『インパクトウェーブ』が使用可能。

外見は角が無くなった代わりに頭に犬耳の様な突起が出来、両脚に鱗の様なパーツが付く。アンダースーツは水色で装甲は黒。

必殺技のノックアウトクラッシュはバッファローヒューマンフォームと違い踵落とし。

『仮面ライダーデイナ・ホークレオンフォーム』

・デイナの形態の一つで飛行能力とパワーに優れる。背中に付いた翼で空中を飛行可

能となっており、更にパワーも優れている為正面からの殴り合いも得意としている。

外見は仮面に角や突起が無く、代わりに鷹の嘴の様なバイザーが目の周りを覆っている。装甲は茶色でアンダースーツは金色。

必殺技のノックアウトクラッシュは空中から両脚で相手を上下から挟むキックになっっている。

『仮面ライダーデйна・シャークヘッジホッグフォーム』

・デйнаの形態の一つ。鮫の能力として鋭い感覚を持ち、いち早く敵の動きを察知し先回りするように動く事が可能。またハリネズミの能力として優れた毒耐性を持っている為、敵の毒攻撃を無力化する事が出来る。

両腕に鱗状のカッターが付いており、これで攻撃をすると微細な鱗が攻撃の瞬間剥がれて相手を切り裂くので相手に攻撃のリーチを見誤らせる事が可能。

外見はシャープな仮面に両腕には鱗の様なカッターが付き、装甲の色は灰色。下半身を見れば脚には無数の棘が下向きに伸びており、アンダースーツは黒い。

必殺技のノックアウトクラッシュは、両腕のカッターを伸ばして相手を切り裂く技。

『仮面ライダーデйна・バッファアローヒューマンエレキテル』

・ダイナの強化形態。仁が作り出した『BHエレキテルカートリッジ』をダイナドライバーに装填して変身する。

バッファローヒューマンフォームをベースに、電気を操る能力を獲得させた。全ての攻撃が電撃を帯びると同時に、全身の電気信号を強制的に高速化させることで文字通り稲妻のように素早く動く事が出来る。

外見はバッファローヒューマンフォームがベースだが、全身に青い稲妻の様な模様があり、走り頭部の角を始め体の各部の突起も稲妻の様なジグザグした形に変化している。

必殺技は腕から放電して相手の動きを拘束し、その後電気を纏った飛び蹴りを放つ『エレキテルクラッシュ』。

『仮面ライダーダイナ・ケツアルスピノフォーム』

・ダイナの強化形態。翼竜ケツアルコアトルスと恐竜スピノサウルスの遺伝子から作られたベクターカートリッジで変身する。性能は他のエヴォリューションフォームのどれよりも優れており、陸海空全てのフィールドで戦闘が可能と全てのスペックが高い。

その分ドライバーを使用しているにも仁に対する負担があり、当初は変身しても暴走して敵味方関係なく襲い掛かるだけでなく、変身を解除しても狂暴性が抑えられなかった

りと制御に苦勞した。

外見はベージュの装甲に銀色のアンダースーツ。仮面にはトサカが付き、背中にはケツアルコアトルスの翼がある。

必殺技のノックアウトクラッシュは相手を両足で挟んで空中で一回転して地面に放り投げ、更に両脚蹴りを叩き込む技。

『仮面ライダールーナ』

・ 亜矢が変身する仮面ライダー。変身に使用するのはデイナと同じくデイナドライブバーだが、女性の亜矢が変身するという事で女性らしい名前をと仁がルーナと名付けた。

基本スペックはデイナと共通。

峰が開発した自律猫型デバイス『アダプトキャット』を変形させてデイナドライブバーに装填し、キャットベクターカートリッジで変身する。外見は額から二本のアンテナが伸び、アンダースーツは黒、装甲は白。

基本性能はデイナのバッファローヒューマンフォームに比べパワーで劣るが、独自の装備として両の太腿に専用ハンドガン『リプレッサーショット』によりデイナよりも射撃性能に優れる。

後に真矢の能力をより効率よく活かす為、格闘戦能力を強化する『アームブレード』を両腕に追加した強化形態となる。

必殺技はデйна同様ATPバーストを使用して放つ上段回し蹴りのノックアウトクラッシュ。

『仮面ライダールーナ・ユナイト』

・傘木社が実戦投入した恐竜ファッジに対抗し、ケツアルスピノフォームとなったデйнаと並んで戦う為にアダプトキャットを強化した『ユナイトキャット』を使用して変身するルーナの強化形態。

外見は全体のシルエツトに大きな変化はないが、手足の装甲が薄くなり黄色いラインが入っている。

またアームブレードは無くなったが、主武装が銃身下部に刃を持つ『リプレッサーシヨットII』となり格闘戦能力を損なう事なく全体的な能力を向上させている。

スペック上は能力が向上しているが、扱い熟すには亜矢と真矢が心を合わせる必要がある為当初は扱いに難儀した。

『仮面ライダースコープ』

・ S・ B・ C・ T・ が独自に開発したスコープドライバーで変身する仮面ライダー。最大の特徴はバクターカートリッジを使用せず、変身者のデータを入力したキープレートを右から装填、ドライバー左の円形のハンドルを手動で回転させて変身する。

外見はデйна・ルーナと異なりかなりメカメカしい。頭部は右目の赤い複眼に対し左目が光学顕微鏡のレボルバのように三つのレンズを持つカメラアイとなっている。用途に応じて回転して様々な視界に変更できるようになっている。

デйна・ルーナと違いフォームチェンジ能力は無いが、様々な装備を有し状況に応じてそれらを使い分けている。

必殺技は変身時に使用するパーソナルキープレートを裏返してドライバーに読み込ませて発動する飛び蹴り『エンドスマッシュ』。

『ガンマライフル』

・ スコープが用いるライフル。スコープの基本装備であり、戦闘ではもっぱらこれを用いる。対ファッジ用の専用弾を用いている為ファッジ相手には効果抜群。

使用に際しては専用のキープレートをドライバーに読み込ませる事で投影精製する。

『ボルテックスブレード』

・ 左腕に装着した攻防一体装備『ボルテックスシールド』に内蔵された剣。

『ボルテックスガン』

・ブレードと同様シールドに内蔵された機関銃。射程距離は短いが高速で弾丸をばら撒く為近距離の相手に対しては弾幕を張る事が出来る。

『ライオットバトン』

・相手を倒すのではなく無力化する事を目的としたトンファー。使用の際には装甲がスライドして1.5倍の長さになり、さらに象をも気絶させるほどの電撃を相手にお見舞いできる。

第1話：扉、開かれる時

都内某所・総合アミューズメント施設

夜も更けた頃、都内にある総合アミューズメント施設に複数の車両が接近していた。黒塗りのSUVだ。

数台のSUVは半分はアミューズメント施設の正面に、もう半分が地下に続くスロープに入っていく。

停車したSUVからは次々と防弾ベストにシールド付きのヘルメットを身に付けた男達が出てくる。素早くSUVから降りてきた者達は直ぐに車体後部に向かうと、トラックを開けた。そこにはアサルトライフルを始めとした銃火器が収納されている。

一見彼らは自衛隊の様に見えるが、腕章を見ると描かれているのは警察の紋章だった。彼らは警察の組織なのだ。

彼らは警察が秘密裏に組織した特殊部隊『特殊生物災害対策部隊』、通称S・B・C・Tである。彼らはある目的の為に組織され、自衛隊にも匹敵する装備が許可された警察内でも特異な組織であった。

SUVから降り、装備を手にした隊員達は整列し正面入り口前に整列する。その隊員

たちの前に、隊長らしき1人の男が立ちヘルメットに内蔵されたシールドを下ろした。それを合図に隊員たちは隊列を組んで施設内に突入した。

正面入り口と地下搬入口から施設に突入したS・B・C・Tの隊員は、周囲を警戒しながら内部を進む。施設内の照明は落とされていく。光源は隊員達が装備しているフラッシュライトのみ。施設の大きさに反して、その光源は頼りないと言う他なかつた。

「こちらAチーム。一階にファッジの姿は確認できないこれより二階に上がる」
『こちらBチーム、了解』

正面入り口から突入した部隊は、階段やエスカレーターで二階に上がっていく。

その様子を、暗がりの中からジッと見つめる者が居た。

一方、地下搬入口から突入したBチームも同様に暗い施設内をフラッシュライトで照らしながら移動していた。油断なく周囲を照らしながら四方八方に銃口を向け何かを探している。

………と、最後尾を歩く隊員の背後の景色が揺らいだ。揺らぎは段々と形になり、次の瞬間そこには人間とは明らかに異なる異形が姿を現していた。まるで蛙が人型になったような怪物だ。

その怪物は背後から最後尾を歩く隊員を掴むと、舌を使って配管だらけの天井に自分

の体を隊員ごと持ち上げた。隊員は声を上げようとしたが、喉を絞められ声を出す間もなく天井の暗がりの中に引き摺り込まれていった。

先に行く隊員達は一人としてその事に気付かなかつたが、施設の外で隊員達の様子を見ていたオペレーターは異変に気付いた。

『Bリーダー！ 緊急事態です！ 最後尾に居たB9が、ああ!』

「どうした!？」

『B9のバイタル停止!』

オペレーターの悲鳴の様な声が通信機越しに響いた直後、隊列の後ろに最後尾を歩いていた隊員のライフルが落ちてきた。その派手な音に隊員達は一斉に背後を振り返り、そして敵襲を察知する。

「何だ!？」

「敵だ、敵襲!？」

「石上は何処だ!？」

「落ち着け！ 総員警戒態勢、敵は上に居るぞ！」

配管が蜘蛛の巣の様に入り組んだ天井を無数のライトの光が切り裂くように走る。しかし光の先には怪物の姿は勿論、引き摺り込まれた隊員の姿すら見当たらない。

暫し天井を警戒するS・B・C・Tの隊員達だったが、次の攻撃は予想外の方向か

ら行われた。

「ごぼっ!？」
今度の攻撃は隊員達の後方、つまり先程まで隊員達が進んでいた方向から行われた。

先程まで先頭を歩いていたBリーダーが背後から鋭い爪のついた手で胸を突き刺され一撃で命を刈り取られる。今度は別方向からの攻撃に、だが隊員達はそちらに素早く銃口を向けた。同時にBリーダーを屠った怪物は腕を振って亡骸を床に叩き付けて捨てる。

「撃てッ!？」

一斉に銃口から吐き出された銃弾が怪物に殺到する。しかし怪物の強固な甲殻はアサルトライフルの銃弾を全て弾いてしまった。

「……フン」

怪物は非力な攻撃しかしてこないS・B・C・T.を鼻で笑うと、両手の爪で次々と切り裂いていく。首や胴体を切断され、隊員達が次々と命を落としていく。

あつという間にBチームの隊員を全滅させた怪物。その隣に、先程と同じように景色が揺らぎ蛙の怪物が姿を現す。

「あつけないな」

「ただの人間など詮せんなものよ」

「上の連中は？」

「そつちはアデニンとグアニンが向かったわ。今頃派手にやってるでしょう」

蜘蛛の怪物の言つた通り、地上施設でも既に戦闘は行われていた。

「顔だ！ 顔を狙つて撃て！ 攻撃を集中させろ！」

一方的に皆殺しにあつた地下のBチームに比べてこのAチームは怪物相手に善戦している様に見えた。隊長の指示の下、全員が的確に目の前の怪物——烏賊がそのまま人の様になつた烏賊人間と形容すべき姿——の顔に攻撃を集中させていた。

これには怪物も流石に怯むのか、顔を腕で守つて思うように前に出れずにいる。

このまま行けるかと隊員たちの中に事態を楽観する者が出始めた。

その時、烏賊の怪物の背後から針の様な物が飛んできて隊員の1人の心臓を一撃で貫いた。

「ギャッ!?!」

「何ッ!?!」

何事かと隊長が烏賊の怪物の背後に目をやると、そこには全身棘だらけの新たな怪物が出現していた。その怪物は体から先程と同じ針を抜き取ると、それを別の隊員に向け

て投擲した。

「ぐふっ?!」

投擲された針は寸分変わらず隊員の心臓を貫き命を奪う。その光景に隊長は唇を噛み締めた。

と、通信機から地下のBチームが全滅したことを知らせる報告が届いた。それと同時に、Aチームへの撤退命令も。

『権藤隊長、撤退してください! これ以上の戦闘は無理です! 地下のファッジ達も直ぐに上がってきます! このままでは全滅を待つだけです!』

「くっそ……………撤退! 総員撤退だ!!」

隊長が血を吐くような顔でそう指示を出すと、生き残りの隊員たちは怪物達を牽制しながら後退を始めた。その間にも針の投擲と、先程とは打って変わって攻勢に回った烏賊の怪物の放つ鋭い触手による一撃で更に数名の隊員が犠牲となった。

這う這うの体で施設から出た隊長を含めたS・B・C・Tの隊員達。その数は最初に比べると見るも無残な程に数を減らしており、片手で足りる程度の人数しか残っていないかった。

負傷して動けない隊員を押し込み、最後に隊長が運転席に乗り込みエンジンを入れる。そしていざ発車しようとした瞬間、チラリと施設の入り口を見ると、そこには彼ら

をここまで追い詰めた怪物が4体並んで彼らの事を見ていた。

追撃する様子はない。それは即ち、何時でも潰せるから今は見逃してやると言外に語っていた。

それが分かかってしまった隊長の権藤ごんどう 宗吾そうごは、悔しさに血が滲むほど唇を噛み締めSUVを発進させる。

怪物たちはそれを黙って見送るのだった。

明星大学・図書室

夜の間に死闘が起こっていたなど知る由もない学生達で溢れる、都内有数の科学分野に力を入れている明星大学の図書室。

もうすぐ昼になるというその図書室に、机に突っ伏して寝ている男の学生が居た。短めのボサボサの髪が本の山に埋もれている。時々頭をかく為に腕を動かすが、その度に積まれた本の山が崩れ足元に落ちていた。

そんな彼に、1人の女性が近付いた。栗色の髪を肩の下まで伸ばした、物腰の柔らかな女性である。見た所彼女も学生らしい。図書室の中だという事か、ただでさえ材質の関係で立ち辛い足音を更に殺して布ずれの音以外立てずに寝ている男性に近付いていく。

女性は男性に近付くと、彼の肩をそつと揺する。優しく揺すられて男性は身動きするが、しかし起きる気配はない。ならばと肩を叩くが、男性は小さく唸るだけだ。そろそろ本気で起こそうと言うのか、本の山を崩さない程度に強く揺するが、やっぱり起きる事は無かった。

「……………はあ」

全く起きる気配を見せない男性に、女性は遂に最後の手段に出た。男性の周りに積み上げられている本の山の中から、一番重量のありそうなハードカバーの専門書らしきものを手に取りそれを振り上げると男性の頭に叩き付けた。

「ふんー！」

「んぐんぐん？」

これには流石に睡魔も吹き飛んだのか、男性は本の山を崩しながらゆつくりと起き上がった。

「いつつ……………んん？ 誰だ？」

「目が覚めましたか、門守君？」

「ん〜？ ああ、双星さん？ 何の用？」

男性——門守かどもり 仁は、寝ぼけ眼を擦りながら女性——双星ふたぼし 亜矢あやを見上げる。最初彼は女性が亜矢である事に気付いていなかったが、少しして完全に目が覚めたのか亜矢の姿をしつかりと見た。

対する亜矢は、彼がしつかりと起きたのを確認して床に落ちている本を回収しながら答えた。

「何の用って、今日の午後が共同レポートの提出期限だつて言うの忘れてませんか？ 後は門守君の分だけなんですよ？」

話しながら床に落ちた本を拾い終え、近くの机の上にとりあえず置く。本と机が接触した際にトンと音が立つ。

亜矢が本を机に置くと、それを狙っていたのか本の山からレポートの束を引っこ抜いて亜矢に突き出す。それは彼の担当する共同レポートだった。

「あらっ？」

「こんなのとつくの昔に終わってるよ」

「じゃあこの本の山は？」

「暇つぶし」

「……午前の講義はどうしたんですか？」

「出席日数足りてるし、内容は楽勝だからサボった」

仁の答えに亜矢は思わず溜め息を吐いた。成績は同年代の中でぶっちぎりでトップで、噂ではマサチューセッツ工科大学への留学の話も上がっている程の彼だ。しかも午前の授業は彼が得意とする分野の応用化学に分子生物学。仁なら確かに出席日数さえ稼げていれば、講義に出なくても問題ないのだろう。

しかし――

「だとしても、こんな所で寝たりしたら風邪ひきますよ。それにその目の下の隈、昨日また徹夜してたんですね？ 幾ら鍛えているとは言っても、無理が過ぎれば体を壊しますよ？」

突然始まった亜矢の説教を、仁は欠伸を噛み殺しながら聞き流した。実は彼がこうして亜矢に説教されるのはこれが初めてではない。

亜矢はこと健康管理には特にうるさい。お節介焼きと言ってしまうえばそれまでだが、不摂生が過ぎる者を放つてはおけないのだ。だから時に邪険にされると分かっていても、つい口を出してしまう。

対する仁は一度熱中すると寝食を忘れることがしょっちゅうあった。自身の知的好奇心を満たす事に全力を注いでしまう為、夜に海外の論文などを読み始めると止まらな

くなつてしまふのだ。

しかも仁は食事にも無頓着で、腹が膨ればいいと適当なもので食事を済ませる事も日常茶飯事だった。

そんな2人だから、口論と言うか亜矢からの仁への説教は頻繁に見られる光景となつていた。

勿論説教されたからと言つて生活習慣を改める程、仁の知識に対する欲求は収まらない。しかし彼女が独りよがりなんかではなく、純粹に厚意で口うるさく言っているのも理解できるので突き放すような真似は出来ない。

結局彼に出来る事と言えば、大人しく彼女の説教が頭上を通り過ぎるのを待つ事だけであつた。

「——聞いてますか？」

「うんうん、聞いてる聞いてる。次からは気を付けるよ」

「その言葉、もう何度も聞きました」

「大丈夫だつて。それよりこれ片付けるから、もう行きな」

いそいそと本を元あつた場所に戻していく仁。亜矢はそれを見て、同じく本の山から何冊か持ち出して一緒に片付け始めた。

彼女が手伝つてきた事に、仁は思わず目を丸くする。

「ん？ いやこれくらい自分でやるよ」

「一体何分かかるんですか？ 午後の講義は出るんでしょ？ 早く片付けないとお昼食べ損ねちゃいますよ」

「いやでもさ……」

「いいですからいいですから」

そのまま自分と共に本を片付け始める亜矢の姿に、仁は溜め息を吐かずにはいられなかった。

仁と亜矢の付き合いはこの大学に入ってからだ。最初は同じ講義で顔を合わす程度の間柄だったが、この通り仁はどちらかと言うと協調性がなく我が道を往くタイプだったので気付けばどの講義でも孤立する姿が目立つようになっていった。

そんな彼に臆することなく声を掛けたのが亜矢である。海外の科学誌をアイマスク代わりに外のベンチで仁が昼寝をしていた時に、見兼ねて亜矢が声を掛けたのだ。

曰く、そんな所で寝ていると風邪を引く、と。

それに対して、仁は最初無視を決め込んだ。自分の健康は彼女に関係のない事だし、この程度で体調を崩す程柔な体はしていない。

亜矢の顔をチラリと見ると、再び科学誌を顔に被せて昼寝を続けようとした仁。その瞬間、科学誌を没収されたかと思うと丸めたそれで鼻っ柱を思いつき叩かれたのだ。

勿論その時は文句を言い、それに対して亜矢も反論。お互いああ言えばこう言うを繰り返し、気付けばとつくの昔にその日の講義が終わる時間となつてしまつていた。

そこからまた始まる2人の口論。お互いに相手の所為でその日の残りの講義を欠席してしまつたと。

その後も何かにつけて互いに相手が目に付くようになり、気付けば互いに相手の扱いや接し方を何となくだが覚えてきた。

仁は亜矢に対して取り合えず話を聞く様に心掛けた。無視するとその方が面倒になるからだ。

一方亜矢の方は、仁に対して遠慮は必要ないと行動するようになる。中途半端に距離を置くと無視か反発をされるからだ。

そんな感じに、腐れ縁ともとれる付き合いを続けて今や2人は大学三年生。そろそろ所属する研究室を決める頃だ。

本を片付け終わり、そのまま学生食堂に向かった2人は食後の茶を飲みながらどの研究室にするかを互いに話し合う。

「門守君はこの研究室にするかも決めました？」

「うん。白上教授の研究室。あの人の講義面白かつたから」

白上教授とは、この大学の名物とも言える教授だ。別名紳士教授。常に杖を手講義

を行い、噂では三時には必ずティータイムを設けているとか。しかも最近では自分が陰で紳士教授と呼ばれている事に気付いたからか、パイプにハンチング帽まで被ると言う有様。そのノリの良さと、分かり易い講義内容で多くの学生に人気のある教授だった。

「そう言う双星さんは？」

「実は私は、まだ決めかねてて……」

「ふうん……まあ双星さんならどこでも上手くやれるんじゃないの？ 何せこの大学のマドンナだし」

「や、止めてくださいよそんな言い方。結構気にしてるんですから」

「でも人気があるのは事実でしょ。今だって、ほら……」

仁がチラリと周りを見渡すと、自分達に向けて視線を向けている学生がチラホラ居る。大学のマドンナと、大学一の変人と言われる組み合わせに興味津津なのだろう。男子学生の中には——中には女子も——嫉妬の目を向けている者も居るが、仁は特に気にしていない。

微かな悪意を感じないでもなかったが、直接行動に起こさない限り気にするのも馬鹿らしいし時間の無駄だ。少なくとも仁はそう考えていた。

「さつてと。俺次の講義に行くから、お先失礼するよ」

「あー！ 待ってください、私も！」

そろそろいい時間だという事で席を立つ仁と亜矢。食堂から出ていく2人の様子を、他の学生達は羨望半分嫉妬半分の目で見送っていた。

一方、今し方仁が話題に挙げた白上しらがみ源五郎教授は、講義の時間が近付いていると言
うのにまだ自分の研究室に籠っていた。

いや、ここは本当に大学の研究室なのだろうか？ 普通の大学の研究室にしては他の
学生が研究をするスペースが見当たらない。室内にはあちこちに何に使うのか分から
ない機械が詰め込まれ、大学の研究室と言うよりは本格的なラボと言った方が正しいよ
うに見える。

そのラボの中で、教授は何かのベルトが繋がった機械のキーボードを叩いていた。そ
の機械には、反対側に大きな試験管の様なものとその中に浮かぶアンプルの様な形の
カートリッジがある。

暫くキーボードを叩いていた教授だが、区切りがついたのかキーボードから手を離し

椅子の背もたれに体重を預けた。

「ふう……………これで調整は完了だな」

教授は額の汗を拭いながら立ち上がると、機械からベルトとカートリッジを二つ取り出して普通より頑丈そうなアタッシュケースにそれらを大事に収めた。

「雄成……………」

ベルトとカートリッジを収めたアタッシュケースを見て、教授は表情を険しくする。まるで何かを悲しむか悔いるようだ。

だが直ぐに気を取り直すと、ケースを閉めて鍵をかけるとそれを手にラボから出ていった。

ラボを出た先は普通の学内の研究室、彼が責任者を務める研究室の中だった。

彼はそこで自分の研究を熱心に行う四年生や院生達に軽く挨拶をしながら、講義を行うべく研究室を後にした。

研究室から出て講義を行う講堂へ向かう白上教授の姿を、大学から遠く離れた所から双眼鏡で見ている者が居た。全身防具をフル装備で固め、頭もフルフェイスのヘルメットを被った如何にも怪しい出で立ちの人物だ。

同様の恰好をした者は他にも居り、さらにはその中には一人だけヘルメットを被っていない者が居る。女性だ。

そのヘルメットを被っていない女性が、双眼鏡で白上教授を見ている者に話し掛けた。

「どう、ターゲットの様子は？」

「……確認できました。大きな動きは確認できませんが、如何いたしましたでしょうか？」

問い掛けられ、女性は考え込む。今回彼女が言い渡されたのは飽く迄も偵察だ。目的の人物の行動を観察し、異常が無ければ帰還する。予定通りであれば、この後帰還する手筈になっていた。

しかし………と女性は考える。このまま帰っていいのだろうか、と。

下手に騒ぎを起こすべきではないと言うのは分かっている。つい先日手痛いダメージを与えたとは言え、S. B. C. T. は依然として監視の目を張り巡らせている。下手な事をして尻尾を見せるのは下策だ。

だがあそこに明確な脅威が居る事もまた事実。今は無力だが、放っておけば大きな力

を得て牙を剥いてくるかもしれない。

「……………S・B・C・T・に何か動きはあるかしら？」

「少々お待ちを……………いえ、今のところ大人しくしているようです」

女性はS・B・C・T・の動きを確認した。先日の攻撃は相当に堪えた様で、何か起こったとしても即応出来るだけの余裕はないらしい。

その情報が彼女に決断させた。

「……………貴方達は撤収しなさい」

「チミン様は？」

「愚問ね」

〈SPIDER〉

「……………了解」

チミンと呼ばれた女性は円筒形のカートリッジを取り出すと、そのコックを捻り押し込んだ。そして電子音声が響くと、それを自らの首筋に押し付ける。

するとカートリッジが彼女の体内に入り込み、その体を変異させる。

チミンは全身を毛の生えた甲殻に覆われ、背中からは四本の蜘蛛の脚が生え、顔も蜘蛛の様な複数の眼と鋏角を持ったものとなる。

それを見届けると、フルフェイスヘルメットの集団は音も無くその場を離れた。

「さあ……………行くわよ」

チミンが変異した怪物——スパイダーファッジは、一路明星大学へと向かって移動を開始した。

昼食を終え、講堂へと向かう仁と亜矢。2人がこれから受けるのは、白上教授の受け持つ遺伝子工学だ。教授の人柄と内容の割に分かり易い講義内容で、大学内でも一、二を争う人気の講義である。あまりの人気ぶりに、定員を余裕でオーバーしてしまいただの講義だと言うのに選考試験が行われるほどであった。

まだ時間に余裕があったのでゆっくり歩いて講堂に向かう2人。その前に同じく講堂に、しかしこちらは講義を行う為に向かう白上教授が通り掛かった。

彼は2人の姿を見ると、柔らかな笑みを浮かべて軽く手を上げた。

「やあ、門守君に双星君！」

「あ、白上教授」

「今日もよろしくお願いします」

大学の変人とマドンナの存在は教授間にも知れ渡っている為、白上教授は2人の事を当然知っている。しかも仁に関しては、特に熱心な学生として記憶していた。興味のない事に対してはとことん反応が悪い仁だが、反面興味を惹かれた事に対しては打って変わってアクティブに行動するのである。白上教授の講義に関しても、講義内容で気になる事があると仁は彼の研究室に乗り込んであれやこれやと質問攻めする程に熱心な姿を見せていた。

その姿は、噂でしか仁の事を知らなかった研究室内の学生や院生が目を見張るほどである。

「それで教授、今日の講義内容は何ですか？」

「おいおい、気が早いぞ。講義は逃げたりしないから、始まるまでじっくり待ちたまえ」
早くも白上教授の講義内容に興味津々な仁の様子に、亜矢は思わず苦笑を浮かべた。このアクティブさをもっと前面に出せば、周りからの目も少しはマシになるだろうに。

「フフ……………ツ!？」

等と考えていた時、不意に亜矢の中の何か危険を訴えた。その不思議な感覚に促されるように明後日の方を見ると、手から伸ばした糸でまるで振り子の様に空中を立体起動して迫るスパイダーファッジの姿を目撃した。

それを見た瞬間、亜矢は一も二も無く白上教授と仁を押し倒した。

「危ないッ!？」

「双星君!？」

「おわっ!？」

何が何だか分からずそのまま押し倒される2人。彼らと一緒に亜矢が倒れるとその真上をスパイダーファツジの鋭い爪が通り過ぎ、その勢いのまま大学敷地内の地面を抉った。

「な、何? 何が……って、えっ!？」

「お、お前は……まさか!？」

突然目の前に現れたスパイダーファツジの姿に、目を見開く仁と白上教授。亜矢もまたその異形の姿に慄くが、周囲の学生達の反応の方が大きかった。

「な、何だアイツツ!？」

「まさか、噂の化け物!？」

「逃げろおおっ!？」

今世間で実しやかに囁かれている噂………社会の裏で、異形の怪物が人々を襲うと言う噂だ。だがニュースなどで取り上げられた事は無く、情報源はネットの書き込みでの目撃情報のみ。なので仁ですら、その存在を信じてはいなかった。

だが現実には怪物はここに居る。ファッジと言う異形の怪物が、今正に牙を剥いているのだ。

それは嘘偽りなく抉られた地面が証明している。

その光景を目の当たりにし、周囲は一気に大混乱に陥った。

逃げ惑う学生達。警備員や教授が必死に避難誘導する中、スパイダーファッジはお構いなしに白上教授に迫った。

「白上、源五郎……プロフェッサーの大願成就の為、障害は消えていただく」

今だ押し倒されたままの白上教授に爪を振り下ろそうとするスパイダーファッジ。

しかしその爪を、立ち上がった亜矢が蹴りで弾き飛ばした。

「ツ!! コイツ!!」

「!?! え?」

2度目の邪魔に、スパイダーファッジが憤りの声を上げるが亜矢本人も何故か驚いていた。まるで自分が何故こんな事が出来たのかと言った様子だ。

しかしスパイダーファッジにはそんな事関係ない。どんな理由があれ、邪魔をしてくるなら亜矢も敵だった。

「邪魔をするな!?!」

「あ——」

再び振り下ろされたスパイダーファツジの爪、しかも今度は背中の中の4本の足も追加されてのそれは、流石にどう足掻いても避けられるものではなかった。

迫る5つの脅威に、亜矢の視界がスローモーションになる。

そのゆっくりと動く世界で、彼女を突き飛ばす者が居た。仁だ。

彼は亜矢を突き飛ばし、代わりにスパイダーファツジの攻撃をその身で受け止めた。

「門守君!？」

「門守君!! いやあつ?!」

体をズタズタに切り裂かれ、血を噴き出しながら倒れる仁。亜矢は倒れる仁の体を受け止め、顔から血の気が失せた彼に必死に呼びかける。

「門守君! 門守君、しっかりしてください!」

仁は亜矢の言葉に反応しない。まだ目は薄く開かれ生きてはいるが、体はどんどん冷たくなり呼吸も弱くなっていく。

亜矢の悲痛な声が響く中、スパイダーファツジは白上教授に再び狙いを定めようとした。

「ふん、無駄な事を……」

「無駄ではないさー!」

しかし仁の行動は無駄ではなかった。彼の行動によりスパイダーファツジの意識が

逸れている間に、教授は手にしていたアタッシユケースから緑色の液体が入ったカプセルと口径の大きな拳銃の様な物を取り出した。

半分に折れる拳銃——カプセルシューターにカプセルを装填し、至近距離からスパイダーファッジに向け引き金を引いた。撃ち出されたカプセルはスパイダーファッジの関節部に命中し、柔らかい部位からカプセルの中身を注入した。

「ぐっ!?!、これは——!?!」

「お前達専用の制限酵素だ。少しの間大人しくしている」

そう言うと白上教授は倒れている仁の方を見た。もう息絶える寸前の彼に、亜矢が血を流す傷口を押さえて涙ながらに声を掛けている。

「門守君、駄目!?! 駄目です!?! 目を閉じないで!?! 意識をしつかり持つてください!?!」

「はっ……………はっ……………」

「私を見て! しっかりとしてください! 死んじや駄目です!?! 門守君!?! 仁君ツ!?!」

両手を仁の血で汚しながら亜矢の必死の呼び掛けも空しく、彼の命の灯は消えようとしている。

その彼に、アタッシユケースを手に白上教授が近付いた。死相が浮かんだ人の顔を見て、彼は顔を顰めるとアタッシユケースからベルトを取り出す。

「教授、門守君が!?!」

「分かつている！ 門守君！」

白上教授は亜矢を押し退け、仁の腹にベルトを巻く。ベルトはバックルの上部に2つのソケットがあり、中央に円形の窓の様な物、そして右側にはL字が上下逆になったドアの取手の様な物が付いている。

仁の腹にベルトを巻き、取手——と言うよりグリッパ——に手を掛ける白上教授。だが彼は、その瞬間何かを悔いるように目を瞑った。

「くっ……門守君、許せ!!」

だが彼は直ぐに目を開けると、謝罪の言葉と共にグリッパを引いた。

〈Open the door〉

教授がグリッパを引くと、ベルト中央の窓——セントラルドグマ——から光が溢れ出し、仁の体を包み込む。

そのあまりの眩しさに、教授も亜矢も、そして動けるようになったスパイダーファツジも手で目を覆う。

光が辺りを照らしていたのはほんの数秒。直ぐに光は晴れ、亜矢は目を開けられるようになる。

「う、何が……えっ!!」

「くっ……なっ!!」

亜矢とスパイダーファツジが手を退けた時、そこに仁の姿はなかった。

代わりにそこには、全身に灰色のアンダースーツと装甲を纏った1人の戦士が立っていた。戦士は己の体を見て、自らの顔を触り、自分の変化を確かめている。

「っ、これは……っ」

呆然として困惑した声を上げる戦士。だが自分の体とスパイダーファツジを見比べ、そして何かを思ったのか拳を握ると、一気に近付きスパイダーファツジにその拳を叩き付けた。

第2話：進化の始まり

仁が変身した仮面の戦士の拳が、スパイダーファツジに突き刺さる。

本来であれば容易に反応出来る攻撃だったが、白上教授に撃ち込まれたカプセルの効果に加えてまさかの存在、まさかの反撃に反応が遅れてしまい、大人しく殴られた。

「ぐうつ!! き、貴様はツ!!」

突然の攻撃に怯むスパイダーファツジだったが、怯んだのは攻撃した本人もだった。

「いっつつつ!! か、硬——!!」

殴った方の手を振って痛みを紛らわす仁が変身した仮面の戦士。だが彼は何とか痛みを堪えると、再び拳を構えて殴り掛かった。

彼は元々、自分の無茶に体が耐えられるようにと地味に鍛えていた。その為に空手を習い、プロには及ばないまでも一端の型は覚えられるくらいには続けていた。そのおかげで彼の戦いはそれなりに堂に入ったものとなっていた。

放たれる正拳突きが何度もスパイダーファツジを捉え、動きを止めた所で回し蹴りが引き下がるせる。

「イテテテ……けど、何とかやれてる……かな?」

手応えがイマイチ感じられないので実感は湧かないが、少なくとも先程よりはマシだろうと思いい攻撃を続行する。

しかし――

「調子に、乗るなッ!!」

撃ち込まれたカプセルの効果完全に切れたのか、スパイダーファツジの動きが大きく変わる。背中の四本の脚で地面を叩き、大きく跳躍して仁の攻撃を回避。そして空振りして隙を晒したところから蹴りを放った。

「フン!」

「ぐあっ?!」

そこから更にスパイダーファツジの攻撃が続いた。両手の爪による斬撃で怯んだところに、背中の脚で突き飛ばし、前蹴りで大きく吹き飛ばした。

その攻撃にはまるで弱った様子が無い。

「イツテエ……あれ? 何か大して状況好転してないな。ちよ、教授!? 何とかありません!」

これの持ち主だった白上教授なら何とかしてくれるだろうと、彼に助けを求める仁。その彼に、教授はアタッシュケースから取り出した二つのカートリッジを放り投げる。

「門守君、これを使うんだ!」

放物線を描いて投げ渡されたカートリッジを受け取った仁は、それをまじまじと見つめた。カートリッジは二重構造になっており、透明な表面の中に二重螺旋の管の様な物が見える。管の色はカートリッジでそれぞれ異なり、右のカートリッジの中が赤で左のカートリッジの中が白い。

しかし渡されても、仁にはこれの使い方が分からなかった。

「これどうやって使うんですか!？」

「コックが付いてるだろ! それをまず捻って、次に押し込め!」

仁は言われた通りカートリッジの上部のコックを捻り、次に押し込んだ。するとカートリッジから電子音が鳴る。

〈BUFFALO〉

〈HUMAN〉

「そしてそれを、ベルト上部のソケットに装填しろ!」

「させるか!!」

教授の指示に従い仁がカートリッジをベルトに装填しようとするが、それを黙って見ているスパイダーファッジではなかった。仁がカートリッジを装填しようとするのを、両手から放出する粘着性の糸で妨害した。

「あ、ちよっ!？」

「門守君!？」

「くっ!？」

糸で拘束され焦る仁に、悲鳴のような声を上げる亜矢。教授はもう一発あったカプセルをシューターに装填しスパイダーファッジに向ける。

だがスパイダーファッジが次の行動を起こす前に、両者の間に乱入する者が居た。無数の弓矢の様な大きさの針が地面に突き刺さり、教授とスパイダーファッジの行動を妨害する。

「ッ!？」

その攻撃が何であるかを知っているスパイダーファッジが針の飛んできた方を見ると、そこには案の定見知った怪人の姿があった。

「グアニン!？ 何故ここに!？」

その怪人——グアニンと呼ばれた、ウニの様な特徴を持つシーアーチンファッジがスパイダーファッジの傍に歩いてきた。

「撤退だ」

「何!？」

突然の撤退指示に、スパイダーファッジは当然不服そうな声を上げる。あともう少しで邪魔な仁を始末し、障害となり得る白上教授も消せそうだったのだから当然だ。

だがこの場での発言に正当性があるのは、スパイダーファツジではなくシーアーチンファツジの方だった。

「何、じゃない。お前が言い渡されたのは偵察だった筈だ。こんな騒ぎを起こして、プロフェツサーに苦勞を掛けるつもりか？」

「そ、それは……しかし!？」

「とにかくここは退くぞ。反論は認めない」

シーアーチンファツジはスパイダーファツジからの反論も聞かず、地面に無数の針を打ち込んだ。するとその針が爆発し、仁達の視界を土煙が覆い隠した。

土煙が晴れるまでの間に、仁は体に付着した糸を引き剥がし目くらましに紛れての追撃に備えた。置き土産的な攻撃をしてくるかもしれないからだ。

だが結論を言えばそれは杞憂だった。土煙が晴れた時、そこには爆発で抉れた地面以外何も存在しなかった。どうやら本当に撤退する為だけの目くらましだったらしい。

「逃げた……逃げてくれたか………ふう」

脅威が去ってホッと胸を撫で下ろす仁に、我に返った亜矢が大急ぎで近付いた。

「か、門守君! 大丈夫ですか!! 痛いところありません? 自分が誰か分かりますか? これ何本です!？」

「ああ、もう。一気に質問しないでつて。痛い所は無いし俺は門守 仁、そんで指は三

本。これでいい？」

仁の回答にとりあえず問題なさそうである事が分かり、亜矢は安堵の溜め息を吐く。だが安堵しているのは実は仁自身も同様であった。スパイダーファッジに体を切り裂かれ、意識が朦朧とし感覚が薄れていく中、亜矢の声徐徐に聞こえなくなってきた時はもう死ぬのかとまるで他人事のように考えていたのだ。

それが今はどうだ？ 全く問題ないどころか、スパイダーファッジの攻撃によるダメージを除けば絶好調だ。

一体自分の体はどうなってしまったのか、その答えを知るだろう白上教授に仁は詰め寄った。

「それで教授、これは一体何なんです？ って言うかそろそろ元に戻りたいんですけど、戻れるんですか？」

死なずに済んだのは良かったが、このままで過ごすのは凄く困る。迂闊に出歩けば警察官から職質間違いなしだ。

「ああ、戻るのは簡単だ。ベルトの右側にグリップがあるだろう？ それを引けば戻れるぞ」

言われた通り仁はベルト右側のグリップを引いた。すると全身が一瞬光り、そして次の瞬間光が納まるとそこにはスパイダーファッジに切り裂かれた服がそのままである

こと以外は何の問題もなさそうな仁の姿があった。

元の姿に戻れた事に、仁は勿論亜矢も安堵に胸を撫で下ろした。

「あ、あく……戻れた」

「よ、良かった……傷も無さそうですね」

「うん………つて言うか、双星さん俺より安心して過ぎじゃない?」

「だ、だって、本当に心配したんですよ!」 死んじやうんじやないかって……本当に、また……」

仁が切り裂かれて血塗れで倒れた時の事を思い出してか、亜矢がまた目に涙を浮かべる。また泣かれては堪らないと、仁は彼女を宥めに掛かった。

「ああああ、悪かったつて。大丈夫、俺もうこんなにピンピンしてるから」

亜矢の前で両手を広げて何てことはない事をアピールする仁の姿に、亜矢は少し落ち着いたのか少し笑みを浮かべる。

場が少し和んできたのを見計らつてか、白上教授が2人に声を掛けた。

「さて……君達。色々と聞きたいことがあるだろう?」

「あ、是非。さっきの怪物とか、このベルトとか、聞きたい事山ほどあります」

「教授、色々と知ってるんですよね? 一体何がどうなってるんですか?」

一気に捲し立てるように白上教授に2人が質問する。教授は2人がそう言う反応を

することを察していたからか、特に慌てる事無く両手を上げて2人を宥めた。

「分かっている、分かっているさ。だがここで話すのもなんだ。君達、私の研究室に来な
きゃ」

撤退したスパイダーファッジとシーアーチンファッジは、何処かの研究室の様な所に
来ていた。周囲には無数の試験官があり、その中には一つずつ円筒形のカートリッジが
浮かんでいる。

そして肝心のスパイダーファッジとシーアーチンファッジだが、2人はある人物の前
で跪いていた。スパイダーファッジなどは大学での事が嘘の様に恭しくしている。

そんな2人の前に居るのは、如何にも高そうなスーツに身を包んだ壮年の男性だ。
ファッジ達の事を棚に上げるようだが、この場所には何処か似つかわしくない。

「……………報告は聞いている。私の指示を無視して、勝手に行動したようだな？」
壮年の男性の言葉に、スパイダーファッジはビクリと肩を震わせる。

「も、申し訳ありません。ただ、決して貴方の言葉を軽んじた訳ではないのです。ただ、ここで白上教授を始末すればプロフェッサーにとつての障害が居なくなると思つたものでして……」

必死に弁明の言葉を口にするスパイダーファッジを、斜め後ろで跪いているシーアーチンファッジは心の中で笑つていた。普段の様子が嘘のように無様な姿だ。こんな姿を残りの2人どころか、下の連中に知られたらどうなる事か。

だが次にプロフェッサーと呼ばれた男性の口から出てきた言葉は、スパイダーファッジは勿論シーアーチンファッジですら予想外のものであつた。

「構わん、気にしていいない。いや寧ろ良くやつた」

「え、は？」

「ぶ、プロフェッサー？ 本當に宜しいのですか？ 今回の事、決して小事では済まされません。S. B. C. T. も警戒する筈です。もし連中に尻尾を掴まれるようなことがあれば、動き辛くなるどころかプロフェッサーのお立場も危ういものとなるのでは？」

シーアーチンファッジの心配を他所に、プロフェッサーは徐に一つの試験官から一つのカートリッジを取り出しそれをスパイダーファッジに投げ渡した。

「心配する事は無い。連中だつてそう簡単には動けん。その気になればいつでもどうに

でもできるのだ。今しばらくは放っておけ。それよりそら、これを使え」

「ッ!? こ、これは?」

「それを使って、もう一度白上の奴に仕掛ける。ついでだ、アントも連れていけ」

プロフェツサーの言葉にスパイダーファツジはシーアーチンファツジと顔を見合わせた。今に始まった事ではないが、彼の考えは理解できない。一体何を考えてこんな事を指示したのか。

「わ、分かりました。必ずや、プロフェツサーのご期待に副つてみせます」

「期待しているよ」

だがスパイダーファツジが疑問を抱いたのは少しの間のこと。直ぐに気持ちを切り替えプロフェツサーの言葉に頷き、スパイダーファツジは研究室を後にした。残されたのはプロフェツサーとシーアーチンファツジのみ。

シーアーチンファツジはスパイダーファツジが出ていくと、首筋からカートリッジを抜き取り元の姿に戻った。元の姿のシーアーチンファツジは、プロフェツサーに比べると数段劣るがそれでもしつかりとしたスーツに身を包んだ眼鏡の男性だった。

「プロフェツサー、本当に宜しかったのですか?」

シーアーチンファツジだった男——いや、グアニンと呼ばれた男は、改めてプロフェツサーに真意を訊ねた。プロフェツサーの「立場」的にも、事を荒立てるのは賢い

判断とは思えなかった。

「構わんさ。事は全て私の思う通りに動いている」

「それは、チミンの行動や白上教授の発明の事もですか？」

グアニンの問い掛けにプロフェッサーは意味深に笑うだけであった。一向に答えが得られない事にグアニンが焦れて更に問い掛けようとすると、プロフェッサーの懐から電話の着信音が鳴り出した。

プロフェッサーは流れるような動きで携帯を取り出し通話に出た。

「私だ」

『社長、そろそろ会議のお時間ですので第1会議室にお越しく下さい』

「ああ、もうそんな時間か。分かった、すぐに行くよ」

電話口でそう言うと、プロフェッサー………否、世界的製薬会社『傘木社』の社長、

傘木かさぎ雄成ゆうせいは薄く笑みを浮かべながら研究室を後にした。

その後ろ姿を、グアニンは何とも言えない顔で見送るのだった。

仁と亜矢は白上教授に連れられて、彼の研究室へとやって来ていた。

ただし、2人が居るのは「大学の」研究室ではない。ベルトがあつた白上教授の研究室である。大学にあるまじき機材の数々に、仁も亜矢も目を丸くしている。

「な、何だこれ？　ここ、本当に大学の中か？」

「白上教授、ここは一体？」

周囲の機材を見渡しながら亜矢がこの部屋の事を訊ねると、白上教授は空のアタツシユケースを適当な所に置き椅子に腰掛けながら答えた。同時に2人にも椅子に座るよう勧める。

「ここは、私の秘密のラボとでも言うべき場所だ。ここを知っているのはこの場の3人以外にごく僅かしか居ない」

まずは2人を落ち着かせようとしてか白上教授は室内の一面に設けられた、冷水器とガスコンロが置かれただけの給湯スペースで茶を淹れて2人に渡した。

「まあ、まずはこれでも飲んで落ち着きなさい」

「あ、はい……」

「どうも……とここで教授、早速なんですけど——」

仁はカップを受け取るも、口を付けることなく質問を口にしようとした。白上教授は

それを片手で制す。

「分かっている。とりあえず手短かに話すから、質問はその後にしなさい」

言われて仁は渋々黙ると、カップに口を付けた。温かい紅茶の味が、嫌が応にも心を落ち着けてくれる。

何気なく彼が隣の亜矢を見ると、彼女は既に中身が半分ほどに減っているカップに角砂糖を二つ入れていた。

「さて、まず最初に言うべきはやはり門守君を変身させた、これについてかな」

そう言って白上教授は仁から受け取ったベルトを持ち上げる。ベルトと言ってはいるが、今あるのはそのバックル部分だけだ。

「これはDNAドライバー。私が開発した、仮面ライダーと言う存在に変身する為の専用ツールだ」

「DNA、ドライバー？」

「仮面ライダー……？」

白上教授の口から出てきた単語に、2人は首を傾げる。教授はそんな反応が来ることもお見通しだったのか、順を追って説明し始めた。

「まずこの能力だが、先程やってみせたようにこれは人を仮面ライダーと言う戦士に変身させる。その際全身の細胞を活性化させるので、瀕死の重傷を負っていても変身す

れば傷は完治するんだ」

「はあく、そつか。だから俺死なずに済んだのか」

「あの、初歩的と言うか根本的な質問なんですが、仮面ライダーって何なんですか？」

「それはそのまま、先程門守君が変身した奴の事だ。名前がないと不便だろう？ 今はまだ製作途中だが、あれには専用のバイクがあつて移動の際などに活躍するんだ」

顔には仮面を被り、そしてバイクに乗って疾走する。仮面を被ったバイク乗り……故に仮面ライダー。

仁は白上教授の説明に一応の納得を見せ、そして先程は使いそびれた二つのカートリッジを取り出した。

「あの、それじゃこれは？」

「それこそが、このDNAドライバーの機能の要とも言える物だ。その名もベクターカートリッジ」

白上教授によると、このベクターカートリッジにはそれぞれバッファローと人間の遺伝子情報を持つ超万能細胞と言う細胞が入っているらしい。

またも出てきた聞きなれない単語に、2人は首を傾げた。

「超万能細胞？ iPS細胞みたいなものですか？」

「いや、あれよりもずっと凄い能力を持っている。血液型や人種に関係なくどんな細胞

にも瞬時に馴染み、遺伝子情報を入力すればあらゆる組織に変貌可能な文字通り万能細胞を超えた万能細胞だ。私が嘗て研究し、その理論を見つけ、そして……封印した」

2人は白上教授の口から出た、超万能細胞の概要に度肝を抜かれた。あらゆる組織に変貌可能で、しかもどんな細胞にも馴染む細胞など医学界に革命が起こってもおかしくない代物だからだ。これさえあれば、特に臓器移植が抱えている多くの問題が解消される。

だが仁は、白上教授が最後に口にした封印と言う言葉に引つ掛かりを覚えていた。これほどの理論、世に出せばノーベル賞確実だろうに、それをしないと言う事は相応の理由があると言う事だ。

「凄いじゃないですか！ そんな凄い発明、何で世の中に出さなかつたんですか!? これさえあれば、臓器移植や他の医療で大活躍する筈なのに！」

だが亜矢は教授が最後に発した言葉に気付いていないようで、この発明を世に出さない事に対する疑問を口にする。

それを横で聞いていた仁だったが、少し考えて彼は教授が超万能細胞を世に出すのを諦めた理由に見当がなかった。

「そう簡単な問題じゃないって事だよ、双星さん」

「それは、どう言う……?」

仁の言葉にまだ訳が分からないと言った様子で首を傾げる亜矢に、教授が答えを口にした。

「そう、門守君の言う通りだ。実験を進める内に、私はこの超万能細胞について二つほど大きな問題点を見つけてしまったのだ」

「その問題点とは？」

「一つは、超万能細胞は他の細胞に伝播すると言う事。例えば心臓を超万能細胞で培養し移植した場合、その心臓を構成している超万能細胞の遺伝子は他の組織の細胞にも広がるんだ」

まるで癌細胞の様だ。亜矢は思わず口元を押さえた。それはいくらなんでも危険すぎる。制御できない遺伝子、まるでB級のモンスターパニックか何かに出てくる細胞の様だ。

その危険性は、仁の好奇心に火をつけた。

「仮に、全身が超万能細胞の遺伝子で支配された場合、その人間はどうなるんですか？」
「……想像もできない。臨床実験をする前にサンプルも研究データも破棄したからな。人間のまま全身の細胞がアップグレードされるだけならまだマシだが……」

「最悪の場合、人間ではない怪物になってしまう」

「そう言う事だ。それが問題の一つ目」

それだけでも確かに研究を破棄するには十分な理由だ。だがこの超万能細胞の持つ問題はもう一つあると言う。それは一体何なのか？

「それで、もう一つの理由って？」

「仮に超万能細胞が人間に有用で、全身を超万能細胞で構成された謂わば新人類とも言うべき存在が生まれた場合……どうなると思う？」

「え？ どうって……」

突然問い掛けられ、亜矢は答えに詰まる。超万能細胞と言う、人間にとって夢のような細胞。人を人のまま更に優れた存在にしてくれる細胞で体が出来れば、健康面で様々な問題が解決されて良い事ばかりの様な気がするが………

その答えを口にしたのは、亜矢の隣の仁であった。

「超万能細胞を持つ人間に対する迫害、若しくは新人類と旧人類の戦争」

「えっ!？」

「その通り。思想や宗教的、若しくは倫理云々の理由で超万能細胞を受け入れない者は当然出てくる。今の時代にこんなものを世に出してしまえば、新たな争いの火種となりかねない」

亜矢は完全に絶句してしまった。一見人類にとって夢の様な細胞が、一歩間違えれば人類を滅ぼしかねない災厄の種であったなど。

だがこの場での本当の問題はそこではない。問題はもつと別の所にあった。

「ちよつと待つてください。教授、そんな危ない物を門守君に使わせようとしていたんですか!？」

白上教授の話を信じるなら、仁はあと一步と言うところで彼自身を人外に変貌させてしまいかねない危険なものを使いそうになったという事になる。それを説明する前に使わせようとしたことに、亜矢は白上教授に詰め寄ろうとした。

「その為のDNAドライバーだ。このドライバーには、超万能細胞からの影響を最小限に抑える機能がある。これを介してベクターカートリッジを使えば、超万能細胞の利点だけを引き出して肉体を強化できる。それが仮面ライダーだ」

そう説明されたが、亜矢はまだどこか納得できてはいない感じだ。無理もない。どう言葉を並べようと、仁に爆弾を抱えながら戦わせようとしたのは事実なのだから。

だが確かにこのDNAドライバーが無ければ、仁は今この場に居なかつたかもしれない。

しかし――

「ふくん……DNAドライバーねえ……何か言い辛いな？ うくん………よし、ディナだな」

「え？」

「これの名前だよ。DNAドライバーなんて呼び辛い。『D』で『デイ』、『NA』で『ナ』だからデイナ。その方が呼び易いしカッコいい。良いですよ、教授？」

こんな時に何を言っているんだと亜矢は呆れた。まあ彼のマイペースさは今に始まった事ではないし、この程度であれば寧ろ可愛い方なので目くじらを立てる程の事でもないが。

一方、心血注いで作り上げたDNAドライバーに勝手に新しい名前を付けられてしまった白上教授はと言うと、こちらはこちらで苦笑を堪えずにはいられなかった。仁は自分が危ない橋を渡りかけていた事など微塵も気にしていない。教授が思っている以上に、彼は自分の好奇心に正直な男なのだ。過去の身の危険より、今、そして未来への好奇心の方を彼は取ったのである。

「ハハ、そうだな。確かにそちらの方が呼び易い。良いだろう、今日からそいつはデイナドライバー。君は仮面ライダーデイナだ」

「どうも」

「ちよつと待つてください。また門守君を戦わせる気ですか？」

一度は落ち着いた亜矢だったが、白上教授の言葉に黙ってはいられなくなった。先程は止むを得ない理由で仁を仮面ライダーに変身させてしまったが、本来彼にそんな危ない事をする義理はない筈だ。また彼が死に掛けるのではないかと思うと、彼の学友とし

て黙ってはいられなかった。

「仕方がない。奴がここに現れた以上、次が無いとも限らない」

「ですが、門守君はただの学生なんですよ？ もっと他に、それこそ警察官や自衛官に適任な人が居るんじゃないですか？」

「残念だがもう手遅れだ。デイナドライバーは最初に使用した人間の遺伝子をマスターとして登録するように設定してある。外部から解除されないよう、何重にもプロテクトを掛けてね。今更彼以外の人間に使わせることは出来ない」

「いつそ無情とも言える白上教授の言葉に、最初亜矢は啞然としてしまっていた。だが次の瞬間、彼女にしては珍しく本気で憤り立ち上がると教授の顔を平手打ちしようとした。

それを察した仁が、彼女の手を取って宥めた。

「まあまあ、落ち着きなつて」

「これが落ち着いていられますか!? 門守君は良いんですか!? また死に掛けるかもしれないんですよ!」

亜矢は目尻に涙を浮かべながら問い掛けた。

「本当に、死ぬかもしれないんですよ？ さつきだつて、危ない所だったじゃないですか」

言いながら亜矢は自分の手を見た。先程仁の傷口を必死に押さえた両手。ここに来る途中トイレの洗面台で洗い落としはしたが、あの時の血の生暖かさと感触はまだ手に残っているし、服の方には所々に彼の血が付着している。

他人の命が流れ出るあの感触は、当分忘れられそうにない。思い出すと今でも体が震えるようだった。

「嫌なんです、私……もう誰も、私の前から居なくなつて欲しくないんです。怖いんです」

両手で自分の体を抱きしめ、背を丸める亜矢の姿はまるで孤独と寒さに震える子供の様だった。

その姿に、白上教授も罪の意識に胸を痛めた。

「正直、私もすまないと思つている。奴が……ファツジが来たのは間違ひなく私を狙つての事だ」

「ファツジ……それがあの怪物の名前ですか？」

「ああ。今言つた、超万能細胞の能力により他の生物の遺伝子で全身を変異させた人間が、あれだ。ドライバーを介さず直にベクターカートリッジを使うと、ああなる」

白上教授による簡単な説明に頷きつつ、仁は震える亜矢の肩に手を置いた。

「悪いけど、双星さん。俺も止めるつもりは無いよ」

「え？ な、何ですか？ 危ない目に遭うのが、平気なんですか？」

「うーん、危ない目に遭うのが平気って言うより、もともっとこれの事が知りたいんだよね……俺」

仁は二つのベクターカートリッジを軽く投げて片手でキャッチし、もう片方の手にデイナドライバーを持ちながら言った。

「自分でも心底どうしようもない馬鹿な奴だとは思うけど、俺はこのドライバーとベクターカートリッジの事がもともっと知りたい。徹底的に研究して徹底的に検証したい。その為なら俺はいくらでもやるよ」

「何でそこまで……」

亜矢には仁の考えが理解出来なかった。彼が自分の知的好奇心に正直なのは知っていたが、ここまで向こう見ずの馬鹿だとは思っていなかったのだ。今、彼女は仁との間に大きな溝を感じていた。

だが――

「こいつもきつと、こんな戦うだけじゃなくてもっと平和な使い道がある筈なんだよ。双星さんさつき言ってたじゃん。医療で大活躍できるって。どんな技術にも、良い面と悪い面があるのは当然だよ。俺はその良い面を掴み取りたい」

仁はただ自分の知的好奇心を満たす為だけにドライバーとベクターカートリッジに

関わりようとしていた訳ではなかった。彼はこの技術の平和利用の為の道を模索する為に危険に飛び込もうとしているのだ。

ハッキリ言つて、今までの亜矢の中で仁は自分の好奇心に素直なだけの研究馬鹿と言う印象が強かった。だがそれがこの瞬間180度変わった。彼は自分の為でなく、他人の為に常日頃知識を集めていたのだ。

それが分かると、仁の姿が今までと違つて見えた。亜矢の体の震えは気付けば止まっていた。

もう亜矢には、仁を止めることは出来なかった。彼の意志は彼女が思う以上に固い。それに対抗できる意志を持たない亜矢に、これ以上何かを言うことは出来なかった。

「……改めて言わせてくれ。門守君、すまなかった。そしてこれから、よろしく頼む」
印象が変わつたのは白上教授の方もだった。ただの勉強熱心なだけの学生だと思つていた仁が、実は心に彼なりの熱いハートの持ち主だと理解した。

その彼への敬意を称して、教授は彼に握手を求めた。差し出されたその右手を、仁はしっかりと握り返すのだった。

その後もデインドライバーやベクターカートリッジの事に関する話などをしていたが、気付けば日も大分傾きもうすぐ夕方になろうと言う時間になっていた。

今日はもう解散と言う事になり、2人は白上教授の車でそれぞれの家へと送られていく。

因みに三人が研究室のある研究棟を出た時には既に大学の敷地内は騒動の対処に来た警察が来ていて、避難もせずに研究棟に残っていた事をこっぴどく叱られた。

そんな事がありながらも、帰路に就く三人。仁は昼間の戦闘で何だかんだ疲れが溜まっていたのか、眠ってしまっている。

仁の寝顔を横目で見つつ、亜矢は白上教授に気になっていた事を訊ねた。

「教授、一つ先程は話されていない事を聞きたいんですが？」

「何かね？」

「超万能細胞の研究資料は、教授がご自身で破棄されてるんですよね？」

「その筈だよ」

「じゃあ、あのファッジは一体誰が？」

本来であれば存在する筈の無いファッジの出現に、亜矢は強く疑問を抱いた。彼女の

心が強く騒いだ。白上教授は信用できないと。

その質問に対し、白上教授は直ぐには答えなかった。ただ前を見据えて、ハンドルを握るだけ。

だが何かの覚悟が決まったのか、教授が何かを言おうと口を開きかけた。

その時、白上教授が運転する車が銃撃を受けた。銃弾は全て車体には命中せず前方や側面の道路に穴を穿ただけであったが、突然の銃撃に白上教授は慌ててハンドルを切った。

「きやあつ!？」

「くっ!？」

車は派手なブレーキ音を立ててドリフトしながら停車し、地面から煙が上がる。

「いたたた……い、今のは？」

「早速……お出ましまいたいな」

「ああ、そのようだ」

混乱する亜矢に対し、仁と教授は早くも状況を察していた。このまま車内に居てはまずいと、混乱する亜矢を促して車外に出る。

周囲には突然急停車した白上教授の車に野次馬が群がっていた。事故を起こしたとも思ったのだろう。

そこに、昼間仁と戦ったスパイダーファッジが姿を現した。人々の視線は、フィクションの世界から出てきたようなスパイダーファッジに興味をそそられ視線だけでなく携帯のカメラまで向ける。

「なにになに？ 何あれ？」

「映画の撮影か？」

「鬱陶しいわね……失せなさい!!」

「止せ!!? いかん皆逃げるんだ!!」

周囲からの視線が煩わしくなり、スパイダーファッジは手から出す糸を近くの標識に巻き付けた。それに白上教授は危機感を感じ周囲に逃げるよう警告するが、一步遅くスパイダーファッジは引き千切った標識を威嚇の様に周囲に叩き付けた。

飛び散る道路の破片が当たった何人かが怪我をし、そこで漸く周囲の人々もこれが映画の撮影でも何でもなく現実であると理解した。

「うわあああああつ?!」

「助けてえええツ!!」

蜘蛛の子を散らすように逃げる人々。その中で3人は真つ直ぐスパイダーファッジを見つめている。

「これで邪魔な連中は居なくなつたわ。さつきぶりね」

「正直、こっちはもうアンタの顔を拝みたくはなかったけどね。もう疲れたよこっちは」
「悪いけど、もう少し付き合ってもらおうよ」

スパイダーファッジがそう言つて片手を上げると、建物の陰から数人のフルフェイスヘルメットを被つた者達が銃を手に現れた。先程の銃撃は彼らだろう。

その彼らは、徐に黒いベクターカートリッジを取り出すとコックを捻り押し込んで首筋に押し当てた。

〈ANT〉

ベクターカートリッジが首筋に入り込むと、彼らの体に変化し黒い甲殻を持つアリの様な怪人——アントファッジとなった。アントファッジは銃剣付きの銃を構え、3人を包囲する。

「さあ、どうする？」

この状況、並の人間であれば両手を上げて降参するしかない。相手は皆銃を持つているのだ。無手では勝ち目がない。

しかし仁は違つた。何が何だか分からなかつた先程とは違い、今は力の使い方も戦い方も分かる。

それを実践しようと彼が前に出ようとすると、咄嗟に亜矢が彼の服の裾を掴んで引き留めた。仁を見ると、亜矢は不安そうな顔をしている。

そんな彼女の顔に、仁はフツと笑みを浮かべた。基本表情を表に出さない彼には珍しい、感情を感じさせる顔だ。

「……ありがと」

「あ……」

仁は優しくそう言って亜矢の手を外すと、アントファアツジ達の前に立ちデイナドライブバーを腰に装着し両手にベクターカートリッジを持った。

「さて、検証の時間だ」

〈BUFFALO〉

〈HUMAN〉

赤と白のベクターカートリッジのコックを捻って押し込み、それをベルト上部のソケット部に装填した。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

ベルトから電子音が響き、セントラルドグマが光を放ち始める。仁はその光を視界に収めつつ、右手をベルト右側のグリップに添え左腕は真っ直ぐ伸ばして左掌を右肩の前で構えた。

「変身！」

〈Open the door〉

仁が左手をスライドさせて右肩の前から左肩の前に移動させながらグリップを引くと、セントラルドグマから赤と白の二重螺旋が飛び出し彼らを包囲しているアントファッジ達をしなる鞭の様に弾き飛ばす。そして二重螺旋の先端が自分に向かって突っ込んできたのを見て、仁はそれに向けて正拳突きを放った。

ぶつかり合う拳と二重螺旋。すると次の瞬間、仁の体に変化した。

一瞬だけ姿を現す、日中も変身した基本形態のネイキッドフォーム。そのアンダースーツがグレーから白に代わり、装甲も赤く堅牢な力強いものとなる。

仮面は保護ゴーグルの様に繋がった緑の複眼はそのままに、クラッシュャーが白、それ以外が赤くなり更に額からはバツファローの様に湾曲した金色の角が2本生える。

これこそが真の力を発揮したデイナ……『仮面ライダーデイナ・バツファローヒューマンフォーム』である。

「よっし……行くぞ」

ベクターカートリッジを使用して変身したデイナは、体勢を立て直したアントファッジ達との戦闘を開始した。

アントファッジ達は四方八方からデイナに銃撃を浴びせるが、デイナは素早い身のこなしで銃弾の間を掻い潜る。何発かは命中するが、デイナ・バツファローヒューマンフォームの装甲はその程度の銃弾など物ともしない。

「それら」

「があっ?!」

デイナの正拳突きがアントファアツジを一撃で吹き飛ばす。吹き飛ばされたアントファアツジは壁に叩き付けられると、体を痙攣させてそのまま動かなくなった。

その能力に、誰よりも一番驚いているのはデイナに変身している仁自身である。

「おお、こいつは凄いな」

自分の能力に感心していると、数体のアントファアツジが銃に取り付けられた銃剣で斬りかかってきた。銃撃で駄目なら接近戦で、という事だろう。

それに気付き、デイナは気持ち切り替え構えを取ると、振り下ろされる刃を次々に弾き、受け止め、反撃の拳や手刀を叩き込む。

「なるほどね。バツファローの強靱な筋力と人間の柔軟な動き。2つを兼ね備えたのがこの姿か。良いね、使い易い」

戦いながらも、仁はデイナの能力測定を怠らない。何が出来て何が出来ないのか、それを彼は戦いの中で見極めていた。

最初は何体も居たアントファアツジも、デイナの活躍であつという間にその数を減らしていく。そして遂に、最後の1人が倒されてしまった。

「はい、これでお終いつと。次はお前さんだ。昼間殺されかけた、借りを返させてもらう

よ」

スパイダーファツジを指差すデイナ。だがスパイダーファツジは、彼を鼻で笑うと最初に倒されたアントファツジの首筋に手をつ突つ込んでベクターカートリッジを引きずり出した。

「ッ!?! お、おい何やって——」

白上教授から既に話は聞いているが、ファツジは大きなダメージを与えればベクターカートリッジが排出されて元の人間に戻れるらしい。ただしこれはベクターカートリッジを常習的に直挿ししていない場合に限った話で、何度も直刺した場合細胞の変異が後戻りできないくらい進んでしまうとの事だが。

デイナによって倒されたアントファツジの中には、既にベクターカートリッジが排出されて元の姿に戻っている者が何人か居る。あのアントファツジも、まだ元に戻れる可能性はあった。

しかし——

「有効活用よ」

〈MANTIS〉

スパイダーファツジはそんなことお構いなしに、使用者の生命等度外視してベクターカートリッジを引きずり出すと別のベクターカートリッジをそいつに刺した。すると

アントファアツジだったそいつの体は一瞬人間の姿に戻ったが、次の瞬間には緑の体軀に両手に鎌を携えたカマキリの特徴を持つファツジ、マンティスファツジへと変異してしまった。

「ウウウウ……」

「さあ、やりなさい」

「ウ、アアアアアアアアアア!!」

マンティスファツジは、スパイダーファツジの命令と同時にデイナに襲い掛かった。両手の鎌を武器に、デイナに素早く斬りかかる。

「うおつと!?!」

思っていた以上の速度に、デイナは面食らいつつも何とか防御する。相手の攻撃をめぐ事に成功すると、お返しとばかりに回し蹴りを放つがマンティスファツジの素早さは彼の予想を遥かに超えていた。

紙一重でデイナの回し蹴りを回避すると、素早く背後に回り両手の鎌で彼の背中を切り裂いた。

「シャアツ!」

「イツテエ?! んのやろ」

デイナの攻撃はマンティスファツジになかなか当たらない。獲物を狩る瞬間のカマ

キリの瞬発力は、人間やバツファローのそれを上回る。普通にやっては勝ち目はない。

亜矢は追い詰められつつあるデイナの姿に居てもたつてもいられなくなり、白上教授に何とかできないかと詰め寄った。

「教授、門守君が!?! 何とかならないんですか!?!」

正直な話、何とかしたいのは白上教授も同じだ。だがデイナドライバーは「今は」仁が使っている物しかないし、ベクターカートリッジもあの2本しかない。助太刀に入ろうにも、迂闊に近づけば逆にこつちの命が危ないだろう。今の2人に出来る事は何も無い。

亜矢と白上教授が己の無力さに嘆いていると、突然デイナが動きを止めた。仁王立ちして、両手を花のような形にして腹の前で構えている。

一体何をするつもりなのか、亜矢と教授が見守っているとマンティスファッジがデイナの周りをぐるりと一周した。動かない獲物をどこから切り刻もうかと考えているのだろう。

一周回り。やはり背後から一撃で仕留めようと鎌を振り下ろす。

「門守君!?!」

デイナの危機に、亜矢が思わず声を上げる。

だが次の瞬間、デイナは振り下ろされたマンティスファッジの鎌を見事に受け止め

た。

「何ッ!?!」

これで決まると思っていたスパイダーファッジは、目の前の光景に絶句する。

対して、デイナは何時もと変わらぬ調子で口を開いた。

「カマキリに限らず、虫の多くは動くものに対して敏感な反面、動かないものに対する反応は鈍い」

厳密に言えば、マンティスファッジは人間としての側面も持っているので、動かない相手でも見ることは出来る。だが見ればしても、反応は動くものに比べれば僅かに劣る。

仁は先程の攻防の中で、その僅かな変化を観察していたのだ。

「だからもしやと思っただけど……仮説は証明されたみたいだな」

デイナはそう言ってマンティスファッジの鎌を振り払うと、先程までのお返しとばかりに正拳突きを何発も浴びせた。一度勢いを殺されてしまうと、今度はマンティスファッジが圧倒的に不利だった。瞬発力の上ではあちらに分があったが、力比べと防御力ではデイナの方が上回っている。一度受け手に回ってしまえば、それを覆すのは難しい。

デイナの回し蹴りがマンティスファッジを蹴り飛ばす。マンティスファッジは、度重

なるダメージで自慢の瞬発力も発揮できない程に弱り切っていた。

「それじゃそろそろ、トドメと行きますか」

そう呟くと、彼はデйнаドライバーの右側面のグリップを一度引いた。するとその瞬間、セントラルドグマが強い光を放つ。

〈ATP Burst〉

ドライバーのグリップを引くと、ベクターカートリッジ内の超万能細胞が一気に活性化し大量のエネルギー『ATP』を産生。それがデйнаの全身を巡り、彼の能力を一時的に底上げする。

「はあああああ……」

デйнаはマンティスファアツジに向けて構えを取った。マンティスファアツジは何とか攻撃を阻止しようとするが、動きが鈍っており今のデйнаにはいいのだ。

そのマンティスファアツジに向け、デйнаは駆け出すとその勢いのままに跳躍し体を捻りながら飛び蹴りを放った。

「ハアツ!!」

錐揉み回転しながら放たれた飛び蹴り『ノックアウトクラッシュ』は、遺伝子の二重らせん構造の様な軌跡を描いてマンティスファアツジに突き刺さる。諸に喰らったマンティスファアツジは、体に穴を穿たれるのではと言う程の威力に大きく吹き飛ばされた。

「……レポートは纏まったな」

「グオオオオオオオオオオツ?!」

デイナの必殺技を食らい、マンティスファッジは爆発。後には排出されたベクターカートリッジと、辛うじて息のある変異させられていた人間が残された。

まさかプロフェッサーから直に渡されたベクターカートリッジで生み出したファッジが倒されるとは思っておらず、スパイダーファッジも狼狽えた。

「まさか……こんな!?!」

「さて、次はお前さんだ」

デイナはこのままの勢いでスパイダーファッジを倒そうと意気込む。対するスパイダーファッジは、舐められたものだど迎え撃つ構えを取るが、この2人がこれ以上戦うようなことにはならなかった。

何故なら、マンティスファッジだった奴のみならず倒されただけのアントファッジだった連中が一斉に体から火を噴いて燃え上がり始めたのだ。

「うおっ!?! え、何? 俺の所為?」

「……………どうやら今日はここまでの様ね」

「あ?」

どう言う事かとデイナが訊ねようとするが、スパイダーファッジは何も答えずにその

場を糸を使って飛び去って行った。あの機動力は流石に追い付けないと、デイナは追撃を諦めドライバーからベクターカートリッジを抜き取り変身を解除した。

そして元の姿に戻った仁は、既に燃えカスとなっている人だったもの達の姿に溜め息を吐く。

「全く……酷い事するなあ」

「門守君！」

犠牲となつた者達に哀れみを抱いていると、亜矢が近付き怪我が無いかを確認した。

「門守君、大丈夫ですか？ さっき酷くやられている様に見えましたけど？」

「いや、思ってるよりも大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「い、いえそんな……大丈夫そうで良かったです」

ホツと胸を撫で下ろす亜矢の姿に、仁も今し方感じた哀れみや憤りを一時忘れた。何だか今日は随分と彼女に心配を掛けてしまった。それは後日何らかの形で詫びておこうと、仁は頭の中でメモしておく。

そこに白上教授もやって来た。

「お疲れ様だ、門守君。凄いな、もうそいつを手足の様に扱えるとは」

「なんの、まだまだこれからですよ。それより車の方は大丈夫ですか？」

「ああ、幸い銃弾は何発か掠った程度で、走る事に問題は無い」

「そんじゃ、劳いの代わりにこのまま家に送ってもらってもいいですか？ 正直今日はもうクタクタで……」

「図々しいにも程がある発言だが、この場でそれを咎める者は誰も居ない。今日誰が一番大変だったかなど、亜矢も教授も嫌と言う程理解しているからだ。」

「それくらいならお安い御用さ。さ、2人共乗るといい。快適なドライブを約束しよう」
お言葉に甘えて仁と亜矢は教授の車に乗り、再び走り出した。クタクタと言う言葉に嘘はないのか、仁は走り出して一分も経たない内に眠りについてしまった。

穏やかな寝息を立てて眠る仁の横顔を、亜矢は劳いの意味を込めて優しく見つめていたのだった。

第3話：テイク・オフ

ファアジとの遭遇、そしてデイナへの初変身から一夜明け……………

「んん…………くわあ…………」

仁は自宅であるアパートの一室で目を覚ました。先日はクタクタに疲れた状態で白上教授に車で送ってもらい、亜矢の手を貸してもらって部屋に帰るなり夕飯も食わずそのままベッドに倒れ込んでしまった。お陰で腹の中はすっからかんだ。胃が空腹を訴えてくる。

とりあえず起きた仁は、台所に向かうと冷蔵庫を開ける。何かないかと期待して見ると、そこにはタッパ―に入った煮物があるだけであとは残りが半分以下になったパックの牛乳と生卵が二個だけ入っていた。

仁は迷わず、と言うか迷う余地も無くタッパ―と生卵を取り出すと、鍋に水を入れて湯を沸かし生卵二つを湯の中に放り込んだ。卵は纏めて茹でるらしい。

一方煮物はどうするのかと言うと、なんとこちらは食パンの間に挟みだした。炊飯器の中が空になっているから炊かなければ米が食えないとは言え、いくら何でも思い切り過ぎである。普通はやらないだろう。

だが、これが仁と言う男だ。彼は寢食に關しては完全に二の次であり、食事なんかは腹に入ればすべて一緒とばかりに纏めて食べる癖がある。彼も一人暮らしをしている都合上、自炊はするしその為の買物もするのだが、余った食材が期限切れ間近になると食材に關係なく纏めて鍋に放り込んで煮ると言う事を最低でも月に一回はやつていた。

尚その事実を初めて知った時、亜矢が呆れるあまり頭を抱えたのは言うまでもない。そうこうしていると、卵が茹で上がり茹で卵が二つできた。彼はそれを湯から引き揚げ殻を剥くと、煮物を挟んだパンと同じ皿に乗せてリビングに運んだ。ついでに牛乳をパックごと持ち出し、その皿の隣に置く。

「いただきます、と」

男飯にしてもあまりにも豪快過ぎる献立と呼ぶのも憚られる内容。食い合わせも何のそのと言うその朝食を、彼は顔色一つ変えずに平らげていく。内容的に今回はまだマシな方だからだろう。酷い時は期限ギリギリのハチミツを納豆や紅シヨウガ、海苔の佃煮と混ぜて炊いたご飯の上に乗せて食べた事すらあったのだから。

豪快な朝食を平らげながら、仁はテレビをつけた。気になるのは昨日の騒動がどこまでニュースになっているかである。

案の定、大学と街中、双方に出現したファッジの事は大きな話題となっている。幸い

なのが、自分達仮面ライダーの事が一切話題に上がっていない事だろう。かなり派手に暴れたが、誰かに撮影されたりする事は無かったようだ。

そう言えば大学はどうなったのだろうか？ 気になった仁が携帯で大学のホームページを開くと、そこには本日臨時休校の知らせが出ていた。あんな事があったのだ。警察の捜査などもあつて講義どころではないのだろう。

さて、こうなると彼は暇だ。別段出かけたい場所はなく、片付けるべき課題も特にな
い。

ならば今日は一日海外の生物学・遺伝子工学に関する論文でもネットで読み漁ろうか？ いや、今後戦う事を考えるとトレーニングにも力を入れた方が良くかもしれない。そんな事をぼんやり考えていると、突然彼の携帯が鳴った。

こんな朝っぱらから誰だ？ そんな思いで携帯の画面を見ると、そこには亜矢の名が表示されていた。

「もしもし、双星さん？」

『あ、おはようございます門守君。今大丈夫ですか？』

「うん。もう朝飯終わらせたとこらだから。で、どうしたの？」

課題なら昨日渡した筈だ。いや、提出する前にあの騒動が起こったからまだ課題は亜矢の手元だろうか？

だがそうなるや否や、亜矢が電話を掛けてくる理由が分からない。

仁が電話の理由を問い掛けると、彼女は白上教授からの伝言を伝えた。

『昨日は門守君大分疲れていたようだったので、私が白上教授からの伝言を預かっています。今日大学の研究室に来てほしいそうです』

「ん？ でも大学って今日警察に封鎖されてるんじゃないの？」

『うーん、私もそこまで詳しい事は何も……ただ、校門に来てくれれば分かると仰ってましたから』

「んー、分かった」

仁は通話を切ると、パックの中の牛乳を一気に飲み干し、着替えて出かける準備をした。その際、ナツプザックにデイナドライバーとベクターカートリッジを入れる事を忘れない。

「いつてきまらす」

支度を整え、ナツプザックを背負い仁は家から出て一路大学へと向かった。

その道中、仁は亜矢と合流した。

「あ、双星さん？」

「門守君！ さっきの電話ぶりですね」

「そだね。ところで双星さんも教授に呼ばれたの？」

「私はどちらかと言うと自主参加でしょうか？ 直接呼ばれてはいませんが、来るなども言われていませんので」

亜矢の答えに仁は特に興味も無さそうに相槌を打つ。それに彼女は特に気分を悪くした様子を見せない。彼が興味のない事に淡泊な反応しか示さない事を彼女はよく知っている。いちいち気にしていたら彼とは付き合っていけない。

それに彼が研究以外に興味を示さない冷血漢でない事は、先日的一件で良く分かった事だ。寧ろ何かしら反応を示してくれる分関心を持つてくれていると考えれば、決して悪い気はしなかった。

暫く歩いてみると、2人は見慣れた大学の校門に辿り着いた。が、校門にはやはり警察官が2人見張りに立っており、ここからは研究室に入れそうもない。

さて一体どうしたものかと2人が顔を見合わせていると、何処からか白上教授がやって来た。

「やあおはよう2人とも。門守君、昨日はよく眠れたかね？」

「はい、まあ」

「あの、教授？ 見ての通り校内には入れそうもありませんが？」

「問題ない。こちらへ来たまえ」

教授はそう言つて校門とは別方向へ2人を連れて行こうとする。訳が分からない2

人だったが、このままここに居ても仕方がないのでとりあえず彼について行くことにした。

少し歩いて、3人が辿り着いたのは大学の裏にある小山の麓。地元住民がよく散歩コースにしている所だ。なるほど確かにここには警察官が配置されていない。

だがここを道なりに言っても、大学に入るところには見張りの警官が居るだろうことは容易に想像できた。一体ここからどうすると言うのか？

「……ちだ」

教授がそう言つて2人を連れて行つたのは、山肌に設置された壊れた自販機の前だった。この自販機、電力が通つていないのか金を入れても一切反応せず、にも拘らず一向に撤去される気配が無いという事で大学内でも謎の自販機として少し有名だった。

そんな自販機の前に立つた白上教授に、2人は首を傾げる。すると次の瞬間、教授が自販機のボタンを次々と押していった。特に法則があるようには見えない、一見するとランダムな押し方。中には一度に連続で押している場合もある。

その光景に2人が目を丸くしていると、突然自販機が開いた。その先には、時々見かける自販機の内部構造……ではなく、山の中へと続く洞窟なんかとは違う通路が姿を現していた。

それを見た瞬間、仁は興味をそそられ覗き込んだ。

「おおおつ。教授何ですかこれ？ 秘密の通路？」

「ま、そんな所だ。研究室の入り口が使えない時なんかはここから出入りするんだ」

そう言つて教授は2人を招いた。仁は意気揚々と、亜矢は少し恐る恐る通路に入つていき、最後に教授が自販機にカモフラージュしている扉を閉めた。

通路はSF映画にあるような造りになっており、狭いが照明もしっかりとしていて明るい。

その狭い通路を歩いていくと、視界の先にまた扉が見えた。特に窓もついていない、非常に簡素な扉だ。仁が白上教授に視線で問い掛けると、頷いて返してくれたので彼は迷わず扉のノブを回して押す。

その先には、先日も見た大学内の施設とは思えないラボが広がっていた。もう2度目となるが、やはりこの光景には色々と圧倒される。

「さ、座りたまえ」

教授に促されて、2人は昨日と同じく椅子に座る。教授は昨日と同じように2人に茶を出し、一口飲んで落ち着いた頃を見計らつて話を切り出した。

「さて、まずはもう一度言わせてくれ。門守君、昨日は本当にありがとう。そして、すまなかつた」

「それはもう言いつこなしですよ教授」

「そうだったね。それと、双星君も、巻き込んでしまつてすまなかつた」

白上教授はまず仁に対する感謝と、2人に対する謝罪から口にした。

「お気になさらず。ただ、ファッジの事など昨日は聞けずに終わってしまった事を、今日は教えてもらえると考えて良いんでしょうか？」

「勿論だ。今日の本題はそれだからな。しかし………今更だが、双星君は良いのかな？」

「どういう意味ですか？」

「君は門守君とは事情が違う。無理してこの件に首を突つ込む必要など無いのだよ？
それでも君は、この件に深入りする気かね？」

口調は穏やかだが、言外に部外者はこれ以上立ち入るなど言われているようで、亜矢は内心でムツとした。しかし彼女はそれを表に出さず、いつもと変わらぬ様子で答えた。

「確かに私は、門守君と違って仮面ライダーに変身しませんしベクターカートリッジの事も全然分かりません。でもだからと言って無関係ですなんて、そんな事は言えません。それに、戦えなくても手助けは出来ると思つてます」

亜矢は白上教授の視線を真正面から受け止めてそう答えた。真つ直ぐ見返してくる彼女の視線から感じる意志は強い。簡単には曲がらないだろう。

その視線に教授はあっさりと折れた。

「やれやれ、最近の女性は本当に強いな」

「知ってた。双星さんそう言うところあるもん」

「どういう意味ですか？」

「そのまま」

仁の発言にどこか納得できないものを感じつつ、彼が自分を拒絶していない事に留飲を下げる亜矢。2人の様子に教授もそれ以上の亜矢の説得は諦め、彼女を一関係者として迎える事にした。

「さて、それでは改めて話すとしよう。昨日門守君が戦った相手……ファツジとその背後に居る者についてだ」

白上教授の言葉に、仁と亜矢は顔を引き締めた。

「まずあのファツジ。あれは昨日も言ったが、超万能細胞を用いたベクターカートリッジにより作り出された怪物だ」

「でも、超万能細胞に関するデータは教授が全部破棄したんですよね？ それなのに、何故？」

「誰かがどこかにバックアップ取ってたんでしょ？」

仁の答えに、白上教授は頷いた。そう考えるのが妥当だ。問題はそれが誰か、という

事だが。

「恐らくそうだろうな。思えば、バックアップの可能性はもつと疑ってしかるべきだったが、あの時は私も冷静さを欠いていたんだろう。情けない話だが」

「その、バックアップを取った相手が誰かは分かっているんですか?」

「ああ、考えられるのは1人しかない」

白上教授はそこで言葉を区切った。言うべきかどうか、まだ少し迷っている様子だった。この期に及んで彼を迷わせるとは、スパイダーファッジの背後に居るのはそれほど危険な相手なのだろうかと亜矢は身構える。

少し迷った素振りを見せた後、白上教授は重い口を開いた。

「その男の名は……雄成。傘木 雄成だ」

最初その名前に、2人はピンとこなかった。だが記憶を探り、傘木と言う名で色々と考えた時ふとある大企業が頭に浮かんだ。

「傘木、傘木………ん? それってもしかして、製薬会社の?」

「その通り。私も最初知った時は驚いたものだが、傘木社の社長こそが私と共に超万能細胞の研究を行っていた雄成本人だ」

「傘木社って言ったら、世界的な大手製薬会社じゃないですか?! まさか、そんな所がファッジを!」

「恐らくな。大方超万能細胞の研究データを応用して、様々な製薬に役立てているのだろう。そうして急成長し、その財力と権力を盾に裏でファッジ……いや、超万能細胞の研究をしているのだろう」

そこまで話して、白上教授は深く溜め息を吐いた。その様子は、道を違えた友を憂いているようであった。

いや、実際に憂いているのだろう。教授は雄成と共に超万能細胞の研究を行っていたと聞いた。恐らく途中で研究を中断しようとした教授と、その雄成との間で意見の対立が起こり道を別つ事になったのだ。

「警察には通報しないんですか？」

「無駄だろうな。奴は用意周到な男だ。あの時も奴は私にバックアップの存在を悟らせなかった。今も奴は、ファッジの活動と自分達が結びつく事が無いように手を回しているだろう。アントファアジが処分されたのがその証拠だ」

あの時、まだ死んではいなかったアントファアジが燃え上がったのは仁の所為ではなかった。全ては証拠隠滅の為の工作だったのだ。その事に仁は少しの安堵と、胸糞の悪さを感じずにはいられなかった。

一方亜矢は、改めて自分達が敵対しようとしている相手の強大さを目の当たりにして緊張に生唾を飲み込んだ。今なら、教授が念押しするように深入りするかを聞いてきた

理由が分かる。

思わず、若干の後悔の念が湧いてきた。

「今からでも遅くは無いよ」

「え？」

敵の強大さに亜矢が慄いていると、徐に仁がそう言ってきた。突然なんだとそちらを見ると、彼は空になったカップを弄びながら言葉を続ける。

「別に今から双星さんが無関係って顔しても、俺別に責めないよ。今まで通り、ただの友達でいるだけだし。必要以上に俺に関わらなければ、連中だって「嫌です」」

亜矢は仁の言葉を遮るように拒絶の言葉を口にした。決して大きな声ではなかったが、その言葉はラボの中に力強く響いた。

「嫌です……嫌、です。絶対………嫌です」

自分に念押しするように嫌だと呟き続ける亜矢を見て、仁は頬をかくと小さく溜め息を吐いて彼女の背を撫でた。

背中から伝わる仁の体温に、亜矢はハッと彼の方を見る。

「ん……分かったよ。ごめん」

彼が口にした言葉はそれだけであった。あまりにも素っ気無い言葉。だがそこに、確かに相手を気遣う気持ちがある事に亜矢は気付いていた。

やはり彼は他人に対して無関心な人間ではない。それを実感し、亜矢は小さく頷くのだった。

一方その頃、件の黒幕である傘木社の本社ビル。その中でも一般社員は立ち入ることの出来ない特別区画において、社長の傘木 雄成ことプロフェッサーはチミンと呼ばれた女性とグアニンと呼ばれた男性、後他に2人の男性を後ろに控え実験室の様な部屋に居た。彼の前には数人の研究員と、大きな強化ガラスを隔てた先で鎖に繋がれた男の姿がある。

強化ガラスの向こうの繋がれた男を見るプロフェッサーに、グアニンが声を掛けた。

「プロフェッサー、今一度お訊ねしますが本当にチミンを許すのですか？」

「それはどういう意味かしら、グアニン？」

「そのままの意味だろ？ 勝手な行動をした上に、何処の誰とも知らない奴にプロフェッサーから渡されたベクターカートリッジをやられたんだ。俺がプロフェッサー

ならお前をそのままモルモット行きにしているぜ」

チミンの言葉に答えたのは、グアニンの隣に居る男だ。耳に多くのピアスを着け、一見するとそこらに居る不良にしか見えない。

その男性の言葉に、すかさずチミンが彼を睨み付ける。

「勘違いしないでほしいわね、『シトシン』。プロフェッサーは仕掛けると仰っただけで、障害を排除しろとは一言も仰っていないわ。そんな事にも考えが及ばないなんて、貴方こそ実験動物からやり直したら？」

「んだと!？」

険悪な雰囲気になる2人に間に挟まれたグアニンは面倒臭そうな顔をし、強化ガラスの前に居る研究員達は一様に顔色を悪くした。ここで2人が争えば、彼らも巻き添えでただでは済まないからだ。

それを鎮めたのは、グアニンでも残りの1人でもましてや研究員でもなく、プロフェッサーこと雄成であった。

「止める2人とも。お前達ほどに練り上げるのにも相応の時間と金を掛けているのだ。そんなお前達を下らぬことで失っていい訳がないだろう?」

「ぶ、プロフェッサー……」

「申し訳、ありません」

雄成の言葉に、2人はあつという間に大人しくなった。先程までの険悪な様子が嘘の様である。

2人が大人しくなったのを見て、雄成は満足そうに息を吐いた。

「今一度ハッキリ言っておこう。私が目指すのは勝利とか敗北とか、そんな陳腐な結果ではない。私が目指すのはただ一つ、新人類への扉を開き世界を手中に収める事、それだけだ。その為であれば勝利も敗北も、ただの研究データの一つに過ぎん」

そう言つて雄成が研究員の1人に顎でしゃくると、その研究員はキーボードを叩きマイクで指示を出した。

「実験開始だ。被検体に、ベクターカートリッジを使用しろ」

その言葉を別室で聞いていたのか、2体のアントファッジが強化ガラスの向こうの部屋に入り鎖に繋がれた男にベクターカートリッジをもつて近付いていく。

近づくアントファッジとベクターカートリッジに、それまで大人しくしていた男は悲鳴を上げながら抵抗した。

「ひっ!?! や、止めろ!?! もう止めてくれッ!?!」

男は抵抗するが、既に大分消耗しているのか抵抗は弱い。それに加えてアントファッジの力で押え付けられては抵抗も意味をなさず、彼はあえなく首筋にベクターカートリッジを刺し込まれた。

〈PIIRANHA〉

「うわあああああつ!? い、嫌だあ!? もう、自分が、自分でなくなる……感、かく……ハ……」

男はベクターカートリッジ内の超万能細胞が全身に回り、体が変異する。鱗のある皮膚、背中に生えた鱗、剃刀の様な鋭い歯。それは有名な肉食魚・ピラニアが半魚人になったような姿であった。

「グウウウウ、キシヤアアアアアッ!」

ピラニアファッジに変異した男は、直ぐに理性を失うと先程以上の暴れ方を見せた。それこそ鎖を引き千切る勢いである。

アントファッジ2体がそれを抑えつけようとするが、ピラニアファッジは更に抵抗し両手を天井から鎖に繋がれていると言うのに口だけでアントファッジの片方の首筋に噛み付き、食い千切ってしまった。首筋を食い千切られたアントファッジは血を引き出しながらその場に倒れ伏す。そしてそれが引き金となり、倒れたアントファッジからはベクターカートリッジが排出され同時に体が燃え上がり始める。

相方を殺されたアントファッジは、穏便に済ませるのは不可能と判断してスリングで肩から吊っていたライフルを持ち銃剣で斬り、至近距離からの銃撃でダメージを与え黙らせた。

ダメージを受けたピラニアファッジはベクターカートリッジこそ排出されなかったが、項垂れて動かなくなった。それを見て鎮圧完了と判断しアントファッジが銃を下ろした。

瞬間、ピラニアファッジは鎖を引き千切るとアントファッジに飛び掛かり牙と両手の爪でアントファッジをズタズタに引き裂いた。隠蔽処理が施される間もなく殺されたアントファッジの姿に、強化ガラスを隔てている筈の研究員達は顔から血の気が引くのを感じた。

と、自分に危害を加えた奴を始末したピラニアファッジが強化ガラスの向こうに居る雄成達を見た。強化ガラス越しに向けられる殺気に、思わず研究員達が仰け反る。

ピラニアファッジは強化ガラスがあるにも関わらず彼らに襲い掛かろうとした。当然それは強化ガラスに阻まれる。こう言う事態も想定した専用の強化ガラスだ。ピラニアファッジの攻撃に傷一つ付かない。

その光景に雄成は鼻で笑うと、背後に控える部下の一人……今までずっと黙っていた一見優男にしか見えない白衣姿の者に黙って手を振った。

合図を受けて、その男……『アデニン』は黙ってベクターカートリッジを使用して己の姿をファッジに変異させた。

〈SQUID〉

「アデニンはその体を烏賊の特徴を持つファッジ・スクイッドファッジに変異させると、強化ガラスの向こう側に向かいピラニアファッジの鎮圧に取り掛かった。」

「シヤアアアアアッ！」

ピラニアファッジはスクイッドファッジもアントファッジと同じように牙と爪で引き裂こうとしたが、柔らかいスクイッドファッジの皮膚はピラニアファッジの攻撃を物ともしない。それどころか、体の各部から生えた触手でピラニアファッジを絡め捕ってしまった。

「アガ、カッ?!」

全身を締め付けられ、動きを止めるピラニアファッジにスクイッドファッジは静かに語り掛ける。

「大人しくしろ。そうすれば悪いようにはしない」

その言葉が通じたのかは分からないが、とにかくピラニアファッジの抵抗は無くなった。

スクイッドファッジがピラニアファッジを言いなりにした様子に、研究員達は安堵の息を吐きキーボードを叩いて様々なデータを纏め始めた。

その光景を後ろから見ながら、雄成は満足そうな笑みを浮かべた。

「どれ、早速白上の奴をまた押搦つてやるとするか」

時間は遡り、再び明星大学の白上博士のラボ。

相対する敵の事などがある程度話した白上教授は、今後どうするかを2人に話した。
「さて、それでは君達の今後についてだが」

「俺達の今後？」

「うむ。勝手な話だが、君達には私の研究室に所属してもらおうと思う。その方が色々動きやすいからね」

仁にとつてそれは渡りに船であった。彼は元々白上教授の研究室に所属する気だったし、向こうから受け入れてくれるなら万々歳である。

問題は垂矢の方だ。彼女は未だ所属する研究室を決めかねていた筈だが……………。

「双星さん、それで良いの？」

「はい。私もその方が良いだろうと思ってましたし」

どうやらこちらも問題はないらしい。まあ決めかねているという事はイコール、何処

かが迎え入れてくれるならそこに入るに越したことはないと言う訳だしこれで良かったのだろう。

そこで仁は気になった。白上研究室に所属する学生や院生の中で、ファッジやベクターカートリッジの事を知っている者は果たして何人いるのだろうか？

「そう言えば教授、一つ気になる事が――」

仁がその事を訊ねようとした時、研究室側の扉を物凄い勢いで開けて一人の女性が飛び込んできた。

「教授教授!! 大変です!! 街にファッジが出ました!?!」

入ってきたのは如何にも勉強一筋と言った感じの丸眼鏡を掛けた女性だ。白衣を着ているが慌てて部屋に入って来たからか、白衣は肩までずり落ちていている。

「何? 本当か宮野君!?!」

「本当です!?! 今ネットのSNSとかでも動画が上げられてるんですけど、ファッジが大暴れして街が大パニックになってます!?!」

宮野と呼ばれた女性から携帯端末を受け取り、それを3人で見る。するとそこには、ピラニアファッジが警察や一般人に襲い掛かっている様子が映っていた。

更に情報を調べてみると、場所は大学から少し遠い。今からでは現場に着くまでに被害が大きくなってしまう。

それでも行かない訳にはいかぬと、仁がドライバーを片手にラボを出ようとすると白上教授がそれを引き留めた。

「待ちたまえ門守君！」

「何です？ 今すぐ行かないと——」

「分かっている。だが徒歩では時間が掛かる。これを使うんだ」

そう言つて白上教授がラボの一角に向かうとそこにはコードが繋がれた白を基調とした一台のバイクがあつた。

見た目かなり異質で全体がかなり大きく、しかもフロントカウルは正面から見るとベクターカートリッジを装填したディナドライバーの様にも見えるデザインをしている。

更に気になるのが、車体左右に前輪から車体中央にかけて縦に畳まれた翼の様なパーツが付いている事だ。これの所為でただでさえ大きく見える車体が更に大きく見える。

既存のバイクに囚われない形をした大型バイクに、仁は思わず口笛を吹く。

「教授、コイツは？」

「ディナ専用のバイク、その名も『トランススポゾン』だ。遠隔操作で呼び出す事が可能など色々機能があるが、最大の機能はこれだな」

白上教授がハンドル付近にあるコンソールを操作すると、車体左右の翼上のパーツが八の字に広がり、前輪・後輪が90度回転して水平位置で固定され更にそのまま宙に浮

き始めた。

まさかの宙に浮くバイクに、仁も亜矢も目を見開く。

「浮いた!？」

「まさかこれ、空が飛べるんですか!？」

「うむ。仮面ライダーデイナ支援用のモンスターマシンとして作り上げた。地上走破速度もかなりのものだが、こうして空を飛べばより迅速に現場に向かえるだろう。頼んだぞ」

「上開けますね」

白上教授の意図を察したのか、宮野が近くのコンソールを操作するとトランスポゾンの真上の天井が開いた。あそこから出撃しろという事だろう。

ますます以てSF染みた光景に、仁も乾いた笑いを浮かべてしまう。

「は、ははは……よし。いっちょ行ってくるか」

仁が意を決してトランスポゾンに跨ると、白上教授と宮野が繋がったコードを外す。それと同時に教授は彼にヘルメットを渡した。

「頼むぞ、門守君。状況は一刻を争う」

「分かっています。必ず止めてみせますよ」

そう言うと仁は亜矢に視線を向ける。

やや心配そうな顔をしている彼女に、仁はサムズアップしてみせた。それを見て亜矢も少し安心したのか、表情を柔らかくし頷く。

簡単に操作方法を教わった仁は、そのまま上部ハッチから出て一直線にファッジが暴れている現場に向かって行くのだった。

第4話：ゲノムチェンジ

飛行形態のトランスポゾンで現場近くに向かった仁は、程よい所で地上に降り道路上を走った。状況が状況とは言え、目立ちすぎるのは良くない。

走り心地は流石モンスターマシンと言うだけあってなかなかじゃじゃ馬な性能だが、運転できない程ではない。走りながら体を慣らし、現場に到着する頃には問題ないレベルにまでなっていた。

だが現場に着いた時、彼はそれを喜ぶ気にはなれなかった。

そこは正に地獄絵図と言う表現が正しかった。

警察も一般人も関係なく血塗れで、倒れている者ばかりで動く者は殆ど居ない。数少ない生者である警察官も、拳銃で必死にピラニアファッジを攻撃しているがまるで効果が無くあつと言う間に肉薄されると喉笛を鋭い歯で食い千切られた。あれではまず助からないだろう。

その光景に歯噛みする仁だったが、次の瞬間彼の目にとんでもないものが飛び込んできた。

今し方殺された警察官の後ろに、小さな子供が居るではないか。恐らくは逃げ遅れる

かしたのだろう。警察官は命を賭して子供を守ったのだ。

だがこのままではあの子も犠牲になってしまう。現にピラニアファッジは明らかに子供に狙いを定めている。

仁は無言でアクセルを全開にし、その重量と速度を活かして体当たりした。不意打ちだったこともあって、ピラニアファッジは跳ね飛ばされる。

「大丈夫か？」

「ひ……………ひ……………」

ピラニアファッジがどうなったか等確認する事もせず、仁はヘルメットを脱いでトランスポゾンから降りると子供の傍にしゃがみ視線を合わせる。

子供は自分の周囲で起こった惨劇に完全に委縮しており、仁が話し掛けても怯えてばかりだった。

子供の怯える姿に、仁は一度ピラニアファッジの方を見ると子供の頭を軽く撫でた。「うっ!？」

「安心しろ。大丈夫、俺があいつを追い払ってやるから。ただし一つ、約束してくれ」「やく……………そく……………」

「今から見るものは、絶対に誰にも言わない事。いいな？」

仁はそう言うと、子供の前で立ち上がりピラニアファッジの方を見た。彼の視線の先

では、跳ね飛ばされたピラニアファアツジが体勢を立て直して歩いて来ていた。

その姿に悲鳴を上げる子供を、仁は庇う様に仁王立ちして腰にデйнаドライバーを着する。

〈BUFFALO〉

〈HUMAN〉

腰に装着したデйнаドライバーに、ベクターカートリッジを装填する。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「変身！」

〈Open the door〉

仁は仮面ライダーデйна・バッファローヒューマンフォームに変身すると拳を握りピラニアファアツジと対峙する。その見るからにヒロイックなデйнаのスタイルと、ピラニアファアツジを前に微塵も退く気配を見せない後姿に子供は気付けばデйнаに見惚れていた。

「さあ、検証の時間だ」

「シャアアアアッ！」

デйнаと対峙したピラニアファアツジは、彼から感じる気迫に気圧される事無く攻撃を開始する。見た目魚人間だと言うのに、陸上でも思っている以上に素早い。あつという

間に接近を許してしまい、鋭い爪が振り下ろされる。

「おっと」

デイナはそれを左腕で受け止めると、至近距離から右の拳を叩き込む。脇を絞つて腰の捻りで相手を殴る所謂ショートパンチを腹に喰らい、ピラニアファツジは後ろに下がる。

更にデイナは下がったピラニアファツジに追撃を仕掛ける。正拳突きを次々と放ち、時々飛んでくる反撃を手刀で弾き、連続回し蹴りで蹴り飛ばす。

この連続攻撃はなかなか効いたのか、ピラニアファツジも動きを鈍らせる。

その光景にデイナはこのまま押し切れるかと思つたが、次の瞬間ピラニアファツジからの殺気が膨れ上がり思わず足を止めてしまった。

「ウウウウウウツ」

「ん？」

「シヤアアアアツ!!」

それが良くなかった。一瞬の躊躇をピラニアファツジは敏感に感じ取り、素早く近付くとすれ違い様に両腕のカッターの様な鱗で斬り付けてきた。その動きは明らかにさつきよりも素早い。様子もどこかおかしく、見て分かるほどに奴は興奮した様子だった。

「あの顔立ち……ピラニア臭いな。そう言えばピラニアって血の匂いに敏感で感じ取ると興奮する筈。ヤバいな……」

見渡せば周囲は血を流した人で溢れている。ここは完全にピラニアファツジのフィールドとなっていた。

本当に魚の特性を持つ相手なのかと疑いたくなるくらいに速度で動き回り、すれ違い様に攻撃を仕掛けてくるピラニアファツジに、デイナは苦戦を強いられる。何とか反撃するが、興奮のあまり限界を超えた動きをするピラニアファツジの動きに段々と追い付けなくなっていった。

そして遂に、その鋭い歯の生えた顎がデイナの肩を捉えた。

「ぐうっ?! っ、いつ——!?!」

幸いな事にピラニアファツジの牙はデイナの肩を食い千切る事は無かったが、それでも強靱な顎は鋭い歯に装甲を破らせ、その下にある仁の肉体に食い込ませた。

このままでは肩の肉を装甲ごと食い破られるのも時間の問題だと、デイナはピラニアファツジを引き剥がすべくショートパンチを何発も放つが、今度はなかなか離れない。相手が肩に喰らい付いていては、腰の捻りが意味をなさず十分な威力が出ないのだ。

これ以上は流石に不味い。次第にデイナの心に焦りが生まれた時、この場に居る筈の無い者の声が響いた。

「門守君!!」

「へ? ふ、双星さん?」

やって来たのはまさかの亜矢であった。

仁が飛び立った直後、どうにも不安が拭えなかった亜矢は無理を言つて宮野のバイクを拝借し、全速力で飛ばしてここまで追いついたのだ。

亜矢は走り寄ると、先日白上教授がスパイダーファツジ相手に使つたのと同じ制限酸素をカプセルシューターでピラニアファツジに打ち込んで動きを鈍らせた。

その隙にデイナはピラニアファツジを引き剥がし、殴り飛ばすと取り合えず距離を取つて亜矢の傍へを向かい彼女を守るように立ち塞がる。

「何で来たの、危ないじゃん」

「危なかったのは門守君の方だったじゃないですか。それより教授からの伝言です」

「伝言? 今?」

何でよりもよつて今なのかと文句の一つも言いたくなくなったが、先程は時間も無かつたし最初は伝言が無くて大丈夫だと思つていたのである。つまり、この事態を招いた要因は仁の力不足にもあると言えた。

これ以上考えても仕方が無いと、気持ち切り替えデイナは白上教授からの伝言に耳を傾けた。

「なんでも、トランスポゾンの左右の翼は武器の格納スペースも兼ねているみたいです。専用装備の方も既に完成して入っているそうなので、それを使って欲しいそうです」

「翼の中に武器？ んなもん入ってたのか」

「デイナは早速トランスポゾンに近付き、コンソールを操作して車体右の武器収納スペースを開く。車体右側のパーツが開き、そこから片刃の機械的な大剣がせり出してくる。」

「剣？ まあないよりマシか」

「あとこれも」

「デイナが大剣——ハイブリッドアームズを手に取り繁々と眺めていると、亜矢がベクターカートリッジを手渡した。」

「こいつは？」

「急ピッチで最終調整を終わらせた、新しいベクターカートリッジだそうです。それと、この武器ですが——」

「亜矢がハイブリッドアームズの扱い方をレクチャーする。その間にピラニアファツジは制限酵素の効果が切れ、動けるようになった。」

「ピラニアファツジが動き出したのを見て、デイナは亜矢を庇いつつ子供の方へ向かわせる。」

「あそこにいる子供をお願い」

「分かりました！」

デイナの頼みを受けて、亜矢は取り残された子供を優しく抱き上げその場から離れる。残されたデイナは、ヒューマンベクターカートリッジを抜き取り新しく渡された水色のベクターカートリッジをドライバーで装填した。

〈WHALE〉

「さてと」

〈BUFFALO + WHALE Mutation〉

「ん？ ミュートーション？ ふむ……」

〈Open the door〉

デイナがベクターカートリッジを入れ替えグリップを引くと、最初の変身と同じプロセスを経て姿がやや変わった。装甲はそのままにアンダースーツの色が白から水色に変化し、更に脚の装甲に鱗の様なパーツがついた。

現状、それ以外に変化が見られない。が、全く変化なしという事は無いだろう。

「ホエール、って事は鯨か？ 鯨って言えば……」

デイナが冷静にベクターカートリッジで追加された能力を分析するが、ピラニアファッジは彼が考えを纏める時間をくれない。考え事をして無防備を晒すデイナに飛

び掛かる。

「ガアアアアッ！」

「ッ!!」

完全に意識外からの攻撃。しかしデイナはそれに寸前で素早く反応しハイブリッドアームズで防御してみせた。

「そうそう、そうだよな。鯨って言えばエコーロケーションだよな」

ホエールベクターカートリッジで得られる能力は、鯨やイルカなどが用いるエコーロケーション。音の反響を利用して、目には見えない対象の位置を正確に把握できる。潜水艦のソナーと同じものと言えば分かり易いだろう。

今、デイナの体からは定期的に常人には感知できない音が発せられている。これが周囲の物体に反射して、デイナに周囲の状況を目で見ると以上に理解させていた。

だが彼は、この能力に何処か違和感を感じていた。何と云うか、全力を発揮できていない印象を受けたのだ。

能力の違和感はそれだけではない。バッファローベクターカートリッジで得られる筈のパワーも、先程に比べて下がっているのを感じていた。

「ミューテーション……なるほど。突然変異、ね」

そこで彼は理解した。ベクターカートリッジには相性があるのだ。相性が良いと『エ

ヴオリューション』となり能力を全力で発揮でき、逆に相性が悪いと『ミューテーション』となつてベクターカートリッジで得られる能力が下がるのだろう。

こんな事を考えている間にも、ピラニアファツジの攻撃を受け止めているハイブリッドアームズがどんどん押されていく。そして遂に、剣が弾かれて爪による一撃を貰ってしまった。

「ぐうっ!？」

防御力も先程より下がっており、本来なら耐えられる筈だった攻撃で膝をついてしまう。そこにピラニアファツジが彼の首筋に鋭い歯を突き立てようとする。

「させないー!」

あわやと言うところで、子供を避難させた亜矢が戻つて来て再び制限酵素カプセルをピラニアファツジに撃ち込んだ。それにより再び動きを止めるピラニアファツジ。

それを見てデイナはハイブリッドアームズの機能の一つを使用した。この武器、一見すると機械的な大剣だが実はモードチェンジ機能があつて、大剣の他にハルバードとライフルに変形できる。

デイナは説明通りに機械的な刀身の後部を柄でもあるポールパーツを軸に180度回転させ、刀身全体を後方に下げてライフルモードに変形させると、銃撃でとにかくピラニアファツジを遠ざけた。

「ちよつとお前暫くこつち来ないで」

度重なる銃撃でダメージを蓄積させたピラニアファツジは、これ以上の戦闘は不利と察したのか動けるようになるかと近くのマンホールの蓋を破壊しその中に飛び込んだ。デイナは、流石に下水道に逃げ込まれては追跡する手段が無いと諦めハイブリッドアームズを下ろすとトランススポゾンに収納し変身を解除した。

「ふう……いつつ——!?!」

「門守君、大丈夫ですか!?!」

変身を解き元の姿に戻った仁だが、直後にピラニアファツジに噛まれた肩が痛みを訴えてきた。見ると刃が食い込んでいた箇所から出血している。

それを見て亜矢が彼の容態を心配するが、彼は至つて平然とした様子で答えた。

「ん? ああ、これくらい平気平気。それよりあの子は?」

「あの子供なら、少し離れた安全な所へ連れて行きました。ファツジが見えなくなつた辺りで安心したのか気を失つたので、そのまま寝かせてあります」

「ん、そ。じゃ、俺らも戻ろうか」

仁はそう言つてヘルメットを被ると、座席後部の収納スペースにあつた予備のヘルメットを亜矢に手渡しトランススポゾンに跨ろうとした。が、それに亜矢が待つたを掛ける。

「待ってください門守君。帰りは私が運転するバイクに乗ってください」

「へ？ いやでもこのバイク——」

「この傷で、安全に運転できるんですか？」

そう言つて亜矢は仁のピラニアファッジに噛まれた肩を軽く叩いた。瞬間、肩から走つた痛み仁は体を強張らせた。確かにこんな肩で、モンスターマシンと言われるバイクを運転するのは少し危険だろう。

「でもこれここに置いとく訳にはいかないじゃん？」

「ご心配なく。コンソールを操作すれば、自動操縦でラボ迄帰還してくれるそうですから」

「……あつそ」

仁は観念して、亜矢に言われた通りトランスポゾンのコンソールを操作して自動操縦でラボ迄向かわせると、自分は亜矢の運転するバイクに乗り大学まで戻つた。

尚その際に聞かされた事だが、亜矢はこれが人生で初のバイクの運転なのだとか。

その事を聞かされ、仁は自分がどれだけ危ない橋を渡つたのかと肝を冷やしたと言う。

下水道を通じて傘木社本社の秘密研究フロアに戻ったピラニアファッジは、二度の制限酵素注入によって得られたデータを用いての強化が行われていた。

「制限酵素に対する耐性を持たせる様に超万能細胞を調整しろ。毎回毎回あれに出しやばられては鬱陶しくて敵わんからな」

「はい」

雄成の指示に、研究員はキーボードを叩き急ぎ超万能細胞に制限酵素耐性のデータを入力していく。送られたデータを元に、超万能細胞が自己を進化させ自分に刻まれた遺伝子の発現を阻害する酵素に耐える能力を会得する。

そうして強化された超万能細胞を持つベクターカートリッジを、再び先程の男に投与した。今度は男は抵抗しない。と言うより、最早この男に自我があるかどうかも定かではなかった。目は焦点が定まっておらず、口は半開きで涎を垂らしている。

ファッジとなつて無理矢理戦わされた事は、彼の心身に多大な負担を掛けていた。その結果、彼は一時的な廃人状態となつてしまったのである。

とは言えこれは彼らにとつても好都合。暴れないでいてくれるのなら、実験もやり易

いと言うものだ。

強化されたベクターカートリッジを投与される男性を、強化ガラス越しに眺める雄成とアデニン。アデニンは、視線を被検体の男性に向けたまま雄成に問い掛けた。

「あの白上教授の作り出した……なんでしたっけ？ 仮面ライダー？ 案外厄介ですね。始末しておきましょうか？」

今なら仁も消耗している。敵を叩くなら今だとアデニンは進言するが、雄成はそれに否と答えた。

「何を言っている。あれはこのまま放置だ」

「何故です？ 放置すれば、奴は更に力を付ける可能性が高い。現に先程の戦いでも新たな武器とベクターカートリッジを使いました。敵に白上教授が居るのなら、今後もベクターカートリッジは増え、更に力を付ける可能性も……」

「だからいいんじゃないか」

アデニンに限らず、雄成の真意を理解出来る者は居ない。雄成も多くを語らず、また必要以上に踏み込ませることをしないで直属の幹部である4人にも雄成が何を思い描いているのかは分からなかった。

だが彼の頭脳が優れている事は周知の事実。故に、アデニンはそれ以上問い詰める事はしなかった。何よりも下手に刺激して、雄成から見限られるような事にはなりたくな

い。

そんな事になったら、また再び――

「ッ!?!」

思わず身震いするアデニン。その彼の様子を、雄成は一瞥し口角を少しだけ上げるのだった。

翌日、仁はデイナ用のラボでパソコンの画面を眺めていた。見ているのは、ピラニアに関する情報だ。先日の戦闘であのファツジがピラニアの遺伝子を持つベクターカートリッジによるものであると察した仁は、何か攻略の糸口があるのではないかと片っ端から調べていたのである。

「ん〜……」

仁はピラニアの生態なんかをあれこれ調べていたが、その表情は芳しくない。それは効果的な攻略法が見つからなかったからではなく、考え得る限りで最も効果的な攻略法

があまり実践したくないものしかなかったからだ。

しかし贖沢は言っていていられない。彼が我が身可愛さに手段を渋っていたら、更に被害が広がってしまう。四の五の言っではいられない。

「やるつきやねえか」

「何をですか？」

観念して覚悟を決めた仁に、背後から亜矢が声を掛ける。大学は未だ休校が続いているが、先日のファッジへの対処の為に2人はこうして警察の目を掻い潜り大学へと赴いているのだ。

「あのファッジの退治。このまま放っておいたら被害が増える」

彼がそう言うと、亜矢の表情が曇った。それは先日のファッジによつて犠牲となつてしまった者達を思つてのものであり、同時に再び危険に赴く仁を想つての事であつた。

再び1人で戦いに臨もうとしている彼の姿に、亜矢は意を決して口を開く。

「次からは……次からは私も一緒に連れて行つてください」

「はあ。」

「白上教授から制限酵素を貰えば、私だつて門守君の手助けなら出来ます。それに逃げ遅れた人の誘導だつて」

自分が戦場に向かう事の有用性を力説する亜矢に、しかし仁は難しい顔になつた。彼

としては彼女を危険に巻き込むような真似はしたくなかったのだ。

「……双星さんは俺と違って、変身できないから駄目だよ。何かあってからじゃ遅いんだよ？」

「承知の上です。それに一番危険なのは門守君の方じゃないですか。その門守君に危険云々言われても、納得できません」

「ん〜、だけどさあ……」

「絶・対・に、ついて行きますから」

これは置いて行こうものなら勝手について来て事態が面倒になるパターンをやつだと直感で仁は察した。見えない所で勝手な行動をされて予想外の事態になられるよりは、見える範囲で何かされた方がまだマシだと考え仁は渋々頷いた。

「見えるところに居なかつたら遠慮なく置いてくからね。待つてる時間が勿体ないし」
「それで結構です」

観念した仁に、亜矢は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。彼女の笑みに、仁は疲れたように溜め息を吐き目をくるりと回すとパソコンの電源を落として別の場所で作業している白上教授の所へ向かった。

そこでは白上教授が、宮野と共にベクターカートリッジの調整を行っている。

「う〜む、鯨の遺伝子と相性が良いのは何の遺伝子なのか……」

「超万能とか言いつつ、好き嫌いが多くて困りますねえ」

「それは私への当て付けかい？」

「いえいえ、そんなつもりは微塵も」

2人揃ってああでもないこうでもない議論している所に、仁と亜矢が近付いた。

「白上教授、一つ良いですか？」

「ん？ 何かね門守君？」

「こちらどなた？」

そう言つて仁は宮野の事を見た。思えば昨日は色々あつて宮野の事を訊ねるのを忘れていた。戻つてからは仁は治療、宮野はトランスポゾンの整備などで慌ただしく動いており、互いに自己紹介している余裕が無かつたのだ。

言われて宮野も自己紹介がまだだったことを思い出し、この場で2人に改めて自己紹介をした。

「あ、ゴメンなさい!! 自己紹介が遅れました。教授の研究室に所属する4年の宮野^{み야の}峰^{みね}です」

「俺、門守 仁です。宜しく、先輩」

「私は双星 亜矢と言います。こちらこそ、よろしく願います」

「ところで、先輩は何で白上教授と一緒に？」

学生という事は、以前から超万能細胞の研究に携わっていた訳ではないだろう。そうになると、峰が教授に協力している理由は何なのか？

「実を言うとな、この研究室に所属する学生は皆この事は知ってるんだ。隠しているのは飽く迄も必要以上に外部に知られないようにする為だね」

秘密を知る者は少ない方が良いとは言いが、秘密に近い場所に居る者が何も知らないとそれはそれでいざと言う時に秘密が漏れる危険がある。それならば、秘密の周りを秘密を知る者で固めて黙ってもらおうと言う事だろう。

教授の考えにある程度納得した仁は、次いで目の前に並んだベクターカートリッジを端から眺めた。

「遺伝子同士の相性の良い悪いってどこで判断するんです？」

「生憎と、それはやってみなければ分からないんだ。思わぬ組み合わせがエヴォリユーションに繋がる可能性もある」

白上教授の答えに、仁は適当に一つの試験管に手をついた。

と、その時。峰の持つ携帯端末からけたたましいアラームが鳴り響いた。

「な、何ですか!？」

「バッテリー切れ？」

「違う、ファッジだ!？」

峰の携帯端末は何処かでファッジ絡みの事件が発生するとアラームが鳴って報せるようになっていた。これにより少しでも迅速に、ファッジによる被害を少しでも減らせるようにしているのだ。

「場所は……昨日より少し近いですね。トランスポゾンなら直ぐです!」

横から峰の携帯端末を見て、瞬時に地図を頭に叩き込むと仁は今し方眺めていた試験管の中のベクターカートリッジを指差した。

「教授、これ使えます?」

「そ、それか? そいつはもう調整が終わっているから、直ぐに持っていけるが……」
「それじゃ遠慮なく」

仁は機械を操作し、試験管からベクターカートリッジを取り出した。何の迷いも無く中身が不明のベクターカートリッジに、亜矢も焦りの声を上げる。

「ちよ、門守君! そんな適当に選んで大丈夫なんですか?」

「どれがどれと相性良いかなんて分かりやしないんだ。なら、総当たり上等で只管検証していくしかない。そうでしょう、教授?」

「……そうだな、その通りだ。頼んだぞ、門守君」

白上教授からの言葉に、仁はベクターカートリッジを握った拳を掲げて応えるとトランスポゾンへと向かって行く。亜矢は慌ててその後について行った。

「そうし仁が向かったのは、河原近くの公園であった。昨日の今日で出歩く人が少なかったからか、幸いな事にまだ犠牲者は出ていない。」

だがそれでも公園には僅かにだが子供連れの母親らしき女性がいる。ピラニアファアツジは獲物を見つけたとばかりに、その親子に襲い掛かろうとした。

〈BUFFALO〉〈HUMAN〉

「変身！」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

トランスポゾンで跳ね飛ばすよりも、変身の際のセントラルドグマから出るスーパーコイルで吹き飛ばした方が早いと判断し仁は車上で変身した。目論見通り変身の際に発生するスーパーコイルは親子に襲い掛かろうとするピラニアファアツジを吹き飛ばし、2人が駆けつけるの間に合った。

「さ、今の内に逃げてください」

亜矢が親子を逃がす間に、デイナはピラニアファアツジと二度目の対峙をする。先日的一件を覚えていたからか、ピラニアファアツジはデイナに最大限の警戒を向けた。

警戒しつつ何時でも飛び掛かれるように身構えているピラニアファアツジの前に、デイナは車体の格納スペースからハイブリッドアームズを取り出すと、ライフルモードから更に変形させて刀身後部の刃を前後で180度回転。更に刀身全ての部分をブレード

モードの柄頭の部分まで後退させたハルバードモードにして構える。

親子を逃がし終えた亜矢は、カプセルシユーターに制限酵素カプセルを装填しつつ両者の間に流れる緊張感に様子を見る事しか出来ずにいた。

だが次の瞬間、デイナとファッジの間に一陣の風が吹いたのを合図に、両者は同時に駆け出した。

「ガアアアアアッ！」

「よっ」

先手を取ったのはデイナの方だった。ハルバードと言うリーチのある武器を使っている分、爪と鋭い歯しか武器が無いピラニアファッジよりは彼の方が有利だ。

ハイブリッドアームズにより胴体を切り裂かれるピラニアファッジ。しかしそれで怯む相手ではなく、ピラニアファッジはデイナの周りを素早く動き回ってはすれ違い様に攻撃を仕掛けた。

最初の内こそある程度対応してみせたデイナだったが、次第に反応速度が追いつかなくなり遂に一撃貰ってしまった。脇腹を腕に付いた硬質化した鱗で切り裂かれ、そこから血が流れ落ちる。

「うっ——」

「門守君!？」

すかさず亜矢が制限酵素を撃ち込もうとするが、ピラニアファッジの動きは素早くなかなか狙いを定める事が出来ない。

そうこうしている間にピラニアファッジはデイナに二撃、三撃と攻撃を当てていく。しかもその攻撃はどれも装甲の無いアンダーズーツ部のみを狙って仕掛けられた。お陰で本来白い筈のデイナのアンダーズーツは、装甲とは違う色合いの赤で彩られている。

「はあ……はあ……」

失血とダメージの所為か、デイナの動きが大分鈍くなる。それを好機と見て、ピラニアファッジは大胆にも正面から掴み掛りデイナの首筋に喰らい付いた。鋭い歯が食い込み、デイナの首筋から血が噴き出す。

「ぐあ、がつ——!?!」

「ダメツ!?!」

ピラニアファッジがデイナに組み付き、首筋に喰らい付いた瞬間、動きを止めたのを見て亜矢は狙いを定めてカプセルシューターの引き金を引いた。カプセルは狙い違わずピラニアファッジの首筋に命中し、ベクターカートリッジによる作用を一時的に鈍らせる制限酵素を注入した。

これでデイナが反撃する暇が生まれる。そう思っていたのだが、ピラニアファッジは

構わず動き攻撃を続行した。

「そんな、何で!？」

念の為にと亜矢がもう一発、今度は脇腹にカプセルを撃ち込んだが、結果は同じ。ピラニアファツジは少しも動きを鈍らせる事なく、寧ろデイナの血の匂いに興奮してか更に動きを激しくした。

「効いてない? 何で?」

「多分、酵素を中和する細工を施したんだろうね。昨日から今までやけに大人しかったのは、それでか」

先日は効果靦面だった制限酵素が全く役に立っていない事に困惑する亜矢。デイナはボロボロになりながらも、制限酵素が効かない原因を推測する。

対するピラニアファツジは、効果は無いながらも二度もカプセルを撃ち込まれた事に煩わしさを感じたのか、ターゲットを亜矢に変更してそちらに近付いた。明らかに自分が狙われている事に気付いた亜矢は、効かないと分かりながらも何発も制限酵素を撃ち込んだ。

「ウウウウウウ、シャアアアツ！」

「ヒッ!？」

鋭い歯をむき出しにして襲い掛かってくるピラニアファツジを前に、亜矢は恐怖に足

をもつれさせその場に尻餅をついた。

亜矢の目前にピラニアファッジの鋭い歯が迫る。彼女は思わずその場で目を瞑ってしまひ――

「ぐっ!？」

「……う? え?」

何も感じない事に違和感を覚え目を開けると、そこではピラニアファッジの前に立ちはだかったデイナが己の腕をピラニアファッジの口に押し込んでるのが見えた。ピラニアファッジは構わずそのまま彼の腕を食い千切ろうと顎に力を籠める。

片腕に走る痛みにも、デイナは仮面の奥で顔を顰めつつ食らい付かれて血が噴き出した首筋に触れた。掌に血がべったりとこびり付く。

「あくあく、こんなに血を流させやがって」

「グウウウウ!」

「ま……こうなる様に狙ってたんだけどね?」

腕に食らい付かれながら、デイナが徐にそんな事を呟く。

そして次の瞬間、彼は血がこびり付いた掌をピラニアファッジの顔に思いつき叩き付けた。

「ガウツ!？」

突然の事に驚き、咄嗟に距離を取るピラニアファツジ。視界を彼の血で塞がれたが、元より嗅覚に優れるピラニアは血の匂いに敏感だ。しかも今、デイナは血を流しまくっている。発見は容易だ。

案の定、ピラニアファツジは直ぐに血の匂いで、デイナの居場所を特定し、そこに攻撃を仕掛ける。この時点でピラニアファツジは自身の勝利を確信していた。

だがその攻撃は空を切る。外したのだ。確実に当たる場所に攻撃したにもかかわらず、外した事にピラニアファツジは驚愕する。

「グツ!」

「こつちだよ」

驚愕にピラニアファツジが動きを止めていると、まさかの真正面から攻撃を受ける。即座に反撃するがそれも外し、あろう事か逆に攻撃を受けてしまった。

訳が分からず困惑するピラニアファツジに、デイナは失血でふら付きながら話す。「血を流させ過ぎたな。一瞬だけなら、俺の位置をこの血の匂いが誤魔化してくれる」

ピラニアファツジが攻撃を仕掛けてくる瞬間、デイナは首筋から流れる血を掬い取りそれを自らの正面にバラ蒔く事であったかも本体がそこに居ると錯覚させたのだ。

急場凌ぎのアイソレーション。成功するか不安だったが、血の匂いに興奮して冷静さを欠いたピラニアファツジには有効だった。

「ここからデイナの反撃が始まる。ハルバードモードのハイブリッドアームズによる斬撃が次々と叩き込まれ、ピラニアファッジはボロボロになっていく。」

「ほれ、さっきのお返しだ」

一際強い切り上げがピラニアファッジを大きく吹き飛ばす。だがここで、ピラニアファッジの目を覆っていた血が落ちた。視界を確保するなり、ピラニアファッジは近くの川に飛び込んだ。

「あっ!?!」

また逃げられる。そう思つて亜矢が声を上げると、デイナは新たな二つのベクターカートリッジを取り出した。

「どれ、試すか」

〈DOG〉

〈WHALE〉

新たな二つのベクターカートリッジ……ドッグベクターカートリッジとホエールベクターカートリッジをバッファロー・ヒューマンと入れ替える形で装填する。

〈DOG + WHALE Evolution〉

「ツ!! これでエヴォリユーションか」

〈Open the door〉

適当に持つてきたつもりが、まさかのエヴォリューションにデイナは内心で喜んだ。セントラルドグマから、水色と黒のスーパーコイルが飛び出しデイナに向かってくる。デイナがそれを正拳突きで受け止めると、デイナが新たな姿に変化した。

アンダースーツは水色に、装甲は黒になり、頭部の角は無くなり代わりに犬耳の様な突起が二つできた。そして両脚の装甲には先日と同様に鱗状のパーツが。

これこそがデイナの新たな力、『デイナ・ドッグホエールフォーム』である。

デイナはこの姿になると、即座にその能力を理解した。

「さあ、検証の時間だ。よっと」

「えっ!?! 門守君!!」

亜矢が驚くのも無理はない。何故ならデイナは何を思ったのか、ピラニアファッジの後を追って川に飛び込んだのである。どう考えても水中は相手の土俵。向こうが攻撃なり逃走なりどちらを選んでいようが、水中でデイナに勝ち目は薄い。

少なくとも亜矢はそう考えていた。

だがデイナは水中に入ると、その能力を遺憾なく発揮してピラニアファッジの姿をしつかりと捉えていた。既に遠くに離れているピラニアファッジを、本来の力を発揮したエコーロケーションと犬の収音能力により正確に捉えていたのだ。

デイナは一気に勝負を決めるべく、ライフルモードにしたハイブリッドアームズに

バッファローベクターカートリッジを装填した。

〈Genome set. ATP burst〉

ベクターカートリッジ内の超万能細胞が活性化しエネルギーを産生、迸るエネルギーが銃弾に収束されていく。

もう肉眼では捉えられない程遠くまでピラニアファッジは泳いでしまったが、辛うじて射線は通っている。ならば、今のデイナには距離など関係ない。

エコーロケーションで正確に位置を把握し、狙いを定め、引き金を引く。エネルギーを纏った銃弾は光線と見紛う程の閃光を放ちながら一直線にピラニアファッジに向けて直進した。

背後から迫る閃光に、ピラニアファッジが何事かと背後を振り返ろうとしたがそれは遅すぎた。

「ガッ?!」

一瞬でピラニアファッジは体を貫かれ、そのまま水中で爆散。被験者の体からベクターカートリッジが排出され、元に戻った男性は岸へと流れついた。

その様子を、デイナは遠くから眺めていた。

「レポートは、纏まったな」

そう呟き、デイナは垂矢の元へ戻り変身を解除した。

「お待たせ。それじゃ帰ろっか」

後始末は無責任かもしれないが警察に任せた。すぐ近くで派手に水柱が上がったのだし、警察が来るのは早いだろう。この程度の事で傘木社の悪事が露呈するとも思えないが、やらないよりはマシだ。

仁はあちこちが痛む体に鞭打ってトランスポゾンに跨った。結構な大怪我を負った筈だが、ドツグホエールにエヴオリューションした影響で細胞が活性化したのか傷は殆どが塞がっている。それでもまだ節々痛むが、まあ今度は運転に支障はないだろう。

そう思っていたのだが、何故か亜矢に引きずり降ろされてしまった。そんなに心配しなくても大丈夫………と、言おうとしていたのだが、彼女の行動は仁の斜め上をいていた。

「門守君、そこに正座してください」

「へ？」

「正座」

「あの、双星s「正座」……うん」

有無を言わさぬ亜矢の雰囲気、仁は大人しくトランスポゾンの隣の地面に正座する。

そこから彼は亜矢に説教された。

「門守君はもう少し自分を大事にしてください」

「あのファッジの攻略法が思いついた時、どうして私や教授に一言相談してくれなかったんですか」

「本当に心配したんですよ。分かっていますか？」

「門守君、聞いてます？」

「うんうん。聞いてる聞いてる」

危険な作戦を誰にも知らせずに実行した事に対する説教を、仁は正座したまま一時間近く聞かされた。

そして長時間の正座で完全に足が痺れてしまい、泣く泣く今度の運転も亜矢に譲らざるを得なくなってしまうたのであった。

第5話：執念が齎すもの

ピラニアファアツジの騒動が納まった次の日、明星大学は漸く休校が明け講義が再開される事となった。

仁は退屈ながらも何時も通りの日常が戻ってきた事に心の奥で安堵し、久しぶりに何時もはサボっている教科の講義に顔を出した。

出席日数は満たしていて、しかも試験では成績上位確実だろうと言われていた彼が講義に顔を出している事に担当の教授は勿論、一部の学生も珍しい物を見る目を彼に向けていた。

周囲からの好奇の視線に晒されつつ、それを気にすることなく教材などを広げる仁。

その彼の隣には、当然の如く亜矢が陣取っていた。

「……物好きだね」

「はい？」

分かり切った内容が頭上を通り過ぎるのを感じながら、仁は隣の亜矢に話し掛けた。頭にハテナマークを浮かべる亜矢に、仁は手にしたペンをクルクルと回しながら答えた。

「他にも席空いてるのに、態々俺の傍に来るなんてさ。双星さん俺と違って女友達とか多いんだから、そっちの方が変な噂も立たないし気楽なんじゃない？」

亜矢と居るとよく感じる、嫉妬なんかの視線が自分に突き刺さるのを仁は感じていた。だがそれが自分だけでなく、亜矢にも向いているだろう事に彼は気付いていた。本人はそう言われるのを嫌がるが、彼女はこの大学のマドンナとして有名なのだ。当然それに対して、女子の方からやつかみや嫉妬が向けられる事もあるだろう。

そんな輩にとって、亜矢が問題児や変人として有名な仁と共に行動しているのは格好の攻撃材料だろう事は容易に想像できた。

彼女自身の事を想うなら、自分とは距離を置くべきではないか？　と言う彼なりの親切心であった。

しかし彼女は、そんな彼の頬を軽く抓った。

「……何すんの？」

「分かりませんか？」

「全然」

心底分らないと言う顔をする仁に、亜矢は小さく溜め息を吐いた。

「私は居たいから門守君の隣に居るんです。他の人がどう思おうが知った事ではありません」

「それで変な噂が立っても？」

「堂々としていけばいいんです。それとも門守君は私が友達だと迷惑ですか？」

「そうは言わないけどさ……」

「ならこの話題はこれで終わりですね」

そう言つて亜矢はニコリと笑みを向ける。並の男ならそれだけでコロリと墮ちてしまふまいそうだが、仁は小さく溜め息を吐くだけであつた。

面白味の無い反応しか見せない彼に、亜矢はいつも通りと笑みを浮かべて講義の内容をノートに取る作業に戻ろうとした。

と、その時、うっかり手を滑らせてシャーペンを落としてしまった。

「あ、あ、あ——！——」

足元に落ちればまだ何とかなつたのだが、シャーペンが落ちたのは2人が付いている席の一つ下の段。しかも運が悪い事にそこには誰も居なかつた。これでは誰かに頼んで拾つてもらう事も出来ない。

だがだからと言つて今席を立つのは少し勇気が要る。しかしこのままではノートが取れない。いや、ボールペンならあるのでそれでノートを取ればいいのだろうが、ボールペンだと書き間違えた時などに修正が——

「……はこ」

亜矢が困っていると、仁が今の今まで手の中で回していたシャーペンを差し出した。「俺別にノート取る必要ないから」

「あ、ありがとうございます！」

仁からシャーペンを受け取り、ノートの続きを取る亜矢。その顔は心なしか嬉しそうだった。

しかし、この時2人は気付かなかった。自分達に対し、暗く淀んだ怒りと嫉妬を孕んだ目を向けている者が居る事に――

その日の講義を終え、仁と亜矢の2人は今日も今日とて白上教授の研究室を訪れていた。

2人が研究室を訪れると、矢鱈と背が高いノツポな学生がノートPCから顔を上げて2人の事を見た。

「白上教授なら今日は用事があつて出かけてるよ」

「あ、それなら宮野先輩は居ますか？」

「あいつなら今はラボに籠ってるよ。呼ぼうか？」

「いえ、こつちから行くんで大丈夫です」

2人は白上教授の部屋に入り、その奥に隠された扉を通りラボへと入る。

ラボの中には話に聞いていた通り峰が居たが、彼女は作業台の上で何かを作っているのか入ってきた2人に気付いた様子を見せなかつた。

自分達に気付かない峰に、亜矢は少し大きな声で挨拶しようとして口を開くのだが、一方で仁は彼女が何を作っているのか気になり真つ直ぐ峰の傍へ近寄ると横から作業台を覗き込みながら声を掛けた。

「何作ってるんです？」

「うわあっ!? って、君達ですか？ 脅かさないでくださいよ」

「す、すみません先輩!？ ほら、門守君も!」

「すみません。それで、これなんです？」

先輩を驚かせてしまった事に亜矢が慌てて頭を下げ、謝る気を見せない仁にも無理矢理謝らせる。だが仁は微塵も悪いと思つた様子も無く、口先だけで謝って再び作業台を覗き込んだ。

亜矢は自由な振る舞いをする仁に冷や冷やしていたが、峰は全く気を悪くした様子も

見せずに、寧ろ仁からの興味に嬉々とした様子で作っている物の説明をし始めた。

「ふっふっふっ！ よくぞ聞いてくれました！ これはね、デイナの自立型サポートデバイスであると同時にベクターカートリッジ一本でエヴォリューションフォームに匹敵する能力を発揮できるようにするガジェット。その名も『アダプトキャット』！」

峰は声高に告げながら、まだ製作途中であるそのアダプトキャットと言うガジエツトを掲げた。まだまだ完成には時間が掛かるのか、キャットと言う割には猫らしさが微塵も無い。

仁と亜矢は峰の手の中の、製作途中のガジエツトに興味深そうに眺めた。

「へえ、自立型って事はコイツ自分で動くんですか？」

「その通り。こんなサイズだけど、ファツジの目くらましをしたり必要なベクターカートリッジを運んだりと結構便利な働きをしてくれる予定ですよ！」

「あの、ベクターカートリッジ一本で力を発揮できるようにと言うのは？」

亜矢からの質問に、峰は試験管の一つから調整の終わったベクターカートリッジを一本取り出しそれを仁に投げ渡しながら答えた。

「今のデイナって、ベクターカートリッジが二本ないとともに戦えないじゃないですか？ でもそれだと困ることがあるんじゃないかと思って、こうして一本でも全力で戦えるようにとガジエツトを作ってるんですよ！」

「ほおほお」

峰の説明に仁は興味津々と言った様子で聞き入っている。その様子に峰は更に機嫌を良くし、現在構想中のガジェットについての説明まで話し始めた。

最初こそ仁と共に聞いていた亜矢だが、次第に話についていけなくなり2人から離れてラボの中を見て回った。今後はここでの活動も増える訳だし、何処に何があるのかなどを覚えておいた方が良いと言う判断である。

とは言え室内にある物と言えば、ベクターカートリッジ制作の為の試験管とトランスポゾン整備用のスペース。それと今仁と峰が熱心に話し込んでいる作業台とそれぞれに繋がった端末位だ。だがそれらが結構所狭しと並んでいるので、見た目以上にラボの中は狭い。

機材を避けながら室内を見て回る亜矢。もう一通り見てしまったかと思ひ、最後に軽く室内を見渡した時、彼女はあり得ないものを見つけてしまった。

「ん？ え……………これって——!?」

亜矢の視線の先に会ったのは、仁が使っている物と瓜二つのデイナドライバー。仁が使っている物と違って外装が外されて内部パーツが丸見えだが、間違いなくデイナドライバーだった。

亜矢は困惑しつつ、仁と熱心に話している峰を呼び寄せた。

「あ、あの!? 宮野先輩、ちよつと!」

「はい? どうしたんですか、そんなに慌てて?」

「これ!? これ何ですか!」

慌てる亜矢に引つ張られる峰と、何事かについて行く仁。

そこで仁ももう一つ作られつつあるデイナドライバーに目を見開いた。

「あれ? デイナドライバー? 二個あつたんですか?」

「ああ、これですか? もしもつて時の事を考えての予備だそうですよ。まあ今の所門守君が使つてるデイナドライバーが問題なく動いてくれるから、完成しても使う予定はないみたいですけど」

峰はそう言って中断していたアダプトキャットの制作に戻る。仁は仁で、白上教授が戻ってくるまでの間にベクターカートリッジに関する資料を読み耽ろうと資料の束に目を通していた。

そんな2人を他所に、亜矢は1人未だ未完成の新たなデイナドライバーを見つめ続けていた。

その頃、大学から離れた所にあるマンションの一室で一人の青年が嫉妬と憤怒に身を震わせていた。

「何で……何であんな奴が……!?!」

その部屋は一目で異常と言うのが見て取れた。何しろ室内の壁の一面が、一人の女性の写真で埋め尽くされていたのだ。

写真に写っている女性は……亜矢。そのどれもが明らかに盗撮されたものだろう。アングルのものばかりであり、彼が亜矢に歪んだ想いを抱いている事は明らかであった。

この青年の名前は新藤 しんどう 貞助 さだすけ。仁や亜矢と同じ学年の大学生である。成績は中の下。性格はどちらかと言うと根暗な方で、大学でも親しく話す程の友達などは居ない。

彼もまた亜矢に惚れこんだ男性の一人であり、しかし積極的に話しかけることは出来なかった。代わりにこうして盗撮をして自分を慰めているのだ。

その彼は現在、仁に対して並々ならぬ嫉妬と怒りを向けていた。

貞助はとにかく許せなかった。亜矢の笑顔を独り占めしている仁が、邪魔で仕方なかったのだ。

「何であんな、ロクに講義にも出ないくせして成績だけは良い奴にばかり双星さんは構

うんだ!? あいつ、双星さんに笑いかけられたにもかかわらず全然嬉しそうにしないんだぞ!」

貞助にとって、亜矢は女神にも等しい存在となっていた。彼女の柔らかな笑みを離れた所から眺めるだけで、彼の心は洗われる様な気持ちになる。貞助が亜矢に近付けないのは、単純に人見知りが激しいからと言うだけでなく女神に等しい亜矢に近付くのが畏れ多いからと言うのもあった。彼女の隣の席など、彼にとっては神聖な聖域にも等しい場所であった。

その神聖な領域に、土足で踏み込んでいるのが仁である。彼はあろうことか亜矢の隣に平然と座り、それどころか彼女に笑顔を向けられてももしらぬ態度をとると言う不敬極まりないことをしているのだ。

もちろんこれは貞助の主観であり、亜矢からすれば冗談ではないと言った感じであろうが、彼にとってみれば仁は聖域を荒らす不屈き者であった。

だがそれを真正面から糾弾して仁を亜矢の傍から引き離すことが出来る程の度胸も彼にはなかった。頭の出来は天と地ほどの差があり、また噂でしか聞いたことはないが仁は空手を習って鍛えている。文武どちらにおいても負けている、自分が敵う相手ではないと言う事は彼自身が嫌と言うほど分かっていた。

しかし頭では分かっている、その想いは抑えきれぬものではなかった。だからこう

して一人家で荒れているのである。

叶う事なら、仁を垂矢の傍から引き剥がし、その場所に自分が納まりたいとすら願っていた。

そんな鬱屈とした思いを抱える貞助に、声を掛ける者が居た。

「いいわね。お前、悪くない」

「ッ!? だ、誰だッ!?」

貞助が驚いて立ち上がり声のする方を見ると、そこには人型の蜘蛛と称するのに相應しい異形……スパイダーファツジが佇んでいた。

見るからに怪しいを通り越して危機感すら感じさせるそいつは、一体何時からそこに居たのか窓辺に腰掛けていた。

「ば、化け物ッ!? い、何時からそこにッ!?」

「そんなのどうでもいいでしょう? それよりもお前よ」

狼狽える貞助を無視して、スパイダーファツジは彼に近付いた。咄嗟に逃げようとする貞助だったが、すぐ後ろは壁だった為逃げ場がない。

「私は昼間からお前を見ていたわ。お前、一人の女とそいつに近付く男に凄まじい執念を向けていたわね?」

「お、女? 双星さんの事か? それに、男つて……」

「そんなお前の執念に私は興味がある。さ、これを……」

スパイダーファツジは貞助にベクターカートリッジを差し出した。見た目怪物のスパイダーファツジが普通に応対して、しかも何か訳が分からないカートリッジの様な何かを渡してくるので貞助は混乱した。

「な、何だこれ？」

「これはお前の願いを叶えてくれる魔法のアイテムよ。これを使えばお前は何でもできる。それこそ、邪魔者を排除して愛する女を自分一人のものにするくらい造作もないわ」

それは貞助にとつてとても魅力的な提案だった。これを使えば仁を亜矢の傍から退かす事が出来る。それを思い浮かべるだけで気分が高揚した。

思わず手を伸ばしそうになるが、相手は見るからに異形の化け物だ。もしかすると異星人で、耳あたりの良い言葉で自分を騙すつもりなのではないかと、貞助の中に残っていた理性がベクターカートリッジを手に取るのを躊躇させる。

彼の躊躇を感じ取り、スパイダーファツジは自分に使っているベクターカートリッジを抜き取った。

「大丈夫よ。私も同じ物を使っているわ。ほら」

そう言ってベクターカートリッジを抜き取ったスパイダーファツジは、チミンと言う

人間としての姿を貞助の前に晒した。

その姿は亜矢に傾倒する貞助から見ても美しいと評価できる女性だった。髪はくすんだブロンドで緩くウェーブが掛かり、切れ長の目に赤い口紅を差した唇が妖艶さを感じさせる。亜矢が清廉な美しさだとすれば、チミンは妖しい美しさだ。

自分に見惚れる貞助にチミンは口を三日月の形に歪めて笑みを浮かべると、彼の頬にそつとキスをした。

「さ……これはあげるわ。どう使うかはお前の自由。でも使えばきつと、お前は新しい世界の扉を開けるわ」

〈SPIDER〉

チミンは貞助にベクターカートリッジを渡すと、再びスパイダーファッジとなり窓から出ていった。両手から糸を伸ばして建物の壁などを使って素早くその場を離れるスパイダーファッジの姿を見送り、貞助は自分の手の中にあるベクターカートリッジを見た。

「これを使えば……双星さんは……」

1人窓辺でベクターカートリッジを見つめる貞助。自分にとってのバラ色の未来を思い浮かべる、彼の目には明らかな狂気が宿っていた。

翌朝、亜矢はいつも通り自宅のマンションの一室で目覚め、朝食も済ませ身支度を整えると大学に向かうべく一階に下りて外へ出た。

何時もならここから大学近くまで行く電車に乗るのだが、この日はいつもと勝手が違った。

「おはよ〜」

なんと、仁が赤いトランスポゾンで亜矢を待っていたのだ。

「門守君？ どうしたんですか？」

「いやさ、教授がトランスポゾンに簡単なカモフラージュ機能つけて車体カラー変えられるようにしてくれたんだよ。折角のバイクなのに、普段使えないのはもったいないなあつて言ったら教授と先輩があつという間に実装してくれたんだ」

「はあ……」

まあ確かに、仮面ライダーが乗っているバイクに普段から乗っていたら関係性を派手に疑われるだろう。だがそれにしたって、既存のバイクとは大きく異なる形をしている

時点で十分怪しまれたりしないだろうか？

「色を変えられるだけじゃ、あんまり効果が無いような気がしますけど？」

「そこはほら、仮面ライダーのファンって事にして押し通す。大体にして俺と仮面ライダーを関係づけるなんて、現場見てなきやできっこないんだから」

見た目同じで色が違えば、まあ確かに仮面ライダーのバイクに憧れて見た目それっぽくしたと言ひ張れなくもない。何より普通はバイクの色をあつという間に変える事など出来はしないのだから、これだけでも誤魔化しは利くだろう。

それにしたってこんなバイク、街中では目立って仕方がない気もするが。

「ま、何だっつていいじゃん。それよりほら、折角普通に乗るんだし、どうせだから送るよ」
仁はそう言つて予備のヘルメットを亜矢に渡した。どうするか悩む亜矢だったが、折角の誘いを断るのも悪いし相乗りさせてもらう事にした。

亜矢が荷物を仁と自分の間に挟み、仁の腰にしがみついた。彼女がしっかりと自分の腰に手を回して体を固定したのを見て、仁はトランスポズンを走らせた。

道中、時々注目を浴びる事はあつても止められる事は無かった。見た目珍しくとも、まだ仮面ライダーの事がそこまで広がっていないと言う証拠だろう。

仁の後ろで揺られながら、亜矢はそんな事を考えていた。

その時、突然仁がブレーキを掛けた。大学はまだ遠いし、それどころか信号がある場

所でもない。一体何事かと亜矢が後ろから前を覗き込むようにして訊ねた。

「ど、どうしたんですか急に止まって？」

「……………あれ」

「あれ？」

言われて改めて前を見ると、道のど真ん中で一人の青年が立ちほだかっているのに気付いた。亜矢はその青年の目に身の危険の様な物を感じ、意識せず仁の背中に抱き着いた。

それを見て青年——貞助は眼光を更に鋭くした。

「し、知り合いですか？」

「ん〜？ さあ？ あ、でも講義で偶に見た覚えある」

少し意外だったが、亜矢が全く覚えていないのに仁は多少なりとも覚えていた。と言っても仁にとっても貞助はよく目にする背景だから覚えていて程度の認識でしかなかったが。

しかし貞助にとっては重要な事だった。意中の相手である亜矢には確に覚えられていないのに、よりにもよって邪魔者である仁に多少なりとも覚えられていた。その事が無性に腹立たしい。

「お前が……………お前が居るから——!？」

「何？ 何か用？ ってかそこ危ないよ？」

貞助の憎悪など何処吹く風と言った感じで、マイペースな事を告げる仁。それが亜矢とくつついている事と合わさり、遂に貞助に最後の一線を越えさせてしまった。

「双星さんは……………渡さない——!!」

「お前何言って……………あ」

「べ、ベクターカートリッジ!？」

突然訳の分からない事を言う貞助に、仁は最初怪訝な顔をしたが次の瞬間貞助がベクターカートリッジを取り出した事で亜矢と揃って驚愕に目を見開く。

仁の驚く顔に気を良くしたのか、貞助は歪んだ笑みを浮かべてベクターカートリッジのコックを捻り押し込んだ。

〈WOLF〉

「ッ!? 駄目です!？」

亜矢の制止も空しく、貞助は左手の掌にベクターカートリッジを挿した。

瞬間、左手を中心に彼の体は変異しあつという間に貞助は狼の能力を持ったウルフファアツジに変異してしまった。

「ウウウウウウ!! アオオオオオオオオオン!!」

思わず耳を塞いでしまう程の大音量の遠吠えに、仁と亜矢だけでなく往來を行く人々

も耳を押さえて蹲る。車道を走る車の中には、今のでハンドル操作を誤ったのか他の車にぶつかったり横転してしまう車が続き更には玉突き事故まで発生してしまった。

「双星さん、しつかり掴まってる」

「え？ は、はい!？」

一早く立ち直った仁は、トランスポゾンを素早くその場でターンさせると反対車線に入り元来た道を大急ぎで戻った。このままここに居ては変身を誰かに見られる事になつてしまう。それに、ここでヘタに暴れられては被害が増える一方だ。

まずは自由に戦える場所にウルフファツジを誘導しに掛かる。予想通りウルフファツジは2人の後を追い掛けてきた。

とにかく只管人の少なそうな場所を目指して走る仁。途中何度か亜矢がナビゲートし、彼は漸く変身して戦える場所を見つけた。場所は工場跡地。郊外に程近く、滅多に人が来るような場所ではない。

「さつてと……」

戦えるシチュエーションを整えた辺りで、ウルフファツジが追いつき口元から涎を垂らしながら仁の事を睨む。視線だけで相手を射殺せそうな眼光を受け、しかし仁は特に気にした様子も無く、デイナドライバーを腰に装着しベクターカートリッジを取り出した。

〈BUFFALO〉

〈HUMAN〉

「こんな朝っぱらから……」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

登校中に襲い掛かれた事に仁は愚痴りながら変身した。

「変身！」

〈Open the door〉

セントラルドグマから放たれたスーパーコイルがウルフファッジを怯ませる。その間に仁は仮面ライダーデ INA に変身した。

「さあ、検証の時間だ」

「ガルアアアツ!!」

仁がデ INA に変身すると同時に、ウルフファッジが襲い掛かる。デ INA はそれをハルバードモードにしたハイブリッドアームズで受け止めた。

「一体何がどうしてお前がそれを手に入れてファッジになったのかは知らないけど、とりあえず倒すよ」

ウルフファッジの両手の爪と牙による攻撃を、ハイブリッドアームズでの確に捌き反撃するデ INA 。

その様子を、少し離れた所からチミンが双眼鏡で見ている。その傍にはカメラを構えて撮影しているフルフェイスヘルメットの部下も居た。

チミンは戦闘を見ながら、通信機に向けて話し掛ける。

「駄目ですね、プロフェツサー。前の被検体と同じです」

『ふむ……何かに対する攻撃的な精神があればある程度は自我を保てるかと思つたが……やはり素の肉体では精神を蝕まれるか』

「このまま放置しますか？」

『いや………人間の欲望は馬鹿にできん。チミン、場合によっては手を貸してやれ。そして経過観察を続けろ』

「はい」

チミンはそこで通信を切ると、通信機を部下に渡して代わりに自分のベクターカードリッジを取り出した。どうにもウルファアジの旗色が宜しくないのだ。このままではただやられるのを待つばかりとなってしまう。

「全く、困った坊やだこと」

〈SPIDER〉

スパイダーファアジに変異したチミンは、糸を伸ばしてその場を離れるとダイナとウルファアジが戦っている場所へと向かった。

その頃、戦いはデイナの勝利で幕を下ろしそうになっていた。

「よいしょつと」

「ガアツ?!」

デイナの振り下ろした斧槍がウルフファツジの胴体を切り裂いた。

このままいけば戦いはデイナの勝利で終わるだろう。彼だけでなく、傍から見ている亜矢もそれを心の中で確信していた。ウルフファツジは特別厄介な能力を使う事も無く、理性の無い獣同然に力を振るってばかりで恐れるところが何処にもない。

そう思っていたデイナは、突然背後から放たれた飛び蹴りをまともに喰らってしまい大きく吹き飛ばされる。

「うおっ!」

「門守君!」

突然の襲撃にデイナと亜矢が声を上げる。

デイナは吹き飛ばされつつも受け身を取り、素早く立ち上がって先程自分が居た場所を見るとそこに着地したスパイダーファツジの姿を見た。

「あ、お前……あの時の蜘蛛女」

「久しぶりね、仮面ライダー。悪いけどこいつは今やらせる訳にはいかないわ」

スパイダーファツジは背中から生えた四本の脚を使って跳躍すると、上空からデイナ

に攻撃を仕掛けた。デイナはそれをハイブリッドアームズで迎え撃つが、同時に襲い掛かってきたウルフファッジの攻撃に手が回らず背中を爪で切り裂かれてしまう。

「イツテ!」

「そら!」

「ぐっ!?!」

流石に2対1は分が悪い。これがアントファッジレベルの能力しかない奴らならともかく、単純なスペックではアントファッジを凌駕する2体を同時に相手をするのは厳しかった。

苦戦するデイナの姿に、亜矢が堪らず物陰から身を乗り出した。

「ひ、卑怯ですよ!?! 2対1だなんて!?!」

亜矢からの批判に、しかしスパイダーファッジは全く気にした様子を見せない。

「卑怯で結構よ。こっちは成果が無ければ命が無い世界で生きてるんだから。悔しかったらお前も戦ってみれば? まあ、そんな事をすればあつという間にミンチになるでしょうけどね」

明らかに嘲笑を含んだ言葉に、しかし亜矢は何も言い返せなかった。今この場には白博士の制限酵素は無いし、あつたとしても先日的一件から対策が取られているのは確認済みだ。今の彼女に出来る事は何もない。

今、亜矢は無性に力を欲していた。

だが直ぐに彼女はそれどころではなくなってしまう。彼女の姿を見た瞬間、ウルフファツジは狙いを彼女に変更していたのだ。

「ウウ、ウウウー！」

「あ!?!」

いつの間にか自分の方に向かって歩いて来ていたウルフファツジに、亜矢は慄き後退する。

亜矢に近付きつつあるウルフファツジの姿はダイナの目にも映っていた。このままでは亜矢がウルフファツジに殺されてしまうと、彼女を助けようとしたダイナだったがスパイダーファツジがそれを許さなかった。

「双星さん、逃げて！」

「おっと！」

亜矢の救援に向かおうとしたダイナを、スパイダーファツジの糸が絡め捕る。

「ツ!?! この、離せ!?!」

スパイダーファツジの糸にダイナが苦戦している間に、ウルフファツジは亜矢を壁際まで追い詰めていた。

「あ、ああ………」

目前に迫ったウルフファツジに、亜矢はこれから自分に降りかかるだろう残酷な未来に恐怖した。

だが次の瞬間、思わぬ事態になった。

「フタ……ホシ、サン……」

「え？」

「へえ？」

今の今まで理性の無い獣同然だったウルフファツジが、明確に亜矢の名を呼んだのだ。その事にスパイダーファツジはデイナを拘束しながら感心する。

「なるほど、あの男はあの女に尋常ではないくらい傾倒していた。その執念の相手が目の前に迫った事で、歪んだ感情が遺伝子の浸食を振り払いある程度の思考能力を取り戻させたようね」

「要するに下半身の欲望に忠実なサルならぬオオカミになったって事だろうが。どっちにしろ双星さんが危ない」

冷静に分析するスパイダーファツジと、要点をざっくり理解し亜矢に迫る別の危機を感じ取るデイナ。デイナは何とか拘束を解こうと身を振るが、流石の蜘蛛の糸はそう簡単を外れてはくれない。

その間に、ウルフファツジは慄く亜矢に手を伸ばし彼女の両手を壁に押さえつける

と、彼女の顔や首筋に舌を這わせた。

「んうっ!? 嫌っ!? 止めて、ください!」

亜矢は必死に嫌がるが、ウルフファツジは鼻息荒く彼女を舐め続ける。

その様子にデイナは頭に血が上るのを感じた。

「チツ。おい蜘蛛女、これを外せ」

「そうはいかないわ。少しの間大人しくしていなさい」

そう言うトスパイダーファツジは、両手から糸を伸ばしながらデイナの周囲を縦横無尽に動き回る。まるで地面に蜘蛛の巣を描く様に動き回り、彼の体を雁字搦めにすると背中の四本の脚を肥大化させた。

そしてその四本の脚を、デイナに突き立てるべく跳躍して飛び掛かった。

「門守君、逃げて!」

咄嗟に亜矢が叫ぶが、それが出来たら苦勞はしない。何しろ雁字搦めにされて身動き一つとれないのだから。

何も出来ぬまま、亜矢が見ている前でデイナはその身に四本の肥大化した脚を突き立てられた。

「ハアッ!!」

「うわあああああっ?!」

「門守君!？」

四本の脚を突き立てられたデイナは爆炎に包まれる。亜矢の悲鳴が響く中、爆炎が晴れるとそこには変身が解除され傷だらけで倒れる仁の姿があった。

一瞬彼が死んでしまったのではないかと亜矢は顔を青くした。

「プロフェッサーから、仮面ライダーはまだ殺すなど言われているのよ。でもお前がどうなるうと私達は知ったこっちゃないけどね」

スパイダーファッジの言う通り、仁はまだ死んではない。よく見ると身動きしていた。仁の身に迫る危機は一応過ぎ去ってくれたが、亜矢の方はそうではなかった。寧ろ彼女はこれから危機が迫るのである。

「ウオオオオオオオン!!」

まるで勝鬨の様に遠吠えを上げると、ウルフファッジは亜矢を両腕で抱きしめてその場を離れようとした。何処かに連れていかれそうになっているのに気付き、亜矢は必死に仁に手を伸ばす。

「嫌、離してください!! 門守君!! 仁君!!」

亜矢の必死の叫びも空しく、彼女はそのまま何処かへと連れていかれてしまった。スパイダーファッジはそれについて行く。

後には残されたのは、全身傷だらけで倒れた仁だけであった。

「……………んの、野郎……………」

誰も居ない工場跡地に、絞り出すような仁の声が静かに響いて消えていった。

第6話：獅子の目覚め

スパイダーファッジに敗北し、目の前で亜矢を連れ去られた仁。

彼は痛む体を引き摺ってトランスポゾンに辿り着くと、起き上がり体を寄りかからせた。

「いつつ……くそ」

口の端の血を拭いながら仁は悪態を吐く。全身を痛みに苛まれているが、頭の中は亜矢を心配する気持ちで一杯だった。

今の亜矢は文字通り、飢えた狼の前に居るのだ。例え殺されずとも、放っておけばどんな目に遭うかは容易に想像できた。

急いで追いかけるなければならない。

「とは言え……どうやって追いかけたもんかなあ」

なにしろ手掛りなど何処にもない。ウルフファッジだった学生、貞助の事を仁は何も知らないのだ。行動の予測など出来る訳も無く、完全に手詰まりだった。

しかし仁はそこで諦めるようなことはしない。決して鼻にかけるつもりは無いが、彼には自分の頭脳が優れている事に対する自負がある。まだ正式な話ではないが、マサ

チューセツツへの留学の話もあるのだ。その自分なら、絶対に何か妙案が浮かぶ筈だと。

取り合えず、仁は今あるものを広げて何か役立つ物が無いかと探した。

今手元にある物と言えば、今日の講義の為に持っていく予定だった教材に筆記用具。そしてデイナドライバーと現在5種類の各種ベクターカートリッジ。

その中で彼が注目したのはドッグベクターカートリッジだ。文字通り犬の能力を得る事が出来るこのベクターカートリッジ。使用すれば恐らく、聴覚だけでなく犬の持つ優れた嗅覚を手に入れる事も可能だろう。つまり、匂いで亜矢を追い掛ける事が可能かもしれないという事だ。

「よし、これを使えば………待てよ?」

一瞬光明が見えたように思えたが、彼は肝心な事を見落としていた。匂いで追いかけるのは良いとして、その亜矢の匂いにする物は何処にあるのか?

先程タンDEMしていた時に亜矢がしがみ付いていた仁の上着は、彼自身の血や泥とかで汚れている。これでは亜矢の匂いがかき消されてしまっているだろう。使い物にならない。

ならばと予備ヘルメットを始め、先程まで亜矢が身に付けていた物や彼女の荷物などないかと探したが、どういう訳か彼女の荷物は一切見当たらなかった。

「マジかよ……あの野郎、双星さんの荷物全部持っていきやがった」

流石に予備ヘルメットまで無くなっているのはおかしい。仁はこの状況を、ウルフファツジが亜矢の匂いにする物を片っ端から持ち去ったのだと結論付けた。

これで亜矢の匂いにするものもなくなってしまった。当然だがウルフファツジの匂いにする物など何一つ残っていない。

万事休す……その言葉が脳裏に浮かんだが、それを振り払って仁は何かないと頭をフル回転させた。

何か……そう何かある筈だ。理屈ではない。頭の何処かがそう叫んでいるのである。

仁は考えた。考えに考え、考え続け――

「――あ――」

そして思い出した。きっと奴も回収していない、亜矢の匂いがまだ辛うじて残っているだろう物の存在を。

仁は確信を持って自分の手荷物をひっくり返し……そして見つけた。

「あった――！」

筆記用具の中から見つけたそれを見て、仁は小さく頷いた。恐らくこれならきつと、自分を亜矢の元へ導いてくれる。

その考えの元、仁はデイナドライバーを装着しベクターカートリッジを装填した。

〈DOG〉

〈WHALE〉

「絶対に、間に合わせる」

〈DOG + WHALE Evolution〉

「ん……………」

その頃、ウルフファツジに連れ去られた亜矢は工場跡地から遠く離れた廃ビルに連れていかれていた。連れて行かれる途中、意識失った彼女は奇妙な気怠さで目を覚ました。

「あ、あれ？ ここは……………私は、一体…………？」

目覚めたばかりで意識も視界もぼんやりしている。とりあえずぼやける視界を何とかしようと目を擦ろうとして、両腕が動かせない事に気付き驚きで一気に覚醒した。

「えっ!？」

見ると両腕が何か糸の様なもので天井から吊るされている。長さは膝が床に付く程度なので、強制的に膝立ちにさせられていた。

一体何がと一瞬。パニツクになる亜矢は、そこで漸く直前に何があったのかを思い出した。

「そう言えば私……ッ?! ーここは? 門守君はッ?!」

意識を失っている間に何処かに連れて行かれたのだろう事に気付いた亜矢は、パニツクになりながらも仁の事を心配した。あの時彼は傷だらけで放置された筈だ。果たして彼は大丈夫だろうか?

だが直ぐに彼の心配をしている余裕は無くなった。彼女が目を覚ました事に気付いたのか、ウルフファツジがやって来たのだ。

「ヤア、目ガ覚メタ? 双星サン」

「あ、貴方は?」

先程に比べてずつと流暢に話すウルフファツジに、一応は対話が出来そうなのを理解して亜矢は応対する。それでも言葉は出来るだけ慎重に選ぼうと心掛けた。一見すると流暢に話せているが、何か一つでも応対を間違えたらすぐに爆発しそうな雰囲気を感じるのだ。

亜矢の伺う様な応対に、ウルフファツジは何処か上機嫌に言葉を続けた。

「覚エテナイ？　マダ僕ヲガ入学シテ少シノ頃、僕ヲ助ケテクレタジャナイカ？」

言われて亜矢は記憶を掘り返すが、思い当たる事は無かった。そもそも入学して少しの頃と言う、遠くは無いが近くも無い程度に昔の話である。物によつては覚えていようが、些細過ぎれば忘れていてもおかしくはない。亜矢にとってはその程度の事だったのである。

因みに何があつたかをここで述べておくと、本当に些細な事であり、単にまだ大学敷地内の構造を理解できていない貞助と一緒に案内板を見て彼が受ける講義が行われる講堂へ案内しただけの話であつた。亜矢には特に印象に残る事も無かつたので、覚えていないのも当たり前だ。

しかしその出会いは貞助に大きな衝撃を齎した。それまでの彼の人生の中で誰よりも優しく、そして美しい亜矢は他の女性が全てマネキンに思える程の存在であつた。

それ以降彼は亜矢に傾倒するようになっていくが、その彼女の隣に仁が居座るようになるのを見て彼の想いは徐々に歪んでいった。いや、例え仁が居なくても貞助の性格を考えれば、亜矢への想いを拗らせ暴走するのも遅かれ早かれだつたかもしれない。

「嬉シカッタヨ。僕ニアンナ風ニ優シクシテクレル人、今マデ居ナカッタカラサ」

ウルフファッジはそう言つて亜矢の頬を愛しそうに撫でた。その感触に亜矢は先程舐められた時と同じかそれ以上の痺ましきを感じ、全身に鳥肌が立つのを感じて身を振

らせた。

自分を明らかに拒絶する亜矢の姿に、ウルフフアツジは苛立ちを感じたのか彼女の首を掴んで怒気を含んだ声を上げた。

「ソナ君ガ、何デアンナ奴トツ!? 他ノ連中ヨリ頭ガ良イダケデロクデモナイ、門守ミタイナイイ加減ナ奴ト仲良クシテルンダツ!?」

仁に対する悪意に溢れた言葉。それは先程まで頭にあつた、慎重に言葉を選ぼうという考えを吹き飛ばすのに十分であつた。

「私が……私が誰と仲良くしようとする自由じゃないですか!? そんな事を、貴方にどうこう言われる筋合いはありませんツ!!」

「何デ分カツテクレナインダツ!? 君ハ僕ノ女神ナンダツ! 神聖ナ人ナンダツ! 君ノ魅力ガ分カラナイ、アンナ男ガ傍ニ居テ良イ女性ジャ無インダツ!?」

「こんな魅力、分かつてほしくありません!? 私が門守君と一緒に居るのは、彼が私をとんでも普通に扱ってくれるからです!?」

大学に入学してからと言うもの、亜矢はマドンナ扱いされて他の人とは違う扱いをされる事が窮屈で仕方なかった。

高校まではそうでもなかったのに、大学に入ってからと言うもの特に男性の多くが彼女をまるで他の女性と違うとでもいうかのように接してくる。女友達と一緒に居ても、

まるで隣の女友達が見えていないかのように接してくるのだ。その所為で折角できたにもかかわらず、自分から離れて行った女友達も少なくない。

その事に人知れず悩んでいた亜矢の前に現れたのが仁である。彼は他の男性と違い、亜矢にとっても普通に接してきた。周囲からは変人変人言われる彼だが、亜矢が女友達と一緒に居るとその女性の事もしつかりと視界に収めているのが分かる対応を取るのだ。

亜矢が仁と共に居るのが心地よくなるのは当然の帰結であった。

「大体いい加減いい加減って、門守君の何を知ってるんですか!?! 少なくとも門守君は、こんな力に頼って誰かを害そうだなんて絶対にしませんよ!?!」

仁はこのベクターカートリッジの、延いては超万能細胞の技術を平和利用する方法を模索する為に危険に身を置く覚悟で仮面ライダーに変身した。自分の身を実験動物にして、人々を守りながら新たな技術の事を知ろうとしているのだ。

誰かを傷付ける為、自分の欲望を満たす為だけにベクターカートリッジに手を出した貞助とは根本的に違う。

思わず感情的になってウルフファッジに言い返してしまった亜矢だが、彼女の言葉は彼の心の地雷を踏んだ。自分の想いが理解されず、それどころか否定された。それはこれまで彼が出会ってきた他の女性……根暗で陰気な彼を小馬鹿にする、大多数の女性と同じものを感じさせた。

次の瞬間、ウルフファツジは亜矢の服をその爪で引き裂き彼女の柔肌を露にさせた。

「ツ!? きゃああああああつ!」

突然の凶行に、思わず絹を裂くような悲鳴を上げる亜矢。

ウルフファツジは悲鳴を上げる彼女に、目を血走らせて鼻息を荒げながら迫った。服を着ていると分かり辛かったが、剥かれると大きさを主張し始めた双丘に舌なめずりをしている。

「分かつテクレナイナラ仕方ガナイ。君ヲ本当ノ意味デ僕ノ、僕ダケノ女神ニシテミセル! 僕色ニ染メ上ゲテアゲルヨ、双星サンツ!!」

「う、うう——!!」

恐怖と羞恥、その他いろいろな感情が混ざり合い目から涙を流しながら、亜矢はウルフファツジを睨みつつ拘束から逃れようと必死に体を振った。しかし両腕を拘束している糸……スパイダーファツジの糸はその程度で外れる程脆くはなかった。

このままだと、獣と化した貞助に亜矢は蹂躪されるだろう。その様子を、亜矢からは死角になる場所からチミンがつまらなそうに見ていた。

「何が楽しくて美女と野獣の交わりなんて見なきやならないのかしらね。でもまあ、経過観察はしなきやならないし」

今更だが損な役割を受けてしまった。その思いでチミンは小さく溜め息を吐く。

そんな彼女の手には、亜矢が被っていた予備ヘルメットが握られている。事前情報でデイナに犬の能力が備わっている事を知っていた彼女は、仁が追って来れないようにと亜矢の匂いが付いていそうなものを回収していたのだ。

それに気付かぬまま、亜矢は迫るウルフファツジを前に恐怖が勝り遂に目を瞑った。その瞼の裏に浮かぶのは、この場に居ない仁の姿であった。

「誰か、助けて……門守君——!!」

望み薄と分かっているながら、思わず仁の名前を亜矢が口に出した瞬間——

突然壁を突き破って、飛行形態から地上形態に変形したトランスポゾンが亜矢の目の前に居るウルフファツジを撥ね飛ばした。

「ウガアツ?!」

「——え?」

まさかの登場の仕方をしたデイナに、亜矢が目を白黒させていると彼はハイブリッドアームズで亜矢を拘束している糸を切断し、変身を解いて元の姿に戻ると自分の上着を前が開けた彼女に被せた。血と泥で汚れてはいるが、破れた服で半裸を晒すよりはずつとマシだろう。

「か……門守、君?」

「ごめん。遅くなった」

呆然とする亜矢に仁は素っ気無く答える。何時も通り、特に興味も無さそうなその応対に、しかし亜矢は不思議な安心感を感じた。自然、流れる涙の意味は変わり顔には笑みが浮かぶ。

それに対し黙っていられないのがウルフファツジだ。彼はこの場に来る筈の無い仁の登場に動揺を露にした。

「バ、馬鹿ナ!? 才前、ドウヤツテココガ分カタ!? 双星サンノ匂イノスル物ナンテ、残ツテナカツタ筈ダゾツ!」

先程チミンから亜矢の匂いのする物は全て回収したと言われていたウルフファツジは、仁がここに来れた理由が分からず困惑した。

狼狽えるウルフファツジに、仁は一本のシャーペンを見せながら答えた。

「昨日、俺はこれを双星さんに貸した。使い終わったら返されたけど、それから俺はこいつに一回も触ってないからもしかしたらまだ少しだけ匂いが残ってるかもしれないと思っただ。結果は大当たり。ドッグホエールにエヴォリユーションすれば、警察犬に匹敵する追跡能力で双星さんの居場所が分かったって訳」

本場に運が良かった。もしあの後仁がシャーペンを使う様な講義があったら、若しくはそもそも亜矢がああ講義中にシャーペンを落としていなかったら、仁がこの場に間に

合うような事は無かった。

基本無神論者の仁だったが、この時ばかりは神の存在を信じ感謝していた。

「さて、とりあえずお前は一発ぶん殴る。覚悟は出来てるよね？」

〈DOG〉

〈WHALE〉

仁は一度外したベクターカートリッジを再びデイナドライバーに装填した。その視線の先では牙を剥き爪を尖らせるウルフファッジ。そして彼と亜矢の死角には、ベクターカートリッジを取り出したチミンの姿が。

〈DOG + WHALE Evolution〉

「変身！」

〈Open the door〉

グリップを仁が引くと、セントラルドグマからスーパークォイルが放たれ流星の様に煌めき飛び掛かろうとしていたウルフファッジを叩き落した。そしてその勢いのままに向かってきたスーパークォイルを、仁は正拳突きで受け止める。

ドッグホエールフォームにエヴォリユーションしたデイナに変身した仁は、大剣型のハイブリッドアームズで斬りかかる。ウルフファッジはそれを両手の爪で受け止めた。

「サツキハ負ケソウニナツタケド、今度ハソウハイカナイ！ オ前ヲブツ殺シテ、双星サ

ンヲ僕ダケノモノニシテヤル!？」

「お前もう喋るな」

これ以上戯言は聞きたくないとばかりに、ウルフファツジに大剣を振り下ろすデINA。その威力は先程の戦闘でのそれを超えていた。ウルフファツジは攻撃を受け止めきれず弾き飛ばされる。

落雷の様な一撃に、ウルフファツジは防戦一方だ。

その時、デINAの背後からスパイダーファツジが襲い掛かった。

「その手はもう喰わないよ」

「うぐあつ?! なっ?!」

背中の中の四本の脚がデINAに突き刺さろうとした瞬間、出し抜けにスパイダーファツジは何かに弾き飛ばされた。まるで空気の壁でぶつ叩かれたような衝撃に、スパイダーファツジは目を白黒させているとまたしても衝撃が彼女を襲った。

「ぐうっ?! 何? 何なの!？」

明らかにデINAによる攻撃なのだろうが、何をされているのか全く分からない。その事がスパイダーファツジを焦らせた。

「お前ら、ベクターカートリッジ使ってる割にあんまり知識足りてないね。鯨の能力を知らないの?」

「鯨の能力？」

「えっと、確か鯨と言えば……エコーロケーション？」

「鯨って結構器用で、超音波を索敵やコミュニケーション以外に使ってるんだよ」

マッコウクジラの話だが、この鯨は深海で超音波を一点集中して放出する事で強烈な衝撃をダイオウイカなどに喰らわせ気絶ないし死亡させて捕食するのだと言う。今スパイダーファッジを吹き飛ばしたのも、索敵に用いる為に周囲に放出している超音波を一点集中させることで放った衝撃波のようなものである。

先程は2対1と言う状況でスパイダーファッジに翻弄されたデイナも、今は見なくても分かるスパイダーファッジを片手間で相手していた。

「よ、ほっと」

ウルフファッジの攻撃を受け流しつつ、スパイダーファッジを下からの切り上げで引き下からせた。

数の上で勝っている筈なのに、寧ろ一方的に押されている事実にはスパイダーファッジもウルフファッジも動揺が隠せなかった。

「ナ、何デ!? コツチハ2人居ルノニ!」

「力におんぶに抱っこで能力を知ろうとしてないからだよ」

動揺は動きに現れ、精細さを欠きデイナの攻撃を防ぐ事さえ失敗する。

元より戦闘向きではない、本当の意味で闘争のド素人だったウルフファツジは、ダイナの動きについて行けず醜態を晒すがスパイダーファツジは違った。徐々にダイナの動きに慣れると、一瞬の隙を突いて彼が手にしたハイブリッドアームズを弾き飛ばしてしまっただけだ。

「あ」

「調子に乗らないで欲しいわね」

「別にそんなつもりは無かったけどね」

ハイブリッドアームズは亜矢の直ぐ傍まで飛ばされてしまった。回収に行きたいが、スパイダーファツジがそれを許してくれそうにない。

仕方がないのでダイナはそのまま無手で2体のファツジの相手をすることにした。

「武器サエ無ケレバ、オ前ナンカニイツ!？」

今もさっきも、自分を追い詰めたのは武器があるからだ。と攻め手を増やしたウルフファツジだが、ダイナは素早い蹴りでそれを返り討ちにした。

「グゲアツ?!」

「これでも鍛えてるから」

ダイナは無手でも十分に戦えた。これで戦場が屋外であれば距離を取って仕切り直す事もできただろうが、屋内では距離を取る事も容易ではない。

左右に居るウルフファツジとスパイダーファツジを相手に、デイナは交互に正拳突きや手刀、回し蹴りを放ち互角に渡り合っていた。

この状況に、スパイダーファツジはとうとう見切りをつけた。どうにも旗色が悪いし、何より彼女に求められているのはデイナとの戦闘ではなくウルフファツジの経過観察である。これ以上ウルフファツジを観察しても得られるものは何もないと判断し、彼女は最後に置き土産をしてその場を去ろうと考えた。

「喰らいなさい！」

「おっと」

出し抜けに両手の間から糸で作った網を飛ばすスパイダーファツジ。これに掴まっては身動きが取れなくなるとデイナがその場を飛び退くと、その隙にスパイダーファツジはウルフファツジに近付きベクターカートリッジとは異なるアンプルを注射した。

「もう一つ実験に付き合ってもらおうわよ」

「ウグウツ!?!」

ウルフファツジはアンプルを注射された瞬間、全身を痙攣させてその場に倒れた。

明らかにヤバい薬を使った様子に、デイナは亜矢を守るように移動しつつ構えを取った。

「何してんの?」

「ちよつとしたお薬よ。超万能細胞を活性化させる、ね」

「グルアアアアアアツ!？」

スパイダーファツジが距離を取ると、跳ねるように起き上がったウルフファツジが先程とは比べ物にならない速度でデイナに迫った。その速度にデイナは反応が遅れ、振り下ろされた爪を諸に喰らってしまった。

「うおっ」

「それじゃ、後始末は任せたわ」

何とか体勢を崩す事は無く、ウルフファツジからの追撃を防ぐ事には成功したデイナ。

その間にスパイダーファツジはその場から逃げて行ってしまった。

逃げていったスパイダーファツジを一瞥し、デイナはウルフファツジと対峙する。

見た所、ウルフファツジ自体に大きな変化は見られない。が、恐らくそれは外から見た部分だけで内部——筋肉や骨格——はより狼としての特性を表に出したものとなっているだろう。

「さつき打つたのは制限酵素の逆バージョンか？ 面倒臭いの使ってるな。つてかあいつ大丈夫かな？」

白上教授の話では初期段階でなら直刺しでも元の体に影響は少ないそうだが、あれは

恐らく人間としての体にも影響が出ているのではないだろうか？ もし仮に元の姿に戻れたとしても、社会復帰できるのか少し不安になる。

等と考えていると再びウルフファッジが飛び掛かってきた。今度も捌く事には成功するが、あまり何度も持ちそうにはない。

ここでデイナは、試しに新たなベクターカートリッジを使用する事を考えた。

「どれ、試すか」

〈LEON〉

新しいベクターカートリッジ——レオンベクターカートリッジのコックを捻り押し込むと、ホエルベクターカートリッジと交換する形でドライバーに装填した。

〈DOG + LEON Mutation〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

ホエルベクターカートリッジとレオンベクターカートリッジを入れ替えて得た、ミューテーションフォーム。アンダースーツの色が金色になり、下半身の装甲が全体的に重厚になっている。見るからに力強くなったその姿に、しかしデイナはそれ以外の事に気付いた。

「この感覚……なるほど。百獣の王、か」

「デイナは構えを解き、ウルフファツジと対峙した。その様子に亜矢は危険を訴えようとした。今のウルフファツジは完全に理性を失っている。今構えを解くのは不味い。」

しかし、彼女の危惧に反してウルフファツジはデイナに攻撃を仕掛ける事はしなかった。それどころか寧ろ距離を取っている。まるで恐れているかのようだ。

「な、何で?」

「ライオンはサバンナで本能的に捕食者の支配者の立ち位置に居座る。人間に飼育されてライオンの脅威を知らないハイエナでも、匂いを嗅いだけで逃げ出すくらいだ。つまり、ライオンは他の肉食動物に対して遺伝子レベルで上位に立つ」

今、デイナはウルフファツジを威嚇していた。目に見えるものではないが、それでもその威圧感はずかしくウルフファツジを慄かせていたのだ。肉食動物系のファツジに対する威圧、これが隠されたレオンベクターカートリッジの能力だった。

しかし所詮はミューテーションフォームで出せる能力。限界値は低い。案の定、ウルフファツジは心に湧き上がった恐怖を振り払って飛び掛かってきた。

「ウガアアアアツ!!」

「はっ」

飛び掛かってきたウルフファツジを、デイナはアッパーカットで迎え撃つ。顎をかち上げられ無防備を晒すウルフファツジの腹を、追い打ちで殴り飛ばした。

「ガア、アガガアツ?!」

腹を押さえて蹲るウルフファツジを前に、デイナはトドメを刺すべくバッファローとヒューマンのベクターカートリッジを取り出した。

瞬間、一瞬の隙を見てウルフファツジは逃げ出した。このままでは危険だと、野生の勘で判断したのだろう。

ここで逃げ出すとは思っていなかったデイナは、一瞬判断が遅れた。

「あ、おい」

窓から飛び出したウルフファツジを追って外に飛び出るデイナ。しかしウルフファツジは素早く、もう道路の彼方へと向かおうとしていた。このままでは取り逃がしてしまう。

そう思っていると、突然一発の銃弾がウルフファツジを撃ち抜き転倒させた。

「え?」

ウルフファツジの倒れ方から射撃地点を予測しそちらを見ると、なんと亜矢がデイナの落としたハイブリッドアームズをライフルモードにして構えていた。間違いなく彼女が狙撃してウルフファツジを足止めしたのだ。

その事に彼女自身が驚いているのか、倒れたウルフファツジを見て目を丸くしている。

「……お見事」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

こつそり彼女の狙撃の腕を称賛しつつ、デイナはバッファローヒューマンフォームにゲノムチェンジすると、立ち上がるうとしてしているウルフファッジに駆け寄りながらグリッブを引いた。

〈ATP Burst〉

「はっ」

掛けながら放った錐揉みキックは砲撃もかくやと言う威力でウルフファッジに襲い掛かる。

「ハアアアアアアッ!!」

「ガアアアアアッ?!」

放たれたノックアウトクラッシュユが、ウルフファッジを蹴り飛ばす。

大きく吹き飛ばされたウルフファッジは落下地点で爆発し、後には気絶した貞助と排出されたベクターカートリッジだけが残される。ベクターカートリッジは排出された際の衝撃で破損したのか、大きく罅が入っていた。これではもう使えまい。

それでもデイナは、傘木社が修復して使うようなことが無いようにとそのベクターカートリッジを踏み潰した。一瞬持ち帰って自分が使えるようにすることも考えたが、

コイツが使っていたベクターカートリッジは使う気になれなかつたし、何より何か仕込まれていそうで嫌だった。

デイナは変身を解除し、貞助を路肩に引つ張ると頬を叩いて起こす。数回強めに引つ叩くと、貞助は目を覚ました。

「う、うう……?」

「よ。気分はどう?」

「か、門守——!?!」

仁の顔を見て直前までの事を思い出したのか、逃げようとする貞助だったが後ろが壁なので逃げようがない。その彼に仁は特に感情を感じさせない声色で問い掛けた。

「お前、あのベクターカートリッジどうやって手に入れたの?」

「ど、どうやって?」

「何時、何処で、誰に貰ったのかって話。まさか覚えてないなんて言うつもり?」

声色は何時もと変わらないが、圧がいつもとは比べ物にならない。言い様の無い迫力に、貞助はあっさりと口を割った。

「き、昨日だよ。何時の間にか蜘蛛の化け物に変身する女が部屋の中に居て、僕に……」

「ふん……」

貞助の言葉は事実であり、彼は半ばベクターカートリッジを押し付けられたようなも

のであった。勿論そこには彼の隠しきれない歪んだ欲望が存在していた事も理由の一つだが、そこを付け込まれてそのかさされたのは事実。故に、彼に言えることは驚くほど少ない。

少なくとも違法薬物の様に路地裏とかで売り捌かれている訳では無い様だということに安堵し、仁は立ち上がって亜矢を迎えに行こうとする。

彼が立ち去ろうとする様子に、貞助は安堵の溜め息を吐いた。

と、その時。仁は徐に踵を返すと俯いて安堵している貞助の肩を人差し指でチョンチョンと突いた。

「え？」

貞助が咄嗟に顔を上げた瞬間、仁は彼の顔面に向けて拳を放ち——鼻っ柱が潰される寸前で拳を止めた。

「ヒィイツ!？」

「……………もう思いつきり蹴っ飛ばしたから、双星さんを怖がらせたのはこれでチャラにしておく。多分双星さんも、仕返しとかは……………あ、もう一発撃つてたか。でも次何かしたら今度はマジでぶん殴るから」

そう言つて仁は今度こそその場を立ち去った。残された貞助は、恐怖と緊張の糸が切れた事で泡を吹いてその場にひっくり返るのだった。

一方、仁は先程の廃ビルに入り亜矢が待っている階まで階段を上っていった。

先程戦闘を行った部屋に辿り着くと、そこでは亜矢がハイブリッドアームズを抱えるようにしてトランスポゾンに寄りかかって座っていた。

仁が戻ってくると、亜矢はハイブリッドアームズを手放し仁に飛びつくように駆け寄った。

「門守君ツ!!」

「双星さん、大丈夫だった？ あいつに変な事されてない？」

「はい。服は破かれちゃいましたけど」

仁の上着の隙間から破かれた自分の服を覗き見て、亜矢は少し困ったような笑みを浮かべる。これではとてもではないが今日の講義には出られそうにないし、かと言ってこんな格好では家にも帰れない。少なくとも人通りの多い日中は避けなければ、良くて事件の被害者悪ければ痴女として騒がれてしまう。

どうしようかと亜矢が悩んでいると、徐に仁が彼女の体をそつと抱き締めた。

「ふえっ?!? か、門守君？」

「ごめん……嫌な思いさせた」

「べ、別に門守君の所為じゃ……」

「でも、近くに居たのに一度は助けられなかったのは確かだし……だから、ごめん」

亜矢はちよつと意外だった。仁にもこんな風に何かに対して責任を感じて申し訳なく思うことがあったのだ。

初めて見る彼の一面に、亜矢は困惑すると同時に微笑ましきを感じた。そして貞助に對して思った。ほら見ろ、仁は決してロクデナシなんかではない。ただ普通の人と比べてちよつと変わっているだけだ、と。

「……それでも、こうして助けに来てくれたじゃないですか。嬉しかったですよ……凄く」

「ん……」

「だから、ありがとうございます。信じてましたよ。きつと来てくれるって」

亜矢がそう言つて優しく微笑んだ。普段の仁であれば、それに対して特に頬を緩める事もせず素つ気なく答えるだけであつた。

だが――

「……………うん」

今は、この時ばかりは安堵したからか、仁も頬を緩めまるで子供の様な笑みを浮かべて返した。これは亜矢も見ると、彼の初めての表情であつた。

その笑みに亜矢は暫し見惚れ、仁は突然黙ってしまった。亜矢を心配して顔の前で手をひらひらしたりして彼女を正気に戻すと、白上教授に連絡して亜矢の着替えの事などを

連絡して迎えに来てもらった。

迎えの車が来るまでの間、亜矢は仁の隣で顔を真っ赤にしながら終始俯いているのだった。

その日の夜。

亜矢は1人ベッドの上で寝ころび、ぼんやりと天井を見ていた。

その脳裏に過るのは、自分を助けた直後に仁が初めて見せてくれた笑顔。

「~~~~~!?!?」

何処か少年の様なあの笑みを思い出した瞬間、亜矢はどうしようもなく胸と顔が熱くなり枕を抱えてベッドの上を右に左にゴロゴロと転がった。

亜矢は今自分が仁に対して抱いている気持ちが無理解で、困惑していた。これをそのまま受け取るなら恋の様な気もするが、あの状況を考えるとただの吊り橋効果の様な気もしなくもない。その場の感情に任せて判断するのは、彼にだって迷惑だ。

しかし、と亜矢は考える。

改めて考えてみると、自分は果たして彼の事をどう思っているのだろうか？

まず嫌っていないのは間違いない。嫌いだったらウルフファッジに仁が貶された時、あそこまで言い返そうとしたりはしていない筈だ。何よりも、あの時ウルフファッジに對して告げた事は全て本心である。

と言う事は、仁の事を好いてはいるのだろうか。だがそれは果たしてどう言う意味で好いているのだろうか？ 飽く迄友達としてなのか、それとも恋愛対象として好いているのか？

亜矢は悩んでいた。

「門守君は……私の事、どう思ってくれてるのかな？」

少なくとも彼も亜矢の事を嫌っていないのは確かだろう。だが果たして彼が亜矢に對して恋愛感情を抱いてくれるかと聞かれたら、それは難しいと言わざるを得ない。結局彼が興味あるのは、遺伝子工学・生物工学等の知識が主だ。人間関係に関しては基本無関心もいいところ。亜矢と普通に接してくれているだけでも彼としてはかなり他人に對して心を開いている方なのではないか？

そう思うと、自分1人騒いで浮かれるのが馬鹿みたいに思えてきた。1人で勝手に期待して、1人で勝手に悶絶して。

不意に亜矢は、机の上の写真立てに目をやった。そしてそこに写っている人物に向けて一人声を掛ける。

「こんな時、貴女だったらすぐに答えを出して行動していたんだろうけどね………ね、真矢？」

そこに写っていたのは亜矢ともう一人、彼女とはどこか異なる雰囲気だが、それでも瓜二つとしか言いようのない亜矢そっくりの女性が亜矢と並んで立っている姿だった。

第7話：出会う者達

時は流れて、季節は春先。ほんのり気温も暖かくなり、桜が花開いた頃。

仁と亜矢の2人は正式に白上研究室の一員となる事が決まり、この日は2人の歓迎会も兼ねての花見が行われていた。

場所は明星大学から少し離れた所にある自然公園。桜の木が多く植えてあるそこは絶好の花見スポットであり、彼ら以外にも多くの花見客がビニールシートを広げて酒や料理に舌鼓を打ち、談笑を楽しんでいた。

基本こう言った集まりには興味の無い仁も、今回ばかりは先輩方との顔合わせもあつて参加していた。

「よう、飲んでるかい仮面ライダー？」

そう言つて仁の肩に腕を回すのは、4年生の蓮見史郎である。同じ白上研究室の一員である彼は当然仮面ライダーの事も知っていたが、彼自身はそれに深く関わるようなことは無く白上教授の裏事情を秘匿するだけの立場の人間の1人であった。

彼と同じく仮面ライダーやベクターカートリッジの研究には携わらず、ただ秘密を共有しているだけの学生はこの場にもう1人居た。

それは今仁の対面で黙々と料理を口に運んでいる小太りの男、みなもと源 こうた康太も同様である。

彼らの他にも4年生は居るが、この2人以外は皆卒業の道を選び各々の道を歩むことが決まっているので、仁と亜矢が4年生になっても付き合いが続くのは峰の他にはこの2人ともう1人くらいのもだろう。

この2人は白上研究室内で秘密を共有しているだけで、それ以上の事はしていない。ラボに入る事は無いし、戦闘に首を突っ込む事など以ての外だ。

その事を仁も亜矢もとやかく言うつもりは無い。寧ろそれが当たり前だ。彼らが仮面ライダー関連の事を知らされているのは、危険に触れるべからずと言う事と秘密を守ってもらう為だけである。

………とは言え、酔って絡まれるのはそれとはまた別問題だが。

「飲んでる、飲んでますよ。だからそんなに引つ付かないで。後こんなところでそれ言うの不味くないですか？」

「気にすんなって。だって、ほら」

仁の指摘に、史郎はある方向を指差す。そこでは、仁と同じように酔った峰に絡まれている亜矢の姿があった。

「見て見て、亜矢ちゃん！ これ、遂に完成したんだよ！」

酔った峰の手には、猫型のロボットの様な物が握られている。以前から作っていた自律型サポートガジェットのアダプトキャットだ。仮面ライダーのサポートガジェットと言う本来であればあまり大っぴらに見せびらかすべきではないものを、何のカモフラージュも無しに持つてきているのである。

当然だが絡まれている亜矢は、必死に峰を宥めながらアダプトキャットを隠そうとしている。

「分かりました！ 分かりましたから先輩、落ち着いてください!」

「可愛いでしょ、凄いでしょ、最高でしょ！ この子ね、動きも本物の猫を追及して作っただよお！ 見ててね!」

酔ったからか、峰の雰囲気が大分変っている。若しくはあれが素で、普段は少し気取っているのか。

亜矢が宥めようとするのも気にせず、峰はアダプトキャットを起動させた。すると起動したアダプトキャットは、彼女の言う通り本物の猫のような動きで体を伸ばしブルブルと体を震わせた。

確かに本物の猫と寸分違わぬ動きだ。絡まれて仕方なく見ていた亜矢だけでなく、傍から見ていた仁も思わず注目していた。

「へえ、本当に猫みたいだ」

「でしよでしよー」

峰はそのまま何処からか猫じやらしを取り出し、アダプトキャットをじやれつかせて遊び始めた。興味が自分からそれて、亜矢はとりあえずホツと一息つきカクテルの缶に口を付けた。

一方の仁も、隙を見て史郎の絡みから逃れると少し距離を置いて一人手酌で日本酒を呷っている白上教授の隣へと移動した。

教授は隣に座った仁を一瞥するが、彼が何も言わずに缶ビールを呷るのを見て自分も何も言わずにそのまま日本酒を飲んだ。

どれだけそうしていたか、アダプトキャットとじやれるのに飽きた峰が再び亜矢にちよつかいを掛け始めた頃、仁は漸く口を開いた。

「教授……」

「ん？」

「研究室に配属されたら、ベクターカートリッジの事とか色々、全部教えてもらっても良いですか？　って言うか教えてください」

唐突にそんな事を言う仁だが、教授は彼が遅かれ早かれこう言うだろうことを読んでいた為驚く事は無かった。寧ろよく持った方であるとすら思っていた。

知識欲の塊の様な仁なら、全ての講義の出席日数が達した段階で研究室に入り浸って

ベクターカートリッジや超万能細胞の知識の吸収に全力を注いでもおかしくないとすら思っていたので、研究室に配属されるまで待つ事が出来たという事に白上教授は少し驚いていた。

「……卒業研究は別にやってもらうぞ」

「上等です」

「私の本当の専門分野だ。普通の講義と違って、厳しいものになる」

「覚悟の上です」

言外に知識の習得が険しい道である事を告げるが、仁は教授からの言葉に全て即答で答えしかも教授から目を逸らさなかった。

仁の決意は固い。

その決意の固さを目の当たりにして、白上教授はフツと笑みを浮かべた。

「良いだろう。私が持つ知識、全て君に叩き込むつもりで教えよう。ついてこれなかったら置いて行くからそのつもりでいたまえよ」

「望むところです」

仁の答えに白上教授はもう一つコップを取り出すと、それに日本酒を注いで仁に手渡す。仁がそれを受け取ると、教授は自分のコップに酒を注ぎ軽く掲げた。それが何を意味しているかを察した仁は、自分もコップを同じ高さに掲げるとどちらからともなく

コップを軽くぶつけ合わせ小さく乾杯をした。

今ここに、師弟が誕生した瞬間であつた。

コップに注がれた日本酒を仁が一気に飲み干し、酒精の混じつた息を吐き出す。

と、そこで彼は亜矢の姿が無くなっている事に気付いた。先程まで亜矢に絡んでいた峰は、酔い潰れたのかノツポの先輩こと瀬高せだか拓郎たくろう——彼は峰と同じく教授の裏の顔に深く関わっている——に膝枕をされて寝息を立てている。

はて、亜矢は一体いつの間に消えたのか？

単純にトイレに行つただけかもしれないが、何となく気になつた仁はコップを置いて立ち上がると亜矢を探して周囲を歩き回つた。

数分程歩き回り、公園の端に近いところまで来たところで彼は亜矢を見つけた。一本の桜の木に寄りかかり、どこか遠くを見つめながらカクテルの缶に口を付けている。

「双星……さん？」

見つけた瞬間声を掛けようとした仁だが、彼は目の前の亜矢に違和感を感じた。何と云うか、雰囲気が何時もの亜矢と違うのだ。酔つたからとかさう言うのではなく、もつと根本的に何かが違う。

「双星さん、こんな所でどうしたの？」

とは言え目の前に居る亜矢は見た目だけなら先程まで一緒に居た彼女と全く一緒。

なので違和感を脇に置いて声を掛けた。

「ん?」

「ん?」

呼ばれて仁の方を見た亜矢だが、どうにも様子がおかしい。まるで何故自分に声が掛けられたのかを分かっていないかのようだ。

首を傾げられ、逆に仁も首を傾げ返す。互いに首を傾げ合って見つめ合っていると、不意に亜矢が何かに気付いたような顔になった。

「あ、そっか……そうよね。うん……何? 仁君?」

「……いや、いきなり居なくなっただけかと思っただけ」

「ああ、その事ね。別に大した理由じゃないの。ただ折角飲むお酒だもの。少しは1人で静かに飲みたくなっただけよ」

仁の中で違和感が大きくなる。しかしその違和感の正体に彼は気付けない。酒が回っている所為だろうか。

「……………ありがとう」

「え?」

徐に亜矢が感謝の言葉を口にした。脈絡のない感謝に、仁は訳が分からず間の抜けた声を上げてしまう。

「えっと、何が？」

「守つてくれた事、助けてくれた事……色々よ。本当に、感謝してるわ」

そう言うとき亜矢は缶を片手にゆっくりと仁に近付いた。

「でもね、だからこそ仁君にはもつと自分を大事にしてもらいたいわ。戦う以上怪我とかは避けられないかもだけど、それでも自分の体を傷付けて引き換えに勝ちを取るような無茶は止めてほしいの」

それはきつとピラニアファッジとの戦いの事を言っているのだろう。だがあの時の事は既に説教もされたし、もう終わった事の筈だ。何故今更になってまたその話をするのか。

「またこの間の話？」

「フフ、ゴメンね？　でもこう言う時でないと、言う事が出来ないから」

微笑みながら亜矢は猫の様にするりと仁に近付き、彼の胸板にこつんと額を当てた。

「仁君が思つてる以上に、仁君の事を大事に思つてるの。もしこれからの戦いで仁君の身に取り返しのつかない何かが起つちやったら………きつと悲しくて泣いちゃうわ」

そう言つて亜矢は顔を上げた。酔いが顔に出ているのか、頬が赤みを帯びている。赤くなつた顔で微笑む亜矢は、清楚さを感じさせる普段とは打つて変わつて艶やかだつた。

思わず仁も見惚れる程である。

「だから、ね。少しでいいの。これからはもう少し、自分の体を大切にして……ね？」
「ん、まあ……頑張る」

何とも信用のならない答えに、亜矢は堪らずクスリと笑みを溢した。

「フフフ！ うん、今はそれだけで十分よ。約束だからね？」

亜矢はそのまま仁に顔を近付けると、彼の頬にそっと口付けをした。頬に一瞬感じた温かさと柔らかさに、仁は思わず目を丸くする。

その顔が面白いのか、亜矢はまるで悪戯が成功したのを喜ぶようにクスクスと笑った。

「それじゃ、私は先に戻るわね。さっきの約束、忘れないでよ」

離れていく亜矢の背中を、仁はジツと見つめていた。

その手は気付けば亜矢に口付けされた頬に伸びていたが、彼がその事を自覚するのは少しの時間を要するのだった。

仁達が花見を楽しむ一方、ここ警視庁内のS・B・C・T。本部では最近のファッジに対する対策会議が連日行われていた。

先日の戦いで多くの隊員が殉職し、戦力を大きく消耗した権藤らは隊員の補充を待つ傍らファッジ、延いてはそれを生み出しているとと言われる傘木社への対策を日夜練り続けていた。

「——え、続きまして最近ファッジに対抗しているとみられる謎の仮面の人物についてです」

最近の彼らの関心は、専らファッジと戦っている姿が目撃された仮面の人物……仮面ライダーデйнаに関する事である。

彼らが徒党を組んで必死になっても傷付けたり撤退させるのが精一杯なファッジを、たった一人で対抗しあまつさえ倒して見せた。デйнаの存在は彼らにとって色々な意味で興味を引かれる存在であった。

「まず身元ですが、今の所一切分かっています。目撃者自体がとても少なく、有益な情報が殆どない状況です」

「確か現場近くで幼い子供が保護されたと聞いたが、その子供は何も見えていなかったのか？」

「それが……何かを知っているようではあったのですが、何も語ってはくれず……」

あの時、ピラニアファツジに襲われそうになり仁に救われた子供は、仁との約束を守ってくれていたのだ。

「ネット上ではこの人物の事を仮面ライダーと呼称する者も居るようですが……」

「一体何者なんでしょう？ 行動だけを見れば、ファツジから人々を守っているようにも見えますが……」

この場に居るS・B・C・T 幹部陣の意見は、概ねデйна||仁は人々の味方であると言うものであった。

だが……ただ一人、前回の戦闘でAチームを率いていた権藤 宗吾隊長だけは、数少ないデйнаの写真に写っている一点を見て味方と言う意見に異を唱えていた。

「いや……味方と見るのは時期尚早かもしれないぞ」

「と、言いますと?」

「()を見る」

宗吾が指差したのはデйнаの腰にあるデйнаドライバー。もつと正確に言えばそれに装填されているベクターカートリッジだ。偶然撮影された画像だからかかなり粗いが、それでも何とかそれだけは確認できる。

「これは……」

「見れば分かるだろう、ベクターカートリッジだ。つまりこいつは、ファッジと同じ力を使っている。もしかすると、この仮面ライダーは暴走したファッジを始末する為に傘木社が送り込んだ生態兵器の一種かもしれない」

宗吾の一言に、会議室の雰囲気ガラリと変わった。言われてみれば確かに、そもそもベクターカートリッジは（彼らの認識では）傘木社しか所持していないのだ。それを使って戦っているなど、傘木社に關係している者であると公言している様なものだった。

「権藤隊長の言う通りだな。今後、この仮面ライダーなる者に遭遇した場合は最大限に警戒して対応しろ。相手はファッジを倒す程の戦闘力を持っている。十分に警戒するように」

S. B. C. T. の総指揮官である氷室ひむろ 昭俊あきとしの言葉にその場の全員が頷いた。

そのまま会議もお開きになるかという時、徐に宗吾が口を開く。

「それと……例の対ファッジ用装備、『スコープシステム』に関してはどうなっている？
開発状況は？」

そう問い掛けられて、パソコンと向かい合っている女性隊員がキーボードを操作しながら答えた。

「現在の完成度は80%です。実戦に出せるようになるまでは今しばらくの時間が必要

です」

「急がせてくれ。今の装備ではどの道仮面ライダーどころかファッジにも後れを取る」
「分かりました。技研に少しでも急ぐよう通達します」

「頼む」

そのやり取りを最後に、この日の会議は終了となった。

仁と宗吾、共に人知れずファッジの脅威に立ち向かう2人の邂逅は、恐らく遠くはな
いだらう。

歓迎会の花見も終え、日常に戻った仁は研究室に配属されると早速白上教授に超万能
細胞・ベクターカートリッジに関する知識を学び始めた。

超万能細胞の基礎理論、ベクターカートリッジの構造、そしてこれらの技術の更なる
応用。今現在白上教授が持っている知識を仁は片っ端から吸収していた。

その学習速度は尋常ではなく、白上教授も舌を巻くほどである。事学習に関しては目

を見張るものがある学生だと言う印象だったが、そんなレベルでは済まない早さで知識を物にしていた。まるで乾いた砂に水が沁み込む様な早さだ。

現に今も、仁は新たなベクターカートリッジを自分で調整している。まだ十数日しか経っていないと言うのに、驚くべき成長速度だ。

「——出来た」

白上教授が見ている前で、仁が新たに完成したベクターカートリッジを試験管から取り出した。自分の手で作り上げたそれを、仁は何処か誇らしげに見ている。

「教授、どうです?」

「ふむ、どれ?」

仁の手からベクターカートリッジを受け取った白上教授は、コックを捻り押し込んだ。

〈HAWK〉

ベクターカートリッジから鳴る電子音声。告げられるのは鷹。デイナは新たに鷹の能力を得る事が出来るようになったのである。

「うむ……完璧だな。正直上達が早すぎて逆に教え甲斐が無かったよ」

「教授の教え方が上手いからですよ」

「いや門守君の学習速度が異常すぎるんですよ。私だって一人でガジェット作れるよう

になるまで半年以上掛かったのに」

謙遜する仁に、峰のツツコミが入る。

先日の酒の席では大分張っちゃけていた彼女だが、それが過ぎればいつも通りであった。

因みにその時の事を話題に上げると、峰は物凄く恥ずかしそうにする。どうもあの酒の席での姿が彼女の素ではあるようだが、それを晒すのは抵抗があるらしい。

(素の姿と言えば……)

仁はチラリと資料とにらめっこをしている亜矢に目を向ける。

あの日、桜の木の下で相對した亜矢は本当に彼女だったのだろうか？

実は後日、あの時の事を亜矢に訊ねたのだが彼女からの返答は覚えていないとの事だった。どうも峰に再び絡まれた時、強めの酒を飲まされそこから意識が無かったのだと言う。だからあの時、桜の木の下で仁と交わしたやり取りの事を彼女は全く覚えていなかった。

それだけならば、単に酒の所為で性格が豹変した挙句記憶が飛んだと解釈できるのだが、果たして本当にそれだけだろうか？

あの時の亜矢はハッキリ言って彼女らしくなかった。それこそよく似た別人と言われた方が納得できるくらいだ。

言い様の無い不可解さに、仁が亜矢の事を見ながら首を捻る。

と、彼女がその視線に気付き彼の方を見た。

「? 門守君、どうかしましたか?」

「ん? ん〜……いや、何でも無い」

「そうですか?」

何と答えるべきか迷った末に、何でも無いと答えると亜矢は首を傾げつつ再び資料に視線を戻した。彼女は彼女で少しでも仁の手助けが出来るようにと、彼女なりに知識を吸収していた。生憎と彼女は仁程学習能力が化け物染みていなかったため、ベクターカートリッジの制作に手が出せるようになるには今しばらくの時間が必要そうだったが。

そんなこんなで思い思いに過ごしていると、気付けば時間は午後3時。

それを報せるベルが鳴ると、白上教授は休憩と称して仁達に作業の手を止めさせティータイムの用意を始めた。

「噂には聞いてましたけど、教授って本当に英国紳士みたいにティータイム設けるんですね」

「決して悪い文化ではないよ。一旦小休止を挟むことで脳をリフレッシュさせ、最大効率で行動できるようにするんだ。理に適っている」

教授は人数分のカップを用意し、湯を沸かして紅茶を淹れる。それを渡され、仁は軽く冷まして流し込んだ。隣では亜矢が同じようにストレートの紅茶で喉を潤している。

「ところで教授、最近気になってることがあるんですけど？」

「ん？ 何かね？」

「ファッジの事って、警察とかは知らないんですか？ この間とかは別にしても、噂になる程度にはあいつら暴れてるんですよ？」

仁がデイナに変身する以前から、彼もファッジの……怪物の存在は噂で聞いてはいいた。当時はあまり信じてはいなかったが、今ならそれらの噂が真実であったと分かる。そしてそれが分かると、その噂の元となったファッジによる犠牲者も出ているのではと言う考えに至った。

被害者が出ているのであれば、警察も何らかの動きを見せるのではないかと。仁はそう考えたのだ。

「あ、そうですね。最近は流してましたけど、こう言うのは本来警察が積極的に動く案件なんじゃないですか？」

亜矢が減った紅茶に角砂糖を入れながら仁の発言に同意した。最初仁が戦う事になった時、彼女は真っ先に反対したのだ。

「その事だが……私も一応気になって調べはしたんだ。するとどうやら警察の方も全

く動いていない訳では無いようだな」

「と言うと?」

訊ねた仁に答えたのは峰だった。

「警察内部に、対ファッジを目的とした部隊が発足されているみたいなんですよ。ですよね、瀬高君?」

「ん? ああ、S. B. C. T. な。内容が内容だけにあまり大つびらにされてはいないし、活動も秘匿されてるみたいだが」

教授から峰、更に拓郎を経由して警察の現状を教えられた。ここで初めて仁と亜矢は警察の特殊部隊S. B. C. T. の事を知った。

「へえ、警察にそんな部隊が居るんですね?」

「……秘匿されてるのに先輩は何でその部隊の事を知ってるんです?」

素直に感心する亜矢の隣で、仁が疑問を抱く。秘密を知っていると一口に言うのは容易いが、秘密は本来知る事が出来ない筈だ。それを知っている、拓郎は一体何なのか。疑惑の目で仁が見つめると、拓郎はそつと視線を逸らした。それが全てを物語っていた。

「瀬高君はね、ハッキングの技術が達人なんですよ」

「言わんでいい事言うな」

つまりはそう言う事だ。結構危ない橋を渡って情報収集したらしい。もしバレたらかなり大事である。

何とも微妙な空気になったその時、峰のタブレットが派手にアラームを鳴らした。突然のけたたましいアラームに、峰が飲みかけていた紅茶を驚きのあまり噴き出した。

「ブツ!!? げほっ!!? げほっ!!?」

「わわっ!!?」

咽る峰に亜矢が急いで布巾を持って近寄る。峰が噴いた紅茶を拭きとりつつ彼女の背を擦る亜矢を視界の端に収めつつ、仁は峰のタブレットを見てファッジの出現地点を確認した。

「……か……教授、俺行つてきます」

〈BUFFALO〉

〈HUMAN〉

「うむ。頼んだぞ!」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「変身!」

〈Open the door〉

仁はデイナに変身し、トランスポゾンに跨るとラボ上部のハッチから飛び立ってい

く。

空を飛び、ビルの間を通り抜けて騒動の渦中へと飛び込む。デイナの姿は流石に目立ち、ビルの中から驚きの表情で飛び去る彼の姿を見る者が続出した。

注目を浴びている事を気にせず、デイナはファッジが出現した場所に到着する。

彼が到着すると、そこには先客がいた。

「撃てえッ!!」

自衛隊のものとは異なる装備に身を包んだ、アサルトライフルを構えた集団が空を舞うファッジを相手に応戦している。しかし彼らの攻撃はロクに当たらず、当たっても強固な表皮に弾かれていた。

「おっと?」

彼らの姿を見て、デイナは飛び込むのを一瞬躊躇した。今出ていくと場を混乱させそうだったのだ。

しかし彼らに興味はあつたので、デイナは物陰に隠れながら彼らの事を観察した。

「あれって自衛隊じゃないよな? つて事は警察? あ、さつき先輩が言つてた特殊部隊ってアイツらの事か」

デイナが彼らの正体に気付くのと同時に、上空のファッジ——バットファッジが口から収束させた超音波を放った。集束させたことで威力を増した超音波は、空気中の分子

を可視化できるレベルで振動させS・B・C・T。隊員に襲い掛かる。

「伏せろおっ!!」

隊長の宗吾が叫ぶと同時に自分もその場に伏せる。直後、隊員達を狙って放たれた集束超音波は地面を抉り、その衝撃が一部の隊員達を吹き飛ばした。

「うわあああああつ?!」

「た、隊長つ!? これ以上はつ!」

「諦めるなツ!! せめて避難が完了するまでは持ち堪えろ!」

彼らが戦っている向こう側では、逃げ遅れた市民が警察官の手により避難誘導されている。彼らS・B・C・T。は己が身を盾として、例え倒せずとも人々をファッジの脅威から守ろうとしているのだ。

その姿はデイナに気合を入れさせるのに十分だった。怪しまれる? 場が混乱する? そんなの知った事か。このまま彼らが居なくなるまで傍観して被害が広がるのを黙って見ている方がどうかしている。

トランスポズンを再び飛行モードにして飛翔すると、デイナは一気にバットファッジに肉薄し体当たりした。

「グアアツ?!」

重量のあるバイクであるトランスポズンに体当たりされるのは堪ったものではな

かったのか、バットファッジは飛行を維持する事が出来なくなりそのまま落下する。バットファッジが落ちると、デイナもトランスポゾンを着陸させ下りるとハイブリッドアームズをハルバードモードにして構えた。

その登場に勿論S・B・C・Tは目を剥いた。

「な、何だっ!？」

「あれは、まさか——!？」

「仮面ライダーっ!？」

口々に驚きの言葉を口にするS・B・C・Tの隊員達。その中に『仮面ライダー』の単語があつた事をデイナは聞き逃さなかつた。

(俺もちよつと有名になつてきちやつたかな?)

今まではあまり気にする必要も無かつたが、そろそろ動き辛くなつてくるかもしれない。そんな事を考えながら、デイナはバットファッジと対峙した。

「キ、貴様が仮面ライダーカ!？」

「ま、そんなところ。そう言うお前さんは、何処の何方?」

「答エル必要ハ無イツ!!」

このファッジは以前の貞助のウルフファッジ同様、少し言葉がおかしいがそれでもコミュニケーションが取れるタイプの様だ。それはつまり、マンティスファッジやピラニ

アファツジの様子に遺伝子元となった生物の特性を突いた作戦が効き辛いという事。

やり辛い戦いになる。そんな事を考えながら、デイナはハルバードを振り下ろした。

「ほっ」

地面を抉るほどの威力の一撃を、バットファツジは軽やかに避けた。続けて振るうも、見た目以上に軽快な動きをするバットファツジにはなかなか当たらない。

それどころか、至近距離から集束超音波を放って反撃してきた。

「カアッ!!」

「うおっ」

体を逸らせて回避するデイナだったが、その所為で体勢が崩れてしまった。そこにバットファツジの低空飛行からの飛び蹴りが突き刺さる。

「ぐっ」

軽快な動きをする割にパワーも強く、大きく蹴り飛ばされるデイナはそのまま壁に叩き付けられそうになった。だが彼はそれを寸でのところで、大剣モードにしたハイブリッドアームズを地面に突き刺す事で阻止する。

デイナはそのまま大剣モードのハイブリッドアームズで斬りかかるが、彼が近づく前にバットファツジが再び空中に飛び上がってしまった。大剣は空を切り、デイナは空へと飛び立ったバットファツジを見上げる。

空中に飛び立ったバットファッジは、そのまま空から集束超音波でデイナを攻撃し始める。最初はハイブリッドアームズで防いだデイナだが、思っていたよりも遥かに威力が高く何度も防いでいては武器の方が持たないと防御ではなく回避に切り替えた。

「あく、つたくこれだから空飛ぶ奴は。撃ち落として………いや待てよう。」

このままではじり貧だと、デイナはハイブリッドアームズをライフルモードにして撃ち落とそうとするが直前で思い留まった。そう言えば自分も、空を飛ぶ能力を手に入れたばかりではないか。

デイナはバツファローベクターカートリッジを抜き取り、先程自分で作ったばかりの新たなベクターカートリッジを取り出した。

〈HAWK〉

「これで俺も飛べる筈」

〈HAWK + HUMAN Mutation〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

ホークベクターカートリッジでゲノムチェンジすると、鷹の頭部を模したバイザー付きの仮面に変化した。更に背中には一対の翼が付き、如何にも空が飛べそうな姿だ。

ただ残念なのは、これが能力を全力で使えないミューテーションフォームであるとい

う事か。こうなると自慢の飛行能力も何処まで發揮できるか不安がある。

とは言え、今になって別のベクターカートリッジと交換してエヴォリューションフォームを探すのも難しい。敵は待つてはくれないのだから、今はこれで頑張るしかないだろう。

「さて、今からそこ行くぞ」

感覚でジャンプしながら背中に力を入れると、背中の白い翼『インペリアルウィング』が肥大化しデイナを重力から解き放つ。

トランスポゾンを用いての空中散歩を既に何度も経験したデイナではあるが、何かに乗って飛ぶのとその身一つで飛ぶのは感覚が違った。何よりも爽快感がある。

だが飛び立って早々にデイナはこの形態ではバットファッジに追隨する事は難しい事を悟った。飛行能力がまるで違うのだ。ミューテーションフォームではやはり全力が出せない。本気で空を飛ぶ相手と対峙する為には、どうしてもエヴォリューションフォームである必要があった。

だがそんな事情などバットファッジには関係ない。寧ろ、デイナも空に飛んできた事で彼を更なる脅威と捉え速度で翻弄してきた。

「落チ口オオオッ！」

「チッ、野郎……」

高速で飛行し、すれ違い様に攻撃を仕掛けてくるバットファッジにデイナは苦戦を強いられる。辛うじて対抗できてはいるが、それでも状況は彼に不利と言わざるを得なかった。

そして遂に、バットファッジの集束超音波が空を飛ぶデイナを捉えた。

「ぐあっ!!」

空中で撃ち落とされ、地面に落下していくデイナ。だが彼もただでやられたりはせず、落下しながらも適当なベクターカートリッジをライフルモードのハイブリッドアームズに装填して一撃を放った。

「くっ」

〈Genome set ATP burst〉

ハイブリッドアームズにベクターカートリッジを装填する事で発動するノックアウトブレイクがバットファッジに向けて放たれる。強化された銃弾が閃光となり、バットファッジの翼の片方を撃ち抜いた。

「ガアアッ?!」

デイナに遅れて地面に落下するバットファッジ。直接飛行能力が奪われた訳ではないデイナは落下直前に再び飛行する事で難を逃れたが、飛行能力に関わる翼にダメージを受けたバットファッジは体勢を立て直す前に地面に激突してしまった。

「グウ、アアアア……クツ!？」

それでもまだ倒れる程のダメージではなかったのか、バットファッジは立ち上がるとデイナを睨み付ける。デイナもバットファッジが再び攻撃を仕掛けてくるだろうと踏んで空中でハイブリッドアームズを構えるのだが――

「ハア、ハア……ウグツ!？ アガ、ア――!？」
「ん?。」

突然バットファッジが苦しみ出した。まだデイナは何もしていないのに、胸の辺りを押さえて悶えるバットファッジにデイナは訝し気な視線を送る。

「グウウウウ、ガアアアアアアッ!？」

「あ、ちよ……」

暫く悶えていたバットファッジは、突然叫ぶと傷付いた翼を広げてどこかへと飛んで行ってしまった。慌てて後を追うデイナだが飛行能力の違いからあつという間に引き離される。せめて追撃だけはとハイブリッドアームズの引き金を引くが、フラフラと不規則に飛ぶバットファッジにはなかなか命中せずそのまま逃がしてしまった。

「あちゃあ……しかしあいつ、いきなりどうしたんだ?。」

今までにない事態にデイナも頭を捻るが、今ここで考えても仕方がないと気持ちを切り替え地上に降り立ちトランスポゾンに跨りその場を去ろうとした。

その時、周囲に居たS・B・C・T・隊員が彼に銃を向けた。

「待て、動くなッ!」

「ん?」

デイナが声をした方を見れば、残っていた隊員達が全員彼に銃口を向けている。ある程度予想出来ていた展開だけに、デイナはこの光景を前にしてもあまり驚きはしなかったが。

しかしこれは困った。何と言うか、向こうから感じる雰囲気も思っている以上に殺伐としている。まるで親の仇でも見ているような目だ。今ここで穏便に済ませるのは難しいとすら思える。

「貴様、一体何者だ! 何故ベクターカートリッジを使用している! 答えろ!」

デイナは悩んだ。ここで全て正直に答えるのも一つの手だろうが、雰囲気的に間違はなく逮捕される。そりやそうだ。デイナの中身である仁は武器の使用免許など持つてはいないのだから、立派な銃刀法違反である。

詳しく事情を話せば或いは情状酌量の余地もあるかもしれないが、さつきも述べたように今の彼らは話が簡単に通じる気がしない。それに迂闊に全てを話して、亜矢や白上教授が芋づる式に逮捕されるのは避けたかった。

何よりも、今逮捕されてはあのファッジに対抗できる人間が居なくなる。

「ん〜……ごめん、ノーコメントで」

「何ッ!?!」

悩んだ末にデイナは、逃げる事を選んだ。説明とか面倒くさかったし、無用な争いはもつと面倒だった。

トランスポゾンのコンソールを操作し、飛行モードにして飛翔するデイナ。下からはS・B・C・T.による銃撃音が響き、何発かが命中するがその程度では痛くも痒くもない。

そのままデイナは彼らの目が届かないところまで飛び去った後、地上に降り立つと変身を解除すると同時に車体カラーも変更して逃げ切り大学まで戻るのがだった。

第8話：彼は全てを受け入れる

バットファアツジとの戦闘を終え大学の秘密ラボへと戻った仁は、帰還の報告もそこそこ到手元にあるベクターカートリッジを抱えてパソコンと向き合ってしまった。

まるで憑りつかれたかのようにキーボードを叩きモニターに目を走らせる彼の様子に、白上教授も峰も拓郎も圧倒され何も言えなくなってしまう。

そんな中でただ一人、亜矢だけは一切物おじせず仁に近付き話し掛けた。

「どうしたんですか？」

横からモニターを覗き込みながら亜矢が口にした質問に、仁はモニターから目を離さずに答えた。

「エヴォリユーションするカートリッジの組み合わせに何か法則性は無いかと思つてさ。折角の能力も、全力を発揮できないんじゃないじやただの宝の持ち腐れだ。どうせ新しい力を手に入れるなら、全力でぶん回す方が良い」

「でも調べて分かるものなんですか？ 教授もどれとどれがエヴォリユーションの組み合わせかは分からないって言っていましたけど？」

「何も無いなんてことは絶対ない筈なんだよ。組み合わせに相性の良し悪しがあるな

ら、何処かに違いが絶対ある。それが分かれば、次からはもっとスムーズにエヴォリューションフォームになれると思うんだけど……」

亜矢と会話しながらも、仁の指は片時も止まる事は無い。手元を全く見ず、一切のミスも無くキーボードを叩くその姿は機械の様ですらある。

仁の指が高速でキーボードを叩き、それに合わせてモニターの表示が目まぐるしく変わる。次から次へと数字の羅列が現れては消えていき、表が数字で埋め尽くされるとグラフが表示された。無数の線が上に行ったり下に行ったりしているそのグラフは、傍から見れば何を表しているのか全く分からない。

いやグラフだけではない。亜矢には数字の羅列ですらどれが何を表しているのか理解できず、首を捻るしかできる事は無かった。

只管キーボードを叩き、様々な角度からエヴォリューションする組み合わせとミュージションする組み合わせを比較していく。

が、結局分かる事は何もなかった。どれだけ数字を比較してどれだけグラフを見比べても、それらしい法則性の類は発見出来なかったのである。

何の成果も得られなかった事に、仁は疲れたように椅子の背もたれに体重を預け全身を脱力させた。

「んんんん……そう上手くはいかないか」

疲れたようにしてはいるが、あまり残念そうには見えない。科学を目指す上で、こんな事は日常茶飯事だからだ。本腰入れて検証したからと言って、それで確実に何か分かるという事は無い。時には空振りに終わる事だつてある。

それを分かっているから、ここで何も分からなくても落胆するような事は無い。

一つの検証が空振りに終わったのなら、次の検証に移るまでの話だ。

仁は椅子に座ったまま場所を移動し、今度はベクターカートリッジの調整をしている区画へ向かう。次の策は言ってしまうえば総当たり、つまり今作れるベクターカートリッジを片っ端から作って組み合わせを検証するのだ。

力技ではあるが、一つ一つ検証すると言う点で見れば理に適っている。それにどの道戦いの手札を増やすのだから、新しくベクターカートリッジを作り出すのは無駄ではない。

そう思いパソコンに向かい、肩と首を回して筋肉を解しキーボードに指を走らせようとした。

次の瞬間、仁の頭にバインダーが叩き付けられる。何事だと背後を振り返ると、そこには今し方仁の頭に叩き付けたのだろうバインダーを手に持った亜矢の姿があった。

「……何すんの？」

作業を遮られた事に仁が不満を口にすると、亜矢が黙つてある一点を指差す。それに

釣られて仁が彼女が指差す先を見ると、そこには壁に架けられた時計があった。その時計の針は、ピッタリ9時を差している。

「今何時ですか？」

「……9時だね」

「何時間作業したと思ってます？」

「……5時間位？」

「途中で私が何度か声を掛けたのには気付いてました？」

「……全然」

「では、私が言いたい事は分かりますね？」

「…………うん」

反論を許さぬ圧に負け、仁は帰り支度を始めた。

ラボを片付け表の研究室に出ると、2人以外誰も居ない。検証作業に熱中するあまり、時間の経過を忘れ教授を含め亜矢以外全員が帰ってしまった事に気付かなかったのだ。

これで亜矢がいなければそれでも無視して検証作業を続行しただろうが、亜矢がいる現状仁は大人しく帰る事を選択した。

それはこれ以上亜矢を怒らせて喧嘩になるのが嫌だからではなく、こんな時間になっ

て他の者が帰ってしまったのに未だに残ってくれている彼女に悪いと思ったからだ。

室内の電気を消し、亜矢が預かっていた鍵で扉を閉める。2人は揃って管理室に研究室の鍵を返すと、そのまま2人で夜の研究棟内を歩いた。

「何かゴメンね？　こんな時間まで付き合わせちゃって」

「別に構いませんよ。門守君を1人残す方が不安です」

「お詫びって訳じゃないけど、家まで送るよ」

仁は携帯でトランスポズンを遠隔操作——彼の物となる上で必要な機能なので峰がアプリとして追加した——し校門近くに移動させる。この時間なら誰かに見られる可能性は低いだろう。

遠隔操作し携帯をポケットに戻す仁を見て、亜矢はある事が気になり彼に問い掛ける。

「……門守君、昼間警察の特殊部隊に出会ったんですよね？」

「え？　ああ、うん。S・B・C・T。だっけ？　その人達に会ったよ」

「その時、銃を向けられたって聞きましたけど？」

「ん〜？　言ったっけ？　ゴメン、よく覚えてないけど……まあ向けられたのは確かだよ」

先程仁が検証作業に夢中になっている時、ラボでトランスポズンの整備をしていた峰

が弾痕を発見し仁に問い掛け、仁はそれに無心で答えていたのだ。条件反射も同然に答えていたので、仁の記憶にはなかったのである。

亜矢は仁が警察関係者から銃を向けられ、あまつさえ引き金を引かれたと言う事に心を痛めた。ファツジの脅威に立ち向かっているとは言え、ただの学生でしかない彼が何故そんな目に遭わなければならぬのかと。

「不満とか、嫌になつたりはしないんですか？」

「何で？　だつて向こうからしてみれば俺怪しい奴だし、警戒するのは当然じゃん？」

それに俺面倒だからって話するの拒否して逃げてきちゃつたし」

正体不明のデイナを、彼らが警戒するのは至極当然の事と仁は彼らの行動を受け入れていた。

しかし亜矢には納得できなかつた。

仁がベクターカートリッジの力で戦っているのは、行く行くはその力を平和利用する為だ。決して私欲の為に使おうとしているのではない。ましてや、誰かを傷付ける為に使おうなどとは微塵も思っていないのだ。

仁は戦う時、何時だつて誰かの為に戦つてきた。彼が戦つた事で、助けられた人だつている。きつと今後も、彼が戦えば助けられる人達が出るだろう。

……………では、肝心の仁自身は？　誰かを助ける為に戦い傷付く彼を、一体誰が

助けてくれるのだ？

仁の事だから、誰かに助けを求める様なことはしないだろう。彼はそういう男だ。

だが亜矢は、そんな彼の在り方をとても悲しいと感じていた。誰かを助ける為に戦う者が、助けられてはいけなさと誰が決めた？

亜矢のすぐ隣を歩く仁。手を伸ばせばすぐ届く距離に居る筈の彼が、今の亜矢にはとても遠くに居るように思えて仕方なかった。

心にモヤモヤとしたものを抱えながら、亜矢は仁と共に校門を出てそこに停まっていた。トランスポゾンに跨った。仁の背中にしがみ付き、腰に手を回して体を固定する。

それから亜矢の家には、そう時間を掛けずに到着した。自宅のマンシヨンの前にトランスポゾンが停まると、亜矢は彼から離れバイクを降り、予備ヘルメットを彼に返す。

「んじゃ、おやすみ」

そう言って仁が去ろうとした。その背に向けて、気付けば亜矢は声を掛けていた。

「あのツ！」

「ん？」

突然呼び止められ、仁はブレーキを引いてその場に止まる。振り返ってきた彼に、亜矢は何か言葉を掛けようとし、しかし何も頭に思い浮かばず暫し口をパクパクさせると

「あ、あの、あ……………お、お休みなさい」

結局、ありきたりな別れの挨拶だけを告げる事しか出来なかった。ここぞと言う時の意気地の無さに嫌気がさしつつ、亜矢は踵を返して自宅へと帰ろうとした。

その彼女に対し、今度は仁の方が声を掛けた。

「あのさ……………」

「え？」

「……………ありがとう。助けられてるよ。俺も」

それだけ告げて、仁はその場を走り去っていった。

助けられている、それは気遣いではなく事実だろう。

亜矢の存在が、精神的な彼の支えとなっている。先程の感謝はきつとそう言う意味だ。ただ居てくれるだけで、何時も通りに接してくれるだけで彼は助けられている。戦いで傷付こうとも、警察から銃口を向けられようとも、へこたれる事無く戦う事が出来た。

彼の伝えたい事は何となくだが亜矢にも伝わった。これ自体は嬉しい。こんな自分でも、戦う彼の支えとなれている事が。

しかしそれは所詮、彼の後ろに立つ者に出来る事だ。結局彼が傷付く事から守る事が出来ない。

戦いに傷付く彼を見ているしかできない自分に不甲斐なさを感じながら、亜矢は去って行く仁の背を見送り自分も自宅へと向かうのだった。

ここは傘木社本社の地下にある秘密研究エリア。その一室、取調室のように壁の一部が広く強化ガラスで覆われた部屋の中では、1人の男が胸を押さえ悶え苦しんでいた。

「うぐううう、あああああつ?!」

入院患者が着るような服を着て、床をのたうち回る男性を強化ガラスの向こうから雄成を始めとした研究員が観察している。

「……前回の結果から、薬物で強制的に精神を強い興奮状態にさせれば理性を保てると思っただが、これではな……」

「理性自体はある程度保てていましたが、薬効が切れると副作用の中毒症状でこうなるようです。定期的に薬物を摂取させればある程度問題はクリアできるでしょうが」

その場合被験者は確実に回数を重ねるごとに体がボロボロになっていく。戦える回数に限りのある消耗品だ。根本的な解決にはならない。

「……やはり直挿しが問題か」

「そう言わざるを得ないでしょう。メリットに対してデメリットが大きすぎます。今後は何らかの器具を用いて力を制御できるようにする方向で考えた方が良いでしょう」

「白上のやり方が正しかったと言う訳だ」

雄成が研究員と話し合っている間に、強化ガラスの向こうでは別の研究員が被験者の男性に薬の入ったアンプルを持っていった。薬が来た事に気付くと、男性は奪い取るように薬を受け取り中身を喉に流し込んだ。

薬を飲んでから数秒ほどで男性の顔色は良くなっていった。そして正気を取り戻した男性は、顔色が良くなったにもかかわらず研究員に掴み掛り懇願した。

「た、頼む!! もう止めてくれッ!! こんな薬使われたら、体が持たない!!」

この男性は、傘木社暗部の武装組織である傘木保安警察と言う組織により拉致された一般人である。

『警察』と名乗ってはいるが、その実態は傭兵や刑務所の囚人で構成された私設武装組織だ。

そして彼らはいざと言う時はアントファッジとなって戦う、正に消耗品の兵士でもあ

る。

閑話休題。

男性に掴み掛られた研究員は、その手を乱暴に振り解き代わりにバットベクターカートリッジを挿した。忽ちバットファッジに変異する被験者の男性。

変異してしまった自分の姿に震えるバットファッジに向け、研究員は冷たく言い放つ。

「もう後戻りはできない。お前が助かる方法はただ一つ。我々の実験に協力する事だけだ」

そう告げられ、バットファッジはその場に膝をついて項垂れた。彼らに掴まったのが彼の運の尽きであった。

絶望するバットファッジに興味を失ったのか、雄成は強化ガラスから視線を外し先程のベクターカートリッジ専用ツールに関する話を再開した。

「先ほど言っていたツールだが、まずは出来るだけ利便性を追求しろ」
「と、言いますと？」

「奴を真似てベルト型にするのはデータが集まってからだ。最初は持ち運び等に優れる形状にするんだ。例えば腕輪だったり、拳銃なんかにして武器としても使える物が良いだろうな」

「なるほど……分かりました。その方向で開発を進めてみます」
人々が寝静まった後も、この地下研究室では災厄の種が育ちつつあった。その芽吹いた災厄が仁達に牙を剥くのは、そう遠い事ではなさそうである。

翌朝、仁は朝から大学へ向かうべくトランスポゾンを走らせていた。昨日の検証の続きを行う為だ。

今日は土曜日なので本来は大学も休みなのだが、居ても立ってもいられず自主的に動いていた。

その道中、彼は亜矢の姿を見かけた。方角的に大学へ向かっている彼女が気になり、仁はバイクを近くに寄せて話し掛けた。

「おはよ〜」

「門守君、おはようございます」

「こんな朝からどうしたの？ 今日土曜日じゃん」

「大学ですよ。門守君、今日も昨日の続きやるつもりだったんでしょ？ 1人では大変かと思つて、私もお手伝いしに行こうと」

仁は目をパチクリさせた。行動が読まれている事にもだが、何よりも態々付き合つてくれると言う彼女にだ。

「別に付き合わなくてもいいのに」

「せめてこれ位はやらせてください」

「ん……分かった。なら後ろに乗りなよ。乗せてくから」

小さく溜め息を吐きながら、仁は予備のヘルメットを取り出して亜矢に手渡し後ろに乗せようとした。

その時、彼に話し掛ける者が居た。

「失礼」

「ん？」

声を掛けられて仁がそちらを見ると、そこにはスーツを着た1人の男性が居た。

初めて見る筈の顔だが、仁はその男性に何処か見覚えがあるような気がした。

「何だろ？ 何処かで見た事があるような？ ……何です？」

若干警戒しながら訊ねると、男性は懐から警察手帳を取り出して仁に見せた。

「私、警察の者なんですがね。このバイクについて少し話を聞かせてもらつても？」

トランスポゾンについて訊ねてくる警察と言う男性。そこで仁は気付いた。この男性を何処で見たのかを。

（ああ、昨日の警察の特殊部隊の……）

その男性はS・B・C・T.の隊長である宗吾だった。あの時、一瞬だけ見た顔だったが仁は辛うじて彼の顔だけは覚えていたのだ。

トランスポゾンに興味を持ってきた宗吾に亜矢が顔を強張らせる前で、仁は至つて平然とした様子で答えた。

「何でもどうぞ」

「このバイク、普通の物とは大分異なるようですが何処で買われましたか？」

出だしから話辛い事を聞かれたと、亜矢が仁の後ろで冷や汗をかいた。何処で買ったも何も、白上教授が独力で作ったバイクを貰った状態なのだから答えようがない。だからと言って馬鹿正直に答えては、仁がデйнаである事がバレてしまう。

「カッコいいでしょ？ 自作なんですよ」

「自作？」

「こそ。知つてます？ 今噂になつてる仮面ライダーつて奴」

「知つてます。実は今それについて情報を集めていまして」

「そいつが乗つてるバイクがカッコ良かったんで、見た目真似てみたんですよ。よく出

来てるでしょ？」

いけしやあしやあとホラを吹く仁に、亜矢は何とも言えない顔になってしまった。真実を話す訳にはいかないとは言え、よくもまあこんな嘘が言えたものだ。

大体にして、自作したとは言えこれは改造の域を逸脱していいだろうか？ どんなバイクをベースにすればここまでの形に出来ると言うのか。

「それにしたって、随分と独特過ぎるスタイルをしてるように見えますけど？」

ほれ見ろ、案の定突っ込まれた。ハーレーと比べたって形状が独特過ぎる。今ある物を改造したと言うよりも一から全部作ったと言った方が自然だ。

「ジャンク品集めて作ったんですよ。苦労しましたよ、ここまで形似せるのは」

「ふうむ……」

宗吾は仁とトランスポゾンに疑惑の目を向ける。その後ろで亜矢が冷や汗を流している、仁が口を開いた。

「もしかして、俺がその仮面ライダーじゃないかって疑ってたりしますか？」

仁が問い掛けると、宗吾は目線を鋭くした。疑っているのとは違うが、仁の言葉にどこか挑発的な何かを感じたのだろう。若造に小馬鹿にされたとも思ったのだ。

それを敏感に感じ取った亜矢が、慌てて仁の後頭部を叩く。

「門守君!! お巡りさんに失礼ですよ！」

「別に馬鹿にした訳じゃ……」

「言い方の問題です!？」

「そんなに？」

目の前で痴話喧嘩を始める2人に、宗吾は面倒くさそうに溜め息を吐く。亜矢は狙った訳ではないが、この喧嘩で宗吾は一気に2人から興味を無くしたらしい。

「あく、そう言う訳じゃないですから。ただあまりにも似すぎてるんで。まあ無関係だつて言うならそれで構いません。突然声を掛けて失礼しました」

宗吾はそう言つて足早にその場から立ち去つていった。

彼の後姿に、仁は無言で後ろの亜矢にサムズアップを送る。狙った訳でもないのに宗吾を追い払う手助けをすることになった、亜矢の心境は複雑だった。

「とは言えこれで問題は過ぎ去つた。さてそれでは改めて大学のラボへ向かおうと仁がアクセルを吹かした。

その時、そう遠くない所から破壊音と無数の悲鳴が聞こえてきた。それを耳にした瞬間、2人は一瞬間を見合わせると亜矢がトランスポゾンから降りた。

「ゴメンね」

「いえ。気を付けてください!」

「ん、ありがとう」

仁は悲鳴が聞こえてきた方にトランスポズンを走らせる。

現場に到着すると、そこでは案の定ファッジが暴れて周囲に被害を与えていた。それも先日取り逃がしたバットファッジだ。

昨日の不手際がこの事態を招いたかと思うと、仁は苦虫を噛み潰した顔をせずにはいられない。

「さて……つと？」

いざ変身しようとして、仁は現場に宗吾を始めとした警官が多数居る事に気付いた。彼らは逃げ遅れた人々を必死にその場から逃がそうとしている。

「急いでッ！ 早く避難をッ!」

宗吾が陣頭指揮を執り避難誘導しつつ、拳銃でバットファッジに応戦しているのを見て仁はそつと下がって物陰に隠れた。流石に彼らに見られながらの変身は面倒な事になる。

「大変だな、お互い」

〈HAWK〉

〈LEON〉

宗吾達を労いながら、仁はベクターカートリッジを装填する。選んだのは先日全力を發揮できなかったホークベクターカートリッジと、まだエヴォリユーションが見つかつ

ていないレオンベクターカートリッジ。まだペアとなる組み合わせが見つからないもの同士なら、或いは――

〈HAWK + LEON Evolution〉

「ピンゴ。変身！」

〈Open the door〉

仁はデイナに変身しながら、トランスポゾンの車体を白に変更し走らせた。目指すはまだ空を飛ばずに地上で破壊活動をしているバットファッジ。ホークレオンフォームにエヴォリューションしたデイナはそのまま猛スピードでバットファッジに体当たりをぶちかました。

迫るトランスポゾンに気付いたバットファッジは、慌てて翼を広げて空を飛びトランスポゾンを回避した。

「来たか、仮面ライダーッ！」

まるでデイナが来るのを待っていたかのような物言いと、理性を保ちながら目的も無く暴れるような行動をするバットファッジにデイナは疑問を抱きバイクを降りながら問い掛けた。

「お前、何でこんな事してんの？ 無暗矢鱈に街ぶつ壊して、何が気に入らないのさ？」

問い掛けながらデイナは大剣モードのハイブリッドアームズを構えた。

「俺ノ目的ハ、オマエ自身ダ！」

「俺？」

「オマエヲ始末スレバ、俺ハコノ苦シミカラ解放サレル！　ダカラ覚悟シロ、仮面ライダー！！」

そう叫び上空から強襲を掛けてくるバットファッジに、デイナも空を飛び応戦する。広がるインペリアルウイングが力強く羽搏き、デイナの体を重力から解き放った。

飛び立ったデイナを前に、バットファッジは最初彼を侮っていた。先日の戦闘で飛行能力に関しては自分の方に分があるのは確認済み。ならば勝機は自分にある、と。

だがその考えは、次の瞬間目前に迫ったデイナが大剣を振り下ろす姿を見て一瞬で崩れ去った。

「ナツ!？」

突然の事にバットファッジは反応できず、諸に体を切り裂かれてしまう。そのまま地面に落下したバットファッジの前に、デイナは悠々と着地した。

「ド、ドウイウ事ダ!?!　昨日ハ確カニ俺ノ方ガ……」

「悪いね、昨日は全力じゃなかったんだ。今回は全力全開で行くぞ」

言うが早い、デイナは低空飛行で一気にバットファッジへ接近した。すれ違い様の斬撃を、バットファッジは何とかやり過ごす。デイナはそのまま上空に飛翔し、ライフ

ルモードに変形させたハイブリッドアームズで銃撃する。

「ナメルナツ!!」

しかしバットファッジも負けてはいない。翼を広げ飛び立つと、空中でデイナの銃撃を回避しつつ反撃に集束超音波を放つ。

余裕を持つてそれを回避しお返しに引き金を引くデイナ。

互いに優れた飛翔能力を活かして、相手の攻撃を回避しつつ反撃するデイナとバットファッジだったが、ふとデイナは気付いた。このままでは周辺への被害が広がってしまう。

このままでは不味いと、デイナはハイブリッドアームズを大剣モードに変形させ接近戦を挑んだ。今の飛翔能力なら、バットファッジに接近する事も容易だ。

デイナが大剣を構えて接近する。それを見てバットファッジはほくそ笑むと、それで集束させてはなっていた超音波を拡散させてはなった。

「うっ」

広範囲に広がる超音波は、先程までの破壊力は無いが回避困難な音の壁となつてデイナに襲い掛かる。不協和音が脳を揺らし、安定した飛行を遮った。

不安定に飛ぶデイナの飛行速度は先程とは比べ物にならない。バットファッジは今が好機と、デイナに接近し蹴り落とそうとした。

〈W H A L E〉

〈H A W K + W H A L E M u t a t i o n〉

バットファッジの蹴りが放たれる直前、デイナはレオンベクターカートリッジをホエールベクターカートリッジに交換してゲノムチェンジした。それと同時にエコーロケーション用の超音波をバットファッジに向けて放つ。それは相手を吹き飛ばす威力のある『インパクトウェーブ』ではない、ただ超音波を一方向に集中させただけのもの。本来であれば相手にダメージを与えられる筈も無いそれを放たれたバットファッジは

「ウグオツ!? ナ、何ダツ!？」

突然平衡感覚を失い、蹴りがデイナを外れた。大きく空振りをして隙を晒したバットファッジ。そこにデイナが大剣を振るった。

「グアアアアアアアッ?!」

胴体を大きく切り裂かれ、悲鳴を上げて落下するバットファッジ。何とか空中で持ち直し地面に激突する事は避けたが、今のダメージはバットファッジから体力を大きく削ぎ落とした。

「ふう……ふう……おえ」

振り返ちでバットファッジを叩き落したデイナだが、こちらも無傷とは言い難かつ

た。何しろ脳を直接揺らされたのだ。視界は歪んでいるし、吐き気も酷い。それでもダイナは気力で持ち堪え、バットファッジを相手に優位に立っていた。

「ナ、何が起コツタ!? 何デ急ニツ!」

「超音波を使えるのはお前だけじゃないって事」

ダイナがやったのはとても単純で、バットファッジに対し超音波を照射し返して相手の平衡感覚を狂わせただけである。

蝙蝠とは周囲の状況を捉えるのに、鯨以上に超音波の反射に頼っている。バットファッジの場合全ての蝙蝠の特徴を持っていると考えられるので視力も決して悪くはないだろうが、それでも超音波による索敵能力は健在な筈。ならばそれをダイナの放つ超音波で狂わせてしまえと言う事だ。

結果は大当たり。バットファッジはダイナの超音波を喰らい正確な彼の位置を見失い、攻撃を空振りした。

〈HALK + LEON Evolution〉

「ゲノム、チェンジ」

〈Open the door〉

ボロボロのバットファッジを前に、ダイナは再びゲノムチェンジしてホークレオンフォームになる。

自身の目前で力強く立つデイナを前に、バットファッジは思わず恨み言を口にした。

「才前ガ、才前サエ居ナケレバツ!? 俺ハコンナ苦シミヲ味ワウ事ハ無カツタンダツ!?」
「俺の所為?」

「才前ニ……才前ニ對抗デキルヨウニト、奴ラハ俺ニ薬ヲ無理矢理——!? 俺ガ何ヲシ
タツテ言ウンダツ!? 何デ俺ガコンナ目ニツ!?」

デイナにバットファッジの恨み言が突き刺さる。彼に言わせれば、この事態はデイナ
の存在が招いた以外の何物でもないからだ。デイナに対抗する為に更なる戦力増強を
見込まれ、劇薬を無理矢理投与され戦わされ、そして苦しんだ。

バットファッジにとつては災難と言う他はない。

そんなバットファッジの境遇を、デイナも哀れに思わないでもなかった。彼がデイナ
を恨む気持ちも分からなくはない。

だが、デイナはそれでも止まる訳にはいかなかった。ここで足を止めては、未来ある
新技術が悪事にばかり利用され多くの人が傷付き、助けられる人が助けられなくなる。

まだ磨かれ始めたばかりの技術と知識。それが間違つた方向にのみ輝く事を許す訳
にはいかなかった。

だから、彼は同情に蓋をして心を鬼にした。

「災難だとは思ふよ。あんたが俺を恨みたくなる気持ちも分かる。でもあんたがやった

事を許す訳には……行かないからさ」

〈A T P B u r s t 〉

デイナはドライバー右側面のレセプタースロットルを引く。ドライバーに装填されている二つのベクターカートリッジ内の超万能細胞がA T Pを産生し、両足に集束したのを見てデイナはインペリアルウイングで飛翔。上空から急降下して両足がバットファツジを噛み砕くように上下から挟んだ。

「ハアアアアッ！」

「クソ、チクシヨオオオオッ!？」

ライオンが獲物を食い殺すが如く、バットファツジを蹴り上げと踵落として挟む。バットファツジは最後までデイナへの恨みを抱きながらそれを喰らい、そして爆散した。

後にはベクターカートリッジが排出され、元の姿に戻った男性と破損したバットベクターカートリッジだけが残された。

デイナは倒れた男性に近付くと、近くに落ちていたバットベクターカートリッジを拾い上げ握り潰す。そして意識が朦朧としている様子の男性に語り掛けた。

「あんたの恨み、確かに受け取ったよ。それで少しでも気が晴れて楽になるなら、いくらでも恨みな」

それが相手に聞こえていたかは分からない。それを受けて本当に彼がデイナの事を、恨んでいるかも分からない。

だが少なくとも、これで彼がこれ以上悲惨な目に遭う事は避けられるだろう。この場には警察も居る。ファッジに変異していたという事で暫くは不自由するだろうが、話を聞く限り彼は完全に被害者だ。薬漬けにされた挙句戦わされたのなら、情状酌量の余地はあるし適切な治療も受けられる。

全てが元通りになるまでは時間が掛かるだろう。治療の過程で辛い思いをするかもしれない。だが立ち止まりそうになった時は、自分への恨みを糧にしてくれれば良い。デイナはそう考えつつ、トランスポゾンに跨りその場を去ろうとした。

「待てッ!」

その時、昨日に引き続きまたしても宗吾が銃口を向けてきた。要請を受けてきていたのか、何時の間にか彼の周りにはS・B・C・Tの装備に身を包んだ隊員もいる。その一部がファッジだった男性を担架に乗せて運んで行くのを視界の端で見て、小さく安堵の溜め息を吐きつつデイナは宗吾からの呼び掛けに応えた。

「今度は何?」

「お前は……お前は一体何なんだッ!? 何故ファッジと戦うッ!? お前もベクターカートリッジを使っているクセに、何故——!?!」

やや困惑した様子の宗吾に、デイナは考える素振りを見せた後………こう答えた。

「……ベクターカートリッジも、そんなに悪いモンじゃないよ。きつと、ね」

「何い？」

「ま、俺以外に戦える人が居ないから戦ってるって事で、一つ。それじゃ」

デイナは一瞬の隙を突き、トランスポズンを飛行形態に変形させてその場を飛び立った。背後からまたしても宗吾達が銃撃してくるが、デイナはビルの影を利用して一気にその場から逃れた。

昨日に引き続き逃げられた事に、宗吾は悔しそうに歯噛みする。機嫌を悪くした部下が宥めつつ、周囲の後処理を開始し始めた。

その様子を亜矢が遠くから眺めていた。彼女は暫く宗吾達を見つめ、次いでデイナが去って行った方を見ると一度顔を伏せ、そのまま静かにその場を立ち去るのだった。

第9話：亜矢の気持ち

仮面ライダーとして戦う仁ではあるが、その本業は大学生である。しかも彼は大学4年生。卒業の為には卒業研究をして、卒論発表で合格しなければならぬ。

それは亜矢も同様であり、彼女もまた卒業研究のテーマを決め、研究を進めそれを発表できるように纏めなければならない。

なので彼女は今、大学の図書室で卒論のテーマを決めるべく様々な本に目を通していたのだが――

「……………はあ」

亜矢の口からは大きな溜め息が零れる。視線は専門書に向いているが、ページは表紙を捲つたところから一枚も動いていない。

彼女が今気にしているのは、1人で全てを背負い込んでいる仁の事だった。先日のバットファッジとの戦いで、仁はファッジと警察、双方から敵視された。

彼自身はその事を気にした様子を見せない。本当に気にしていないのか、それとも実は気にしているが表に出していないだけなのかは分からないが、とにかく彼は弱つた様子を見せなかった。

亜矢にはそれが逆に辛かった。これで仁が少しでも減入った様子を見せてくれれば動きようもあるのだが、彼自身はあつけらかんとしてるのでヘタに動きようが無かった。流石に堪えた様子を見せない相手にお節介が焼ける程、亜矢は自惚れていないし無遠慮でもない。

「門守君……」

亜矢は再び溜め息を吐きながら仁の名前を口に出す。肝心の彼は今、既にテーマを決め研究室で資料集めから始めている所だ。思い出すだけでも、彼がいつもと変わらぬ様子であると思える。

しかし、亜矢の中の何かが囁いていた。仁は無理をしている。いや無理と言うのとは少し違うが、それでも何も感じていない訳ではない。ファッジと警察、双方から敵意を向けられた事は少ないながらも拭えない負担となつて彼の心に蓄積している。今は大丈夫でも、これが続けばきつと何か支障が出る筈だ。

出来る事なら何とかしたいところだが、その方法が思い当たらなかつた。亜矢は再び溜め息を吐く。

「はあ………駄目だな、私……」

思わずネガティブな言葉が亜矢の口から転がり出た。

その直後、背後から亜矢に声を掛ける者が居た。

「あーやー！」

「ひゃっ!？」

突然両肩を叩かれながら声を掛けられたので、亜矢は驚愕のあまり思わずその場で跳びあがり悲鳴を上げてしまった。静かな図書室の中だ。彼女の悲鳴は大きく響き、周囲の学生達の視線を集めてしまった。

彼らに迷惑を掛けてしまったと、亜矢は周りの学生達に申し訳なさそうに頭を下げ、そして背後を振り返り下手人を見た。

「へへ、やほっー！」

そこに居たのは、亜矢と同年代の女性だった。亜矢に比べると大分肌の露出が多く、長い黒髪を肩より少し下の所で一纏めにし左肩から体の前の方に流している。

見知った顔が居た事に、亜矢は呆れと非難が半々になった溜め息を吐いた。

「何だ、篠崎さんですか。驚かさないうでくださいよ。ここ図書室ですよ？」

この女性の名前は篠崎しのぎ 美香みか、亜矢の女友達の1人だ。

「いやあ、何だか亜矢が珍しく1人で居る上に辛気臭い顔してるから、一体どうしたのかなあって思っつて」

美香に言われて亜矢は言葉に詰まる。辛気臭い顔と言われて、反論できなかつたのだ。今の自分がそう言われるだけの顔をしていただろうと言う自覚はあつた。だから

そう言われると何も言えなくなってしまう。

「……私だつて、そう言う時くらいありますよ」

言いながらも、亜矢は今まで気付かないようにしていた寂しさを再認識して再び表情に影を落としていた。

そうだ、ここ最近は何と共に居る事が多かった。それは仮面ライダーである仁を支えるには彼の傍に居る方が都合がいいから……と言うのは理由の半分ではない。

もう半分は、純粹に彼の傍に居るのが心地良いからだ。彼の傍に居ると、心の底から安心できる。それは以前貞助が変異したウルフファッジに言い放った、仁が亜矢の事を特別扱いしないからと言うのが主な理由だ。仁の傍では、亜矢は肩肘張らず素のままに居る事が許される。

しかし、今は――

「なくんで亜矢がそんな辛気臭い顔してるか当ててあげようか？」

「え？」

「ズバリ！ 恋の悩みだね？」

「んなつ!？」

突拍子もない事を言われて、亜矢の顔が一気に上気した。

「ち、違います!？」

「ちよつ!? 亜矢、ここ図書室……」

「あ……」

思わず大声を出してしまったが、美香に言われてまた注目を集めてしまった事に今度は別の理由で顔を赤くして頭を下げる。

ちよつとここでは満足に話も出来ないと考え、亜矢は本を片付け美香と共に図書室を出た。そして大学敷地内にある自販機で適当に飲み物を買って話を再開した。

「それで? 実際の所どうしたのさ?」

「どうって……」

問い掛けられて、亜矢は言葉に詰まってしまった。まさか正直に話す訳にもいくまい。仁が仮面ライダーとして戦っていて、怪人と警察双方から敵視されているのを甘んじて受け入れている負担を少しでも軽減したいなどと。

しかしこのままだんまりを決め込んで、美香からの気遣いを無碍にするのも気が引けた。なので亜矢は、当たり障りのない言い方でお茶を濁す事にした。

「ただ……友達が少し悩んでるみたいだから元氣付けてあげたいけど、どう元氣付けてあげればいいのかで悩んでただけです」

あながち間違いいではないだろう。仁は紛う事なき友達……そう友達だ。その彼が、1人で何でも溜め込んでいるのを黙っていられないから何とかしたいと思っていたのだ

から。

そんな気持ちでありきたりな感じに答えると、美香の口から思いもよらない言葉が返ってきた。

「それって門守君の事？」

「ブツ!？」

美香からの答えが返ってくる直前、コーヒを口に運んでいた亜矢は美香の口から仁の名前が出た事に動揺して気管に入ったコーヒを嘔き出してしまった。

「げほっ!? げほっ!? げほっ!? ほっ!?」

「あくあく、ちよつと亜矢大丈夫？」

「ちよ、ま、なん!? 私、門守君、一言も——!？」

ただ友達としか言っていないなかったにもかかわらず、ピンポイントで仁であると言いつてられ亜矢は焦った。

「だって亜矢がそこまで親身になるのなんて、門守君以外考えられないんだもん」

「だから何で!？」

「何でもなにも、門守君と居る時の亜矢って他の人と居る時より楽しそうじゃない。これで亜矢が門守君に親身にならないなんて考えないのは無理でしょ」

亜矢は顔を真っ赤にして俯き、片手で両目を覆った。

そんな亜矢に、美香は楽しそうな笑みを浮かべて話し掛ける。

「それでそれで？ 2人って付き合ってるの？」

「そ、そんなんじゃないやありませんよ。ただの友達……そう友達です」

飽く迄も仁とは友達であると言うスタンスを崩さない、頑固な亜矢に美香は仕方がないとしても言いたげに溜め息を吐いた。これ以上この事を突いても進展は無さそうだという事で、彼女は話しを進める。

「ま、そう言う事にしといてあげるわ。それで？ 門守君が悩んでるから元氣付けてあ

げたいんだって？」

「そ……………はあ。はい、そうです」

もうこれ以上仁が無関係であると否定する事にも疲れたので、とりあえず亜矢が意識している相手が仁であるという事は認める事にした。こうでもしないと話が進まない。

「ふくん、あの門守君がねえ……彼でも悩む事ってあるんだ」

「多分、ですけどね。何分表に殆ど何も出さない人ですから」

「でも門守君が無理をしているのは分かるんだよね？ よく見てるじゃん。あの門守君の事を理解してる人なんて、亜矢くらいだと思うよ？」

そう言われると亜矢としても悪い気はしない。彼の両親を除いて彼の事を誰よりも理解しているのが自分であると言う評価に、亜矢は何故だか胸に誇らしさを感じずには

いられなかった。

自分でも気がかぬ内に笑みを浮かべる亜矢に、美香は苦笑しつつ続けた。

「まあ、何かに悩んでるのを元気付けたいって言うんなら簡単な方法あるわよ」

「え？ 本当ですか!？」

美香の言葉に、亜矢は藁にも縋る思いで教えを請いた。亜矢自身社交的な性格なので、他人を元気付ける方法もある程度は分かっているが、仁の様に悩みや苦しみを胸の内にしまい込んで表に出さないタイプに関してはどうすればいいか分からなかった。

必死になって教えを請おうとする亜矢の前に、美香は思わず胸を張った。

「ふふ〜ん！ 当然！ こうすれば、男なんて簡単に元気になるわ！」

「で、その方法とは？」

「それはね……………」

「それは？」

「……………デートよ！」

「……………はい？」

その頃傘木社の特別研究区画では、雄成が研究員から腕輪の様な物を見せられていた。

「お待たせしました、社長。これがベクターカートリッジの能力をより効率的に引き出す新ツール。その名もベクタープレスです」

雄成は受け取ったベクタープレスを色々な角度から眺めた。

印象はゴツイ腕時計と言った感じだろうか。黒くてバンドも幅が広い。時計盤がある部分にはベクターカートリッジを装填する為のソケットが付いている。

繁々とベクタープレスを眺める雄成に、研究員は性能の説明をし始めた。

「これを介してベクターカートリッジを使用する事で、超万能細胞の悪影響を大幅に軽減する事が可能となり、薬物投与や肉体改造をせずとも理性を保ってファッジへと変異する事が可能です」

研究員の説明に雄成は満足そうに頷いた。

「うむ、よくやった」

「ありがとうございます」

「さて……早速これの性能を見たいな。アデニン?」

雄成が後ろに居るアデニンに声を掛けると、彼は前に出て雄成の傍に立った。自分の傍に来た彼に、雄成はベクターブレースとベクターカートリッジを一つ渡す。

「適当な部下にこれを渡し、仮面ライダーと戦わせる。性能を見るんだ」

「はっ」

アデニンは受け取ったベクターブレースとベクターカートリッジを手に、恭しく頭を下げると静かに研究区画から去って行った。

アデニンを見送る雄成と研究員。研究員は先程雄成がアデニンに渡したベクターカートリッジを見て、恐る恐る訊ねた。

「あの、社長?」

「ん?」

「あのベクターカートリッジはまだ試作品ですが、宜しかったのですか? まだ性能が安定しているとは言いきれませんが?」

「だがテストで得られたデータはかなりのものだ。仮面ライダーに挑むのなら、これ位

の方が良いだろう」

そう言つて雄成は何処か楽し気に微笑む。研究員はその微笑みに空恐ろしいものを感じた。

まるで世界の全てをモルモットとしか思っていないかのようなその目。

あの目が自分に向けられる事が無いよう、その研究員は優秀な研究員であり続ける事を心に誓うのであった。

その週の土曜日。亜矢は何時もより着飾つて自宅のマンションの前で仁が来るのを待っていた。

(まさか、あんなにあつさりOKが出るとは……)

あの後、亜矢は美香に言われるままに仁を買い物と言う名のデートに誘つた。美香曰く、気難しい男子でも女子と一緒に出掛けてデートを楽しめば簡単にリフレッシュさせる事が出来るとの事。

半信半疑になりながらも、ダメ元で亜矢は仁を買い物に誘ってみた。
すると――

『あ、あの、門守君!』

『ん? 何、双星さん?』

『その……次の土曜日って、予定空いてます?』

『別に何もないけど?』

『な、なら……私と、その……か、かかか、買い物に……付き合つて、もらえませんか?』
ただ買い物に誘うだけなのに、何でこんなに緊張するんだと自分が情けなくなりながらも何とか言葉を紡いだ亜矢。

それに対して仁は、少しだけ悩んだ素振りを見せた。

『ん……』

『だ、駄目ですか?』

『ん? ううん、いいよ。次の土曜日だね? 迎えに行くから待つてよ』

『は、はい!』

結果、仁は快く亜矢の提案を受け入れてくれ、こうして今日を迎える事が出来たと言
う訳である。

「すう……はあ……」

今日の亜矢は気合の入り方が違った。土曜日だと言うのに何時もより早くに起き、手短かに朝食を済ませると身支度を整えるのに普段の倍以上の時間を掛けていた。

仁があまり服装とか見た目を気にしない性質だと言うのは分かっているつもりだが、だからと言って適当に済ませるなど亜矢には出来なかつたのである。

マンシヨンの前で待ちながら、亜矢は腕時計に目をやる。今の時間は9時ちょうど。待ち合わせは9時半なので、まだ30分時間が余っている事になる。

幾ら何でも流石に早すぎたか………と思っていると、聞き覚えのある特徴的なエンジン音が聞こえてきた。

まさかと思つて音の聞こえる方を見ると、そこには今正に彼女に近付いてくる車体色を変えたトランスポゾンが仁を乗せて走つて来ていた。

「ゴメン、遅くなつた」

「い、いえ!? まだ約束の時間30分前ですし、私も今来たところですから!」

寧ろ互いに早すぎる位だ。亜矢が早めに家を出ていなかったら、仁が待ちぼうけを喰らつていた。その可能性を考えると、亜矢は自分が早めにここに来ていて良かったと思つた。ちよつとでも遅かつたら逆に彼を待たせていた。

それと同時に、亜矢は嬉しくも思つていた。こうして仁も待ち合わせ時間よりも早くに来てくれた。それはつまり、彼も今日のデートにそれなりに気合を入れてくれたとい

う事だからだ。

デート……そう、デートだ。美香からのアドバイスで、今日は仁をデートに誘ったのである。それを思うと亜矢の顔に熱が溜まり赤くなるのを抑えられない。

亜矢にとって異性を買う物に誘うのはこれが初めての事だったので、今までにない位緊張していた。明星大学の入試の合格発表の時以上に緊張しているかもしれない。

「それで、面白い物って話だけど何処に行くの？ 双星さんが買いたい物って？」

「あ、えと、そろそろ気温も高くなってきたので、新しい服を買っておこうかと」

「んじや、シヨツピングモールで良い？」

「はい。お願いします」

仁に予備ヘルメットを渡され、トランスポゾンの後ろのシートに座り仁に抱き着く亜矢。仁にしがみつきバイクに揺られている状況に、亜矢の顔が思わず綻びそうになる。

「——って!! 今日私が楽しむ為じゃなく、門守君を元氣付ける為に息抜きに連れて行くんだってば!!」

危うく本来の目的を見失いそうになった。今日仁を買う物に連れ出したのは、彼を元氣付ける為だ。ただでさえストレスが溜まるだろう戦闘をしているのに、この上更に本来は味方と言っても良い筈の警察にまで敵意を向けられた彼を少しでも労う為に連れ出したのである。

それを忘れてはいけない。

とは言え、それでもやる事はデートだ。仁とのデート……その言葉を思い浮かべるだけでまた頬が緩んでしまう。

(ま、ちよつとくらいは良いですよね?)

暫し悶々としていたが、変に気張ると仁に気を遣われたりしてしまうと考え、思い切って開き直り亜矢は自身も楽しむことにした。こう言うのは自分も楽しんだ方が相手にも楽しんでもらえるというもの。

そう自身に言い聞かせ、亜矢は仁の腰に回した腕に力を込めるのだった。

明星大学周辺は、学園都市と言う程ではないがそれでも学生向けに様々な施設が充実していた。

成人した学生向けの飲み屋街は勿論、ゲームセンターや近隣のマンションやアパートに暮らす学生の為にスーパーなどもあり、実家を離れて学業に勤しむ学生が少しでも快

適に過ごせるようになっていた。

その中でも学生に人気なのはこのショッピングモールだ。明星大学に通う学生達の間では、『休日の過ごし方に迷ったらここに来ておけ』と言われるほどの規模を誇っていた。

内部には日用品は勿論、衣服やゲームなどの娯楽用品、果ては飲食店やボーリング場などもある。

休日になれば内部は多くの学生で賑わうそのショッピングモールに、仁と亜矢の2人はやって来ていた。

2人はとりあえず、亜矢が服を買いたいという事で真っ直ぐ衣類を取り扱う階に向かった。

最初の目的の場所に辿り着き、一応服を買いたいと言うのも本当ではあったので亜矢は割と真剣に衣服を選んでいった。

「ん〜〜……」

「双星さん、どんな服を買おうと思ってるの？」

どれを買おうかと悩む亜矢に、仁が後ろから声を掛ける。彼自身は特に新しい服を必要としていなかったたので暇していたので、折角だからという事で亜矢の服選びを手伝おうというのだ。

問い掛けられ、亜矢は両手にそれぞれ別の服を持ちながら答えた。

「私、あまり露出のある服は好きじゃないので、出来るだけ素肌が隠れる服を買おうと思ってるんですけど、どれがいいかなって」

「これから先暑くなるの？」

「通気性が良ければその点は問題ありません。砂漠に住む人達が肌を出さない恰好で暮らしているのを、知らない門守君ではないでしょう？」

「あそこは湿度が低いからあんな恰好が出来るんだよ」

「知ってます。だから言ったじゃないですか、通気性が良ければって」

普段知識を補足するのは仁の方なのに、ここぞとばかりに仁の考えの至らなかつたところを突く亜矢。指摘された仁は、一本取られたとでも言いたげに肩を竦めてみせた。その表情は、気の所為でなければ先程よりも柔らかさを増しているように見える。

「どうやら彼なりに少しは楽しんでくれてるようだ。その事に亜矢は少しうれしくなる。」

「そう言えば、と亜矢は仁の恰好をまじまじと見た。」

仁は基本的に服装には無頓着だ。いや、拘りが無いと言った方が良いか？

彼の服装は基本的にパーカーとジーンズであり、どの季節でもこの格好をしている。

何故パーカーとジーンズばかりなのかと訊ねたら、これが一番楽だし今更他の服を選ぶ

のは面倒臭いとの事。

勿論、一年中同じ服を着続けている訳では無く、日毎週毎に服は違っている。だがそれも、色や柄が違う程度で結局はパーカーとジーンズである点に変わりはない。

種類もそんなに多くは無いので、彼の着る服は大体どれも繰り返された洗濯の影響でどうしてもくたびれたものが多い。

ところが今よく見て見ると、彼が着ているのはやっぱりいつもと同じパーカーにジーンズなのだが何時もに比べて小綺麗な気がした。

「亜矢がまじまじと見ていると、彼女の視線が気になり仁が首を傾げた。

「どうかした？　なんか変なところある？」

「あ、いえ。ただなんか何時もに比べて、綺麗な服着てるなあつて……」

「そりゃ双星さんと一緒に買い物に行くつてんだから、それなりにしっかりした服を選ぶのは当然じゃん？」

真顔で紡がれた仁の答えが、亜矢は嬉しくて仕方なかった。仁の言葉をそのまま意識すればそれはつまり、彼も亜矢との買い物をそれなりに特別なものとして捉えてくれているという事に他ならない。そうでなければ彼は何時ものくたびれたパーカーとジーンズで来ていた。

今回のデートの目的は仁の苦労を労う為だと言うのに、何だかそんな事がどうでも良

なくなってきたしまった。

「~~~~ツ！ あ！ か、門守君はこつちとこつち、どつちが私に似合うと思えますか
!？」

これではいかんと、亜矢は強制的に話題を変えた。話題の変え方が強引だという事には仁も気付いていたが、彼は特に気にすることなく亜矢が見せてきた二つのロングスカートを見比べた。赤と青、どちらも彼女に似合いそうな色だ。

仁はロングスカートをそれぞれ手に取り、亜矢と重ねてどちらが似合うかを見比べる。どちらの色のスカートも彼女によく似合っているが——
「……双星さんならこつちかな？」

仁が選んだのは赤い方のロングスカートだった。明るい赤ではなく、どこかシックな赤。確かに亜矢に似合っている。

だが、仁は赤を選んだ上でもう一つ別のスカートを亜矢に渡した。

「でも、俺はどつちかって言うところこつちも捨てがたいと思う」

「白、ですか？」

仁が亜矢に渡したのは白のロングスカート。それを渡されて亜矢はキョトンとした顔になる。

「うん。多分だけど、双星さんには白がよく似合うと思う」

「そ、そうですね？ それじゃあ、これ……」

「でも赤も似合うと思うから、両方買っちゃったら？」

「でもお金……」

まだ学生の身分で、しかも一人暮らしをしている身だ。生活費は実家からの仕送りに頼っている現状、無駄遣いは出来ない。スカートだけでなく上着なんかも買わなければならないのだから、買うスカートはどちらか一つにしなければならぬ。

そう思っていると、仁が自分が選んだ白い方のスカートを亜矢から受け取り、そのままレジに持っていくいき彼の金で会計を済ませてしまった。

その光景に亜矢は慌てて自分の財布を引っ張り出した。

「ちよ、門守君!? そんな悪いですって、私の買い物なのに!？」

「いいからいいから。お礼だとも思ってますよ」

「お礼?..」

何の事だと首を傾げていると、仁は薄く笑みを浮かべて亜矢を見た。

「俺を元氣付けようとしてくれたんでしょ？」

「ツ!? 氣付いてたんですか？」

「何となくくね。この間から何か気になってくれてたみたいだし、もしかしたらって思ってます」

仁の言葉に亜矢は、あちやあと額に手を当てた。まさか気付かれていたとは。彼の洞察力を甘く見ていた。

それとなく気付かれないように仁にガス抜きさせようとしていたのに、気付かれていては本末転倒だ。

そう思っていると、仁が白いロングスカートの入った紙袋を亜矢に差し出しながら言った。

「ありがとう。自分で思ってた以上に疲れてたみたい。何となくだけど、心が軽くなった気がする」

「あ……」

失敗かと思ったが、どっこい成功だった。亜矢とのこの時間は、仁の気を少しだろうが晴らして見せたのだ。彼の負担を少しでも和らげる事が出来て、亜矢の気持ちも楽になった。

「その、これ、もう履いてみて良いですか？」

「どうぞで」

折角だからと、亜矢は試着室に入りスカートを取り換えた。上はそのままだが、水色のシャツに群青色の上着を羽織っていたので色のバランスは悪くなかった。

着替え終わると、早速仁に見せた。

「に、似合います?」

少し照れながら訊ねると、仁はどこか満足そうに頷いた。

「うん。やっぱり似合ってた」

「あ、ありがとうございます!」

仁に褒められ、彼の満足そうな顔に亜矢は胸の内が温かくなるのを感じずにはいられない。

(これって……私、やっぱり……)

亜矢が仁に対する気持ちに気付きそうになった。

その時、2人にもあまりにも場違いな恰好をした男が近付いてきた。独特なボディアーマーに身を包んだ、髪を刈り上げた厳つい男性だ。

男性は亜矢と仁を交互に見て、仁を睨み付ける。

男性の無遠慮な振る舞いに、亜矢は嫌なものを感じて仁の傍に避難した。

「な、何ですか、貴方?」

亜矢が恐る恐る訊ねると、仁が彼女を自分の後ろに引っ張った。彼は気付いたのだ。この男の服装が、以前戦ったアントファッジだった男達の物と同じである事を。

「双星さん。合図したらここから離れて」

「え?」

突然の指示に困惑する亜矢だったが、彼女の疑問に答えている暇はなかった。

男性——傘木社から派遣された傘木保安警察の一員である、梅田うめだ敏則としのりは、左腕にベクターブレスを装着しそこにベクターカートリッジを装填した。

〈WASP〉

「さて、相手をしてもらうぞ。仮面ライダー！」

〈CONTAMINATION〉

敏則がベクターブレスにベクターカートリッジを装填すると、彼の体がファッジに変異する。

だがそのファッジは、今までの奴に比べると姿が少し異なっていた。今までのファッジはベクターカートリッジ内の超万能細胞のDNAにインプリントされた生物がそのまます人型になったような姿だったのに対し、目の前に居るファッジはどこか仮面ライダーに似通った部位をいくつか持っていた。少なくとも人間と生物のキメラらしさは以前に比べると大分薄れた。

それでもまだ異形としか言いようのない見た目だが。

「え、何あれ？」

「ちよつと!? まさか噂の怪物じゃない？」

当然だがショッピングモール内には仁と亜矢の他にも買い物をしている客が多数居

る。そんな中でファツジに変異すれば、多くの一般人に見られるのは当然の事だ。

次第に周囲に騒ぎが広がりつつある中、目の前のファツジ——ワスプファツジは、右手首の孔から隠し武器のように鋭い針を伸ばした。

それを見た瞬間、亜矢は周囲に逃げるよう叫んだ。

「いけない！ 皆さん早く逃げてッ!」

亜矢が周囲に警告するのと、ワスプファツジが右手首から何本も針を飛ばし周囲を破壊し始めるのは同時であった。突然の破壊行動に、周囲は一気にパニックになる。

慌てて逃げる買い物客や店員たちを尻目に、仁はデйнаドライバーを装着してベクターカートリッジを装填した。

〈BUFFALO〉

〈HUMAN〉

「あんたらせめてもうちょっとTPOを弁えてくれない?」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「変身!」

〈Open the door〉

仁はデйна・バッファローヒューマンフォームになると、拳を握りワスプファツジに殴り掛かった。

「はっ」

屋内での戦闘で、しかもトランスポゾンには外なので殴る蹴るしか戦闘方法がない。だが場所を考えれば、この方が良かったと言える。こんな色んな物がある場所で、大型武器であるハイブリッドアームズは使い辛い。

デイナの正拳突きがワस्पファッジに襲い掛かる。放たれた拳を、ワस्पファッジは巧みに防ぎ捌いてみせた。

これだけで分かる。今度の奴は今までの奴とは違う。今までデイナが戦ってきたのは、スパイダーファッジと能力に劣るアントファッジを除いて全て戦いのイロハも知らないド素人ばかりだった。だがこいつはしっかりとした訓練を受けている。そんな奴がアントファッジとは違う、能力の高いワस्पベクターカートリッジを使ったのだからそりゃ強くて当たり前だ。

しかしデイナとて負けてはいない。ワस्पファッジが反撃にと放ってきた拳や手刀を、彼も巧みな技で以って防ぎ切った。

格闘の技術においてはほぼ互角。となると後は、互いにどれだけ使っている能力を活かせるかだ。

ワस्पファッジと戦うデイナの様子を、亜矢が少し離れた所からジッと見ている前でデイナはベクターカートリッジを取り換えた。

〈HAWK + LEON Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

デイナはベクターカートリッジを取り換えてホークレオンフォームにゲノムチェンジした。飛び道具を持つてる敵に対して、このフォームならインペリアルウイングを盾代わりに防御することが出来る。

ゲノムチェンジが完了する僅かな間に、ワस्पファツジは低空飛行でデイナの傍を離れると、その道すがら右腕から無数の針を発射した。

それを読んでいたデイナは、特に慌てる事なく広げたインペリアルウイングで自身を包んで防御した。

するとそれを見たワस्पファツジから、予想だにしていなかった攻撃が飛んできた。

何と背中から四匹の大きなスズメバチを飛ばしてきたのだ。一匹一匹が成人男性の握り拳も軽く超える程の大きさ。持っている針も針と言うより最早釘だ。あんなもので刺されたりしたらと思うとゾツとする。持っている毒も強力だろう。一発でも喰らってはいけないタイプの攻撃だ。

「行けッ！」

「くっ」

スズメバチ達はワスプファアツジが自在に操れるのか、デイナの間を突くように動いて終始動き回る大型スズメバチ達。

四方八方から飛んでくるそれをデイナは拳と手刀、そしてインペリアルウィングを用いて何とか全て捌いていく。ワスプファアツジには攻撃できなくなるが、デイナの方も致命的な一撃は今のところ回避に成功している。

このまま上手い事ワスプファアツジの攻撃を捌き続け、隙を突いて反撃に出ようと画策するデイナだったがワスプファアツジは予想外の行動に出た。

なんとワスプファアツジは、4匹のスズメバチを離れた所から戦いを見ていた亜矢に差し向けたのだ。

自分に向かってくる何処か無機的なスズメバチの姿に、亜矢は思わず固まってしま
う。

「双星さん!?!」

デイナの声が響く中、スズメバチ達は腹部の針を伸ばし一斉に亜矢に向けて急降下し
ていき――

「うぐ、ぐああああああつ?!」

「門守君ツ!?!」

亜矢に針が突き立てられる寸前で、間に割り込めたデイナがその針を一身に受けた。

彼の体の合計4か所に、ファッジにより生み出されたスズメバチの毒針が突き刺さり猛毒を注入される。

その毒の威力は凄まじいようで、デイナは絶叫を上げると変身が維持できなくなり元の姿に戻ってしまった。

「フン、他愛ないな」

それを見届けると、ワस्पファッジは鼻を鳴らしその場を立ち去っていった。後に残されたのは、戦闘の余波により破壊されたショッピングモールの店内。

そして、倒れて気を失っている颯人に必死に声を掛ける亜矢だけであった。

「門守君ッ!? 門守君しっかりしてくださいッ!」

「仁君ッ!!」

亜矢の悲痛さすら感じさせる声が響く中、仁は全身から脂汗を流して自身を苛む毒素に苦しんでいた。

第10話：決意の選択

ワスプファッジの操るスズメバチに刺された仁は、騒動を聞きつけて駆けつけた救急隊員により病院に運ばれた。

救急搬送された仁は治療を施されるが、物はファッジによる毒だ。通常の医学では治療することが出来ず、手の施しようがなかった。

現在のはせめてもの対処として、ベッドに寝かされ呼吸器に繋がれていた。

その仁が寝ているベッドの傍の椅子に、亜矢が沈んだ様子で座っていた。

(私の………私の所為だ)

亜矢は自分を責めていた。あの時、心配だからと少し離れた程度のもので見守ったりせず、仁に任せてあの場を離れていれば彼が隙を晒す事は無かったかもしれない。こんな事にはならず、仮に苦戦したとしてもワスプファッジに勝っていた筈だ。

結果的に無力な自分が仁の足を引っ張り、彼を危険に晒してしまった。しかもこれで二度目だ。一度目は最初にスパイダーファッジが襲い掛かってきた時。あの時も仁は、亜矢を庇って死に掛けた。

椅子に座りながら、亜矢は顔を両手で覆って涙を流した。自分の無力さを悔いてい

た。何が仁の負担を少しでも和らげたいだ。和らげるどころか彼を窮地に追いやって
いるではないか。一体自分は何をやっているんだ。

亜矢の心は己を責める言葉で埋め尽くされていた。

「双星君！」

「……教授？」

罪悪感に亜矢が苛まれていると、連絡を受けた白上教授が病室に飛び込んできた。相
当急いでいたのか、教授は少し息を切らせている。

「門守君がフアツジの毒で倒れたと聞いた。何があつたのか聞いてもいいかね？」

「はい……」

亜矢は重い口を開いて、先程のシヨツピングモールでの戦いの顛末を白上教授に話し
た。

全てを聞き終え、仁の身に何があつたのかを知った白上教授は事の重大さに口に手を
当てて深刻そうな顔をした。

「そうか……いやしかしこれはマズい事になつたな。恐らくだがこのままでは門守君の
身が持たない」

「そんな——!?!」

教授の口から出た残酷な言葉。悲鳴に近い声を上げる亜矢に、教授は努めて冷静に続

けた。

「この毒は通常のスズメバチの毒など比べ物にならない程複雑な構成をしている。恐らくこのまま放っておけば今以上に症状が悪化して、そのまま死に至るだろう。何とかして解毒剤を作りたいところだが……」

「何とかならないんですか?」

「今すぐは無理だ。解毒剤作製には毒のサンプルか、若しくはこの毒を使用するファツジのベクターカートリッジが必要になる」

どちらも絶望的な要求だ。仁の体から毒を抜き取る訳にもいかないし、仁がこの有様ではファツジを倒してベクターカートリッジを回収することも出来ない。

「何とか……何とかならないんですか?」

「……………厳しいと言わざるを得ない。が、彼を巻き込んだのは私だ。何もせずにいるのは義理に反する。出来るだけの事はやってみよう」

そう言うとう白上教授は病室を出て何処かへと行ってしまった。後には再び、仁と亜矢だけが残される。

ふと亜矢が仁を見ると、彼が酷く汗をかいているのが目に入った。亜矢は急いで洗面器に水を張り、タオルを濡らして絞るとそれで彼の額や首筋の汗を拭いた。

その際に彼の肌に触れたが、信じられないくらい熱い。呼吸は荒く、彼が苦しんでい

るのが嫌でも分かる。

堪らず亜矢は仁の手を握った。意味などないと分かってはいるが、それで少しでも彼の苦しみが自分に流れてくれればと願って。

「門守君……ごめんなさい——!?!」

2人だけの病室で、亜矢は仁の手を握り彼の回復を願いながら、もう一つある事を願っていた。

力が欲しい……………と。

一方傘木社では、見事にデイナを倒してみせた敏則がアデニンからの称賛を受けていた。

「よくやった。新型のツールとベクターカートリッジを用いての仮面ライダー討伐、見事だったぞ」

「お褒めに預かり光栄です」

雄成直属の幹部であるアデニンからの称賛を受け、敏則は誇らしげに頭を下げた。

実際、これは彼ら傘木保安警察にとつても大きな快挙であった。これまで傘木社が誇るファッジをたった一人で倒してきた仮面ライダーを、見事に打ち倒してみせたのだ。それも、スパイダーファッジの時のようにまだ再起が可能な状態ではない。猛毒を撃ち込んでどう足掻いても再起できないだろう状態にしてみせた。解毒が不可能な以上、仁はこのままじわじわと毒に侵され静かに死んでいくだろう。

今まで煮え湯を飲まされてきた相手が消えるかと思うと、爽快感を感じずにはいられない。

もつとも現状をあまり面白く思っていない者も居る。チミンだ。彼女はこれまでに数度仮面ライダーと相对する機会に恵まれたが、彼女では仮面ライダーを完全に戦闘不能にすることは叶わなかった。精々が一度一時的に倒した程度である。

幹部である自分が、部下の敏則に後れを取ったと面白く思わないのはある意味当然であった。

そこに、雄成が手を叩きながらやって来た。

「良い働きだった。私も雇い主としてとても嬉しい」

「ありがとうございます」

「今回の戦闘でベクタープレスも良いデータが集まった。他の研究員たちも喜んでい

る」

現在特別研究区画では、今回の戦闘で得られたデータを基に更なる改良型の開発が行われている。新型が完成するのも時間の問題だろう。

しかし現状で彼らにはもう一つ懸念事項があった。白上教授だ。彼らの認識では仮面ライダーは白上教授の尖兵に過ぎず、仮に仁を始末したとしても教授が健在である限り第二、第三の仮面ライダーが生まれるのではと言う懸念があった。

「さて、見事に仮面ライダーを打ち倒してみせたはいいが、しかし白上の奴はまだ元気だ。この状況、奴も手を拱いているなどと言う事は無いだろう」

「確かに、何らかの対策を練る可能性が高いですね。もしかすると、既に次の仮面ライダーを用意しているかも？」

「プロフェッサー！ それならば私にお任せください！ 仮面ライダーが死に掛けている今、白上 源五郎を始末する絶好の好機！」

雄成の口から教授が健在である事が話題に上がると、チミンが飛びつく様に教授討伐に名乗りを上げた。ここで見事な働きをして見せ、幹部としての地位を盤石にしようと言うのだ。

ただでさえ最近はあまり活躍がパツとしておらず、彼女の中で己の幹部としての地位が揺らぎつつある。そろそろポイントを稼いでおかなければと、焦っているのだ。

チミンからの進言に、雄成は考え込む素振りを見せると一つ頷き彼女の進言を受け入れた。

「ふむ、そうだな。この機に白上を始末しておくか」

「では「だが……」ッ!？」

喜び勇んで出撃しようとするチミンだったが、雄成はそれに待ったを掛けた。

「出撃するのは敏則、君だ。もう一度ベクタープレスとワスプベクターカートリッジを用いて白上の所へ赴き、そして奴を始末しろ」

「はっ。しかしベクタープレスは現在データ収集に回しており、整備の事も考えるところに移れるのは明日になってしまいますが?」

「構わん。たった一日で何が出来ると言うのかね。獲物は逃げやしないんだ。明日までじっくり待てばいい」

「分かりました。では、これにて」

敏則はそう言つて静かにその場を立ち去っていった。

後に残されたのは雄成と幹部4人。

チミンは早速優勢に抗議した。

「何故ですかプロフェッサー!? 私にお任せ下されば、あんな老いぼれ直ぐに始末してみせます!」

「折角だからもう少し詳しくデータを取ろうと思ったのだよ。今後はベクタープレスも基本装備になりそうだからな」

「ですがデータ取り程度なら、別に白上討伐でなくともS・B・C・Tを相手にするだけで十分な筈です！」

「おいおいチミン。捨てられるかもしれないからって焦るなよ」

必死に抗議するチミンに、シトシンの煽りが炸裂する。気にしていた事を小馬鹿にされる感じで指摘され、チミンの堪忍袋の緒が切れた。

「シトシン、ちよつと表に出なさい。流星に我慢の限界よ」

〈SPIDER〉

「お、やるか？」

〈FROG〉

互いにベクターカートリッジを起動して睨み合うチミンとシトシン。一触即発の雰囲気、アデニンとグアニンが2人を止めるべきかどうか迷っている――

〈SAMPLEE〉

「「「ツ」」」

!?!?!?

雄成が懐から取り出したベクターカートリッジを取り出し、見せびらかすようにしながら起動させた。それを見て今正にファッジに変異しようとしていた2人のみならず、

アデニンとグアニンの2人も驚愕し顔を青くする。

「何度も言っているだろうに。お前達には金と時間を掛けていているんだ。下らぬ事で互いに争い合ったりするんじゃない」

「も、申し訳ありません!」

チミンとシトシンはベクターカートリッジを仕舞い、土下座する勢いで頭を下げた。アデニンとグアニンの2人は冷や汗を流して直立不動を貫いている。

彼らの様子に満足したのか、雄成はベクターカートリッジを起動状態から待機状態に戻し懐に仕舞った。そこで4人は漸く重圧から解放されたように一息ついた。

「安心しろチミン。何度も言うがお前にも金と時間を掛けている。多少失敗が続いたり活躍がパツとしない程度で捨てる程私も短慮ではないよ」

「ハツ……」

「それとシトシン。あんまり他人を揶揄うものじゃない。お前たち4人は苦楽を共にした仲間じゃないか。もつと仲良くするんだ」

「善処します……」

先程までの荒々しさが嘘のように静まり返る2人。

それを見て雄成は、満足そうに笑みを浮かべるのだった。

翌日、亜矢は仁が入院する病室で目を覚ました。

本来であれば消灯時間を過ぎれば帰らされるのだが、亜矢が無理を言つてこの日は泊めさせてもらった。病院の方も本来は規則で駄目な所を、正体不明の毒で侵され回復の見込みがない仁が相手という事で、せめてもの情け的な感じで特別に許可を出したのだ。夜通し仁のかいた汗を拭い続けた亜矢だが、流石に限界が来たのか途中で眠気に負け仁が寝ているベッドに突つ伏する形で眠りに落ちていた。

「ん……？ 朝……あつ!？」

寝ぼけ眼で病室を見渡し、何故自分が病室に居るのかを思い出した亜矢は弾かれるようにベッドの上で寝ている仁を見た。

そこでは相変わらず苦しそうに汗をかき荒く呼吸しながら眠っている仁の姿があった。

起きて早々、仁の汗を拭く亜矢。だがこれでは何の解決にもならない。汗を拭ったから仁が回復する訳ではないのだ。

そこで亜矢は先日の白上教授の言葉を思い出した。

『この毒を使用するファツジのベクターカートリッジが必要になる』

現状最も現実的なのは、やはり誰かがあのファツジを倒してベクターカートリッジを回収する事だろう。

しかし、誰が？

仁はこんな状態だから絶対無理だし、事情を警察に話して助けてもらおうにも彼らではファツジを倒せない。

どうするべきか………そこまで考えた所で、亜矢は思い出した。

デйнаドライバーはもう一つある。

「ツ………うん。よし」

亜矢は決意した。自分が仁を救うのだと。自分も仮面ライダーに変身し、ワस्पファツジを倒してベクターカートリッジを回収して仁を助けるのだ。

病院を後にした亜矢は、そのまま真っ直ぐ大学のラボへと向かっていった。昨日の今日で日曜日なので、大学構内には基本誰も居ない。居るとすれば研究中の院生位だろう。

白上研究室もその例に漏れず、表の研究室には誰も居ない。それを見越して亜矢は裏口である自販機の入り口からラボへと入った。長い通路を抜け、扉を開けてラボへと入

る。

「やっぱり来ちゃいましたか」

扉を開けるなり、室内に居た人物から声を掛けられる。まさか入って早々に話し掛けられるとは思ってもみなかったので、亜矢はびっくりして声のした方を見る。

するとそこには、デйнаドライバーを繋いだ機械の傍の椅子に座っている峰の姿があった。

「み、宮野先輩？」

「双星さんって、変に頑固と言うか行動力ありそうな感じだったんでまさかと思つてましたけど、本当に来ちゃうとは思つてなかつたですよ。目的はこの予備のデйнаドライバーですね？」

何処か試すように問い掛けられ、一瞬躊躇する亜矢だったがすぐに気を取り直して答えを口にした。

「はい。門守君を助ける為に、どうしてもそれが必要なんです。もしまだ持ち主が決まっていないうら、私にやらせてください！」

「……………はあ」

亜矢の言葉に峰は大きく溜め息を吐く。そして彼女は亜矢の言葉に答える事無く椅子から立ち上がると――

白衣の袖から警棒を取り出して先端を亜矢に向けた。

「——え?」

「特に教授に言われた訳ではありませんけどね。欲しければ力尽くで手に入れてください。私も全力でそれを阻止しますので」

「な、何で!?!」

「当たり前でしょう? 半端な人に渡しても、門守君の二の舞にしかありません。私程度も乗り越えられないようじゃ、仮面ライダーになっただとしても無駄にしかありませんよ?」

言いながら峰はじりじりと亜矢に近付いてきた。向けられる気迫は本物だ。冷や汗が出てくる。

だがここで引く訳にはいかない。何が何でも仮面ライダーになって、ワスプファッジを倒さなければ。

誰もやらないのならば、自分がそれをやってみせる。

「分かりました……行きまっすッ!」

亜矢は覚悟を決めると、よく見ている仁の動きを真似て拳を握り峰に殴り掛かる。見様見真似の攻撃だったが、思っていたほどへろへろではない。少なくともハッターが利く程度には動いていた。

「遅……」

しかし亜矢の渾身の攻撃は、峰にあっさりと破られた。警棒を持っていない方の手であっさり掴まれると、振り回された挙句デイナドライバーからは離れた何も無い所に向けて放り投げられる。

「あうっ?!」

「駄目ですね。駄目駄目です。動きが完全にド素人の付け焼刃丸出しです。こんなじゃ変身しても高が知れてるってもんです」

「くっ?!」

言いたい放題にされ、流石の亜矢もカチンときたのか直ぐに立ち上がると再び峰に接近した。

峰に亜矢の手が伸びる。それを峰は警棒で叩き落とし、更にそこから怒涛の連続攻撃が亜矢に襲い掛かった。

「シッ!」

「う、っ?!」

警棒の柄頭で近くに寄ってきた亜矢の右のこめかみを打ち据え、彼女がたたらを踏んだと同時に警棒を振るった。胸元、下腹部、脇腹に素早く連続で警棒だ叩き込まれ、走る激痛に亜矢が動きを止めた。

「あ!?　ぐっ、うっ!?」

「そこで動き止めない」

そこに追い打ちで反対の脇腹にも警棒が振るわれ、駄目押しに蹴り飛ばされる。タイトスカートから伸びる峰の脚が、亜矢を押し出すように蹴り飛ばし彼女の体がデスクに叩き付けられた。

「ああ、……ぐ……げ……ほっ……!!?　げほ……っ……!!?　……う……っぐう……っ?!」

立て続けに警棒を叩き込まれた拳句腹を蹴り飛ばされ、亜矢は喉にせり上がってくる不快感を抑え込むのに必死だった。

蹲り口を押えて堪える亜矢を、峰が警棒で肩を叩きながら冷たく見下ろす。

「分かりましたか、双星さん?　これがあなたの実力です。私程度も乗り越えられないあなたでは、ファツジを倒すなど夢のまた夢。門守君には可哀想ですが、教授が――

――
峰が亜矢に語り掛けるが、彼女の耳には入っていないかった。

警棒で何度も打ち据えられ、蹴り飛ばされる痛みなど人生初だ。その痛みは想像を絶し、先程の決意が鈍りそうになる。

(痛い……あゝ、痛いなあ。凄く痛い……けど!)

だがそれも仁の苦しむ姿を思い浮かべれば、すぐに気合が戻った。今も仁は地獄の苦痛を味わっている筈だ。こんなところでもたついていてはいる場合ではない。

「負け、ない。私は、絶対に……門守君を、助けるんだ——！」

吐き気を飲み込み、立ち上がって呼吸を整える。警棒で殴られた箇所がまだ痛むが、動くことは出来た。

そして立ち上がった亜矢は、何を思ったかロングスカートの裾に手を掛けた。

仁が似合うと言つて、感謝の印と言つてプレゼントしてくれた白いロングスカート。

「(ごめんなさい!) ……あああああつ!？」

一呼吸おいて覚悟を決めると、亜矢はロングスカートを自分で引き裂き縦に大きくスリットを入れた。それによつて今まで隠されていた亜矢の生の脚が露わとなった。

「はあ、はあ……、すう……はあ……」

「……………んっ？」

何度か大きく息をして呼吸を整え、亜矢は再び構えを取る。

だがそれは、先程までの仁の猿真似が如き空手の構えではなかった。

握った両拳を顔と同じくらいの高さに掲げ、両脇は締め、右足を引いた明らかに空手とは異なる構え。

峰はその構えに見覚えがあった。

(キックボクシング?)

軽くステップを踏むその姿は間違いなくキックボクシングのそれだ。構えには見様見真似からくる素人臭さを感じられず、実に堂に入った構えとなっていた。

峰の頭に幾つもの疑問が浮かんだ。この構えは明らかに先程の空手と違って彼女の体に馴染んでいる。なのに何故先程はこれを使わなかったのか?

そもそも、亜矢に武術の心得があるなど聞いた事が無かった。学園のマドンナとして有名な彼女だ。ジムでキックボクシングを習っているとすれば、直ぐにそれは多くの学生に知れ渡る筈。

疑問を抱きつつ、峰は先程よりも少しだけ本気の構えを取って亜矢と対峙した。今の亜矢は先程とは全く違う。油断してかかると痛い目に遭うと本能が訴えていたのだ。

そしてその訴えは正しかった。

「フッー！」

「ッ!?!」

合図も無しに始まった第二ラウンド。先手を取ったのは亜矢だがその動きを峰は一瞬見逃した。対峙した時は2m位離れていた筈なのに、瞬きした次の瞬間にはもう目の前に亜矢が居た。

視界の端でスリットから覗く亜矢の右足が動くのが見える。それを目にした峰は、直

感で顔面と右側頭部を全力で防御した。

「ハッ！」

「ぐっ!?!」

鋭いハイキックが峰の防御とぶつかる。腰を入れて防いでいる筈なのに、踏ん張りが僅かに利かず後退りを余儀なくされた。

亜矢の攻撃はそれだけでは終わらない。ハイキックが防がれたと見るや、追撃で回し蹴りをお見舞いした。

峰はそれをしゃがむことで回避し、お返しに足払いを掛けようとする。だが亜矢は、普段の様子からは信じられない程の身軽さを以つてその足払いを跳躍で回避し、空中で一回転してからの踵落としを叩き込んできた。割いた事で動きの自由度の上だったスカートが、羽の様に広がり靡く。

そこから伸びる脚が、峰の目にはギロチンの様に見えた。

辛うじて転がる事で回避した峰は、改めて亜矢の姿を見た。割いたスカートの隙間から生足を覗かせながら構えるその姿は、間違いなく亜矢の姿をしているが佇まいはまるで別人だ。

一瞬誰を相手にしているのか分からなくなる。

互いに仕切り直しとばかりに攻撃を止める2人。睨み合いタイミングを見計らった、

2人が動いたのはほぼ同時だった。

「セイツー！」

「ハアツー！」

亜矢と峰の放った蹴りがぶつかり合う。

亜矢はそこから連続で回し蹴りを放ち、峰はそれを紙一重で回避。僅かな隙を見て反撃に警棒を振るうと、亜矢は峰の腕を押さええる事で防御した。

刹那に睨み合う2人だが、直ぐに距離を離し峰の攻撃が亜矢に放たれる。

縦横無尽に振るわれる峰の警棒。亜矢はそれを軽快なステップで躲し、体を逸らして胸元ギリギリを掠める様に避け、回避が間に合わない場合は腕で防御する。

その防御の直後、峰はローリングソバットで亜矢を蹴り飛ばした。最初に亜矢を叩き伏せたあの蹴りだ。

さつきは大ダメージとなって亜矢を一時行動不能にした技。しかし今度はそうはならなかった。

「クッー！」

亜矢は蹴り飛ばされた力を逆に利用して、自分から後方に大きく飛んだ。それこそ壁にまで届くほどに。

その途中で体を捻り壁に両足を着くと、重力が作用して体が床に落ちるよりも前に両

足で壁を蹴り、峰に飛び蹴りを食らわせた。

「嘘っ!？」

「はあああっ!!」

「ぐうツ?!」

まさかの亜矢の動きに一瞬思考が停止した峰に、亜矢の前転を交えた飛び蹴りが炸裂する。何とか防御はする峰だったがその威力は生身であると言うにもかかわらず凄まじく、後ろにあった機械に叩き付けられるほどであった。

「がっは?!」

機械に叩き付けられ肺から空気が飛び出し、峰の意識が一瞬飛ぶ。衝撃で眼鏡が床に落ち、彼女自身も足に力が入らなくなり立てなくなる。

立てない峰に向け、亜矢が驚異的な跳躍力で一気に接近し峰の体を跨ぐように着地した。

その際、落ちた峰の眼鏡が踏み潰された。

「ふっ!」

着地と同時に亜矢の手刀が峰の首筋に添えられる。寸止めだ。もしこれが実戦なら、手刀は容赦無く峰の首を捉え意識を刈り取っていただろう。

「はあ……はあ……」

「ふう……ふう……」

その状態で峰と暫し見つめ合う亜矢。気付けば互いに汗だくになり、亜矢の額から流れた汗が首筋を通って胸元へ消えていく。むき出しになった右足にも汗が浮かんでい

る。
彼女の脳裏は、峰に勝利出来た嬉しさ以上にここまで戦えた事への驚愕の方が大きかった。何故自分がここまで戦えたのか、彼女自身理解できていなかった。

「……はあ、負けちゃいましたねえ」

「あ……」

亜矢が自分の為した事に内心で驚いていると、峰の纏っていた戦いの雰囲気霧散した。彼女に戦う意思が無いのを見て、亜矢も手刀を下げ彼女の上から退く。

立ち上がろうとする峰に、亜矢が手を貸す。

「すみません。大丈夫ですか？」

「ん？ ああ大丈夫ですよ。大して怪我もありませんし」

「でも、眼鏡が……」

「いえいえ、心配ご無用」

立ち上がりながら峰は、懐から眼鏡ケースを取り出し新しい眼鏡を掛けた。

視界がクリアになり、峰は改めてドライバーを繋いでいる機械に近付きドライバーを

外せるようにした。

「しかし、意外でしたよ。双星さんがここまで戦えたなんて」

「正直私もです。自分でも信じられません」

「キックボクシングを習ってたんですか？」

「いえ、私は武道は何も……」

話しながら峰はデイナドライバーを機械から取り出し、亜矢に差し出した。

「さ、これは今から双星さんの物です」

デイナドライバーを受け取り、亜矢は言葉で言い表せない感覚を覚えた。喜び、とはまた違う。恐怖とか、そう言う負の感情でもない。

だが少なくとも気合は入った。これで、何とかしてワスプファツジを倒しベクターカートトリッジを回収するのだ。

そう決意を新たにした時、亜矢は自分で使う文のベクターカートトリッジが無い事に気付いた。仁が使っていた奴は彼の病室だ。

今ここに使える奴があるだろうか？

「あの、先輩。調整の終わっているベクターカートトリッジはありませんか？　と言うかずっと気になっていたんですけど、白上教授はどちらに？」

「教授だったら、門守君の治療法を探して知り合いの生化学者や薬学者を片っ端から当

たってますよ。多分もうすぐ一度帰ってくる頃だと——」

その時、突如として机の上に置かれていた蜂のタブレットがアラームを鳴らした。急いで2人がタブレットに近付き蜂が操作するのを亜矢が横から見ていると、蜂の顔色が青くなる。

「嘘、マジで!?!」

「先輩、どうしたんですか!?!」

明らかに悪いニュースが舞い込んできた事に、亜矢が何事かと訊ねると蜂は顔を青くして答えた。

「昨日のスズメバチのファッジが出ました。場所は大学の直ぐ近く………ここに来る途中の教授が襲われました」

蜂の言葉に亜矢は目を見開き、次の瞬間にはラボを飛び出そうとしていた。だがそれを蜂が引き留める。

「待っててください!?!」

「でも先輩! 急がないと教授がッ!?!」

「ベクターカートリッジも無いのに行ってどうするんですか!?!」

言われて亜矢は言葉に詰まり動きも止まってしまふ。蜂の言う通り、ベクターカートリッジの無い状態では変身できても弾除けにしかない。

しかしこのままでは教授の命が危なかった。どうすれば――

《にゃん》

悩む2人の足元に、峰の自信作であるアダプトキャットが寄ってきた。

このアダプトキャット、完成したは良いのだが峰が猫らしさの再現に力を入れ過ぎたのか、本当に猫の様に気まぐれで今まで何の役にも立っていなかった。なので2人は、今の今まで存在を忘れていた。

だが今は違った。このアダプトキャットの能力は、現状においてとても重宝する。

「アダプトキャット……そうだ！　これがあればカートリッジ一個でも変身できる！」
「ッ!?　使えるカートリッジはどれですか!？」

「ちよつと待って！　確か最近調整終わったばかりの奴で、えつと……」

峰が部屋中の机をひっくり返す勢いでベクターカートリッジを探していた。しかし目的の物はなかなか見つからなかった。

それもその筈で、峰が探している物は既にアダプトキャットが持ってきていたのだ。アダプトキャットは机の上に飛び乗ると、口に咥えていた物を机の上に置いた。

「あ、これって……」

アダプトキャットが持ってきたのは、一つのベクターカートリッジ——キャットベクターカートリッジだった。それこそ正に峰が探しているベクターカートリッジ。元々

アダプトキャットとセットで使う事を前提に調整を進めていた物であった。

それを自分の足元に置き、一鳴きするアダプトキャット。その様子は正に、亜矢に使えと言っている様なものであった。

何となくだがそれを察し、亜矢はアダプトキャットに手を伸ばした。

「お願い……力を貸して！」

亜矢が手を伸ばすと、アダプトキャットはそれに応えるように彼女の手から乗り肩に移動する。頬擦りしてくるアダプトキャットに、可愛らしさを感じつつ亜矢はキャットベクターカートリッジを掴むとラボの中に停めてあるトランスポゾンに跨った。

「先輩！ 私行つてきます！」

「ええっ!? ベクターカートリッジ……あ、あつたの!? うん、気を付けて！」
峰に慌ただしく見送られながら、亜矢は飛行モードにしたトランスポゾンで飛び立つていった。

上部ハッチから飛び立ち、大学のすぐ近くで地上モードに移行し現場へと向かつていく。亜矢には少々扱い辛い、それでも運転できない程ではない。

場所が近い事もあって、現場にはすぐに到着した。そこでは既にワस्पファッジの襲撃により白上教授の愛車が炎上していて、肝心の教授は少し離れた所で倒れている。

幸い、教授は炎上する前に脱出していたのか軽い怪我で済んでいるようだ。

「教授ツ!?!」

「ふ、双星君か! すまない!」

亜矢がトランスポゾンから降り、白上教授を助け起こす。

最悪の事態は回避できたが、状況は好転したとは言いがたかった。

白上教授を助け起こした亜矢の前に、ワスプファッジが降り立つ。

「ツ!?! 貴方はツ!!」

「仮面ライダーの連れだった女か。どけ、お前に用はない」

「貴方に無くても、私にはあります!」

亜矢はそう言うと、先程渡されたばかりのデイナドライバーを腰に装着した。

それを見て白上教授が驚愕に目を見開く。

「ふ、双星君それはツ!?!」

「すみません教授。説教などは後でお願いします。だけど私はもう……」

亜矢の手の上にアダプトキャットが乗る。するとアダプトキャットは、亜矢が何も言わなくても自分がすべきことを分かっているのか体を変形させてドライバーに装着できようになった。前後両足は折りたたまれソケットに入るようになり、尻尾と頭は背中に畳まれ真上を向いた口はそのままベクターカートリッジのソケットとなる。

亜矢は迷わずそのソケット部分に、ベクターカートリッジを装填した。

〈CAT〉

「もう私は……何も出来ないなんて嫌なんです！」

カートリッジを装填したアダプトキャットを、デナドライバーに装着する。そして亜矢は、右手をレセプタースロットルにかける。

そして開いた左掌を前に掲げ、普段は後ろで聞いているだけだったその言葉を口にした。

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

開いた左手を捻りながら握り、同時にスロットルを引く。すると仁の時同様セントラルドグマから白いスパークが飛び出し、ワスプファッジを弾き飛ばして亜矢に向かってくる。亜矢はそれを両手を広げて受け止め、その姿を変えた。

黒いアンダースーツに白い装甲。装甲は亜矢に合わせてか重厚さは薄く全体的に女性らしいフォルムとなっている。仮面はネイキッドフォームのデイナをベースに、額から後頭部へ引つ張られる様に三角のアンテナが二本伸び、両太腿には一丁ずつ大型のハンドガンがマウントされていた。ハンドガンは右のハンドガンには折り畳まれたストックが、左のハンドガンにはスコープが付いている。

亜矢は変身した自らの姿をまじまじと見て、そしてワस्पファツジに対し構えを取った。これで自分も戦える、と。

「チツ、まさか本当に新たな仮面ライダーが出るとはな」

対するワस्पファツジは、本当に出現した新たな仮面ライダーを即行で始末すべく攻撃を開始した。

翅を広げ、低空飛行で一気に接近するワस्पファツジを亜矢が迎え撃つ。峰を相手にした時と同じくキックボクシングでワस्पファツジに対抗してみせた。

しかし相手は戦闘のプロ。ある程度戦いに慣れてきた仁が何とか対抗出来た相手に、今度が初陣の亜矢では少々分が悪かった。

ワस्पファツジの拳が亜矢の胸板に突き刺さる。

「ぐうッ?! あ——!?!」

「ふん、貴様素人だな? 戦い方がなっちゃいない!」

数回の攻防でワस्पファツジは亜矢が戦いの素人である事を見抜き、早々に勝負をかけるべく攻勢を強めた。

対する亜矢は、先程峰相手にやってみせたように猫の様な柔軟な動きでワस्पファツジの攻撃を凌ぎ、一瞬の隙を見つけると渾身の蹴りを叩き込み僅かながら後ずらせてみせた。

「くっ、貴様ツ!？」

「今の内に!」

亜矢はワスプファッジが隙を晒している間に、トランスポゾンからハイブリッドアームズを取り出しライフルモードにして構える。素手では分が悪いと察し、ライフルにも大剣にもなるハイブリッドアームズをチョイスしたのだ。太腿にハンドガンがある事には気付いているが、そちらはどの程度の性能か未知数だった。

対するワスプファッジは、亜矢がハイブリッドアームズを取り出し構える間に空中へと飛翔していた。

「武器を手にした程度で勝てるかと自惚れたか!」

ワスプファッジが放つのは、仁を戦闘不能にした4匹のスズメバチ。奴の背中から飛び立った4匹に、亜矢は息を呑み仮面の奥で表情を険しくする。

(あれにやられる訳にはいかない!)

その威力を良く知っている亜矢は、先にあれから始末しようと狙いを定め引き金を引く。何発か撃ち、一匹は何とか始末できた。が、残りの3匹の接近を許してしまう。

3匹のスズメバチが毒針を亜矢に突き立てるべく突撃してくる。亜矢は攻撃を中絶し回避に専念するが、四方八方から迫るスズメバチ相手に反応が追いつかない。

「くっ!？」

「双星君、上だ!？」

「え!？」

白上教授の声に、亜矢が上を見るとそこには最早目前にまで迫っているスズメバチが1匹居た。他の2匹に気を取られ過ぎたのだ。

「あ——」

迫るスズメバチの動きがスローモーションで見える。回避しようにもこれではどう足掻いても間に合わない。危機的状况に、亜矢の脳裏に万事休すと言う言葉が浮かんだ。

だがそのスズメバチの針が亜矢を捉える事は無かった。いつの間にか、亜矢とスズメバチの針の間にハイブリッドアームズが割り込んでいたのだ。

「え?？」

そのハイブリッドアームズは、言うまでも無く亜矢が持っていた物。スズメバチの針が突き立てられる直前、彼女は手にしていた武器を盾代わりに防いだのである。

スズメバチの針が突き刺さったハイブリッドアームズの機関部がバチバチと火花を放つ。直感でマズイと感じた亜矢が武器を手放すと、内部機関に誘爆したのか木っ端微塵に吹き飛んだ。勿論スズメバチの1匹も道連れであった。

全く自分で考えたつもりの無い防御に、一瞬呆然となる亜矢だったが近付く羽音に直

ぐに思考を戦闘に引き戻される。

残りのスズメバチは2匹。亜矢はそれを見て迷わず両太腿のハンドガンを手に取り、2丁拳銃でスズメバチを迎え撃った。スズメバチは縦横無尽に動き回って亜矢の死角から迫ろうとするが、亜矢は驚くほど正確な射撃で残り2匹のスズメバチを撃ち落としてしまった。

その光景を前に、ワस्पフアツジは思わず齒噛みした。

「何たること。ならば……………これはどうだ！」

亜矢に向けて右腕を向けるワस्पフアツジ。その動作に彼女は針を飛ばしてくるのかと警戒していたが、飛ばしてきたのは針ではなかった。

放たれたのは高濃度の毒液。最初針の様に見えたが、空気抵抗によりばらけるとまるで散弾の様に亜矢に襲い掛かる。

咄嗟に亜矢は顔を庇った。

「あぐっ!？」

何とか顔だけは守ることが出来た亜矢だが、細かい毒液の飛沫が掛かった部位は白い煙を上げて熱を帯びる。

これはマズいと亜矢が跳躍して追撃を回避しようとする、空中では既にワस्पフアツジが彼女を待ち受けていた。

「そこッ!!」

「くあつ?!」

跳び上がった直後に地面に蹴り落され、一瞬体がバラバラになったような錯覚に陥る。

「うう……はっ?!」

それでも何とか立ち上がる亜矢だったが、ふと顔を上げるとワスプファッジがもうすぐそこまで迫っていた。トドメを刺すつもりなのか、右腕には既に針を展開し今にも彼女に突き立てようとしている。

「貫ったあッ!!」

ワスプファッジはこの時点で己の勝利を確信していた。亜矢は地面に叩き付けられたダメージで満足に動くことが出来ない。このまま亜矢を始末し、そのまま白上教授を仕留めてみせる、と。

だが次の瞬間、ワスプファッジの攻撃は空を切った。外したのだ。より正確に言えば、亜矢が紙一重でワスプファッジの攻撃を回避していた。

「なっ?!」

半身を逸らせて攻撃を回避した亜矢に、ワスプファッジは一瞬気を取られる。

それが彼の命取りであった。

〈A T P B u r s t〉

「ハアツ!!」

回避と同時に亜矢はレセプタースロットルを引いており、右足にエネルギーを集束させていた。

ワスプファツジが何とか攻撃して中断させようとするが全ては手遅れ。彼が次の攻撃に移ろうとした時点で、放たれた亜矢のノックアウトクラッシュがハイキックとなつてワスプファツジに突き刺さつた。

「そん、な……馬鹿な——!?!」

ワスプファツジは信じられないといった声を上げながら、爆散し元の姿に戻つた。その際に排出されたワスプベクターカートリッジを、亜矢は手を伸ばしてキャッチする。

「やった、これで「ぐおおおおおっ?!」、ツ?!」

目的のカートリッジを手に入れた事に喜ぶ亜矢だったが、直後に敏則の悲鳴が耳に入り驚いてそちらを見た。するとそこでは、敏則が証拠隠滅処理として体の中に仕込まれた発火装置で燃やされていた。

「う——!?!」

生きながら焼かれる人間の姿に、亜矢の口の中に嫌な苦味が広がる。直接ではなくとも、自分がこの結果を招いたことに罪悪感と嫌悪感が沸き上がる。

その彼女の肩に、白上教授が手を掛ける。

「気にする事は無い。全ては自業自得だ」

「教授……でも……」

「仕方がなかった事だ。こうしなければ門守君の命が危なかったんだ。忘れろとは言わんが、気にし過ぎない方が良い」

「……………はい」

こうして後味の悪さを感じながらも、亜矢はワスプベクターカートリッジを手に入れ、白上教授の手により仁の命を脅かす毒に対する解毒剤が作製された。

作られた解毒剤は即座に入院中の仁に、教授の手で投与された。解毒剤を投与された仁の手を、亜矢が心配そうに握り締める。

「ん……………ん……………」

「ッ!? 門守君!!」

仁は程なくして目を覚ました。ぼんやりと周囲を見渡す彼を、亜矢が安堵と歓喜で迎える。

「双星さん? あ……………そうか、俺アイツに……………あ、あいつどうなった?」

「あのファツジなら双星君が倒したよ。初陣で大したものだ」

「双星さんが?」

白上教授の言葉に仁が亜矢の腰を見ると、そこには未だ装着されたままのデイナドライバーがあった。それを見て全てを察した彼は、彼女もまた戦いに身を置く選択をしてみました事に申し訳なさを感じた。

「なんか、ゴメン。双星さんにまで戦わせるようなことになっちゃって」

「気にしないでください。多分、遅かれ早かれだつたと思います」

「遅かれ早かれ？」

「あゝ……ゴホン。私は医者先生の先生に回復した事を話してくるよ。理由は適当に話しておくから安心なさい」

何やら空気を読んで退室する白上教授を他所に、亜矢は仁に話した。

「門守君が誰かの為に戦うなら、私は門守君を守る為に戦います。一人ぼっちで戦わせるなんて、絶対にしません」

「双星さんが思ってるよりずっと大変だけど、いいの？」

「はいー」

屈託のない笑みを浮かべて答える亜矢に、仁は彼女の本気度を察しこれ以上は何を言っても無駄であると悟った。

と同時に、心が軽くなったような気になり自然と口元に笑みが浮かんだ。頼もしいとかそう言うのではなく、彼女が本当の意味で常に傍に立っていてくれると言う状況に心

が安心を感じているのである。

「……ありがとう、双星さん」

仁から笑みと共に紡がれた感謝の言葉に、亜矢は顔に血が集まるのを感じた。

「そ、それと……」

「ん？」

ここで亜矢にちよつとした欲が生まれた。これからはただの友ではなく、共に戦う仲間となるのだ。

ならば――

「これからは、一緒に戦う仲間になる訳です……私達、もうちよつと距離が近くても良いと思うんです」

「つて言うとは？」

「な、名前……これからは名前呼び合いませんか？ 何時までも苗字で呼び合うなんて他人行儀じゃなくて」

言われて仁は目をパチクリとさせた。だが直ぐに小さく笑みを浮かべると、お言葉に甘えて彼女を新しい呼び方で呼んだ。

「えつと、じゃあ……亜矢さん。これで良い？」

「はい！ 仁君！」

仁に名前の方で呼ばれ、亜矢は心が温かくなるのを感じた。昨日シヨツピングモールで感じたのと同じ、いやそれ以上の温かさ。

それはいやが追うにも亜矢に、仁に対するある感情を認識させるのに十分だった。
(やっぱり私……仁君の事……)

「どうかした、亜矢さん？」

「い、いえ!? 何でもありません!？」

仁への感情……恋心を亜矢は自覚し、亜矢は暫く顔を赤くしそれが逆に仁を心配させる要因となってしまうていた。

そんな初々しい2人の若人の様子を、扉の外で白上教授が微笑ましく見守り、そして静かにその場から立ち去っていく。

教授の頭の中では、どう話を長引かせて医者をして2人の下へ向かうのを遅らせようとするかの算段が立てられるのだった。

第11話：避けられぬ敵

街中で、亜矢の変身する仮面ライダーと仁の変身するダイナ・バッファローヒューマンフォームが対峙していた。

ダイナはハルバードモードのハイブリッドアームズを、亜矢は両太腿にマウントされているハンドガン——リプレッサーショットを構えている。

2人は互いに暫し見合っていたが――

「ツ!!」

示し合わせたかのように互いに攻撃を開始した。

ダイナが斧槍を手に接近するのを、亜矢が二丁拳銃で迎え撃つ。素早い銃撃がダイナを襲い、それを彼は手にした斧槍を振るって銃弾を叩き落しつつ接近する。

「くっ!」

接近された事で、これ以上の足止めは無理と考え亜矢は銃撃を止め接近戦に切り替えた。ダイナの武器が長物であるなら、接近してしまえば逆に自分の方が有利になると考えたのだ。

横薙ぎに振るわれた斧槍を飛んで回避し、至近距離に接近して蹴りを放つ。ダイナは

それを斧槍の柄で防ぎつつ、柄頭なども使って対抗した。

「よ、ほっと」

「やつ！ はっ！」

デイナが斧槍を振り回し、亜矢が蹴りと拳銃のグリップ、そして至近距離からの射撃で攻防を行う。

両者のスペックを単純に比べると、デイナがパワーに優れ亜矢はスピードに優れていた。

故に、接近戦ではデイナの方が若干有利と言えた。加えて戦闘経験でもデイナの方が勝っている為、状況はデイナの方が若干押ししているように見えた。

亜矢が至近距離からの銃撃でデイナにダメージを与えようとするが、デイナは斧槍の柄を利用して亜矢の二丁の拳銃を弾き銃口を逸らした。

この距離で長物を使っているにも拘らず、デイナは亜矢を相手に優位に立ち回っている。こちら辺は彼の戦闘経験が物を言っているのだろう。つい最近初陣を果たしたばかりの亜矢では、相手が悪いとしか言いようがなかった。

しかしそれでも亜矢はしつこく食らい付いた。ワスプファッジとの戦い以降、空いた時間を見つけては練習してきたキックボクシングを駆使してデイナに対抗してみせる。

激しい連続キックに、デイナは思わず距離を取る。それを好機と見て、亜矢は両手の

拳銃で銃撃した。

二丁の拳銃から放たれる銃撃に、流石のデイナも攻めあぐねる。

「だったら……」

〈HAWK + LEON Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

地上での銃撃戦では亜矢の方に分があると見て、デイナはホークレオンフォームになり空中へ逃れた。逃がすものかと亜矢が狙うが、上空のデイナには射程が足りず銃弾が届かない。

亜矢の銃撃が届かないのを見て、デイナはハイブリッドアームズをライフルモードに変形させて上空から撃ち返した。

「わっ?! とっ?!」

ギリギリで銃撃を回避する亜矢。彼女はデイナからの銃撃を回避しながら、二丁の拳銃を合体させてライフルにした。リプレッサージュットは右の拳銃に左の拳銃を合体させることで、遠距離に対応したライフルになるのだ。

右の拳銃の銃口に左の拳銃を変形合体させ、右の拳銃にのみ存在する折りたたまれたストックを伸ばし、左の拳銃にのみ存在するスコープを付け替えて上空のデイナを狙

う。

対空対地で行われる銃撃戦。しかしそれも長くは続かず、デイナが亜矢に銃撃しながらレセプタースロットルを引いたことで状況が動いた。

〈ATP Burst〉

「ハアッ！」

ハイブリッドアームズを捨てて放ったノックアウトクラッシュ。上空から亜矢を食らうかの如く放たれた挟み蹴りを、亜矢は地上から迎え撃つ。

〈Genome set ATP Burst〉

右手側の銃のグリップ下に当たる部分にベクターカートリッジを装填し、強化した弾丸を放つ『バーストブレイク』を亜矢が使用した。

デイナの挟み蹴りと亜矢の強化弾がぶつかり合い、上空で爆発が起こる。発生した炎と光に亜矢が思わず目を塞いだ。

「うっ!?!」

亜矢が眩い光に目を眩ませている間に、デイナはノックアウトクラッシュの勢いを利用し急降下すると亜矢の背後を取る。

そこでデイナはハイブリッドアームズを大剣モードにし彼女の首筋に添えて降参を

促そうとし――

〈ATP Burst〉

「ッ!？」

彼がそうするのを分かっていたかのように亜矢が背後に向けてノックアウトクラッシュを放つ。

それを察したデイナは、武器を捨てると回避しようと逃げる………のではなく、逆に彼女に抱き着いた。必殺の威力を持つ蹴りも、抱き着いてしまえばダメージなど殆どない。

「は、えっ!？」

予想外の彼の行動に亜矢が呆気に取られていると、一本背負いを極められ背中から地面に叩き付けられる。

「あぐっ!？」

背中を強かに叩き付けられ、一瞬呼吸困難になる亜矢。その隙にデイナは、投げられた瞬間放り出された亜矢のライフルをキャッチして彼女に付き付ける。

「げほっ!?! げほっ!?!……………あ——」

呼吸が落ち着いてきたと同時に、目の前に銃口を突き付けられている事に気付いた亜矢は自身の敗北を悟り全身を脱力させ大人しく両手を上げた。

「はあ………参りました。降参です」

亜矢が観念してそう言うと、デイナは銃口を彼女から外すと米神の部分を弄った。するとその瞬間、彼の視界が砂の様に崩れ視界が真っ暗になる。

だが仁は特に焦る事無く、「視界を覆う物」を上にはズラすと彼の目に見える景色が変化した。

そこに映っていたのは馴染みの秘密のラボの光景。仁は亜矢と隣り合わせでリクライニングシートに深く腰掛けており、その手には今まで顔にかけていた分厚いゴーグルの様な物が握られていた。隣に座る亜矢の顔にも今は同じものが掛けられている。

これは峰が開発したVRで戦闘訓練が行える特殊ツールである。これを掛ければ、実戦さながらの戦闘訓練を一步も動かさず行う事が出来るのだ。

亜矢はまだ仮面ライダーになって日が浅い。彼女がこれからのフアツジとの戦いを生き抜く為には、戦闘訓練は必要不可欠。しかもこれを使えば、新しい装備やベクターカートリッジの能力の確認まで出来るのだ。これを活用しない手はない。

仁は専用のVRゴーグルを外し、額の汗を拭った。現実で体は一切動かしていないが、それでも汗は出る。隣では亜矢もゴーグルを外して額を拭っている。

「お疲れ様、亜矢さん。大丈夫だった？」

「はい。付き合ってもらってありがとうございます」

「いいよいいよ。それにしても最後のあれは驚いたよ。良く反応で来たね？」

「実は私も驚いてるんです。気が付いたら体が動いてて」

「ふ〜ん……」

不思議な話である。聞けばワスプファッジとの戦いでも、決め手は意識せず行つた回避からのカウンターでのノックアウトクラッシュという話だ。

つい最近まで戦いとは無縁で、武道も習っていないなかつた亜矢が無意識でああまで動けるとは。実は本人も自覚していなかっただけで、彼女には戦いの才能があつたのだろうか？

仮にそうだとして、彼女はそれを喜ばないだろうなと仁は思いつつ椅子から立ち上がり体を伸ばした。その隣で亜矢も椅子から立ち、両手を組んで前から上に上げながら体を弓なりに伸ばす。

そうすると服に隠れて普段は分かり辛い、彼女の豊満な胸が嫌でも強調された。服が内側から押し上げられ、その大きさを主張しだす。

仁はそれに気付くも、特に気にした様子も無くゴーグルを椅子の上に放るよう置き、近くに置かれているペットボトルを開け中の水を飲んだ。

「ん……ふう。それはそれとして亜矢さん、『ルーナ』にも慣れてきた？」

「ええ。最初は二丁拳銃とか少し慣れませんでしたけど、今ではすつかり」

ルーナと言うのは、亜矢が変身する仮面ライダーの名前である。使用するツールは仁

と同じくデイナドライバーであるが、同じ名前ではややこしいという事で仁が名付けたのだ。デイナがDNAから取っているので、DNAと対になる『RNA』からルーナと名付けた。

ルーナの最大の特徴は、ベクターカートリッジ一本で変身できる点の他はデフォルトで専用の武装を持っている事だろう。

両太腿にマウントされているリプレッサーショット。右の銃には根元から銃の右側面に折り畳まれたストックが、左の銃には大型のスコープが搭載されている。

この二つの銃を合体させることで、長射程にも対応したライフルにする事も出来、当然ながらベクターカートリッジを装填する事でATPバーストを発動し、銃弾を強化する事が出来るのだ。

閑話休題。

仁と亜矢が訓練後の反省会的な話し合いをしていると、白上教授がやってきた。

「順調かね、2人とも？」

「はい」

「ええ。私も大分慣れてきました」

教授からの問い掛けを、亜矢は仮面ライダーとしての力への慣熟の類だと思っていた。事実それは間違っていない。確かに今後の事を考え、仮面ライダーの力に慣れる事

は大切だ。

しかし、この時亜矢は大事な事を忘れていた。

そう、今の彼女達の本業に関する事である。

「うむ、それも確かに大事だが卒論のテーマのまとめの事も忘れてはいないだろうね？
そろそろテーマを決めてそれを纏めてもらう予定なのだが？」

「もう出来てます」

「……………」

なんて事は無いように答える仁に対し、亜矢は顔を強張らせて先程とは別の汗を流した。彼女は卒論のテーマの事をすっかり忘れていたのだ。

ぶっちゃけ、まだ何にも決まっていない。

「前から言っていたようにとりあえず明日、軽い中間報告的なのをやってもらおうよ。それまでに纏めておくようにね」

それだけに言うと教授はその場を立ち去った。後に残された仁と亜矢。

仁は特に気にした様子を見せない。だって彼はとつくの昔に卒論のテーマを決めてしまっているし、なんならもう研究を始められるくらいにまで纏め終わっている。

問題は亜矢だ。彼女は最近色々あったせいで、卒論のテーマもロクに決まっていな
い。これは色々とまずかった。

「ど、どうしよう……」

先日までとは別の意味で頭を抱えてしまった。一応ある程度何をテーマにするかの候補は幾つか挙がっているが、それらを纏めて何をテーマとするかは全く決まっていな

い。

困窮する亜矢を見かねて、仁が助け舟を出した。

「手伝うよ」

「え？」

「テーマの纏め。全く何にも決まってる訳じゃないんでしょ？」

「は、はい。一応……」

「んじゃ、この後やっちゃおう。時間足りないようだったら、あれだ。家においでよ。科学誌だったら沢山あるから」

実際仁の部屋の本棚は科学誌や図書室には置いていない専門書で埋め尽くされていた。なので、実は資料に関しては事欠かない。

自分の不始末を仁に尻拭いさせるのは気が引けた亜矢だがさりとて背に腹は代えられない。ここは彼の厚意に甘える事を選択し、とにかく明日の中間報告を乗り切る事を念頭に置くことにした。

「すみません。よろしくお願いします」

「ん、任された」

こうして亜矢は仁と共に卒論テーマの纏めに取り掛かった。2人で図書室に赴き、現時点で亜矢が考えているテーマに関係する資料を読み漁り、何を研究するかを纏めていく。

が、案の定時間が足りなかった。

なのでここからは、仁の家で作業を行う事となる。

正直亜矢は別の意味で緊張していた。現状と時間を考えると、今夜は彼の家に泊りとなる可能性が非常に高い。

仁に対する恋心を自覚した今、果たして彼の家で平常を保てるだろうか？

「ちよつと散らかってるかもだけど、そこは勘弁してね……………：亜矢さん？」

「は、はい!？」

「どうかした？」

「い、いえ! 大丈夫です!」

亜矢は努めて平常を装い、彼の運転するバイクで彼の家へと到着した。

目の前に聳えるのは、年季の入ったアパート。見た目は古いが、これでも明星大学が学生の住居用にと契約している物件なので見た目以上には快適に過ごせる。

因みに亜矢が住んでいるマンションも同様に大学が契約を結んでいた。なのでどち

らも家賃は普通に入居するのに比べて格段に安い。

「ただいま〜つと」

「お、お邪魔します」

亜矢はおずおずと言った様子で仁の借りている部屋に入った。

実を言うと、彼女が仁の家を訪れるのはこれが初めてではない。彼の私生活や健康管理に不安を覚えた彼女は、何度か彼の家に上がり込んだことがあったのだ。なので、実は案外勝手知ったる所も多い。

その筈なのだが、今は異様に緊張していた。

どこか変な所はないだろうか？ 等と服装を弄ってみたりととにかく落ち着かない。

そんな彼女の様子に気付かず、仁は部屋に入ると荷物を適当において台所に向かつて行った。

「ちよつと待つて。夕飯何かあるか見るから」

日も沈み良い時間だ。夕飯にはちようどいい。

亜矢は促されるままにリビングに腰掛け、まじまじと室内を観察した。彼女が今まで仁の家を訪れるのは、不摂生な生活を送る彼の為に食事を作ったりする為。なのであまり室内をじっくり見る事を今までしてこなかった。

が、今は彼女は一応客として招かれた。あくせくする必要がない今、彼女には仁の家

の室内を見て回る余裕があったのだ。

まず目に入るのは、やはり本棚をぎっしり埋め尽くしている科学誌や専門書だろう。よくもまあこれだけ集めたものだと感じする。

そしてある意味目に入るのは、他に何も無い殺風景さであった。パソコンなんかもあるにはあるが、必要最低限の家具以外は趣味に繋がりそうなものなどが一切見当たらない。

この場合趣味がないのではなく、科学誌や専門書が彼の趣味に繋がるのであろう。

(本当に好きなんだなあ……)

仁は本当に知る事・学ぶ事・探求する事が好きなのだ実感した。欲望の全てがその事に集約されていると言っている。

それ自体は構わないのだが、亜矢として気になるのはそれ以外にどれだけ興味のソースを割いてくれるのかという事。

ストレートに言って、仁は自分の事を何処まで好いてくれるのか？

亜矢はそれがどうしても気になってしまう。

もしここで告白した場合、彼はそれを受け入れてくれるのかどうか……。

「お待たせ」

亜矢が一人悶々としていると、仁が手にチャーハンの乗った皿を持って戻ってきた。

「ごめんね、こんなもので」

「いえいえ、十分ですよ。いただきます」

亜矢は出されたチャーハンを前に、両手を合わせていただきますをするとスプーンで掬って口に運んだ。熱々のチャーハンは程よい味付けが為され、彼女の舌を満足させた。

「あふ、ん……うん。美味しいです！」

「そう？ 良かった。誰かに料理出すなんて初めてだから、ちよつと不安だったけど」

「仁君、普段は料理なんてしませんものね」

「全然しない訳じゃないよ？」

「適当に食材鍋に放り込んで煮込むだけの物を料理とは普通言いません」

適度に会話を挟みながら、和やかに食事が進む。2人とも普段は1人で食事を済ませる事が多いので、亜矢は勿論仁も何処か楽しげだ。

食事を済ませ、軽い食休みを挟んだら目的の亜矢の卒論テーマのまとめの時間だ。

部屋にあるパソコンをネットに繋ぎ、海外の論文や仁の部屋にある科学誌・専門書を参考に、亜矢のやりたい・興味のあるテーマを絞り纏めていく。

飽く迄も亜矢の卒論のテーマである為、仁に出来るのは資料を調べたりアドバイスを
する程度だったが、それでも亜矢にはありがたく思いの外どんどん進んだ。

そして時計の針が長針短針揃って天辺を差すかどうかと言う時、亜矢の卒論のテーマは纏まり明日の中間報告で発表出来るまでになつた。

大学で教授に中間発表の事を聞かされた時は死刑判決をされたに等しい衝撃を受けたものだったが、何とかなつてくれた事に心の底から安堵した。

「はあく、終わつた……」

「お疲れ様」

「ありがとうございます。仁君のお陰で何とかなりました」

「別に大丈夫だよ。それよりこれからどうする？ もう大分遅いけど、帰るんなら送るよ？」

「い、いえ!? そんな悪いですよ。ここからならそんなに遠くもありませんし、一人で帰れます」

「駄目。危ないよ。変な奴に絡まれたらどうするの」

「でも……」

仁は頑なに亜矢が一人で帰る事に首を縦に振らなかつた。先日のお貞助の一件もあつて、亜矢が不埒な輩に襲われたいとは限らないと警戒しているのだ。

彼の心配を嬉しく思う反面、しかし今から彼にバイクで送ってもらうのは心苦しい。

互いに送るか一人で帰るかで一步も譲らない2人だったが、業を煮やした仁が遂にこ

の提案を口にした。

「んじゃあ、今夜はウチに泊っていきなよ。どうせ明日も一緒に大学行くんだし」

「えっ!?! いや、でも、ご迷惑じゃ……?」

「別に平気だよ。と言つても寝間着とかは俺の予備になっちゃうから、そこは我慢してもらいたいけど」

「我慢だなんてそんな………えと、それじゃ………そもそも私の不手際が原因なんですし、文句なんてありませんよ」

「ん、そう? じゃあ取り合えず先にシャワー浴びてきちやいなよ。その間に俺寝間着とか用意しとくから」

亜矢はお言葉に甘え、先にシャワーを使わせてもらうた。

脱衣所で衣服を脱ぎ、畳んで床の上に置く。暫くすれば仁が寝間着を持ってきてくれるだろうことを考えると、下着を見られる可能性があるの下着は畳んだ服の下だ。

浴室に入ると、亜矢は暑いシャワーを頭から浴びた。

普段は露出の少ない服を着ているので分かり辛いのが、亜矢はこう見えてスタイル抜群だ。出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる。夏場になると流石に隠し切れない、豊満な胸も今は露わとなっている。

傷一つない陶器の様な美しい肌の上を、シャワーの湯が洗い流していく。激しい運動

をした訳ではないが、それでも集中すると自然と汗が出たのか湯が全身を洗い流していく感覚は心地が良い。

最初はその心地良さに身を委ねていたが、次第に緊張が再発してきた。自分はこれから仁と一夜を共に過ごすのだ。いや、決して厭らしい意味ではなく純粹に泊めてもらうだけだし、彼が2人つきりになったからと言って手を出してくる様な輩ではない事は百も承知である。

しかしそれはそれとして、やはり緊張はするというものであった。何しろ異性と同じ部屋で一晩明かすなど人生初なのだから。

「仁君……」

頭からシャワーを浴びながら、亜矢は仁の名を口にする。

そして徐に鏡に映る自分の姿を見た。

今までは特に気にしていなかったが、改めて自分の姿を確認して亜矢はある事が気になった。仁に自分の体はどう映っているのだろうか？

自画自賛かもしれないが、それなりに魅力的だとは思う。節度ある生活を送っている為無駄な肉は付いていないし、美香にも指摘されたが胸だつて大きい。夏場に薄着になると男性の視線を集めているのになんて気付いている。あまり無暗に注目されたくないから、夏場でも極力露出の少ない服を着ているがそれでも異性からの視線は気になつ

た。

自分の体が異性から魅力的に映る事は亜矢自身嫌と言うほど分かっている。が、仁はどうなのだろうか？

彼と三年間大学生活を共にしてきた中で、彼からそう言う目を向けられた記憶がない。彼だつて人間だ、ならば生物の三大欲求は持っているだろう。性欲だつてある筈だ。

果たして彼は、亜矢と2人きりになった時彼女に対し欲情するのだろうか？

そしてもし、彼が欲情して迫ってきたら――

（――つて!? 止め止め止めッ!? 何てこと考えてるのッ!?）

慌てて亜矢は変な想像を頭を振る事にかき消した。彼がそんな単純な人間ではない事は良く分かっている筈だ。少なくとも、誰かを傷付けるような事は絶対にしない。

だから大丈夫だと自分に言い聞かせ、亜矢は頭と体を洗い終えると浴室から出てタオルで体を拭いた。その際足元を見ると、畳んだ亜矢の服の隣に仁の寝間着が置かれている。これに着替えろという事か。

何か一言言ってくれてもいいのにと、少し苦笑しつつ亜矢は畳んだ服の下着を身に付けると寝間着に袖を通した。仕方のない事だが、寝間着は亜矢にはやはり少し大きく袖や裾が余ってしまった。代わりに胸元は大きく押し上げられている。

亜矢はそっと自分の体を仁の寝間着毎抱きしめた。そうすると彼に包まれている気がして、自然と口元には笑みが浮かび、熱い吐息が口から零れる。

「寝間着大丈夫？ 大きすぎたりしない？」

出し抜けに仁の声がりびングから響く。音で彼女が浴室から出たのには気付いていたのだろう。時間的に着替え終わってもおかしくないのにりびングにやってこないで、違和感を与えてしまったようだ。

亜矢は慌てて彼に返事を返した。

「ひゃいつ!? だ、大丈夫ですッ!？」

「あ、そう？ 俺も軽くシャワー浴びたいからそろそろこつち来てもらってもいい？」

「は、はい。今行きます」

勝手に自分の世界に入り込んでしまい、亜矢は何だか申し訳ない気になり服を抱えてそそくさとりびングへと戻った。

仁は自分の寝間着を着ている亜矢を、ざっと上から下まで眺めた。

「へ、変ですか？」

「ん？ あ、いや。やつぱりちよつと袖余るなあつて」

「仕方ありませんよ。仁君の方が背が高いんですし。あ、シャワーありがとうございました」

「ん」

入れ替わるようにして脱衣所へと入る仁を見送り、亜矢はとりあえず荷物の所に衣服を置きドライヤーで髪を乾かすと取り合えず床に腰掛けた。

そのまま亜矢は、特に何もすることが無かったので仁がシャワーを浴びている音を聞きながらぼんやりと部屋の中を見て過ごしていた。

と、不意に机の上の写真立てが目に入った。恐らくは子供の頃の仁と、彼の家族が写った写真だ。写真の中の子供の仁は、年相応の笑顔を浮かべている。彼にもこんな素直な顔をする頃があったのだと、亜矢は写真を微笑ましく見ていた。

亜矢が子供の頃の仁の家族写真を眺めていると、仁がシャワーを浴び終えたのか寝間着に着替えて戻ってきた。

戻ってきた彼は、亜矢が写真立ての写真を見ている事に気付く。

「ん？ ああ、それ？ 俺が子供の頃の奴」

「それ位は見れば分かりますよ。そう言えば仁君、ご両親はどちらに？」

亜矢は仁の両親にちよつと興味があった。変わり者の彼の両親だ、彼同様変わっているのかそれとも彼とは正反対に真面なのかちよつと気になったのである。

だが彼の口から出てきたのは、思わぬ言葉であった。

「あゝ、親父は俺が子供の頃に死んじゃったからなあ」

「……………え？」

「親父、アメリカのマサチューセッツで教鞭取ってたんだけどさ。向こうで暴漢に襲われて死んじゃったんだよね」

仁はあつけらかんとした様子で口にするが、亜矢が受けた衝撃は尋常ではなかった。今でこそ平然としているが、当時の彼が受けた悲しみや喪失感とは相当なものだった筈だ。身内を失う悲しさや苦しみは、亜矢にも理解できた。

「ご、ごめんさい!? 知らなかつた事とは言え、私……」

「気にしなくていいよ。俺はもう平気だから」

「でも……」

「はいはいお終い。そろそろ寝よう。明日は中間発表だし」

強引に話を区切ると、仁は大きめのタオルを二つ持ってきた。そして一つを丸めて枕にし、机を退けたリビングの床に寝転ぶともう一つのタオルを被った。

「……………つて、仁君何自然に床で寝てるんですか!?」

「え? だつて亜矢さんベッドで寝るんだし、俺床で寝るのが普通でしょ?」

「いやいや!? 仁君の部屋なんだから仁君がベッド使ってくださいよ!」

「そう言う訳にはいかないでしょ。俺にだつて男としてのプライドあるし。俺がベッドで快適に寝て、亜矢さんを硬い床で寝かすなんて出来ないよ」

「じゃ、じゃあせめて……いい、一緒にベッドで……」

「俺のベッド、シングルだから2人で寝たら狭くて逆に寝づらいよ。遠慮せずに亜矢さん1人で使いなつて。俺床でも平気だから」

そう言うのと仁は灯りを消し、タオルを被つて横になつてしまった。亜矢はまだ何か言いたげだったが、言うべき言葉が頭に思い浮かばず何も言えなくなつてしまったので結局彼の厚意に甘えてベッドで寝る事にした。

ベッドに横になり、枕に頭を乗せて布団を被る。そうすると彼の匂いに全身を包まれ、心地の良い安心感が彼女の眠気を誘つた。

瞼が重くなるのを感じつつ、亜矢が仁の方に意識を向けると彼の方からは早くも寝息が聞こえてきた。本当に床でも大丈夫だったらしい。

その事に亜矢は苦笑を浮かべると同時に、感謝と申し訳なさを感じつつ眠りへと落ちていった。

暫し部屋には仁と亜矢、2人の寝息が規則正しく響く。

と、その時。徐に亜矢が体を起き上がらせた。起きた彼女はゆつくりと仁の方を見て

「……………ん、んん？」

翌朝、亜矢は窓から差し込む朝日に意識を覚醒させた。まだ瞼は重く目も開けられないが、それでも意識だけはぼんやりとだが起きていた。

（朝……………そうだ、今日は卒論のテーマの中間発表があるんだ。仁君に手伝ってもらった……………ああ、そうだった。昨日は仁君の部屋に泊ってもらったんだ。それじゃあ、早めに起きて、せめて朝ご飯くらいは……………）

せめてもの恩返しにと、早めに起きて朝ご飯を用意しようと考えたが、心地良い温かさにどうにも起きるのが億劫になってしまう。

はて自分はこんなに寝起きが悪かっただろうか、起きた頭の一部がそんな事を考えたが心はこの心地良さをもう少し堪能したくて起きる事を拒否した。どの道中間発表は朝一と言う訳では無いのだし、少しくらい遅くなっても問題はない。

そこまで考えた時、亜矢は寝ているベッドに違和感を覚えた。妙に硬いのだ。まるで床に寝転んでいるかの様で、何かがおかしいと感じ瞼をゆつくりと開く。

すると彼女の目に、眠っている仁の顔のドアップが映し出された。

「……………へ？」

思わず間の抜けた声を上げてしまった亜矢だが、直後に頭の中はパニック状態となる。気付けば彼女は床で、仁の隣に寝ていたのだ。しかもご丁寧に枕と掛け布団を一緒に持つてきている始末。

辛うじて大声を上げる事だけは避けられたが、あまりのパニックに彼女の頭の中は洗濯機もかくやと言うくらい様々な疑問などがぐるぐると駆け巡る状態となってしまった。

(なななななな、何で何がどうなってるの!? 私、何で仁君の隣で!? 確かに昨日ベッドの上で寝た筈なのに!? 寝ぼけて仁君の隣に寝ちゃった? いや無い無い無い!?) どんな寝ぼけ方をすればこうなるの!? 枕に掛け布団まで持つてきて!?)

どうすればいいか分からず困惑する亜矢だったが、仁の寝顔を見ているとその内気持ちも落ち着いてきた。

普段拝むことの出来ない、仁の安らかな寝顔。大学で出る必要のない講義をサボったりして昼寝をしている彼を見た事はあるが、今の彼はその時の寝顔とは違う安らかなものであった。

その寝顔を見ていると何だか色々な疑問がどうでも良くなってきた。

(フフツ、子供みたいな寝顔。いい年した大人なのに)

仁は決して童顔と言う訳では無いが、こうして寝ている彼の顔は少年の様にあどけな

い。普段気怠そうに眼の下に薄く隈を作っている顔とは大違いだ。今は寧ろ可愛らしさすら感じてしまう。

亜矢はそつと、仁の頬に手を伸ばした。決して起こさないよう慎重に、優しく彼の頬に触れ、撫でる。

そうすると仁も寝ながら心地良いのか、撫でられる手に身を委ねる様に頬を少し彼女の方に寄せた。それがまた堪らなく可愛くて、亜矢の顔に優しい笑みが浮かび上がる。

「……………フフツ」

亜矢が思わず笑みを溢した、その時。

「んんん……………」

仁が手を伸ばしてきたかと思うと、そつと彼女の体を引き寄せ抱きしめた。

（ふえっ!?!）

突然の事で声が出なかったが、今度は意外とパニックになる事が無かった。皮肉な事に濃厚な仁の匂いに包まれた事で、逆に心が安心感を感じてパニックにならなかつたのだ。パニックが一周して冷静になったとも言える。

（ど、どうしようっ…）

流石に何時までもこの状態では居られない。出来るだけ彼を起こさないように抜け出し、夜の間に隣に潜り込んでいた事がバレないようにしなければ――

ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピピッ

「ん……」

その時、目覚まし代わりに仁がセットしていた携帯のアラームが鳴り響く。けたたましい音に仁が目を開き――

「……………あれ？」

自分が亜矢を抱きしめている事に気付き、仁は寝ながら首を傾げる。

「あれ？ 俺いつの間に亜矢さんの隣に……………んん？ あれ、逆か？」

仁は徐々に状況を理解してきた。自分が床に寝ている状況は変わらないが。亜矢が枕と掛け布団を持って自分の隣に寝ている。自分はそれを寝ぼけて抱きしめていたのだと、仁は寝起きながら回転の速い頭で状況を的確に理解していた。

そして……………。

「~~~~~!!!!!!」

朝早く。

仁の部屋に、声にならない亜矢の悲鳴が響き渡るのだった。

第12話：失われた半身

その日の朝、仁は亜矢と共に朝食を共にしていた。

しかし昨夜と違つて今度は両者の間に会話は無く、何とも気まずい雰囲気の流れていた。原因は言うまでも無く、朝起きたら亜矢が仁の隣に移動していた事だ。

重ねて言うが、亜矢には何故起きたら仁の隣に移動していたのか全く分からなかった。枕と掛け布団まで持つて移動し、一緒に掛け布団を使って寝るまでの記憶が無かったのだ。

果たしてこれが本当に寝ぼけてやらかした結果なのか、それとも彼女の内なる欲望が無意識の内に行動となつて表れたのか。少なくとも亜矢には判断が付かなかった。

亜矢は激しく不安だった。仁に変な女と思われたり、嫌がられたりしていいいかと考えると胸が締め付けられる思いだった。

亜矢が不安な思いを抱えながら、台所を借りて作った朝食を食べていると徐に仁が口を開いた。

「……俺は嫌じゃなかったよ」

「え？」

「亜矢さんが隣に寝てくれて。お陰で朝寒くなかったし」

思えば、色々あつて気にしていられなかったが今朝は春先とは言え少し冷えた。もし亜矢が掛け布団を仁と共有していなかったら、彼の体は冷えていたかもしれない。

「それどころか、亜矢さんの方は嫌じゃなかった?」

「嫌つて、何が?」

「俺に抱きしめられて。嫌じゃなかった?」

「嫌だなんて、そんな……別に私、仁君に抱きしめられて嫌だとかそんな事……お、おも、思つてません、よ?」

言われて思い出して、再び亜矢の顔が赤面した。あの時の仁の温もりと匂いは、とても心地良かった。もし許されるなら、また抱きしめてもらいたいくらいだ。

勿論そんな事、恥ずかしくて言える訳も無いが。

「良かった。亜矢さん抱き心地凄く良かったから、あれで嫌われたらどうしようかと思つてた」

「み。——」

等と思つていたら仁が爆弾を投下してきた。思わず『ま行』に半濁点を付けるという器用な発音の声を発してしまふ位には動揺した。

「温かいし、良い匂いするし、柔らかいし。多分目が覚めてなかったらあのままずっと抱

きしめてたかも」

素直に亜矢を抱きしめた感想を口にする仁に、亜矢の顔が見る見る内に赤くなっている。抱いた感想が、仁に抱きしめられた亜矢の物と殆ど同じだ。違いがあるとすれば、仁は見た目と印象以上に鍛えられていて筋肉質で逞しく、抱き締められて安心感が得られるというところだろうか。

段々と亜矢の体に変な汗が浮かんできた。

そして同時に、亜矢も思った。もし許されるなら、自分だってあのままずつと抱きしめてもらいたかった、と。

そこで仁が、亜矢の顔が尋常ではないくらい赤くなっている事に気付いた。割とシャレにならないくらい赤くなっていたので、彼は思わず心配して彼女の顔を横から覗き込んだ。

「亜矢さん、顔真っ赤だけど大丈夫？」

「ひゃい!!」 ダイジョブです!?! さあ早く食べちゃいましょう今日は大事な中間発表ですからね!!」

「あ、亜矢さんそんなに急いで食べたら……」

亜矢は気恥ずかしさを誤魔化すように、バターを塗った食パンを口に突っ込んだ。それをを見て仁が彼女を制止するが、時すでに遅し。

勢い良く突っ込んだパンが、彼女の喉に詰まった。

「ん、っ!? ん、くん、くん!?」

「だから言つたのに。はい、水」

「ん、ん、ん! はあっ!?!」

仁に渡された水でパンを流し込み、窮地を脱した亜矢。まだちよつと咽ている彼女の背を、仁はゆつくりと撫でた。

「大丈夫?」

「はあ、ふう……ありがとうございます。ご迷惑をおかけしました」

「気にしないで。さ、早く食べちゃおう」

「は、はい」

今のが良くも悪くも、亜矢の心を落ち着かせるのに役立ってくれた。怪我の功名とはこの事だ。

その後は何事も無く朝食を済ませ、仁と亜矢は2人揃って家を出て大学へと向かうのだった。

一方ここ傘木社秘密研究区画では、新型ベクターカートリッジの開発と同時にベクターブレスの改良と更なるベクターカートリッジ専用ツールの開発が行われていた。

先日の戦いでルーナに敗北した敏則と共に失われたベクターブレスではあったが、そのデータは随時ここに送られており彼らにとってはそれほど痛い損失では無かった。

なので、研究員達の表情に変化はない。

だが幹部達はそうではなかった。彼らは新たな仮面ライダー……ルーナの登場に頭を悩ませていた。

「まさか、あの女が新しい仮面ライダーになるなんてね」

「敏則が破れるとは予想外だったな。奴は保安警察の中でも腕利きの1人だった。奴が欠けた事は単純に戦力的にも痛い損失だぞ」

「どうする？ もうこの際だから俺ら全員で殴り込みかけるか？ いくら何でも俺ら4人が全員で掛かれば勝てない相手じゃねえだろ？」

幹部4人の内、グアニン・シトシン・チミンの3人が深刻な表情で話し合っている。彼らにとって失敗の連続とはそれ即ち自身の存在意義が薄れる事であり、存在意義の危機は彼らの命に直結する問題だった。

今の状況は決して楽観し出来るものでは無かった。

そんな中でただ一人、アデニンだけは焦る事無く冷静に構えていた。彼は幹部達の輪に混ざらず、雄成の隣でベクタープレスの改良を眺めていた。

「……宜しいのですか？」

「ん？ 何がだ？」

「仮面ライダーの事です。あの3人が言う通り、我ら4人が掛ければ勝てない相手ではないと考えますが？」

しかしアデニンは会話に加わっていないだけで、考え自体は彼らと同じであった。ただ彼が3人と違うのは、彼は基本的に勝手な行動も考えも起こさない。彼が動くのは雄成に命令された時だけであり、言われなければ例え目の前に宝が転がっていても彼は無視した。

アデニンは、雄成の忠実な駒なのだ。

それを理解している雄成は、必要なければアデニンに対し余計な事は言わない。他の幹部と違って、彼には言う必要がないからだ。

だが逆に言えば、彼は命令すればそれがどんな内容であつても絶対に実行する男であつた。

新たに調整が完了したベクタープレスを、雄成はアデニンに手渡す。

「こいつはお前に託す。どう使おうが自由だが、コイツは証拠隠滅用の機能を外してある。言いたい事は分かるな？」

「はっ」

「では行け。そしてデータを集めろ」

先程の質問に対する答えも聞かぬまま、アデニンは雄成の指示に従いその場を後にする。

言われるがままにするだけのアデニンの姿を、他の3人の幹部は何とも言えぬ顔で見送った。

と、その彼の背に雄成が声を掛けた。

「前にも言ったが、私は勝利など求めていない。私が求めるのは栄光だけだ。その事を中心に刻んでおけ」

それは果たして、誰に対しての言葉だったのか。アデニンは少し考える素振りを見せた。

「……肝に銘じます」

雄成からの言葉に対し、アデニンは背中越しに頭を下げ改めてその場を後にした。

彼を送り出した雄成本人は、そんな部下に特に興味も無い様に室内に並んだベクターカートリッジの入った試験管の列を眺めていた。

「——以上です」

仁と亜矢は、白上教授を相手に卒論のテーマの纏めに関する中間発表を行っていた。2人の本分は学生、いくら仮面ライダーとして戦っていようが、卒論は免除されない。

仁は滞りなく発表を終え、亜矢もまた教授を納得させるだけの発表が出来ていた。教授が満足そうに頷いたのを見て、亜矢は心の中で仁に感謝した。

「うむ、2人ともしつかり纏める事が出来たようだね。大変結構。君達の場合他の学生以上に厳しい状況での卒論になるだろうが、頑張ってくれ。勿論こちらも出来る限り便宜は図るから」

「でも免除にはならないですよね？」

「それはそうさ。君達の今後の為にも、卒論は必要だよ」

そんなに旨い話が無い事は分かっていたが、それでも仮面ライダーとして戦いながら卒論を熟さなければならぬ事に亜矢は思わず肩を落とす。仮面ライダーとして戦う

事を選んだこと自体に後悔は無いが、それとこれとは別問題だった。

そんな彼女の肩に、仁が手を置いた。亜矢が彼を見ると、彼は小さく頷いた。

「大丈夫。俺も手伝うから」

「でも仁君も卒論あるじゃないですか」

「これ位なら同時並行でやれるよ。問題ない問題ない」

「迷惑じゃありません？」

「全然？ 寧ろこれ位頼つてよ」

自信に満ちた仁の言葉に、亜矢はこれ以上ない頼もしさを感じずにはいられなかった。

だが同時に、こんな所でも彼に頼ってしまう自分に情けなさを感じずにはいられない。

亜矢は決意した。可能な限り仁の手助けは無しで、卒論を完成させて卒業資格を手に入れよう。

飽く迄自然体な仁と意気込む亜矢の様子に、白上教授は小さく笑みを浮かべる。見ていて飽きない2人だ。

「さて、堅苦しい中間発表も終わった事だし、ここらでティータイムとしよう」

白上教授は2人の対面のソファから立ち上がると、部屋の一面に置かれている

ティーセットをテーブルの上に置き、ガスコンロで湯を沸かし始めた。

仁と亜矢は教授が湯を沸かし紅茶を淹れ始めたのを見て、肩を回したり両腕を伸ばしたりして体を解した。亜矢はともかく、仁も流石にこう言う場では肩も凝るらしい。

今この研究室に居るのは、この3人の他には峰と拓郎の計5人。その2人も、教授がティータイムの用意をしたのを見て作業の手を止め、椅子を持ってやってきた。仮に無視して作業を続けても、どうせ教授の方からお呼びが掛かる。

それに何より、教授の淹れる紅茶は絶品だった。今まで紅茶なんて緑茶の香り違い程度にしか考えていなかった仁も、認識を改める程度には美味な紅茶を教授は淹れていた。

渡されるなり早速それに口を付ける仁。次に渡された亜矢は、最初に香りを楽しんでからゆっくり口を付けた。峰と拓郎も思い思いに渡された紅茶に舌鼓を打っている。

暫し紅茶の香りや味を楽しんでいた5人だが、ここで昨夜亜矢が仁の家に泊った事に興味を抱き亜矢に訊ねた。

「そう言えば双星さん、昨日は門守君の家に泊めてもらったんだって?」

「ん?!——けほつ……ええ、まあ……」

突然の質問に、亜矢は飲んでいた紅茶が気管に入りかけ少し咽た。噴き出す事は堪えたが、それでも少し口の端から紅茶が零れたので、亜矢は慌ててハンカチで口元を拭い

ながら答えた。

正直、先日……と言うか今朝の事は今思い出してもまだ顔が熱くなる。それだけで勤の良い人には何かがあつた事を悟られそうなので、出来るだけ考えないようにしていたのだが……。

「ほうほう！ それで？ どうでした彼の部屋は？ と言うかどんな一夜を！」

「あ、あの先輩!? そ、それに關しては、えつと……」

「そこら辺にしとけ宮野。双星さんも困つてるだろうが」

何とか今朝の事を秘密にしたい亜矢がしどろもどろになつていると、拓郎が助け舟を出してくれた。彼はお代りの紅茶を教授に入れてもらいながら、峰に呆れた目を向けている。

「何言つてるんですか！ 若い男女が一つ屋根の下で一夜過ごしたんですよ！ これでも起こらなかつた訳がないでしょう!」

「だからと言って他人のプライベートに土足で上がろうとするな」

そう言つて拓郎は紅茶を一口啜つた。峰はそれに対して、心外だという顔で反論した。

「良いじゃないですか、これくらい！ こう言う甘酸っぱい話は乙女の嗜みでしょうが！」

「……乙女？」

「ちよつと待つててください。何でそこで疑問符を付けるんですか？」

「自分の胸に聞いてみる」

拓郎は心底どうでもいいと言いたげに相手をしていたが、峰にとっては割と死活問題なのか結構必死で訂正を求めた。

「わ、私だつて女らしいところありますよ!？」

「生物学的にな」

「その言い方酷くありません!？」

「だから自分の胸に聞け。そして今までの行いとか私生活を振り返つてみる。話はそれからだ」

かなりボロクソに言われて、峰の目に思わず涙が浮かぶ。そのまま峰は継るように唾矢に抱き着いた。

「ふ、双星さくん!？」

「わっ!?! ちよ、先輩!？」

「双星さんは分かってくれますよね!?! 拳で語りあつた仲でしょ?！」

「ゴメン先輩。その発想出てくる時点で俺、先輩を乙女扱いは出来ないや」

「普通の乙女は拳で語り合う、なんて表現使わん」

「宮野君はもう少しお淑やかさを学ぶべきだろうね」

亜矢は何も言わなかったが、代わりに男性陣からはこれでもかと辛辣な評価が飛び峰の胸に突き刺さる。特にそれまで黙っていた教授の一言は、結構大きなダメージだったのか峰は胸を抑えてその場に崩れ落ちる。

「分かってる……分かってますよ。年頃の女性が遺伝子と機械に囲まれて寝袋で一夜を明かすなんて女らしくないって。それでも女らしさを夢見たって良いじゃないですか……」

「夢って便利だね。誰でも自由に見れるから」

「門守君、もしかして私が双星さんを蹴り飛ばしたの根に持ってます？」

峰からの質問に、仁は何も答えず紅茶を啜る。

亜矢にはそれが、峰の言葉を肯定しているように見えた。何となくだがそんな気がする。

現金とは思うがそれを嬉しく感じてしまい、しかし峰に対しては同時に申し訳なきも感じずにはいられなかった。あれも偏に亜矢を思つての事ではあつたのだ。あれがなければ亜矢は決意を固められなかったかもしれない。

そんな考えなど露知らず、拓郎は峰の女らしくない所を次々と指摘した。

「大体にしてお前、部屋の片付けも碌にできないだろ？」

「出来ないんじゃないんです!？」

「尚悪いわ。しかも部屋の有様が手に負えなくなった時、頼るのが他の女友達じゃなくて俺だったのはどういう事だ?」

「力仕事になりそうだから男手に頼って何が悪いんですか!？」

「お前羞恥心無いのか? 下着とか普通に放置されててこっちは目のやり場に困ったんだぞ」

拓郎の言葉は何処までも正論であり、次第に峰は言葉に詰まり反論できない事が増えた。

するとそれを見て、仁は徐に亜矢の服の裾をクイクイと引つ張った。ちようど半分になった紅茶に角砂糖を入れようとしていた亜矢は、突然の彼の行動に首を傾げた。

「何ですか?」

問い掛けるが、仁は何も言わず亜矢をその場から移動させた。見ると教授も峰と拓郎から距離を取っている。一体何が始まるのかと亜矢が困惑していると、峰の肩が震えているのに気付いた。

その様子に亜矢も嫌な予感を感じ始めたが、拓郎はそもそも彼女を見ていないのでその変化に気付いていない。

そして――

「う……………」

「ん？ 宮野？」

「うがあああああつ?!」

何も言い返せなくなった峰の怒りが爆発し、テーブルをひっくり返す勢いで拓郎に飛び付いた。

「うおつ?!」

「女らしくなくて悪かったなコンチクショウ?! んな事こつちが一番分かってるつての?!」

「だ、だったら少しは改善する努力をすればいいだろうが?!」

「五月蠅い五月蠅いうるさあああ?!」

そのまま今度は取っ組み合いを始める2人を、亜矢は何とも言えぬ顔で見つめ仁は我関せずと空になったカップをシンクに持っていった。

「と、止めなくていいんですか？」

「放っておきなよ。多分その内落ち着くつて」

「うむ。こう言う時は第三者が口を挟むべきではない。ここに居るとばつちりを食うかもしれないな。ラボの方に行こうか」

2人は教授に促され、研究室を後にしラボへと向かう。3人がラボへと向かった事

に、峰と拓郎は気付いた様子も無く取っ組み合いを続けていた。

2人をラボの方へ連れてきた教授は、空いてるスペースに椅子を用意し2人をそこに座らせた。

教授に促され椅子に座る仁と亜矢。2人が椅子に座ると、その瞬間教授が真面目な顔になり2人に問い掛けた。

「さて、落ち着いたところで、君達に聞きたいことがある」

「何ですか、急に改まって？」

「門守君の話では、先日のファッジ……ワスプファッジだったかな？ そいつはベクターカートリッジを直挿しではなく、ブレスレット型のツールを用いた。そうだね？」

教授の言葉に、亜矢は先日シヨツピングモールで2人の前に現れた敏則の事を思い出す。言われてみれば確かに、あの男はそれまで直に体に挿していたベクターカートリッジを、腕に装着したブレスレットに装填してファッジに変異していた。

明らかに今までのファッジとは違う。言葉も流暢だったし、見た目もキメラっぽさが減っていた。

その評価に、白上教授はかなり深刻そうな顔になった。

「恐らく連中もドライバーの必要性を感じたんだろう。直挿しは手軽な反面、悪影響も大きい。メリット以上にデメリットの方が大きいなら、よりリスクの少ない方法を選ぶ

のは道理だ」

「これからは、そう言うドライバーを使ったファッジが相手になるって事ですか？」

「その可能性は高い。気を付けた方が良さだろう」

そんな感じに、今後の脅威に関する話をしてその日は解散となった。

2人がラボを出ると、峰と拓郎はまだ取っ組み合いをしていたので流石に亜矢が宥めようとしたが、仁がそれを制止して峰と拓郎は研究室に放置された。

その帰り道、亜矢は仁の運転するトランスポソンの後ろに乗って送ってもらった。

ただその道中の、彼女の表情は暗い。その理由は一つ。今後の戦いが今まで以上に厳しくなることが予想されるからだ。

傘木社は着実に技術を進歩させ、仁が変身する仮面ライダーに対抗しようとしている。これまでは何とか戦えてきたが、今後どうなる事か。

勿論、亜矢自身仮面ライダーになって戦う事を選んだ事に後悔はない。だがそれと戦いが厳しくなることに対する思いは別問題だ。

戦いが厳しくなるという事は、自分だけでなく仁までもが傷付く可能性が高いという事である。自分が傷付くより、彼が傷付く事の方が亜矢は恐ろしかった。

知らず、亜矢が仁に抱き着く腕の力が強くなる。

それに気付いてか、仁は亜矢のマンションに向かわず少し遠回りする道を通った。考え事をしていた亜矢は、周りが見知らぬ景色になっているのに気付くのが遅れた。

「あれ？ 仁君、ここは？」

2人が辿り着いたのは、川沿いの遊歩道だった。仁は器用に遊歩道に入ると、川沿いにバイクを止めヘルメットを脱いだ。

「何か亜矢さん、思い悩んでるみたいだったから、ちよつと寄り道してゆっくり話そうかと思つて。いきなり亜矢さんの家にかかる訳にもいかないし」

別に仁であれば、いきなり家上げる事になつても構わなかつた。流石に恥ずかしくて言えないが。

もつと言えば、仁の家に何時でもお邪魔したかつた。こっちは口が裂けても言えないが。

「……怖い？」

「え？」

亜矢が内心で変な事を考えて軽く赤面していると、仁が口にしたのがそれであつた。突然何をと亜矢が首を傾げると、仁は真つ直ぐ彼女の顔を見ながら答えた。

「これから先、きつと敵は今まで以上に強くなる。それこそあのピラニア野郎とかとは比べ物にならないくらい」

言われて亜矢は表情を曇らせた。あの時は仁も大怪我をして、亜矢も気が気ではなかった。

今後あれに匹敵するかそれ以上の怪我を仁がするかと思うと、胸が締め付けられるような気になる。

仁にはそれが、亜矢が自分が傷付くのを恐れているように見えた。

「亜矢さんだつて、ただじゃ済まないかもしれない。それでもまだ、戦う気はある？」

真つ直ぐ自分の目を見て問い掛けてくる仁の顔を、亜矢は正面から見返した。彼の目には、彼女を心配する気持ちが溢れている。彼がこんなに誰かの事を心配する事もそうは無いだろう。この3年間、彼と学生生活を送ってきた亜矢にはそれが分かった。

分かったからこそ、逆に心が落ち着いた。

「……あります。私はもう、何も出来ずに誰かを失うような事になりたくは無いです」
そう言うのと亜矢は、徐に上着の裾をたくし上げ腹を露にした。突然の彼女の行動に面食らう仁だが、露になった腹に見えたものに目を丸くした。

「その、傷は……？」

亜矢の腹には、大きな傷跡が付いていた。以前ウルファツジに上着の前を破かれたことがあったが、あの時はそんなところまでまじまじと見ている暇が無かったから気付かなかつた。

「実は私、双子の姉妹が居たんです。名前は、真矢」

仁が亜矢の腹の傷に注目していると、亜矢はその傷の経緯を語った。

「今から4年前……私が大学受験に合格した時、真矢は合格記念につて私を旅行に連れて行ってくれたんです。でもその道中、事故に巻き込まれて……」

『『居た』つて過去形つて事は……』

「はい。真矢はその事故で命を落としました。実は私もその時、あと一歩で命を落としていたところだったんですが……」

その時の事を思い出し、亜矢は今でも己の無力感に苛まれた。

亜矢は当時の事故で内臓を大きく損傷しており、そのままでは真矢共々命を失っていた。だがその命を繋いでくれたのは、他ならぬ真矢であった。

真矢は事故で心臓を鉄筋で貫かれており即死していたが、他の臓器には損傷が無かった。なので、無事な真矢の臓器を移植する事で亜矢の命は生き永らえたのだ。

「……私が目を覚ました時には、真矢は既に何も言わなくなっていました。別れも言えず、気付いた時には助けられていたんです」

だからこそ、今度こそ亜矢は何も出来ないまま親しい誰かが目の前から居なくなるような事は避けたいと願っていたのだ。そして仮面ライダーとして戦えば、それが出来る。

「私はやらずに後悔する様な事はしたくありません。例え危険だったとしても、私は戦います。仁君の隣で」

そう告げた亜矢の目には、とても強い意志が宿っていた。何があっても揺らぐことのない、鋼の様に粘り強い意志だ。

その意志を感じ取り、仁はフツと小さく笑みを浮かべるとそつと彼女の体を抱きしめた。

「あ、あの、仁君？」

突然の抱擁に戸惑う亜矢だが、仁は構わず彼女に語り掛けた。

「ありがとう……だけど、亜矢さんも無理はしないで。亜矢さんが俺を心配するみたい
に、俺も亜矢さんを心配してるんだから」

「仁君………はい。約束です」

仁の素直な言葉に、亜矢は笑みを浮かべ抱きしめ返した。朝は一方的に抱きしめられるだけで心が一杯になったが、自分からも抱きしめ返す事でそれ以上に心が満たされた。気付けば、亜矢は仁の胸板に頬擦りしていた。まるで自分の匂いを擦り付けて、存在を刻む猫のマーキングの様である。

そしてそうすると、必然的に彼の匂いも亜矢に付く。自分に付いた仁の匂いに、亜矢は体が熱くなるのを感じた。

何だか今なら、仁に対して自分の気持ちを告げる事が出来るかもしれない。そう思い
亜矢は顔を上げ、うるんだ瞳で仁の事を見上げながら口を開こうとした。

その時――

「……に居たのか、捜したぞ」

「ツ!?!」

突然見知らぬ人物が声を掛けてきた。その人物は白衣を着ており、一目で医者か研究者
者と思える見た目をしている。

だが纏う雰囲気は医者やただの研究者とは全く違った。2人は直感する。こいつは
傘木社の人間だ。

その男――アデニンが手を振ると、周囲から全身フル装備の兵士達が銃を手に2人を
取り囲んだ。先日の敏則と同じ、傘木保安警察の連中だ。

取り囲まれたと見るや、2人はすぐさま臨戦態勢になる。ドライバーを片手に、何時
襲い掛かれてもいい様に周囲を警戒する。

「団体さんは久しぶりだな……亜矢さん、行ける?」

「勿論。仁君の背中は、私が守ります!」

「無理だけはしないでね」

「仁君こそ」

2人は互いに顔を見合わせ微笑み合うと、同時にドライバーを装着しそれぞれ変身に使うアイテムを手にした。

仁はバツファローとヒューマンのベクターカートリッジ。

亜矢はキャットベクターカートリッジとアダプトキャット。

2人が変身アイテムを手にしたのを見て、周囲の保安警察の面々は自分達もアントベクターカートリッジを手に取りそれを自分達に挿した。

〈ANT〉

周囲の兵士達がアントファッジに変異する。

それに対抗するように、仁と亜矢も変身した。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「行くよ、亜矢さん」

〈CAT Adaptation〉

「はい、仁君」

「変身！」

〈Open the door〉

仁がデイナに、亜矢がルーナに変身した。

姿を現した2人の仮面ライダーを前に、アントファッジ達は一齐に攻撃を開始した。

四方八方からの銃撃が2人を襲う。

襲い来る銃弾を、デイナは前転する事で回避しアントファッジ達に接敵。一方のルーナは、跳躍する事で回避してそのまま飛び蹴りを放った。

「ハッ！」

堂に入ったルーナの蹴りがアントファッジを蹴り飛ばし、そのまま次々と回し蹴りで文字通り蹴散らしていく。時々銃剣で斬りかかってくるが、彼女はそれすらも蹴りで逸らし反撃を喰らわせ次々と倒していく。

デイナの方も負けてはいない。軽やかに動き回るルーナに対し、こちらはパワーと装甲、そして一瞬の見切りでアントファッジの攻撃を紙一重で回避しながら、拳に手刀、蹴りを織り交ぜて叩き伏せていく。

「よっ、ほっ、それっ」

「セイッ！ ヤッ！ ハアッ！」

接近戦で次々と数を減らされていくアントファッジ達。近付かれては勝ち目がないと悟り、距離を取って銃撃を集中させて倒す方向に戦術をシフトさせた。

一斉に距離を取り、弾幕を張り2人をその場に釘付けにするアントファッジ達。デイナは自分の方が装甲が厚いという理由でルーナの前に立ち塞がり、彼女を銃撃から守った。

「仁君ッ!？」

「これ位なら大丈夫。それより亜矢さん、俺を踏み台にして」

「えっ!? あ、はい!」

デイナの指示に、ルーナは一瞬戸惑うがすぐに彼の言いたい事を理解しリプレッサーショットを抜くと、指示通り彼の肩を踏み台にして大きく飛び上がった。

突然上空に飛び上がったルーナの姿に、アントファッジ達は一瞬呆気に取られ反応が遅れる。

その間に彼女は、両手にそれぞれ持った二丁拳銃で撃ち返し次々とアントファッジを仕留めていった。空中と言う不安定な場所でも且つ飛行している訳でもないのに正確な射撃を行う彼女に、デイナは内心で舌を巻く。

残りアントファッジの三分の一ほどが倒れた所で、生き残りのアントファッジは遠距離攻撃できるルーナの危険性に標的を彼女に変えた。銃口が上を向き、デイナへの攻撃が疎かになる。

その瞬間を彼は待っていた。自分への弾幕が薄れたと同時に、彼は一気にアントファッジ達に肉薄した。

しまったとアントファッジ達が再び彼に銃撃しようとした時にはもう遅かった。

「そおらっ」

先程の弾幕のお返しとばかりに、デイナは残りのアントファアジジを叩きのめしている。距離を取って銃撃しようとする者も居たが、そいつらは漏れなくルーナによる射撃の餌食となる。

そうしてアントファアジジ達は物の数分で全滅した。立っているのはデイナとルーナ、そして2人とアントファアジジ達の戦いを静観していたアデニンだけである。

「ん、まあこんなもんか。それで？ アンタはまだやる気あるの？」

「一応言っておきますけど、2対1ですよ」

アデニンが隠し玉を持っている事を警戒するデイナと、特に苦も無くアントファアジジを一掃出来た事でちよつと強気のルーナ。2人が迫る中、アデニンは溜め息を吐くと右腕にベクターブレスを装着した。

それに先日のワスプファアジジの事を思い出し、ルーナが僅かに動揺する。

「そ、それはッ!？」

「さて、データ収集だ。良いデータを取らせてくれよ、仮面ライダー？」

〈SQUID Contamination〉

アデニンがベクターブレスにスクイッドベクターカートリッジを装填すると、その姿をスクイッドファアジジに変異させる。

それは以前、S・B・C・T.を一方向的に蹴散らした時の姿とは異なっていた。ワス

プファツジと同様、より洗練され無駄のないフォルムに変化している。乱雑に生えていた触手は両肩に纏められ、顔も生物臭さが減っていた。

言うなれば今の姿は、スクイッドフアツジ ver. 2と言ったところだろうか。

こいつは今までの敵とは違うという事を肌で感じた2人は、気を引き締め身構える。そんな2人に対し、スクイッドフアツジは恭しく頭を下げた。

「言い忘れていた。私はアデニンと言う。以後宜しく」

「あ、はい、こちらこそ？」

まさか挨拶から入るとは思っていなかったルーナは、呆気に取られながら挨拶を返した。

だが頭を上げた瞬間、スクイッドフアツジは一気に2人に肉薄した。

「あっ!？」

突然の加速にルーナは反応が遅れる。接近してきたスクイッドフアツジが拳を彼女に叩き付けようとしたその時、間に割って入ったダイナがそれを受け止めた。

「おっと」

「ほお、受け止めたか？」

「多分こう来るだろうと思ってたから」

鳥賊は海中でジェット噴射により高速で移動する事が出来る。その加速力は凄まじ

く、種類によっては海上を飛行する事が出来るものすらいた。

本来であれば推進力となるのは海水の噴射だが、ファッジとなった事でその能力が強化されていれば空気圧によるジェット噴射で加速力を得る事が出来ても不思議ではない。デイナはそれを警戒していたのだ。

デイナはそのままスクイッドファッジとの戦闘に入った。放たれる拳を逸らし、お返しに正拳突きを放つ。更には気を取り直したルーナも攻撃に加わった。

しかし――

「ん?」

「え!」

攻撃を当てた瞬間、2人は違和感を覚えた。まるで手応えが感じられないのだ。まるで水で満たされた風船を殴ったような感触。スクイッドファッジの方も全くダメージを感じた様子が見られない。

「フンツ!」

「ぐっ」

「あうっ?!」

2人が攻撃に手応えを感じられない事に呆気に取られていると、スクイッドファッジが反撃に両肩の触手を振るって2人を薙ぎ払った。強烈な一撃が2人を大きく吹き飛

ばす。

「い、今のは!？」

「亜矢さん、来るよ」

「あっ!？」

攻撃が碌に効いていない事に動揺を隠せないルーナを、デイナが宥めると同時に、スクイッドファッジが再びジェット噴射で接近し2人に襲い掛かる。

デイナの拳や手刀がスクイッドファッジの腹部や背中を打ち据え、ルーナのハイキックが相手の頭を蹴り飛ばす。しかしスクイッドファッジは全く堪えた様子を見せず、手で2人をそれぞれ掴むと2人をぶつけ合わせた挙句に投げ飛ばした。

「あああああっ!？」

「ぐうっ!？」

投げ飛ばされた先で折り重なるように倒れる2人。上に重なったルーナが起き上がり、下敷きにしてしまったデイナに手を貸して起き上がらせる。

「仁君、大丈夫ですか？」

「うん。俺は平気。亜矢さんは？」

「何とか。それより、どう言う事ですか？ こっちの攻撃が効いてない？」

「柔らかすぎるんだ。全身がゴムみたいに柔らかいから、こっちの攻撃が皮膚の表面を

伝って分散してダメージになってない」

「どうすればいいと思いますか？」

「考えはある。亜矢さんはリプレッサーショットで攻撃して。流星にあれば効くだろうから」

「分かりました。でも仁君は？」

「烏賊相手にはこれでしょ」

〈DOG〉

〈WHALE〉

デイナはベクターカートリッジを交換し、ドッグホエールフォームとなった。

〈DOG + WHALE Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

ゲノムチェンジし、ドッグホエールフォームとなったデイナにスクイッドファッジが襲い掛かる。先程と同じようにジェット噴射により一気に接近し、右の触手を叩き付けてきた。

デイナはそれを両腕で受け止め、振り払うと反撃にアッパーカットを放った。スクイッドファッジはそれをボディで受け止めるが――

「うづつ!?!」

今度の一撃は、体の芯に直接響いてきた。思わぬダメージにスクイッドファッジは動きを止める。

そこに今度はルーナの攻撃だ。2人から距離を取ったルーナは、スクイッドファッジに対し二丁の拳銃で何発も銃弾を喰らわせた。

「ぬ、ぐうつ!?!」

銃弾は弾かれる事なく、スクイッドファッジの表皮を削る。

「銃弾はまだ分かるが、先程の一撃……そうか、超音波か」

スクイッドファッジは、ダイナの攻撃の絡繰りに気付いた。

ダイナは先程の一撃の瞬間、拳から超音波を放ち攻撃をスクイッドファッジの内側に直接響かせたのだ。表面に対する衝撃には強くても、内側に衝撃を通されては堪ったものではない。

ダイナの攻撃は思いの外大きなダメージとなり、ルーナの銃撃も相まってスクイッドファッジは体力を削られていた。

「今が好機！」

「亜矢さん」

「はいー」

〈ATP Burst〉

デイナとルーナが同時にレセプタースロットルを引く。そして動きを止めたスクイッドファッジに同時に駆け寄ると、同じタイミングで跳びノックアウトクラッシュを放った。

「おおおおおつ!!」

それに対し、スクイッドファッジは両肩の触手をそれぞれ両腕に巻き付け左右の腕を大幅に肥大化させると、その拳で2人の攻撃を迎え撃った。

「ハアアアアアツ!!」

「ウオオオオオオオツ!!」

ぶつかり合う二つの蹴りと二つの拳。両者は互いに拮抗し、デイナ・ルーナとスクイッドファッジの間で激しい火花が飛ぶ。

体感では長時間拮抗していたような気がするが、実際に拮抗していたのは僅かな時間。両者の間でぶつかり合ったエネルギーが限界に達し激しい爆発を起こして、互いに相手とは反対方向に大きく吹き飛ばされた。

「うあ、くう……」

「い、つつつ……亜矢さん大丈夫?」

「はい……いたた」

「デйнаとルーナは互いに手を貸し合いその場に立ち上がる。2人とも今の大きな負担となったのか、やや足下が覚束ないがそれでも何とか立つ事が出来た。」

一方、スクイッドファツジの方はと言うとこちらも無傷では無かった。特に被害が甚大なのは両肩から生えていた触手であり、本体はそこまででもないが両肩の触手は全滅と言っても過言ではない状態だった。

スクイッドファツジは暫し自分の両腕を見て、触手が全滅したのを見ていた。が、徐に肩を震わせると小さく笑い始めた。

「ふ、ふふふ、ふははははは……」

スクイッドファツジは一頻り笑うと、突然踵を返してその場を去ろうとした。

その背にルーナがライフルモードにしたリプレッサーショットを向ける。

「待ってください！……このまま逃がすと思ってるんですか！……」

相手は明らかに強い。ここで逃がしては、後々大きな脅威になるとルーナは危惧しここで倒そうと躍起になる。

が、銃口を向けられているにも拘らず、スクイッドファツジは全く焦った様子を見せなかった。それどころか寧ろ余裕を感じさせる声色で語り掛けた。

「今日はここまでだ。有用なデータが取れた。感謝する」

「何を——?!？」

「亜矢さん、ストップ」

「仁君？」

引き金を引こうとするルーナだったが、デイナがそれを宥めた。彼はリプレッサーショットの銃身に手を置いて下げさせる。

彼の行動にルーナが何故？　と言う目を向けるが、彼はそれには答えず黙って去って行くスクイッドファッジを見送った。

スクイッドファッジの姿が見えなくなったのを見計らい、2人は変身を解除した。元の姿に戻るなり、亜矢は仁に何故やつを見逃したのかを訊ねた。

「仁君、何故あのファッジを行かせたんですか？」

「下手に藪を突かない方が良いつて話。あいつ、まだ余裕を残してた。最大の武器の筈の触手が無くなったのによ。多分だけどあいつの触手、無くなってもすぐに再生するんだと思う」

仁の考察に亜矢はギョツとなってスクイッドファッジが去って行った方を見た。もうその姿は見えないが、もし仁の言う通りだとすればあの余裕そうな態度も納得できる。

亜矢は改めて、敵の底知れなさを知った。後ろから見たり話を聞いているだけでは分からない、本当の強さだ。

思わず不安そうな顔をする亜矢の肩に、仁が手を置いた。

「大丈夫」

「仁君……」

「今一緒に戦って分かった。俺と亜矢さんが一緒ならどんな相手にも負けないよ。さつきは見逃された感じだったけど、次会った時はギャフンと言わせてやろう」

仁にそう言われて、亜矢は心が軽くなるのを感じた。知らず知らずの内に感じていたプレッシャーが、仁の言葉で何処かへ行ってしまったらしい。

全く根拠はない話だが、彼の言う通り。自分と彼が力を合わせればどんな相手にも負けないと、そう思えた。

「……はいー」

亜矢は仁からの激励に、透き通った笑みで答えるのだった。

第13話：君のだから

ここ最近、仁は卒論と並行してラボに籠って何かをしているらしい。峰の話では、何でもデイナのパワーアップアイテムを作っているのだとか。

事の発端は先日、スクイッドファツジ相手に余裕を持って相手されてからだ。あれで仁は、今のままでは戦力不足になると考え、ただのエヴォリューションフォーム以上の能力をデイナに持たせる為に教授の知識と峰の技術を用いてデイナのパワーアップアイテムの作成に取り掛かったのだ。

正直最近の仁は少し無理をしているのではと言う気もしなくはないが、亜矢にもやらねばならない卒論があるので彼にばかりかまけてもいられない。

亜矢は自分の卒論の研究を進めつつ、仁の事を気にかけるという毎日を送っていた。そんな時、彼女に声を掛けてくる者が居た。先日亜矢にアドバイスをして仁とのデートを考案した美香である。

彼女は大学敷地内にある喫茶店で亜矢が一人コーヒーを飲んでいるのを見つけると、面白い物を見つけたとでも言わんばかりに声を掛けてきた。

「やっほー、亜矢！ 辛気臭い顔してどうしたのよ？」

「篠崎さん？ 私、そんな顔してました？」

「思いつきりしてたわよ。もしかしなくても気になる彼の事？」

「う…………ええ、まあ…………」

彼女相手にはへ々な誤魔化しは効かないと考え、今度は亜矢は素直に認めた。思いの外あつさり認めた亜矢に美香は若干手応えの無さを感じつつ、2人の関係の進展などが気になるのでその事について訊ねた。

「ふくん…………それで？ 何も関係が進展しなくて気落ちしてるの？」

「いえ、そう言う訳では……………ただ最近、仁君少し頑張り過ぎてるような気がして…………」

「ツ!? へえ…………」

美香は亜矢による仁の呼び方が、苗字ではなく名前になってる事に気付いた。それだけで2人の関係が以前に比べて進展している事を察する事が出来たが、今重要なのはそこではないので今は黙っておくことにした。

「なるほどなるほど。つまり亜矢は門守君が自分に構ってくれなくて、寂しい思いをしているって訳か」

「そこまでは言ってませんよ。ただ純粹に、彼が無理し過ぎていないか心配ってだけです」

仁が結構タフだという事は知っている。だがタフだからと言って無茶をしても良いという理由はない。タフだろうが何だろうが人間は適度に休息を挟まなければ。

しかし仁の事だからそれを普通に説いたところで聞いてはくれないだろう。

いや、以前に比べて親密度が上がった亜矢が相手であれば、或いは縫りついで言い聞かせれば聞き入れてくれるかもしれないが、流石にそこまでやろうという気にはなれなかった。何だかそれは仁の自分に対する信頼とかを利用してゐる気になる。

どうすればいいかと亜矢が悩んでいると、美香が今度も案を授けてくれた。

「それじゃあさ、亜矢が門守君を労ってあげればいいんじゃないの?」

「労う?」

「そうそう。手作りのお弁当作るとか、お茶を淹れてあげるとか。些細な事でもいいから影ながら門守君を支えてあげれば彼も亜矢の気遣いを気にして少しは肩の力を抜いてくれるかもよ?」

「そんなものでしょうか?」

「さあ? でも門守君って結構他人に優しい所もあるみたいだし、亜矢が優しく接してあげれば門守君もそれに応えてくれるんじゃない?」

言われて亜矢は考えた。確かに仁であれば、邪魔をしたりするような事をしなければこちらからの思い遣りを持った対応に対して邪険に扱うような真似はしないだろう。

それに——ちよつと打算的になるかもしれないが——影ながら支えてやれば、仁からの心象も更に良くなりいざ告白した時に受け入れてもらえる可能性が上がるかもしれない。いやそれどころか、彼に惚れさせて向こうから告白してくれるかも？

想像して亜矢は思わず赤面してしまった。そしてそんな彼女の様子を、美香が心底楽しそうに眺めていた。

自分にニヤニヤとした笑みを向けてくる彼女に気付いた亜矢は、慌てて姿勢を正し咳払いをして顔を引き締めた。が、顔はまだ赤いままなので全く意味がない。

「んん！ とりあえず、アドバイスありがとうございます。ちよつとやってみます」

「ほい、頑張れ〜！………とこゝろで亜矢？」

「何ですか？」

亜矢が気を取り直したのを見て、美香は今までず〜と指摘したかった事を口にした。

「門守君との仲は進展したみたいね？」

「え!？」

「だってさ、彼と名前呼び合う仲になったんでしょ？ この間まで亜矢も彼の事を「門守君」って呼んでた筈だもんね？」

「——あ!？」

亜矢は己の迂闊さを呪った。そう言えば、自分は他人を基本的に名字で呼ぶ。この大学内で、彼女が名前の方で呼ぶのは現時点で仁だけだ。勘の良い人物であれば、これだけで2人が特別な関係になった事に気付いてしまう。

美香はその勘の良い人物の1人であった。

まだ恋人関係ではないが、仁とは特別な関係である事を第三者に悟られた亜矢は顔を真つ赤にして俯いた。その様子を美香はとても楽しそうに、そして微笑ましく見ている。

「ま、頑張りなさいな。私が言うのもあれだけど、彼は良い男よ」

美香はそう言って亜矢の肩を叩いた。叩かれた亜矢は、顔を上げる事無く美香の言葉に無言で頷く事で答えた。

仁が良い男だなんて事は、言われるまでも無くきつとこの大学の誰よりも分かっている………と。

その後、喫茶店を後にした亜矢は真つ直ぐ白上研究室に戻った。

表の研究室内には仁の姿は見られない。どうやらまだラボに籠っているらしい。

そのまま秘密のラボに入ると、そこでは案の定仁がここ最近全く変わらぬ様子でコンソールと向き合っていた。

「使うのはバッファローとヒューマンで………んん、やつぱりこうした方が………いや———」

仁は何やらブツブツ呟きながらキーボードを叩いている。あれで自分の卒論研究はちゃんと進めていると言うのだから、一体彼の一日のスケジュールはどうなっているのかと気になって仕方がない。

まあそんな事は正直どうでもいい。気にはなるが、亜矢が気にしても仕方がない。

今亜矢が気にするべきは、如何にして仁を労うか。これに尽きた。

とは言え悩んでも仕方がないので、今出来る事からやろう。と言う訳で、とりあえず今仁に一番受け入れてもらえる労いとして茶の一杯でも淹れてリラックスさせる事にした。

ラボにある給湯スペースに向かい、湯を沸かして茶葉を用意する。

(流石に教授には及ばないかもだけど……)

自分でやってみて分かるが、白上教授は本当に紅茶の淹れ方が上手い。同じように淹

れている筈なのに、明らかに教授が淹れた紅茶の方が美味しいのだ。一度コツがあるのかと聞いたことがあるが、教授自身何か特別な事はしていないと言う。

果たして本当に特別な事はしていないのか、それとも何か秘訣があるが隠しているのか。

等と考えていたら紅茶が出来た。カップに注ぎ盆に乗せて仁と、ついでに同じくラボで何やら作業している峰にも持って行ってやる。

「お茶入りましたよ」

「おー、ありがとう、双星さんー」

峰は横からスツとカップを差し出すと、作業の手を止めてそれを受け取ってくれた。香りを楽しみ、一口流し込んでほっと一息つく。

仁にも同じように横からカップを差し出した。

「仁君、お茶が入りましたよ？」

「ん〜……」

「……………ここに置いときますからね」

まあ分かつてはいたが、仁はカップを差し出されても聞いているのかいないのか分からない反応しか返さなかった。かなり集中している様子なので、余程の事がない限りは大した反応は返ってこないだろう。

亜矢はそんな彼に、小さく溜め息を吐きながら邪魔にならない位置にカップを置いた。仁は特に気付いた様子も無く、カップを無視してキーボードを叩き続けた。

これは前途多難そうだ。己の恋路の先行きに不安を感じ、亜矢が盆を抱えて溜め息を吐き近くの椅子に腰かけた。

その様子を峰が眺めている。視線は仁と亜矢を行ったり来たりしていた。

と、仁が徐にノールックでカップを手に取り口に運んだ。何だかんだ言いつつ、喉は乾いたのだろう。視線はモニターに向けながら、カップを口に付けて紅茶を飲んだ。

すると次の瞬間、仁の手が止まり視線がモニターからカップに移った。突然彼が動きを止めた事に、亜矢だけでなく峰も彼の次の動向に注目する。

(もしかして、口に合わなかったかな?)

最近も彼も白上教授の淹れる紅茶で舌が肥えているので、もしかすると亜矢の淹れた紅茶がお気に召さなかったのかもしれない。

亜矢が不安を感じていると、2人が注目する前で仁が再び動き出した。カップの中身の香りを堪能するように匂いを嗅ぐと、残った紅茶を一気に飲み干した。

そして空になったカップを暫し眺めると、亜矢に声を掛けた。

「亜矢さん」

「は、はい?」

「お代わり貰ってもいい?」

「あ……………はい!」

気付けば亜矢は花が咲いたような笑みを浮かべて、仁からカップを受け取るとウキウキした足取りで給湯スペースに向かった。

そのまま鼻歌交じりに新しい紅茶を淹れる。

「♪~~~~♪~~~~♪~~~~」

とにかく嬉しかった。明確に言葉に出した訳ではないが、仁は確かに亜矢が淹れた紅茶を『美味しい』と感じてくれたのだ。

チラリと仁の方を見れば、キーボードから体を離し椅子の背凭れに体重を預けて体をリラククスさせている。当初の目的であった、仁を労い彼の負担を少しでも和らげる事にも成功した。

その事に亜矢はますます笑みを深める。

そんな彼女に、峰がそつと近付き話し掛けた。

「良かったわねえ、双星さん?」

「み、宮野先輩!」

「門守君、双星さんの淹れた紅茶美味しいって」

「……………はい」

頬を赤く染めながらも峰の言葉に答え、新しい紅茶を淹れ仁に持っていく。

紅茶を受け取った仁は、今度は亜矢の目を見ながら受け取った。

「仁君、はい」

「ん、ありがとう」

受け取った紅茶を、仁は香りから楽しみ今度はゆっくり口に流し込んでじっくり味わう。

亜矢の淹れた紅茶を堪能する仁の様子に、峰が興味本位で問い掛けた。

「ねえねえ、門守君？」

「ん？ 何です先輩？」

「ぶっちゃけ、教授が淹れたのと双星さんが淹れたの、どっちの紅茶が美味しかったですか？」

「先輩ッ!？」

いきなりなんて事を聞くと、亜矢が慌てて峰を取り押さえようと後ろから羽交い絞めにする。

じゃれ合いを始めた2人を気にせず、仁は真剣な表情で考えながら紅茶を一口飲んだ。

「ん……教授のも亜矢さんののも美味しいけど……」

「美味しいけど？」

峰の事を羽交い絞めにしながらも、仁の答えは気になるのか峰と共に仁の言葉に耳を傾ける。単純な興味に関しては峰より強いのか、彼女を押し退けるようにして聞いていた。

「……何時でも飲みたいのは亜矢さんの淹れてくれた方かな？」

「あ——」

「味はどっちもそんなに変わらないと思うんだけど、何て言うか……亜矢さんが淹れてくれた方が良い。……うん、亜矢さんの方が良い」

そう言つて頷きながら仁は紅茶を飲み干した。

彼の答えに峰は物凄く楽しそうに笑みを浮かべ、自分を羽交い絞めにしてゐる亜矢を見た。

対する亜矢はと言うと——

「か、かかかかか、顔洗つてきます!？」

放り捨てる勢いで峰の体を放すと、物凄い勢いでラボを出ていった。その顔は茹蟄かと言う程真っ赤に染まっており、嬉しさと恥ずかしさからか目は潤んでいた。

慌ててラボを出ていく亜矢の後姿を目を丸くして見送つた仁は、あの反応の理由がイマイチ分からず首を傾げていた。

「亜矢さん？ どうしたんだろ……先輩分かります？」

亜矢の行動の理由が分からず近くに居た峰に助言を請うが、彼女は笑いを堪えるので精一杯でそれどころではない様子だった。

峰はおかしくておかしくて仕方なかった。この2人は本当に見ていて飽きない。特に恋愛関係になると、恋愛を理解している亜矢に対して、色恋沙汰を理解していない仁の天然っぷりが刺さっていた。

お陰で仁の反応や挙動に対する亜矢の反応が面白くて仕方ない。

「先輩？」

笑ってばかりで何も答えてくれない峰に、仁が再び声を掛けると彼女は何とか笑いを引っ込める。

「ん、ああ、いえ……。んん！ 大丈夫ですよ。ええつとそれで、双星さんの反応でしたっけ？ 大丈夫ですよ。別に機嫌を損ねたとか言う訳じゃありませんから」

「あく……………そうですか」

峰の答えに仁は何処か釈然としないものを感じつつ、適度な休憩で気分もリフレッシュしたので作業を再開するのであった。

因みに亜矢が戻ってきたのは、それから数分ほど後の事であった。

仁と亜矢が日常を謳歌している頃、アデニンは一人で明星大学近くの街中を当てても無く彷徨っていた。

彼は求めていた。更なる実験サンプルを。

あの2人……仁と亜矢は最高の実験対象だ。試作品のベクタープレスとは言え、その能力をまだまだ活かせる余地を見せてくれた。あの2人との戦闘データを収集すれば、更なる技術発展が望める。

その為には、自分以外に実験のサンプルとなる奴が必要だった。また自分がベクタープレスを使用していいが、他の人間、他のベクターカートリッジを用いた場合の能力査定もやっておきたい。

そんな事を考えながら歩いていると、ガラの悪い3人の男が目の前から歩いてきた。見た所3人共若い。恐らくは明星大学の学生だろう。明星大学は大学としてレベルは高いが、それでも何割かはああ言う学生も居る。学生全体から見ればごく僅かだろうが。

その3人の1人と、アデニンの肩がぶつかった。アデニンは特に気にする事なくそのまま歩き去ろうとする。

だが3人の学生は彼を見逃さなかった。肩をぶつけられた学生はアデニンの肩を掴み、残りの2人は彼を威圧するように取り囲んだ。

「おい待てよ!!」 テメエ、人にぶつかっておいて謝りも無しか、あ?」

「こんな街中でも白衣脱がねえとは、相当なガリ勉野郎みたいだな? なんつつたつけ、あの変な奴?」

「門守だろ、門守 仁。あいつ以外にも変な奴が居たとは初耳だぜ」

3人はアデニンが見た目優男で白衣を着ているという事で、腕つぶしの弱いガリ勉学生か何かかかと思っているのだろう。下品な笑みを浮かべ言いたい放題言っている。

だが彼らの口から仁の名前が出た瞬間、アデニンの目の色が変わった。アデニンは素早く振り返ると、懐に手を突っ込みそこからベクターカートリッジを2つ取り出し起動状態にする。

〈JELLYFISH〉

〈STARFISH〉

取り出して起動状態にした2つのベクターカートリッジを、アデニンは躊躇なく自分の肩を掴んでいる男とその隣に居る男に挿した。

「うぐっ!？」

「なん——!？」

アデニンが挿したベクターカートリッジから、超万能細胞が男達の体に流れ込みその体を変異させる。

一方は全身が半透明で体の至る所に触手を持つ、クラゲの性質を持ったジェリーフィッシュユファッジに。

もう一方は全体のシルエットが五芒星の星形で、体の中心に口の様な部位があるヒトデの性質を持つスターフィッシュユファッジに変異した。

「え!？ な——!？」

ついさつきまで一緒に居た友人が化け物に変異した事に、残りの1人が動揺を露にする。

そんな奴に構うことなく、アデニンは自分もベクターカートリッジを取り出し今回は直挿してファッジに変異した。

〈SQUID〉

「グルウウウウッ!」

「ガアアアアッ!」

アデニンがスクイッドファッジに変異すると同時に、2体のファッジは見境なくスク

イッドファツジに襲い掛かる。

スクイッドファツジはそれを触手で捉えようと、2体を思いつきり地面に叩き付けて大人しくさせた。

「鎮まれ。言う事を聞け」

「シヤアアアア……」

「フウウウウ……」

明確な格の違いを見せつけ、本能的に2体のファツジを黙らせた。そして2体が大人しくなったのを見ると触手を放し、1人恐怖にへたり込んでいる男を見るともう一つベクターカートリッジを取り出しベクタープレスと共に男に投げ渡した。

「は、え？」

「お前にやる。コックを捻って押し込んでから、プレスレットのソケットに装填すれば使える。どう使うかはお前の自由だ。好きにしろ」

「な、何で……?」

その男からすれば訳が分からなかった。目の前の怪物は、一体何故自分の友人を怪物にした上、自分に同じものを渡して好きにしる等と言うのか、と。

「お前が知る必要はない事だ。ああ、安心しろ。そのプレスレットを使えばこいつらの様に理性を失う事は無い。ではな」

スクイッドファッジはそれだけ告げて、その場から音も無く立ち去った。後に残されたのは怪物と化した2人と、未だ地面にへたり込んだままの男のみ。

だが直ぐに男の目には欲望の光が灯った。良くも悪くも、ファッジとなった友人2人を大人しくさせたスクイッドファッジが良いデモンストラーションとなったのだ。理性が保てるなら、スクイッドファッジの様に理性無きファッジと化した友人2人を自分が従えて自由に使役する事も出来る筈だ。

男は誘惑に負けると、左腕にベクターブレスを装着しベクターカートリッジを起動状態にした。

〈OCTOPUS〉

コックを捻り押し込んで起動状態にしたそれを、言われた通りブレスレットのソケットに装填した。

〈OCTOPUS Contamination〉

男はその姿をオクトパスファッジへと変異させると、友人だったファッジ2体と共にその場を移動していった。

日も大分傾き、サークル活動をしている一部の学生等を除いて人気の無くなった明星大学。

仁は言うまでも無くまだ残っており、亜矢もそれに付き合つて残っていた。他にこの研究室で残っているのは、白上教授と峰、拓郎だけである。

ラボには窓がない為、太陽から時間を窺い知ることは出来ない。なのでデイナ用パワーアップアイテムの作製に熱中していた仁は今が夕方だという事に気付いていなかった。

そんな彼に時間を報せるのも、亜矢の役目だ。彼女は後ろから彼に近付くと、徐に彼の両眼を手で覆い隠した。

「……………ん？」

突然の事に少し理解が及ばなかったのか、間を置いてから仁は背後を振り返り自分の視界を隠す亜矢を見た。後ろを振り返ってきた彼の顔を見て、亜矢は少し悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「仁君。そろそろ日も暮れますし、今日はここら辺で切り上げて帰りましょう」

言われて仁は時計に目をやり、確かにいい時間である事を確認して途中までしか出来

ていないデータを保存して電源を切った。

彼個人としてはまだ続けても良かったが、亜矢を付き合わせるのは心苦しい。

なので彼は大人しく引き下がり、亜矢と共にラボを出ようとした。

その時、峰のタブレットからアラームが鳴り響いた。

荷物を纏めて帰り支度を整えていた2人はそのアラームに顔を見合わせ、肩を竦めながら溜め息を吐いた。

「は〜い、ファッジ情報入りました〜。仮面ライダーの2人は元気よく出勤して下さい〜」

2人の何処か疲れたような様子に、峰は敢えておどけるように告げた。彼女の気遣っているのか何なのか分からない言葉に、2人は揃って苦笑を浮かべると互いに頷き合って現場に急行すべく外に停めてある仁のバイクへと向かった。

2人が辿り着いたのは、大学から遠くに離れた所にある公園。そこで数人の若者が、3体のファッジに襲われていた。

「オラアッ!」

「うわあああああつ?!」

若者の1人が、オクトパスファッジに投げ飛ばされる。地面に叩き付けられた若者は、呻き声を上げてそのまま動かなくなる。身動きしているのでまだ生きてはいるよう

だ。

その近くでは、ジエリーフィッシュファッジとスターフィッシュファッジにより他の若者達が痛めつけられている。

まだファッジの攻撃に曝されていない若者は、何故こんな事をするのかとオクトパスファッジに問い掛けた。

「な、何だよお前ら!? 俺達は何したってんだよ!?」

「ああ!?! そんなの決まってるだろうが!」

オクトパスファッジは触手の1つで疑問の声を上げた若者を締め付けながら引き寄せ、彼の問い掛けに答えた。

「この間の仕返しだよ。お前ら、高校生のガキのくせして俺らをコケにしやがったろ。その時の仕返しだよ!」

この3人、以前講義をサボって公園をぶらついていた時にこの高校生の若者たちに絡まれ喧嘩の末に負けて財布の中身を取られたことがあるのだ。

その時は今と同様8人近くの高校生に囲まれ、多勢に無勢で一方的にやられてしまったのだが今はその時の逆に3人で8人を圧倒している状態だった。

以前自分達をコケにしたいいけない高校生成達を、一方的に痛めつけている事にオクトパスファッジはこの上ない爽快感を感じていた。

「あく、堪らねえぜ！ 今なら何でも出来るぜ俺らは。なあお前ら！」

オクトパスファッジは締め付けていた若者を捨てるように放り投げ、仲間のファッジ2体に声を掛ける。だが当然答えは返ってこない。彼らはオクトパスファッジと違って理性が残っていないのだ。話し掛けてもまともな返答は望めない。

何時もなら何かしらの返答がある相手から何の反応も返ってこない事に、若干物足りなさを感じずにはいられないオクトパスファッジ。しかし、そんな気持ちもすぐに薄れた。空しさよりも、強い力に与えられる快樂の方が上回ったのだ。

オクトパスファッジが力に酔いしれていると、トランスポゾンに乗った仁と亜矢が現場に到着した。2人は3体のファッジが高校生達を蹂躪しているのを見ると、彼らを助けるべく動いた。

「亜矢さん、しっかりと掴まってて」

「はー！」

仁は巧みなハンドル操作でファッジ3体を弾き飛ばすと、意識のある者を最初に立たせて彼らに気絶した者達を逃がさせた。

「ほら、早く立って」

「他の方達を、早く！」

「は、はいいいっ!?!」

何が何だか分かっていない高校生達は、這う這うの体で意識のない者を引き摺ってその場を逃げていく。

高校生達が逃げていく時間を稼ぐように、その場に留まり3体のファツジと対峙する仁と亜矢。

対するオクトパスファツジは、見知った人物が2人立ち塞がっている事に思わず声を上げた。

「おいおいおいおい！ 何だ何だ、どういうこつた？ まさかこんな所でウチの大学のマドンナと変人が同時に出てくるとは思ってもみなかったぜ！」

「ん？ 俺達を知ってるって事は——？」

「貴方、もしかして明星大学の学生ですか!？」

亜矢がファツジの正体に驚く。まさか自分達と同じ学び舎からファツジになる者が出るとは思ってもみなかったのだ。

「ま、あり得ない話じゃないでしょ。この間の蝙蝠の奴も、無理矢理ファツジにさせられてたみたいだし？」

言いながら仁はデйнаドライバーを取り出して腰に装着した。それを見て亜矢もボケっとしていた場合ではないと、デйнаドライバーを取り出した。

相手は同じ大学の学生だが、否だからこそ彼らが止めなくてはならない。このまま彼

らに好き勝手をさせてはならないのだ。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

2人がデイナとルーナに変身すると、オクトパスファッジは面食らったように仰け反った。

「嘘だろツ!? まさか、噂の仮面ライダー!?!」

「そう言う事。さ、検証の時間だ」

「これ以上、好き勝手にはさせません！」

ハルバードモードのハイブリッドアームズを構えるデイナと、リプレッサーシヨットを向けるルーナ。2人を前にして、オクトパスファッジは明らかに狼狽した様子を見せた。

「冗談じゃねえ、こんな所でやられてたまるかよ!?! お前ら、行け!?!」

オクトパスファッジがジェリーフィッシュユファッジとスターフィッシュユファッジを喉ける。迫る2体のファッジを、デイナは一人で相手にした。

「こいつらは俺が何とかするから、亜矢さんはあっちの蛸野郎を何とかして」

「分かりましたー！」

デイナは斧槍を振るい2体のファッジと互角に戦い、ルーナは二丁拳銃でオクトパスファッジを追い詰める。

「よいしょっ、ほれ」

「グガアアッ?!」

長物の利点を最大限に活かし、デイナは2体のファッジを寄せ付けず逃がさない。刃で相手を切り裂き、近付こうとした相手には石突の部分で突きや殴打を喰らわせた。巧みな戦い方に、2体のファッジは全く数の利点を活かしていない。

「逃がしませんー！」

「クソッ!?!」

一方のルーナも、オクトパスファッジを相手に優位に立ち回っていた。先日のスクイドファッジとの戦闘もあつてか、軟体動物で且つ無数の触手を持つ相手に接近戦は危険と判断し、リプレッサージュットによる銃撃で釘付けにする戦法を選択。弾幕を張って相手を決して近づけず、逃げようとすれば足元を撃って逃走を妨害し続けた。

戦力的には2対3でファッジ側が優位の筈なのに、実際にはデイナとルーナが圧倒していた。この状況を離れてみていたスクイドファッジは、オクトパスファッジ達の不甲斐無さに嘆息した。

「はあ……あれでは良いデータが取れそうにないな。仕方がない」

仕方なくスクイッドフアツジは彼らの救援に向かう事にした。

ver. 2に比べると性能はやや劣るものの、それでも健在な空気圧によるジェット噴射で戦場に乱入した。

まず真つ先に狙ったのはルーナの方だ。一気に接近した彼は彼女の背後に立つと、全身の触手を余すことなく使って彼女の手足を拘束した。

「え、なあっ?!」

「お、お前——!」

「ボサツとするな、早くやれ」

「へ、へへへ! お言葉に甘えて!」

何とか拘束から逃れようと藻掻く亜矢に、それまで一方的にやられてばかりだったオクトパスフアツジが牙を剥く。

触手を全て伸ばして、それを鞭のように振るい何度もルーナを打ち据えるオクトパスフアツジ。無数の触手により同時に複数個所を打たれて、ルーナの前進に激痛が走る。

「あうっ?! ぐうっ?! あああっ?!」

「ヒヤツハハハハツ!! まさかあのマドンナのこんな悲鳴が聞ける時が来るとはな!

オラオラ、もっといい声で泣けてんだ!!」

「ぐ、うつ?! いっ?! づあああっ?!」

ルーナの悲痛な叫びが辺りに響き渡る。それを耳にして、デイナの意識がそちらに逸れた。

「亜矢さん——!?!」

「グルアアアアアッ!」

「シヤアアアアッ!」

直ぐ様ルーナの救援に向かおうとしたデイナだったが、ジェリーフィッシュユファアツジとスターフィッシュユファアツジがそれを許さない。デイナの前に立ちはだかり、彼の邪魔をした。

「——退けよ」

〈DOG + WHALE EVOLUTION!〉

邪魔をする2体のファアツジの前に、デイナはゲノムチェンジをして対抗した。襲い来る2体のファアツジに、デイナはインパクトウェーブを最大出力で浴びせた。

瞬間、2体のファアツジは全身を痙攣させてその場に倒れた。強烈な振動が脳を直接揺さぶり、意識を刈り取ったのだ。意識を失った事でベクターカートリッジが排出され、2人は元の姿に戻る。

その光景をルーナを拘束しながら見ていたスクイッドファアツジは、まさかの事態に驚

愕した。

「何だとツ!？」

ドッグホエールフォームのインパクトウエーブは事前に知っていた。だが報告ではあそこまでの威力が出るとは聞かされていなかったのだ。

恐らくはルーナの危機を前にして、デイナに変身している仁が感情を爆発させそれが能力にも影響したのだろう。早い話が火事場の馬鹿力だ。意図して出来る事ではないだろうが、その分加減を失った威力は馬鹿にできない。

障害となる2体が倒れた事で、デイナが今度はホークレオンフォームにゲノムチェンジして一気に接近してくる。ルーナを痛めつける事に夢中になっているオクトパスファッジはその事に気付いていなかった。

「う……あ、ああ……」

「へへへ——!」

ふと気付けば、オクトパスファッジはルーナの首に触手を巻き付けて彼女の首を絞めていた。ならばこれ幸いと、スクイッドファッジは彼女の拘束を解いてその場を離れる。

スクイッドファッジが拘束を解くと、代わりにオクトパスファッジが他の触手を用いて彼女の全身を締め付け始めた。首だけでなく全身を締め付けられ、彼女の口から零れ

る苦悶の声が強くなる。

それが彼の心に火をつける火種になるとも知らずに。

「うぐつ?! あ、ああ……………あ———!?!」

「———!?!」

〈ATP Burst〉

ルーナの口から更なる苦悶の声が上がるのと、ダイナがレセプタースロットルを引くのはほぼ同時であった。

放たれたノックアウトクラッシュは最初の一撃でルーナを拘束している触手を食い千切り、続いて放たれた二撃目がオクトパスファッジ自体を噛み砕いた。

「ぎあああああああつ?!」

ノックアウトクラッシュを諸に喰らったオクトパスファッジは絶叫を上げた。ダイナは両足で挟んだそいつを空中で振り回し、遠くに放ると着地し倒れたルーナを抱き起した。

「……………戦いのレポートは纏まったな」

彼がそう呟くのと、地面に落下したオクトパスファッジが爆散するのはほぼ同時であった。

オクトパスファッジの爆発の衝撃からルーナを守るように彼女を抱きしめるダイナ。

彼の腕の中でルーナの変身は解除され、亜矢は元の姿に戻った。

彼女が元の姿に戻ったのを見て、デイナも変身を解き仁の姿に戻り彼女に優しく声を掛けた。

「亜矢さん、大丈夫？」

「じ、仁君……あはは……ごめんなさい。情けない所見せちゃいましたね」

「気にしないで。体はどう？ 何処か酷く痛むところとかはない？」

「体中あちこち痛いですけど、大事は無いと思います」

「ゴメン。守るのが遅れた」

「助けてくれただけで十分ですよ」

亜矢は仁の謝罪に笑顔で手を振りながら答え、痛む体に鞭打って自分の脚で立ち上がった。が、直ぐにバランスを崩してその場に倒れそうになる。

仁は倒れそうになる亜矢の体を即座に支えた。

「亜矢さん!？」

「う、つう……」

「無理しないで。このまま家に送ってあげるから」

「すみません。お世話になります」

仁は亜矢を横抱き——所謂お姫様抱っこしてトランスポゾンまで運ぶ。そのまま亜

矢は仁によって自宅へと送られていった。

2人が去って行ったのを見て、その場から一時的に離れていたスクイッドファッジは戻ってくるかと爆散したオクトパスファッジの所へ向かいベクターカートリッジとベクターブレスを回収。

それとジェリーフィッシュとスターフィッシュのベクターカートリッジも回収して2人が去って行った方を見た。

「……………この程度では碌なデータが取れそうにないな。やはりデータを取るなら……………」

スクイッドファッジはそんな事を呟きながらその場を立ち去る。

後には仁によって倒された、先程までファッジだった3人が取り残されるのであった。

第14話：蜘蛛の強襲

「ん……………?」

翌朝、亜矢は自宅のベッドの上で目を覚ました。窓から差し込む光が、彼女を眠りから呼び覚ます。

(ああ、朝……………あれ? 昨日は……………そうだ! 昨日は仁君に家まで送ってもらって……………)

先日、一瞬の油断からオクトパスファッジに痛めつけられた亜矢は、仁に自宅まで送ってもらったところで限界を迎えそのまま玄関に入ったところで意識を失ったのだ。なので自宅に着いてからの記憶が彼女にはない。

(仁君にお礼の1つも言えてない……………今日大学に行ったら一言お礼言っておかないと……………ん?)

微睡の中でぼんやりと考えていた亜矢は、不意に異変を感じた。ベッドの上に自分以外の気配を感じる。

まさかと思ひ、意を決して目を開けるとそこには――

「すう……………すう……………」

「ッ?!?!」

何故かそこには、同じベッドに入つて眠つてゐる仁の姿があつた。無防備な寝顔を晒し、時々口をもごもご動かしている。

前にも似たようなことがあつたとは言え、短期間で2度もこんな状況になるとは思つてもみなかったので驚愕に目を見開く。しかも前回と今回では経緯が異なる。前回は亜矢の方が仁の隣に潜り込んだ形だが、今回はその逆で仁の方が亜矢のベッドに潜り込んだ形だ。

一体彼がどんな考えでこんな状態になる事を選んだのか分からず、亜矢の頭がパニックを起こしていた。

この状況で、亜矢は覚醒した頭で今すべき最善の行動を思考した。

その結果………彼女はそのまま横になり続け、それどころか彼にすり寄る事を選んだ。

傍から見たら何を考へているんだと思わなくも無いし、彼女自身心の一部は何をやつてゐるんだ自分とは考へないでもなかつたが、今はとにかく彼に甘えたい気分だつた。

亜矢は仁が好きだ。それは友としてではなく、異性としてである。出来る事ならば彼に告白し、恋人同士になりたいとすら願つてゐた。

しかし、亜矢にはその一步を踏み出す勇気が今はまだ無かつた。だから情けないとは思いつつ、こんな時に甘えて自分を慰める位しか今は出せる勇気がなかつたのだ。

「ただどそれでも……せめて、予行練習位なら……もつと言つてしまえば、言うだけならば……………」

「寝ている仁に体を寄せ、その身を委ねながら彼女はその言葉を口にした。

「仁君……………大好きです」

「これを彼が起きている時に、もつとムードのある場所で言えるようにならなければと思いつつ、その言葉を口にした瞬間彼女の心が言い様の無い多幸福感に包まれる。

その時——

「んん……………ふあ……………」

「わひゃつ!?!」

「日差しに漸く目が覚めたのか、仁が欠伸と共に目を擦りながら起き上がった。彼が起き上がった瞬間、亜矢は素早く彼から離れ目にも留まらぬ速さで起き上がりベッドの上で何故か正座していた。

「んん……………あ? お早う、亜矢さん」

「お、おはようございます仁君!?! えつと、ところで……………何で仁君が私のベッドと一緒に……………? いえ別に嫌だったとかそういう訳では無いんですけど……………」

「んん……………?」

「起きた彼にこの状況に至る経緯を訊ねると、彼は暫しボケつと虚空を見つめていた。

恐らく寝起きではつきりしない思考の中で昨夜の出来事を思い出しているのだろう。

亜矢が変な緊張を感じながら見守っていると、漸く昨夜の出来事を思い出した仁が事の経緯を話し出した。

「ああ、そうだ………つて言うか亜矢さん覚えてないの？」

「え？ 何を、ですか？」

「昨日ベッドで一緒に寝ようつて言ってきたの、亜矢さんの方だった筈だよ？」

「——え？」

仁が言うにはこうだ。

昨夜亜矢を自宅に送り届け、彼女がカギで自宅のドアを開けるところまでは良かった。が、そこで亜矢は限界が来たのか意識を手放してしまった。ここまでは亜矢自身覚えていてる。

問題はここから。

仁は気を失った亜矢を寝室まで運び、彼女が起きた時失礼にならない程度に且つ、彼女が寝ている間に窮屈にならない程度に衣服を緩めるなどして彼女をベッドに寝かせた。

そして自分の役割はこれで終わりと帰ろうとした時、彼は気付いた。このままでは亜矢の家のドアの鍵が開けっ放しになってしまう。

一応下の入り口はマンションの関係者以外立ち入る事が出来ない仕様になっているが、そんなものを突破してマンションに入り込む手段など幾らでもある。そんな中で、亜矢の家のドアに鍵を掛けずに一晩放置するのは気が引けた。

だからと言って勝手に亜矢の家の合鍵を失敬する訳にはいかない。となると、亜矢の家の鍵はこのまま閉めておき、仁は勝手ながら亜矢の家に泊り込むのがベターであろうと言う結論に達した。

こうなるとどうやって彼が一夜を明かすかが問題になるが、一緒にベッドに寝るなど亜矢に失礼だしタオルケットを無断で拝借するのも彼女に悪い。となると取れる手段はその身一つでリビングの床に雑魚寝するしかないだろう。

そう思い彼が亜矢の寝ているベッドから離れようとした時、彼女が何時の間にか起きており、仁の服の裾を掴み彼を引き留めこう言ったのだ。

『ねえ、どうせだから一緒に寝よう?』

『え? でも悪いよ』

『いいからいいから。ね?』

『だけど……』

『あゝあゝ、今日ちよつと痛い目に遭っちゃって心細いな。誰か一緒に寝て慰めてくれないかな?』

そう言いながら亜矢はベッドの中からチラチラと仁の顔を見ていたそうだ。暫し悩んだ仁だが、まあ彼女がここまで言うのならと仕方なく彼は亜矢と一緒にベッドで寝る事を選んだのだそう。

勿論亜矢にそんな事を言った記憶はない。酒に酔った訳でもなく、またどう考えても寝惚けた訳でもないのにそんな事を自分が口にした事が信じられず、先程とは別の意味で亜矢の頭は激しく混乱していた。

一体昨夜、自分は何でそんな事を言っていたのか？ いやそもそもそれは本当に自分の意志だったのか？ 亜矢は自分の行動や言動に自信が持てなくなってきた。

そんな彼女に、仁が声を掛ける。

「とりあえず亜矢さんも大丈夫みたいだし、俺そろそろ帰るね。結局昨日晩飯食わずにそのまま寝ちゃったから腹減っちゃったし」

ベッドから降り帰ろうとする仁だったが、彼が帰る意思を見せた瞬間亜矢は跳ねるようにベッドから降り仁を引き留めた。

「ま、待つてくさい!？」

慌てて引き留めようとしたものだから、背後から彼に抱き着く形になったがそんな事に頓着する余裕も今の彼女にはなかった。

今はとにかく仁と一緒に居て欲しい。また自分ではない自分が何かするのではと考

えると、一人で居るのはとても心細かったのだ。もしかしたらまた記憶が途切れ、仁に對して何か仕出かすかもしれないが、それよりも心細さが勝つたのである。

背後から抱き着かれ、仁は足を止めた。背中に亜矢の豊かな胸の感触を感じるが、それに心を乱す事無く彼は背後を振り返り彼女の顔を正面から見た。

「分かった。このまま一緒に大学まで行こう。それでいい？」

「あ……はい！」

仁の答えに亜矢は安堵からか、花が咲くような笑みを浮かべた。その彼女の笑顔に、仁も胸が温かくなるのを感じるのであった。

ところ変わって、ここは傘木社の秘密研究区画。その廊下をアデニンが思案顔で歩いていた。

今の彼の課題は、仁達にどんなファッジをぶつけるかである。

(そこらの三下が変異したファッジでは、本気になった仮面ライダー相手に役者不足。

となると……………)

先日の戦いではデイナが本気を出した瞬間、3体のファッジが瞬く間に一蹴された。あれは本気を出したというより、彼が容赦をすることを止めたという感じだった。

とにかく、デイナの潜在能力は未だ未知数だ。そんな奴相手に、不良やチンピラ程度が力を得ただけのファッジでは相手にならない。なつたとしてもそれは所詮一時的なものに過ぎない。ベクターブレスを与えても、有用なデータは取れないだろう。

そうなる、ベクターブレスを与える相手にも慎重な吟味が必要となる。まず真つ先に思い浮かぶ相手と言えば――

「……………そう言えばチミンの奴、仮面ライダーに少し執着していたな」

仁は亜矢の家で朝食を終え、ついでにシャワーも借りたりなんかして身支度を整え大
学へと向かう用意を整えていた。

身支度と言っても、仁に関しては別に着替えたりする事なく先日の恰好のまま、荷物

もそのままに下に停めてあるトランスポゾンまで行くだけである。亜矢もそれに同行し、タンデムして大学まで向かう予定だ。

支度を整え、2人揃って亜矢の部屋から出る。

その瞬間、隣の部屋のドアが開いた。出てきたのは亜矢の友人の1人である篠崎 美香。彼女は亜矢のお隣さんでもあったのだ。

2人と同じく大学に向かうべく部屋から出てきた美香は、亜矢の部屋から亜矢だけでなく仁と一緒に出てきた事に目を見開いた。

「えっ!? 亜矢の部屋から門守君って………!? もしかして2人って、もうそう言う関係だったりする?」

「ちちちちちちち、違います!?! ここ、これには、その、色々と事情があっただけで——!?!」
何かを勘繰る美香に、亜矢が大慌てで誤解を解こうとする。が、顔を真っ赤にして必死に否定する様子からは逆に説得力を感じられない。

ニヤニヤと笑みを浮かべ始める美香を見て、仁も亜矢の援護に入った。

「えっと、篠崎さんだよね? 亜矢さんの言う通り、別に昨日は何も無かったよ」

美香は仁の方から話し掛けられた事に、ちよつと意外そうな顔になり口を噤んだ。

「じゃあ何で亜矢の部屋から門守君が?」

「実は昨日、俺の研究で遅くまで亜矢さん付き合わせちゃってさ。それで遅くなったか

らってんで、亜矢さんを送って来たんだけど……」

「うんうん?」

「ここまで送ったのは良いんだけど、廊下の所で俺がコケて亜矢さん押し倒しちゃったんだ。で、一緒に転んだ拍子に亜矢さん頭打って気絶しちゃって」

「えっ!?!」

勿論これはこの場で考えた即興のホラ話である。事前に何の打ち合わせも無く紡がれた嘘に、美香だけでなく亜矢も声を上げそうになったが仁が見えない所で亜矢の体にタッチしたので彼女が声を上げる事は無かった。

「で、気絶した亜矢さんを家に上げて寝かせたのは良いんだけど、鍵開けっ放しで帰る訳にはいかないし、だからって勝手に合鍵借りる訳にはいかないからって事で、昨日は勝手だけど泊めてもらってたんだ」

途中からは殆ど本当の事だ。故に話には信憑性があった。

しかしよくこの瞬間に即興でこんな話を思いつくものだ。亜矢は感心した。いや、もしかするとこう言う事態を想定して、事前にこの話を考えていたのかもしれない。

一方、この話を聞かされた美香は何ともつまらなそうな顔をしていた。彼女としては男女の恋愛、延いては濡れ場なんかも予想していただだけに、色気を感じられない話に落胆を感じずにはいられなかった。

「なくんだ……」

「期待に応えられなくてごめんね」

残念そうに肩を落とす美香に、仁がさりげなく謝る。別に謝る必要などないと言いたい亜矢ではあったが、ここでヘタに喋るとボロが出そうだったので敢えて黙っておいた。

しかしここでただでは転ばないのが美香と言う女であった。彼女は仁と亜矢が揃っているからという事で、今まで気になっていた事を思い切つて彼に訊ねた。

「それじゃあさ、一つ気になる事聞いていい？」

「ん？ 何？」

「最近門守君と亜矢つて名前呼び合つてるみたいだけどさ……ぶつちやけ、門守君つて亜矢の事どう思つてる訳？」

「え、ちよつ——!？」

とんでもない事を訊ねる美香に亜矢が思わず声を上げる。それを誰よりも聞きたいのは他ならぬ亜矢自身だ。だがそれを訊ねるには、まだ心の準備とかが出来ていない。

出来てはいないが、何時かは自分の口から彼に訊ねようと思つていた事である。

今美香にそれを問い掛けられるのは、まるで勝手にお膳立てされているようで気分の良いものではなかった。

「んんん……」

亜矢の内心など知る由も無く、仁は美香からの質問に真剣に考え込んでいた。

仁が真剣に考え込んでいる。その事実だけで亜矢は嬉しかった。仁なら興味のない事に対しては即答する筈である。それが時間を掛けて考えているという事は、少なくとも悩むくらいには意識してくれているという事。仁の中で亜矢がどれだけの割合を占めているかが伺えるというものである。

だが同時に不安もあつた。言うまでも無く、彼がどんな結論を出すのかに対する不安だ。

果たして彼は、亜矢の事を実際問題どう思っているのか？

長考の末に結論を出したのか、仁が顔を上げ美香の顔を見ながら口を開いた。

「俺は——」

仁が亜矢に対する印象を口にしようとしたその時、彼は突然明後日の方を見ると切羽詰まった顔で亜矢と美香の2人を同時にその場に押し倒した。

「えっ!! 仁君ッ!!」

「きゃあっ!!」

突然の事に驚く2人だったが、本当に驚くべきことになるのはこの直後。

3人が倒れ込んだのと僅差で、3人が立っていた場所を糸の塊の様な物が通り過ぎ壁

に広がりながらへばり付いた。

それを見て亜矢と美香が目を見開く。

「こ、これは——!?!」

「なになにッ!?! 何が起こったのッ!?!」

亜矢はそれがすぐにスパイダーファツジによるものと気付いたが、こんな事態に出くわしたのが初めての美香は何が起こったのか分からず混乱する。

その2人を背後に庇いながら、仁は糸の塊が飛んできた方を見つめていた。

彼が見つめる先にはスパイダーファツジ——しかもベクタープレスにより、以前よりずっと洗練された姿になったスパイダーファツジver. 2が居た。

「ウフフフ、久しぶりね」

「別に嬉しくないけどね。今日は何の用?」

「言わなくても分かるでしょう?」

朝っぱらからの戦闘に、仁は溜め息を吐くと気持ち切り替え取り合えず美香を逃がす事を第一に考えた。巻き込む可能性もあるし、仮面ライダーに変身するところを見られるのは面倒だ。

「亜矢さん、篠崎さんを安全な場所に——」

「させると思うの!」

スパイダーファツジが何かを手繰り寄せるように右手を自分の方に振ると、先程彼女が放つて壁にへばり付いた糸の塊が壁から？がれて戻ってきた。戻ってきた糸の塊はその途中に居た亜矢と美香をくっ付け、そのまま2人はスパイダーファツジに捕らえられてしまった。

「なっ!?!」

「しまっ——!?!」

「ぎゃああああつ!?!」

予想外の事に仁も思わず言葉を失い、引き寄せられる途中に亜矢共々糸で縛られた美香は甲高い悲鳴を上げる。その悲鳴に他の部屋から何事かと住人が顔を出し、そして全員がスパイダーファツジを見て悲鳴を上げて部屋の中に引き返した。中にはその場から逃げ出す者も居る。

マンシヨンの他の住人には頓着せず、仁はスパイダーファツジを見据えた。

「……2人を放せ」

「ええ、放してあげるわよ？　ただし、これから私が行った場所ですね!」

そう言つてスパイダーファツジは空に向かつて糸を放つ。放たれた糸はパラシュートの様に大きく広がると、風を捕らえて彼女と亜矢達を纏めて空へと誘つた。

「さあ、精々頑張つて付いて来なさい!」

そのままスパイダーファッジは亜矢達を連れて、パラグライダーの様に空を飛んで行ってしまった。

今から下りてトランスポゾンに乗っている間は間に合わない。仁はデイナのホークレオンフォームで空から追いかける事を選択した。

〈HAWK + LEON Evolution〉

「変身！」

〈Open the door〉

仁はマンシヨンの外に飛び下りながらデイナに変身し、背中のインペリアルウイングを広げて飛び立った。

上空に飛び立ち周囲を見渡して、デイナはスパイダーファッジを直ぐに見付けた。デイナと違って飛行を風向きと風の強さに頼っているスパイダーファッジの飛び方では、空を自在に飛べるデイナとは飛行能力に決定的な差がある。

案の定彼は直ぐにスパイダーファッジに追いついた。

「おい」

「あら、意外と早かったわね？」

「2人を返してもらおうぞ」

デイナは空中でスパイダーファッジに殴り掛かる。しかし彼が接近しようとした瞬

間、スパイダーファツジは手から糸の網を放出。投網漁のようにデイナを空中で捕えようとした。

あんなものに捕まっては飛行は勿論、満足に動く事すら儘ならなくなる。デイナは網が放たれた瞬間距離を取り、敵の捕縛攻撃から逃れた。

難を逃れる事には成功したデイナだが、お陰で再びスパイダーファツジからは距離が開いてしまった。その事に彼は仮面の奥で苦い顔になる。

何よりも大変なのは、人質となつている2人の安全を確保しながら追跡しなければならぬ事だ。これであいつがその身一つで逃げているのなら多少無理をしてでも叩き落してやるのだが、変身していない亜矢と完全に巻き込まれただけの美香が居る現状それは出来ない。

結局彼に今出来る事は、スパイダーファツジの思惑通り彼女が目指す場所について行きつつ、2人を取り返す隙を伺う事だけであった。

そのままスパイダーファツジを追跡して飛行するデイナが辿り着いたのは、とあるビルの上であった。風が弱くなってきたのか、段々と飛行速度が低下し高度も下がってきたのを見て降り立ったのがそこであった。降り立つと同時に飛行に用いていた糸の傘は手放され、身軽になったからか風に乗ってそのまま何処かへ飛ばされてしまった。

スパイダーファツジは一足先に屋上に降り立つと、片手で持っていた亜矢と美香を乱

暴に手放した。

「あうっ!?!」

「い………つたあ——!?! 何すんのよ!?!」

「んん?」

乱暴に扱われた事に、美香が思わず文句を口にするが、スパイダーファッジが一睨みすると直ぐに大人しくなる。流石にこんな奴相手に喧嘩を売るほど、身の程知らずではない。

「篠崎さんは関係ないでしょう!?! 彼女は解放してください!?!」

一睨みされて大人しくなる美香だったが、亜矢の方は違った。彼女はスパイダーファッジに美香の解放を訴えかけたのだ。

「ちよっ、亜矢!?!」

「人質なら1人いれば十分でしょう? 私の人質になります。だから——!?!」

「馬鹿ねえ、お前にとつての人質でもあるに決まってるじゃない」

亜矢の訴えをスパイダーファッジは一蹴する。美香さえ居なくなれば一瞬の間を突いて変身し、仁と共に戦う事が出来ると考えていたのだがそれは見抜かれていた。美香が居る状態では正体がバレる事も考え、迂闊に変身する事が出来ない。

彼女は仁と亜矢、2人に対する人質だったのだ。

まんまと敵の思惑に嵌ってしまった事に亜矢が歯噛みしていると、追いついたダイナが屋上に降り立った。

彼は降り立つと同時に、スパイダーファッジに2人の解放を要求する。

「言われた通りついてきたぞ。2人を解放しろ」

「釣れないわねえ？ 折角なんだからこのまま観戦してもらいましょうよ。ギャラリーが居る中でこの戦いも乙なものよ？」

「とぼつちりで怪我させたくないつつつてんの」

ダイナは言いながら低空飛行で一氣に接近し殴り掛かる。スパイダーファッジはそれを正面から迎え撃ち、両者の拳がぶつかり合い派手な火花が散った。

突然の日常からの逸脱に、美香は啞然と2人の戦いから目が離せなくなっていた。

「うっそ……あれってもしかして、噂の仮面ライダー？ 本当に居たんだ……」

美香がダイナとスパイダーファッジとの戦いに目を奪われている間に、亜矢はこっそりとアダプトキヤットを呼び出し糸を切らせていた。

その間にもダイナとスパイダーファッジの戦いは激しさを増していく。

「こいつでどうだ」

〈DOG + WHALE EVOLUTION!〉

ドッグホエールフォームにゲノムチェンジし、攻撃に超音波による振盪攻撃を交えて

対抗した。相手の内側に直接打撃を与える事が可能なこのフォームなら、どんな相手にだって一定のダメージは与えられる。

何より――

「よ、おっと」

突然デイナが不自然に何かを避ける動きをしたが、実は今彼は不可視なレベルの極細の糸による斬撃を回避したのだ。

スパイダーファッジは ver. 2 になったからか、能力が更に多彩になった。その最たる例が、糸の利用法の増加だろう。先程の糸を風に乗せての飛行に始まり、今のよう
に極細の糸を飛ばしたり張り巡らせたりして相手を切り裂くというような事が出来る
ようになったのだ。

極細糸による攻撃は、威力自体は然程でもないが一発喰らうとそこから絡め捕られた
りと次の攻撃に繋がり戦いのペースが相手に持つていかれてしまう。

飛行可能と言うアドバンテージを捨て振盪攻撃と音波探知による警戒を可能とした
ドッグホエールフォームを選択したのは偶然だったが、この状況には見事に噛み合っ
ていた。

「ふっ、ほっ」

デイナはスパイダーファッジの張った、極細の糸によるトラップを回避しながら拳と

蹴りで攻撃する。今の彼になら、例えば目に見えていなくとも糸の存在が手に取るように分かった。

スパイダーファツジは戦いのペースをデイナに持つていかれている事に内心で焦りを感じつつ、時折捕縛用の網を放つてデイナの動きを止めようとした。

両者の戦いは一進一退と言ったところ。デイナは糸のトラップを回避する為時に攻撃のチャンス逃さざるを得ない事が多々あり、スパイダーファツジはデイナに有効打を与えられていない。

互いに攻め手に欠ける、膠着状態となつた状況の中、事態が動いた。

「……よしー」

アダプトキャットにより、2人を拘束していた糸が切られた。これで2人はこの場から逃れる事が出来る。

「さ、逃げますよ篠崎さん！」

「ええっ!? ちよ、亜矢一体どうやったの!？」

「そんな事どうでもいいですから! ほら立って!」

「う、うん……」

同じように雁字搦めに縛られていた筈なのにどうやって糸を切つたのかと首を傾げる美香ではあつたが、亜矢の言う通り今はとにかく逃げるべきかと気持ちを切り替え僅

かに残った糸を払い落としながら立ち上がった。

そのまま2人揃って屋上の出入り口に向かう2人。その姿を見てスパイダーファツジはデイナと対峙しながら舌打ちをした。

「チツ、あいつら……」

「よそ見してていいの?」

スパイダーファツジの意識が2人に向いたのを見て、デイナが攻め手を激しくした。一気に接近し、正拳突きを連続で放つ。スパイダーファツジもそれに対抗し、こちらは背中から伸ばした脚によって手数を増やした攻撃を放った。単純な手数では相手の方が勝っているのに、デイナも苦戦を強いられる。

前方から縦横に放たれる攻撃に、次第にデイナは装甲に傷を増やしていった。

徐々に追い詰められつつあるデイナを横目で見て今すぐにでも彼の援護に向かいたい気持ちを抑え、美香をこの場から逃がすべく屋上の出入り口に向かう。

亜矢は扉に辿り着くなりドアノブに手を掛け扉を開けようとするのだが、扉には鍵が掛かっており開ける事が出来なかった。

「ちよっ!」

何とかならないかと何度もドアノブを回したり扉を押し引きするが、ガチャガチャなるだけで扉が開く気配はない。

亜矢が扉と格闘している頃、デイナの方も状況に変化が起こった。

スパイダーファツジとの戦闘中であるにも拘らず、亜矢が扉と格闘しているのに気を取られ僅かだがデイナの意識が逸れる。

その瞬間スパイダーファツジが動いた。

「おバカさん」

一瞬の隙を突いてスパイダーファツジが両手を振るうと、ここまでの戦いで周囲に張り巡らせた糸を一齐に手繰り寄せデイナを雁字搦めにした。

「あ、ちよっ」

四方八方から迫る糸がデイナの動きを完全に束縛する。しかもこの糸はトラップ用の触れたら切り裂かれる糸だ。デイナは締め付けられながら装甲などを徐々に切り裂かれていく。

「見事に引っかかったわね。このまま膾切りにしてあげるわ!」

「ぐ……………く、くう……………ぎっ!」

今は何とか堪えているが、このままではいずれ装甲が限界を迎えてしまうだろう。

その光景を前に、亜矢は美香に隠し事をする事を諦めた。

「篠崎さん……………」

「な、何? てか、あれヤバくない? このままじゃ仮面ライダーが——」

「今から見るものや知る事は、他言無用でお願いします」
「へっ? 亜矢、あんた何する気?」

美香からの問い掛けに答えず、亜矢はデイナドライバーを腰に装着した。そしてアダプトキャットとキャットベクターカートリッジを手に持つ。

〈CAT〉

「仁君、今行きます!」

「は? え!?!」

〈CAT Adaptation〉

デイナドライバーにベクターカートリッジを装填したアダプトキャットを装着し、デインナに向けて駆け寄りながらレセプタースロットルを引いた。

「変身!」

〈Open the door〉

目の前で亜矢が仮面ライダールーナに変身するのを見て美香が言葉を失う。友人が噂の仮面ライダーに変身したのだ、当然だろう。

友人からの視線に後ろ髪を引かれながら、ルーナはリプレッサーショットでスパイダーファッジに攻撃を仕掛けた。

「うっく、チイツ!?!」

「仁君を放してください！」

とにかくスパイダーファツジを近付けないようにしつつ、ルーナは銃撃でデイナを拘束する糸を切断しに掛かった。地面やフェンスではなく、デイナ自身に巻き付いてある程度可視化できる糸を端から銃弾で削る。

すると徐々にデイナの拘束が緩み、自力で束縛から逃れる事が出来る程に弱くなる。

拘束が破れる程にまで弱つたと見るや、デイナは糸を力尽くで引き千切った。

「よい、しよつと」

「仁君、大丈夫ですか？」

「うん、まだ平気。それより良かったの？」

「仕方ありません。それより今はファツジを！」

「分かった」

スパイダーファツジの前に、身構えるデイナとルーナ。2人の仮面ライダーを前に、スパイダーファツジは鼻を鳴らして対峙していた。

「フーン！ まあいいわ。2人纏めて相手してあげる」

両手から糸を投網の様に放出して2人を捕らえようとするスパイダーファツジ。飛んできた糸を2人は左右に分かれて回避し、デイナは接近戦、ルーナは射撃での遠距離戦を選択した。

「よっ」

「そこですー！」

デイナからの拳や蹴りを捌きつつ、ルーナからの射撃は硬い甲殻で防ぐ。スパイダーファッジは2人の仮面ライダーを相手にかなりの粘りを見せていた。流石は幹部と言ったところか。

そしてスパイダーファッジことチミンは、粘りだけでなく狡猾さも兼ね備えていた。

徐にルーナに向けて糸の束を放つスパイダーファッジ。ルーナはそれを難無く回避したが、スパイダーファッジの狙いはそれだった。

回避した事でルーナに隙が生まれる。その瞬間、スパイダーファッジは飛ばした糸の束がフェンスに張り付いたのを見て、自分の体を糸で引つ張りルーナに一気に接近した。

「あっ!?!」

「フンッ!」

ルーナがしまったと思った時にはもう遅く、接近したスパイダーファッジは彼女の腹に蹴りを入れていた。

「うぐあっ?!」

「亜矢ッ!?!」

「亜矢さんッ!？」

蹴り飛ばされたルーナはそのままフェンスにぶつかり倒れるが、即座に起き上がりスパイダーファッジからの追撃に対応した。が、蹴り飛ばされた際にリプレッサーショットの片方を落としてしまった為、彼女の強みであった射撃能力が低下してしまった。

スパイダーファッジはそんな彼女に容赦なく襲い掛かる。

「ほらほら！…どさくさに紛れて仮面ライダーになった事、後悔させてやるわー!」

「何のー!」

残った片方のリプレッサーショットを右手に、ルーナはスパイダーファッジとの接近戦を行う。振り下ろされる手を左腕で防ぎ、至近距離から右手の拳銃で撃つ。スパイダーファッジはそれを紙一重で回避し、その勢いを利用して回し蹴りを放った。ルーナはそれをバク転する事で回避し、お返しにボレーキックを放つ。

回避も防御も間に合わず蹴り飛ばされるスパイダーファッジだったが、背中の脚を巧みに用いて即座に体勢を立て直すとそのままルーナに飛び掛かった。

互いに柔軟に戦うルーナとスパイダーファッジ。その2人の戦いにダイナが遅れて参戦した。

「はっ!」

「おっ!おっ!」

飛び掛かりながら拳を振り下ろすデイナだったが、スパイダーファツジは直前で気付き飛んで避けられた。

何とかデイナと合流出来たルーナは、小さく安堵の溜め息を吐きつつ油断なくスパイダーファツジを見据えて身構えつつ作戦会議を行った。

「流石に強いですね、彼女」

「うん。何かあいつ他のとは違う感じだし、もしかしたら組織の幹部つて奴かも」

「増援、来ると思います?」

「どうだろ? 何か性格的に呼ばなそうな感じだけど」

どうもスパイダーファツジは獲物を独り占めしたがりそうな雰囲気があるので、自分から増援を呼ぶとは考えづらかった。だが傘木社が増援を勝手に寄越さないとは限らない。これ以上時間を掛けていては、少々マズい事になるかもしれない。

何より美香の事もある。出来る事なら早々に決着をつけてしまいたいところではあるのだが――

「敵を前にお喋りとは余裕ね!」

スパイダーファツジは長々と作戦会議をする余裕をくれなかった。背中の脚を使つて2人に飛び掛かると、その脚を大きく伸ばして2人の四方に突き立てる。上から見ればまるでスパイダーファツジを天辺としたテントの骨組みが2人を覆う様に出来たよ

うな形だ。

その状態でスパイダーファツジは、まるで空中機動を行っているかのように脚を巧みに使つて自分の体を縦横無尽に動かし、2人を翻弄した。

「くっ?!」なんて無茶苦茶な、あうっ?!」

ルーナが必死に銃撃するが、三次元的に素早く動き回るスパイダーファツジにはなかなか当たらない。それどころか銃撃の際の隙を突かれて蹴りを入れられる始末だ。

ここまで素早く動き回られては、デイナのインパクトウェーブも狙いをつけるのが難しい。

「てかアンタ、よく目が回らないね? こんなしっちゃかめっちゃかな動きしてたら、三半規管ぶっ壊れるよ?」

「お生憎様。こちとら色々と体弄ってるんでね。この程度屁でもないわ」

「あく、なるほどね、つと」

何となくだが、デイナはスパイダーファツジの強さの秘密が分かった。ベクターブレスを使用する前からスパイダーファツジは他のファツジとはどこか一線を画す何かがあったが、それが肉體改造によるものと気付いたのだ。

しかし肉體改造がされていようがまいが、彼女が強い事に変わりはなく、そしてそろそろ勝負を極めなければマズい事にも変わりはない。

だがどうやって攻略したものと、デイナはスパイダーファツジの攻撃を捌きながら頭を捻る。

その時

「亜矢!」

「ん?」

突然響いた美香の声に、デイナがそちらを見ると彼女がリプレッサーショットをルーナに向かって投げていた。先程スパイダーファツジの攻撃により落としていた、もう一丁の方である。

デイナと同様に美香の行動に気付いたルーナが手を伸ばしてそれを受け止めようとするのだが、彼女の行動はスパイダーファツジにも気付かれており妨害された。

「させると思うの?」

「ああっ!」

あと少しでルーナの手に戻るかと思われた銃は、スパイダーファツジによって弾かれ明後日の方向に飛んで行き……………その行動を読んでいたデイナによってキャッチされた。

「なっ!」

「ありがとう」

「デイナがりプレッサーショットをキャッチした事に動揺するスパイダーファッジ。その隙を見逃さずデイナが引き金を引き、それに合わせてルーナも銃撃を加えた。」

「狙うは厄介な背中の中の脚。二方向からの銃撃がスパイダーファッジの背中の中の脚を撃ち抜き破壊し、支えを失ったスパイダーファッジはそのまま地面に落下した。」

「グハッ!?!」

「亜矢さん」

「はい!」

「スパイダーファッジが落下すると同時に、デイナはリプレッサーショットをルーナに返却し、自分はレセプタースロットルに手を伸ばした。」

〈ATP Burst〉

「はああああ……」

「必殺技の構えを取るデイナ。一方ルーナの方も、デイナから受け取ったリプレッサーショットを連結させてライフルモードにし、右手側の銃のグリップ下の部分にベクターカートリッジを装填した。」

〈Genome set ATP Burst〉

「ルーナが銃口にエネルギーを集束させ始めたのを見て、デイナは立ち上がりつつあるスパイダーファッジに接近し必殺のサマーソルトキックを放った。」

「ハアアツ！」

「はっ!? ガアアアツ?!」

上空に蹴り上げられ、悲鳴を上げるスパイダーファツジ。そこにダメ押しでルーナのバーストブレイクが放たれ、スパイダーファツジを撃ち抜いた。

「ぐ、ああ——!?!」

蹴り上げられ撃ち抜かれ、落下した先で爆散するスパイダーファツジ。デイナとルーナは爆発の直前、美香を爆風から守るように立ち塞がる。

派手な爆発が起き、爆風が止むと2人は顔を庇っていた腕を退かし、スパイダーファツジがどうなったかを確かめた。

すると驚いたことに、スパイダーファツジはまだ変異を維持していた。全身ボロボロだが、それでもしつかりと両脚で立っている。

「はあ……頑丈だねえ」

「そんな——!?!」

方や呆れ、方や慄きながらもスパイダーファツジが未だ健在な事に再び警戒態勢を取る2人。

だがスパイダーファツジの方はもうこれ以上戦う余裕はなかった。変異を維持し、立っているだけでやっつとである。

「はあ、はあ……くうっ!」

最早脅威にはなり得ないと悟ったルーナは、ライフルの銃口を向け警告を口にした。

「もう降参してください。これ以上は無意味ですよ!」

「降参? 冗談ツ!」

ルーナからの警告を一蹴し、スパイダーファツジは傍のフェンスを破壊しそこから飛び出した。デイナとルーナが後を追う様に破壊されたフェンスに駆け寄ると、ここに来た時と同じように糸で風を捕らえスパイダーファツジはその場から逃げて行つてしまった。

まんまと逃げられた事に、やれやれと溜め息を吐くデイナ。対するルーナは最初撃ち落とそうと銃口を向けていたが、空中で変異が解除されては落下したチミンの命がないと考え渋々銃を下ろした。

「逃げられちゃいましたね」

「ん、まあ大丈夫でしょ。暫くは大人しいだろうし、それに……」

「2人なら、どんな相手にも負けない……ですよね」

ルーナからの返しに、デイナは小さく笑いながら変身を解除した。ルーナもそれに続き変身を解除し、そして……現実と向き合うべく後ろを振り返った。

気まずそうに亜矢が後ろを見ると、そこには呆然とした様子で2人の事を見る美香が

居た。

「亜矢に……門守君……2人があの噂の仮面ライダーだったなんて……」

「えっと、その……」

「亜矢さんは最近なつたばかりだから、噂の元になつた仮面ライダーは俺の事だけだね」
「……ごめんなさい、黙つてて。ただおいそれと人に言いふらす訳にもいかない内容でして」

良き友である美香に対し、隠し事をしていた事に申し訳なきを感じずにはいられない
亜矢は彼女に頭を下げる。亜矢を通じての接点しかない仁も、原因の一端はあるという
事で頭を下げた。

2人が頭を下げたのを見て我に返つたのか、美香は慌てて2人に近付き頭を上げさせた。

「ちよちよちよっ!!」 待つて待つて、別に怒つてないから頭を上げてよ! って言うか
何も知らない時にこんな事言われたつて、ジョークとしか思えないから言わないのも仕方ないつて!」

確かに驚いたし、友人とその想い人が仮面ライダーとして怪人と戦つているという事に
思わない事はないでは無かったが、それでも美香には2人に対する悪感情は存在しな
かった。

それどころか、美香の中には安堵感が浮かんでいた。

「寧ろ、安心したわ。実は噂に聞いているだけだった時って、本当に仮面ライダーは味方なのか分からなくてちよつと不安だったのよ」

「篠崎さん……」

「でも2人が仮面ライダーだって言うんなら、安心よね。あなた達なら絶対信用できるもの」

亜矢の人の好きは美香自身よく知っているし、そんな亜矢が好意を抱く仁も信用できる。この2人が仮面ライダーなのであれば、不安に思う要素は何もない。

故に、美香は純粹に2人の仮面ライダーを応援する事が出来た。

「頑張つて！ あたしに出来る事は何もなくても、2人の事応援してるからー」
そう言つてサムズアップする美香に、亜矢は嬉しさに目を潤ませずにはいられなかった。

「あ、ありがとう……ごさいますー！」

「うん……ありがとう」

ゼミの人間以外で数少ない2人の正体を知りつつ応援してくれる美香。

彼女の存在は、孤独な戦いを余儀なくされる2人の心を少しだが救う力になったのであった。

そして――

「はあ……はあ……ぐっ?!　くう……まだよ。こ、このままじゃ、終わらないから――
!?!」

変異を解き、元の姿に戻ったチミンは全身を苛む痛みを堪えながら、裏路地へと消えていくのだった。

第15話：亜矢の知らない亜矢

「……………最近静かだな」

その日、仁はラポの椅子に腰掛けながらそんな事を口にした。

彼の手には、ちよつと変わった物が握られている。一見すると手回し充電式の懐中電灯の様にも見えるそれは、彼の手で開発された新たなベクターカートリッジだ。名を『BHエレキテルカートリッジ』。デイナのパワーアップアイテムだ。

ここ最近手強くなってきた傘木社のファツジに対抗する為に仁が開発したのである。チミンの襲撃の後、急ピッチで開発を行い後は最終調整を残すのみであった。

問題はその間にチミンやアデニンとの戦闘になる事だったが、この所全くファツジが出現していないのだ。チミンやアデニンだけではない。普通のファツジすら鳴りを潜めていた。

お陰でじっくり準備する事も出来たのだが、この静けさが逆に不安だった。

仁が椅子の背もたれに体重を預けて天井を仰いでいると、彼の視界を覗き込む者が居た。亜矢だ。仁から見て上下逆さまに覗き込んできた。

「……………どうしたんですか？」

不思議そうに訊ねる亜矢を、仁がぼんやりと見上げていた。決して視界の半分を埋め尽くす、亜矢の豊満な胸に視線を奪われていた訳ではない。

「仁君？」

「ん？」

「何ボーつとしてるんです？」

「ん、ああいや。最近ファツジが出なくて静かだなんて思っただけ」

言われて亜矢も、確かにと頷いた。特にあのチミンの性格は、かなり執念深い様に思える。あの場から逃げただけなのであれば、また襲撃を仕掛けてきてもおかしくない筈だ。

それが全くなく、静かに日常を遅れている事に今更ながら亜矢も違和感を感じずにはいられなかった。

「そう言えば、最近はずだのファツジも出ませんね？」

「うん。あのチミンって奴だったら何時再戦してきてもおかしくないのにさ」

「思いの外傷が深かったんじゃないですか？」

「それだけだったら良いんだけどさあ。何か、嫌々な予感がするんだよねえ」

そう言いながら仁は手の中にあるBHエレクトリカードリッジを見た。その彼の眉間には、彼にしては珍しく険しい皺が寄っているのだった。

遡る事数日前。

仁と亜矢に敗れたスパイダーファツジver. 2ことチミンは、傷付いた身体を引き摺って街の裏路地を彷徨っていた。

「はあ……はあ……あいつら、くそ——!?!」

チミンは悪態を吐きながら壁伝いに歩いていたが、とうとう力尽きたのかその場に腰を下ろした。

彼女の腸は煮えくり返っていた。仁と亜矢……デйнаとルーナに敗北を喫してしまった。それも新型のベクタープレスを使用していながら、だ。この事は彼女の存在意義を揺るがす危険がある。

今まではこの体になるまでに掛けられた金と時間があったからということ、雄成に見逃してもらってきた。だが今回の失態は見過ごすことは出来ないだろう。

今回はベクターカートリッジが排出されるほどの事にならなかったから生き残れた

だけで、次に敗北してベクターカートリッジを失うような事になってしまえばその時、彼女は機密保持の意味を込めて隠蔽処分されてしまう。

それだけは絶対に避けたかった。

「次は……次こそは勝つて……いや、せめて何か成果を残さないと——!?!」

苛立ちと痛みで顔を歪めていると、裏路地の奥から何者かが近付いてくる気配を感じた。億劫に思いながらも顔をそちらに向けてみると、そこには3人の男の姿がある。以前アデニンによりファッジにさせられた2人と、ベクタープレスを渡されたあの3人である。

亜矢を痛めつけて仁に倒された後、意識を取り戻してあの場から逃げていたのだ。

この3人は傘木社の関係者ではないので、倒されても隠蔽処分されなかったのである。

3人は傷付き座り込んだチミンの姿を見て、下卑た笑みを浮かべながら近づいていた。

「よおよお、姉ちゃん？ 何だか気分悪そうだな？」

「何だったら、俺らが看病してやろうか？」

「嫌な気分忘れさせてやるぜ？」

数日前にアデニンに痛い目に遭わされていると言うにも拘らず、改心しない3人であ

る。オクトパスファツジになった男は大事には至らなかつたし、残りの2人に至つてはそもそもほとんど覚えていなかった事が災いした。

近付いてくる3人の男を前に、チミンは獰猛な笑みを浮かべるとベクタープレスにスパイダーベクターカートリッジを装填した。

〈SPIDER〉

「ッ?!?!? そ、それは——!?!」

「フフ——!」

〈SPIDER Contamination〉

3人の中で唯一ベクターカートリッジの事を覚えていた男——葛西^{かさい} 秀樹^{ひでき}が、当時の事を思い出し戦慄する。残りの2人は彼女が何をするのか予想出来ず見ているしかできない。

彼らが見ている前でチミンがスパイダーファツジver. 2へと変異し立ち上がる。

その姿に、当時の事を覚えていなかった男達も危険を感じ思わず後退つた。

「お、おい!!? 何なんだあれッ!」

「ば、化け物——!?!」

「逃げろッ!?!」

慌ててその場から逃げようとする3人だったが、その判断は遅すぎた。彼らが背を向

けたのと、スパイダーファッジが糸を放ち3人を拘束したのは全く同時の事であった。

「うわっ!？」

「ひいっ!？」

「た、助けてッ!？」

糸に巻かれ、その場に倒れる男達。スパイダーファッジは彼らに近付くと、まず以前アデニンにファッジにされた2人にベクターカートリッジを挿した。

〈BEAR〉

〈JACKAL〉

「うがっ?!」

「いぎいっ?!」

スパイダーファッジによって2人はまたしてもファッジへと変異させられる。1人は熊の遺伝子からなるベアーファッジ、もう1人はジャツカルの遺伝子を持つジャツカルファッジだ。

「ウウウ、アアアアアアアッ!？」

「ウガアアアアアア!？ ガアアアアアアアアアッ!？」

「ひ、ひいひいひいひいっ!？」

先日焼き直しのような光景を前に残った秀樹は以前の恐怖が蘇り、目に涙を浮かべ

ていた。股間を見ればズボンの股が濡れている。恐怖のあまり失禁したようだ。

「フフフフフ——!」

スパイダーファツジは変異した2人を前に、ほくそ笑みながら手の中にある無数のベクターカートリッジを弄ぶ。彼女が持っているベクターカートリッジはまだまだあるのだ。これを使って、ファツジによる部隊を作りその力を以てして仮面ライダーを倒す。

それこそが今彼女に出来る、己の評価を守る為の策であった。

「とは言えまは……」

「ひっ!」

スパイダーファツジは徐に秀樹に目を向ける。コツソリ逃げようとしていた彼は、スパイダーファツジに見つかった事に自身の終わりを悟り観念したように動かなくなる。

そんな彼にスパイダーファツジは近付き、変異を解くと彼に顔を近付けて言った。

「ねえ、あんた」

「ひっ!」

「あいつ等みたいになりたくない?」

チミンからの問い掛けに、彼は首が取れるのではと言う程ブンブン首を上下に振る。

「そう……なら今から私の言う事を聞きなさい。差し当たってまずは何か食べ物を持つ

て来てもらおうかしら？ それとあちこち傷だらけだから、包帯とかも。それと何処か寝床に出来そうな場所を用意しなさい。いいわね？」

「は、はいいいいいいっ!？」

チミンの命令に、秀樹は悲鳴を上げながらその場を後にする。彼の後姿を眺め、残されたチミンは悠々とその場に腰掛け壁に背を預ける。

彼女の傍にはフアツジと化した2人が、唸りながらも大人しく佇んでいた。

「さて、今に見てなさいよ。仮面ライダー……」

人の来ない裏路地で、チミンは一人妖しい笑みを浮かべているのだった。

大学が終わった後、仁は亜矢と共にスーパーを訪れていた。尤もこれは仁が亜矢と訪れたと言うよりは、仁が亜矢に連れてこられたと言った方が正しいか。

籠に乗せたカートを押し、亜矢について行く仁は色々な食材が入った顔に視線を落としながら問い掛けた。

「ねえ、亜矢さん？」

「はい？」

「今更だけど、何で俺亜矢さんに引つ張られてスーパーに来てるの？」

「そろそろ仁君、冷蔵庫の中空になる頃じゃないですか。自発的に食材買っておかないと仁君何を食べるか分かった物じゃないからですよ」

その言葉に仁はちよっぴりムツとした顔になる。そんなまるで人を口に入るものなら何でも食べようとする動物みたいな言い方しなくても……………。

「……俺だって、食べる物くらいちゃんと選ぶよ」

「つい最近、研究とパワーアップアイテムの開発が忙しいからってカロリーバーとゼリー飲料で朝昼晩済ませるのを3日連続でやった人が何言ってるんですか」

それを言われると仁としてはぐうの音も出ない。確かにあれは思い返して自分でも酷い食生活だったと思う。

と言うかあの時の事はあんまり思い出したくなかった。あれが発覚した時、亜矢から雷が落ちたのだ。流星に栄養が偏り過ぎだなんだと、それはもう物凄い勢いで怒られた。普段そこまで怒る事がない彼女が雷を落とした事に、仁は珍しく小さく縮こまり、その場に居た白上教授や峰は顔を引き攣らせていた。

当時の彼らの心境は完全に一致していた。亜矢は絶対に怒らせないようにしよう、

と。

そんな事があつたので、仁はこの場では亜矢に大人しく従う事を選んだ。

亜矢の後に続き、彼女が籠に食材を入れるのをぼんやりと眺める仁。

その時、籠の中におかしな物を発見した。

「ん？ 亜矢さん、タンマ」

「何ですか？」

仁が声を掛けた事で、亜矢が食材を選ぶ手を止める。丁度人參を選んでいたところだった彼女は、どちらがいいかを吟味する為に両手に人參を持ったまま振り返った。

その彼女に見えるように、仁は籠から“それ”を取り出した。

「亜矢さん、これも買うの？」

仁が取り出したのは鼈甲飴べっこうあめの袋だった。子供の頃によく舐めた、黄色っぽい色をした

あれである。

食材の山の中から出てきたそれを見て、亜矢も目を丸くした。

「あ……これ？ 私、そんなの入れた覚え……」

「さつき近道って言ってお菓子コーナー通った時、何かの拍子に入ったのかな？」

「かもしれませぬ。すみません、戻してきます」

そう言つて仁の手から鼈甲飴の袋を受け取ろうとする亜矢だったが、仁はその瞬間彼

女が一瞬寂しそうな顔をした事に気付いた。それを見て仁は鼈甲飴の袋を籠の中に押し込んだ。

彼の行動に亜矢が目を丸くして顔を上げた。

「仁君？」

「……どうせ俺の金から出すんだし、これ位別にいいよ。食べたいんでしょ？」

「あ、や、食べたい……と言うか……えと……あ!? お金なら全部私が出しますよ! 言い出しつぺは私なんですし!」

「これが入るの、ウチの冷蔵庫でしょ? 消費すんのも殆ど俺なんだし、なら俺が金出すのが筋だよ」

「で、でも……」

こう言う所で変に頑固な亜矢はなかなか引き下がる様子を見せない。何時までもこうしては埒が明かないと、仁は妥協点となる案を口にした。

「んじゃあさ、今日買った食材使って今夜の夕飯作ってよ。それならいいでしょ?」

「それ、は……分かりました」

亜矢自身、何処かで妥協しなければ話が進まないと分かっていたので、仁の提案に乗りこの場を収めることにした。

まあ、見方を変えれば仁に手料理を振舞う口実が出来たのだから、亜矢にしてみれば

こちらの方が結果としては望ましい。

再び人參に視線を戻し、良い物を選び籠に入れ歩き出す亜矢。彼女の脳内では今買った食材で今夜仁に何を作るかを考えていた。

(無難にカレー? それとも肉じゃが? ちよつと前に煮物を作ったし……うくん……)

献立を考えながら歩く亜矢の後姿を眺めて、仁は何気なく呟いた。

「亜矢さんつてさ、良いお嫁さんになりそうだよね」

「……………はい!」

突然の言葉に、亜矢は頭に浮かんでいた献立が吹き飛んだ。今のは不意打ちにも程がある。

「な、何ですか急に!」

「いや、そのままの意味だよ。優しくて、面倒見が良くて、時々ちよつぴり怖くて……何よりしつかりしてる。よく分かんないけど、良いお嫁さんつて亜矢さんみたいな人なんだろうなつて思うよ」

「あの……すみません、勘弁してください……ホント、その辺で……」

褒められて嬉しい事は嬉しいのだが、べた褒めされ過ぎて逆に困ってしまう。顔から火が出るとは正にこの事だ。亜矢は真っ赤に染まった顔を周りに見られないように、顔

を隠すように俯きながら歩みを進める。心なしか、その歩みは先程よりも速い。カートを押している仁との距離が段々と開いてしまった。

置いて行かれないようにと、仁はちよつと歩走りでカートを押し亜矢の隣に並んだ。横から彼女の顔を覗き込み、耳まで真つ赤に染まった彼女の顔を見てちよつぱり罪悪感を感じた。

「……何かゴメン」

「いえ、気にしないでください」

「でも……」

「いいんです。別に、嫌じゃありませんでしたから」

2人の会話はそこで途切れた。仁は亜矢に対して、やらかしてしまったと言う思いを抱えながら彼女について行きそのまま会計を済ませた。

2人して買った食材なんかをビニール袋に詰めるのだが、これがなかなか大変だった。流石に数日分の食材を一気に買い込むと重さも大きさも嵩張る。

元々大荷物になるだろうことは予想していたので、トランスポズンは持つてきていない。あれの荷物スペースにこれは入りきらないので、帰りは2人仲良く歩きだ。

荷物を2人で分けて持ち、スーパーを出て暫く歩く。

その道中で、彼は一軒の喫茶店を見た。そして喫茶店から視線を亜矢に移す。

「……亜矢さん、ちよつと喫茶店にでも寄つて行こ」

「え？」

「ちよつと疲れたでしょ？ 一休みしよ」

言われて亜矢も、スーパーでの買い物からこつち少し疲れてきている事を思い出した。自覚すると途端に、足が重くなってくる。

仁の提案に乗り、2人揃つて喫茶店へと入つていった。

程よく落ち着いていた雰囲気の内は2人の突かれた気分を癒し、空いてるテーブル席に向かい合わせで座ると2人同時に一息ついた。

「ふう……あ」

全く同じタイミングで息を吐いたのに気付いた2人は、互いに顔を見合わせると同時に笑みを浮かべた。時に意見を対立させることはあるけれど、こういう時等は息ピツタリなのが互いに面白いのだ。

互いに一頻り笑い合い、メニューを見て注文する物を選ぶ。と言つても軽い休憩の為に寄つただけであり、頼む物などコーヒーや紅茶など位のものであるが。

「ん……俺コーヒー。亜矢さんは？」

「私は、カフェオレにしておきます」

「ん。すみませ〜ん」

「は〜い〜」

仁は店員を呼び、コーヒーとカフェオレを注文する。亜矢はと言うと、物は仁の為とは言え久々にガッツリ買い物をして疲れたのか首と肩を回して解している。

疲れを見せる彼女の姿に、仁はお冷で唇を湿らせてから口を開いた。

「今日は、ありがとう」

「え？ あ、いえ、気にしないでください。私がやりたくてやった事です」

「ゴメンね、世話掛けちゃって」

「そう思うのなら、今後はもう少し食生活とかを気にしてください」

「ん、頑張る」

仁の返答に、これは改善までの道は遠そうだなと亜矢は苦笑した。まあ改善しないならしないで、こうして仁に構う口実が出来るのだから良いじゃないかと思ひ直した。心の何処かが、寧ろ仁にはこのままでもいい、彼のだらしなさを理由に彼にもっと接近してしまえと囁いた。

それに気付き、果て自分はこんなに腹黒かったかと亜矢は自分で自分に首を傾げる。

そうこうしていると、コーヒーとカフェオレが運ばれてきた。2人は早速カップを手に取り、淹れたてのコーヒーとカフェオレを口に流し込んだ。最近は研究室やラボで白上教授の紅茶を飲んでばかりだったので、コーヒーの苦みが久し振りだ。

と言うか、教授の淹れる紅茶が美味すぎて他所の紅茶を飲む気にならないと言うのが正しかった。どうにも他所の紅茶は信用できず、コーヒーに走ってしまった。仁にとつての例外は、亜矢が淹れた紅茶だけだ。

コーヒーの香りと苦みを堪能しつつ、仁は明日の予定なんかを考える。明日はとりあえず卒論研究を進めようか。パワーアップアイテムも完成した事だし、卒論の為に時間を割くのがいいかもしれない。

などと考えながらコーヒーを半分ほど飲んだところで、ふと仁が亜矢の方を見ると彼女は半分ほどになったカフェオレのカップに砂糖を加えているところだった。

それを見て思わず仁は眩いた。

「亜矢さんってさ、お茶の飲み方変わってるよね？」

「え？」

「だって最近よく見るけど、毎回途中で砂糖追加してるじゃん？」

言われて亜矢は、ポカンと自分の手元のカフェオレの入ったカップを見つめた。

その様子に違和感を感じ、仁は首を傾げた。

「? どうかしたの?」

「あ、いえ……」

仁の問い掛けに、亜矢は心此処に在らずと言った様子で答えながらカフェオレを混

ぜ、口に流し込んだ。砂糖が加わり、甘さと苦さが混ざり合った味が舌の上に広がる。そのまま一気にカフェオレを飲み干し、空になったカップを暫し見つめる亜矢。

何だか悩ましい顔をする彼女を少し心配しつつ、仁は自分も残りのコーヒーを飲み干した。

「ふう……………どうかしたの?」

「……………分からないんです」

「ん?」

「私、本当に砂糖を入れるつもりなんて無かったんです。なのに、気付いたら砂糖を入れてる……………私、何で——?」

亜矢の表情には自分に対する恐怖が見て取れた。不可解な行動をする自分自身に、亜矢は自分が分からなくなり恐れているのだ。

自分に対し恐怖を抱く亜矢に、何か声を掛けようとする仁。

その時、俄かに外が騒がしくなってきた。一体何事かと喫茶店の窓から外を見ると、そこでは驚くべき光景が広がっていた。

視界に映るだけでもファッジが4体、街中で暴れて人々に襲い掛かっているのだ。目に映るものを破壊し、動くものは何であれ襲い掛かっている。人だろうが何だろうが御構い無しだ。

その光景に2人は表情を険しくさせた。

「おいおい、最近静かだと思つたら。幾ら何でも極端すぎだろ」

「文句を言つてる場合じゃありませんよ！ とにかく行きましよう！」

「ん、だね」

2人はとにもかくにも、襲われている人々を助ける為に荷物放つておいて店の外に飛び出した。勿論代金を置いて行くのを忘れない。

店の外に2人が出ると、ちょうど1人の女性が自分の子供だろう赤ん坊をファツジの攻撃から守ろうと地面に蹲つて赤ん坊に覆い被さつていているところだった。1体のファツジがその女性每赤ん坊を叩き潰そうと、拳を振り上げている。

仁と亜矢はそのファツジの前に躍り出ると、二人掛りでファツジの攻撃を受け止め蹴りで女性から引き離れた。たたらを踏んで後ろに転倒するファツジを見て、亜矢は女性に手を貸して立ち上がらせた。

「さ、今の内です。逃げてください！」

「は、はい!?!」

亜矢に促され女性が逃げる。その間にファツジ——ベアーファツジは体勢を立て直し、己の前に立ち塞がる2人を敵と定め敵意をむき出しにした。

更に他の3体のファツジも、他の人間と違い自分達に楯突く2人に狙いを変更し四方

から取り囲んだ。

自分達の周りに集まってきたファッジを前に、仁と亜矢は互いに背中合わせになつて身構える。

「こいつは少し骨が折れる……かな？」

「でもこのファッジ達、見た所幹部じゃなさそうですね」

「そだね。なら、油断しなけりや何とかかなりそうだ」

話しながら2人はデイナドライブを取り出し、ベクターカートリッジを手にとつた。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

それぞれデイナとルーナに変身すると、ファッジ達との戦闘に突入する。

デイナはベアーファッジとジャガーファッジ、ルーナはマンティスファッジとピラニアファッジ——どちらも以前デイナが戦つたファッジだ——と戦い始める。

ベアーファッジの丸太の様な腕から放たれる一撃を、デイナは交差させた腕で受け止める。流石熊の遺伝子と言うべきか、受け止めたデイナの腕が軋みを上げ、足元には蜘蛛

蜘蛛の巣の様な罅割れが広がった。

「う、くう」

何とか堪えるデイナだったが、そこにジャガーファツジの横槍が入る。素早く動き回るジャガーファツジは、ベアーファツジのパワーに押え付けられているデイナの周りを素早く動き回り攻撃を仕掛ける。

「うあつ!? くつ!?!」

パワー型とスピード型の組み合わせに翻弄されるデイナの様子を、チラリと伺うルーナだったが彼女は彼女でマンティスファツジとピラニアファツジを相手にするので手一杯だった。

「くっ!」

迫る2体のファツジにルーナはリプレッサーショットを向け引き金を引くが、彼女の相手はどちらもスピード型。動きが素早く狙いを定めるのが難しい。

あつという間に肉薄され、鎌や鱈で体のあちこちを切り裂かれる。

「うあああつ?! くっ!?!」

切り裂かれる痛みに悲鳴を上げながら、ルーナは懸命に反撃を繰り返すが放たれた銃弾は何もない空間を通り過ぎるだけだった。

現状、スピード特化のファツジ3体の所為で2人の仮面ライダーは劣勢を強いられて

いた。

BHエレキテルカートリッジがあればこの状況を打破する事も容易だったろうが、完成していない事が悔やまれる。

とは言え、無い物強請りをしても始まらない。現状で出来る事をしなければ。

「とりあえずお前らには、これなんか効くんじやないかな？」

〈HAWK + LEON EVOLUTION!〉

デイナは一瞬の隙を突き、ベアーファッジとジャガーファッジの攻撃から抜け出しベクターカートリッジを交換した。

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

デイナが選択したのはホークベクターカートリッジとレオンベクターカートリッジ。空中を自在に飛行するだけでなく、陸棲生物の肉食動物を相手に威圧効果を発揮できるベクターカートリッジだ。

デイナがゲノムチェンジをすると、彼と対峙しているベアーファッジとジャガーファッジはその威圧感に気圧されて動きが鈍くなる。

その隙をデイナは見逃さない。一気に肉薄すると先程までのお返しと言わんばかりに2体のファッジを攻撃した。鋭い正拳突きがベアーファッジの胸板を穿つように突

き、キレのある手刀がジャガーファッジの表皮を文字通り切り裂いた。

一気に形勢逆転したデイナに対し、ルーナは未だに苦戦を強いられていた。

「くう……はあ……はあ……」

全身傷だらけで、地面に膝をつくルーナ。窮地に陥った彼女を見て、デイナが2体のファッジを始末して彼女の救援に向かおうとする。

が、それよりも早くにピラニアファッジとマンティスファッジが動いた。

「キシヤアアアアアッ！」

「ッ!? 亜矢さん!？」

一気に襲い掛かり、彼女に止めを刺そうとする2体のファッジ。デイナはそれを見てなりふり構わず彼女の救援に向かおうとした。

瞬間、突然右足が動かなくなる。何事かと足元を見れば、右足が粘着性の糸で地面に貼り付けられていた。

「あいつ……」

それがスパイダーファッジによるものである事に直ぐに気付いた。咄嗟に奇襲を警戒し、周囲に目を走らせるが見える範囲でスパイダーファッジの姿は見られない。

その隙に2体のファッジがルーナの目前に迫った。

「あ——」

振り下ろされる鎌と爪に、ルーナはまるで他人事のような呆けた声を上げ――

直後、まるでブレイクダンスの様な動きで2体のファッジの攻撃を弾き、その勢いを利用して一気に立ち上がる。まさかの反撃に2体のファッジは理性がないにもかかわらず困惑した様子を見せた。

その困惑はルーナに反撃の隙を与える事になる。彼女は後ろに飛び退きながらリップレーザーショットを構え、2体のファッジに何発も銃弾を浴びせた。

ここで漸く気を取り直した2体のファッジは、銃弾を喰らいながらも彼女に襲い掛かろうと前に飛び出す。

が、2体のファッジが目前まで迫ったところでルーナは片方を足場にその場で跳躍し、ファッジ達の頭上を取るとそこからまた何発も銃弾をお見舞いした。

立て続けに銃撃を受け、2体のファッジの動きが鈍った。その隙にルーナはリップレーザーショットを両腿のホルスターに収めると、レセプタースロットルを引いた。

〈ATP Burst〉

「ハアッ!」

ルーナのノックアウトクラッシュが、ハイキックとなつて2体のファッジに叩き込まれる。頭を蹴り飛ばされた2体のファッジは大きく吹き飛ばされ、落下したところで爆

散し元の姿に戻った。

「はあ……はあ……はあ……、今のは——？」

2体のフアツジをあつという間に倒した事に、自分が一番驚いているのか呆然とした様子で自分の手を見ている。

呆ける彼女を横目で見つつ、デイナは自分も2体のフアツジにトドメをさす。

〈ATP Burst〉

「ふっ、ハッ！」

デイナはインペリアルウイングで飛翔し、ジャガーフアツジを挟み蹴りで掴むとベア—フアツジに叩き付け、2体が纏まったところで今度は2体に同時に挟み蹴りを叩き込んだ。獅子の顎で噛み砕かれるが如く、2体のフアツジが挟まれ爆散する。

倒された事で変異が解けるベア—フアツジとジャガーフアツジ。その正体を見て、デイナは既視感を感じた。

「ん？ ……いつ等——？」

その2人が、以前ジェリーフィッシュユフアツジとスターフィッシュユフアツジとして襲い掛かってきた時の事を思い出したのだ。まさか見覚えのある奴が、別のフアツジとなつて再び戦う事になるとは思つてもみなかった。しかも様子から考えて、ほぼ強引に変異させられた筈だ。

二度も強制的に変異させられ、そして戦う事になるなどどんな偶然だとテイナは哀れに思うやら呆れるやらであった。

とりま、見た所ファツジの脅威は去ったようだという事でテイナは変身を解除した。

だがルーナは未だ呆然とした様子で、変身も解除せず自分の手を見つめている。

「亜矢さん、もう終わったよ?」

「ツ!? あ、仁君……………はい」

仁に言われて慌てて変身を解除する。元の姿に戻り素顔が露になった事で、何処か不安を抱えた亜矢の顔が露となる。

内心で自身に対する不安で震えている様子の亜矢をジツと見つめる仁。彼は彼女から視線を外し、何かを考えると彼女の手を取り喫茶店に戻りながら口を開いた。

「亜矢さん。今夜はウチに泊って行きなよ」

「は、え?」

「どうせ今夜は亜矢さんに晩御飯作ってもらうんだし、その後帰るとなると夜も遅くなるだろうから」

「いや、でも迷惑になりますって!?!」

口ではこんな事を言っているが、亜矢としては渡りに船であった。それは彼の家に泊れることが出は無く、心細いからである。

自分の中で明らかに普通ではない事が起きている。それが何であれ、訳が分からぬまま一人で過ごす事は彼女の不安を掻き立てた。それを癒す為、不安を紛らわす為に彼女の心は人肌を欲していた。

しかしここで仁に頼るのは、彼に重荷を背負わせている様な気になりどうしても一歩引いてしまう。

そんな彼女の想いを、彼はお見通しだった。

「不安なんでしょ？ 顔に全部書いてあるよ」

「あ……」

「遠慮せず、頼りたい時は頼つてよ。これ位の事で迷惑に感じる程、俺人間小さくないつもりだよ？」

そう言つて仁は亜矢の不安を受け止める姿勢を見せた。それは誰かに縋りたいと願う彼女にとって、これ以上無い程甘美な誘惑であった。

彼女の中で彼に甘えたいと言う想いと、彼に頼り過ぎてはいけなめが対立する。が、軍配を上げたのは想いの方だった。何かに促されるように、亜矢は仁の提案に頷いて答えた。

それを見て仁は安堵したように息を吐き、彼女の手を引きながら喫茶店へと目を向ける。

「さあ……………検証の時間だ」

喫茶店に戻る道すがら、仁が小さく呟いたその言葉は亜矢の耳に届くことなく虚空に消えるのだった。

第16話：彼女はずっとそこに居た

街中に出現した4体のファッジを倒し、喫茶店から荷物を回収して仁の自宅へとやって来た2人。

仁の自宅へと入った亜矢は、洗面所で手を洗うと早速夕飯の支度に取り掛かった。

「それじゃ、台所お借りしますね」

「ん。好きに使って。まあ偶にお願ひしてるから今更って気はするけど」

亜矢は時々仁の家に上がり、不摂生な生活を送る仁の為に作り置きできる料理を作ったりしていた。以前はあまり彼を意識していなかった亜矢だが、彼を好意を向ける相手として明確に意識した今、彼の家の台所に立つ事に特別な何かを感じずにはいられなかった。

そんな浮ついた気持ちで、頬を叩く事で追い払い亜矢は台所に立った。これから彼女が作ろうとしているのは筑前煮だ。

食材を切つて下拵えをし、鍋に入れていざこれから煮込もうとした時、彼女は肝心の物がない事に気付いた。

「あれ？ 醤油が……？」

日本人宅であれば必ずあつてしかるべきである醤油が影も形も無かつた。食卓用の小瓶にも、台所に置かれているボトルにも殆ど入っていない。筑前煮を作る上で味の決め手となる醤油がなければ、味気ない筑前煮となってしまう。

亜矢は慌てて仁に醤油がない事を伝えた。

「仁君、ゴメンなさい！ 醤油が無いんで、ちよつと買つてくるまで待つてもらえませんか？」

テーブルの上を拭くなどして夕飯の支度をしていた仁は、醤油が無いと言う亜矢の言葉に何かを考える仕草をする。そして何を思ったのか、携帯を手に窓の近くに行くのを開けながらどこかに電話を掛けた。

「……もしもし？ 俺だけどき、ちよつと醤油分けてくれね？……うん……うん……いいじゃん、この間塩分けてあげたんだし。しかもお前、その後空の容器返してきたのを俺忘れてないからね？」

どうやら仁は、同じアパートに住んでいる誰かと電話でやり取りをしているらしい。会話の内容から察するに、調味料なんかの貸し借りで何やら揉めている様だ。

こう言つては失礼だが、仁にもああいふ風に接する事が出来る相手が自分以外に居たのかと安心半分、不安半分で亜矢は仁と電話の向こうの相手のやり取りを見ていた。

「うん、うん………じゃあ頼む。こっちはもうスタンバイしてるから」

そう言うとな仁は窓の外に手を伸ばした。はて、彼はこれからこのアパートに住んでいる誰かに醤油を分けてもらいに行く筈。それが何故、あんな風に窓の外に手を伸ばす事になるのか？

その答えは直ぐに明らかになった。仁が伸ばした手に向つて何か落ちてくる。彼はそれを危なげなくキャッチし、手を室内に引つ込めた。

彼の手に握られていたのは、ほぼ満タンの醤油のボトル。上から降つてきた醤油のボトルを彼はキャッチしたのだ。

「ん、ありがと。使い終わつたら返すから」

亜矢が驚きに声を失っている間に、仁は電話の向こうの相手に礼を言つて通話を切り、亜矢に醤油のボトルを渡した。

「はい、亜矢さん。これでいい？」

「あ……あ、はい。大丈夫です……あの仁君？ 今これ、上から落ちてきたみたいですよけど？」

「うん。上の階に住んでる五十嵐つて奴に分けてもらったから」

何でも仁曰く、上の階に住んでいる五十嵐とは数少ない仁の友人であり男友達。仁と同じようにちよつと変人で、興味のある内容に対しては凄まじい没頭ぶりを見せるらしい。

所謂類友だ。

その彼とはこのアパートに住んでから既に似たやり取りを何回も経験しているらしい。最初の内は普通に階段を上り下りして貸し借りしていたようだが、次第に面倒臭くなって今では窓の外から相手の部屋に向かって投げたり落としたりしているようだ。

つまり仁から五十嵐の家に物を渡す時は、下から相手方の部屋の窓に向けて投げ入れる形になると言う訳である。

「あの、つかぬ事を伺いますけど、落として駄目になっちゃったりはしないんですか？」
「偶にね、目測誤ってキャッチしそびれたりして、そのまま下に落ちちゃうことは何回かあったよ。まあ最初の内だけだったけど」

今では結構大きな物も貸し借りすることがあるのだとか。その言葉に亜矢は思わず引き攣った笑みを浮かべ、その事については極力考えないようにして筑前煮作りを再開した。

程なくして完成した筑前煮。同時進行で味噌汁も作っており、ご飯も炊いているので準備は万端だ。

仁と共に配膳し、夕飯の用意完了。

「いただきます」

揃って手を合わせて、箸を手に取り食べ始める。

「どうですか？ 味付けとか」

「うん、美味しいよ」

「そうですか、良かったです」

仁は表情自体は変わらないが、食べる手を緩めずあつと言う間に筑前煮を平らげている。彼の口に合う筑前煮が作れたことに、亜矢は頬を緩めながら彼女も箸を進める。

夕食を終え、2人で食器を片付けるとその後は風呂だ。

仁に勧められ、一足先に風呂に入る亜矢。彼女が風呂で汗を流している間に、仁は寝る用意を整える。以前と同じく、自分は床だ。

「さて……………」

床に寝る用意を整えながら、仁はどのような事になるかを予想していた。

もし彼の予想通りならば――

「ま……………何とかなるだろうけど」

「お待ちせしました」

「ん、分かった」

亜矢が上がり、交代で仁が風呂に入る。汗を流し、風呂を終え、軽い雑談に花を咲かせた後は就寝だ。

「あの、やっぱり仁君がベッドを使った方が良いんじゃない？」

またしても床で寝るつもり仁に、亜矢は申し訳なきに少し洩る。

しかし仁は仁で、自分が床で寝る事を譲らなかつた。

「ん、いいのい。俺平気だし。お客さんを床で寝かせる訳にはいかないでしょ。じゃ、お休み」

そう言つて仁は灯りを消し、床に置いた丸めたタオルに頭を乗せタオルを被つた。相変わらず変に頑固な彼に亜矢は小さく溜め息を吐きつつ、彼の厚意に甘えてベッドになる。

「お休みなさい、仁君」

そう告げるが、既に眠っているのか仁からの返事はない。その寝るまでの速さに亜矢はクスリと笑みを浮かべ、布団にくるまり目を瞑つた。そうすると布団と枕に残つた仁の匂いに包まれ、心地良い安心感が眠気を誘い亜矢を眠りへと誘つていく。

数分と経たず室内には2人の寝息だけが響いた。

するとそれを待つていたかのように、亜矢がゆつくりと目を開き体を起き上がらせ仁の方を見る。彼女はベッドから起き上がると枕を仁の隣に置き、掛け布団を動かし仁と共に布団にくるまり――

「――いらつしやい」

「ツ」

そこで仁が目を開けた。薄暗がりの中で自分を見る彼の目に、亜矢は驚き目を見開く。

「今日も来るだろうと思つてたよ」

驚く亜矢に構わず仁は彼女に話し掛ける。最初は驚いていた様子の亜矢だが、次第に状況が呑み込めたのか笑みを浮かべ始めた。

光源が殆どないので分かり辛いのが、その笑みは亜矢が普段浮かべないだろう悪戯つ子の様なものであつた。

仁の中で疑問が確信に変わる。

「君、誰？ 亜矢さんじゃないよね？」

今仁の隣で横になつて居るのは、亜矢ではない。亜矢はこんな笑みを浮かべないし、仁をベッドに引き摺り込んだり寝ている間に仁の隣に横になるような大胆な事もしない。

確信を持つて仁が問い掛けると、亜矢？はクスクスと笑い声を上げた。

「ウフフフ！ 凄いわね、仁君は。私を亜矢の一面じゃなくて、別人として見るだなんて」

「明らかに亜矢さんと違い過ぎたからね。それで？ さっきの質問に戻るけど君は誰？」

「誰だと思う？」

「正直、判断材料が曖昧だからはっきりとは言い難いんだけど——」

仁が亜矢——否、彼女の中に巣食う存在にその正体の予想を告げる。すると亜矢？は、満面の笑みを浮かべ寝ながら小さく拍手をした。

「お見事！ 凄いわ、本当に。因みにどの辺で分かったか聞いても良い？」

「言つても良いけど、ここから先は明日研究室で亜矢さんとかを交えて話しても良い？ 流石にこの情報は教授達にも共有しておいた方が混乱ないと思うんだ」

「ん〜……ま、そこまで隠す理由なんて無いしね。良いわ」

「ありがと。亜矢さんも流石に自分で自分が分からなくなつて不安になつてたから、それを解消してあげたくつて」

実は今日彼女に泊るように言つたのもそれが理由だった。ここ最近の事から寝静まつた後に亜矢の中に巣食う存在が何らかのアクションを起こすだろうと予想して、亜矢に今日は泊つていくように提案したのである。

そして案の定、亜矢に巣食う存在は今宵再び姿を現し、仁は彼女に直接話し掛け自身の推測を検証する事に成功したと言う訳だ。

亜矢に巣食う彼女は、仁の言葉に先程とは違いふわりとした笑みを浮かべた。

「……………ありがとう。亜矢の事をそこまで考えてくれて」

「何時も助けてもらつてゐるから、これ位はさ」

「じゃあさ、亜矢の爲つて事でもう一つお願いしても良い？」

「ん？」

仁が首を小さく傾げると、亜矢に巢食う彼女はその身を彼に密着させた。仁の全身に亜矢の柔らかな肢体、取り分け薄い寝間着の所為で存在が強く主張される豊満な胸の感触がダイレクトに伝わる。

「……このまま朝まで、亜矢の事を抱きしめてあげて。亜矢、仁君にそうされるの好きだから」

「ん、お安い御用だよ」

要求に従い、仁は亜矢の体をギユツと抱き締めた。抱きしめられた瞬間、亜矢に巢食う彼女が「ん……」と声を上げる。

流石に少し強く抱きしめ過ぎたかと、仁は腕の力を緩める。

「ゴメン、少しきつかった？」

「ううん、気にしないで。あ！朝になったらフオロー宜しくね？多分また色々混

乱したり怖がつたりするだろうから」

「勿論、分かつてるよ」

「ありがとう。それじゃ、お休みなさい」

「うん、お休み」

亜矢に巢食う彼女はそうして眠りにつき、仁に身を委ねて静かに寢息を立て始める。彼女が完全に眠ったのを見て、仁は彼女の背を優しく撫で自分も目を瞑り眠りに落ちるのだった。

そして翌日——

(ああ……………また……………)

三度目となる、目覚めたら仁が目の前に居ると言う状況に亜矢は混乱する事も無く若干の諦観を以て受け入れた。流石に三度目ともなれば彼女も慣れる。

それに、実を言うと期待していなかった訳ではない。どう言う訳かは知らないが、仁と同じ部屋で寝ると起きた時自分の隣には仁が居る。それがどういいう経緯でそうなったのかは分からなくとも、普段は出来ない仁との濃厚な接触を亜矢は心の奥で期待していたのだ。

だって素面では絶対出来る事ではないから。

しかし今朝は随分と密着度合いが強い。仁ががっしりと抱きしめてくれている。仁の温もりを全身で感じられるのでありがたいと言えればありがたいが、ここまで抱きしめ

られると身動きが取れない。

まあ動くつもりも無かった。三度目ともなると、亜矢にもこの状況を堪能する余裕が生まれていた。

その余裕は、亜矢に邪な考えが浮かんだ。今、亜矢の顔のすぐ近くには仁の顔がある。無防備な寝顔を晒す、仁の顔が……………。

気付けば亜矢は彼の顔にそつと自分の顔を近付けていた。あともう少し顔を近付ければ、唇と唇が触れ合うほどの距離だ。

(少しだけ……………少しだけなら……………)

あと少しで仁の唇に自分の唇が触れそうになった時、亜矢の動きが止まった。

(……………流石に、駄目ですよね)

仁への好意は本物だし、彼への湧き上がる愛しさは抑えられないが、自分達はまだ告白も済ませていないただの友人同士。それなのに寝ているからと言って勝手に唇を奪うのは、彼に対して不誠実に過ぎると亜矢は己の心を律した。

「うん……………よし」

心を落ち着け、気持ちを整えた亜矢は仁の肩を揺さぶり彼を静かに起こした。

「仁君、起きてください。朝ですよ」

「んん？ んん……………」

亜矢に優しく起こされ、仁は彼女を抱きしめていた腕を外した。動けるようになった。亜矢は、彼に先んじて体を起こした。

「ほら、仁君。今日も大学に行くんですから、起きて顔洗ってきてください」

「うん……………亜矢さん、意外と落ち着いてるね？」

起きて慌てない亜矢の様子に、仁が寝ぼけ眼を擦りながら首を傾げた。まあ過去二回慌てた様子を彼に見せてしまったのだから、不思議に思われるのも当然だと亜矢は苦笑した。

「流石に三回目ともなると、慣れましたよ。まあ訳が分からないのは変わりませんけれど……………」

そう言つて亜矢は表情に影を落とした。相も変わらず自分の知らない自分が勝手な行動をしている。その事が気持ち悪くて、不気味で、その内何かとんでもない事をするのではないかと気が気ではなかった。

不安を表情に出す亜矢を見て、仁はそつと彼女を抱きしめその背を優しく撫でた。

「仁君？」

「大丈夫。今亜矢さんに起こつてる事、何とかなるから」

「……………え？」

仁の言葉に亜矢が目を見開く。

「何とかなるって……どう言う事ですか？」

「それについては大学で話すよ。教授とかも交えて話した方が良い事だと思うから」

「は、はあ？」

訳が分からないと言った顔をする亜矢だが、心には安堵が沸き上がっていた。彼がこう言うという事は、きっと何とかなるのだろうと言う確信があったからだ。

その後2人は着替えと朝食を済ませ、身支度を整え大学へと向かって行くのだった。

その頃、街の中にある廃ビルの一室では、チミンが苛立ちながらコンビニ弁当を食っていた。

「くそつ、折角4人も用意してやったのに役に立たない奴らね——?!? 数の上で勝つてる上にあの2人が苦手にしてそうな速度型を多く入れてやったのに……」

食べ終えた容器と箸を適当に近くに放り、すつと横に手を伸ばす。3人組のチンピラの中で唯一ファッジとなる事を逃れた秀樹は、それが飲み物を求めているのだという事

を察し買っておいたお茶のペットボトルを手渡した。

受け取ったペットボトルを開け、お茶を喉に流し込む。

「んぐ、んぐ……プハアっ！ フン、まあ良いわ。カートリッジはまだある。こうなったら数で——」

次の策をブツブツと呟くチミンを他所に、秀樹は散らばったコンビニ弁当の容器などを片付けていく。その様子は完全に小間使いだ。彼の気分としては奴隷だろうか。

秀樹は何故こんな事になったのかを考えずにはいられない。

(チクシヨウ、何だってこんな………)

彼はただ、その日その日をやりたい様に生きてきただけだった。そりや確かにカツアゲなどをやりはしたが、こんな目に遭うような事をした覚えはない。自業自得・因果応報と言うには些か過剰ではないか。

己に降りかかる理不尽に嘆きながら大人しく片付ける。今はまだ小間使いとしての利用価値があるからとファツジにされてはいいないが、不要と判断されたら間違いないくファツジにされて戦わされる。

もうあんな思いはこりごりだ。

(ん？……ッ!! そうだ！)

そこで彼は思い付いた。仁と亜矢が仮面ライダーで、ファツジ相手にも勝てる存在で

ある事を。

彼らに縫れば、或はこの状況から救われるかもしれない。

秀樹はチラリとチミンの様子を伺う。彼女は未だ手元にあるベクターカートリッジをどう有効活用しようかと考えているのか、彼の事など見てもいない。

行動を起こすなら今がチャンスだ。秀樹は音も無く静かにその場を後にした。

時々背後を振り返りながら、廃ビルから脱出する事に成功する。秀樹はホッと一息つき、仁か亜矢に助けを求めようと歩き出し――

「何処へ行くのかしら?」

「ッ?!?!」

出し抜けに頭上からチミンの音が響く。弾かれるように秀樹が頭上を見上げると、そこにはスパイダーファッジ ver. 2 に変異したチミンが、背中の脚を使つて廃ビルの壁に垂直に立っていた。

「ヒイツ!?!」

「逃げる度胸があつたとは思わなかつたわ。……………覚悟は出来てるわよね?」

スパイダーファッジは言いながら、ベクターカートリッジの1つを秀樹に見えるようにチラつかせた。それを見た瞬間、秀樹は恐怖に慄き情けない悲鳴を上げながらその場から逃げ出した。

「ヒヤアアアアアアアッ!？」

顔から出る汗を全部出しながらその場から逃げ出す秀樹を、スパイダーファッジは暫し見つめた後、背中の脚をバネの様に使い秀樹を追跡し始めるのだった。

大学に到着した仁と亜矢は、真っ直ぐ白上研究室へと向かつて行く。

研究室内には今日も何時も通りのメンツが居る。教授は勿論、峰に拓郎、そして史郎に康太も居た。白上ゼミの学生勢揃いだ。

「おはようございませう」

「おはようございます」

「うむ、おはよう2人とも」

「今日も2人揃って登校ですか。相変わらず仲良いですね」

峰の茶化しに亜矢が照れ臭そうに俯くが、仁は峰の言葉を無視してその場の全員に話し掛けた。

「教授、それに他の皆も。ちよつと大事な話があるんで聞いてもらつていいです?」

「大事な話? ふむ……」

「あく、それつて俺らも聞いて良い話か?」

突然の仁の言葉に、顎に手を当てる教授。その一方で、史郎と康太は仮面ライダーに
関わる話かと退室を考え出した。

仁は少し悩んだが、彼らにも聞いてもらつた方が良いかと退室は待つてもらつ
た。

「多分、知つておいてもらつた方が良いと思うんで居てください」

仁がそう言う中、亜矢は気を利かせて研究室の鍵を掛け本当の部外者が入つてこない
ようにした。

準備が整つたのを見て、仁は話を切り出した。

「んじや、準備が出来た所で話なんですけど……」

「何の話なんだ?」

「亜矢さんの話です。宮野先輩、前に亜矢さんの腕試しした時に途中から別人みたいになつたつて話してましたよね?」

まず最初に彼が切り出したのは亜矢がディナドライバーを手に入れるに至る経緯で
の話だ。彼女がドライバーを手に入れる直前、峰に腕試しとして実戦さながらの戦闘を

仕掛けられ、そして見事に彼女を押し退けてデイドライバーを手に入れルーナへと変身するに至った。

あの時の事は出来ればあまり思い出したくないのか、峰は少し気まずそうな顔をした。

「う……………ま、まあ……………言いましたね」

「そう……………念の為聞くけど、亜矢さん？ 亜矢さん自身はそれ以前に戦いは勿論、スポーツの試合形式で誰かと争うなんて事もした事ないんだよね？」

「はい。私は、そう言う事とは無縁の生活でしたから」

「じゃ逆に、試合慣れ……………戦い慣れしてる人は身近に居なかった？」

仁に問われ、亜矢はやや俯きがちになって考える。いや、考えるまでも無かった。彼女が知る中で、身近に居る——正確には居た——人物の中で、戦い慣れしている人物など一人しか居なかったからだ。

「……………真矢……………双子の姉妹の真矢が……………」

「キックボクシングをやってた？」

「やって……………ました。学生の大会ですけど、何度も出場して入賞した事も一度や二度では……………」

「甘党だった？」

「え？」

「その真矢さん、もしかして甘党だったんじゃない？」

仁の指摘に、亜矢はハッと顔を上げる。

「は、はい……真矢は確かに甘党でした。特に鼈甲飴が大好きで、部屋にはいつも鼈甲飴の袋が……あ——」

そこまで言つて亜矢は、先日仁と共に買い物に行つた時気付けば買い物籠に鼈甲飴が入っていた事を思い出す。

この辺から亜矢の中で、ある可能性が浮かび上がる。彼女はそれを心の何処かで否定し、だがその一方でその可能性に期待もしていた。

その期待に応えるかの如く、仁が最後の質問を亜矢に投げ掛けた。

「最後にこれ聞いておきたいんだけど……その真矢さんつて、亜矢さんと比べて性格的に奔放だった？」

最後の質問に、亜矢は半ば放心したような感じで頷きながら答えた。

「はい……私に比べて、真矢は自由で言いたい事は何でも言つて、それでいてちよつと悪戯好きだったりします……」

「ん、ありがと。これで確信が持てたよ」

亜矢からの答えに仁は満足した様子を見せた。対する亜矢は、何処か縋るような様子

で仁に詰め寄った。

「仁君……仁君——！ 教えてください！ 今の質問の意味………もしかして……まさか、私が時々自分で覚えのない事をしたのは——！」

「うん。そう………亜矢さんの中には、もう一つ人格があるんだ。………真矢さんって言うね」

真矢が自分の中で生きている………死別したと思っていた姉妹が人格だけとは言え自分の中で生きていたと言う事実に、亜矢が目には涙を浮かべ己の胸に手を置き、そしてその奥に居ると言う失われた半身に問い掛ける。

「真矢………真矢？ 貴女は………ここに居るの？」

亜矢がそう呟いた瞬間、亜矢の右手が右の髪をかき上げる。

その瞬間、教授達にも分かるレベルで亜矢の雰囲気が変わった。何と言うか、顔付からして違うのだ。パーツそのものは亜矢のそれだが、目付きや口角の上がり具合が亜矢と違う。

表に出てきた亜矢の中に潜んでいたもう一つの人格——真矢は、まるで悪戯が成功した子供の様な笑みを浮かべて口を開いた。

「そう言う事よ。久しぶりね、亜矢？」

「ま、真矢ッ!! 何で？ どうして!？」

人格の内側に引つ込められた亜矢が、表に出た真矢の人格に問い掛ける。真矢は驚き混乱した様子の亜矢の人格に、クスクスと笑い声を上げた。

「ウフフ！ ゴメンね、今まで黙ってて。まあ何で居るのかって言われたら、私自身何でかなとしか言えないだけだよ」

内側に引つ込んだ人格の声は勿論他の者には聞こえない。しかし真矢の様子から亜矢と真矢の間でどんなやり取りが行われているのかには察しがついた。

仁は2人の疑問に、己の推測を混ぜた答えを口にした。

「これは俺の推論だけど、亜矢さんに移植された真矢さんの臓器に刻まれた人格が出てきたんだと思う」

「臓器に刻まれた？」

「ふむ……臓器移植された人が、臓器の提供元の影響を受けて性格や嗜好が変化すると
言う話は確かによく聞く。だがまさか人格までもが新たに形成されるとは、俄かには信じがたいな」

「多分、物凄く低確率の奇跡みたいなものだから滅多に起こる事じゃないと思いますよ。
亜矢さんと真矢さんが一卵性双生児で遺伝子的に限りなく同一に近い存在だから起こったんです。何千何万、いや……何億分の一で起こるかどうかって確率かな」

しかし理解は出来なくとも、納得はいく話であった。と言うよりそう考えなければ辻

棲が合わない。状況を説明する為の、後付けの理論みたいなものだ。とてもではないが科学的とは言えない。

「真矢さん自身は何時から亜矢さんの中に居たの？」

「ん〜？ 具体的に何時かって聞かれたら困るけど、少なくとも亜矢が大学に入学してからは確実に居たと思うわ。ただその頃はあんまり意識もはっきりしてなくて、何て言うか夢を見てるような感覚だったけど」

「意識がハッキリしたのは何時頃？」

「それはあれよ、最初にあの蜘蛛のファッジに襲われた時」

「やっぱりあの頃からか……………」

仁と亜矢が最初にファッジと遭遇した時、亜矢は白上教授に襲い掛かろうとしていたスパイダーファッジの攻撃を蹴りで弾いていた。恐らくあの辺りで真矢の人格が僅かながら表に出ていたのだろう。

白上教授が真剣な表情で考え込む。

「ふむ……………」

「教授、何か分かりますか？」

「……………断定はできないが、恐らく移植された細胞に刻まれた経験と能力を、肉体が必要に駆られて引き出した際の副産物として人格が形成されたのだろう」

「あら、私副産物?」

副産物と言う単語に、しかし真矢はあまり気を悪くした様子を見せない。しかし失礼な物言いをしてしまったのは事実なので、白上教授は即座に彼女に頭を下げた。

「ああ、すまない。決して悪気があつた訳では無いんだ。ただそう言う表現が一番しつくりきたものでね」

「気にしなくて大丈夫よ。自分がとつくの昔に死んだ人間だつて事は理解してるから。ここに居る私は差し詰め、双星 真矢の残滓つてところかしら?」

おどけて言う真矢ではあつたが、内側に居る亜矢にとっては笑い事ではない。死別したと思つていた双子の姉妹が、どんな形であれ再び自分の目の前に現れてくれたのだ。その存在を、否定や貶める事がどうして出来ようか。

「そんな言い方しないで!? 真矢が死んじゃつた時、私、すごく……悲しくて……ぐすつ」

「あくあく、泣かないでよ亜矢。大丈夫よ。私は今こうして亜矢の中に居るから」

「ぐす……うん。真矢……」

「うん?」

「——おかえりなさい!」

「……うん。ただいま」

今ここに漸く再会となった2人の姉妹。見た目は1人だが、その中で亜矢と真矢が微笑み合っているのが仁には手に取るように分かった。

その2人の再会に水を差すように鳴り響く峰のタブレット端末。全員が弾かれた様に見守る中、峰はタブレット端末を操作し情報収集して何が起こったのかを確認した。「つたく、こんな時に!?! ファアツジ出現、場所は………うげっ!?! 大学近く、しかもこっち来てる!」

峰の報告を聞き、仁は素早くその場を後にし正門から外に出た。すると街の方から徐々に悲鳴や破壊音が近付いてきているのが分かる。

仁はこれ以上の好き勝手を許してなるものかと音の発生源であるファアツジの元へと向かおうとした。その時、彼の隣に亜矢……いや真矢が並び立つ。

「随分と派手にやってるみたいね。あの蜘蛛女かしら?」

「どうだろ? って言うか真矢さんの状態で戦うの?」

「折角大手を振って表に出れるようになったんだし、久々に思いつきり体を動かさせてもらおうわ」

この事は亜矢も了承済みらしい。

因みに2人の力関係だが、一応本来の体の持ち主である亜矢が優先されるようだ。真矢が好き勝手出来るのは亜矢が意識を失った時か、彼女が主導権を明け渡した時。なので亜矢がその気になれば、真矢から主導権を奪って表に出る事も可能なのだとか。

そんな話をしていると、2人の前にスパイダーファツジ ver. 2とそいつに追われる秀樹が姿を現した。

「ん？ あいつ……」

「何処かで見た事あるわね？」

2人は一応、彼の事を覚えていた。臆気にだが、何時何所で出会ったか、そしてその時に何をしたかは覚えていた。

自然と仁の秀樹を見る目が鋭くなった事に気付かず、彼は仁の姿を見て安堵の表情を浮かべる。

「門守！ 双星さん！ 良かった、助けてくれ！」

これで自分は救われる……そう期待を胸に抱いて2人に秀樹が近付く。

そんな秀樹の前に仁は立ち塞がるように立つと、近付いてきた彼を突き飛ばした。

「イテツ!! な、何すんだ!!」

「……お前、亜矢さんに何か言う事あるんじゃないの？」

「え——？」

「ここで秀樹は気付いた。仁の目が今まで見た事がない位冷めている。」

「この間亜矢さんにした事、まさかもう忘れた訳じゃないよね？俺が止めてなけりや亜矢さんがどうなつてたか分かつてる？」

「いや……あれ、は……」

「揉られてた、何て事はない筈だよ。ベクターカートリッジにそんな機能無い筈だから。お前が自分の意志で、亜矢さんを笑つて傷付けたんだ。それに対して何か言う事があるんじゃない？」

薄情な気がしなくも無いが、ここだけはハッキリさせておきたかった。こいつは亜矢を笑いながら傷付けていたのだ。あの時は戦闘後すぐにその場を離れたので謝らせたりしている暇はなかったが、こうして目の前に再び出てきたのであれば話は別。

こんな状況だが、通すべき筋は通してもらわなければ仁の腹の虫が収まらない。

彼は決して聖人君子ではないのだ。助けを求めて伸ばされた手を取ること自体は吝かではないが、どんな相手・何をした相手でも手を取れるほど優しくはなかった。

「……見つけた。ん？仮面ライダー……まあいいわ。何か揉めてるみたいだし、先ずは——！」

追いついてきたスパイダーファッジが、仁達の姿を認めつつ先に秀樹を始末しようとう腕を振り上げる。

背後から迫るスパイダーファツジに気付き、秀樹は――

「あ、ひ——!? わ、悪い!? 俺が馬鹿だった!? もうあんな事二度としない!? だから頼む、助けてくれえっ!?!」

秀樹は泣きながら垂矢に向けて謝罪した。命の危機を前にして、強がりを見せる余裕も無かった。

その必死の様子に、仁は真矢に一瞬目配せをすると同時に前に出て、スパイダーファツジの攻撃を2人掛りで受け止めた。

「ッ!?!」

「うわっ!?!」

「……………これからはもうちよつと真面目に生きなよ?」

そう告げると、2人は同時に蹴りを放ちスパイダーファツジを引き下がらせる。

直前まで迫っていた死に、秀樹が呆けていたが仁の言葉に無言で何度も頷いた。それを見て仁は小さく溜め息を吐く。

「ほら、早く行きなつて。そこに居ると巻き込まれるよ」

言われて秀樹は大慌てでその場を逃げ出した。

彼の後姿に、仁は先程より少しだけ大きな溜め息を吐いた。

そんな彼の様子を、真矢がクスクスと笑いながら見ていた。

「フフ！ 仁君もなかなか捻くれ者ね。どうせ謝らなくても助けはするつもりだったくせに」

真矢と、彼女の内側に引っ込んでいる亜矢は気付いていた。仁は彼が謝ろうがどうしようが、彼を助けていた。

真矢の言う通り、なかなか捻くれている。

「それとこれとは別問題だし……でも、謝らなかつたら謝らなかつたで、後で一発ぐらいぶん殴ってたけどね」

その答えが面白かったのか、真矢はケラケラと笑い声を上げた。

「アハハ！ そっかそっか。うん、そうね。亜矢を苛めた奴にはそれ位してやらなくっちゃ。さて……」

一頻り笑って満足したのか、真矢が表情を引き締めスパイダーファッジを見据える。彼女の雰囲気の変化に、仁もスパイダーファッジに目を向けながらデイナドライバーを取り出し腰に装着した。

「敵を前にしてお喋りとは、随分と余裕みたいね？ 一度痛い目に遭わない時が済まないのかしら？」

「……とりあえずこいつを何とかしないとね」

「気を付けてね。あいつ、そこらのファッジとは一味違うから」

「亜矢の中から見てたからよく知ってるわ。お互い、油断しないようにしましょ」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

仁は何時も通り、先ずは様子見も兼ねてバッファローヒューマンフォームの為のベクターカートリッジをドライバーに装填した。

真矢もそれに合わせ、ベクターカートリッジを起動しアダプトキャットに装填し、デインドライバーに装着する。

そして真矢は仁とも亜矢とも違うポーズを取り、それを見て仁も何時もの変身ポーズを取った。

「変身！」

〈Open the door〉

それぞれデイナとルーナに変身した仁と真矢。

2人が仮面ライダーに変身したのと同時に、スパイダーファッジは両手から糸を放射状に放って2人を絡め捕ろうとした。先制で放たれた面制圧攻撃。

しかしデイナはそれをハルバードモードのハイブリッドアームズで切り払った。一方のルーナはリプレッサーショットで迫る糸を弾幕を張って防いでいる。

糸による先制攻撃が防がれたと見て、スパイダーファッジは背中の中脚を使って跳躍し

2人に飛び掛かった。

「はあああつー!」

空中から飛び掛かり、背中の4本の脚と両手足を使って激しい攻撃を2人に繰り出す。仁はそれを斧槍で何とか防御するが、真矢が変身しているルーナは違った。

ルーナは軽やかなステップとしなやかな動きでスパイダーファッジの攻撃を紙一重で回避し、銃のグリップで弾き、そうして出来た隙に容赦なく蹴りと銃撃を叩き込んだ。

「ぐっ!?!」

ルーナからの反撃にスパイダーファッジは困惑した。以前とは戦い方が違う。どちらかと言えば銃撃がメインだった亜矢に比べ、真矢は接近戦に強い。真矢の存在を知る由もないスパイダーファッジには、ルーナがいきなり戦い方を変えたように見えて驚かすにはいらなかった。

そしてこの場に居るのはルーナだけではない。彼女の反撃で動きを止めたスパイダーファッジに、攻撃が緩んだことで余裕が出来たデイナが攻撃に参加した。

「よっ」

「くうっ?!」

振り下ろされる斧槍を何とか防ぐが、そうすると今度はルーナが無防備なボディに向けて銃口を向け引き金を引いてくる。連続して放たれる銃弾が、スパイダーファッジの

甲殻を削り取っていく。

「ぐうあつ!? くつ!? このおつ!!」

あまりにも一方的な状況に、スパイダーファツジは業を煮やして以前2人と対峙した時に使用した、伸ばした脚で体を支え自分を宙吊りにしての三次元軌道での攻撃に切り替えた。

あの時は美香の横槍もあつて凌げたこの攻撃だが、今度は邪魔が入らない。

「つたく、またこれだよ。これ面倒臭いんだよなあ」

「そう言う事なら、任せて!」

不満を漏らすデイナに、ルーナが自信満々に返した。

2人の会話を遮るように攻撃を繰り返すスパイダーファツジ。

その瞬間、ルーナは動き出した。

「フフツ!」

笑みと共に飛び上がったルーナが、空中軌道をしているスパイダーファツジに飛び付いた。

その光景に飛び付かれたスパイダーファツジは勿論、傍から見ていたデイナも度肝を抜かれる。

「んなあツ!」

「ええ——?」

絶句するデイナの前で、スパイダーファツジに飛び付いたルーナは相手の体に密着させたリプレッサーショットの引き金を引いた。防御も回避も出来ない銃撃が撃ち込まれ、スパイダーファツジは堪らず崩れ落ちた。

「あああああああつ?!」

「おつとと——!」

崩れ落ちるスパイダーファツジの下敷きになる寸前、デイナは離れルーナも離脱して彼の傍に着地する。

デイナと並び立つたルーナは、彼に向けて得意げにピースサインをした。

「ウフフ……どう?」

「……お見事です」

素直に感心するデイナに気を良くしたのか、ルーナは胸を張る。

その内心では、デイナに関心を寄せられている真矢に亜矢が人知れず嫉妬していた。

【うゝ、真矢あ……】

「おつと、あんまり仁君に良い所見せてると亜矢が機嫌を損ねちゃうわ。つて事で、そろそろ決めましょ。仁君」

〈ATP Burst〉

「ん、そだね。そろそろ終わらせようか」

〈ATP Burst〉

2人揃ってレセプタースロットルを引き、必殺の一撃の構えを取る2人の仮面ライダー。

スパイダーファッジはそれを前に、何とか体勢を立て直すと両手からこれでもかと糸を出し自分と2人の前に糸の壁を作り出した。

目の前に立ち塞がる障害を前に、しかし2人は臆せず飛び込みノックアウトクラッシュを放った。

「ハアアアアアツ!!」

同時に放たれたノックアウトクラッシュの飛び蹴りを、何重にも糸を重ねて張った壁が受け止める。

恐るべきことに糸の壁は破れる事無く2人の必殺技を受け止めていた。

「ツ?! 柔らかいのに、貫けない!？」

「蜘蛛の糸だからね、そりゃ頑丈だろうさ」

蜘蛛の糸は強度は鋼鉄の4倍、伸縮性はナイロン以上、そして耐熱性は300度以上と言われている。サイズがサイズなら大型の飛行機を受け止める事も可能と言われる素材だ。それが遺伝子レベルで強化されたファッジの出したものであるのなら、この

程度の芸当が出来てもおかしくないのかもしれない。

しかし2人は諦めず、糸の壁を突き破るつもりで蹴りを放ち続ける。対するスパイダーファツジも、負けてなるものかと2人の蹴りを受け止めている糸が千切れるよりも早くに次々と糸を生み出し壁を補強する。

攻撃と防御の一進一退、盾と矛の勝負。しかして盾と矛の性能が等価なら、軍配はそれを扱う者の強さに由来した。

この場でその強さを有していたのは、デйнаとルーナの2人であった。

「これで——」

「負けない!!」

2人の放つ蹴りの威力に、補強が追いつかなくなり糸の壁が突き破られた。壁の補強に全力を挙げていたスパイダーファツジには、この2人の攻撃を回避する事も防御する事も出来なかった。

「ああっ?!」

「ハアツ!!」

壁を突き破り、スパイダーファツジに2人の渾身の蹴りが突き刺さる。

「ぐあああああああつ?!」

蹴り飛ばされ、壁に叩き付けられるスパイダーファツジ。しかし彼女は耐えた。回避

も防御も出来ず直撃した筈なのに、スパイダーファツジは倒される事なく壁に手をつきながらも何とか立ち上がったのだ。

「え、まだ立てるの?」

「ん、糸の壁で大分威力殺されたみたいだね。執念は大したもんだ」

デイナの推測通り、スパイダーファツジがまだ立てるのは糸の壁が2人の攻撃の威力を大幅に減衰させたからだ。一見すると無駄な努力に見えたかもしれないが、その執念は彼女を生かす要因となった。

しかし、生かされただけだ。最早彼女に戦うだけの力は残されていない。立つだけで精一杯であった。

「はあ、はあ……クソクソクソツツ!? 何でツ!? 何で勝てないのツ!」

2人の仮面ライダーに対する呪詛を口にしながら、スパイダーファツジはその場を離れた。このままここに居てはトドメを刺され、変異を解かれる。そうなつては彼女はお終いだ。

覚束ない足取りでその場を離れるスパイダーファツジ。それを見てルーナはリップレッサーショットの銃口を向け投降を促した。

「ちよつと待った。逃がすと思ってるの?」

銃口を向けられ、動きを止めるスパイダーファツジ。ルーナが動きを牽制してくれて

いる間に、デイナが大剣モードのハイブリッドアームズで取り押さえに近付いた。

「あんた、傘木社に所属してるんだろ？ 予想は付いてるけど、倒されると体燃えるんだよね？ だったら倒されなかつたらそうはならない訳だ。って事で、大人しく元に戻ってくれない？」

「くっ!？」

迫るデイナに、スパイダーファッジが歯噛みするが最早どうしようもない。こうなつたら変異を解き、相手が油断したところで逃げ出すかと算段を立て始める。

そこに無数の銃撃がデイナとスパイダーファッジの間に壁を作った。咄嗟にその場を離れるデイナと、銃撃が来た方向に銃口を向けるルーナ。

「何だ何だ?！」

「あれは——!！」

2人の視線の先には、無数のアントの姿。スパイダーファッジの撤退を援護する為、傘木保安警察が動いたのだ。

それを率いているのは、新たに制作されたベクターブレスでver. 2へとなったスクイッドファッジだった。

スクイッドファッジが合図を送ると、アントファッジ達は一斉にデイナとルーナに攻撃を仕掛けた。2人がそれへの対応に追われている間に、スクイッドファッジはスパイ

ダーファツジを連れてその場を逃げ出した。

逃げた先で2人は変異を解き、チミンはその場に崩れ落ちる。

「はあ、はあ……くっ!?!」

「まだ元氣そうだな、チミン?」

「何よアデニン、私を笑いに来たの?」

「定型文な対応だな、つまらん女だ」

「ほっというよ。それで? 本気で何の用?」

吐き捨てるように言うチミンに、アデニンは懐から薬剤の入ったアンブルを放り投げる。それを受け取り、チミンは思わず目を見開く。

「ちよ、これってまさか——!?!」

「お前が以前ウルフファツジに対して使用した薬剤の改良品だそうだ」

アデニンはそれ以上は語らず、黙ってその場を離れた。後は好きにしろという事らしい。

残されたチミンは奥歯を噛み締めながら、手の中のアンブルを見つめる。

「……せめて実験動物として価値を示せて事じゃないの……くっ!?!」

渡されたアンブルに込められた雄成の意志を読み取り、チミンの目から一筋の涙が零れ落ちる。

それは果たして自分の価値が下がった事に対する悔しさからくるものか。

それとも継るべき相手から大分見放されつつあることに対する悲しさからくるものか。

この場にその涙の意味を知る者は、彼女を除いて誰も居なかった。

第17話：眠り続ける兄

物が散らかった部屋の中で、峰が身支度を整えていた。

珍しい事に、この日は軽くだが化粧をしている。普段は化粧つ気も無く、拓郎などに女つ気が無いと辛辣な評価を下される彼女が、たまにしか使わない化粧道具を取り出して自分を磨いているのだ。

仁と亜矢が見れば信じられないと言った顔をするだろう。

だがこれも彼女にとつては必要な事であった。今日は彼女にとつて大事な予定がある日、こう言う時くらいは彼女だつて着飾っていた。

「ふむ……………こんなもんかな？」

最後に鏡で出来栄を確認し、問題がない事を確認するとバッグを持って家を出る。眼鏡を掛け直しながら歩く彼女が目指すのは、都内にある大手病院。そこに居るある人物に会いに、彼女は足を進めていた。

明星大学の白上ゼミの研究室では、峰が居ない事に仁が疑問の声を上げていた。

「あれ？ そう言えば今日宮野先輩は？」

仁の疑問の声に、亜矢は周りを見渡し首を傾げる。何だか今日は随分と静かな気がしていたのだが、その原因が峰の不在である事に気付いた。

「そう言えば今日はラボの方でも見かけませんでしたね？ お休みですか？」

「ああ……あいつなら今日は私用で休みだ」

2人の疑問の答えたのは拓郎だった。彼は自分の研究を行いながら素っ気なく答えた。ドライな彼の答えに、亜矢は違和感を抱き、仁は特に興味も無さそうに適当な相槌をした。

そのまま峰が居ない事への疑問が流れていきそうになった時、亜矢の中で真矢が呟いた。

【ずっと気になってたんだけど……】

「ん？ 何、真矢？」

突然疑問の声を上げた真矢に、亜矢は対応を口に出してしまふ。その声に仁が反応し彼女の方を見る。

「どうかしたの、 亜矢さん？」

「あ、 真矢が気になる事があるって……」

【あの峰って人、 一体何者？ 只の学生じゃないわよね？】

以前亜矢がデインドライバーを手に入れようとした時、 峰は付け焼刃ではない戦闘技術を見せた。 あの時は真矢の助力もあつて勝つ事が出来たが、 あの時の動きは明らかにただ教授の研究や活動に興味を持ってファッジに関わつた者のそれではない。 どう考へても実戦を考へて身に付けた戦う為の動きだ。

仁や亜矢の様に、 必要に駆られ磨かれたのとは違う峰の戦闘技術に、 亜矢は改めて疑問を抱いた。

「……そう言えば宮野先輩って、 何で白上教授の裏の活動に参加したんですか？ 瀬高先輩も？」

問い掛けられて、 拓郎は何と答えたものかと言つた感じに唸り声を上げた。 自分一人の事なら答えるのも吝かではないが、 流石に峰の事まで勝手に話すのは気が引けると言つたところだろうか。

拓郎が言い辛そうにしていると、 それまで黙つていた白上教授が口を開いた。

「これに関しては、 ちよつとデリケートな問題だね。 他人の口からおいそれと話す訳にはいかないんだ」

「……………つまり、普通とは違う事情が宮野先輩にはあるって事ですわね？」

教授の口ぶりから峰には複雑な事情——それも戦わねばならないような何か——がある事を仁と亜矢は察した。

皆の言いたい事は分かるし、そう言う事なら第三者である自分達があれこれ訊ねる事はあまりにも失礼過ぎるかと思いを示し口を紡ぐ二人だったが、それでも気になる事は気になった。特に仁は、あの峰に一体何があつたのかと眉間に皺を寄せた。

そんな彼の様子に小さく溜め息を吐くと、白上教授はメモ用紙にペンを走らせ彼に渡した。

「これは？」

「どうしても気になると言うのなら、そこに行つてみると良い。今から行けば宮野君とも会えるだろう」

それだけ言つて教授は研究室の方の自分のパソコンと向き合つた。それ以上は自分の口から言う事は無いという事らしい。

仁は渡されたメモ用紙に視線を落とす。そこに書かれていたのは「四つ葉総合病院」と言う都内の病院と、「宮野 健けん」と言う名前だつた。

メモ用紙に書かれている二つの名前を覚え、仁は亜矢を見た。彼女も横から彼が渡されたメモ用紙の内容を見ていた。

自分に視線が向けられた事に気付き垂矢の方も仁を見る。視線が合うと、2人は同時に頷き合った。

そして2人は手早く片付けると、メモに書かれた病院に向かうべく研究室を出て行った。それを見もせず見送る白上教授。

拓郎はそんな彼にこれで良かったのかと訊ねた。

「良いんですかね？ 勝手にあの2人行かせちゃつて？」

「宮野君からは、駄目とは言われていないよ」

「そうかもしれないが……」

拓郎はどこか納得できていない様子だ。勝手に2人に、峰のプライベートに関わる事を一端でも教えた事に不満があるらしい。

「あの2人は俺らと違って、教授の裏事情に深く関わってる。そんな2人に、関係ありそうな事を黙っておく理由はないんじゃないか？」

不満そうな拓郎にそう告げたのは史郎だった。実験機材の向こうから顔を出し、首から上だけを拓郎に向けている。

「俺と康介はよく知らないけど、宮野の奴は殊更に教授の裏事情に関係してるんだろ？」

なら、同じように裏事情に深く関わってるあの2人を私情で除け者にするのは少し違うんじゃないか？」

「除け者……………ん……………」

史郎の口にした除け者と言う言葉に何かを言い返したそうにした拓郎だったが、良い反論が思いつかず、また彼の言う通り私情が入っている事も事実だったので何も言い返せなかった。

拓郎はそのまま何も言い返せず、口をへの仁に曲げて視線を史郎から外しパソコンの画面に向けた。体はその場に留まっているが、これも一種の逃避である。

その彼の近くに、一杯の紅茶が置かれた。

「ま、難しく考える事は無いだろう。宮野君の性格とあの2人の事を考えれば、そう悪い結果にはならない筈だよ」

そう言って白上教授は彼の元を離れ、史郎と康介にも紅茶の入ったカップを渡した。

彼の後姿を見送り、拓郎はそつと紅茶のカップを口に付ける。程好い温度に調整された紅茶の温かさと、エグみの無い爽やかな苦味が心を落ち着かせてくれた。

「ふう……………」

自然と零れる溜め息。拓郎は一息つき、自分が必要以上に肩肘張り過ぎていた事に気付いた。

(全く……………らしくない)

拓郎は思わず苦笑し、気分を入れ替えて研究に戻った。仁と亜矢なら、峰の抱える問

題と上手く付き合ってくれと信じて……………。

「四つ葉総合病院……………ここか」

大学を出た仁と亜矢の2人は、彼の運転するトランスポゾンで教授に教えられた病院へと到着していた。

教授に渡されたメモ用紙によると、ここに居るといふ宮野 健を訊ねれば何か分かるという事だったが……………。

「この病院で働いてらっしゃるといふ事でしょうか？」

「ん、そんな感じじゃないと思うけど……………取り合えず受付で聞いてみよう」

仁は早速駐車場にバイクを止め、正面から入ると受付に向かい健と云う人物について訊ねた。

「すみません。こちらに居る宮野 健と言う方に会いたいですけど？」

「宮野 健……………少々お待ちください」

仁が訊ねると、受付の女性が席を外した。戻ってくるまでの間仁は受付カウンターに寄り掛かり、病院にやって来る患者達の様子を観察していた。

受付の女性は程なくして戻ってきた。

「お待たせしました。面会を希望されているのは、宮野 健さんで宜しかったですか？」

「はい」

「そちらの方でしたら、303号室の病室にてお会い出来ます」

病室に居るといふ事は、健と言う人物は患者と言う事だ。

仁と亜矢は互いに顔を見合わせると一度頷き合い、そして受付に病室を教えてください向かって行く。

やがて辿り着いた病室に、宮野 健と言う文字を見つける2人。仁が代表して病室のドアをノックすると、中から峰の声が聞こえてきた。

『はい、どうぞでー!』

呼び声が掛かったので、2人は病室へと入った。

病室に入ると、ベッドサイドの椅子に腰かけていた峰が少し驚いた表情で2人の事を見た。

「えっ?! 2人とも、何で?」

「どうも、先輩」

「すみません先輩。真矢が先輩の事に色々疑問を抱きまして……」

「そしたら教授が、ここに来れば先輩がラボに協力してる理由が分かるって」

2人が素直にここに来た理由を告げると、峰は少し苦笑してベッドに寝ている人物に目を向けた。

「まあ……何時かは2人にも話した方が良くはなかって思ってたんで、別に良いんですけどね」

「……その人は？」

「ご家族ですか？」

まあ苗字が同じなのだから、血縁者である事に違いは無いだろう。ベッドの上で眠っているのは、峰ともそう年が離れていないように見える男性だ。

峰は男性の、中途半端に伸びて目に掛かっている前髪をかき分けながら答えた。

「兄さんです。もう2年はここで眠っています」

「2年も……」

「事故ですか？」

仁がそう訊ねる。だが彼が訊ねると、峰は首を横に振り顔を憤りに歪め拳を握り締めてそれを否定した。

「いいえ、事故なんかではありません。兄は奴らに……傘木社の連中にやられたんです——!?!」

今まで見た事のない顔を見せる峰に、仁が目を細める。だが彼女から放たれる雰囲気、亜矢は身に覚えがあった。

そう、以前自分の前に立ち塞がった、あの時に感じた雰囲気似ているのだ。

「傘木社に?」

「……………兄は、元々傘木社の研究員だったんです」

峰の告白に亜矢は驚き、仁は興味深そうに彼女を見る。峰は2人からの視線を受け、気持ちを落ち着けるように大きく深呼吸して話を続けた。

「最初はただ普通の研究員として働いていました。当時は私も、兄が大企業の研究員になれたと思って喜んでいました。だけど——」

健は研究者として優秀だったが、同時に人格者でもあった。優秀であるが故に傘木社での裏の研究を知らされ、そしてそれに対して異を唱えたのだ。

その事を当時の峰は知らなかった。傘木社が裏で人体実験をしていた事を、彼女が知る事になったのは傘木社の魔の手が健に伸びた時であった。

「……………表向きは、兄は事故により昏睡状態になったとされています。でも、後になって兄の部屋を整理してる時、偶然にも兄が纏めていた傘木社の非人道的な人体実験などに関

する資料を見つけたんです」

推測でしかないが、健は恐らくこれを警察などに知らせるつもりだったのだろう。そしてその前にこの事がバレて、行動を起こす前に傘木社からの刺客の手に掛かった。

「この事、警察には？」

「勿論、資料の事を知ってから私は警察に駆け込んで全部の資料を基に傘木社を告発しようと思いました……………だけど!？」

警察は峰の告発を相手にしなかった。最初こそ真面目に取り合ってくれたのだが、突然手の平を返したように彼女が提示した資料を全て虚偽と断じて傘木社への捜査を打ち切ったのだ。

恐らくは傘木社からの裏取引があったのだろう。仁と亜矢はそれを察し、そしてそれにより涙を呑むしかなかった峰の無念を思い胸を痛めた。

気付けば峰は拳を握り締め、涙を流していた。

「相手にしてくれない警察と、眠り続ける兄に色々とやる気を無くして半ば廃人になってた私に声を掛けてくれたのが白上教授でした。あの人は傘木社と戦う為に少しづつでも力を付けているって。だから私も、それに協力しようって思ったんです」

「……………戦闘技術はそこから学んだんですか？」

「ええ。実を言うと、デイナドライバーは本当は私が使う予定だったんですよ」

まさかの発言に2人は思わず目を剥いた。

デINAドライバーは元々峰が使う為に調整されていたのだが、最初のデINAドライバーは仁を助ける為に使われ彼専用。そして予備として作られたドライバーは、亜矢との勝負に負けた事で彼女専用となってしまう。

その時の彼女の無念は如何ばかりだったか。特に横から搔つ攫う形となった亜矢は、申し訳無さを感じて峰に頭を下げた。

「その、ごめんなさい。私、何も知らないからって……」

「ん……良いんですよ。あの時負けたのは私の方です。傘木社と戦う為には、より優れた方がそれを使う方が理に適っています。だから気にしないでください」

そうは言うが、峰の顔にはやはり何処か口惜しさが見え隠れしていた。やはり兄の無念を晴らす為には自分の手で、と言う気持ちが強いのだろう。それを押し隠して、彼女は2人に戦いを託した。

強い女性だ……仁は峰をそう評価した。今までは偶に変な方向にスイッチが入る女を捨てた先輩と言う印象でしかなかったが、その評価を改めたのだ。

「何時か……」

「ん？」

「何時かきつと、起きてくれる日が来ますよ」

気付けば仁の口からは、そんな励ましの言葉が出ていた。彼の口からそんな言葉が出てくるとは思っていなかったので、峰は一瞬驚き目を瞬かせ、次の瞬間には目尻に薄く涙を浮かべて笑みを浮かべていた。

「うん……………ありがとう」

それから3人は少しの雑談を挟み、ちょうど時間が昼になったという事で病院内の食堂へと向かつて行った。

病室から離れて行く3人の背中。それを見送る人物が1人居た。

「……………宮野 健、ねえ？」

3人の背を見送り、彼らが見えなくなってから病室の前に立ったのはチミンだった。仁と亜矢に仕返しをしようとしてコッソリ2人の後をつけていた彼女は、2人の後をつけて病院にまでやって来ていたのだ。

彼女は3人が角を曲がり姿が見えなくなったのを見計らって病室の前に移動し、部屋

番号の下に掛けられた患者の名前を見てそれが誰であったかを思い出した。

「……ああ、昔私達の事をバラそうとしてたあの馬鹿か。仕留めたと思つてたのにまだ生きてたとはね」

その昔、健が傘木社の悪事を告発しようとしていた時、彼を襲つてそれを妨害したのは他ならぬ彼女であつた。スパイダーファツジとなり健を襲い、彼を意識不明の昏睡状態にさせたのだ。

尤もその時彼女自身は健の命を奪うつもりであつた為、こうして彼が生きている事は彼女にとって誤算であつた。

あの2人よりも先に、こちらを仕上げてしまおうと病室に入るチミン。確実に抵抗してくるあの2人に比べれば、死に損ないにトドメを差す事など赤子の手を捻るよりも容易い。

「やり残した仕事は、きつちり片付けないとね——！」

病室に入り、スパイダーファツジ ver. 2 に変異して健の心臓を抉ろうと手を上げる。が——

「——いや、そうね……」

何を思ったのか彼女はその手をゆつくりと下ろし代わりにベクターカートリッジを取り出した。それも1個ではなく複数個。

顔も変異しているので表情に変化はないが、それでもこの場に第三者が居れば彼女が悪い笑みを浮かべているのが手に取るように分かっただろう。

「フフ——！」

スパイダーファッジは複数のベクターカートリッジを手に、眠り続ける健を見下ろした。

そして——

一方病院の食堂で軽く昼食を済ませた仁達。食後のコーヒーで一服し、さてそろそろ出ようかと言う時突然峰の持つタブレットがアラームを鳴らした。

けたたましいアラームに他に居る客からの視線が突き刺さる。亜矢は向けられる視線に申し訳なさそうに頭を下げ、仁と峰はファッジの出現にタブレットを覗き込んだ。

「場所はどこです？」

「ちよつと待つてください。場所は………え？」

タブレットに表示されている地図は、正しく今3人が居る辺りを示していた。そしてファッジの存在を示す光点は、明らかに3人が居る病院内にあった。

つまり、ファッジは今正に3人が居るこの病院内に出たという事。

驚愕に顔を見合わせる3人。その時、食堂の外がにわか騒がしくなる。どうやら院内のファッジが暴れ出したらしい。騒動によるパニックが伝染し、動ける人々が我先にと逃げ出し始めたのだ。

「行こう。このままだと先輩のお兄さんも危ない」

「ッ!? はいー!」

2人は即座に気を取り直し、食堂を出て病院内を駆けていく。先程のタブレットではファッジが現れたのは病院内の何処かと言う事しか分からなかったが、何処に出たかの検討は大体つく。要は人の流れに逆らえばいいのだ。その流れの上流に騒動の原因はある。

途中すれ違った職員などに引き留められるが、2人はそれを振り払い人の流れに逆らって行った。

一階の食堂を出て、病院ロビーを通り、階段を上がった。

二階に上がると、近くから何かが壊れる音がした。どうやらファッジは二階に居るらしい。

2人は互いに頷き合うと、息を潜めて慎重に二階を進んで行く。二階の診療病棟内は既に人々が逃げ出した後なのか、物が散乱しているだけで人の姿がない。

極力足音を立てないようにしつつ、リノリウムの廊下を歩く。

と、その時、目の前に病院の医師だろう白衣を着た男性が血塗れになりながら床を這って診察室から出てきた。

「う、うう……た、助けて……」

医師は2人の姿を見つけると、手を伸ばして助けを求めてくる。仁は周囲に警戒しつつ、亜矢と共に医師に駆け寄りその手を取った。

次の瞬間

「グルアアアアアッ!」

「ヒイツ!」

突然、2人が何もしていないのに医師の体が持ち上がった。まだ診察室の中にある足が、ファツジに掴まれ持ち上げられたのだ。

医師はそのまま診察室の中に引き摺り込まれそうになる。2人は物凄い力で引き摺り込まれそうになる医師の手を掴み、彼を助けるべく診察室から引つ張り出そうとした。

「ああああああつ!? 助けて、助けて、助けてえッ!」

「くう……」

「駄目です！ 手を、離さないで………ああつ!？」

必死に医師の手を引く2人だったが、医師自身の血で濡れた手は滑りやすい上にファツジの力に生身では対抗しきれず、医師は診察室に引き摺り込まれてしまった。

「ひつ!?! やめ、ぎやあああああつ!?!」

引き摺り込まれた直後、診察室から飛び出る血飛沫と断末魔の叫び。目の前で1人の命が奪われた事に拳を握り締める仁と目を背ける亜矢。

だが2人に彼を助ける事が出来なかつた事を悔やむ時間は与えられなかつた。血飛沫が止むと、壁を突き破つて騒動の原因となるファツジが飛び出してきた。

「こいつが……?」

飛び出してきたそのファツジの姿に、仁は眉間に皺を寄せた。

そいつは奇妙なファツジだった。鋭い牙が生えた口に犬か何かの様な耳があり、腕には鱗、体の各所からは吸盤のついた触手が生え、背中には虫の羽まである。

今までのファツジは何だかんだで遺伝子元の生物が外見で大体特定できるものばかりだったが、コイツは何が元になつているのか全く分からない。まるでいろいろな生物をごちゃ混ぜにしたような奇妙な姿だった。

「亜矢さん、気を付けて。こいつ今までのファツジとは違う」

「そうみたいですね。真矢もさっきから気を付けて言ってます」

唸り声を上げるファッジを前に、2人は警戒しつつデイナドライバーを取り出し腰に装着した。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

それぞれベクターカートリッジをドライバーに装填する仁と亜矢。2人の様子に本能的に脅威を感じ取ったのか、目の前のファッジは牙を剥き唸り声を強くした。

「さあ、検証の時間だ」

「私はもう、失わない!」

「変身!」

〈Open the door〉

2人はデイナとルーナに変身し、構えを取りファッジと対峙する。戦闘体勢に入った2人を前に、ファッジは一切の躊躇も無く2人に飛び掛かった。

その頃、峰は健を心配して危険を承知で彼の病室へと向かっていた。途中病室内で無残に殺されている入院患者の姿などを見る度、峰は最悪の事態を予想し病院内を駆け抜

ける。

「兄さんッ!?!」

漸く健の病室に到着した時、彼が居る筈の部屋のドアは“内側から”無残に破壊されていた。その光景に彼女はまさかと思ひ、縋る思いで病室の中に飛び込んだ。

「兄さんッ!?!……………え?」

峰が病室内に入った時、そこには誰も居なかつた。ベッドから何まで病室内はあらゆる物が破壊されていたが、肝心の健の姿は影も形も無い。

「兄さん……………一体何処に——!?!」

峰が呆然と室内を見渡す中、割られた窓から風が吹き込み引き裂かれたカーテンの切れ端が風に舞い上がった。

第18話：電光石火の頭脳

「デイナ・ルーナの2人にファツジが襲い掛かる。

「グルアアアアアアッ！」

飛び掛かってくるファツジを左右に分かれて回避し、デイナは手刀、ルーナは蹴りでの迎撃する。

「ふっ」

「やっ！」

放たれた2人の攻撃は、ファツジの背を捉え飛び掛かった勢いそのままに前に大きく吹き飛ばされる。

「グウウウウ——！」

かなりしつかりと攻撃した筈だが、ファツジは全く堪えた様子を見せない。どうやら見た目以上に防御力もあるようだ。

しかしデイナは臆さず接近すると、ファツジに正拳突きを叩き込んでダメージを与えようと奮闘。一方のルーナも、リプレッサーショットを抜きデイナの攻撃の合間に銃撃を加えて確実にダメージを与えていった。

2人のコンビネーションに、ファツジは徐々に追い詰められていくかと思えたが――

「ゴポツ――」

「ん？」

突然目の前のファツジから唸り声が消え、喉から気泡が弾けるような音が鳴った。それに気付いたデイナが何かを不審に思い攻撃の手を一旦止め、少し相手から距離を取り様子を見た。

それが彼の危機を救った。デイナが距離を取ったと同時に、ファツジは口から霧状の液体を噴出。これは不味いと、デイナは更に距離を取った。

お陰で直撃は免れたが、霧状の液体は僅かながらデイナの腕の装甲に付着した。するとその部位が白い湯気のような煙を上げて音を立てる。

「毒？ いや、この臭い……」

最初デイナはそれを毒の類かと思った。だが感じる臭いから、それが毒ではない事に気付く。

「これは……蟻酸か？」

ツンと鼻をつく酢の様な臭いに、それが蟻酸であると気付いた。だがそうであるなら、目の前のファツジは蟻の能力を持ったファツジと言う事になる。

目の前のファツジはともではないが蟻の特徴を持っていない。蟻には毛も耳も、鱗も触手も無いのだ。

ではこの蟻酸は一体何なのか？

デイナが首を傾げていると、ファツジは体から触手を伸ばしルーナに巻き付けた。ルーナは咄嗟に回避しようとするが、素早く無数に伸ばされた触手を回避しきる事は叶わず捉えられ、振り回されて壁に叩き付けられてしまった。

「あうっ!!」

「ちっ……」

苦痛の声を上げるルーナに、デイナは疑問を一旦脇に置き手刀でルーナに伸ばされた触手を切断。そのまま中段回し蹴りでファツジをルーナ同様壁に叩き付けると、まだ触手に巻かれた上に床に倒れているルーナに手を貸した。

「大丈夫、亜矢さん？」

「は、はい、何とか……」

【あいつ何なのかしら？ 明らかに複数の動物の特徴持つてるわよ?】

吸盤でルーナに貼り付く触手を引き剥がしながら、デイナは首を傾げる。

あのファツジは明らかに今までのものとは違う。特徴がハッキリとせず、まるで統一感がない。

ファツジに関して様々な考えを巡らせていたデイナだが、相手は悠長に考える時間をくれなかった。両腕の鱗を刃とし、2人に攻撃を仕掛けてきたのだ。

「シャアアアアアッ！」

「くっ……」

まだ体勢を立て直せていないルーナを守るべく、デイナは前に出てファツジの攻撃を受け止めた。鋭い鱗による斬撃を、手刀で迎撃し反撃の回し蹴りをお見舞いした。

蹴りは見事に直撃し吹き飛ぶファツジだったが、背中の羽を羽搏かせ即座に体勢を立て直してしまう。1体で随分と能力が多彩な奴だ。

戦いながらデイナは敵の観察を続けるが、やはりどれだけ考えても行きつく結論は一つだけだった。

「……やっぱりあいつ、1人の人間に何個もベクターカートリッジ使ってるんじゃない？」

「その通りよ」

デイナが辿り着いた結論を口にする、それを肯定する声が聞こえてきた。デイナとルーナが声のする方を見ると、そこにはver. 2のスパイダーファツジが佇んでいた。

スパイダーファツジの登場にルーナはリプレッサーショットを構えて身構えるが、デイナは目の前のファツジに集中しながらスパイダーファツジの言葉に耳を傾ける。

「そいつには、手元にあつたベクターカートリッジを全部ぶち込んであるのよ。正直成
功するかは賭けだったんだけど、案外上手くいった様ね」

満足そうに言うスパイダーファッジだったが、デイナには気掛かりなことがあつた。

デイナとルーナはドライバーがフィルターの役目を果たしているので負担は少ない
から忘れがちだが、ベクターカートリッジは直挿しだと使用者に相当負担が掛かる筈
だ。人間の体に異物を注入して体を変異させているのだから、肉体に負担を掛けていな
い訳がない。

今まで二本以上同時にベクターカートリッジを使うファッジが居なかつたのだから、
そう言った負担何かを考えての事だった筈。

それがいきなりこんな何種類も1人の人間に使うような事をして、変異した人間は大
丈夫だろうか？

「ちよつといい？ 1人の人間に何本もベクターカートリッジ使つたつて言つてたけ
ど、それ中の人は大丈夫なの？」

デイナがそう問い掛けると、ルーナがハツとなつてファッジとスパイダーファッジを
交互に見る。

「あら、そこに気付くとはね」

「関心はいいかから答えて」

「面白味の無い奴ね……ええ、そうよ。中の人間には相当な負担になつてる筈よ。何しろ全身の細胞をシャレにならないレベルで活性化させてるんだもの。並の人間だったら、まあ……活性化し過ぎた細胞の所為で、変異を解除しても何かしら後遺症が残るかもね」

「何て事を——!?!」

変異させられた人間に対して何の感慨も抱かず、他人事のように後遺症が残るだろうことを告げるスパイダーファッジにルーナが憤りの声を上げる。デйнаも、口には出さないが内心ではスパイダーファッジに対して嫌悪感を抱いていた。

そこでデйнаはもう一つ、ある事が気になった。あのファッジ——複数の生物の特徴をこちゃ混ぜにしているのでカメラファッジとでも名付けるか——に変異させられているのは一体何処の誰だろうか？

スパイダーファッジには殆ど使い捨ての駒としてアントファッジになれる傘木保安警察が居るが、いくら連中でも配下の兵士をこんな風の実験台にはしないだろう。こう言う事には、何の関係も無い一般人なんかを使う筈だ。

それは一体誰なのか………考えを巡らせた時、峰が息を切らせて2人の所にやって来た。

「はあつ！ はあつ！ か、門守君、双星さんッ!? 大変!?!」

「宮野先輩？」

「先輩、ここは危険ですッ!? 早く離れて——!？」

このままでは戦闘に巻き込まれると、ルーナが退避を促す。

しかし峰はそれどころではなかった。彼女の最愛の兄が姿を消してしまったのだから。

「兄さんがッ!? 兄さんが何処にも居ないんですッ!?」

「えっ!？」

健が姿を消したと言う峰の言葉に、ルーナは困惑せずにはいられない。そうそう目覚めるような状態ではなかっただろうし、仮に目覚めたとしても直ぐに動けはしないだろう。峰の口振りから単純に目の前のファツジに襲われた訳でもないのだろう。

では一体何処に？

「……………まさか？」

ルーナと峰が慌てる中、デイナはスパイダーファツジを見て次いでカメラファツジを見た。

健は以前傘木社に勤めていた。

健は傘木社を告発しようとして消されかけた。

スパイダーファツジは傘木社の幹部の1人。

「ここまで情報の統合し、デイナはある結論に辿り着いた。

「おい蜘蛛女、教えろ。そのファツジに変異してるのって……………」

デイナが確信を持って問い掛けると、スパイダーファツジは笑いながら答えた。

「ウフフフツツ！ ほくと、頭の回転の速い奴ね。ええそうよ。ご想像の通り、こいつは宮野 健を素体にしたファツジよ」

スパイダーファツジの口から告げられる衝撃の事実、峰は足元が崩れたかのように体を揺らした。

「に、兄さん？ 兄さんが…………嘘…………」

信じたくないと言うように首を振る峰だったが、彼の病室が内側から破壊されていたのを思い出してスパイダーファツジの言葉が真実である事を嫌でも実感した。

衝撃を受けたのはルーナも同様だ。ただでさえ普通に倒しては後遺症が残りかねないキメラファツジが、よりにもよって長年昏睡状態で体力の落ちている健を素体にしてるのである。普通に戦って倒しては最悪殺してしまいかねない。

しかしそんな2人の葛藤もキメラファツジには関係なかった。

「ガアアアアアツ!!」

「亜矢さん、来るよ」

「で、でも——!?!」

【亜矢、代わって!】

襲い掛かってくるキメラファアツジの前に、ルーナは攻撃する事を躊躇してしまう。デイナが警告するが、ヘタすれば殺してしまうと思うと彼女にはキメラファアツジを攻撃する事など出来なかった。

それを見兼ねて、彼女の中の真矢が亜矢に代わって体を動かした。

「ハッ!」

【真矢ツ!? あのファアツジは——!】

「分かってるわ! でも何もしないでやられるのを待つなんて事も出来ないでしょ?」

【そ、そうだけど……!】

口ではこう言うが、真矢もキメラファアツジを容赦なく攻撃している訳ではない。リップレッサーショットを用いてキメラファアツジの攻撃を巧みに弾き、とにかく自分がダメージを受ける事を避けた。自分達がやられてしまっただけはそれこそ最悪の展開になってしまう。

デイナも共にキメラファアツジへの攻撃に加わるが、彼もまたキメラファアツジの正体が峰の兄である事に攻撃を躊躇しているのか思う様に攻め切れていない。

一気に戦い辛くなり、キメラファアツジからの攻撃に防戦一方となるデイナとルーナ。その様子をスパイダーファアツジは楽しそうに眺めていた。

「フフフッ！ いい気味。この分ならこいつを使う必要は無いかしら？」

アデニンから渡されたアンプルを見ながら呟くスパイダーファツジに、衝撃から立ち直った峰が近付いた。その手には警棒が握られている。

「よくも……よくも兄さんをッ！」

「ん？ 貴女、あいつの妹？」

「絶対に許さないッ！」

警棒片手に峰はスパイダーファツジに攻撃を仕掛けた。ただの人間にしては鋭い動きで接近し、何度も警棒で殴り付ける。その動きは本職の軍人なんかも舌を巻くほどだろう。

しかし、彼女が相手をしているのは人間を遥かに凌駕した能力を持つファツジだ。それも幹部クラスの強力なファツジ。これがアントファツジ程度であればまだ何とかなっただろうが、スパイダーファツジが相手では彼女は分が悪い。

「フン………鬱陶しいわね！」

「あぐっ?! くうっ!？」

羽虫を振り払うように峰はスパイダーファツジの振るわれた腕に殴り飛ばされた。殴られた衝撃で警棒が手から離れてしまったが、彼女は構わず立ち上がり再びスパイダーファツジに挑む。

「このおおおつ!？」

生身でありながらしぶとくスパイダーファッジに挑む峰。

その一方で、デイナとルーナはキメラファッジを相手に苦戦を強いられていた。

「ガルアアアアッ!」

「うぐつ?!」

「仁君ッ!」

キメラファッジがピラニアファッジ由来の牙に喰らい付かれる。傷口から血が流れるのを見て、ルーナはリプレッサーショットを構え引き金を引こうとする。

が、彼女が引き金を引く直前、内面に引っ込んだ亜矢がそれを無理矢理止めさせた。

【待って真矢、駄目ッ!】

亜矢が主導権を奪い、銃口をあらゆる方向に向け銃撃は明後日の方向へ飛んで行く。

真矢は当然亜矢に対して抗議した。

【ちよっ!?! 亜矢、邪魔しないでよッ!?!】

【でも!?! あのファッジは先輩のお兄さんなんだよ!?!】

【そんな事言ってる場合じゃないでしょッ!?!】

【だけどッ!?!】

ルーナが内なる人格同士で口論していると、キメラファッジがデイナから口を離し

た。そしてそのまま顔をルーナの方に向けてると、口内に強力な超音波を集束させる。その意図に気付いたダイナが嘔み付かれた箇所を押さえながら彼女に警告した。

「危ないッ!？」

「えっ!？」

ダイナの警告も空しく、キメラファアツジから放たれた集束超音波がルーナを吹き飛ばす。内面の人格同士で口論していた2人は反応が遅れ、集束超音波を諸に喰らってしまった。

「きゃあああああつ!？」

「亜矢さんッ!？ く、そおおお——!？」

力むと痛みと共に血を噴き出す傷口を無視して、ダイナは渾身の一撃をキメラファアツジに叩き込む。

ルーナへの攻撃に意識を向けていた為、ダイナの一撃をまともに喰らってしまったキメラファアツジ。しかしキメラファアツジは全く堪えた様子を見せない。恐らく蛸の遺伝子がスクイッドファアツジ同様、表皮を柔らかくし打撃によるダメージを減衰させているのだ。

それでも諦めずにキメラファアツジを攻撃し続けるダイナだが、やはり決め手に欠け反撃を許してしまった。

「ガアアアッ！」

「ぐうっ——」

鱭による斬撃に怯み、動きを止めたデイナをキメラファツジは触手で吹き飛ばした。吹き飛ばされたデイナが壁に激突すると、限界が来たのか壁が崩れデイナはそのまま外に放り出されてしまった。

「仁君ッ!」

【亜矢、危ない!】

「ハッ!」

ルーナが外に放り出されたデイナに気を取られた瞬間、キメラファツジは彼女に触手を巻き付け壁や床に何度も叩き付けた。

「あうっ?! ぐっ?! あああっ?!」

何度も叩き付けられ、ルーナが次第にぐったりとしてくる。声も上げられなくなる程叩き付けられ彼女が抵抗を止めると、最後にキメラファツジはデイナが放り出された壁の穴に放り投げ彼女の事も外に投げ捨てた。

デイナが何とか体勢を立て直していると、彼の目に壁の穴から放り出されるルーナの姿が映った。ぐったりとしていて、このままでは受け身も取れず地面に激突してしまう。

「くっ!？」

彼女を受け止めようと咄嗟に動くデイナだったが、彼自身まだダメージが残っており受け止めると言うよりはその身をクッションとして彼女が地面に激突するのを防ぐ形となった。

「ぐっ!？」

「う……あ……」

何とか彼女が地面に叩き付けられるのは防げたが、それでもキメラファアツジから受けた容赦の無い攻撃によるダメージは大きくルーナは変身が解除されてしまった。

元の姿に戻り、体のあちこちに痣を作った亜矢の苦しそうな顔が露となる。彼女のその姿にデイナは仮面の奥で奥歯を噛み締めた。

そこに壁に空いた穴から出てきた、キメラファアツジとスパイダーファアツジがやってくる。スパイダーファアツジの手にはボロボロになった峰が掴まれている。

「返すわ」

スパイダーファアツジはそう言って峰をデイナの近くに放り投げる。倒れた峰は亜矢以上にボロボロで、顔も殴られたのか頬を赤くはらし眼鏡は無くなっていた。

「う、うう——!？」

峰の口から悔しさと悲しさによる嗚咽が漏れる。

涙を流す峰の姿が可笑しいのか、それとも仮面ライダー2人が追い詰められているのが愉快なのかスパイダーファッジは3人を見下ろしながら笑った。

「ウフフフフッ！ さ、こいつらにトドメを差しなさい」

スパイダーファッジの指示にキメラファッジは唸り声を上げながら3人に近付く。迫る兄だった存在に、峰は大粒の涙を零しデイナは亜矢を優しくその場に横たえ2人を守ろうと立ち上がる。

自分達の前に立ち塞がるデイナの後姿と最早ただの怪物となってしまう兄に、峰は遂に覚悟を決めた。

「門守君……仮面ライダー！」

「ッ!？」

「お願い……もう、兄さんを止めてあげて。……止めさせて——!」

それは即ち、健の命を奪ってでも止めてくれと言う言葉であった。彼女はもう兄を助けられないと諦め、これ以上兄が罪を重ねないようにとデイナに彼を止めるよう懇願したのだ。

このままではキメラファッジがどれだけの被害を齎すか分からないし、何より自分と亜矢、峰の命も脅かされる。

この場で一番ベターな選択は、峰の決断通りこの場で健の命と引き換えにキメラ

フアツジを倒す事なのだろう。

しかしデイナは、頭では理解しつつ心はまだ足掻いていた。

脳裏を過るのは、今は亡き父の言葉。

『いいか、仁？ 考える事を止めず、前に歩き続けろ』

『諦めず前に進み続ける事こそが全ての生命の生きる原動力であり、進化の源でもあるんだ』

『生命は道を探し続ける。その事を忘れるな』

まだ幼かった頃に父から掛けられた言葉だが、デイナはこの言葉を今でも鮮明に覚えていた。

（考えろ……考えろ、俺。生きてるなら、道を探し続けろ）

デイナは残り少ないタイムリミットの中で、今ある情報を次々と挙げていく。

健は長年寝たきりで体力が低下している——

健には無数のベクターカートリッジが使用されている——

無数のベクターカートリッジによる変異は異常な細胞の活性化を促し、それが素体に大きな負担を掛けている——

負担は常人なら後遺症が残るほど。体力が落ちた健なら死んでしまいかねない——
ここまで色々と挙げ連ねた所で、デイナは引っ掛かりを覚えた。

変異が負担となるなら、変異した時点で素体が死亡し変異が解ける筈だ。にもかかわらずこうして脅威として立ち塞がっているという事は、今はまだ健は死んでいないという事。

では仮に死ぬとして、彼は何処で死ぬのか？ 何をもって死とするのか？ 死の定義とは？ 死人は絶対に生き返る事は無いのか？

様々な考えが新幹線の車窓から見える景色の様に彼の脳裏を過つた。一見すると長考しているように見えるが、この間何と一分も経っていない。キメラファアジが数歩も距離を縮めていない間に、デイナは次々と考えを纏めていたのだ。

そして彼は、ある一つの結論を導き出した。

「……そうか、なら可能性は……」

結論に辿り着いた彼は、その手に懐中電灯の様な物を取り出した。

遂に完成したBHエレキテルカートリッジだ。

デイナはBHエレキテルカートリッジの後端に置まれているレバーを起こすと、手回し充電の懐中電灯宜しくレバーを回した。発生した電気が忽ちカートリッジ内に満ち、先端のライトを発光させる。

突然の奇行とも取れる行動をし始めたデイナに、スパイダーファアジとキメラファアジも動きを止めた。

「何、それ？」

「お前らの企みをぶっ壊す、俺の自信作さ」

スパイダーファツジに挑発気味に返し、デイナはBHエレキテルカートリッジのライト部分を90度真横に折り曲げた。

それと同時にカートリッジからデイナドライバーのソケットに挿入する為のプラグがせり出してくる。

デイナはそれを迷うことなくデイナドライバーに装填した。

「さあ、検証の時間だ」

〈BUFFALO + HUMAN Light up〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

レセプタースロットルをデイナが引くと、セントラルドグマから何時もの如くスーパーコイルが飛び出した。が、今回はそれだけでなく、曲がった事で前を向いたライトから放電が放たれそれがスーパーコイルに纏わり付いた。

電撃を纏ったスーパーコイルが接近しつつあったキメラファツジを弾き飛ばし、その勢いのままデイナに接近してくる。彼はそれを正拳突きで受け止めた。

瞬間、スーパーコイルと拳の接触点を中心に周囲に稲妻が走った。激しい発光にスパ

イダーファッジも峰も目を開けていられず、目を手で覆い強烈な光から目を守った。激しい閃光が放たれていたのは僅か数秒。直ぐに光は収まり、峰たちは目を開けることができるようになった。

まず真つ先に目を開けたのは峰だった。彼女は目の中の光が治まると、新しい眼鏡を取り出してそれを掛け前を見る。

彼女がくつきりした視界で前を見た時、デイナは新たな姿になっていた。

「あれは……」

「仁、君——？」

峰が呆然となりながら眩き、亜矢が目を覚まし彼の名を口にする。

外見は全体的にバツファローヒューマンフォームのそれだが、全身各所に稲妻の様な青いジグザグ模様が刻まれ、更に角を始めとした装甲各所の突起部分も同様に稲妻の様なジグザグした形になっていた。

これこそが仁が開発しデイナが新たに手にした力、その名も『仮面ライダーデイナ・バツファローヒューマンエレキテル』である。

「ふん、姿が変わったからと言って——！」

スパイダーファッジはカメラファッジを向かわせる。恐れを知らぬ理性無きカメラファッジは、少しも警戒せずデイナへと向かって行く。

デイナはそれに対し、迎撃の構えを取る事無くドライバー右側に向いているBHエレキテルカートリッジのハンドルを回した。充電が行われ、ライトが眩い光を放つ。スパイダーファツジはまさかそんなもので目くらましでもしているつもりかと鼻で笑った。

が――

〈Charge up〉

次の瞬間、デイナの全身の稲妻模様が青く光ったかと思うと、放電しながら姿を消した。その光景にスパイダーファツジが驚く間もなく、彼女は自身の腹に衝撃を感じた。

「ガハッ!」

何が起こったかを認識する間もなく地面に叩き付けられるスパイダーファツジ。それはキメラファツジも同様だった。キメラファツジも何かに突き飛ばされるように吹き飛び、地面に倒れていた。

これがバッファローヒューマンエレキテルの能力だ。超万能細胞に帯電させる事で電気を操る能力を持たせ、その力を以て全身の神経伝達の電気信号を通常の倍以上の速度で伝達させて動きと思考を高速化。目にも留まらぬ速度での動きを可能としたのである。

今、デイナの視点では自分以外の全てがほぼ止まっているかのような超スローモーションで動いているように見えていた。

亜矢と峰が見ている前で、青く光る軌跡が2体のファツジを圧倒していく。ファツジ達は反撃しようにも、デイナの姿を捉える事が出来ず翻弄され続けていた。

「こ、こんな……馬鹿な——!?!」

スパイダーファツジが信じられないと言う気持ちを口にする。

だが彼女には勝算があった。デイナ達はカメラファツジにトドメを差せない。情の尻尾が邪魔をして、きつと一瞬でも躊躇するタイミングがある筈だ。

狙うはその時——

「戦いのレポートは纏まった」

〈Charge up ATP Burst〉

スパイダーファツジが内心でほくそ笑んでいる前で、デイナは再びハンドルを回し充電。そしてライトが光った状態でレセプタースロットルを引いた。

「ハッ」

全身から稲妻を放ちながらデイナは跳躍し、カメラファツジとスパイダーファツジの頭上に飛び上がる。その場の全員がそれを目で追っていると、デイナが強烈な放電を2体のファツジに降り注がせた。

「な、あああああッ?!」

「ガアアアアアッ?!」

全身を焼く電撃にスパイダーファツジとキメラファツジは叫び声を上げた。2体のファツジは電撃で動きを止め、最早ただの的となった。

そこで再びデイナが高速移動。全てが殆ど静止したかのような視界の中で、まず最初にキメラファツジに、次にスパイダーファツジに飛び蹴りを放った。

これがバッファローヒューマンエレキテルの必殺技『エレキテルクラッシュ』である。電撃を纏った必殺のキックが、キメラファツジとスパイダーファツジを蹴り穿った。

「が、ああ——!?!」

蹴り飛ばされた勢いで壁に叩き付けられるスパイダーファツジ。一方のキメラファツジは、スパイダーファツジとは反対方向に蹴り飛ばされ地面に落下しその場で爆散した。

兄だったファツジの最期の姿に、涙を流す峰と痛ましそうに見つめる亜矢。

だが、爆炎が晴れるとそこには何時の間にかデイナが居て、元の姿に戻った健を抱き上げていた。

「兄さん——!」

峰はデイナに駆け寄り、物言わぬ兄の手を握る。まだ息絶えたばかりでその手には温かさがあり——

「う……」

「ッ!?!? え、に、兄さん!」

その時僅かにだが、死んだ筈の健が小さく呻いた。その光景に峰がまさかと言う声を上げると、健は薄らと目を開きしつかりとした目で自らの妹を見た。

その様子は弱々しいが、今にも息絶えそうな儂さは感じられない。

「み、峰——?」

兄が死の運命を免れた事を心で実感し、峰は歓喜に涙を流しデイナの腕の中の健に抱き着いた。

「兄さん、兄さん!!」

「そ、そんな……何でッ!? 生きてる筈がないわ!? 常人だって確実に後遺症が残るレベルなのよ!」

一方のスパイダーファツジは目の前の光景が信じられなかった。傘木社で一度に複数のベクターカートリッジを1人の人間に使用したらどうなるかは既に何度も実験している。その結果、被験者は全員が後遺症を残すか死亡しているのだ。

数年昏睡状態だった、半分死んだも同然の人間が生き残れる道理はない。少なくとも彼女にはそうだった。

「逆だよ。一度に幾つもベクターカートリッジを使ったから助かる余地があつたんだ」

「どう言う事です?」

叫ぶスパイダーファッジに、デイナが諭すように告げた。亜矢がその意味を問うと、彼は健を峰に預けながら口を開いた。

「全身の細胞が超万能細胞で活性化させられて、この人の体は一時的に全快した。俺が最初に変身した時みたい」

「あ……」

「下地はあの時点で既に出来ていた。でもそのまま倒したら反動で一気に体が弱る。だから俺は先輩のお兄さんが元の姿に戻った瞬間、電気ショックで心臓を一時的に停止させて消耗する前の状態で仮死状態にさせてそれからもう一度電気ショックで蘇生させたんだ」

全てはバツファローヒューマンエレキテルの超高速行動が為せる業だ。普通の感覚では捉える事も困難な刹那のタイミングを、正確に捉えて最適な行動を可能としたのだ。

デイナは……仁は、決して諦める事無く目指す結果を手にする為に考え続け、ベストの選択——即ち新たな道を切り開く事に成功したのである。

恐るべきは彼の思考速度だ。あの僅かな時間の中で、彼はこの結論に辿り着くまでに考えを纏めたのである。

スパイダーファッジは改めてデイナの脅威を実感し、同時にこう考えた。彼は危険だ

と。

その危機感は、彼女に使いたくなかった切り札を切らせる切っ掛けとなった。

「こうなったら——!?!」

スパイダーファツジは自分の腕にアンプルの針を刺した。注入される薬液が、全身の超万能細胞を更に活性化させる。

「うううあああああああああああつー!」

急激な細胞の活性化に、スパイダーファツジの精神が蝕まれキメラファツジの様な叫びを上げる。そしてそのまま彼女はデイナへと襲い掛かった。

「殺すツ! 殺してやるわツ!」

スパイダーファツジが背中から生えた鋭い脚を使いデイナを攻撃する。だが彼女が近づく頃には、デイナは充電を済ませ再び超高速移動へと移っていた。

〈Charge up〉

「ツ!?! チツ!?!」

青い軌跡となつて姿を消したデイナに、即座に警戒するスパイダーファツジだったが結局それは無意味だった。

姿を捉える事が出来ないデイナからの攻撃に曝され、スパイダーファツジはリフティングされるボールの様に空中を跳ねる。

「デイナは容赦なく動きの止まったスパイダーファツジを殴り付ける。殴り上げて空中に浮いたスパイダーファツジを、殴り蹴りダメージを与えていった。」

「そして充電が切れ、体感時間が元通りになった時、スパイダーファツジは全身ボロボロの状態で地面に落ちた。」

「うぐ、あ、ああ……」

「これでレポートは纏まった。アンタとの戦いのレポートは……」

〈Charge up ATP Burst〉

「ハアアアアアッ！」

「ボロボロの体で立ち上がったスパイダーファツジに、デイナの二度目のエレキテルクラッシュが炸裂する。」

「ガアアアアッ?!」

「デイナに蹴り飛ばされ、スパイダーファツジは空中で爆散する。」

「しかし地面に落下した時、スパイダーファツジはまだ変異した姿を保っていた。」

「ツ?! 随分と頑丈な……さっきの薬か?」

「う、うう……」

「ボロボロになりながら、何とか立ち上がるスパイダーファツジ。その口からはデイナへの呪詛が。」

「まだ……まだ、終わってない——!? お前を、殺して——!?!」

次の瞬間、スパイダーファツジの右腕のベクタープレスが火花を上げベクターカートリッジが勝手に排出。地面に落ちたカートリッジは火花を上げて砕け散った。

忽ち元の姿に戻るチミンは、自身の体と砕けたベクターカートリッジに目を見開き慄いた。

「あ、あああああアツ!? 嘘嘘嘘、駄目駄目駄目駄目——!?!」

このままでは隠蔽処分で体が燃え上がってしまう。そんな最期を迎えて堪るか、チミンは周囲を見渡し窓ガラスを見つけるとそれを拳で割り、大きめの破片を素手で掴むとそれを使って自らの腹を切り開いた。

まさかの行動にダイナと亜矢は驚愕のあまり動くことが出来ずにいた。

「いぎつ!? 発火装置の場所は、ぐ、うぐうう、知ってるんだから!? こんな、事……で、ガハツ?! こんな所で、死んでたまるもんですかツ!? 生きてやる、絶対……ぐうううツ!? 生き延びてやるツ!!」

チミンは自らの腹を裂くとその中に手を突っ込んだ。そして何かを掴むと、それを渾身の力で引き抜いた。

「いぎぎぎぎぎぎツ!? ぎ、ああああああアツ!?!」

ダイナ達の所にまで、肉が引き千切れるブチリと言う音が聞こえそうな勢いでチミン

が腹の中に仕込まれた発火装置を引きずり出した。腹から発火装置が引きずり出された事で、彼女の体は隠蔽処理が施される事は無くなった。

それを実感し、チミンは痛みと血の流し過ぎによるショックで顔を青くしながらも歡喜に打ち震えた。

「や、やった——！ ははは、やったわ！ これで、私……は——」

歡喜に震えたのも束の間、チミンはその場に崩れ落ちた。元よりデイナとの戦いで大きなダメージを受けていたところに、強烈な痛みと失血が重なって体が限界を迎えたらしい。もう彼女は一步も動くことは出来ないだろう。

倒れて血を流すチミンの姿を眺め、デイナはポツリと呟いた。

「……あの人も被害者だったのかもね」

「かもしれないね」

【そんな悠長に構えてる場合じゃないと思うわよ？ 急がないとあの人、死ぬんじゃないかな？】

いつそ哀れみすら感じるチミンの姿に、思わずしんみりとしてしまうデイナと亜矢であつたが、真矢の言葉で亜矢が我に返つた。

このままではチミンが出血多量で死んでしまう。

「仁君、このままだとあの人が——！」

「あ、そっか。とりあえず助けてやろうか」

幸いにもここは病院だ。先程の騒動でいろいろと混乱しているだろうが、重傷者をほったらかしにはすまい。連れていけばとりあえず治療は施してくれる筈だ。重要情報彼女は回復してから聞き出せばいい。

しかしそれは叶う事は無かった。

デイナがチミンに近付こうと一歩足を踏み出した瞬間、地面に無数の銃弾が撃ち込まれデイナの動きを止めさせる。

「ん?」

「銃撃ツ!? まさか——!?!」

デイナ達が銃弾が飛んできた方を見ると、そこにはアントファアツジ達にアデニンが異したスクイッドファアツジ、それに見た事もないファアツジらしきものの姿があった。

不気味なファアツジだ。何処かのつぺりとした外見の中で両腕の鋭い爪だけが存在を強く主張している。

ここに来ての増援と新たな脅威の出現にデイナが身構えていると、新たなファアツジは倒れたチミンに近付き心底楽しそうに口を開いた。

「チミン、君は実に執念深い性格だ。しかしその生き汚さ、生への執着、諦めない意志こそが全ての生命の進化の源でもある。いいだろう、その意志を尊重し、今回は君への処

分を見送る事にする。アデニン、チミンを運べ」

「はっ」

見た事も無いファツジの命令に、スクイッドファツジが触手で彼女の体を抱き上げその場を離れようとする。

デイナはそれをさせて堪るかど妨害しようとするが、不意に背後に違和感を感じ後ろを振り返った。

「あ、ああ——!?!」

「ひ、ひ——!?!」

「亜矢さん、先輩?」

彼が後ろを振り返ると、亜矢と峰が恐怖に顔を引き攣らせていた。2人のこんな顔は初めて見る。

一体何が? そんなもの、考えるまでも無かった。今この場でこれまでになかった異変など、あの見た事のないファツジしかあり得ない。

あのファツジは一体何を元に行っているのか全く分からなかった。キメラファツジとは違い、こちらは特徴らしいものが何も無いのだ。

「お前……一体何なんだ? 傘木社の幹部か?」

「ほお? 君は何とも無いんだな、門守 仁?」

「? 俺の事知ってるの?」

「それはそうさ。君は非常に興味深い。出来ればもつと君と語り合いたいのだが………生憎と私は忙しいのでね」

正体不明のファッジが手を振ると、アントファッジ達がデイナ達に銃口を向けたまま後ろにゆつくりと引き下がっていく。

アントファッジ達が引き下がると、残ったファッジも踵を返してその場を後にしようとする。

その背にデイナが声を掛けた。

「ちよつと待った。アンタ一体誰だ?」

「おつと、失礼した。まだ名乗っていなかったな」

ファッジは振り返り、変異を解いて元の姿に戻った。

年齢は大体白上教授と同じくらいだろうか。白髪交じりの頭髮に皺の刻まれた顔。だが弱々しさは無く、生命力に溢れている。

正体を晒したファッジだった男性は、デイナに向けて優雅に一礼した。

「お初お目に掛かる。私の名は傘木 雄成、傘木社の社長を努めている者だ。以後、よろしく頼むよ。仮面ライダーデイナ、門守 仁君」

「お前が——?」

まさかの傘木社長直々の登場にデイナが面食らっていると、雄成は再び踵を返してその場を離れて行く。彼の向かう先には、一台の黒塗りの車があった。

雄成が車に近付くと、運転手がドアを開け頭を下げた。それに領き返し雄成は車の後部座席に乗ろうとするが、何を思ったのか振り返った。

「いずれまた会おう。その時は今日とは違って、互いにゆつくり話そうじゃないか。その時を楽しみにしているよ」

そう言うのと今度こそ雄成は車に乗り、運転手がそれに続き車を走らせる。

残されたデイナはそれを暫し見送ると、変身を解いて未だ恐怖に顔を引き攣らせている亜矢と峰に近付いた。

「亜矢さん、先輩、大丈夫？」

「は、はい……何とか……」

「私も大丈夫です。兄さんも……」

雄成がこの場から居無くなった事で彼女達を恐怖させていた『何か』が無くなったからか、2人の様子も何時も通りに戻っていた。それでもまだ顔は少し引き攣っているし、嫌な汗が流れている。

「一体どうしたの？」

「わ、分かりません。あのファッジの姿を見た途端、体が動かなくなつて……」

【まるで心臓を鷲掴みにされたみたい】

訳が分からないと言った様子の亜矢の中で、真矢も同意した。

「不気味な奴でしたね。まるで、全身が存在を否定している様な奴でした」

峰の言葉に仁は小さく唸り声を上げる。

得体の知れない敵の首魁に、仁は改めて雄成を乗せた車が走り去っていった方を見た。

「あれが傘木 雄成……………傘木社の社長、か」

仁はそう呟き、そして来る雄成との次の邂逅の時に思いを馳せるのだった。

第19話：動き出す司法

日も沈み、出歩く者も居なくなつた街の一面にて

「撃て、撃てえッ!?!」

S・B・C・Tの隊員達が、2体のファツジを相手に必死に攻撃していた。突如街に出現したそのファツジ達は、不運にもその場に居合わせた一般市民を殺害。ギリギリで難を逃れた者からの通報で、S・B・C・Tがファツジ討伐の為にこうして出動したのである。

しかし戦況は芳しくない。1体でも手を焼かされたファツジが今回は2体、しかもこのファツジ達は簡易生産されたベクタープレスにより理性を保つたまま変異している。

本能のままに暴れる以前のファツジとは違い、時に狡猾な戦いも見せる2体のファツジにS・B・C・Tの隊員は次々と倒れていった。

手塩にかけて育てた部下が命を落としていく光景に、宗吾は奥歯が砕ける程歯を食いしばった。

「くそお、化け物共めッ!?!」

思わずファツジに対して呪詛を吐く宗吾。

その彼の耳に、何処からか近付いてくるバイクのエンジン音が響いた。

まさかと思ひ宗吾がそちらを見ると、そこにはトランスポゾンに乗ってやって来たデイナとルーナの姿があつた。

「仮面、ライダーっ!?!」

デイナとルーナと言う2人の仮面ライダーの登場に、宗吾は声を上げずにはいられない。

敵ではないのかもしれないが、得体の知れない連中に自分達の仕事を任せるのが気に入らないのだ。

しかし気に入ろうが入らなからうが、最早この場合はS・B・C・T.でどうにかなるレベルを超えていた。彼らでファツジへの対処がどうにもならない以上、あの2人に任せる以外に道はない。

宗吾は職務に対するプライドは持っていたが、プライドに拘り最悪の事態を招くほど愚か者では無いのである。

デイナは生き残ったS・B・C・T. 隊員と2体のファツジの間を遮るようにトランスポゾンを抑めると、宗吾達に撤退を促した。

「(ト)は俺達に任せて」

「皆さんは後退を！ 怪我をしている人達の事はお任せします！」

2人は怪我人の事を生き残りの隊員に任せ、2体のファッジを相手に戦い始める。

数の上では勝っていたにもかかわらず碌に対抗できなかった自分達と違い、仮面ライダー達はそれぞれ1人で1体のファッジを相手に互角に立ち回っている。その光景に宗吾は自分達の無力さが情けなくて悔しくて、気付けば拳を硬く握りしめていた。

「くっ!!? ぬう……くくく——!!?」

「隊長!?! この場は彼らに任せて、後退しましょう!?!」

「くくく!!? 分かってはいる!?! 総員、撤退だツ!! 負傷者は優先して運べツ!」

宗吾が指示を出し、S・B・C・T、隊員は次々と後退していく。その間にもデйнаとルーナは2体のファッジを相手に優位に立ち回り、徐々にだが追い詰めていった。

最後に宗吾が移動車両に乗り込む直前、背後を振り返るとそこでは今正に決着が着く寸前と言う所であった。

〈A T P B u r s t 〉

「ハアアツ!」

「ヤアアツ!」

デйнаとルーナがそれぞれ放ったノックアウトクラッシュが、2体のファッジを倒した。ファッジ達は爆散し、後には変異が解けた人間が残される。

ファッジの脅威が無くなったのを見ると、宗吾は撤退を取り消しファッジだった2人

の人間の確保。そして仮面ライダー2人の拘束へと行動を移した。

「ファッジだった2人を確保しろ！ 残りは俺と一緒に、仮面ライダーをツッ！」

そう言いながら宗吾はファッジを倒してこの場から離れようとしているデйнаとルーナに近付き、2人に銃口を向けた。

「待てッ!! お前達には色々聞きたいことがある！ このまま我々と同行しろ！ 拒否するのであれば力尽くで連行する!!」

数少ない生き残りの隊員と共にデйнаとルーナを拘束しようとする宗吾。彼はかなり息巻いているようだが、他の隊員達はあまり気乗りしている様子がない。曲がりなりにも命の恩人である仮面ライダー達に銃を向ける事に気が進まないし、ファッジと対等に戦える仮面ライダーを力尽くでどうにかできるとは彼ら自身思っていないからだろう。

宗吾自身、現状の戦力で仮面ライダーをどうにかできるとは思っていない。しかしやらずにはいられなかったのだ。仮面ライダーをこのまま見逃すのは、彼のプライドが納得してくれなかった。

一方仮面ライダー2人の内、ルーナは折角助けたと言うのに恩を仇で返すかのような宗吾の行動に憤りを覚えたのか何かを言おうと一歩前に踏み出した。

しかしデйнаがそれに待ったを掛けた。片手で彼女を制すと、そのままトランスポゾ

ンに乗りエンジンを噴かせた。

またしても何も言わずこの場を去ろうとする仮面ライダーに、宗吾はなりふり構わず彼の肩を掴んで引き留めた。

「待てッ!? 貴様何故何時も何も言わずに立ち去るッ!? 何とか言ったらどうなんだッ!?」

そこが宗吾には納得できなかった。毎度毎度、デイナは宗吾達に対して何も語らずに去って行く。その姿はまるで自分達など相手するにも値しないと言われているようで、宗吾はプライドが傷付けられていた。

デイナはそんな彼の内心を知ってか知らずか、自分の肩を掴む宗吾の手を優しく外すと静かに語り掛けた。

「多分、今はまともに話にならないだろうから」

「何ッ!?!」

「もうちよつと落ち着いて話せるようになったらその時はゆっくり話そうよ。それじゃ」

デイナはそう告げ、ルーナを後ろに乗せてトランスポゾンを走らせた。

走り去っていく彼らの後姿に宗吾は手を伸ばすが、当然届く筈も無く2人を見送るしか出来なかった。

「くッ!? あああああ、クソオツ!」

去つて行く仮面ライダー達の姿を見送り、宗吾はその場で怒りに身を任せ叫ぶしか出来なかった。

翌日、仁が大学で卒論研究を進めていると、同様に研究を進めている亜矢が昨日の事で声を掛けてきた。

「仁君。昨日のあの人達の事なんですけど……」

「昨日のあの人達? 警察の人達の事?」

「はい。そろそろ何とかした方が良くないでしょうか?」

これまで仁達は警察——と言うよりはその特殊部隊 S・B・C・T。——と、何度か衝突してきた。衝突と言うよりは、向こうがかなり敵対心剥き出しで接してきたと言つた方が正確か。

どうしてかは知らないが、彼らは矢鱈とデイナを敵視している。まあ大方、自分達が

苦戦するファッジに独力で対抗できるデイナの力を脅威に感じての事だろう。今はまだ敵対していないが、何時敵対する事になるか分からないから警戒していると云った感じか。

しかし何とかと云われても、現状どうする事も出来ないのと言うのが仁の見解だった。ヘタに接触すれば仁だけでなく、亜矢や白上教授にも何かしらの手が伸びるかもしれない。

そう思うとどうにも迂闊に接触しようと言う気にはなれなかった。

「私は反対です。警察なんて信用できないしちやいけません」

亜矢の提案に異を唱えたのは峰だ。彼女には実際、健が傘木社の被害者になった際警察に駆け込んだが徒労に終わったと言う苦い経験がある。それもあって彼女は警察組織を信用していないのだった。

そんな峰の意見に、今度は仁が否と答えた。

「いや、それは警察の一部の話だと思えますよ。あの人達はそう言う思惑とは別だと思えます」

「何を根拠に？」

「繋がってる連中は死なないでしょ？」

言われてみれば確かに、先日の戦闘でもS. B. C. T. には多数の死傷者が出た。

もし彼らが傘木社と繋がっているのであれば、被害はもつと少ない筈………と云うよりそもそも被害など出ないだろう。自分達と繋がりのある連中を、自分で何度も痛めつける理由がない。

それに何より、兵隊が欲しいなら傘木社にはアントファツジがいる。忠実な駒として機能する彼らが居るのならば、警察組織内に特殊部隊を用意する必要がない。

「つまり、S・B・C・T・は傘木社とは無関係であるか？」

「無関係どころか警察内における傘木社の暴挙に対する抵抗組織でしょ。装備が警察の特殊部隊で済むレベル超えてますよ、あれ」

S・B・C・T・の装備は自衛隊のそれにも引けを取らない。恐らく警察組織の高官の誰かが、警察内に蔓延る傘木社の手の者に対抗する為にかなりの無茶を通したのだろう。そうでもしなければ、警察であるにも拘らずあれだけの重装備が許可される筈がない。

「じゃあやつぱり、彼らとは話し合つて協力関係を結ぶべきなんでしょうか？」

「協力、したいのは山々だけど、あの隊長さんがこつちの話を冷静に聞いてくれなさそうなのにな……」

結局はそれである。宗吾の仁達に対する態度がどうにも一步踏み出すのを躊躇させているのだ。

「何より私は、仁君に何度も助けられた上に尻拭いまでしてもらつてゐるのにお礼の1つも言わないのが納得できないわ」

仁に続き、亜矢の中で真矢が苦言を呈す。彼女は純粹に恩をまるで感じた様子を見せない彼らに対して不信感を抱いている様だ。

「真矢、仁君は別にお礼が言つて欲しくて戦つてゐる訳じゃないんだよ」

「それは知つてゐるわ。でも、だからと言つてお礼を言わないどころか敵視する理由にはならないと思わない？」

「それは……思うけど……」

真矢の言いたい事は分かる。仁が望んでゐるにないに関わらず、助けられたのであれば感謝こそしても敵視するのはお門違いにも程がある。

口には出さなかつた（と言うか仁に止められてしまった）が、亜矢だつて宗吾の物言いには文句の1つも言つてやりたかつた。

そんな事を考えていると、気付けば時刻は昼を過ぎていた。何時の間にか卒論研究に熱中している仁は空腹を感じていないのかそれとも気付いていないのか、昼食の時間が過ぎてゐる事を気にした様子がない。

なので亜矢が研究の手を止め、仁に声を掛けてやつた。

「仁君、もうお昼過ぎています。一旦休憩にしましょう」

「ん？ あ、ホントだ」

亜矢に言われて昼食の時間を過ぎている事に気付き、仁も研究を中断し白衣を脱いでハンガーに掛けた。亜矢がそれに続いて白衣を脱ぐと、仁が自然な動作で彼女から白衣を受け取りそれもハンガーに掛けた。

「あ、ありがとうございます」

「ん、気にしないで。今日はどうする？」

「そうですね——」

当たり前の様に2人揃って研究室を出て、昼食を共にする仁と亜矢。

その姿を見送った峰は、チラリと拓郎に視線を送った。彼はそれに気付いた様子もなく、自分の荷物から弁当のオニギリを出して多目的スペースでペットボトルの茶を片手に静かに昼食にしている。

彼の様子に峰は肩を竦めながら溜め息を吐くと、大学敷地内のコンビニに向かうべく自分も研究室を後にするのだった。

一方警視庁のS・B・C・Tの本部では――

「くそ、仮面ライダー……」

宛がわれたオフィスのデスクにて、宗吾は書類を片付けつつ仮面ライダーに対する悪態を吐いていた。

先日の戦闘も酷いもので、部隊の半数が殉職と言う目を覆いたくなるような有様であつた。折角対ファッジ用に組織され様々な銃火器も融通されていると言うのに、被害ばかり出して成果が全く無い。

これでは何時解散を言い渡されても不思議では無かつた。と言うより、未だ部隊が存続している状況自体が奇跡と言えた。

それほど彼らは今、何の成果も挙げられていないのだ。

彼らの存続を危ぶめている要因はそれだけではない。先程宗吾が口にした仮面ライダーも、彼らの必要性に影を落としていた。言うまでも無く現状ファッジの討伐が出来るのは仮面ライダーであり、仮面ライダーが居れば、何の成果も挙げられない――言つてしまえば金食い虫の――S・B・C・T等必要無いのである。

つい先程もこの事でS・B・C・Tの存在を疑問視する高官から嫌味を言われたばかりであり、宗吾は自分達の不甲斐無さとファッジに対する憎しみ。そして自分達に

出来ない事をいとも容易く為してしまう仮面ライダーに対する嫉妬で、彼の機嫌は最悪と言つていい状態だった。

取り合えず先日の被害に関する詳細を纏めた報告書をまとめる事に集中していた。しかしそれは嫌でも自分達の無力さと向き合う仕事。彼の中で苛立ちは収まるどころか更に増していった。

しかしそれでも何とか書類との格闘を終え、一息つく為にコーヒを淹れ喉を潤す。

そこに彼の部下が書類を手に近付いて来た。

「隊長、休憩中の所失礼します」

「何だ？」

「先日の戦闘でファッジだった2人が身に付けていたと思しき装備についてですが……」

先日の戦闘でファッジだった2人は、簡易生産されたベクタープレスを装備していた。傘木社はこれを回収することなく放置していたので、彼らの技術の一端などが分かるのではとS. B. C. T. に回収されていたのだ。

しかし書類に目を通す部下の表情は芳しくない。宗吾はそれだけで結果が予想出来、溜め息を吐かずにはいられなかった。

「結論から言いますと、得られた情報は何もありませんでした。どうやら倒されると自

動で内部構造が破壊されるように細工されていたようで、仕組みは勿論傘木社との繋がりも分からない状況でした」

「あの2人は？」

「事情聴取しましたが、傘木社との関連はありませんね。ほぼ無作為に選ばれてベクターカートリッジを手に入れたようです」

当然だが2人にベクターカートリッジを融通したのが何者かに関しての情報は一切ない。薄々予想出来ていた結果だっただけに、宗吾は特に機嫌を損ねる事無く部下の報告を聞いていた。

「……そもそもあの2人は何であんな所で暴れてたんだ？ 一般人に犠牲者まで出して？」

「あの2人、麻薬の売人と客と言う関係みたいです。犠牲者を出したのは目撃者の始末が目的だったみたいで」

「フアツジ関係なく屑か」

「現在はそっち方面での取り調べが行われている最中です」

宗吾は溜め息を吐き、カップに残ったコーヒーを飲み干した。気付けば冷めていたコーヒーは、酸味を増している。

全く良い報告がない。部隊は半壊、成果は挙げられず高官からは煙たがられ、半ば漁

夫の利を得る形で手に入れた証拠品も全く役に立たなかった。これで苛立つなど言うのは無理があるだろう。

しかし部下が持つてきた報告はこれだけでは無かった。彼はもう一つ、ある事に関する報告書を持つてきていた。

そしてその報告は、宗吾にそれまでの苛立ちを忘れさせるほどに良い報告であった。

「それと隊長御所望の対ファツジ用装備の完成形……スコープシステムに関する報告です」

「ッ!? どうだった!?!」

「……こちらは良い知らせです。遂に完成したとの事です」

その報告を部下から聞いた宗吾は、最初時間が止まったかのように全く動かなかつた。だが次第に爪先から全身を振るわせていき、抑えきれなくなつた歓喜を爆発させるように手を叩き声を上げた。

「ツツツツシャアツ!!」

「装着者を選ばれたのは勿論隊長、貴方です。つきましては慣熟訓練を行いたいとの事です、この後開発部へ向かつて欲しいとの事です……」

「よし、分かった! 今すぐ行くぞ!」

年甲斐も無く喜びを全身から滲ませ足早にオフィスを出る宗吾の後ろを、報告した部

下が苦笑しながらついて行った。

やや遅めの昼食を摂りに研究室を出た仁と亜矢は、気分的に食堂ではなく喫茶店の方に向っていた。気分はカフェのランチだった。

仁は暫くメニューを眺め、目についたBLTサンドが気になったのでそのランチセットを注文した。

一方の亜矢はしばらく悩んでいたが、最終的にミートソーススパゲティを選択。注文しようとして店員を呼んだのだが――

「すみませ〜ん！」

「はいー！」

「この、ミートソーススパゲティを……………それと食後にパフェ一つ」

スパゲティを頼んだ直後、亜矢の雰囲気が変わった事に気付いた仁はパフェを頼んだのが亜矢ではなく真矢である事に気付いた。

注文を受けた店員が離れて行く。その間、まだ表に出たままの真矢の中では亜矢が抗議していた。

「ちよつと真矢ツ!? 何でパフエまで頼むのツ!?」

「だつて食べたかつたし」

「もゝツ!? この喫茶店のパフエ結構大きいんだよ!? ただでさえ最近では真矢が甘い物たくさん食べるからカロリーの計算大変なのに!?」

人目も憚らず亜矢との会話を口に出す真矢。傍から見ると一体誰と話しているんだと言う様子に、仁はさり気無く周囲を見渡し変に注目を浴びていないかを心配した。

幸い時間が少しズレていた事もあつてか、店内にはまばらにしか客がおらず、また真矢があまり大きな声で話していないから変に注目を浴びるような事にはなっていないかった。

「まあまあ、甘い物は別腹つて言うし」

「入るのは私のお腹なんだけど!?!」

内面に引つ込んでいる方の声は周りには聞こえないので、仁には亜矢が真矢に何と返しているのかは分からない。分からないが、真矢の態度から大体何を話しているのかは察する事が出来た。

「まあまあ落ち着いて亜矢さん。食べきれそうになかったら俺も手伝うから」

「だつてさ。良かったね、亜矢？　仁君にあくんとあげられるよ？……そう言う問題じゃ——つて、真矢？」

「交代したみたいだね」

唐突に真矢の雰囲気が変わった。どうやら真矢が自発的に引つ込んで亜矢が表に出てきたらしい。

因みにここまでの様子を見てもらえば察することは出来るかもしれないが、仁は亜矢と真矢の違いが分かっている。明確に何が違うかが分かっている訳では無いのだが、何となく雰囲気ですぐ2人の違いを理解しているらしい。瞬時に2人が入れ替わっても、仁はそれに素早く気付く為2人を呼び間違える事が無い。

「うう……仁君、助けてください」

「ん、いいよ。流石に2人で食べればそんな大した量にはならないでしょ」

「いえ、そつちではなくて」

「ん？……あ、真矢さんに対する仕返しと云うかお仕置き？」

亜矢と真矢は一つの体を共有している。故に、相手に何かしら不満があつても言葉で言い負かす以外に出来る事が無いのだ。

一応感覚も共有している為、自分の体を殴れば内面の人格も同様に痛覚を感じはするが、結果は痛み分けにしかない。何より自分で自分を殴るなど、傍から見れば馬鹿

か精神異常者である。

それでも何かできる事は無いかと、亜矢は藁にも縋る思いで仁に知恵を借りた。

頼られて仁も悪い気はしないが、しかし流石の彼も同じ体を共有している二つの人格の片方を懲らしめる方法などそう簡単に思いつくものではない。それこそ精神を分離させたり、相手が嫌う言葉を並べ立てたり――

「――あ、そう言えば真矢さんって甘党なんだよね？」

「はい」

「じゃあもしかして、辛いのかか苦手だったりするんじゃないの？」

徐に仁が口にした言葉に、亜矢は暫し動きを止めていた。だがそれも数秒の事で、亜矢は何か気付いたかのように視線をテーブルに置かれた調味料に向ける。

その中にはランチメニュー用に置かれた塩や粉チーズ、そしてタバスコなどの調味料が置かれていた。

仁には分からないが、真矢が先程からずっと黙っている。顔は見えないが、しかし亜矢には分かった。今真矢が、盛大に冷や汗を流しているだろう事を。

「お待たせしました。こちら、ミートソーススパゲティとBLTサンドのセットになります。それではごゆっくり」

まるでタイミグを計っていたかのように運ばれてきたサンドイッチとスパゲティ。

亜矢は自分の前にスパゲティが置かれると、何よりもまずタバスコを手に取りそれをミートソースに振り掛けた。

まるで親の仇か何かの様にこれでもかかとタバスコを振り掛ける亜矢に、見かねて仁が制止の声を掛けた。

「亜矢さん、少し落ち着こう？　食べるのは自分なんだからそんなに掛けたら亜矢さんも大変だよ？」

「ご心配なく。私これでも結構辛いのが好きな方なんです」

「そうなの？」

「ええ。カレーも辛口の方が好きですし」

これまで何度か亜矢にはカレーを作ってもらった事はあったが、それらは全て中辛だった記憶がある。恐らくだがこれまで亜矢は仁の事を考え、辛さを抑えたカレーを作ってくれていたのだろう。

その事に気付いた仁は内心で彼女に感謝した。

しかし黙っていられないのが亜矢の内面に押し込められた真矢だ。体の優先権が亜矢にある以上、彼女が本気を出したら真矢にはどうしようもない。

「あ、亜矢？　ちよつと落ち着こう、ね？　こう言うの良くないっ!?」

「大丈夫。人間ちよつと辛いのが食べた程度じゃどうにかなったりしないから」

【あ、相手が食べたくない物を無理矢理食べさせるのは良くないと思うな〜】
【私別にパフェ食べたくなかったんだけど?】

自業自得、調子に乗り過ぎた罰が当たったと仁はもう亜矢を止める事無くBLTサンドを口に運んだ。真矢の助けを求める声が聞こえた気がしたが、仁は気の所為と断じ亜矢のやりたいようにやらせた。

【待つて待つて!? ゴメン亜矢私が悪かったからちよつと待つてツ!?】
【ただだきま〜す】

真矢の懇願も聞かず亜矢はタバスコをたっぷり掛けたミートソーススパゲティをフォークで巻いて口に運んだ。口に入ると、亜矢の口の中に辛味と酸味が増したミートソースの味が広がる。

瞬間、亜矢の中で真矢が激しく悶絶した。

【ちよつ!? 待つて、辛い辛い辛いッ!?】
【ん〜! 考えてみたら辛いモノ食べるの久しぶり!】

「真矢さん、自分が辛いモノ食べたくないからつてこつそり亜矢さんの行動に干渉してんだね」

「でもこれからはそうはいきませんよ」

内側から響く真矢の悲鳴をBGMに、亜矢はスパゲティを次々と平らげていく。久方

ぶりの辛味と勝手をした真矢を懲らしめられた事に、二重の意味で笑みを浮かべる真矢の様子を仁は眺めながらサンドイツチを口に放り込んだ。

それから程なくして仁と亜矢はサンドイツチとスパゲティを平らげ、食後のコーヒーを飲んで一息ついていた。

その亜矢の中では、真矢が苦手な辛味に半ばベそをかいていた。

【うう……亜矢酷い】

【（自業自得でしょ）】

涼しい顔でコーヒーを飲みながら内心で真矢に返答する亜矢。

そんな彼女の前に真矢が注文したパフェがやってきた。なかなかのポリウムに、見ただけで少し胸焼けがしてくる。

パフェが来た瞬間、亜矢は主導権を手放し真矢に譲った。

「……………え？」

【パフェの始末は任せるから。責任とってちゃんと食べてよね】

キョトンとしていた真矢だったが、目の前に鎮座する甘味に歓喜の笑みを浮かべた。

「（ありがとう亜矢！ 愛してる！）」

【はいはい】

口直しの意味も含んでパフェを心の底から楽しむ真矢。本当に幸せそうな笑みを浮

かべてパフェを口に含む様子は、傍から見ているだけの仁も和んでしまふ程であった。

そうして見た目以上にボリユームのあるパフェを半分ほど平らげた所で、真矢は徐にスプーンで掬ったパフェの一部を仁に差し出した。

「ん?」

「仁君。はい、あゝん」

「ちよちよ、真矢何してるの!」

突然の真矢の行動に内面の亜矢が慌てる。だが主導権を真矢から奪い返さないのは、亜矢自身これを嫌とは思っていない証拠であった。

「(だって、流石にお腹いっぱいになつてきちやつたし? 私一人がデザート食べてるのに、仁君に何も無いのは何か可哀想だなくつて)」

「だからつて——つて、仁君ツ!」

ふと気付くと、仁は既に口を開けてスタンバイしていた。バツチコイな彼の様子に、亜矢は狼狽え真矢は笑みを深め仁の口に運んだ。

仁は真矢に食べさせられたパフェの甘さをじっくり堪能している。その様子を楽しそうに眺めつつ、真矢はパフェを掬い今度は自分の口に運ぶ。

その時亜矢は気付いた。これは彼との間接キスになると。

「真矢! ちよつとタンマ——!」

亜矢の制止も聞かず、真矢はパフェを掬ったスプーンを口に入れる。味は先程と然して変わらない筈なのに、パフェを食べた真矢の浮かべる笑みは先程よりも幸せそうに見えた。

そして真矢は再びスプーンにパフェを掬うと、またしても仁に差し出した。今度は仁も言われる前に口を開けスタンバイした。

ここまでくると亜矢はもう何も言わない。ただただ真矢のやりたいようにやらせるだけだ。結局体を動かしているのは真矢なのだし、意識しなければ恥ずかしさはそこまですらない。

しかし――

「(はい亜矢、バトンタッチ)」

徐に真矢は主導権を手放し亜矢に譲った。突然表に押し出され、仁にパフェを食べさせようとした体勢をしている事に亜矢は理解が追いつかず固まった。

突然動かなくなった彼女に、仁が口を開けたまま首を傾げた。

「? 亜矢さん?」

「えっ?! あ、え、え、え……あ、つと……」

真矢に文句を言う事も忘れパニックを起こす亜矢だったが、仁はまだ口を開けて待っている。

そんな彼の姿に亜矢はもうどうにでもなれと、彼の口にスプーンを運び入れた。仁が口を閉じパフェを食べたのを見ると亜矢はスプーンを引き抜く。

亜矢は仁にパフェを食べさせたスプーンを暫し見つめていた。これを再び使うのは、ある意味で勇気が要る。今度は自分の意志で間接キスをする事になるのだ。

しかし何時までも残りのパフェを食べずにスプーンを見つめるのは流石に仁にも変に思われる。亜矢は意を決すると、パフェの器を掴み残りのパフェをかき込むようにして平らげた。

あつという間にパフェを食べきった亜矢は、何処かやり遂げたような表情をしている。

だが彼女は気付いていないが、その頬にはかき込んだ時に付いたクリームがある。

仁はそれに気付き、紙ナプキンを取り亜矢を手招きした。どうしたのかと亜矢が顔を近付けると、仁は彼女の頬に付いたクリームを紙ナプキンで優しく拭き取った。

「ん……出来上がり」

「あう……ありがとうございます」

彼に世話を焼かれた事が何だかこつ恥ずかしくて、頬を赤くして縮こまる亜矢。

仁はそんな彼女を優しく見つめていた。

そして、数少ない客の中で、そんな2人のやり取りを眺めながらブラックコーヒーを

飲んでいる者が居た。

峰だ。何だかんだで彼女もカフェ飯を選び、先に来ていた仁と亜矢のやり取りを離れた席から眺めていたのだ。

2人の様子を見ながらブラックコーヒーを飲み、そして徐に呟いた。

「いやあ、あの2人が居れば砂糖いらねえですね。便利便利」

ブラックの筈のコーヒーが甘く感じる仁と亜矢の様子に、峰は関心と呆れを滲ませながら再びブラックコーヒーに口を付けるのだった。

第20話：見通す者、その名はスコープ

「いや、相変わらずお熱いわねえ」

仁に顔を拭いてもらい、恥ずかしさに顔を赤くし俯く亜矢に美香が話し掛けてきた。突然現れた彼女に、亜矢は勿論仁も視線を向ける。

「わっ!？」

「あ、篠崎さん？ どうしたの、こんな時間に？」

「遅めの昼食よ。そしたら偶然2人を見つけてね」

「ふ〜ん」

彼女も残りは卒論を残すのみなので、研究の進み具合によつてはそういう事もあるのだろう。別に興味もない仁は、適当に相槌を打った。

亜矢の時とは違う淡白な反応に、美香は面白そうに笑みを浮かべると亜矢を手招きして店の外へと連れだした。仁もついて行こうとするが、それは美香により止められる。

「ゴメン、亜矢と2人だけで話したいんだ。門守君はちよ〜つとだけ待っていてくれる？」

「え……………あ、そう」

立ち上がりかけていた仁はさすがと座り直した。その様子はどこか置いてきぼりを喰らった犬の様で、そこはかとなく罪悪感を感じずにはいられなかったがそこはグツと堪え美香は亜矢と共に店の外にでた。

「で？ どう？ 彼との仲は進展した？」

ド直球に訊ねてくる美香に、亜矢は赤面しつつも肩を落とした。恥ずかしがりながらも気落ちすると言う器用な真似をする亜矢に、美香は軽く目を剥き問い詰めた。

「え、嘘？ まだお友達止まりなの？ あそこまでやっておいて？」

「は、はい……………つて、篠崎さん見てたんですか!？」

実は峰にも見られていたのだが、色々と一杯一杯だった亜矢はその事に気付いていない。

「そんな事はどうでも良いの！ それより亜矢、余計なお世話かもしれないけどそろそろ関係進展させないと。このままだと仲の良いお友達っただけで終わって卒業して別れちゃうわよ？」

「そんな、事……………は——」

口では否定しようとしたが、あり得ない話ではないと思っただけで亜矢の顔に影が差す。

恐らく仁は博士課程に進むだろう。これは確実だ。彼と共に居たいなら亜矢もそち

らに進むだけで良いのだが、問題なのは仁にはマサチューセツ工科大学への留学の話がある事だ。幾ら博士課程に進もうとも、海外留学となると簡単にはいかない。ただの海外留学であれば何とかなるだろうが、仁が予定されているのはマサチューセツ。留学の為には英語力や高成績、学業を続ける為の資金が求められる。

仁の場合は大学が推薦のような形で留学するので資金に関しては大学が持つてくれるし、英語力を始めとした学力も問題ない。

対して亜矢はどうかと言うと、成績は決して悪くはない。大学全体で見れば中の上から上の下、若しくはそれより若干上と言ったところだろう。

だが仁程の英語力があると言う自信はなかった。彼はネイティブの英語で外人と普通に日常会話できる程の英語力があつたが、亜矢はそこまでの事は出来ない。

更に問題となるのが資金だ。亜矢の家は特に裕福ではない一般家庭。海外で長期に渡つて学業を行えるほどの余裕はない。頼めば出してくれるだろうが、それは両親に多大な負担を掛ける事になる。亜矢の目的が留学先での学業にあるのであればそれも致し方ないかもしれないが、色恋の為について行きたいから家族に苦勞を掛けると言うのは気が引けた。

結論を言えば、例え仁と共に博士課程に進んでも2人は長期に渡つて離れ離れにならざるを得なくなってしまう。仁との関係を宙ぶらりんのまま、離れ離れになる事は想像

しただけで辛かった。

「まあ仁君、亜矢の事好きだろうから他の女に目移りする事は無いかもだけどねえ」

「(でも、もし離れてる間に仁君を好きになる人が居て、先に告白したりしちやったら――!?)」

仁が他の女性に靡くかは分からない。告白して立場を確立したならばともかく、そうでない場合仁がどういう選択をするか。

それを思うと、亜矢は押し潰されそうな苦しさを感じた。心が悲鳴を上げ、切なくなってくる。

「何だったら私が代わりに告白してあげようか？」

「それは駄目ツ!!」

告白する勇気が出ないのならば、真矢が亜矢に代わり告白する事を提案するがそれはすかさず却下された。

突然声を上げた亜矢に、美香は訳が分からず驚愕し怪訝な顔になる。

「わっ!!? え、ちよ、どうしたの?」

美香は真矢の事を知らないのです、彼女からは亜矢が突然訳の分からない事を口にしたようにしか見えない。

その事に気付いた亜矢は慌てて心を鎮め、努めて平常を装った。

「い、いえ……何でもありません」

「そう？ それならいいんだけど……。まあ何が言いたいかと言うと、好きって気持ちに間違いがないならさっさと告白しちやいなさいって話よ。私ら学生は一緒に居られる時間が有限なんだから」

それだけ告げると美香は手を振って店の中に戻っていった。亜矢はそれを見送る事もせず、1人俯いて悩み続けていた。

(告白……告白、かあ……)

確かに、そろそろ決断するべき時かもしれない。自分と仁はただの学生と言うだけではない。命をかけた戦いに身を置いているのだ。考えたくはないがもしもと言う可能性もある。

そうなつてほしくはないが、少しでも悔いを残さないようにするならば告白しておいた方が良くのかもしれない。

しかしそんなせっつかれるような感じで告白して良いのだろうか？ もっと彼の気持ちとかを考えた方が良いのでは？

そう思うとどうにも告白にまで踏み切る事が出来なかつたのだ。

煮え切らない亜矢に真矢は彼女の中で溜め息を吐かずにはいられなかつた。

【篠崎さんの言う通り。亜矢はもっと積極的になるべきよ】

「(そ、そうかな)」

【そうよ】

真矢からの言葉に亜矢は悩む。友人と双子の姉妹にこうまで言われては、確かにもつと積極的になるべきなのかもしれない。

「……………よしー！」

亜矢は自分の頬を叩いて、気合を入ると仁への告白を決意する。仁を想う気持ちは本物なのだ。この気持ちを正面から彼にぶつけて――

「亜矢さん、そろそろ戻ろう?」

「ひゃいっ!」

出し抜けに背後から仁に声を掛けられ、亜矢は飛び上がるほど驚いた。あまりにも見事な驚きっぷりに、仁も逆に驚いた程だ。

「うおっ、え? 何?」

「じ、仁君ッ!? あ、いえ、えっと、な、何でもありません!」

「そ、そう? じゃあ、そろそろ戻ろうか」

「は、はい……………」

突然声を掛けられて驚いたからと言うのもあったが、結局亜矢は告白に踏み切る事が出来ず仁の後に続いて研究室へと戻っていく。

【亜矢……】

「（お願い……今は何も言わないで……）」

【はいはい……】

真矢がジト目で自分を見ているのを察し、亜矢は居た堪れない気持ちで小さく溜め息を吐くのであつた。

傘木社の特別研究区画にて、雄成は窓から見える階下の手術室を眺めていた。

そこでは今、先日回収されたチミンの再強化手術が行われている真つ最中であつた。

傷の治療と並行して、防護服を着た研究員達が手術台に拘束されたチミンに様々な薬を打っている。

そこにグアニンが近付いて来た。

「プロフェッサー。本当に宜しいんですか？」

「何がかね？」

「チミンにあんな処置をします。あれ、ハッキリ言つて死にますよ。」

「ぐうっ?! ぐううううううっ?! あああああああああつ?!」

薬を打たれると、チミンが拘束具を引き千切らんばかりにベッドの上で暴れた。開かれた目は血走り、口の端からは泡が出ている。

しかし研究員達はそれを気にした様子も無く、機械的に次々と薬をチミンの体に打つた。中には毒々しい色をした薬剤もあつたが、それらも容赦なくだ。

「ううっ?! ううう、ううああああああああああああつ?!」

チミンの口から出る苦悶の悲鳴が、窓越しに手術室の外に居る雄成達にまで聞こえてくる。その光景にグアニンは顔を顰め、雄成はと言うと顎に手を当て興味深そうに事の経緯を見守っていた。

暫し手術室にはチミンの絶叫が響き、手術台に彼女を拘束している拘束具がギシギシと軋みを上げる。

と、ここで異変が起こった。拘束具が暴れるチミンの力に耐え切れなくなり外れ始めたのだ。最初は右腕、次に左腕。両脚と続き、最後に胴体を拘束している拘束具が千切れ飛び彼女は手術台から解き放たれた。

途端に鳴り響くサイレンに、慌てて彼女から離れ手術室から逃げ出そうとする研究員達。しかしこの手術室は内部でトラブルが起こると、外部からしか扉が開けられない造

りになっている。コンソールを幾ら操作しても扉は開かない。

「開けてツ!? 開けてくれえツ!?」

中の研究員が扉を叩き、上階の窓から見ている雄成達に助けを求めている。だが雄成は見ていっただけで動く様子を見せない。グアニンがその様子を不安そうに見て、研究員と雄成を交互に見る。

「がああああつ!?」

「ひっ!?」

そうこうしていると、正気を失ったチミンが研究員達に狙いを定めた。その目は完全に捕食者のそれだ。

逃げ場のない手術室の中で、チミンは躊躇いなく研究員の1人に襲い掛かり防護服の上からその首筋に喰らい付いた。防護服を切り裂き、頸動脈を噛み千切り血が噴き出す。

「ぎやああああああつ?!」

「ひいひいっ!?」

「誰かッ!? 助けてえッ!?」

「社長ッ!? 開けてくださいッ!?」

阿鼻叫喚の地獄絵図となる手術室。次々と研究員を襲いその肉を喰らっていくチミ

ンを、雄成はまるで実験動物を観察するように眺めていた。

「プロフェッサー、あれは？」

「肉体の急激な変化に、体がエネルギーを欲しているんだろう。何、腹が膨れれば落ち着くよ」

雄成は然も当然とそう告げた。こうなる事が分かっていたのだ。

グアニンは理解した。あの研究員達はチミンの処置の為に居るのではなく、肉体が変異した彼女の最初の餌となる為に放り込まれたのだ。そう、まるでトックリバチなどが幼虫の餌とする為に巣の中に生きた虫の幼虫を入れておくように。

雄成が他人を実験動物としてしか見ていない事に、グアニンは何とも言えない顔になった。あの研究員達や、最早人間と呼んでいいか疑問なチミンにすら憐れみの目を向けずにはいられない。

同時にグアニンは恐れた。何時、自分がただの実験動物として扱われるか。例えば幹部と言えど、失態が重なり幹部としての価値が無くなればあの様だ。

ああならない為には――

「ところで、そろそろまた仮面ライダーとの戦闘データが欲しいな」

「……………分かりました。手頃なベクターカートリッジを選びます。素体は如何いたしますか？」

「君の部下から選びたまえ。歯応えの無い相手では仮面ライダーも退屈だろう」
「分かりました。直ちに」

雄成に頭を下げ、グアニンはその場を離れて行く。

その際、チラリともう一度窓から見える階下の手術室の様子を見た。

「は……え？　嘘？　わ、たし………うぶツ——!？」

どうやら正気に戻ったらしいチミンが、手術室の惨状と自分の状態から何が起こったのかを理解してしまったようだ。血塗れの自分の姿と肉体の欠損した研究員達の様子に慄き、そして激しく嘔吐している。

チミン——いや、最早この名で呼ばれる事も無いだろう——を憐れに思いつつ、グアニンは決意した。自分は決してああはならない。

たとえ今ですら実験動物であったとしても、使い潰されるモルモットには絶対落ちないといと心に誓った。

その為には失敗は許されない。雄成が望む結果、彼が喜ぶ結果を出し続けるのだ。

グアニンは決意しながら、使用するベクターカートリッジを選び部下を招集して仁達の元へと向かうのであった。

あれから研究室に戻り卒論研究を進める仁と亜矢。

仁は己の研究である、『小麦にサボテンの遺伝子を組み入れて砂漠でも育つ小麦の作製』を行っている。今は単純に裸にした小麦の細胞とサボテンの細胞を融合させたものと、並行して小麦の遺伝子にサボテンの持つ暑さと乾燥に強い細胞を作る遺伝子を組み込んだものを生育させている最中らしい。

経過は今の所順調の様で、今後しばらく観察を続け段階的に砂漠と同じ環境に置き正常に育つか、普通の小麦と同じように実をつけるかを検証するようだ。

亜矢も亜矢で、卒論研究である『人の細胞の拒絶反応を取り除く方法の模索』の研究を進めている。拒絶反応のメカニズムに関しては分かっているのですが、その原因となる遺伝子の特定とそれの抑制を今は模索している所であった。……のだが、戻って来たらと言ふもの彼女は溜め息を吐いてばかりである。原因は言うまでもない。結局仁に告白する事が出来なかったからだ。

彼女の言い訳をするのであれば、告白するにはシチュエーションが整っていないかつたと言ふのが挙げられる。あの後研究室に向かう道中で告白するなど、ムードも何も

あつたもんじゃない。そんな状況での告白など、流石に彼女としても願ひ下げだった。

しかしこうして研究室にまで戻つてしまうと、今度は仁に対してどう思ひを告げたものかという事ばかり考えてしまい卒論研究にどうにも身が入らない。幸いな事に真矢が手伝つてくれていたので作業ミスは無かつたのだが。

「亜矢？ 亜〜矢〜？」

「(え？ あ、何?)」

「何じゃないわよ。少しは気持ち切り替えたら？ 今ここで悩んだつて仕方ないじゃない」

「(そ、そうだけど……)」

ここら辺、亜矢と真矢の性格の違いが大きく表れていた。真矢は基本きっぱりと決断する方だし、その時に決まり切らなければその問題は後回しにし今すべき事に集中出来る。

対する亜矢はご覧の通り、一度悩み始めると何時までもズルズルと引き摺つてしまう。己の煮え切らなさ、決断力の無さに、亜矢は自分が情けなくて自己嫌悪に陥つてしまつていた。

そんな亜矢の体の、右腕の主導権だけを一時的に自分のものにして真矢は自分の頬――即ち亜矢の頬をペチリと叩いた。

「ッ!? 真矢?」

【亜矢の気持ちは良く分かるわ。心から好きな相手だもの。告白に緊張して悩んじゃうのは仕方ない事よ。でも悩むだけ悩んだら問題は解決するの?】

「(それは……違う、けど………でも——)」

【でもじゃない! 悩むなどは言わないけど、頭の中でウジウジグルグルするだけの悩みなんて生産性ゼロよ。相談ならいくらでも乗るから、今は気持ちを切り替えよ。ね?】

真矢の説得に、亜矢は今度は自分の意志で自分の頭をコツンと叩いた。彼女の言う通り、さつきから自分と同じところでグルグル回ってただけで解決に向かっていなかった。こんな事では仁への告白など覚束ない。

とにかく今はやるべきことに集中しようと心機一転し、さあ研究を進めようとした。

その時、峰のタブレットからアラームが鳴った。弾かれるようにそちらを見る仁と亜矢。

「ファッジ出現です!」

「亜矢さん、行こう」

「はい!」

峰のタブレットに表示されたのは大学から北に2kmの地点。2人はトランスポゾン

で即座に現場へと急行した。

その場所は所謂倉庫街で、周囲には倉庫や積み重ねられたコンテナがある。

普段であればコンテナや倉庫に荷物を出し入れするフォークリフトや作業員が行き交っているのだろうが、今彼らはアントファッジ達に追われ逃げ惑っていた。

「うわあああああつ!?!」

逃げ遅れた作業員の1人が、アントファッジの銃撃に倒れた。彼だけでなく、逃げ遅れた作業員が倉庫街には無数に倒れていた。

死屍累々となった倉庫街を闊歩するアントファッジ達と、その後ろからついて行くシーアーチンファッジ。シーアーチンファッジは凶弾に倒れた作業員たちには目もくれず、仮面ライダー達が現れるのを待っていた。

(しかし、プロフェッサーも回りくどい事を言う。何故あの2人が確実に居るだろう大学への攻撃を禁じたのか。大学へ直接攻撃を仕掛ければ、仮面ライダーを倒せずとも白上教授を始末する事も可能だったろうに……)

シーアーチンファッジは雄成から言い渡された奇妙な条件に首を傾げつつ、周囲を絶えず警戒していた。もう生き残った作業員達は粗方逃げ終え、ファッジ達以外に動くものは誰も居ない。

そこへ一台のバイクのエンジン音が近付いてくる。エンジン音のする方へファッジ

達が目を向けると、トランスポゾンに乗った仁と亜矢がやって来た。

仁は倉庫街に入りファッジの姿が見えるとそこでバイクを停車させ、亜矢と共に下りてヘルメットを取った。

バイクから下りた亜矢は、倉庫街のそこかしこに倒れている作業員達の姿に悔しそうに顔を顰めた。間に合わず助ける事が出来なかった彼らに、申し訳ない気持ちになる。

「亜矢、後悔は後！ 今はあいつらを何とかしないと！」

「真矢……うん！」

「行くよ、亜矢さん真矢さん」

「はい！」

「ええ！」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

2人がデイナとルーナに変身すると、それを待っていたかの様にアントファッジ達が攻撃を開始した。2人から距離を取り銃撃しながら徐々に距離を詰める。

そんな中で、シーアーチンファッジの傍に居たアントファッジは1人変異を解いて元

の姿に戻った。その部下に、シーアーチンファッジはベクターカートリッジを渡した。受け取った部下はコックを捻って押し込み、カートリッジを起動状態にする。

〈CORAL〉

シーアーチンファッジの部下はカートリッジを起動させると、右腕に装着した簡易ベクタープレスにカートリッジを装填した。

〈CORAL Contamination〉

ベクタープレスにカートリッジを装填した部下は、その体を赤い宝石の様な輝きを放ち体の各部に枝分かれの様な突起を持つ怪人・コーラルファッジへと変異させた。

コーラルファッジはアントファッジ達と戦闘を繰り返している。ダイナとルーナに襲い掛かる。

「ハッ！」

「おっと？」

最初にコーラルファッジの攻撃の標的にされたのはダイナの方だった。硬く硬質的な外殻を持つコーラルファッジの一撃は、ダイナが攻撃を回避した先にある地面を砕くほどの威力だ。そしてそれを成したコーラルファッジの拳は傷一つ付いていない。

パワーだけでなく硬さも優れている証拠である。単純だがそれだけに厄介な敵だろう。

（あの硬さに体……何だあれ？ 虫とかじゃない。鱗が見えないから魚類や爬虫類とも違う。哺乳類や鳥類も論外……一体何の遺伝子情報なんだ？）

戦いながらデイナはコーラルファッジの元となっている生物の遺伝子を見極めようとしている。何の遺伝子を使っているかが分かれば、自ずと弱点も見えてくるからだ。

だがコーラルファッジに関してはイマイチ何の生物かがピンとこない。

デイナはハルバードモードのハイブリッドアームズを構えつつ、慎重に立ち回っていた。彼が一気に攻撃を仕掛けないのは、相手の弱点が分からないからだけでなく、相手が多様な隠し玉を持っているか分からないからである。生物の中には思わぬ武器を持っているものも居る。このファッジが恐るべき隠し玉を持っていないとは限らない。

しかしコーラルファッジはデイナの分析などお構いなしに、積極的に攻撃を仕掛けてきた。流石にそれを甘んじて受ける訳にはいかないので、デイナはコーラルファッジの攻撃を斧槍で弾いた。

「流石に手強いな、仮面ライダー。ならばこれで！」

徐にコーラルファッジは右手を刃の様に鋭くさせた。ビキビキと音を立てながら形状を変化させる。どうやらある程度であれば体の形を自由に変化させる事が出来るらしい。

デイナはますます以てこの敵が分からなくなった。幾ら超万能細胞の力とは言え、木

が急速に成長するように体の部位を変化させるなどどんな生物の遺伝子を使えばできると言うのか。

(動物じゃなくて植物なのか? いや、でもな……)

「敵を前に考え事か? 随分と余裕だな!」

剣の様になった右手を振るい、デйнаに斬りかかるコーラルファッジ。デйнаはそれを斧槍で迎撃し、両者の刃が激しくぶつかり合う。

激しい剣戟を繰り広げるデйнаとコーラルファッジの戦いはルーナにも見えていた。ルーナは未だ残る無数のアントファッジを相手にしつつ、真矢のサポートを受けてデйнаへの援護射撃を行った。

【亜矢、左腕貸して!】

「分かった!」

ルーナが左腕の主導権を真矢に譲渡すると、ルーナが全く見ていない方向に向きその方向に居るアントファッジ達を次々と撃ち抜いた。全く予想できなかった動きに、アントファッジ達が驚き動きを止める。

【チャンスよ亜矢!】

「うん!」

〈Genome set ATP Burst〉

アントファアツジ達が動きを止めた瞬間、ルーナはリプレッサーショットを連結しライフルモードにするとバクターカートリッジを装填。エネルギーを収束させた銃弾をアントファアツジ達の間を縫ってコーラルファアツジに命中させた。

「ぐおっ!」

「隙あり」

「ぐふっ?!」

ルーナに肩を撃ち抜かれ隙を晒したコーラスファアツジを、ダイナが振り回した斧槍が薙ぎ払う。コーラルファアツジはロクに防衛する事も出来ず攻撃を喰らい、突起の幾つかを砕かれ体液をまき散らしながら吹き飛ばされた。その近くにはルーナも居る。

ダイナはコーラルファアツジを追う様にルーナと合流すると、彼女の周りに居たアントファアツジを彼女と共に次々と打倒していく。

あつという間にアントファアツジ達は倒され、残るは遠くから戦いを眺めているシーアーチンファアツジと傷だらけのコーラルファアツジのみ。

そろそろ戦いを終わらせようと2人の仮面ライダーが身構えた……………その時である。

突然ルーナの手からリプレッサーショットが滑り落ちた。

「……………え?」

「亜矢さん？」

ルーナ自身何故自分が武器を落としたのか理解できず呆けていると、続いてデイナもハイブリッドアームズを落とした。突然手から力が抜けた事に、デイナは危険を察知してこの場を離れようとするがその判断は遅かった。

次の瞬間、2人の仮面ライダーは全身に筋肉痛の様な痛みを感じその場に崩れ落ちた。全身が痛むだけではない、妙に息苦しい。まるで酸素が薄い山の頂上に来たかのようだ。

「じ、仁君……一体、何が——？」

「毒？ でも何で？ 何かが揮発した？………ツ!? そうか、あいつ——」

そこでデイナは気付いた。これはコーラルファツジの仕業だ。

コーラル……即ち珊瑚。一般に珊瑚は宝石の一種としても扱われるが、その正体は刺胞動物門に属する立派な生物である。

その大多数は一言で言ってしまうえば成長する岩の様な、ただ海中に存在して時期が来れば産卵すると言う特に害のない生物であるが、一種類だけ非常に危険な種類が存在する。

その名もマウイイワスナギンチャク。他の珊瑚と同じ美しい見た目だが、こいつは衝撃を受けて体が欠けたりすると猛毒を分泌するのだ。

その毒の名はパリトキシン。フグの約60倍、青酸カリの約8000倍と言う非常に強力な毒である。

コーラルファッジは先程ルーナとデイナに攻撃を受けて、体の各部を欠けさせ体液をまき散らした。その時の体液こそがパリトキシンであり、それが揮発しデイナとルーナを蝕んだのだ。

「そうか、珊瑚も生物だ。見た目が今までのファッジと違い過ぎたから分からなかった」「今更気付いてももう遅い。その命、貰うぞ!」

「ぐっ……」

「仁君ッ!」

体勢を立て直したコーラルファッジはデイナを踏みつけ、右手の刃を振り上げる。ルーナが彼を助けようとするが、彼女も全身に回った毒で満足に動けない。

勝った……遠くからその様子を見ているシーアーチンファッジは自分達の勝利を確信した。これで自分はモルモットに落ちずに済むと安堵の溜め息を吐いた。

その時、何処からか放たれた銃弾がコーラルファッジを撃ち抜いた。銃弾は一発ではなく、次々とコーラルファッジの体を穿ちデイナの上から退かした。

「ぐああっ!! くっ、誰だッ!」

まさかの奇襲に、コーラルファッジが怒りを露に銃弾が飛んできた方を見る。すると

そこには、思わぬ存在が居た。

「あ、あれは……」

「仮面、ライダー？」

その姿は一言で言えば正しく仮面ライダーであった。デイナともルーナとも違う、かなりメカメカしい見た目だが、ファッジとは明らかに違う。

右目の赤い複眼に対し左目は大ききの違う三つのレンズを持つカメラとなっており、時折回転している。

全身は銀色の装甲で覆われ、左腕には小型の盾の様な物を、右手には一丁のライフルを持つている。腹部には一つのレンズを持つバツクルのベルトが巻かれていて、それがますます仮面ライダーらしさを醸し出していた。

その仮面ライダーらしき存在は、右手に持ったライフルを構え引き金を引いた。フルオートで放たれた銃弾がコーラルファッジを近付かせず、コーラルファッジは毒の体液を周囲にまき散らした。

「ヤバい、亜矢さん！」

デイナはこれ以上ここに居ると更に濃厚になった揮発毒にやられると、まだ体が何とか動く内にルーナを引き摺ってその場を離れた。

何とかトランスポゾンの停めてあるところまで下がると、毒の濃度が下がったからか

体が大分楽になってきた。変身したお陰で肉体が強化されているからこの程度で済んでいるのだろう。生身である場に居たら一巻の終わりだ。

「大丈夫、亜矢さん？」

「はい、まだ少しくらくらしますけど……」

「そう……。それにしても、アイツは何で平気なんだ？」

デイナはコーラルファッジと戦う仮面ライダーに疑問を抱いた。新たなライダーは既に大分コーラルファッジに近付いており、揮発した毒の圏内に入っている筈である。にも拘らず、あのライダーは全く苦しそうな様子を見せない。

「何だ、あの仮面ライダーは——!?」

デイナとルーナ、そしてシーアーチンファッジが見ている前で、銀色の仮面ライダーはライフルを置くと右腰のホルダーから顕微鏡で試料を見る時に使うプレパラートの様なプレートを取り出し左腕の盾に後ろから装填した。

〈Vortex・Blade Startling〉

仮面ライダーがプレートを盾に装填すると、電子音声が響き盾の先端から盾の三分の二ほどの長さの両刃剣が伸びた。仮面ライダーはそれでコーラルファッジに斬りかかる。

「フンッ！」

「くっ、舐めるな!」

コーラルファッジも負けじと右手の刃を振るうが、パワーが違うのか押し負けている。攻撃しては弾かれ、防いでは押さえられてしまう。

しかも何度か刃をぶつけ合っていると、右手の刃が折れてしまった。硬さが自慢の体が、相手の剣の切れ味とパワーに負けてしまったのだ。

「そんな、バカな——!」

まさかの事態に慄くコーラルファッジを、銀色のライダーは回し蹴りで蹴り飛ばした。

「ハアッ!」

「ガハッ?!」

蹴り飛ばされ地面に倒れるコーラルファッジ。それを見て銀色の仮面ライダーは盾からプレートを引き抜き剣を収納すると、右腰のホルダーに戻し更にベルトのバックルからも同じプレートを引き抜きホルダーに戻す。

そして代わりに別のプレートを取り出すと、それをバックルに右側から装填しバックル左に付いた円形のハンドルを回した。

〈Recognition〉

バックルから電子音声が響くと、右足の装甲が開き開いた部分から熱気が放出され陽

炎が立ち上る。

仮面ライダーはその状態でコーラルファッジに駆け寄り、装甲が開いた右足で飛び蹴りを放った。

「ハアアアツ!!」

仮面ライダーの放った飛び蹴りはコーラルファッジの甲殻を粉碎し、大きく蹴り飛ばした。

「ぐあああああアツ?!」

蹴り飛ばされたコーラルファッジはコンテナの1つに激突。そのままコンテナを貫通し、突き抜けた先で爆散した。

それと同時に変異が解除されたコーラルファッジは、体内に仕込まれた発火装置が起動。隠蔽処置が施され消し炭となってしまう。あそこまで炭になってしまったのは、DNA鑑定も望めない。

消し炭となった傘木保安警察の隊員に溜め息を吐くと、周囲を見渡しシーアーチンファッジの方を見た。シーアーチンファッジを見た仮面ライダーは左目のレンズを回転させると、先程置いたライフルを拾いシーアーチンファッジに向けた。

「ツ!!? くっ!!?」

引き金が引かれる直前、シーアーチンファッジはその場を離れ難を逃れた。銃弾が虚

空を貫く様を見て、仮面ライダーは再び溜め息を吐く。

と、仮面ライダーは今度はデイナとルーナの方を見た。奴さんの視線が自分達に向いたのを見て、デイナとルーナは思わず身構えた。ファツジを倒したという事は敵では無いのだろうか、味方であると言う保証もない。

ライフルを持ったまま近付いてくる仮面ライダー。そこで漸く相手を真正面から見たデイナは、仮面ライダーの右胸に見た事のある紋章を見つけた。

「その紋章……S. B. C. T. ?」

「その通りだ」

「ッ、その声——?」

デイナの呟きに仮面ライダーが答える。その声をデイナは覚えていた。

そう、以前彼に話し掛けてきた警察の制服姿だったS. B. C. T. 隊長、権藤 宗吾の声だ。

「やつとだ……やつとお前達に追いついた。これでお前達と対等に戦える」

仮面ライダーはそう告げると、ライフルを2人に向けた。

向けられた銃口に、ルーナがまだ万全ではないながらリプレッサーショットを構え牽制する。

一方のデイナはと言うと、一瞬向けられる銃口に目をやるがすぐに視線を上げ宗吾が

変身した仮面ライダーを見た。

「俺の名は権藤 宗吾……お前らに合わせて言うなら、仮面ライダースコープだ！ 今日と言う今日は話を聞かせてもらおうぞ、仮面ライダー!!」

第21話：悪魔の発明

「今日と言う今日は話を聞かせてもらおうぞ、仮面ライダー!!」

ライフルを構えて告げるスコープを前に、ルーナが牽制の為にリプレッサーショットを向けている。必要とあれば引き金を引く事も覚悟していた。

が、それはダイナによって阻まれた。ダイナが彼女の持つリプレッサーショットに手を添え、そつと下に降ろさせたのだ。

何をするのかとルーナが視線で問い掛けると、ダイナは彼女を手で制しスコープの言葉に答えた。

「いいよ」

「えっ!?!」

「例えお前が拒もうと今度h……って、何?」

「いいよ」

あまりにもあつさりと承諾したダイナに、スコープだけでなくルーナも驚き彼の事を見る。

「じ、んんッ! ダイナ、良いんですか?」

ルーナは一瞬仁の名前を口に出しそうになったが、何となくこの場で実名がバレるのは不味い気がしたので慌ててライダー名に言い直した。そのデイナはと言うと、特に気にした様子も無く然も当然と言いたげに答えた。

「うん。前よりはこっちの話も聞いてもらえそうだし」

「は、はあ……」

「……………少しでも変な真似したらすぐ撃つからな？」

「警察なのに随分と血の気が多いね？」

「ファツジを相手にしていればこうもなる」

「そうかな？ あ、話すのは良いけど移動はさせてね？」

「分かっている」

スコープは銃で歩く様に指示を出し、デイナはトランスポズンを押して歩きだす。ルーナはトランスポズンを挟んでデイナの反対側を歩いた。

暫し無言で歩く3人だったが、唐突にデイナがある事に気付いた。

「あ、そうだ。あの倉庫街暫く立ち入り禁止にしてね？ 揮発性の生物毒だからそんなに長く残留はしないだろうけど、無毒化するのにどれくらい時間掛かるかまだ分からないから」

「言われなくても分かっている」

「つて言うかそれ、もしかしくなくても小型の酸素ボンベとか防毒機能付いてる?」

「ファツジの中には毒を使う奴も居るんだ。対策を講じるのは当然の事だろう」

「ふ〜ん……」

やはりと言うか、スコープには防毒装備が施されていたらしい。この事からも、このスコープはデイナとは別の技術で作られていることが伺えた。

ざっと見た限りだが、スコープにはベクターカートリッジが使われた様子がない。警察が独自に作り上げたライダーシステムなのだろう。

正直な話、警察組織で良くここまでのが物が出来たと感心せずにはいられなかった。

「それより、そろそろ話しても良いんじゃないか?」

「ん? 何を?」

「お前たち自身の事だ。何故お前達がベクターカートリッジを使っているのか。その力は何処で手に入れたものなのか。お前達に聞きたい事は山程ある」

倉庫街からは大分離れた。もう毒の影響は無いだろう。それを見越してか、スコープはライフルを再び2人に向けた。

向けられた銃口に、ルーナが体を強張らせる。咄嗟に手が太腿のリプレッサーショットに伸びるが、デイナがそれを押さえた。

飽く迄もスコープとは敵対しない姿勢を見せるデイナに、流石のルーナも心配そうな

視線を向ける。

だが次の彼の行動は更に信じられないものであった。

なんとデイナは変身を解き、その素顔を晒したのだ。まさかの彼の行動にルーナは慌てて彼を引き寄せる。

「なっ!?!」

「ちよ、何してるんですかッ!?!」

「多分こうするのが一番手っ取り早いよ」

「いや、手っ取り早いって……」

「先帰ってて。俺だけで話をするから」

予想外の展開に、慌てふためくルーナと思考停止しているスコープ。そんな中で仁は飽く迄もマイペースに話を進めていた。

ルーナだけを先に帰らせようとしていた仁だったが、衝撃が大きかったのかスコープは何も言わない。

何の反応も返さないスコープに、仁は首を傾げて彼の肩を揺する。

「もしもし? 大丈夫?」

「はっ!?! いや、お前、そんな勝手な……ん? 待て、お前何処かで会った事が……」

「ほら、前に赤い色したこのバイクに乗ってた時に会ったじゃん」

「あつ!! お前あの時のツ!!」

微かにだが仁と出会った時の事を覚えていたスコープは、彼に指摘されその時の事を完全に思い出した。あの時は仁の適当な嘘で誤魔化されてしまったが、彼の見立ては間違っていないかったのだ。

「んで、話を戻すけど俺がついて行くから亜矢さんは戻ってもらっても良いでしょ?」

「いい訳あるか!! 2人揃って連行だ!!」

「でもその間にファッジ出てきたら対応できないよ」

飽く迄仁と亜矢、2人を連れて行きそれぞれから話を聞こうとするスコープだが、仁は亜矢に負担を掛けたくはなかった。

それに警察に拘束されている間、仁は恐らく戦う事が出来ない。その間は亜矢にファッジへの対応をしてもらわなければならないのだ。なので、彼女には残ってもらう必要があった。

この時点で仁は警察と敵対しているつもりはさらさらなかった。ここで警察に行くのは飽く迄事情を知る者として任意の事情聴取に付き合うだけであり、言ってしまうと警察とハッカーが協力する様な感覚であった。

なので、仁としてはここで亜矢にまで警察に付いて来させる訳にはいかない。

「お前スコープがさつきファッジを倒したのを忘れたのか? お前達が居なくても俺が

居ればファッジなど問題ない！」

「連中を甘く見ない方がよいよ。もしもって時の為に仮面ライダーは2人、自由に動ける状態にしておいた方がよいと思う」

「駄目だ！ だとしても信用できない者を自由にさせるなど出来る訳がない！」

「仰ることは御尤も。でも敵はこっちの事情なんて知ったこっちゃんないだろうから、備えは絶対必要だよ。もし同時に別々の場所でファッジが出た時、あんたが対応できない方の被害は放置すんの？」

「それは……………」

痛い所をついてくる仁の言葉に、スコープの銃口がブレる。

相手が迷っている事を見抜いた仁は、ここぞとばかりに自分のペースで話を進めた。

「そう言う訳だから亜矢さん先帰っててくれる？ これ使つていいからさ」

「は、はあ……………あの、良いんですか？」

「大丈夫大丈夫。ほらお巡りさん、早く行こう。取り合えず近場の交番にでも行けば良いの？」

スコープの返答を待たず、ルーナにトランスポズンを預け仁はその場を歩き出す。

反論する間もなく行動を開始した仁に、スコープは慌ててついて行った。

「ちよっ!?! おい待て、勝手に行くなッ!?!」

「お巡りさん、早く早く。情報交換は手早く済ませちゃお」

サクサク進む仁について行くスコープを見送り、ルーナは2人の姿が見えなくなると変身を解除した。仮面の下にあった亜矢の顔は、呆れを滲ませた苦笑を張り付けていた。

「全く、仁君は……」

【亜矢、取り合えず今は大学に戻る。教授達にこの事を話さなきゃ】
「分かってるって」

亜矢は戦いで緊張した筋肉を解す意味で体を伸ばすと、大きく息を吐いてトランスポゾンに跨り大学へと戻っていくのだった。

一方シーアーチンファッジことグアニンは、あの戦いの後1人撤退して事の次第を雄成に報告していた。

「プロフェッサー、緊急事態です。3人目の仮面ライダーが現れました」

「3人目？」

「警察、S. B. C. T. です。S. B. C. T. が独自のライダーシステムを開発して実戦投入してきたのです」

「そうかね」

かなり急を要する内容の筈なのに、雄成の反応は淡白なものであった。予想外の反応にグアニンは一瞬呆けてしまう。

「は？ あ、あの、それだけですか？」

「それだけとは？」

「他に何かないのですか？ S. B. C. T. への襲撃や、新たなライダーが量産されないように手を打つなど……」

「別に必要ない。好きにさせておけ」

S. B. C. T. がライダーシステムを実戦投入してきたと言う事実にも拘らず、雄成は全く興味が無さそうである。

今彼の興味を引いているのは、2人の前にある大きなカプセルの中に全裸で浮いているチミンだけであるようだ。口に呼吸器をつけられ、眠るようにカプセル内の薬液の中に浮いているチミンを雄成は熱心に見ている。

グアニンには何故雄成がS. B. C. T. のライダーシステムを気にしていないの

かの理由が分からなかった。

今まで S・B・C・T に積極的に攻撃を仕掛けなかったのは分かる。幾ら警察組織と言えども、ファッジ相手では彼らは何も出来ない。証拠が残らなければ、警察は何も出来なかった。

だが今後は違う。警察はファッジと対等に戦う手段を手に入れてしまった。今後何かあれば、ボロが出てしまう危険性がある。

それを放置するとは一体どう言う事なのか。

「流石にこれは無視できません。仮面ライダーが増えたのです。会社の為、もつと積極的な行動を起こすべきでは？」

「そこは君が心配すべき事ではないよ。いいから落ち着きたまえ」

まだまだ言いたい事はあったが、しかしこれ以上は何を言っても無駄だろう。経験上、今の雄成には何を言っても聞き入れてもらえない。

それどころか、これ以上食い下がると不興を買って切り捨てられるかもしれない。

グアニンは止む無くこれ以上は何か言うのを止める事にした。

「分かりました。では警察に対しては暫く静観するとして、以前からの仮面ライダー達に対してはどうしますか？ 再び仕掛けますか？」

「そうだなあ……………」

雄成は研究員の1人から資料を受け取り、それに視線を走らせる。資料の内容は今チミンに施されている処置に関するものであった。

端的に言ってしまうえば、チミンの処置には今しばらく時間が掛かる。カプセルからはまだ出すことは出来ないし、出せても様々な検査やら何やらがあった。

一通り資料を流し見て、内容を頭に叩き込んだ雄成は資料を研究員に返しながら口を開いた。

「君が行きたまえ」

「私が、ですか？」

「うむ。今あるベクターカートリッジでは仮面ライダー達に良い刺激を与えることは難しそうだし、君らが行った方が良さだろう。何だったらシトシンも連れて行くと良い。最近暇だろうから」

「分かりました。シトシンにもそのように伝えてきます」

グアニンはそう言って雄成に頭を下げ、その場を離れて行く。

雄成は彼を見送る事無くカプセルの中のチミンを眺めていた。

と、ここで彼はチミンの眼が薄く開かれているのに気付いた。薄らと開いている眼は、しかし何を見ているのか分からない。

そんな彼女を見て、雄成は薄く笑みを浮かべカプセルを軽く小突くのだった。

大学に戻ってから、亜矢は事の次第を白上教授に報告していた。

仁が警察に連れて（ついで）いかれた事には、流石の教授も色々と思わずにはいられなかったのか焦りを顔に浮かべた。

「そうか……門守君が警察に……」

「不味くないですか？ 下手に全部話されたら、最悪教授が連行されたり……」

「門守君にも思うところがあつたのだろう。警察と接点を持つ必要性を感じたのかもしれない」

「しかし……」

白上教授は仁の判断に理解を示そうとしていたが、峰と拓郎はかなり難色を示している。以前警察を相手に苦い思いをしている峰などは、警察経由で傘木社の手が仁や教授に伸びる事を心配しているようだ。

3人が仁の判断について議論しているのを尻目に、亜矢は異様に落ち着いていた。教

授の淹れた紅茶を飲み、リラックスした溜め息を吐き茶請けのスコーンに舌鼓を打つほどだ。

あまりのリラックスっぷりに逆に不安になった峰が、思わず議論を中断して亜矢に話し掛けた。

「双星さん、随分と落ち着いてるみたいですけど門守君の事心配じゃないんですか？」
峰が問い掛けた時、亜矢は真矢と紅茶に入れる砂糖の量で揉めている真つ最中だった。真矢が何とか主導権を手に入れた左手が角砂糖を一気に7粒も入れようとするのを、亜矢が主導権を握っている右手が押さえている。

「駄目！ 真矢これは流石に入れ過ぎ！」

「これ位が良い甘さになるのよ！ 良いじゃない、半分は亜矢好みの味で飲んだんだからー！」

「そう言う問題じゃないの！ こんなに一遍に砂糖飲んだら体に悪いでしょ！」

「その分動けばいいんですよ！」

「動く予定が無いでしょ！」

傍から見ていると一人芝居をしているようにしか見えない亜矢の様子に、峰は何とも言えない顔になりつつも一度声を掛けた。今度は先程よりも大きな声で、だ。

「双星さん!!」

「ん!? あ、はい? すみません、気付くのが遅れました」

「いえ、それは仕方ないんで良いんですけど……」

大きな声で呼ばれ、亜矢は慌てて峰の方を見た。意識が峰の方に向き右手の力が緩んだ瞬間、しめたとばかりに左手が角砂糖を紅茶にぶち込んだ。

「あっ!?!」

【隙有りよ、亜矢?】

「もお……」

「何と言うか、思っていたよりも落ち着いているね? 門守君が関わる事だから、もっと動揺するかと思っていたが?」

「まんまと砂糖を大量に入れられ、悔しそうにする亜矢に白上教授がそつと話し掛けた。仁が敵か味方かもわからぬ警察へ行ってしまった事に、亜矢ならもつと動揺するかと思っていたのだ。」

それは教授だけでなく、拓郎と峰も抱いていた疑問であった。

言われて亜矢も自分が驚くほど落ち着いている事に気付いたが、その理由は直ぐに思い至った。

「ん、まあ……仁君って、私と真矢を一目で見抜く位には人を見る目が良いですから。その仁君が自分からついて行くなら、あの警察の人は大丈夫だって事だと思います。だ

からですかね？」

「流石に門守の事を信頼してるんだな」

「ふふつ、はい。あ、でも……」

「でも……何かな？」

拓郎の言葉に少し気恥ずかしそうにしながらも笑顔で頷いた亜矢だったが、その直後何かに思い至ったのか心配そうな顔になった。

突然表情を変えた彼女に不安を煽られ問い詰める白上教授。その彼に、亜矢はティー Spoon で紅茶をかき混ぜながら答えた。

「仁君のペースに、警察の人達が引つ掻き回されて迷惑を掛けないかが心配と言えれば心配ですね」

そう呟くと亜矢は甘々な紅茶を口に流し込んだ。その甘さに亜矢は思わず顔を顰めるが、彼女の内面に居る真矢は口に広がる甘さに満足そうな声を上げていた。

亜矢に言われて、3人は仁のマイペースを思い出す。そして彼女の言葉に同意せずにはいられず、仁が警察に迷惑を掛けた挙句に怒らせたりしないかと新たな心配をせずにはいられないのであった。

その話題の仁が今どうしているかと言うと――

「ズズツ……………はあ――」

S・B・C・T 本部の一室で、湯呑に入った緑茶を飲みリラックスした息を吐いていた。そのリラックスつぶりたるや、食後の一杯を飲んでいるかの如くである。

あまりの落ち着き様に、机を挟んで彼の対面に座っている宗吾も声を掛けるのを躊躇するほどだ。

「お前こんな状況でよく落ち着いていられるな?」

「ん? そうかな?」

「正直幾ら何でも落ち着き過ぎだ」

勿論、話を聞く事が最大の目的なのだから慌てふためかれて支離滅裂な事を言われたり、保身に走るあまり出鱈目な事を言われるよりは落ち着いてコミュニケーションが取れる方がずっと楽ではある。

楽ではあるが、自宅かと言いたくなる程リラックスされると逆に不安を感じずにはいられなかった。

「まあいいじゃん。それで、え〜つと……どこまで話したんだっけ?」

急須からお代りの緑茶を湯呑に注ぐ仁に、宗吾は何とも言えない顔をしながら部下に取らせた仁からの情報を読み上げた。

と言っても、彼が話したのは彼自身の名前と仮面ライダーに変身するようになった経緯位のものであったが。

「お前の名前は門守 仁。1月23日生まれの22歳。明星大学の4年生。去年の10月に起こったファアツジによる明星大学襲撃事件の際に仮面ライダーに変身し、それ以降ファアツジとの戦い続けている……と言う所までは聞いた」

「ああそこまでね」

「……それで? お前にベクターカートリッジとライダーシステムを与えたのは一体誰なんだ?」

「教授だよ。白上教授」

仁から出た教授の名前に、宗吾が部下に目配せをすると即座に部下であるオペレーターきたむらの女性・北村 茜あかねが素早くノートパソコンのキーボードを叩く。

白上教授のデータは直ぐにノートパソコンのディスプレイに表示された。

「ヒットしました。白上 源五郎、明星大学の教授です。経歴には特に不審な所は見られません。傘木社との繋がりはないようです」

「その傘木社と繋がり無い教授が、何故ベクターカートリッジとそれを扱うドライバーを開発できたんだ？」

「それは簡単だよ。教授がベクターカートリッジの開発者の一人だからさ」

思わぬ言葉に宗吾だけでなく茜も弾かれるように仁を見た。注目された仁はと言うと、残った茶を出し切るように急須を上下に振っている。もう一滴も出なくなつたのを見て急須を近くに置くと、湯呑を手に持ち口に近付けた。

宗吾は彼が茶を飲んでゐる途中で、机の上に身を乗り出し彼の胸倉を掴んで引き寄せた。

「おい待て、それは一体どう言う事だッ!？」

「ん、んん……ちよつと待つて零れた。何か拭くもの——」

「そんなのどうでもいいッ!?! 一体どう言う事かと聞いている!?!」

ベクターカートリッジの開発者が大学で教授をしているという情報に冷静さを欠いたのか、宗吾は仁を揺さぶりながら捲し立てた。

揺さぶられる度に彼の手のの中の湯呑から茶が零れるので、見兼ねた茜が宗吾を宥めつつ布巾を取り出し机を拭いた。

「隊長、落ち着いてください。それでは話を聞く事すら出来ません」

「……ッ、しかしだな北村——」

「そこまでです！ これ以上感情任せになるようでしたら、隊長の頭が冷えるまで私が聴取を引き継ぎますか？」

遠回しに出ていけと言われ、宗吾は仁の顔を睨み奥歯を噛み締める。当の仁はと言うと、茜から受け取った布巾で手を拭いていた。

あくまでマイペースな仁を忌々し気に睨み付けると、宗吾は立ち上がり壁際に向かうと壁に手をつき俯いた。出ていきたくはないが、心は落ち着けようという彼なりの考えだろう。

彼の様子に茜が軽く肩を竦めながら、宗吾の代わりに椅子に腰かけ仁への聴取を再開する。

「それで続きですけど、その白上教授は何故大学で教鞭を？」

「何で大学の教授やってるのかは知らないけど、ベクターカートリッジとダイナドライブを作った理由は聞いてるよ」

「その理由とは？」

「一緒にベクターカートリッジ……それに使われてる超万能細胞の研究をやった、傘木雄成を止めたいんだって」

「傘木 雄成？ それって——!？」

茜と宗吾も察しがついたようだ。傘木社の社長である雄成が、嘗て白上教授と共に超

万能細胞の研究をしていた事を。

そして、その研究成果を悪用して巨大企業で人体実験を行っている事を知ったのだ。

「ならば傘木社はやはり人体実験を行っているという事だな!! よし、ではすぐに強制捜査を——」

「物的証拠が何も無いのにそんなこと出来るの？ 令状下りないでしょ？」

一瞬勢いを取り戻した宗吾だったが、仁の正論に勢いを削がれ再び壁を向いて俯いた。テンションのアップダウンの激しい宗吾に、茜は呆れた目を向けつつ話を続けた。

「つまりその教授は元々ベクターカートリッジに関する研究を行っていて、傘木社社長の凶行を止める為に独自にライダーシステムなどを作り上げたという事ですね？」

「纏めればそう言う事」

「なるほど……………では君は？」

「俺？」

「そう。君は何故仮面ライダーになって戦うんですか？ 君も教授と共に超万能細胞とやらの研究をしていたのですか？」

この話には興味があるのか、宗吾も顔だけ振り返って仁の言葉に耳を傾けた。仁は茜からの問い掛けに、椅子の背凭れに体重を預け息を深く吐いてから口を開いた。

「俺が超万能細胞の事を知ったのは去年初めて変身した時だよ。その前は存在そのもの

を知らなかった」

「ならなんで戦うんだ？ ただの学生だろう？」

「ん〜……そんなに崇高な理由がある訳じゃなくて恐縮なんですけど、強いて言うならばベクターカートリッジ……超万能細胞の可能性を信じたいからかな？」

「可能性？」

「そう。超万能細胞だって、使い方次第ではきつと人を助けたりすることに使える筈なんだ。だから——」

「そんな訳あるかッ?!?!」

突然宗吾が仁の言葉を遮るように叫ぶ。彼の怒声に驚く仁に対し、宗吾は茜に宥められながらベクターカートリッジ……ファッジに対する憎悪を吐き出した。

「俺の……俺の妻子はファッジに殺されたんだぞッ!? ベクターカートリッジが、超万能細胞なんてものがあるから俺の妻と娘は——!?!」

「そっか……それが権藤さんが最初から俺を強く敵視してた理由か」

「ああそうさ、悪かったな。俺はベクターカートリッジを認めない。あれは悪魔の発明だ！」

鬼の形相でベクターカートリッジと超万能細胞を全否定する宗吾。仁はその言葉を聞いて、しかし微塵も気を悪くした様子を見せない。だからと言って興味が無さそうと

言う訳でもなく、ただ宗吾の怒りと憎しみをそのまま受け入れているような感じだ。

「言いたい事は分かるよ。でもさ、それは違うと俺思うんだ」

「何？」

「もしもの話だけど、仮に権藤さんの奥さんと娘さんを殺したのに使われたのが包丁だったらどうするの？ 権藤さんは世界中のコックや包丁職人を憎んで全員逮捕するの？」

「それは——?!」

宗吾は思わず言葉を詰まらせた。

確かにベクターカートリッジとその産物であるファッジは危険だ。しかし、それは結局扱い方を誤っているからに過ぎない。

「権藤さんの気持ちは分かるけど、それって結局ベクターカートリッジと超万能細胞の一面しか見てない訳じゃん？ 今はまだ机上の空論かもしれないけど、超万能細胞だって使い方を間違えなければ世界中の病気や怪我で苦しむ人達を救う事だってできる可能性があるんだよ」

「お前は、それを証明する為に戦うって言うのか？」

「そんな感じ。このまま超万能細胞が危険ってだけのイメージが広がったら、未来で助けられる筈の人も助けられなくなっちゃうし」

普段であれば、仁の言葉はただの夢物語として一蹴されていたかもしれない。しかし宗吾達は、仁が今までベクターカートリッジの力で戦い何人も救っているのを知っている。なんだったら彼らS・B・C・Tも何度か助けられているのだ。

仁の言葉がただのカッコつけなんか出ない事は、宗吾達が身をもって知っていた。

「俺思うんだ。俺達と権藤さん達、戦う目的はそれぞれ違うかもしれないけど、先にあるものはきつと同じ物だって」

「……………」

「だからさ、これからはお互い仲良くやっていきたいって思ってるんだけど、どうかな？」

仁は正面から宗吾を見て、右手を差し出した。

差し出されたその手を、宗吾は――

第22話：勝利の為のシエイクハンズ

仁が和解の証として手を差し出し、宗吾がそれをジッと見つめている。

2人に様子を茜が交互に見ていると、唐突に扉がノックされた。静まり返っていた部屋に響くノックの音に、全員の視線がそちらに向いた。

茜が即座に対応し、扉を少し開けて訪問者に返答した。

「はい？ すみませんが今取り込み中で……って、小早川さん？」

訪問してきたのは茜達と同じS. B. C. T. の隊員の1人・小早川こばやかわ慎司しんじだった。

彼は茜と室内に居る宗吾に敬礼をすると、訪問の目的を話した。

「ハッ！ 実は先程、そちらの仮面ライダーを訊ねたいと言う人物が2人来まして」

「2人？」

「双星 亜矢と白上 源五郎と言う2人です」

慎司の口から出た名前に、仁と宗吾は揃って顔を見合わせた。

遡る事数十分前……………。

【さて……………亜矢、そろそろ……………】

「うん」

白上教授達が議論を続けている間に、紅茶を飲み終えた亜矢。

一息ついた彼女は、カップをシンクに片付けると研究室を出ようとする。

突然何処かへ行こうとする彼女の背に、白上教授が声を掛けた。

「ん？ 双星君、何処へ？」

「そろそろ仁君を迎えに行こうかと」

まさかの発言に教授達の目が点になった。常識的な筈の彼女が、全く予測できない事を口走ったので理解が追いつかなかったのだ。

そんな中で真っ先に再起動したのは峰であった。

「ちよちよちよっ!?! ちよつと待って双星さん!?! 何がどうしてそうなの!?!」

亜矢にはフアツジが出た時の対策として残ってもらったのだ。それに何より、仁が彼女を素顔も晒さぬ内に帰らせたのは彼女に負担を掛けない為。

その仁の想いを無視するかのような彼女の行動が信じられなかった。

「折角門守君が双星さんに負担を掛けないようにってしてくれなのに!」

「大丈夫ですよ。仁君の事だから、私が着く頃には警察の人達ともある程度打ち解けてる筈です。少なくともこちらの事情は少しは理解されてると思います」

自信を持ってそう告げる亜矢からは、仁に対する強い信頼感が見て取れる。彼女は本気で、仁が宗吾達と和解できると考えているのだ。

亜矢の言いたい事は分かるが、警察を信用する事にまだ抵抗がある峰は渋い顔をして
いる。

それに対し、白上教授は何かを思案する様子を見せると、徐に立ち上がり身形を整えた。

「私も行こう。事情を説明するには、私が居た方が都合が良いだろうからね」

「ええっ!」

「教授もですか?」

「うむ。やはり門守君だけに面倒を押し付ける訳にはいかないだろう。元はと言えば、彼を巻き込んだのは私の方なのだし」

議論の中で、白上教授は仁が警察と繋がりを持つとうとした理由に気付いたのだ。

今までは警察にはファッジに対抗する戦力が無かった。だから以前の状態で接触しては、警察側が仁達に必要以上に警戒して不協和が起こる危険があった。

だが今は違う。警察も独自のライダーシステムを手にし、彼らとこちらの立場はほぼ対等、組織力に関しては何が上となった。

事ここに至り、警察とこれ以上距離を取る事は逆に無用な諍いを生むだけと仁は判断したのである。何しろ警察は単純な組織力で教授達を上回っている。本気を出して警察が仁達に牙を剥けば、勝ち目はない。

そうなる前に、仁は向こうが余裕を持った瞬間を狙って和解へと踏み込んだのだ。

「門守君は警視庁に居るだろう。私の車で共に行こう」

「分かりました」

こうして2人は、仁を迎えにS・B・C・Tの本部がある警視庁へと赴いたのである。

そして現在――

「教授、お茶です」

「ああ、すまないね双星君」

白上教授は、先程仁が座っていた場所に座り垂矢に淹れてもらった緑茶の入った湯呑を受け取っている。

仁程ではないが、マイペースなその様子に対面の宗吾は眉間に皺を寄せ、その後ろに控えている茜と慎司は困ったような顔をしている。

一方、仁と亜矢は白上教授の後ろに控えていた。こちらは打って変わって、何処かりラックスした様子だ。今も（何故か）亜矢が新しく淹れたお茶の入った湯呑を手に、教授と宗吾の話し合いを見守っている。

「さて、ある程度の事情はこちらの門守君から聞かされていると思いますので手短に話そうと思います」

お茶を一口飲み、口を湿らせた白上教授がそう切り出した。宗吾は相変わらず眉間に皺を寄せているが、教授が口を開くと気持ちを切り替えたのか姿勢は正している。

「聞きましよう」

「端的に言えば、我々は民間協力者としてそちらと共闘したいと考えています。私達も貴方方も、目的は傘木社の暴挙を食い止める事。目指す先にあるのが同じであるなら、協力するのは当然の事と思います」

「門守 仁と同じことを言うんだな」

正直に言って、この提案はS・B・C・T.にとつて渡りに船であった。スコープと言うファッジに対抗できるライダーの力を手に入れたとは言え、傘木社の戦力に比べれば力の差は歴然。例えば民間人であったとしても、傘木社と……ファッジと戦える戦力が増えるのは彼らとしては歓迎すべき事であった。

しかし、宗吾にはおいそれと首を縦に振る事が出来ない理由があった。

今彼の目の前に居るのは、言つてしまえば彼の妻子の死因を作り上げた元凶とも言える人物。仇敵に等しい存在である。

そんな人物の手を借りねばならないという事に、頭はともかく心が激しく騒いでいるのだ。

白上教授は宗吾の葛藤に気付き、先んじて言葉を紡いだ。

「そちらの……と言うか貴方の事情は門守君から聞きました。なんでも、ファツジによつてご家族を亡くされたとか。………正直、申し訳なく思っています」

白上教授が頭を下げるのを、後ろの仁と亜矢は黙つて見ていた。

対する宗吾は、教授が頭を下げると何を思ったのか机を強く叩いて立ち上がった。

「お前は——!? 謝る位なら、何であんなものを作つたツ!? あれの所為で俺の妻と娘は——!?」

「隊長、落ち着いてください!」

「そこまでです、隊長!」

激昂した宗吾を背後に控えていた茜と慎司が慌てて宥める。まだ手は出していないが、このまま放つておくと白上教授の首を絞めてしまふような勢いだったので、彼の部下2人は多少力尽くでも上官を落ち着かせ椅子に座らせた。

宗吾は部下2人に取り押さえられながら、今まで抑えていた感情を吐き出した。

「何でだ……何で、俺の妻と娘は死ななきゃならなかったんだ——!? あの日、娘の誕生日だったんだぞ……。帰ったら、娘の笑顔が待つてる筈だったんだ。それなのに——」

一年以上前、彼が自宅に帰った時、彼を出迎えたのは愛する妻と娘の笑顔ではなく無残な姿となった2人の姿だった。彼が帰宅した時には既に事切れていて、物言わぬ軀の前に彼は絶望し涙を流した。

「返してくれ……。俺の妻と娘を……。返してくれよ——!?!」

「隊長……」

人前、まして部下の前だというのに、止め処なく涙を流す宗吾に慎司と茜の彼を抑える手から力が抜けた。2人もここまで詳しい事は知らなかったのだ。初めて聞いた、自分達の上官が抱えていた悲しい過去に何も言えなくなってしまった。

白上教授は慟哭する宗吾に、心の底から申し訳なさそうな顔をして机に両手を付き頭を下げた。

「本当に……申し訳ない。全ては昔雄成を止める事が出来なかった、私の責任だ。だからこそ、責任を取らせてほしい」

「責任?」

「今後、貴方達がファッジと傘木社に対抗する上で、私は貴方方への協力を惜しまない。

それで許してくれとは言わないが、そうする事で少しでも私の不手際を清算させてほしいのです。どうか……………」

白上教授が頭を下げたのを見て、仁も頭を下げ、更に亜矢までもがそれに続いて頭を下げた。3人に頭を下げられ、宗吾は流れる涙を拭う。

「……………」一つ、聞かせてくれ」

「何でしょう?」

「あんたは何で、ベクターカートリッジ…………いや、超万能細胞なんてものを作ったんだ?」

「それが、多くの人々を助ける人類の新たな力になると考えて…………」

「そうか…………」

「ですが、その為に作り出した力が多くの人々を不幸にしてしまったのは揺ぎ無い事実。咎はいくらでも受けます」

そう言つて改めて頭を下げる白上教授を見る、宗吾の目からはもう涙は流れていない。だがその顔には、涙を流す前に合った仁達に対するトゲトゲした感情も見られなかった。

暫し沈黙が室内を支配する。仁達3人は宗吾に頭を下げ続け、宗吾の背後に控える2人は事の成り行きを見守っていた。

どれだけそうしていたのか、宗吾が沈黙を破る言葉を口にした。

「正直に言う。俺はまだベクターカートリッジを認められない」

宗吾の言葉に彼の部下2人が何かを言おうとするが、それよりも早くに宗吾が言葉を続けた。

「だが、アンタらがそれを悪用しないだろうことは……何となくだが分かった。何より、その仮面ライダーは今までに何人も助けてるんだからな」

自分の事を言われ、仁が顔を上げると宗吾が手を差し出していた。

仁が差し出された手と宗吾の顔を交互に見ていると、彼はバツが悪そうに頬をかいた。

「その……この前は助かった。礼を言う。それと……一方的に敵意を向けたりしてすまなかった」

それは和解の証だった。仁の気持ちに、宗吾が答え彼の方からも歩み寄ってくれたのだ。

その事に気付いた仁は、笑みを浮かべるとまではいかずとも表情を柔らかくしてその手を握り返した。

仁から手を握り返され、宗吾は肩から力を抜き2人は改めて互いに名乗った。

「門守 仁、仮面ライダーデйнаだよ。よろしく」

「権藤 宗吾だ。仮面ライダースコープ、力を貸してくれ」

「ここに漸く、警察と仁達の協力体制が成立した。」

「……あ、そうそう。そこに居る亜矢さんがもう1人の仮面ライダーだから」

「何ッ!？」

「そんなに驚く事です?」

「あ、すまん。何と言うか、そう言う荒事をするタイプには見えなかったもので……」

見ると慎司と茜も目を丸くしている。亜矢が仮面ライダーに変身して戦うとは思っていなかったらしい。

そんな彼らの態度に、真矢が表に出てきた。

「見た目で判断しないでもらえる? これでも1人でファッジ倒した事もあるんだから」

「ん? おお?」

突然真矢に切り替わった事で、宗吾達は変化に対応しきれず困惑する。

真矢の存在を知る訳がない彼らに、仁が軽く亜矢のもう一つの人格である真矢を紹介した。

「真矢さん、気持ちは分かるけどいきなり出てきたら皆びっくりしちゃうよ。こちら、真矢さん。亜矢さんのもう1人の人格だよ」

「だって失礼じゃない？ 見た目で人を判断するだなんて」

【まあまあ真矢、仕方ないよ】

「そうは言うけど亜矢……」

流石に二重人格者は初めて見るのか、仁に紹介されても宗吾達は目を白黒させていた。

驚かれはしたが、しかしそこには畏怖や嫌悪の悪感情は見られない。

どうやら仁達は頼もしい味方を得る事に成功したらしい。彼らの様子を見てそれを確信した白上教授は、すっかり冷めてしまったお茶を満足そうに啜るのだった。

仁達が和解している頃、警視庁を見上げる人物が居た。シーアーチンファアツジことグアニンである。

その近くには白衣を着崩し、軽薄そうな恰好をした男性のシトシンも居た。

2人が警視庁を見上げていると、シトシンがグアニンに話し掛けた。

「……で？ 本当にここに仮面ライダー共が入っていったのか？」

「部下からの情報ではそうだ。仮面ライダー……ルーナだったか？ に変身する女が、白上 源五郎と共に入っていくのを見たらしい」

彼らの目的は簡単だ。仁と亜矢、2人の仮面ライダーの排除若しくは戦闘データの収集である。現状のベクターカートリッジでは仮面ライダー達に有効な戦果を挙げられるか分からないという事で、他のファッジに比べて高い戦闘力を持つ2人が派遣されたのだ。

勿論念の為にアントファッジは連れてきているが、彼らは前座にしかならないだろうと2人は思っていた。

「そんじゃ、おっ始めるか？」

「そうだな。総員戦闘用意」

〈Sea urchin〉

〈Frog〉

〈Contamination〉

グアニンとシトシンがそれぞれシーアーチンファッジとフロッグファッジに変異すると、彼らの背後に控えていた傘木保安警察の隊員がアントファッジに変異する。

全員が変異したのを見ると、まずは露払いとアントファッジ達を警視庁に突入させ

た。

「行け。邪魔者を始末し、仮面ライダー共を誘き出せ」

シーアーチンファッジが指示を出す、アントファッジが一糸乱れぬ隊列を組んで警視庁へと向かつて行く。

迫るアントファッジの集団に気付いた警察官が何か叫んでいるが、それもすぐに銃声にかき消される。

忽ち悲鳴と銃声が周囲に響き渡る戦場となる警視庁に、シーアーチンファッジとフロッグファッジが悠々と向かつて行くのだった。

和解が成った後、仁達は宗吾達と今後の連携について話を進めていた。

「とりあえずファッジが出たら俺らも現場には行くようにするよ」

「そうしてくれ。こちらにも出来る限り迅速に駆けつけるようにはするが、如何せんこちらには出動までに若干ラグが出来るからな」

「関係各所には、仮面ライダーと連携ないし最低限邪魔はしないように通達しておきます」

「教授、宮野先輩のファツジ絡みの騒動に反応して警報を鳴らしてくれるシステムを警察の人達にも導入してもらっては？」

「ふむ、そうだね。後で宮野君に頼んでみよう」

あまり広くない室内で議論を交わしていると、不意に仁の耳が銃声を聞いた。外から聞こえてきたその音に、仁は話を中断し窓へと近付く。

「どうしました、仁君？」

「今銃声が聞こえた気がして……」

仁がそう呟いた瞬間、警視庁全体に警報が響いた。それと同時にアナウンスも。

『緊急事態！ 緊急事態です！ 現在警視庁が武装勢力からの攻撃を受けています！』

繰り返します、警視庁が武装勢力からの攻撃を受けています！』

警報とアナウンスに、部屋の外が騒がしくなる。それと同時に何処からか何かの破壊音が響く。窓から外を見ると、何処からか煙が上がっているのが見えた。

警視庁に攻撃を仕掛ける武装勢力……それが傘木社のアントファツジ達である事に、室内に居た者は全員が気付いた。

宗吾は即座に慎司と茜に指示を出した。

「北村！ 動ける奴らをすぐに迎撃に当たらせる！ 小早川は装備を整え次第合流！」

「了解！」

「門守君、双星君。頼むぞ！」

「はい」

「分かりました！」

茜からの報告で、騒動はエントランスで起こっている事が分かった。仁と亜矢、そして宗吾の3人は出来る限り急いでエントランスへと向かった。

3人がエントランスに到着すると、そこでは警官隊とS・B・C・Tの隊員が共同でアントファアツジと激しい銃撃戦を繰り広げていた。

「撃てッ！ 撃ち続けろッ！」

「負傷者は下がらせるんだ！」

相手が下級の兵隊ファツジだからか、普通の警官隊やS・B・C・Tの装備でもなんとか対抗できている。が、やはり奇襲に近い形で襲撃されたからか警察側の被害が大きい。広々としたエントランスは荒れに荒れ、警官が何人も入り口近くに倒れている。

その光景に仁は眉間に皺を寄せ、亜矢は男女問わず倒れて動かない警官の姿に目を伏せ、宗吾は拳を握り締めた。

通常の装備で奮闘する警官達を救うべく、3人は仮面ライダーに変身する。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

仁と亜矢はデйнаドライバーを装着し、仁はバツファローとヒューマンのベクターカートリッジを、亜矢はキャットベクターカートリッジをアダプトキャットに装着してドライバーに装着した。

一方、宗吾も自分のライダーシステムを用意する。単眼レンズが付いたドライバー『スコップドライバー』を腰に装着し、右腰のホルダーから長方形のプレート『キープレート』を取り出した。

「変身！」

〈Open the door〉

仁と亜矢がレセプタースロットルを引いてデйнаとルーナに変身する横で、宗吾はキープレートをドライバーの右側から装填し、ドライバー左の円形のハンドルを回した。

〈Access〉

「変身ッ！」

〈In focus〉

2人がデйнаとダイナに変身する横で、宗吾が仮面ライダースコップに変身する。バ

ルト中央のレンズ『アイピース』からスコープの姿が投影され、それが宗吾の姿にオーバースラップされるとその瞬間変身が完了していた。

3人は変身が完了すると、警官隊の前に出てアントファッジと戦い始める。デイナは拳を、ルーナはリプレッサーショットを構えた。

そしてスコープは再び右腰のプレートホルダーから一枚のプレートを取り出し、先程変身する時に装填したプレートと交換してハンドルを回す。

〈Y・Rifle Starting〉

スコープがハンドルを回すと変身する時と同じ要領でアイピースから一丁のライフル『ガンマライフル』が生成された。

各々戦闘態勢を整えると、3人のライダーが戦線に加わった。

警官隊相手には優勢だったアントファッジ達も、仮面ライダー3人相手には殆ど無力に等しかった。デイナの徒手空拳で、ルーナの2丁拳銃で、そしてスコープのライフルによる射撃で次々とアントファッジが倒されていく。

物の数分でエントランスに展開していたアントファッジの部隊は全滅し、そして倒されたアントファッジは隠蔽処置で焼け死んでいく。無事な警官の何人かが消火器で火を消して助けようとしているが、彼らの行動も空しく襲撃を掛けてきたアントファッジは全員が消し炭になってしまった。

ともあれすべてのアントファツジを倒し、一先ず安堵する3人のライダー。だがこれで終わりとは思っていない。態々警視庁に襲撃を掛けてくるという事は、こいつらの他に強力なファツジを用意している筈だ。

その確信を持ってデイナが周囲を警戒すると、突然ルーナが何かに首を絞められた。

「うぐっ!!? な、何——!?!」

「亜矢さん?」

突然苦しそうな声を上げるルーナだったが、デイナとスコープには何も見えない。

だが彼女の身に何か異変が起こっている事は確かなので、デイナが彼女を助けようと近付くと次の瞬間彼女は見えない何かに引つ張られて外へと引き摺られていった。

「亜矢さん!!」

「ツ!!? 待てツ!」

慌ててルーナを追い掛けようとするデイナだったが、それを妨害するように無数の針が飛んできた事に気付いたスコープが彼の肩を掴んで引き留めた。

寸でこのところで足を止めたデイナの足元に、無数の黒い針が突き刺さり爆発する。

ルーナはその爆煙に紛れて何処かへと連れ去られ、代わりに2人の前にはシーアーチンファツジが立ちはだかった。

「お前……前に大学で会ったな?」

「覚えていたか、仮面ライダーデイナ。そしてそちらは初めましてだな、警察の仮面ライダー？」

「スコープだ。俺はお前を知っているがな。何度か部下が世話になった」

まだスコープを手に入れる前に何度か相對した事のあるスコープが、怒りを押し殺してシーアーチンファツジに返す。

2人の因縁を無視して、デイナはルーナを連れ去った相手をシーアーチンファツジに訊ねた。

「亜矢さんを連れてったのは誰？」

「同僚のシトシンだ。あいつは粗暴だからな。弱い者を甚振る事を好む」

シーアーチンファツジの言葉に、デイナは拳を握り締める。下衆の相手をルーナがする事になった事に、彼の心中は穏やかではいらなかった。

だが彼はその気持ちに静かに蓋をした。今のルーナには真矢と言う頼もしい味方が居る。あの2人が力を合わせれば、下衆の1人や2人敵ではない。彼はそう信じていた。

だからこそ、今彼は自分出来る事に最大限注力しようと荒ぶる心を鎮めた。

「権藤さん。こいつさつさと倒すよ」

「分かっている。こいつとは何度か戦ってきた。油断するな」

「あうっ!？」

「ダイナとスコープがシーアーチンフアツジver. 2と戦闘を始めた頃、ルーナは警視庁の向かいにあるビルの屋上に連れ去られていた。

首に巻き付いた何かが唐突に外れ、乱暴に屋上に放られて受け身も取れずに倒れるルーナ。

しかし彼女は即座に体勢を立て直し立ち上がると、未だ姿を見せない敵を警戒しリップレツサーショットを左右別々の方向に向けて警戒した。

（姿が見えない……何処？）

敵の姿が見えない事に、言い知れぬ恐怖に近い感情を抱くルーナだったが、そんな彼女の正面の空間が突然揺らいだ。

【亜矢、正面!】

「ッ!？」

一早く異変に気付いた真矢が警告を発した次の瞬間、ルーナが行動に起こすよりも先に姿を現したフロッグファッジ ver. 2 が彼女の首を手で掴んだ。

「うぐつ?!」

「いよう! 女の仮面ライダー! 初めましてだなあ?」

「あ、あなたは——!?!」

凄まじい力で首を絞められ、ルーナは呼吸が出来ない事に苦しみながら何者かを訊ねた。

苦しみながらも気丈にしようとする彼女に、フロッグファッジは舌なめずりをしながら答えた。

「俺はシトシンンってんだ。精々いい声で泣いてくれよ、仮面ライダー!」

「うあつ!?!」

首を振り回されて放り投げられるルーナは、屋上の地面に叩き付けられるが今度は即座に立ち上がりリプレッサーショットを向け引き金を引く。

だが彼女が銃口を向けた時、そこには既にフロッグファッジの姿は無くなっていた。

「ツ!?! また——!」

再び姿を消したフロッグファッジに、ルーナは周囲を警戒する。

下からはダイナ・スコープとシーアークンファッジが戦う音が聞こえてくる。ルーナ

はそちらを気にしながら、周囲の異変を余さず捉えようと集中する。

だが彼女の努力も空しく、背後から迫っていたフロッグファツジの爪が彼女の背を切り裂いた。

「きゃあつ!？」

【亜矢つ!?!】

「くっ!?!」

背中を切り裂かれながら、体勢を立て直し攻撃された方に向け銃撃するルーナだったが銃弾は何もない空間を通り過ぎ屋上の入り口のドアに穴を穿つだけで終わった。

攻撃が無意味に終わった事に歯噛みしつつ再び周囲を警戒するルーナを、嘲笑うかのように再びフロッグファツジの攻撃が襲い掛かる。

今度は何と正面からの攻撃。胸元を思いつきり切り裂かれ、激しい痛みがルーナを襲う。

「あああああああつ?!」

「ヒヤハアツ! いい声で泣くじゃねえか! オラ、まだまだ行くぞ!!」

【亜矢、代わって!】

追撃を掛けようとしてくるフロッグファツジに対し、ルーナは主導権を真矢に譲り対抗した。振り下ろされる爪を真矢のルーナは片腕で防ぎ、至近距離からの銃撃をお見舞

いする。

「うおっ!?!」

「舐めないでよね!」

そこからルーナが反撃した。ルーナはとにかく相手を逃がすまいと、蹴りと銃のグリップによる殴打、そして至近距離からの銃撃でフロッグファッジを釘付けにした。

しかし彼女に出来た反撃はそこまでであった。

「ハアツ!」

ルーナがここで勝負を決めようとフロッグファッジの首筋に蹴りを叩き込んだ瞬間、首の近くにあるイボから粘性のある液体が飛びルーナの複眼に掛かった。

瞬間、彼女の目を灼熱の痛みが襲った。

「あああああああつ?!」

【うああああつ?! ま、真矢ツ!?!】

痛みに思わず絶叫するルーナを、フロッグファッジが悠々と眺めながら口を開いた。「どうだ、俺特性の毒液の味は?」

フロッグファッジが嗤いながら言う前で、ルーナは痛みに悲鳴を上げて蹲る。

「ひっひっひっ! 舐めるなだ? 舐めるに決まってるじゃねえか! お前みたいな旨

そうなやつをよお!」

変身した状態なので、見た目ほどルーナは危険な状態では無いだろう。変身を解除すれば、少しの間は視界に異常を感じるだろうがそれもすぐに治る筈だ。

だが今視界が潰されているのは非常にまずい。何しろ敵に好き放題去れることになるのだから。

「ハッハアツ!!」

フロッグファツジは何も出来なくなったルーナを、敢えて致命傷にならない程度に攻撃する。

「ああつ?! っ、このつ?! ぐうつ?!」

見えない相手からの攻撃を、ルーナは出鱈目な攻撃で迎え撃つがそれは意味を成さない。

徐に足を引つ掛けられ、仰向けに倒されたところでルーナの腹をフロッグファツジが踏みつけた。そして身動きが取れなくなった彼女を、フロッグファツジは両手の爪で滅多切りにした。

「あつ?! うあつ?! や、め……ああツ?!」

徹底的に攻撃され続けて全身傷だらけにされ、動けなくなったルーナをフロッグファツジの舌が全身を締め付ける。

「うあ、あ……ああ——!?!」

猛烈な力で締め付けられ、徐々にルーナの意識が薄れていく。

あと一步で意識を手放しそうになった瞬間、ルーナは内面に引つ込んでいた亜矢の意識も手伝って渾身の力を振り絞って右腕だけを拘束から引き抜き、自身を締め付ける舌を至近距離から撃ち抜いた。

「ぎあああああつ?!」

流石にこれは効いたのか、フロッグファッジは思わず拘束を解きルーナから距離を取る。

拘束を解かれたルーナは何か一息つくが、それでも満身創痍である事に変わりはない。しかも未だ視界は塞がれているというおまけつき。傍から見ても彼女に勝機は見当たらなかった。

「はあ……はあ……はあ……」

【真矢……う、大丈夫?】

「は、はは……何とかね」

亜矢が真矢に問い掛けると、真矢は弱々しい声で答えた。感覚を共有しているので肉体的に辛いのお互い様。今聞いたのは精神的な話だ。

心はまだ折れていないが、しかし肉体的には立っているのもやつとだ。事実、もうリプレッサーショットを狙った場所に撃つ事も難しい。恐らく今彼女に出来る事は、ノッ

クアウトクラッシュを一発お見舞いする事だけだろう。

だが目が見えない中で、それは絶望的と言わざるを得ない。真矢はどうすればこの状況を打開できるかと必死に頭を働かせた。

誰が見ても打倒は困難と言わざるを得ない状況の、解決策を見出したのは亜矢の方だった。

「真矢、私を信じてくれる？」

「(亜矢?)」

「私はあのファッジを見つける事に全力を出すから、真矢には私が言った方向を攻撃して欲しいの。出来る？」

感覚を共有しているので、亜矢にだって目は見えない。彼女は視覚以外の聴覚や地面から伝わる僅かな振動で敵の位置を把握し、その方向を真矢に攻撃して欲しいと言っているのだ。

謂わば二人羽織りで必殺の一撃を敵に叩き込むと言っているのである。しかもチャンスは一回のみ。

常人であれば無謀としか言い様の無い策。しかし真矢はこれに乗った。

「(勿論よ。あいつに私達の力、見せてやろうじゃない)」

真矢は亜矢の提案を受け入れると、両手に持ったリプレッサーショットを落とした。

どの道これからやる事には邪魔だし、敢えて銃を落とす事でこちらがもう反撃できないと相手に思わせる事を狙っていた。

その狙いは的中した。フロッグファッジはルーナが立ち上がりながらも銃を落とし、もう反撃する力はないと判断。

それでも念には念を入れてと、背後からゆつくりと近付いた。

全身が粘液で濡れたフロッグファッジは歩く度にペタペタと音がする。神経を集中させた亜矢はその音を聞き、僅かな振動と合わせてフロッグファッジの正確な場所を特定していた。

【真矢、敵は私達の後ろから近付いて来てる】

「了解……タイミングは任せるわ」

ルーナはフロッグファッジに気付かれないように慎重にレセプタースロットルに手を掛けた。

そして遂にルーナの背後にフロッグファッジが立ち、その爪で彼女の背を切り裂き自身の勝利で幕を閉じようとした。

瞬間——

【真矢、今！ 敵は真後ろ、6時の方角!!】

「ッ!!」

〈A T P B u r s t〉

「ハアアツ!!」

居合抜きの様な後ろ上段回し蹴りがフロググファツジの頭を蹴り抜いた。フロググファツジはこのタイミングで攻撃されると思っていたのかもしれないのか、思いつき蹴り飛ばされ屋上のフェンスを突き破って下に落下していった。

「何だとおおおおっ?!」

フロググファツジは訳が分からないと言う声を上げながら落下していく。決して高いとは言えないビルだ。変異したままならここから落ちた程度で死にはしないだろう。

とは言え、渾身の必殺技を喰らってただでは済まない筈だ。少なくともこれ以上の追撃は無いとみて良い。

ルーナはフロググファツジの気配がビルの屋上から消えた事に安堵すると、体力に限界が来たのかその場に崩れ落ち仰向けに倒れた。それと同時に変身が解除される。

「はあ……はあ……亜矢、お疲れ。見事なナビだったわ」

【ふ、ふ……真矢の方こそ】

真矢は疲れた体に鞭打って周囲を見る。視界はまだ大分ぼやけているが、それでも徐々に視界が戻ってきているのを感じる。この分ならあと数分か十数分で視力は元通りになるだろう。

だが体力の方は限界だった。意識に反して瞼が閉じようとしている。

【真矢、せめて教授に私達がここに居る事は伝えておこう】

「そうね。このままだと私達、なかなか見つけてもらえないかもしれないし」

亜矢の意見に同意し、真矢は震える手で携帯を取り出し電話を掛けた。視界は未だぼやけているので電話帳に表示された名前も碌に見ることは出来ないが、何処に誰の番号があるかは覚えている。

真矢が電話を掛けると、程なくして白上教授が出た。

『もしもし、双星君か？ 今どこに!?!』

「警視庁の真正面にあるビルの屋上です。取り合えず無事なんで、慌てずに回収に来てください」

伝えたい事を伝え終わると、真矢は一方的に通話を切った。そこが彼女の限界で、真矢の意識は亜矢共々闇へと落ちていった。

意識を失う直前、2人は最後まで仁の事を想い続けていた。

一方その頃、デイナとスコープの2人はシーアーチンファツジを相手に手をこまねいていた。

その最大の理由は――

「ふっ」

デイナがシーアーチンファツジに拳を叩き込むが、その瞬間シーアーチンファツジは全身の棘を伸ばした。伸びた棘がデイナの拳に突き刺さり、逆に彼にダメージが入る。

「ぐっ!? いっつつつ……」

「離れる門守君!」

届いた声にデイナが距離を取ると、スコープがガンマライフルでシーアーチンファツジの全身の棘を撃ち抜いていく。棘はあっさりとは撃ち抜かれ折れていくが、折れた先から次々と生えてきた。

そして新たに生えた棘を、シーアーチンファツジが自分で抜いて暗器か何かの様に投擲してくる。投擲された棘は、何処かに刺さると爆発するので回避しなければならぬ。

これが2人がシーアーチンファツジを攻めあぐねる理由であった。

「くそお、面倒な奴だな。攻撃が効いてない訳じゃないんだらうが……」

全身が棘に覆われている為接近戦は危険だし、距離を取っても爆発する棘を投擲してくる。しかも棘が無くても奴の甲殻は銃弾を弾くほど硬い。一見すると攻守において隙の無い相手だ。

そんな奴を相手に、デイナは内心で焦りを感じつつ冷静に相手を見極めていた。

ここまでで相手がウニの能力を持ったファッジである事は分かっている。であれば、弱点と言えるのは――

「権藤さん、俺があいつの注意を引くからアイツの背中を攻撃してくれる？」

「何、背中？」

「背中はどこか。多分アイツ、そこが一番脆いだろうから」

幾らウニが全身を棘で覆われているとは言え、口と肛門の周りだけは穴が空いているものだ。特に肛門の周りは、精子や卵子を放出する為の生殖孔が空いている。全身を棘で覆われた中で、そこだけは確実に脆い筈だ。

見るとシーアーチンファッジの顔には口らしき部位がある。口があるなら、肛門もある筈だ。先程までの攻防の中で、デイナは尻にも攻撃を仕掛けたがそこも棘で防御されていた事は確認している。

人間で言う尻に肛門が無いという事は、腹か背中どちらか。スコープが先程から腹にも攻撃しているが堪えた様子が無いのを見ると、考えられるのは背中は何処かしかな

かった。

「頼んでいい?」

「よし、任せろ!」

スコープはデイナの提案に頷くと、右腰のホルダーから変身時に使用したプレート『パーソナルプレート』を取り出し裏返すと『ガンマライフルプレート』と交換しバックルに装填した。

〈Recognition〉

電子音が響く中、デイナはシーアーンファツジに攻撃を仕掛ける。殴り掛かると見せかけ、前転して背後を取り背中に蹴りを入れようとした。

させるかとシーアーンファツジは素早く背後を振り返り、棘を伸ばした拳でデイナに攻撃する。それをデイナは紙一重で回避していた。

デイナとシーアーンファツジが戦う中、スコープは右足にエネルギーをチャージしながら狙いを定めていた。デイナの言う事を信じるなら、背中の何処かに防御の弱い所がある筈。

「ツッ、あれかッ!」

果たして目的の部位は見つかった。背中の一点に、明らかにつむじの様に棘に流れがある所がある。あれがデイナの言う弱点だ。

「ハアアアッ！」

スコープは必殺技の『エンドスマッシュ』を放つ。デイナの相手に意識を割いていたシーアーチンファツジはそれに気付くのが遅れ、スコープの必殺の一撃を弱点部位に喰らってしまった。

「何、ぐあああああつ?!」

スコープの必殺技を喰らったシーアーチンファツジは大きく蹴り飛ばされ、地面に激突しその場で悶絶していた。

シーアーチンファツジはギリギリで耐えたのか、自力で立ち上がり変異も解除されな
い。だがこの戦いの勝敗はもう明らかだった。

「動くな！ 貴様を逮捕する！」

「くう……」

スコープはガンマライフルを構えシーアーチンファツジを牽制する。逃げようにも
デイナも居る現状、万事休すとしか言い様の無い状況にシーアーチンファツジの脳裏に
諦めの文字が浮かんだその時、両者の間に黒い何かが撃ち込まれたかと思うとそれが一
気に広がり辺りを黒い煙が覆いつくした。

「何だこれは?!」

「煙幕?!」

デйнаとスコープが突然の煙幕に警戒していると、煙幕の向こうではシーアーチンフアツジがスクイッドフアツジにより回収されていた。

「撤退するぞ、グアニン」

「アデニン？ 助かった」

「気にするな。シトシンも回収済みだ。お前も退け」

「分かった……」

スクイッドフアツジの言葉に、シーアーチンフアツジはやや項垂れながら答えその場を離れた。今回の攻撃は失敗だと、その事に暗鬱な思いを抱きながら。

そして煙幕が晴れた先にシーアーチンフアツジが居ないのを見て、デйнаとスコープはまんまと逃げられた事を悟った。

「くそっ!? 逃がしたか」

「まあ仕方ないよ。それより亜矢さんは……」

デйнаが周囲を見渡すと、向かいのビルの入り口から担架に乗せられた亜矢が運び出されてきたのを目にした。

それを見た瞬間彼は変身を解除しながら彼女に駆け寄った。

「亜矢さん!?! 大丈夫?」

「落ち着きなさい、門守君。双星君なら大丈夫だ。少し視力に異常があるようだが、それ

も直に治る。心配はいらないよ」

白上教授にそう言われ少しは安堵する仁だったが、その顔にはまだ不安が残っている。

そのまま彼は亜矢と共に救急車に乗り、病院へと向かった。

その道中、亜矢は目を覚ました。

「ん……ん……は？」

「亜矢さん、大丈夫？」

「仁君……？」

「ここは救急車の中だよ。気分はどう？」

仁の言葉に、亜矢は自分が何処に居るのかを理解した。そして大分元通りになった目で仁の顔を見る。まだ彼の顔が少しぼやけて見えるが、それでも彼の顔が見れて亜矢の口から安堵の溜め息が零れた。

実を言うと、もう彼の顔を見る事も叶わなくなるのではないかと少し不安だったのだ。

「亜矢さん？」

「え？ あ、ああ、気分ですか。大丈夫です。思ってたより良いくらいですね。まだちよっと目が霞んでますけど……」

「それならその内治るみたいだよ。安心して」

うっかり仁の顔に見惚れていた亜矢は、それを悟られないように慌てて答えた。

亜矢からの答えに、仁は彼女を安心させるように優しい声で話し掛ける。

「そうですか、それを聞いて安心しました」

仁からの答えに別の意味で安堵すると、唐突に真矢が出てきた。

「あ、勘違いしないで欲しいんだけど、私達負けた訳じゃないからね。ちゃんと敵倒してから気を失っただけだからね？」

真矢の答えに仁は驚いた様子を見せた。

チミンとのやり取りから、シーアーチンファツジ即ちグアニンが敵の幹部である事は想像出来た。そのグアニンの同僚と言う事は、シトシンも幹部であるという事は容易に察せられた。

亜矢と真矢は、ルーナだけでその幹部の1人を退けたのである。デイナが前回チミンを1人で退ける事が出来たのは、エレキテルの能力があつてこそそのもの。彼女は一切の強化無しに幹部を退けたのだから、仁からすれば十分驚愕するに値した。

「ホントに？ 凄いじゃん」

「私も亜矢も頑張ったんだから。という事で、何かご褒美欲しいな〜？」

「ま、真矢？ 何言ってるの？」

突然の真矢の言葉に亜矢が狼狽える。こう言う時、真矢が何を言い出すかは彼女でも分らないのだ。

そんな亜矢の動揺を他所に、仁は真矢からの言葉に首を傾げた。

「ん、何か欲しい物でもあるの?」

今回は本当に亜矢と真矢は頑張った。自分に出来る限りの労いであれば喜んで聞くとうと仁が先を促した。

「今度買いい物に付き合つて」

「ん? そんなので良いの?」

「それが良いの」

「良いよ。それ位ならお安い御用」

「それじゃ、今度の休みの日にね」

仁は真矢からの頼みを快く聞き受けたが、分らないのは亜矢の方であった。亜矢は真矢の意図が読めなかった。

【真矢? 何考えてるの?】

「(何って、分らない? デートよデート。仁君とのデ・ー・ト。このデートで仁君と一気に距離を近付けるのよ)」

【ちよ、えっ!?!】

思いもよらない真矢の考えに、動揺を隠せない亜矢だったが彼女の意識が内面に引込んでいく為表面上は変化が無い。

仁に亜矢の動揺を気付かせないまま、真矢はそのまま仁との雑談を続ける。

最初こそ内面で動揺して騒いでいた亜矢だったが、次第に仁とのデートの日を心待ちにし当日着ていく服を何にするかなどを楽しみながら考えたりするのであった。

第23話：告げられる想い

週末の土曜日、亜矢は鏡に映った自分をみてウンウン唸っていた。

「ん〜……真矢、どう思う？」

「良いと思うわよ？　問題なし。寧ろ良すぎて仁君以外の男の視線を集めちゃうんじゃない？」

「揶揄わないで」

今の亜矢の恰好はこれまでで一番気合の入ったものとなっていた。

白いブラウスの上にベージュ色のカーディガンを羽織り、下は赤いロングスカート。くるりと回ってみせるとカーディガンとスカートの裾がふわりと舞い上がる。

亜矢はおかしなところが無いかと心配しているが、真矢に言わせれば素材が良いのだから余程の恰好をしなければ早々悪くなる事は無いだろうと考えていた。

尤もだからと言っておぎなりな恰好をしようなどと言う気は真矢にもさらさらなかった。亜矢の心配は分からなくも無かったが。

亜矢が矢鱈気合入っているのは、単純に仁とのデートだからではない。彼女は今日、仁に告白するつもりなのだ。

仁に自分の気持ち、好きと言う気持ちを伝える。その事を考えると彼が居ないにもかかわらず顔が赤くなり、心臓が激しく脈打つ。

「う〜〜……」

【まくだ煮え切らないの？ いい加減覚悟決めちやいなさいよ】

「で、でも……」

【そんなんじや本当に私が仁君に先に告つちやうわよ？】

真矢の言葉に、亜矢が顔を強張らせる。

と言うのも、亜矢は先日真矢から聞いたのだ。真矢も一人の人格として仁の事を愛している。亜矢があまりにも煮え切らないようであれば、自分が隙を見て仁に先に告白してしまうと告げてきたのだ。

亜矢には分かった。真矢の仁を愛していると言う言葉が嘘偽りのない事実であるという事が。このまま亜矢がハッキリしないのであれば、真矢は本当に仁に告白するだろう事が亜矢には確信出来ていた。

だからこそ、今日は何時も以上に気合を入れているのだ。今日と言う今日は仁に告白してみせると。なけなしの勇気を振り絞り、仁に気持ちを伝えるのだ。

「すう……はあ……よし！ 今日こそ、仁君に告白してみせる！」

【その意気よ。大丈夫、自信を持って】

亜矢が気合を入れ直し、真矢が彼女にエールを送る。

その瞬間、亜矢の携帯から着信音が鳴った。ディスプレイに表示されているのは仁の名前だ。

「はい、もしもし?」

『あ、亜矢さん? お待たせ。今マンションの下に居るよ』

「はい、今行きます!」

仁が既に下に来ていると分かり、亜矢は急いで片付けハンドバッグを手に家を出た。因みに待ち合わせの時間にはまだ早い。今日は仁の方が早くに到着したようだ。

亜矢がエレベーターで下りてマンションから出ると、すぐそこには仁が待っていた。彼は亜矢の姿を見るなり手を上げて挨拶してきた。

「おはよう。ゴメンね、急かすような事しちゃって」

「おはようございませす! 気にしないでください。今日お誘いしたのは私の方ですし」

「正確には真矢さんだけどね」

「そうでした」

互いに挨拶を交わすと同時に、仁は早く来すぎた事を、亜矢は呼び出したのに出遅れた事を謝り合う。そしてその原因が真矢であると言う結論に至ると、仁は薄く、亜矢は噴き出すように笑った。

何が可笑しいと言う訳では無い。ただこうして、何気ない話をする事が無性に楽しかったのだ。

互いに一頻り笑い合うと、仁が亜矢に予備のヘルメットを渡し代わりに彼女からハンドバッグを受け取りトランスポゾンの収納スペースに収めた。そして自分もヘルメットを被ると、座席に跨り彼女に手を貸し跨らせた。

「それじゃ、ショッピングモールで良いかな？」

「はい、お願いします」

「ん」

亜矢が仁の腰に手を回してしっかりと抱き着いてきたのを確認すると、仁はバイクを走らせ一路ショッピングモールへと向かった。

今年の春先にワスプファッジの襲撃を受け、その余波で荒れに荒れた店内も今ではすっかり元通りになり、無事に営業を再開しているらしい。

思えばあそこで仁に選んでもらったスカートも、峰に力を認めさせる為とは言え破いてしまったし、何よりあそこで亜矢は仁への気持ちを自覚したのだからベンジとしては最適だ。

仁の背中で亜矢は改めて気合を入れ、真矢が内面からそんな彼女を優しく見守っていた。

走り去る仁と亜矢の乗るトランスポゾン。走り去る2人を、物陰からジッと見送る者が居た。

美香だ。彼女は亜矢が家を出た辺りで上から2人の様子を見つけており、バレないようになりてこつそり2人の様子を見守っていたのだ。

そして2人が走り去つていくと、内心のワクワクを微塵も隠さず物陰から出てきた。

「あれは間違いなくデートよね。これは面白い事になって来たわ！」

行き先と漏れ聞こえてきた会話から、2人がショッピングモールに行くと察した美香はタクシーを捕まえ2人の後についてショッピングモールへと向かつて行つた。

美香に後をつけられているとは露知らず、2人は春先にも足を運んだショッピングモールへと到着した。

以前仁と亜矢が2人で買い物に来た際は、ワスプファッジの襲撃を受け戦鬨の余波で少くない被害を齎してしまつた。だが今2人の目の前には、以前と変わらぬ賑やかさ

を取り戻したショッピングモールの姿があった。

その事に内心で安堵しつつ、仁は亜矢に引つ張られるようにしてモールに足を踏み入れる。とりあえずは当初の目的である、衣類を取り扱う階へと向かった。

ついこの間訪れた事もある筈なのに、妙な懐かしさを感じつつ仁と亜矢は店内へと入る。

店内に入るなり、亜矢は色々な服を眺めた。彼女も年頃の女性、この手の店に入ればテンションも上がろうと言うもの。

最初は自分で何を買うか悩んでいた亜矢だが、以前ここに仁と訪れた時の事を思い出してある考えが浮かんだ。

「あの、仁君が選んでくれますか？」

「ん？ 俺が？」

「つまりは亜矢を『仁君の色に染め上げて』って事ね」

「(その言い方は止めて!) はい。駄目……ですか？」

「いいけど……あんまり期待しないでね？」

この提案は予想外だったのか、少し驚いた様子を見せる仁。しかし直ぐに気を取り直すと、真剣な表情で亜矢に似合いそうな服を選別していく。

自分の為に仁が真剣に服を選んでくれている事に、亜矢はコツソリと嬉しそうな顔を

した。

仁が服を選んでくれるのを、亜矢が彼の後ろから待つ事数分。彼は幾つかの服を亜矢に手渡した。

「ん、この辺似合うと思うんだけどどうかな？」

「ありがとうございます！ 早速試着してみますね」

言うが早い、亜矢は試着室に入り仁が選んだ服に袖を通した。

最初に袖を通したのは、黒のボウタイブラウスに灰色のチュールスカートの組み合わせ。ゆらゆらと揺れるブラウスの紐がエレガントさを引き立て、チュールスカートが華やかさを演出してくれる。

次がシックな赤いワンピースと白いジャケット。ワンピースの方がノースリーブだったので一瞬抵抗を感じたが、直ぐにジャケットと組み合わせる事に気付き安堵した。袖を通して見ると、良い感じに動きやすい。

最後がアシンメトリークットのインナーに薄いブラウンのシアーシャツとブラウンのスラックスだ。袖を通すと薄い生地 of シアーシャツにノースリーブのアシンメトリークットのインナーが薄らと浮かび上がる。仁が選んだ中で一番セクシーなデザインだった。

「っ、これ、似合ってますか？」

「うん。亜矢さんの上品さが出てる。俺は好きだけど、嫌だった？」

「い、いえ!? 嫌なんかじゃ……」

服装自体はゆつたりとしていて、あまり体のラインが出ない。デザイン自体は亜矢好みのものだ。

とは言え、少し前の亜矢だったらこんな服は選ばなかっただろう。あまり生地の薄い服を着るとどうしても体のライン——特に豊かな胸元——が嫌でも異性の目を引き付ける。それを好まないが故に彼女は、肌の露出の少ない服装を好んだのだ。

だが今は少し違う。今は自分の魅力を存分に魅せたい相手が居る。その相手である仁が、少しでも亜矢の魅力的な姿を見たいと感じて選んでくれたのであれば、この服装も決して嫌では無かった。

「ど、どうですか?」

亜矢はもう一度仁の前でぐるりと回ってみた。ボトムスはともかく、トップスは薄くゆつたりしたデザインなので彼女が動くときふわりと裾が舞う。

その様子を見て、仁は満足そうに頷いた。

「うん。やっぱり似合ってる」

「あ、ありがとうございます……じゃ、次は私の番ね」

仁からの誉め言葉に、亜矢が嬉しさに顔を赤くしているとその隙を突いて真矢が表に

出てきた。真矢は素早く試着した衣服を脱いで元の服装に戻ると、仁が選んでくれた服を籠に入れ次の服を選び始めた。

「え、ちよ、真矢!?!」

「真矢さんも服選ぶの?」

「私だつて、好きな服装位あるもの。折角自由に表に出れるようになったんだし、これ位良いでしょ?」

「それは勿論構わないけど……」

亜矢が内面で首を縦に振ると、真矢は喜び勇んで服を選び始めた。仁が服の入った籠を真矢から受け取り、待つ事数分――

「ねえどうかな仁君? こんなのも良いと思わない?」

「ちよ、真矢ツ!?!」

試着室から出た真矢は、亜矢とは反対にかなり露出度の高い服装で現れた。白のニツトキヤミソールにデニムのホットパンツと言う、ある意味でオーソドックスな夏の服装。夏の定番の服装だが、スタイル抜群の亜矢が着るとその破壊力は抜群だ。秋冬に着る服に比べて薄い生地が、胸周りのボディラインをこれでもかと主張させている。

一歩外に出れば男性どころか女性の視線も釘付けにするだろう服装の真矢(亜矢)を、仁は顎に手を当てじつくりと眺めた。

「ふくん……真矢さんは亜矢さんと違ってアクティブな服装が好きなんだね」

「体を動かす事が好きだから。亜矢は嫌がるかもだけど、私はこれ位のが好みなの」

【うう……真矢。これ、恥ずかしい……】

瑞々しい太腿や腕の肌を惜しげも無く晒す服装に、内面の亜矢が消え入りそうな声を上げる。

亜矢には悪いと思わなくも無いが、真矢だつて立派な一つの人格。好きな味覚もあるし、好きな服装もある。前と違ってコソコソする必要は無いのだから、少しくらい自分の着たい服装をしたいと思うのは自然な事であつた。

それが分かつているから、亜矢も自分に優先権がある事を利用して真矢に服装を止めさせるような事はしない。この体は亜矢のものであり、同時に真矢のものでもあるのだから。

「で、どうかな仁君？ 似合ってる？」

「んん、そうだなあ……」

再び真矢に問い掛けられ、改めて真矢の服装をじっくり眺める仁。彼の視線が上下する度に、内面の亜矢は恥ずかしさで顔から火が出そうになる。

「どれだけそうしていたか、仁が視線を何往復かさせると徐に口を開いた。

「うん……これはこれで良いかもしれない。亜矢さんが普段着てるのが露出の少ないの

ばかりだったから、こういう服装が新鮮つてもあるかもだけど」

「仮に亜矢が自分からこういう恰好をしたとして、仁君はどう思う？」

「良いと思うよ。亜矢さんは絶対嫌がるだろうけど」

「そう、良かった。……………と言う訳で亜矢、ボタンタッチ！」

そう言つて真矢は自分から内面に引つ込んだ。押し出される形で表に出てきた亜矢は、肌を惜しげも無く晒す自分の恰好を仁に見られている事に顔を真っ赤にして試着室の中に引つ込んでしまった。

「…………ツ!! 真矢ツ!!」

「ええ? いいじゃない、仁君好きつて言つてくれたわけだし」

「帰りにキムチ買つて帰るからね!」

「えっ?! ちよっ?! それは幾らなんでも酷くないツ!」

真矢に文句を言い、彼女への制裁内容を告げながら亜矢は着替えた。最初は家を出る時に着ていた服装にしようかと思つていたが、どうせなら仁に選んでもらつた服のどれかにしようと考え直し、最後に試着した奴に着替え試着室から出た。

「ん? それ着たままにするの?」

「はい。折角ですから……」

「じゃ、お会計済ませちゃおうか」

会計を済ませ、2人はレディースファッションの店を出る。

店を出た仁がさて次はどうしようかと周囲に目を走らせると、亜矢が彼の手を引いた。

「さ、次は仁君の番ですよ」

「俺？」

「仁君、パーカーとジーンズばかりじゃないですか。偶には仁君もお洒落したいと思いませんか？」

「俺は………いや、そうだね。じゃあ俺も」

「はい！」

最初遠慮しようとしていた仁だが、何か感じるところがあったのか考えを改め自分も新しい服を買う事にした。

その事に亜矢が嬉しそうな顔をして、彼をメンズファッションショップへと引つ張っていく。

楽しそうにメンズのファッションショップに入っていく亜矢と、彼女に手を引かれる仁。

その2人の様子を、美香が物陰に隠れながら見守っていた。

「フフフッ！ 亜矢ってば楽しそう！」

友人が楽しそうにしているのを見て、美香も楽しくなる。何より、友の恋愛事情を見る事がこの上なく楽しかった。普段物静かな方の亜矢が、仁を相手にしている時に限って見せる澆漑とした表情。傍から見ると一目で恋していると分かる彼女が、彼に対してのみ見せる輝くような笑顔を見てると美香の方まで心が温かくなってきた。

今、美香の視線の先では仁が亜矢の手で色々な服を着させられている逆フアツションショーが行われていた。時々亜矢が変なテンションになったり、変な方向に向かつて何かを言っているのが気にはなるがそれ以上に亜矢と、仁までが何処か楽しそうにしているのを見ればそんな事どうでもよくなる。

「仁君、こんなのはどうですか？」

「んん、俺に似合うかな？」

「きつと大丈夫ですよ。ほら！」

亜矢に促され試着室に入る仁。程無くして着替えて出てきた仁の姿は、カジユアルなスーツ姿になっていた。普段パーカーとジーンズしか着ない彼の、レアな姿はそれだけで価値がある。

「うん、やっぱり！ 仁君こういう恰好も似合ってますよー！」

「そう？」

そしてそんな彼の姿を見て楽しそうに笑う亜矢の姿がまた、美香の心を和ませた。

「はあく……これが尊いつて奴なのねえ」

「ですね。ホント、見てて飽きない2人です」

「分かる分かる………つて、はい？」

「……え？」

出し抜けに横合いから聞こえてきた相槌に、美香は一瞬反応が遅れつつそちらを見た。

そこに居たのは、美香と同じく仁と亜矢の2人を出羽亀していた峰だった。彼女は偶然ここに買い物に来ていて、偶々仁と亜矢を見つけたから気になって後をつけてきたのだ。

そしてどんな偶然か、同じく2人を出羽亀している美香と出会ったのである。

美香と峰は互いに言葉も無く相手を見つめていたが、同時に仁と亜矢を見て再び互いに視線を合わせると固く握手した。言葉は無くとも、何か通じ合うものがあつたらしい。

そうこうしていると、仁の方も買う服が決まったらしく最初に着ていたパーカーとジーンズ姿から先程亜矢に選んでもらったカジュアルなスーツ姿に着替えたまま店を出た。互いにここに来た時とは異なる服に変わっているが、どちらも似合っている。寧ろ先程、レディースファッションショップを出た時は仁の方が普通過ぎる格好をしてい

た所為で変に浮いていたくらいだから今の方がちよどいい。

その後も2人はシヨツピングモール内の色々な店を見て回った。

アクセサリーショップでは仁が亜矢に指輪を嵌めようとして、その指が左手の薬指だったことに亜矢が激しく動揺し……

ゲームセンターではガンコンのシューティングゲームで、亜矢が仁以上のスコアを叩き出して珍しく仁が少し悔しそうな顔をしてみせ……

昼になり立ち寄ったレストランで、仁の頬に付いていたソースを隙を突いて表に出てきた真矢が指で掬い取って舐めて、内面の亜矢と軽い喧嘩状態になり、何が何だか分からないながらも仁がそれを宥めたりした。

2人とも今日と言う一日を存分に楽しみ、そして気付けば時刻は夕方。

休憩も兼ねて、2人はシヨツピングモール屋上のベンチに腰掛けていた。

「はあく、今日はちよつとはしやぎ過ぎちやいましたね」

「でも、楽しかったよ」

「そうですか？ 良かったです、それなら」

「……………くあ……………」

徐に仁が軽く欠伸をした。どうやら思っていた以上に疲れているらしい。

それを見て、内面で大人しくしていた真矢が囁いた。

「亜矢、仁君に膝枕してあげたら？」

「へっ!? いや、でも……」

「別にそんな恥ずかしがることないじゃない。それに、今日のデートの本当の目的を忘れたの？」

今日、真矢が仁をデートに誘った本当の目的は、亜矢から仁に告白させる事だ。デートはその為の心を温める準備に過ぎない。

「ここで仁君に膝枕してあげてさ、それで仁君のガードが緩んだところで一気に告白するのよ」

「(そ、そんなに上手く行くかな?)」

「大丈夫だって」

真矢から背中を押され、心落ち着けるべく軽く深呼吸すると、亜矢は意を決して仁に声を掛けた。

「じ、仁君……」

「ん？」

「疲れてるようでしたら、その……少し横になりますか? わ……私の膝、使っていいですから」

そう言つて亜矢は自分の膝をポンと叩いた。

仁は亜矢の顔と膝を交互に見て、数秒ほど何かを考えていたが次の瞬間ふらりと体を倒して亜矢の膝枕に頭を乗せた。

亜矢の膝枕に頭を乗せた仁は彼女の太腿を堪能するように目を瞑り、深く息を吐いた。まるで気難しい犬か猫が、全幅の信賴を置いている相手に無防備な姿を晒しているような姿に亜矢は頬を赤くしながら顔を綻ばせる。

亜矢はそのまま彼の頭を優しく撫で、労いの言葉を掛けた。

「何時もお疲れ様です」

「ん……ありがと……」

亜矢からの言葉に、仁は若干微睡みながら答えた。どうやら思っている以上に警戒心を緩めているらしい。

これはチャンスだ。真矢が内面からエールを送り、亜矢が覚悟を決め告白しようとした。

が、彼女が何かを言う前に仁が口を開いた。

「何時もありがと……」

「ッ！ 何が、ですか？」

「色々……亜矢さんが傍に居てくれて、俺、凄く助かってる。あ、料理作ってくれたりする事じゃないよ？ それも助かってるけど、それとは別」

微睡んでいるからか、彼の声はややほわほわしている。だが彼の口から紡がれる言葉は、何時も以上に強く亜矢の心に響いた。

「何て言うか……亜矢さんが一緒に居てくれると、何でも出来るって気になるんだ。傍に居てくれるだけで安心できるって言うか……」

そこで仁は目を開けて亜矢の顔を見た。夕日に照らされて分かり辛いのが、今亜矢の顔は今までにならない位赤く染まっている。

しかし若干微睡んでいる仁はそれに気付く事なく、彼女に向けて力の抜けたふにやりとした笑みを向けた。

「だから……ありがと」

世辞でも何でもない感謝の言葉と、完全に警戒心を解いた無邪気な笑み。それが今度は亜矢の心の籠を外した。

「あの……仁君！」

「ん？ 何？」

「私……私、仁君の事が——」

いよいよ亜矢が仁に対して告白しようとした。

その時、近くから聞き覚えのあるアラームが鳴り響いた。他では絶対聞く事のないそのアラームが耳に入った瞬間、仁はガバリと起き上がり亜矢と揃って音のする方を見

た。

2人の視線の先では、ゴミ箱の陰でアラームを鳴らしたタブレットに峰と美香が慌てる様子が映った。彼女達は仁達と視線が合うと、物凄く申し訳なさそうな顔をして出てくる。

「あ、あはは……ゴメン2人とも、お仕事です」

「せ、先輩に篠崎さん——!?!」

「……何時から見てたの?」

「えっと、ゴメン。私は2人がマンションから移動した時から……」

「私はここで2人を見てそのまま……」

つまりは今日の仁とのデートはほぼ全て見られていたという事で、その事実を知った亜矢は顔から火が噴き出そうなほど恥ずかしくなり、堪らず今度は仁の膝に顔を埋めた。

仁はそんな亜矢の背を撫でながら、何時もより3割増しの冷めた目を2人に向けた。

その視線に居た堪れなくなり、大人しく2人は彼らに頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「……ま、詳しい話は後でって事で。ファッジ何とかするんで、荷物お願いします。亜矢さん、行ける?」

「うう……何とか」

「んじや、ちやつちやと終わらせようか」

仁に促され、亜矢はシヨツピングモールから出ると2人でトランスポゾンに乗り
ファツジが出現した現場へと向かって行った。

ファツジが現れたのはシヨツピングモールからやや遠くはなれた商店街。

時間帯的には多くの買い物客で賑わうそこは、暴れるファツジにより破壊されてい
た。

そのファツジに、宗吾が変身するスコープと彼が率いるS・B・C・Tが攻撃を仕
掛けている。

「困え！ 困いつつ戦力を集中させろ！」

スコープがガンマライフルを構え、他の隊員は彼の指示に従い徐々にファツジの周辺
を取り囲んでいる。

「あ、もう権藤さん達が来てたみたいだね」

「ツ!? 君達、ここは危険だ! 早く逃げなさい!」

「ちよつと待つて。これこれ——」

「そ、それは……そうか、君達だったか」

そこへ仁と亜矢が辿り着いた。最初2人が来た時、S・B・C・T。隊員は何も知らない民間人が来たのかと2人を追い返そうとした。だが仁がデイナドライバーを見せると相手が誰だか分かり、隊員は2人をスコープの所へと連れて行った。

「隊長、門守 仁さんと双星 亜矢さんです」

「お待たせ。でももしかして俺ら必要なかった?」

「いや、来てくれて助かった。何分あのファツジなかなかしぶとい上に変な奴でな」

「どう言う事です?」

スコープの言葉に亜矢が首を傾げてファツジの方を見た。

それは確かに奇妙なファツジだった。

両手の鍔にゴツゴツとした甲殻など、一見すると蟹としか形容のしようがない見た目をしている。が、その背にはイソギンチャクのような物が一体化しており触手を伸ばしている。

そのファツジに、周囲からS・B・C・T。隊員の銃撃が突き刺さる。スコープの開

発に合わせて開発された対ファッジ用新型弾頭による銃撃は、ファッジの甲殻を削り取り触手を断ち切っていく。

このまま行けば倒せるのでは？ 仁と亜矢がそう思った矢先、ファッジの腹部がひび割れたかと思うと次の瞬間、その腹部から全く同じ姿のファッジが飛び出てきた。まるで新品同然、傷一つない姿で出てくると、比較的近くに居た隊員に向け突撃していく。

「き、来たッ!？」

「回避いいッ!？」

突撃してきたファッジを、ギリギリで回避する隊員達。だがあれは運が良かった方で、既に同じようなやり取りの中で攻撃を喰らい死傷した隊員が何名か出ていた。

「あれは……」

「どれだけ攻撃しても、ああやって再生されるんだ。一体どうなってるんだ？」

喰るスコープに対し、仁はファッジをジッと観察している。

そして気付いた。あのファッジは両腕にそれぞれベクターブレスを装着している事に。

「そうか……あれただの蟹じゃないや。蟹とヒドラを混ぜてるんだ」

「混ぜてる?？」

「あいつ、両腕にベクターカートリッジを装填するブレスレット付けてる。二種類のベ

クターカートリッジを使ってるんだ。使ってるのは蟹と、もう一つは多分ヒドラ」
「ヒドラって……あの無脊椎動物の？」

蟹は再生能力が高く、敵の目を欺く為足を自切して逃れ脱皮と共に再生する事が出来る。

ただし脱皮できる回数には限界があるので、無限に再生できると言う訳では無い。そこを補うのが、蟹を遥かに超える高い再生能力を持つヒドラなのだろう。二種類の遺伝子を混ぜる事で、脱皮して無限に再生できる蟹とヒドラによるキメラファッジなのだろう。

「ちよつと待つてください。でも確かベクターカートリッジって二つ以上同時に使用するのには難しかったんじゃない？」

健の時は偶々上手く行っただけで、それ以外の被検体は体が耐え切れなかったと言うのはチミンの言葉だ。その言葉を信じるなら、あのファッジが二種類のベクターカートリッジを使用しているのはおかしい。

「ベクタープレスを使ってるからってのもあるんだろうけど……もしかしたらあのファッジにされてる人、体弄られてるのかも」

仁の予想は概ね当たっていた。

あのファッジは傘木社が拉致した一般人を被検体とし、チミンで得たデータを基に投

薬で肉体改造を施しベクタープレスを二つ使用する事で作り出す事に成功した、比較的安定したキメラファッジなのだ。

傘木社のやり方を分かっている亜矢にスコープは、それが容易に想像できたので顔を顰める。

「ひでえ事しやがる」

「何とかならないんでしようか?」

「普通に戦うならともかく、あの再生能力は……………ん?」

戦闘力自体は大した事ないが、再生されると面倒だ。あれを何とか封じることが出来ないかと仁が観察を続けると、キメラファッジが背中の中の触手を忙しなく動かしているのが見えた。何をしているのかと思えば、先程隊員に突撃してそのまま突っ込んでいった店舗の魚屋の商品を手当たり次第に触手で掴んで背中の中のヒドラの口に突っ込んでいた。

どうやら再生には相応のエネルギーが必要らしい。そしてそのエネルギーを、商店街の商品で補っているのだ。

となれば、攻略法は一つしかない。

「権藤さん。部下の人達に言っておいてアイツ他の店に近付けないで。あいつ飯食ってそのエネルギーで再生してる」

「なるほど、そう言う絡繰りだったか。よし……………全員、奴に飯を食わせるな! 店舗から

引き剥がして攻撃を続行しろ！」

「店舗から引き剥がすのは俺達でやるよ。行こう、亜矢さん」

「はい！」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

デйнаとルーナに変身した2人は、未だ鮮魚店の商品を食っているキメラファアツジに攻撃を仕掛けた。デйнаの蹴りが食事を中断させ、ルーナの銃撃がキメラファアツジを鮮魚店から引き剥がした。

その瞬間、S・B・C・T 隊員からの苛烈な銃撃がキメラファアツジに襲い掛かる。正に銃弾の嵐が瞬く間にキメラファアツジをボロボロにしていき、一回目の脱皮へと誘った。

脱皮をした事でエネルギーを消耗したキメラファアツジは、食事でエネルギーを補充しようとするがデйнаとルーナがそれを許さない。近くの食料品を取り扱う店舗にキメラファアツジが近付こうとすれば、2人がそれを全力で阻んだ。

エネルギーが補充できなければ、再生できないし動きも鈍る。キメラファアツジは一気

に劣勢に立たされた。

その様子をグアニンが遠くから双眼鏡で眺めている。

「……やはり急場凌ぎの改造ではあれが限界か」

「回収に向かいますか？」

「必要無いだろう。ベクタープレスには隠蔽装置が取り付けてあるし、中身は攫った被検体だ。叩いて出る埃は無い」

よしんば隠蔽装置が動作不良に陥ったとしても、解析して分かる事は装置の原理だけ。その原理も、簡易版と言う事で本来の原理のごく一部でしかない。S. B. C. T. に回収されても大して痛くは無いのである。

「戦闘データを回収したら撤収する。そのまま観測を続けろ」
「了解」

グアニンと観測係の保安警察の隊員が見守る先で、決着が着こうとしていた。

もう再生するどころか動く事も出来ない程エネルギーが枯渇したキメラファッジは一步も動けない。

そのキメラファッジを、解き放つ為にダイナがトドメの一撃を放つ。

〈ATP Burst〉

「ハアアッ！」

放たれたノックアウトクラッシュユがキメラファッジを蹴り飛ばし、ダメージ超過で変異を解除させる。ベクタープレスからカートリッジが排出され、元の間人へと戻った。

この後、ファッジにされていた人はS・B・C・T. によって搬送され、検査を受けた後身元の調査などが行われる事となった。

ここから先は彼ら警察の仕事と、仁と亜矢はショッピングモールへと戻り峰と美香から預けていた荷物を受け取った。

どうやら戦っている間に2人は更に打ち解けたらしく、2人が戻った時には喫茶店で仲良くお喋りなどをしていた。

尤もその後、出羽亀していた事などを亜矢と真矢によってガツツリ文句を言われたりしたのである。

そうして少し騒動に巻き込まれながらも、楽しい一日を過ごした仁は亜矢をマンションへと送り届けた。彼女の分の荷物を持って、彼女の部屋まで運んでいく。

「すみません、荷物持ってもらっちゃって」

「ん、別に良いよ。今日は楽しかったし、そのお礼って事で」

亜矢の部屋に彼女の分の荷物を置き、仁は部屋を出て別れの挨拶を告げる。

「それじゃ、お休み。また来週」

「はい……………ッ！ 仁君！」

挨拶を済ませ、マンションを出ようと踵を返した仁だったがその彼の背に亜矢が声を掛けた。矢鱈気合の入った声に、仁が何事かと振り返る。

「何、どうかした？」

「あの……えつと……」

【亜矢——！】

もうチャンスはここしかない。ここを逃せば再び言い出す事が出来ない日々に戻ってしまう。

亜矢は真矢からのエールを糧に、遂に覚悟を決め口を開いた。

「私、仁君の事が好きです！ 大好きです!! 人として、女として貴方を愛してます！」

でも、仁君は私の事……どう思ってますか？」

遂に亜矢の口から出た、仁への告白。正面切つて異性として愛していると言われ、仁はその場で固まった。

何も言わない仁に、亜矢が不安そうに声を掛ける。

「あの、仁君？」

「え、あ、いや……うん。亜矢さんの気持ちは分かった。それで、俺の気持ちだけど

……」

「は、はい——！」

「——ちよつとだけ、待っててもらつても良い？　少し、気持ちを整理したいから。でも、必ず答えは見つける！　だから、待ってて？」

「はい……待ってます」

「ありがとう。それじゃ……お休み」

「お休みなさい、仁君。また、来週に……」

亜矢は仁に別れの挨拶を済ませ、静かにドアを閉めた。

仁は閉じられたドアを暫し見つめると、踵を返し帰っていくのだった。

第24話：輝きを増す瞬間

「……………はあ……………」

週明けの月曜日、仁はまだ午前中という内から大学敷地内の喫茶店のテラス席で冷めたコーヒーを前に溜め息を吐いていた。

彼を知る者であればこんな彼は初めて見ると、半分信じられないと言った目を向けるだろう。

彼がこんな悩んだ様子を見せる理由は、言うまでも無く亜矢から告白された事に起因する。

亜矢から告白された。彼女が自分の事を愛してくれている事は純粹に嬉しい。言ってしまうえば仁だって亜矢の事は好きだ。

だがそれを恋愛と結び付けていいかと問われれば、仁は考え込まずにはいられなかった。

果たして自分は、亜矢を愛しているのか……………それともただ人として好いているだけなのか。

「あれ？ 門守君？ こんな時間にこんな所で時間潰してるなんて珍しいわね？」

唐突に声を掛けてきたのは美香だ。図書室からの帰りなのか、手には専門書を何冊か抱えている。

声を掛けられて、仁は胡乱な様子で片手を上げて挨拶した。その様子に違和感を感じたのか、美香は仁に近付くと彼の向かいの椅子に腰かけた。

「どうかしたの？ 何だか何時もに比べて覇気が無い感じだけど？」

「そんなに、変かな？」

「多分、門守君を知ってる人は皆首傾げると思う」

「そっかあ……」

自分はそんなに分かり易いかと、仁は空を仰ぎ見た。どこか黄昏た様子に、美香の頭に浮かんだハテナマークが数を増した。

「ホントにどうしたの？ もしかしてあの後、亜矢と喧嘩でもしちゃった？」

「いや……そう言うんじゃないんだけど……うーん……」

仁は悩んだ。ここで美香に亜矢から告白された事を話してしまつて良いものかと。亜矢の真剣な告白をおいそれと誰かに話す事は何となく憚られた。

だが1人では結論が出そうにないのもまた事実。仁は少し悩んだが、美香に亜矢から告白された事を話し相談する事にした。

「実はさ……」

「うん？」

「あの後、亜矢さんを家に送っていったら……その……亜矢さんから、告白されちゃって」

仁の話を聞いて、美香は一瞬思考が停止した。だが再起動した時、その顔には友の快挙を称えると同時にこれ以上無い程楽しい話の気配に満面の笑みを浮かべていた。

「うっそ、マジでツ!? ホントにツ! 亜矢から門守君に告白したって!!」

「待って、声大きい」

「おっとと……」

慌てて美香は心を落ち着けた。今は出歩く学生の方が少ないとは言え、ゼロではない。もしこの事が他の誰かに聞かれて、何かのネタにされたら事である。

落ち着きを取り戻しつつ、逸る心が押さえられない美香は身を乗り出し仁に話の先を促した。

「それで? 門守君は何を悩んでるの?」

「ん……その、さ「あつ! やっぱり来てた!」——ん?」

美香に続きを話そうとしたところで、更なる来訪者が現れた。やって来たのは峰だ。白衣姿の彼女が、仁を指差し近付いて来た。

「今日は朝から全然研究室に顔を出さないものだから、教授も双星さんも心配してまし

たよ？　こんな所でこんな時間から何油売ってるんですか？」

実は仁、今日は一度も研究室に顔を出していないのだ。どうにも亜矢と顔を合わせ辛くて、朝からこうして喫茶店で1人時間を潰していたのである。

峰からの問い掛けに対し、答えたのは仁ではなく美香であった。

「実は門守君、この間亜矢から告白されてたらしくて」

「何ですとツ!?　どう言う事ですか、詳しく聞かせてくださいッ!!」

美香の話に峰は目の色を変えて仁に詰め寄った。仁は峰を宥めつつ、勝手に話した美香に恨めしそうな目を向ける。

「いやさ、この件に関しては知恵多い方が良いと思うわよ？　少なくとも2人の関係をよく知る宮野先輩には居てもらった方が良いと思う」

先日の邂逅を経て、美香と峰は親交を深めていた。今では先輩後輩でありまた友人同士とも言える間柄である。

美香の言う事も一理あると、仁は溜め息を吐き峰を引き剥がすと彼女を別の椅子に座らせ話を続けた。

「ま、話続けるけど……何て言うか……俺が亜矢さんからの告白を受けていいもんかなって、不安で……」

「どう言う事です?」

「俺、今までずっと勉強とか研究ばかりだったから、他人に対してそう言う感情向けた事も向けられた事も無くて……」

「亜矢さんの事は大事で、嫌な思いはして欲しくないって思うんだけど、それが愛してる事なのかって聞かれると……どうなんだろうって……」

「半端な気持ちで応えて、後で亜矢さんをごっかりさせたり失望させたりするくらいなら、受けないのも一つの手なんじゃないかなって……そう思っちゃって……」

「ぼつりぼつりと自分の気持ちを口にする仁。粗方話し終わると、彼は最後に2人に対し「どうしたらいい？」と訊ねてきた。

そんな彼を見て、2人は一旦席を離れ彼に聞こえない声で話し合った。

「どう思います?」

「正直、十分だと思えますけどねえ」

「ですよ。あの門守君があそこまで誰かを想うなんて無いですもん」

「ね〜」

仁は自他共に認める程、他人に興味を抱かない。他者を見下している訳でも、自分の殻に閉じ籠っている訳でもなく、単純に関心が無いのだ。それは周りの人間のあるがままを受け入れ「そんなものか」と結論付けているだけであり、干渉の必要性を感じてい

ないからである。

そんな彼が、亜矢の事をここまで気遣っているのだ。彼の中で亜矢がどれほど大きな存在であるかを如実に物語っているし、何だったら愛しているだろう事も察する事が出来た。

だが彼自身はその気持ちをイマイチ理解していない。他人との干渉をスルーしてきた弊害だろう。自分が他人に対してここまで愛情を抱くと思っていなかったから、心の中に沸いた『愛しい』と言う気持ちを分かっていないのだ。

分かっているなら、分からせてしまえばいい。峰は単純な結論に達し、仁に近付いた。

「門守君。君のその心のモヤモヤ、私達が晴らしてあげますよ」

「ん？ 出来るんです？」

「まっかせてください！ と言う訳で門守君、カモン！」

峰はそう言つて近くのベンチに座り自分の膝をポンポン叩いた。膝枕をしてやるという事だろう。

「……………」

突然の峰の申し出に、仁は素つ頓狂な声を上げてしまう。

後ろから見ていた美香も、突然何を言い出すんだこの人はと言う目を向けている。

2人から向けられる奇異の視線に、峰は慌てて自分の考えを話した。

「変な勘繰りしないでください!! 門守君、この間双星さんの膝枕を受け入れてたじゃないですか?」

「はい、まあ……」

「それと同じ要領で、私の膝枕で何か感じるかを確かめて欲しいんです。もし私の膝枕で寝てその時に感じたものが双星さんと同じ物であれば、門守君にとって双星さんは他の女性と何も変わらない存在であるという事。逆に私の膝枕と双星さんの膝枕で感じるものが全く別の物であれば、門守君にとって双星さんは特別な存在と言う事です」

つらつらと理論を並べる峰だが、要するに亜矢の膝枕と亜矢以外の膝枕の寝心地を比べろという事だった。何となく言いたい事は分かったので、仁は失礼して峰の膝枕に頭を乗せる。

「ん〜……………」

「どうですか、門守君?」

自分の膝枕の寝心地を仁に訊ねる。自惚れるつもりは無いが、肉付きはそんなに悪くないつもりだ。理系女子と思わせて、戦闘用に鍛えても居るので太腿は程好い筋肉によりそれなりの弾力を持っている。

そんな膝枕に対し、仁は次第に不満そうな声を上げると起き上がった。

「門守君？」

「ん〜……もういいです」

「どうだったの？」

「どう……って程の事も無かったよ」

「ふむ、なるほど……」

峰は仁の答えに顎に手を当てた。

仁が自分の膝枕に不満そうな様子を見せた事に、地味にシヨックを受けながらも峰は検証を次のステップに移した。

「では次……篠崎さん、ゴー」

「はいっ!? 私ッ!?!」

「単純に門守君が私の膝枕をお気に召さなかっただけと言う可能性もあります。検体は複数必要ですよ」

「言いたい事は分かりますけど……篠崎さんは良いの？」

「いや別にそれ自体は構わないけど……じゃあ、どうぞ?」

峰と入れ替わりベンチに座り、仁に膝枕をする。仁は美香の膝枕に頭を乗せ、暫しその感触を確かめると、峰と同じように早々に頭を上げた。

「あらら、もういいの?」

「うん、ごめん。なんかもう、いいや」

美香に対しては少し申し訳なきそうにしつつ、不満そうな様子を見せる仁。

峰とは違い、美香の太腿には必要以上に筋肉はついていない。柔らかさは峰の太腿以上だ。こちらの膝枕の方が寝心地は上かもしれない。

その膝枕がお気に召さないと言う。たった2人の検体だけなので、探せば仁が満足する膝枕があるのかもしれない。

だが仁の反応を見る限り、結論は一つと考える方が自然だった。

「うん、まだ2人だけですけどほぼ確定ですね。門守君は双星さんに対して特別な感情を抱いています」

「特別な、感情——」

「亜矢を愛してるって事でしょ、門守君は」

峰の言葉を美香が補足する。

2人の導き出した結論に、仁は強い衝撃を受けた。

「愛してる……俺、亜矢さんを……」

「門守君は、双星さんの事……嫌いですか？」

峰からの問い掛けに、仁は首を激しく振った。亜矢を嫌うなどありえない。

事ここに至り、仁は自分の気持ちを自覚した。彼は、亜矢に対して愛を抱いている。

その気持ちを自覚した瞬間、仁は胸が温かくなるのを感じた。

「そっか……………俺、亜矢さんを…………」

「…………今、双星さんは研究室に居ます。行ってあげてください」

峰に促され、仁は研究室に向け一目散に駆け出そうとした。

その瞬間、仁の携帯に着信が入った。出鼻を挫かれ、転びそうになりつつ仁が携帯に出るとその相手は宗吾であった。

連絡を寄越してきた相手に嫌な予感を感じつつ、仁は携帯に耳を当て対応した。

「もしもし?」

『門守君か? すまないが、手を貸してほしい』

「ファツジ?」

『そう言う事だ。同時に複数個所で出現した。こちらでも人員を派遣したいところだが、先日の襲撃で地味に人手が削られていてな』

「分かった、すぐ行くよ」

『助かる』

その後宗吾は自分が向かう場所を伝えると急ぐように通話を切った。その直後、峰のタブレットがアラームを鳴らす。見ると地図上の複数個所にファツジの出現情報を報せる光点が表示されている。

「……はあ……」

大きく溜め息を吐く仁に、峰と美香は同情の目を向けた。

「あゝ、その……頑張って？」

「ふ、双星さんにも知らせておきますね。門守君何処に行きますか？」

ファッジが出たのは全部で3か所。その内警視庁に近い所には宗吾達S、B、C、

T、が向かったと言う。

残る2か所はオフィス街と住宅街。仁は胡乱な目でタブレットを眺め、オフィス街に

出たファッジを指差した。

「……、オフィス街に出た奴の所行きます。ここが一番遠いし」

独自の移動手段を持つ仁が向かうなら、遠い所の奴の方が良い。そう判断して選ぶと、彼は足早にその場から移動し始めた。

これから垂矢に答えを返さなければならぬ。さっさと終わらせたいのだ。

去って行く仁の背を見送り、峰と美香は顔を見合わせ肩を竦めると、美香は自分の研究室へ戻り峰は垂矢にファッジ出現を報せに向かうのだった。

仁はあの後、亜矢を住宅街へ送り届けると自分はオフィス街へと向かった。因みにその際、2人の間にあった会話は必要最低限なものであった。

彼がオフィス街に辿り着くと、そこにはある意味彼にとつて因縁深い相手が待ち受けていた。

「あん？　来たのか、仮面ライダー？」

「お前……」

オフィス街に居たのはフロッグファッジ。先日亜矢を甚振ったファッジである。

亜矢からその姿や能力を聞いていた仁は、そいつの姿を見た瞬間目を鋭くした。

「……この間は亜矢さんが世話になったみたいだね」

「ん〜？　ああつ！　あの女の仮面ライダーか！　あいつはアデニンかグアニンの所に行つたのか……クソツ!?　こつち来てくれればこの間のリベンジが出来たつてのによ」
心底残念そうにするフロッグファッジを、仁は冷めた目で見つめている。感情を酷く押し殺した目だ。

亜矢が今の彼を見れば、今までにない位彼が怒っている事に気付いただろう。

事実、今仁は怒りに燃えていた。こんな奴に亜矢は………

「ああ、本当に俺、亜矢さんの事が大好きなんだな……こんな奴に亜矢さんが好き放題されたかと思うと、腹が立って仕方がない」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「……変身」

〈Open the door〉

仁はデイナに変身すると、ハイブリッドアームズをハルバードモードにして斬りかかる。

フロッグファッジは振り下ろされた斧槍を最初受け止めようとしたが、凄まじいパワーに一撃で防御を崩され二撃目を喰らい思わず距離を取った。

「いつ!? つつつつ……へっ、お前も結構やるじゃねえか」

「今日は検証してる時間は無いんだ。さっさと終わらせる」

デイナはそのままフロッグファッジへの攻撃を続行する。縦横無尽に振るわれる斧槍の、刃や柄、石突がフロッグファッジを襲い、斬撃や殴打がフロッグファッジの表皮を傷付けていく。

「ふっ」

このまま一気に畳み掛けようと、柄を殴打の為に振るう。振るわれた先にあるのは、フロッグファッジの首筋——

「おっと……」

寸でのところでデイナは柄の殴打を止め、斧槍を引つ込めた。亜矢から事前に聞いていた、フロググファツジの能力の1つを思い出していたのだ。

「蛙の中には耳周りのイボに毒液を溜め込んでる奴が居た筈だからな、危ない危ない」
「ちつ、引つ掛からなかったか」

「姑息な手は二度以上は通じないと思つた方がよいよ」

「アドバイスどうも……ならこいつはどうだ！」

言うが早い、フロググファツジは姿を消した。表皮の色を変えて周囲に擬態する能力。一般にカメレオンが周囲の景色の色に溶け込むことは良く知られているが、実はアマガエルなど一部の蛙にもこの能力は備わっている。

こちららも姑息と言えば姑息だが、触れなければ害の無い毒のイボに対してこちららは知っていても厄介だ。見えなければ攻撃できないのだから。

「でも残念。お前の居場所はすぐに分かる」

〈BUFFALO + W H A L E Mutation〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

バッファローホエールフォームにゲノムチェンジしたデイナは、エコーロケーション

で姿を消したフロググファツジの姿を探す。光学迷彩化と見紛う程の完璧な擬態を見せるフロググファツジだが、存在している限りエコーロケーションから逃れることは出来ない。

程なくしてフロググファツジの姿を見つけたデイナは、ハイブリッドアームズをライフルモードに変形させフロググファツジに向け引き金を引いた。

「そっ」

隠れたフロググファツジに突き刺さる銃弾。

だがその直後、デイナは背後から攻撃を受けた。

「ッ!? えっ?」

「ハッハッハアツ!!」

まさかの読み違いに、デイナは一瞬混乱して自分が攻撃した方と背後を交互に見る。自分は確かにエコーロケーションでフロググファツジを追跡し狙い撃った筈。それなのに何故?

その絡繰りはすぐに分かった。デイナが撃った所に居たのは別のファツジが居ただ。だ。

特徴的なぎよろりと突き出た目は左右別々の方を向き、鼻先には申し訳程度の角を生やしている。そして腰の後ろからはカールした尻尾。

そこに居たのはカメレオンファッジだ。何時の間にかカメレオンファッジがダイナの傍に接近していたのだ。

「残念だったな、そいつは囷だ！」

「……俺が来るって分かってた訳じゃないよね？」

「ああ残念ながらな。別にお供なんて必要無かつたんだが、世の中何がどう転ぶかわからねえもんだぜ」

言いながらフロッグファッジはカメレオンファッジ共々姿を消した。

それを見てダイナは即座に作戦を立て、フロッグファッジを捉える為にベクターカートリッジを取り換えた。

〈DOG + LEON Mutation〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

ダイナがゲノムチェンジしたのは犬の能力とライオンの能力を持つミューテーションフォーム。その姿にフロッグファッジはダイナに関するデータから彼が何をしようとしているのかを見抜いた。

（今度は匂いでこっちの場所を見つけようって魂胆か……だがッ！）

フロッグファッジは物陰に移動するとカメレオンファッジを呼び寄せ、己の体から分

泌されている粘液をカメレオンフアツジに塗りたくった。さらには分泌する粘液の質を変え、己の匂いそのものを変化させる。

姿を消す能力を持っているからこそ、それを見破る可能性のある相手への対策は考案済みだった。

フロッグフアツジとカメレオンフアツジは再び姿を消してデイナに別々の方向から近付いていく。

一步一步、ゆっくりと近付いていった時、不意にデイナが何かに反応した。フロッグフアツジが居るのは別方向だ。カメレオンフアツジに付けた先程の粘液の匂いに反応したらしい。

その瞬間フロッグフアツジは一気にデイナに飛び掛かった。蛙特有の跳躍力を活かし、デイナとの距離を一気に詰め両手の爪で斬りかかる。

〈ATP Burst〉

「ハッ!」

「なっ!?! ガハアツ?!」

だが次にデイナが攻撃したのは、飛び掛かろうとしていたフロッグフアツジの方であつた。為す術なくカウンターで喰らった回し蹴りに、フロッグフアツジは大きく蹴り飛ばされる。

幹部の危機に焦ったのかカメレオンファッジが急いでデイナに攻撃を仕掛けようとするがそれは悪手。動揺したままの攻撃はデイナに容易く見切られ、大剣モードにしたハイブリッドアームズのノックアウトブレイクを用いた一撃により倒されてしまった。

「な、何でだッ!?! 何で、俺の居場所が分かったッ!?! 匂いは誤魔化してた筈だッ!!」

しかも事前情報でミュートーションフォームでは能力は十全に発揮できない筈。匂いに敏感になれるフォームであっても、誤魔化しは効く筈である。それなのに何故とフログファッジの頭の中は混乱の極みにあった。

「俺、一度でもお前を匂いで捜そうなんて考えてなかったけど?」

「何?」

「気付いてない? お前とカメレオン、足音が全然違うって事に」

全身粘液で常に濡れているフログファッジは移動の際微小にだがペタペタと音がする。大してカメレオンファッジは、全身が鱗で覆われている為そんな粘着質な音はしない。デイナはその違いに着目し、音を聞き分ける為にドッグベクターカートリッジを選択したのだ。レオンベクターカートリッジは、反撃の際に大きな一撃が放てるベクターカートリッジが欲しかったからに過ぎない。

先日、フログファッジはルーナに対し足音で居場所を悟られそれが原因で敗北した。彼はその時と全く同じ敗因で敗北したのだ。

「ああ、クソッ!? 今日はこちらまでにしといてやる、覚えとけよッ!!」
フロッグファッジは捨て台詞と共にその場を跳んで逃げ去って行く。デイナはそれを見送る。

撃ち落としてやろうかとも思ったが、流石にこの姿では精密射撃は向かない。今からドッグホエールフォームになっても、姿が変わった時にはフロッグファッジは逃げてしまった後だろう。

デイナはフロッグファッジにトドメを差す事を諦めると、トランスポゾンに跨り住宅街の方へ向かった。

その頃、ルーナは住宅街に出現したシーアーチンファッジと一進一退の攻防を繰り広げていた。

ルーナの銃撃は先程からシーアーチンファッジの棘をへし折り、投擲される棘を撃ち落としていたが本体にはなかなか有効打を与えられていない。

一方のシーアーチンファツジも、隙の無いルーナを相手に攻めあぐねている状態だ。何しろルーナは実質2人分の意識で戦っている。例えば今体を動かしている亜矢の意識の隙を突いた攻撃をしようと、その穴を警戒している真矢が即座に反応して危険な攻撃を防いでいるのだ。

互いに相手に効果的な攻撃が出来ていない現状。これでシーアーチンファツジがルーナを相手に接近戦を挑んでいればまた状況は変化したであろうが、シーアーチンファツジはルーナの接近戦能力を警戒して必要以上に近づく事をしなかった。

先日の戦いでフロッグファツジがルーナにトドメを差そうと接近して、返り討ちに合った事を知っているからだ。

膠着状態となる住宅街での戦い。

そこに参戦する者が居た。デйнаである。フロッグファツジを退け、ルーナを手助けする為に馳せ参じたのだ。

「仁君ッ!」

「デйнаッ?!」 あの方角は……シトシンか。あいつ、しくじったな……」

デйнаの到着に喜色の声を上げるルーナに対し、シーアーチンファツジはフロッグファツジがデйнаに敗れた事を察し悪態を吐いた。

同時にシーアーチンファツジは均衡が崩れた事に撤退を決意した。ルーナ相手に一

進一退の攻防を余儀なくされたのだ。ここにさらにデイナまで加わっては、苦戦は免れないし下手をすれば敗北を喫してしまう。

「アデニン、シトシンがデイナに負けたりしない。私はそろそろ退かせてもらう」
『了解だ。こちらもそろそろ後退する』

シーアーチンファツジは通信でアデニンに撤退を進言すると、意外とあっさり了承された。向こうも戦況が芳しくないか、必要なデータは手に入れたから後退を考えていたらしい。

データに関しては、シーアーチンファツジもルーナとの新たな戦闘データが手に入った。その為に部下のファツジを1体失ったが、お陰でルーナの戦闘データが新たに獲得できた。成果は十分だ。

デイナとルーナの足元に棘を投擲し、爆発で目くらましをするとシーアーチンファツジは素早く撤退した。

煙が晴れた先にシーアーチンファツジの姿が無かったことに、デイナは溜め息を吐くと変身を解除した。

「どうやら逃げるみたいだね」

「そうなんですか？」

「通信で話してるのが聞こえた。権藤さんの所の奴も逃げるみたい」

ルーナと話しながら仁はスコープの方に携帯を掛けた。

「もしもし、権藤さん？ こっちの奴らは逃げただけど、そっちはどう？」

『こっちの奴にも逃げられた。嫌にあっさり引き下がったな？』

「目的は仮面ライダーのデータ収集みたい」

『そう言う事か……兎に角今回は助かった。後はこっちで処理しておく』

「あ、それなら俺が戦ったオフィス街の方、ファッジ1体倒したよ。あいつの部下だったみたいだから口封じされちゃったけど……」

「こちらも……」

そちらに関しても後は権藤達が処理してくれるとの事で、仁と亜矢は大学へと戻る事にした。

亜矢を後ろに乗せ、仁がトランスポズンを走らせる。

「……………」

仁は真つ直ぐ大学へと向かう。だが大学が目の前に迫った瞬間、彼はハンドルを切り大学の駐車場とは違う方へと向かった。彼が向かったのは大学の裏手、裏山がある方だ。確かにそちらからもトランスポズンならラボの格納スペースへと入る事が出来る。

だが仁も普段は大学の駐車場に停めている筈。事実今日も、行く時は大学の駐車場に停めていたのだ。

それが何故帰りには裏山なのか？

「あの、仁君？ 何で裏山へ？」

「ん、ちよつとね」

「ちよつと、つて……」

困惑する亜矢を乗せたまま、仁は裏山の麓にトランスポズンを停め降りた。とりあえず亜矢もそれに続き降りる。

「仁君、どうしたんです？」

「ん……」

亜矢が事情を問うが、仁は頷くだけで何も答えない。こんな仁は初めてだったので、亜矢は訳が分からないと更に混乱した。

そんな彼女と共に裏山を上った仁は、ラボへは向かわず山頂まで登り一本の木の下に立った。恐らくは桜だろうその気は、花はとつくに散つて緑の葉を生い茂らせている。

その気を見上げる仁を、亜矢が心配そうに見つめていると彼は徐に口を開いた。

「ずつと……」

「え？」

「ずつと、考えてた。俺、亜矢さんの事をどう思ってるんだろうって……」

突然の事に亜矢は最初彼が何を言おうとしているのか分からなかったが、少ししてそ

れが先日の告白に対する答えに繋がる話だと気付き緊張に息を呑んだ。

「俺、今まで人に対して特別な想いとか持った事なくてさ。研究とか学説とかにしか興味が無くて……」

仁の言葉に、次第に亜矢の表情が沈む。やはり彼は、色恋には興味などないのか、と。だが次に続いた言葉に、彼女は思わず頭を上げた。

「でも、亜矢さんに対しては違った」

「え——！」

「亜矢さんと一緒に居ると、何て言うか、心が温かくなるんだ。亜矢さんの笑顔を見ると、俺も何だか嬉しくなってきた……逆に、亜矢さんが辛かったり、亜矢さんに酷い事したやつ見ると、凄く嫌な気持ちになる」

段々と仁の言葉に熱が籠ってくる。それに合わせて亜矢の顔にも熱が溜まり、頬が赤く染まってきた。

更に欲見ると、仁の頬も何だか赤い。

「今日、峰先輩の手助けで色々検証してみたんだけど、俺……亜矢さんの事大好きみたいだ。………うん、俺、亜矢さんが好きだ」

「この気持ちをお愛だつて言うんなら、俺、間違いなく亜矢さんを愛してる」

仁の口から出た、亜矢に対する明確な好意。亜矢は言葉を失い目を見開き、両手で口

を押えている。

動揺する亜矢に気付く余裕も無いのか、仁はそのまま話を続けた。

「これからも、ずっと一緒に居たい。これが俺の答えなんだけど………これで、良いかな？」

言いたい事を言い終え、仁が亜矢の顔を伺うと思わずギョツとした。

顔を赤くして口を手で押さえている亜矢の目からはポロポロと涙が零れていたのだ。何か答えに不満があつたかと、何かを間違えたかと仁がらしくなく狼狽える。

「えっ!? ちよつ、何? 何かまずく——」

この大学に入學してから見せたことがあるだろうかと言う狼狽えつぶりを披露する仁だったが、その彼の胸に亜矢が飛び込んだ。両手を彼の背に回し、渾身の力を込めて抱きしめる。

突然の抱擁に最初困惑する仁だったが、直ぐにそれが彼を受け入れての事だという事に気付く彼も亜矢の事を抱きしめ返す。

「仁君……仁君——!」

「ゴメン……変に鈍くて。もつと早くに気付いてれば良かったのに……」

他人の気持ちにも、自分の気持ちにも鈍かったことを仁は後悔していた。もつと早くにこの気持ちを亜矢に伝える事が出来ていれば………

そうすれば、世界はもつと輝いていたかもしれない。

他人に対し必要以上に興味を抱かなかつた自分を恥じ、そして自分よりも己の気持ちに正直だろう亜矢を待たせてしまった事を申し訳なく思った。

しかし亜矢はそれでも構わなかつた。彼はこうして自分を受け入れてくれた。彼も自分の事を愛してくれている。それだけで十分嬉しかつた。

「いいんです……ぐすつ。仁君が愛してくれた、それだけで私には十分です」

「ううん。まだまだ……これからだよ。これからもつともつと、亜矢さんを愛したい。愛してみせる」

そう言つて仁は亜矢の顎に指を添え、そつと自分の顔に向せ顔を近付けた。それが何をしようとしているのか気付き、一瞬目を見開く亜矢だつたがすぐに頬を赤く染めながらも目を閉じ彼がやろうとしている事を受け入れた。

そのまま重なり合う2人の陰。仁は優しく亜矢にキスをし、彼の唇を感じた瞬間亜矢は彼の首に腕を回して離れまいと強く抱きしめた。仁もそれに応えるように、亜矢の背中と頭に手を回して彼女をしつかりと抱きしめる。

（良かった、亜矢……これで、私は——）

想いが繋がり合つた2人を、亜矢の中の真矢が静かに祝福していた。

第25話：暗闇から迫るもの

峰は目の前に居る仁と亜矢をジッと見ていた。

時間は現在午後3時過ぎ。この時間は教授の意向で白上研究室は恒例のティータイムとなっている。

なので今は学生は全員作業を止め、談話スペースで教授手製の紅茶で一服している所なのだが――

「亜矢さん、砂糖要る?」

「ありがとうございます。あ、仁君。このスコーン美味しいですよ」

峰と拓郎の前には、仁と亜矢が並んで座っている。それ自体は何時も通りなのだが、気になるのはその距離感。

昨日からこの2人の距離が矢鱈近いのだ。物理的にも精神的にも。

この2人は前から確かに仲が良かった。ナチュラルに隣同士で座るし、何だったら普通に一緒に昼食を食べに行く。

だが今の近さはその比ではない。仁の左隣に亜矢が座る形なのだが、一言で言えば密着も同然の近さだった。腕と腕が触れ合い、それどころかりラックスすると亜矢が仁の

肩に頭を寄り掛かせている。

「こんなのを見せつけられてしまえば、気にならない訳が無かった。

「双星さん、随分と門守と距離が近いが何かあったのか？」

「ふえっ!? あ、いや、その……」

拓郎に指摘され、一気に顔を赤くする亜矢。どうやらほぼ無意識の近さだったらしい。それでも仁から離れることはしないが、誰かに指摘されると恥ずかしいのか顔を赤くして顔を俯かせている。

状況が分かっている拓郎はそんな亜矢の様子に首を傾げているが、峰がそんな彼の脇腹を小突いた。

「ちよつと瀬高君……」

「な、何だ？」

「少しは察してあげてくださいよ」

仁と亜矢の距離が急激に近づいたのは昨日ファッジとの戦いを終え戻って来てから。あれから2人の距離は明らかに近かった。亜矢の方にはまだ恥じらいがあったが、仁は明らかに意図して亜矢に近付いている。

その事に気付いた峰は、仁が亜矢からの告白に返答し2人が正式に恋仲になった事を察した。

因みに白上教授も気付いているらしい。彼が2人を見る目が前と比べて明らかに温かい。若人2人の恋路を優しく見守っている目だ。

前途ある2人の未来を優しく見守る紳士っぷりである。流石紳士教授。

しかし拓郎は依然として理解していないのか、はてなマークが見える程の顔で首を傾げている。彼の朴念仁さに峰は堪らず溜め息を吐いた。

「はあ~~~~~……………」

「おい、何だその馬鹿でかい溜め息は?」

「自分の胸に聞いてみたらどうです?」

「だからどういう意味だ!」

「分からないなら結構です」

「おい!」

拓郎と峰が揉め始めたその時、突然仁の携帯から着信音が鳴った。仁はジーンズの後ろポケットに突っ込んでいた携帯を取り出すと、ディスプレイに表示されている名前に僅かに視線を鋭くした。

「権藤さんから?」

仁の呟きに発信者が誰か分かった瞬間、亜矢も表情を引き締めた。

宗吾が仁に直接連絡してきたと言う事は、何か厄介な事が起こったと言う事の証拠だ

からだ。実際先日がそうだった。

仁は紅茶のカップ片手に宗吾からの着信に出た。

「はい、門守です」

『門守君か？ 突然済まない。実は少し君の知恵を借りたい状況になってな』

話し口が何かおかしい。先日と違ってストレートに戦闘が起こっている訳ではないようだ。だが仁に助力を乞うと言う事は、十中八九原因はファッジによるもの。仁はその確信を持って宗吾に問い掛けた。

「何があつたの？」

『手短に話すと、恐らくファッジによるものだろう他殺死体が発見された。だがどんなファッジにどうやられたのかイマイチ判然としないんだ』

「そこで俺に知恵を借りようって？」

『そう言う事だ』

「でも警察にはその道のプロが居るでしょ？ その人達にも分からなかったの？」

『鑑識は死因や殺害道具、犯人に繋がる手掛かりを見つけてるのが仕事だ。だがその犯人が人外で常識外れとなると、彼らにも手に負えない。そこで君の柔軟な思考が必要になる。頼めるか？』

「分かった。今からそっち行くよ」

宗吾から現場の場所を聞くと、仁は通話を切り残った紅茶を飲み干すと荷物を持った。亜矢もそれについて行く。

「んじゃ、そういう訳なんで俺達先に上がります。今日は多分もう戻ってる時間無いでしょうし」

「分かった。気を付けたまえよ」

「それじゃ、失礼します」

研究室を出て2人は駐車場に停めてあるトランスポゾンで宗吾から聞いた現場へと向かっていく。

尚2人が研究室を出るまで、峰と拓郎は依然揉め続けていたので2人が研究室を出ていった事には気付く事は無かった。

仁が亜矢を後ろに乗せトランスポゾンを走らせ十数分、2人は宗吾に指定された現場に到着していた。

場所は都内某所の地下鉄。入り口は既に警察により封鎖されており、周りには野次馬が集まっている。

思っていた以上の人混みに亜矢が若干辟易した顔をしたが、仁は構わず突き進み警備をしている警察官に話し掛けた。

「あの、こちらに権藤 宗吾って人が居ると伺ったんですが？」

「君は？」

「門守 仁。こっちは双星 亜矢。2人が来たって言えば、権藤さんには伝わると思いますが？」

「なるほど、貴方達でしたか。こちらです」

既に警護している警察官にも2人の事は伝わっているのか、名前を出すとすぐさま2人は通され地下鉄へと入っていった。

2人が地下鉄駅構内に入ると、S・B・C・Tの装備に身を包んだ慎司が2人を迎え入れた。

「待ってました！ 2人とも、こっちです」

慎司は2人をホームへ連れていき、そこから路線内へと連れて行った。どうやら問題が起こったのは路線での事らしい。

と言う事は被害に遭ったのは地下鉄の職員と言う事か。

外から持ち込まれた照明に照らされた路線を2人が歩いていくと、次第に慎司と同じ格好をした隊員を多く見かけるようになった。

そのまま更に慎司の後について行くと、地面に敷かれたブルーシートの傍に立つ宗吾の姿を見つけた。彼の方も近付く仁達に気付き、手を上げて2人を迎えた。

「よく来てくれた。待ってたぞ」

「お待ちませ。外、野次馬凄かったよ」

「だろ。日本で地下鉄が封鎖されるなんて事、そうある事じゃない」

「で、何があったの？」

率直に何が起こったのか訊ねる仁に対し、宗吾は無言で自分の足元のブルーシートを見た。よく見るとそのブルーシート、一部が微妙に盛り上がっている。そこに何があるのかは、最早考えるまでもない。

「……見てもいい？」

「ああ。言っておくが、少し覚悟して見てくれ。ちよつとどころではなくシヨツキングな状態だからな」

宗吾からの警告に臆することなくブルーシートを取り払おうとする仁だったが、ふと何かを考えるとブルーシートに掛けた手を離し亜矢の方を見た。

「ええ？」

突然視線を向けられ困惑する亜矢に、仁は少し離れるように言った。

「亜矢さん、少しの間離れてて。権藤さんがこういうつて事は結構グロい事になってるかも」

「仁君……………それなら私が変わるわ」

「真矢さん？」

「仁君、そう言うのは無しよ。私達、そんなに頼りない？」

別に足手纏い云々の話ではなく、仁としては純粹に亜矢が嫌な思いをしないようにと配慮したつもりだった。だがそれが2人にとつては足手纏い宣言してるも同然である
と気付かされ、仁は肩を竦めると頬をかきながら己の浅慮を恥じた。

「……………ゴメン」

「分かればよろしい」

「じゃ……………いくよ」

気を引き締め、覚悟を決めて仁はブルーシートを外した。

途端に広がる死臭と血の匂い。仁は僅かに、真矢は盛大に顔を顰めた。内面に引つ込んだ亜矢は、真矢が代わってくれたことに感謝した。自分が表に出していたら、最悪吐いていたかもしれない。

「ゴメンね、真矢……………うっ!？」

「(気にしないで。亜矢は難しい事にしなくてもいいから)」

【真矢——?】

感謝すると同時に、真矢に厄介事を押し付けるような形になった事を謝る亜矢だが真矢は全く気にした様子がない。寧ろこれが当然だと言うようにも捉えられる真矢の様子に、亜矢が内面で首を傾げる。

それを横目で見つつ、仁は外気に晒された遺体をじっくり眺めた。

酷い有様の遺体だ。体の大部分が欠損している。頭も左腕も、下半身も無い。

これだけでも人の死に様としては十分異常だが、何よりも気になるのはその傷口だ。鮮やかな傷口。まるで鋭利な刃物で切り裂かれたかのような滑らかさは、臭いが無ければ人の死体とは思えない程である。

これは明らかに人の手によるものではない。ファツジ以外に考えられなかった。

「ふむ……………」

「凄く滑らかな傷口ね。一体どうやってたらこんな傷になるのかしら?」

「蟹とかの鋏じゃこうは無理……と言いたい所だけど、ファツジなら何でもありな気がするのがなんともなあ……………」

ファツジになると、元となった生物の能力は大幅に増強され本来のそれとは異なる力を発揮する事がある。

例えばマンティスファアツジだが、あれの元となったカマキリの鎌は本来獲物を捕らえ押さえつける為の物であつて切り裂くと言つたことは出来ない。しかしマンティスファアツジの鎌は明らかに敵を切り裂く刃物としての能力を持っていた。

バットファアツジの超音波だつてそうだ。自然界に居る蝙蝠が、超音波で獲物を探知するならともかく超音波自体を武器にして獲物を捕らえるなど聞いたこともない。

この遺体を作り出した犯人も、そうした常識から逸脱した能力を持った何者かによるものの可能性が高い。こうなるとどんな相手で、どんな能力を持っているかを予測する事は絶望的だ。

「ん〜……………ん?」

悩む仁だったが、ここで彼はある事に気付いた。

仏となった死体は服装から地下鉄の整備の作業員である事が伺えるが、彼らは通常一人で行動しない。他にも仲間の職員が居る筈だ。

その人達はどうかつたのか?

「ねえ、この人の仲間つてどうかつたの?」

「仲間?」

「この人、整備の作業員でしょ? こういう人たちつて基本チームを組んで動くものであつて、単独行動はしないんじゃないの?」

宗吾は仁の洞察力に驚いた。彼の言う通り、この亡くなった作業員と同時に行動していた作業員は存在する。ただし、彼らは一切の痕跡も残さず音信不通となっていたのだ。

遺体も遺留品も無しに姿を消した作業員の事を今この場で告げても混乱するだけだろうと言う事でその事についてはまだ話していなかったのだが、その事をズバリと言い当てられた事に宗吾は自分がまだまだ仁を甘く見ていた事に気付かされた。

「確かに門守君の言う通り、他にも連絡が取れなくなつた作業員は居る。だが彼らに關しては一切の遺留品が見つからないんだ」

「遺留品がない？ 遺体も見つからなかったの？」

「ああ。唯一見つかった痕跡がこの遺体という訳だ」

宗吾の話に、仁は違和感を覚えずにはいられなかった。そもそもにしてファツジがこんな部位の欠損した遺体を残す理由が分からないのもそうだが、この遺体だけ残して他の作業員は何処へやったと言うのか。

（鋭利な切り傷……………欠損部位……………消えた遺体……………ん？ 待てよ？ 何かこんな事する奴居たな……………）

記憶の本棚を片っ端から漁り仁は該当する生物を検索する。しばし考え、そして彼は思い出した。こう言った感じの捕食後を残す生物を。

「あ、思い出した。これオニイソメだ」

「オニイソメ？ 何、それ？」

「一言で言えばゴカイの仲間だよ」

オニイソメ……………海底に生息する多毛類である。海底の土に長い体を隠して5本の触覚で獲物を感知し襲い掛かるミミズのような奴だ。最大の武器は鋭い牙とその速度。恐るべきことにオニイソメはその牙の速度で獲物を捕らえるだけでは飽き足らず、綺麗に両断してしまう事もあるのだ。

寿命が長い事でも知られており、長く生きている個体の中には3m近くまで成長する事がある。

「……………つまりこの作業員の遺体は、そのオニイソメの能力を持ったファツジによるものだと言う事か？」

「実物を見てないから確証はないけど、でも状況的にはありえるかも。この欠損した体も、仕損じて切断されたと考えれば納得できる」

「……………でも、だとすれば何でこんな死に方……………って言うか殺し方をしたのかしら？ 他の作業員は全身持っていたのに？」

「最初に片腕、次に下半身。瀕死の体を引き摺ったところで頭を持っていかれたんだろ
うね」

この作業員が最初の犠牲者か最後の犠牲者かは分らないが、じわじわとなぶり殺しにされる恐怖は如何許りだったか。全身一気に持つていかれた作業員の方が、もしかしたらまだ幸運だったかもしれない。一思いに死ぬことが出来たのだから。

「さて、となると何処かにそいつが出入りした穴がある筈だけど……」

「ファツジって素体人間でしょ？ そんな穴あるの？」

「オニイソメ、と言うかゴカイ系の奴を基にした遺伝子の奴ならあつてもおかしくないと思う」

「あゝ……それつてもしかして、あんな奴か？」

仁と亜矢が周囲を見渡してそれっぽい穴を探していると、宗吾が徐に上を指差した。2人がその指の差す方を追つて上を見ると、そこには明らかに不自然な穴が開いている。あれが件のファツジ——名付けるならボービットワームファツジだろうか——が出てきた穴だろうか。

試しに仁がライトを向けて穴の中を照らしてみるのが、穴の中には何も見えない。

天井に空いた穴を見て、仁が顔を顰める。今回はちよつとマズいかもしれない。

まず第一に、今回のファツジはかなり凶暴だ。人間性が低く獰猛で、恐らく人間を食料にしてエネルギーを得ている。それが生存の為か戦いの為かは分らないが、とにかくそいつは今後も人を襲う。今はまだ地下鉄の路線内と言う限定的な空間でしか被害

が発生していないが、これが地上で起こるようになるると被害は加速度的に大きくなる。想像するだに恐ろしい。

第二に、ボービットワームファッジは元のオニソメと比べて能力が大幅に強化されている。足元どころか天井にまで潜むことが出来るとなると、陸上でありながら奴は何処にでも潜むことが出来てしまう。それはこの地下鉄の路線と言う上下左右360度全てが敵のフィールドになつてしまふと言う事。このまま戦うのはむざむざ敵の懐に飛び込むも同然である。

そして最後——仁としてはこれが最も警戒すべき事と認識している——は、このファッジは人間性が低いくせしてなかなか頭が回ると言うところであつた。通常オニソメは一度狩場を設定するとそこが荒らされるとかしない限り移動する事は無い。元々移動には適さない体だからだ。

だがこのファッジは、人間の体を素体として優秀な頭脳を手に入れたからか、確実に自分に有利な状況でのみ攻撃を行おうとしている様に仁には見えた。

「……………権藤さん、部下の人達はこの先に展開してるの？」

「ん？ ああ、もしかしたら連絡が取れない作業員の生き残りやファッジ本体が見つかるかもしれないからな」

「直ぐ引き上げさせて。今回のファッジは何時も以上に一筋縄じゃ——」

仁が全てを言い終える前に、彼らの耳に立て続けに銃声が響いた。それが何を意味しているか、分からない程この場の3人はほんやりしていない。

「遅かった」

「くそッ!？」

急いで路線の先に向けて駆ける3人。

まだ照明が設置されていない路線は暗く、彼らは手に持ったライトの光を頼りに足元と先を照らす。

まだ銃声は響いているが、同時に怒号と悲鳴も聞こえてきた。どう好意的に見積もっても押されているのはS・B・C・Tの方だ。3人は走る速度を上げる。

だがその時、唐突に銃声が止んだ。声も聞こえない。3人が嫌な予感を感じて先に進むと、足元にライトが落ちてるのが見えた。

近付いてみると、それはS・B・C・Tの正式装備となっているライフフル『ガンマカービン』だった。スコープのガンマライフフルの簡易量産版、そのオプションとして取り付けられているフラッシュライトが光っていたのだ。

銃は落ちているが、肝心の隊員の姿は見当たらない。3人は周囲を警戒した。

「……オニイソメはどんな狩りをするんだ?」

宗吾がスコープドライバーを装着しながら問い掛ける。仁はダイナドライバーを腰

に装着しつつ、それに答えた。

「海底の砂の中に潜つて、獲物が傍に寄るのをじつと待つんだよ。それで獲物に鋭い牙で食らい付くと、そのまま砂の中に引き摺りこむんだ。ただその時の攻撃の速度と牙が鋭すぎて、偶に獲物を真つ二つにしちゃうんだけどね」

「なるほど……だがここは周囲をコンクリートで固められた地下鉄のトンネルの中。隠れ潜むには少し適さないんじゃないか？」

「そうは問屋が卸さないみたいよ」

真矢が照らす先には、壁や天井に空いた無数の穴。どれもこれもが人間一人を引き摺りこめるくらい大きく、内幾つかは穴から血が滴っていた。

それを見て仁と宗吾も顔を顰めた。

「お、おいおいおい!! あれ全部がファッジの出入りする為の穴か!」

「……………オニイソメだけじゃない」

「何だと?」

「またベクターカートリッジを二つ使つてるつて事?」

一目見ただけであの光景を作り出したファッジが二つ以上の遺伝子を用いている事を見抜いた仁。真矢が彼の予測に思わず壁に空いた無数の穴から目を離した。

その瞬間、穴の一つから牙の生えたミミズの様な物が飛び出し真矢に襲い掛かった。

目を離していた真矢はそれに対する反応が遅れた。

「あ——?!」

「真矢さんッ!」

突然の事に体が動かない真矢を、仁が突き飛ばし庇った。代わりに壁から飛び出したそいつの牙は、仁の脇腹を大きく切り裂いた。

「ぐ、あ——?!」

「仁君ッ!」

「く、変身ッ!」

〈Access In focus〉

脇腹から血を流し倒れる仁に真矢が駆け寄り、宗吾はスコープに変身して壁から出てきたミミズをガンマライフルで蜂の巣にしていく。余り頑丈ではないのか、ミミズの体はあつと言う間に穴だらけになり悲鳴を上げながら引っ込んでいった。

スコープはそのままミミズが引っ込んでいった穴に銃口を向け、次の攻撃に備えた。その間に真矢は仁に声を掛け続ける。

「仁君、仁君大丈夫!」 しっかりして!」

「だ……だ、じょうぶ……くっ!」 これ位なら、まだ……」

そうは言うが、切り裂かれた脇腹からは血が流れ続けている。このままでは仁の命が

危うい。

急いで治療を施す必要があると真矢が仁を移動させようとした時、スコープの口から焦りの声が上がった。

「おいおい、マジか!?!」

「え!?!」

何事かと真矢がスコープの方を見ると、そこには信じられない光景が広がっていた。

何と壁にある無数の穴から次々と牙の生えたミミズが姿を現したのだ。スコープが片っ端から撃つて引つ込めさせるが、引つ込んだ先から次のミミズが姿を現すのでキリがない。

次々と襲い掛かってくるミミズに、銃では対処が間に合わないと思えば盾から『ボルトテックスブレード』を展開。近くまで寄ってきたミミズを片っ端から切り裂いた。

【このままじゃキリがない。真矢!】

「言われなくても分かっている!」

このままではマズいと、真矢もダイナドライバを装着しルーナに変身しようとする。

〈CAT Adaptation〉

アダプトキャットにキャットベクターカートリッジを装填しドライバーに装着した。

その電子音声が響いた瞬間、地下鉄の天井が崩れた。あのファツジがトンネルのあちこちに穴を掘って脆くなっていたのだ。

ミミズ達は一齐に穴の中に逃げ込み、スコープも後退し崩落から逃れた。が、仁は脇腹の怪我の所為で満足に動くことが出来ない。動きの鈍った彼の上に、無数の瓦礫が降り注ぐ。

「仁君危ないッ!?!」

真矢は変身するよりも先に仁を助ける事を優先し、崩落する天井の下に居る彼に抱き着くとそのままトンネルの奥へ向かって飛び込んだ。その直後、2人の背後を崩落した天井が塞いだ。

「門守君!?! 双星さん!?!」

2人と分断された事に、スコープが塞がれたトンネルに近付き声を掛ける。だが向こう側からの返事は無い。

思わずスコープは行く手を阻む瓦礫の山を殴った。スコープのパワーを以ってすればこの程度の瓦礫を撤去することなど造作もない。だがそれは更なる崩落を考慮しなければ、だ。こんな状態で無理矢理瓦礫を撤去すれば、更なるトンネルの崩落を招きかねない。

しかも更に悪い事に、崩落が落ち着いたからか再びミミズが現れ攻撃し始めてきた。

崩落の音を聞いて他の隊員が応援に駆けつけてきてくれたが、こいつらを何とかしなければ仁達を助けるどころではない。

「くそっ!!? 頼む2人共、無事でいてくれ——!」

スコープは仁と真矢が崩落から逃れた事を信じて、ボービットワームファッジのミミズに向け引き金を引いた。

第26話：真矢の抱える孤独

暗闇の中、亜矢は頭に響く鈍痛に目を覚ました。

「うっ……………」

痛む頭を押さえつつ、体を起こし周囲を見渡す。しかし辺りを見ようにも、照明は無く視界は暗いまま。

何も見えない事に、亜矢が不安を感じていると彼女の中で真矢も目を覚ました。

「い、つつ……………」

「(真矢、大丈夫?)」

「それはこっちのセリフよ。怪我は無い?」

「(あちこち痛いけど、大きな怪我はしてないと思う)」

「そう……………あ! 仁君は!?!」

真矢に言われ、亜矢は手探りで落としたりライトを探して仁を見つけようとした。自分よりずっと重症だったのだ。今の崩落の衝撃で怪我が悪化していないか心配だった。

手探りで近くを探す亜矢だったが、手が届く範囲にはなさそうだったので亜矢はライトを探すのを諦め携帯のライトを使用して仁を探そうとした。

携帯のアプリからライトを選択し、灯りがつき前方を照らす。

その瞬間、亜矢は巨大オニソメと出くわした。

「ッ?!?!」

あまりの驚愕に声も出せず後退る亜矢。巨大オニソメは5本の触覚を動かし彼女にゆっくり近づいてくる。亜矢は巨大オニソメを照らしながら後退りするが、直ぐに背中が崩落したトンネルの瓦礫にぶつかりそれ以上下がれなくなる。

「あ——」

後ろには下がれず、巨大オニソメはこちらに近付いてくる。絶体絶命の窮地と言う所で亜矢はトンネルが崩落する直前、変身準備が出来ていた事を思い出した。

即座に手をレセプタースロットルに伸ばし変身しようとした亜矢だったが、その瞬間横から伸びた手が彼女の口とレセプタースロットルに伸びていた手を押さえつけた。

「んッ!?!」

「しー……」

亜矢の口と手を押さえたのは仁だった。彼は亜矢に静かにするよう目で訴えると、そのまま動かず彼女の携帯で照らされた巨大オニソメをジッと見つめる。

巨大オニソメは2人に襲い掛かる事なく、触覚を動かしゆっくりと近付いてくる。

こいつは何故一思いに襲い掛かってこないのか。自分達が恐怖し動けないと思って

焦らせて楽しんでいるのかと亜矢が訝しんでいると、仁が自分の携帯を取り出した。一体どうするのかと亜矢が彼の手の動きを目で追っていると、彼は徐に亜矢のデイナドライバーからアダプトキャットを外しベクターカートリッジを抜き、自律モードに変形させると自分の携帯を唾えさせてトンネルの奥へと向かわせた。

本来は亜矢の言う事しか聞かない筈のアダプトキャットだったが、その亜矢の危機だという事だからか仁の言う事を聞いている。

アダプトキャットが遠くへ離れ、暗闇の向こうへと消えたのを確認すると仁は亜矢の手から携帯を取り電話帳から彼の番号を検索し電話を掛けた。トンネルの暗闇の向こうから、仁の携帯が鳴らす着信音が反響して聞こえてくる。

その瞬間、巨大オニイソメは機敏な動きでそちらを見るとトンネルの奥へと消えていった。巨大オニイソメの姿が完全に見えなくなり、携帯の着信音が殆ど聞こえなくなったところで仁は電話を切り小さく息を吐いた。

「ふう……上手く行った」

「な、何で？ 私達、あんなに近くに居たのに……」

「簡単だよ。あいつ、目が見えてないんだ」

真矢を庇って重傷を負った後も、仁は周囲をつぶさに観察していた。

その中で彼が注目したのは、巨大オニイソメの奇妙な動きだ。奴は仁が重傷を負った

のを分かっている筈なのに、彼に追撃する様子を見せず派手に発砲するスコープばかりを狙っていた。最初は先に邪魔者を始末しようとしているのかと思ったが、巨大オニソメの中に仁に追撃を喰らわせようとする仕草を見せるものが一体も居なかったのだ。「最初に襲われたのは、直前に声を上げた真矢さんだった。あれも真矢さんの声を目印にして攻撃したからなんだ」

「そっか、それで……。あ、それより仁君、傷は大丈夫ですか？」

「ん……まだかなり痛むけど、動けない程じゃないよ。ドライバー付けてるお陰で細胞が活性化してるからか、治りが早い。もう少しすれば問題ないレベルになるかも」

「そうですか……。良かったです」

即座に命に別状が無いだろう事が分かり、亜矢はほっと一息つく。彼女の中では、真矢も同様に安堵していた。元はと言えば真矢が油断したのが仁の負傷の原因であるとも言えるのだ。真矢は真矢で結構気にしていた。

【ゴメン、亜矢。私が油断したから】

「気にしなくても大丈夫だよ、真矢」

「ん？ 真矢さん、どうかしたの？」

「仁君が怪我した事に責任を感じてるんです」

「それなら気にしないで。あれは仕方ないよ。それより今はここを移動しよう。また崩

れないとも限らないし」

立ち上がり移動しようとする仁だったが、足に力が入らないのかガクリと倒れ込む。亜矢は咄嗟に彼を支え、彼が倒れるのを未然に防いだ。

「うっ!？」

「仁君ッ!？」

「つう、ゴメン。まだ足にダメージが残ってるみたい」

「気にしないでください。さ、行きましよう」

仁そのまま亜矢に支えられ、ゆっくりとした歩みでトンネルの奥へと移動していった。

その2人が向かう先には、今は廃駅となった無人の駅があった。都市開発に伴い使われる事が無くなり、駅としては存在しないものとなった場所である。

その奥、一際広い空間にそれは居た。一見するとバカでかいただの肉塊に見えるそれ

の上部からは、無数の巨大オニソメが生えていて何本かはトンネルの奥へ向かって伸びている。

こいつが仁達に襲い掛かった巨大オニソメの本体であった。

その巨大オニソメを生やした肉塊を、モニター越しに雄成とアデニンが眺めていた。

「……凄い光景ですね。とてもファッジとは思えません」

「あれは飽く迄一形態だよ。十分にエネルギーを溜め込めれば新たな姿になる」

「蛹の様な物ですね。しかし何故エネルギーを現地調達させるのです？ 社の研究室で行えば騒動が大きくなることも無かったのでは？」

「それだとあの状態での戦闘力が分からないだろう。あの状態でどこまでやれるか、それを見ておきたいですね」

あの肉塊はファッジだった。オニソメとイソギンチャク、二つの遺伝子を用いたキメラファッジ。しかし生み出した瞬間、このファッジは今までのキメラファッジにはない変異を遂げた。突如として肉塊の様な姿になると、オニソメを生やして近くに居た人間を片っ端から襲い始めたのだ。

これは不味いと、傘木社は生み出したばかりのファッジを自分達で倒し一時無力化。その後、場所を移してこの場で再びファッジを生み出し、カメラで監視しているのであ

る。

しばらく放置していると、キメラファッジは肉塊から伸ばしたオニイソメを使って次々と人間を捕食。S. B. C. T. も把握していないが、実はすでに多くの人々が奴の犠牲となっていた。その多くは所謂浮浪者で、居なくなっても気付かれる事が殆どなかったが今回作業員が犠牲となった事でその存在が発覚したのである。

カメラの向こうではキメラファッジが何処かへ向けて積極的にオニイソメの触手を伸ばしている。時々戻ってくるオニイソメはポロボロになっているので、その先で戦闘が行われている事は容易に想像できた。

「先程からファッジが傷付く事が増えましたね」

「仮面ライダーが来たんだろうね。恐らくはS. B. C. T. も来たんだろう」

「先程戻ってきた触手がS. B. C. T. の隊員を啜えてましたから、まず間違いありませんね」

「まあ、触手の部分をいくら潰しても意味は無いがね。幾らでも再生するし」

2人が見ている前で、キメラファッジは被弾したオニイソメを引っ込め体内に吸収すると、新しいオニイソメを生やしそれを伸ばした。生憎と地下鉄全域を監視している訳では無いので、あのオニイソメが伸びていった先でどんな戦いが行われるのかは分からない。

だが推し量ることは出来た。

「さて………ここまで辿り着く事が出来るか。お手並み拝見と、いこうじゃないか」

仁と亜矢は極力音を立てないようにしつつ、線路沿いに進み出口を目指していた。傷を癒すにもファツジへの対抗手段を考えるにも、今はこの魔窟と化した地下鉄の路線から出なければならぬ。

そんな中、仁に肩を貸して歩いていた亜矢は、途中から内面に引つ込んだ真矢に対して違和感を覚えていた。何と言うか、妙に静かなのだ。

この暗い路線を、いつ出てくるか分からないファツジの巨大オニソメに警戒しながら歩かなければならない現状。仁が負傷して歩く事がやつとの中で、何時もの真矢であれば亜矢を鼓舞する為にちよつとふざけた事を言ってきたりするのが普通なのに、だ。

あまりにも静かなので、気になった亜矢は歩きながら真矢に問い掛けてみた。

「(真矢、さつきから静かだけどどうしたの？ 何時もの真矢らしくないよ?)」

【……ううん、何でも無い。ゴメン……】

亜矢の問い掛けに、真矢が覇気のない声で答える。こちら辺も何時もの彼女らしくない。何時もの真矢なら、もっとあっけらかんとした様子を見せるのだが。

「さつき仁君が怪我した事に、責任感じてるの？」

【ッ!?!】

まさかと思いきや、亜矢が真矢の元気がない理由を予想して指摘すると、真矢が息を呑むのが分かった。

どうやら真矢は、先程油断をして仁の足手纏いになってしまった事を強く気にしていたらしい。この覇気の無さはそれが理由だったのだ。

珍しく弱々しい姿を見せる真矢に、亜矢は歩きながら目を丸くした。そしてその後、今度は思わず溜め息を吐いた。

「そんな、気にしなくても大丈夫だよ。仁君そんな事をいちいち気にしないって」

【分かってる……仁君がそんな事気にしない人だつて事は。ただ……】

「(ただ……何?)」

【……ううん、何でも無い】

真矢はそれつきり口を閉ざしてしまい、亜矢からの問い掛けに対し何も答えなくなってしまう。

らしくない双子の姉妹にして自身の半身の態度に、亜矢は顔に困惑を浮かべていた。すると仁がそれに気付いた。

「どうか、した？」

「あ、え？」

「何か、困ってるって言うか……そんな感じに見えた」

仁の指摘に亜矢は自分も大概だと思わず苦笑し、そして真矢に異変が起こっている事を仁に相談した。

「実はさつきから、真矢の様子が可笑しくて……」

「ん……さつきの事、気にしてるのかな？」

「私もそう思ったんですけど、どうもそんな単純な話じゃないみたいで……」

「それって本当にさつきから？ もっと早い段階で様子が可笑しかったりしてない？」

「早い段階？」

「俺、今日真矢さんが出てきたの見たのさつきが初めてだったんだけど」

言われて亜矢はハッと気付いた。亜矢にとって真矢は常に傍に居る存在だから忘れていたが、今日真矢が表に出てきたのはあの欠損した遺体を直接見る時が初めてだった。

仁と亜矢、2人が知る真矢にしては今日は随分と控えめだ。

何かが可笑しいと感じさせるには十分だった。

事実、こんな話をしているのに真矢からは何の反応も無い。

違和感を感じた亜矢がもう一度真矢に問い掛けようとした時、2人は灯りの無い駅に辿り着いた。

「あ、え？　ここは？」

「ん……多分使われなくなった廃駅だね。駅としての機能は別の所に移して、駅そのものは残したって感じ」

「じゃあ、ここに出口は？」

「塞がれてる、と思うよ。流石に使わない駅の出入り口を残してはおかないでしょ」

「そう、ですか」

「でも入り口跡とかはある、と思う。ちよつと無理やりにも、そこから出る事、出来るかも……」

「仁君？」

段々と仁の言葉が途切れ途切れになってきた事に、亜矢が不審に思つて彼の顔をライトで照らす。すると彼の顔には大粒の汗が浮かんでいた。

よく見ると肩も大きく上下していて呼吸も荒い。ここまで気付かなかつたのが不思議なくらい仁は消耗している様子だった。

彼の様子に亜矢は思わず目を見開いた。

「な、仁君ッ!？」

「ゴメン……そろそろ、歩くのがきつくなってきた……」

「待っててください、今休める所に——!」

廃駅に到着できたのはある意味いいタイミングだったかもしれない。殆どもぬけの空だろうが、休むには十分な場所がどこかにある筈だ。

仁を支えながら亜矢が廃駅の職員用の通路に入りドアを片っ端から調べていく。やはりと言うかドアには既に鍵が掛かっておらず、調べるのに不自由はしない。

そうしていくつかドアを開けた時、2人は職員用の休憩室の様な部屋に辿り着いた。運の良い事に部屋には大きめのソファが置かれている。廃駅になってからずっと放置されていたのかボロボロだが、床よりは断然寝心地は良いだろう。

亜矢はソファまで仁を運ぶと、仁を横に寝かせると同時に自分も端の方に座り彼の頭を自分の膝の上に乗せた。

「ふう……少し楽になった。ありがと、亜矢さん」

「気にしないでください」

亜矢の膝から伝わる彼女の体温に、本能的に安心したのか仁の顔が先程よりも安らかなものになる。自然と亜矢の手は彼の頭に伸び、幼い子供を寝かしつけるようにゆつく

りと撫でた。数回ほど撫でると、仁は寝息を立て始める。

仁が体を休めてくれ始めた事に亜矢が安堵の溜め息を吐きつつ、巨大オニソメの襲撃を警戒して辺りに気を配った。

するとそれまで静かにしていた、真矢が亜矢に声を掛けた。

【亜矢、亜矢も少し休んだら?】

「(でも、まだ安全と決まった訳じゃないし……)」

【それなら心配しないで。私が代わりに見張ってあげるから】

体は一つだが、精神だけでも休めておけばいざと言う時動きやすくなる。真矢は自分が率先して見張り役を買って出て、亜矢を休ませようとしていた。

そんな真矢の気遣いだったが、亜矢はそこに違和感を感じずにはいられなかった。

「……ねえ真矢? どうしたの?」

【どうしたって?】

「今日の真矢何だか変だよ? 自分から大変な役割を買って出て……」

思えばさつきも、無残な遺体を直視する役目を自分から亜矢と代わっていた。あの時は純粹に助かったと思っていたが、今になって考えてみればあの時の主導権の交代は少し強引だった気がする。

まるで辛い事は全て自分が引き受けようとしているようである。

亜矢からの問い掛けに、真矢は言葉に詰まった。その沈黙は、真矢の内心を何よりも雄弁に物語っていた。

「ねえ、真矢？ 私達、もうただの双子じゃない。2人で1人なんだよ？ 楽しい事も、辛い事も分かち合わせて。1人で全部抱え込まないでよ」

「——!?!」

真矢が息を呑んだのが亜矢には分かった。やはり真矢は、何かを無理しているのだ。問題は何を無理しているのか、だが——

「いいのよ、私の事なんて心配しなくて。亜矢は仁君と自分の事だけを考えていれば……」

「……ええ？」

真矢の口からぼつりと呟かれた言葉。そこには彼女が今まで表に出してこなかった想いが込められていた。

「私は、真矢だけど真矢じゃない。亜矢の中で生まれた、真矢の模造品なのよ」

「そんな事ない……どんな形でも、真矢は真矢だよ——!?!」

「でも体の主導権を最終的に握ってるのは亜矢。結局、私は移植された真矢の臓器の付属品に過ぎない程度の存在なのよ」

以前白上教授が、真矢の事を一言で例えて副産物と称していた。その時真矢はそれを

軽く笑い飛ばしていたが、内心ではその事を何よりも気にしていたのだ。

付属品、副産物……自分をその程度の存在と位置付けてしまっている彼女にとって、己の存在意義を見出す為には今は亡き本当の真矢が最後まで成し遂げる事が出来なかつた事……即ち、双子の姉妹である亜矢の幸せを最後まで見届ける事であつた。

「仁君が亜矢の恋人になつてくれた。これからは仁君が亜矢を笑顔にしてくれる。なら、私に出来るのは消えるその瞬間まで亜矢を守る事だもの」

「消えるつて、真矢——!?!」

「だって私、必要に応じて生まれただけの副産物だもの。きつと戦いが終わつて必要無くなつたらその内消えてなくなるわ」

「そんな……そんなの——!?!」

真矢の言葉を否定したい亜矢だったが、頭の何処かではその未来もあり得ると納得してしまつていた。頭の一部が納得してしまうと、考えが頭の中で競合し合い否定の言葉が素直に出てこない。

「でも真矢……仁君の事愛してるつて言つてたじゃない。それも嘘だつて言うの?」

何とか捻りだした言葉は、まだ亜矢が仁への気持ちを打ち明ける事に足踏みをしていた時に真矢が告げた仁への愛。あれだけ亜矢に対して発破を掛けるように仁への愛を口にしていただけなのに、それをすんなり諦める事が出来るのか?

「あれは………ああでも言わないと亜矢、なかなか仁君に告白しないだろうと思ったから。ただそれだけよ」

真矢の答えに亜矢が完全に言葉に詰まり、目に涙を浮かべるしか出来なくなつてしまった。

「どうかしたの?」

その時、悲しみを含んだ亜矢の声に反応したのか仁が目を覚ました。亜矢は仁が起きたのを見ると、他にどうしようも無くなり彼に縋りつき涙を流した。

「仁君………お願いです! 真矢を……真矢を、助けて!」

「どう言う事?」

亜矢の膝枕で眠っていた仁は、当然ながら亜矢の中で行われた会話を知らない。亜矢は涙ながらに真矢とどんなやり取りをしたかを仁に話した。

全てを聞き終え、啜り泣く亜矢を仁が優しく撫でて慰めた。

しかし彼の表情は険しい。何しろ当の本人である真矢が色々と諦めているのだ。そんな彼女をどう救えば良いと言うのか。

だが彼とて真矢の事を見捨てようなどとは思っていない。真矢が居無くなれば亜矢が悲しむし、何より仁だつて真矢にも笑顔でいて欲しいのだ。真矢は亜矢の半身と言つても過言ではない存在。亜矢を愛するという事は真矢を愛する事と同義。2人で1人

の彼女の内、片方を蔑ろにするなど彼には出来なかった。

そこまで考えてから、この問題は悩むほどの事ではないと気付いた。考えてみれば簡単だったのだ。

唯一心配な事があるとすれば亜矢がどう思うかだが……とにかく話してみる外は無いだろう。

そうと決まれば、と自分の考えを仁が口にしようとしたその時、突然2人が居る部屋の扉が派手な音を立てて外からの衝撃に凹んだ。

「ッ!?」

何事かと2人が顔を上げ扉の方を見ると、扉は二度三度と外から叩かれた。何があつたかなど考えるまでも無い。2人の居場所がフアツジにバレたのだ。

流石に話す声が大きく過ぎたかと、仁がバツの悪そうな顔をしつつ立ち上がる。まだ少し脇腹が痛むが、この程度なら我慢できる。

何より、ここまで来たら寧ろ変身した方が状態が良くなるだろう。仁はそう考え、二つのベクターカートリッジを取り出した。

亜矢も変身しようとして、そう言えば仁が困にする為は何処かに行かせてしまった事を思い出す。

しかしアダプトキャットは優秀だった。突然2人の近くの通気口のフェンスが外れ

ると、そこから仁の携帯を啜えたアダプトキャットが下りてきたのだ。

「あ、お帰り」

「良かった、無事だったんですね！」

なかなか戻ってこないの、何処かでやられてしまったのではないかと心配していたのだが杞憂だったらしい。流石峰の自信作。酔っ払いながらも自慢するほどの出来栄である。

亜矢は戻ってきたアダプトキャットを本当の猫の様に撫でて労うと、変形させべくターカートリッジを装填しドライバーに装着した。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

「仁君、無茶だけはしないでくださいね？」

「無茶な相談しないで。こいつはそんな余裕を持ってやれる相手じゃなさそうだよ」

【私がサポートするから大丈夫よ】

仁と亜矢・真矢が話している間もドアは激しく叩かれる。もう後一撃でドアは白旗を上げ突き破られるだろう。

それを察した2人は、レセプタースロットルを引いて仮面ライダーに変身した。

「変身ッ！」

〈Open the door〉

2人がデイナとルーナに変身すると、同時に扉が吹き飛びそこから無数の巨大オニソメが飛び込んできた。

デイナは接近してきた巨大オニソメを蹴り飛ばし突撃の軌道を逸らすと、抱えるように掴み手刀で切斷した。

一方のルーナは、両太腿からリプレッサーショットを抜き素早い射撃で巨大オニソメの体を穴だらけにしていく。

2人の抵抗に巨大オニソメたちは悲鳴を上げて引つ込んでいく。巨大オニソメ達が逃げていくのを見て、2人はその後を追い掛けた。

「きつとあいつらが引つ込んでいった先に本体が居る筈。そいつ潰さないとキリがない」

「はいー」

逃げる巨大オニソメを追うデイナとルーナ。時折別方向から襲い掛かってくる奴を迎え撃ちながら追跡していくと、2人は駅の中で一際開けた空間に出た。

そこで2人はとんでもないものを目にする。天井に届きそうなほど巨大な肉塊とその上部から無数に生えている巨大オニソメ。こいつこそが2人に今まで襲い掛かっていた巨大オニソメの本体である。

その姿に2人は思わず顔を顰めた。

「うげえ……何これ？」

「これ、ファッジなんですかッ!？」

「みたいだね」

「何でこんな事に……」

「二つの遺伝子を混ぜた結果起きた予想外の事態って感じ？　よくある事だよ、遺伝子工学には」

そんな事より今はこいつを倒す事を考えなくては。ダイナがそう考え拳を構えると、ルーナもリプレッサージュをライフルモードに連結させて構えた。デカイ相手ならこつちの方が良い。

勝負を仕掛けようと2人が身構えた。その瞬間、突然肉塊の様なイソギンチャクボダイから伸びていた巨大オニソメが力無く地面に落ちた。それだけではない。イソギンチャクボダイそのものも果物が腐る時の様に各部から体液を滴らせながら萎れていった。

「……え？」

まだ何もしていないのに死んだように姿を変えていくキメラファッジに、ダイナとルーナが困惑していると更に変化が起こった。

イソギンチャクボディの一部が不自然に脈打ち、膨れ上がると内部から鋭利な刃が飛び出し肉塊を切り裂いて中から人型が姿を現したのだ。

「ッ!? あれはッ!?」

「……進化したのか?」

ぐずぐずに崩れる肉塊の上に立つのは、十分なエネルギーを溜めて新たな姿に変異したキメラファアツジであった。全身を粘液で濡らし、顔はオニソメそのもの、両手にはオニソメの牙と同形のブレード、そして一見逞しい大胸筋の様な胸部は、開くとイソギンチャクの触手と口が姿を見せた。

完全な姿に変異を遂げたキメラファアツジは、体を解すように各部を動かすと2人に向って突撃してくる。

「シヤアツ!」

「つと」

向かってきたキメラファアツジは両手の刃で斬りかかってきた。デイナはそれを前に出て受け止め、キメラファアツジが動きを止めたと見るやルーナがリップレッサーショットを向け引き金を引いた。

「そこです!」

見た目に反する事なく、キメラファアツジの体は柔らかくリップレッサーショットの銃弾

が容易く貫通した。このまま一気に押し切ってしまったと、ルーナは次々と引き金を引きキメラファアツジを追い詰める。

が、ここでキメラファアツジが抵抗を見せた。ルーナの銃撃に耐えるように腕で頭を庇いながら前進し、両手の刃でデイナを切り裂いた。

「グッ?!」

「なっ!? あれだけ撃たれてまだ動けるなんてっ!?」

「待って亜矢、よく見てっ!」

真矢に言われてルーナがキメラファアツジをよくよく観察すると、ルーナに撃たれた箇所が盛り上がるようにして塞がっていった。急速に再生しているのだ。

「オニイソメって、こんなに再生力強いんですか!」

「いつつ……。いや、オニイソメ自体の再生力はそこまででも無かった筈だよ。多分混ざってるのはイソギンチャクか何かだろうけど、そいつもあそこまでの再生力は無い」

「じゃあ、何で?」

デイナとルーナが見る前で、キメラファアツジは悶えるように体を震わせながら傷を再生させる。だがよく見ると傷が再生するだけでなく、傷の無い部位も不自然に盛り上がっては崩れて再生するを繰り返していた。どうやら単純に傷が治癒しているだけでなく、全身の細胞が不規則に細胞分裂と細胞死を繰り返している様だ。

それを観察して、デイナは一つの結論に到達した。

「そっか……あいつ細胞が暴走してるんだ」

「どう言う事です?」

「細胞が活性化し過ぎて、プログラム細胞死が正常に機能してないんだ。出鱈目に細胞が急激に分裂したり細胞死したりを繰り返して、異常が無い場所の細胞まで必要以上の破壊と再生を起こしてる」

多細胞生物は本来、不要な細胞を計画的に切り捨て新しい細胞を生み出す事で正常な姿を保っている。だがあのファッジは、超万能細胞が異常活性化した結果その機能が正常さを失い、無作為に細胞が増殖と崩壊を行っているのだ。損傷部位が急激に再生しているのはその副産物の様な物であった。

「あれが続くとどうなります?」

「想像するしかないけど……崩壊が再生を上回れば自滅するし、再生が崩壊を上回ればエネルギーが続く限り際限なく膨れ上がるんじゃないかな」

どちらにしてもろくでもない事になるのは変わりない。ここは一気に勝負をかけるべきと、デイナはBHエレキテルカートリッジを取り出した。

「ああ言うのは、一気に焼いた方が良い」

〈BUFFALO + HUMAN Light up〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

バッファローヒューマンエレキテルにゲノムチェンジしたデイナは、ハンドルを回して充電すると一気に接近し、充電した電気を高速移動では無く電撃を攻撃に付与する事に使いキメラファアツジを攻撃した。拳や蹴りが突き刺さる毎に放たれる高圧電流が、キメラファアツジの異常活性化した細胞を焼いていく。

「ゴボアアアアアアアアッ!」

キメラファアツジの方もただやられている訳では無く、細胞を焼かれながら反撃を放ってきた。再生を制御できている訳では無いので、無事な細胞が不自然に増殖してどんどん歪な形になっていく。

デイナはキメラファアツジからの反撃を超高速で回避し、更に電撃を伴う攻撃を叩き込む。放電がキメラファアツジの全身を焼いていき、再生可能な細胞がどんどん減っていった。

「オゴ、ア、ガガ……」

立て続けに攻撃を受け細胞を焼かれ、エネルギーも枯渇したのかキメラファアツジはその場に膝をついた。

そこを見逃さず、デイナはトドメの一撃を放った。

「この戦い、レポートは纏まった」

〈Charge up ATP Burst〉

動きを止めたキメラファッジに向け、デイナはエレキテルクラッシュを発動。放電で相手を焼きながら放つ飛び蹴りがキメラファッジに突き刺さる。強烈な放電がキメラファッジの異常な細胞を焼き尽くし、限界を超えたダメージがベクターカートリッジを排出させた。

それによつて被験者とされた人も元に戻り、2人は脅威が去つた事に安堵の溜め息を吐いた。

「はあ……終わつた……」

「お疲れ様です仁君」

「亜矢さんもね」

2人は互いに労い合うと、変身を解除した。そして被験者の人に近付き、まだ息がある事を確認する。

そこに奥の方からスコープに率いられてS・B・C・T. が雪崩れ込んできた。あの瓦礫を撤去したのかそれとも別のルートからここに来たのかは分からないが。

「おーい、門守君！ 双星さん！」

「あ、権藤さん」

「無事だったんですね！」

「そいつはこっちのセリフだ。あの崩落に巻き込まれて怪我でもしたんじゃないかと心配したぞ」

ファッジが既に倒されていると思しき様子に、スコープは変身を解除して安堵した表情で2人に近付く。その周りでは、S・B・C・Tの隊員達が周辺警戒と後処理の準備を進めていた。

「真矢さんのお陰で助かってね」

「そうか……それより傷の方は大丈夫か？ かなりの深手だったように見えたが？」

「そっちも大丈夫。ドライバーの副作用で傷の治りが早くなってくれてるから」

切り裂かれた脇腹は服がそのままだし乾いた血がこびり付いているが、その下には既に塞がった傷があるだけとなっていた。

とにもかくにもこれで今回の騒動も解決と言って良いだろう。

一件落着

「あ……これ……？」

「仁君？」

【ツ！ 亜矢代わって!?!】

一安心と言ったところで、突然仁の体がぐらりと傾くとそのまま倒れた。

仁の異変に素早く気付いた真矢が亜矢に警告を発し、主導権を譲り受けると彼女は倒れる仁を素早く支えた。

「どうやら体力的に限界が来たらしい。先程の戦いは状況故にかなり無理をして行っていたのだ。」

平気で無茶をする彼に、亜矢と真矢は困ったものだと思つて溜め息を吐く。

「仁君、無茶し過ぎ。亜矢がさつきから凄い勢いで心配してるわ」

「ん、ゴメン。じゃあ、こつからは頼つても良い？」

「お安い御用よ」

「ん……………」

「そうして仁は意識を手放し、真矢と宗吾によつて外の救急車によつて近くの病院に搬送された。」

傷は癒えているとの事だが、念の為だ。

後処理がされる廃駅の様子を、隠しカメラから雄成達がジツと見ていた。

「ふむ……………ま、こんなものだろう」

「今回はかなり面白い結果が得られましたね。あんな反応は初めての事です」

「そうだね……………だがあれは失敗だ」

予想外のデータは取れたが、あれは雄成が求める結果では無かつたようだ。過剰な細

胞の活性化によるプログラム細胞死の暴走。向かう先が滅びしかない先の無い袋小路の変異は、彼の望む結果では無かったのだ。

直ぐに興味をなくし、研究室を後にする雄成。アデニンはそれを見送ると、最後の始末とばかりに簡易ベクタープレスと隠しカメラの証拠隠滅用装置のスイッチを押し、後の事を研究員達に任せ自身も研究室を去るのだった。

病院に搬送された仁はその日の夜には目を覚ましていた。彼の言う通り、傷はもう言えていて意識を失ったのも体力の消耗によるものだけで他に異常は見られないとの事。

彼が目を覚ますと、ベッド脇で椅子に座っていた亜矢が覗き込んできた。

「仁君、目が覚めましたか？」

「ん……もう大丈夫。亜矢さんの方は大丈夫だった？」

「お陰様で」

「良かった」

互いに問題ない事を確認し合い、安堵の表情を浮かべる仁と亜矢。2人の様子に、亜矢の内側から見ていた真矢もそつと笑みを浮かべていると徐に仁が表情を引き締めて口を開いた。

「それで、亜矢さん」

「はい？」

「ちよつと、真矢さんに代わってほしいんだけどいいかな？」

「……はい」

気を引き締めた様子で真矢との交代を望んだ仁に、亜矢も彼が何をしようとしているのかを察して主導権を真矢に譲り自分は内側に引つ込んだ。

真矢は突然表に押し出され、少し困惑した顔をしている。

「え、ちよ、亜矢？ 仁君？」

「真矢さん」

「え……？」

珍しく神妙な顔をする仁に、思わず真矢も姿勢を正す。彼女が自分の方を向いて背筋を伸ばしたのを見ると、仁は徐に真矢を正面から抱きしめた。

突然の抱擁に、真矢は珍しく狼狽える。

「え、え、何？ どうしたの急に？」

「真矢さん……真矢さんは亜矢さんのオマケなんかじゃないよ。体は亜矢さんと一つだけど、真矢さんも立派な一人の人間だよ」

「ッ!?!」

「だからさ……もつと自分に正直になつても良いと思うよ。亜矢さんに気を遣つたり、自分の自由を諦めたりしないで」

仁の言葉はとても甘美だった。気をすっかり持たなくては、そのまま流されてしまいうようになる。

だが自分は所詮不安定な存在だと、もしかしたらいつか消えるかもしれない儂い存在だと言ひ聞かせ一線を超えないようにと踏み止まった。

「やめ、てよ——!?! そんな事、言わないで——!?!」

「それに俺、そんなに器用じゃないからさ。亜矢さんだけを愛して、真矢さんだけを愛さないなんてことできそうにないんだ。だから——」

「止めてそれ以上言わないでッ!?!」

「俺に真矢さんの事も、愛させてくれないかな?」

そうすれば、真矢には生きる意味が出来る。仁と亜矢、2人の人間に愛されると言う生きるには十分過ぎる理由が。

それを理解した瞬間、真矢の目から滝の様に涙が零れ落ちた。泣き顔を見られなくな

くて、真矢は仁の胸に顔を埋める。

「私……2人の邪魔にならない？」

「ならないよ」

「亜矢は……本当にそれで良いの？」

「うん。だって私達、もうただの姉妹じゃない。2人で1人なんだよ。私1人じゃなくて、真矢にも幸せになってほしいよ」

存在を受け入れてくれる2人に、真矢は声を上げて泣いた。

最初亜矢の中で自意識に目覚めた時、真矢は自分がどういふ存在なのかを臆気ながら早々に理解した。そして、意識がある内は亜矢を死んだ真矢に代わって守る存在になろうと心に誓った。

だが仁に存在を見抜かれ、隠れてはいられないと表に出るようになり、仁や亜矢と普通に接していく内に2人との関係を純粋に楽しむようになっていった。そして、それが失われる事がとても怖くなった。

何より恐ろしかったのは、亜矢と仁の關係に罅を入れ亜矢を悲しませるところか彼女に疎まれる事。亜矢の中から逃れる事が出来ない自分にとって、亜矢に拒絶される事は何よりも恐ろしい事であった。

そんな思いを味わう位なら、自分は亜矢を助けるだけの存在になろうと決めたのに、

2人は真矢の存在を受け入れ、彼女に愛を注いでくれた。

それが嬉しくて、安堵と歓喜が溢れて止まらなくなった。

「怖かった——!?! 私、もし2人と笑えなくなったらって思ったら、凄く……凄く怖かった——!?! だから、せめて2人の間には、居られるようにって——!!」

「大丈夫……俺も亜矢さんも、真矢さんと笑い合いたい気持ちは一緒だから」

「真矢が幸せになっちゃいけない理由なんてどこにもないよ。一緒に幸せになろう」

傍目から見れば仁が真矢を抱きしめているだけの光景。だがしかし、真矢は仁と共に亜矢にも抱きしめられている感触を確かに感じていた。

後から生まれた、後天的二重人格故の孤独。密かにそれに苛まれていた真矢は、この瞬間その孤独から救われたのだった。

それから数分ほど泣き続け、落ち着いた頃には何時もの真矢に戻っていた。

「何か、ゴメンね。情けない所見られちゃって」

「何言ってるのさ。俺や亜矢さんの前で位、幾らでも甘えてよ」

「仁君の言う通りだよ、真矢。私だってそんなに頼りなくはないつもりなんだから、甘えなくなったら何時でも甘えてよ」

2人からの言葉に、真矢はクスリと笑みを浮かべた。

「えっと、それで……改めて私の気持ちを言わせて」

「ん……」

「その……私も亜矢と同じ、仁君の事が大好き。だから、その……これからもよろしくね」

「ん、こちらこそ」

仁が両手を広げると、真矢はそこに飛び込み満足そうな笑みを浮かべた。心から安堵した様子の子の真矢に、仁も、内面に居る亜矢も真矢を優しく見つめていた。

第27話：太古からの贈り物

恋人同士になってからは、前以上に一緒に居る事が多くなった仁と亜矢だがそれでも四六時中一緒に居る訳ではない。

朝晩は互いに自宅へ帰っているし、大学に居ても予定が合わなかったりする時は別々に行動する事もあった。

現在、仁は大学敷地内の喫茶店のテラス席で1人コーヒーを啜りながらノートパソコンを叩いていた。ノートパソコンの机身はベクターカートリッジや超万能細胞に関する知識。これまでの戦いで仁が独自に学び、考えた知識を纏めているのだ。

亜矢はと言うと、図書室にて卒論に関する資料を集めている。最初は仁も手伝おうとしたのだが、流石にそこまで頼るのは悪いと亜矢がそれをやんわり拒否。喫茶店で待ち合せようという事で一度分かれたのである。

手持無沙汰になった仁は暇な時間を利用して、これまで得た知識を今こうして纏めていたのだ。

そこに近づく人物が居た。少し伸ばし目の黒髪はあまり手入れがされておらず、服装も何処かだらしない。だがその割には活気に満ちた男子学生だ。

その男子学生は、鼻歌を歌いながら喫茶店に入ってくると仁が座っているテラス席のテーブルの対面に座った。

「あ、ジンジャエール一つ」

「かしこまりました」

男性は無遠慮に仁の対面の席に座ると平然と店員に注文した。その後も鼻歌を歌い続ける学生に、仁は一度視線を向けるとキーボードを打ちながら話し掛けた。

「随分と御機嫌だね。何か良い事あった？」

この男子学生の名は五十嵐^{いがらし}薫^{かおる}、仁の住むアパートで彼の上の階に住んでいる男である。

薫は仁に問い掛けられると、待つてましたと言わんばかりに身を乗り出し答えた。

「おっ！ 気付いた？ 気付いちやった？」

「気付いてほしそうな感じだったけどね」

「いや、分かっちゃったか。え、気になる？ 気になっちゃう感じ？」

「まあ、興味はあるよ」

あんなあからさまに『私御機嫌です』と言う雰囲気バラ蒔いておきながら、気付いたも気になるも何もない。小学生が自分の誕生日を周りに気付いてほしくて態と機嫌良さそうにしている様なものだ。正直鬱陶しい。

しかし気になるのは事実だった。この男がこんな風に機嫌良さそうにしているのは初めて見るし、仁の勘が彼の話は聞くべきだと囁いていたのだ。

好奇心に突き動かされるまま、キーボードを打つ手を止め薫の話に耳を傾ける。

仁が興味あると言う姿勢を見せると、薫は楽しそうに笑いながら身を乗り出し小声で話してきた。

「あのな？　これまだ外部には秘密の事なんだけどな……」

「うん……」

「実はうちの研究室で、遂に見付けちゃったんだよ！」

「何？　新種の化石？」

薫の所属する研究室は古生物学を扱っている。なので彼がテンション高く見つけたと言うのなら、それは新種の古生物の化石だろうと思っただのだ。

だが彼の口から出てきた答えはその斜め上を行っていた。

「違うよ、DNAだよ！　恐竜の生DNA！」

小声で声を張り上げると言う器用な事をやってみせる薫だったが、仁はそれどころでは無かった。

薫の答えに好奇心を強く刺激された仁は、一瞬思考停止すると素早く辺りを見渡しノートパソコンを閉じ自分も身を乗り出した。

「マジ？ 恐竜のDNA？」

「ははあ、興味あるだろう？ ま、実際恐竜かどうかは分からねえけど、古生物のDNAである事は間違いねえよ」

「どう言う事？」

薫の話ではこうだ。前々から彼の所属する研究室では琥珀に閉じ込められた蚊から古生物のDNAを採取する事が出来ないかと研究が続けられてきたのだが、先日彼の研究室の教授の手により幾つか蚊を閉じ込めた琥珀が研究室に持ち込まれ、そこから生きたDNAを複数採取する事に成功したのだと言う。

やってきたジンジャールで喉を潤しながらそこまで話した薫。仁は彼の研究室が為した事に素直に感心していた。

「凄いいじゃん」

「まあな……ただ一個問題があつてさ……」

それまでウキウキしていた顔を少し曇らせる薫に、仁は何が問題なのかに気付きそれを口にした。

「流石に何億年も経てばDNAは劣化してるだろうね」

「そこなんだよお、折角見つけたDNAもこれじゃ宝の持ち腐れ。しかもうちの研究室の設備じゃ解析も時間が掛かっちゃう」

「……………でも、ウチの研究室ならそこらの研究室に負けない設備でDNAの解析が出来る」

仁は薫が自分に自慢するように近付いて来た理由が分かった。これが彼の目的だったのだ。

仁が自分の真意に気付いたと分かり、薫が会心の笑みを浮かべる。

「気付いたか？」

「それが目的だったんでしょ。白上教授とウチの研究室の設備があれば、劣化しててもDNAの解析は出来る。その話を円滑に進める為に俺に話を持ってきた。違う？」

仁に言い当てられ、薫は楽しそうに指を鳴らした。

「いいねえ、流石門守！ 話が早くて助かる！ 見込んだ通りの反応だよ！ 勿論タダとは言わねえ。このDNAに関するデータはそっちの研究室と共有させてもらうからよ、どうだ？」

「いいよ。教授には話を通しておく」

「サンキュー！ 恩に着るぜえ！」

仁からの色よい返事に、薫が歓喜し彼の手を取り大きく上下に振った。

そこに資料を集め終えた亜矢が何冊か本を抱えてやって来た。

「お待たせしました、仁君……………あれ？ そちらの方は？」

「おっと！ そろそろお邪魔みたいだな。 んじゃ、失礼するぜ！」

薫はジンジャエールを飲み干すと、代金をテーブルの上に置いて去って行った。

何がか分分からず薫の後姿を見送ると、目を丸くしながら仁の方を見た。

「あの、一体何がどうしたんですか？」

「ん、ウチの研究室とアイツの研究室で共同研究しようって話」

「はあ……？」

その後、仁の口添えもあつて白上研究室と五十嵐の所属する山根研究室による共同研究で複数の恐竜のDNAの採取に成功。

この事は新聞などでも大々的に取り上げられる事となった。

それは当然、この男の目にも止まる事になる。

傘木社の社長室で、椅子に深く座りながら新聞を広げる雄成。その見出しは、明星大

学で恐竜の生きたDNAが採取されたと言う事で埋め尽くされていた。

新聞を真剣に眺める雄成の様子を、アデニンとグアニンが静かに見ている。

その2人に向けてか、それとも無意識の内になのかは分からないが雄成がポツリと呟いた。

「恐竜のDNAか………欲しいな」

明確に命令した訳ではないのだろうが、彼の呟きに対するレスポンスは早かった。

「直ちに蚊の混じった琥珀を片っ端から取り寄せます」

「それとも、明星大学に部下を送って現物を手に入れますか？」

アデニンが薫たちを真似て琥珀から恐竜のDNAを得ようとする一方、グアニンは今既にある恐竜のDNAを奪い取る事を提案する。それを聞いた雄成は新聞を畳むと、机に肘をつき組んだ手の上に顎を乗せ考え込んだ。

「ふむ……そうだね。どちらに進めてもらおうか」

雄成から許可が出た事に、アデニンとグアニンは深く頭を下げ社長室を退室しようとする。

だがその際、雄成はグアニンにだけ声を掛けた。

「ああ、そうだ。折角だ、私も行くよ」

「はっ」

予想外の言葉に、思わず変な声を上げてしまった。たかがこの程度の事に、社長が直接出張するなど……

「いえ、お言葉ですがこの程度の事であれば私だけで熟して見せます」

「いやいや、私も偶には体を動かさんとね。それに明星大学には会いたい人が居る。君の仕事の邪魔はしないよ」

「グアニン……」

「……………分かりました」

アデニンの口添えもあり、グアニンは折れ雄成の同行に頷いた。

雄成は満足そうに笑みを浮かべると、椅子を回して2人に背を向けた。

窓の方を向いた彼の顔には、その時を楽しみにしているかのように満面の笑みが浮かんでいる。

「ああ、そうだ。『例の物』は出来ているかね？」

「それに関しては技術部から完成の報告がありました。今はテストを行っている最中だとの事です」

「では折角だ。それも持つていって実戦テストといこうじゃないか」

「分かりました。では技術部にその様に伝えておきます」

思い出したように言う雄成に、アデニンが即座に答える。その答えに満足したのか、

雄成は2人に軽く手を振った。今度こそ用は無くなったらしい。

2人が出ていき、1人部屋に残される雄成。その口からは抑えきれない笑い声が零れていたのだった。

山根研究室との共同研究により、付随する形で一躍有名になった白上研究室。

亜矢が仁に紅茶を淹れながら、未だ興奮冷めやらぬと言った様子で話し掛けた。

「私、取材なんて初めて受けちゃいましたよ。はい、仁君」

「ん、ありがと。……亜矢さん美人で花があるから、取材の人達も亜矢さんの写真撮りたがってたよね」

「止めてくださいよ、教授や教授を手伝った仁君を差し置いて写真撮られるのを断るのが大変だったんですから。……もしかして妬いちゃった？」

「……………ちよつとね」

仁の答えに真矢が嬉しそうに笑みを浮かべる。

先日快挙を成し遂げた山根研究室と白上研究室は新聞やテレビからの取材を受けたのだが、その際取材陣は亜矢をやたらとメディアに取り上げようとしたのだ。特に写真の催促が凄かったのだが、それは流石に教授達に悪いと最後まで断り続けた。

それでも尚もしつこかった取材の人に対し、仁は遂に最終手段に出た。常に亜矢と取材陣の間に陣取るように立ち、彼女に取材陣が近付けないようにしたのだ。

真矢の指摘通り、自分以外が亜矢に必要以上に近付こうとしている事に対しヤキモチを焼いたのである。思い出せば随分と子供っぽいと思わなくもない行動だったが、亜矢からすれば彼に守ってもらえて純粹に嬉しかった。

そんな2人に対し、ちよつぱり不満そうにしているのが峰である。彼女には取材陣は全く近寄ってこなかったたので、少し面白くないらしい。

「良いんですよ良いんですよ。私には研究と言うパートナーが居るんですから」
「とうとう女を捨てたか。いや、今更だな」

「ぐっ!？」

やけくそになって呟いた言葉に、拓郎の言葉が重なり峰は胸を押さえる。

仁はそんな2人を視界の端に捉えつつ、亜矢が淹れてくれた紅茶を一頻り堪能した後何かを憂いような溜め息を吐いた。

それに気付いた亜矢が真矢に代わって表に出て彼に問い掛ける。

「どうしたんですか？」

「ん？ うん……今回の事、メディアに取り上げられたのはもしかして不味かったんじゃないかなって」

「何ですか？」

「メディアに取り上げられたって事は、傘木社にも知られたって事でしょ。もしかして、傘木社の連中が恐竜のDNAを欲しがって奪いに来るんじゃないかって……」

仁の何気ない言葉に、研究室に居た者全員に電流が走ったかのような衝撃を受けた。快拳に浮かれるあまり、その可能性をすっかり見落としていた。

仁の言う通り、傘木社であれば恐竜のDNAを新たなベクターカートリッジなどの研究の為に奪いに来てもおかしくはない。

「……………一応山根研究室に行ってみようか」

念には念を入れて、山根研究室の様子を見に行こうと仁が立ち上がり亜矢もそれに続こうとした。

その瞬間、研究棟の何処かから派手な破壊音が聞こえてきた。非常ベルが鳴り、研究室の外が騒がしくなる。

「まさか、もう——!？」

「先越されたね。急ごう」

デイナドライバーを手に研究室を出て、山根研究室へ急ぐ2人。

慌てふためく学生の流れに逆らって山根研究室へと向かうと、研究室の扉が破壊されているのが見えた。急いで破壊された扉に向かい、中を覗き込むとそこにはシーアーチンファッジとバツタの遺伝子を用いたファッジ・ホッパーファッジが室内の学生を薙ぎ倒し何かをトランクに入れていた。

半透明の液体の入った小さなシリンダー、あれは件の恐竜のDNAだ。

「返せッ!」

そのシリンダーを奪い返そうと、薫が無謀にもホッパーファッジに掴みかかる。ただの人間の力で押え付けられる訳も無く、薫はホッパーファッジに簡単に振り払われてしまった。

「うわっ!」

「こいつは我々が頂く。ご苦労だったな」

「ち、くしょう——!」

シーアーチンファッジの言葉に、薫が唇を噛み締め床を殴る。自分達が苦労して手に入れた研究成果を、みすみす目の前で横取りされるのだ。悔しくない訳がない。

自らの無力さに拳を握り締める薫に、シーアーチンファッジは棘を何本か抜き投げつ

けようとした。

「亜矢さん」

「はいー!」

その直前、部屋に飛び込んだ仁と亜矢がシーアーチンファツジに飛び蹴りを放つ。ただ変身していない状態での蹴りだったのでダメージにはならないが、それでも体勢を崩させホップパーファツジにブチ当てて倒し、薫を救うことは出来た。

「ぐおっ!」

「ふう……危ない危ない」

「大丈夫でしたか?」

「か、門守ツ!? それに双星さんまでツ!」

薫の無事を確かめ安堵の溜め息を吐く仁と、薫を気遣う亜矢。対する薫は、2人が果敢にシーアーチンファツジに挑んで助けてくれた事に驚きの声を上げた。

「来るだろうとは思っていたが……仮面ライダーめ」

「えっ!?! 仮面ライダー? 誰が?」

突然乱入してきた仁と亜矢の事もあって混乱している薫は、シーアーチンファツジの言葉の意味が理解出来ず2人が仮面ライダーである事に気付いていない。

仁と亜矢は薫に気付かせる為……ではないが、恐竜のDNAを取り返す為に仮面ライ

い返そうと飛び掛かる。

「それ返せ」

「冗談じゃない。フツ！」

それに対し、シーアーチンファツジは壁に向け棘を投擲し破壊するとそこからホッパーファツジと共に外へと逃げ出した。

考えてみれば奴らの狙いは恐竜のDNAを手に入れる事なので、ここで仮面ライダー達と戦闘をする事のメリットは無い。寧ろ戦えば折角の目的の物を奪い返されたり失う可能性があるのだから、戦闘を避けるのは理に適っていた。

「さらばだ、仮面ライダー」

「逃がすか」

壁の穴から逃げていく2体のファツジを、デイナとルーナが追い掛ける。ルーナは走りながらリプレッサーショットで2体のファツジの足元を狙い撃つと、ホッパーファツジの足を撃ち抜き転倒させることに成功した。更にそれに巻き込み、シーアーチンファツジも転倒する。

「ツ!？」

「うおっ!？」

「お見事亜矢さん」

「真矢のサポートのおかげですよ」

「え？ 今私何もしてないけど？」

「え？」

「え？」

どうやら亜矢には銃の才能の様な物があつたらしい。本人も気付かぬ才能だったが、ルーナとして戦う内にそれが開花したのだ。

一方、転倒させられたファッジ2体はこのままでは捕まる事を予感し二手に分かれて逃げる事にした。荷物はそれぞれ別に行っているので、最悪どちらかが運んでいるDNAが手に入る。

「お前は向こうへ行け。私はこちらから逃げる」

「了解」

シーアーチンファッジとホッパーファッジは二手に分かれ、別々の方向へと逃げていく。

デйнаとルーナも二手に分かれるべきと考え、ルーナは即座にシーアーチンファッジの方に名乗りを上げた。

「仁君、私はあのウニのファッジの方に行きます！」

「待つて亜矢さん、あいつ幹部だよ？」

「大丈夫よ仁君。私と亜矢が揃えば、あれくらい何とかなるって」
「真矢さん……分かった、気を付けて」

亜矢と真矢、2人に説得されデイナはホッパーフアツジの後を追う。

流石と言うか、脚力に優れるバッタの遺伝子を用いたフアツジは逃げに徹すると速い。一飛びでビルの屋上に辿り着き、ビルからビルへと飛び移る。

そんな奴を追い掛けるのなら、これが最適だ。

〈HAWK + LEON Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

ホークレオンフォームにゲノムチェンジすると、デイナはインペリアルウイングを広げ飛翔。ビルの合間を飛び、あつという間にホッパーフアツジに追い付いた。

「よっ」

「ッ!?!」

あまりにも早くに追い付かれ、ホッパーフアツジは驚愕の余りデイナの方に気を取られてしまった。

「前方注意」

「え? がっ!?!」

その次の瞬間、ホッパーファッジはビルの壁に激突した。デイナに気を取られ、力加減をミスってしまったのだ。

ビルの壁に激突した衝撃でトランクを落としてしまい、そのまま落下するホッパーファッジ。デイナは自由落下していたトランクを空中でキャッチすると、落下して地面に激突したホッパーファッジの傍に悠々と降り立った。

「盗んだもの、返してもらったよ」

「させるか——！」

デイナが見せびらかす様にトランクを掲げると、ホッパーファッジはそれを取り返そうと飛び掛かる。

自慢の脚力を活かして高速でジャンプしてきたホッパーファッジを、デイナはインペリアルウィングを盾代わりに防ぎその間にベクターカートリッジを交換した。

〈HAWK + HUMAN Mutation〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

今度はホークヒューマンフォームにゲノムチェンジすると、同時にインペリアルウィングを開いてホッパーファッジを吹き飛ばす。

吹き飛ばされながらも体勢を立て直したホッパーファッジはすかさず次の攻撃を行

うが、今度は受け止める事無くひらりと身を躲した。まるで風に舞う木の葉の様に、自慢の跳躍からの飛び蹴りなどを回避するデイナに次第にホッパーファッジは焦りを感じ始めた。

ミューテーションフォームは一見エヴォリユーションフォームの下位互換に見えるが、必ずしもそうではない。能力の出力は確かにエヴォリユーションフォームに劣るが、その代わりエヴォリユーションフォームにはない柔軟な組み合わせが大きな武器となっていた。

今デイナが選んでいるホークヒューマンフォームも、ホークベクターカートリッジで得られる飛翔能力を体を浮かす事に使いヒューマンベクターカートリッジで得られる柔軟な動きにより他のフォームでは得られない舞うような動きを獲得させるに至ったのだ。

「よっ、ほっ」

ホッパーファッジの攻撃を巧みに回避し、反撃の蹴りで追いつめていく。やられてばかりではいられないとホッパーファッジも激しく攻撃するが、まるで柳に風と言わんばかりにデイナはそれらをするりと回避した。

当たらない攻撃に、ホッパーファッジは段々と疲労が重なり動きが鈍くなっていく。

「はあ、はあ、はあ……」

遂に動きを止めてしまったホッパーフアツジに、デイナはトドメの一撃を放つ。

「戦いのレポートは纏まった」

〈ATP Burst〉

レセプタースロツトルを引き、ホッパーフアツジに向けて滑空するように飛び蹴りを放つデイナ。疲労困憊しているホッパーフアツジは回避が間に合わず、デイナのノックアウトクラッシュを喰らい爆発。ベクターブレスからカートリッジが排出され元に戻ると同時に隠蔽処置で消し炭となった。

ホッパーフアツジだった人間の燃えカスを見て、デイナは溜め息を吐くと手に持ったトランクを見た。

「……………んな事の為に……………」

デイナは溜め息交じりに呟くと、踵を返してルーナの居る方へ向かった。トランクの片方を取り返す事には成功したし、何だかんだで彼女の事は心配だった。

遠くからはルーナが戦っているからだろうリップレッサージュの発砲音が聞こえる。デイナはそこに向けて一目散に駆けた。

その時何処からか銃声が響き、一発の銃弾がデイナが持つトランクの手元に命中した。

「あっ!？」

銃弾が手元に命中した衝撃でデイナはトランクを放つてしまい、トランクは放物線を描いて遠くに落下した。

急いでトランクを回収しようとするデイナだったが、彼の足元に次々と銃弾が突き刺さり彼がトランクに近づくのを阻んだ。

「くっ……。誰？」

今のはアントファアツジが使う銃弾ではない。それに気付いたデイナが銃声の聞こえてきた方を見ると、そこには意外な人物が居た。

「すまないね、門守 仁君」

「お前……傘木 雄成？」

そこに居たのは傘木社の社長である、傘木 雄成その人であった。彼の手には一丁の大型の拳銃が握られている。

デイナはトランクの回収を諦め、雄成に対し半円を描く様に動いた。

「社長自らが来るなんて、余程暇なんだね」

「いやあ、今日はちよつとどうしても自分の足でここに来たくてね。頑張つて予定を開けて足を運んだんだよ」

言いながら雄成は懐からベクターカートリッジを取り出した。

デイナはそれに対し警戒しながら、彼の真意を見抜こうと会話を続ける。

「何で態々？ 部下に任せればいいのに……」

「会いたかったんだよ、君にね。前に再び会おうと言ったじゃないか」

〈SAMPLE〉

雄成は話しながらベクターカートリッジを起動し、それを拳銃上部から斜めに装填した。

〈Leading〉

拳銃——ベクターリーダーから音が響くと、雄成は銃口をデイナに向ける。身構えるデイナの前に、雄成は笑みを浮かべた。

「さあ、これが私の今の研究成果だ。——進^{しんせい}生」

〈Transcription〉

雄成が引き金を引くと、銃口からデイナが変身する際にセントラルドグマから放たれるスーパーコイルと同様の二重らせんが発射される。それはデイナの目前で軌道を変えUターンすると、真つ直ぐ雄成自身に戻っていきその身を貫いた。

すると見る見る内に雄成の肉体が変異していき、アンダースーツと装甲が白く防護マスクの様なバイザーを身に付けた姿になった。青いバイザーの奥では、黄色い双眼がキラリと光っている。

それは最早ファッジでは無かった。変身プロセスなど、細部は異なるがそれでも外見

はファッジより仮面ライダーのそれに近い。

仮面ライダーに限りなく近い、ファッジとは異なる存在。

その名も――

「これがプレインジーン。門守 仁君……見せてくれ、君の研究成果を――！」

ベクターリーダーの銃口を向けてくる雄成の変身したプレインジーンに対し、デイナは何も言わず佇んでいた。

もしこの時、彼が仮面をしていなかったら……恐らくプレインジーンは見る事になっていただろう。

「へへっ」

何処か楽し気に、そして何処か怪しげに笑みを浮かべる、仁の表情を見る事になっていた筈だ。

第28話：2人だけの研究発表会

デйна・ホークヒューマンフォームとプレインジーンは、激しい戦闘を行っていた。

「ふっ、はっ、しっ」

「おっと、フンツッ！ ハハッ！」

放たれるデйнаの攻撃を、プレインジーンは巧みに受け流し格闘や銃撃で反撃を繰り返す。

プレインジーンの格闘スキルはとてただの一企業の社長とは思えないほど優れたものであった。先程から何度もデйнаの攻撃が飛ぶが、プレインジーンには一発もまともに命中していない。ただ能力に頼っているのではない、洗練された技術を持っていることが伺えた。

「社長って、普段椅子に座ってふんぞり返ったり会議ばかりやってる印象あった……」
「驚いたかね？ これでも腕に覚えはあるんだよ。それより君の力はこんな程度かね？」

デйнаからの言葉に答えながら、プレインジーンは至近距離からの銃撃を浴びせる。これは流石に躲しきれず、デйнаは胸に何発も銃弾を浴び後方に吹き飛ばされた。

「ぐうっ!？」

吹き飛ばされ地面に叩き付けられるデイナ。そんな彼に、プレインジーンはつまらないと言いたげに溜め息を吐いた。

「はあ……どうしたのかね？　こんなものか？　君の研究成果を見せてくれたまえよ？」

挑発するようなプレインジーンの言葉に、デイナは立ち上がりながらベクターカートリッジを取り出す。

「いいよ、見せてあげるよ。俺の研究成果——」

〈BUFFALO + LEON Mutation〉

デイナがゲノムチェンジしたのは、出力の高いエヴォリユーションフォームではなく、ミューテーションフォーム。この強敵相手には一見力不足の様に見えるが——

「おりやつ」

接近するデイナの正拳突きがプレインジーンに放たれる。突き出された拳をプレインジーンは片手で受け止めようとするが、デイナの一撃はプレインジーンの腕を押し込み殴り飛ばした。

「何ッ!？」

「まだまだ……」

二発目、三発目と拳をプレインジーンに叩き付ける。予想外の威力に、プレインジーンは防衛は困難と受け流しに切り替えたがデイナは相手の動きからどう受け流そうとしているかを予測。受け流される事を前提で殴り、拳を受け流されるとその力の流れを利用して体を回転させ二撃目を喰らわせた。

「むっ!？」

受け流しを逆に利用された事に、プレインジーンはたたらを踏み後退する。デイナは後退ったプレインジーンを追撃する事なく、構えを取り次の攻撃に備えた。

「……なるほど、陸上における強力なパワーを持つバッファローとライオンの組み合わせ。自然界では食うモノ食われるモノと言う関係の二つが手を取り合う事で、ここまでのパワーを発揮できるのか」

攻撃を受けながら、プレインジーンはデイナの能力を分析していた。その様子には発想に対する関心と、何処か楽しんでる様子が見て取れる。

そして能力の分析が終わればそれに対処するのは当然の事。プレインジーンは下手に接近戦で打ち合う事はせず、距離を離してベクターリーダーによる銃撃に切り替えた。今デイナは手元にハイブリッドアームズを持っていない。今のままでは一方的に撃たれるだけだ。

〈HAWK + WHALE Mutation〉

今のフォームでは対処が出来ないと察したデイナは即座にゲノムチェンジ。またしてもミューテーションフォームで今度はホークホエールになった。しかしこのフォームも決して遠距離に強い訳ではない。ホエールベクターカートリッジで使用出来るインパクトウェーブも、ミューテーションフォームでは全力が出せない。

なのになぜ彼はこれをチョイスしたのか？

その答えは直ぐに明らかになった。デイナはインペリアルウイングを広げるとそれを飛行の為では無く銃撃を防ぐ盾として使用。銃撃は防げたがこれでは視界が塞がれ反撃に移る事が出来ない。

それを補ったのがホエールベクターカートリッジの能力だ。エコーロケーションでプレインジーン的位置を正確に把握すると、視界が塞がれていながらもそちらへと突貫し攻撃可能範囲に近付くと翼を広げ攻撃を繰り返した。

「ほはおっ！」

思わぬデイナの戦法にプレインジーンの口から感心した声上がる。しかし口では感心していながらも、デイナへの対処は怠らない。

「鷹の翼を盾にすると言う発想には少し驚かされたがね、しかしそれでは翼が宝の持ち腐れだぞ！」

デイナの攻撃を掻い潜り、至近距離から銃撃を浴びせる。幾ら翼を盾にして接近する

事が出来ても、攻撃の瞬間には防御を解かなければならない。プレインジーンからすればデイナのチョイスはその場のしぎ程度のものでしかなかった。

しかし彼がこの二つを選択した事の真骨頂が発揮されるのはここからであった。

プレインジーンの銃撃を喰らい、一旦距離を置く為翼を羽搏かせ飛翔しながら距離を取るデイナ。その際に発生した風がプレインジーンに触れた瞬間、プレインジーンは全身を何かによって切り裂かれた。

「ッ!?! ーこれは——!?!」

謎の攻撃の正体は羽搏きの風と共に放たれた超音波だ。デイナは風を巻き起こし舞い上がった微粒子を超音波で振動させる事により、超振動でプレインジーンの体を切り裂いたのである。

完全に想定外、しかも二つの遺伝子から得られる能力を巧みに活かしたデイナの発想に、プレインジーンは今度こそ歓喜の声を上げた。

「はっはっはっ! ー良い! ー良いぞ!! ー二つの遺伝子から得られる能力をよく理解し活用している! ー出力に劣るミュートーションフォームでも、戦えているじゃないか!」

歓喜の声を上げながらも、プレインジーンの攻撃の手は緩まない。徐に左腰に装着していた剣の様なホルスターにベクターリーダーを突っ込むと、拳銃とホルスターが一体化し銃剣となる。

今度は接近戦にシフトし、銃剣で斬りかかってくるプレインジーンに対しデイナは新たなベクターカートリッジを装填した。

「この間出来たばかりの新作だ」

〈SHARK + HEDGEHOG Evolution〉

鯨の遺伝子とハリネズミの遺伝子、二つの遺伝子からなる新たなエヴォリユーションフォームがここにお披露目となった。シャープな仮面に両腕には鰭の様なカッターが付き、装甲の色は灰色。下半身を見れば脚には無数の棘が下向きに伸びており、アンダースーツは黒い。

鯨とハリネズミの能力を組み合わせた、デイナ・シャークヘッジホッグフォームの誕生である。

デイナはゲノムチェンジを果たすと、プレインジーンの斬撃を両腕のカッターで受け止め反撃を放つ。手刀の様な一撃がプレインジーンに迫るが、彼はそれを紙一重で回避する。

しかしその瞬間、デイナの体を離れた鱗が僅かに距離を取ったプレインジーンの体を斬り付けた。

デイナの攻撃はそれだけで終わらない。今度は蹴りだと言わんばかりに脚に力を込めると、脚の棘が逆立ち針山の様になる。その状態でデイナが蹴りを放つ。

プレインジーンは放たれた蹴りを銃剣で受け流す。これは見た目的に絶対喰らいたくないだろう。喰らえば穴だらけにされてしまう。

「おっとと……これはもしや、君が自分の力で作ったのか？ 白上の手を借りずに？」

「そうだよ。教授に教わって、俺が自力で1から作ったんだ」

「素晴らしい！」

プレインジーンは感心しながらも、引き金を引きつつ銃剣を振るった。斬撃の瞬間引き金が引かれると、峰の部分から火が噴き瞬間的に斬撃の速度が上がる。目測を見誤ったデيناは、その斬撃を回避しきる事が出来ず体を切り裂かれてしまった。

「ぐっ、つう……」

〈SHARK + HUMAN Mutation〉

攻撃を受けながらもデيناは次のベクターカートリッジを使用する。シャークベクターカートリッジにより得られる高い感知能力とヒューマンベクターカートリッジによる柔軟な動きを組み合わせ、プレインジーンの攻撃を流れる水のような動きで躲し両腕のカッターによる攻撃で迎え撃った。

「お次は鮫と人間か！ 何だ何だ、君はまるで発想のデパートだな！ 次から次へと既存から外れた組み合わせを見せてくれる！ 見ていて飽きないぞ！」

「どうも」

「どうだね、卒業後は我が社に来ないか？ 君になら研究主任の椅子を用意するぞ？」
 「経営方針が合わないから遠慮しとく」

唐突にプレインジーンはデイナを傘木社にスカウトした。デイナはそれを即座に拒否するが、プレインジーンはそれに対し気分を害した様子を見せない。

「そうかね、残念だ。だが気が変わったら何時でも来てくれたまえ。君ほどの男であれば何時でも大歓迎だ」

「期待はしないでね」

〈BUFFALO + HUMAN Light up〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

戦いながらデイナは隙を見てBHエレキテルカートリッジを使用し、現時点で最大の戦力であるバッファローヒューマンエレキテルとなった。

「こいつは俺の自信作。じっくり味わいなよ」

〈Charge up〉

ゲノムチェンジ後即座に充電し、超高速移動でプレインジーンを翻弄する。目にも留まらぬ速度で動き回るデイナに、プレインジーンも手も足も出ない。

……………と思っていたのだが――

「フフフツ、帯電による能力の向上……君もその発想に至るとはね。ますます面白
い」

プレインジーンの呟きは超高速で行動しているデイナには届かない。だが彼の声は直ぐデイナにも届くようになった。

次の瞬間、プレインジーンの全身に電気が走ったかと思うと彼はデイナの速度に追従してみせたのだ。

「ツ!?!」

「はははっ!」

デイナとプレインジーンは同等の速度で動き、激しい戦闘を繰り広げる。時に互いに電撃を放ち合い、拳をぶつけ合い、蹴りを相殺し合った。

正に一進一退の攻防戦。だが充電して能力を発動しているデイナには超高速でいられる時間に限りがある。

充電が切れた瞬間、デイナの周囲の動きが元に戻った。それと同時に、プレインジーンの超高速攻撃がデイナに襲い掛かる。

「ぐ、あっ?!」

目にも留まらぬ攻撃を受け、地面に叩き付けられる。倒れたデイナの前に、プレインジーンが悠然と姿を現した。

「いやいや、堪能させてもらったよ。大したものだ君は。とても面白い」
「何の……まだまだ、これから——」

〈Charge up ATP Burst〉

ここで勝負をかけるべく、デイナは充電しATPバーストを発動。全身の電撃を一点に集中しプレインジーンに向けてエレキテルクラッシュを放つ。

それに対し、プレインジーンもベクターリーダーにベクターカートリッジを装填した。

〈Genome set Full blast〉

プレインジーンがベクターカートリッジを装填すると、刀身にエネルギーが集束していき光の刃が形成される。彼はそれでデイナのエレキテルクラッシュを迎え撃つ。

「ハアアアアッ！」

「オオオオッ！」

ぶつかり合う電撃を纏う飛び蹴りと光の斬撃。2人の攻撃が拮抗し合い、激しい火花を散らす。

「く、う——！」

「ぬう——！」

長く続いたかと思われた拮抗だが、時間にして僅か数秒。行き場を失ったエネルギー

は2人の間で爆発を起こし、彼らを互いに遠くへと吹き飛ばした。

「ぐあっ!？」

「うぐおっ!？」

勝負は互いに痛み分け。どちらも大きなダメージを負い、地面に倒れ伏す。

どれほど時間が経ったか、立ち上がったのはほぼ同時だった。互いにまだ変身は解除されておらず、しかし足取りは覚束ない。

「はあ……ふう……」

「ふ、ふふふ……はははは……」

立ち上がりながらも疲労した様子を見せるデイナに対し、プレインジーンの口から零れるのは笑い声だった。心の底から楽しんでる純粹な笑いだ。

「ああ……君は本当に最高だ。今日は来て良かったよ。出来ればもっと君と研究成果を見せ合いたかったが……生憎と私は忙しいのでね」

そう言いながらプレインジーンは、直ぐ近くに落ちていたトランクを持って立ち上がった。

「あっ——!？」

「ふっふっふっ、私の方が一枚上手だったようだね」

デイナは気付かなかったが、戦いの最中でプレインジーンは恐竜のDNAが入ったト

ランクが背後に来るように立ち位置を調整していたのだ。プレインジーンとの戦いにデイナが集中していたのに対し、プレインジーンの方は二手三手先を読んで備えていた。

完全にしてやられた事に、デイナは仮面の奥で苦虫を噛み潰したような顔になる。

悔しがる彼を前に、プレインジーンは突然トランクを開けると中からシリンダーを二本取り出した。

「だがまあ、今日は思っていた以上に楽しませてもらった。その礼と言っては何だが、これだけは君に返してやろう」

指で挟んだ二本のシリンダーを器用にデイナの所まで届く様にプレインジーンが放り投げる。ガラス製のシリンダーが壊れたりしないよう、デイナは放物線を描いて飛んでくるシリンダーを慌ててキャッチした。

「つと!? 何で二本だけ? 全部返してよ」

「私を倒せていれば、全部返してあげても良かったんだがねえ。ま、世の中そう甘くは無いです」と

踵を返すプレインジーンは、しかし立ち止ま手振り返るとデイナの手の中のシリンダーを指差した。

「まあ元の場所に返すのは君の自由だが、私としては君が有効活用してくれることを

願っているよ。それでは、これにて失礼」

プレインジーンは驚異的な跳躍力で今度こそデйнаの前から姿を消した。

まんまとトランクを持って逃げられた事に、デйнаは歯噛みすると手の中にある二本のシリンダーを見て小さく溜め息を吐き、そしてせめてルーナがある程度取り返してくれている事を願ってシリンダーを仕舞いながら彼女が戦っているだろう方へ向けて移動し始めた。

一方ルーナの方はと言うと、こちらは幹部であるシーアーチンファツジを相手に良い戦いを見せていた。元より射撃型のルーナは、棘の投擲しか遠距離攻撃手段が無いシーアーチンファツジにとって相性の悪い相手であった。それでもただの銃撃であれば、棘を折られても甲殻で防ぐことは出来ただろう。

しかしルーナは、デйнаからシーアーチンファツジの甲殻自体の硬さを聞いていたの
で、それならばと彼女は銃撃を一点に集中させてシーアーチンファツジの防御を打ち抜

くと言う攻撃に出た。これにはシーアーチンファツジもお手上げだった。

そもその話、今の彼は持ち帰るべき荷物を抱えている。この所為で片手は常に塞がれている上に、これを危険に晒さない為出来る事には限りがあった。

トランクを無傷で取り返したいのはルーナも同様だったが、彼女の場合は言ってしまうとトランクさえ無事なら後はどうとでも出来た。この差は大きい。

だがこの2人の勝負には、相性の差もあるだろうが何よりもルーナの方が以前に比べてレベルアップしたと言う部分が大きく作用しているだろう。何度も戦い続けてきた事で、積んできた経験が亜矢自身の隠されていた能力を引き出し、そこに真矢の能力が加わって今まで以上に強くなったのだ。

「ええい、全く振り切れない!？」

「逃がしはしません!」

ルーナのリップレッサーショットから放たれる銃弾が、とうとうシーアーチンファツジの脚を撃ち抜き転倒させる。

「ぐあつ?!」

足を撃ち抜かれ、転倒したシーアーチンファツジ。辛うじてトランクを手放す事は無かったが、体を起こした時には目前でルーナがリップレッサーショットを突き付けていた。

「これで勝負ありです。降参して、トランクを返してください」

銃口を突き付け、降伏を促してくるルーナをシーアーチンファツジは睨み付けるが今の彼に出来る事はそれしかなかった。

せめてトランクさえなければ、彼女を相手にここまで後れを取る事は無かったのにと思わずにはいられない。

どうすべきかと悩むシーアーチンファツジ。降伏などありえない。敵を前に無様に逃げだすような事をすれば、最悪チミンの二の舞となってしまう。それだけは避けたい。

次の行動の決断に悩むシーアーチンファツジに対し、ルーナの中の真矢は焦れて一発くらいは撃つてやろうと提案し亜矢がそれに不承不承ながら頷いた。

だがルーナが引き金を引く前に、銃声が響き銃弾が彼女の胸の装甲で弾けた。「ああっ?!」

予想外の攻撃にルーナが後ろに転がり倒れる。その瞬間シーアーチンファツジは立ち上がり、棘を数本引き抜きルーナに向けて投擲した。

「う、くっ?!」

向かってくる無数の棘を、ルーナは転がって回避しつつ起き上がって迎撃する。迎撃しながら、ルーナは今の銃撃の主を探した。

今の威力は絶対にアントファッジではない。

【あつ！ 亜矢あそこっ!?!】

果たして、下手人は直ぐに見つかった。シーアーチンファッジの向こう側、ルーナからは死角になっていた所に、イカを思わせる白い装甲と黒いアンダースーツの人物が大型の拳銃を構えていたのだ。

その人物……アデニンがベクターリーダーにスクイッドベクターカートリッジを使用して変身した『ホワイトカラーズ』は、ルーナに銃口を向けながらシーアーチンファッジを守るように立ち塞がった。

「まだ無事なようだな、グアニン？」

「アデニン!? それはまさか——!?!」

「プロフェッサーが使用しているのと同じ、ベクターリーダーだ。ただこちらは急場凌ぎで用意したものだから、性能は安定していないがな」

アデニンことホワイトカラーズは、シーアーチンファッジに言いながらルーナの前に立ち塞がる。

「行け。プロフェッサーは既に目的の物を持って撤退した」

「プロフェッサーが? じゃあ——」

「お前が連れて行った奴はデイナに敗れた。お前も、早く行け」

「行かせると思ってるのかしらー」

相手が同じく銃撃で対抗してくると見るや、ルーナは人格を真矢と交代し接近戦主体の戦闘にシフトした。銃撃しながら接近し、ホワイトカラーズをボレーキックで退かそうとする。

しかしホワイトカラーズはルーナのボレーキックを片腕で受け止めると、もう片方の腕の手首から烏賊の触腕の様な鞭を伸ばしそれでルーナを絡め捕り地面に叩き付けた。

「あぐっ?!」

「グアニン、行け」

「……分かった」

ホワイトカラーズに促され撤退するシーアーチンファツジ。させじとルーナが逃げるシーアーチンファツジの背に銃口を向けた。

「待って!!」

「させん」

引き金を引く寸前、ホワイトカラーズがシーアーチンファツジに向けられていた銃を蹴り飛ばす。

「あっ!!」

【真矢避けてッ!!】

片方の銃を蹴り飛ばされ、一瞬そちらに意識を向けるルーナだったが、亜矢の警告にその場で転がると先程まで彼女が居た場所に銃弾が突き刺さる。

追撃を回避したルーナに、ホワイトカラーズはベクターリーダーをホルスターと合体させてブレードモードにして斬りかかってきた。ルーナはそれを何とか蹴りで弾いて對抗するが、次々と繰り出される斬撃に徐々に追い詰められていく。

「くっ!? こいつ、強いッ!」

「真矢、そこから右に転がって避けて! そこにさつき蹴飛ばされたリプレッサーショットがある!」

「ッ! 了解!」

亜矢の指示に、ルーナは右に転がるとそこにあたりプレッサーショットを回収。二丁拳銃でホワイトカラーズを攻撃した。

「フン……」

放たれる銃弾を、ホワイトカラーズは触腕型の鞭を回転させる事で防ぎルーナに接近。十分に近づいたところでブレードモードのベクターリーダーを振り下ろし、斬撃の瞬間引き金を引く事で威力を増し強烈な一撃を見舞った。

「あああっ?!」

さらに二撃、三撃と立て続けに攻撃を喰らい、衝撃で壁に叩き付けられたルーナはダ

メージから変身を解除されてしまった。

「うぐつ!? く、つう……」

体のあちこちに痣や傷を付けながら、真矢はホワイトカラーズを睨み付ける。変身は解除されたが、その闘志はまだ衰えてはいなかった。衝撃で外れたデイナドライバーに、もう一度変身する為手を伸ばす。

そんな彼女の闘志を踏み躪るように、ホワイトカラーズは伸ばされた彼女の腕を踏みつけた。

「ああつ!? ぐ、うあ——?!」

「うあ、ああああつ?!」

腕の骨を砕かれるのではという程の力で踏みつけられ、真矢と亜矢が悲鳴を上げる。

もう彼女が抵抗できないと見て、ホワイトカラーズは腕から足を退けると彼女の腹を蹴り飛ばした。

「ぐふつ!? うげ、ええ——?!」

腹を蹴り飛ばされて襲ってきた痛みと吐き気に、彼女はその場で腹を抱え体を丸めた。

もうシーアーチンファッジは十分逃げただろう。ホワイトカラーズはこの場での戦闘はもう必要なしと、彼女に背を向けて撤退しようとした。

瞬間、充電して『エレキテル・ブースト』を発動したデイナが目にも留まらぬ速さでホワイトカラーズを殴り飛ばした。

「がっ!？」

「お前……亜矢さんと真矢さんに何した?」

腹を抱えて苦しそうに倒れる真矢の姿に、デイナは静かな怒りを燃やしてホワイトカラーズを睨み付けた。殴り飛ばされたホワイトカラーズは、立ち上がりながらブレードを外したベクターリーダーをデイナに向ける。

「仮面ライダーデイナ……プロフェッサーの相手をしたにしては元気だったな」

「答えろよ。お前、亜矢さん達に何してんの?」

「何かおかしなことがあるか? 傷付く事を承知の上で戦っているのだろうか? 死んだり女としての辱めを受けていないだけマシじゃないか?」

ホワイトカラーズの言葉にデイナは何も答えない。何も答えはしなかったが、デイナから向けられる背筋が凍りそうなほどの冷たい視線が全てを物語っていた。

(本気で怒らせたか……)

デイナから感じる視線に、危険なものを感じベクターリーダーだけでなくブレードモード時に装着するホルスターから収納されていた柄を伸ばして剣として構える。

一触即発の雰囲気には亜矢は苦しさに顔を歪めながらデイナの様子を見守っていた。

だが突如として、デイナから放たれる絶対零度の視線が霧散し彼の口から大きな溜め息が零れた。

「はあ~~~~~……………」

「……………」

突然の変化にホワイトカラーズが思わず銃口を下ろすと、デイナは変身を解除して彼を無視し真つすぐ亜矢へと向けて歩いていく。

今の今まで殺意すら感じる程の視線を向けていた仁の変わりように、ホワイトカラーズは流石に困惑した声を上げた。

「どういいうつもりだ?」

「もういい……………疲れた。お前の相手なんかしたくない。どうせお前もう帰るつもりだったんでしょ。とつとと行っちゃえよ」

仁はそう言いながら亜矢のデイナドライバーを拾い、倒れている彼女の傍で膝をつくと優しく抱き起した。

断つておくと、仁は別にホワイトカラーズを許した訳ではない。現状で仁にとつての最優先事項は亜矢の介抱であり、ホワイトカラーズの順位は冷蔵庫に入っている食材の賞味期限までの日数すら下回る。

もつと分かり易く行つてしまえば、爆発する前に怒りが一周して何故亜矢を後回しに

してまでこんな奴に対して怒らねばならないのかと言う結論に達したのだ。

「亜矢さん、大丈夫？」

「仁君……ごめんなさい。逃げられちゃいました」

「気にしなくていいよ。俺の方も二つしか取り返せなかったし」

「でも……」

「大丈夫。だから今は休んで……」

「……はい」

仁の腕の中でゆっくりと意識を失う亜矢。自分の体の身を委ねて安らかな顔で眠る亜矢の頬を、仁が優しく撫でた。

2人の様子を離れた所から見ていたホワイトカラーズは、無言で踵を返しその場を立ち去るのだった。

「ごめん。頑張ったけど、これしか取り返せなかった」

「本当にごめんなさい。私の力が足りないばかりに……」

その後、仁と亜矢は大学に戻り未だ慌ただしい研究棟で山根研究室の薫達に取り返したDNAのシリンダー二本を返しながら頭を下げた。あれだけでかい口叩いて取り返すと言ったのに、二本しか奪還出来なかった事に少なからず責任を感じずにはいられなかったのだ。

そんな2人に対し、山根教授は優しく肩に手を置き2人の頭を上げさせた。

「頭を上げなさい。君達の所為じゃない」

「そうだけ、門守、双星さん。頑張つて二個は取り返してくれたお前らを責める奴なんてここには居ねえよ」

見れば山根研究室の全員が2人に温かな視線を向けている。彼らの研究成果を殆ど持つていかれた事を気にしている2人にとって、彼らの優しさは困惑せずにはいられないものであった。

「それに、研究室がこの状態ではどの道今以上の研究は進められそうにない。データは無事だが、研究再開までは時間が掛かるだろう。そこで、だ——」

山根教授は仁が取り返した二つのDNAのシリンダーを、あろう事か仁に手渡した。渡された二つのシリンダーに、仁は目を白黒させる。

「え？ あの一——？」

「この二つのDNAは、君らに預けるよ。何もせずに保管しておくより、君らの研究室で研究に役立てるなりしてくれ」

「そんな、悪いですよ!?!」

「それに俺達、別にこれを使った研究は——」

渡されたDNAを返そうとする仁と亜矢だったが、山根教授はそれを片手で制した。

「いや、受け取ってくれ。例え君達に必要な無かったとしても……『仮面ライダー』には必要だろうか?」

「ッ!!」

思わず顔を見合わせる仁と亜矢に、山根教授を始めとした研究室の面々は優しい笑みを向ける。

「これで何もかも終わりって訳じゃねえんだ。次がある。だから今回の俺達の頑張りは、お前らが役立ててくれよ。仮面ライダー?」

研究室を代表して激励の言葉をかけてくれる薫。彼らのエールと心の広さ、優しさに胸を打たれ、亜矢は目尻に涙を浮かべる。

仁の方もまた、彼らからの信頼を確かに受け取り、胸に温かいものを感じ渡されたシリンダーを優しく握りしめた。

「……………分かった。ありがとう」

「へへっ、おうよー！」

薫達の笑顔に、仁は彼らの研究成果と共に彼らの想いを託された事を感じた。それと同時に、仮面ライダーと言う言葉に掛かった重みも感じるのであった。

第29話：近づく再誕

ここ最近、亜矢には悩みがあった。

どうも最近、戦闘で仁の足を引っ張っている様な気がしてならないのだ。

大して役に立つ事も無いどころかやられる事も増えてきたし、良くても苦戦を避けられない事が増えてきた。時間を見て1人トレーニングもしているが、どうにも力不足感が否めない。

悩んだ亜矢は真矢とあれやこれやと話し合った。その結果、ルーナの強化を施す事が必要であると言う結論に達した。敵はさらに強力なドライバーを開発したが、デイナにはエレキテルがある。しかしルーナには何も無いのだ。これでは彼女だけ遅れるのは自明の理である。

しかし彼女にはベクターカートリッジもデイナドライバーも弄れない。

となると、彼女が取るべき手段は一つであった。

「そう言う訳で宮野先輩、何とかならないでしょうか？」

「随分と唐突ですね。まあ話は分かりましたけど」

亜矢は峰に頭を下げ、ルーナを強化することは出来ないかと訊ねた。訊ねられた峰

は、唐突過ぎる話題に苦笑しながらもパソコンに向かいキーボードを叩いた。

「最近の報告で、傘木社がライダーシステムに匹敵するドライバーを開発した事は聞いてます。だからエレキテルがあるデイナはともかく、ルーナには何かしらの強化が必要だなんて気はしてたんですよ」

「じゃあ——！」

峰の言葉に喜色を浮かべる亜矢であつたが、続いた峰の言葉は色良いとは言えぬものであつた。

「ただ……ルーナの場合は単体で完成されていると言つても過言ではないので、出来る強化に限りがあるのが問題なんですよねえ」

「それって、強化できないって事ですか？」

「出来ない訳じゃないんですよ？　ただルーナとしての性能そのものを引き上げるのは難しいんですよ」

「じゃあやつぱり私自身が強くないとダメって事ですか。……………本格的にジムにでも通うしかないかなあ、シュツ！　シュツ！」

「ん、そうでもないよ」

落胆して肩を落とす亜矢だったが、そこで峰の言葉に否を告げたのは仁だった。

彼は椅子ごと移動して2人の傍に近寄ると、自分のノートパソコンのキーボードを叩

き2人に画面を見せた。

「仁君？」

「どう言う事ですか？」

「見てて思ったんだけど、亜矢さんはともかく真矢さんの戦い方とルーナの性能が噛み合って無いような気がしたんだ」

キーボードを操作しながらそう言う仁に、亜矢はこれまでの戦いを振り返った。

亜矢の戦い方はリプレッサーショットを用いた銃撃に蹴りなどの格闘を織り交ぜたもの。

対する真矢は、蹴りを主体にした接近戦メインの戦い方だ。リプレッサーショットも使うが、使用頻度は高くはない。

「真矢さんって遠距離戦より近距離戦の方が得意でしょ。だからルーナにも蹴り以外に接近戦の手札が必要だと思うんだよね」

「つまり門守君は、ルーナにも接近戦用の武器が必要だと思つた訳ですか？」

「簡単に言えばそう言う事です。でも固有武装のリプレッサーショットを潰すのはあまり良くは無いと思うから……………」

仁がキーボードを操作すると、パソコンの画面にルーナが映し出される。だがそのルーナは何時ものそれとは違い、各部に多少の強化が施されていると思しき変化が見ら

れた。

「付けるべきは固定装備。権藤さんが使ってるスコープからヒント貰ったんだ」

パツと見は普段のルーナと変わりないように見えるが、接近戦に関係する両腕と両脚に変化が見られた。両足の装甲は攻防で活躍する為だろう、装甲が以前より分厚くなっている。

そして気になる両腕。こちらも見ただ感じただ装甲が追加されただけの様に見えるが、仁がマウスポインターを合わせてクリックすると変化が起こった。

ズームされ角度が変わる右腕部分。そこから手首の方に向けて二本の爪が伸びたのだ。

「これが門守君の考えるルーナの強化案ですか？」

「そ。へ々に剣とかを追加して手持ちの装備を増やすより、こっちの方が良いと思って」
これなら確かに、咄嗟の事態にリプレッサーショットを手放す事なくブレードによる攻撃が出来る。そうでなくてもリプレッサーショットを失った時にブレードでの攻防が出来るようになるので、ルーナの戦闘に幅を持たせる事が出来た。

「出来ますか？」

「うん……これなら簡単に強化できそうです」

「だってさ」

これでルーナの強化方針が決まった。亜矢はこれを考えてくれた仁と、それを実行に移してくれる峰に感謝した。

「仁君、先輩……ありがとうございます！」

「ん、気にしないで」

「私は戦闘には参加できませんから、これ位はお安い御用ですよ」

その後、仁は自分のパソコンの中のルーナ強化案に関するデータを峰のパソコンに送り、峰はそれを基にアダプトキャットを機械に繋ぎ強化作業に移った。

それを見届けると、仁は自分の机に戻り先程までの作業に戻った。彼の手元にあるのは先日山根研究室から譲り受けた、二つの恐竜のDNA。彼はこれを使って、新しいベクターカートリッジを作ろうとしているのだ。

手持無沙汰になった亜矢は、後ろから仁に近付き彼の作業を後ろから見た。

最初静かに見ていた亜矢だが、彼の作業内容が気になったのか真矢が表に出てきて後ろから話し掛けた。

「ねえ仁君、それって結局何のDNAなの？」

一口に恐竜と言っても、その種類は多岐に渡る。有名どころではティラノサウルスなんかだろうか。

「ん……調べてみたら、こっちがスピノサウルスでこっちがケツアルコアトルスみたい

だね」

仁が二つのシリンダーをそれぞれ左右の手に持って中身が何のDNAなのかを口にした。だが耳慣れない名前に、真矢は思わず目をパチクリとさせた。

「ん？ ん？ ん？ ちょっと待って、ゴメン。何と何って？」

【スピノサウルスと、ケツアルコアトルスだよ】

「その……スピノとケツアルって？」

聞いたことのない恐竜の名前に真矢が首を傾げていると、仁はシリンダーを置きキーボードを操作しながら答えた。

「スピノサウルスもケツアルコアトルスも、白亜紀に生息してた古生物だよ。スピノサウルスは獣脚類の恐竜だけど、ケツアルコアトルスは翼竜だから間違えないでね」

何てことはない様に二つの遺伝子の元となった生物の名前を告げ、その生息した時代までをも答える仁に真矢は感心して口笛を吹いた。

何時も思う事だが、仁の知識量には驚かされてばかりだ。まさか恐竜の生息年代なんかまで即座に出てくるとは。

「スピノサウルス、ねえ……」

【あ、思い出した！ 昔一緒に見た映画で、そんな名前の恐竜が出てきてた！】

亜矢の言葉に、真矢はポンと手を叩いた。そう言えばそんなのもあった。

因みにスピノサウルスと言えば、とある映画で背ビレのあるティラノサウルスの様な恐竜と言うイメージが持たれたが、実際のスピノサウルスはあれとは体型が大きく異なるだろうと言われている。顎の形状などから水辺で四つん這いになって行動しているだろうと考えられているからだ。

更にスピノサウルスと言えば特徴的なのは背ビレだが、これも実際には背ビレではなくバイソンなどの様に強靱な筋肉を支える為の土台の可能性があると言う学説が出ている。

総じて、スピノサウルスはずんぐりとした筋肉質で四つん這いのワニの様な恐竜と言ったのが今の学説である。

閑話休題。

「——で？ 結局のところ進捗はどんな感じなの？」

「ん〜、案外時間は掛からないかも」

「……どんな能力が得られるんでしょう？」

「片方は飛行能力で確定だろうけど、スピノの方は何だろうね」

亜矢と話しながら仁はベースとなる超万能細胞にスピノサウルスとケツアルコアトリスの遺伝子情報を読み込ませていく。膨大な遺伝子情報を読み込ませる為、仁の手が忙しなくキーボードの上を動き回る。

暫くキーボードと仁を交互に見て、時折仁が首周りや肩を動かしているのを見ると亜矢は音も無く仁の背後に回り彼の肩を優しく揉んだ。

「ん……………」

「頑張るのも結構ですけど、適度に休憩は挟んでくださいね。疲れが見えてきてますよ」
亜矢に言われ肩を揉まれた事で仁は自分の疲れを自覚し、切りの良い所で作業を中断しキーボードから手を離した。

そして背もたれに体重を預け、そのまま背後の亜矢を見上げようとしたのか頭を後ろに倒した。するとその彼の後頭部が、ちょうど亜矢の丰满な胸に乗っかる形になってしまった。仁の後頭部に、亜矢の胸のポヨンとした柔らかさが伝わる。

「んッ!？」

「あ、ゴメン」

「い、いえ、気にしないでください。……………何ならそのまま枕にしてみる？ 私胸」

【真矢ッ!】

突然の胸への刺激に、驚いて亜矢が声を上げると仁が即座に頭を起こす。

だが、次の瞬間真矢が表に出てくるとこれ見よがしに胸を寄せて上げて仁にアピールした。ただでさえ最近服が薄くなって分かり易くなった亜矢の大きな胸が、それにより更に強調され思わず亜矢が内面で声を上げる。

対する仁はと言うと、真矢の言葉に何かを考えると再び頭を後ろに倒して彼女の胸に後頭部を乗せた。胸に頭の重さが掛かると、真矢は一瞬真顔になり次いで頬を赤く染める。

「——ふえ？」

まさか本当に頭を乗せてくるとは思っていなかったのか、真矢が変な声を上げる。それに気付いているのかいないのか、仁は後頭部から伝わる感触に満足そうな溜め息を吐く。

「じ、仁君——!？」

「ん……感想言った方が良い？」

「遠慮しとく……亜矢が恥ずかしさで死んじやうわ」

恋仲になって改めて分かった事だが、仁は結構自分に正直でしかも甘える時に容赦がない。亜矢の方が控えめな性格である事を考えて大つぴらに甘えてくる事は無いのだが、真矢が表に出てガードを緩めると遠慮なくそれに乗っかってくるのだ。時には真矢も冗談で言った事を実行に移され、こんな風にドギマギする事もよくある事だった。

そんな2人の様子を、作業を中断してジツと見つめる峰。彼女は暫く2人の事を眺めていたが、徐に立ち上がると給湯スペースでインスタントコーヒーを淹れた。かなり濃い目に淹れたが、峰はそれを少しも苦そうにせず飲む。

「んぐ、んぐ……はあっ！ あゝ、口が甘い……」

口に広がる幻覚の甘さを濃いインスタントコーヒーで洗い流し、再び2人の方に目を向けると真矢が自棄になったのか後ろから仁の首に手を回し、彼の頭を抱きしめているのが見えた。真矢が恥ずかしさと愛しさ、そして満足感に顔を赤く染めながらも笑みを浮かべて仁の頭に頬を乗せているのを見て、峰の口に再び得も言われぬ甘さが広がった。

「……………」

ラボの中でイチヤつく仁達に、峰はインスタントコーヒーの瓶を驚掴みにすると中身をマグカップに容赦なくぶち込んで湯を入れて口に流し込んだ。分量なんて知った事か。

ここ数日を期に、インスタントコーヒーの消費量が倍以上に増えたのは言うまでもない事であった。

その頃、傘木社では――

様々な機器が置かれた医務室の様な部屋で、アデニンとチミンが向かい合っている。椅子に座って向かい合っている2人は、しかしあまり穏やかな雰囲気ではなかった。

何故ならチミンは入院患者が着ているような服を着て、両手を手錠とワイヤーで床と繋がれているのだから。

アデニンは今の所大人しくしているチミンの片目を手で隠し、それをサツと取り払い眼球の動きを観察している。

そこへ雄成がシトシン、グアニンと共にやって来た。

「どうだね？　彼女の様子は？」

「経過は良好です。肉体の機能に異常は見られません。強化は成功の様です」

チミンは雄成達を睨む。その視線を雄成は全く気にせず彼女を観察するとアデニンと何かを話し合い始めるが、シトシンは違った。チミンの視線に気付いた彼は、蔑みの目を向けながら吐息が掛かりそうなほど彼女に近付いたのだ。

「よお、どんな気分だ？　モルモットに戻った気分はよお？」

「あゝ、シトシン。離れた方が良いぞ」

「え？」

チミンに近付き彼女を挑発するシトシンに、雄成がやんわりと忠告する。その意味を

理解していないシトシンが視線を雄成達の方に向けた次の瞬間、まだ自由だったチミンの両脚がシトシンの腰を挟み締め付けた。

「あつ!？」

「んッ！ フンッ!!」

シトシンの腰を締め付けながら、チミンは手錠に繋がったワイヤーを力尽くで引き千切りそのままシトシンの首を絞め始める。腰と首を絞めつけられ、シトシンは白目を向き口から泡を噴く。

チミンが動き出した瞬間、グアニンは距離を取りアデニンは雄成を守るように彼を下がらせ、そして雄成本人はシトシンを殺そうとしているチミンを観察していた。

シトシンの顔が段々と青くなってくる。このままだとシトシンが死ぬと、アデニンがベクターリーダーとカートリッジを取り出した時、部屋に傘木保安警察の隊員が3人入ってきた。その手には実験動物が暴れた時の為の、電極を打ち込んで電撃で相手を無力化するライフルが握られている。

「止めろッ！」

隊員の警告も聞かずそのままシトシンを殺そうとするチミン。保安警察の隊員は彼女が警告を無視したと見るや即座に引き金を引き、三対の電極が次々とチミンに撃ち込まれる。

「あがあああああつ?!」

テザーガンのそれを超える電圧による電撃を受け、チミンがシトシンを離し床に倒れる。電撃はなおも収まらず、チミンの体は彼女の意思に反して不規則に暴れていた。

今度はチミンの方が命の危機に晒されていると見て、アデニンが隊員達に注意した。

「殺すなよ」

「死にはしないだろう」

アデニンの心配を雄成が一蹴する。この処置とそれにより得られる結果を誰よりも理解していた彼から見れば、最早チミンはこの程度で死ねるほどの軟な体をしていなかった。

一方危うくチミンに絞め殺されそうだったシトシンは、解放され呼吸が安定すると苛立ちを隠さず立ち上がり倒れたチミンの腹を思いつき蹴り飛ばした。

「この、クソ負け犬があツ!?!」

「がツ?!」

「モルモットの分際でツ!! 生意気なんだよツ!?!」

1発だけでは気が済まなかったのか、シトシンは何度もチミンの腹に蹴りを叩き込む。

忘れていかもしれないが、今のチミンほどではなくともシトシンも肉体改造を施さ

れた身だ。身体能力は常人のそれを大きく上回る。

そんな脚力で何度も蹴られ、チミンは内臓を大きく傷つけられた。何度目になるか、腹を蹴られた瞬間チミンの口から赤黒い血の塊が吐き出される。

「ごべっ?! あ、が……」

「そこまでにしておけ、シトシン。本当に死ぬ」

「いや、まだ大丈夫だろう。既に細胞は再生を始めている筈だ。シトシン、もう2、3発やってみろ」

「へへっ、了解ッ!」

雄成の許しが出たからか、シトシンは嬉々としてチミンの腹を蹴り続ける。2、3発と言われたにもかかわらずそれ以上蹴り、チミンからは何の反応も無くなった。

「う、う……」

「これは、流石に死んだのでは?」

口から血を流しながら動かなくなったチミンの様子に、グアニンが不安そうな顔でそう呟く。

「ふむ……君、それを貸したまえ」

「はっ」

雄成はそんなグアニンの言葉を聞くと、隊員の1人からテザーライフルを受け取り

カートリッジを交換して再びチミンに撃ち込んだ。

「あああああああつ?!」

電極を撃ち込まれた瞬間、再びチミンの口から悲鳴が上がる。その光景に雄成は、どうだと言う目をグアニンに向けた。

「見たまえ、彼女はまだ元気だ」

「は、はあ……」

「もう宜しいですか?」

「ふむ、そうだね。彼女には部屋に帰ってもらおう」

「では……部屋に連れて行け」

アデニンが指示すると、動かなくなったチミンを隊員が二人掛りで運んでいく。

チミンが運ばれたのは非常に簡素な個室であった。まるで刑務所の独房の様な、簡単な仕切りで区切られたトイレと洗面台、簡素なベッド以外何もない。

そこへ放り込まれたチミン。運ばれるまでは死人の様な顔をしていた彼女だが、乱暴に放り込まれて数分ほど経つと意識を取り戻し体を起こした。

「うっ、く——」

まだ腹を中心に体のあちこちが痛むが、動けない程ではない。そして意識がハッキリしてくると、途端に先程のシトシンの態度に腹が立ってきた。

「あいつ——!?!」

前々から気に入らなかつたが、自分が実験動物にまで墮ちると途端に調子に乗りこれでもかと威張り散らしてくる。それが気に入らなくて一人怒りに震えていると、部屋の一画が開きそこからトレーに乗った食事が出された。見た目や味なんて度外視した、ただエネルギーを補給する為だけの食事。常人よりはるかに多くのカロリーを欲する彼女に合わせたそれは、デイストピアの世界の住人の食事かと言う程のものであった。

機械的に出されたその食事に、チミンはゆっくり近づく………感情に任せてそれを裏拳で殴ってひっくり返した。

「くそっ?!? くそっ?!? くそっ?!? 私が、こんな——!?!」

少し前まで、自分は組織で上位の存在だった。部下を顎で使い、実験動物として運ばれた人間を使い潰し、向けられる視線は畏怖のそれだった筈だ。

それが今はどうだ? 研究員達が向けてくる視線は嘗て彼女自身が拉致してきた人間達に向けていた、実験動物を見る冷たい目。嘗て部下だった連中の態度は、上司に対するものではなく暴れる実験動物を押さえつける乱暴なものだ。先程テザーライフルを撃ってきた隊員の事は見た覚えがある。以前ウルフファッジを観察する際に同行していた隊員だった筈だ。

何故ここまで墮ちたのかと考えれば、真っ先に思い浮かぶのは仮面ライダーデイナ

……仁の顔だった。彼に負け続け、それが原因で墮ちるところまで落ちてしまった。

チミンは独房の中で仮面ライダーに対する憎悪を燃やしていた。が、不意に彼女は口の中に違和感を感じた。

「……？」

何かと悪い口を動かしながら下を見ると、そこには先程自分の手でひっくり返した食事が広がっている。両手には床に落ちた食事を握っており、しかも片方は口に運ばれていた。そう、彼女は自分でも気付かぬ内に、自分で床にぶちまけた食事を拾って食べていたのだ。

どんなにプライドが許さなくても、体は生きる為にカロリーを欲していた。例えどんなに惨めで卑しくても、彼女の体はプライドに殉じる事よりも生きる事を選んだのである。

それを自覚し、チミンの目から涙が零れ落ちた。

「ちく、しよう——!? ちくし、ちくしよう——!?」

悔しき、惨めさ、卑しさに涙を流しながら、チミンは床に落ちた食事を拾って口に運んでいく。どんなに不味くても、食べる事を止める事が出来ない。

独房には監視カメラが取り付けられており、床に落ちた食事をチミンが拾って食べている様子は研究員達にも当然見られている。それが分かっているから、彼女は余計に今

の自分が情けなくて惨めで仕方なかった。

彼女しか居ない独房の中、すすり泣く声と咀嚼音しか聞こえない筈のそこで、しかしチミンは自分の中でプライドが崩れていく音を確かに聞いていた。

アダプトキャットのアップグレードは程なくして完了した。亜矢は峰から調整の完了したアダプトキャットを受け取る。

「どうぞ、双星さん。これが新しく生まれ変わったアダプトキャットです」

「ありがとうございます！………見た所特に変わった感じはしないわね？」

「そりゃ弄ったのは中身ですから」

真矢が受け取ったアダプトキャットに特に変化が見られない事に首を傾げていると、峰が苦笑しながら答える。今回の改良はソフト面を弄っただけなので、外見上変化が見られないのは当たり前だ。

恐竜のDNAでベクターカートリッジの作製を行っていた仁も、作業の手を止め横か

ら新しくなったアダプトキャットを見る。

「ふくん………真矢さんどうする？」

「どうするって？」

「肩慣らし、してみる？」

そう言っつて仁はVRゴーグルを取り出す。まずは模擬戦で使い心地を慣らししてみようと言う事らしい。

仁からの提案に、真矢は好戦的な笑みを浮かべた。

「是非お願いするわ！」

「ん。それじゃ——」

差し出されたVRゴーグルを真矢が受け取ろうとしたその時、峰のタブレットからアラームが鳴る。3人が一斉にそちらを見て、峰が中心となってタブレットを覗き込む。

「ファッジ出現、ですね」

「肩慣らし相手が向こうから来てくれたよ」

「みたいね。行こう、仁君！」

2人は早速ファッジ出現現場へと向かった。

街中に出現したのはまたしてもキメラファッジ、それも2体だ。見た感じ兎と熊を組み合わせたファッジと、トカゲとトンボを組み合わせたファッジに見える。

人々が逃げ惑う中、ファッジと対峙した2人は腰にデイナドライバーを装着する。

「さて、新しくなったルーナの力、見せてもらおうかしら」

「翹付きの方は俺に任せて。兎の方は任せるから」

「オツケー！」

〈HAWK + LEON Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

周りの人々は既に逃げ終えているので、人目を気にする必要は無い。仁と真矢は気兼ねなく仮面ライダーに変身した。

「変身ッ！」

〈Open the door〉

2人は仮面ライダーに変身し、ルーナは変わった自分の体をまじまじと見た。

やはり大きく変わったのは両手脚。脚は装甲が一新されより頑丈なものに変化し、両腕には爪が収納されたガントレットが装着されている。

試しにルーナが爪を出す事をイメージし、両腕に力を込めるとシャキンと音を立てて鋭い刃が両出にそれぞれ2本ずつ飛び出した。刃の全長はリプレッサーショットよりも長い。仮に銃を構えた状態でも、銃口が引つかかる事なく攻撃する事が可能だろう。

「うん、良い感じ」

「さあ、検証の時間だ」

ルーナが両腕の爪『アームブレード』を出し入れして調子を確認していると、2体のキメラファッジが飛び掛かってきた。2人はそれに気付くと、デイナはハイブリッドアームズで、ルーナは早速アームブレードで迎え撃った。

「おととつと」

「ッ！ ぐ 挨拶ね！」

ルーナはキメラファッジを押し退け体勢を整えると、右腕の爪で地面を引っかく様にして加速しキメラファッジに肉薄した。

「行くわよー！」

キメラファッジに向け、ボレーキックを決めるルーナはそのまま勢いを殺さず空中で体を捻りアームブレードで斬り付ける。キメラファッジはルーナからの斬撃を防御するが、素早く動き回るルーナの攻撃に防御が追いつかず体のあちこちを切り裂かれる。

それでもパワーに物を言わせてルーナの攻撃を振り払うキメラファッジ。攻撃を弾き無防備となったルーナに、熊の腕で殴り付けようとする。

瞬間、ルーナはアームブレードを出したままリプレッサーショットを抜き至近距離からの銃撃を浴びせた。こちらはアームブレードに比べてストッピングパワーに優れている為、キメラファッジは強制的に後ろに下がらされる。

「リプレッサーショットとの同時使用も問題なし、ね」

ルーナの活躍はデイナにも見えていた。戦闘の最中に横眼でチラリと見て、問題がない様子に小さく安堵の息を吐く。

本当はもつとしっかり見ておきたかったが、生憎そうもいかない。トンボの飛行能力により空中を三次元的に動き回るキメラファアτζに対し、デイナは若干の苦戦を強いられていた。

トンボは4枚の翅を動かし、空中を三次元的に動く事が出来る。分かり易い例を挙げれば、正面を向いたまま空中でバックや斜め方向への移動が出来るのだ。

対して鳥の動きはどうしても直線的にならざるを得ず、機動力に於いてデイナはキメラファアτζに後れを取っていた。

単純なスペック上での敗北。しかしそれを戦いの敗北に結び付けず、発想と頭脳・知識によって勝利への筋道を組み立てるのがデイナに変身している仁の真骨頂であった。

「……………あった」

キメラファアτζと空中戦を演じながら、デイナはある物を探していた。そのあるものは、ビルの屋上に設置された貯水タンク。それも出来るだけ大きな物を見つけると、デイナはそちらに向け一気に飛翔する。

当然キメラファアτζもその後続き、デイナの後ろに付いてきていた。

後方からカメラファッジが付いてきているのを確認すると、デイナは大剣モードのハイブリッドアームズで貯水タンクを切り裂いた。切断面から大量の水が噴き出す。

デイナの行動はそれだけでは終わらず、その貯水タンクが置かれた屋上に着地すると噴き出す水に向けて翼を羽搏かせ強風を巻き起こし、大量の水を雨の様にカメラファッジに向けて飛ばした。

突然巻き起こった横殴りの暴風雨、しかしその程度で止まるほどカメラファッジは軟ではない。構わずその暴風雨を突き進みデイナへと肉薄し――

「――程好く冷えたろ？」

突然カメラファッジの動きが鈍った。翅の動きも鈍くなり、飛行を維持する事が出来ず屋上に落下する。

「ッ?!?!」

「何も言わないって事は、あんたは実験に使われたのかな? 理性なくしても感覚は人間のままだね。変温動物だってのに、体温が冷える事を考えないなんて」

デイナが貯水タンクの水をぶちまけて飛ばしたのは、目くらましだとかを狙ったものではない。多量の水分を含んだ風により、カメラファッジの体温を冷やす事を目的としていた。日中だが多量の水が太陽光を遮り、同時に吹きすさぶ風と水滴がカメラファッジの体温をあっという間に奪っていく。それこそ行動に支障が出る位に。

そして動きが鈍ったフアツジなど、ただの的でしかない。デイナはキメラフアツジに向けて容赦なく必殺技を叩き込む。

「戦いのレポートは纏まった」

〈ATP Burst〉

「ハアッ！」

デイナのノックアウトクラッシュユがキメラフアツジに突き刺さり、蹴り飛ばされた先で爆発し元の姿に戻った。そこに居たのは囚人服のような恰好をした男。一言も喋らなかつたのもしやと思つていたが、やはりこのキメラフアツジは拉致された人間が無理矢理変異させられたもののようなのだ。腕にはベクタープレスを身に付けているが、簡易型であるが故に性能が低いのか理性を保てなかつたらしい。いやそもそも、プレスを使つてもベクターカートリッジの二本同時使用は負担が大きいか。

ともかくにもこちらは片付いた。デイナは変異させられていた人を抱えて屋上から下りると、適当な所にその人を寝かせルーナが戦っている方へと向かつた。

彼が向かつた時、戦況は完全にルーナの独壇場となつていた。

「ハッ！ ヤアッ！」

ルーナの回し蹴りがキメラフアツジを蹴り飛ばし、距離が開いた瞬間リプレッサーショットの銃撃がキメラフアツジの表皮を穿つ。ルーナの銃撃を何とか堪え接近する

が、攻撃しようと防御を解いた瞬間アームブレードによる斬撃が襲った。

もう既にキメラファアツジはボロボロだ。

【真矢、そろそろ！】

「了解！」

〈Genome set ATP Burst〉

アームブレードを収納し、リプレッサーショットを連結させライフルモードへ。そしてドライバーから引き抜いたベクターカートリッジを装填してATPバーストを発動し、バーストブレイクでキメラファアツジを撃ち抜き倒した。

キメラファアツジが倒された場所には、やはり囚人服を着た人が倒れている。

「お疲れ、真矢さん亜矢さん。新しいルーナの使い心地はどう？」

「仁君！ いい感じよ。これなら私も全力で戦えそう」

【私も、今まで以上に頑張れそうです】

「亜矢も気に入ったって」

2人は新しくなったルーナに満足してくれたらしい。その事に安堵しつつ、仁は変身を解除し宗吾に事態が終息した事を伝え同じく変身を解いた亜矢と共に大学へと戻っていくのだった。

街に解き放ったキメラファアツジが仮面ライダーに倒された事はすぐさま傘木社の雄成の知るところとなった。

一度は仮面ライダー達に脅威となったキメラファアツジも、今となってはちよつと能力が多彩なファアツジ程度の脅威に落ちている事に報告に向かったグアニンは居心地御悪さを感じずにはいられない。

しかしその報告を聞いた雄成の反応は思っていたよりも薄かった。

「やはり、ただベクターカートリッジを二つ使っただけでは大した違いはないみたいだな」

「はあ……それで、次は？」

雄成の次の考えを聞き出そうとするグアニンに対し、彼は目の前のシリンダーを眺めながら答えた。

「まあそう慌てるな。今はこれの完成を待とう」

そう言つて雄成が見ているのは、ベクターカートリッジが浮かんだシリンダー。その

カートリッジの中にあるのは、先日奪い取ったDNAから作られた恐竜の遺伝子を持つ超万能細胞。

シリンドラーの中に浮かぶベクターカートリッジを、雄成はガラス越しに愛しそうに見つめていた。

第30話：鍵の完成

深夜……学生や教授が帰宅した明星大学の研究棟の一室。

白上研究室にて、仁が一人秘密のラボの中でキーボードを叩いていた。恐竜のDNAを使ったベクターカートリッジの生成の為だ。

この作業は急務である。傘木社は仁とは比べ物にならない数の古生物のDNAを手に入れてはいるし、今後新たに手に入れるかもしれない。

正直に言つて、古生物のDNAがどの程度強力なベクターカートリッジになるのかは想像もつかない。だが仁は、通常のベクターカートリッジに比べて遥かに強力な物が出るだろうと見立てていた。何しろ何十億年もの長い時間を生き抜いた強靱なDNAだ。現代の生物のDNAとは比較にならない力を秘めているに違いない。

その力を傘木社だけに独占される訳にはいかなかった。意地でも仁の方でも恐竜のDNAを戦力に加えなければ。

「う——はあ……」

とは言え長時間ぶっ続けの作業は彼を以てしても流石に疲れる。もうすぐ作業完了と言う事で今日だけはと亜矢にも見逃してもらえらることになり、こうして深夜まで作業

していたのだが想像以上にこのベクターカートリッジの生成は疲れる。普通のベクターカートリッジはそこまでも無いのだが、恐竜のDNAを用いたベクターカートリッジは生成に集中力を使う。解析出来ているとは言え、所々穴が空いたDNAを補いながら生成しているのだ。入力するDNAに不備があればベクターカートリッジは機能しないので、一切のミスがない様にと半端ではない集中力を要する。

だがそれももうすぐ終わる。もうあと一歩で恐竜のDNAを使ったベクターカートリッジが完成しそうだった。

だからだろうか。気が緩んで、余計な事を考えてしまった。

「ふう……んく？」

徐に仁が手に取るのは、ダイナの基本フォームの片割れとなるヒューマンベクターカートリッジ。最初こそ特に何とも思っていなかったが、こうして自分でベクターカートリッジを作っているとどうしても拭いきれない疑問が浮かんでしまう。

それは、このヒューマンベクターカートリッジは一体何なのか？ という事だ。他のベクターカートリッジは分かる。特定の生物の遺伝子をインプットした超万能細胞。ダイナが使えばその生物の特性を力として使う事が出来るし、直挿しすればその生物と人間を組み合わせたファッジになる。

ではヒューマンベクターカートリッジを直挿ししたら？ 最近はそのがずっと気に

なっていたのだ。人間の特性を持ったファッジとは一体何なのだろうか？

〈HUMAN〉

コックを捻って押し込み、ヒューマンベクターカートリッジを起動状態にする。普段だったら絶対考え付かないだろうが、ベクターカートリッジの生成にかなりの集中力を使ったからだろうか。頭のブレーキが壊れたのか、普段ならやろうとしないだろう事を実行に移した。

即ち、起動状態のベクターカートリッジを自分の腕に当てた。直挿しだ。起動状態のヒューマンベクターカートリッジを自分に直挿ししたのである。

果たしてその結果は——

「……………ふむ」

——何も起こらない。何かが流れ込んでくる感覚も無いし、体に異変が起こった感じもしない。そもそも直挿しが成功したのであれば、ベクターカートリッジは体内に潜り込んでくる筈だ。それすらないという事は、ヒューマンベクターカートリッジは人間に対して効果が無いという事になる。

「——って事は……」

考えられる可能性は現時点で二つ。一つはベクターカートリッジはインプットしている遺伝子情報と同じ生物に対しては効果が無い。もう一つは、ヒューマンベクター

カートリッジ自体が特別だという事。

次の瞬間、仁の左手が素早く動いた。電光石火の速さで動いた彼の左手に握られていたのは、大多数の人間が苦手としている黒光りする昆虫……ゴキブリだ。まだ元気にわしやわしや足を動かしているゴキブリを、仁は繁々と眺め右手のベクターカートリッジを押し付けた。

もし一つ目の方の仮説が正しいのであれば、これで人間の特性を持つゴキブリが出来る上がる筈だが、結果はやはり無反応だった。

「やっぱり……」

これでハッキリした。このヒューマンベクターカートリッジは、デйнаドライバーで使用する事が前提のベクターカートリッジなのだ。

デйнаドライバーは最初に装着した人間の遺伝子情報を入力し、その人物以外は使用できないようになっていいる。このヒューマンベクターカートリッジは、そのインプットされた遺伝子情報をリーディングし、それと他の遺伝子情報を組み合わせ様々な力を得ているのだろう。

これが現時点でのデйнаとヒューマンベクターカートリッジに関する仁の考察であった。仁は検証に付き合わせたゴキブリを離し、ベクターカートリッジも待機状態に戻した。

「ふう……んんん、はあ」

待機状態に戻したヒューマンベクターカートリッジを仕舞い、体を伸ばして筋肉を解す。そして溜め息を吐いて時計に目を向けると、深夜1時を過ぎていた。

恐竜ベクターカートリッジの完成まであと一步。ここであまり無理をしてミスをするのもアホらしい。仁はここで作業を中断し、今日はもう帰る事にした。データを保存し、パソコンの電源を落とす、荷物を纏めてラボの照明を落として表の研究室へと出た。

そう言えば、作業に夢中になり過ぎて夕飯を食べていなかった。帰り際にコンビニにでも寄って何か買って帰るか？ いや何だかそれも面倒臭い。それに家に帰り着く頃にはさらに時間も遅くなっているだろうし、もうエネルギーでも腹に入れてさっさと寝てしまおうか――

「あ、仁君……」

「んん？」

仁が白上研究室に戻ると、そこには何と亜矢が居た。もうとつくの昔に帰った筈の彼女が居る事に、仁は目を丸くして彼女を見ていた。

「亜矢さん、何で居るの？ もう帰ったんじゃないか？」

「仁君の事ですから、ご飯も食べずにこの位の時間まで頑張ってるんじゃないかと思ってお弁当持ってきたんです」

そう言つて亜矢はバッグから弁当箱を取り出した。多目的スペースのテーブルの上にそれを置いた亜矢は、仁を引つ張つてソファアに座らせた。

「さ、今お茶淹れますから座つててください。あ、それとももしかして、ご飯食べちゃつてました？」

「いや、まだだけど……亜矢さん、こんな時間に態々弁当作つて持つてきてくれたの？」
健康に人一倍気を遣う亜矢の事だから、もうとつくに夕飯も済ませて夢の中だと思つていたからかなり意外だった。

「別に無理してくれなくても良かったのに……」

「私や真矢が無理するなつて言つても、仁君する時は普通に無理するじゃないですか」
「私と亜矢はそんな仁君を支えたかっただけよ」

亜矢と真矢が交互に出てきて、仁の言葉に答える。そこにあつたのは、言葉通り仁を支えたいと言う亜矢と真矢、2人の愛情のみ。

それを受け、仁は申し訳なき以上に嬉しさを愛しさを感じ、自然と顔を綻ばせた。
「……ありがとう」

「気にしないでください。さ、どうぞ」

「ん……いただきます」

湯呑に入つた茶を渡され、仁は亜矢の手作り弁当を開け箸を手に取つた。玉子焼きを

箸で摘み、口に運ぶ。

「うん……美味しい」

仁は疲れた体に、亜矢の手作り弁当の上手さが沁み込むのを感じた。次々と弁当の中身を心底美味そうに食べていく仁の様子を、亜矢が隣で優しく見守っていた。

「……あ、この肉巻き真矢さんが作ったやつでしょ」

「えっ!? 何で分かったの?」

「亜矢さんと味付けが微妙に違う。ちよつと甘めだから」

「ふふつ、流石仁君ですね。ね、真矢?」

「うー、ちよつと悔しいかも」

「でもこつちも美味しいよ。ありがと、2人とも」

たった2人しか居ない深夜の研究室で、和やかな時間が過ぎていくのだった。

傘木社の本社ビル研究区画の一室で、アデニンは1人パソコンにデータを入力してい

た。

ディスプレイに映っているのは、彼も良く知るチミンに関するデータだ。

チミン——本名を志村^{しむら}希美^{のぞみ}と言う彼女は、元々傘木社の研究員の一人だった。

グアニン、シトシンもそうだったが、最初はベクターカートリッジに関係のない普通の研究に従事する研究者だった彼女は、研究者としてはどちらかと言えば平凡であった。だが健康診断に偽装した遺伝子検査でベクターカートリッジに対する適正を見出され、裏の研究の実験台となりそこから彼女は変貌した。

実験台にされる以前は大人しい何処にでもいる女性だった希美は、投薬による肉体改造・遺伝子改造を受け性格が豹変。チミンとしての性格が形成された。

その後はチミンと言う幹部としての名を与えられ活躍する彼女だったが、仁と仮面ライダーテイナの登場から彼女の転落は始まった。度重なる敗北と失敗。幹部とは言え、組織の暗部を秘匿する為の処置を施されていた彼女はあの病院での戦いで敗北しベクターブレスを破損した時点でこの世から去っている筈だった。

しかし彼女は未だ生かされている。その生への強い執着が雄成の目に留まり、再強化手術を受ける事となったのだ。

尤もそれが幸運だったかと言われたら、必ずしもそうとは言えないだろう。何しろ扱いは完全に実験動物のそれ。特に先日シトシンに襲い掛かって以降、彼女が独房から出

る時は必ずアデニンがホワイトカラーズに変身して見張る中で拘束具を着させられてから出ることが許されているのだ。

もうこの会社で彼女の事を人間として扱っているものは誰も居ない。誰も彼もが、彼女の事を狂暴な実験動物として認識している。

しかし得られるものもあつた。彼女は先日の再強化手術を受け、肉体が大幅に強化。今は生身でベクターカートリッジを同時に複数本直挿ししても耐えられる事が実証されていた。

今は彼女に合わせた新たなドライバーの開発が行われている。まだ骨組みも出来ないが、完成すれば相当強力なドライバーになるとの事だ。ホワイトカラーズでもどこまで対抗できるかどうか。

そこまで考え、アデニンはデータを保存した。現時点で彼女に関して纏められるのはここまで。続きは今後の実験次第となる。

「……………哀れだな」

不意にアデニンの口からそんな言葉が零れる。言葉を向ける相手はチミンもとい、希美であつた。雄成の駒として忠実に、冷徹に動く彼だが同僚として共に働いていた彼女の転落に色々と思わないではない。別にあの境遇から助け出そうと言う気はさらさらなかつたが、哀れに思つてやる程度には情も残つていた。

そこで彼の携帯に着信が入る。相手は彼の部下である保安警察の者だ。「私だ」

『失礼します。トラブルが発生したので、至急アデニン様の助力を得たいと』
「分かった、すぐ行く」

通話を切り、パソコンの電源を落とすと椅子から立ち上がり部屋から出ていくアデニン。

廊下を歩いていると、途中で何人かの研究員とすれ違う。彼らは誰もがアデニンの姿を見ると足を止め、深く頭を下げる。

少し前までは希美も同じようにすれ違う度に下の者達に頭を下げられていたものが、人間堕ちれば堕ちるものである。

しかし希美の今の姿は、未来のアデニンの姿かもしれない。彼も肉体改造を施されている身。ただの人間である研究員達は心の奥底で彼の事も実験動物と思っっている事だろう。

「……………くくく」

想像してアデニンは笑いを堪え切れなかった。全く滑稽な話だ。

歩きながら小さく笑うアデニンの姿に、途中すれ違う研究員達は誰もが奇異の目を向けるのだった。

その夜、都内にあるビルの一棟の前に複数の特殊車両が集まっていた。警察の特殊部隊 S・B・C・T の移動用車両である。

この日この時間に彼らがここに来たのは、秘密裏の調査の結果このビルが傘木社の裏の事業に係る何かを行っている事が判明したからだ。

特殊車両から次々と隊員が降車し、ガンマカービンを手にビルの入り口を包囲する。その彼らの後ろには、既にスコープに変身した宗吾が居た。

「隊長、準備完了です」

「よし……………突入！」

スコープの号令が響くと、隊員達が一齐に動き出し正面入り口は勿論裏口からもビルに突入していく。

隊員達は次々とビルの中に雪崩れ込むと、部屋を片っ端から開けていく。その殆どは時間が時間と言う事もあり、人は殆ど居なかった。時折残業の為残っていたのか、デス

クのパソコン画面に齧りついているサラリーマンらしき人物の姿を見かけたがその程度だ。念の為残っていた者達の事も調べたが結果は白。どの部屋もオフィスとして使われているだけで、怪しい所は何もない。

情報が間違っていたのか？ 念の為各部屋のパソコンも調べてみたが、データに怪しい所も見られなかったし、今回は外れかもしれない。

しかしスコープは諦めなかった。彼は調査をした者達の事を信じていたし、彼自身何か違和感を感じずにはいられなかったのだ。

試しに彼はスコープの左目のカメラを切り替え、電磁波で物を見るモードに切り替え床を注意深く観察した。上に異常が見られなかったのなら、考えられるのは下しかない。

果たして彼の判断は間違っていないなかった。一階の床の一画に、明らかにおかしい電磁波を発している部分があったのだ。

スコープは見つけたその部分を迷わず踏み抜く。

そこにあつたのは地下へと通じる階段だった。床の一面に階段が隠されていたのだ。「俺が先行する。付いて来い！」

灯りの無い階段を、スコープはカメラを暗視モードに切り替え、暗闇を物ともせず降りていく。その後ろに、他の隊員達が銃のライトで照らしながら行った。

階段を降り、廊下を進んで行くとそこにあったのは無数の機材だった。地上部分にあったオフィス用機材ではない。

地下にあったのは無数のシリンダー。その中にはベクターカートリッジが浮いている。

「こいつは……当たりだな。ここは傘木社の秘密研究室……」

「ですが、何故人が居ないのでしよう?」

「既に全員退避したからだ」

慎司の疑問に答えたのは、スコープでは無く何時の間にか地下施設に入ってきていたホワイトカラーズだった。スコープ達が彼の存在に気付くと、それを合図にしたかのように奥からアントファッジ達が姿を現す。

「待ち伏せか——!?!」

「いや、研究員とデータを逃がすだけで精一杯だったよ。随分とフットワークが軽いんだな、驚いた」

ホワイトカラーズの言葉にスコープは仮面の奥で苦い顔をする。今回の強制捜査は秘密裏に進めていたのだが、何処かで情報が洩れるか感付かれたらしい。

情報戦においては向こうが一枚上手だった。その事実は素直に悔しい。

しかし、S・B・C・Tの行動が全くの無駄骨だった訳ではない。

「だがお前らがここに居るといふ事は、ここにはまだ持ち出せ切れていない何かがあるという事だ。それを回収させてもらう」

「やれるものならな」

「……………撃てッ!!」

命令と共にスコープが発砲し、それを合図に地下施設で銃撃戦が始まった。地下施設の機材などを盾代わりにして、互いに相手の銃撃を凌ぎながら応戦する。

その激しい銃撃戦の中で、スコープとホワイトカラーズだけは相手に接近して戦闘していた。

「はっー!」

スコープが銃撃しつつホワイトカラーズに接近して飛び蹴りを放つ。ホワイトカラーズはそれを銃剣で防ぎ距離を取ると、ブレードを外してベクタートリガーの引き金を引いた。

「くっ!?!」

放たれた銃弾をスコープは左腕のボルテックスシールドで防ぎつつ、円を描く様に移動。その中でもスコープは片手に持ったガンマライフルでホワイトカラーズを撃つた。片手で撃っているので射線が安定せず割と見当違いの方にも銃弾が飛んで行くが、それが逆にホワイトカラーズに射線を読ませず動きを牽制する役に立っていた。

射撃戦ではスコープの方に分がある。それを理解したホワイトカライズはベクターリーダーを銃剣モードにして、ルーナに対してやったのと同じように片手から触腕の鞭を伸ばし回転させて銃弾を弾きながらスコープに接近した。

「ッ!？」

「もらった!」

十分に接近すると鞭を防御では無く攻撃に転用。ガンマライフルに巻き付けるとスコープの手から奪い取り遠くに放り投げた。

メインの武装を奪われ一気に戦闘力が下がるかに見えたスコープ。しかしスコープは武器が奪われたと見るや即座に右腰のホルダーから一枚のプレートを取り出し盾の後部に装填した。

〈Vortex・Gun Starting〉

プレートを装填した盾から、二門の銃口が伸びる。スコープはそれを迷わずホワイトカライズに向け、盾の持ち手についたトリガーを引いた。

放たれる銃撃の連射速度は、ガンマライフルの比ではない。激しい銃撃がホワイトカライズから反撃の隙を奪い取る。

「ぐあああつ?!」

スコープの盾、ボルテックスシールドには二つの武装が内蔵されている。一つが近接

戦闘用の剣・ボルテックスブレード。そしてもう一つが、盾に内蔵されているマシンガン・ボルテックスガンだ。

ボルテックスガンはガンマライフルに比べ射程距離に難があるが、その分連射速度はガンマライフルを大きく上回り近距離の相手に対し弾幕を張り制圧射撃をするのに優れていた。

高速連射される弾丸に、ホワイトカラーズは後退を余儀なくされる。

「くっ!? S. B. C. Tのライダーシステム、これほどとは——!?」

「今までとは違うって事だ。一気に決めさせてもらう!」

〈Vortex・Blade Starting〉

盾に装填したプレートを一度抜き、裏表をひっくり返して再び装填して今度はプレードを展開しホワイトカラーズに接近する。近距離からの弾幕で大きくダメージを受けたホワイトカラーズは、スコープからの斬撃を銃剣で何とか受け止めた。

「ぐっ!?!」

「門守君達からお前の事も聞いていたが、案外大した事なかつたな!」

パワーの上ではスコープの方に分があるのか、スコープの攻撃は必ずホワイトカラーズの銃剣を弾いていた。鏝迫り合いになるとホワイトカラーズは踏ん張ってもじりじりと押されている。

スコープは早くも勝利を確信していた。

「だが、お前とデイナでは決定的に違う事がある……」

「あん？」

「お前には……知識が足りない」

「何だと？」

「こう言う事だ」

ホワイトカラーズは徐に防御の軸をズラして、スコープの攻撃を自分から逸らさせる。勢い余ってホワイトカラーズの横を通り抜けてしまったスコープだが、直ぐに体勢を立て直し追撃に移ろうとした。

だがスコープが振り返った時、彼は思わぬものを目にした。

なんとホワイトカラーズの姿が背景に溶け込んだのだ。

「ふっ……」

「何ッ!？」

あつという間に姿が見えなくなったホワイトカラーズに、スコープが周囲を見渡すがホワイトカラーズの姿は何処にもない。

辺りを警戒するスコープだったが、その彼の警戒を嘲笑うかのように背後からホワイトカラーズが彼を斬り付けた。

「ぐあつ?! くつ?!」

背中を受けたダメージに体勢を崩すスコープ。即座に反撃するが攻撃は空を切り、続いてホワイトカラーズの第二撃が再びスコープの背を襲った。

「ぐああああつ?!」

「隊長ツ?!」

強烈な攻撃を二度も背中に喰らい、倒れるスコープに部下が心配の声を上げるが彼らは彼らでアントファアツジの相手に忙しく彼を援護している余裕がない。そもそも姿が見えない相手なので、援護も何も無い。

この状況、恐らく仁であれば即座に対応してみせただろうし、何だったらイカの迷彩能力の高さからこの展開を警戒していてもおかしくはない。

先程のホワイトカラーズの言葉の意味が漸く分かった。確かにスコープは生物学の知識は人並み程度にしかない。

しかし何も手が無い訳では無かった。

「スコープを甘く見るなよ——!」

スコープは視界モードを赤外線モードに変更した。熱で周囲を見る事が出来るこのモード、幾ら姿を消していると言っても熱までは隠せまい。

果たしてホワイトカラーズと思しき姿は直ぐに見付ける事が出来た。今正に振りか

ぶった銃剣を振り下ろそうとしているホワイトカラーズのシルエツト。イカが変温動物だからか、その体温は非常に低いがそれでも姿を捉えることは出来た。

振り下ろされる銃剣を盾で防ぐ。自らの存在が見つかった事に、ホワイトカラーズは動揺せずにはいられなかった。

「何ッ！ 見つかった!?!」

「オラアッ!」

見つかるとは思っていなかったのか、ホワイトカラーズは僅かに動きを止める。その隙をスコープは見逃さず、銃剣を弾きボルテックスブレードをホワイトカラーズの腹に叩き付けた。

大きな隙ではあったが、それでも幹部の名は伊達では無くギリギリのところまで回避し剣先が腹を掠める程度で済んだ。

仕損じた事にスコープは舌打ちし、窮地を脱したホワイトカラーズは安堵の溜め息を吐く。

これで状況は仕切り直し。その時、アントファツジの1体がホワイトカラーズに近付き何かを耳打ちした。

「……………そうか、ご苦労」

〈Genome set Full blast〉

部下にハンドサインで後退を指示し、同時に銃剣を外したベクターリーダーにベクターカートリッジを装填する。銃口にエネルギーが集まる様子に、スコープは盛大に嫌な予感を感じた。

「おい、何するつもりだ!?!」

「それが想像できないほど馬鹿では無いだろう」

「させると思ふのか!!」

「こつちが行動する方が早い」

ホワイトカラースは問答無用でベクターリーダーを大きく振るいながら何度も引き金を引いた。強化された銃弾が何発も放たれ、機材だけでなくビルそのものを倒壊させるほどの破壊を齎す。

地下施設が崩れ始める頃には、アントファアツジ達は皆逃げ出した後だった。

「貴様ツ!?!」

「また会おう、スコープ。お前が生きていたらな」

「くそ、総員退避だツ! 急げツ!」

崩壊する地下施設の向こうに消えるホワイトカラース。このままでは自分達も生き埋めになると、スコープは全員に後退命令を出す。S・B・C・Tの隊員達は負傷した仲間に手を貸しながら這う這うの体でビルから脱出した。

因みに地上部分で残業していた数名の社員に関しては、事情聴取も含めて既に退避済みだ。

最後にスコープがビルから飛び出し、車に乗り込んでビルから離れる。タツチの差でビルが倒壊を始め、轟音と共にビルが崩れ去った。

離れた所でその様子を見たスコープは、変身を解除して大きく溜め息を吐く。その顔は言うまでも無く苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

「クソツ?!」 奴らの尻尾を少しでも掴めると思ったのに……」

「残念です。しかしまさか幹部が直々に出てくるとは思いませんでした」

「それだけの物があるそこにあつたのか、それともスコープを警戒しているのかは分からないがな」

「とにかく、今後も捜査は続けます。あそこ以外にも同じような所がある筈です」

車を運転する慎司の言葉に、宗吾は「当たり前だ」と返しつつ窓の外を流れる景色を見やるのだった。

「——出来た」

額の汗を拭いながら呟く仁の手には、二つのベクターカートリッジが握られている。スピノサウルスベクターカートリッジと、ケツアルコアトルスベクターカートリッジだ。

満足そうに呟く仁に、亜矢が労いの言葉と共に紅茶の入ったカップを渡す。

「お疲れ様です、仁君」

「ん、ありがと亜矢さん」

ベクターカートリッジをデスクに置き、亜矢からカップを受け取り口を付け大きく溜め息を吐く。疲れが吐息と共に吐き出されるような感覚に、仁がリラックスした顔になった。

その横から、峰が二つのベクターカートリッジを手取る。

「ふうん？　これが古生物のDNAで作ったベクターカートリッジですか。どんな効果を得られるんですかね？」

「ふう……それは使ってみないと何とも。ただ俺の見立てだと、他のベクターカートリッジよりずっと強力だとは思ってますけど」

「へえ〜。……………恐竜時代の生物の遺伝子か、何かロマンあるわね」

真矢が自分の分の紅茶を飲みながら呷く。彼女の感想は仁にも分かる気がした。太古の生物のDNAは、それだけで人の心——取り分け科学者の——を刺激してくる。実際仁も最初に薫から恐竜のDNAを手に入れたと聞いた時は、柄にもなく内心で興奮していた。

しかし——と仁は、今峰が持っている二つのベクターカートリッジを見て思う。作っておいてなんだが、これで良かったのかと言う気がしなくも無いのだ。

言葉では言い表し辛いのが、強いて言うのであれば眠れる獣を起こしてしまったような、そんな感じである。

(……………流石に気にし過ぎか)

仁は自身の中に湧いた不安を杞憂と流した。幾ら何でも考え過ぎだ、と。

それが杞憂でも何でもないという事を彼が知る事になるのは、そう遠くない事であった。

第31話：危険な産声

その日、傘木社の秘密研究区画では今日も希美を被検体とした実験が行われていた。

今日の実験は、つい先日調整が終了したばかりの恐竜ベクターカートリッジの運用試験。太古の時代から蘇ったDNA、その力は未だ未知数だ。普通の人間で何処まで耐えられるのかも分からない。

その点希美なら心配いらぬ。今の彼女は再強化改造により常人を凌ぐ頑丈さを手に入れている。仮にベクターカートリッジからの反動が大きくても、彼女なら耐えてくれるだろう。

「う……ぐ、うう……」

希美は意識を失った状態で、実験室の強化ガラスで隔てられた先の部屋に天井から伸びた鎖に両手を繋がれ吊るされている。こうしておけば、もし仮に彼女が正気を失っても被害が広がる前に鎮圧する事も可能だ。

——少なくとも研究員たちはそう思っていた。

「実験開始」

強化ガラス越しに、今回の実験の責任者である研究員がマイクで希美の傍に居るアン

トファアツジに指示を出す。指示を受けたアントファアツジは、強化ガラス越しに研究員に向けて頷くと相方のアントファアツジと頷き合い希美にベクターカートリッジを挿す。

「や、めろ——!? やめ——」

辛うじて意識を取り戻した希美が僅かながら抵抗するが、鎖で繋がれている上に暴れないようにと痛めつけられ、更には薬まで打たれているので朦朧とした意識で小さく身動きする事しか出来ない。

結局希美は抵抗も空しく、前までは雑魚として甘く見ていたアントファアツジに押さえ付けられベクターカートリッジを首筋に直挿しされた。

〈DEINONYCHUS〉

「う、あー、あぁあぁあぁ……」

ベクターカートリッジが希美に恐竜「デイノニクス」の遺伝子情報を持つ超万能細胞を注入し、彼女の肉体を変化させる。

トカゲの様なシルエット。しかし体には羽毛が生え、両足には親指部分から鋭い鉤爪が生えていた。

デイノニクス……白亜紀に存在した恐竜の一種で、高い知能を持った集団で狩りをすると言われた恐竜だ。

全長も3mほどと人間以上に大きく、自分よりも大きな恐竜を群れで狩っていたと言

われる恐竜である。

「ウウウウ、ウアアアアアアアアッ!? 外セ! コレヲ外セエエツ!」

デイノニクスファアツジに変異した希美は、その瞬間大きく暴れてアントファアツジ達に襲い掛かろうとした。

思っていた以上に彼女の暴れ方が大きく、彼女を天井に繋いでいる鎖が軋みを上げる。思わずアントファアツジ達はデイノニクスファアツジから距離を取り、手にしていたライフルの銃口を向けた。

もしこの場に雄成が居れば、彼は間違いなく攻撃命令を出していただろう。彼ならきつと一目で、あの拘束が彼女に対して無意味である事を見抜いていた筈だ。

それを証明するかのように、鎖がボルトを引き千切つて天井から外れた。

これは不味いとアントファアツジ達がデイノニクスファアツジを攻撃しようとするが、それより早くデイノニクスファアツジの貫手が一瞬でアントファアツジ2体の胸を貫通する。

デイノニクスファアツジが手をアントファアツジの胸から引き抜くと、血が噴き出し瞬間に血の海となる実験室。その様子に研究員は即座に鎮圧処理を実行。キーを挿してロックを解除し、実験室内に液体窒素を噴霧して実験動物を鎮圧する装置を起動。点灯したスイッチを躊躇無く押した。

「ガアアアアアアアッ!」

噴き掛けられた低温の液体窒素に、デイノニクスフアツジが叫び声を上げる。噴霧された液体窒素が一瞬で空気中の水分を氷結させて白煙の様に室内に広がり、デイノニクスフアツジの姿がかき消された。

数秒ほど噴霧して実験室内が静かになったのを見て、研究員がスイッチから手を離す。

デイノニクスフアツジの暴れる音も叫び声もしない実験室内を、研究員達が固唾を飲んで見守った。

どれ程そうしていたか、徐々にだが強化ガラスの向こう側が鮮明に見えるようになってきたその時、出し抜けに強化ガラスを破ってデイノニクスフアツジの腕が飛び出した。

「うわああああっ!?!」

まさかフアツジが暴れても外に出さないようにする為の強化ガラスが破られるとは思っていなかった研究員達は、悲鳴を上げて席を立ち実験室から逃げていく。

その際にフェイルセーフを作動させ、数秒で部屋を完全閉鎖する処置をとった。これでデイノニクスフアツジはこの部屋に閉じ込められる。

研究員達が出て行った直後、強化ガラスを破って研究区画に入ったデイノニクスフアツジは両手に残った枷と鎖を引き千切りドアに近付く。

「コンナ物——!!」

デイノニクスファアツジは鼻で笑うと、ドアのすぐ近くの壁を破壊し配線を切断。ドアをロックする為の電力を遮断すると、力尽くでドアをこじ開け廊下へと出た。

「ひ、ひいつ?」

「来たああツ?」

「警備!? 警備を早くツ!!」

まさかここまで出てくるとは思っていなかった研究員達は必死に逃げるが、デイノニクスファアツジからは逃れられない。今まで散々実験動物として扱い馬鹿にしてきた鬱憤を晴らすように逃げる研究員を始末していく。

ここで漸く応援の保安警察の隊員がやって来る。彼らはアントファアツジへと変異しデイノニクスファアツジを鎮圧すべく攻撃を開始した。

「アア?」

「撃てツ!」

次々と放たれる銃弾は、しかしデイノニクスファアツジの表皮を破る事なく弾かれる。鎮圧が出来ないどころか、アントファアツジ達はデイノニクスファアツジに返り討ちに遭い次々と殺されていく。

「アアアアアアアアツ!!」

「ば、化け物——」

鎮圧にやって来たアントファツジを全滅させると、デイノニクスファツジは一直線にある所へと向け駆けていく。

束縛から解き放たれ、自由を得た彼女が目指すものは……………己の中に渦巻く怒りと恨みを晴らす事であつた。

「仮面ライダアアアアアアアツ!!」

仁が自宅で目を覚ましたのは、昼近くになつてからであつた。

「……………ん？ ふあ……………ふう。あれ？ 今何時？」

目覚めて窓の外を見た仁は、いやに日が高く昇つているのを見て嫌な予感を感じ時計に目をやりその時間に暫し固まつた。

「あ……………やべ、昨日遅くまで起き過ぎた」

彼がこんな時間になるまで寝過ごした理由は何てことはない。毎度の如く夜遅くま

で起きて卒論のデータを纏めていたからである。気分が乗りに乗ってデータの纏めを行っていたら、空が白く染まるほどの時間になっていたのだ。

少しは寝ておこうと作業を切り上げ、ベッドに横になつたらそのまま熟睡どころか爆睡。通学の時間をぶつちぎり昼近くまで寝てしまったのだ。

携帯を見れば亜矢からの着信履歴が何件も来ている。相当心配させてしまったらしい。

とりあえず彼女にはメールで寝坊した事と、今から大学に行くことを伝えて荷物を纏めた。

多分、大学で事の詳細を聞いたら亜矢は怒るだろう。研究室の床に正座させられ説教されるかもしれない。

しかしそれも仁の事を想つてのものであると理解している彼は、彼女に心配をかけてしまった事への申し訳なさや愛される事への嬉しきで小さく顔を綻ばせた。

そうして出かける準備を整え、荷物を背負いふと窓の外を見た。

その彼の目に、部屋に向つて飛び込んできたデイノニクスファッジの姿が映つた。

「はあ。」

全く予想もしていなかつた光景に一瞬思考停止に陥る仁だったが、デイノニクスファッジが窓ガラスを突き破ると同時に再起動し荷物を放り捨ててデイノニクス

ファツジの飛び込んでくる射線から退避。デイノニクスファツジが窓をぶち破って入ってきたおかげで部屋の中に飛び散ったガラス片から身を守った。

「くっ!？」

ガラスの破砕音が激しく響き渡り、床板やテーブルが破壊される音を聞きながら仁は腰にデイナドライバーを装着しベクターカートリッジを取り出した。

「仮面、ライダアア……!？」

「おいおい、幾らなんでも人の家に飛び込むなよ。寝坊した事は悪いと思ってるけどさ」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

まさか家にまで襲撃を掛けてくるとは思っていなかったので、仁は不満を口にしながらベクターカートリッジを装填する。

変身の準備を整えながら、仁はふと思う。そう言えば傘木社は組織力がある筈なのに、随分と自分達を見逃してきたものだ。連中がその気になれば、仁達を社会的に追い詰める事も容易だったろうに。

「……ま、いつか。変身!」

〈Open the door〉

抱いた疑問を脇に置き、仁はデイナに変身する。ここで戦えば部屋が滅茶苦茶になり引越しを余儀なくされるだろうが、さりとてこいつは戦う場所を選ばせてくれそうに

ない。

彼は仮面の奥で大きく溜め息を吐かずにはいられなかった。

「はあ〜……こんな所で戦いたくは無かったな……」

気怠そうにしながらも、デイナは敵ファッジの観察を怠らない。

しかし見れば見る程おかしなファッジだ。一見するとトカゲの様だが、羽毛が全身を覆っている。鳥とトカゲのキメラファッジか何かかと思つたが、鳥が入っているにしては翼も嘴も見当たらないのが奇妙だった。

デイナが首を傾げるのも無理はない。こいつは今回初めて登場した、恐竜のDNAを用いたベクターカートリッジなのだから。

「ガアアアアアッ!」

デイナが観察する時間など与えないと言わんばかりに、デイノニクスファッジは彼に襲い掛かる。壁や床、天井が破壊される事などお構いなしに爪や尻尾を振るう姿に、デイナは思わず文句を口にした。

「ああ、つたく。人の家壊すなよ」

言いながらデイナはデイノニクスファッジを投げ飛ばす。投げ飛ばした先には浴室があり、デイノニクスファッジは浴室の壁を破壊し湯船を粉砕した。自分で言うておいて自分で家を壊してしまったが、彼の中にやらかしたとか失敗したとか言う後悔はな

い。こうでもしなければならなかったのだ。

本当はデイノニクスファッジを受け止めるつもりだったのだが、思っていた以上にパワーが強くと受け止めきれないのは無理と判断したのである。

自分で自分の家を破壊してしまった事に、しかしデイナはデイノニクスファッジに対する違和感を強めていく。キメラファッジとは違う感じだが、パワーもスピードも通常のファッジを超えている。しかもあのファッジには理性が感じられない。つまり、あのファッジはブレスやリーダーを使わず直挿ししてあのパワーを発揮しているのだ。

理性に頼らず、本能だけの戦いでここまでの能力を持つこのファッジは非常に危険だとデイナの脳が警鐘を鳴らした。

「出し惜しみしてる場合じゃないか」

〈BUFFALO + HUMAN Light up〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

普段ならもつと別の組み合わせで相手のデータを収集するのだが、この相手にそんな余裕は許されないとデイナは即行で勝負を仕掛けに動いた。

〈Charge up〉

充電しエレキテル・ブーストで超高速で動き回りながら、デイナはデイノニクス

ファツジに攻撃を仕掛ける。殆ど止まったような動きしかないデイノニクスファツジを、デイナがサンドバッグにして徹底的に殴り蹴っていく。

充電が終わり、周囲の動きが元に戻るとデイナに一方的に蹂躪されたデイノニクスファツジが床に落ちた。

「ガフツ!!」

超高速且つ電撃を纏つての連続攻撃は流石に堪えたのか、デイノニクスファツジは倒れたまま動かない——という事は無く、直ぐに立ち上がると何てことはない様に再びデイナに攻撃を再開した。

「舐メルナアアアツ!!」

「ツッ! マジか、あんだだけ攻撃喰らつて——」

普通のファツジであれば、少なくとも体勢を立て直すのに苦労するだけの攻撃を加えたつもりである。ましてや消耗の大きい筈の直挿しファツジだ。あれだけ痛めつければ、後は必殺技でトドメといけるのが何時ものパターンである。

事ここに至り、デイナはあのファツジが今までのファツジとは根本的に何かが違うという事に気付いた。

「トカゲみたいだな見た目……でも羽毛があつて、翼や嘴がない………ん?」

デイノニクスファツジの攻撃を捌きながら、デイナは相手をつぶさに観察した。特に

気になるのが、羽毛があるのに鳥の特徴が全く見られない事だ。経験上、空を飛ぶ能力を持つ生物の遺伝子を持つファッジは必ずその能力が反映される。

にも拘らず、あのファッジには羽毛があっても翼が無い。それはつまり、羽毛を持ちながら翼や嘴を持たない生物であるという事。

ここまで考えて、ダイナの脳裏に何かが光った。気付いたのだ。最近彼の身近で、そう言う特徴を持つ生物群の遺伝子が見つかった事を。

「こいつまさか、恐竜のDNA使ったのか？」

漸くダイナも気付いた。このファッジが恐竜のDNAを用いて生み出された、今までにないファッジである事に。

ダイナが正体に気付いたからか、それとも単に回復したからかダイノニクスファッジの攻撃が激しさを増す。両手の爪に加えて、親指の鉤爪による攻撃が徐々にダイナの装甲を削っていく。

「くっ!? こいつ……足に見覚えのある爪付けてる。あれは………ヴェロキラプトルか、ダイノニクスだな」

使われているDNAの正体にも気付いたダイナだが、気付けたところでどうしようもない。何しろ恐竜に関してはデータが殆ど存在しないのだ。生態も全て想像に過ぎず、実際にどうであったかは現代を生きる彼らには知る由も無い。

つまり、コイツに対してはデイナの頭脳にあるデータベースも意味を成さないのだ。それならば出来るのは単純な能力と技術による戦いだ。デイノニクスファツジの戦闘力は高く技術を力でねじ伏せてくる。能力については言わずもなだ。現状でデイナの最高戦力であるエレキテルを用いているのに、全く優位に立てていない。

デイナが充電して放った電撃を纏う拳をデイノニクスファツジは正面から掴んで受け止めた。表皮を電撃で焼かれているのに、デイノニクスファツジは構わずデイナの腕を捻りねじ伏せた。

「ぐうっ!?!」

「ラアアッ!」

「がっ?!」

腕を捻られ、体勢を崩すデイナにデイノニクスファツジの攻撃が次々と突き刺さる。両手の鋭い爪がデイナを切り裂き、牙の生えた口で噛み付き振り回して台所に叩き付け、踏みつけの要領で放たれた鉤爪の斬撃が彼の肩口に突き刺さった。

「ぐあああっ?! ぐ——」

粉碎された台所の水道管から噴き出す水が体を濡らす中、右肩に走る激痛にデイナが苦悶の声を上げる。

「ハッ! 無様ダネ、仮面ライダー?」

「んの、ぐ……ああっ！」

そのままダイナの肩を引き千切ろうと足を引くデイノニクスファッジだったが、それより早くにダイナが力尽くでデイノニクスファッジの鉤爪を引き抜き台所から転がり出た。

「はあ、はあ、はあ……くっ」

何とか体勢を整えることは出来たが、勝機は薄いと言わざるを得ない。少なくとも今のままでは。

どうやら恐竜のDNAは思っていた以上に凄まじいパワーを秘めているらしい。それを嫌でも体感した。

体感できたのなら、自分もそれに乗っかるだけだ。

「持つてるのはお前だけじゃないんだよ」

ダイナはつい最近出来たばかりの2つのベクターカートリッジを取り出す。山根研究室から譲り受けた2つの恐竜のDNAから作ったベクターカートリッジ、スピノサウルスベクターカートリッジとケツアルコアトルスベクターカートリッジだ。

エレキテルカートリッジを抜き取り、ダイナは2つのベクターカートリッジを起動状態にする。

〈QUETZALCOATLUS〉

〈SPINOSAURUS〉

起動状態の2つのベクターカートリッジを、デイナドライバーに装填する。

その際、デイナは僅かだが躊躇する素振りを見せた。その瞬間何を感じたのか、デイナにも分からなかった。

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「リボーン? 再誕……、ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

デイナがレセプタースロットルを引き、スーパーコイルがデイノニクスファッジを吹き飛ばす。

そして戻ってきたスーパーコイルをデイナが正拳突きで受け止める。

その太古の時代を生き、現代まで生き続けた強靱なDNAが産声を上げ——
彼が覚えているのはそこまでだった。

「全くもう、仁君ったらー！」

明星大学の白上研究室で、亜矢がプリプリ怒りながらティーカップを用意していた。白上教授からこの研究室への所属記念にと、仁用に送られたティーカップである。

この研究室では教授から、所属した学生に記念にティーカップが送られていた。仁は勿論、亜矢もこの研究室で専用のティーカップを持っている。

亜矢がその仁専用のティーカップを用意しているのは、当然彼に紅茶を淹れる為だ。寝坊してやって来る彼に、目覚めの一杯を飲ませてやるのである。

仁が来たら、亜矢はとびつきり涙みを利かせた笑みと共に紅茶を手渡すつもりだった。

「門守君は寝坊だそうだね？」

「はい。今日の明け方近くまで卒論のデータを纏めてたんだそうで」

「門守君らしいですねえ」

仁が寝坊して遅刻する事は既に亜矢の口から教授達に伝えられている。その理由が卒論のデータ纏めで徹夜した挙句、明け方に寝て昼近くまで寝ていたと聞かされた時は誰もが呆れつつ彼らしいと納得した様子を見せた。

峰などは彼らしさに笑いを堪えずにはいられなかった。

「笑い事じゃありません！」

【まあまあ、何事も無かつたようだし良いじゃない。後で思いつきり説教してあげればいいんだから】

真矢の言葉に、亜矢はティーポットにお湯を入れながら頷く。仁が来たらまず何を言つてやろうか？

まず朝の挨拶は勿論だが、何か皮肉めいた事を言つてやった方が良いかもしれない。説教はその後だ。彼が飲み終えた所で……いや、飲んでる途中で言つてやろう。きつと紅茶の苦味が増す。

「と、あ——」

仁へのお仕置きを考えながらティーカップを持つ亜矢だったが、その際手が滑つてティーカップが床に落ち派手な音を立てて割れてしまった。

「あつちやあ……、やつちやつた」

【あくあく、仁君のカップが……】

割れたカップを片付けるべく、亜矢が素早く箒とチリトリを用具入れから取り出した。

仁に申し訳ない事をしてしまったと、心の中で彼に謝罪しながらカップの破片を片付ける。仁がやってきたら謝らなければならぬだろう。先程考えていた、彼への説教など既に忘却の彼方だ。

その時ふと、亜矢は自分の手が震えているのに気付いた。寒い訳ではない。だが体が芯から震えているのだ。

まるで何か恐ろしいことがあつた時の様に――

「な、何だろ……」

【嫌な感じ……そう言えば仁君、遅いね】

同じ震えを共有している真矢の何気ない一言に、亜矢の心臓が跳ね上がる。まさか……いや彼に限つてそんな……

【……亜矢、仁君に電話】

「うん――」

亜矢と同じ不安を感じた真矢が、仁に連絡を取る事を提案する。運転中なら出る事は無いだろうが、この気持ちを紛らわすには他に方法が無かった。

だが彼女が仁に電話をする事は叶わなかった。彼女が仁に電話を掛けるよりも早く、彼女に電話を掛けてきた者が居たのだ。

【ツ!? 誰よ、このタイミングで――!】

「………権藤さん?」

逸る心を抑え、携帯のディスプレイを見るとそこには宗吾の名前が表示されていた。仁と同様、亜矢にも何かあつた時に彼女に連絡が取れるよう宗吾と連絡先を交換してい

た。なので彼から亜矢に電話が来ること自体は珍しくはない。

だが彼がまず真つ先に連絡を取るのには仁の方である。ファッジ絡みで知識面で頼りになるからだ。

それが亜矢の方に電話が来た。亜矢と真矢は嫌な予感が膨れ上がるのを感じつつ、ディスプレイの通話をタッチした。

「はい、双星です……はい……え？」

最初耳と肩で携帯を押さえて通話しながら掃除を再開した亜矢だったが、電話口で宗吾から伝えられた『何か』に箸を落とした。

明らかに何か異変が起こった事を察し、峰が亜矢に問い掛ける。

「双星さん？ どうしました？」

「ちよつとそれどう言う事!? 何があったの、説明してよッ!!」

どうやら余程衝撃的な内容を告げられたのか、亜矢を押し退けて真矢が表に出てきた。主導権があると言っても基本亜矢は真矢を自由にさせているので、こう言う事は良くある。

だが今回は余程の緊急事態なのか、真矢の勢いが尋常では無かった。それこそ峰の言葉など耳に入らない程に。

「うん、うん、それで仁君は……うん………」

「双星さん、双星さん？ 門守君がどうしたんですか？」

仁のみに何か遭ったらしい事は分かったが、肝心の内容は真矢が何も言ってくれないので峰達には分からない。白上教授達が固唾を飲んで見守る中、峰は真矢に説明を求めた。

それを一瞥し、しかし何も語らず宗吾との話を進める真矢に、峰がいよいよ焦れてきた時真矢が通話を切った。その表情は暗い。

峰は改めて真矢に何があったかを訊ねた。

「門守君に何があったんですか？」

恐る恐る訊ねる峰に、答えたのは亜矢だった。

「仁君が……仁君がお家でファッジに襲われて、仁君は病院に運び込まれたそうです」

亜矢は白上教授の車で仁が搬送された病院に向かった。

病院の入り口では、宗吾が2人の事を待っていた。事の次第を詳しく説明する為に2

人の事を待つていたらしい。

「こつちだ」

「権藤さん！ 仁君は!?!」

「落ち着いて、双星さん。彼なら命に別状は無いから安心して。詳しい事は彼の病室で話そう」

宗吾に案内されて、亜矢と白上教授の2人は仁が居る病室へと案内された。案内されたのは個室。宗吾が扉を開けると、ベッドの上で仁が眠っている。

亜矢はそれを見て、堪えていた物が嘔き出す様にベッドに近付き上から仁を覗き込む。

「仁君——!?!」

起こしてはいけないと言う彼への気遣いと、彼の声を聴いて安心したいと言う気持が鬨ぎ合い亜矢はベッドの中から仁の手を取り優しく握る。両手で握った仁の手を、頬擦りするように自分の顔に付ける。

するとその瞬間、仁の臉が震えた。

「う……………ん……………?」

「じ、仁君——!」

微かに呻き声を上げた仁に、亜矢が声を上げると彼の臉がゆつくりと開いた。

「亜矢、さん？」

「仁君！」

仁が目を開け、自分を確かに認識してくれた事に亜矢は目尻に涙を浮かべて抱き着く。仁はそれを少し驚きながらも優しく受け止めた。

「おつとつと……」

「良かった、仁君。……もう、仁君！ 心配させないですよ！」

「ごめんね、真矢さん。俺はこの通り、とりあえず大丈夫だから」

全身で安堵を表す亜矢と真矢を、仁が優しく宥める。まだ少しぼんやりしているように見えるのは、寝起きだからかそれだけ消耗したからか……

亜矢が仁の無事を喜んでいるのを眺めつつ、白上教授は宗吾に何があったのかを訊ねた。

「それで、何故こんな事に？」

「始まりは一般市民からの情報提供だった。曰く、あるアパートで激しい破壊が行われていると——」

デイナとデイノニクスファッジの戦いは、当然周辺住民も知るところとなった。特に彼の部屋に隣接している部屋に住んでいる住人達は、デイナの戦闘音に何事かと家を飛び出し警察へと通報したのだ。

最初こそただの事故かと思われたが、直後にファツジと仮面ライダーの姿を確認した住人からの追加情報を得てS・B・C・Tも緊急出動。そして現場に向かった時、戦闘は既に終了しており現場には破壊された部屋の中で倒れた仁だけが残されていた。

「現場に到着した時は驚いた。何しろ破壊された彼の家は血だらけだったんだから」

「血だらけ？ 門守君が？」

「いや、彼は見ての通り殆ど外傷はない。恐らく……戦闘に巻き込まれた誰か、それともその場に居なかったファツジのものだろうが……」

2人の会話は仁と亜矢達にも聞こえていた。落ち着きを取り戻した亜矢は、仁に何があったのかを訊ねた。

「それで仁君、一体何があったんですか？」

「ん……いきなり部屋に、恐竜のファツジが飛び込んできて——」

「えっ!? 恐竜のファツジ!?!」

「間違いないよ。来るだろうとは思ってたけど、連中早くも恐竜のDNAを使ったベクターカートリッジでファツジを生み出してたんだ」

取り急ぎまず最初に伝えるべき恐竜ファツジの出現を伝えてから、仁は自分が覚えている限りの事を話した。

自宅への襲撃、苦戦、そして——

「エレキテルでも勝てないってなったから、この間出来たばかりの恐竜ベクターカートリッジを俺も使ったんだ。けど……」

「けど、どうしたんですか?」

仁は自分も恐竜ベクターカートリッジを使って、デイノニクスファッジに対抗しようとした事を伝えようとした。が、突然言い淀んだ彼に、亜矢が覗き見るように声を掛ける。

自分を心配して見つめてくる彼女に、仁は何かを躊躇う素振りを見せながら口を開いた。

「……………覚えてないんだ」

「覚えてない?」

「うん……………スピノサウルスとケツアルコアトルスのベクターカートリッジをドライバーに入れてレバー引いたところまでは覚えてるんだけど、そこから先が……………どうして、も……………」

その時の事を頑張っと思って思い出そうとする仁だったが、段々と仁の様子がおかしくなってきた。額に手を当て、汗をかき、呼吸が荒くなってくる。

これはただ事ではないと、亜矢が彼の肩に優しく触れた。

瞬間、仁は亜矢に抱き着いた。

「わっ!?　じ、仁君——?」

「ごめん……………何か分かんないけど、少し……………こうさせて……………」

詳しくは思い出せない。だが断片的に思い浮かぶ光景がいくつかある。

飛び散る血——転がる人の腕——血で濡れて真っ赤に染まる誰かの手——

その光景が段々鮮明になってくるような気がした瞬間、言い様の無い恐怖が仁の内から湧き上がった。何があつたのかは分からないが、何か……………とても良くない事があつたのは確かかなようだ。

何かに怯え、恐怖を紛らわす様に自分に抱き着く仁に亜矢は最初驚き目を見開く。だが直ぐに優しい目になると、幼い子供をあやす様に優しく抱きしめ彼の背を擦った。

「大丈夫、大丈夫です。何があつたのかは分かりませんが、ここに仁君を傷付ける人はいません。だから安心してください」

「……………ありがとう……………ありがとう——」

亜矢に抱き着き、彼女の体温に徐々に仁の心は落ち着きを取り戻していく。

次第に安心が眠気を誘つたのか、仁は再び眠りについてしまった。

眠つた仁をベッドに寝かせ、布団を掛けた亜矢は安らかに眠る仁の頭を優しく撫でる。

「大丈夫です、仁君。私が……………私と真矢は……………何があつても、仁君を支えますから」

眠る仁の頬に亜矢がそつと口付けをする。夢現に彼女の言葉が届いたからか、それとも彼女の体温に安心したからか、仁の顔に薄らとだが笑みが浮かぶ。

静かに寝息を立てる仁を、亜矢は優しく微笑みながら見守っていたのだった。

……………尚、余談だがその様子は教授と宗吾が温かく見守っていて、時間が経つてから真矢にその事を指摘され亜矢は顔を真っ赤にして仁が寝ているベッドに顔を埋めたのは言うまでも無い事である。

第32話：遺伝子の反乱

怪我自体は大した事の無かった仁は、様子見を兼ねて翌日まで待つてから退院した。だが退院してからも問題は山積みだった。目下最大の問題は、彼の今後の住居だ。彼の家はデイノニクスファツジの襲撃により最早住める状態ではなくなってしまった。なので、新しい家を探さなくてはならないのだが……………

「ん…………どうしよう?」

物が少ない部屋だったので引越しの手間自体は少ないのだが、問題は次の住居が決まるまでの寝床だ。そんなに早く住居は決まらない。

最悪研究室か、ネットカフェにでも転がり込もうかと考える仁。

そんな彼に、亜矢が声を掛けた。

「仁君、お家の事ですけど…………」

「ん? ん、暫くは研究室かネットカフェで寝泊まりしようかなって」

「その件ですけど…………実は私の隣の部屋、今空いてるみたいで…………」

ほんのり頬を赤く染めながら亜矢が言葉を紡ぐ。

「それは…………」

「嫌でなければ、ですけど……仁君、ウチの近所に越してきませんか？」

亜矢の住んでいるマンションは決して安くは無いが、高級と言う訳でもない。亜矢くらしいの学生でも一人暮らし出来る位の家賃だ。仁も余裕で住めるだろう。

「どうでしょう？」

「ん……そうだね。別に決まっていなかったし、亜矢さんの隣の部屋に越そうかな」

仁の答えに亜矢は顔に喜色を浮かべた。

そうと決まれば早速とばかりに、仁の入居手続きを行った。亜矢の隣の部屋は確かに空いていたので、仁の引越手続きは問題なく終わった。

そして部屋が決まったとなれば次は家具だ。ダイノニクスファッジの襲撃で仁の部屋の家具は全滅してしまった。

とりあえず家具に関しては中古を取り揃える事で何とかするとしても、直ぐに住めるようにはならない。何分持ち込むのはデカイ家具が殆どだ。部屋に運ばれるまでは僅かばかりの時間が掛かる。

そんな訳で、家具が揃うまで仁は亜矢の家に厄介になる事になった。

「でも亜矢さんは良かったの？ 俺は別に研究室やネットカフェでも大丈夫だったのに」

亜矢の家に上がった仁は、無事だった着替えなどを置きながら口にした。前にも亜矢

の家に泊らせてもらった事があるとは言え、やはり男が1人暮らしの女性の家に転がり込むのは少し問題があるのではと思つたのだ。

しかしその亜矢は、あつげらんとした様子でそれに答えた。

「私がそうしたいから良いんです。それに研究室で寝泊まりなんて不健康ですし、これから入用になるのにネットカフェで寝泊まりなんて無駄な出費ですよ」

「ん〜、まあ……ね」

仁とて何時も学んでばかりいた訳ではない。日々の生活費や家賃の為にバイトだつてしていた。加えて仁は浪費するタイプではないので、食費や家賃など最低限必要な分以上に金は使わなかつたのでそれなりに貯蓄はある。

だがそれは無駄な出費をしては良い理由にならない。そう言う意味では、亜矢の家に厄介になるのは合理的ではある。

とは言え仁とてただで厄介になるつもりはない。新居に住めるようになるまでの僅かな間は、亜矢の家の家事を手伝うつもりだ。彼だつて1人暮らしをしてきた身、最低限の家事は出来る。

「だからつて洗濯はしなくていいですからね？」

「大丈夫、それくらいは弁えてるよ」

洗濯ともなれば普通の衣服だけでなく、下着まで世話しなくてはならない。仁に洗濯

をさせるという事は、彼に使用後の下着を触らせるといふ事。それはなんぼ何でも恥ずかしいとか言うレベルの話ではない。

その日、仁は部屋や浴室の掃除を手伝い1日を過ごした。夕食も2人で肩を並べて作り、順番に浴室で汗を流して気付けば就寝の時間。

恒例のどちらがベッドで寝るかと言う問題も、真矢の『もう3回も一緒に寝てるんだから今更気にする必要は無い』と言う鶴の一声により一緒にベッドに入る事になった。

灯りを消した室内で、仁と同じ布団にくるまり横になる亜矢。

これまで3回仁と同じ布団の中で朝を迎えた事はあったが、それらはいずれもまだ存在を知らなかった真矢が亜矢の知らぬところでやった事。こうして亜矢の意識がある内から同じベッドに入る事はなかった。

だからだろうか。ベッドに入ってから、亜矢は全く寝付く事が出来なかった。恥ずかしいので仁には背中を向けて横になっているのだが、背後に感じる仁の体温に心臓が高鳴りっぱなしだ。

(うゝ、緊張して眠れないよ……)

【もゝ、亜矢つてば神経質になりすぎ。眠れないなら代わつて】

心は2つでも体は1つ。仁を意識する事で心臓が高鳴つて眠れないのなら、仁が傍に居ても平常を保てる真矢が表に出れば体は嫌でも睡眠に向かう。

尤もそれは建前で、真矢としては愛しい仁と同じベッドで寝ている感覚を表に出して堪えたいと言う下心もあるのだが。

亜矢と交代し表に出た真矢は、体を反転させ仁の方を見ながら寝ようとした。だが寝返りを打とうとした直前、仁が口を開いた。

「亜矢さん、寝ちゃった？」

「ッ!? 仁君まだ起きてたの？」

「あ、真矢さんの方か」

仁は声だけで答えたのが真矢である事に気付いた。一声で自分と亜矢の違いを見抜いた仁に、真矢はそう言えばどこで2人の違いを見分けているのかを聞いていない事に気付き問い掛けた。

「ねえ仁君? 仁君はどうやって私と亜矢を見分けてるの? 体は1つな訳だし、見た目で見分けるなんて殆ど出来ないでしょ?」

真矢に問い掛けられ、仁は少し考え込むと答えを口にした。

「ん、どこでって聞かれると難しいんだけど……うん、ゴメン。はつきりとは言えないや。でも分かるんだよね。亜矢さんと真矢さんの違い。理屈じゃないんだ。強いて言うなら心で分かるって感じ」

「心で……」

「あ、今は亜矢さんだね」

さりと入れ替わったのだが、仁はそれすらも見抜いてみせた。それは何よりも雄弁に仁の言う「心で分かる」を表していた。

それが何だか嬉しくて顔を綻ばせていると、徐に仁が彼女の方を見て抱きしめた。

「ッ！　じ、仁君？」

「亜矢さん……あつたかい……こうしてると、凄く安心する」

「仁君……私もです。仁君の腕の中……凄く……安、心……」

優しく仁に抱きしめられ、亜矢は最初心臓が高鳴ったがそれもすぐに収まり心が落ちていく。息を深く吸うと仁の匂いが肺を満たし、愛しさで心が満たされる。

すると一気に眠気がやってきて、亜矢はそのまま仁の腕の中で眠りについた。亜矢の意識が眠りに落ちると、真矢が代わって表に出てくる。

「亜矢、寝ちゃった」

「そっか」

「ねえ仁君。一つ聞かせて」

「何？」

「私と亜矢……どっちが好き？」

意地の悪い質問だ。どちらを選んでも体は一つなのだから、どちらとも顔を合わせな

けばならない。そんな相手のどちらかを選べ等……

普通ここは悩んでみせるところなのだろうが、仁は違った。彼は真矢の質問に対し、間を置かずに答えた。

「どっちも。亜矢さんも真矢さんもどっちも大好きだよ。どっちなんで選べない」

「どっちかしか選べないってなったら？」

「どっちも選べるところに行くし、どっちも選べるようにする。片方を蔑ろになんて絶対にしないよ」

これ以上ない欲張りな答えに、しかし真矢は満足そうに笑みを浮かべ体を仁に密着させた。豊満な胸が薄い寝間着越しに仁に押し当てられる。

「仁君、だ〜い好き」

「俺も……………」

「私と亜矢の事、抱きたくなったらいつでも……………あれ？」

女としてちよつと仁を誘惑してみた真矢だが、気付けば仁も眠ってしまった。折角胸まで押し付けて女としての自分をアピールしてみたのに、眠ってしまった事にちよつぱり不満を感じずにはいられないのか真矢は頬を膨らませる。

「むう〜……………ふう」

とは言え仁がこうして無防備に寝顔を晒してくれているという事は、全面的に彼女の

事を信じてくれているという事の証左である。彼が心を開いてくれていると言う事実に、真矢は不満も忘れて仁に擦り寄り頬擦りした。

「ん〜！ 仁く〜ん！」

一頻り仁に頬擦りした真矢は、顔を上げると仁の寝顔に顔を近付けると躊躇いなく彼の唇を奪った。

「ん、ちゅ！ えへへ……仁君、愛してるわ。私も、亜矢も」

真矢は仁の首に腕を回した。もしこのまま朝を迎えれば、起きた時仁と亜矢は互いの顔をドアップで見ることになるだろう。

「何時か、私と亜矢の全部……仁君が貰ってね」

眠った仁にそう告げると、真矢も目を瞑り眠りへと落ちていくのだった。

一方傘木社では、こんな時間だと言うのに雄成が研究区画でアデニンの仕事を後ろから眺めていた。雄成の前で、アデニンはモニターを見ながらキーボードを叩いている。

そのモニターは1つのカプセルに繋がっており、カプセルの中には満たされた液体の中に人影が浮かんでいた。

「順調だな」

「そのようです。後は勝手に再生していきますよ」

そう言つて2人はカプセルの中に目を向けた。そのカプセルの中に浮かんでいるのは希美だった。

だがその状態は明らかに普通ではない。彼女の体はあちこちが欠損していた。

パーツの欠けた希美を見ているのは2人だけではない。グアニンとシトシンも雄成の傍で同様に希美の事を観察していた。

グアニンはカプセルに近付き傷口をまじまじと見た。すると剥き出しの筋組織などが徐々に再生しているのが分かり、思わず息を呑む。

「流石に驚きました。ここから再生を始めるとは」

畏怖を感じながらそう呟き、彼は腕や足が欠けている状態で口に呼吸器を繋いだ希美の姿を何とも言えぬ顔で見つめていた。

「ノウダラケ遺伝子は知っているだろ？ あれと似たようなものだ」

「プラナリアが持つてる、切断されたところが問答無用で再生する遺伝子でしたっけ。でもそれだどこいつが増えちまいませんか？」

シトシンがカプセルに近付き小突きながら呟く。確かにプラナリアは、二つに切断するとそれぞれの切断面から再生して分裂増殖してしまう事で有名だ。同じ事が希美で起こってしまうのであれば、引き千切られた分彼女が増える事になってしまう。

しかしその可能性は雄成により否定された。

「そこまで万能ではないよ。飽く迄も似たようなものだ。脳からの信号が届かない細胞は再生する事はないから安心して良い」

「とは言え、回収した時は正直もう駄目かと思いましたがけどね」

希美を回収したのはアデニンだったが、現場は壮絶であった。腕や足が引き千切られ、腹も引き裂かれてとてもではないが生きているとは言い難い有様であったのだ。寧ろこれは死んでいた方が幸せだと思えるほどだった。

それでも希美は生き残った。今はカプセルの中で再生を待つ身だが、再生速度から計算すればそう時間を掛けずに元通りになるだろう。

こうなると別の疑問が浮かぶ。彼女は果たして死ぬ事が出来るのだろうか？

「こいつ死ぬるんですか？」

その疑問を代表して口にしたのはシトシンだ。彼はカプセルに寄り掛かりながら雄成に訊ねる。

「死ぬるかどうかで言うなら、死ぬるだろう。だが最早普通のやり方では無理だろうな。

再生力が高すぎて、もう隠蔽装置でも死ぬ事は無い」

「……………それ不味くありませんか？　彼女が反乱を企てたら、止める手立てがありません」

「別に痛みを感じない訳じゃないんだ。制御用の首輪をつけておけば大丈夫だろう」

殺す事を目的としたものではなく、苦痛を与える事を目的とした装置を体内に埋め込むことを告げる雄成。

その言葉に対し、アデニンは無表情を貫きグアニンは顔を顰め、そしてシトシンは愉快そうに笑いカプセルに顔を付けた。

「良かったな、お前今度から負け犬じゃなくて飼い犬になるんだってよ。実験動物よりずっとマシじゃねえか？」

勿論希美から返答がある訳がない。だがカプセルの中の希美は、薄らと目を開けるとシトシンの事を見て再び目を閉じた。

何の反応も無い事にシトシンはつまらなそうにカプセルから離れた。

その瞬間、雄成の携帯が着信音を鳴らした。

「私だ……………ふむ、そうかね……………分かった、すぐに行く」

雄成は携帯を切ると、踵を返して研究区画から出て行こうとする。その背にグアニスが声を掛けた。

「どちらへ？」

「社長室だよ。アメリカ支社から出向してきた者達が挨拶に来たのでね」

そう言つて雄成は研究区画を後にした。

立ち去つた彼の後姿を見送りながら、アデニンは訪日してきたアメリカ支社からの2人とやらの事を考えていた。

（アメリカ支社からの出向……………！ あの双子か？）

アデニンは出向してきたアメリカ支社からの者に見当がついた。だがそれが分かつたところで素直に喜ぶことは出来なかつた。

「……………騒がしくなりそうだな」

「何だつて？」

「いや……………何でも無い」

思わず口から出たボヤキをシトシンに聞かれてしまったが、詳しい事は伏せておいた。どうせ嫌でも後で顔を合わせる事になる。

アデニンは席を立つと2人を伴つてその場を後にするのだった。

あれから数日後、仁の引越しも無事に終わってからのある日。

仁と亜矢の2人が大学の研究室に向っていると、その道中で峰から連絡があった。

曰く、ファッジが出現したとの事だ。場所は変電所。既にS・B・C・T.が現場に到着しているらしいが、戦況は芳しくないらしい。

仁は亜矢を後ろに乗せたトランスポゾンを走らせる。

暫く走らせ、2人の視線の先に変電所が見えてきた。情報通り既に戦闘が行われているのか、火の手が上ががり黒煙が立ち込め、無数の銃声が辺りに響いている。

「亜矢さん、しっかり掴まってて」

「はいー!」

仁はアクセルを噴かし加速すると変電所へと突入した。フェンスを突き破り、トランスポゾンが変電所へと飛び込む。

そこに広がっていたのは、合計4体のファッジがS・B・C・T.の隊員達を圧倒している様子だった。隊員達は必死に銃撃しているが、ファッジ達はそれを物ともせず次々とS・B・C・T.の隊員を屠っている。

そんな中で善戦しているのはやはりスコープだった。それもよく見ると2人確認で

きる。

仁は変電所に突入すると、適当な隊員を捕まえて状況を聞き出した。

「お待たせ。今どんな感じですか？」

「君達か！ 助かった……現状は見ての通り、隊長と菅野かんののスコープ以外は碌に相手になっていない状況だ」

「その菅野さんと言うのは……あの銅色のスコープですか？」

「そうだ。君達が共に戦ってくれば数の上で互角になる。頼む！」

「ん、分かった」

仁と亜矢はトランスポゾンから降りると、デイナドライバーを装着しベクターカートリッジを取り出した。

その際、仁はスコープ2人が戦っているファッジをよく見た。その姿は一見どれもトカゲか何かの様に見えるが、頭部の形状や三本の角などよく見れば何処かで見た事のある姿をしている。

仁にはすぐに分かった。あれは恐竜ベクターカートリッジを用いて生まれた、恐竜ファッジだ。

早くも恐竜ファッジを複数体投入してきた事に、仁と亜矢に緊張が走る。

「あいつら、もうあんなに……」

「確か、普通のファッジよりも強いんですね」

「そ。とにかく気を付けて。俺も出来るだけ手早く片付けて合流するから」

「ま、私が居るから大丈夫よ。……私も、でしょ」

亜矢と真矢のやりとりで緊張を解されつつ、仁はダイナに変身し亜矢はルーナに変身した。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

2人はダイナとルーナに変身すると、恐竜ファッジ4体と実質2対1の戦いを繰り広げていたスコープ2人と合流した。

とりあえず挨拶代わりにと、2人は恐竜ファッジに対し飛び蹴りを放ちスコープ達から強引に引き剥がした。

「そうら、つと」

「ヤアアッ！」

スコープの相手に夢中だったファッジ達は、ダイナとルーナの乱入に反応が遅れ蹴り飛ばされてしまった。

「ふう、お待たせ」

「大丈夫ですか？」

「助かった。気を付けろ、アイツら強いぞ」

「知ってる。あいつら恐竜の遺伝子使ってるから」

「デイナとルーナに蹴り飛ばされたファッジ達は、即座に体勢を立て直すとそれぞれ対象を決めて襲い掛かってきた。」

「デイナに襲い掛かってきたのは、両目の上に突起のあるテイラノサウルスの様な恐竜・カルノタウルスのDNAから生まれたカルノタウルスファッジだ。カルノタウルスファッジは強靱な顎と足でデイナに攻撃を仕掛けてくる。」

「放たれた噛み付きと蹴りを防ぐデイナだったが、単純にパワーが強くて防御を崩されてしまう。」

「ぐっ!! くそ……」

「思わず悪態を吐くデイナだったが、カルノタウルスファッジの攻撃は止まらない。拳を振り上げて殴り付けてくる。」

「それを受け止めるのではなく受け流す方向で凌いだデイナは、反撃の正拳突きを放つ。ファッジの胸板に拳を叩き付けるとそのまま連続で殴る。」

「だがカルノタウルスファッジは全く堪えた様子を見せない。デイナの連続正拳突き

を胸板で受け止め、平然としている。

「くう……硬いな」

「ガアアアッ！」

まるで巨大な壁でも殴っているかのような感覚に、デイナは思わず攻撃を止め逆に痛みを訴えた手を引つ込めた。

すると今度は自分の番だと言わんばかりに、カルノタウルスファアツジが顎を大きく開いて噛み付いてきた。全く通用していない攻撃に集中力を切らしていたデイナは、回避が遅れ右腕に喰らい付かれてしまった。

「ぐああっ!？」

「仁君ッ!？」

硬いボールのような頭を持つ恐竜・パキケファロサウルスの遺伝子を持つパキケファロサウルスファアツジの頭突きや突進を軽やかな身のこなしで対応していたルーナは、耳に入ったデイナの悲鳴にそちらに意識を持っていかれてしまう。

その瞬間、パキケファロサウルスファアツジがルーナから少し距離を取り突進の構えを取った。するとファアツジの頭部にエネルギーが収束していき、丸いパキケファロサウルスファアツジの頭部が光を放つ。

「く……あー！ 亜矢さん危ないッ!？」

「えっ!?!」

デイナの警告に、パキケファロサウルスファツジの方を見るルーナだったが、一歩遅く彼女が振り返った時にはエネルギーを収束した頭部による頭突き of 突進が目前まで迫っていた。

「しま、きやあああああつ?!」

突進は彼女の腹部に直撃し、喰らったルーナは壁に叩き付けられると地面に落下しそのまま変身が解除されてしまった。

「あ、ぐ——!?! げほっ!?! う、うう……」

「亜矢さんッ!?!」

「くそっ!?! 援護しろ菅野!」

「了解!」

倒れた亜矢はそのまま意識を失ったのか動かなくなってしまう。パキケファロサウルスファツジはそのまま亜矢にトドメを差そうと言うのか彼女に近付き、デイナはさせるものかとその前に立ち塞がる。2人のスコープも相手をしているアンキロサウルスファツジとパラサウロロフスファツジの相手をしながら、ガンマライフルで援護射撃をした。

しかしやはり恐竜ファツジは強かった。途中でエレキテルを使用したけど、電撃も恐竜

フアツジ相手にはあまり効果がない。しかもデイナが相手をしていたカルノタウルスフアツジまでもが加わってきて、デイナは窮地に立たされる。

「こうなったら——！」

この事態に、デイナは自分も恐竜ベクターカートリッジの力を借りる事を選択。自作の2つのベクターカートリッジを取り出し起動状態にした。

〈QUETZALCOATLUS〉

〈SPINOSAURUS〉

「——ッ!?!」

2つのベクターカートリッジを起動状態にした瞬間、デイナは恐怖を感じた。ベクターカートリッジをドライバーに装填しようとする、訳も分からず体がそれを躊躇している。

何故こんな反応を体がするのか分からなかったが、この状況を打開する為にはこれを使わなくてはならない。デイナは恐怖を振り払い、ベクターカートリッジをドライバーに装填した。

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「……………あれ？」

気付けば仁は変身前の姿に戻って、何も無い空間に佇んでいた。辺りは暗く、人も建物も見当たらない。

「(ハハ)は……亜矢さんは？……………ん？」

ふと仁は足元に何かの気配を感じて下を見た。するとそこに、一匹の犬が居て仁の事を見て嬉しそうに尻尾を振っている。

何があだか分からない仁だったが、気持ちを落ち着ける意味でとりあえずしやがみ犬と視線を合わせ頭を撫でてやる。犬は嬉しそうに目を細め、仁も釣られて薄らと笑みを浮かべた。

「よしよし……………にしても、ここに居るのは俺とお前だけか？ 何処だ、此処？」

犬を撫でながら周囲を見渡していると、背中を何かの小突いた。何だと彼が背後を振り返ると、そこには背に鷲を乗せたライオンが居るではないか。百獣の王が至近距離に居る事に、仁も思わず固まった。

「……………は？ えつと……………」

よく見ると自分の周囲には他にも動物がいる。肩にはハリネズミが乗っているし、足

元をよく見れば鯨と鯨が居て足元を泳ぎ回っていた。

そして隣には、何時の間にか大きなバツファローが立ち荒い鼻息を吹きかけてきた。

不可解な状況に、しかし仁は奇妙な安心感を感じていた。

「お前ら……」

何となくだが、仁には彼らの正体が分かってきたような気がする。その答えを彼が口にしようとしたその時、突然動物達が同時に一点を見て怯えるようにその場から逃げて行つた。

「え？　え、何？」

一体何事かと逃げて行つた動物達の後姿を見送り、彼らが見た方に何があつたのかと仁がそちらを見ると――

「――え？」

そこには恐竜と翼竜が一頭ずつ居た。ワニの様な四足歩行の恐竜と、見上げる程巨大な翼竜。

スピノサウルスとケツアルコアトルスだ。

その2頭と仁の目が合った。

瞬間、スピノサウルスが大きく口を開き仁に喰らい付いた。

「ッ?!?!」

仁は悲鳴を上げる間もなくスピノサウルスに一口で食われた。

〈Open the door〉

デイナが恐竜ベクターカートリッジをドライバーに装填しレセプタースロットルを引くと、何時もとは違う現象が起こった。セントラルドグマを中心に光が広がったかと思うと、デイナの全身を光が包み込み見えなくなったのだ。その姿はまるで大きな卵の様である。

その光の卵に、カルノタウルスファアツジとパキケファロサウルスファアツジが攻撃を仕掛ける。だがファアツジの攻撃は光の卵を壊すには至らず、逆に弾き飛ばされてしまった。見た目は何時もと違うが、能力は通常のスーパーコイルと同じらしい。

と、その時、光の卵に罅が入った。罅はどんどん広がり、半分ほどまで来ると天辺から殻が崩れて中のデイナの姿が露とった。

嘴の様なバイザーに頭頂部には角の様なトサカが一つ。背には翼があり、両手足は装甲に覆われて頑丈そうだ。

遂に姿を現したデイナの新たな姿……その名もケツアルスピノフォーム。今ここに、太古の時代より現代に蘇った遺伝子の力が顕現した瞬間であった。

「あれが、恐竜のDNAのベクターカートリッジ……」

呆然と呟く銀のスコープだったが、直ぐに異変に気付いた。デイナが全く動かないのだ。ゲノムチェンジ後、俯いたまま動く気配がない。

このままでは良い的だと、スコープが警告するよりも前にパキケファアロサウルスファアツジがデイナに攻撃を仕掛けた。ルーナを一撃で変身解除にまで追い込んだ頭突きによる一撃だ。喰らえばデイナとてただでは済まない。

誰もがそう思っていたのだが、次の瞬間広がる光景に誰もが思考を停止させた。

なんとデイナはパキケファアロサウルスファアツジの頭突きを、片手で軽々と止めてしまったのだ。パキケファアロサウルスファアツジは踏ん張りデイナを押すが、デイナはその場から1cmも動かない。

「う、いたた……え？」

その時、亜矢が目を覚ました。彼女は目の前でデイナがパキケファアロサウルスファアツジの攻撃を片手で受け止めている光景に目を白黒させる。

「じ、仁君？」

亜矢が恐る恐るデイナに声を掛ける。彼女は気付いたのだ。デイナの様子が普段と

違う事に。

僅かながら膠着した戦況は、亜矢の声を合図にしたかのように動き出す。

徐にダイナの空いた方の手がパキケファロサウルスファツジを一撃で地面に叩き伏せた。今までどんな攻撃を受けても堪えた様子を見せなかった恐竜ファツジが、今この瞬間初めてダメージに苦しんでいる。

だがその様子を見て、喜べるものは誰も居ない。ファツジにダメージを与えられたこと以上に、ダイナの身に起きた異常の得体の知れなさが不気味で恐ろしかった。

ダイナが倒れたパキケファロサウルスファツジを見下ろしていると、目にも留まらぬ速さで襟首掴み上げ無理矢理立たせて腹に拳を叩き込んだ。それも一発だけでなく何発も。

それを他のファツジが黙って見ている訳も無く、寧ろパキケファロサウルスファツジに掛かり切りになっている隙にダイナを集中攻撃しようと飛び掛かる。

だが3体の恐竜ファツジの攻撃を喰らっても、ダイナは全く堪えた様子を見せなかった。パキケファロサウルスファツジへの攻撃を中断しゆっくりと自分を攻撃したファツジ達に目を向けるダイナ。

そこから先は最早戦闘ではなくただの蹂躪だった。ダイナの攻撃は一撃で恐竜ファツジ達の体を凹ませ傷付け、4対1と言う状況にもかかわらず圧倒していた。

拳が一発でアンキロサウルスファツジの装甲を砕き、パラサウロロフスファツジの振り下ろしてきた腕を受け止めると握り潰した。カルノタウルスファツジを蹴り一発で吹っ飛ばし、パキケファロサウルスファツジの自慢の頭を粉碎した。

「なんだ、あれは？ あれが本当に、門守君なのか？」

「仁君——!?!」

あまりにも仁らしくない戦い方に、スコープも亜矢も彼に畏怖の目を向ける。

気付けば恐竜ファツジ達はボロボロになり、満足に動ける奴は居なくなっていた。それでもまだ変異が解けないのは、それだけ奴らが頑丈と言う事だろうか。

しかしデイナは動かないファツジに対しても容赦なく攻撃した。

最初の標的になったのはパキケファロサウルスファツジだ。デイナはパキケファロサウルスファツジの首を掴んで持ち上げると、レセプタースロットルを引いた。

〈A T P B u r s t〉

デイナはノックアウトクラッシュを発動させると、パキケファロサウルスファツジの首を放した。僅かな間、体が直立するパキケファロサウルスファツジ。

そこにデイナのノックアウトクラッシュを発動した拳が叩き込まれた。右の拳で一発殴り、衝撃で離れるとそれに合わせて前に出て次々と強化された拳を突き刺した。

「ウオオオオオアアアアアアッ!!」

何発も強化された拳で殴られたバキケファロサウルスファツジは限界を超過し、爆発して変異が解除された。中身は傘木社の人間だったのか、変異が解けると同時に燃え上がった。

これで恐竜ファツジは残り3体。その3体に、デイナの視線が向いた。

「ウウウウウ………」

「「ツ!?!」」

3体の恐竜ファツジは身の危険を感じたのか、自分から変異を解いた。

「ま、待ってくれ!?!」

「降参、降参する!」

人間の姿に戻り降伏の意思を見せる3人。今のデイナの容赦の無い攻撃に、抵抗する意思を失ったらしい。

何時もの仁であればこれで彼らは見逃される筈であった。

しかし――

「アアアアアアアアツ!!」

狂気はまだ終わらない。

第33話：畏怖の視線

「アアアアアアアアッ!!」

デイナが変異を解いた傘木社の3人に向つて突撃する。その声には明らかに狂気が宿っており、彼が3人に襲い掛かろうとしている事が手に取るように分かった。

「止める門守君ッ!!」

そのデイナの突撃を防いだのは、他ならぬスコープだった。彼は寸でのところでデイナと3人の間に割つて入ると、デイナに抱き着いてそれ以上の移動を阻止した。

「今の内だ! 早くその3人を連れて行け!」

「は、はい!」

「ウオアアア、アアアアアアアッ!!」

銀色のスコープ1号は、デイナをpushしながら部下に指示を出す。このままあの3人を殺させてはいけない。彼らは重要な参考人だし、何よりデイナに……仁に不要な殺生をさせる訳にはいかなかった。

スコープ1号はスコープ2号と共にデイナをpushさえつけ、必死に彼に声を掛けた。

「落ち着け、門守君ッ! 正気に戻れッ!!」

「グルルルッ！ ガルアアアアアッ!?」

スコープ1号の声もダイナには全く届いていない。今の彼は正に飢えた獣の様に、目の前の敵を仕留めるまで止まる気は無いようだった。

そんな彼の異常に、亜矢と真矢も黙ってはいなかった。

「亜矢、しっかり!」

「分かつてる——！ 仁君を、止めなきや!!」

〈CAT Adaptation〉

「変身!」

〈Open the door〉

再びルーナに変身した彼女は、暴れるダイナに後ろから近付き羽交い絞めにした。

「仁君、落ち着いてください! これ以上はもう戦う必要はありません!!」

「ガアアアアアアッ!!」

背後から抱き着き声を掛けるが、止まる気配を見せない。それどころか、拘束が強くなつたからか逆に激しく暴れ出した。

「オオオオアアアアアッ!」

「うわっ!?!」

「ぐっ!?!」

「きやあつ?!」

自分を押さえつけてきた3人の仮面ライダーを、デイナは腕の力だけでいとも容易く振り払ってしまった。何と言うパワーか。今までのデイナのどのフォームと比べても比較にならないパワー。ルーナは改めて恐竜ベクターカートリッジが持つ力の凄まじさを思い知った。

「一体どうなってる? 何で彼があんな事に?」

「あのベクターカートリッジの所為です。強力過ぎてドライバーを通して影響を抑えきれないんです」

「どうすれば止められる?」

ルーナは言葉を詰まらせた。止め方は、分かる。だが彼に対しそれをする事に、躊躇を覚えずにはいられなかった。だがこのまま彼を放置すれば、彼は取り返しのつかない事をしてしまう。それを許すくらいなら――

「――倒すしかないでしょうね。一応ドライバーからカートリッジを抜いて変身解除させるのも手ではありますが、今の仁君相手に下手に近づく事は……………悪手以外の何物でもありません」

正直、デイナを相手にこんな提案をしたくはない。だがやらねばならないのだ。その事にルーナは心が上げる悲鳴を抑え込み、スコープ1号・2号と共にデイナの前に立ち

塞がった。

「グルルルルルル——!!」

デイナは目の前に立ち塞がる3人を明確に敵と判断し、腰を落とすと背中中の翼を広げ文字通り飛び掛かってきた。低空飛行で突撃してくるデイナを、3人の仮面ライダーが弾幕を張って迎え撃つ。

「仁君、止まってください!!」

ルーナのリップレッサーショットとスコープ1号のガンマライフル、そして2号のボルトックスガンの銃弾がデイナに殺到する。迫る弾丸を、デイナは避けようとしめない。

それも当然、避ける必要などないのだ。3人の仮面ライダーの銃弾は全てデイナの装甲で弾かれ、全くダメージになっていない。いやそもそも、回避という発想がないだけなのか。

とにかく接近してくるデイナを、3人の仮面ライダーは全力で避けた。あの防御力はそのまま攻撃力に還元される。

「避けろッ!?!」

3人はバラバラに回避し、デイナの突撃を喰らう事は何とか避けられた。

ギリギリのところまでデイナの突撃を回避したルーナは、彼が着地する瞬間を狙って連結させたリップレッサーショットの引き金を引いた。分割した拳銃モードの時より貫通

力のある強力な銃弾がダイナに迫る。

しかしその一発はダイナの翼により弾かれてしまった。その動きにやはりあれは仁なのだという事を実感し、ルーナの心が苦しくなる。翼を盾代わりに使うのは、仁が変身するダイナの常套手段だ。

「仁君——!?!」

【亜矢! ボサツとしないで!】

束の間、仁を感じさせるダイナの動きにルーナの動きが鈍ったのを真矢が叱咤する。次の瞬間には、驚異的な脚力で一足跳びにダイナがルーナに飛び掛かっていた。

「あ——」

咄嗟の事でルーナは判断が遅れてしまった。ダイナは動きを止めたルーナに飛び掛かり——

「くうっ!?!」

ダイナの拳が振り下ろされた瞬間、真矢が亜矢と人格を入れ替わりダイナの一撃をアームブレードで防いだ。しかしルーナは元々パワーには自信の無い性能をしている。対して今のダイナは、速度もパワーも優れていた。案の定ルーナはダイナのパワーに徐々に押し込まれ、防御をこじ開けられそうになる。

「ぐ——!?!」じ、仁君……お願い、正気に戻って——!?!」

力尽くで押し込まれる辛さに苦しみながら、ルーナはデイナに声を掛ける。例え届かなかったとしても、届く事を信じて声を掛け続けるつもりだ。

「ウ、ア……………」

「ツ!!」

その時、デイナの様子に変化が生じた。僅かながら、ルーナをpushさえつける力が弱まったのだ。

これはもしや声が届いたのでは……そう思った瞬間、アツパーカットがルーナを殴り飛ばした。

「ぎやああああつ!!」

一瞬油断を突かれ、下から殴り飛ばされたルーナは地面に叩き付けられ変身を解除されてしまう。そして倒れた彼女に、デイナはトドメを差そうと言うのか拳を握り締めて近付いていった。

「オオオオオツ!!」

「ああ、あ——!?!」

地面に叩き付けられたダメージで体が満足に動けない真矢に、デイナの拳が振り下ろされそうになる。

そこへスコープの1号と2号が、ボルテックスブレードを展開し背後からデイナに振

り下ろした。

「止めるんだ門守君ッ!!」

叫びながら1号が振り下ろしたボルテックスブレードを、デイナは素早く振り返り片手で受け止めた。もう片方の手で2号の振り下ろしたブレードも受けとめる。

正直、スコープ1号はこれでデイナにダメージが与えられるとは思っていないなかった。装甲で弾かれるか、受け止められるだろうという事は予想していた。

だが次の彼の行動は予想外だった。何と片手でそれぞれのスコープを押し返し始めたのだ。

「なっ!?!」

「スコープがパワー負けしている!?!」

デイナなどの様に能力の多様性がない代わりに、スコープはパワーと装甲に優れている。並大抵のファツジであれば押し合いで負けない自信があった。

しかしこのデイナ相手にはスコープもパワー面で後れを取っている事が明らかとなった。その事実には2人は驚愕せずにはいられない。

「ウウウウウアアアアアアオオオオオッ!!」

2人の刃を押し返し、振り払って隙を作らせた。そしてデイナは、隙が出来た2人に対し容赦なく必殺技を叩き込んだ。

〈ATP Burst〉

「アアアアアアアッ!!」

「ぐあっ?!」

「がふっ?!」

スコープ2人は回し蹴りの要領で放たれたノックアウトクラッシュを喰らい吹き飛ばされる。地面に叩き付けられた2人の内、2号はギリギリで防御できたのか倒れた状態からボルテックスガンで反撃した。

「くそっ?!」

放たれる銃撃がダイナの装甲で弾かれる。ダメージにはなり得ないが、それでも攻撃された事は注意を引いたのかダイナの目がスコープ2号を捉えると、彼は銃撃を物ともせず接近して2号に馬乗りになってその拳を2号の装甲に何度も叩き付けた。

「ウアアアアアアアッ!!」

「うわっ?! ぐっ?! くそ、やめ、ぐあっ?!」

何度も振り下ろされたダイナの拳が2号の装甲をひしやげさせ、仮面を破損させていく。あつと言う間に2号はポロポロになり、次第に2号の抵抗が薄くなってきた。

これ以上は2号に変身している菅野が死ぬと、1号がダイナを止めようとした時、それよりも先に亜矢がダイナに抱き着き後ろからダイナのドライバーに手を伸ばした。

「仁君、もう止めてください!!」

2号を攻撃する事に意識を集中させていたからか、それとも変身が解除された彼女に脅威を感じていないのか、デイナは亜矢が抱き着いても全く振り払う様子を見せない。

その隙に亜矢はデイナドライバーから恐竜ベクターカートリッジ二つを抜き取りレセプタースロットルを引いて変身を解除させる。

「う……………え?」

「仁君——!」

元に戻った仁は正気に戻ったらしく、声や顔からは狂気が感じられない。その事に亜矢は安堵するが、殺されかけた2号の方はそうではなかったらしく、仁が元の姿に戻った瞬間残った力を振り絞り彼を押し退けた。

その際に彼に抱き着いていた亜矢も一緒に押し出され、仁から離れた所に倒れる。

「うわっ!」

「あうっ!」

何が何だか分からないままに突き飛ばされ、混乱する仁は周囲を見渡した。

「え、何?……何がどうしたの?」

訳が分からないながら、仁は全身ボロボロで倒れているスコープ2号を見つけると彼を助け起こそうと言うのかそちらに近付こうとする。

だが彼が一步足を前に踏み出した瞬間、2号はまだ原形を留めているボルテックスガンを向けた。

「——え？」

「はあ、はあ、はあ——!?」

向けられた銃口と恐怖を感じさせる目に、仁が困惑して周囲を見ると他のS・B・C・T.の隊員達も似たり寄つたりの目を向けている事に気付いた。そして思い出すのは、意識を取り戻した瞬間の状況。亜矢に抱き着かれながら、スコープ2号に跨つていた自分の様子を客観的に意識して、直前まで何が起こっていたのかを臆気ながら理解した。

理解してしまった。

「え……は……俺？　これ、俺が………？」

「止めろ菅野ッ!」

困惑の中に恐慌を滲ませ始めた仁の前で、1号が2号のボルテックスガンを下げさせた。1号はそのまま2号の変身を解除させ他の隊員に任せると仁に近付き彼を宥めるように両肩に手を置いた。

「大丈夫だ門守君、気をしっかり持て！」

「権藤さん、教えてくれ。俺……俺今まで何してた？」

「待て、まずは落ち着くんだ。いいか、君は——」

スコープ1号が必死に仁に声を掛け彼を宥めようとする。仁の方も、頭では冷静なろうと努めているが周囲から向けられる畏怖の視線が心をかき乱していた。自分が意図していない所で誰かを自分の手で傷付け、そしてその事で他者から恐れられる。それがこれほど恐ろしい事だとは知らなかった。

不意に仁は気になる視線を感じた。先程仁を変身解除させる為に抱き着き、スコープ2号により仁共々突き飛ばされていた亜矢だ。

既に半ば恐慌状態の仁の視線と亜矢の視線がぶつかり合った。

「う、あ——」

「ッ!? じ、仁くん——」

その瞬間仁は言い知れぬ恐怖を感じた。命の危険に類する恐怖ではない。それは言うなれば拒絶される恐怖だ。

目が合った瞬間、亜矢の眼の奥に自分に対する恐れとかそう言う類の感情を仁は確かに感じ取ったのだ。そしてそれを感じた瞬間、仁の体は彼の意志を振り切りその場から逃げる事を選択した。

「あ、ああ……あああ——!?」

「あつ! 門守君、待つんだッ!」

スコーパー1号を振り払い、脇目も降らず仁はその場から逃げ出した。トランスポゾンも忘れ、とにかく周囲の目から逃れる様に我武者羅に逃げていく。

彼の後姿を見送るしかできなかった亜矢は、彼が見えなくなるとその場にぺたんと座り込んでしまった。

「私……なんて事を……………」

【亜矢……】

仁が逃げていった方を見ながら亜矢が呆然としていた。彼女は後悔していた。先程仁が亜矢に対して恐怖の視線を向けた瞬間、彼に何も声を掛けず引き留めることが出来なかった事をだ。

「支えようって決めたのに……仁君を助けたくて、傍に居るのに……」

あの時、仁が自分に視線を向けてきた時、亜矢は一瞬だけだが仁に近づく事を躊躇してしまった。直前に殺されかけた光景が脳裏を過り、体が強張って動かなくなってしまうのだ。

彼を助ける為に、支える為に仮面ライダーになって戦うと決めたのに、本当に仁が助けを必要とする時に手を差し伸べる事が出来なかった。

その事は暗雲となつて亜矢の心に立ち込め、顔を両手で覆い涙を流した。

「いめんない……いめんない、仁君——!?!」

この場に居ない仁に向けての亜矢の懺悔の言葉。流れる涙と共に紡がれたその言葉を聞いたのは、状況が一応落ち着いた事で変身を解除した宗吾だけであった。

希美は溶液の満たされたカプセルの中で目を覚ました。薄く緑がかった溶液越しに見える外の世界では、研究員が動き回り警備の者が銃を持つて佇んでいる。

その緑がかった外の世界から、雄成が彼女の事を覗き込んだ。

「目が覚めたようだね……自分の事は分かるかい？」

溶液越しでくぐもった雄成からの質問に、希美は少し間を置いてから頷いて答えた。口は呼吸器に繋がれているので喋れないし、呼吸器が無かつたとしても溶液の所為で言葉は外に届かない。

「何があつてこんな事になつたかは、覚えているかい？」

続けて放たれた雄成の質問。言われて希美の脳裏に、デイノニクスベクターカートリッジが使われてからの出来事が蘇った。

仁の家に突撃し、ダイナと戦闘し、そして……完膚なきまでに敗北した挙句、体をズタズタにされた。

本来であれば思い出しただけで発狂してもおかしくない程の苦痛の記憶を、しかし希美は顔色を一切変化させず頷いて答えた。

「よろしい……」

彼女の反応に満足したのか、雄成は薄く笑みを浮かべながら頷くと彼女を出す様を示を出した。

「彼女を出してやれ」

雄成の指示に研究員がコンソールを操作すると、カプセルの中の溶液が抜かれていく。どんどん水位が下がり、頭が溶液の外に出ると緑がかった視界がクリアになる。

物の数分もかからず溶液が全て排出されたが、溶液が無くなると希美はカプセルの中で陸に投げ出された蝟の様に崩れ落ちていた。体が全く言う事を聞かないのだ。手足に満足に力が入らず、呼吸器を自力で外す事も出来ない。

満足に動かない体に希美が悪戦苦闘していると、カプセルが開き雄成が彼女に手を貸した。呼吸器を顔から外してやり、肩を抱き上げて立たせ、研究員から渡されたタオルを羽織らせる。

「おはよう。気分はどうだい?」

「……お腹、すいた」

カプセルから出た途端、彼女を猛烈な空腹感が襲った。腹の中が見事にすつからかな感覚。空き過ぎて何もする気が起きない。

「直ぐに食事を用意させよう。さあ、立ちたまえ。もう君の体は動けるようになってい
る筈だ」

先程は満足に立ち上がる事も出来なかつた希美だが、雄成の言う通り既に体は言う事を聞く様になっていた。早くも自力で歩く事が出来る程度には回復したらしい。

そのまま2人は研究区画の廊下を歩く。

カプセルから出たばかりの、裸にタオルを羽織つただけと言う恰好で廊下を歩く希美に研究員の何人かがギョツとした顔で彼女を見るが、隣を歩く雄成と2人の後ろにいる保安警察の隊員の姿に誰もが道を譲った。

会話もなく廊下を歩く2人だったが、唐突に雄成が希美に問い掛ける。

「随分と落ち着いているね。てつきりもつと取り乱すなりヒステリックに叫ぶなりするかと思つたんだが?」

実際保安警察を待機させていたのも、彼女が感情的になつて暴れ出した時の為の保険であつた。もし彼女がデイナに敗北した事でヒステリーを起こしたら、またテーザーラ

イフルで強制的に黙らせるつもりであった。

尤も、今の希美にはレーザーライフルも大した効果は無いだろうと雄成は見ていたが……。

「……………どうでもいいですよ。もう……………」

「ほお？」

雄成の問い掛けに対する、希美の返答は彼をしても少し意外な物であった。以前の彼女では考えられないあまりにも投げやりな態度。ジトつとした目は雄成とは反対方向に向けられ、胡乱な視線が廊下の壁を眺めている。

どうやらデイナに徹底的に敗北した事で、彼女の中に残っていた最後のプライドが木っ端微塵に砕け散ったらしい。今の彼女には向上心も野心も、対抗心も無い。一言で言ってしまうえば、覇気が無かった。

文字通り、今の希美は空っぽだった。

あるのはただ一つ、空虚からくる飢えを満たすと言う欲望のみ。

2人が歩いていった先は、最近まで希美が入れられていた独房ではなかった。決して上等ではないし質素だが、人が暮らす空間としては必要な物が揃った部屋だ。そこには彼女に詭えた衣服もある。

1人部屋に入れられた希美は、久しぶりにまともな服装を手に入れた。ここ最近は一

人服ばかり着せられ、ついさつきまでは裸にタオルだけという痴女同然の恰好だったのだ。

しかし彼女の中に、裸にタオルだけで廊下を歩いたことに対する羞恥心はなかった。彼女自身にとつても意外なほど、心が騒がなかつた。

彼女が着替え終わると、そのタイミングを見計らつたかのように扉がノックされる。実際見計らつていたのでろう。一見普通の部屋に見えても、ここは研究区画の一室。室内に監視カメラの一つや二つあつても不思議ではない。

「お食事をお持ちしました」

着替えが終わると今度は食事の時間だった。部屋の前には大型のカートが来ており、様々な料理が乗っている。

係の者が次々と部屋のテーブルに運ばれた料理を、希美は並べられた先から次々と平らげていく。久方振りのまともな料理。カロリー摂取の為だけの、味も見た目も度外視したものではない本物の食事。

しかしそれを食す彼女の表情は淡々としていた。やつとまともな食事でありつけたと言ふのに、彼女の顔には何の感情も浮かんでいないのだ。

しかし感情はなくとも、その食べる速度は尋常ではなかつた。次から次へと料理が彼女の胃袋へと消えていき、大型のカートはあつと言う間に空の食器で埋め尽くされた。

食事を終え、係の者は大型のカートを引っ張って部屋から去っていった。

残された希美は、特に何も言われていないので部屋の椅子に座ってぼんやりとしていた。

「……………足りない……………」

どれ程そうしていたか、彼女の口から零れた言葉がそれだった。あれだけの量を平らげておきながら、彼女はまだ飢えを抱えていた。

腹が減った、喉が渇く。もつと欲しい。

もつと……………もつと……………もつともつともつともつともつともつと――

「希美……………」

不意に声を掛けられた。希美がゆらりとそちらを見ると、何時の間そこに居たのかアデニンが扉を開けて彼女の事を見ていた。

「女の部屋開けるのにノックもしないなんてどういう神経してるのよ？」

「何回もした。ただお前が全然反応しなかっただけだ」

「あ、そ……………それよりお腹空いたんだけど……………」

「さつきあれだけ食べただろうが……………いいから来い」

呆れたアデニンに連れられ、希美は研究区画内の廊下を歩く。

彼女が連れて行かれたのは研究区画内にある訓練ブースだった。だだっ広く何も無い部屋は、主に新型ベクターカートリッジの性能テストなどに使われる。

2人がそこに辿り着くと、部屋の中央に雄成が立っていた。希美たちが部屋に入ると、彼が軽く手を上げて手招きする。よく見ると、その手には何かを持っている。

「やあ、ご苦勞アデニン」

「いえ」

「ふむ……食事は満足してくれたかね？」

「足りない」

雄成を前にしても、気怠そうな様子を崩さず更なる食事を所望する希美。彼女の態度にアデニンが咎めるような目を向けるが、雄成はそれを手で制した。

「働かざるもの食うべからず、だよ。さあこれを」

そう言つて雄成が手渡してきたのは、デйнаドライバーによく似たベルトのバックルだった。あれと違うのは、セントラルドグマ部分が装甲で覆われてレセプタースロットが存在しない点だろうか。

渡されたベルトを希美は胡乱な目でジロジロと眺めた。

「……………何です、これ？」

「君用に作った新型ドライバーだ。これを使って変身するといい」

追加で渡される二つのベクターカートリッジ。一つのドライバーに二つのベクターカートリッジ、それはまるで因縁の相手である仮面ライダーデナのようだ。

思わず希美の口元に笑みが浮かぶ。

「ふ……ふ……ふ……」

手の中のドライバーとカートリッジを見て笑う希美の傍から、気付けば雄成とアデニンは姿を消していた。

代わりに室内に数人のアントファッジが入ってくる。嘗ては彼女の部下だった連中、その彼らは部屋に入ると彼女に銃口を向けた。

自分に向けられた銃口を前に、希美は胡乱な目で彼らを眺めつつ口の端を吊り上げて気の抜けた笑みを浮かべる。

「足りない……ああ、足りない………あんだ達、私を満たしなさい」

〈Base HORSESHOE〉

新たなドライバー……『ブレイドドライバー』を腰に装着し、二つのベクターカートリッジ『クロコダイレクターカートリッジ』と『タートルベクターカートリッジ』を構える希美。

これから始まるのは、戦闘に非ず。生まれ変わった希美の新たな食事の時間である。彼女の食事風景を、モニタールームから雄成とアデニンの2人が眺めていた。

第34話：亀裂の入った関係

あの後亜矢は、心此処に非ずと言った様子で帰宅した。自己嫌悪と仁への申し訳なさで、今日はもう何もする気になれない。

自宅に帰ると必然的に隣の仁の部屋が目に残まる。一瞬彼の部屋のインターホンを押して彼に何かを言おうと思ったが、結局何を言えば良いかも分からずそのまま自宅へと入り、着替えもせずベッドに倒れ込んだ。

重力に行かれるままにベッドに倒れ込むと、その瞬間亜矢を仁の匂いがふわりと包み込む。以前彼が泊っていた時、一緒にベッドに入った時の彼の匂いがまだ残っていたのだ。

鼻腔を彼の匂いがついた瞬間、亜矢の目から再び涙が零れ落ちた。

「うぐ……ぐすつ！ 仁君……ごめんなさい……」

【明日、仁君としつかり話さないね】

「ん……うん……」

こんな残り香では全然足りない。もっと直に仁と触れ合い、温もりを全身で感じた。しかしこのままでは彼に合わせる顔がない。

真矢からの言葉に泣きながら頷き、亜矢はそのまま眠りに落ちていった。微睡に落ちる最中、亜矢は仁との平和で穏やかな日常を夢見ながら意識を手放した。

そして翌日………

「おはようございます……」

仁と顔を合わせる事に気まずさを感じずにはいられず、何時もに比べて圧倒的に覇気の足りない挨拶と共に研究室へと入った亜矢。

すると彼女の姿を認めた峰が、何やら慌てた様子で近付いて来た。

「ああ良かった、やっと来てくれた双星さん！」

「え？ あの、何かあったんですか？」

峰の様子に困惑を隠せない亜矢。何が何だか分からないと言った様子の彼女を、峰は強引に引つ張ってラボの方へと向かった。

「昨日何度も携帯にかけてのに、双星さん全然出ないんですもん。あなたの身にまで何かあったんじゃないかって凄く心配したんですよ？」

「昨日？ 何度も？」

まさかと思ひ携帯を見ると、昨日から何件も着信履歴があった。そう言えば、夢現に何度か携帯の着信を聞いた様な気がする。どうやら携帯の着信音も気にならないくらい、昨日から精神的に参っていたらしい。

しかし峰は一体何を慌てているのだろうか？

「一体何が？」

「口で言うより、見てもらったほうが早いだろう」

白上教授に言われ、峰によりラボに引き摺り込まれて……………目の前に広がる光景に
亜矢は言葉を失った。

ラボには何時も通り仁が居たのだが、明らかに様子がおかしい。鬼気迫る様子で只管
キーボードを叩き、彼の前のディスプレイは目まぐるしく情報を出しては決してを繰り返している。
早すぎて何が表示されたのかも認識できない程だ。

仁が何かに熱中して周りが目に入らない様子を見せるのは今に始まった事ではない。
だが今の彼の様子はそれとはまるで違う。

「こ、これは一体——!?」

「昨日、戻ってきてからこれです。双星さんは戻って来ないしで何かあったんじゃない
かって聞いても、門守君は何も言ってくれないしでこっちも訳が分からなくて…………」

「……………ちよつと待ってください。昨日から？」

つまり仁はあの後、亜矢と別れてからずっとああしてパソコンと向き合っていると
言っただ。しかもあの様子、恐らく食事も碌にとつていないに違いない。

流石に気ままずいなどと言っても居られず、亜矢は仁に近付き彼を宥めようと声を掛け

た。

「じ、仁君、落ち着いてください!？」

「ん……気にしないで」

「気にしないなんて、そんなことできる訳ないじゃないですか!？」

「大丈夫……」

「大丈夫って、何を——」

「五月蠅いなッ!?!？」

仁の怒声がラボの中に響き渡る。初めて耳にする感情をむき出しにした仁の怒声。怒りと焦り、様々な感情が緋い交ぜになった声で怒鳴られ、亜矢の身が竦み体が震える。

怯える亜矢の姿を見て、仁も頭が冷えたのか目を見開き目を泳がせた。

「あ——」

亜矢からの怯えた視線を向けられ、仁の脳裏に先日 of 光景が蘇る。周囲から向けられる畏怖の視線、自分の手で死に掛けた菅野、そして仁の所業に恐怖する亜矢。

「——ゴメン」

その視線から逃れるように、仁は亜矢から視線を外し再びパソコンと向き合った。キーボードを高速で叩く音が響く中、仁はパソコンのディスプレイを見ながら亜矢に話し掛けた。

「今ちよつと手が離せないんだ。この恐竜ベクターカートリッジ、何とかして制御できるようにしないといけないから。こいつが制御できるようにならないと、傘木社の連中に勝てないよ」

理に適った事を早口で捲し立てる仁。言ってることは正しいだろう。事実傘木社が実戦に投入してきた恐竜ファッジは強い。何か対抗手段が無ければ、彼らの暴拳を止める事が出来なくなってしまう。

しかし峰の耳には、それはどうしても言い訳に聞こえた。まるで何かから逃げよう自分の世界に逃げ込む口実として、恐竜ベクターカートリッジの改良に没頭している様に見えて仕方なかった。

そんな彼に、亜矢が手を伸ばそうとする。

「えと……あの……」

本当は今すぐにでも彼を止めたい。戦闘と暴走で消耗している筈なのだ。加えて徹夜しての作業、今彼に必要なのは休息の筈である。

しかし今の彼女にそれを彼に告げる勇氣は無かった。無理に止めようとしてまた怒鳴られるのは怖かったし、何よりあの時彼を支える事が出来なかった自分に何かを言う権利があるとは思えなかった。

大人しく引き下がる亜矢と、彼女に見向きもせず只管パソコン画面とだけ向かい合う

仁の姿を、白上教授と峰が信じられないと言った様子で見ている。つい昨日まであんなに仲良く——それこそ嫉妬とかを通り過ぎてしまう程——していたのに、この変わりようは何だと言った感じである。

これは流石に見過ごせない、峰は亜矢をラボの端に引つ張つていき何があつたのかを訊ねた。

「ちよちよ、双星さん双星さん!!? 何があつたんですか? ただの喧嘩つて感じじゃありませんよね?」

近くの椅子に座らされた亜矢は、峰からの問い掛けに少しずつ答えていった。

「実は……」

亜矢は先日の出来事を掻い摘んで話していく。その中で2人が食い付いたのは、やはりと言うか当然と言うかダイナが暴走したところだった。

「——暴走?」

「門守君がですかッ!」

「……はい。恐竜ベクターカートリッジの力が強すぎて、影響を抑える事が出来ないみたいなんです」

亜矢の言葉に、白上教授は信じられないと言った顔で顎に手を当てた。元々ベクターカートリッジの悪影響を受けないようにする為のダイナドライバーで、影響を抑えきれ

ないと言う事態に陥ったのが信じられないのだ。

「それで……仁君が暴走して、私や警察の人達を攻撃して……何とか仁君を変身解除させて暴走を止めることは出来たんですけど………」

問題はそこから先だった。亜矢にとって最も己が忌々しく、同時に情けなくなるシーン。

「……暴走した仁君を、警察の人達も怖がっちゃって。それで仁君、自分が何をして怖がられてるのかを理解しちゃったんです」

「………それであんなに必死になってるって訳ですか」

漸く峰は仁が鬼気迫る様子でパソコンに齧りついていて理由を理解した。敵が強化された力を会得しているのに、自分がその力を使う度に暴走して周りを傷付けていたら本末転倒にも程がある。

「……仁君が怖がられた時、私、何も出来なかつたんです」

「え？」

「本当は私が近くで仁君を支えなきゃいけないのに………肝心な時に脚が動かなくて、何も言えなくて………権藤さんが仁君を宥めようとしてくれたんですけど、結局仁君、心を傷付けて———！」

思い出して亜矢の目に再び涙が浮かんだ。

「肝心な時に何も出来なくて……私、何の為に——!？」

顔を手で覆って涙を流す亜矢を見て、峰は優しく背中を擦ってやった。今の峰が亜矢に対して出来る事はこれしかない。

「……今は、信じましょう。門守君ならきつと、この窮地を乗り越えてくれるって……」

それから数日の間、仁はラボに籠りきりとなった。

何かに憑りつかれたかの様にパソコンと向き合い鬼気迫る様子でキーボードを叩く仁は、文字通り寝食も投げ捨て恐竜ベクターカートリッジの制御方法を模索し続けた。

流石にぶっ倒れるのではないかと、峰が仁を宥めようとしたが彼は一切の利く耳を持たない。白上教授なら或いはと言う気もしたが、彼は彼でダイナの暴走を抑える為、仁程ではないが恐竜カートリッジの解析と研究に集中している。

結果、仁を止められる者は誰も居らず彼は身を削って暴走の解決方法を探し続けた。

【亜矢、仁君を止めよう】

「……………うん」

この事態に、遂に亜矢と真矢が覚悟を決めた。このまま恐れてばかりいてはいけな

い。行動を起こさなくては。例えそれで再び仁に怒鳴られたりしたとしても、その苛立ちも何もかもを受け止めるのだと言う覚悟を持って亜矢は仁を止める為彼に声を掛けた。

「仁君！ いい加減にしてください！ 一体何日無理してると思ってるんですか!？」

「放つといてよ。別に亜矢さんに迷惑かけてる訳じゃないんだ」

「心配だつて言ってるの!? 私も亜矢も、仁君が何時壊れるんじゃないかって不安なのよ!」

「だとしても、大事な事なんだよ。何で分かってくれないんだ!」

「仁君こそ何で分かってくれないんですか!？」

互いに一步も譲らない。仁も亜矢に対して乱暴な態度を見せていくが、今度は亜矢も怯む事無く仁と対峙し続ける。

しかし話は完全に平行線。仁は只管に恐竜ベクターカートリッジの制御を確立する事に執心し、亜矢は仁にこれ以上の無理をして欲しくないと説き続けた。

「五月蠅い! もう放つておいてくれ!!」

平行線の議論に遂に我慢の限界が来たのか、仁は感情を爆発させ、感情に流されるままに腕を振るう。振り回された手が近くのパソコンに直撃すると、ディスプレイが粉砕され小さな爆発を起こした。

「ッ!?」

その光景に2人は口論を中断し、仁はデイスプレイを粉碎してしまった己の手を呆然と見つめ、亜矢はその手から流れる血を見てハンカチを取り出し彼の手を取った。

「仁君ッ!? 大丈夫ですか、見せてください!」

仁の手を取り流れる血を拭う亜矢だが、彼はそれを振り払い逆に彼女を突き飛ばした。

「近付くなッ!?」

「きゃっ!?」

「双星さんッ!」

仁に突き飛ばされた亜矢は床に尻餅をつく。流石にこれ以上は傍観していられなくなったのか、峰が亜矢に近付き彼女を助け起こしつつ仁に非難の目を向けた。

「門守君ッ!!」

峰の声に我に返った仁は、床に座り込みながら自分の方を見る亜矢の目に、今度は仁の目に恐怖が浮かぶ。

そして仁は彼女達に背を向けると、逃げるようにラボから出て行った。

「門守君何処に行くんですか!?!」

「仁君ッ!」

「来るな、俺に近付くなッ!」

裏口を通つてラボから出て行く仁を、亜矢が立ち上がり追い掛ける。

「双星さん、待つてくさい!」

「仁君を放つておけません! 今度は、絶対に!」

仁を追つてラボから出る亜矢。2人が出て行ったことで、ラボの中は一気に静かになる。

「あ……………はあく、もう。忙しい2人だなあ」

峰は1人溜め息を吐くと、とりあえず仁が粉碎したディスプレイの残骸の片付けに取り掛かるのだった。

ラボから逃げて我武者羅に走り続けた仁は、当ても無く街中を走り続けていた。今とはかく亜矢から離れたい。離れなければならぬと心が叫んでいた。

あの日…………ケツアルスピノフォームになって暴走してからと言うもの、仁は意識が自

分の制御を離れつつあるという事に気付いていた。意図せずして本能が剥き出しになる。凶暴性が押さえられなくなり、感情が爆発しやすくなっていた。

ケツアルスピノフォームの制御方法を探していたのは、半分は確かにその制御方法を見つけて出す為だがもう半分はとにかく何かに没頭して気を紛らわせる事だった。何かに没頭していれば、剥き出しとなった本能を抑える事も出来た。

だがそれにも限界があるらしい。些細な事ですぐに心の均衡が乱れ、怒りとなって爆発してしまった。

このままでは、亜矢にまで危害を加えてしまいかもしれない。そう思うと仁は居ても経つても居られず、あの場を逃げ出さずにはいられなかった。

必死の形相で駆ける仁を、道行く人々が奇異の目で見ている。そんな視線も今の仁には刺激物となっていた。集中する視線は、否が応にもあの暴走した時にS. B. C. T. の隊員達から向けられた畏怖の視線を思い出させる。

そしてそれに続く、亜矢の視線も――

「う——!?!」

いい加減走り続けるのに限界が来て、近くの電柱に手をつき立ち止まる。全身汗だけで、顔には連日の貫徹による疲労で目の下にハッキリと隈が浮かび上がった様子は、ともすれば薬物中毒患者を彷彿とさせた。実際、今仁の事を見ている人の中にはその疑い

を持つ者も少なからずいるだろう。明らかに何か危険なものを見る目をしている。

ここに居るのはあまり宜しくない。そう思つて仁がその場を移動しようとしたその時、どつからか飛んできた銃撃が彼の周りにある物を手当たり次第に破壊した。

「くっ!!」

銃撃は街灯を粉碎し、車を破壊し、ビルの壁を崩壊させる。その余波は彼の周りの人々にも及び、街は一気に阿鼻叫喚の地獄と化す。

「何だ、一体——?」

突然の攻撃に仁が周囲を見渡していると、彼の視界に1人の白衣を着た男が姿を現した。傘木社の幹部の1人、シトシンだ。

「よお、仮面ライダー?」

「お前……傘木社の?」

「おう、シトシンだ。覚えてるか?」

「お前——!!」

忘れる訳がない。亜矢を甚振つたとかいう奴だ。以前倒すことが出来なかつた事を仁は地味に悔やんでいた。

「この間は世話になつたからな、その礼も兼ねて来たつて訳よ」

「だからつてこんな街の往来でやるとか、お前結構バカでしょ?」

「はん！ 減らず口を叩けるのも今の内だぜ」

精神的に平常ではないからか、仁の口からシトシンに対して毒が吐かれる。だがシトシンはそれを鼻で笑うと、フロッグベクターカートリッジと………ベクターリーダーを取り出した。

「ッ！ それは——!?!」

「へへへっ、イイだろこれ？ 俺の分も新しく用意してもらったんだぜ。こいつでこの間の礼をしてやるから覚悟しろよ」

〈FLOG〉

シトシンは起動状態にしたベクターカートリッジを、ベクターリーダーのソケット部に装填する。

〈Leading〉

「行くぜ、進生！」

〈Transcription〉

以前雄成がやってみせたように、ベクターカートリッジを装填したベクターリーダーの引き金を引くと銃口からスーパーコイルが放たれ仁の周りの地面を抉りシトシンに向かつて戻ると彼の体を貫いた。すると彼の体が黒いアンダースーツで覆われ、その上から緑色のカエルを模した分厚い装甲が包んだ。

そこに立っていたのは、やはりファッジではない。全体的に丸いシルエットの、仮面ライダーに酷似した戦士だった。

「こいつが……『グリーンリキッド』だ！」

シトシン改めグリーンリキッドは、そう叫ぶとベクターリーダーを仁に向け引き金を引いた。放たれた銃弾が彼の足元を抉る。

仁はその場を飛び退きながらデイナドライバーを取り出すと、腰に装着してベクターカートリッジを取り出す。

「今は苛立ってるんだ。悪いけど容赦はしないから」

〈HAWK + LEON Evolution〉

「変身！」

〈Open the door〉

ホークレオンフォームのデイナに変身した仁は、インペリアルウイングを広げて飛翔し空中からグリーンリキッドに対し攻撃を仕掛ける。上昇しては急降下からの蹴りも何度も繰り返し、堅実にグリーンリキッドにダメージを与えていく。

しかしグリーンリキッドは彼が思っている以上に頑丈だった。カエルの能力を反映しているクセして、見た目に違わず硬い。デイナの蹴りが大して効いていない。

「何だ何だ、こんなもんかよー！」

「デイナの攻撃が大して痛くない事に、グリーンリキッドは挑発するように声を上げる。普段のデイナならそんなもの何処吹く風と受け流せたのだが、精神が乱れている今は効果抜群だった。デイナは地上に降り立つと、BHエレキテルカートリッジでエレキテルにゲノムチェンジした。」

「ならこいつで……」

〈BUFFALO + HUMAN Light up〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

バツファローヒューマンエレキテルにゲノムチェンジしたデイナは、エレキテル・ブーストを用いてグリーンリキッドに接近し電撃を伴う高速攻撃を繰り返した。グリーンリキッド相手には対抗されたエレキテル・ブーストも、生体発電などとは無縁のカエルの能力を持つグリーンリキッドには有効な筈だ。速度に対抗する事など出来る筈が無いし、装甲が分厚くても電撃が内側まで浸透しダメージを与えられる筈だった。

しかし、デイナのエレキテル・ブーストが終わった時、そこには全く堪えた様子の無いグリーンリキッドが立っているではないか。これにはデイナも目を剥いた。

「ッ!? 何でッ?」

「自分の手、よく見てみな」

余裕を感じさせる声で告げられた言葉に、デイナが警戒しながら自分の手を見る。そこには、何やら透明でやや粘性のある液体が付着していた。

「これは……？」

色はなく臭いも殆どない。だが相手がカエルの能力を持っている存在であると言う結論に達した時、デイナはそれの正体に気付いた。

「……………毒の粘液か」

「ははっ！ あつたりい〜！」

カエルは皮膚呼吸を行う為、体を湿らせておく必要がある。その為体表に粘液を分泌して陸上で干乾びたりしないように保湿しているのだが、この粘液には毒が含まれている事が多い。有名なもので言えばジャングルに生息するヤドクガエルなんかがそうだし、日本に生息するアマガエルですら体表の粘液には毒を含んでいる。

無論それらの毒は触れただけでどうにかなるものではなくキチンと洗い落とせば害は基本無いのだが、これは自然界のカエルのそれよりも強化された粘液である可能性が高い。今はまだ大丈夫だが、長時間放置してはどんな悪影響があるか。

「…………なるほどね。粘液の方を電気が走っていったから、内側にはダメージが届かなかった訳か」

「そう言う事だ。お前の電撃は俺には通じねえ。それに下手に触らねえ方が良いぞ？」

浸透すれば忽ちお前の体の自由を奪う」

なかなか厄介で、何より厭らしい戦い方だ。中身の性格が滲み出ている。

「仁君！」

デイナが頭の中でグリーンリキッドの攻略法を模索していると、追い付いてきた亜矢がルーナに変身して攻撃に加わった。ルーナはグリーンリキッドに接近しながら、両手に持ったリプレッサーショットで銃撃する。

「はっ！ 来たか！」

ルーナに対してもリベンジの機会を欲していたグリーンリキッドは、歓喜の声を上げながら全身に粘液を分泌した。多量に分泌された粘液は彼の体から滴り落ち、足元に水溜まりを作るほどだ。

そこにリプレッサーショットの銃弾が命中する。電撃は受け流せても、銃弾は奴の装甲を抉るだろうとデイナは予想していた。しかし結果は、彼にとっても予想外のものがあった。

なんとグリーンリキッドは無傷。ルーナの放った銃弾は、彼の体表を滑るようにして逸れていきあらぬ方向へと飛んで穴を穿った。

「えっ!?!」

「あれは……」

デイナはグリーンリキッドが何をやったのかすぐに分かった。要はボクサーが顔にワセリンを塗るのと同じだ。滑らかな粘液を全身に分泌する事で、摩擦を軽減し銃弾を滑らせたのだろう。銃弾を逸らせるほどの滑らかさは、ワセリンなどの比ではないだろうが。

とにかく、あいつには打撃・銃撃は通用しない。奴に有効打を与えるには斬撃しかないだろう。

「とりあえずあいつにはこいつが効きそうだ」

〈SHARK + HEDGEHOG Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

グリーンリキッドに対抗すべく、デイナはゲノムチェンジしてシャークヘッジホッグフォームになる。シャークベクターカートリッジによって得られる腕部のカッター『スケイルカッター』は、ただの刃と言うだけでなく攻撃の瞬間無数の鱗を飛ばして相手の体を切り裂くことが出来る。粘液による防御も削り取ってくれる筈だ。

だがデイナが何よりもこの姿を選んだのは、ハリネズミの能力を欲したからである。ハリネズミの隠された能力は毒耐性。大抵の毒素を無害化してしまうこの能力があれば、グリーンリキッドの分泌する毒にも耐えられる。

「はっ」

デイナはフォームチェンジするなり両腕のカッターで斬りかかる。攻撃の瞬間放たれる鱗がチェンソーの様にグリーンリキッドの粘液の防御を削り本体の装甲を傷付けた。

「ぐうっ!?! こいつ——!?!」

「……なるほどね。亜矢、選手交代!」

「分かった!」

デイナの戦い方に攻略法を見つけたルーナは、人格を亜矢から真矢に切り替えて突撃した。

「アイ ハヴ コントロール!」

ルーナはアームブレードを展開し、グリーンリキッドに斬りかかる。鋭い爪は彼女の読み通り、滑らされる事無く相手の装甲を切り裂いた。

「ぐおあっ!?!」

「よし! 仁君、このまま一気に決めるわよ!」

「……………ん」

ルーナの参戦に、デイナはやや不満げだ。先程の事をまだ引き摺っているのだろう。だが、この場でやるべき事は理解している様子。それに今は戦いに集中しているから

か、何時もの状態に大分近い。それを自覚して、デイナは彼女を突き放す事無く肩を並べてグリーンリキッドに対抗した。

デイナの両腕のカッターが、ルーナのアームブレードが、グリーンリキッドの粘液の防御幕を破って切り裂いていく。入れ代わり立ち代わり立ち位置を変える2人の呼吸は今の所合っており、ただでさえ2対1だと言うのに2人の息の合ったコンビネーションも合わせりグリーンリキッドは一気に劣勢に立たされた。

「こんの、がはあっ!?!」

動きが鈍ったところで、2人が同時に放った蹴りがグリーンリキッドを蹴り飛ばす。大きく蹴り飛ばされたグリーンリキッドは電柱に激突し地面に落下した。

「くっ、チクシヨウ——!?!」

立て続けのダメージに、グリーンリキッドが動きを止める。そこにデイナに容赦ない攻撃が叩き込まれた。

〈ATP Burst〉

ノックアウトクラッシュが回し蹴りとなってグリーンリキッドに放たれる。剣山の様な装甲の脚はグリーンリキッドの装甲を粘液ごと削り取り、大ダメージとなって彼を襲った。

「ぐおああああああっ!?!」

「デイナの一撃を食らったグリーンリキッドは地面に叩き付けられると、自らの意志で変身を解除した。」

「ぐっ!? あ、危ねえ……危うく死ぬところだった……」

「どうやらあれを使っているも、強制変身解除などになると隠蔽装置が作動するらしい。デイナの攻撃のダメージが強制変身解除に繋がりそうだったから、自分から変身を解除しようだ。」

「今、シトシンはダメージもあつて完全に無防備であり、捕らえる絶好の機会であつた。それを見て取つてか、デイナがシトシンにゆっくり近づいていく。」

「ああ、宗吾達が来るまで彼を確保しておくのだな……ルーナはそう思っていたのだが、次の瞬間それは間違いであると気付かされた。」

「デイナはシトシンに近付くと、手を振り上げ拳を硬く握りしめたのだ。それを見た瞬間彼女は背後から彼を取り押さえた。」

「仁君待つて!!」

「——ツ!?!」

「背後からルーナに取り押さえられ、動きを止めるデイナ。ハツとした様子で周囲を見て、自分が何をしようとしていたのかを知り慌てて彼女を振り払い離れた。」

「はあっ?!? はあっ?!? はあっ?!?……俺……俺は……」

「仁君、大丈夫？ 最近本当に変よ？」

「ツ!? 来るな、来るなよ!」

彼を心配してルーナが近付くと、彼は慄いた様子で彼女を拒絶した。必死な様子に、ルーナも思わず足を止める。

「仁君?」

「分かるだろ、俺今普通じゃないんだ! あんな事も、こんな事もしたくは無かったんだよ!?! なのに——」

半ばパニックになって叫ぶデイナに、ルーナはどうすればいいか分からずその場で立ち往生してしまった。今彼に触れるべきか否か、亜矢と真矢で意見交換が行われていた。

だがそれも長くは続かなかつた。出し抜けにデイナの背後に姿を現した人物が彼の事を殴り飛ばしたのだ。

「があっ?!」

「仁君!」

殴られ倒れるデイナに、ルーナが近付き助け起こしながら彼を殴った人物に目を向ける。

そこに居たのは、一言で言えば仮面ライダーとしか言い様の無い奴であった。

デイナドライバーに酷似したベルト、鎧の様な仮面、鱗の様な表面の緑のアンダー
スーツと、滑らかな曲面が目立つ茶色い装甲。

その人物を見て、シトシンが声を荒げる。

「て、テメエ何しに来た!？」

「……………はあく、あんたが無様に負けてるから助けに来てやつたんじゃない。お礼の
1つも言えない訳?」

呆れたような声を上げる仮面ライダー。その声には覚えがあつた。覇気が全く無い
ので感じが大分違うが、間違いなくチミンと呼ばれたスパイダーファツジに変異してい
た女の声だ。

「お前……………蜘蛛女か?」

「いい加減その呼び方何とかならないの?……………ま、もうあつちの呼び方されるのも
あれだし、名前知らないんじゃないやどうしようもないわよね」

希美が変身した仮面ライダーは、溜め息と共にそう呟く。実は案外、蜘蛛女と呼ばれ
る事を前々から気にしていたようだ。

「志村 希美よ、宜しくね。尤も、あんた達は別に宜しくしたくは無いだろうけど…………」

自重するように呟く仮面ライダーに、ルーナがリップレッサーショットを向ける。名前
が何であれ、希美が敵である事には変わりはない。現に今デイナの事を殴り飛ばした。何

時襲ってくるかと考えたら、ゆったり構えてなどいられなかった。

「あんたの名前なんて興味ないわ。こいつを連れて帰ろうってつもりなんだろうけど、そうはさせないから」

「やれるもんならやってみなさいよ」

希美がそう返すと、それを合図にルーナがリプレッサーショットの引き金を引いた。放たれた銃弾が希美の変身した仮面ライダーの装甲のに突き刺さる。

しかし彼女は全く堪えた様子を見せない。まるで痛痒を感じていないかのように、銃弾を受けながらも悠然と前に進んだのだ。

「き、効いてないのッ!？」

【真矢、ここは私がッ!】

「わ、分かった!」

火力不足なのか狙いが悪いのか分からないが、このままでは接近を許すだけだと亜矢は真矢と交代して表に出ると、リプレッサーショットをライフルモードにして撃った。狙うは装甲に覆われていないアンダースーツ部分。幾ら硬かろうが、装甲がない部分なら防御力も大した事はない筈。そこを貫通力に優れるライフルで撃たれば――

「……………はんっ」

「そ……………そんな――!？」

だが希美はこれすら全く気にしなかった。精々衝撃で撃たれた箇所が後ろに押された程度で、命中箇所には傷一つ付いていない。

「ダメね……全然ダメ……こんなんじゃないや私は満たされない……もつと私を満たしてみなさいよ。あの時みたいに、さ」

「あの時……？」

「そうよ？ ついこの間……私の事を容赦なくズタズタにしてくれたじゃない。あれくらいの事をやってみせてよ」

希美の言葉に、デイナの臆気な記憶が鮮明さを取り戻す。

以前デイノニクスファツジが仁の家に襲撃を掛けてきた時、デイナは初めてケツアルスピノフォームを使用した。

そしてその時も暴走し、抑えられない凶暴性に任せてデイノニクスファツジを……倒されて変異が解けた希美の体を――

「!? う、五月蠅いッ!」

蘇った忌々しい記憶を振り払うようにデイナは希美に殴り掛かる。だが普通の攻撃は彼女には通用しない。全て受け止められ、そして彼女を落胆させた。

「はあ……もういいわ」

〈HORSESHOE Burst〉

希美の変身した仮面ライダーが、ドライバー中央上部のスイッチを押した。すると彼女の右手にエネルギーが集まる。

「はあっ!!」

右手を手刀の形にし、希美はデイナに叩き付ける。貫手を喰らったデイナはその一撃の重さに吹き飛ばされ、壁に叩き付けられ変身を解除された。

「が、はあっ!!」

「仁君ッ!!」

「よそ見してる場合?」

「はっ!!」

変身解除された仁に意識を向けた瞬間、今度はルーナに攻撃が放たれた。デイナを殴り飛ばしたエネルギーをそのまま刃の様に放出し、回避する間もなく直撃を食らった彼女は仁の傍まで吹き飛ばされ彼同様変身が解除されてしまった。

「あぐうっ!! う、あ……」

「亜矢、さん……」

自分の隣に倒れた亜矢を、仁が痛む体に鞭打って手を伸ばす。が、彼女に触れそうになった瞬間ビクリと体を震わせ手を引っ込めた。

そんな2人に対し、希美は興味を失ったのか変身を解除するとシトシンを俵の様に担

ぎその場を後にした。

物の様に担がれたシトシンは当然抗議する。

「おいつ!? 何だこの持ち方、下ろせッ!」

「こっちは早く帰りたいのよ。怪我人の歩調に合わせるなんて真っ平だわ」

勝手な物言いです歩みを進める希美に抵抗するシトシンだったが、彼女は構わず2人の前から姿を消した。

離れていく希美とシトシンの姿に、仁はその場で顔を俯かせ静かに地面を拳で叩くのだった。

第35話：亜矢の涙

デйнаとルーナ、2人の仮面ライダーを容易く退けシトシンを回収した希美を出迎えたのは雄成とアデニンだった。相変わらずシトシンを俵担ぎした希美を、雄成はにこやかに出迎えた。

「やあ、お疲れ様。どうだったかね、ブレイドライバーで変身した仮面ライダー……『ヘテロ』の使い心地は？」

雄成からの問い掛けに対し、希美はすぐ答えることはせずシトシンを乱暴にその場に落とした。落とされたシトシンは潰された蛙の様な声を上げた。

「て、てんめえ……もうちよつと優しく下ろせねえのかよ!？」

「……………ふん」

「何か言えツ!？」

「まあまあ。それでどうだったかね?」

希美に食って掛かるシトシンを宥めつつ、答えを催促する雄成。一瞬無言で雄成の問い掛けを無視するように彼の隣を通り過ぎる希美だったが、何かを思い出したかのように足を止めると雄成の方を見ずに口を開いた。

「……別に不自由はしないです」

「ふむ、そうかね。使った後体に何か異変はあるかね？」

「別に……そうならないようにしたのはそっちでしょう」

雄成と視線を合わせず素つ気なく答える希美に、傍に控えていたアデニンが何かを言おうと一歩踏み出す。だが雄成はそれを宥め、にこやかな笑みを崩さないでいた。

「それより、お腹が空きました」

「分かった。直ぐ食事を用意させよう。今回はご苦労だったね」

その労いの言葉を話の終わりと判断したのか、希美は無言でその場を後にした。自室に戻っていく希美の後姿を見送り、シトシンは雄成に詰め寄った。

「あいつ何なんですか!？ 俺だけじゃなく、プロフェッサーにまで舐め腐った態度取りやがって!？」

「少し、灸を据えた方が良いような気がしますか?」

雄成に対し忠誠を誓っている2人にとって、希美の態度は無礼極まりないものだった。曲がりなりにも相手はこの会社の社長であり、彼女はこの会社の一員なのだ。ならば最低限の礼儀は払ってしかるべきである。

しかし当の雄成本人は全く気にした様子が無く、それどころかアデニンとシトシンの2人を宥めすらした。

「まあまあ、落ち着きたまえ。そうカツカするものじゃないよ」

「良いんですか？ このままでとアイツ、更に調子に乗りますよ？」

雄成が許すならそれで良いと引き下がったアデニンに対し、シトシンは納得がいかない様子だった。許すと言っている雄成に対し、尚も食い下がる。

「その心配は無いよ。彼女はただ全てを諦め、流れに身を任せているだけに過ぎない」

「え〜つと……つまり？」

「餌を与えている限りは大人しいという事さ。こう言えば納得するかね？」

つまり希美は傘木社の飼い犬である、そう言いたい訳だ。こういう言い方ならシトシンにも納得できた。寧ろ人間としての尊厳が奪われている辺りに、シトシンの中の歪んだ優越感が刺激され上機嫌になる。

「なるほど、それなら納得です。飼い犬……飼い犬ねえ……くくつ！」

そう言う事なら精々寛容に接してやろう。どれだけ粹がっても彼女は鎖に繋がれた犬に過ぎないのだから。

この場に居ない希美に対し優越感に浸るシトシンを、アデニンがそれとなく眺めていた。1人ニヤニヤと笑う彼の姿に、アデニンはアデニンで笑いが込み上げるのを抑えきれず声を出さずに薄く笑った。

シトシンは気付いていないのだ。自分が特別であるように思っている様だが、彼もま

た雄成の飼いだであるという事に。彼自身鎖に繋がれているという事に気付かず他人の首輪を見て悦に浸るシトシンの姿に、そしてアデニン自身もまた雄成によって鎖に繋がれているのだという事実には、アデニンは笑いを堪える事が出来ずにいたのだった。

希美の変身した仮面ライダーへテロに敗北した仁は、まだ体力が回復していない亜矢を抱えて大学のラボへと戻っていた。

傷だらけで戻ってきた2人に、峰は驚愕し濡らしたタオルを持ってくる。

「ちよっ!! 2人ともどうしたんですか!?!」

峰の驚愕を他所に、仁は亜矢をソファに寝かせ自分は傍の床に座り込む。流石に体力が限界だった。

「……派手に負けただけです」

「負けたって、恐竜のファッジに?」

「いや……傘木社が遂にライダーシステムを作ったんです。それも滅茶苦茶強い。デイ

ナとは比べ物にもならない」

亜矢の顔を拭いていた峰は絶句した。まさかデйнаとルーナが揃って歯が立たないようなライダーシステムを、よりにもよって傘木社が作り出してしまふなど。

今までは組織力では劣っていても、デйнаとルーナでファッジ相手に対処出来ていたからある種の均衡が保っていた。それがここに来て恐竜ファッジに加えて敵のライダーと言う二つのファクターにより崩れてしまった。

由々しき事態である。

峰が状況の悪化に危機感を抱いていると、仁が傷付いた身体で立ち上がり自分のデスクに座る。そして再び、恐竜ベクターカートリッジ制御の為の方法を模索し始めた。

「そ、そんな身体で無茶です?! 今は休んだ方が良いですって!」

無理矢理デスクから引き剥がそうとする峰を振り払い、仁はノートパソコンのキーボードを叩く。傷付いているからか速度は落ちてはいるが、それでも彼は痛む体に鞭打ってキーボードを叩き、歪む視界を気合で補正してディスプレイの文字を凝視している。

何を言っても聞きそうにない仁に、峰も流石にどうしたら良いかと迷った。

その時、ソファアーに寝かされていた亜矢が立ち上がった。ふら付きながら仁の背後に立った亜矢は、呼吸を整えると仁が座っている椅子を無理矢理回して自分の方に向かせ、それでもパソコン画面を見続ける仁の頬を思いつき叩いた。

暫しラボには亜矢のすすり泣く声が響いた。どれだけそうしていたか、仁は未だ涙を流す亜矢の肩に手を掛けゆつくりと……本当にゆつくりと引き剥がした。

「仁君……？」

「……………(めん)」

本当はもつと言うべきことがあつた筈だ。言うべき事もそうだし、言いたい事もあつた。だが今の仁には自分のどんな言葉も醜い言い訳にしか思えず、それを亜矢に聞かせたくなくて結局一言謝るしかできなかった。

そして仁がこの場に居られたのはそれが限界だつた。これ以上、こんな自分を亜矢達に見て欲しくない。

「今日は……帰る。それじゃ……」

「待つてください門守君、そんな体で——」

一人で帰ろうとする仁を引き留めようとする峰だつたが、彼は峰の言葉を無視してラボから出て行つてしまった。残された峰は、同じく残された亜矢に目を向ける。亜矢は未だに涙を流していた。

正直、泣いてる人と2人きりになるのはかなり気まずい。が、さりとて放つておく訳にはいかず、探る様に声を掛けた。

「あ……まあ、何ですか。門守君も別に双星さんの事を嫌いになつた訳じゃないんで

すし、その……」

仁に代わつて亜矢を泣き止ませようとする峰だったが、良いセリフが思い浮かばず言葉に詰まる。かと言つてこんな事を、拓郎を始めとした野郎共に任せる訳にはいれない。あんなデリカシーの無い連中に任せる位なら、自分が面倒を見ると峰は自分を奮い立たせた。

「……分かつてるわよ、仁君が私達を嫌いになつたんじゃないつて事くらい」

突然亜矢が顔を上げた。目からはまだ涙を流しているが、雰囲気が先程と違つている。

「を？ ああ、真矢さんの方ですか」

泣き崩れる亜矢に代わつて、真矢が表に出てきた。尤も彼女も悲しんでいる事に変わりは無いのか、拭つた傍から涙が流れ落ちているが。

「分かつてる、仁君が私達に気を遣つてゐるって事は。私達が悲しいのは、仁君に気を遣わせてばかりで何もしてあげることが出来てないって事よ」

今一番苦しんでいるのは、他ならぬ仁自身だ。強敵に対抗できる筈の力は暴走を伴う諸刃の剣。敵はそれを自由に扱うだけでなく、それとは別の強力な力までをも手にした。対抗するには力を使うしかなく、しかしその力を使えば使うだけ彼は自分を見失い望まぬ暴力を振るつてしまう。

本当は仁も、もつと亜矢……そして真矢と触れ合いたい筈だ。それは先程亜矢を引き剥がした時の動きで分かった。本当は離れたくなくて、でも何時自分がおかしくなるか分からないから彼女と触れ合いたい気持ちを押して彼女から離れたのだろう。

全ては亜矢を守る為に……………。

「情けないわよね……………肝心な時に、何も出来ないだなんて」

流石に涙は枯れたのか、もう泣いてはいないが表情は沈んだままだ。だが彼女達の本音と、悩み苦しむ姿に逆に峰の心が落ち着きを取り戻した。気合が入ったとも言えるだろう。

普段一番辛い戦闘を仁と亜矢・真矢に任せきりなのだ。こう言う所で自分が彼らを支えなければ、先輩としても示しがつかない。

「……………そうですね。確かに情けないです。それで？ 嘆くだけ嘆いて何もしいんですか？」

「え……………？」

突然の峰の物言いに、真矢が呆けて顔を上げる。真矢が顔を上げると、峰が彼女の頬を両手で包んで顔を近付けた。

「そうじゃない……………そうじゃないでしょう？ 彼が一番辛いのを分かっているなら、こんな所で嘆いてる場合じゃない筈です」

「でも……私も亜矢も、どうすればいいか……」

「そんな簡単に崩れる程、門守君と双星さんは脆い関係なんですか？ 一緒に戦ってきたのに、絆の1つも生まれなかつたんですか？ 双星さんの好きな、信じる門守君はそんなに簡単に壊れる程弱い男なんですか？」

「ツ!!??」

峰の言葉は亜矢と真矢に衝撃となつて届いた。

脆い関係？ 絆が無い？ 否。仁とは恋仲になつてまだ1年も経っていないが、それまでの大学に入つてから築き上げてきた友情の上に成り立つ愛情とそれによつて出来た繋がりはそんなに弱くは無いと断言できる。

仁が弱い男？ それこそ否。彼は亜矢と真矢が知る中で誰よりも強い男だ。ただ今は迷い、苦しんでいるだけ。

「それともそんな覚悟で門守君の隣に立とうと思つてたんですか？」

「ち……違う……」

「何です？ 聞こえませんか」

「【違うツ!!】」

亜矢と真矢は同時に叫んだ。仁との関係は脆くない。仁の間には絆がある。仁は弱くない。仁の隣に立つ為の覚悟は出来ている。

亜矢と真矢はそう信じていた。

亜矢の……その内面に居る真矢の心に火が灯った。情熱の火だ。たとえ小さくとも、簡単には消えずとも熱い火が彼女の心に灯ったのを峰は感じ取った。

それを見て峰は満足そうに頷いた。

「なら……どうすればいいかは分かりますね？」

「はい……。ありがとうございます、先輩。お陰で目が覚めました」

「私に出来る事なんてこんな事くらいですから。頑張ってください。相手はなかなかの強敵ですよ？」

「承知の上です」

先程よりずっと覇気のある顔になった亜矢は、仁の後を追ってラボを出て行った。亜矢の後姿を見送り、峰は大きく体を伸ばした。

「まぐったく、本当に世話の焼ける2人なんですから」

愚痴りつつも満足そうな峰。その彼女の頬に、良く冷えた缶ビールの缶が当てられた。

「うひゃおうっ?!」

何だと背後を振り返ると、そこには両手にそれぞれ缶ビールを一本ずつ持った拓郎の姿があった。

「お疲れ」

「瀬高君？ いきなり何ですか？」

「何だ、折角労ってやろうって言うのに」

「……って言うか、結構いい時間なのにもう飲酒する気なんですか？」

「別にこの程度どうって事ないだろ。それとも要らないのか？」

「誰が要らないと言いましたか」

峰は拓郎から缶ビールを受け取ると、躊躇なくプルタブを引いて蓋を開けた。良く冷えているので、泡は殆ど噴き出さない。

彼女が蓋を開けたのを見て、拓郎も蓋を開け口を付ける。冷えたビールを飲みながらチラリと峰の事を見ると、彼女は満足そうにアルコールを含んだ息を吐いた。見た所彼女も肩から力が抜けたようだ。

その様子に拓郎は、改めて心の中で彼女を労い残りのビールを喉に流し込んだ。

それはビールを味わうというよりは、必要の無くなったビールを胃で処分する様な飲み方だった。

ラボを後にした亜矢は、仁の家を訪ねていた。彼が向かいそうなどころなど、現状ここ以外に思いつかない。

インターホンを押すが、反応はない。念の為仁から渡された合鍵を使って部屋に入ってみたが、彼の自宅はもぬけの殻であった。どうやら帰宅してはいないらしい。

こうなると亜矢にはお手上げだった。仁の行きそうなどころなど見当もつかない。そもそも彼は基本的に自宅か大学のどちらかにしかいないのだ。これが当ても無くあちこちを彷徨っていると、探しようがない。

それでも仁を探して日が沈むまであちこち奔走したが、その日は結局仁を見つける事は叶わなかった。

帰宅の際、念の為仁の家をもう一度訪れたが彼はやはり帰宅してはいなかった。

落胆しつつその日は諦め、翌日再び仁を探す事に時間を費やした。今の彼を一人にするのは良くない。

大学に行っていない事は峰に電話で訊ねて確認しているので、彼は昨日から何処かを彷徨っているらしい。

シヨッピングモールなど、仁と一度は訪れた場所を片っ端から当たるが彼の姿は見当

たらなかった。

「仁君……何処に行ったの？」

流石にここまで見当たらないと色々と不安になる。

その時、亜矢の携帯から着信音が鳴った。急いでディスプレイを見ると、どうやら峰からの着信であるらしい。

「はい、双星です」

『双星さん、門守君は見つかりましたか？』

「いえ、まだ……でもどうして？」

『ファッジが出ました。街で暴れているようです』

亜矢は唸り、真矢は舌打ちをした。この忙しい時に……。

「分かりました。とりあえず私が行きます。仁君に連絡は？」

『一応こつちでも連絡を取ろうとはしましたが、出てはくれませんでした』

「じゃあこつちの方でもう一度連絡を取ってみます」

『すみません、お願いします』

峰との通話を切ると、亜矢は仁の携帯に電話を掛けた。

コール音を鳴らす事数回。一向に出る様子の無い彼に、寂しさを感じ諦めようかと考えたその時、仁が電話に出た。

『……………』

「仁君ですか？　今どこに？」

問い掛けるが仁からの返答はない。亜矢からの着信と言う事で、とりあえず出てはくれたと言った感じか。

それならそれでも構わない。今の仁に、無理に戦えとは亜矢には言えなかった。

だから亜矢は、必要な事だけを彼に伝えた。

「仁君。今、宮野先輩からの連絡で、街にファッジが出たみたいです。私はこれからそちらに向かいます。仁君は……無理に来てくれとは言いません。今、大変ですもんね。仁君は今自分を大事にしてください。それじゃ……行つてきます」

言いたい事を言い終え、亜矢は通話を切った。通話の切れた携帯を、亜矢は複雑そうな表情で見つめていた。

「……………これで、良かったんだよね？」

「うん……………さ、行こう」

「うん！」

顔を上げ、亜矢は現場となつている場所へと向かつて行く。

現場に到着すると、そこでは既にS・B・C・Tが戦闘を行っていた。彼らが戦っている相手は普通のファッジの様で、多少手古摺っている様だが苦戦しているようには

見えない。

「変身！」

〈Open the door〉

亜矢は彼らを支援すべく、ルーナに変身してファッジに攻撃を仕掛ける。二丁拳銃がスコープ1号と戦っているファッジの表皮を穿つ。

「ツ！ 双星さんか！」

「すみません、遅れました！」

「気にするな、来てくれただけありがたい」

「……あれ？ そう言えば、菅野さん？ は——？」

見た所この場に居るスコープは宗吾の変身する1号のみ。菅野が変身する2号の姿は見当たらない。

「菅野は、先日の戦いで負傷してな。まだ病院だ。それに2号自体修理が必要でな」

先日ダイナが暴走した際、スコープ2号はケツアルスピノフォームに徹底的にボコボコにされた。その威力は変身している菅野本人にまで及び、スコープ2号自体も修理が必要なほど損傷していたようだ。

改めて恐竜ベクターカートリッジの持つ力を前に、ルーナは恐ろしさと頼もしさを同時に感じた。仁が何らかの方法で制御する術を身に付けてくれたら、これほど頼りにな

る存在は無いだろう。

「……つとと、いけないいけない。仁君に頼りきりじゃ……」

「そう言えば、今日は1人なのか？ 門守君は？」

ルーナがスコープ2号の不在が気になる様に、スコープ1号もデイナの不在が気になったようだ。問い掛けられてルーナは一瞬言葉を詰まらせたが、気を取り直してファツジを見据えながら答えた。

「……仁君は、少し休ませてあげてください。今、色々と大変ですから……」

「そうか……そうだったな」

言葉を濁したルーナに、スコープ1号も事情を察しそれ以上深く問う事はしなかった。

何より今は、あのファツジを何とかしなければ。

「私が行きます。援護、お願いします！」

「分かった！」

ルーナがリップレッサーショットを撃ちながらファツジに接近し、スコープ1号を始めとしたS. B. C. T. がそれを援護する。ファツジの方も銃撃の中接近してくるルーナに気付き、その剛腕で反撃しようとした。

瞬間、ルーナの腕からアームブレードが伸びてファツジの腕を切り裂きながら華麗な

身のこなしで回避した。

「アイ ハヴ コントロール!」

瞬時に人格を入れ替えた彼女は、接近戦主体の戦闘にシフトし両腕のアームブレードを使ってファツジの体を切り裂いた。

素早く動き回るルーナの動きをファツジは捉える事が出来ず、一方的に体を切り刻まれていた。先日の傘木社のライダーやホワイトカラーズ相手では碌な戦果を挙げられなかったが、流石にただのファツジ相手に苦戦するほど弱くはない。

寧ろ、ここ最近碌に活躍できていない憂さを晴らすかのようにファツジを追い詰めていった。

〈A T P B u r s t〉

「ハアツ!!」

動きの鈍ったファツジに、ルーナのノックアウトクラッシュが突き刺さる。蹴り飛ばされたファツジは落下地点で爆発し、後には変異が解けた人と強制排出されたベクターカートリッジが残されていた。

「ふう……」

とにもかくにも、これにて一件落着——と思っていたのだが、そうは問屋が卸さなかった。

「……なっさけな……………」

「ん？ あっ!？」

ゆらりと姿を現したのは希美だった。彼女は戦闘がルーナたちの勝利で終わったのを見て、大きく溜め息を吐かずにはいられなかった。

「つてか、今日はデイナはどうしたのよ?」

「……さあね」

希美もまたデイナが不在な事に首を傾げたが、ルーナはそれに答えることをしない。今の仁にこの女の相手は危険すぎる。ここで何とか退けなければ。

気合を新たにするルーナの前で、希美はブレイドライバーを取り出した。

「……………ま、いいわ。いないならいないで、あんたに相手をしてもらうだけだから」

〈Base HORSESHOE〉

希美がブレイドライバーを装着したのを見て、ルーナとスコープ1号達に緊張が走る。

警戒する彼女らの前で、希美はベクターカートリッジを二つ取り出した。

〈CROCODILE〉

〈TURTLÉ〉

起動状態のベクターカートリッジを、デイナ同様ドライバー上部にある二つのソケット

トに装填した。

〈HORSESHOE × CROCODILE × TURTLE Mixing
Genetic information〉

ここまではデイナとほぼ同様。そして最後に彼女は、ドライバー中央上部にあるスイッチを押した。

合言葉と共に。

「……変身」

〈Create〉

それは新たな生命の創造……希美がスイッチを押した瞬間、ドライバー中央の装甲が開き溢れ出た光が彼女を包み込み――

〈Capture〉

その光から伸びた閃光が鎖の様に地面に突き刺さり彼女の動きを拘束し――

〈Out of Control〉

しかしその程度で彼女を制御する事など叶わない。

光の鎖は徐々に罅割れ、砕け散ると同時に彼女を包んでいた光も弾けた。

〈Brake the chain〉

束縛から解き放たれた、作り上げられた実験動物が動き出す。

「仮面ライダーヘテロ……さあ、私を満たしなさい」

「撃てえっ!!」

悠然と歩み寄ってくる仮面ライダーヘテロに、スコーパー1号の号令を合図に一斉に銃撃が行われる。ルーナもそれに加わり、ヘテロは四方八方からの銃撃の嵐の中に晒された。

並大抵の相手であればこれだけでただでは済まないだろう状況。ルーナがヘテロの立場に置かれたら、何も出来ず蜂の巣にされて終わりの筈だった。

しかしなんと、ヘテロはその銃撃の中を無人の野を往くが如く歩いたのだ。銃撃の嵐をそよ風のようにしか感じていないとも言いたげな様子だ。

「ば、馬鹿な——!?!」

「嘘——!?!」

「こんなんじや、全然足りないわね」

落胆の声と共に、ヘテロは背中に背負っていた片刃の長剣『テイルバスター』を抜いた。ハンドガード部分に内蔵されたグリップを掴み引き金に指を掛け、切先をS・B・C・T・隊員達の方に向けた。

まるでワニの尻尾の様なその長剣は、よく見ると先端上部に銃口の様な物が見える。

「ッ!?! 伏せろッ!?!」

危険を察知して指示を出しつつ身を屈めるスコープ1号だったが、判断が僅かに遅れた。彼が指示を出すと同時に引き金が引かれ、放たれた銃弾が地面に着弾し爆発。隊員達を次々と吹き飛ばした。

「ぐああああつ!？」

「くそっ!？」

次から次へと放たれる銃弾に吹き飛ばされ、射貫かれる隊員達の姿にスコープ1号は激昂しボルテックスシールドで身を守りながら突撃する。これ以上部下をやらせる訳にはいかない。

炸裂弾を何とか防ぎながらも接近に成功したスコープ1号が、ボルテックスブレードを展開してヘテロに斬りかかる。その瞬間銃撃は止み、物陰に隠れてやり過ぎしていたルーナも彼の援護をすべく飛び出した。

ヘテロに振り下ろされるスコープ1号の刃。それをヘテロは、銃身に当たる刃の部分で受け止めるとストックでもある柄を掴んで振り抜いた。

「ぐっ!？」

「……はあ」

スコープ1号を振り払ったヘテロは、物足りないと言いたげな溜め息と共に構えを解いた。脱力すらししたその様子に、スコープ1号は舐められたものだと構わず刃を振り下

ろす。

しかし彼の攻撃はヘテロの装甲を傷付ける事は無かった。

「何だとツ!？」

「……………もう終わり? ならばはこっちの番よ」

〈TURTL E Burst〉

ヘテロはテイルバスターを左手に持ち替えると、タートルベクターカートリッジを押し込みエネルギーの甲羅を生成する『シエルブレイカー』を発動。生成されたエネルギーの甲羅でスコープ1号を殴り飛ばした。

「ガハアアアアツ!？」

「権藤さんツ!？」

殴り飛ばされたスコープ1号は大きなダメージを負ったのか、変身こそ解除されなかったが動くこともままならない様子だった。

倒れた彼を心配しつつ、ルーナは果敢にも1人ヘテロに挑みかかった。

「この間私1人にデйна共々やられたのに、大した根性ね。それとも馬鹿なの?」

「何とでも言ってください! それでも私は…………私達は、退く訳にはいかないのよツ!？」

銃撃を交えつつ、アームブレードでヘテロを攻撃する。ルーナは人格を瞬時に入れ替え、相手に攻撃を読ませないようにして接近戦と銃撃戦を交互に仕掛けた。

だがどれほど相手に攻撃を読ませない努力をしようと、攻撃がそもそも相手に通用していかないのであれば意味はなかった。

何度目になるか分からないアームブレードでの攻撃。いい加減それを受けるのにも飽きたのか、ヘテロはルーナの腕を掴んでその攻撃を受け止めた。

「なっ!!? くっ、離してよッ!!?」

「……もういいわ。あんたも期待外れだった」

言うなりヘテロはルーナを地面に叩き付け放り投げる。いきなり掴まれた腕を振り回され放り投げられたことで、彼女は腕を痛めてしまう。

「あぐっ!!? ぐう……」

「私を満たすことが出来ないなら………死んで」

〈C R O C O D I L E B u r s t 〉

ヘテロは今度はクロコダイルベクターカートリッジを押し込んだ。すると彼女の両足にエネルギーが集束していき、さながらワニの口の様になる。

「はっ!」

ヘテロはルーナに飛び掛かると、その状態の両足で何とか立ち上がったルーナを挟み込んだ。

「うあっ!!? あ、ぐうッ!!?」

強烈な力で挟まれたルーナが苦悶の声を上げるが、ヘテロの行動はそれだけで終わらずその状態でバク転しルーナを地面に叩き付けた。

「あ——?!」

強烈な力で挟まれながら更に地面に叩き付けられるルーナだったが、悲鳴を上げる間もなく再び持ち上げられ地面に叩き付けられる。

何度も何度も……捕らえた獲物を弱らせる猛獣の様に、ルーナを地面に叩き付けた。抵抗する間もなく振り回されて叩き付けられるルーナは、まるで犬に振り回されるタオルの様だ。

「あぐっ?! がっ?! あっ?! はぐっ?!」

そうして何度も地面に叩き付けられ、解放された時には彼女は見るも無残なほどにボロボロだった。

「あ………う、あ——」

全身ボロボロの状態で何とか立ち上がるようにするルーナ。もう変身解除されてもおかしくないレベルのダメージを受けている筈だ。最早気力だけで変身を維持している。

だがそれもすぐに限界が来て、崩れ落ち変身が解除された。

倒れた亜矢をヘテロが見下ろしていたが、直ぐの興味を失ったのか彼女から視線を外した。

「う……………く……………」

ヘテロが視線を外した瞬間、亜矢がボロボロの体に鞭打って立ち上がった。もう動けない程のダメージを与えた筈の彼女が動き出したことに、ヘテロは若干意外そうに再び彼女を見た。

立ち上がった亜矢は、それでもやはり全身ボロボロで傷や出血が見える。立っているだけでもやつとなのは誰の目にも明らかだ。

にも拘らず、亜矢は足を引き摺ってヘテロに近付くと相手の肩を掴んで拳を叩き付けた。

「……………何のつもり?」

最早攻撃とも呼べないような一撃だ。拳を叩き付けると言っても、その動きは弱々しく頑張ってもペチンと言う音がするのが精一杯。その様子は無謀を通り越して滑稽ですらあった。

それでも亜矢は攻撃を止めようとはしなかった。

「私が……………頑張るんだ……………仁君が、元気になるまで……………!?!」

最早自己暗示の域で自分に言い聞かせながらヘテロを殴る亜矢。余りにも痛々しいその姿に、しかしヘテロは何よりも煩わしきを感じ彼女を突き飛ばした。元より力が入らない足腰に鞭打って立っていた亜矢は、それだけで容易く仰向けに倒れた。

「うあ……………うう……………」

亜矢は再び立ち上がるうとしたが、彼女の意志に反して体は言う事を聞かず立ち上がることが出来ない。結局自分ではこれが限界なのだと思うと、情けなくて亜矢の目に涙が浮かんだ。

「う、うう——!?!」

悔し涙を流す亜矢に、今度こそ興味を失い踵を返すへテロ。その歩みが突然止まった。

「あんた……………」

「……………」

何かに驚いた様子のへテロに、亜矢がどうしたのかとそちらを見た。

するとそこには、険しい顔でへテロと倒れた亜矢を見る仁の姿があった。

第36話：呼び覚まされる力

ふらりとその場にやってきた仁は、険しい顔で傷付き倒れた亜矢を見ていた。

「じ、仁君——？」

体の痛みも忘れて、体を持ち上げやってきた仁の事を見て彼の名を呆然と眩く亜矢。痛々しい彼女の姿と、それを成したヘテロの姿を見て、仁は辛そうに俯くと頭をガリガリと掻き毟った。

「くくくく!? あくくくく……くくつ!?」

何処か苛立った様子でデイナドライバーを取り出した仁は、それを躊躇う事なく腰に装着しBHエレキテルカートリッジを起動状態にして装填しデイナに変身した。

〈BUFFALO + HUMAN Light up〉

「変身ッ！」

〈Open the door〉

仁はデイナに変身すると、エレキテル・ブーストを発動しヘテロに超高速で攻撃を繰り出す。目にも留まらぬ速さでヘテロの周りを動き回り、電撃を伴う攻撃を叩き込んでいく。

攻撃されているヘテロは、為す術も無くサンドバックにされ右へ左へと跳ね回った。傍から見ていて、戦闘はデイナが優勢に進めているように見える。ヘテロはデイナの動きに対応しきれず、幾ら防御力が高くても電撃までは防げない。

彼ならあの強敵にも対抗できるだろうと、亜矢はそう確信を持った。だがその確信は間もなく裏切られる事になる。

充電が終わり、動きが通常速度に戻るデイナ。

攻撃を終え、息を整えヘテロを見る。するとそこには、先程と特に変わらぬ様子で佇んでいるヘテロの姿があった。

首をコキコキと鳴らし、体を解して特にダメージを負った様子を見せない彼女の様子には、デイナも堪らず目を見開いた。

「ッ!? 効いてない?」

「ん? 何? もうお終い? 準備運動に付き合ってたつもりだったけど、まさかあれで全力だった?」

失望したと言いたげな物言いに、デイナが奥歯を噛み締める。今のが準備運動だなんてとんでもない。先程までの攻撃はデイナが、恐竜ベクターカートリッジに頼らないで、出来る最大の攻撃だったのだ。

だがそれがヘテロ相手には全く通用していない。その事実にはデイナは相手の強さを

改めて実感した。

「デイナは思わず苦虫を嘔み潰したような顔になる。

「じゃ……次は私の番」

「ッ！」

来る、そう思い身構えるデイナは次の瞬間、目前に迫ったヘテロの強力な一撃に防御

ごと殴り飛ばされた。

「ぐうっ?!」

「ほらほら」

一方的、そうとしか言い様の無い戦いだった。

ヘテロの拳や脚が振るわれる度、デイナは防御の上から大きなダメージを受け後ろに下がらされる。防御が殆ど意味を成していないのだ。両者の間にはそれだけの能力の開きがある。

「ふんっ！」

「ぐふっ!?!」

ヘテロのパンチが腹に直撃し、痛みと吐き気にデイナが前のめりに倒れそうになる。だが彼が倒れる事をヘテロは許さなかった。デイナの角を掴んで無理矢理立たせ、持ち上げたデイナの顔に自身の顔を近付けた。

「何やってんのよ……早く本気出しなさいよ」

「な……にを……」

「恐竜ベクターカートリッジ……あるんでしょ？ この間私を思いつきりズタズタにしてくれたアレ。もう一度使いなさいよ」

「あ、あれは——!?!」

ここで漸くデイナは、あの時自宅に突撃してきたデイノニクスファツジは希美であったという事を知った。

そうなのであれば、余計に恐竜ベクターカートリッジを使う訳にはいかない。あれの制御法はまだ確立していないのだ。今使えば再び暴走してしまう。そうなったら、希美だけでなく近くに居る亜矢達すら殺めてしまう危険があった。

「あれは……まだ……」

だからデイナは躊躇した。今最も危ないのは自分であるというのに、周りを傷付けてしまうかもしれないという理由で力に手を出す事を躊躇っていたのだ。

その様子を見て、ヘテロは大きく溜め息を吐き掴んでいる角から手を離れた。突然解放され、デイナはその場に崩れ落ちた。

「……意気地なし。もういいわ」

ヘテロは踵を返しデイナから離れて行く。彼女が向かった先には……未だ倒れてい

る亜矢の姿があった。

デイナは顔から血の気が引いた。

「ま、待て——！ そっちは……………」

「あんたが悪いのよ。弱いあんたがね」

「亜矢さん、逃げて——!?!」

デイナの警告に亜矢も立ち上がり逃げようとするが、体に力が入らないのか立つ事すら儘ならない様子。彼女が逃げる時間を稼ごうと、デイナが悲鳴を上げる体に鞭打って立ち上がりヘテロに後ろから抱き着き歩みを止めようとするが、直ぐに振り払われ逆に叩きのめされる。

このままでは亜矢がヘテロに殺されてしまう。この事態に、デイナは遂に禁断の力に再び手を出した。

「くっ——!!」

〈QUETZALCOATLUS〉

〈SPINOSAURUS〉

躊躇いながらも、ドライバーに二つのベクターカートリッジを装填した。

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「ゲノム…………チェンジ！」

〈Open the door〉

覚悟を決め、デイナは現時点で最強の力であるケツアルスピノフォームへと姿を変えた。

フォームチェンジした瞬間、彼は意識に霞が掛かるのを感じた。このままでは再び暴走してしまう。

そうなる前に勝負を掛けようと、デイナはまだ意識が残っている内にヘテロに自分の意志で攻撃を仕掛けた。

「ああああッ！」

「ん？」

背後から殴り掛かってきたケツアルスピノフォームのデイナにヘテロが振り返る。彼女が振り返ると同時に、デイナの強力なパンチが彼女の顔面を殴り飛ばす。

「ッ！」

「ふん！ はあ！ あああ！」

一瞬でも気を抜けば意識が途切れてしまいそうになる、まるで酩酊したような状態で戦うデイナ。普段以上に声を上げているのは、そうやって気合を入れていかないと直ぐに意識を手放してしまいそうだからだ。

強化されたデイナの攻撃を、ヘテロは一方的に受けているだけで反撃しない。一見す

るとデイナの激しい攻撃に今度は彼女の方が手も足も出ていないように見える。

だがそれは間違いだ。ヘテロはデイナの攻撃を敢えて受けているのだ。彼の能力を測る為に――

「……はあ」

ヘテロの口から溜め息一つ。それはもう十分デイナの能力を計り切ったと彼女が判断した合図。これで彼女は確信した。今のデイナは全てにおいてヘテロを下回っている。

徐にヘテロが手を上げると、デイナの拳を片手で受け止めてしまった。

「ッ!？」

「そんなッ!？」

受け止められて動揺したのはデイナだけでなく、彼らの戦いを見ていた亜矢もだった。今の今まで一方的だったと思っていたのに、突然ヘテロがデイナの拳を片手で受け止め、それだけに留まらず逆に押し返し始めたのだ。

「ちよつとは期待したんだけど……もういいわ」

次の瞬間ヘテロの拳がデイナの鼻っ柱に炸裂する。いきなり顔面を殴られ後退るデイナに、ヘテロのさらなる追撃が襲い掛かる。下から突き上げるような腹へのパンチに、腰を砕くのではと言う程の回し蹴り。吹き飛びそうになったデイナを掴むと、振り

回して地面に叩き付け、衝撃で浮いたデイナを肘鉄で再び地面に叩き付けた。

あまりにも一方的。しかも先程デイナがヘテロを一方的に攻撃していた時と違い、デイナには余裕がない。一撃を食らうごとに意識が飛びそうになり、だがその痛みが逆に彼の意識をはつきりとさせ皮肉にも暴走を防いでくれていた。

これこそはと期待を込めたケツアルスピノフォームが全く歯が立たない状況に、亜矢は言う事を利かぬ体で必死に立ち上がりデイナに近付こうとした。このままでは彼が死んでしまう。

「ま、待って……それ、以上は——!?!」

亜矢の声も空しく、ヘテロにより散々叩きのめされたデイナはボロ雑巾の様になってしまった。その状態でも辛うじて立ち続けているのは、仁の意志の力かそれともベクターカートリッジに内包された恐竜の遺伝子が為せる業か。

「じゃ……そろそろ死のつか?」

〈HORSESHOE × TURTLE × CROCODILE Mixing
Burst〉

中央のスイッチ、タートルベクターカートリッジ、そしてクロコダイルベクターカートリッジを順番に押し、ヘテロが構えを取る。

ボロボロのデイナはそれを見て大技が来ることを察し、しかしダメージにより言う事

を聞かない体では回避は難しいと判断し防衛の構えを取った。正直、焼け石に水な気がしなくもないが何もしないよりはマシだ。

「はあああああッ!!」

放たれたヘテロの最大の必殺技、その名も『インクリュード・シュート』。両足に多量に産生したATPからなるエネルギーを集束させ、相手に何度も蹴りを叩き込む必殺技だ。連続で放たれる蹴りが、怪物が獲物を徹底的に喰らう様に何度もデイナに食らい付く。

「ぐうつ?! う、ぐ、がああああああああつ?!」

強烈な蹴りを何度も喰らい、デイナは叫び声を上げながら蹴り飛ばされ壁に叩き付けられた。そこでガスか何かが漏れていたのか、デイナが叩き付けられた瞬間何かに引火し爆発。デイナは炎に包まれ、衝撃で今度は地面に叩き付けられるとそこで漸く変身が解除された。

「う……うぐ、が………」

意識も殆どないのか、仁は呻き声を上げるだけで立ち上がりとはしない。ヘテロはそんな彼に、テイルバスターを手に近付いていく。トドメを刺そうと言うのだろう。切先を地面に引き摺り地面に傷をつけながら近付き、肩に担ぐと峰の部分で肩を叩いた。

そして遂にヘテロが仁の目の前に立つ。数回テイルバスターの峰で肩を叩くと、逆手

に持ち仁の背中に突き立てようとする。

そこに亜矢が乱入した。彼女は今にも仁に刃を突き立てようとするヘテロに抱き着き、止めさせようとした。

「止めて、ください!?! 仁君は、仁君は——!?!」

必死に止めようとするが、彼女自身満身創痍。ヘテロが軽く腕を振っただけで振り払われてしまった。

しかしそれで諦める彼女ではなく、振り払われて倒れたまま地面を這うと仁の上に覆いかぶさりヘテロを見上げて懇願した。

「お願いします、仁君を殺すのだけは止めてください! その代わり、私はどうなっても良いですから!」

「亜矢、さん……だめ……」

辛うじて意識を取り戻した仁が、亜矢の身を挺した行動を止めさせようとするが彼女は聞く耳を持たない。

それはヘテロも同様だった。彼女にとって亜矢が仁と一緒に死のうがどうしようが関係ない事なのだ。

「くっだらな………一緒に死にたいってんなら纏めて面倒見てあげるわよ」

ヘテロは2人纏めて串刺しにしようと言うのか、テイルバスターを逆手に持った手を

高く掲げた。あれで一思いに突き刺すつもりなのだろう。

亜矢は光を反射する刃を見て、目を固く瞑り仁にしがみ付いた。せめて最期の瞬間は絶対に離れないようにしようと――

だが結果的に言えば仁と亜矢は死ぬことはなかった。漸く復帰したスコープ1号が銃撃しながらヘテロにタツクルし、彼女を無理やりその場から退かしたのだ。

「俺を忘れるなああッ!!」

「ッ!? チツ……」

横合いからいきなりタツクルされ、バランスを崩し数歩2人から離れるヘテロ。あと一步と言うところで仁にトドメを刺しそびれた事に彼女は思わず舌打ちをした。

「死に損ないが……」

忌々し気に呟くヘテロに対し、スコープ1号は倒れた2人の傍に近寄り助け起こす。

「ここは一旦逃げるが勝ちだ」

〈FLASH BULLET set up〉

「撤退だ!」

周囲に指示を出しながら彼がヘテロの足元に銃口を向け引き金を引くと、放たれた閃光団が凄まじい光を放ち彼女の視界を一時的に奪う。

ヘテロが目を眩ませている間に、スコープ1号は隊員と協力し仁と亜矢を連れてその

場を離れて行く。

「くっ……………んん？」

漸く視界が戻った時、ヘテロが周囲を見渡すとそこには仁と亜矢は勿論、S. B. C. T. の隊員すら1人も居なかった。物の見事に逃げられてしまった。

「……………はあ……………」

街中に1人取り残されたヘテロは、大きく溜め息を吐くとベクターカートリッジを抜き変身を解除した。元の姿に戻った希美は、暫し胡乱な目で周囲を見渡した。

その時唐突に彼女の腹から空腹を報せる音が鳴る。

「……………帰ろ」

踵を返してその場を後にする希美。その顔は微塵も満たされていなかった。

S. B. C. T. の手によりヘテロから逃げる事に成功した仁と亜矢の2人は、警察病院へと搬送されていた。他の負傷した隊員達も一緒だ。

その病院のロビーでは、宗吾が顔に絆創膏を貼って椅子に座り誰かを待っていた。程なくして彼の待ち人は現れた。白上教授だ。宗吾の連絡を受けて、彼もすつ飛んできたのだ。

「どうも」

「遅れてすみません。それで、2人の容態は？」

「怪我自体は大した事ない。ウチの連中の方が重傷な位だ。ただ体力の消耗が激しかったのか、未だベッドの上で寝ている」

病室に向かう道すがら、2人は簡単に情報を交換し合う。直近で白上教授が知りたかったのは仁と亜矢の容態だが、2人は打撲や擦り傷などが多数あるが骨を折ったりなどの怪我は負っていない。ライダーシステムが2人の身体を最低限守ってくれたようだ。

その事に白上教授は一先ず安堵した。

話している間に2人が寝かされている病室に到着した。間を置いて並べられたベッドの上には、仁と亜矢がそれぞれ寝かされ目を瞑っている。

「う……」

と、そこで亜矢が先に目を覚ました。ヘテロの『バイトクラッシュ』を喰らった彼女だが、重症は何とか避けられたが故にこうして目を覚ます事が出来た。

「双星君！ 大丈夫かね？」

「きよ、教授？ ここは……病院………ッ!? そうだ、仁君は!」

目覚めて直ぐの間はぼうつとしていた亜矢だが、状況を理解すると即座に飛び起きた。明らかに喰らうとやばい攻撃を仁が諸に受けてしまったのだ。どう言う状況なのか知りたくて仕方がない。

【亜矢落ち着いて。隣に居るみたいよ】

慌てる亜矢に対し、真矢は視界の端に一瞬映った仁の姿を報せた。

「仁君。………良かった、傷は大した事なさそうね。本当に……良かった」

亜矢と真矢は仁が穏やかな寝息を立てている様子に、安堵の溜め息を吐く。

彼女が落ち着いたのを見て、白上教授は改めて彼女にヘテロの事を訊ねた。現れた強敵、今とはかく情報が欲しい。

「双星君、早速で悪いんだが……君達が戦った傘木社の仮面ライダーについて教えてくれ」

「ええ……と言つても、私達は仁君ほど頭が良い訳じゃ無いからあんまり良い情報を期待しないでほしいんだけど……」

真矢がそう前置き、亜矢が答えた。仁の頭の回転速度に比べれば、彼女達の思考は鈍いと言わざるを得ない。しかしそんな彼女にも確実に断言できる情報があった。

「あの仮面ライダー、多分ですけどベクターカートリッジを三本使ってます」

「三本？」

「はい。あの仮面ライダー、必殺技を4つ使いましたけど最後に仁君に使った奴を除いてどれも押す部分が違いました。ね、真矢？……………そう。最初の技だけ和訳が分からなかったけれど、カメとワニともう一つ何かの遺伝子を使ってるのは確かね」

「——カブトガニだよ」

突然仁が口を開いた。全員が一斉に彼を見ると、仁がゆっくりと目を開けた。

「仁君！」

「大丈夫なのか？」

「ん……………まあね」

亜矢達に心配されながら仁はゆっくり体を起き上がらせる。亜矢がそれを手助けし、背中に手を回して彼を気遣った。

起き上がった仁に、白上教授は詳しい話を聞いた。

「カブトガニ？」

「聞こえた音声の1つがHORSESHOEだった。これは多分horse shoe crab……………カブトガニを意味してるんだと思う」

「なるほど……………だが何でカブトガニなんだ？ 連中は恐竜ベクターカートリッジを手

入れたって言うのに、今更カプトガニなんて……」

宗吾の疑問は垂矢も抱いていた。聞こえた限りではヘテロに使われた遺伝子はカプトガニ・カメ・ワニの3つだが、どれも現代の生物だ。そもそも3つ目のベクターカートリッジは何処にあったのかなど、分からない事は多いが遺伝子のチョイスが最大の謎だった。

その謎の答えに、仁も白上教授も気付いていた。

「いや……その3つも立派な古生物のDNAだ」

「え？」

「どれも現代の生き物だろ？」

「いや。カプトガニ・カメ・ワニ……この3つはどれも恐竜が生きてた時代から存在し続けている。生きた化石と言っても過言じゃない」

正確には、生きた化石と言われるのはカプトガニだけではある。だがワニとカメも、サイズこそ違えどK—Pg境界——恐竜が絶滅した中生代と新生代の境目を示す地質学用語——以前からその化石が発見されている。例えば太古の巨大ウミガメ・アーケロンなどは、大きさが違うだけで姿形は現代のウミガメと全く変わっていない。

「現代まで姿を維持し続けている生物……進化に頼らず生存し続けた遺伝子だ。傘木社はそこに目を付けて、古生物の遺伝子を使ってこの3つの生物の遺伝子の秘められた強さ

を引き出したんだよ。そりゃ強くて当たり前だ。だってこの3つは、絶滅に負けない遺伝子なんだから」

仁の考察に白上教授も頷いた。

亜矢と宗吾は思わず息を呑んだ。現代の生物に古生物の強さを蘇らせ、更にそれを2つどころか3つも使っているのだから。そんな奴にどうやって勝てばいいというのか。そこまで話したところで、仁がベッドから出た。靴を履き、まだ少しふらつく体で病室から出ようとするのを亜矢が慌てて引き留める。

「ちよ、仁君!? まだ動くのは無茶です、今はゆっくり休まないと!」

「いいんだ……俺は、いいから……」

「何がいいんですか!?!」

「門守君、今は休め!」

「門守君!」

亜矢に続き白上教授と宗吾が彼を引き留めようとして、彼はそれを振り払い病室から出ようとする。

そうすると騒ぎを聞きつけ、医師や看護師も彼を引き留めようと押さえつけに掛かった。

「止める、ダメだ——!?! は、離れる——!?!」

それに対し仁は必死に抵抗する。それが彼らを煩わしく思っているのではなく、心の底から心配して警告しているのだという事に垂矢は気付いた。

咄嗟に仁から垂矢が離れると、それを合図にしたかのように仁の目が豹変した。目の奥に狂暴な光が灯るのを彼女は見逃さない。

「ッ!?! ダメ、仁君——!!」

仁を止めねばと彼に駆け寄ろうとする垂矢だったが、それより早くに仁が自分を取り押さえようとする医師に襲い掛かった。

「あああああッ!!」

不運にも仁のすぐ目の前に居た医師が最初の標的となった。仁は獣の様な声を上げ医師に襲い掛かると、馬乗りになって医師を殴り始めた。

「ちよ、ま!?! が!?! や、止めッ!」

「門守君、止めろ!」

「何してるんだ!?!」

仁の暴挙に、白上教授と宗吾他周りの者達が必死に止めようとする。だが彼は止まらない。例え腕を誰かに掴まれていようとも構わず目の前の医師への攻撃を止める事は無かった。

あっという間に医師の顔が血だらけの無残な見た目になっていく。

そして遂に医師が意識を手放し抵抗が無くなったのを見ると、彼は次の標的に宗吾を選んだ。

「がああああっ!？」

「くそっ!」

宗吾は自分に矛先が向いたのを見て、咄嗟に仁の両手を掴んで押え付けた。ここは流石に警察官と言ったところだろう。他人を鎮圧する術はお手の物だ。宗吾の行動により仁は動きを止められる。

そこで亜矢が動いた。彼女は相互により両手を抑えられて、身動きを封じられた仁の背後から抱き着いた。

「止めてください、仁君!」

「ッ! ぐ、あ……!」

背後から亜矢に抱きしめられ、涙ながらに引き留められた瞬間仁の動きが鈍った。相互に襲い掛かろうとしていた腕の力が緩む。

「今だ!」

仁の力が緩んだ瞬間、宗吾は彼の両手から手を離すと無防備な腹に一発、重い拳を叩き込んだ。決して大きなダメージにはならない程度に、しかし相手から抵抗する力を奪う絶妙な力加減で拳が放たれる。

「ぐふっ!? あ——」

腹に叩き込まれた一撃に、仁の足から力が抜ける。腹を抑えてその場に蹲る仁を、亜矢が心配して背中を擦りながら彼の顔を覗き込む。

「仁君、仁君? 大丈夫ですか?」

「待つんだ双星さん、今はまだ危ない!」

「ッ、ちよつと放してよ!」

まだ仁が暴走しないとも限らないので、仁に近づく亜矢を宗吾と白上教授が慌てて引き剥がす。自分の身よりも仁の方が気になる真矢は、そんな2人に抵抗して仁に近付こうとする。

「う、ぐ……はあ、はあ……あ——」

真矢が抵抗している間に、仁が意識を取り戻した。暴れる真矢を見る仁の目には、先程あつた狂暴な光は無い。

それに気付いた真矢は安堵に頬を綻ばせるが、当の仁はそれどころではない様子だった。彼は倒れた医師の様子と自分の手に付着した血、そして何より周囲から向けられる視線に自分が何をしたのかに気付いてしまった。

「う、あ……あ、ああ——!」

混乱と恐怖に顔を歪め、完全に言う事を聞かない脚を動かしてその場を逃げるように

去る仁。彼の様子を離れて見ていた看護師らが近付く仁から悲鳴を上げて距離を取る様を見て、亜矢が彼の後を追う。

「待って！ 仁君待ってください!?!」

背後からの亜矢の声を無視して、仁は病院から逃げ出した。亜矢が必死に後から追いかけるが、彼女自身も万全ではないので距離が徐々に離されていく。

そうして彼女が仁の後を追って病院から出た時、そこに彼の姿は影も形も無かった。

「はあ、はあ……仁、君………」

届かなかった手、追いつけなかつた背中に、亜矢はその場で佇み一人項垂れるのだった。

第37話：鍵が開く時

仁が逃げてしまった後、亜矢は一人悔いるように顔を俯かせていた。またしても仁が苦しんでいる時に、何もしてやる事が出来なかつた。その事が悔しい。

だが今度は悔いる時間は短かつた。何を隠そう、今一番辛く苦しいのは他ならぬ仁自身なのである。自分で自分が制御出来ず、望まぬ暴力を振るい他人を傷つける事に彼は心を痛めているのだ。

こんな所で悔やんではいられない。今必要なのは行動だ。

「(どうすれば良いと思う?)」

「とにかく仁君を追いかけたいところだけど、その前にまずはあの教授に話を聞く必要があるわね。きっと今の仁君の状態に心当たりがある筈」

「(だね)」

亜矢は踵を返すと、先程の病室の所まで戻つた。案の定白上教授はまだそこに居る。

「教授!」

「双星君か、門守君は?」

「いえ、逃げられちゃいました。さっきのお医者さんは?」

見渡せば先程仁に襲い掛かれた医師の姿は見当たらない。

「彼なら治療の為担架に乗せて運ばれたよ。心配しなくていい」

「そうですか。ところで教授、先程の仁君の様子について何か分かりませんか？」

十中八九原因は恐竜ベクターカートリッジにあるのだろう。それくらいは分かる。原因がベクターカートリッジにあるのなら、その専門家である白上教授なら何かの対処法を知っている筈だ。

「ふむ……門守君があのような様になるのは、恐竜ベクターカートリッジを使う様になってからだったね？」

「はい」

「となると、やはり強すぎる遺伝子に精神が影響を受けているとみて間違いは無いだろう。直挿ししたファッジと同じ状態だ」

「何とかならないんですか？」

「今必要なのは対処法なのだが、それを訊ねられると白上教授は難しい顔をして頭を抱えた。」

「……すまない、こればかりは私にも気の持ちようと言う以外にない」

「気の持ちよう、ですか？」

「本来、ベクターカートリッジの悪影響は直挿しした状態で起こるのが普通なんだ。ま

さかドライバーを介しても尚起こった上に、変身していなくても影響が残るだなんて想定外だ」

「——これはもしや……………だとすると彼は——」

「教授?」

突然亜矢にも聞こえないくらいの小声でブツブツ呟いた白上教授に、亜矢が首を傾げていると彼はハツとしたように顔を上げた。

「あ、いやいや。何でもないよ。とにかく一度影響が出てしまった以上、対処するには門守君自身の心の強さに期待するしかない」

身も蓋もない言い方だが、ある意味間違いいではないと亜矢の中で真矢は思っていた。今の仁は普段に比べて覇気が無い。予想外の事態とショックな出来事の連続でナーバスになっているのだろう。これでは全力が発揮できなくて当然だ。

「……………分かりました。それじゃあ私、行ってきます!」

「あ、待ちたまえ!」

引き留める白上教授の言葉を無視して、亜矢は仁を探す為に病院を出た。

【それで、仁君が何処に居るか分かるの?】

「今の仁君は、自分を見失つて誰かを傷付ける事を恐れてる筈。となれば……」

【行きそうな場所は、一つしかないよね】

そう、今の仁が向かいそうな場所は一つしか考えられなかった。

誰とも触れ合わず、もし自分を見失つても誰も傷付ける危険の無い場所。

それは――

病院を出た後、仁は何処をどう移動したのか覚えていないが自宅へと戻ってきていた。戻った彼は扉に鍵をかけ、自宅の奥で一人膝を抱えて床の上に座り込んでいた。

これなら誰も傷付ける事は無い。例え理性を失つて暴れようが、部屋の中が散らかるだけで済む。誰にも迷惑は掛からない。

だがその一方で、今彼は無性に人との触れ合いを欲していた。心細くて、誰かに触れ

合い、甘えたい。

「亜矢さん……真矢さん……」

頭に思い浮かぶのは最愛の女性。仁の心は彼女を求めていた。彼女と触れ合い、温もりを感じたい。

しかしそれは駄目だ。今の仁は何時爆発するか分からない爆弾の様なもの。何時また暴走して、亜矢を傷付けるか分からない。

本能を理性で抑える事が出来ないのがこれほど恐ろしい事だとはと、仁は己に恐れを抱きながら1人部屋の中で静かに塞ぎ込んでいた。

テレビも電気も点けず、無為に時間を過ごす。日は段々と傾き、影が濃くなり窓からは夕日の赤い光が差し込んでくる。

その時、部屋のインターホンを誰かが押した。ピンポンと言う音が部屋中に響き渡り、仁の肩がビクリと震える。

「ッ!？」

肩を振るわせた仁だが、それ以上の反応は見せなかった。誰が来たとしても、鍵を掛けたこの部屋に入る事など出来はしない。

ところがここで思わぬ展開になった。数回ほどインターホンが鳴らされ、仁がそれらを全て無視していると突然鍵がガチャリと音を立てて開いたのだ。まさかと思わず顔

を上げると、玄関に続く廊下から亜矢が顔を出した。

「ああ、やつぱり。仁君つてば部屋に居ましたね」

「亜矢、さん？ 何で……」

「何でつて、仁君私にだけは合鍵を渡してくれてた事を忘れたんですか？」

仁はすっかり失念していた。この部屋に越す際、仁と亜矢は互いの部屋の合鍵を相手に渡していたのだ。

迂闊だった。こんな事なら人気の無い山奥にでも行くのだったと後悔しつつ、仁は部屋に入ってきた亜矢を拒絶した。

「帰って……出て行ってくれ!」

「仁君……」

「もう分かっているだろ。俺、何時暴れ出すか自分でも分からないんだ。医者だって俺、別に殴りたかった訳じゃないんだ。でも、自分を抑える事が出来なくて、気付いたらあんな事を……」

あの時は止めてくれる人が居たから良かった。だが今同じ事が起きた場合、亜矢が傷付く事を防いでくれる人が居ない。もしここで本能の赴くままに亜矢に襲い掛かってしまったら、彼女がどうなってしまうか想像もつかなかった。

もしかするとただ暴力を振るうだけでなく、彼女を女性としても徹底的に蹂躪してし

まうかもしれない。そんなのは嫌だった。

しかしそれに対する、亜矢の答えは否だった。

「いいえ、ここに居ます。もう、仁君から離れません」

「何で……………何で分かってくれないんだ!？」

仁は普段見せない怒りに歪んだ顔で亜矢の両肩を掴むと、彼女を壁に押し付けた。掴まれた肩と背中を壁に叩き付けられ、亜矢の顔が痛みに歪む。

「ッ!？」

「分かってくれよ……………お願いだから!？」 俺、亜矢さんだけは絶対に傷つけないんだ!？」 それくらい、大切なんだよ……………だから——!？」

薄暗い部屋の中で、夕日の逆光を受けながら亜矢は確かに見た。仁の目から零れ落ちる涙を。震える声と頬を伝う涙、それは仁の心を何よりも雄弁に物語っていた。

亜矢はそつと仁の頬に手を当て、涙を優しく拭った。

「嫌です……………絶対に、嫌です」

そう告げる亜矢の目には強い決意の光があった。それこそ仁が思わず怯むほどに。

気迫に圧され亜矢の両肩を掴む仁の手の力が緩む。それを好機と見て、亜矢がするりと仁の手をすり抜け彼に身を寄せる。

「大丈夫です。私は絶対に、仁君を怖がったり拒絶したりしません。だから安心してく

ださい」

優しい声で亜矢がそう告げると、仁がよろよろと後ろに下がりはベッドに座り込む。そのまま項垂れる仁に亜矢が近付くと、彼からすすり泣く声が聞こえてきた。

「何で……何でだよ。何で……離れなきやつて分かつてるのに、亜矢さんが近くに居るとこんなに安心しちゃうんだよ——!!」

頭では彼女に近付くべきではないと思つてゐるのに、心は彼女から離れたくないと言つてゐる。彼女が傍に居る事で、心は驚くほど鎮まつていた。

矛盾する自分の心に、仁は涙を流さずにはいられなかつた。

「怖いんだよ……俺、亜矢さんを傷付けるんじゃないかつて。亜矢さんを泣かせたくないから、亜矢さんから離れたいのに……それなのに、何で——!?!」

顔を右手で覆い、嗚咽を漏らす。初めて見る弱々しい仁の姿に、亜矢は彼の隣に腰掛けると優しく寄り添つた。

「そんなに自分を追い込まないでください。辛い時は、甘えてください。仁君にはその権利があります」

「止めて、くれ……俺、何時亜矢さんに襲い掛かるか分からないんだ……」

「仁君はそんな事しません」

「何で——?」

仁には分からなかった。亜矢は何故ここまで自分を信じてくれるのか。

「信じてますから……仁君の事。私達、仁君が思ってるより仁君が強い事を知ってます」
最初にスパイダーファツジと遭遇した時、彼は亜矢を庇って瀕死の重傷を負った。頭
の回転が速い彼なら、身代わりになれば自分がただでは済まない事など分かった筈な
のだ。

それだけではない。彼は自分には全く関係ない事の筈なのに、戦いに身を置く事を直
ぐに決断した。命の危険が伴う、本来であれば関わるべきではない仮面ライダーとして
の戦いに対し逡巡せずに戦う事を決めたのだ。普通であれば少しの時間を必要とする
筈である。

勿論そこには彼なりの譲れない信念があつての事。だがそれを差し引いても、彼は
ちよつとやさつとの事では挫けない強さを持つていると亜矢は確信していた。

亜矢がウルフファツジに連れ去られた時、仁は諦めず亜矢の元へと辿り着く手掛りを
見つけ出して危うい所を助けてくれた。

峰の兄・健がキメラファツジにされた時、仁は一步間違えれば健が死んでしまうとい
う状況の中、自身の知恵と決断力で最高の結果をもぎ取つてみせた。

多分探せばもつとある。それこそ戦い始める前からだ。そんな仁が弱いだなんて事
は絶対に無いと亜矢も真矢も確信していた。

「でも、俺……………」

それでもまだ自分を恐れる仁。頭が回ってしまふから、最悪の結果を考えずにはいられないのだ。その最悪の結果の回避方法が確立していないから。

自分を恐れる彼を、亜矢がそつと抱き締めた。

「大丈夫です。怖がらないで」

「仁君は絶対、私達を傷付けるような事はしないわ。自信を持って」

「それでも不安なら、その不安……私達が全部受け止めます」

「一人で全部抱え込まないで。私達2人が仁君を支えるから」

日が傾き、夕日だけが光源となつた薄暗い部屋で亜矢と真矢の声が仁の耳元に響く。

彼が恐る恐る声のする方を見れば、そこには母性と慈愛に満ちた笑みで彼を見つめる亜矢の顔があつた。

同時に、彼の鼻腔を亜矢の匂いが擦る。彼女の——女の匂いが仁の男としての本能を刺激した。ただでさえ人肌を欲していた状況で、最愛の女性にこんな事を言われて抱き着かれては、性を意識するななど無理な話だ。

しかし仁は自分を抑えた。何度も言うが今の彼は理性による歯止めが利き辛い。もしここで亜矢に襲い掛かつて、本能の赴くままに彼女を蹂躪してしまつたら……………。

そう思うと、彼は恐ろしくて仕方なかつた。

「亜矢さん……真矢さん……」

仁はやりわりと彼女を押し返した。彼女を守る為の拒絶、彼女を狂暴な本能の暴虐から守る為の行動。

しかし亜矢と真矢の想いは、そんな彼が作り上げた壁を突き破つて彼を包み込んだ。

「安心して、全部吐き出してください。不安も何もかも、全部」

「私と亜矢で全部受け止めるから。私達が仁君を支えてみせるわ、絶対」

そう言つて亜矢は仁の頬に優しく手を置き、唇にそつとキスをした。それは言葉だけでなく、行動による全てを受け入れるという合図。仁になら好きにされても良いという、亜矢と真矢の覚悟の表れ。

彼女の温もりを何よりも求めていた仁に、それ以上耐える事は不可能だった。そのまま溢れる想いに任せて、仁は彼女を押し倒した。

「ん……………」

窓から差し込む朝日に、仁が目を覚ました。重い瞼を擦り、軽く身動きする。

「んう……」

不意に隣から小さく声が上がった。そちらを見れば、穏やかな顔で寝息を立てている亜矢が居る。

それだけなら2人も今まで何度か経験してきた事だが、今までと違う事が一つある。

今、2人は揃って一糸纏わぬ姿で一つのベッドの上に居るのだ。男女が裸で一つの寝具の中に居る。それが意味している事は一つしかない。

よく見ればベッドの一点には赤い染みが付着しているし、何だつたら全体的にまだ湿っている。更に言えば2人の身体には所々に虫刺されの様な赤い斑点が主に首や胸周りについていた。

仁は亜矢を起こさないように気を付けながら、隣で眠る彼女の頬を優しく撫でる。たったそれだけのことで、彼女への愛しさで胸が一杯になる。たった一日前に、胸を覆いつくしていた陰鬱とした気持ちが無処かへと行ってしまっていた。

「ん、んん……」

と、仁に撫でられてかそれとも朝日が眩しくてか、亜矢も目を覚ました。薄らと目を開け、ぼんやりとした目が仁の事を見る。

「んん？ あ、仁くん……」

「おはよう、 亜矢さん。 真矢さんも」

「ん、 お早う仁君……あ——」

甘えるように仁に抱き着いた真矢だったが、ここで彼女も自分が一糸纏わぬ全裸である事を思い出した。そして思い出してしまうと、それに付随して昨夜の熱い一夜の記憶が鮮明に蘇る。

「~~~~~!!」

恥ずかしさのあまり、 亜矢が真矢から主導権を奪い彼に背を向けた。 思い出すと恥ずかしいのか、 その顔は真っ赤だ。

そんな彼女がまた愛おしくて、 仁は後ろから彼女をそつと抱き締めた。

「ありがとう……2人共」

感謝の言葉を告げる仁。 そこには先日までの、 自分を恐れている様子がない。 その事に亜矢は気恥ずかしさも忘れて嬉しくなる。

「……………は、い」

仁の腕の中で亜矢は振り返り、そして仁の顔を正面から見た。

互いに穏やかな笑みを浮かべて互いに見つめ合う2人だったが、どちらからともなく顔を近づけそのまま優しく相手にキスをした。

「実はずっと考えてたんだ……」

「え？」

その後身支度を整え、簡単に朝食をとっていた時に仁が唐突に呟いた。

「考えてたって、何を？」

「恐竜ベクターカートリッジの制御法。今までずっと考えてたんだけどさ」

食べ終えた食器を片付け、コップに牛乳を注ぎ一気に飲み干す。そして一息つくくと、考えを口にした。

「恐竜ベクターカートリッジ……俺は制御できなかつたけど、傘木社の連中は直挿しで制御できてたんだ。覚えてる？」

そう言えば、と亜矢は以前4体の恐竜ファッジとの戦いの事を思い出した。あの時、あのファッジ達は仁が暴走すると慄き自分から変異を解いて降参の意を示していた。それはつまり、彼らは恐竜ベクターカートリッジを制御できていたという事に他ならぬ。

「でもどうして……」

「多分、あいつらは肉体改造を施してるんだと思う。薬学的に遺伝子を後天的に改造して……」

自分で言つて胸糞悪くなったのか、仁の眉間に皺が寄つた。

亜矢は彼の気持ちを察し、それ以上その事を考えないようにと先を促した。

「つまり、遺伝子が恐竜ベクターカートリッジに負けるから暴走してしまう、と？」

「そう言う事だと思う。直挿しとドライバーじゃあドライバーの方が制御しやすい筈なのに、俺の方が制御できてないって事はそう言う事だと思う」

そこまで聞いて亜矢は仁が、自分の肉体に改造処置を施そうとしているのではと危惧した。

「仁くん、まさか——?!」

「いや、改造まではしないよ。でも今のままじゃいけないんだと思う」

「それじゃあ、どうするんです？」

改造するのではないとなると、仁は一体何を考えているのか？

「……一つだけ、可能性がある。改造に頼らず、遺伝子のレベルを上げられる可能性が」

仁は亜矢に考えを述べた。それはお世辞にも危険過ぎる、賭けとも言えぬ考え。それには流石に亜矢も声を上げずにはいられなかった。

「それは——!」

「ん、分かつてる。凄く危ない事だつてのは。でも……こういう言い方はしたくないけど……亜矢さん達が傍に居てくれたら、何とかなるかもしれない」

真剣な表情で仁が亜矢の事を見る。真つ直ぐな視線には、彼女も言葉を飲み込んでしまふ。

「無理強いは……しないよ。亜矢さん達も危ないから。嫌なら付き合ってくれなくても構わない。でも、出来る事なら——」

それ以上仁は何かを言う事は出来なかつた。何故なら彼の口に亜矢が人差し指を当てるから。

仕方のない人とも言いたげな、薄い笑みを浮かべながら亜矢が彼の事を見ていた。

「嫌だなんて、言う訳ないじゃないですか。……私達、もう絶対仁君から離れないつて誓つたんだから。そりゃちよつと驚いたけど、でも……私達の事、頼ってくれて素直に嬉しいです」

「亜矢さん……真矢さん……」

「言われなくても、付き合いますよ。……例え火の中の水の中、ね」

「……ありがとう」

自分はこれ以上ない幸せ者だと、仁は改めて思った。自分が辛い状況の時でも、折れないように支えてくれる最愛の人が居る。

不意に2人の目が合った。互いを見る熱の籠つた目。その目に引き寄せられるように2人は顔を近づけて——

唐突に仁の携帯から着信音が鳴った。決して五月蠅くはない筈の着信音は、この時ばかりは煩わしく仁も思わず顔を顰めた。

「……………良い所だったのに、もしもし?」

ぼそりと仁が呟くと、それを聞いて亜矢が思わず笑みを浮かべる。

亜矢が笑った事に気付かず、仁が携帯に出ると通話の相手は峰だった。携帯の向こうの彼女は何処か慌てた様子だ。

『ああ良かった門守君! やつと出てくれましたね!』

「すみません。それで、何が?」

『白上教授と一緒にS. B. C. T. と傘木社に対する対策を練ろうとしていたんですけど、移動の途中で2人が言っていた仮面ライダーに襲撃されて……………権藤さん達が助けに来てくれたんですけど、状況は最悪です!』

「すぐ行きます。場所は?」

峰から今居る場所を聞き出した仁は通話を切ると、引き締まった顔で亜矢を見た。それだけで彼女も全てを察し、こちらにも引き締まった表情で彼に頷いた。

「行こう、亜矢さん真矢さん」

「はい!」

2人はすぐさまマンションを出ると、トランスポズンで現場へと向かった。

ある程度近くまで行くと激しい戦闘音が聞こえてくる。どうやら相当派手にやり合っている様だ。仁がアクセルを噴かしスピードを上げて現場へと到着する。

〈CROCODILE Burst〉

仁達が現場に到着した瞬間、2人の目に飛び込んできたのはヘテロの必殺技『バイトクラッシュ』を銅色のスコープ2号に放ち、両脚で挟んだ挙句何度も地面に叩き付け変身解除にまで追い込んだ。

「が、はあ……」

「野本ッ!」

スコープ2号が倒された事に、別のファッジの相手をしていたスコープ1号が声を上げる。どうやら敵はヘテロだけではないらしい。

「……ん? 来たんだ?」

ここでヘテロがやってきた仁達に気付いた。彼女は気怠そうな声を上げながら2人の事を見る。

「お待たせ」

「別に待っちゃいけないけどね。もうアンタなんてどうでもいいし」

「そんな事言わないでさ」

ヘテロは仁の様子に違和感を感じた。先日までの頼りなさが感じられない。今日の

前に居る仁は、彼女を何度も負かしてきた。あの「仁だ。

自然と仁に対する興味が湧く。ヘテロの視線が自分に向かったのを見て、仁は亜矢を一度見るとケツアルコアトルスベクターカートリッジとスピノサウルスベクターカートリッジを取り出し起動状態にした。

〈QUETZALCOATLUS〉

〈SPINOSAURUS〉

ベクターカートリッジを取り出す仁だったが、その腰にはまだダイナドライバーが装着されていない。一体何のつもりだとヘテロを始め、白上教授達も怪訝な顔をして仁の動向を見つめている。

「すう……はあ……」

何処か緊張した様子の仁が一つ深呼吸をすると、亜矢がそつと彼の腕に触れる。それだけで仁の顔からは緊張が消え、強い意志を感じさせる目を見せた。

そして――

「はっ。」

「なあっ!？」

「門守君ッ!？」

仁は徐に起動状態の二つのベクターカートリッジを、ドライバーではなく自分に挿し

た。直挿しをしたのだ。ベクターカートリッジはあつという間に仁の体に潜り込み、その体を変異させる。

「グウウウウツ!? ガアアアアアアアツ!!」

ケツアルコアトルスとスピノサウルスを混ぜたような姿のキメラファアツジとなる仁。理性を失った獣の咆哮を上げる仁だったが、亜矢は彼の傍から離れない。

それどころか彼女は、溢れる力に体を震わせる仁に優しく抱き着いた。

「ツ!?! 駄目だ双星君!?! 直ぐに彼から離れる!!」

「双星さん早くツ!?!」

仁が何を考えているのかは分からなかったが、今の亜矢が非常に危険な状態である事は理解できた。ただでさえ直挿しによるファアツジは人間から理性を奪い取り、破壊と殺戮を撒き散らす獣とするのだ。ましてや恐竜ベクターカートリッジの危険性を考えれば、今の彼に近付くのは無謀極まりない行為と言えた。

しかし亜矢は白上教授達の声を無視し、仁に抱き着き離れない。

周りの物を破壊しながら暴れる仁の変異したキメラファアツジだが、不思議と亜矢は振り払われなかった。

「ん……………？」

気付けば仁の意識は再び周囲を暗闇に包まれた空間に佇んでいた。自分以外人も無い、孤独な空間。

だが今度は違う。例えば姿は見えていなくても、仁は直ぐ近くに亜矢の存在を感じていた。彼女が居てくれるなら、自分は1人じゃない。1人じゃないなら、恐れる事など何もない。

と、ここで仁は自分と亜矢以外の気配を感じた。気配を感じる方に目を向ければ、そこには以前もこの空間で見た動物達が遠巻きに仁の事を見ていた。

今なら分かる。あの動物達は全てベクターカートリッジに封入されている超万能細胞、正確には超万能細胞にインプットされている遺伝子だ。

もつと穿った言い方をしてしまえば、あれはそれぞれの遺伝子に宿った意思の様なものだろう。遺伝子に意思があるなど非科学的な物言いだが、そうとしか言いようが無かった。

その生命の意思達が、遠巻きに仁の事を見ている。いや……………それは間違いだった。彼らが見ているのは仁の向こう側に居る存在だったのだ。

「……………ふむ」

彼らの視線の先を追って仁が振り返ると、そこには自分を見下ろすケツアルコアトル

ストスピノサウルスが居た。彼らは揃って、今にも仁に襲い掛かりそうな様相で彼の事を見ている。

以前ここに来た時は、仁も慄き有無を言わず意識を彼らに飲まれてしまった。だが今、落ち着いた心で彼らを見る事が出来た。そして分かる。彼らはただ、生きただけなのだ。

一度は絶滅し、遺伝子だけになりながら悠久とも言える長い時を耐え忍び、そして再び地上に蘇る事が出来た。

だが現代の生物たちは、過去の生物である彼らを受け入れてくれなかった。それが辛く、悲しくて彼らは——

「……生きる事に、罪は無いよな」

仁は遠巻きに見ている。「仲間達」に向け微笑んだ。恐れる事は無い、彼らは敵では無いと。

それを証明するように、仁は太古の時代から蘇った新たな仲間に向けて手を差し伸べた。

「おいで——」

受け入れる姿勢を見せた仁に、気付けば彼らは圧を向けていなかった。仁の心が、彼らに伝わったのだ。

そして、ケツアルコアトルスとスピノサウルスは今度は優しくそつと仁に近付き、その鼻先で差し出された手に触れた。

キメラファアツジに変異し、暴れる仁を白上教授達が固唾を飲んで見守っている。

彼を見ているのはヘテロも同様だった。尤もこちらはどちらかと言うと落胆の気持ち強い。彼女には仁の行動が、ヘテロに勝てないから自棄になってベクターカートリッジを直挿ししたようにしか見えなかったのだ。

「ふん……」

もう完全に仁に対する興味を失ったヘテロが、テイルバスターの銃口を彼に向ける。

その時、彼女らの視線の先で変化が起こった。

「グウー！ ウウウウウウウウ！！」

突然仁が変異したファアツジが胸を押さえて苦しみだした。

その様子にヘテロと白上教授は、仁の体力が変異に耐え切れなくなったのだらうと予想した。ただでさえ負担の大きなベクターカートリッジの直挿し……それも通常のそれより強力な恐竜ベクターカートリッジの、更に2本同時使用だ。その負担は計り知れない。

しかも仁は傘木社の一部の人間の様に肉体改造を施していないのだ。普通に考えれば、耐えきれぬ訳がなかった。

「ガアアアアアアッ!?」

叫び声と共に仁の体から2つのベクターカートリッジが排出される。それと同時に仁の姿は元に戻った。

今なら仁は無防備だ。ヘテロは仁にテイルバスターの狙いを定め、引き金を引こうとした。

だが次の瞬間、信じられない事が起こった。ベクターカートリッジが排出された仁は、力強い目で宙に浮いたベクターカートリッジを見たのだ。

「ッ!? まさか——!?!」

信じられないと固まるヘテロの前で、仁は2つのベクターカートリッジを空中でキャッチしてみせた。

亜矢を除く誰もが驚き注目する中、仁は手の中の2つのベクターカートリッジを見て頷く。

「……よろしく」

そして彼は亜矢を見て、危険と隣り合わせの状況で自分を信じ続けてくれた彼女に感謝を込めて抱きしめた。

「ありがとう……亜矢さん、真矢さん」

「信じてましたから……絶対に大丈夫だってね」

暫し亜矢の温もりを堪能した仁は、少し名残惜しそうにしながらも彼女から離れ腰にダイナドライバーを装着した。ヘテロは彼がドライバーを装着したのを見て警戒を強める。

〈QUETZALCOATLUS〉

〈SPINOSAURUS〉

「さあ……検証の時間だ」

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「変身!!」

〈Open the door〉

意を決して変身する仁。そこには一切の恐れがない。恐れる必要などない。その手にあるのは、凶暴な力ではなく頼れる仲間なのだから。

光の殻を破り姿を現したダイナ・ケツアルスピノフォーム。彼は変身完了すると、その背にある翼を広げ一度飛翔し一気にヘテロに接近した。

「ッ!?!」

予想以上の速度に、一瞬反応が遅れるがテイルバスターの引き金を引いて迎撃するへ

テロ。デイナは放たれた炸裂弾を僅かに体を傾ける事で避けた。

無駄のない動きでヘテロに接近すると、その拳を握り締めヘテロに叩き付ける。今までの借りを返す様に。

「はっ」

放たれた拳は重く、ヘテロもテイルバスターを盾代わりにしなければ防げない程だった。しかも防いでも尚重く、衝撃はヘテロを僅かに後退りさせる程。

「くっ、舐めるな!？」

負けじとテイルバスターを振り回すヘテロだったが、デイナはそれを必要最低限の動きで避け、時には受け流した。そこには先日までの力に振り回された荒々しい動きは無く、理性で冷静に考えて成している動きを見せていた。

「この動き、暴走してない!? 力は前と同じかそれ以上なのに!? アンタ一体何したのよ!!」

訳が分からないとヘテロは思わず叫んだ。無理もない。一度直挿ししただけで制御できるようになるなど、肉体改造を施して漸く理性を保って制御できるようになった彼女からすれば冗談じゃないと叫びたくなる光景だった。

その疑問に対し、デイナは静かに答えた。

「大した事はしてないよ。ただ、受け入れたただけだ」

「受け入れた？」

「そうさ。皆生きてるんだ。例え遺伝子だけになろうと、生命はここに確かに存在する」
話しながらデイナはテイルバスターを弾き、ヘテロの胸部装甲に正拳突きを放つ。穴を穿たれたような一撃に、一瞬ヘテロの呼吸が止まる。

「ぐっ?!」

「俺はそいつらと、ただ手を取り合っただけ。ただ生きたかったこいつらと、一緒に歩いていく事を決めた。ただそれだけの事だ」

「ふざけるなッ!」

認められない。認められる訳がない。そんな事で制御できてしまうなら、体を改造されて飼い犬にまで身を墮とした、自分は一体何なのか。

〈HORSESHOE Burst〉

ヘテロは激情に任せて『トーンインパクト』をデイナに放つ。だが今のデイナに、そんな我武者羅な攻撃は当たらない。翼を使って低空飛行して距離を取りつつ、デイナはレセプタースロットルを引いた。

〈ATP Burst〉

「戦いのレポートは、纏まった」

デイナは再び飛翔すると、両脚にエネルギーを集束させヘテロに接近し両脚で彼女を

挟むと一気に上昇。空中で1回転して彼女を地面に向って投げつけると落下しつつある彼女に向って、今度は急降下して接近しつつ両脚蹴りを放った。

「ハアアツ！」

「くっ!？」

〈TURBLE Burst〉

放たれたデイナのノックアウトクラッシュに対し、ヘテロは悪足掻きでシエルブレイカーを発動。エネルギーの甲羅でデイナの両脚蹴りを受け止めた。

「ハアアアツ!!」

「くう、あああああああつ!？」

空中で攻撃を受け止められるも、デイナは構わずそのままヘテロを足蹴にしたまま急降下。翼を持たないヘテロにはどうする事も出来ず、彼女はデイナと地面に挟まれた。

「がはあつ?!」

地面に円形のクレーターを作るほどの力で叩き付けられ押し潰され、ヘテロの口から苦悶の声と共に空気が吐き出される。

クレーターの中心に埋まったヘテロを尻目に、デイナはクレーターの縁に着地した。彼はクレーターの縁から彼女を見下ろすと、踵を返して亜矢の元へと向かう。

完全に制御したケツアルスピノフォームの手で、亜矢をそつと撫でた。絶妙な力加減

で、彼女を傷付ける事無く撫でる。それは彼が力を完全に制御できていた事を何よりも表していた。

自分が完全に力を制御できている事を確信したデイナが変身を解除すると、亜矢が彼に抱き着き白上教授と峰がやって来た。

「門守君！」

「制御出来たんですか？ でもどうやって？」

彼らが気になるのは仁が恐竜ベクターカートリッジを制御できるようになった理由だ。つい昨日まで力を全く制御できていなかった筈なのに、一体何故制御できるようになったのか。

「簡単です。細胞をこいつらに合わせたんですよ。直挿しで、敢えて影響を受ける事で……」

デイナドライバーでベクターカートリッジの悪影響を防ぐという事は、言葉を変えればベクターカートリッジ——超万能細胞と自身の間には壁を作るという事。仁はそれ自ら取っ払い、自分の細胞を超万能細胞に歩み寄せさせたのだ。

仁の話を聞いて白上教授達は驚くと共に呆れた。

「なんて無茶を……帰ったら検査を受けてもらうよ。どんな悪影響が出るか分かったもんじゃないんだ」

「分かつてますよ」

もう仁は完全にいつもの調子を取り戻していた。その事に峰も安堵の溜め息を吐き、彼と彼に抱き着いている亜矢を優しく見た。

と、ここで彼女は亜矢の首筋に赤い斑点を見つけた。最初それをただの虫刺されかと思つた峰だったが、何気なく仁の首筋を見るとそこにも同じような斑点があるのを見てもしやと思ひ2人に接近。2人の首筋にある赤い斑点を近くで交互に見た。

「あ、あの先輩？ 私達に何か？」

「——あ」

仁は峰が何を見つけたのかに気付き、咄嗟に首筋を手で隠した。それを見て峰の眼鏡の縁がキラリと光る。

「門守君、双星さん……その首筋の虫刺されみたいな斑点は何ですか？」

「……………はうつ!!」

亜矢も峰に気付かれたのに気付き、顔を真っ赤にする。それは2人が昨夜何をしていたのかを雄弁に物語っていた。

途端に峰は2人に昨夜の事を根掘り葉掘り聞こうとした。

「2人共、ちよつと色々話を聞きたいんですけど!」

「ノーコメントで。亜矢さん、ちよつとゴメンよ」

「わわっ!？」

峰からの追及を逃れる為、仁は亜矢をお姫様抱っこで抱えその場から逃走を図った。人一人を抱えているとは思えぬ速度で逃げる仁を、峰が追いかけてその様子を白上教授が微笑ましく眺めているのだった。

因みにスコーパー1号は自力でファッジを倒しており、デイナにより倒された筈のヘテ口を確保しようとしたが彼がクレーターの縁に立った時、そこには誰も居なかった。

第38話：大きな一歩

傘木社の襲撃を撃退した後、仁は白上教授によって強制的に大学へと向かわされた。当初は傘木社への対策の為にS・B・C・T.と話し合いをするのが教授の当初の目的だったのだが、それどころではなくなってしまった。宗吾達は戦闘後の処理で大忙しだし、何より仁の事で直ぐに確認しなければならぬことがある。

先程の戦いで仁は強力な恐竜ベクターカートリッジを2つ同時に直挿した。その影響がどれほど出ているのか、それを調べなくてはならない。

そんな訳で、大学へと向かった仁はラボにて採血を受けたり体にコードを繋がれたりしていた。

「ふむ……………」

「どうですか、教授？」

採血の結果他様々なデータを見て、白上教授が真剣な表情を浮かべながら唸る。その様子に何か不味い所でもあったのかと、亜矢が横からデータを覗き込みながら訊ねた。様々なグラフが並び数字が羅列されたデータは、流石に亜矢が見ても何が何だか分からない。

「うん、特に問題は無いよ。少なくともデータで見える範囲で異常はないね」

白上教授の答えに亜矢はほっと胸を撫で下ろす。何だかんだで仁がベクターカートリッジを直挿しすると言った時、彼女は彼を応援はしたが同時に心配もしていたのだ。

2人のやり取りを横目で見つつ、仁は峰の助けを借りて体に繋がれたコードを外し服を着直す。

「良かったですな門守君。正直直挿ししてファッジになった時は肝を冷やしましたよ」「すみません。でもあれ以外に考え付かなくなってます」

言いながら仁は白上教授の手の中にあるデータを自分でも見た。教授からタブレットを受け取り自分で自分の体の変化を確認する。

「……あの位じゃ目に見えて分かる変化は無いんだな」

「あつたら大変ですよ。最悪人間じゃなくなるかもしれないんですから」

「そうですかね?」

仁はタブレットを教授に返す。もう興味をなくしたらしい。

そしてタブレットと入れ替わるようにして亜矢が仁に近付いた。

「何にしても、何時もの仁くんに戻ってくれて良かったです」

「ゴメン。ホント、色々心配かけて」

「いいんですよ。何時もの仁くんに戻ってくればそれで」

満足そうに言う亜矢と、そんな彼女を愛おしそうに見つめる仁。

仲睦まじい様子を見せる2人に、峰の心に悪戯心が湧いた。

「……まあ、こつちが大変だつて時に肌重ね合つて何やってんだつて感じですけどね」

「……はう!？」

「ん……うん」

今データ収集の為に上半身を脱いだ仁だが、そうする事で他の箇所にもある赤い斑点——仁と亜矢が互いに愛し合った証であるキスマーク——が露になり、昨夜何をしていたかを嫌でも峰に知らせる事となった。検査中は何も言わなかつた峰だが、やる事が終わり空気も緩んだのでここぞと弄り始めたのだ。

「で? どうでした門守君?」

「ど、どうつて……?」

「双星さんと一夜を共にした感想ですよ」

「あ……」

目を爛々と輝かせながらの峰の問い掛けに、仁が何かを口にしようとする。だがそれが出てくる前に、亜矢の手により仁の口が塞がれた。

「もが……」

口を塞がれ、目線だけで何をと問う仁に亜矢は顔を真っ赤にして首を左右に振った。

恥ずかしさのあまりか、目尻には涙が薄ら浮かんでいる。

彼女の涙を見て、仁は口が塞がれているからという事で頷く事で答えた。その反応に安堵の顔になり、亜矢は仁の口から手を離れた。

「……すみません、ノーコメントで」

「え〜!?!」

仁の答えに心底不満そうな声を上げる峰だったが、仁も端から亜矢との一夜の事を誰かに言う気はなかった。彼女の艶姿は自分一人の物だ。例え話でも、誰にも知られたくない。

亜矢は彼の想いに気付き、嬉しさと恥ずかしさでまた頬を赤く染める。そんな彼女がまた可愛くて、気付けば仁は口元に笑みを浮かべ彼女を撫でていた。

直ぐに2人だけの空間を作る仁と亜矢に、峰は何処か恨めしそうな目を向ける。

「う〜〜……」

「何変な声を上げてるんだ?」

「うえつ!?! せ、瀬高君!?!」

唸り声を上げる峰に、背後から拓郎が声を掛けた。その手にはケツアルスピノフォームに変身していた時のダイナのデータを纏めた資料が握られている。彼は彼で、白上教授からの指示でダイナ自体のデータ収集を行っていたのだ。

纏め終えたデータを、彼は白上教授に渡した。

「教授、これが先程のダイナの戦闘時のデータです」

「ありがとう」

渡されたデータに白上教授が視線を走らせる。教授がデータを眺めている間、手持無沙汰になった拓郎は仁に話し掛けた。

「しかし、よく直挿ししてファッジになるなんて発想に至ったな？ 一歩間違えば暴走と同じかそれ以上の惨事になってたかもしれないのに」

特に一番危なかったのは、彼を直ぐ傍で支えていた亜矢だろう。仁が最低限の理性を保っていたから亜矢に危害はなかったものの、仁の心が凶暴性に負けていれば亜矢はこの場に居なかったかもしれない。そう思うと峰も改めてぞつとした。

しかし仁に言わせればそれは逆だった。暴走しなかったから亜矢が傷付かなかったのではなく、亜矢が居たから暴走する事がなかったのだ。

心から愛し合う彼女が傍に居てくれるという安心感が、彼に最後の理性を手放させなかったのだ。

「何て言うか……肩の力を抜いたら、自然と出てきたんです」

そう言って仁は手の中にあるベクターカートリッジを見る。あの時、自分が見た様々な動物達と触れ合うイメージは今でも鮮明に思い出せる。そして思う、あれは妄想など

ではなく現実なのだ。

「デイナドライバーと言うツールを通す事で、彼らと対話する事が出来たからこそそなした奇跡だ。」

「こいつらも、生きてる。ただ生きていんだって言う、そんな簡単な事に気付けた」「生きていたい?」

「そう……例えば遺伝子をインプットされた細胞になっても、こいつらには生に対する欲求がある。それを受け入れる事が出来ただけです」

それに気付かせてくれたのは、間違いなく亜矢と真矢だ。彼女は仁自身が恐れている危険性も何もかもを受け入れてくれた。それが彼に、自分の見た全てを受け入れる事を促してくれたのだ。

ついでに言えば、真矢の存在と彼女と手を取り合う亜矢の姿が遺伝子の可能性を改めて仁に教えてくれたと言うのもあった。

統括すれば、仁が恐竜ベクターカートリッジを制御するに至る要因には亜矢と真矢の存在が不可欠と言う事になる。

改めて彼は彼女に心から感謝し、そして心から彼女を愛した。

そして峰は、仁の意識が亜矢に向いている事に気付いた。

「つまりは、愛の力って事ですね」

「どう聞いたたらそうなるんだ」

拓郎は峰の言葉に呆れると、彼女の首に腕を回し片手で彼女の頭をワシヤワシヤと乱暴に撫でまわした。峰は奇声を上げて抵抗するが、力では拓郎に敵わずされるがままだ。

そんな2人の様子を見て、仁はふと疑問を抱いた。この2人の関係は何なのだろうか？ 学友と言うには少々距離が近いような気がする。

「前から気になってたんですけど、瀬高先輩と宮野先輩ってどう言う関係なんです？」

「えっ？」

「いや、何か2人って変に距離近いな〜って……」

「あ、それ私も思っていました」

仁の言葉に拓郎と峰が固まる。2人は仁の質問に視線を泳がせると、拓郎の方が口を開いた。

「……昔馴染みってだけの話だ。ガキの頃から家が近かったからな」

「そんなに長い付き合いなんですか!？」

「……腐れ縁ですよ」

「そうそう互いに競い合ってたら、気付いたら大学まで一緒だった。ただそれだけだよ」
何てことはない様に答える拓郎だったが、その横では峰が何処か不満そうな顔を彼に

向けていた。仁と亜矢の中から見ていた真矢は、それだけで言葉通りの関係ではない事を見抜いた。

が、それを態々指摘するのも野暮かと考え、この場では気付かないふりをして見逃す事にした。

「……ま、そう言う事にしときます」

何かに気付いた様子の仁の物言いに何かを言いたくなつた拓郎だが、ここで何かを口にするればボロが出るかもしれないと押し黙るのであつた。

仁の変身するデイナ・ケツアルスピノフォームに敗北を喫した希美は、敗北感を胸に街の中を彷徨っていた。

「……クソッ」

またデイナに負けた。二度は勝つたが、結局は彼に負けてしまった。その事実が泥の様に彼女の心に広がっていく。

希美は何故自分が負けたのか理解できなかった。自分の肉体……自分のプライド……全てをかなぐり捨てて力を手にしたというのに、仁には力及ばなかった。

愛する者と隣り合い、何を犠牲にする事も無く力を手にした。少なくとも希美にはそう見えた。その事が希美にはどうしても納得できず――

そして何より、羨ましかった。

彼には彼を認めてくれる人が居る。存在を許してくれる人が居る。対して自分はどうだ？

希美の存在意義は最早ただの飼い犬。会社の言いなりになり、居場所の全てを会社に依存している。会社に不要と断じられたら、彼女に待っているのは野垂れ死にだけだ。

「私は……………」

不意に腹が空腹を訴える。ベクターカートリッジの三本同時使用にすら容易に耐え、常人を遥かに超える回復力を持つ肉体だが唯一の欠点として燃費の悪さがあった。特に戦闘を終えた後は空腹感が酷い。体が早急にカロリーを欲した。

ふと希美が顔を上げると、そこには一軒の中華料理屋があった。店先の看板には『30分で全メニュー制覇出来たら無料』の文字が。

それを見た希美は、誘蛾灯に誘われる虫の様にフラフラと店へと足を運んだ。

場所は明星大学に戻り、諸々の検査を終えデイナドライバー共々データを纏め終えた仁は総評を白上教授から聞いていた。

「結論から言うと、門守君は特に問題なさそうだ。デイナドライバーにも異常は無いし、心配する事は何もない」

「どうも」

「ただまあ、あんな事は金輪際止めてくれ。今回は何ともなかったから良かったが、次も問題が起きないとは限らないからね」

「分かっていますよ」

もうあんな無茶はしないし、しようとも思わない。仁自身、あれが割と綱渡りな行動だった自覚はあるのだ。何よりも亜矢にまでリスクを負わせてしまう。

その時、仁の携帯が着信音を鳴らした。教授に一言断って携帯の画面を見ると、デイスプレイには宗吾の名前が表示されていた。

仁はピンときた。そう言えば、今警察には傘木社にとって無視できない存在が居る筈だ。

「もしもし？」

『門守君か？ 今大丈夫か？』

「うん。それで、用件つてもしかしてこの間掴まえた3人の護送か何か？」

『鋭いな……』

電話口の向こうで、宗吾が軽く息を呑んだのが分かった。

「傘木社が放っておくとは思えないからね。それで、何時、何処に護送するの？」

『明日の朝には護送を開始する。道中で傘木社の妨害があるかもしれないから、それに協力して欲しい。悔しいが現状傘木社に対する一番の戦力は君だから。頼めるか？』

「ん、いいよ。明日になったらそっちに亜矢さんと行くから」

『助かるよ。それじゃ』

翌日、仁は亜矢を後ろに乗せて仁はトランスポゾンを走らせていた。

その道中、亜矢が仁に話し掛けた。

「よく今まで何のアクションもありませんでしたね？」

「ん〜？」

「捕まった傘木社の人達に対してですよ。捕まったのがバレたらすぐに何かしらの動きがあると思つてたんですけど……」

色々とおつて気になっている余裕はなかったが、落ち着いた今は傘木社の静かさに違和感を覚えていた。証拠隠滅の為に自社に関係のある人物には始末の為の装置を埋め込む会社が、情報流出するかもしれない捕まった社員（若しくは被験者）を放置するのが意外でしかなかった。

「簡単には情報が出ないように仕掛けられてるのかもね」

「どうやって？」

「さあ？ それはこれから権藤さんに会った時直接聞いてみよう」

そんな事を話しながら仁は警視庁へと向かい、駐車場にトランスポゾンを停めた。

2人がバイクから降りてヘルメットを仕舞うと、2人の到着を待っていたのか慎司が近付き声を掛けてきた。

「どうも。いきなり呼んでしまつてすみません」

「大丈夫」

「それより、掴まえた人達から何か話は聞けたんですか？」

「それについては、歩きながら話しましょう」

慎司に促されて2人は警視庁に入っていく。2人が連れて行かれたのは建物の奥にある留置場だ。

そこにはうろ覚えだが先日戦った4体の恐竜ファッジの生き残りの3人が居た。

3人の様子は明らかに普通ではなかった。目はどこか虚ろで、体をゆつくりと揺らしている。まるで酔っ払っているかのようだ。

彼らの様子に亜矢が軽く息を呑み、仁が目線でどう言う事かと訊ねる。

「……彼らを逮捕してから数時間ほど経って、諸々の処理が終わってから取り調べを行うおうとした時にはああなっていました。心神喪失状態で、こちらからの問い掛けには口々に答えません」

「……薬物中毒ですか？」

「恐らく。なので、これから治療も兼ねて警察病院に護送するところだったんです」

なるほど、これなら傘木社が彼らを放置した理由にも納得がいく。直ぐに会社の不正が漏れる可能性が無いのであれば、少しの間放置されても不思議ではない。

「治療、出来るんでしょうか？」

「さあね。でももしできる可能性があつて、話が出来るとなるなら、傘木社が黙つてゐる訳がないと思う」

「その通りです。ですので護送の護衛をしようという事に……」

「分かりました。この人達の護衛、私達がお手伝いします」

こうして2人はS・B・C・T.による、彼ら3人の病院への護送の支援をする事となった。

2人が警視庁に到着してから数十分後、準備が整い彼らは警視庁から警察病院に向けて出発した。

傘木社の3人を乗せた護送車を中心に、周りをS・B・C・T.の専用車両が囲み、最後尾を仁の乗るトランスポゾンが走っていた。

因みに今、亜矢は護送車の方に乗っていた。理由は単純に、3人を直ぐ近くで守る人物が必要だったからだ。宗吾は全体の指揮を取らねばならないし、仁はヘテロなど敵の強敵を受け持たねばならない。だからと言って3人の護衛を普通隊員にのみ任せてはいざと言う時、3人を守り切る事が出来ない。出来るだけ彼らを近くで守る戦力が必要だ。

一団が警視庁を出て数分。何事も無く病院に向けて進んでいた。思っていたような妨害が無い事に、仁は不気味さを感じていた。

その一団をビルの上から見ている者達が居た。アデニンとシトシンに率いられた傘木保安警察の隊員達。全員武装している。

それに加えて希美も居た。彼女の目は最後尾を走る仁に向けられている。

「……行くぞ。標的はあの護送車の中だ」

「ルーナは俺にくれ。この間のリベンジといきてえ」

「目的を忘れるなよ」

〈SQUID Leading〉

「分かってるよ」

〈FLOG Leading〉

「進生」

〈Transcription〉

アデニンとシトシンがベクターリーダーで変身するのに合わせて、保安警察の隊員達もアントファアジに変異する。

それを横目で見ながら、希美もブレイドライバーを腰に装着しワニとカメのベクターカートリッジを装填した。

〈HORSESHOE × CROCODILE × TURTLE Mixing Genetic information〉

「……変身」

〈Create, Capture, Out of Control〉
〈Brake the chain〉

希美はヘテロに変身すると、背負ったテイルバスターを抜きトリガーグリップを握ると銃口を護送車に向けた。護送車程度なら容易に装甲を撃ち抜ける。

ビルの上から銃口を向けるヘテロの姿に、最後尾を走る仁が気付いた。

「ッ!？」

下から見ていた仁はヘテロが護送車を狙っている事にすぐ気づいた。今からでは変身も通信も間に合わない。

即座に仁はトランスポゾンの格納スペースからハイブリッドアームズを取り出し、ライフルモードにしてビルの上に立つヘテロに向けて引き金を引いた。

それはヘテロが引き金に掛けた指に力を入れようとした瞬間の事であった。

殆ど反射的に狙って撃った銃弾だが、幸いな事に外れる事無く命中した。当たったのはヘテロの右胸の辺り。今正に引き金を引こうとしていたヘテロはそれにより銃口をずらされ、さらに突然の衝撃に手に力が入り引き金を引いてしまった。

「つつ!？」

銃口がズレた瞬間引き金が引かれ、炸裂弾が発射される。放たれた銃弾は護送車の運

転席ではなく、護送車のタイヤを撃ち抜き横転させるに留まった。

「おい何やってんだよ負け犬!」

「……デイナが邪魔したのよ」

「ああん、言い訳か?」

「止めるシトシン。護送車は足を止めたんだ。後は目標を仕留めればいい」

「……ふん」

ホワイトカラーズに宥められ、グリーンリキッドは鼻を鳴らしてビルの屋上から飛び降りた。ホワイトカラーズは小さく溜め息を吐いて彼に続き飛び下り、アントファアッジ達もワイヤーを使って下に下りた。

ヘテロはと言うと、暫く横転した護送車を見ていた。彼女の視線の先では、護送車の傍にトランスポズンを停めた仁が窓から車内に入っていた。

「亜矢さん、大丈夫?」

仁が車内に入ると、彼女は横倒しになった座席の陰から頭を押さえながら顔を出した。

「いたたた……あ、仁君」

「大丈夫、怪我はない?」

「はい、何とか……。他の人達もとりあえず大きな怪我は無いです」

見渡せば、亜矢の他に車内で護衛を努めていた隊員にも大きな怪我は無いようだ。ついでと言っては何だが、護衛対象の3人も一応大事は無いようだった。

2人が互いの無事に安堵していると、車外から銃声が聞こえてきた。傘木社からの刺客が3人を始末しに直接攻撃してきたのを、S・B・C・T.が迎え撃っているのだ。横転しているので外の様子は殆ど見えないが、フロントガラスの向こうではアントファアツジとS・B・C・T.が激しい銃撃戦を繰り広げているのが見える。

「亜矢さん達はあの3人をお願い。俺が外で護送車を守るから」
「仁くん、気を付けて」

亜矢の言葉に頷いて答えると、仁はデйнаドライバーを装着しながら座席をよじ登るようにして外に出た。

「おっと」

仁が窓から顔を出した瞬間、直ぐ傍を流れ弾が通り過ぎていくのを感じ一瞬間を引っ込めた。流れた冷や汗を手の甲で拭い、改めて外に出た仁は傘木社を迎え撃つべく変身した。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「変身」

〈Open the door〉

デイナが変身すると、セントラルドグマから放たれたスーパーコイルが無数のアントファアツジを薙ぎ倒す。敵の行動を妨害しながら変身した彼は、ハイブリッドアームズをハルバードモードにしてアントファアツジを次々と切り伏せる。

斧槍を振り回し、アントファアツジを次々と倒すデイナが戦いながら周囲を見ると、離れた所でスコーパー号がホワイトカラーズと戦闘をしているのが見えた。

ざっと周囲を見渡して、他の隊員達はアントファアツジを相手にいい勝負が出来ているのを見てここでの支援は必要ないと判断。スコーパー号と共にホワイトカラーズを相手にするのが吉と判断してそちらに向かおうとした。

その彼の前に、ヘテロが飛び下り着地と同時にテイルバスターで彼を吹き飛ばした。

「ぐっ!?!」

突然の奇襲にデイナは反応が遅れ、ロクな防御も出来ず吹き飛ばされる。壁に叩き付けられたデイナに、ヘテロからの追撃の銃撃が行われた。

「ちっ」

デイナは痛む体に鞭打ってその場を動き、ヘテロの炸裂弾を回避すると同時に恐竜ベクターカートリッジを取り出した。

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

現状でヘテロに対抗するのに有効なケツアルスピノフォームにゲノムチェンジし、ハイブリッドアームズを大剣モードにして対峙するデイナ。

ヘテロはそんな彼にゆっくり近付いていった。

「さあ、私を満たしなさい」

言うが早いかヘテロはストック兼用の柄を持ち、テイルバスターでデイナに斬りかかっていく。対するデイナも大剣モードのハイブリッドアームズで対抗した。二つの刃がぶつかり合い、激しい火花を散らす。

激しい剣戟を繰り広げるデイナとヘテロ。2人の戦いは凄まじく、互いに大きめの武器を使っているにも拘らずその動きは視認するのが難しいほど早い。

互いの武器をぶつけ合わせ、時には体を反らせたり身を低くしたりして相手の攻撃を回避する。

「はっ」

一瞬の隙を見て、デイナが軽く飛んでヘテロに向けて大剣を唐竹に振り下ろす。振り下ろされる大剣を前に、回避は間に合わないと判断したヘテロはテイルバスターを構えて防御の体勢をとった。

そのままデイナの振り下ろした一撃がヘテロの構えた長剣に当たりそうになる。そ

の瞬間ヘテロは体の軸をズラし、振り下ろされた大剣を受け流した。

「あ、くうっ!」

攻撃を受け流された事にデイナは一瞬思考が停止しかけたが、寸でのところで気を取り直すとヘテロが次の行動に移る前に先手を取る。ハイブリッドアームズから手を離し、攻撃の勢いが完全に死ぬ前にタツクルを喰らわせた。

「ぐうっ!」

ちょうどデイナの攻撃を受け流し自分の攻撃に繋げようとしていたヘテロはこれに反応する事が出来ず、無防備な胴体にタツクルの直撃を喰らってしまった。

至近距離からのタツクルにヘテロは近くの街灯まで吹き飛ばされ叩き付けられる。衝撃で街灯はひん曲がり、ヘテロはその場で座り込み咳き込んだ。

「げほっ!? げほっごほっ……くう!」

暫し咳き込み、呼吸を整えたヘテロは曲がった街灯に手をつきながら立ち上がる。衝撃でテイルバスターは彼女の手から抜けていた。

「ふ……ふ……ふ……」

「?」

突然笑い始めたヘテロにデイナが首を傾げる。

「そう……そうよ。もっと、私を見て……私を満たさない。あんたには、その義務があ

るのよ——！」

「何の話？」

ヘテロが何を言っているのか、デイナには全く理解できない。頭の回転が速い彼だが、自己完結された理論までは流石に理解が及ばなかった。

「私に倒されろって話よ!!」

デイナの問い掛けに答えずヘテロは彼に襲い掛かった。無手で迫る彼女に対し、デイナは拳を握り迎撃の体勢を整えていた。

その頃、亜矢は守るべき3人をS・B・C・Tの隊員と協力して護送車から引っぱり出し近くの専用車両に移していた。護送車は他の車両に比べれば頑丈だが、横転してしまった今最早ただの棺桶ではない。敵からの攻撃が残ったガソリンに引火して爆発でもしたら目も当てられないので、少し危険だがまだ無事な近くの車両に移し必要があれば何時でも逃げられるようにしたのだ。

「これで最後ですね」

「ええ、ありがとうございます」

「いえ——」

3人を別の車両に移し終え、慎司が亜矢に礼を言った。これで多少だが3人の安全が確保でき、必要があれば逃げる準備が整った。

亜矢は慎司からの礼に答えようとして——

「——!!」

出し抜けに背後に向けて蹴りを放った。流れるような鋭い回し蹴り、これは真矢によるものだ。

【真矢ツ!?!】

突然の真矢の行動に亜矢も慎司も驚いていると、真矢の放った回し蹴りが見えない何かに受け止められた。真矢の足を受け止めた何かは、ゆっくりとその姿を現す。

「へえ……よく気付いたな?」

姿を現したのはグリーンリキッドだった。姿を消していた奴は、背後から亜矢に襲い掛かろうとしていたのだ。

「くっ!」

真矢は蹴りが受け止められたと見るや、自由な方の足でグリーンリキッドの顔面を踏

み抜く様に蹴り飛ばす。この行動は予想外だったのか、グリーンリキッドは思わず彼女の足を手放した。

「ぐおっ!?!」

グリーンリキッドが手を離れた事により、真矢は空中で自由の身になった。その隙に彼女はデイナドライバーを装着し、空中でバク転しながらアダプトキャットにベクターカートリッジを装填しドライバーに装着した。

〈CAT Adaptation〉

「変身!」

〈Open the door〉

真矢が着地する時には彼女はルーナへと変身を完了しており、変身すると同時に彼女はアームブレードを展開しグリーンリキッドに斬りかかっていた。

「ハアッ!」

「んのツ!?!」

ルーナのアームブレードに対し、グリーンリキッドは銃剣モードのベクターリーダーで対抗する。爪と刃がぶつかり合う。

「しっ! はっ! やあっ!」

爪が受け止められた瞬間、ルーナは素早く逆の腕の爪を使って攻撃した。ルーナの強

みは素早さと手数ของ多さ。それを彼女は最大限に活かす戦いを心掛けていた。とにかく動き回り、相手に体勢を立て直す隙を与えない。

特にこのグリーンリキッドは姿を消す能力を持っているのだ。一瞬でも姿を消す隙を与える訳にはいかない。

「ちい、このアマあ——!?!」

彼女が姿を消す隙を与えないようにしている事には、グリーンリキッド自身も気付いていた。しかしどうする事も出来ない。姿を消すにはそれなりの集中力を使う。彼女が絶え間なく攻撃してきている状況では、その集中力を確保するのも困難だった。

徐々にルーナにグリーンリキッドが押されていく。これ以上はまずいかと彼が危機感を募らせたその時、2人の間をデイナが通り過ぎて行った。

あまりにも突然の事に、ルーナもグリーンリキッドも動きを止めてしまう。

「え? 仁君!」

「とつとつとつ……あ、邪魔しちやった?」

「いや、大丈夫だけど……仁君大丈夫なの?」

「ん、へっちゃら」

見た感じ、やられて吹き飛ばされてきた訳ではなく止むを得ず距離を取る為に跳んだら2人の戦いの間を通り過ぎてしまったようだ。

それを証明するかのようになり、その場に護送車を踏み台にして移動してきたヘテロが降り立った。

「……何よアンタ、まだこの女倒せてなかったの?」

「うるせえッ!? お前こそ仮面ライダー倒せてねえだろうがッ!」

「じゃあアンタがデイナを相手してみなさいよ」

合流するなり口論を始めるグリーンキッドとヘテロの前に、デイナはそつとルーナに近付き例の3人の安全を確認した。

「あの3人は?」

「この後ろの車の中。護送車は動けないから」

デイナとルーナが情報共有をしていると、何時の間にかヘテロが2人の事を見ていた。彼女はルーナの発言から標的の3人が護送車から移されている事を知る。

「……そろそろ仕事よ。シトシン、ガキみたいに騒いでんじやないわよ」

「チツ! テメエ、後で覚えてろよ」

腹立たしいが弁えてはいるのか、それ以上ヘテロに噛み付く事はせずデイナ・ルーナと対峙した。

そして再び始まる戦闘。今度はタッグでの戦闘だ。殴り掛かるヘテロの拳をデイナが受け止め、その横からルーナがアームブレードで斬りかかる。強固な装甲を持つヘテ

口にルーナの力では大したダメージを与えられないが、比較的防御の弱い関節部分を狙っての攻撃はヘテロに体勢を崩させるには十分だった。

ヘテロの力が弱まったところを狙ってデイナが彼女の腕を掴み、背負い投げで地面に叩き付ける。背中を強かに地面に叩き付けられ、ヘテロの呼吸と動きが止まった。

「がはっ!?!」

「隙ありい!」

「ありません!」

デイナがヘテロを地面に叩き付けた隙を狙ってグリーンリキッドがベクターリダーで斬りかかるが、ルーナがそれを許さない。素早くリプレッサーショットを抜くと、近距離からの早撃ちでグリーンリキッドを遠ざけた。

「がああっ?!」

「チツ、あの口だけ男……」

碌に役に立たないグリーンリキッドにヘテロが舌打ちしながらデイナに反撃を繰り返すが、デイナは翼を盾代わりにして攻撃を凌ぐ。更にヘテロの視界がデイナで埋まっている間に、デイナはスピノサウルスベクターカートリッジをドライバーから抜くとノールックで背後のルーナへと手渡した。

ルーナは渡されたベクターカートリッジをライフルモードに連結させたりプレッ

サーシヨットに装填する。

〈Genome set ATP Burst〉

通常のライフルモードの一発では軽く仰け反らせる程度の威力しかヘテロには与えられない。だがバーストブレイク、それも恐竜ベクターカートリッジの力を借りた一撃ならばと期待を込めて、ルーナは狙いを定め引き金を引く。

「あがあっ?!」

狙いは成功。ルーナの一撃はヘテロを大きく吹き飛ばす程のダメージとなって彼女に炸裂した。

吹き飛ばされたヘテロはグリーンリキッドの傍に倒れる。

それを見たテイナとルーナは、互いに顔を見合わせ頷き合った。

「亜矢さん」

「はー!」

〈ATP Burst〉

同時に発動したノックアウトクラッシュが、ヘテロとグリーンリキッドに向けて飛んで行く。直後に体勢を整えたヘテロとグリーンリキッドは、咄嗟に迎撃の為必殺技を発動する。

「くっ!?!」

〈HORSESHOE Burst〉

「くそがあっ!？」

〈Genome set Full blast〉

デイナとルーナのノックアウトクラッシュを迎撃する為に、ヘテロのトーンインパクトとグリーンリキッドの『ジェネリック・ブレイカー』が放たれる。

「ハアアアアアッ!!」

「ゼアアアアアアッ!!」

「オラアアアアッ!」

4人の攻撃がぶつかり合い拮抗する。その時、デイナが無意識の内にルーナの手を掴んだ。

「!」

掴まれたルーナは一瞬彼の顔を見るが、仮面越しに感じる彼の必死さに彼女も仮面の奥で顔を引き締め手を握り返す。

デイナとルーナが心を合わせて力を込める。すると2人の想いが後押しとなったのか、拮抗が僅かに崩れヘテロとグリーンリキッドの攻撃が押し返された。

「なっ!？」

「ハアアアアアッ!!」

まさかの事態にヘテロが動揺した。その隙を逃すまいと、デイナとルーナが更に力を込める。

遂に拮抗は崩れ、2人のノックアウトクラッシュはヘテロとグリーンリキッドを押し返し2人を吹き飛ばした。

「ああああああつ?!」

「がはああああつ?!」

デイナとルーナのノックアウトクラッシュを喰らい、大きく吹き飛ばされるヘテロとグリーンリキッド。

2人が吹き飛ばされたのは、スコープ1号とホワイトカラーズが戦闘を繰り広げている真っただ中であつた。

「うおっ?!」

「ッ?! お前ら……」

2人が戦闘をしている直ぐ近くに吹き飛ばされ地面に叩き付けられたヘテロ達に、スコープ1号は驚きホワイトカラーズは状況を察した。

「……負けたのか」

「……ふん」

「くそ、があ……」

核心を突くホワイトカラーズの言葉にヘテロは鼻を鳴らし、グリーンリキッドは悪態を吐く。

そこにデイナとルーナがやってきた。2人はスコープ1号に並ぶように立ち、傘木社の3人の前に立ち塞がる。

事ここに至り、ホワイトカラーズはこれ以上の戦闘は不利にしかならないと判断し、撤退を決意した。

「……退くぞ。これ以上は無意味だ」

〈Genome set Full blast〉

「……………はあ、分かったわ」

「この借り、絶対に返してやるからな!」

2人が納得はしていないが理解はしたのを見て、ホワイトカラーズはデイナ達の周りにジェネリック・ブレイカーを撃ち込んで動きを阻害する。ホワイトカラーズの攻撃が飛んできたのを見た瞬間、デイナは翼を広げて2人を守り、代わりに視界を塞がれてしまう。

「くう……」

「仁くん!?!」

「大丈夫、それより……」

衝撃と土煙が晴れた時、そこにはヘテロ達は勿論アントファツジ達の姿も無くなっていた。完全に逃げられたらしい。その事にスコープ1号は少し悔しそうにしていた。

「逃がしたか……どうせなら連中もとつ捕まえたかったんだがな」

「二兎を追う者は一兎をも得ずだよ、権藤さん」

「大事な3人は無事なんですから、それで良いじゃありませんか」

「……それもそうだな」

その後、被害の確認を終えた彼らは改めて3人を警察病院に護送する事に成功した。道中では二度目の襲撃なども無く、重要参考人の3人は無事に病院に搬送された。

それは即ち、傘木社の悪事を暴き打倒する為の第1歩であり、局所的な意味ではなく、本当の意味での勝利への第1歩でもあった。

日本の空の玄関口、東京国際空港……通称羽田空港。

国外から来た人、国外へ行く人達が行き交うこの地に、1人の女性が降り立った。

大きな荷物を背負い、どこか気だるげな目をした、一見すると妙齢に見える女性だ。目は気だるげだが、肌や雰囲気は生き生きしている。

女性は空港ロビーに立つと、背負った荷物を下ろし体を伸ばした。

「んんん……ふう。日本も久し振りだ」

満足そうに周囲を見渡し、日本の空気を堪能すると下ろした荷物を背負い直した。

「さて、久し振りに仁の顔でも拝むとするかな」

誰にともなく呟くと、女性は意気揚々とその場を後にするのだった。

第39話：親子そっくり

週末の金曜日、亜矢は暑い日差しの下をスーパーのビニール袋に食材をたんまり入れて歩いていった。

今日は仁の家に泊り、今夜から明日明後日に掛けて仁と共に過ごす事を決めていたので、夕飯には気合を入れたものを作るつもりだった。

しかし夏真つ盛りで日もまだ沈んでいない時間帯の外出は、正直に言つて辛い。亜矢はどちらかと言うと肌を出さない服装なので、日光に肌を焼かれる面積は少ないが熱はどうしようもない。一応彼女の服は通気性に拘つてはいるが、それでも服の内に籠る熱は彼女から体力を削いでいく。

「あ〜っ〜い〜……亜矢、暑い……」

「(我慢して、真矢……私だって暑いんだから……)」

感覚を共有している為、勿論亜矢の中に居る真矢も暑さに辟易していた。実はこのやり取り、もう5回目である。

こんな事ならもう少し日が落ちた時間に行い物に行くべきだったかと思わなくも無いが、汗を軽く流してから仁の家で夕飯の支度をする事を考えると、多少日差しがきつ

くても早い時間に動くべきだろうと思わずにはいられなかった。

仁を想う気持ちは真矢も同様で、早めに買い物をする事には賛成だったが、それはそれとして暑いものは暑いのでその事に対する不平不満はどうしても出てきてしまうのだ。

額や首筋に浮かぶ汗を、ハンカチで拭いながら自宅への帰路に就く亜矢。その時彼女の視界に、アイスの移動販売車が映った。

それを見た瞬間、真矢が亜矢の中で騒ぎ始めた。

【亜矢亜矢亜矢！ あれ見てあれ、アイスアイス!!】

「（見えてる、見えてるから騒がないで）」

【あれ買おう！ まだお金余裕あるし！】

「（だくめ！ もうすぐ家に着くんだし、余裕がある内に無駄遣いは控えないと）」

甘い上に冷たいという事で、亜矢にアイスを強請る真矢だったが亜矢は首を横に振った。家に帰れば買っておいたカップアイスがある。こんな暑い日差しが差す中で食べなくても、家に帰って冷房の利いた部屋で食べる方が良い。

亜矢はそう思っていたのだが、真矢はこの暑さを少しでも紛らわしたいのか今すぐにもアイスが食べたかった。

【やだ!?! 今すぐアイス食べたい!?!】

「子供みたいな我が儘言わないで」

【暑い暑い暑い暑いアイスアイスアイスアイス!!】

「~~~~ツ!!? ああもう、分かったわよ! 買えばいいんでしょ買えばツ!!」

頭の中で騒ぐ真矢に耐え切れなくなり、亜矢が思わず声を上げてしまった。突然大声を上げる亜矢に周囲の人達がギョツと彼女の事を見る。自分が大声を上げて周囲から注目されてしまった事に気付いた亜矢は、しまったと言う顔になると暑さとは別の理由で顔を赤くして俯いてしまう。

「(う~~~~、真々矢!!)」

【ご、ゴメンゴメン。でも暑かったし……】

「(……はあ、もう。今回だけだからね?)」

喜ぶ真矢の声を脳内で聞きながら、亜矢は移動販売車に近付いていく。この暑さで同じ事を考える者は多いのか、販売車の前には3人ほど列が出来ている。

2人は直ぐに味を決めたのかあつと言う間にアイスを買って離れて行ったが、亜矢の前に並んでいた女性がなかなか長考していた。あれやこれやと指をさしては、顎に手をやり悩んでいる。

ただでさえ最後尾だったのに加えて、漸く後1人と言う所で長々と考え込まれて真矢が次第に我慢の限界に近付いていた。

「う~~~~~!!」

「(ま、真矢? 少し落ち着こう? ね?)」

今にも不満を爆発させそうな真矢を、亜矢は必死に宥めていた。

そんな彼女の焦りも知らず、目前の女性は未だに悩んでいた。

「ん~~~~:~:~:ダメだ、やはりこの中から一つに絞るのは難しいな。なあ、君?」

「んえっ!!」

暫し悩んで結論が出せなかったと思しき女性は、徐に振り返り亜矢に声を掛けてきた。まさかいきなり声を掛けてくるとは思ってもみなかった亜矢は、突然の事に変な声を上げてしまう。

「な、何ですか?」

「ちよつと聞きたいんだが、君はこの中でどのアイスが欲しい?」

「はい?」

「アイスの味だよ。君だったら何を選ぶ?」

何故この女性は見ず知らずの自分にこんな事を聞くのか、亜矢は訳が分からなかった。そんなアイスの味なんて、自分が食べたいと思ったものを適当に決めればいいだろうに。

とは言えそれをドストレートに言つて状況をややこしくするのもなんかあれだった

ので、事を穩便に済ませる為亜矢は適当に思った味を選んだ。

「そ、そうですね……私だったら、ラズベリーでしょうか？」

「ふむ、ラズベリーか……」

オーソドックスにバナラヤストロベリーなんか良いが、この暑さの中で食べるならラズベリーの様なさっぱり爽やかな酸味のある味の方が良い。そんな基準で亜矢はラズベリーを選んだ。

亜矢の答えを聞いた女性は、ラズベリーのアイスに目を向け――

「ではバナラを」

迷いなくラズベリーとは全く関係のないバナラを選んだ。じゃあ何で聞いたんだと、亜矢の中で真矢が文句を言ったがこれで列が動いてくれる。

漸く自分の番だと亜矢が思った矢先、亜矢の鼻先にラズベリーのアイスが差し出された。

「……へ？」

「どうした？　これが食べたかったんだろ？」

「え？　はあ、そうですね……」

「アイス選びの参考の礼と、長い間待たせてしまった詫びだ。遠慮せず受け取ってくれ」

「ど、どうも……」

亜矢はやや困惑しながら、女性からアイスを受け取った。

何時までも店の前に居ては邪魔になるので、亜矢は日陰に移動しそこでアイスを一舐めした。爽やかな酸味と冷たさが口の中に広がり、僅かながら気分も涼しくなる。

【はあく、生き返る〜！】

真矢がお待ちかねのアイスに歓喜の声を上げるのを脳内で聞き、亜矢はクスリと笑みを浮かべながらアイスを食べ進める。

「うん、やはりこの季節に食べるアイスは別格だね」

そして何故か隣には、先程の女性が居た。亜矢はどうにもこの女性が気になったので、アイスを食べる合間に思い切って話し掛けてみた。

「あの、一つ聞いて良いですか？」

「ん？ 何かな？」

「何で私がラズベリー選んで、バニラと言う結論に達したんですか？ 別にラズベリーの近くにバニラは無かった筈ですけど？」

全く脈絡なくラズベリーと聞いてバニラを選んだ、女性の感性が分からず思わず問い掛けてしまった。すると女性は、唇についたアイスを舐め取りながら答えてくれた。

「君はカオス理論と言うものを知っているかな？」

「はい？ カオス理論？」

「うん。端的に言えば、非周期性の変動現象の事だ。風が吹けば桶屋が儲かるを学問したものと言えば分かり易いかな？」

「は、はあ——？」

何故アイスの味がいきなりカオス理論の話になるのか分からず、亜矢は頭にハテナマークを浮かべながら曖昧に返事を返した。その間にも、真矢は亜矢の体を動かしてアイスを食べている。こっちは女性の話には微塵も興味がないらしい。

「それで、そのカオス理論とアイスの味に何の関係が？」

「簡単な話だ。君がラズベリーを選んだと言う一石を私に投じてくれた。それが私の思考に波紋を作り、最終的にバニラと言う選択を取らせたのだよ」

「ん？ んん？」

聞いてもやっぱり訳が分からなかった。つまりあれか、この女性は亜矢の選択を聞いた瞬間直感的にバニラを選択したという事か。

だったらなんで最初から直感で選んでくれなかったんだと思わずにはいらなかったが、多分それを聞いてもきつと訳の分からない理論を展開してくるだけで亜矢が理解出来る回答は返ってこないだろう事は容易に想像できた。

なのでこれ以上この話題を出すのは止めておいた。

すると、何時の間にかアイスを食べ終えて満足していた真矢が亜矢に囁いた。

「なくんかこの人さ、誰かに似てる気がしない？」

「(誰かつて？ 何、何処が？)」

【何て言うか、雰囲気とか？ それにこのマイペースな所とか、誰かに似てる気がするんだけど……】

言われてみれば確かに。どこか気だるげな目元と言い、変に博識と言うか聞いた事も無い理論をすいすい出してくるところと言い、物凄く既視感があった。

はて誰だろうか？ 亜矢が思わず首を傾げていると、突然近くで何かが破壊される音が響いた。

「ッ!？」

「おや?..」

驚き立ち上がる亜矢に対して、女性は音のした方を見て首を傾げるだけ。

今の破壊音、ただの事故であつてくれと願つた亜矢だが、破壊音と悲鳴が断続的に響いて来たのにフアツジが暴れている事を確信。荷物を置いて素早く現場へと向かった。

「あ、っと！ あなたは危ないですからここに居てください！ それと、すみませんがこの荷物お願いします！」

「え？ 危ないって君は?..」

亜矢の言葉に女性は首を傾げるが、女性の問い掛けを無視して亜矢は騒動の現場へと

向かう。

現場に到着すると、案の定そこではファッジが暴れていた。一見すると恐竜ファッジではないように見える。トンボの様な見た目のファッジだ。

「亜矢、気を付けて。あれももしかしたらワニやカメみたいに、太古の力を引き出されたファッジかも」

「うん！」

真矢の予想は当たっていた。あれはただのトンボのファッジではない。恐竜の遺伝子を使って太古の祖先・メガネウラの力を引き出されたトンボのファッジ、メガネウラファッジなのだ。

メガネウラファッジは高速で飛び回りながら街を破壊している。と、メガネウラファッジが亜矢の姿に気付き彼女の前に着地してきた。

「仮面ライダーか？ 待っていたぞ」

「これ以上、好き勝手はさせませんよ！」

メガネウラファッジの暴挙を止めるべく、デイナドライバーを腰に装着した。

次の瞬間――

「おお〜！ 何だ君は？ その姿、まるでトンボじゃないか！」

「——つて、ええ!？」

【何考えてんのよあの人ッ!】

何と先程の女性が、亜矢の荷物を持ってやって来たではないか。しかも荷物をその場に置くと、間近でメガネウラファッジをまじまじと眺め、更にはペタペタと触りまくる始末。

あまりにも危機感が感じられないと言うか非常識な姿に、亜矢は勿論メガネウラファッジも驚愕のあまり動きを止めてしまった。

「触った感触は昆虫の甲殻の様だが、このサイズで外骨格生物は存在できない筈。君、骨はあるのか? いやそもそもこれは甲殻なのか? ちよつとサンプルを取らせてくれ」「な、何だお前は気持ち悪い!」

亜矢とファッジの驚愕など無視して一人騒ぐ女性に、メガネウラファッジは気持ち悪さに女性から距離を取る。

ファッジの方から距離を取ってくれたのを見て、亜矢は女性の腕を掴みメガネウラファッジから引き剥がした。

「何やってるんですか、離れてくださいッ!」

「ああ、待ってくれ。表皮のサンプル、いやせめて産毛の一本でも良いから……」

「いい加減にしなさいよ!?! 好奇心と自分の命とどっちが大事なの!?!」

流石に黙って見ている事が出来なくなり、真矢も表に出てきて女性を怒鳴り乱暴に後

ろに押しやる。

これ以上彼女に好き勝手させてはならないと、真矢はさっさと変身する事にした。

〈CAT Adaptation〉

「変身！」

〈Open the door〉

「あれはっ!？」

背後で女性が驚く声を上げるのを他所に、ルーナに変身した真矢はアームブレードを展開してファッジに飛び掛かった。

「ハアッ！」

ルーナのアームブレードによる一撃はメガネウラファッジの甲殻を傷付け、ダメージを与える。メガネウラファッジは両手の爪と尾の一撃で反撃するが、素早く動き回るルーナには当たらない。

流石に太古の力を引き出されているだけあって、傷付けることは出来てもあまり大きなダメージを与えることは難しかったがそれでもルーナも恐竜系のファッジとの戦いには慣れたもの。相手の防御の薄い所を狙っての一撃や既にダメージを与えた所への集中した攻撃で、着実にダメージを重ねていった。

「ええい、クソッ！」

これ以上のダメージは不味いと思ったのか、メガネウラファツジは翅を広げて上空へと飛翔する。空中に飛んで距離を取ったメガネウラファツジは、翅を超高速で動かし超高周波を発生させた。耳をつんざくような甲高い音に、ルーナは思わず両耳を塞ぐ。

「うあああああつ?! くうつ?!」

強烈な超高周波は周囲の建物のガラスを割り、被害を拡大させていく。これ以上やらせてはいけないと、ルーナは苦痛と不快感を堪えてリプレツサーショットを抜き引き金を引いた。放たれた銃弾は、メガネウラファツジの甲殻を傷付け、僅かながら動きを鈍らせる。

「くっ?!」

一瞬とは言え怯んだ事で、超高周波が弱まった。その隙にルーナはリプレツサーショットを連結させ、ライフルモードにしてベクターカートリッジを装填した。

「これで、終わりです!」

〈Genome set ATP Burst〉

狙いを定め、引き金を引く。放たれたバーストブレイクは、しかし直ぐに体勢を立て直したメガネウラファツジに回避された。

とは言え完全に躲かれた訳ではなく、左翅2枚の先端を掠めて僅かながら飛翔能力を低下させた。

「外した——!?」

「くっ?! ファツジではここまでが限界か」

メガネウラファツジは一人ゴチると、ルーナに背を向けて飛び去って行った。ルーナは飛び去るメガネウラファツジの背に向けて追撃の銃撃を続けるが、素早く飛び回るメガネウラファツジにはなかなか当たらない。

結局ルーナはメガネウラファツジを逃がしてしまい、辺りは静けさを取り戻した。

「逃げられましたか。ふう……」

とりあえずの脅威が去った事にルーナは安堵の溜め息を吐き、変身を解除した。

するとその瞬間、先程の女性が今度は亜矢に詰め寄った。

「君! それを一体何処で手に入れた!」

「わわっ!! えつと、その、あの姿の事は出来れば内密に……」

「もしや君が自分で作ったのか? いやそんな訳がないか、そんな風には見えない。一体誰にこれを渡されたんだ?」

「え、えつと……(真矢、どうしよう!?)」

【私に聞かれても……】

物凄い勢いで質問攻めしてくる女性に、亜矢と真矢はどうすればいいか分からず立ち往生してしまう。

亜矢が困っている事に気付く様子も無く女性は今も彼女を問い詰めるが、そこに仁がやって来た。ファッジが暴れていると聞き、彼は彼ですつ飛んできたのだ。

「あ、亜矢さん」

「仁くん！」

「先越されちゃったね……って、あれ？ その人……」

「あ……えっと、この人は……何て言うか……」

仁に女性の事をどう説明しようかと悩む亜矢だったが、正直説明のしようがない。アイスの移動販売で偶然出会ったところまでならともかく、ルーナに変身するところを見られて質問攻めに遭っていると話すのは少し勇気が要った。

だが亜矢が何かを言う前に、女性が仁に話し掛けるほうが早かった。

「おお、仁。久しぶりじゃないか」

「何でここに？ 帰ってくるなら一言言ってくれば良かったのに」

「別に良いじゃないか。私と仁の仲だろう？」

「部屋の片付けとかいろいろあるんだよ」

「片付けが必要なほど散らかりもしないだろうに」

何やら女性と仁が矢鱈と親しもうにしているのを見て、亜矢は目を丸くした。失礼な言い方かもしれないが、女性は仁や亜矢よりも年上に見える。そんな女性と物凄く親し

気に接する仁に、亜矢は段々と嫉妬に表情を険しくした。

「じ、仁くん？ この人とはどんな関係なんですか？」

「ん？」

珍しく険しい顔をする亜矢に、仁は首を傾げる。何が亜矢を不機嫌にさせているのか分かっていない様子の彼に、亜矢の機嫌はますます悪くなつていく。

が、真矢の方は仁と女性の関係に気付いた。思えば彼女達は既にヒントを手にしていたのだ。

「あゝ、亜矢。私分かつちやつた」

「え？」

「この女の人、多分ね——」

真矢が全てを話す前に、女性が仁の腕を引っ張つた。

「それより仁、私はさつき非常に興味深いものを見たんだ。きつとお前も興味を持つぞ」

「それ多分俺もバリバリ関係者だからある意味手遅れだよ——母さん」

「母さん!？」

「改めて紹介するね。こちら、俺の母さん」

「門守 香苗^{かなえ}だ。宜しく」

とりあえず仁は亜矢と母である香苗を連れて家へと帰った。

帰宅し亜矢が買った食材を冷蔵庫にぶち込み、落ち着いた頃を見計らって仁は亜矢に香苗を、香苗に亜矢を紹介した。

「は、初めまして！ 双星 亜矢です。よ、よろしくお願いします!!」

「うん、宜しく」

「因みに俺の彼女ね」

「ちよつ、仁くん!!」

【きゃつ！ 仁君つたら!!】

まさか香苗が仁の母親だったとは知らなかったの、色々と失礼をしてしまったのではないかと緊張する亜矢だったが、それも仁の言葉で吹き飛んだ。それどころか、母親相手に堂々と彼女として紹介され嬉しさと恥ずかしさで顔が赤くなる。

一方の香苗はと言うと、仁が自分から彼女と紹介した亜矢をとて興味深そうに見ていた。

「ほくう？ ほほくう？ いや、まさかあの仁が彼女を作るとはねえ。子供の頃、友達すらまともに作れなかった仁が彼女を作るとは」

「作れなかったんじゃないかって作らなかつたの。興味なかつたんだもん」

「だから心配してたんじやないか。私は素直に喜んでるんだぞ。きつとあの世でつかき——仁の父——も喜んでるさ」

香苗はうんうんと頷いた。まあ気持ちは分かる。子供の頃から筋金入りで知識欲を満たすこと一筋だつたのなら、親としては色々心配になるだろう。

「それより仁。さっき非常に気になる事を言つていたね？ 仮面ライダーの関係者がどうとか、ちよつと聞きたい事が山ほどあるんだが？」

「後でね。とりあえず腹減つたから晩ご飯にしよう」

「キッチン借りますね」

「俺も手伝うよ」

流石に香苗の分まで入るのに、亜矢一人に全てを任せるのは何だか気が引けた。それに、香苗が居る状況では亜矢と二人きりで話せる場面にも限りがある。

と言つても、仁の料理スキルは最低限のものしかないので、出来ることは本当に亜矢のサポートが精一杯だつた。野菜を切つたり、食材を洗つたりだ。

それでも肩を並べて料理をすつと言う状況に、2人は胸に温かいものを感じずにはい

られなかった。

「……それにしても、そっくりだったわね」

「何が？」

「仁君と仁君のお母さん。なんで見た瞬間に分からなかったんだらうつてくらいそっくりだったわ」

調理の最中、真矢が亜矢の口を借りて思った事を口にする。

出会った当初は色々あつて気付かなかつたが、今改めてみれば仁と香苗は本当によく似ていた。顔立ちもそうだが、何よりも好奇心に素直な所がよく似ている。多少の危険を顧みない所などそっくりだ。

「そうかな？」

「そうですよ。私びっくりしたんですから。仁くんのお母さん、少しも怖がらずにファツジに近付いてペタペタ触ったんですよ？ 仁くんそこまで出来ますか？」

「どうだろ……でも母さんの気持ちちはよく分かるかな」

「分かっちゃうんだ……やっぱり親子ね」

などと他愛のない会話をしながら、夕飯が完成した。

今夜の献立は夏野菜をふんだんに使ったカレーである。

「はい、お待たせ」

「ありがとう。うん、美味しそうだ。それではいただきます」

香苗はカレーの盛られた器を受け取ると早速スプーンを手に取り掬って口に運んだ。口に含むと、程良い辛さが口中に広がる。

満足そうにカレーを食べる香苗に笑みを浮かべ、仁と亜矢もカレーに口を付ける。辛さは中辛と言ったところか。真矢の事を考えて、辛さを押さえている。

「どうだい仁、大学は？」

カレーを食べながら、香苗は仁に近況を訊ねる。やはり母親として、息子の事は気になるのだろう。特にこんな、興味のあること以外には殆ど無頓着な男だ。色々心配になるのも無理はない。

「順調だよ。卒論研究も今の所問題ないし」

「勉強についてはそうだろうさ。私が聞いているのは交友関係。友達とか居るのか？」

「ん……まあね」

「そうか……まあ、彼女が居るなら友達が居なくても寂しくは無いだろうさ」

「んっ!? んぐ……げほっ、げほっ!」

突然話題に上がり、驚いてカレーが変な所に入ってしまった。思わず咽る亜矢の背中を擦り、仁は水をコップに注いで飲ませる。

「亜矢さん、大丈夫? 母さん……」

「すまないすまない。だがさつきも言ったが、仁に彼女が出来た事は素直に嬉しく思ってるんだ」

そんな感じに談笑しながら、夕食は和気藹々とした様子で終わった。

そして夕食が終わり、食後の茶を一杯飲んで和んでからはエネルギーを補給した香苗による質問の再開だ。

「それで仁。もう一度聞くが、お前が仮面ライダーの関係者だつて?」

仁と亜矢は顔を見合わせる。話していいものかと少し考えたが、香苗は仁の母親だ。知ろうと思うなら知る権利が彼女にはある。

それに、ここで教えないと自力で知ろうとして勝手な行動に出る可能性があった。それでさらに厄介事を起こされては堪らないので、仁は仮面ライダーやファッジに関する事を香苗に話す事にした。

「まあね。色々とあつて……つて言うか母さん、海外に居たのに仮面ライダーの事知ってるんだ?」

「噂は海外にも広がっているよ。怪物と戦うヒーローと言う形だがね」

「ふ〜ん」

「あ、そう言えば仁君のお母さんって今何してるんですか?」

「一言で言えば冒険家かな? 気になる事があれば西へ東へ、好き勝手飛び回るんだ」

「好き勝手とは失礼だな。調査依頼を受けてやってるんだぞ。それに冒険家とは言うが、本職は科学者の端くれだ」

冒険家と言う職業の人に出会うとは思っていなかったもので、亜矢と真矢は香苗をまじまじと見た。

「で、話を戻すが、一体何がどうして仁が仮面ライダーと関わったんだ？」

香苗の質問に、仁は話せる限りの事を話した。

最初に仮面ライダーになるまでの経緯と、これまでの大まかな戦い。立ちはだかる傘木社の脅威など、色々だ。

「ふむ、なるほど……まさか私が日本を離れてる間にそんな事になっていたとはな。仁が仮面ライダーに……」

「正直、仮面ライダーになつてなかったら死んでたね」

そう言いながら仁はデйнаドライバーを取り出した。香苗は仁からデйнаドライバーを受け取ると、色々な角度からまじまじと眺めた。

「ほおほお、これが……」

じつくりとデйнаドライバーを眺める香苗。その視線が段々と鋭くなっていく事に、仁も亜矢も気付かない。

「……………因みにベクターカートリッジとは？」

「いれ」

仁は香苗にヒューマンベクターカートリッジを渡した。掌の上のベクターカートリッジを、香苗は興味深そうに見ている。

「これがあの怪物の元かあ……ふむ」

〈HUMAN〉

香苗は受け取ったヒューマンベクターカートリッジを、亜矢が使ったように起動状態にするとそれを躊躇無く自分の腕に押し当てた。

「ちよっ?!」

「大丈夫。ヒューマンベクターカートリッジはファッジを作らないから」

香苗の行動に慌てる亜矢だったが、既実験でヒューマンベクターカートリッジには危険性が無い事を知っていた仁は彼女を宥めた。

渡せばこういう行動をするだろうと読んで、仁はヒューマンベクターカートリッジを香苗に渡していたのだ。肝を冷やした亜矢は、流れた冷や汗を拭いホツと胸を撫で下ろす。

「……………ん？ 仁君何でそんな事知ってるの？」

「そりや自分で臨床実験……………あ」

うっかり自分でベクターカートリッジの実験をしてしまった事をバラしてしまった。

ヤバいと思つて口を噤むが時既に遅し。今度は亜矢が物凄い勢いで仁に詰め寄つた。

「仁くん、何て危ない事をしてるんですか!？」

「いや…………ちよつと気になつちやつて…………」

「ちよつと気になつたからつてそんな事しないでください!？」

「そうだぞ仁。あんまり周りに心配をかけるもんじゃない」

「アンタがそれ言う?」

たつた今自分にベクターカートリッジを使おうとした香苗の言葉に、真矢が思わず表に出てきて呆れた声で言う。

香苗は真矢の言葉に肩を竦めると、仁の傍に行き彼をそつと抱き締めた。

「ん…………母さん?」

「……………本当に、あんまり無茶するんじゃないぞ。これでも一応、人並みにお前を母親として愛してるつもりなんだ。あんまり母さんを心配させないでくれ」

「うん……………頑張る」

「それは頑張る様なものじゃないですよ。本当に、もう…………」

仁の言葉に呆れながらも、亜矢は香苗に抱かれた仁を微笑ましく見ていた。あんな彼でも、ちゃんと人並みに愛情を持って育てられた事が知れて嬉しいのだ。彼は決して一人ぼっちじゃない。自分以外にも彼の居場所を作ってくれる人は居る。

その事が亜矢は無性に嬉しかったのだった。

食後の団欒も終え、夜も更けてきたと言う時間になると突然香苗が荷物を纏めて玄関へと向かい出した。

「え、どこ行くの？」

「実はこの近くにホテルを取っていてね。そう言う訳だからそろそろお暇させてもらうよ」

「どうせなら泊まっていけば良かったのに」

「何を言ってるんだ。巣立ちつつある我が子の邪魔をする訳にはいかないだろう？ 特に、恋人との時間を邪魔するなど……」

言外に、「後は若い二人で」と言われ亜矢が思わず顔を赤くした。彼女の初々しい反応に笑みを浮かべ立ち去ろうとした香苗は、ふと何かを思い出したように立ち止まると荷物を漁り何かを取り出した。

「いや、なかなかの大冒険だったよ。海賊に追われるわ、沈没船の中にはどデカイ蛸が居るわで」

はっはっはっ、と笑う香苗に亜矢が引き攣った顔を向ける。そして同時に納得した。彼女と仁は間違いない親子だ。

「ま、何でもいいや。ありがと」

「ん……それじゃ、私はそろそろお暇するが、仁。あんまり無茶するんじゃないぞ。風邪なんか引かないようにな」

そう言つて香苗は今度こそ玄関から出て行つた。

彼女が出て行くと、部屋は何か一気に静かになつた気がする。別段香苗は騒がしい女性と言う訳でも無いのだが、何と言うか……彼女が居ると場が自然と明るくなるような気がするのだ。

「……行っちゃいましたね。仁くんのお母さん」

「うん……ま、その内またフラツと帰つて来るでしょ」

「そうですね……その時はもう私達、苗字変わつてるかもね……ッ！　もう、真矢!!」

「そうなつてたらしいね」

「じ、仁くんまで、もう——!!」

真矢の茶化しに声を上げる亜矢だったが、次いで放たれた仁の言葉に茹蛸の様に顔が

赤くなる。

「ここの言う事を平然と言い放つ彼に、亜矢は顔を思わず手で覆い隠す。

「母さん……母さん、か」

「ん？ どしたの、仁君？」

「いや、亜矢さんの両親にも何時か挨拶に行かないとなつて」

「亜矢はハツとなつた。そう言えば彼女も両親に仁の事を何も話していない。色々あつて、家族に報告する事を忘れていた。」

「落ち着いた時にでも良いから、連れて行つてくれる？ 亜矢さんと真矢さんの両親の所に」

「はい……何時か、必ず……」

仁の事を話したら、父と母はどんな顔をするだろう？

そんな事を考えながら、亜矢は仁に寄り添い仁は亜矢の肩を優しく抱くのだった。

その日の夜、香苗は宿泊するホテルの部屋にて、ノートパソコンを開きキーボードを叩いていた。

仁の家に居た時と違い、その目線は鋭く表情は何処か険しい。

「何故……何故あれが？」

ノートパソコンのディスプレイには何かの設計図の様な物が映し出されている。それは、細部こそ違うが全体的に見てデイナドライバーにそっくりだった。

香苗はその設計図を見て、深く息を吐くと椅子の背凭れに体重を預け天井を仰ぎ見る。胡乱な目で天井を見ていた香苗だったが、徐に右腕を持ち上げ目を覆った。

「一体どう言う事なんだ、司？ 何故仁があれを持っているんだ？ どうして何にも言ってくれなかった？ どうして死んだ？」

両目を覆い隠した腕の下から、一筋の涙が零れ落ちる。

薄暗いホテルの一室で、ノートパソコンのディスプレイの明かりに照らされた香苗の涙がキラリと光を放った。

第40話：母は強し

仁と香苗が再会した翌日、外は暑いからと家でテレビを見ながら談笑したりと2人だけの時間を過ごしていた仁と亜矢の2人。

そこへ峰からの連絡が入った。曰く、ファツジ出現と言う。

折角の2人だけの時間を邪魔され、不機嫌になる仁を宥めつつ亜矢が現場へ赴くと、そこに居たのは先日取り逃がしたメガネウラファツジだった。

「あつ、あいつツ！……昨日逃がしたファツジです！」

「じゃ、楽に倒せるかな。一度は逃げるような奴だし」

「今度は逃がしません！」

「変身！」

〈Open the door〉

今度は二人掛りで確実に仕留めようと同時に変身し、メガネウラファツジに向かって行くデйнаとルーナ。

メガネウラファツジは2人に気付くと、破壊活動を止めて2人と向き合った。

「待っていたぞ、仮面ライダー」

「また派手に暴れてくれたね。折角ゆっくりしてたつてのに」

「今度こそ倒します!」

即行で倒そうと息巻く2人だったが、メガネウラファツジは臆した様子を見せなかった。

「デйна……お前の相手は俺ではない」

「は?」

突然のメガネウラファツジの言葉に、デйнаが首を傾げると出し抜けに横合いからヘテロが飛び出しデйнаをルーナから引き剥がした。

「アンタの相手は私よ」

「くっ!? お前——!」

「さあ、私を満たして」

「仁くん!?!」

「お前の相手は俺だ」

ヘテロの攻撃に否応なく引き剥がされていくデйнаを、ルーナが援護しようとするがその前にメガネウラファツジが立ち塞がる。こいつを何とかしないとデйнаを援護する事も儘ならないようだ。

「邪魔すんじゃないわよ!」

立ち塞がるメガネウラファツジに飛び掛かろうとするルーナだったが、その前にメガネウラファツジが思わぬ行動に出た。

何と自ら変異を解除したのだ。

「——えっ!?!」

異形の下から現れたのは白人の男性だった。鍛えられた肉体の白人男性は、ルーナに向けて不敵な笑みを向ける。

「昨日の礼だ。覚悟してもらおうぞ」

「……ふん! 昨日私に追い返されたくせに」

「今度はそうはいかない」

そう言った男性の背後から、もう一人の白人男性が姿を現した。その男性は何と、目の前に居る男性と瓜二つの姿をしていた。

「……は?」

「仮面ライダーナ、お前は俺達ソニック兄弟が倒してやる」

〈MEGANEURA Leading〉

「進生!」

〈Transcription〉

ソニック兄弟と名乗った双子の白人男性達は、同じ動きでベクターリーダーを使い変

身する。

アンダースーツに装甲を纏った、トンボモチーフの戦士。片方は赤、片方は青だ。目の前に立ち塞がる2人——レッドインパクトとブルーインパクト——を前に、ルーナは仮面の奥で冷や汗を流さずにはいられない。

レッドインパクトとブルーインパクトは、マントの様な背中の中を翼を広げると一瞬でルーナに接近してきた。

「ッ!?!」

予想以上の速さ、ファッジの時以上だ。あの時は手を抜いていたのかそれともベクターリーダーを用いた事で能力が向上したのかは分からないが、とにかく2人は一瞬でルーナに接近すると一糸乱れぬ動きでルーナに飛び蹴りを喰らわせた。

「くっ!?!」

咄嗟に防ぐルーナだが、加速と全く同じタイミングで同じ部位に受けた蹴りは想像を絶する威力で防ぎきる事は出来なかった。防御ごと蹴り飛ばされ、ビルの壁に叩き付けられてしまう。

「あぐうっ!?!」

蹴られたダメージと叩き付けられたダメージで、地面に倒れ呻き声を上げる。

そんな彼女の前に降り立つ2人は、同時にベクターリーダーを向けると同じタイミン

グで引き金を引いた。2人が銃口を向けたのを見て、ルーナは咄嗟に転がって放たれた銃弾を回避する。

転がった先で立ち上がり、リプレッサーショットを抜き応戦するルーナだったが、一糸乱れぬ動きで翻弄され狙いが定まらない。一歩間違えれば互いにぶつかってしまう様な動きで動き回る様子は、まるで航空ショーで空を飛び回る飛行機の様だ。

「狙いが、付けられない!」

翻弄され動きを止めたルーナに、レッドインパクトとブルーインパクトは容赦なく襲い掛かる。前後、左右、全く別々の方向から同時に襲い掛かる2人の攻撃は、防ぐ事も難しい。

「うあつ!?! ぐうつ?! げ、ほつ?!」

高速で縦横無尽に動き回る2人の攻撃に、ルーナは為す術なく体力を削られ遂にはその場に膝をつく。

「う、ぐう……」

動きを完全に止めたルーナに、しかし2人は容赦しない。膝をついたルーナを集中砲火で次々と銃弾を叩き込む。

「あああああああああああああつ?!」

動けないルーナに2人の銃撃を回避も防御もすることは出来ず、反撃も儘ならない中

銃弾を次々と喰らい悲鳴を上げる。悲痛な悲鳴を上げ、体を穿つ銃弾に痙攣したような不格好なダンスを踊るルーナは、銃弾が止んだ時には綺麗な部分が全くなかった。全身の装甲がボロボロに傷付き、アンダースーツはどこどころ破れて血が滲んでいる。

「あ、う……………」

漸く銃撃が止むと、ルーナはその場に前のめりになって力無く倒れる。それと同時に変身が解除され、その場には変身が解除されて尚全身ボロボロな状態の亜矢がその場に横たわっていた。

「うう……………」

「あ、亜矢……………大丈夫？」

「（な、何とか……………って、言いたいところだけど……………ちよつと、キツイ……………かな）」
体のあちこちが傷だらけで、手足に力が入らず立ちあがる事も儘ならない。

下に恐ろしきのはあの2人のコンビネーションだ。全く同時に攻撃してくるので、どちらか片方を対処してももう片方の攻撃をどうしても喰らってしまう。

一体どれだけ訓練すればあそこまでの連携を手に入れられるのか。嘗て真矢が1人の人間として生きていた頃も、亜矢とここまでのコンビネーションは出来なかった。

亜矢が疑問を抱いていると、彼女の前に立った2人が口を開いた。

「俺達の前には、仮面ライダーも大した事ないみたいだな」

「無理もない。俺達のコンビネーションに勝てる奴なんていないからな」

「当然だ。俺達は特別なんだ」

「ああ、特別だ」

「どう言う、意味ですか？」

しきりに特別を強調する2人に、亜矢が思わず疑問を口にするのとレッドインパクトはしゃがんで手を伸ばし、彼女の髪を掴んで引つ張り上げた。

「ああっ!？」

髪を引つ張られる痛みに悲鳴を上げる亜矢に、レッドインパクトは顔を近付ける。

「俺達は、会社に改造された双子なのさ」

「そう、一卵性双生児の特性を活かして、俺達は精神を同調する実験に使われた」

「俺達以外にも似たような奴が何人も居たが、生き残れたのは俺達だけだった」

「そして生き残った俺達は力を手に入れたのさ。全く同じ事を考え、相手の行動が手に取るように分かる」

「つまりお前が相手をしていたのはただの2人組じゃない。二つの体を持つ1人の人間なんだよ」

驚愕の事実には亜矢は目を見開いた。

彼ら2人がそんな非道の実験の被験者だったという事、その実験で多くの人々が犠牲

になった事。何より、彼らはそんな実験に使われながらも傘木社に従っている事に対して、亜矢は驚かすにはいられなかった。

「なん、で?……何で、あなた達はそんな目に遭っても尚、傘木社に従えるんですか?

一歩間違えれば、あなた達だって命は無かつたんですよ?」

亜矢は純粋な疑問を2人にぶつけた。それに対する、2人からの返答は嘲笑であつた。

「何で? 分かり切つた事を聞く」

「簡単な話だ。もう俺達には、会社しか居場所がないからだよ」

「え?」

「俺達は実の両親に売られた」

「少なくともそう聞かされた」

「嘘か本当かは知らん」

「知る気も無い」

「そんな俺達の居場所は、もう傘木社しかない」

「だから従うんだ」

交互に話すレッドインパクトとブルーインパクトに、亜矢は底知れぬ恐怖を抱いた。

この2人は確実に洗脳されている。それも生まれて間もない赤子の時分から、この年齢

になるまでの長い年月を掛けてじつくりとだ。

こんな事を平然と行う傘木社と、その所業により生まれたと言つても過言ではないこの2人は、最早人間と呼べるのだろうか？

亜矢が慄いていると、レッドインパクトが手を離して彼女を解放した。

「うっ——!?!」

突然解放されて、重力に引かれ地面に倒れ伏す亜矢。レッドインパクト達は倒れた彼女に向けて銃口を向けた。

「それじゃあさよならだ、仮面ライダー」

「安心しろ。もう1人もすぐに連れて行ってやる」

「ッ!?!」

2人が引き金に掛けた指に力を込める。それを見て亜矢は思わず目を瞑った。体は満足に動かず、避ける事は叶わない。

最早これまでと亜矢が殆ど諦めたその時、2人の横合いから駆けてきた香苗がブルーインパクトに向けてドロップキックを放った。

「よいしょっつと」

「ぬおっ!?!」

「おわっ!?!」

ブルーインパクトが蹴り飛ばされると、その隣に居たレッドインパクトにぶつかり結果2人揃って亜矢から離され地面に倒れる。目前に迫っていた死が遠退いた事と、それを成したのが香苗であるという事に亜矢は目を丸くした。

「え？　じ、仁くんのお母さん!？」

「よつと」

驚く亜矢を尻目に、香苗は亜矢に肩を貸すとその場から離れて行く。当然背後からはレッドインパクト達が逃がすまいと銃口を向ける。

「逃がすか!？」

「これあげるよ」

香苗は亜矢を引き摺りながらレッドインパクト達に向け何かを放り投げる。放り投げられたのは火のついた爆竹。導火線の火が爆竹に届いたタイミングは爆竹がレッドインパクトの眼前を落下しつつある瞬間。

着火した爆竹が眼前で激しい音を立てて弾けた。決してダメージのあるものではないが、それでもすぐ目の前で起こった爆発は、例え一つ一つは小さくとも目くらましの効果は十分にある。

2人は爆竹の爆発に怯み、射撃を中断し香苗が亜矢を連れて逃げる距離を稼がせてしまった。

「くそっ!! 何だあの女は!」

「こんな虚仮脅しで、逃げられるとでも思ったのか?」

多少距離が稼げたとは言え、相手は速度に勝るメガネウラの能力を持っている。一度飛んでしまえば、その速度は人間の走る速度など容易く凌駕する。と言うか、恐らく普通に走る速度も上回っているだろう。

ましてや人一人を支えながらでは。

案の定、香苗と亜矢はあつという間に追いつかれ回り込まれた。前方をレッドインパクト、後方をブルーインパクトに挟まれ、退路を断たれる。

前後を挟まれた事に、亜矢は覚悟を決め自分の足で立ち香苗を逃がそうとした。

「逃げてください……ここは、私が——!」

「おいおい、無茶を言うんじゃないよ。そんなボロボロの状態で何が出来るって言うんだい? 無駄死にするのが関の山だぞ」

「それでも、仁くんのお母さんを巻き添えにする訳にはいきませんから……」

「古今東西、この手の輩は首を突っ込んできた人間も見逃さないものさ。もう手遅れだよ」

ならば尚の事逃げてくれと願う亜矢だったが、香苗の顔には諦めの色が浮かんでいない事に気付いた。彼女はこの状況を打開できると思っっているのだ。

「一体どうやって？」

「もう逃げるのは終わりか？」

「ん……そうだね、そろそろいい塩梅だろう」

「何？」

「やれやれ、世話の焼ける息子だ………仁！ いい加減そろそろこっちに来たらどうだい！」

「言われなくても分かってるよ」

〈A T P B u r s t 〉

突如として、レッドインパクトの背後からケツアルスピノフォームのダイナが飛んできて、エネルギーを充填した両脚でレッドインパクトを挟むとブルーインパクトに向けて放り投げた。

「何いっ!?!」

実はダイナは、ルーナが悲鳴を上げた時にはこちらに来ようとしていた。だがヘテロ

が邪魔をしてきた為、なかなかルーナの……亜矢の救助に向えなかったのだ。

それを遠くから見ていたのが香苗だった。彼女はデイナがなかなか亜矢の元へ向かえないのを見ると、彼がヘテロを振り払うまでの時間を少しでも稼ぐべく亜矢の救助に向かったのだ。

香苗の助力により何とかデイナはこの場に来る事が出来た。彼は強化した脚力でレッドインパクトとブルーインパクトを亜矢達から引き離すと、返す刃で後方に両脚蹴りを放った。背後からヘテロが追ってきていたからだ。

「デイナッ!!」

「お前にはこつち」

「くっ?!」

〈TURTL E B u r s t〉

デイナのノックアウトクラッシュとヘテロのシエルブレイカーがぶつかり合う。拮抗する2人の必殺技だったが、デイナはそこに更に更に回転を加える事で技の威力を増強。決るような攻撃にヘテロのエネルギーの甲羅は砕け散り、彼女を大きく蹴り飛ばした。

「ぐあああああつ?!」

蹴り飛ばされたヘテロは自動販売機に激突し、破壊された自動販売機からまだ無事な

缶やペットボトルが雪崩の様に吐き出された。

地面に散らばる缶やペットボトルを、ヘテロは踏み潰しながら立ち上がった。

「デイナ……デイナア——!? もつと……もつと私を満たさないよ!? 私は……まだまだ、食い足りないわ!？」

「——しつこいなあ。相手してやっても良いけど……今はそれどころじゃないし」
振り返ればレッドインパクトとブルーインパクトも体勢を立て直しつつある。亜矢が満足に戦えず、S・B・C・Tもまだ来ない。そんな状況で更に香苗まで守りながら3人を同時に相手にするのは流石に骨が折れる。

そんな状況で、デイナが選んだのは撤退であった。一応あいつらもある程度は痛めつけた訳だし、戦う相手が居無くなれば引き上げてくれるだろう。よしんば引き上げなかったとしても、時間が経てばS・B・C・Tが来る。流石のヘテロも消耗した状態でスコープ達の相手をするのは酷だから退いてくれる筈だ。

「ちよつと我慢してね」

「わっ——!」

「おお?」

デイナは亜矢と香苗、2人を両脇に抱えると翼を広げて空へと飛び、大学のラボへと向かって飛んで行った。

下からはヘテロ達が銃撃してくるが、デイナは下からの攻撃を難無く回避して逃げお
おせたのだった。

傘木社からの刺客から逃げた仁は、とりあえずラボへと入った。今はまず亜矢の怪我
の手当てが必要だ。病院に向かうのも考えたが、こちらは変身しながら入っても騒ぎに
ならない。

ラボで変身を解き、香苗を下ろし亜矢をソファーに寝かせる。すると彼が来るのを
待っていた峰が救急箱を持ってやって来た。

「双星さん、大丈夫ですか？」

「いつつ……何とか」

峰は一瞬香苗に目をやったが、まずは亜矢の手当てが先と傷口を消毒して包帯や絆創
膏を貼る。

その横で、白上教授が仁に香苗の事を訊ねた。

「今回も大変だったようだね。ところで門守君、こちらの女性は？」

「俺の母さんです。母さん、こちら俺が所属してる研究室の教授の白上教授」

仁が香苗を紹介すると、白上教授は軽く目を剥き峰は亜矢への手当の手を止めて香苗の事を見た。自分が注目されている事に対し、香苗は顔色一つ変えず白上教授に軽く頭を下げた。

「どうも。仁の母、香苗です。ウチの息子が世話になつていているそうで」

「いえいえ、こちらこそ。彼にはとても助けられています」

仁の母と言う割には丁寧な挨拶に、白上教授も紳士的に応えた。

一見するとごくありふれた教授と、学生の保護者の挨拶に見える。だが峰は、一瞬香苗が白上教授に険しい表情を向けた事に目敏く気付いた。

「？……………」

何で香苗が白上教授にそんな目を向けるのか分からなかった峰だが、考えてみれば白上教授は仁を戦いに巻き込んだ張本人。

母として、息子を危険に巻き込んだ原因に対しては何かと思うところがあるのだろうか
と1人納得し亜矢への手当てを再開した。

「今回も随分派手にやられましたね」

「面目無いです。折角、ルーナの強化までしてもらったのに……」

「気にする事ありません。双星さんはよく頑張っています」
「でも……」

幾ら慰められても、やはり現状で亜矢が足を引つ張っている感はどうしても否めなかった。ありきたりな言葉だが、力が欲しい。

実を言うと、当てがないと言う訳でも無かった。生憎と知識と技術の足りない亜矢と真矢ではどうしようもないが、仁と峰であれば何とかクリアできそうな当てが。

「ねえ仁君、先輩？ ルーナで使うキャットベクターカートリッジだけどき、これをもつと強化する事って出来ないかな？」

「どう言う事です？」

「ヘテロが使うカメとワニのベクターカートリッジは、古生物のDNAから現代にも生きてる生物のDNAを強化したじやない？ そんな感じに、このキャットベクターカートリッジも強化できないかなって」

真矢の言葉に、仁は顎に手を当てて考え込む。確かに、ネコ科の動物の中には過去に滅んだが現代よりもずっと強力な力を持つものが居た。その能力を、遺伝子に刻まれた歴史から引き出す事が出来れば……。

「出来ない？」

「それは……やってみない事には、何とも……」

「…………やる価値はあると思う。ただ、制御が難しくなるかもしれないって言うリスクはあるよ……」

「上等よ。仁君だつて頑張つてるんだから、私達だつてやってやるわよ。ね、亜矢？……………はい。覚悟は出来ています！」

傷付きながらも、強い意志を宿した目に仁と峰は亜矢と真矢の覚悟が本物であると、頷き合うと早速作業に取り掛かった。

仁がケツアルコアトルスとスピノサウルス、そしてキヤットベクターカートリッジを機械に繋ぎ、キーボードを叩き二つの恐竜ベクターカートリッジから古生物の遺伝子の特徴——所謂因子の様なものを解析。それをキヤットベクターカートリッジに当て嵌め、ネコ科の動物の遺伝子の奥深くに眠る絶滅したネコ科動物の因子を引き出していく。

仁が解析した因子を、峰がアダプトキヤットに入力し太古の昔に絶滅したネコ科動物の力を引き出せるようにする。

それは決して簡単な作業ではなく、ディスプレイを見る仁の額にも汗が浮かんでいた。それほど集中しているのだ。

頑張つてくれている2人に感謝と申し訳なきを感じた亜矢は、体力が回復したら2人をサポートする事を決め今は体を休める事にした。目を閉じ、軽く仮眠をとつて疲れを

癒す。

その様子を見た香苗は、彼らの邪魔になつてはならぬとラボを後にした。

「仁、私はもう少しこの教授と話したいことがあるから、少し席を外すよ?」

「ん、分かった」

「それじゃあ白上教授、行きましょう」

「そうですね。では……」

香苗は白上教授と共にラボを後にした。今日は土曜日と言う事もあつて、表の研究室の方には誰も居ない。

最初に白上教授がラボから出て、その後には香苗が続く。ラボから出ると、香苗は扉をしつかりと閉め研究室内には誰も居ない事を確認した。

「それで、話と言うのは——」

白上教授が全てを言い切る前に香苗が動いた。

香苗は素早く白上教授を壁に押え付けながら近くの机のペン立てからボールペン一本引き抜くと、それを白上教授の右の眼球の目前に突き付けた。あと少し彼女が力を入れれば、ボールペンが白上教授の右目を潰していた。

「うっ!?!」

突然の香苗の行動に為す術なく押さえつけられた白上教授が、何をと彼女に問う前に

彼女が口を開いた。

「何故あの子があれを持っているの？」

「あ、あれ？」

「あのドライバー……あれの基礎設計図をあの子の父……私の夫の司が持っていた。それを何故、あなたが持っていた？」

香苗の言葉に、白上教授は目を見開き絶句した。

何も答えない白上教授に、香苗は苛立ちを隠さず更に問い詰めた。

「答えて……あれを何処で手に入れたのかを」

司が何故、デйнаドライバーの設計図を持っていたのかは香苗も知らない。司が作ったものなのか、それとも別の誰かが作ったものなのか。

だがもし、あの設計図の存在が夫の死に関わっているのなら……そして白上教授がそれを知っているのなら、ドライバーを渡された仁も無事では済まないかもしれない。

そう思うと香苗は心穏やかではいられなかった。

絶対零度の視線とはこの事か。香苗の視線は冷たいが、しかしその奥には地獄の業火もかくやと言う灼熱の怒りの炎が燃えていた。

それは例えるならば絶対零度の炎。香苗は冷静に怒っていた。

背筋が凍るような視線に晒されながら、白上教授は香苗の目を見つめ返しながら答え

た。

「た、確かに、デйнаドライバーは正確には私が作ったものではありません。あれは………貴女の夫である、門守 司君が作ったものです」

「その事……仁は？」

「知らせていません。司君からも、自分とドライバーの事は誰にも言わないでくれと、頼まれていたので……」

嘘を言っているようには見えない。ただまあ、この状況で尚嘘を吐けるだけの演技を白上教授がしていたら、それはそれで大したものだが。

「もう一つ聞かせてくれ。貴方は仁と司が親子である事は？」

「司君からは、息子が居るなどは聞いていませんでした。ですので、この大学で彼の名前を見た時は、まさかと思いました……」

白上教授からの答えに、香苗の視線が鋭くなる。射殺するような視線を、白上教授は正面から受け止めた。

「——はあ」

暫く睨み合い、香苗は溜め息を吐くと力を抜きボールペンを下ろして白上教授を解放した。精神的物理的な圧力から解放され、白上教授は安堵の溜め息を吐いた。緊張から解放されたからか、全身から汗がドツと噴き出した。

流石に歳だからか、先程の二重の圧力が体に負担を掛けたらしい。白上教授は少し苦しそうだ。それを見て香苗は彼の背を擦った。

「……申し訳ない。少し気が立っていたみたいだ。あれは、司……夫の形見みたいなものだから」

「いえ、人の親として当然の反応です。流石に押え付けられて脅されるとは思ってもみませんでした」

香苗は世界中を飛び回り、危険な場所にも足を運んでいる。そこには自然の脅威だけでなく、力が全てを支配する人間同士の諍いに遭遇する事もあった。

そんな状況を何度も潜り抜けてきた香苗は、こう言った過激な手段も必要とあればとる胆力を持っていたのだ。特に今回は、息子と今は亡き夫に関わる事。意地でも何かしら情報を引き出そうと、彼女も必死だったのである。

その結果は殆ど空振りに終わってしまったが。

「ところで一つお聞きしても？」

「何ですか？」

「奥さんはその設計図をどうして知っているんですか？ 内容的に司君の持つ情報の中

でトップシークレットの筈……」

「単純な話です。司の死後、遺品整理してたら短い手紙と一緒にデータが入ったメモ

リーが大事に保管されてたんです。曰く、『誰にも見せず、大切に保管してくれ』……と」
見つけた時は何の為の物なのかもわからなかったが、それでも亡き夫の大事な形見と
言う事で手紙に書いてある通り誰にも見せる事無く大切に保管していた。それこそ、普
段の冒険にも肌身離さず持ち歩いてだ。これの存在は仁にすら話してない。

しかし仁も最早立派な関係者。近々、これの存在を彼に話すべきだろうと香苗は心に
決める。

「——仁は、あなたの事を信頼している。あの子が信じるなら、私もあなたを信じよ
う。あの子の事、宜しく頼みます」

「はい……勿論です」

誰も居ない研究室の中で、香苗と白上教授が硬く握手を交わした。

自分の母親と恩師がそんな一歩間違えば流血沙汰になっていたようなやり取りをし
ていたとは露知らず、仁は亜矢のルーナを強化する為にベクターカートリッジの強化の
為に頭を働かせていたのだった。

第41話：不完全な協和

仁と峰によるキャットベクターカートリッジの強化は、仁の脅威的頑張りによって何と3日で終了した。この結果に誰よりも驚いているのはこれを成した仁自身。彼もこんな短期間に出来るとは思っていなかったらしい。

「門守君、成長してますねえ。私と白上教授じゃここまで早くは出来なかつたですよ」
「俺自身ビックリです」

仁の後ろで亜矢が自分もと頷いている。彼女は時々後ろから仁の作業している様子を覗き見ていたが、彼の操作によつて動くディスプレイは早送りしているのかと思つてしまう程に速度で様々なデータが流れており、もう彼が何をしているのかを理解するのは亜矢には不可能だった。

「とりあえず、これでルーナは強化されたと思つていいんですよね？」
「そう言う事になりますね。デйнаと違つて、新たに強化された形態がデフォルトになるのでこの力を使いこなせないと言ひますが……」

峰の手元のディスプレイには、予想されるルーナの強化形態が表示されている。

名称はルーナ・ユナイト。全体的なシルエットはあまり変化はないが、手足の装甲が

減り、全身の装甲に黄色いラインが加わっている。

武装面は大きく変わっており、両腕のアームブレードが無くなり代わりにリプレックスショットが銃身下部に刃を持つ『リプレックスショットⅡ』に変化していた。固定だったアームブレードに比べて、よりフレキシブルな動きによる戦いが期待できるだろう。勿論ライフルモードは残っているので、亜矢の得意とする射撃能力が低下する事は無い。

新しくなったルーナは今まで以上に恐竜ファッジ相手に戦えるだろう。頼もしい戦力になるに違いない。

唯一の懸念があるとすれば、ちゃんと制御できるかどうかである。何分太古に絶滅したネコ科の動物……スミロドンの遺伝子を呼び覚ましているのだ。仁の時の様に、精神を食われて暴走してしまわないとも限らない。

「もし危ないと思ったらすぐに変身を止めてね」

「分かっています。でも多分大丈夫ですよ」

「どうして？」

「ん〜……何となく、そんな気がするんだ」

ハッキリとしない真矢の答えに、峰は何とも言えない顔になる。そんな事で大丈夫だろうかと不安になったのだ。

しかし仁は違った。彼は真矢の言葉にどこか納得すると、強化されたベクターカートリッジを彼女に手渡した。

「……もし何かあったら俺がサポートするから、心配しなくていいよ」

「うん！ 最初から信じてる」

屈託のない笑みを浮かべる真矢に、仁も釣られて頬を緩める。

2人の空気にてられ、峰が明後日の方を向きながら手で顔を扇いだ。

そこへ拓郎がやって来た。

「ここに居たか、門守」

「瀬高先輩？」

「お前のお母さん、来てるみたいだぞ？」

「え？ また？」

拓郎の言葉に仁も亜矢も首を傾げる。それと言うのも、ここ最近香苗が頻繁に大学に顔を出しているからだ。

仁が表の研究室の方に向かうと、そこには既に香苗がソファアに座り教授の淹れた紅茶を飲んで寛いでいた。

「おお、仁。元気にやってるか？」

「それ昨日も聞いた。どうしたのさ最近？ 次の冒険に行かなくていいの？」

「今は依頼が無いからね。それに冒険にも少し疲れたから、今は羽休めの最中だ」
「それなら家に帰ればいいのに」

「おいおい。我が子の顔を毎日見る、これに勝る癒しは親には無いんだぞ?」

香苗の言葉に仁は思わず溜め息を吐く。何を言ってもものらしくらりと躲されてしまう。今の彼女には何を言っても無駄だ。

それに……実を言うと仁もまた毎日香苗の顔を見て安心してゐる節はあった。香苗は帰ってきててもすぐに次の旅に出してしまう事が多く、あまり長い期間一緒に居れない事が多かった。

現在香苗は大学の近くにあるホテルに宿泊しており、仁の家の厄介になる事はしていないが、それでも母が身近に居てくれると言う現状は仁に不思議な安心感を齎していた。

決して甘えん坊ではない仁だが、いやだからこそ血の繋がった家族が近くに居てくれると言う状況が居心地良いのだろう。

これは垂矢には出来ない、香苗にしかできない事だった。

「で、実際どうしたの? 依頼が無くて冒険に行かないつてのは分かったけど」

それはそれとして、暇だからと言え態々大学に何度も足を運ぶなど普通ではない。仁の顔を見たいと言うのは嘘ではなくとも理由の全てでは無いだろう事が容易に想像で

きた。

きつと何か理由がある筈だ。

そう思つて仁が問い掛けると、香苗は紅茶を飲み干してソファから立ち上がった。

「ん……ちよつと気になる事があつてね。ここじやなんだ、席を外そう」

香苗は仁に手招きして研究室から出て行く。その後仁が続き、亜矢は家族水入らずの話だろうと研究室に残ろうとした。

が、香苗は亜矢が付いてきていない事に気付くとドアから顔を覗かせ亜矢にも手招きをした。

「何をしているんだい？ 君もおいで」

「え？ 私もですか？」

「仁との今後について、色々話を聞かせてくれよ」

「んなつ!? ちよつ……もうっ!」

赤面しながら亜矢が慌てて香苗の後に続く。

亜矢を振り回す香苗の様子に峰や拓郎を始めとした研究室の面々は、香苗と仁の血の繋がりを確かに感じるのだった。

仁と亜矢が香苗により連れ出されたのは、大学の外にある小さな喫茶店だった。店の規模が小さいからか、3人の他に客は誰も居ない。

席に着くと香苗は早速コーヒを注文し、2人にも注文を促した。

「母さんさつき紅茶飲んだばっかじゃん？」

「店に入って何も頼まないのは失礼だろう？ それに今はコーヒを飲みたい気分なんだ」

そう言つて香苗はカップに入ったコーヒを啜る。その様子に仁は溜め息を吐き、亜矢は苦笑した。

だが亜矢の中に居る真矢は違う反応だった。彼女は香苗の様子に何処か違和感を感じ首を傾げていた。

「ん〜？」

「(真矢、どうかしたの?)」

「いや……何て言うか、う〜ん？」

違和感はあるのだが、それを上手く言葉で言い表せず唸るしか出来ない。

とりあえず香苗に促されるまま、仁と亜矢はカフェオレを頼んだ。客が3人しか居ないからか、カフェオレは直ぐにやって来る。

2人がカフェオレに口を付けた頃を見計らって、香苗は口を開いた。

「ところで2人共。体の方は大丈夫かい？」

「体？ 風邪なら別に引いてないけど？」

「私も特には……」

2人の答えに、香苗は手をヒラヒラ振って応えた。その様子は何処か不満そうだ。

「そうじゃないよ。2人が健康そうなのは見れば分かる。私が聞きたいのは、そう言うのとは別の意味で何か違和感は無いかという話だ」

「それは、どう言う？」

香苗の言いたい事がイマイチ分からず首を傾げる亜矢に対し、仁は黙ってカフェオレを口に流し込んでいる。

「はつきり言つて欲しいかい？ 肉体が変異したりしてはいないかと聞いているんだ」

言われて仁は動きをピタリと止め、亜矢は小さく息を呑む。同時に亜矢は、真矢が感じた違和感の正体に気付いた。

今の今まで気付かなかったが、香苗の纏う雰囲気は何処か険しいのだ。香苗自身がそれを悟られないようにしていたからか、気付くのに時間が掛かってしまった。

「……何でそんな事聞くの?」

「気にもなるさ。2人は変身の際、疑似的にファッジの様になっているのだろうか?」

「で、でも、ドライバーを使っていればベクターカートリッジの悪影響はないと白上教授も仰ってましたし……」

「でもそれは100%じゃない筈だ。あれほどの力を発揮しているのに、完全にノーリスクなどと言う事はあるまい。特に仁は長い事変身を繰り返していると言うんじゃないか。それも一度に二つ使って。負担や影響が蓄積していないとは限らないだろう」

言われてみれば確かに……。香苗の言葉に領けてしまう亜矢は、隣の仁の様子を伺った。香苗の推測に、しかし仁は特に動じた様子を見せない。カップの中のカフェオレを飲み干し、カップをソーサーの上に静かに置いた。

「……俺は特に違和感を感じたりしてないよ。亜矢さんは?」

「え、あ、私も……特には……」

「もう1人の君も同じ意見かい?」

「ッ!? 真矢の事、気付いてたんですか?」

まさか真矢の存在が見抜かれていたとは思ってもみなかつたので、亜矢は軽く狼狽えた。香苗になら知られて困る事も無いだろうが、何も言っていないのに見抜かれた挙句信じてもらえるとは思ってもみなかつたのだ。

驚く亜矢の前で、香苗はしたり顔で頷いてみせた。

「この間私の前で変身した時に出てきたじゃないか。あの時にはもう気付いていたよ」
「あの時に？」

「雰囲気の違い過ぎた。素が出たと言うより、別の人格と言われた方がしつくりくる」

流石仁の母親だと亜矢と真矢は感心した。あの時、やむを得ないとは言え表に出てきた真矢を即座に亜矢と違う人格であると見抜くとは。

「ここで言い繕ったり誤魔化して存在を隠す理由も無いので、真矢は遠慮する事なく表に出た。」

「——流石は仁君のお母さんね」

「ありがとう。それで、どうか？」

「ん？ ああ、そうね。私も別におかしな感じはしてないわ。別に糸出せたり垂直の壁を登れたりするようになったりはしてないわね」

真矢がありのままに思った事を伝えたと、香苗は顎に手を当て考え込む。その姿に仁の面影を見ていると、仁が口を開いた。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「そうか？」

「そうそう。それよか、母さん暫く冒険に出ないなら久しぶりに婆ちゃん達に顔を見せ

たら？」

「そうだね〜……」

唐突に普通の話に移る、その切り替えの早さに亜矢が舌を巻いた。

……と、油断していると――

「ところで2人は何処まで進んでるのかな？　もうキスとかそれ以上の事は済ませたの

かい？」

「ブフツ!!」

唐突に仁と亜矢の関係で突っ込んだことを聞いてくるものだから、亜矢はカフエオレが気管に入り思わず吹き出してしまった。

「げほっ!!?　げほっ!!?　ちよ、仁くんのお母さん!?!」

いきなり変な事を聞かれ、思わず香苗に非難の声を上げる亜矢。それに対し、香苗はずっと抱えていた不満を告げた。

「そうその呼び方。ずっと気になってたんだよ」

「よ、呼び方？」

『仁くんのお母さん』なんて堅苦しい呼び方しないでくれよ。気軽に『お義母さん』と呼んでくれ」

「そ、それ、は――!?!」

確かに将来的にはそうなりたいと亜矢も願っている。大学卒業を機に、仁と結婚して香苗を義理の母と呼ぶ事になるだろうとも思っていた。

しかし、まだ付き合っているだけの間の状態でそこまで馴れ馴れしくして良いものだろうか。

「その、ちよつとまだ心の準備が……」

「でもどうせ将来そうなるんだろ？　なら今そう呼ぶ事に何の問題も無いじゃないか」

「そ、そうかもしれないけど……」

「ほらほら、遠慮せずに」

香苗に促され、亜矢はチラリと仁を見る。彼の目には、ちよつと何かを期待しているのが伺えた。

仁が期待しているのであれば、流石に応えない訳にもいかない。亜矢は心の中で真矢と頷き合い、顔を赤くしながら口を動かした。

「お、お……お義母、さん……」

亜矢が香苗の事を義理の母と呼ぶと、香苗だけでなく仁も満足そうな顔をした。その様子に亜矢は、仁との結婚が更に近付いた未来だと実感し頬を赤く染めながら顔を綻ばせた。

「可愛い彼女じゃないか。大事にするんだぞ、仁」

「分かっているよ」

しみじみと頷いた仁は、今度は自分の番だと亜矢の両親に挨拶をする算段を立て始めるのだった。

時は少し遡って――

傘木社本社ビル社長室にて、雄成が1人パソコンのキーボードを叩いていた。ディスプレイに映し出されているのは、ブレイドライバーに酷似したベルトの設計図。

素人目には分からないが、何処か出来に不満があるのか彼の表情は険しい。キーボードを叩いてデータを入力していくが、唐突にその手を止め背凭れに凭れ掛かった。

「……………ダメだな、これでは……………」

珍しく雄成はネガティブなボヤキを口にした。

傘木社のドライバー開発技術はここ最近で飛躍的に向上した。ブレイドライバーなどはその究極系と言っても良い。

だが実は、ブレイドライバーにはある種致命的な欠点があった。

ブレイドライバーには、ゲノムチェンジ能力が無いのである。

希美が変身するヘテロはカプトガニ・カメ・ワニの3種類の遺伝子をミックスし、更に太古の力を引き出す事でデイナの通常フォームを遥かに上回る能力を発揮できる。実を言うと、単純なスペックだけで言えばケツアルスピノフォームよりもヘテロの方が上なのだ。実際の戦闘でヘテロが敗北を喫しているのは、デイナを扱っている仁の能力によるものである。

デイナ以上のスペックを引き出せる秘訣はドライバー自体を一つのベクターカートリッジとすると言うもの。あのドライバーにはデフォルトでカプトガニのベクターカートリッジが組み込まれており、ライダーシステムと直結されている。

これにより3種類の遺伝子を混ぜ、統合する事が可能となりベクターカートリッジを2個しか使わないデイナに対しスペック上でならマウントを取る事が出来るのだ。

しかしその代償で、ヘテロには前述した通りゲノムチェンジ能力がない。カプトガニが初手から組み込まれており、他の組み合わせを作る事が出来ないのである。つまり、ヘテロには拡張性が無い。

ならば最初から使用するベクターカートリッジは2個にして、多少スペックを落とし、でもゲノムチェンジ能力を持たせればいいと言う意見もある。だが実は、現時点の傘

木社の技術ではベクターカートリッジ2個で変身するドライバーを作ろうとすると全ての能力がダイナを下回ってしまふのだ。下手をすると、使用するカートリッジ1個のルーナすら下回ってしまう。原因は恐らく、二つの遺伝子が反発し合って性能を發揮できないからだ。

この問題に対し、ブレイドドライバーは繋ぎとしてライダーシステムにカプトガニのベクターカートリッジを直結する事でワニとカメのベクターカートリッジの性能を遺憾なく發揮できるようにした。

つまりブレイドドライバーが遺伝子を3つ使うのは、単純にダイナ相手にマウントを取りたいからだけでなく3つ使わなければ性能がダイナに追いつけないからなのだ。傘木社の技術陣としても苦肉の策だった。

そしてブレイドドライバーでは“雄成の望むもの”は手に入らない。ブレイドドライバーをさらに発展させ、ベクターカートリッジ2個でも十分な性能を發揮できるようにしなければならない。

どうしたものか……そう考えた雄成の脳裏に、先日の戦闘の経緯が思い出された。

生身であるにも拘らず、亜矢を助ける為に乱入してきた香苗。

彼女の姿を思い出した瞬間、雄成はピンときた。

「彼女ならば、もしかしたら持つているかもしれないな」

雄成の口元に笑みが浮かぶ。彼はデータを保存しパソコンの電源を落とすと、電話に手を伸ばし受話器を取った。

時間は戻って、仁達は喫茶店を後にしていた。

あの後も亜矢は主に香苗によって弄りつくされ、店を出る頃には気恥ずかしさで若干ふら付いていた。足取りがどこか覚束ない亜矢を仁が支えながら歩き、その様子を見て香苗が楽しそうに笑みを浮かべる。

暑い日差しの中、仁達は大学へと向けてゆっくり歩く。喫茶店から大分離れる頃には亜矢も調子を取り戻し、自分の足で歩けるようになっていた。

「俺らは大学に戻るけど、母さんはどうするの？」

「ん、流石に私まで大学まで行く訳にはいかないし、かと言ってホテルに戻るのもつまらないし……」

「だから婆ちゃん家に一度帰ればいいのに。ホテル代だつてただじゃないだし、そろそろチェックアウトしたら？」

仁と香苗が雑談しながら歩いていると、それを後ろから見ている亜矢が周囲の異変に気付いた。

「ん……？」

辺りがやけに静かだ。歩いている人が自分たち以外に居ない。大学周りはこの時間、どちらかと言うと人通りは少ない方だがこれは異常だ。何しろ車のエンジン音ですらかなり遠くからしか聞こえない。

何かがおかしい……と言うか、ヤバい！

「仁くんッ!？」

「ん?。」

切羽詰まった亜矢の声に仁と香苗が足を止めると、周囲の物陰やビルの屋上からアントフアツジが姿を現す。

瞬く間に囲まれ、仁と亜矢は表情を険しくし香苗を間に挟んで周囲を警戒する。その際、ドライバーを取り出す事を忘れない。

だが向けられた銃口が彼らにドライバーを装着する事を躊躇わせる。

もし仁達が抵抗する意思を見せたら、彼らは即座に引き金を引く。そうなれば仁と亜

矢だけでなく香苗もお陀仏だ。

どうするか……仁が頭を働かせていると、アントファツジの間を縫って雄成とグアニ
ンが姿を現した。

雄成は仁ににこやかに笑みを向けながら手を振る。

「やあ！ 久し振りだね門守 仁君！ 会いたかったよ」

「俺はそうでもなかったけど……で、何の用？」

警戒しながら仁が問い掛けると、雄成は香苗を指差して答えた。

「私が今日、用があるのはそちらの女性だよ」

「母さんに？」

仁が思わず訝しげな顔で香苗を見ると、彼女は狙われる理由に心当たりがあるのか苦
虫を嘔み潰したような顔をしていた。

「何で母さんに？」

「門守 香苗……私は貴女の持っているデータが欲しいんだ。それさえ手に入れ
ば、この場でこれ以上事を荒立てるような事はしないよ」

雄成の提案に、香苗は服の上から懐に触れた。そこに、デйнаドライバーの基本設計
図のデータが入ったUSBメモリーが入っているのだ。

「ここで仁達を危険に晒すくらいなら——」

「ダメだよ、母さん」

「ッ!? 仁?」

「あの人が言ってるデータとやらが何なのかは分かりませんが、それを手に入れてロクな事になるとは思えません。渡しちゃ駄目です」

「亜矢さん……だが……」

渋る香苗の前で、仁と亜矢が彼女に笑みを向ける。

「大丈夫だよ、母さん」

「私達が何とかしますから」

2人は頷き合うと、銃口を向けられた状況でデイナドライバーを腰に装着した。2人が抵抗の意思を見せたのを見て、アントファツジ達が銃を構える手に力を込める。

だが彼らが発砲する事は雄成が許さなかった。理由は簡単だ。今周囲から銃撃が行われれば、下手をすれば香苗が持っているデータが流れ弾で破損してしまうかもしれない。そうなればお終いだ。

それが分かったから、仁と亜矢は変身に踏み切ったのである。

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

仁は雄成が敵に居るといふ事で、油断せず全力で行くつもりで初手から恐竜フォームを選ぶ。

一方の亜矢は、早速強化されたルーナへと変身する。

「亜矢、準備は良い？」

「勿論——！」

〈CAT Unite〉

改良型アダプトキャット改め、ユナイトキャットに強化対応型キャットベクターカートリッジを装填しデイナドライバーに装着する。香苗を挟んで互いに背中合わせになった仁と亜矢は、同じタイミングでレセプタースロットルを引き変身した。

「変身！」

〈Open the door〉

仁はデイナ・ケツアルスピノフォームに変身し、亜矢はルーナ・ユナイトに変身する。2人が変身した瞬間、アントファツジ達は一斉に引き金を引いた。その瞬間、誰にも見えない所で雄成が小さく舌打ちをした。

対するデイナは、翼を広げるとそれでルーナと香苗を包み銃撃から2人を守った。無数の銃弾が翼とデイナの装甲に弾かれる。この程度の銃弾なら最早何の痛痒にもならない。

「仁ッ!？」

「平気。それより亜矢さん、行けそう？」

「はいー！」

デイナの質問に、ルーナが力強く頷きながらリプレッサーシヨットIIを構える。それを見てデイナが頼もしそうに頷くと、彼は香苗を横抱きにした。

「3つ数えたら防御を解くよ。そしたら……」

「私が一気に撃ち返しますから、仁くんはお義母さんを」

「それじゃ、3……2……1」

宣言通り3つ数えた瞬間、デイナは防御を解くと同時に翼で上空に飛翔した。

飛翔したデイナにアントファアツジ達は銃口を向けて撃ち落とそうとするが、ルーナがそれを許さなかった。素早く狙いを定め、次々とアントファアツジを撃ち抜いていく。

ルーナからの反撃にアントファアツジ達に動揺が広がり、デイナへの追撃の手が緩む。デイナはそのまま香苗を戦いの余波が及ばない所へ運ぼうとした、その時彼にプレインジーンが襲い掛かる。

「逃がしはしないよ」

「ッ!?! くっ!?!」

ビルの壁を蹴って飛翔しつつあったデイナに迫るプレインジーンは、その手に銃剣モードのベクターリーダーを持っている。

振り下ろされたベクターリーダーの刃を、デイナは翼で防ぐ。攻撃を喰らう瞬間、プ

レインジーンは引き金を引き強烈な一撃をデイナに見舞う。

その一撃に、デイナは下に叩き落された。

「くうっ!？」

このまま地面に落下したら香苗がただでは済まない。デイナは自分を下に、翼を広げて空気抵抗で落下速度を落とすように滑るように地面に落下した。背中を削られながら地面に不時着したデイナは、それでも香苗は無傷で守り通した。

「ぐっ!?! い、つつ……」

「仁、大丈夫か!？」

「ああ、大丈夫……母さんは危ないから隠れてて」

こうなっては仕方が無い。せめて香苗には少しでも危なくない所に隠れてもらい、少しでも早くにこいつらを倒す事をデイナは心に決める。

そのデイナの前に、ベクターリーダーを手にしたプレインジーンが迫った。迫るプレインジーンに対し、デイナは拳を握り構えを取る。

それを見て、プレインジーンはベクターリーダーを腰に戻した。

「どれ、私にも君の恐竜フォームを体験させてもらおうか」

「後悔しないでよ——!？」

一方ルーナは、リップレッサーショットⅡを使ってアントファッジを次々と倒していく。元より強化前の状態で楽勝だったのだから、強化された今のルーナが後れを取る道理はない。

【いい感じね！ 次私！】

「(分かった!)」

射撃能力は何不自由ない。強化前と同じように扱える。

次は格闘戦能力だ。

「アイ ハヴ コントロール！」

亜矢と真矢は主導権を入れ替え、一気にアントファッジに接近する。リップレッサーショットⅡの銃身下部に付いた刃と蹴りを使ってアントファッジを次々と倒していく。

そこへ無数の針がルーナに降り注いだ。

降り注ぐ針に気付いたルーナは、寸でのところで針の雨霰から逃れた。

「この攻撃はッ!?!」

こんな事が出来る敵は1人しか思い当たらない。

それを証明するように、ルーナの前に1人の戦士が現れた。全身真っ黒で、赤い複眼だけが頭部で光る。右腕はそうでもないが、左腕は肩までトゲトゲの鎧で覆われてい

る。

「アンタ、グアニンね？」

「仮面ライダールーナ……邪魔はさせない！」

右手に拳銃モードのベクターリーダーを持ち、接近しながら銃撃してくるグアニンの変身した『ダークステインガー』をルーナが迎え撃つ。

序盤はルーナとダークステインガーは対等に戦えていた。いや対等どころかルーナの方が圧倒していた。身軽に動き回るルーナを相手に、ダークステインガーは追いつけない。

が、それも徐々に形勢が逆転してきた。理由は簡単だ。ルーナの動きが徐々にぎこちなくなってきたのだ。

いやぎこちなくなつたと言うのは正確な表現ではない。一言で言えば、自分の力が振り回された状態だった。

「くうっ!? 何、これ!? 体が、何かおかしい!？」

ダークステインガーに蹴りを放つが、それは力み過ぎたように明後日の方へ向け飛んで行く。それが大きな隙となり、棘を伸ばした左拳による殴打を諸に喰らってしまった。

「あああっ?!」

無防備となっていたルーナに、その攻撃は強烈だった。攻撃のダメージにルーナはその場に倒れ、痛みに体を震わせる。

そのルーナに、ダークステインガーが追撃でジェネリック・ブレイカーを叩き込もうとする。

瞬間、戦場に香苗の声が響き渡った。

「待ちたまえ!!」

「んっ!？」

今正にルーナに大技を叩き込もうとしていたブラックステインガーは勿論、アントファアツジもテイナとブレインジーンも動きを止める。

静まり返った戦場で、香苗は懐から一つのUSBメモリーを取り出し周りに見せつける。

「君らが欲しいのはこれなんだから? 欲しければくれてやる。だからさっさと消えろ」

「……良いだろう。さっさと超越せ」

香苗からUSBを受け取ろうとするダークステインガーだが、彼が近付こうとすると香苗は手に持ったUSBを地面に叩き付けようとした。

「先に君達が兵隊を引き揚げてからだ。渡した瞬間、はいさようならさせられては堪らないからね」

先に提示された交換条件。これが呑まれない場合、香苗はUSBを地面に落とし脚で踏み潰すつもりだった。

それを察したダークステインガーは、視線でブレインジーンに問い掛けた。問われたブレインジーンは、溜め息を吐くと顎をしゃくった。それを合図にして、アントファッジ達が引き下がっていった。

周囲からアントファッジが居なくなつたのを確認すると、香苗はダークステインガー……ではなく、デイナと対峙しているブレインジーンに向けてUSBを放り投げる。ブレインジーンは飛んできたUSBを片手で受け止めた。

USBを受け取ったブレインジーンは、満足そうに頷くと変身を解除した。

「確かに、受け取ったよ」

「約束だ。さっさと帰れ」

「いいとも」

言つた瞬間、雄成は自然な動作でベクターリーダーを上げ香苗に向け一発撃つた。反応が遅れたデイナにはそれを止める事が出来ず――

「あうっ?!」

寸でのところでその身を盾にしたルーナにより、香苗は九死に一生を得た。急所を狙つて放たれた銃弾は大ダメージとなり、ルーナの変身が解除され倒れそうになつたと

ころを香苗に受け止められた。

「おっと!？」

「真矢さんッ!? お前——!？」

卑怯な攻撃にデイナが雄成に怒りを向けるが、その瞬間には雄成の傍にやって来たダークステインガーが彼を抱えて近くのパルの屋上へと移動していた。

「いやすまないね。今のはちよつとした保険と言う奴だ」

「保険?」

「こうすれば君らは私達への追撃よりも守る事を優先させるだろうと思つてね。それでは失礼するよ」

雄成はダークステインガーに抱えられ一飛びでその場から消えていった。

後に残された3人。デイナは変身を解除し真矢は痛みに顔を顰めながら立ち上がる。

「ゴメンなさい、私の所為で……」

折角ルーナを強化したと言うのに、その性能を發揮できないどころか振り回され、足を引つ張つてしまった。自分が情けなくて泣きたくなつた。

しかし香苗はあつげらんとした様子だった。

「気にしなくて大丈夫だよ。何の問題も無い」

「でもデータは——!？」

真矢が声を荒げかけたその時、香苗は懐からUSBを取り出し真矢の鼻先に掲げた。それを見て真矢だけでなく、仁も目を見開いた。

「……………これは？」

「こつちが本物のデータ。さつき彼らに渡したのは偽物さ」

そう言つて香苗はしてやったりな笑みを浮かべる。それをみて真矢は脱力してその場に崩れ落ち、仁はそんな彼女を慰めた。

「それならそうと、早く言つてくれれば……」

「いやすまないね。先に言えれば良かったんだけど、そんな暇も無くつてさあ」

「まあ、いいけど。でもそれすぐバレるかもね」

「そうだね。今の内に対策会議だ。さ、早く大学へ戻つて話し合おう」

真矢が崩れ落ちた原因は自分にあると言うのに、香苗はマイペースにそう言つて仁と反対側から真矢を支えて大学へと向け歩みを進めた。

血の繋がった母でありながら、周りを振り回す困った母に仁も大きな溜め息を吐かずにはいられないのだった。

第42話：彼女達は2人で1人

仁は香苗を秘密のラボへと連れて行った。暫くは誤魔化せると言っても、あまり長くは無いだろう事は容易に想像できる。少しの間とは言え、隠しておいた方が良い。

ラボに入ってきた3人に、事情を聞いた白上教授が気分を落ち着かせようと紅茶を淹れる。

出された紅茶で一息ついた仁は、香苗にずっと気になっていた事を訊ねた。

「ところで母さん、連中が狙ってたデータって何なの？」

「ん？」

「それ、私も気になってました。何でお義母さんは傘木社に狙われたんです？」

仁と亜矢から投げ掛けられた質問に対し、香苗は直ぐに答える事はしなかった。黙ってカップを傾け、温かい紅茶を喉に流し込むだけだった。

そんなに言い辛い事なのだろうかと仁が訝しんでいると、横から峰が割り込んできた。

「それより双星さん、新しくなったルーナが満足に動けなかったって本当ですか!？」

「うえっ!? あ、はい……すみません」

「いえ、双星さんを責めてる訳じゃないんです。ただどう言う状態だったのかを聞きたくて」

「えっと、そうですね……」

状況を知らなかったとは言え、峰の乱入により大事な事を聞く事が出来なくなつたことに仁は思わず顔を顰めた。

だがルーナ・ユナイトが満足に戦えないのはそれはそれで香苗を守る上で問題だ。なので峰の行動には目を瞑り、ルーナの問題改善の方に思考を切り替えた。

「何と言うか、反応が敏感すぎたって感じなんです。動こうと思つた時には体の方がもう動いてて、それが頭の中で思い描いた動きと違うせいで変な行動になつちやつて……」

「うーん、反応速度が双星さんに合つて無い感じですか？」

峰は椅子に座り腕を組んだ。予想していた問題は暴走だが、それが起こらず体を動かす上での問題が起こるとは彼女にとつても予想外の事であつた。

この問題は厄介だつた。対処法としては前のルーナに戻すか、亜矢と真矢自身の反応速度を上げてもらうしかない。この場合一番現実的なのは言うまでも無くルーナのダウングレードだが、それをすると結局ルーナが傘木社との戦いで足手纏いとなつてしまふ。かと言って反応速度の底上げなど、一朝一夕に出来る事では無いだろう。専用の訓

練を長時間熟す必要がある。

どう対処すべきか？ 峰が頭を悩ませ、煙が出るのではと言うほど脳をフル回転させた時、思わぬところからアドバイスが飛んできた。

「1人でダメなら2人でやれば良いじゃないか」

「え？」

アドバイスを口にしたのは香苗だ。唐突な香苗の言葉に、亜矢と峰は揃って首を傾げる。

「2人でつて……私と真矢でつて事ですか？」

「そうさ、他に誰が居る？」

「でも私と亜矢、普段から2人で戦ってるんですけど？」

香苗の言葉の真意が理解出来ず、亜矢と真矢が疑問を口にする。

それに対し、香苗はカップを横に置き足を組んで答えた。

「それは飽く迄交代交代でつて事だろう？ そうじゃなくて、一つの体を二つの思考で動かせば良いんじゃないかって話さ。この問題、一言で言えば肉体に思考や精神が追いついていないって事なんだろう？ それなら、2人分の思考で体を動かせば、反応速度もついて行けるようになるんじゃないかい？」

言いたい事は分かる。1人では追いつけない反応速度を、2人分の反応速度で補おう

と言うのだ。それはある意味で本当に2人で1人の人間となって戦うという事。

頭で理解は出来たが、しかしそれを実践するとなるとこれがまた難しい。意識して思考を合わせるなど、今までやった事がないのだから。

「(ど、どうしよう……?)」

【まず思考を合わせるところから始めてみる?】

「(じゃあまず、瞑想から……かな?)」

ほぼ手探りで亜矢と真矢は思考を合わせる方法を求め、試しに目を瞑って瞑想してみる。まずは頭を空っぽにして、その状態を2人で維持するところからやってみようと言うのだ。

亜矢と真矢の問題についてはとりあえずここまでにして、問題は他にもある。

香苗をどうすべきか? このままホテルに返す訳にはいかない。きっと傘木社は渡されたデータが偽物だと直ぐに気付き、再度データを奪いにやって来る。ホテルは危険だし、それ以前に街中に放り出す訳にはいかなかった。何時何所で襲われるか分からない。

現状最も安全なのは、やはり警察に保護してもらう事だろう。警察を恐れるような可愛げのある連中ではないが、それでも多少は襲撃を躊躇ってくれるだろうし何かあってもS・B・C・T. が守ってくれる。

「瀬高君、S・B・C・Tの権藤さんに連絡をしてくれ」

「分かりました」

「宮野君、門守君のお母さんにはそれまでの間、研究室の仮眠室に居てもらってくれ。ここよりはまだ快適だ」

「はい。それじゃ香苗さん、行きましょう」

「私は別にここでも構わないよ。床でも寝れるしね」

一度冒険に出してしまえば、寝床を満足に選べない状況など当たり前だ。それこそ硬い岩や木の根つこの上で寝袋に入って寝なければいけない事もある。そんな状況に慣れている香苗にとっては、虫や猛獣、自然災害の危険が無いラボの床は十分に快適な寝床であった。

しかし彼女の人となりがある程度理解した峰はそれを突っぱねた。

「ここには迂闊に触られると面倒な事になる機材も多いんです。香苗さんに好奇心で勝手な事されて取り返しのつかない事になったら困りますから、ここは絶対ダメです」
「……………ちえっ」

「今『ちえっ』って言いましたよね?」

峰が香苗と共にラボを出て行き、拓郎と白上教授もそれぞれのやるべき事の為にその場を離れて行く。

後には仁と、瞑想する亜矢だけが残される。

暫くの間、仁は椅子に座って指を組んで瞑想する亜矢を眺めていた。まるで座りながら眠っているかのような姿だ。

そんな彼女を見て、仁の中に悪戯心が芽生えた。音を立てずに彼女に近付くと、まず顔の前で手をヒラヒラと振ってみる。反応はない。

ならばと彼女の髪を一房摘み、毛先を彼女の鼻先に持っていき擦ってやる。

「~~~~~！ もう、仁くん!?!」

流石にこれには亜矢も堪らず仁に抗議した。悪戯が効果ありだった事に、仁は楽しそうに小さな笑みを浮かべた。

「止めてくださいよ、ただでさえなかなか上手く行かなくて苦労してたんですから!」
「な〜んかね〜、意識すると難しいのよこれ」

意識を統一すると言うのは、言葉では簡単だが実践しようとするとなかなか難しい。2人の場合は体は1つな訳だし、四六時中一緒に居るようなものなのでもっと簡単かと思っていたがそれは甘い考えだった。

意識を集中させようとするとな何故か余計な考えが浮かんでしまったり、無我になろうとするとそれ自体が1つの思考となり結果として無我になり切る事が出来ず思考が乱れてしまった。しかもそれを相方が指摘してくるのだから、思考は余計に統一から遠退

く。

「ごめんごめん、ちよつと寝てるみたいだったからもしかしたらと思って」

「寝る時、かあ……………確かに寝る時なら何にも考えてない訳だから、ある意味思考統一出来てるんだろうけど、寝ちやつたら意味ないし……」

「俺も手伝うから、諦めずやってみよう」

こりゃ先は長いな。仁はそんな事を考えながら、亜矢と真矢が思考を統一できるようなあれこれ考えるのだった。

傘木社の特別研究区画にて、グアニンは雄成が見ている前で香苗から奪ったUSBの中身を見るべくノートパソコンにUSBを繋ぎデータを開いていた。

保存されていた幾つもあるデータには番号のみが振ってあり、どれが目的のデータかは分からない。グアニンは適当にデータを開いてみると――

そこにはどこぞの森の中を写した写真や、何処かの現地民族と写真を撮る香苗の写真

が入っていた。

「——は？」

グアニンは慌ててデータを片っ端から開くが、中にあったのはどれも香苗が冒険をした先で出会った人や目にしたものを写した写真のデータばかり。

ここで雄成とグアニンは、香苗に騙された事を理解した。

「……ま、こんな事だろうと思つてはいたよ。随分とあつさり渡してくれたから何かあると思つてはいたが……」

「も、申し訳ありません!？」

グアニンは顔を蒼褪めさせた。よりにもよつて雄成が求めているものを取り損ね、こんなバカみたいなものを見せてしまった。グアニンは自分の寿命が縮むのを感じた。

「構わんよ、あの場には私も居たんだ。君一人の責任じゃない」

「は、はい……」

「恐らく本物はまだ彼女が持っているだろうね。後でまた彼女から貰いに行かないと……時間を調整する必要があるね」

雄成がブツブツと呟きながらその場を後にする。立ち去った彼の背を見送るグアニンの顔色は悪かった。

時刻は夜。もう大学内に残っている者は、研究に追われている一部の学生や院生くらいという時間だ。

白上研究室もその例外ではなく、教授も帰宅し残っているのは仮眠室に泊っていく香苗とまだラボに居る仁と亜矢のみ。

亜矢はあの後も、真矢と思考を合わせる練習をしていた。仁に手伝ってもらい、一つの動きを二つで息を合わせて行ってみるなど色々とやった。

しかしどれもピントは来ず、ハッキリ言って手詰まりとなっているのが現状だ。

コンビニで買ってきたオニギリで軽く腹を満たした2人は、食休みも兼ねて亜矢と真矢の思考をなかなか合わせられない事に関する反省会を行っていた。

「なかなか上手く行かないな……」

亜矢が思わず溜め息を吐く。彼女の言う通り、本当に色々とやってみたのだ。例えば仁に投げてもらったボールを亜矢と真矢で息を合わせてキャッチしてみたり、あっち向いてホイで亜矢と真矢で打ち合わせなしに同じ方向を意識したりなど。

これらで分かった事は、厳密に言えば亜矢と真矢は呼吸を合わせる事は出来るという事だった。

だがそれは恐らく、香苗が言っていた物とは別物だ。彼女が言っていた目指すべきものは2人の思考の融合。「いつせーの」で出来るような物とは訳が違う。

なかなか進展しない状況に、仁もコーヒを飲みながら難しい顔をしていた。

「……………気になるんだけど、片方が表に出て戦ってる時、もう片方はどうしてるの？」
不意に仁が疑問を口にする。今まで特に気にした事は無かったが、こうして真剣に二重人格者である彼女と触れ合っていると引っ込んでいる意識の事が気になった。

「ん、何て言ったらいいんでしょう……………一言で言えば、ジェットコースターに乗ってるみたいな感じかな？ 体は動かさないけど、意識や感覚だけハッキリしてて」

「感覚は共有してるんだよね？」

「そうですね。裏に引っ込んでても感覚は特に変わらないので……………例えば真矢が表に出て戦ってる時、私は真矢の意識が届かない感覚で周囲の索敵なんかをしています」

つまり副座式の戦闘機に乗っている様なものか。片方が表で戦っている時、もう片方の人格は遊んでいる訳では無く出来る範囲で表の人格のサポートをしている訳だ。

恐らく2人が思考を合わせられない原因はこれだろう。自然と2人の間で役割分担する事が沁みついてしまっているので、いざ思考を合わせようとするとなかなか上手く

行かないのだ。

考えてやるような思考の合わせ方では駄目だ。もつとこう、本能とかそう言うレベルで自然に出来るようにしなくては。

「——あゝ、亜矢？ 私もしかしたら感覚分かったかも」

そんな時、亜矢の中で真矢がそんな事を口にした。意外な言葉に亜矢が思わず目を剥く。

「えっ!? 真矢それ本当!?!」

「どうかしたの?」

「真矢がもしかしたら感覚分かったかもって!」

「え?」

亜矢と仁が驚く中、真矢は何処か歯切れ悪くどう言う事かを説明した。

「えつとき、亜矢……仁君と寝てる時の事、覚えてる?」

「は、え? ちよつと真矢、真面目に——」

【真面目な話よ。特に盛り上がった時の話だけどさ……あの時私達どつちが表に出てた?】

真矢に言われて、仁と床を共にした時の事を思い出す。あの熱い夜を思い出すだけで、亜矢の顔に熱が溜まっていく。彼女が急に顔を赤くし始めた事に仁が首を傾げてい

る。

「そ、それは……………あれ？」

思い出して、亜矢の頭から熱が引つ込んだ。当時は全く気にしていなかったが、今になって思い返せば不可解な事に仁との行為中、盛り上がった時の人格がかなり曖昧になつていた。

霞掛かつて記憶がはつきりしないと言うのではない。何と言うか、あの時の感覚自体はハッキリしているのだ。

あの時、亜矢と真矢は間違ひなく1つになつていた。仁に愛され愛していた時、亜矢は真矢であり真矢は亜矢だった。

【ひよつとしたら……………亜矢、ちよつと代わつて】

「え？ うん……………」

突然何かを思い付いた様子 of 真矢が、亜矢に代わつて表に出てくる。彼女が何をするつもりなのか分からないが、とりあえず亜矢は大人しく彼女の動向を内面から見守る事にした。

亜矢が見守る中、真矢は仁に近寄ると徐に彼の膝の上にちよこんと座つた。突然の彼女の行動に仁も彼女を押し退ける事無く、次に何をするつもりなのかと彼女を見てい

仁の膝の上に座り、彼の首に腕を回した真矢。正面から仁の顔を見つめた彼女は、近付いた仁の顔を前に頬をほんのり赤く染めると顔を近付け彼の口付けをした。

「むぐ……」

「ちよ、真矢ツ!? いきなり何やって——」

「(集中して啞矢。今は全部仁君に委ねるの)」

「ゆ、委ねるって……」

突然の行動に目を白黒させる仁の唇を、真矢は一心不乱に食る。本能の赴くままに、愛する彼とのキスを堪能する事に全神経を集中させた。

最初慌てていた啞矢も、次第に仁との甘美なキスに酔いしれその身を委ねた。

本番でも無いのに、キスだけで心が温かくなる。そして気付けば、啞矢も真矢も意思を一つに統一させていた。どうすればキスだけで更に心が昂るか、どう舌を動かせば仁は喜んでくれるか。呼吸のタイミング、肌に感じる彼の体温。

二つの意識が溶け合った事で、それらが普段以上に敏感に感じ取る事が出来るようになっていた。敏感に感じ取る事が出来るようになったという事は、感覚や思考がシンク口して増加したという事。

つまり、ルーナ・ユナイトを扱う為に必要な状態になれたという事だ。

それを実感し、理解した2人は仁の口から唇を離した。

「(……感じた、亜矢?)」

【うん……この感覚だね】

「(そうよ、この感覚よ)」

漸く理解した。二つの意識を一つに統一するとはこう言う事なのだ。亜矢と真矢、2人の思考が1つになる事で、倍ではなく乗で感覚が跳ね上がる。

しかもただ意識が統合しただけでなく、意識自体は二つあるので感覚を上昇させながら一度に多数の情報処理する事も出来る。言うなれば、思考と反射の融合だ。一方が考える中でもう一方が反応し、その反応に対して更に一方が思考する。

これならルーナ・ユナイトの能力を100%發揮する事も可能だ。

亜矢と真矢が希望を見出したその時、仁の片手が静かに彼女の後頭部へと伸びた。

そして彼女が油断している隙に、片手で彼女の頭を固定し今度は彼が彼女の唇を奪った。

「んむうっ!」

【あ……】

突然の仁からの接吻。しかも先程よりもずっと激しい。仁の舌が亜矢の舌に絡みつき翹っていく。驚く亜矢だったが、頭を固定されている為逃れる事が出来ない。

一方真矢は、仁の行動が何となくだが分かってしまった。と言うか、これは彼女の責

任だ。

何も告げずに仁に激しく接吻してしまい、彼を刺激して火を点けてしまったのだ。

どれ程続いたか、漸く仁が満足し亜矢の口を解放した。

「ふはっ！ はあ、はあ……」

口を解放され、亜矢が大きく息を吸う。頬を上気させ、肩で呼吸をする彼女の姿はそれだけで魅力的だ。

軽く酸欠になった彼女の顎を、仁が片手で軽く持ち上げる。

「真矢さん、俺が男だってこと忘れてない？」

「あ、あはは……そんなつもりは無かったんだけど、あれが一番手っ取り早いかなって……」

「うん、それは分かるけどさ……まさかこれだけでお終い、なんて考えてないよね？」

亜矢と真矢は仁の瞳の奥に、獣欲の色を見た。普段は大人しい、眠れる獣を起こしてしまったのだ。

ゆっくりと近付いてくる仁の顔に、亜矢と真矢は互いに冷や汗をかきながら、同時に心の何処かで期待している自分に気付き揃って内心苦笑した。

亜矢はチラリと時計を見る。夜も遅い。この時間ならここに来る人は誰も居ないだろう。

亜矢は期待を胸に、仁に全てを委ねた。

— その様子を扉の陰から、峰が見ているとも気付かずに —

翌日には、宗吾と話が付き香苗を保護する事が決まった。

あまり物々しくS・B・C・T.の車両で迎えに行く訳にはいかないの、指定された場所まで仁が送っていきそこからS・B・C・T.と共に香苗をとりあえずは警視庁まで連れていく事になった。

朝早くに適当に朝食を済ませ、香苗と共に大学を出る仁と亜矢。白上教授と峰がそれを見送る。

尚その際、峰が香苗を見る目が何かおかしかった事に仁は気付いていたが、2人が何も言わないので気にする程の事でもないかと無視した。

まだ人の少ない街中を、宗吾達と合流すべく歩いていく。

道中では仁と亜矢が周囲を絶えず警戒した。また街中で襲撃してくるかもしれない。

しかし2人の警戒に反して、合流地点までの道中で襲撃を受ける事は無かった。思いの外あつさり宗吾達に合流できたことに、2人は安堵よりも不安を感じずにはいられない。

その危惧は正しかった。迎えに来てくれた2台の車両の片方に香苗を乗せ、いざ出発しようと言う時になって突然上空からレッドインパクトとブルーインパクトが襲い掛かってきたのだ。

「やっぱり来た」

「あれは！」

上空から銃撃して香苗が乗ったもの以外の車両を破壊するレッドインパクト達を見て、亜矢の視線が鋭くなった。忘れもしない、苦い敗北を経験した相手だ。

「仁君、ゴメン。あいつらの相手は私達にやらせて」

すかさず真矢が表に出ると、デイナドライバーを装着しながら仁に告げた。あの2人の相手は自分達だけでやる、と。

勿論仁はそれを危険だと思った。まだルーナ・ユナイトのテストも済んでいないのだ。いきなり強敵相手するには危険過ぎる。

しかし亜矢と真矢の意思は固かった。特に亜矢にしては珍しく、リベンジに燃えていた。

何より――

「大丈夫よ、もう分かったから……だから心配しないでください」

強い意志を感じさせる目で告げる亜矢と真矢に、もう仁は何も言えない。これ以上は彼女を侮辱する事になるし、彼女の様子に仁も大丈夫だと感じたからだ。

「分かった。あいつらは任せるから、俺は……」

仁の視線の先にはダークステインガールの姿があつた。ダークステインガールは香苗が持つデータを奪うべく、ベクターリーダーを片手に近付いてくる。

その前に仁が立ち塞がる。

「行かせないよ」

「こつちも退く訳にはいかないんだ。その女が持つてるデータ、渡してもらおうぞ」
「やれるもんならやてみな、てね」

ダークステインガールの前で仁はデйнаドライバーを装着し、ホークベクターカートリッジとヒューマンベクターカートリッジを装填する。こいつ相手なら恐竜ベクターカートリッジを使うまでも無い。

ところが――

〈SHARK + HUMAN Evolution〉
「……………え？」

デイナドライバーから聞こえてきた音声に、仁は変身する事も忘れてドライバーを凝視する。今確かにエヴォリションと言ったが、この組み合わせはミューテーションの筈だ。

仁の疑問に構わず攻撃しようと足を踏み出すダークステインガーだったが、流石に無視できなかったのか仁は両手でTの字を作り一時停戦を要求した。

「ちよ、タンマ」

「は？」

「あれ？ おかしいな……………」

困惑するダークステインガーの前で、仁はベクターカートリッジを抜き取り適当にミューテーションとなる組み合わせのカートリッジを装填した。

〈BUFFALO + DOG Mutation〉

「これは正しい……………じゃあこっちは？」

〈SHARK + DOG Mutation〉

「うん……………それじゃあ……………」

〈HAWK + HUMAN Evolution〉

「あれえ？」

「お〜い……」

1人首を傾げながら、仁は次から次へとベクターカートリッジを組み合わせていく。放置されたダークステインガーは、声を掛けるが仁は気付いてくれない。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「ん〜？ 変身」

〈Open the door〉

色々と検証してみたが、どうやらヒューマンベクターカートリッジだけどの組み合わせともエヴォリユーションとなるらしい。

これは正直仁にとっても謎——否、実を言うと思いついた節が無くはない——の事態であり、首を傾げずにはいられなかった。

「お〜い、まだか〜？」

仁が1人検証している間、待ちぼうけを喰らっていたダークステインガーは少し離れた所から控えめに声を掛けた。彼の声にデイナも彼を待たせていた事を思い出した。

「あ、ごめんね。もういいよ」

「そうか……」

………よい、ドン

「——はっ」

「——ふっ!」

同時に相手に向けて駆け出し、拳を相手に叩き付けるデイナとダークステインガー。放たれた拳は互いに相手の胸板に直撃し、押し合う事で相手を遠ざける。

「ん………?」

「くう………」

互いに相手から僅かに距離を取った2人は、一瞬の間を置いて次の攻撃に移った。

デイナが正拳突きを放つと、ダークステインガーは左腕の棘でそれを受け止めようとする。あんなものを殴っては自分の拳を傷付けるだけと、デイナは攻撃を中断し逆の拳でダークステインガーの左腕を弾き蹴りをお見舞いした。

素早いデイナの連撃に、ダークステインガーは対応しきれず蹴り飛ばされた。

「がっ!?! くう——!?!」

蹴り飛ばされ、地面に倒れたダークステインガーは立ち上がり際に銃剣モードのベク

ターリーダーを抜き構えた。

武器を持ったダークステインガーに対し、デイナはフォームを変える事も無く相手を挑発するように指をクイクイと引いてみせた。

一方ルーナ・ユナイトとレッド&ブルーインパクトとの戦いは、同時に動くインパクト達が押していた。

先日の戦いと同じように、高速で別方向から全く同時に放たれる攻撃に翻弄されてしまっている。

「ぐはっ?! あぐっ?! ううっ?!」

二方向から同時に放たれた攻撃に、ルーナは壁や地面に叩き付けられる。先日と殆ど変わらぬ戦いに、レッドインパクト達は余裕を見せて彼女のすぐ近くに着地した。

「少し姿が変わった様だが……」

「その程度で俺達に勝てると思ったのなら、俺達も舐められたものだ」

自分を嘲る2人の言葉に、ルーナは少しふら付きながら立ち上がって対峙した。
「はあ、はあ……真矢、行ける?」

【ふう……何時でも】

ルーナはただ闇雲にレッドインパクト達に挑んだ訳ではなかった。

ここまで押されたのは実は態と。あまり万全過ぎる状態だと、精神的に余裕があり過ぎて上手く心が重ねられないと思つたからだ。ある程度きついと思える状態になつて漸く、2人は心の一つに合わせる準備が整つた。

「(それじゃ……行くよ!)」

【あいつらに見せてやろう!】

一つ大きく深呼吸し、心を落ち着けた亜矢と真矢。

動きを止めた彼女に、レッドインパクトとブルーインパクトは勝負を掛けるべく一気に接近した。ルーナもそれに対抗するように駆けて接近していく。

あつという間に距離が縮まるルーナとインパクト達。

「左右前方から同時に接近……対応してみせる!」

左右前方から迫るレッドインパクトとブルーインパクトに、リプレッサーショットIIを向け同時に引き金を引く。同時に放たれた銃弾は同時にレッドインパクト達に命中し、動きを僅かに乱れさせる。

「ちっ!?!」

「だがッ!」

僅かに体勢を崩された2人だが、しかし銃弾一発程度のダメージなら直ぐに体勢を立て直せる。寧ろ体勢を崩した事を利用して、ルーナの左右に散開し同時に彼女に攻撃を放った。先日であれば、反応する事も儘ならなかった攻撃。

しかし今、心をシンクロさせ全ての感覚を大幅に向上させた2人にはレッドインパクト達の動きが手に取るように分かった。

「等速で左右から……足とブレードで……同時に!……今!!」

右から迫るブルーインパクトに対してはリプレッサーショットIIの銃剣で、左から迫るレッドインパクトに対しては蹴りに対応する。

カウンターの要領で放たれたその攻撃を、2人は諸に喰らい今度は大きなダメージを受け地面に叩き付けられる。

「ぐあっ!?!」

「くう、何ッ!?!」

まさかのダメージに狼狽える2人。倒れた2人をルーナが悠然と見下ろす。

「やっと呼めました……アンタ達がぶっ倒れた所をね!」

「この程度でッ!?!」

「もう一度だ！ フォーマーションを組め！」

痛む体を押しして体勢を立て直し、飛翔してルーナに襲い掛かる。

迫る2人を前に、ルーナは酷く落ち着いていた。全く負ける気がしないのだ。2人の動きが手に取るように分かり、次にどう動くべきなのかが直ぐに思いついた。感覚だけでなく、思考速度まで上がっていた。

接近してくるレッドインパクトとブルーインパクト。ベクターリーダーの銃撃を交えての2人の攻撃を、ルーナは的確に回避し反撃の隙を伺った。焦る必要は無い。焦らずとも、2人を攻撃する隙は必ず存在する。

そしてその時は訪れた。レッドインパクトとブルーインパクトが別方向から彼女に攻撃を仕掛けてきた。レッドインパクトは上から、ブルーインパクトは背後からだ。

「亜矢！……うん！」

ルーナはまず背後から近づいてくるブルーインパクトに銃撃を加えて体勢を崩すと、体を捻りながらジャンプし上から迫ってきたレッドインパクトを紙一重で回避しつつ地面に向けて蹴り落とす。自分の速度も利用されて地面に叩き付けられたレッドインパクトを、ルーナが着地と同時にノックアウトクラッシュで蹴り飛ばした。

〈ATP Burst〉

「ヤアアアッ!!」

「がはあっ!!」

「なっ!! ごほおっ?!」

レッドインパクトが蹴り飛ばされた先に居たのは、体勢を崩したブルーインパクト。レッドインパクトを一つの弾丸として、ブルーインパクトは大きく吹き飛ばされ揃って大きなダメージを受け地面に倒れた。

「な……馬鹿なあっ!!」

「何故だ!! 2人で1人の俺達のコンビネーションは、完璧な筈——!!」

「分かってないわねえ。あんた達は特別でも何でもないのよ」

「何いっ!!」

突然のルーナの言葉に、レッドインパクト達は倒れながらも激昂する。

「あなた達は所詮、ただ2人の息を合わせているだけ……1人1人の力は何も変わっていません」

「でも私達は違うわ。私達は1人で2人分以上の力を発揮してる。私と亜矢、2人が心と力を合わせれば……」

「出せる力は、ただ2人が息を合わせた以上のものを発揮できるんです」

「つまり、アンタ達が相手にしてるのは1人の人間じゃない。1人で2人の人間なのよ——」

レッドインパクト達は所詮1人1人でしかルーナを相手にしていない。だがルーナは元より1人で2人。しかも心を合わせた事で、その力は倍では済まないレベルに膨れ上がる。

そんな彼女に、レッドインパクト達が勝てる道理はなかった。

「そんな訳あるかあッ!!」

だが2人はそれを認める訳にはいかなかった。それを認めてしまつたら、彼らの存在意義が失われる。

〈Genome set, Full blast〉

ルーナに接近しながら、銃剣モードでジェネリック・ブレイカーを発動するレッドインパクト達を見てルーナもリプレッサーショットIIを連結させる。左の銃を右の銃の先端に連結させると、左の銃のグリップが外れ二つの銃の銃剣が繋がリ銃身下部にブレードのついたライフルとなった。外した左の銃のグリップは、右の銃の後部に接続する。

それは奇しくも、ヘテロの武装であるテイルバスターと似たシルエットであった。

ライフルモードとなつたりプレッサーショットIIに、ルーナはベクターカートリッジを装填した。

〈Genome set, ATP Burst〉

ベクターカートリッジを装填したりプレッサーショットIIを、ルーナは後部のストック兼用のグリップを掴み左手を峰に当たる部分に添えて構える。

接近してきたインパクト達はジエネリック・ブレイカーを発動した銃剣モードのベクターリーダーを振るい――

「――ハアッ!!」

同時にルーナがリップレッサーショットIIを一閃。すれ違い様にレッドインパクトとブルーインパクトの一撃をすり抜けつつ『デュエル・ブレイバー』で切り裂いた。

すれ違い離れた所に着地したレッドインパクト達。2人は着地したその場から動かない。

一方のルーナも技を放った姿勢から暫く動かなかつたが――

「――ふう」

緊張を解すように小さく息を吐いた。

次の瞬間、彼女の背後でレッドインパクトとブルーインパクトが声も上げず倒れた。

背後で倒れた2人を、ルーナは静かに振り返り視界に収め、その姿に自身の勝利を嘯み締めるのだった。

第43話：親を知る時

見事、レッドインパクトとブルーインパクトにリベンジを果たしたルーナは、倒れた2人を静かに見つめていた。

あの2人も傘木社によって改造を施されたのなら、同時に隠蔽処置の為の発火装置も取り付けられている筈。それが作動せず、そもそも変身も解除されないという事は、あの2人はまだ戦える状態だという事だ。

油断なく見据えるルーナの前で、2人が静かに立ち上がった。

「この、アマあ——!?!」

「調子に、乗るなよ——!?!」

もう最初の余裕など何処へ行ったのか、ルーナを憎悪の籠った目で睨み付けるレッドインパクト達。対するルーナが、何時でも引き金を引けるようにと分離させたりプレッシャーショットIIを構える。

そこへ、ダイナの攻撃で吹き飛ばされたダークステインガーが飛んできた。

「ぐはあっ!?!」

「よっと。あ、亜矢さん真矢さん、大丈夫?」

「はい。そちらも大丈夫みたいですな」

遠目に香苗が乗っている車を見ると、そちらは傷一つ見られない。ダークステインガーはダイナを突破する事も出来ず、香苗の持つデータを手に入れる事は叶わなかったようだ。

このままこいつら全員を追い返してやる……そう2人が意気込んでいると、出し抜けるに飛んできた銃弾が彼らの足元で弾ける。

「おっと?」

「わっ!」

突然の銃撃に2人が足踏みして後退る。何事かとダイナが銃撃されたであろう方向を見ると、そこにはベクターリーダーを構えた雄成の姿があった。

「また来たの?」

「それだけの価値が、君のお母さんの持つデータにはあるんだよ」

「一体何のデータ?」

警戒しながらダイナは雄成から情報を引き出そうとする。特にデータの内容は、香苗も教えてくれなかったものなので気になっていた。

ダイナの問い掛けに、雄成は香苗が乗った車に目をやり口角を上げて笑った。

「なるほど、息子には何も話していないのか」

「何を？」

「あのデータの中身さ。あのデータはな、君らが使っているダイナドライバーの基礎設計図なんだよ」

雄成の言葉にダイナとルーナは顔を見合わせ、同時に背後の車に目をやる。車からは香苗がゆつくりと出てきた。

「母さん、どう言う事？ 何で母さんが、ダイナドライバーの設計図なんて……」

香苗は何も答えない。険しい顔で眉間に皺を寄せ、視線を行ったり来たりさせている。

煮え切らない様子の香苗に、ルーナが強く問い詰めようと一歩彼女に近づく。しかし彼女が何かを言う前に、ダイナが手でそれを制した。

「仁君、良いの？」

「ん……聞きたい事は沢山あるけど、今はこいつらを追い払う方が先決だから」

ダイナにだつて、香苗に聞きたい事は山程あつた。今まで白上教授と面識がないと思つていた香苗が何故ダイナドライバーの基礎設計図などを持つているのか、気になる事を上げればきりがない。

だが今はそれを問い詰める時ではない。まずは雄成達を追い払い、香苗の安全を確保しなければ話を聞く暇も無いのだから。

切り替えの早いダイナに、雄成は心底楽しそうな笑みを浮かべた。

「いいねえ、やはり君は良い！ 是非とも欲しいよ……いろいろな意味でね」

〈SAMPLE1 Leading〉

笑いながら雄成はベクターリーダーにベクターカートリッジを装填する。

「とは言え今はまだその時ではない。君が熟すまでもう少し、それまでじっくり待たせてもらおうよ。……進生」

〈Transcription〉

プレインジーンに変身する雄成に、対抗してダイナもケツアルスピノフォームになるべくベクターカートリッジを取り出す。

「亜矢さんは母さんをお願い。あの3人はもう戦力外だよ」

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「任せてください。仁君も気を付けてね」

「ん……ゲノムチェンジ」

〈Open the door〉

ケツアルスピノフォームになったダイナは、翼を広げてプレインジーンに挑みかか
る。

上空から突撃してくるダイナをプレインジーンはベクターリーダーで迎撃するが、放

たれる銃弾をデイナは体を僅かに逸らす事で回避して接近した。

デイナに接近されたプレインジーンは、ホルスターを剣として使いデイナに斬りつけ迎え撃つ。それをデイナは蹴り飛ばす事で防いだ。

やはり上空を取れるデイナが有利だ。飛べないプレインジーンでは出来る事に限りがある。このままデイナが空中からのヒット&アウェイに徹すれば、プレインジーンを退かせる事も可能だろう。

だがそれは希望的観測が過ぎた。

徐にプレインジーンが剣を投げた。一見乱雑に投げられたようなそれを、デイナは容易く回避した。あんなのに当たる訳がない。仮にルーナがデイナのポジションに居たって回避は容易だろう。

「ふふっ……」

〈Genome set Full blast〉

プレインジーンは自分の攻撃が避けられたと言うのに、少しも慌てた様子を見せずベクターリーダーをデイナに向けた。少なくともルーナにはそう見えた。

しかしデイナにはプレインジーンが別の物を狙っている事が分かった。銃口が僅かにずれているのが見えたのだ。

「?……ッ!?!」

何を狙っているのか？ デイナが相手の狙いに気付いたと同時に、プレインジーンが引き金を引いた。

「ぐあっ!？」

「えっ!？ 何？ 今何がッ!？」

プレインジーンが撃った銃弾は、デイナのすぐ横を通り過ぎたと思つたら、まるでデイナの後を追うように引き返し無防備なデイナの背中に直撃した。

何をされたのか、デイナは直ぐに気付いた。跳弾だ。プレインジーンは避けられることが分かつていて、剣を投げたのである。跳弾させ、無防備なデイナの背中を撃つ為に。

「ぐうっ!？」

バランスを崩し落下したデイナを、プレインジーンが追撃する。飛び蹴りを放ち、立ち上がったデイナを再び地面に倒れさせた。

「くっ!？ この……」

「そらそら!？」

「おっと」

デイナの頭を狙って放った回し蹴りを、デイナはギリギリのところまで回避。蹴りを放った直後で隙だらけのプレインジーンに対し、デイナは拳を握り殴り掛かるがプレインジーンはそれを掴み逆に彼を背負い投げた。

だがデイナは自分を掴んできたプレインジーンの腕を掴み返し、投げ飛ばされるのを防ぐと同時に逆に投げ返した。投げ飛ばすのではなく、地面に叩きつける。

その戦いの様子がルーナは愕然となった。ケツアルスピノフォームになったデイナとプレインジーンが互角に渡り合っている。あれほど仁が苦労して獲得した強化形態に、プレインジーンは対抗できているのだ。同じくベクターリーダーで変身するダークステインガーやレッドインパクト達はあのフォームで十分に圧倒できる筈なのに、である。

これは変身している雄成自身の能力なのか、それとも彼が変身するプレインジーンが特別なのか。

「——気になってたんだけどさ」

「ん？」

徐にデイナが戦闘を中断してプレインジーンに問い掛ける。彼からの問い掛けに興味があるのか、プレインジーンも攻撃を中断した。

「アンタが使ってるベクターカートリッジ……それ普通の奴じゃないよね？」

「その根拠は？」

「根拠も何も、名前がサンプルって時点で普通じゃないでしょ」

ベクターカートリッジは基本、何らかの生物の遺伝子を超万能細胞に読み込ませて精

製する。だから起動状態にすれば、読み込ませた生物の名前が出てくる筈だ。

だが雄成が使うベクターカートリッジが読み上げる生物の名前は『サンプル1』。特定の生物名ではなく、サンプル表記で読み上げられるという事は――

「直球で聞くけど、そのベクターカートリッジに読み込ませてる遺伝子つて1から遺伝子操作で作り上げた奴なんじゃないの？」

デイナの指摘に、プレインジーンは即答しなかった。ホルスターを腰に装着し、ベクターリーダーを突っ込んだ。

そして両手を自由にすると、心底感心したと言う様に拍手をデイナに送った。

「その通り。よく分かったね、門守 仁君」

「前にファッジだった時のアンタを見た時の亜矢さん達の反応がずっと気になってたんだ。まるで何かを拒絶する様な、それでいて怯えたような反応。それが自然界に存在しない、異物を前にした本能的な反応なら納得できる」

生物は本能的に異物を忌避する性質がある。例えば同族であろうとも、他の個体と異なる容姿をしていたら排斥に走るのは珍しい事ではない。過去にはアルビノのチンパンジーが、同じ群れの他の個体によって子供であるにも拘らず無残に殺されてしまったと言う事例もある位だ。

人間社会において人種や肌の色、障害の有無で人を差別する事は一般には悪とされて

いるが、自然界では異物の排除は当たり前前の事である。

近似的の遺伝子を持つ個体であろうとそれなのだ。その相手が自然界に於いて存在しえない異物中の異物であれば、正体不明の存在に脅威と恐怖を感じるのは当たり前前の話であった。

ここで仁の中である疑問が生まれる。そもそも傘木社がベクターカートリッジを用いて人体実験を行う、その理由は一体何なのだろうか？

世界征服？ 市場独占？ ベクターカートリッジにより作り出されるファッジを軍事利用し、各国にバラ蒔き世界を裏から操ろうと言うのも考えられた。

だが、雄成の人となりがその結論に待ったをかける。仁の私見だが、雄成は世界征服に興味を持つような男に見えない。

彼と仁は同類だ。自身の知的探求心を満たす事に喜びを感じ、その為になら多少のリスクを恐れない。

そんな男が、それだけで人間を変異させるベクターカートリッジで更に異質な遺伝子操作で作った遺伝子を用いるだろうか？ そしてそれを、ただの商売道具にするだろうか？

仁が彼の立場ならそんな事はしない。似た者同士だから分かる、雄成にとってはこれまでの騒動も全てはただの実験や試験に過ぎない。

となると、導き出される答えはただ一つ。

「雄成さん……アンタがやろうとしているのは、新たな生物の創造。自分の手で、新しい種の生物を創り出そうとしてる………違う？」

「デイナの口から語られた、プレインジーン……傘木 雄成の恐ろしい計画。」

ルーナは仮面の奥で慄くと同時に理解した。プレインジーンの強さは、変身している雄成の能力もあるだろうが何よりもあのベクターカートリッジが強力なのだ。どんな遺伝子を使っているのかは分からないが、あのベクターカートリッジの超万能細胞には色々な生物の優秀な形質の遺伝子が入っているから、あのベクターカートリッジで変身するプレインジーンはあそこまで強いのだ。

「ん……70点と言ったところかな。良い線行っているが、正解にはまだ遠いな」

だが意外な事に、プレインジーンの口から出たのは外れを意味する言葉であった。デイナの——仁の読みが外れたのだ。

自身の推測が外れたと言う事に、しかしデイナは落胆した様子を見せなかった。寧ろ何処か焦りを感じたように見える。

「そっか………やっぱりそうなんだな」

「仁くん？」

一人何かを納得したように呟くデイナに、ルーナが首を傾げていると彼は突然香苗に手を伸ばした。

「母さん、持つてるデータ俺に渡して」

「何だって?」

「いや、渡さなくても良い。そのデータ今すぐぶつ壊してもう見れなくして」

何の説明も無く、突然データを破壊しろと告げる仁に香苗どころかルーナも困惑を隠せない。彼は一体何をそんなに焦っているのか?

「詳しく話してる暇はないんだ。とにかく今すぐ——」

「私は構わんよ? その所為で君らの母校が無くなっても良いならねえ」

香苗が逡巡しながらも仁にUSBを放ろうとした瞬間、プレインジーンが口にした言葉に香苗だけでなくデイナとルーナも動きを止めた。

「何——?」

「だってそうだろう? 君のお母さんが持っているデータが手に入らない以上、残るデータは白上が持っているデータだけだ」

それを手に入れる過程で大学が大きな被害を受けるかもしれないと、彼はそう言っているのだ。仁と亜矢の知人も見知らぬ人も全員を纏めて人質に取られたようなものだった。

「……今まで大学をほとんど放置してたのはこの時の為か」

「何て、卑怯な——!?!」

ルーナが憤る中、プレインジーンはさあどうすると両手を広げる。もうその手に武器を持つつもりはないようだ。必要無いと思っっているのだろう。そしてそれは正しかった。今のデイナとルーナに、プレインジーン達を止める手立てはない。

「母さん……お願い」

事ここに居たり、今はプレインジーンに従う他ない。デイナは香苗にデータを渡す様に言い、香苗は物凄く逡巡したが大学に居る人々の身の安全と天秤にかけて仕方なくUSBをプレインジーンに向けて放り投げた。放物線を描くUSBを、プレインジーンは苦も無くキャッチする。

「ふむ……グアニン」

「はい」

変身を解いたグアニンが、ノートパソコンを手にプレインジーンに近付いていく。グアニンはプレインジーンからUSBを受け取ると、ノートパソコンに挿して中のデータを閲覧した。また偽のデータを渡されては堪らない。

「……ロックが掛かっています」

「パスワードは？」

最後の悪足掻きの様なパスワードにも、プレインジーンは動揺しない。香苗に明星大学の全学生を道連れにデータを破棄する覚悟があるなら話は別だが、彼女はそこまで心を鬼にする事は出来ない事を彼は理解していた。

「……………パンドラ」

香苗が観念してパスワードを口にし、グアニンがそのパスワードを入力するとデータが開かれる。ノートパソコンのディスプレイにはデイナドライバーの基礎設計の設計図が表示された。

「本物の様です」

「らしいね。ありがとう、諸君。このデータは有効活用させてもらうよ」

手に入れたデータが今度こそ本物である事を確認し、プレインジーンは満足そうに頷いてその場を去ろうとする。

が、何を思ったのか立ち止まると振り返り、仁の事を見た。

「そうそう、白上の奴に伝えておいてくれ」

「……………何を？」

デイナが問うと、プレインジーンは変身を解き雄成の姿となり口を開いた。その顔には、不敵な笑みが浮かんでいた。

「お互い、順調に研究が進んでいるようで何よりだと……………ね。それでは失礼」

そう言つて雄成はグアニン達を連れて今度こそその場を離れた。

後に残されたデイナは、その後ろ姿を見送りながら変身を解いた。

雄成が最後に放つた言葉の意味を考えながら――

まんまと雄成達にデイナドライバーの基礎設計図を奪われてしまった仁は、亜矢・香苗と共に大学へと戻つた。仁と亜矢はともかくとして、香苗までもが一緒に戻つてきた事に白上教授達は驚きを隠せなかったが、データが奪われたと聞くと納得すると同時に危機感を抱いたのか深刻な顔になる。

そして、そのデータの内容がデイナドライバーの基礎設計図であつたと知つた仁と亜矢は改めてどう言う事なのかを香苗と白上教授に問い詰めた。デイナドライバーの基礎設計図を香苗が持っていたと言う事に、峰と拓郎も驚き2人も興味深々と言つた様子で聞き耳を立てている。

「それで、何で母さんがデイナドライバーの基礎設計図なんて持ってたの?」

「教授はその事を知っていたんですか？」

仁と亜矢の問いに、まず最初に答えたのは香苗だった。

「あれはね、司が残した物なんだよ」

「父さんが？」

「ああ。司が死んだ後、遺品整理していた時に見つけてね。誰にも渡さない様にと言うメモと共に、司の部屋の机の奥に仕舞われていたのを見つけたんだ」

香苗の口から、デйнаドライバーの基礎設計図のデータが父・司の遺品であったことを仁は初めて知った。

デйнаドライバーは自分の父が設計したものである……その事実には、仁は顎に手を当て考え込む。

「……教授はその事を知ってたんですか？」

「ああ……知っていた。と言っても、彼に息子が居た事も、それが君だと言う事も知らなかったがね。彼は直向に研究する男で、自分の周りの事は何も語らなかつたから」

どこか懐かしむ様に呟き、紅茶を啜る白上教授。仁はそんな白上教授をジッと見ている。

「教授……俺、父さんはアメリカの大学で教鞭取つてた頃に暴漢に襲われて死んだって聞かされたんですけど……本当はもしかして……」

司が白上教授と共に研究に携わっていたと言う事は、雄成とも関わりを持っていたと言う事だ。そして教授と雄成は最終的に決別した。司が作ったデイナドライバーを教授が持っていたと言う事は、司は教授の側に付き雄成と敵対したと言う事。

その頃に既に雄成が何らかのベクターカートリッジを完成させていたとすれば――

「そう、司君は雄成を止めようとして殺されたんだ。いや、正確には雄成の勧誘を断つたから消されたと言うべきかな。私も知らない事だが、雄成は何らかの計画を考えていたらしい。それを成し遂げる為に司君を味方に引き入れようとして、断られたから秘密を守る為に殺された様だ」

突然、室内に大きな音が鳴り響く。全員がビツクリしてそちらを見ると、香苗がテーブルを殴り付けていた。相当強く殴ったのか、彼女の傍に置かれていたカップがひっくり返り中の紅茶が零れている。

「そんな……そんな事で、司は――!?!」

「母さん……」

怒りと悲しみに震える香苗。歯を食いしばり、目には涙が浮かんでいた。握り締めた拳は、爪が肌に食い込んでいるのか血が滲み出ている。

亜矢が香苗の肩に手を置き、仁が優しく香苗の握り締められた拳を開かせる。

これ以上この話題は止めよう。司の本当の死因と、デйнаドライバーとの関係自体は分かった。ならばこの話はこれで十分だ。

仁は話題を変えた。

「……教授、連中がデйнаドライバーの基礎設計図を欲しがると理由って分かります？」

「確証はないが、恐らくゲノムチエンジ機能が欲しいんだろう」

「やっぱりそう思いますか」

仁と白上教授は納得した様子を見せるが、周りで話を聞いている亜矢達は首を傾げた。傘木社は既に自分達で新たなドライバーを作り上げている。今更デйнаドライバーの基礎設計図を手に入れてどうすると言うのか分からなかった。

「何で今更、ベクターカートリッジ2本のデйнаドライバーを参考にしたんです？」

「連中は3本使えて強力なライダーを作り出せるのに？」

「多分、3本使って変身するライダーじゃダメなんだ」

「ダメって……？」

「ベクターカートリッジを3本使うのは本来邪道なんだ。確かに3本使って変身するヘテロは強い。でも実は、ヘテロの中じゃ3本のベクターカートリッジが互いに競合してるんだ」

これは白上教授にベクターカートリッジや超万能細胞の事を色々教わり、そして自分

でも色々と調べてみて分かった事だ。

超万能細胞は人間など既存の生物の細胞に多大な影響を及ぼすが、一方で超万能細胞同士だと反発し合う。言ってしまうえば、超万能細胞は非常に利己的な細胞なのだ。故に、別の遺伝子を持つ超万能細胞と競合してしまう。

ベクターカートリッジ2本では互いに足を引つ張り合ってしまう所を、ヘテロは3本にする事で三角関係を作り出した。足を引つ張り合う競合ではなく超万能細胞同士が互いに警戒し合う関係を作り、その結果ヘテロは安定して強力な力を持つに至ったのだ。

「じゃあ何でデイナは2本で力を発揮できるんだ？」

「その秘訣がデイナドライバーにはあるって事です。そして連中はそれを欲しがってた」

こんな状況だと言うのに、仁はデイナドライバーの基礎設計を行った司を尊敬した。本来反発し合う2本のベクターカートリッジを、反発させず全力を発揮させる。不可能を可能にしてみせる発明をした、司は間違いなく科学者だ。

「素朴な疑問なんですけど、そもそも仁くんのお父さんはどうしてデイナドライバーを作ったんでしょう？」

「教授……教授から父さんにデイナドライバーを作る様に依頼したりしたんですか？」

「いや、それが私も彼がドライバーを作っていた事は知らなかったんだ。私がデйнаドライバーの存在を知った時には既に出来ていたんだよ」

結局、司がデйнаドライバーを作った理由などに関しては分からず仕舞い。そして最大の問題である、傘木社にデйнаドライバーの基礎設計図が渡ってしまった事への対策も思いつかずだった。

この日は結局有効な対策を考え付く事も無く、後日宗吾達も交えて対策を練ると言う事になり解散となった。

雄成達の目的であったデータをもう持つていない香苗は狙われる事は無いだろう。彼女は宿泊しているホテルへと戻って行った。

別れる際、香苗は仁を優しく抱きしめた。

「仁……無茶はするんじゃないぞ」

「ん……分かってる」

「……亜矢さん、真矢さん。この子の事を頼む。よく無茶するから」

「はい、分かっています……私達に任せて、お義母さん」

亜矢と真矢の答えに満足そうな笑みを浮かべると、最後にもう一度仁の頭を撫でて香苗は2人の前から去っていった。

「それじゃ、私達も帰りましょうか？」

「あ、ごめん。俺最後に教授と話しておきたい事あるから先帰っててくれる?」

「教授と? どんな?」

「ん、ちよつとね」

それつきり仁は何も語らない。亜矢は首を傾げたが、あまり干渉し過ぎるのも良くないと一足先に大学を後にした。

残されたのは、仁と白上教授の2人のみ。他に人が居なくなると、仁は白上教授に雄成からの伝言を伝えた。

「教授、雄成さんから伝言預かってます」

「雄成から?」

「はい……『お互い、順調に研究が進んでるようで何より』……つて」

「それは——!?!」

仁から伝えられた伝言の意味に、白上教授は何かに気付いたのか目を見開く。

白上教授は何かを言おうと口を開くが、それより早くに仁が手を上げた。

「その事に関して、教授に頼みたい事があります」

仁は白上教授に自分の考えを述べた。それを聞いていく内に、白上教授の顔がどんどん険しくなる。

「門守君……君は、本当にそれでいいのか?」

「はい」

白上教授の問い掛けに仁は即答した。迷いなきその答えに、白上教授は観念したように息を吐いた。

「分かった……君がそこまで言うのなら」

「ありがとうございます。それじゃ、用事は済んだんで俺はこれで。失礼しました」
踵を返し研究室から仁が退室する。

残された白上教授は仁が出て行った扉をしばらく眺め、暫く経ってから何かを悔いるように力無く机に拳を叩き付けるのだった。

一方傘木社では早速手に入れたデйнаドライバーの基礎設計図を基にした、新たなドライバーの開発が行われていた。

今までの課題であった、ベクターカートリッジ2本同時使用で最大限の能力を発揮する技術。それを取り込み、ブレイドライバーを超えるドライバーの開発が技術陣によつ

て急ピッチで行われていた。

その傍らで、雄成は専用の研究室の中で一人ベクターカートリッジの精製を行っていた。

周囲には専用の機械に様々なベクターカートリッジが装填されており、ベクターカートリッジ内部の超万能細胞のデータがデータ化されている。

雄成は珍しくスーツ姿ではなく、白衣を着た姿でその機械と繋がったパソコンのキーボードを叩いていた。

雄成がキーボードを叩く速度は恐ろしいほど早く、本気を出した仁にも引けを取つていなかった。

ディスプレイの上を猛烈な速さでデータや数列、文字がスクロールしていく。

そして唐突に雄成の指の動きが止まった。彼の口からは満足そうな溜め息が零れ、視線をパソコンの隣にコードで繋がったシリンドラーに向けた。

シリンドラーの内部には一つのベクターカートリッジが浮いている。

「ふふ……出来た」

雄成がキーボードを操作すると、シリンドラー内部の薬液が抜け取り出せるようになる。ロックが解除されたシリンドラーを開け、雄成は中のベクターカートリッジを取り出した。

「ふふふふ……」

完成したベクターカートリッジを見て、雄成は満足そうに笑みを浮かべ起動させる。

〈Organism〉

新たに作られたベクターカートリッジはオーガニズムベクターカートリッジ。超万能細胞にインプットしたのは、現在地球上に存在するありとあらゆる生物の遺伝子。

つまりこのベクターカートリッジには、全ての生物の遺伝子が詰まっていた。

「これが、第一の鍵になる」

手の中にあるベクターカートリッジを雄成は愛おしそうに撫でた。

と、よく見ると雄成の目尻に涙が浮かんでいる事に気付く。だがこの場に居るのは彼一人。なのでその事を指摘するものは誰も居ない。

誰にも指摘されないからか、雄成は目尻から零れる涙を拭いもしなかった。

「待っている、恵里……もうすぐだ。もうすぐ、お前を……」

誰も居ない研究室の中に、雄成の言葉が静かに響き渡るのだった。

第4話：流れ、変わる時

その日、亜矢は研究室で白上教授の奇妙な様子を見た。

パソコンのディスプレイを見て何やら非常に難しそうな顔をしているのだ。どこか深刻そうなその様子に、ただならぬものを感じ声を掛けた。

「教授？ どうかしたんですか？」

「ッ!? い、いや……何でもありませんよ」

声を掛けられるまで亜矢の存在に気付かなかったのか、驚いたように顔を上げた白上教授は何処か慌てた様子でパソコンのディスプレイを切った。暗くなったディスプレイから離れ、教授はラボへと向かって行く。

「私は少しラボに籠るよ。S. B. C. T. と今後の対策の為に資料を纏めないといけないからね」

そう言つて教授はラボへと入っていった。研究室に残された亜矢は、違和感を感じる白上教授の姿に首を傾げた。

「……亜矢、教授のディスプレイの電源入れよう」

「(えっ!?) ちょ、真矢?」

突然の真矢の言葉に、亜矢は目を剥いた。

急いでいたのか、白上教授はパソコン自体ではなくディスプレイの電源だけを落としていた。だからディスプレイの電源を入れてやれば、先程まで教授が深刻そうな顔をして見ていたのが何なのか分かる。

だが勝手に他人のパソコンの中身を見るなど非常識だ。それに教授がディスプレイの電源だけを落としたのは、亜矢が勝手に中を見ないだろうと言う信頼もあつての事。それを裏切るような行為を、亜矢は躊躇せずにはいられない。

「亜矢や仁君には悪いけど、私あの教授をどうにも信用しきれないのよ。なんか怪しい」
「だからって、勝手にパソコンの中を見るのは良くないって。それに怪しいって言うけど、証拠も無しに……」

「確かに証拠は無いわ。でも怪しいって事は断言できる」

一体真矢は白上教授の何を怪しんでいるのか分からず、困惑してその場に立ち尽くした。

「(何で?)」

「あの教授、仁君の事で何か隠していることがあるわ」

真矢がここまで白上教授の事を疑うのは、以前仁がケツアルスピノフォームの暴走に悩まされていた際に小さく呟いた一言を聞いたからだ。

『これはもしや……だとすると彼は』

亜矢は聞き逃していたが、真矢は白上教授の小さな呟きをすっかり聞いていた。

白上教授は仁の身に起きた異変について、目に見えていること以上の何かに気付いている。そしてその事を亜矢達は勿論、仁にも明かしていない。

その事が真矢の疑心を煽っていたのだ。

『もしかすると取り返しのない事になるかもしれない。だから亜矢、教授がさつきまで何を見てたのかを調べよう』

「（それは……でも……）」

真矢の言いたい事は分かる。あの時、亜矢も白上教授が何か呟いたのは見ていた。何を言ったのか聞いてもその場ははぐらかされてしまい、再び聞くタイミングも無かったからそのまま忘れていたが、気にならないと言えば嘘になる。

そしてその内容が仁に関する事で、ただ事では無いのなら放置する訳にはいかないのも確かだ。

だがだからと言って、仁が信頼する白上教授を自分が疑って根掘り葉掘り調べるような事をするのは、亜矢にはどうにも気が引けてしまった。

しかしやはり真矢の言う通り、白上教授が何を隠していたのかは亜矢も気になる。自身の内に湧いた好奇心と真矢に促され、気付けば白上教授の机のパソコンの前に立つて

いた。

罪悪感に躊躇を感じつつ、亜矢はディスプレイの電源スイッチに手を伸ばし――

「亜矢さん、そろそろお昼だからご飯行こう？」

「ひゃっ!!？」

出し抜けに仁から声を掛けられ、驚いた亜矢は弾かれるようにディスプレイから手を離した。その様子と彼女が教授のパソコンの前に居る事に、仁は彼女は何をしていたのかと首を傾げた。

「亜矢さん？ 教授の机の前で何してるの？」

「え？ あ、いや、えつとその……きよ、教授の机の上、結構散らかってるなうって思ってます……」

「ああ、最近色々あつて忙しかつたらうし、片付けてる余裕無かつたのかもね」

苦し紛れの言い訳だったが、仁は特に亜矢を疑う事なく納得した様子を見せた。その事に亜矢は胸が苦しくなるのを感じた。たった今悪事を働こうとしていたのに、それを仁に隠している。仁に汚い自分を見せた事に、亜矢は嫌な思いを感じずにはいられなかった。

これ以上は無理だ。亜矢は白上教授のパソコンを見る事を諦め、仁と共に研究室を出

て学食に向かった。

その道中、真矢の言葉が気になった亜矢は仁に最近異変がないか訊ねてみた。

「そう言えば仁くんは大丈夫ですか？ その……変な感じがしたりとか？」

「何それ？」

「いえ、その……ほら、最近一番大変だったのは仁くんじゃないですか？ 人間緊張が解

れた瞬間が一番体調を崩しやすいですし、最近の疲れとか一気に出てきたんじゃないかなって」

本当は、もつと突っ込んだことを聞きたかった。体調が悪いとかそんなレベルじゃなく、体に何か異変が起こっていないかと聞いておきたかった。

だが何だか聞いてはいけないような気がして、具体的に訊ねる事は出来ないでいた。訊ねる事で、何かに引き金を引いてしまうのではとありもしない事を想像してしまったのだ。

そんな亜矢の内心に気付いているのかいないのか、仁は亜矢の頭を優しく撫でた。

「ありがと、心配してくれて……でもま、俺は大丈夫だから。体にも特に異変は無いし」
微笑みながら言う仁ではあるが、その割には何だか変に汗ばんでいる。確かに残暑はあるが、今日はどちらかと言うと過ごしやすい方だ。事実年中露出の少ない服装をしている亜矢も、今日は特に暑さを感じる事無く過ごしている。

「本当ですか、仁くん？ 何だか変に汗ばんでいるように見えますけど？」

「ん？ そう？」

「はい」

亜矢の指摘に、仁は額や首周りを手の甲で拭う。じつとりとした汗の感触に、仁は視線を明後日の方に向けると手の甲に付いた汗をジューパンで適当に拭いた。

「……最近暑かったのに急に涼しくなったから、体が涼しさになれてないだけかもね」

「本当にそうですか？ もし何処か体調が優れないなら、早めに帰って休んだ方が良くんじゃない？」

「でも別に体調は悪くないし、へっちゃらだよ」

「うーん……」

仁の返答に、それでも彼の体調の異変を疑う亜矢は徐に彼の頭を引き寄せ自身の額と彼の額を触れ合わせた。

「……………うん、確かに熱は無いみたいですね」

「でしょ？」

「あゝ、亜矢？ 場所分かってる？」

「へ？」

真矢の言葉に亜矢がふと周りを見ると、多くの学生達の視線が2人に刺さっていた。

ここは家でも無ければ研究室やラボでもない。そんなところで、こんな恋人同士の距離の近さを披露すればそりや注目される。それも大学一の変人と大学のマドンナのイチャ付きなら尚更だ。

一応少し前に海に行った時の一件（*番外編参照）で2人が恋人同士である事は学生達の間では周知の事実となつてゐる為騒ぎにはならない。ならないが、それでも2人がイチャつけば嫌でも注目を集める。

特に未だ恋人の居ない者や、まだ亜矢の事を諦めていない者なんかは特にだ。

途端に亜矢は自分がとんでもなくはしたくない事をした事に気付き、恥ずかしくて顔を真つ赤にさせ俯いた。額には変な汗が浮かび、先程の仁以上に汗ばんでいる。

「亜矢さん、汗ばんでるみたいだけど大丈夫？ 体調悪いなら早めに帰つて休んだ方が良いんじゃない？」

「うう〜……仁くん、分かつてくるくせに……」

分かつてて仁が揶揄うと、亜矢が顔を赤くして上目遣いになりながら恨み言を呟く。そんな亜矢の様子に、仁はちよつぷり満足そうな顔をした。気付けば彼の体から汗は引いていた。

「俺の汗は引いたみたい……新陳代謝がちよつと乱れてたのかな？」

「それ、大丈夫なんですか？」

「一時的なものだから大丈夫」

「何でそう言い切れるんです?」

「ん?.....勘」

端的に述べて仁はさっさと先へ行ってしまった。まるでこれ以上この話題を続けなようにしているかのようだ。

やっぱり何かおかしい。まだ顔を少し赤くしながらも、仁の様子に亜矢は違和感を感じずにはいらなかった。

亜矢の疑心に気付いているのか、仁はそそくさと学食へと入っていくので亜矢は慌ててその後続いた。

学食に入り、それぞれ料理を手に席に着く2人。

仁は軽く口と喉を潤そうと、コップに注いだ水を一口飲んだ。

瞬間、軽く咽てコップから口を離した。

「ツ!? ねえ亜矢さん、今日の水なんか変じゃない?」

「え? 変?」

「何か変に苦いって言うか.....」

まさかと思いい亜矢もコップに水を注いで一口飲んでみる。だが言うほど苦さとかは感じず、至って普通の水であった。

「……別に何も感じませんけど？」

「そう？ んん……」

もう一度仁はゆっくり味わう様に水を口に含んだ。ソムリエがワインを品定めするように水を舌の上で転がし、ゆっくりと嚙下しているのが傍から見ている亜矢にも分かった。

「仁くん、本当に大丈夫なんですか？ 今日何だかおかしいですよ？」

心の底から心配する亜矢に、仁は数秒目を泳がせると溜め息を一つ付き、困ったような笑みを浮かべて見せた。

「……ごめん、心配させちゃって。でも大丈夫だよ」

「でも……」

「大丈夫大丈夫。ほら、早く食べちゃお」

仁はかき込むように昼食を食べ始めた。誤魔化された事を自覚しつつも、正体の分からない違和感を相手にこれ以上追及する事は出来ないと諦め亜矢も大人しく昼食を食べ始めるのだった。

結局その日は、特にそれ以上何かが起こる事も無く終わった。あれ以降仁の身に何か異変の様な物が見られる事も無く、またファッジの出現により卒論研究が中断させられる事も無く平和な一日が過ぎた。

「それじゃ、お先に失礼します」

「お疲れ様でした」

「うん。2人共、お疲れ様」

仁と亜矢は揃って研究室を出て帰路へとつく。一緒に大学の敷地内を歩きながら、亜矢は仁に話し掛けた。

「仁くん。今日、仁くんの家に泊っても良いですか？」

「ん、いいよ」

そうと決まれば夕飯の買い出しだ。どうせ仁の事だから、そろそろ冷蔵庫の中も確な物が残っていないに違いない。

定期的に彼の家に入り込んで、食事の管理をしなければ。

………と云うのは建前であって、本心は昼近くの仁の異変が再び起こるのではないかと危惧しての事である。

仁は何でもないと言っていたが、それでもやはり心配にはなる。もしかしたら仁自身の自覚症状が少ないだけで、本当はもつと深刻な事——尤も仁自身何かに気付いている節は見られたのでそこは杞憂だと真矢は睨んでいる——になっているかもしれない。

仁の運転するトランスポゾンに2人で乗り、一路スーパーへと向かう。日が短くなってきたからか、既に茜色に染まりつつある空の下を2人の乗るトランスポゾンが駆け抜ける。道には2人の様に帰路についているのだろう、バスに乗っている学生やサラリーマンの姿も見えた。

何気ない日常。しかしそれは唐突に破られた。

出し抜けに2人の眼前の道路が吹き飛び、黒煙が辺りに立ち込めたのだ。

「ッ!?」

慌ててブレーキを掛ける仁。他の一般車両も同様に突然の爆発にハンドルを切ったリブレーキを踏んだりしたが、通行量が多くなる時間帯での出来事だからか急停車した車に別の車が追突したり、ハンドルを切ってそのままビルや電柱に衝突する車や、ブレーキとハンドル操作を同時に行い横転する車も少なくない。

その中には先程ちらつと見たバスもあった。多くの乗客、取り分け学生や子連れの主婦なんかを乗せたバスが、2人が見ている前で横転しようとしている。

それを見た瞬間、2人はデイナドライバーを腰に装着した。

「亜矢さん」

「はい！」

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

〈CAT Unite〉

「変身！」

〈Open the door〉

2人はデイナとルーナに変身し、バスの倒れてくる側に回り込むと同時に下からバスの天井部分に飛び蹴りを叩き込んだ。加減して放たれた飛び蹴りは倒れそうになるバスを立てさせ、横転する事を未然に防いだ。派手に揺れはしただろうがそこは御愛嬌だ。

「大丈夫？」

デイナはバスの横転を防ぐと、運転席に駆け寄り窓から運転手に声を掛けた。運転手はまだ頭が混乱しているのか、半分呆けながらも頷いて答えた。

「は、はあ、はい」

「早くここから離れて。今よりもっと危なくなるから」

デイナの言葉に運転手は小刻みに頷くと、バスをUターンさせてその場を離れていく。ルーナはその間にまだ無事な車に呼び掛け、同様にこの場から退避させた。

2人は察していた。ここはこれから戦場になる。今の爆発は事故ではなく人為的なものだ。

それを証明するかのように、上空から赤と青の衝撃が飛来する。翅を広げたレッドインパクトとブルーインパクトが、吹き飛んで開いた道路の穴の縁に着地した。

「待つていたぞ、仮面ライダー」

「今日がお前達の最期だ」

2人の言葉を合図に、傘木保安警察の隊員達が周囲から姿を現し、ダイナとルーナに銃口を向ける。明らかに危険な連中の出現に、まだ自力で動ける人達は悲鳴を上げてその場から逃げていった。

多くの人々は自力で逃げてくれたが、まだ安心はできない。今し方の混乱で怪我をし、倒れている人や車中に取り残されている人達が少なからずいる。彼らが居る以上、派手な戦闘をする訳にはいかなかった。

そんな2人の懸念など知った事かと言わんばかりに、傘木社の連中は徐々に包囲の輪を狭めていく。今にも発砲しそうな雰囲気だ。

「お前らさあ……もうちよつと場所選ぶってことできないの？」

「こんな人の往来のある中で襲うなんて……」

ダイナは呆れて溜め息を吐き、ルーナは言葉の端に怒りを滲ませた。

それはある意味で余裕の表れでもあった。複数の敵に囲まれながら、しかし自分たち以外の人達の事を心配する事が出来るのだから。

そんな余裕を、レッドインパクトは鼻で笑った。

「ふん！ 余裕を見せていられるのも今の内だ」

「おい」

ブルーインパクトが合図をすると、保安警察の隊員達がベクターカートリッジを取り出した。今更アントファッジなど……と思ったダイナだが、よく見ると彼らが持っているベクターカートリッジは何時ものとは異なっている事に気付いた。

「あれは……?」

ダイナが目を凝らす前で、隊員達はベクターカートリッジを起動状態にした。

〈Velocityraptor〉

「ッ!? まさか?」

起動したベクターカートリッジから聞こえてきた音声にダイナが目を剥いていると、保安警察の隊員達はベクターカートリッジを自らに挿入した。

そして変異した隊員達は、普段見るアントファッジではなく別のファッジの姿になった。トカゲのような顔に羽毛が生え、足には親指部分に湾曲した鉤爪が生える。

それは間違ってもアントファッジではない。それどころか、現代の生物の遺伝子すら

使ってはいなかった。

「恐竜フアツジ!? 量産型の!?」

「ヴェロキラプトルか……」

ヴェロキラプトル……某映画で有名になった恐竜の一種である。頭蓋骨が大きく脳の容量が多かった為、非常に頭が良く獰猛で危険な肉食恐竜として一般には認知されていた。

しかしそれは実は間違いであり、映画でモデルにされたのはデイノニクスと言う恐竜の方である。

実際のヴェロキラプトルはそれよりもずっと小さく、体高は精々人の股下程度の高さしかない。また頭蓋骨の化石から体の大きさに対して大きな頭脳を持っていた事は確実だろうが、発見された化石の中には集団で狩りを行ったとされるものは発見されていない。

これだけ聞くと、映画は能力を盛っただけで実際は大した事ないかのように見える。だがそれも所詮は化石から得た推測であり、実際のヴェロキラプトルがどんな恐竜であったかは分からない。もしかすると発見されていないだけで高い社会性を持った事を証明する化石が今後見つかるかもしれないし、実際にヴェロキラプトルが生息していた時代には他の恐竜たちから恐れられた存在と言う可能性も否定できるものではない

のだ。

しかしこの場で何よりも問題なのは、ただでさえ強力な恐竜ベクターカートリッジが量産されているという点だ。今2人の周りを囲んでいるのは簡単に倒せる雑魚ではなく、厄介な敵である。その認識は持つべきだろう。

「不味いかな、仁君？」

「ビビる必要は無いよ。恐竜ファッジって言ったってあれは多分性能を落とした量産仕様、今まで相手にしてきた恐竜ファッジよりはやりやすい筈さ。精々ちよつと前の普通のファッジレベルだよ」

要はピラニアファッジやマンティスファッジが群れでやってくる様な物と言う事か。それはそれで厄介な気がするが、今の2人は以前に比べて扱うライダーシステムの性能は勿論、変身している本人の能力も格段に向上している。今の2人がタイムスリップなどをして過去に戻りあの頃のファッジと戦えば、苦も無く倒す事が出来るだろう。

そう思うと、2人を取り囲んでいるヴェロキラブトルファッジも大した事ないように思えた。

徐々に迫ってくるヴェロキラブトルファッジ達を前に、デйнаとルーナは背中合わせになつて身構えた。

その時、数台の大型トレーラーが2人を取り囲んでいるヴェロキラブトルファッジ達

の輪から数メートル離れた所に停車した。よく見るとそのトレーラーには警察のマークとS・B・C・T・と言う文字が描かれている。この騒ぎに、S・B・C・T・が動してくれたのだ。

だが彼らの移動車両が何時もと違う。普段彼らが移動に使うのはもつと小型のSU Vだ。

もしや何か新兵器でも載せているのか？ デイナとルーナが注目していると、トレーラーのコンテナ部分から驚くべきものが姿を現した。

「あれは……スコープ？」

「でも見た目が大分違います」

コンテナから出てきたのは一見するとスコープの様だが、よくよく見ると各部が大分違う。

カラーリングは光沢を抑えた群青色だし、顔もスリットの様なバイザーと額に単眼のレンズがついただけのものとなっている。

顔の違いもあるが、何よりもスコープとして異質なのがベルトの形状である。非常に簡素なものとなっており、最大の特徴であるプレート挿入口とハンドルが存在しない。

それは遂に量産化に成功した、スコープ量産仕様——通称ライトスコープであった。

傘木社のファッジに対抗する為の量産型ライダーシステムが、遂にロールアウトしたのだ。

ライトスコープを身に纏ったS・B・C・T。隊員達は、トレーラーから次々と姿を現すとヴェロキラプトルフアッジ達に銃口を向けた。そして最後に、宗吾が変身したスコープ1号と銅色のスコープ2号がトレーラーから降りてくる。

「A小隊は仮面ライダーの援護、B小隊は逃げ遅れた民間人の避難誘導だ！ 行動開始！」

スコープ1号の指示を受け、ライトスコープ達は一斉に行動を開始した。半分は発砲しながらヴェロキラプトルフアッジに突撃していき、半分は半壊した車等の中から怪我などで動けない民間人を救出し避難を手助けしている。

ライトスコープの戦闘力は、量産仕様と言う割には非常に優れていた。同じ量産仕様とは言え、恐竜ベクターカートリッジを使用しているヴェロキラプトルフアッジと1対1で互角の戦いが出来ているのだ。ライトスコープ採用以前から使用されてきたガンマカービンによる銃撃戦は勿論、複合武装であるボルテックスシールドの代わりに装備している折り畳み式の短剣『ガンマソード』による接近戦までもこなしていた。

この事態に狼狽えたのはレッドインパクト達だ。今までスコープを除けば烏合の衆同然だった筈のS・B・C・T。が、これほどの力を付けてきたのだから。傘木保安警

察の隊員も戦いの素人ではないが、組織立った戦闘ではS・B・C・Tの方に分があるのか押されている。

この状況にデイナとルーナは顔を見合わせ領き合った。頼もしい味方が来て、敵の大半を引き付けてくれたのだ。

ならば、彼らがやるべきことはこの場で一番厄介な敵の相手に他ならない。

「……形勢逆転だね」

「今日は、倒します！」

「ちい、調子に乗るな!？」

レッドインパクトとブルーインパクトは飛翔し一気に2人に接近していく。高速で接近してくる2人だったが、ユナイトとなったルーナにはその動きが手に取るようになっていった。

「そこよッー！」

ルーナはリプレッサーショットIIを使い、銃剣モードのベクターリーダーで斬りかかってきたレッドインパクト達を銃身下部の刃で逆に切り裂き体勢を崩させる。2人の体勢が崩れた所で、デイナが翼を広げそれで2人を地面に叩き落とす。

「はい、いらっしやい」

「ぐはっ!？」

「うぐうっ!」

2人して地面に叩き落とされ、苦悶の声を上げる2人にデイナとルーナは畳み掛けた。

この2人の厄介な所は優れた連携と速度だ。ならばそれを封じてしまえば、こいつらは何も怖くない。

デイナがレッドインパクトを、ルーナがブルーインパクトを相手に戦う。彼らほどではなくとも優れた飛翔能力を持つデイナは空中に逃げるレッドインパクトを逃がさず、反応速度に優れるルーナはブルーインパクトの攻撃を全て躲し反撃を叩き込んでいた。

「くそっ!」 何故だ? 何故俺達兄弟が追い詰められる!?

「お前達は特別じゃなかったって事だよ」

狼狽えながらも高速で空中を飛び回り、四方八方から同じく空中に飛んだデイナにレッドインパクトが攻撃を仕掛ける。デイナはレッドインパクトの攻撃を耐え、一瞬の隙を突き強烈な拳や蹴りを叩き込み最後には踵落として再び地面とキスさせた。

「負けて堪るか!」 俺は、俺達は特別なんだ!」

「アンタ達、2人で1人なんでしょ? なら2人に分けられたらそれ半人前って事じゃない。最初から2人で1人の私と亜矢に勝てる訳ないでしょうが!」

何度も高速で接近して攻撃してくるブルーインパクトを、ルーナはすれ違いざまに防

御しつとりプレッシャーショットⅡの銃撃をお見舞いする。動きが早いので一瞬の交錯で一発しか叩き込めないが、それが何度も続けば蓄積したダメージは相手の動きを確実に鈍くさせる。

何度かの交錯の末に、目に見えて動きが遅くなったブルーインパクトをルーナはローリングソバットで蹴り飛ばした。その先には、デйнаにより地面に叩き落とされたレッドインパクトが居る。デйнаに叩き落されたダメージから回復しきれないレッドインパクトは、蹴り飛ばされてくるブルーインパクトを避ける事が出来ず激突し再び地面に倒された。

「ぐはあっ?!」

「ぐぐ、うう……」

デйнаとルーナの攻撃にボロボロの2人。これでは得意の連携攻撃も出来ないだろう。最早勝敗は明らかであった。

「どうする? まだやる?」

「もうあなた達2人に、勝ち目はありませんよ」

洗脳されている相手には無駄と分かりつつ、それでも降伏勧告を行ってみる。もしかするとこの状況で降参するだけの利口さは残っているかもしれない。しかし。

だが結果は予想通りで、2人はベクターリーダーを手に抵抗の意思を見せた。

「ふざけるな……負けを認めようものなら、それこそ会社に殺される」

「勝てないならせめて、お前達との戦鬪データを持ち帰るまでの話だ」

2人はデイナとルーナに向けて銃撃した。ボロボロでふら付いているからか狙いは正確ではなく、殆どは2人の周りを穿つだけで偶に当たりそうになる奴も簡単に防ぐか避ける事が出来た。

尚も抵抗を続けるレッドインパクト達に、寧ろ憐れみを覚えたデイナはせめて引導を渡してやろうとトドメの一撃を放った。

「亜矢さん、援護宜しく」

「はいー」

一撃で勝負を決めるべく、デイナは飛翔しレセプタースロットルを引く。その間にレッドインパクト達にはルーナが銃撃で対抗し狙いをデイナから逸らした。

〈A T P B u r s t〉

「ハアアアアッ!」

ルーナの援護を受けながら放たれたノックアウトクラッシュ。空中から放たれた両脚蹴りは、レッドインパクトとブルーインパクトを纏めて蹴り飛ばそうとしたが、ここで彼らは予想外の動きをした。

デイナのノックアウトクラッシュが2人に直撃する寸前、ブルーインパクトが前に出

てレッドインパクトを庇ったのだ。

「あ……」

「ぐあああああああつ?!」

1人でデイナの必殺技を喰らったブルーインパクトは爆発四散し、変身が解けたソニック兄弟の片割れは隠蔽処置により火達磨となった。

その光景に一瞬呆気にと取られている間に、レッドインパクトが空へと逃げた。彼らはどちらか片方が犠牲となっても、デイナとルーナの戦闘データを持ち帰ろうとしたのだ。

「逃がすか」

逃げようとするレッドインパクトを追おうと翼を広げるデイナだったが、ヴェロキラプトルファアジを殲滅し終えたS・B・C・T.の動きの方が早かった。

「隊長! 最後の敵が空へ逃げます!」

「逃がすな! 撃ち落とせ!」

地上からのライトスコープ達の一斉射撃が空中のレッドインパクトを襲う。デイナ達の攻撃で体力を消耗したレッドインパクトは、加速するのに時間が掛かり逃げる前にS・B・C・T.の十字砲火の餌食となってしまった。無数の銃弾が装甲を抉り、背中の翅は全て穴だらけとなって千切れ彼は再び地上へと落下していった。

「うわあああああああつ?!」

悲鳴を上げながら落下するレッドインパクトは、空中で変身が解除され更にそのまま燃え上がった。ソニック兄弟の残りの片割れは火の玉となって地面に落下し、地面に叩きつけられ焼死するよりも先に落下死するのだった。

事切れたソニック兄弟を、変身を解除した仁と亜矢が静かに見ている。敵ではあったが、彼らは同時に傘木社の狂気の犠牲者でもあった。亜矢は苦しめられた相手だが、それでも憐れに思わずにはいられない。

「……何時まで続くんでしょうね?」

ふとした疑問を亜矢が口にした。命を奪い合い、無関係な人達が巻き込まれる苦しい戦い。こんなもの、一体何時まで続くと言うのか。

抱いて然るべき疑問を口にした亜矢の肩を、隣に立つ仁が優しく抱いた。

「正確には分からないよ。でもそんなに長くはないと思う」

振り返れば、戦闘後の処理を行うライトスコープ達。その中から変身解除した宗吾が2人に近付いて来ている。

傘木社とは決して2人だけで戦っている訳ではない。それを実感させる光景に、仁は頼もしさを感じると同時にこの戦いの流れが変わった事を感じずにはいられないのだった。

その光景を遠くから見ている者達が居た。アデニンと希美、そして雄成の3人である。

3人は現場から遠く離れたビルの屋上から、特に仁と亜矢の2人を双眼鏡で見っていた。

「……………ソニック兄弟がやられたか。アメリカの方じゃ評価が高かったみたいだが、存外大した事なかったな」

「あんなもんでしょ。寧ろ長く持った方よ」

アデニンと希美が思い思いに感想を口にするのに対し、雄成は只管仁の事を観察していた。

「フフフ……もう少し揉んでやる必要がありそうだね」

そう呟くと、雄成は双眼鏡を下ろしポケットから二つのベクターカートリッジを取り出した。

「楽しみだよ、君が熟す瞬間がね」

ウキウキとした様子で一人呟く雄成を、希美が冷めた目で見つめていたのだった。

第45話：供物にされる者達

遂にS・B・C・T.の正式な装備として量産型のライトスコープが配備された。

それからと言うもの、今までにないほどの頻度で傘木社の息が掛かった施設などへの検挙が行われた。

企業・工場・場合には集合住宅など、一応は秘密裏に組織された部隊だと言うのに、その存在が民衆の間で周知されるほどの活躍を彼らは行っていた。

そのS・B・C・T.による傘木社への攻勢には、仁と亜矢も加わっていた。今までとは違い、攻めるべき箇所が多すぎたのだ。なので、足りない戦力を補う為の意味でも、仮面ライダーとしてファッジとの戦いではベテランと言って良い2人に声が掛かった。

「はっ」

「ヤアツ！」

ダイナ・ケツアルスピノフォームとルーナ・ユナイトがS・B・C・T.の部隊の一つと行動を共にし、とある工場を隠れ蓑にしたファッジの実験場を襲撃していた。最早当たり前のように出てくる恐竜ファッジ達。雑魚である傘木保安警察の隊員すら恐竜ファッジであるヴェロキラプトルファッジとなって向かってくる。

それをデイナとルーナを中核としたライトスコープの部隊が相手をする。最初の頃
に比べれば圧倒的に中も外も強化されたデイナとルーナ、そしてただでさえ訓練を受け
た上に戦う相手に見合う装備を手に入れたS・B・C・T.には、恐竜ファッジと言え
ども相手にはならなかった。

「ふう……終わったか」

デイナとルーナの活躍もあって、この工場での戦いも勝利する事が出来た。この部隊
を任されている慎司が、戦闘終了後に感謝と労いの言葉を掛ける。

「ありがとうございます。今回も、お2人のお陰で大きな被害も無く終われました」
「いえ、お力になれて幸いです」

「じゃ、後は任せます」

事後処理などをS・B・C・T.に任せ、仁と亜矢は大学へと戻った。

「はあく……」

大学に戻り、研究室に入るなり仁は多目的スペースのソファアに深く腰掛け深く息を
吐いた。その様子には目に見えて分かるほどの疲労が浮かんでいる。

「仁くん、大丈夫ですか？」

「ん？ うん……ちよつと疲れただけだから」

「最近ずっとそうじゃない？ 戦った後は毎回そんな感じで……」

真矢が指摘する通り、ここ最近仁は戦闘が終わると毎回疲労を露にしていた。

それ自体は決しておかしい事ではない。戦闘はそれだけ体力を使う事だし、亜矢だって戦いの後は疲れた様子を見せる。だが仁のそれは、以前までに比べて明らかに疲労の溜まり具合が違っていた。

少し前なら、戦った後でも研究室に戻ればそのまま卒論研究に戻っていた筈なのに………。

「もし体調が悪いんですしたら、あまり無理せず休んでくてもいいんですよ。」

「ん、いや。大丈夫だよ。確かに最近ちよつと疲れてるけど、少し休めばすぐ良くなるから」

そう言って仁は再び深い溜め息を吐く。その様子を見て、亜矢は小さく息を吐くと仁の隣に腰掛け、彼を半ば無理矢理引っ張り倒して自分の膝の上に彼の頭を乗つけさせた。

「んん？ んん？」

「……ならせめて、少しでもいいから寝てください。それ位の時間なら私の膝を貸しますから」

「ん、でも……」

「一番頑張ってるのは仁君でしょ？ これ位で文句言う人は居ないし、私達が言わせな

いわ。だから今はとにかく休んで頂戴」

一瞬渋る仁ではあったが、疲労と亜矢の膝には勝てなかったのか静かに意識を手放し眠りに落ちていった。

仁が規則正しい寝息を立て始めたのを見ると、亜矢は彼に優しい笑みを向け頭を撫でると片手で携帯を操作して電話を掛けた。その相手は、S. B. C. T. の宗吾だ。

「もしもし？ 権藤さんですか？」

『どうした？ 何かあったのか？』

「いえ、大した事ではありません。ただ、一つお願いがあつて」

『何かな？』

「次にファッジが出て私達の力が欲しいってなつた時、仁君じゃなくて私達に連絡して欲しいの」

亜矢と真矢は、最近仁が変に疲れている事などを告げた。ここ最近はずつぱりとなつている事を、宗吾の方でも理解しているからか彼女の言いたい事を理解し快く了解した。

『分かった。次に君達の力が必要になつたら君の方に連絡する』

「ありがとうございます。それじゃ」

亜矢は通話を終えると、携帯を仕舞い再び視線を下に降ろした。仁は依然として眠つ

ていて、亜矢が今し方宗吾にした話などまるで気付いていない。

穏やかな笑みで眠る仁の頭を、亜矢が慈愛に満ちた目をしながら撫でた。

「……本当に、何時も無茶するんですから。……とにかく今は休んで、ね」

彼女の言葉が夢現に届いたのか、それとも彼女の膝枕の寝心地が良いからか、仁は亜矢と真矢に頭を撫でられて穏やかな溜め息を吐くのだった。

傘木社の特別研究区画に昼夜の区別はない。研究員は交代で絶えず研究に励んでいる。特に今は、手に入れたデイナドライバーの基礎設計図を基にした新たなドライバーの開発が行われているのだ。力の入り方が尋常ではない。

その様子を雄成がモニターで満足そうに見ている。あれが完成すれば、彼の野望の達成にまた一步近づく。そして完成はもう間近だ。

研究員達の奮闘を横目で観察——若しくは監視——しつつ、雄成本人は別の事をしていた。

彼の手元のノートパソコンには、ここ最近のデイナ……仁の戦いの様子が映し出されている。

様々な映像の中で、デイナは様々なファッジと戦っている。大体はケツアルスピノフォームを使用しての戦闘だが、時には通常フォームで戦闘している場面もあった。

「もう一息……と言ったところか。次は何処を教えてやろうか……いや、新たに用意するのにも良いな」

ここ最近、矢鱈と戦闘が多いのは雄成がS・B・C・Tに情報をリークしているからだ。戦闘の頻度が高くなれば、S・B・C・Tだけでは手が足りなくなりデイナの出番が多くなる。

雄成はとにかく仁を戦わせたくて、自分の息のかかった施設の情報を敢えて教えていたのだ。時には戦力を増加してやり、簡単には落ちないように調整したりもした。

末端とは言え配下の者が命を散らす事に対し、雄成の心は欠片も痛まない。彼にとつて他人の命などはその程度のものであった。

さて、次は誰を生贄にしようか……そんな事を考えていた雄成はふと、ソニック兄弟と一緒に送られてきた被検体の事を思い出した。安定した能力を与えられた彼らと異なり、その被検体達は性能が安定せず失敗作の判を押されはしたが、能力自体は目を見張るものがあるのでこちらで評価試験などに役立てて欲しいとの事。

送られた資料に目を通し、雄成はその被検体達に興味を抱いた。

「ほお？　これはなかなか、面白いじゃないか。どれ、ちよつとテストしてみよう。相手は……グアニンでいいか」

雄成は軽い気持ちでグアニンに部下を連れて訓練ブースへ来るよう命じた。詳細は伝えず、完全武装で来させる。

雄成の指示から程なくして、グアニンは直轄の部下と共に訓練ブースへと向かった。突然の命令に、グアニンも彼の部下達も些か困惑を隠せない。

「グアニン様。社長は何故我々をここに？」

「私も詳しい事は聞かされていません。ただ完全武装でここに呼んだと言う事は、何かの性能試験でしょうか……」

部下と雄成の真意についてグアニンが話し合っていると、彼らが入ってきたのとは別の扉が開いた。

一瞬雄成が入って来たのかと思ったグアニンだが、入ってきたのが恐らくは10代後半だろう少女だと言う事に気付き怪訝な顔になる。年齢もそうだが、服装もだ。少女は少し前まで希美が着せられていた囚人服の様なものを着せられていたのである。この場において、あの服装をしている者は実験動物である事を意味していた。

もしや、あの少女と戦えと言う事か？　グアニンが雄成の意図を予想していると、

ブース内のスピーカーから雄成の声が発せられた。

『やあグアニン。突然ここに呼び出してすまないね』

「いえ、問題はありません。それで、私達は……あの、少女と？」

グアニンがスピーカーからの声に応えながら少女を見ると、少女はビクリと体を震わせる。とてもではないが、自分たち全員を相手に戦えそうには見えない。

だが雄成はやらせるつもりの様だった。

『その通りだ。君らには彼女と戦ってもらおうよ』

「それは構いませんが、あの少女は何なのですか？ 私は見た事がありませんが？」

『彼女は先日ソニック兄弟と一緒に送られてきた被検体だよ。尤も、アメリカの支社からは失敗作の烙印を押されてはいるがね』

失敗作という言葉に、背後の部下達から失笑が漏れた。今の彼らは全員が新型のヴェロキラプトルフアτζとなれる。アントファアτζとは比べ物にならない性能のファツジに加え、ベクターリーダーを与えられたグアニンを相手にたった一人で戦わされると言うのだから。

「本当にやってしまったって構わないのですか？ 正直に言って、殺さない自信はありませんよ？」

『寧ろ殺す気で行った方が良いでしょう。何、難しく考えないでくれ』

そうは言われても、やはり少女に対する違和感は拭えない。とてもではないが脅威とは思えないからだ。現に今も、体調が悪いのか明らかに緊張とは違う汗をかいて苦しうに息をしている。あんなのと戦って何が分かると言うのか。

『さ、そろそろ始めてくれ。えっと、名前は……リリイだったか？ 始めるんだ』
「……………」

〈POISONOUS Creature〉

少女——リリイはベクターカートリッジを取り出し起動状態にした。そのベクターカートリッジが良く知るものとは異なり、内部のシリンダーだけでなく外観までもが毒々しい紫色をしていた。

だがそれ以上に気になるのが、カートリッジの起動音だ。それは特定の生物を示していなかった。

「ポイズノースクリューチャー？ 毒生物か？」

訝しむグアニンの前で、リリイはベクターカートリッジを自らの鎖骨の部分に押し当てて挿入した。彼女の体に潜り込んだベクターカートリッジから注入される超万能細胞が、彼女の体を大きく変異させていく。

「うっ!? あ、あああ——」

体に変異するにつれ、リリイは苦しそうに喘ぐ。だが苦悶の声は、変異が終わる頃に

は咆哮へと変化していた。

「グルルルル……シヤアアアアッ!!」

リリイが変異したファッジは奇妙の一言に尽きる見た目をしていた。全身を甲殻で覆われており、両手には鋭い爪、腰の後ろからはサソリの尾の様なものを伸ばしている。だが尾の先端にあるのはサソリの物ではなく蜂の腹と毒針だった。

そしてファッジが声を上げる時、顔の甲殻が動き中には蛇の様な鋭い牙が姿を見せる。

「何だ、あれは？ キメラファッジ？ だがカートリッジ一本で？」

「シヤアアアアアッ!!」

「くっ!？」

リリイの変異したファッジ——有毒生物の遺伝子をかき集めた人造遺伝子からなるトクシツクファッジ——は、開始の合図を待たずにグアニン達に襲い掛かってきた。

グアニンは咄嗟にベクターリーダーによる銃撃でファッジを牽制しつつ、シーアーチンベクターカートリッジを取り出した。

〈Sea urchin Leading〉

「進生!」

〈Transcription〉

グアニンがダークステインガーに変身すると同時に、部下達もヴェロキラプトルファアツジに変異する。

部下のヴェロキラプトルファアツジ達は変異すると素早くダークステインガーの前に展開し弾幕を張る。

放たれる無数の弾丸を、トクシツクファアツジは強固な甲殻と素早い動きで最低限の被弾で済ませて接近した。接近を許してしまったヴェロキラプトルファアツジが、銃剣で迎え撃つ。

「シヤッ！」

振り下ろされた銃剣を、トクシツクファアツジは素早い動きで回避した。そしてお返しとばかりに、尻尾の先端の毒針を片方のヴェロキラプトルファアツジに突き刺した。毒針から猛毒がヴェロキラプトルファアツジに注入される。

「あが、があああ……」

毒針で刺されたヴェロキラプトルファアツジは、苦悶の声を上げながら体を崩れさせていく。猛毒がヴェロキラプトルファアツジの体組織を破壊し、肉体を崩壊させているのだ。下級に位置するとは言え、人間と比べ強靱な肉体を持つファアツジの体を崩壊させるほどの猛毒。どれほど恐ろしいかは想像するに難くない。

「ハ、ハ、ハ……」

隣に居た仲間を殺され、近くに居たファッジが至近距離からの銃撃を浴びせる。放たれる銃弾はトクシツクファッジの甲殻を僅かだが削り取った。だがトクシツクファッジは銃撃を気にせず、ヴェロキラプトルフアッジに接近し両手の爪で切り裂いた。

「ぎゃああああつ!？」

切り裂かれたファッジが断末魔の悲鳴を上げて崩れ落ちる。あの爪にも猛毒があるらしい。いや、尻尾と爪だけでなく、口から垂らす涎も床を溶かしている。あれも猛毒の様だ。

「全身隈なく猛毒だと? とんでもない奴だな」

「シヤアアアアツ!」

トクシツクファッジは他のファッジ達も始末すべく襲い掛かる。見た目に反して素早いトクシツクファッジにはなかなか銃撃が当たらず、悉く交わされては接近され爪や尻尾、牙で殺されていく。しかもその攻撃はどれも彼らにとつて即死攻撃。喰らえば即座に肉体を崩壊させる、死神の一撃だ。

最初相手が少女1人と侮っていたヴェロキラプトルフアッジは、今や悲鳴を上げながら1人また1人と狩られる獲物と化していた。

このままでは全滅は必須だと、彼らは戦法を変えた。とにかく接近を許さず密集してからの一斉射撃で確実に倒そうと言う戦法に切り替えたのだ。

只管距離を取って遠距離からの銃撃でトクシツクファアツジを釘付けにするヴェロキラプトルフアツジ達。

するとトクシツクファアツジも新たな攻撃で対抗した。両腕で頭を守りながら、その場でヴェロキラプトルフアツジが居る方に向け尻尾を振るう。すると尻尾の先端の毒針から毒液が撒き散らされ、ヴェロキラプトルフアツジ達に降りかかる。

その瞬間、まだ生き残っているヴェロキラプトルフアツジ達の口から一斉に悲鳴が上がった。

「うぎやあああああつ?!」

トクシツクファアツジは爪や牙から毒液を流し込むだけではなく、撒き散らす事も出来るのだ。

実際、スズメバチやコブラなど毒液を敵に向け飛ばす生物はいる。なのでトクシツクファアツジが出来ても不思議ではない。問題なのはその毒の威力だ。肉体だけでなく装備や床、壁なども腐食させるなど、生物の毒としてあり得ない溶解力である。

これで残るはダークステインガーだけとなった。ヴェロキラプトルフアツジ達が全滅するまで、僅か数分。幾ら相手が下級ファアツジとは言え、この時間で彼らを殲滅してしまったトクシツクファアツジはリーダーどころかブレスもない頃のグアニン達幹部に匹敵する戦闘力の持ち主だ。

油断すると命取りになる。ダークステインガーは危機を察して、初手から全力でトクシツクファアツジとの戦闘に臨んだ。

「くっ！」

まずあのファアツジ相手に接近戦は非常に危険だ。どの攻撃も下級ファアツジ相手であれば即死級の威力を持つ。下級ファアツジに比べれば頑丈である上に中身が改造されているダークステインガーなら即死と言う事はなくとも、喰らえばただでは済まないことは明白だ。

だからこそ、ダークステインガーは徹底して遠距離からの攻撃に徹した。幸いな事にトクシツクファアツジの甲殻は保安警察の標準装備のライフルで傷付けられる程度の強度だし、唯一の遠距離攻撃である毒液の噴霧も攻撃モーションが大きいので直ぐに分かる。ヴェロキラプトルファアツジ達との戦闘で手の内を見せすぎていた。既にダークステインガーは、トクシツクファアツジの攻略法を編み出していた。

「ふん……」

ダークステインガーは離れた所から主に顔を狙ってトクシツクファアツジを撃った。最初トクシツクファアツジは放たれた銃弾を回避していたが、次第にその動きにダークステインガーが慣れてきたからか当たるようになってきた。そうなると当然、トクシツクファアツジは回避を止め防御しながらの毒液の噴霧に攻撃を切り替えた。

彼はその瞬間を待っていた。この攻撃はモーションが大きい上に、直ぐ傍が大きな死角となる

トクシツクファツジが尻尾を大きく振って毒液を撒き散らした瞬間、ダークステインガーは前方に向けて飛び込み毒液を回避するとそのまま至近距離に近寄り銃剣モードにしたベクターリーダーで切り裂いた。

「グウツ?!」

「貫った!」

〈Genome set Full blast〉

大きくすきを晒したトクシツクファツジにトドメの一撃をと、ダークステインガーはジエネリック・ブレイカーを発動した。ファツジは今の一撃がまだ尾を引いているのか、避ける素振りを見せない。

ダークステインガーは自身の勝利を確信して必殺の一撃を振り下ろす。強化された刃がファツジの甲殻を抉り、切断面からは夥しい血飛沫が散った。

「アアアアアアアッ?!」

悲鳴を上げたファツジから飛び散った血をダークステインガーは大量に浴びる。

その瞬間、彼は全身を焼かれる痛みを感じた。

「うわあああああつ?!」

恐ろしい事にこのファツジは、血液ですら猛毒だったのだ。ダークステインガーが頑丈だからか、それとも血液は他の部分ほど毒が強くないのかは分からないが、ヴェロキラプトルフアツジの様に体が崩れるようなことはないがそれでも全身を苛む激痛は彼からそれ以上の行動を奪った。

「ああ、あああああつ?!? ぎいいいいあああああああつ?!」

変身しているというのに全身の肉を焼かれ、腐食させられる悍ましい感覚と痛みにはその場でのたうち回る。

そこにさらに追い打ちの様に、まだ生きているトクシツクファツジの毒針による一撃が彼を襲った。

「アアアツ!」

「ギヤアアアアツ?!」

この上さらに流し込まれた毒に、とうとう変身も維持できなくなりグアニンは元の姿に戻った。元の姿に戻った彼の姿はひどいもので、顔を含む全身がひどく焼けただれていた。

そこでトクシツクファツジも変異を解いた。元の姿に戻ったりリイの顔は勝者であるにも関わらず酷く消耗した様子であり、顔から脂汗を流し今にも嘔吐しそうな顔をしている。

「はあ、はあ、ぜい……う、あ……」

リリイは苦しそうな顔をしながら懐から手の平大の瓶を取り出した。中には大量の錠剤が入っており、彼女は蓋を開けるとそれを手の上に出した。手の平から零れるのも構わず、出てきただけの薬剤を彼女は一気に口に放り込んだ。口に錠剤を流し込んだ手でそのまま口を塞ぎ、錠剤を噛み砕くと水も使わず飲み込んだ。

「んぐ——!?! ぐ、ん……かはっ?!? はあ……はあ……」

大量の錠剤を飲み込んだリリイは、そのまま苦しそうに胸を抑えてその場に座り込む。明らかに異常な光景だが、未だ全身を焼かれる苦痛に悶えるグアニンは勿論、雄成も全く気にした様子を見せなかった。

その雄成はモニター室から移動してブース内に入ると、床で悶えているグアニンに近付いていく。

保安警察の隊員達があつという間に絶命したのに対し、グアニンは未だに生きていた。希美ほどではないが、肉体改造を施された彼は焼け爛れはしても死にはしなかったのだ。

「ああああ、ぐうううう!?! があああああ!?!」

毒による肉体の腐食と再生に苦しむグアニンを冷たく見下ろしていた雄成は、懐からアンプルを取り出した。

「助かりたいかね？」

「だ、だずげで!? だずげでください!？」

グアニンの必死の懇願に、雄成は口角を上げるとアンプルを専用の注射器に入れグアニンに打ち込んだ。薬液が注射されると、次の瞬間グアニンの体から湯気が上がり苦しみ出した。

「がああああああつ!？」

「我慢したまえ。腐食した肉体が急速に回復しているんだ」

グアニンの体からは湯気が数秒に渡り上がり続けた。漸く湯気が収まり、苦痛が引いたグアニンが顔を上げると、その顔は未だに爛れていて元の面影が無かった。

醜い姿になったグアニンに、雄成は顔を近付け彼の目を覗き込んだ。

「ご苦労だったね。これで彼女が決してただの失敗作ではない事が証明された。運用に際して少し面倒がついて回るが」

雄成が口先だけの労いをしていると、通気口からスライムのような粘液上の物体が入って来た。それは人の形に纏まると新たなファッジとなつてリリーの傍に寄り添う。ファッジがリリーに寄り添いながら変異を解くと、そこには彼女と歳の近い少年の姿があった。

「あ、あの少年は? 彼も、アメリカ支社からの?」

「その通り。あつちの少女……リリイは遺伝子改造によつて毒に対する耐性を持たせているんだ。ただ耐性が不十分でね、ファツジになった時に精製した自分の毒に体が耐え切れないから、変異後には専用の薬を服用しないとならないんだよ」

例え薬を服用しても、尚自分で精製した毒が体を苛むのかりリイの呼吸は荒い。少年は彼女を氣遣つてか、彼女を横抱きに抱き上げて少しでも楽な体勢をとらせた。

「あの少年は体に超万能細胞からなる微生物を細胞内に共生させているそうさ。そのおかげで肉体を液化化させる事が可能になったそうだよ。ただまあ、あちらも液化化の際に大量に体力を持つていかれるそうだから、多用できる能力ではないようだがねえ」

言外に対した価値が無いと告げる雄成を少年がキツと睨むが、逆らえばただでは濟まないと分かっているから直ぐに顔を伏せると少女の看護に戻った。

そんな2人から早々に興味を失った雄成は、能面の様な笑みをグアニンに向けた。

「さて、グアニン？ 一仕事終えた後で大変だろうが、もう一働きしてもらおうよ？」

自分を冷たく見下ろす雄成の、底冷えする様な視線にグアニンは震え上がり頷くしか出来なかつた。

そして、その様子を扉の陰から希美が冷めた目で覗き見ていた。暫く様子を見ていた

希美だったが、直ぐに興味を失ったように扉から離れるとその場から離れていく。

「——お腹、空いたな……」

ついさつき、本社ビル近くの飲食店の食材を全て平らげる程食べたばかりだと言うのに空腹とぼやく希美。

果たして飢えているのは、本当に腹なのかそれとも別の何かなのか。

誰にも何も告げずに、本社ビルを出た希美の進路にはまだ営業している飲食店。彼女はそこに向けて歩いていき、そのまま飲食店の前を素通りしていった。

覇気を感じられない目をした希美は、誰に気にされる事も無く歩いていく。

彼女の向かう先に見えてきたのは……明星大学。

「お腹……空いたわ。ねえ……アンタは、私を満たしてくれるわよね？」

1人呟きながら、希美は大学構内へと入っていった。

彼女の事を何も知らない警備員や学生は、彼女を一瞥しただけで特に引き留める事も無くそのまま通じたのだった。

第46話：狙われた仁

亜矢が仁と共に大学の研究室で卒論研究を行っていると、出し抜けに亜矢の携帯が着信音を鳴らした。携帯を取り出しディスプレイを見て誰が掛けてきたのかと確認すると、その相手は宗吾であった。

それを見て亜矢は一瞬視線を鋭くするが、直ぐに気を取り直して室外に出た。

「すみません、ちよつと……」

「ん？」

電話の為に外へ出ると言う、今までにない行動をする亜矢に首を傾げる仁。彼の視線を背に受けながら、研究室を出て更に離れた所で亜矢は電話に出た。

「はい、双星です」

『双星さんか。すまない、君らの手を借りたいんだが……』

「それって仁君居ないとダメ？」

出来れば仁は少し休ませたい。ここ最近どうも彼は戦闘後に様子がおかしい。彼の為を想うなら、彼には少し休んでいてもらいたかった。

『いや……そうだな。双星さんだけでも十分だ』

「それじゃ、直ぐに行きます。場所は？」

宗吾から向かうべき場所を聞くと、亜矢は一旦研究室に戻った。

「すみません、ちよつと用事出来ちやつたんで暫く席外しますね」

「亜矢さんどうしたの？」

「何でもないから大丈夫よ。仁君は気にしないで」

やや強引に話を終わらせると、亜矢は大学を出てタクシーを捕まえ現場近くへと向かって行く。

その際、亜矢は入れ違いになる様に大学に入ってきた希美の存在に気付く事は無かつた。

研究室に残された仁は、亜矢が居なくなつたからか少し寂しそうにしていた。

そんな仁の様子に気付いた峰が、ちよつと揶揄つてやろうと声を掛ける。

「愛しの双星さんが居なくなつちやつて寂しいですか？」

「お前、趣味悪いぞ？」

すかさず拓郎のツツコミが飛んでくるが、峰は勿論仁も特に気にした様子を見せない。
い。

「ん、まあ、寂しくないって言ったら嘘になりますけどね」

「大丈夫ですよ。双星さんなら、きつとすぐに用事とやらを済ませて帰ってきますって」
本当は峰も拓郎も、先日仁が仮眠している間に亜矢が宗吾と話し合い要請を仁に報せない様になると話し合っていた事を知っている。知っていて、亜矢の気持ちと仁の体を考えて黙っていた。

その時ふとある事が気になり、拓郎が峰に小声で話し掛ける。

「(そう言えばお前、アラームなったらどっち道門守も戦いに出ちまうんじゃないのか?)」

「(そこは抜かりありませんよ。今アラームは切つてあります。S・B・C・T・に同じものを渡してますから、こつちが気付いて向こうが気付かない事も無いですからね)」
もしそれでも仁の力が必要になれば、流石に宗吾も仁に助けを求めらるだろう。それは仕方ない。だが可能ならば今は仁に戦いの事を報せたくはなかった。

正直な所、薄情な気がしなくもない。仁が戦いに出なかつた事で、失われる命が無いとは言わない。だが戦士にだって休息は必要だ。特にここ最近異常が顕著な仁に、必要以上に無理を強いるのは責任の押し付けでもある。

以前と違い今は戦える者が多くいるのだから、1人くらい休息を得たつて罰は当たらないだろう。少なくとも仁はそれに見合うだけ戦い救ってきたのだから。

「お〜い、ちよつとコンビニ二行くけど何か欲しいものあるか?」

その時、史郎と康太がコンビニに行くと言い出した。ちよつとした休憩などに軽く摘まめる菓子やジュースなんかを買いに行くつもりらしい。

仁と拓郎は特に欲しい物もなかったのだが、峰はそうでもなかったようので2人についていく。

「あ、私一緒に行くわ」

「別に来なくても、ついでに買ってくるぜ?」

「何が欲しいかってのが決まってるから、自分で探した方が早いよ。それに態々買ってもらうのも悪いし」

「じゃ、行くか」

峰と史郎、康太の3人は研究室を出てコンビニに向かつて歩く。他の学生と時折すれ違いながら、雑談しつつ研究棟の廊下を歩く。

「そう言えばさ、宮野つて瀬高の事ぶっちゃけどう思ってる訳?」

「はっ!? 何でいきなり瀬高君!」

「お前ら距離感近すぎ。もううちの研究室一組カップル出来てるんだからお前らもさっ

さと付き合え」

史郎に続き、康太にまで拓郎との関係を指摘された峰は、顔を赤くしながら必死に反論する。

「違うから！ 瀬高君とは幼馴染ってだけだから！」

「大学生どころか院生になっても幼馴染を維持し続けられるお前ら凄えわ」

「無意識に付き合ってるんじゃないの？」

「だ〜か〜ら〜!!？」

根掘り葉掘り拓郎との関係を突いてくる2人に、峰が必死に抵抗する。気心の知れた仲間とふざけ合う、他愛のない日常。

そんな日常が、唐突にぶち壊された。

廊下を歩く3人の前に、ふらりと姿を現す1人の女性。言わずもがな、大学に正面から堂々と潜入した希美である。

その姿を見た瞬間、峰の顔から血の気が引いた。

「久しぶり」

「な、何であんたがッ!？」

胡乱な目で見てくる希美に、峰が一気に戦闘態勢に入る。白衣の袖から警棒を取り出し、希美に向けながら史郎と康太の2人を下がらせた。

「2人は研究室に戻って、門守君にこいつが来たこと知らせて！」
「こ、こいつって、一体何なんだよ!？」

突然の峰の豹変に訳が分からない史郎が困惑するが、康太は事情を察して史郎を引つ張り研究室へと引き返す。峰が過剰なまでに警戒する相手など、傘木社の人間以外ありえないと分かっているからだ。

「お、おい源!？」

「良いから急ぐぞ。宮野のあの様子だと、あの女かなりヤバイ」

2人が研究室に引き返していく中、峰は希美と睨み合っていた。と言っても、睨んでいるのは峰の方のみで希美は峰に対して興味なさそうである。

「何の用よ?」

「……デイナに、会いたくてね。居るんでしょ? そこ退いて」

そう言われてはい分かりましたと退く訳がない。峰は道を開けるどころか、警棒を手に希美に飛び掛かった。変身されると絶対に勝ち目がない。やるなら変身するよりも前に――

そう思っていたのだが、その思惑はいとも容易く崩された。

希美は峰の振り下ろした警棒を持つ手を、片手で受け止めてしまったのだ。

「くっ!？」

ここで勝負が決まるとは流石に思っていないかった。避けられるか、防がれるだろうとは思ってはいた。だがまさか片手で、それもあつさりを受け止められるとは思ってもいなかった。

しかも掴まれた手はピクリとも動かない。必死に外そうとするが、まるでガツチリ固定されているかのように動かす事が出来なかった。

「こん、の!?! 離しなさいよ!」

「別にアンタに興味はなかったのに……まあ前菜になつてくれるつて言うなら、喜んで相手してやるわよ!」

「舐めんな!」

腕が固定されているなら、それを逆に利用してやればいい。峰は掴まれた手を支点に自分の体を持ち上げ、希美の腹に踏みつけるように蹴りを叩き込んだ。これは少しは効いたのか、希美の手が緩み峰は蹴りの威力も利用して脱出する。

「このおおつ!」

着地した時、希美はまだ体勢を崩したままだった。峰は今が好機と、希美に突撃し今度は下から振り上げるように警棒を振るい相手の脇腹を殴る。今度は希美に防がれる事も無く彼女の脇腹に突き刺さり、確かな手応えを峰は感じた。

峰はそのまま希美に追撃しようとするが、希美もやられてばかりではなかった。振る

われた警棒を片手で弾くと、もう片方の手で峰の顔にフックを叩き込む。峰はそれをギリギリで回避したが、拳は頬を掠め薄く切り裂き、眼鏡を吹き飛ばした。

「くうっ!?!」

眼鏡を吹き飛ばされて峰の視界が悪くなる。しかし戦えないほどではないので、峰は予備の眼鏡を取り出すこともなくそのまま戦闘を続行。希美に追撃させないようにと回し蹴りを放った。

「はっ!」

「ふん……」

頭を狙って放たれた回し蹴りを希美は体を逸らすだけで躲し、無防備になった峰の背中に裏拳を叩き込む。

背中を殴られた峰はその勢いで廊下に倒れる。

床に倒れた峰を踏みつけようと希美が足を上げる。峰はその足が下ろされる前に、警棒で希美の脛を殴りつけた。これは流石に効いたのか、希美はバランスを崩し踏みつけが外れた。

その隙に立ち上がった峰は希美の首筋に警棒を振り下ろす。脛が効いたのだ。急所の一つである首筋に警棒を叩き込まれれば、確実にダメージになる。

だが峰の警棒が当たるよりも前に、鞭のようになつた希美の拳が峰の顔面に突き刺

さった。

「がっ——?!」

顔面を強かに殴られ、峰の鼻から鼻血が噴き出す。噴き出した血で服や手が赤く染まるのも構わず、動きを止めた峰に希美が蹴りをお見舞いした。蹴り飛ばされた峰は壁に叩き付けられ、その際に手から警棒が滑り落ちる。

「がはっ?! げほっ?!」

「ふっ—」

「おっっ?!」

蹴られた痛みと壁に叩き付けられた痛みで喘いでいる峰に、希美が追撃を加える。無防備な峰の腹に拳を叩き込む。口から内臓が押し出されるのではという痛みに、峰が目を見開き口から反吐を吐き出す。

強烈な腹への一撃に、ただの人間である峰が耐えられる訳もなくそのまま意識を手放した。

「う、う……」

「……………ふん」

口から涎を垂らして脱力した峰の首を、希美は面白くなさそうに息を吐きながら手放した。

そこに騒ぎを聞きつけたのか、警備員がやって来た。

「何をしている!？」

「大人しくしろ!」

警備員2人が希美を取り押さえようと迫るが、それより先に希美は峰が落とした警棒を拾い上げると高速で投擲し、警備員の1人の肩に突き刺した。

「がああっ!？」

「なっ!？」

まさかの希美の行動にそちらに気を取られる警備員。希美はその間に警備員たちに接近すると、1人の頭を掴んで壁に叩き付けめり込ませ、もう1人の警備員は側頭部を裏拳で殴り一撃で意識を刈り取ってしまった。

峰を下し、警備員2人を一瞬で戦闘不能にした。その暴れっぷりを遠めに見ていた学生は、希美と目が合うと悲鳴を上げて逃げていく。

逃げていく学生を目だけで追い、つまらなそうに溜め息を吐く。

そこに漸く仁が拓郎と共に駆け付けた。拓郎は顔を血塗れにして倒れている峰に顔色を青くして彼女に駆け寄る。

「宮野!?! しっかりしろ!?!」

「先輩、揺するのは駄目。悪化するかも」

無残な姿となった峰に冷静さを欠いた拓郎を仁がそれとなく宥める。

その一方で視線は希美から離さない。仁の姿を見た希美は既にブレイドライバーを手持っている。何時でも変身できる状態だ。こちらも備えなければ。

デイナドライバーを取り出しながら、仁は徐に最初にデイナに変身した時の事を思い出していた。思えば最初に出会った敵も希美が変異したスパイダーファッジだった。あの時白上教授を助けた亜矢を咄嗟に庇ってから、仁は仮面ライダーとなり戦い続けている。そして仁達は知らない事だが、あの時の希美の行動は彼女の独断専行だった。

つまり、全ての始まりは彼女にあると言う事である。

「……アンタとも長い付き合いになったよね」

「何よ突然？」

「いや……」

不意にやってきた郷愁にしんみりしながら、仁はデイナドライバーを装着する。希美も同時に、ブレイドライバーを腰に装着しベクターカートリッジを取り出した。

「ま、何でも良いわ。私は満たされたいだけ……」

「……ずっと聞きたかったんだけど……アンタどうしたら満たされるの？」

「はあ。」

希美は仁に徹底的に敗北してから人が完全に変わった。覇気は無くなったのに、何か

を無性に求めている。まるで心の底に穴でも開いたようだ。何をしても満たされる事のない、空っぽで穴だらけの心。

敵ながら仁は希美が哀れに見えて仕方なかった。

そして仁の哀れみを含んだ視線は、希美の心を不快にさせる。

「……何よ。何よその目？」

「ん？」

「何か分かんないけど……アンタむかつくわね!？」

〈HORSESHOE × CROCODILE × TURTLE Mixing Genetic information〉

「ああ、嫌な思いさせたならゴメンね。悪気は無かったんだけど、何て言うか……さ」

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSARUS Reborn〉

廊下で向かい合う仁と希美を、拓郎が横目に見ながら峰を引き摺って行く。

拓郎が離れるまでの間、仁はともかく希美も動かなかった。

そして、拓郎達が十分に離れた瞬間——

「変身!!」

〈Open the door〉

〈Create, Capture, Out of Control——Brake

t h e c h a i n

一方、宗吾に呼ばれた亜矢が辿り着いたのは都内某所にある工場だった。廃工場ではなく、稼働している工場。S・B・C・Tの調査により、この工場に不自然な資材の搬入などが見られ、更に詳しく調べようとしたところ捜査員からの音信が途絶えた。状況確認を行ったところ、工場にファッジが出入りしているのを確認し、強制捜査を行う事となったのだ。

現場には既に警察により交通規制が行われており、タクシーは途中までしか近づく事が出来ない。亜矢は途中で降りると、規制を行っている警察に事情を話し通してもらい宗吾達と合流した。工場周りにはライトスコープで武装したS・B・C・Tの部隊が展開しており、突入の準備は既に完了していた。

「すみません、お待たせしました！」

「いや、大丈夫だ」

「どんな状態です?」

「静かなもんだ。物音一つしない」

宗吾と共に工場を覗き込む。確かに、稼働している工場にしては静かすぎる。人の気配を感じない。

「……気付かれて、ますよね?」

「これだけ派手に囲めばな。だが向こうから出てこず、こちらが入るのを待っている様なのがどうにも不気味だ」

「隊長、どうしますか?」

2人が工場の様子を伺っていると、ライトスコープの1人が問い掛けてきた。声からすると慎司だろう。

「全部隊、展開を完了しています。指示さえあれば、何時でも突入できますが?」

正直に言うと、この状況は畏の様な気がしてならない。ここ最近は派手にS・B・C・T・が活動している。ここらで邪魔者を一網打尽にしようと思と迎え入れようとしている可能性もあった。

「……………突入するぞ。全員、準備しろ」

「了解!」

考えた末、宗吾は突入を選択した。危険はあるが、冒すだけの価値はある。これだけ

の規模だ、何か有益な情報があるかもしれない。

それに合わせて、亜矢もダイナドライバを腰に装着する。

〈CAT Unite〉

「こちらでも行けます」

〈Access〉

「よし、総員突入だ！」

宗吾の合図と共にライトスコープ達が一斉に工場敷地内に突入していく。それを見ながら、2人も変身した。

「変身！」

〈Open the door〉

〈In focus〉

亜矢がルーナ・ユナイト、宗吾がスコープ1号に変身して工場に向かう。

ルーナとS・B・C・T. が工場内に突入すると、工場の奥からヴェロキラプトルフアツジが次々と出てくる。

たちまち始まる銃撃戦。工場内の機械は丁度良い遮蔽物となり、互いに身を隠しながら互いに撃ち合っていた。

そこにルーナも加わる。遮蔽物を盾に慎重に戦うライトスコープ達に対して、こちら

は飛び交う銃弾を物ともせず敵陣の真ただ中に突っ込んでいった。常人であればそんな事をすれば敵だけでなく味方の銃撃も喰らってしまいそうだが、ユナイトと全ての能力が向上されたルーナは銃弾の合間を縫ってファッジ部隊に突撃。

そして近距離から銃撃や蹴り、銃剣での斬撃で次々とヴェロキラプトルファッジを倒していった。

「はっ！ やっ！ そこっ！……後方警戒！ 近付いてくる！……分かつてる！」

左右の手に持ったリプレッサーショットIIで次々とファッジを撃ち抜くルーナの背後から近付く奴が居たが、彼女はそれに気付いている。銃剣を使って攻撃しようとしたそいつに、ルーナは振り返り様の上段回し蹴りを放ち一撃で昏倒させた。

「真上と右斜め後ろから撃たれた！……回避余裕！……奥の扉から出てくる奴！……先に仕留める！」

死角からの攻撃を必要最低限の動きで回避し、続いて奥の扉から出てくる増援を先読みして倒す。

素早い反応速度で立ち回るルーナを、気付けばS・B・C・Tが見守っていた。出番が無くなったと言っても良い。

ルーナの動きはまるで踊っているようで、一切の無駄なく流れるように攻撃と回避を行っていた。S・B・C・Tは全員気付けば彼女の動きに見惚れていた。

「す、凄いですね彼女……」

「ああ。流石と言えば良いのか……情けない話だがな」

本来であれば専門家は彼らの方である筈なのに、気付けば仁や亜矢に任せてしまっている。頼もしく思うと同時に、情けなくもあつた。

「これで……ラスト！」

ヴェロキラプトルファアツジの最後の一体を倒し、工場内は静かになる。ルーナは周囲を警戒したが、これ以上の増援が来る気配はない。

その事にルーナは警戒を解き、一息吐いた。

「ふう……」

「お疲れさん。と言うか凄いな。殆ど全部君が倒したぞ」

「あ、ゴメン。出番取っちゃった」

「構わんさ。こつちが不甲斐無いだけだ」

スコープがルーナを労う後ろで、ライトスコープ達が更に工場の奥に突入していく。

軽く休んだルーナがそれに続き工場の奥へと向かおうとした時、先行したライトスコープ達が何かによって吹き飛ばされた。

「うわあああつ!!?」

「ツ!!? どうした!?!」

「新手!？」

これはヴェロキラプトルフアツジではない。強敵の出現を感じ工場の奥へとルーナとスコープが向かうと、そこではライトスコープ達が素早く動き回る粘液の様なものに吹き飛ばされているのが見えた。一見するとただの粘液の様だが、明らかに意志を持って動いている。

「な、何あれ!? あれもファツジ?……でも液体のファツジってどう言う事?」
「何かの集合体か?」

ルーナとスコープ、無事なライトスコープが見ている前で、粘液が形を持ち始め人型になる。

人型になった粘液はまるで全身ゼリーの、クラゲの様な見た目をしているファツジになった。あれもファツジなのは間違いないが、何のファツジなのか見当もつかない。

「こんな時、仁君が居てくれたらなく……贅沢言わない」
「とにかく敵なのは間違いない。攻撃だ!」

新手のファツジに一齐に銃撃が行われるが、銃弾は全てファツジの体を突き抜け後ろの壁や機材に穴を穿つ。そして撃ち抜かれた筈のファツジはまるでダメージを感じさせない。それがどうしたと言わんばかりに、首と肩を回した。

「銃弾が効いてない!？」

「液状の生物？ そんなのが居るの？」

困惑するルーナ達だったが、悠長に分析している余裕はなかった。続いて新たな、全身を甲殻で覆われたファッジが出てきたのだ。

「シヤアアアアッ！」

新たに出現したファッジは手近なライトスコープに襲い掛かる。鋭い爪で襲い掛かってくるファッジを2人のライトスコープがガンマソードで迎え撃つ。

だがライトスコープの防御を粘液のファッジが妨害した。素早く体を液状にして移動すると、2人のライトスコープが手に持つガンマソードを弾き防御を崩す。

「なっ!？」

「しま——」

防御を崩されると同時に、2人のライトスコープの首を甲殻のファッジの爪が切り裂いた。防刃防弾性に優れる筈のボディースーツ部が容易く切り裂かれ、赤い血が噴き出しファッジの甲殻を赤く染める。

瞬く間にライトスコープ2人を仕留めたファッジに、ルーナとS・B・C・T.は警戒を強める。見た所恐竜ファッジではないようだが、能力は正直未知数だ。

ルーナは即座に察した。あいつらはヤバイ。このままではS・B・C・T.の被害が広がるだけだと、ルーナが前に出ようとした時彼女の足元を銃弾が抉った。

「ッ!? 誰ッ!」

銃弾が飛んできた方を見ると、そこに居たのはグアニンだった。だが顔が醜く爛れたその姿は尋常ではない様子で、一瞬自分が知るグアニンと同一人物なのかを疑ったほどだ。

「え、アンタ、グアニンよね?……どうしたんですか、その顔?」

「お前に話す義理はありません。それより、デイナは何処です?」

グアニンに言い渡された任務はデイナとの戦闘、それだけだった。とにかくデイナと戦い、許可が出るまで退かずに戦い続けると言われた。逆らえば今度こそ命はない。遠隔操作で隠蔽装置を作動される。

もうグアニンに逃げ道は残されていない。彼に許されたのは雄成の指示に忠実に従い、戦い続ける事しかなかった。例えば、退く許可が何時になっても出されなくても……。

「残念ね、仁君は今日はお休みよ。……代わりに私が相手をお願いします!」

「……チツ、大学か。態々情報を流したのに、肝心の奴が来てないんじや意味がない」

「仁くんが目的?……どう言う事よ!」

「だから話す義理はありません。ここはお2人に任せますが、構いませんか?」

先日的一件以降、グアニン本人はあのファッジに対して苦手意識があるので、特に彼

女に対しては腰が低い。幹部である筈のグアニンの何う様な様子に、ルーナが首を傾げる。

グアニンからの問い掛けに、甲殻のファッジの方が頷く。

「ありがとうございます。では私はこれで失礼」

「あ、ちよ、待ちなさい!」

グアニンは間違いなく大学へ向かうつもりだ。それではこうしてルーナが1人で赴いた意味がない。させてなるものかと後を追おうとした時、スコープに茜からの通信が入った。

『隊長、緊急連絡です!』

「何だ! 今こつちも忙しいんだ!」

『先程入った通報で、明星大学に仮面ライダーヘテロが出現したようです! 現在、仮面ライダーダイナと交戦中!』

「何!? 大学にヘテロが!?!」

「ええっ!?!」

それはルーナにとっても凶報だった。自分がこうしてS・B・C・T.と行動している間に、仁はヘテロと戦闘をしていたのだ。

負けるとは思っていないが、最近調子が良くなさそうな仁の身に何か起こるかもしれ

ない。そう思うとルーナは居てもたつてもいられなかった。

「あ、あの！ 権藤さん、お願いします！ 私、戻らなくちゃ!」

「分かった。北村！ 双星さんを明星大学まで送つてやれ！ こつちはこつちで何とかする！」

踵を返すルーナを見送つたスコープは、2体のファッジの相手に集中した。彼らがグアニンと話している間に、2体のファッジ——毒を持つトクシクファッジと体を無数の細菌で構成されたりキッドファッジ——によりさらに数人のライトスコープが倒されていた。

これ以上被害を出す訳にはいかないと、スコープは前に出て指揮を執る。

「総員、甲殻を持つファッジの相手に集中しろ！ こつちの液化化するファッジの相手は俺がやる！ 指揮は小早川、お前が執れ！」

「了解！」

スコープはトクシクファッジの相手を部下たちに任せ、自分はキッドファッジの相手に集中する。

グアニンと話しながらもスコープは時々ファッジ達の戦いを観察していた。その結果、トクシクファッジは両手の爪だけでなく尻尾の針に毒液まで使う事を確認した。

それを見て、奴らへの対抗策は考え付いた。特にキッドファッジの相手は、ライト

スコープはともかく宗吾のスコープなら相手は出来る。

〈Riotter・Batton Startling〉

右腰のホルダーから取り出したプレートをドライバーに装填してハンドルを回し、投影精製したのはトンファー。スコープがそれを手に取ると、トンファーが伸長し1.5倍の長さになる。

リキッドファッジはそれがどうしたと言わんばかりに体を液化化させスコープに襲い掛かるが、スコープは臆することなく液化化したリキッドファッジにライオットバトンを叩き付けた。

その際、トンファーの打突部が放電している事にファッジは気付いた。それを見て、しまったと思った時にはもう遅かった。

「があああああつ?!」

液化化する事の出来るリキッドファッジ相手に、物理攻撃は効果がない。だが液化化していてもこちらに対して攻撃できるのであれば、物理攻撃以外なら通用する筈。ならばと、スコープはリキッドファッジに対し電撃で対抗したのだ。ライオットバトンは相手を無力化する事も考えた装備なので、打撃の際に放電で相手を痺れさせることが出来る。物理攻撃が通用しない相手であっても有効だ。

「ぐう!? はあ、はあ……」

対ファッジ用の電撃は相当効いたらしい。体が液化化しているから、普通よりも効果が高いのだろう。変異こそ解けていないが、今のでかなり消耗した様子だ。

一方、ライトスコープ達も先程と打って変わって善戦していた。

「シャアアアアッ!!」

「近付かせるな！ 出来るだけ距離を取って応戦しろ！」

複数人のライトスコープ達が、迫るトクシツクファッジに銃撃している。トクシツクファッジは全く接近を許さないライトスコープ達に向けて、尻尾の毒針や口から毒液を飛ばす。触れれば腐食するし揮発しても有害なそれを、しかしライトスコープ達は物ともしていない。

トクシツクファッジはその事に愕然とした。今まで自分の毒が通用しない相手なんて存在しなかったのに……。

スコープシステムはそもそも、強力な生物兵器と言えるファッジに対抗する為に作られた装備だ。生物が相手と言う事で、その攻撃手段は爪や牙だけでなく毒も想定されている。

なので、量産仕様であっても、毒に対しては万全の対策が為されている。毒が気化しようとも強力な防毒仕様のマスクが有毒ガスを防ぐし、装甲やボディースーツも腐食耐性が高い。実際試験段階では、有毒ガスの中での活動も問題なくクリアしたし、硫酸や

塩酸などの付着に耐えるようコーティングが施されていた。

何が言いたいかと言うと、トクシツクフアツジはスコープシステムとはすこぶる相性が悪いのだ。先程まで苦戦していたのは、偏にリキッドフアツジによるサポートの存在が大きい。彼がライトスコープの行動を妨害してくれたから、彼女は的確に防御の弱い所を攻撃する事が出来たのだ。

その連携が崩された今、最早彼女達に勝ち目は無い。悔しいが、ここは引き下がるのが得策だった。もうグアニンは十分にこの場から離れたのだし、必要な仕事は熟しただろう。元より2人に言い渡されたのは、グアニンのサポートなのだから。

「くっ！」

「あ、待てッ！」

リキッドフアツジは一瞬の間を見て、液状化してトクシツクフアツジに近づく。それと同時にトクシツクフアツジは周囲に腐食性の高い毒液をばら撒いた。装甲やボディースーツにコーティングが施されたスコープ達には効果がないが、工場内の機材はそうではない。あつと言う間に腐食し、あちこちの柱などが溶けて崩れ、支えられていた天井の梁が崩れ落ちる。

工場の崩壊を察したスコープは、慌てて全員に後退を指示した。

「全員下がれ！ 急いで工場から出るんだ！」

崩れる前に急いで工場から出るスコープ達。先程の毒液のばら撒きでそれまでの戦闘によるダメージが一気に限界に達したのか、工場全体が連鎖的に崩れていく。

S. B. C. T. の隊員達が全員脱出した直後に、工場全体が完全に崩れ落ちた。

「くそ、滅茶苦茶する」

「あいつらは、逃げたのでしょうか？」

「自爆みたいな真似をする奴らじゃないだろう。今の混乱に乗じて逃げた筈だ」

地上部分は完全に崩れたが、あるとすれば地下施設がまだ無事な筈だ。そちらの調査をしなくてはならない。

「隊長、明星大学へはどうしましょう？ 数人なら向かわせる事も出来ますが？」

今頃はダイナとルーナが、ヘテロとダークステインガーを相手に戦っている筈だ。スコープも正直な話、彼らを助けに行きたいと言う気持ちが無い訳でもなかった。

「いや……ここは彼らに任せよう。こちらも消耗しているし、ここを疎かにも出来ない。諸々の処理を考えると、我々も満足には動けない」

しかし、ここは敢えて彼らに任せる事にした。あの2人が今更ヘテロとダークステインガーに敗れるとは思えなかったし、こちらの調査を進めなければならぬ。あの2体のファッジに関しては、S. B. C. T. との戦いで消耗しただろうから合流する事はしないだろう。

「すまないな。頑張ってくれ」

デйнаとルーナの善戦を祈りつつ、スコープは部隊の再編と工場の調査再開に向け行動を開始するのだった。

第47話：来るべき時

亜矢がS・B・C・Tと共に工場に潜んでいた傘木社の保安警察の部隊と戦闘を行っていたのとはほぼ同時刻、仁はデイナに変身してヘテロと戦っていた。

明星大学の研究棟で始まった戦い。容赦なく攻撃するヘテロに対し、デイナは出来るだけ周囲への被害を抑える為戦い方に制限を受けていた。

武器の使用は厳禁、相手の攻撃は回避してはならない、攻撃の際ヘテロの背後に人や他の研究室が無い事を確認など普段は考えなくても良い事を考えながらの戦闘はデイナの動きを何時もより鈍くしていた。

「そらあつー！」

「ぐつ……」

ヘテロの振り回すテイルバスターを、デイナは両腕で防ぐ。ここで回避しては、背後にある何処かの研究室が被害を受けてしまうからだ。

デイナが反撃してこない事に、ヘテロは不満そうに鼻を鳴らした。

「ふん。つまらないわね。そんなに学校が大事？」

「当たり前じゃん。俺、ここ好きだから」

「あ、そ。じゃあ本気でやらないと、自分だけじゃなく学校もただじゃ済まないんじゃないー！」

気に入らないと言いたげにヘテロはデイナを蹴り、廊下の先に吹き飛ばした。デイナが蹴り飛ばされた先には、野次馬をしていたと思しき学生が居た。彼らはデイナが飛んでくると、悲鳴を上げて逃げていく。

「い、つつ……」

「あ、あわわ……」

「ツッ！」

体を廊下に叩き付けられたデイナが痛みに仮面の奥で顔を顰めながら立ち上がると、直ぐ傍から誰かの声が聞こえた。弾かれるようにそちらを見ると、腰が抜けて逃げ遅れたのか廊下にへたり込んでいる学生が1人居た。

離れた所からはこの学生の友人だろう、数人の学生が急いで離れるように声をかけている。しかし本人は逃げたくても足が上手く動かないのか、ジタバタするだけでその場から動く様子がない。

それに構わず、ヘテロはデイナにティルバスターの銃口を向けた。あの銃弾は炸裂弾、着弾すれば穴を穿つだけでなく爆発して周囲に被害を齎す。この学生もただでは済まないだろう。

「早く立って、ほら」

「ひ、ひいいっ!？」

ヤバいとデイナが学生を無理矢理立たせて押し出すが、学生はデイナに対してもビビり思うように動いてくれない。ヤキモキしているとヘテロがデイナに向け引き金を引いた。

響く銃声に、デイナは止むを得ないと学生を伏せさせ翼で自身と学生を包んだ。銃弾が翼に着弾すると、激しい爆発が起こりデイナを中心とした廊下が一瞬火の海になる。その光景に遠巻きに見ていた学生は悲鳴を上げ、近くの壁や部屋が爆風で破壊された。

炎と煙でデイナと学生の姿がかき消される。しかしヘテロは今のでデイナを仕留めたとは思っていなかった。この程度で死ぬほど彼が柔ではないことはとっくの昔に分かっている。

それを証明するかのように、廊下に広がっていた煙が突風で吹き飛ばされた。デイナが翼を羽搏かせて煙を吹き飛ばしたのだ。

翼を盾にしたことで、デイナには殆ど損傷が見られないし学生に至っては傷一つない。

追撃が来ないのを見ると、デイナは学生を再び立たせ今度こそその場から逃がした。

「ほら、今の内。早く逃げて」

「は、はいー！」

危ないところをデイナに助けられた学生は、彼に促されるままその場を離れた。残されたデイナは、これ以上ヘテロに攻撃させない為に打って出る事にした。

「お前、いい加減にしろよ」

翼を畳み、ヘテロに駆け寄るデイナ。それをテイルバスターで迎え撃とうとするヘテロだったが、彼女が引き金を引く前にデイナがそれを妨害すべく行動した。

徐に近くにあつた自販機に腕を突っ込むと、パワーに物を言わせて自販機を持ち上げヘテロに投げつけたのだ。固定する為のボルトや、電力供給用のコードも引き千切り更には放り投げる。驚異的な能力を持つ、二つの恐竜ベクターカートリッジだから為せる事だろう。

「ッ!? チッー！」

あれを喰らえば流石に堪ったものではない。ヘテロはデイナよりも先に飛んでくる自販機に狙いを定め、テイルバスターで撃ち落とす。炸裂弾が自販機を木っ端微塵に吹き飛ばす。

その爆発を突き破って、デイナがヘテロに肉薄した。自販機は謂わば囹であり、こうして接近することが目的だったのだ。大学の備品である自販機を壊してしまつたが、あれは所謂コラテラルダメージという奴だろう。

ヘテロに接近したデイナは、彼女の腕を掴んでテイルバスターをあらゆる方向に向けさせた。

「なっ!?!」

「いい加減表出るぞ。ここで暴れたら他所の研究室まで滅茶苦茶になる」

そう言つてデイナはヘテロを窓から放り投げた。窓というか、先程まで窓があつたところと言うのが正しいだろう。外と面する壁は、ヘテロの銃撃により吹き飛び大きな穴が開いている。もう風通しがいいとかそういうレベルではない。

研究棟の外に放り投げられたヘテロは、空中でバランスを取り難なく着地する。だが彼女が着地した直後、後を追つて飛び出したデイナが着地の瞬間を狙つて飛び蹴りを放つていた。

「はっ」

「遅い!」

放たれた飛び蹴りを、しかしヘテロはテイルバスターで弾き返す。

体勢を崩されたデイナだが、即座に翼を広げてバランスを取るとそのまま低空飛行してヘテロの背後を取つた。無防備な背中をデイナに晒したヘテロは、次の彼の行動に対して反応が遅れた。

「あっち行け」

「グッ?!」

背中を思いきり蹴り飛ばされ、更には翼を羽搏かせて起こした突風でヘテロを遠くへ吹き飛ばす。

ヘテロが吹き飛ばされたのは大学敷地内にある広場。普段であれば学生達の憩いの場となる、花壇や噴水がある場所である。

ここなら多少暴れても被害は少なく済む。既に研究棟が一部被害を受けてしまつたが、これ以上広げない為だ。

「デйна、デйнаあ!?!」

ヘテロがデйнаに向けてテイルバスターを振り下ろす。それを彼は左腕で剣の腹を叩く事で逸らし、隙を晒したところに正拳突きを叩き込んだ。

「ふっ」

「うぐっ!?!」

胸板を拳で殴られ、息を詰まらせながらヘテロが吹き飛ぶ。背中から地面に叩きつけられたヘテロは、直ぐに立ち上がるとテイルバスターを持ち替え銃口をデйнаに向けようとした。距離が離れたから銃撃で対応しようと言うのだ。

あれを使われては受けても避けても大学への被害が大きくなる。デйнаはさせてなるものかと、一気に接近しテイルバスターを掴んで銃口を空に向けさせた。

「それ使うな、大学が壊れる」

「離せ、このっ!？」

互いにテイルバスターを掴んで揉み合いになるデイナとヘテロ。武器を手放させようとするデイナとさせまいとするヘテロの勝負は、デイナが僅かに勝利ヘテロのバランスを崩させた挙句振り回して手放させる事に成功した。

もぎ取るようにしてテイルバスターをヘテロから奪うと、それを遠く離れた所に向けて放る。武器を回収しようとヘテロがそちらに向けて走るが、デイナはそれをさせまいと彼女の襟首を掴んで引つ張りテイルバスターが飛んでいった方とは逆方向に投げ飛ばした。

「くっ、んのおっ!？」

「来いよ、互いに無手での戦いだ」

デイナの挑発にヘテロが乗った。拳を握りデイナに徐々に近づくヘテロに対し、デイナは自然体で近付いていく。構えも取っていない自然体だが、しかし対峙しているヘテロは彼に隙が無い事を肌で感じていた。

今の彼は言うなれば居合抜き構えをしている様なものだ。力を態と緩めて、攻撃の瞬間まで待っているのだ。

まるで西部のガンマンが抜き打ちの勝負をしているかのような緊張が周囲に漂う。

その緊張は遠巻きに見ている一部の学生達も感じており、彼らは固唾を飲んで2人の戦いを見守っていた。

その中には白上教授を始めとした研究室の面々も居た。

束の間の静寂。2人の間を風が吹き抜け、戦いの影響で発生した砂が一瞬2人の視界を僅かに遮った。

次の瞬間――

「ハアツ！」

出し抜けにデイナの後方からダークステインガーが飛び掛かった。工場を後にしてからここまで、ルーナに追跡されながらも大学まで辿り着きデイナの不意を突いたのだ。

しかし精神を研ぎ澄ましていたデイナはそれに素早く反応し、振り返る事なく翼を広げてダークステインガーを打ち払う。不意を打った筈が予想外の反撃を喰らい逆にダークステインガーの方が吹き飛ばされた。

「ぐはあっ!？」

「はあ……次から次へと」

「く、くそっ!？」

不意打ちが失敗したダークステインガーは、立ち上がるとヘテロの傍に駆け寄った。

不意打ちが失敗した以上、後は彼女と2対1で攻めるしかない。

「手を貸せ。2人で仕掛ける！」

再度、デイナに攻撃しようとするダークステインガーが一步前に足を踏み出す。ヘテロはそれを妨害するかのように、彼の肩を掴んで後ろに押しやった。

突然の彼女の行動にダークステインガーは困惑しながらも抗議する。

「な、何だいきなり!？」

「アンタさあ……邪魔。デイナは私の獲物よ。私が倒すの。アンタは引つ込んで」

そう言ってヘテロはダークステインガーをその場に置き去りにしてデイナに挑みかかった。それを見送ったダークステインガーは、焦りと苛立ちを滲ませながらも彼女に続き、デイナに攻撃を仕掛ける。

「そもいかない！ こちらにも事情があるんだ！」

「直挿しフアツジに殺されかけて、利用価値が下がったから？ 下らない」

「お前、見てたのか!？」

「アンタが無様に死に掛けるところをバツチリとね。今まで日和って後ろでヌクヌクしてたツケが回って来たんじゃない？ 出撃回数、ぶつちぎりで低いのアンタよ」

内輪揉めをしながらも、2人のデイナに対する攻撃は緩まない。強固な装甲でデイナの攻撃を的確に防ぐヘテロと、鋭い針を用いて巧みにデイナを攻めるダークステイン

ガー。連携もへつたくれも無い戦いだ、奇跡的に互いに邪魔をする事なくデイナを相手に善戦できている。

「ハアツ！」

「フンツ！」

「つと……」

これ以上2人から同時に攻撃されては反撃も儘ならないと、デイナは一旦2人から距離を取った。

「はあ……ウニ野郎だけならともかく、今の蜘蛛女まで纏めて来られると少し面倒だな」
本気でやればどうにかできるだろうが、ここが大学敷地内であると言う事が問題になる。ヘタに本気を出して、大学の被害を広げてしまつては本末転倒だ。

デイナがどうすべきか悩んでいた頃、大学正門前には亜矢を乗せたS・B・C・Tの車が到着した。まだ大学内は混乱が続いているのか、正門からは次々と生徒が飛び出してくる。

「仁くん、やつぱり——!? 北村さん、ありがとうございます！」

「お気になさらず。さ、早く！」

ここまで法定速度ギリギリで飛ばしてくれた事への感謝もそこに、亜矢は人の流れに逆らうように正門へと入っていく。

彼女が大学に到着すると、その姿を美香が見つつけ声を掛けてきた。

「あ、亜矢!」

「篠崎さん! 今、何がどうなってます? 仁くんは?」

騒動が起こっている様子から戦いが起こっているのは間違いないだろうが、何処でどうなっているのかが来たばかりの亜矢には分からない。

それを察した美香は、手短かに現状を説明してくれた。

「チラッと見たけど、今は研究棟前の広場で戦ってるみたい」

「広場……分かりました、ありがとうございます!」

「気を付けて!」

美香に見送られ、研究棟前の広場へと向かう亜矢。正門からなら、研究棟前の広場までは直ぐだ。

果たして直ぐに亜矢はデイナが戦っている姿を目撃する。ヘテロとダークステインガー、2人からの攻撃をデイナは可能な限り周りに被害を広げない様にしながら対応していた。

「仁くん!」

見た所仁は苦戦している訳ではないようだが、それでも戦い辛そうだ。やはり周りに被害を与えない様にしつつ一人で戦うのは、彼に通常以上の負担となるのだろうか。

ならば、その負担を少しでも和らげる！

「行くわよ、真矢！……オーケー、亜矢！ 変身！」

〈CAT Unite Open the door〉

亜矢はルーナ・ユナイトに変身し、今正に自分に背を向けているダークステインガーを背後から銃撃した。ここで漸くルーナの登場に気付き、撃たれたダークステインガーだけでなく、ダイナとヘテロも戦闘を中断した。

「亜矢さん、真矢さん」

「遅れてすみません。……助太刀するわ！」

ダイナの隣に並び立ち、リプレッサーシヨットIIを構えるルーナ。ヘテロはそれを前にしても、少しも臆することなく鼻を鳴らした。

「ふん、今更のご登場とはね」

「悪いわね、遅れちゃって。……ここからは私もお相手します！」

互いに火花を散らすルーナとヘテロ。一方、ダークステインガーはダイナとルーナが揃った事で自分達の不利を察していた。

先程まで、ダイナー人を相手に持ち堪えられていたのだ。ここにルーナまで加われば、それこそ敗北してしまいかねない。

特に今回は、雄成からの指示で勝手な撤退が許されていないのだ。生き残る為には、

雄成の許しが来るまで戦い続けるか勝つしかない。

どうすればいいか……ダークステインガーが頭を働かせたその時、今度はデイナのすぐ近くにあつたマンホールが高々と吹き飛んだ。そこから出てきたのは、体を液状化させていたリキッドファッジ。

「えっ?」

「な、何ッ!？」

突然の出来事にデイナとルーナの視線が、吹き飛んだマンホールと新たに出現したりキッドファッジに注がれる。リキッドファッジは空中で一旦体を形作ると、再び体を液状化させルーナに纏わり付き彼女の体を拘束した。

「なっ、ちよ!?! 離しなさいよ!?!」

「真矢さん!?!」

ルーナが液状化したリキッドファッジに絡みつかれたのを見て、デイナが彼女を救うべく手を伸ばす。だがリキッドファッジが出てきたのと同じマンホールから、トクシツクファッジの尻尾が伸び尻尾の先端の毒針をデイナに突き刺した。

「ぐあっ?!」

「仁くん!?!」

トクシツクファッジの毒針から猛毒が注入され、デイナがその場に崩れ落ちる。彼が

崩れ落ちると同時にリキッドファツジがルーナを解放し、ダークステインガーは喜び拳を握った。

「よし！…これで……」

デイナを倒せたことだし、これで自分は生き残れる。そう喜んだダークステインガーに対し、ヘテロは悔しそうに奥歯を噛み締めた。自分が倒す筈だったデイナが、横から搔つ攫われてしまった。あの毒の威力は知っている。解毒しなければ数時間と絶たず命を落とす。彼が解毒剤なんか持っている訳がないから、これで一卷の終わりだろう。

「……くそ」

悪態を吐くヘテロは、視線をデイナに駆け寄るルーナに向けた。何も出来ないのに彼女はデイナに必死に声をかけている。

「仁くん、仁君!! しっかりしてください!」

「あや、さん……」

ヘテロは無言で2人に近付くと、ルーナの首を掴みデイナから引き剥がした。

「うあ、っ!?! く、何を——!」

「お腹、空いた……満たしてよ……誰か、誰か私を満たしてよ!」

叫びながらヘテロはルーナを投げ飛ばした。ルーナは何とか受け身を取り、すぐさま

立ち上がるとリプレッサーショットIIを構える。

「邪魔しないでよ!」

「五月蠅いわね!? どいつもこいつも……もうアンタで良いから私の事満たしなさい!」

「訳分かんないわよ!」

自分勝手な事を言いながら迫るヘテロをルーナが銃撃するが、二丁拳銃状態での銃撃ではヘテロのアンダースーツや装甲を抜く事は出来なかつた。パワーはともかく、防御力はヘテロが圧倒的に上だ。

ルーナの銃撃も気にせず、ヘテロが迫りながら手を伸ばす。

あと少しでヘテロの手がルーナへ届く。これ以上は不味いとルーナが回避しようとしたその時、デイナが横からヘテロにノックアウトクラッシュを喰らわせた。

〈A T P B u r s t〉

「おおっ!」

「があっ?!」

「仁くん!? 大丈夫なんですか?」

「はあ、はあ……何とか、ね」

苦しそうに息をしながら、デイナはルーナに答えた。蹴り飛ばされたヘテロは地面に

叩きつけられ、ダメージの所為か変身が解除される。

その姿に声を上げたのはダークステインガーだった。

「そんな馬鹿な!? 奴の猛毒を受けて何故動ける!?!」

直にトクシツクファッジの猛毒を受けた彼だからこそ分かる。あの猛毒は全ての生物を確実に死に至らす猛毒だ。スズメバチの毒は毒のカクテルと呼ばれるが、トクシツクファッジのそれに比べれば遠く及ばない。ダークステインガーが生き残れたのは肉体改造を施されたからだ。そうでない者が、あのファッジの猛毒に耐えられる訳が無いのである。

狼狽えているのは希美も同じだった。尤もこちらは見て分かるほどに狼狽えている訳では無く、ただじつとダイナの事を見つめるだけである。

「アンタ……本当に人間?」

「何言ってるのさ……間違はなく人間だよ」

希美は暫しダイナの事を見つめていたが、不意に視線を逸らすと踵を返した。先程まで異様なまでにダイナに固執していた彼女が、唐突に興味を失ったようにその場を離れていく事にダークステインガーも困惑を隠せない。

「お、おい何処に行く?」

「カロリー切れ……お腹空いて死にそうだから今日はもう帰るわ」

「そんな勝手が許されると……つて、何だ？」

ダークステインガーが希美を引き留めようとしたその時、彼の持つ携帯から着信音が鳴る。誰だと通話に出ると、相手は雄成であった。

彼が通話に出るや否や、雄成は彼の声も聞かずに指示を出す。

『グアニン、もう十分だ。戻りたまえ』

「は、え？ よ、宜しいのですか？」

『二度は言わないよ。戻るんだ』

「は、はい……」

訳が分からないが、雄成の命令なら従わない訳にはいかない。釈然としないが、ダークステインガーは大人しくその場を引き下がった。

希美はとつくに大学から出て行っており、トクシツクファツジとリキッドファツジも既にこの場から消えていた。

唐突に終わりを迎えた戦い。あまりにも一気に状況が変化した事で呆然とするルーナの前で、ダイナが糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ち変身が解除された。

それを見てルーナも慌てて変身を解き彼を抱き起した。

「仁くん!? 仁くん大丈夫ですか？」

亜矢の声に仁は答えない。顔中汗びっしよりで、着ている服がずぶ濡れになるほどの

発汗量に亜矢の顔から血の気が引いた。尋常ではない汗の量、そして先程のダークステインガーの言葉。仁が先程受けた毒は、以前受けたワスプファッジの毒をも超えると言ふ事だ。

もしあの時と同じなら、あのファッジを倒してベクターカートリッジを回収しなければならぬ。

だが亜矢の心配を他所に、仁は己の足で立ち上がった。

「うう……はあ、はあ……」

「じ、仁くん？ 大丈夫なんですか？」

「ん？……はあ……ん……ふう、ふう……ちよつと辛いけど……とと、大丈夫。さつきより大分良くなってきたから」

汗は依然として凄いが、顔色自体はそう悪くはないように見える。ダークステインガーの言葉を信じるなら、今頃仁は満足に立つ事も出来ない筈なのに……。

「本当に大丈夫？ 無理してない？」

「大丈夫大丈夫。この様子なら少し休めば元通りになるだろうから」

そう言つて仁は、やや覚束ない足取りで研究室へと向かつて行く。亜矢はそれを見て慌てて彼に続き、1人で行こうとする彼を横から支えた。

「ん？ 別に大丈夫だよ。これ位なら、1人で行けるし」

「ダメです。ただでさえ仁くん、最近調子悪いんですから。……例え駄目だと言われても私達が支えるから」

頑として譲らない姿勢を見せる亜矢と真矢に、仁は苦笑すると体重を僅かながら彼女に預けた。そこまで言うのなら、お言葉に甘えよう。

「分かった……取り合えず、研究室のソファアームまでお願い」

「はい、任せました」

仁はそのまま亜矢に肩を貸してもらい、研究室まで連れて行かれるとソファアームの上で泥のように眠った。その間も夥しい汗をかいていた為、亜矢は仁の汗が引くまで彼の体の汗を拭い続けていた。

本社に帰還したグアニンは、この事を早速雄成に報告した。

「プロフェッサー、デイナは異常です！ 奴は肉体を改造された私ですら動けなくなる程の猛毒を受けて尚自力で動いていました！ もしや奴も、白上 源五郎から改造手術

を受けていたのでは？」

仁が毒に耐えられた理由は、グアニンにはそれしか考え付かなかった。肉体改造を施されでもしなければあの毒に耐えられないのであれば、改造されていなければおかしい。雄成と白上教授が共同研究していたと言うのであれば、同様に肉体改造の技術を持っていたとしてもおかしくないと言うのが彼の考えだった。

「ふむ……それはあながち間違つてはいないかもしれないねえ」

グアニンの問い掛けに対する、雄成の答えは酷く曖昧なものだった。明確に改造されているとは言わないが、違うと真つ向から否定もしない。

「それは、一体どう言う……」

詳細を聞こうとするが、雄成はグアニンの方を全く見ようともしない。彼が見ているのはトクシツクファアツジとリキッドファアツジの戦闘で得られたデータだった。先日のグアニン達を相手にした戦闘、そして今回S・B・C・Tとテイナ達との戦闘で得られたデータを整理するのに忙しいらしい。

これは何を言っても聞いてはくれなさそうだ。それを察したグアニンは、頭を下げるとその場から離れていく。

グアニンが出て行き、部屋に1人残された雄成。その方は次第に震えていき、遂には口から笑い声が零れた。

「ふふふ……くくくく……ははははははははつ！　遂にここまで来たか、門守　仁君！　待っていたよ、この時を！」

雄成は部屋に響き渡るほどの笑い声をあげると、部屋の中に置かれたトランクに近付きロツクを解除して開けた。中にはデйнаドライブと非常によく似たドライブが収められている。

トランクからドライブを取り出した雄成は、それを愛おしそうに撫でた。

「白上、感謝するぞ。彼をそこまで育ててくれて。これで私の計画は大きく前進する。待っていてくれたまえ、門守　仁君。迎えに行くからね」

怪しく微笑みながら雄成はそう呟く。

傘木社本社の社長室の中でその言葉が呟かれたのと同時刻、明星大学の白上研究室のソファで寝ている仁は眠りながら体を僅かに振るわたった。

第48話：開く扉

それは、唐突に起こった――

あれから仁は、夕方には完全に回復した。グアニンの言葉を信じるのであれば猛毒を注入された筈なのに、夕方にはケロツとしており？せ我慢をしている様子もない。

それでも念の為検査してもらおうと亜矢が病院に行くことを進めたが、物がファツジの猛毒であれば病院など何の役にも立たないし現実に体に不調は無いのだからと言う事で仁はこれを拒否した。

一体何故、仁の体は毒に侵されたにもかかわらず一時苦しんだだけで済んだのか？

疑問に思った亜矢は白上教授に聞いてみた。

「教授、どうして仁くんは毒を受けても平気だったんでしよう？」

亜矢からの問い掛けに、白上教授は少し考えてから答えた。

「これは想像だが……恐らく門守君がケツアルスピノフォームだった事が幸いしたのかもしれない」

「ケツアルスピノフォームだったから？」

「うん。太古の恐竜・翼竜に関しては外見ですらはつきりした事が分かっているとは言い難い。体内で行われている生体活動に関しても分かる範囲での想像だ。もしかすると、太古の生物は毒に対して強い耐性を持っていたのかもしれない」

確かに、仁は毒に対する対策も考えてハリネズミの遺伝子からなるベクターカートリッジを作っていた。それと同じ効果が、恐竜の遺伝子にあつたとしても不思議ではないかもしれない。

だが真矢は、そんな白上教授の結論に違和感を覚えたのか納得した様子を見せなかった。

【ん〜?】

「真矢? どうしたの?」

【ん〜……ううん、何でもない】

真矢の様子に首を傾げる亜矢だが、とにかく仁が大丈夫そうで良かった。

とは言え完全に安心した訳ではなく、時間差で再び異常が起こるかもしれないと言う事でこの日は仁の家に泊る事にした。仁もそれを拒否する事なく、彼女を家に招きその日は終わった。

夜、亜矢が寝静まった頃に仁は静かに目を覚ました。

一糸纏わぬ姿で隣で眠る亜矢。無防備なその寝顔に、仁は優しくキスを落とし髪を梳く様に撫でる。

「……………ごめんね」

これから自分は、絶対彼女を不安にさせてしまう。それはきつと避けられない。その事を考えると、今から彼女に対し申し訳なく思ってしまう。

だが、もう止まれないのだ。今更全てを無かった事には出来ない。

仁は近い内に訪れるその時、亜矢と真矢に掛けてしまう心配や迷惑の事を考え、それに対する謝罪の意味も込めて——同時に自身の不安を和らげる為——再び彼女に優しくキスをするのだった。

そして翌日、仁と亜矢は大学に向かった。先日の戦闘で広場や研究棟は酷い有様だったので、大学自体は休校状態だ。

それでもここ最近活動が活発になってきた、傘木社に対する備えはしなくてはならない。

ラボに到着すると白上教授に峰、拓郎とこの研究室の裏の活動に関わる者が全員揃っていた。

ラボに到着するなり、峰は仁からデイナドライバーを受け取った。これまでの戦闘

データなどを収集し、今後の傘木社のファツジに対抗する手段の構築などに役立てると言うのだ。

仁は白上教授、拓郎と共にベクターカートリッジの調整などを始めた。残された亜矢は、最初仁を手伝おうと思っていたのだが、徐に真矢が表に出て峰に近付いた。

【ま、真矢？】

〔ゴメン、ちよつと気になる事があつて〕

困惑する亜矢を他所に、真矢は峰に近付き背後から声を掛けた

「先輩さん、ちよつといいい？」

「うおつ!? 真矢さん? いきなり後ろからどうしたんですか?」

音も無く近付き声を掛けてきた真矢に、峰は飛び上がるほど驚く。真矢は驚く峰を宥め、チラリと白上教授の様子を伺うと声を落として峰に話し掛けた。

「ちよつと気になるんですけど……恐竜ベクターカートリッジに解毒とか毒耐性があるかどうか調べて分かります?」

「毒耐性ですか? 調べてみない事には何とも言えませんが……」

「ちよつと調べてみてくれませんか?」

「はあ……まあそれ位なら」

真矢の言葉に首を傾げながら、峰はケツアルスピノフォームのダイナのデータを調べ

上げていく。戦闘時の仁のバイタルと、デイナの中で起きている変化を事細かに調べ上げていった。

そうして暫くして、ある事が分かった。ケツアルスピノフォームには毒に対する耐性など存在しない。仁が毒に侵された時、デイナドライバーのスペックに変動は見られなかった。もしケツアルスピノフォームに毒を浄化する能力が何か備わっているのなら、スペックに変動が生じる筈である。

それが無いと言う事は、ケツアルスピノフォームには毒に対する耐性は存在しないと
言う事に他ならない。

では仁はどのようにして猛毒を無毒化したのか？

「(やっぱり……)」

【真矢、どう言う事?】

「あの教授は嘘をついてるって事よ。やっぱり私、あの人が信用できない」

真矢は改めて白上教授に真実を問い質す事を決めた。あの教授が抱えている秘密は、きつと仁にも関係がある。無視する訳にはいかない。

白上教授に本当の事を聞こうと真矢が立ち上がった時、教授は紅茶の用意をしているところだった。カップに紅茶を注ぎ、まずは近くに居た拓郎と仁に手渡す。

「さ、少し休憩しよう」

「どうも」

「は、」

仁と拓郎がカップを受け取り、一口啜って軽く息を吐く。教授は続けて亜矢と峰の分の紅茶を淹れ2人に手渡した。

「さ、君らも」

「ありがとうございます」

差し出されたカップを峰は素直に受け取ったが、真矢はカップと教授の顔を交互に見てから受け取った。渡された紅茶からは温かな湯気が立っているが、真矢は紅茶に口をつけることなく本題を口にした。

「教授さん、一つ聞きたいんですけど？」

「ん？ 君は真矢さんだね？ 何だい、聞きたい事って？」

真矢の様子に首を傾げながらも、白上教授は話の続きを促した。どこか余裕を感じさせる白上教授の様子に、真矢は不快な顔をする。自分達に嘘についておきながら、至って普通に接してくるのが白々しく思えて仕方ないのだ。

「さつき先輩さんにお願いで調べてもらったんだけど、ケツアルスピノフォームには毒耐性は無いそうよ？」

「ッ!?……………そう、なのか」

「さて、これは一体どういう事なのかしら？ 教授さん昨日言つてたわよね？ 仁君が無事だったのはケツアルスピノフォームが毒耐性を持つてからだつて——」

真矢による白上教授への詰問。だがそれは突然室内に響いたカップが割れる音で中断された。

「ん？」

音が聞こえてきたのは、仁と拓郎が居る方から。流石に少し気になり、話を中断して真矢がそちらを見ると仁の足元が零れた紅茶で濡れていた。どうやら仁が紅茶の入ったカップを落としたらしい。

拓郎がカップを落とした仁に呆れながら、雑巾と箒、チリトリを持つてきた。

「おいおい、何やってるんだよ」

最初、仁の些細なミスに呆れながらも割れたカップと零れた紅茶の片付けをしようとする拓郎だったが、ふと仁の事を見て異変に気付いた。

仁の手が引き攣つた様に震えているのだ。いや、手だけではない。仁の顔も、まるで何かを耐えようとしているかのように引き攣つていた。拓郎が見ている前で、仁の震えは手だけでなく体全体に拡がっていく。

異変に気付いたのは真矢もだった。突然硬直したように動きを止めた仁と、そんな彼を怪訝な顔をして見つめる拓郎に真矢も違和感に気付いたのだ。

「仁君?」

仁の異変に気付いた真矢が声を上げた瞬間、仁の体の震えが大きくなり、遂には激しく痙攣しながら倒れた。

「あ……あああああああああああああああああつ!」

「仁くんツ!」

「門司!」

突然悲鳴を上げて痙攣しながら倒れた仁に、亜矢と拓郎が慌てて近づく。何が起こったのかは分からない。もしかしたら時間差で毒が再び猛威を振るったのか、それとも別の何かなのかは分からないがとにかく異常事態なのは確かだ。

亜矢は倒れた仁を心配して衣服越しに仁の腕に触れた。だが触れた瞬間、服の下に感じた“それ”に彼女は思わず手を引つ込めた。

「ツ!」

「どうした、双星さん?」

何かに弾かれたように手を引つ込め、驚愕の表情を浮かべる亜矢に何があったのかと拓郎が問う。白上教授と峰も亜矢の様子に尋常ではない何かを感じたのか、仁を心配しつつ彼女の事を見た。

自分に向けられる視線に気付かず、否、そんなもの気にする余裕もなく亜矢は今し方

自分が感じたものに困惑を隠せずにはいた。

「何……今の……?」

「双星君?」

呆然と呟く亜矢に白上教授が問い掛けるが、亜矢は構わず再び仁の腕を掴むと袖を捲つて彼の腕を直接目にした。

「ッ!」

「なっ——」

「これは!」

そこにあつた光景に、亜矢だけでなく峰と拓郎も絶句した。

蠢いていた。仁の肌が蠢いていたのだ。まるで皮膚の下で何匹ものミミズがのたくる様に、仁の皮膚がウゾウゾと蠢いていた。そして何よりも、熱い。火傷するほどと言うのは大袈裟だが、尋常でない熱を仁から感じる。体温を測れば40度は超えているのではないだろうか。

今の仁はどう考えても普通ではない。もしかするとこのまま死んでしまうのではと言ふ危機感に、亜矢は居ても立ってももいられず仁に声を掛けた。

「仁くん、仁くん!?! しっかりしてください!?!」

「双星君、待ちなさい!」

「そんな、だって仁くんがッ!」

慌てふためく亜矢を白上教授が宥めようとするが、逆に亜矢は更に狼狽える。無理もない。仁は現在進行形で苦しんでいるのだ。しかも原因が分からないと来ているのだ。これで落ち着けなど無理がある。落ち着いてほしければ、それ相応の情報や状況の変化が必要だった。

その変化は程なくして訪れた。

「だい……じょうぶだよ。亜矢、さん……」

「ッ、仁くん!」

先程まで苦しみ悶えて悲鳴を上げていた仁が、いつの間にか亜矢の事を見ていたのだ。彼は凄まじい量の汗をかきながら、亜矢に向けて必死に笑みを浮かべている。

「大丈夫、だよ。きつと、大丈夫。だから……心配しないで……」

「そんな、無理ですよ!」 だって、こんなすごい量の汗、絶対普通じゃありません!」 それに——」

今の仁の身に起きていることは明らかに異常だ。いや、異常という言葉すら生ぬるい。人間に起こっていい異変ではない。

心の底から仁の身を案じる亜矢に、仁はこんな状況でも嬉しくなり彼女の頬を優しく撫でた。或いはそれは、彼女を少しでも安心させようとしての行動だったのかもしれない

い。

「だいじようぶ、だから……。教授……。あとは、頼みます」

亜矢と真矢を安心させようと声をかけ、最後に白上教授に後の事を託し意識を手放した。胸が上下しているので、ただ意識を失っただけなのだと分かるが尋常では無く苦しそうなその様子から一瞬本当に死んでしまったのではないかと亜矢は焦った。

「仁くん!?!」

「いや、大丈夫だ。意識を失っただけで、問題はない。瀬高君、手伝ってくれ」

「は、はい」

焦る亜矢を宥め、拓郎と共に仁を仮眠室まで担いでいく。

インドア派に見えて意外と鍛えられている仁は、印象に反してがっしりしていて重い。拓郎は想像以上に苦労しながら仁を仮眠室のベッドへと連れて行く。その際、彼も服越しに感じる仁の異常な体温と彼の蠢く肌に、言い知れぬ怖気を感じずにはいられなかった。

仁を仮眠室の簡易ベッドに寝かせ、亜矢が濡らしたタオルで彼の汗を拭い熱から脳を守る為氷嚢を乗せる。一通り仁の介抱を終え一息つくくと、亜矢は白上教授に何が起きているのかを訊ねた。

「教授、これは一体何なんですか？ 仁くんの体に一体何が？」

【亜矢、ゴメン代わって】

この事態に一番対処できるだろう白上教授に状況の説明を求めた亜矢だが、有無を言わず真矢が表に出てきた。唐突且つ強引な主導権の交代に、亜矢も目を白黒させながらそれでも文句を言う事はしなかった。

「教授さん、正直に答えて。……仁君がこうなるって分かってたの?」

真矢は激情を感じさせない声色で問い掛けているが、それが怒りを抑えているのだと言う事は直ぐに分かった。快活な真矢にしては声色が平坦過ぎる。

何時爆発するかも分からない活火山の様な真矢の前に、白上教授は何を言うべきか悩むように押し黙っていた。だが簡易ベッドの上で眠る仁の姿に、覚悟が決まったのか教授は口を開いた。

「……………ああ。こうなる事は予想出来ていた」

「ツ!!」

真矢からの問いに白上教授が小さく頷きながら肯定の言葉を口にした、その瞬間真矢の怒りが爆発した。白上教授の襟首を掴み、振り回すようにして床に倒しその上に馬乗りになる。

「あんた……あんたあツ!!」

「ちよつ、真矢さん落ち着いてください!」

「気持ちには分かるが、ここで教授を傷付けてもどうしようもないぞ!」

【真矢……】

このままだと白上教授の首すら絞めてしまいかねない真矢の勢いを流石に見兼ねて、峰と拓郎が彼女を必死に宥めた。後ろからそれぞれ真矢の腕を掴み、彼女がそれ以上白上教授を傷付けないようにする。

一方亜矢は、真矢の行動を賛同も咎めもしなかった。仁がこうなる事を知っていて何もしなかった白上教授は確かに許せない。だがここで教授を傷付ける事が正しいとはどうしても言えなかったのだ。

【真矢……まずは落ち着こう】

「これが落ち着いていられる!? この男、仁君を実験台にしたのよ!? ううん、仁君だけじゃない。きつと亜矢の事も実験台にしてデйнаドライバーとベクターカートリッジの実験してたのよ!」

仁の身に起こっている異常とデйнаドライバー・ベクターカートリッジが無関係な訳がない。きつとこれは、デйнаドライバーとベクターカートリッジを使う事で発生する不具合が形となったものだ。

そして白上教授は、何れこうなる事が分かっている何とも言わなかった。仁を実験台にして、経過観察をしていたのだ。

少なくとも真矢にはそう見えた。とてもではないが許せるものではない。

「それは違う！ 私は少なくとも、君や門守君を実験台にしたつもりはない！」

「それじゃこれは何!? どうして仁君がこんな事になつてるの？ 分かつてたんなら何で止めてくれなかつたの!!」

頭に血が上つた真矢が白上教授に食つて掛かる。今の彼女には、白上教授や峰達は何を言つても聞く耳を持つてはくれないだろう。

今、彼女を宥める事が出来るとすればそれはただ一人——

「——止めなかつたんじゃなく、止めさせなかつたんだよ」

「ッ!? 仁君!」

真矢の怒声に反応してか、それとも体調が落ち着いて来たからか、仁が目を覚まし体を起き上がらせた。まだ体温が高いのか顔は赤く汗が浮かんでおり、目も何処か虚ろで未だ体調が悪いのだろう事が伺える。

起き上がった彼を見て、亜矢が表に出て彼の背を支えた。

「無茶しちやダメです。さ、横になつて……」

「いや……大丈夫。見た目ほど体調は悪くはないから」

仁は心配してくる亜矢を宥め、ベッドの上に座り直すと一つ大きく息を吐いて口を開いた。

「こうなる事……俺は分かってたよ。分かってて教授には何もせず見ていただけにしてくれて頼んだんだ」

「何の為に……」

「必要だと思ったんだ。俺の体に起きてる事は、これから先きつと重要なデータになる。そのデータを活かす為に、教授には経過観察をお願いしたんだ」

つまり仁は、自分自身を実験動物として教授に差し出したのだ。確かに彼は、仮面ライダーとして戦う事を決意した時にそんなような事を言っていた。だがまさか、ここまでするだなんて思っていないかった為亜矢は信じられないと言う思いで一杯だった。

「と言うか、門守君。今一体どうなってるんですか？」

「お前の今の体、明らかに普通じゃないぞ？」

亜矢だけでなく峰や拓郎も仁の体の事が気になり疑問を口にする。それに対し、仁は暫し思案すると徐に自分の左手の中指を右手で包んだ。

そして――

「ツ!!」

「じ、仁くん!?!」

仁はその中指を躊躇せずへし折った。湿った木が折れるような嫌な音が室内に鈍く響き、その光景に亜矢が悲鳴を上げ峰と拓郎は顔を顰めた。

「何やってるんですか!？」

「大丈夫、落ち着いて」

「これを見てどう落ち着けと——!？」

自分で自分の指をいきなりへし折ると言う行為に、冷静さを欠いた亜矢を仁が宥める。宥めながら、仁は折った中指を今度は無理矢理真つ直ぐに治した。強引にへし折った指を今度は無理矢理治そうとする仁の行動の意味が分からず、峰と拓郎はその痛々しい行為に只々顔を顰めるだけだった。

だが次の瞬間、目の前の光景に亜矢達は言葉を失った。

無理矢理真つ直ぐ治しただけの指が、何の問題も無く動いたのだ。先程彼は間違いなく指の骨を折った。関節を外したと言うレベルではない。明らかに間接ではない所が曲がっていたのだから間違いはなかった。

「え? もう治った? え?」

「じ、仁くん? これは、一体——?」

訳が分からないと言う顔をする亜矢達に、仁は自分の体に起きた異変を端的に話した。

「俺、新人類になっちゃったみたい。超万能細胞が全身に行き渡った、超万能細胞に適応した新人類に」

「え？」

希美は一人傘木社の社内食堂で食事をしていた。周りには既に彼女が平らげた皿が山の様に積み上げられており、周りからは彼女の姿が皿の山に隠れて見え辛い。

その山が唐突に崩れた。高さが限界に達してバランスを崩したのではない。誰かがぶつかって崩れたのだ。崩れた食器が床に散乱し、割れてしまった物も少なくない。

「あ———？」

希美はフォークに刺したステーキを口に運ぶ態勢のまま、皿の山を崩した人物の方を目を向けた。大方、シトシン辺りが絡んできたのだろうと最初思っていたが、彼女が目を向けるとその予想は裏切られた。

そこに居たのはトクシツクファツジに変異していた少女——リリイだった。リリイは苦しそうに胸を抑えながら、自分がしてしまった事に顔を青くしている。

「あ、ゴメン………なさい」

胡乱な目で自分を見てくる希美に、リリイは彼女を怒らせてしまったかと体を縮こまらせて謝った。まるで小動物の様に体を震わせるリリイは、希美が鼻を鳴らすと肩をビクリと震わせる。

殴られるか怒鳴られる事を覚悟して目尻に涙を浮かべるリリイ。だが予想に反して、希美は特に気分を害する事も無くそのまま食事を続行。分厚いステーキを僅か二口で完食し、水で口の中を洗い流すとリリイに向けてシッシと手を振った。さっさと何処かへ行けと言う事らしい。

怒っている訳ではない事は伝わったのか、リリイは僅かに安堵した表情で再び希美に頭を下げるとその場を離れていく。その際も胸を抑え、苦しそうに息をしていたが希美は全く気にした様子がない。

「……………はあ」

希美は空になった皿を空虚な目で見つめていた。腹はもう満腹だ。これ以上は入らない。だが心は全く満足していなかった。

考えてしまうのは、先日の戦いで仁に言われた一言。

『アンタどうしたら満たされるの?』

「———そんなの、こっちが聞きたいわよ」

これだけ食べても心は満たされない。戦っても虚しいだけ。一体自分はどうすれば

満足できるのか、彼女自身全く分からなかった。

いつそ死んでしまえばこの虚しさからも解放されるのだろうか、それだけはどうしても選ぶ気になれなかった。

或いは、もう一度仁と戦えば何か答えが得られるのだろうか。そんな事を考えていると、椅子がひっくり返る派手な音が聞こえてきた。

「んん？」

何事だと希美がそちらを見ると、リリイが倒れているのが見えた。その際に椅子に体を引つ掛けたのか、近くの椅子をひっくり返してしまったらしい。

「はあ……はあ……」

リリイは苦しそうに喘いでいる。息をするだけでも苦しそうだ。そんな彼女に対し、希美は特に関心も抱かず椅子から立ち上がる。少女の方に向けて歩いていき……その横を素通りしようとした。そちらに向けて歩いたのは、その方向が食堂の出入り口だからだ。リリイがどうなるかと知った事ではない。

だが希美が横を通り過ぎようとすると、ズボンの裾をリリイが掴んだ。朦朧とした意識の中で、リリイは希美に助けを求めたのだ。

「はあ……あ、あ……」

弱々しい力でズボンの裾を掴んだりリリイに、希美は尚も関心を向けない。鬱陶しそう

に足を引つ張り、彼女の手を振り払った。

それでもリリイは諦めなかった。一度は振り払われたが、再び手を伸ばしズボンの裾を掴んできた。

「——チツ」

流石にしつこいので文句を言おうと希美がリリイの方を見ると、彼女は震える唇で言葉紡いだ。

「た、す……け……て……」

希美が視線をリリイの前方に向けると、そこには錠剤の入った瓶が転がっていた。どうやらあれの中身を飲もうとして転び、拾う体力も無く希美に助けを求めたらしい。正直希美にはどうでもいい事だった。この程度の事で死ぬのならそこまで言う事だ。

再び足を引つ張りリリイの手を振り払い、希美は先へと進んで行き食堂を出ようとする。

「……」

が、不意に彼女の足が止まった。

リリイが必死に生きようとする姿が、隠蔽装置を体から無理張り引き剥がしてでも生き永らえようとした自分の姿に重なったのだ。希美だつて生きる為に醜く足掻いた。それとあのリリイの必死さが重なり、何だか放っておけなくなつてしまつたのだ。

「くくくく……はあ、つたくもう」

面倒くさそうに溜め息を吐くと、希美は引き返して瓶とリリイを拾い、リリイを近くのテーブルに寝かせ瓶から錠剤を一粒取り出し彼女の口にねじ込み水を流し込んだ。いきなり水を流し込まれたからか、彼女の体が驚き水を錠剤と一緒に吐き出してしま

う。
「んっ！ げほっ!? げほっ!」

「ッ、アンタ生きたいんでしょ？ なら気合で飲みなさいよ、ほら」

希美はもう一粒錠剤を取り出してリリイの口に入れ、先程よりも優しく水を口に流し込んでやった。口では何だかんだ言いつつ、先程の水は勢いがあり過ぎると彼女自身反省したようだ。意識が朦朧としたリリイが水を錠剤と一緒に飲めるよう、考慮して水を流し込む。

「んく、んく……はあ。も、もつと……もつと……」

「はあ？ こんな何粒も一気に飲んだら体に悪いわよ。一つで十分でしょ」

「おね、がい……もつと……」

「……………どうなつても知らないわよ」

面倒だから飲みたいと言うなら飲ませてやれと、希美はもう何粒か錠剤を取り出し飲ませてやった。

薬を飲ませてもらったからか、リリイは次第に呼吸も落ち着いてきて目もすっかりとしてきた。

もう大丈夫だろうと、希美がリリイをその場に残し立ち去ろうとする。その背に向けてリリイは先程よりはつきりした声で感謝の言葉を口にした。

「あり……………」

「……………」

ハッキリと聞こえたリリイからの感謝の言葉に、希美は僅かに目を見開きつつ小さく鼻を鳴らして今度こそその場を離れていった。

食堂を出て行く彼女の顔を見たものは誰も居ないが、誰か居れば気付いただろう。希美の顔が先程よりも幾らか覇気を取り戻している事に。

「新人類になったって……………」

一方白上研究室では、仁が自身の体に起こった異変を亜矢に説明していた。

「言葉通りの意味だよ。最初に超万能細胞の事を聞かされた時、教授が言ってたでしょ。超万能細胞は他の細胞に伝播するって」

「た、確かに言ってみましたけど……。でも！ ドライバーを使えば、問題ない筈じゃないですか？ それに、私やファッジになった人達は？」

現実には仁の体に異変が起こってしまった以上、実際には問題がないと言う事は無かったのだろう。だがそうなると、仁と同様にデイナドライバーで変身している亜矢の体だって異変が起こっている筈だし、直挿しをしてファッジに変異している人達だって新人類になっている筈だ。なのに何故仁だけが新人類になってしまったのか？

「多分、俺の場合はドライバーで体を慣らしてから直挿しをしたからだと思う」

「え、あ——！」

そう言えば仁は一度だけ直挿しをしてファッジになっていた。だがあの時は後になって検査をしても異常は無かった筈だ。

「どう言う事なんだ？」

「簡単に言えば、いきなり直挿ししてファッジになっても超万能細胞の影響を受けた細胞が耐えられないんですよ。急激な変化に、体の方が耐えられなくて進化する前に影響を受けた細胞が死滅するんです」

その死滅は命に関わるほどではない。精々が体力が低下して日常生活に支障を来す

程度で、人間でなくなる程ではない。

だがデйнаドライバーを使い続けた場合はその限りではない。デйнаドライバーを使つて変身すると、体には超万能細胞の影響が僅かずつだが残るのだ。それも体に大きな異変が出ない程度に。

勿論それだけではこんな事になりはしない。本格的に不味かつたのは恐竜ベクターカートリッジを制御する為に直挿した事だ。あれがドライバーにより徐々に影響が残つた体に火を点け、仁を新人類に覚醒させる種火になつてしまつたのだ。

「門守君、新人類つて具体的に何が凄いですか？」

「まずこの回復力。この程度の骨折なら直ぐに治る。多分体力も前より上がってるし、こればかりは想像するしかないけど寿命も延びてると思いますよ」

それはつまり、人間という枠からは大きく外れてしまつた事を示す。この世界でただ一人、超万能細胞で体を構成した新人類。

「仁くんは……本当にそれでいいんですか？ 人でなくなつても、良いつて言うんですか？」

「……覚悟してたから」

そう、仁はこうなる事を覚悟していた。人でなくなる可能性を覚悟した上でデйнаとして戦い続けてきたし、覚醒する事が避けられないとなると白上教授にデータを取つて

もらっていた。

だがそれでも、仁の中に不安がないかと言えば嘘になる。最大の不安は、こんな体になつてしまった自分を亜矢が受け入れてくれるかであつた。

「……こんな俺は、気持ち悪い？ 人でなくなつた俺と居るのは……」

「そ、そんな事は——!?!」

自虐するように言う仁の言葉を、亜矢は必死で否定する。例え人でなくなつたとしても仁は仁だ。その事には変わりはない。

「私は、仁くんがどうなつても仁くんを愛してます！ その気持ちに嘘はありません！」
「亜矢だけじゃないわ、私もよ！ 新人類？ だから何よ！ そんなの、仁君を愛さない理由にはならないわ！」

そう言うのと真矢は仁に抱き着き、白上教授達が見ている目の前で仁にキスをしてみせた。突然キスをしてきた事に仁も驚いたが、直ぐに彼女を受け入れて抱きしめ返し全身で彼女からの愛を受け止めた。

目の前で突然繰り広げられる2人の熱い抱擁と接吻に、峰は顔を真っ赤にして両手で顔を覆いつつ指の間からそれを眺め、拓郎と白上教授は後ろを向いた。

どれほどそうしていたか、亜矢が仁からゆっくりと離れた。離れた彼女の頬を、仁は優しく撫でる。

「……ありがとう、亜矢さん、真矢さん」

仁に頬を撫でられ、亜矢が気持ち良さそうに目を細める。

そこで突然仁が横に倒れた。

「仁くん!?!」

「ん、大丈夫。ただまだ体の変異についていけないみたい。少し休めばすぐに良くなると思うから……」

そう言つて仁は直ぐに寝息を立て始めた。今度は特に苦しそうな様子もなく、穏やかに眠っている。その様子に亜矢は安堵し、彼の体に掛け布団を被せてやった。

亜矢が仁に布団を掛けてやると、それを見計らっていたかのように彼女の携帯が鳴った。掛けてきたのは宗吾だ。どうやら昨日の今日でまた傘木社が何か仕出かしたらしい。

思わず溜め息を吐きつつ、亜矢は寝ている仁の頭を一撫でしラボを後にした。

仁は亜矢が出て行つたことにも気付かず、ベッドの上で静かに眠り続けていた。

第49話：新たなる生命の誕生

亜矢が出て行つてから数分後に仁は目を覚ました。

「ん、うう……?」

「あ、門守君。目が覚めました?」

「はい………亜矢さんは?」

開口一番に亜矢の事を探す仁に、峰は思わず苦笑する。本当に彼女の事が好きなんだから、と。

「双星さんなら少し用事で出掛けると言っていた。ま、直ぐに帰ってくるだろう」

亜矢からは口止めされているので、拓郎は適当な事を言つて誤魔化そうとした。

拓郎の言葉を聞き、最初仁は何処か心細そうにしながらも納得した様子を見せる。

が、次の瞬間仁は頭痛がするのか頭を押さえて蹲った。

「うっ!?!」

「門守君!?!」

「大丈夫か!?!」

「まだ、何処か異変が?」

白上教授達が心配する前で、仁は頭を押さえながらゆつくりと顔を上げた。

「——行かないや」

「行く? 行くつて何処へ?」

突然変な事を呟き立ち上がった仁に峰が訊ねるが、仁は何も答えない。峰や教授達の事など見えていないかのようになり、ややふら付きながら外へ出ようとする。

当然そんな状態の彼を一人外へ放り出すような真似をする者はこの場に居ない。

「ま、待ちたまえ門守君! そんな状態で何処へ行こうと言うんだね?」

「そうですよ! 今は体を休めた方が良いでしょう!」

白上教授と峰が必死に仁を押さえようとしますが、仁は聞く耳を持たず歩き続ける。恐ろしい事に、仁は白上教授と峰の力を全く意に介さず自然な様子で歩いていた。まるで2人など存在していないかのようである。

とうとう押さえきれなくなり、教授と峰はその場に置き去りにされる形で仁から振り落とされた。

「うおっ!」

「きゃっ!」

「教授! 宮野! 2人共、大丈夫ですか?」

「あ、ああ。私は何ともないよ」

「私も……でも門守君は……」

幸いな事に峰と教授は本当にただ振り落とされただけで大した怪我も無く、だが仁の底知れぬ力に近づく気力を削がれ彼が出て行くのを見送るしか出来なかった。

2人を振り落とした事など意にも介さず、仁はやや覚束ない足取りで歩き続ける。彼が向かう先にあるのは、たった一つ。

「行かなきゃ……亜矢さんが、危ない……」

数分ほど遡り、宗吾に呼ばれて亜矢が向かったのは湾口近くの倉庫街だ。

現場にはS・B・C・T・が到着しており、倉庫街への入り口は閉鎖されている。

亜矢はここに来る際、茜が運転するSUVに乗せてもらってやってきた。車を降りると、宗吾が既にスコープに変身した状態で近付いて来た。

「昨日の今日で呼び出してすまないな」

「いえ、大丈夫です」

言いながら辺りを見渡すと、ある事に気付いた。先日比べてライトスコープの人数が減っている。

「何だか、先日よりも隊員の方が減ってますね?」

「単純に前の戦闘でやられた隊員の補充が出来てないつてもあるんだけどな……」

「あ、ゴメンなさい……」

「いや、気にするな」

スコープ1号はそう言うが、その表情にはやや険しさが伺える。

「それより、そろそろ突入だ。今度こそ連中の尻尾を掴んで——」

「隊長!?!」

今回の作戦への意気込みをスコープ1号が口にしようとした時、スコープ2号が声を上げた。何事だとスコープ1号と亜矢がそちらを見ると、彼は倉庫街の一面を指差している。それにつられて2人が指差す先を見ると、そこにはヘテロとホワイトカラーズ、ダークステインガー、そしてグリーンリキッドの4人が歩いてきているのが見えた。

彼らの姿に、スコープ1号が驚きの声を上げる。

「何ッ!?! あいつら——!」

「権藤さん、ここには何故来たんですか?」

「情報提供だ、ここに異様な物資の搬入があるとな」

だとするならおかしな話だ。異様な物資の搬入がされていると言う事自体はおかしいし、そこを守るために迎撃が出てくる事も十分考えられる。

だがその迎撃にヘテロ達が出てくると言うのは明らかに変だ。彼らは謂わば傘木社の最大戦力。こう言う言い方はあれだが、使い時は慎重に選ばなければならない。特にただ物資を搬入するだけの場所に、1人だけならともかく4人全員を配置するなどおかしい。

それもまだ何もしていないにも拘らず向こうから出てくるなど……。

まるで彼らがここに来るのが分かっていたような動きだ。

「まさか……いや、考えるのは後だ！ 総員攻撃開始！」

スコープ1号の命令に隊員達は一斉に倉庫街に入り、ヘテロ達に攻撃を仕掛ける。ヘテロ達4人はテイルバスターやベクターリーダーでそれを迎撃した。

隊員達に続いて倉庫街に入っていくスコープ1号の姿に、亜矢もルーナに変身して続く。

〈CAT Unite〉

「変身！」

〈Open the door〉

亜矢はルーナに変身すると、一直線にヘテロに向かって行った。幾ら人数が揃っている

とは言え、スペックが下げられているライトスコープではヘテロの相手は厳しい。スコープでも厳しいだろう。

ここはベクターカートリッジ一つとは言え、ヘテロと同じく古代生物の遺伝子の力を引き出しているルーナが相手をしなければ。

「はあっ！」

「ん？」

一直線にヘテロへと向かって行き、出合い頭にボレーキックを放つ。ちようどライトスコープ3人を同時に相手していたヘテロは、放たれた蹴りをテイルバスターで防ぐが蹴りの威力が思いのほか強く踏ん張り切れずに下がらされる。

ヘテロが後ろに下がると、ルーナはリプレッサーショットIIを向けながらライトスコープ達に告げた。

「このライダーの相手は私達がするわ！ あなた達は権藤さん達の援護を！」

「分かった、すまない！」

ライトスコープ3人はバラバラに分かれ、それぞれがスコープ2号と戦うグリーンリキッド、スコープ1号と戦うホワイトカラーズ、ライトスコープ部隊のみで戦うダークステインガーの方へ向かって行く。

その場に残されたのはルーナとヘテロの2人のみ。2人は周囲の戦闘音をBGMに

対峙する。

「……今日もデイナは来ないのね。何かあったの?」

「お生憎様。仁くんはね、色々忙しいからアンタ達みたいな木端連中を相手にしてる暇ないのよ」

本当は仁は新人類に覚醒してしまい、体が変異に順応していないので休んでいるのだがその事を教えるつもりはなかった。というか、連中には教えてはいけないう。仁が新人類に覚醒したなどと知れば、連中は絶対にろくでもない事を考える。

彼らに知られる訳にはいかない。

「へえ……そう……ま、いいわ。デイナが来れないなら、アンタが私の相手をしてよ」
「望むところですよー。そう言えばアンタには何度も痛い目に遭わされてたからね。ここらでリベンジとさせてもらおうわ!!」

ルーナは吠えながらリプレッサーショットIIの引き金を引く。その程度なら当然ヘテロには大して通用しないが、ルーナは構わず銃撃しながらヘテロに接近する。迫るルーナに対し、ヘテロは反撃をしたいが二丁拳銃の銃撃が行動を阻んだ。速度が売りの二丁拳銃ではヘテロ相手に効果的なダメージが与えられない事はルーナだって分かっている。なので、銃撃を頭と武器を持つ右手に集中させているのだ。

このおかげでヘテロは視界がすっかり確保できず、武器も満足に構えられない。ダ

ダメージが無い攻撃も使い様と言う事だ。

「くっ!？」

「もらった!」

ルーナの銃撃によりヘテロの動きが鈍った。今がチャンスと、ルーナは一気に接近しリプレッサーショットIIの銃剣部分で斬りかかった。

「イヤアツ!」

跳躍し体を捻りながらの斬撃。先程までの銃撃で体勢を崩され気味だったヘテロは僅かに反応が遅れ、胸部に斬撃を喰らう。強固な装甲に覆われた胸部はこの程度で大きなダメージとはならないが、接近を許してしまった事はヘテロにとって大きな痛手となる。

ヘテロの武装であるテイルバスターは大きい。つまり取り回しに難がある。対してルーナの武器は分離状態だと小型だ。威力は低めだが、速度と取り回しに優れている。以前のルーナが相手であればその程度大した事なかっただろうが、スミロドンの遺伝子の力を引き出した今のルーナが相手だと無視は出来ない。

だからヘテロは、以前よりも真面目にルーナの相手をした。放たれる攻撃を最小限の動きで回避し、必要以上に攻撃は喰らわれないようにした。前と同じように放たれた攻撃を無気力に喰らっていたら、手痛いダメージを受けてしまう。

「まだまだあつー！」

しかし一度攻撃を回避された程度ではルーナは止まらない。攻撃を回避されても、その勢いを利用して次の攻撃に繋がったり、立ち位置を変えてヘテロからの反撃を回避したりした。ヘテロが放とうとする攻撃はルーナには手に取るように分かる。挙動が大きいかからすぐに分かるのだ。

「フーン！」

「おつとー！」

反撃に放たれたヘテロの右フックを回避し、空中で体を捻りながらルーナは相手の側頭部に蹴りを喰らわせる。脳を効率的に揺さぶる蹴り方だ。喰らえばヘテロとてただでは済まない。

「ぐうつ!？」

ヘテロの側頭部にルーナの蹴りが入る。だがヘテロは蹴りが直撃する寸前に体を傾ける事でダメージを最小限に留め、脳が揺さぶられて動けなくなることを避けた。流石の反射神経である。

「チツ、浅いか。……ならー！」

蹴られた勢いを利用して距離を取ったヘテロを見て、ルーナは戦法を接近戦から射撃戦に移行。リップレッサーショットIIを連結させてライフルモードにし、離れたヘテロの

アンダースーツ部を狙って引き金を引いた。ヘテロのアンダースーツはスパンコールのように、表面をうろこ状の装甲で構成されている。なので鎖帷子の様に、柔軟に動きながらも高い防御力を発揮する事が出来た。

それでも衝撃は殺しきれるものではなく、強化されたルーナのライフルによる一撃はヘテロにとつても無視は出来ない。

ヘテロはルーナがライフルを撃つたのを見て、それを回避すべく横に転がって避けるとお返しにテイルバスターで撃ち返した。放たれた炸裂弾はルーナの右肩に命中し破裂する。

「ああっ?!」

撃たれた衝撃でルーナはリプレッサーショットIIを手放してしまう。さらに悪い事に、今の一撃でルーナは利き腕の肩を痛めてしまった。これでは持ち前の正確な射撃が封じられたも同然だ。

「くう、やられた……なら接近戦よ!」

射撃が出来ないなら、接近戦で対抗するしかない。ルーナは右肩の痛みを堪えながらヘテロへと突撃していった。

激戦となる倉庫街。右肩を負傷したルーナはそれでもヘテロと互角に戦い、テイルバスターを振り回すヘテロを相手に蹴り技で対抗してみせた。

スコープ1号は部下と連携してホワイトカラーズと戦闘を繰り広げる。ホワイトカラーズは単体で高い戦闘力を誇り、触腕型の鞭とバクターリーダーの銃撃・斬撃でスコープを寄せ付けない。だがスコープ1号は、自身の能力と指揮によってライトスコープ達と連携してホワイトカラーズを徐々にだが追い詰めていた。

一方スコープ2号の方は、グリーンリキッド相手にやや苦戦を強いられていた。スコープやライトスコープはその性能上、グリーンリキッドの透明化が通用しない。しかしグリーンリキッドはスコープ達に対して機動力で勝っていた。カエル由来の脚力で素早く動き回る上に、垂直の壁面にも立てる重力を半ば無視した自由な動きにスコープ2号を始めとした隊員達は翻弄されていた。

そして量産仕様のライトスコープのみで構成された部隊とダークステインガールの戦いは、1人で棘による弾幕を張れるダークステインガールにライトスコープが釘付けにされた状態だった。ライトスコープ達も盾持ちが前に出て味方の被害を減らしつつ数で押し潰そうとするが、流石に幹部と言うだけあってちよつとやそつとの事では守りを崩せない。

一進一退の様相を呈す倉庫街での戦い。その戦いを止めたのは、戦場に降り注ぐ銃弾だった。

「わわっ!?! なこよっ!?!」

「敵の増援か!？」

今の銃撃、ヘテロ達には一発も当たらなかったがライトスコープの中には銃撃を喰らいダメージを受けた者が数名いた。何より今のS. B. C. T.には増援を出せるほどの余裕はない。つまり、この銃撃は敵側の増援によるものと言う事だ。

この機に乗じて体勢を立て直そうと引き下がるヘテロ達を見ながら、ルーナとスコープ1号はどれ程の増援が来るのかと警戒した。この状況だと、ヴェロキラプトルフアツジでも来られると厄介だ。

だが彼女達の警戒に反して、姿を現したのはたった1人だった。

「あれは……」

「傘木 雄成ツ!？」

現れたのは雄成であった。彼は片手でベクターリーダーを弄びながら辺りを見渡し、仁の姿が見当たらない事に落胆して肩を落とした。

「何だ、今日も門守 仁君は来ていないのか。最近彼少し出不精になっていないかね?」「お生憎様。今までが仁君頑張りっぱなしだったから、今は休ませてるのよ」

「ほほお………つまり今、彼は休まなければならぬ状態にあると言う事だね?」

ルーナの言葉の裏に隠れた仁の状態に、雄成は鋭く気付いた。まさか気付かれるとは思っていないだったので、ルーナは思わず言葉を詰まらせた。

「ッ!？」

「ふふふ、凶星だね。これはますます彼に会わなければならないな。居るとすれば、大学か？」

踵を返そうとする雄成の足元を、リプレッサーショットⅡの銃弾が抉った。

「行かせると思ってるの？」

「……………それもそうか。いや、そうだね。うん、今度は彼の方から来てもらおうか」「は？」

突然何を言い出すのかと、雄成の言葉にルーナが訝しんでいると彼は徐にドライバーを取り出した。

それはカラーリングは異なるが、全体的な見た目はダイナドライバーと瓜二つだった。

雄成が取り出したドライバーに、ルーナとスコープ1号は目を見開いた。

「それは——!？」

「ダイナドライバーをコピーしたのか!」

「コピーとは心外だね。見た目こそ確かにダイナドライバーとそっくりだが、中身は別物と言っても過言ではない出来栄えだよ。ちょうどいい、ここで軽くテストしてみよう」

雄成はそう言ってドライバー——青と白で彩られたデйнаドライバーとは対照的に、黄色と黒で彩られたカラミティドライバー——を腰に装着し、ベクターカートリッジを2本取り出し起動状態にした。

雄成が変身する……それもプレインジーンとは違う、新たな仮面ライダーに。

それを察して身構えるルーナ達。本当は変身を妨害したいところだが、それはホワイトカラーズ達が許さないだろう。ルーナ達には見ている事しか出来ない。

〈SAMPLE〉〈ORGANISM〉

雄成はベクターカートリッジを起動させ、腰に装着したカラミティドライバーに装填する。その過程から何まで、仁の変身するデйнаと全く同じだ。

〈SAMPLE + ORGANISM Experiment〉

カラミティドライバーから響く音声。デйнаドライバーと然して変わらない筈のそれが、ルーナにはとても禍々しいものに感じられた。

〈Biological disaster warning issued〉

それはそう……まるで、開けてはならない扉の鍵を開けてしまったかのような。そんな嫌な何かを感じずにはいられなかった。

そんなルーナの不安を他所に、雄成は胸の前で腕を交差させて変身ポーズを取った。

「変……身」

〈Biohazard〉

セントラルドグマから放たれたスーパーコイルが雄成の周りで渦巻き、彼の姿を覆い隠す。

光る円柱の中に消える雄成。その様子は宛ら巨大なシリンダーの中に人間が漂うようだ。薄らと見える雄成のシルエットが、見る見るうちに変化していく。

そして……姿が固まった時、光のシリンダーの中に浮かぶ雄成がその手で内側から破った。

「う——!？」

その瞬間、ルーナは激しい吐き気のようなものを感じた。この感覚は覚えがある。そう、雄成が変異したフアツジと初めて相對した時。あの時に感じた、存在そのものを拒絶する様な嫌悪感だ。

今この瞬間、悪意に塗れた科学者の手により、存在してはならない歪な生命が世に解き放たれる。

「誕生だ……これがカラミティ。仮面ライダーカラミティだ」

黒いアンダースーツに黄色い単眼、両肩にはバイオハザードマークを模した装甲。黄色い胸部装甲にもバイオハザードマークが刻まれている。

これこそが雄成の変身する、『仮面ライダーカラミティ・ハザード』だった。

カラミティは両腕のカッター『リスクブレード』を伸ばし、何時でも戦える体勢を取る。

「さあ、折角こうしてお披露目したんだ。掛かってきたまえ。テストをさせてくれよ」
両手を広げるカラミティ。言い知れぬ不気味さに足踏みするルーナに対し、スコープ達はその不気味さを払いのけた。

「怯むなあ！ 敵は所詮一人！ 数で攻めろ!!」

スコープ1号の号令に、ライトスコープ達が一齐にガンマカービンの銃口を向け引き金を引く。放たれる苛烈な弾幕、晒されればルーナとただでは済まない。

嘗て、ヘテロはその銃弾の嵐の中を物ともせずに進んだ。

しかし、カラミティは違った。カラミティは目にも留まらぬ動きで銃弾の合間を縫うように動き、全ての銃弾を回避してしまったのだ。

その速度、流石にバツファローヒューマンエレキテルのエレキテル・ブーストには劣るが、それでも目で追う事も出来ないほどの速度である事に変わりはない。そのあまりの早さに、ルーナ以外は一瞬カラミティの姿を見失ってしまった。

「なっ!!」

「速い!!? 何処に!!?」

「そこです!」

カラミティの姿を見失ったスコープ達と違って、ルーナはその優れた動体視力で辛うじてカラミティの動きを捉えていた。カラミティはスコープ達の集団の中に紛れ込んでいたのだ。

それを捉えていたルーナは、ライフルモードのリプレッサーショットIIで狙い撃つ。「おっと」

放たれた銃弾をカラミティは軽く身を反らすだけで回避した。そこで漸く自分達の中に紛れ込んでいた事に気付いたライトスコープ達は、銃では同士討ちになるとガンマソードを抜きカラミティに斬りかかった。

「何時の間に!?!」

「このおっ!」

近くに居たライトスコープが振り下ろすガンマソードを、カラミティは素早く回避しお返しに両腕のリスクブレードを振るった。

「ははあっ!」

「ぐあっ!?!」

「があっ?!」

カラミティのリスクブレードに装甲を大きく切り裂かれ、ライトスコープ2人が早くも脱落する。

リスクブレードの切れ味は凄まじく、オリジナルには劣るとは言え防御力には自信のあるライトスコープの装甲が容易く切り裂かれた。その事に隊員達は一瞬狼狽えるが、恐怖を跳ね除けた数人が立て続けに挑みかかった。

「おおおっ！」

1人が突撃すると、それを合図に他のライトスコープ達も次々と攻撃を仕掛ける。中にはガンマカービンにガンマソードを取り付け、銃剣にして威力を増す者も居た。

しかしカラミティは次々と攻撃してくるライトスコープを次々と切り伏せていった。速度だけではなく、パワーも優れているカラミティは腕を一振りしただけでライトスコープ数人を吹き飛ばし、脚を振り上げれば蹴り飛ばされたライトスコープは進路上にあったコンテナを複数突き破る。

これは単純に数で押してどうにかなる相手ではない。被害が無駄に増えるだけなら自分が向かった方が良く、スコープ1号は他の隊員を下がらせた。

「総員退け！ コイツは俺達がやる。坂木、行くぞ！」

「了解！」

量産型のライトスコープに比べ、スコープ1号・2号は防御力もパワーも優れている。流石に速度は負けるが、堪えてしまえば勝機はある。

2人のスコープはボルテックスブレードで斬りかかった。だがカラミティは、2人の

攻撃を避けもせず正面から受け止めた。それもリスクブレードではなく、それぞれを両手の指二本でだ。

「何ッ!?!」

「くそっ!?!」

パワーでも圧倒的に劣っているスコープだが、負けじと力を籠め続ける。だが次の瞬間、カラミティが指先に力を籠めるとボルテックスブレードは中ほどから折れてしまった。

「そ、そんな——!?!」

「くっ!?! うおおおおっ!」

啞然とするスコープ2号に対し、スコープ1号は怯まず拳で殴り掛かる。カラミティはそれを高速移動で再び回避すると、スコープ1号の背後に立ち両腕のリスクブレードでX字に切り裂いた。

「ぐあああああつ!?!」

「権藤さん!?!」

背中を大きく切り裂かれ、その場に倒れ変身解除されるスコープ1号。スコープ2号が助けようと動くが、それより早くにカラミティが動いた。

〈ATP Full blast〉

ドライバーのレセプタースロットルを引き、必殺技を発動。エネルギーが右足に集束させ、必殺の蹴り技『デッドエンドクラッシュ』を迫るスコープ2号に叩き込んだ。

「ハアツ―！」

「がああああああつ?!」

蹴り飛ばされたスコープ2号は、遠く離れたガントリークレーンに激突するとその場で爆発四散。貨物運搬用のクレーンをへし折りながらその残骸を海へと降り注がせた。

「ふむ……スコープ程度ではこれが限界か。では君はどうかかな？」

「!？」

矛先が自分に向いた事に一瞬体を震わせるルーナだったが、ここで逃げては仁に何も知らせなかった意味がない。内から湧き上がる恐怖を抑え込み、ルーナはカラミティに銃剣で斬りかかった。

「はあああつ―！」

「ふつ……」

ルーナが迫ると、カラミティはまたも高速移動で彼女の目前から掻き消えた。だがルーナは辛うじてカラミティの動きを捉える事が出来る。一瞬素早い動きに惑わされたが、カラミティが背後に迫っている事にすぐに気付いたルーナはそちらを見もせず、銃口を向け引き金を引いた。

「くっ！」

「ほお？」

まさか姿を捉えられると思っただけはなかったのか、カラミティは胸部装甲に一発貫つてしまった。しかし所詮は一発、大した痛手にはならない。着弾箇所を手で軽く払うと、高速移動で接近しリスクブレードを振った。

ルーナはそれを両手のリプレッサーショットIIで受け止めるが、その瞬間カラミティの足が動き無防備なルーナの腹を蹴り飛ばす。

「うっ?!」

腹を強かに蹴り飛ばされ、ルーナの動きが大きく止まる。そこにカラミティのリスクブレードの斬撃が襲い掛かり、胸部を大きく切り裂かれてしまった。

「あああああああああああああつ?!」

その瞬間、切り裂かれた箇所を中心に必然に尽くしがたい苦痛がルーナの全身を駆け抜けた。まるで体がバラバラになったかのような衝撃。苦痛はただ長引くだけでなく、時間が経つごとに強くなっていく。

「ああ、ああああああ!?! うあああああああ、あああああああああつ?!」

明らかに尋常ではない様子に、しかしカラミティは満足そうに頷いて見せた。

「ふむ。悪くない性能だ。遺伝子破壊の効果はしっかりと出ている様だね」

倉庫街に響くルーナの悲痛な叫び。それを止めさせようとしてではないが、カラミティは彼女の首を掴んで持ち上げた。首を掴まれた事で悲鳴が強制的に止められる。

「うぐ、ああ——!?!」

「さて、それでは呼んでもらおうか? 門守 仁君を——」

「その必要は無いよ」

突如倉庫街に仁の声が響く。仁の声が聞こえた瞬間、カラミティはルーナの首から手を離し声のした方を弾かれるように見た。

果たしてそこには、まだ本調子とは言い難い様子の仁が佇んでいた。

「じ、仁、くん——!?!」

「おお! 待っていたよ、門守 仁君!」

仁はカラミティの声には答えず、未だ苦痛で苦しむルーナと倒れたS. B. C. T. の隊員達の姿を見渡す。

一通り見渡した仁は、何かを堪えるように目を瞑ると次の瞬間、目を開くと同時にデイナドライバーを腰に装着した。

そして取り出す2個のベクターカートリッジ。だがそれは、現時点で最強の力を持つ恐竜ベクターカートリッジではなかった。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「は？ 何で今更……」

その光景に首を傾げたのはヘテロだった。誰よりもダイナとの戦闘経験のある彼女は、ダイナのスペックも大体把握している。その彼女に言わせれば、バッファローヒューマンフォームは今更感の拭えない形態であった。

だが次の瞬間、起こった出来事は誰もが驚愕せずにはいられなかった。

「……変身」

へC o n g r a t s ! B i r t h o f a n e w l i f e , M I N O T A U
R . O p e n t h e d o o r

変身が完了した時、そこに居たのはバッファローヒューマンフォームのダイナではなかった。

装甲はより分厚くなり、頭の角も大きくなっている。そして何よりも、全身に血管の様に金色のラインが走っているのが目を引いた。

それは今までのダイナ・バッファローヒューマンフォームに非ず。ここに居るのは、進化した仁の影響を受けて顕現した新たな力。

その名も——ダイナ・ミノタウロスライフ。カラミティと同様、世界には存在しない筈の新たな生命が創造された瞬間だった。

第50話：雌雄が揃う

進化した仁の影響を受け、デイナ自身も進化した。

その光景に、誰よりも大きく反応したのは雄成の変身したカラミティであった。

「はは、はははははははははははははははは!! 遂に! 遂にそこまで至る事が出来たんだね! やはり私の見立ては間違っていないかった! 君は最高だよ、門守 仁君!」

場所も憚らず歓喜の声を上げ笑うカラミティに、ルーナは不気味なものを見る目を向ける。

一方のデイナは、そんなカラミティに近付くと彼を無視して足下に倒れているルーナを抱き上げた。

「気付くのが遅れてゴメン。大丈夫……じゃ、ないよね」

「い、いえ……さつきより、痛みは引いてきました。多分、大丈夫です」

「しばらく休んで。後は俺がやるから」

そう言ってデイナは少し離れた所にルーナを寝かせる。安全な場所に寝かされたルーナは、負担軽減の為に変身を解除した。変身を解除した亜矢の顔には未だ脂汗が浮かんでいる。

デイナは彼女の汗で貼り付いた前髪を手で軽く動かし、彼女の頭を優しく撫でた。その彼の背に、グリーンリキッドの銃撃が突き刺さる。

「何余裕かましてんだよ。状況分かってんのか？」

「じ、仁くん!?!」

突然の背後からの銃撃を受けたデイナを亜矢が心配するが、肝心のデイナはまるで堪えた様子を見せない。まるで小石でもぶつけられたかのように、肩越しに背後を振り返るとゆっくりと立ち上がる。

全くダメージを感じた様子を見せないデイナに、苛立ちを感じたのかグリーンリキッドは立て続けに引き金を引いた。放たれる銃弾が次々とデイナの装甲やアンダーズーツに突き刺さる。

その様子を何時の間にか少し距離を取っていたカラミティがジッと観察していた。

「オラオラどうした？ 余裕かましてたくせに何も出来ねえのか？」

グリーンリキッドは小馬鹿にしたように言った。

そのグリーンリキッドに向け、デイナは突然駆け寄っていった。放たれる銃弾を物ともせず、一直線に駆けていく。

「なっ!?!」

「シトシン、下がれ!」

まさかいきなり駆け出すとは思っていなかったもので、グリーンリキッドの動きが一瞬止まる。それは不味いと、ダークステインガーが銃撃しながら警告した。彼の声にハツとなり、グリーンリキッドは後退しながら共にデイナに向けて銃撃する。

しかしデイナは全く止まらない。少しもスピードを緩める事無く2人に接近すると、その拳をまずはグリーンリキッドに叩き付けた。

「ぐおあつ!？」

「くっ!？」

殴り飛ばされたグリーンリキッドは後方のコンテナに激突し大きく凹ませる。そのパワーは、明らかに以前のデイナよりも上がっている。ケツアルスピノフォームにも匹敵するのではないかと思わせた。

見た目に反する予想以上のデイナの変化に、ダークステインガーは慄きながらもベクターリーダーを銃剣モードにして斬りかかる。デイナはそれを見もせず片腕で受け止め、もう片方の手で押え付けると至近距離からの掌底を顔面に喰らわせた。

「ぐうっ!？」

顔面に掌底を喰らい堪らず仰け反って倒れるダークステインガー。

2人の幹部を圧倒するデイナの姿に、ホワイトカラーズは危機感を覚えつつ自分も銃剣モードのベクターリーダーを手に挑みかかる。その際、カラミティをチラリと見たが

彼は動く気配を見せなかった。

先の2人と違い、落ち着いた様子を見せながら迫るホワイトカラーズ。進化したダイナの力を明らかに警戒した様子のホワイトカラーズの佇まいに、ダイナは次のベクターカートリッジを取り出した。

〈DOG + WHALE Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Congrats! Birth of a new life, CETUS.
Open the door〉

今度は嘗てのドッグホエルだったそのフォームは、進化した事によってダイナ・ケートスライフへと変わった。

ケートスライフとなったダイナに、ホワイトカラーズが銃剣を振り下ろさんと近づいていく。だがダイナは、そんな彼に対し手を軽く上げるだけで対応した。

「うぐっ?! な、がっ?!」

ダイナはただ手を上げただけ……それなのに、ホワイトカラーズは何か苦しむように体を震わせるとベクターリーダーを落とすその場に蹲ってしまった。

この光景には流石にヘテロも彼を心配したのかダイナを警戒しながら声を掛ける。

「何? アデニン、どうしたの?」

「こ、これは……音だ——!」

「音?」

「以前のインパクトウェーブなんて、比べ物にもならない。まるで超音波破砕機の強化版だ。くそ、頭が……」

ただ手を翳しただけで、デイナは強烈な超音波をほぼ一点に集中させホワイトカラーズに照射したのだ。それによりホワイトカラーズは、デイナに近づく前に全身を超音波でシェイクされ内も外も掻き回されたのである。こんな物を喰らってはただでは済まない。もしデイナが彼を殺す気なら、あと数秒照射して内側から彼を破壊していた。

ホワイトカラーズが生き残れたのは、偏にデイナが不要な殺しを良しとしないからに他ならなかった。

その余裕、甘さ……それがヘテロはどうしても気に入らなかった。

「~~~~~!! 舐めるな!!」

テイルバスターを振り上げ、デイナに襲い掛かるヘテロ。だがデイナはそれに先んじて動き、拳でテイルバスターを弾くと回し蹴りをヘテロの腹に叩き込んだ。

「うぶうつ!! あッ——?!」

当然その攻撃にも超音波破砕能力は乗っている。ヘテロは高い防御力を持っているが、それは外からの攻撃に対するもの。内側へ直接響かせる攻撃に対しては流石の彼女

も無力であり、内臓をダイレクトに殴られるような衝撃に一撃で戦闘どころではない状態にまで追い込まれてしまった。

「げふっ!!? うげ、え……ぐう!!? ふぎ、けるんじや、ないわよ!!」

それでも尚ヘテロは戦う事を止めようとはしない。体は危険を訴えているのに、彼女は精神力だけで体を動かし戦闘を続行しようとしているのだ。

そんなヘテロに、デイナはゆっくり近付いていくと………何もせず彼女の隣を素通りしていった。

振り返ったヘテロが見た彼の背からは、もう勝負はついた、これ以上戦う気はないと言う気持ちがありありと見て取れた。

見捨てたかのようなデイナの行動に、ヘテロは膝から崩れ落ちながらもデイナの背に向けて手を伸ばした。

「待つて、待つてよ!! 私を置いていかないで!! こっち見なさいよ!!」

ヘテロの声を無視してデイナはカラミティへと向かって行く。彼の背を強制的に見送る事になったヘテロは、自分の視界が歪むを感じた。

「何で……何で……何で……何で……何で……私を見下して………。何でなのよ、仮面ライダー!!? 何で、私を認めないのよ!!」

その場ですすり泣くヘテロだったが、生憎とデイナには彼女に構っている余裕はな

い。ヘテロ達を圧倒したデイナだったが、カラミティ相手に何処まで対抗できるかは彼自身分からなかったのだ。彼女達を圧倒して倒したのは、余裕の表れではなく即行で戦いを終わらせカラミティとの戦いに集中したいからであった。

自らの前に辿り着いたデイナに、カラミティは満足そうに両手を叩き彼を称賛した。

「素晴らしい！ まさかあの4人を相手に完全に圧勝してしまうとは、想像以上の出来栄えだよ！」

「……これがアンタの目的だったんだね」

カラミティのあの喜びようと、これまでの彼の行動、これまでの出来事を総合的に見て、デイナはカラミティ——雄成の本当の思惑に気付いた。

彼もまた、新人類を作り出す者としていたのだ。その為にデイナを積極的に潰したりはせず、騒動を度々起こし徐々にデイナの相手を強くしていった。追い詰める事で、デイナの——仁の新人類への覚醒を促す為だ。

「でも分からない事がある。何でアンタはそこまで新人類を作り出す事に拘るんだ？」

教授の話じゃ、アンタは学会に自分の理論を認めさせたいって訳じゃないみたいだけども？」

寧ろそれなら分かりやすい方だった。学会で認められなかったから、自分の理論を認めさせる為に凶行に走る。よくある話だ。だが白上教授曰く、超万能細胞理論は一度も

学会に発表した事はないし、雄成が学者時代に学会などで馬鹿にされた経験もないと言
う。

そんな彼が、多大な犠牲の上に仁の覚醒と言う結果を求めた動機が分からなかった。

「それを知りたければ、私に勝ってみるといい」

「あつそ……んじゃ……」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

デイナは再びミノタウロスライフにゲノムチェンジすると、拳を握り締めカラミティ
と相対する。対するカラミティも、リスクブレードを伸ばし構えを取った。

暫し互いに睨み合う2人。その頭上を、一羽の鳥が飛び去った。

それを合図に、2人は同時に駆け出し相手に攻撃を繰り出した。

「はっ」

「むん！」

デイナの正拳突きに対し、カラミティはリスクブレードによる刺突を繰り出す。喰ら
えば遺伝子を破壊される一撃、装甲に喰らってもアウトなそれを拳に喰らえば、デイナ
は手を失ってしまう。

しかしデイナは、刃に触れる瞬間手を払いリスクブレードを弾いた。正拳突きの勢い
で弾かれたので、カラミティの刺突が明後日の方へと向かい無防備となる。

そこにダイナの貫手が突き出されるが、カラミティは体を回転させる事でそれを回避。更には回転しながらダイナの横に回り込むと彼の首筋に肘鉄を叩き込んだ。

「ふん！」

「ぐっ?!」

延髄に肘を叩き込まれ、ダイナの首筋が軋みを上げる。常人が喰らえば折れるどころか首が無くなるだろう一撃を耐えられたのは、偏に今のダイナがそれだけ頑丈だと言う事の証左でもあった。

そして頑丈なのは体だけではない。精神もその痛みに耐え、即座に体勢を立て直すと振り返り様にカラミティの顎を狙い拳を突き上げる。

「甘いよ」

だがその攻撃をカラミティは読んでいた。顎を狙ってくるダイナの拳を、カラミティは両手で受け止めた。

「でもないよ」

しかし次の瞬間、カラミティの顎をダイナの拳がかち上げた。予想外の一撃に、カラミティも驚きを隠せず数歩後ろに下がる。

「ぐうっ?! な、何?」

ダイナは最初のアッパーカットが受け止められることを読んでいた。なので彼は、最

初の拳に隠すようにもう片方の拳を時間差で放っていたのだ。

絶妙な距離感で放つ二つの拳。空手で言う所の夫婦手という技だ。通常の構えよりも近い両手で放たれる連続攻撃は、目が良い程最初の攻撃に目を奪われ続けて放たれる攻撃への対処が遅れてしまう。

だが今のやり取り、傍から見ていたら何が行われていたかを理解する事は難しかった。それほどにあつと言う間の出来事だったのだ。常軌を逸した2人の動きは、周囲の者に視認できるものではなかった。

「ふふ、やるじゃないか。このカラミティ・ハザードでもデイナの全ての能力を上回るスベックの筈なんだけどね」

「生命は計算で測れるほど、単純じゃないって分かってるでしょ？」

「尤もな意見だ。では計算で測れない部分を、これから実戦で見せてもらうぞ！」

カラミティが縦横無尽にリスクブレードを振るう。一撃でも喰らえばただでは済まないそれを、高速で放たれデイナは反撃の機会を失った。彼は放たれる斬撃を、下がりながら体を反らし時には拳や手刀を当てて反らす事で何とか直撃を防いでいる。

「そろそろどうしたのかね？ 逃げてばかりじゃ私には勝てないよ！」

そんな事言われるまでも無く分かっている。だからこそ、デイナは先程からずつと反撃していた。

そして――

「フッ」

小さく気合を入れると同時に、両手の手刀をリスクブレードに叩き付けた。瞬間、カラミティのリスクブレードが2本とも砕け散った。

「何ッ!?!」

これは予想外だったのか、カラミティが思わず動きを止める。その顔面にダイナの拳が叩き込まれた。

「ハッ」

「ぐおっ!?!」

殴り飛ばされたカラミティ。その光景をホワイトカラーズは信じられないという目で見ていた。

「プロフェッサー!?! い、一体何が?」

ダイナがやった事は、何の事はない。リスクブレードの同じ場所を攻撃し続けるという、武器を破壊する為の攻撃をしていただけである。一見すると直撃を避ける為の行動が、実は武器を破壊する為の行動だったのである。

それに気付いたカラミティは、殴られた顔を押さえながら堪え切れずに笑った。

「は、はははははは! なるほどなるほど、これは想像以上だ。悔しいが私の負けだな」

「それじゃあさっきの質問の答えを教えてください。」

「それはまた別の問題だよ。理論では負けたが、この勝負自体はまだ終わってはいない。勝負をつけるぞー！」

〈ATP Full blast〉

「いいよ、乗ってあげる」

〈ATP Burst〉

互いにレセプタースロットルを引き、必殺技を発動するデйнаとカラミティ。同時に放たれる飛び蹴りのノックアウトクラッシュとデッドエンドクラッシュが空中でぶつかり合う。

「く、うう——!？」

「ぬうううっ!？」

激しく火花を散らせながら拮抗する2人の必殺技は、決着が着く事なく行き場を失ったエネルギーが爆発する事で互いに吹き飛ばされるといふ結末を迎えた。

「ぐはっ!？」

「ぐうう!？」

互いに大きく吹き飛ばされ、デйнаは地面に、カラミティはコンテナに叩き付けられる。どちらも同等程度のダメージを受けたように見え、勝負は引き分けに見えた。

だが唐突に、カラミティドライバーが火花を散らし始めた。正確には、カラミティドライバーに装填されたサンプルベクターカートリッジからだ。

「！」

カラミティがサンプルベクターカートリッジを引き抜くと、ベクターカートリッジ内の超万能細胞が急速に変色していくのが見て取れた。その様子に、カラミティは溜め息を吐く。

「はあ……こいつも寿命か。長く持った方だが、限界のようだな」

ベクターカートリッジ内の超万能細胞が劣化し濁った無色になると同時に、カラミティの変身が強制解除されて元の姿に戻る。

どうやら中身やシステムはともかく、変身に使用しているアイテムが限界を迎えてしまったようだ。

「やはり人工物より天然ものに限るね。自然の物を再現しようとするのは難しいものだ」

「それには同意するけど……この場合俺の勝ちって事でいいの？」

既に勝った気であるデイナ。だが雄成との戦いに全力を向けていた彼は気付かなかった。

離れた所から彼を狙う傘木保安警察の隊員が居る事に――

「そうだね……勝負は君に勝ちを譲つてあげよう。だが試合には私が勝たせてもらうがね」

雄成が意味ありげにそう呟いた瞬間、デイナは首筋に鋭い痛みを感じた。何事かと思う間もなく、首筋から何かが流し込まれる感覚にデイナは全身に痺れを感じてその場に倒れる。

「ぐっ!? あ、なあっ!?」

「仁くんッ!」

雄成の言葉が終わると同時に、デイナの首筋に撃ち込まれたのは二つのシリンドラーが付いた機械だった。片方は空で、片方には緑の液体が入っている。その機械はデイナの首筋に命中した瞬間針を首筋に突き刺し、緑の薬液を注入し代わりに彼の首筋から血液を抜き取った。

倒れたデイナは変身が解除され、仁の姿で体を震わせている。雄成はそんな仁に近づき、彼の首筋に撃ち込まれた装置を取り外した。

「うむ、これだけあれば十分だろう」

「あ、アンタ……最初から、これが目的で……」

「そう言う事さ。ありがとう、門守 仁君。君の血液サンプル、有効活用させてもらうよ」

手の中にあるシリンドラーに入った仁の血液を、雄成は軽く振りながら離れていく。代わりに体力が回復した亜矢が仁に近付き、倒れた彼を抱き上げる。

「仁くん、仁くん!?! しつかりしてください!……この卑怯者!?! 不意打ちで毒使うなんて!!」

「毒ではないよ、ただの痺れ薬だ。死にはしないし、そもそも今の彼には毒など通用しないだろう」

真矢の抗議に、雄成は彼女の事を見向きもせずには答える。

その彼の後ろに、変身を解除したアデニン、グアニン、シトシンが続く。

「それでは私はこれで失礼するよ」

雄成はそう言つて、近くに止めてあつた黒塗りの車に乗った。運転席にはアデニンが座り、助手席にシトシン、雄成の隣にグアニンが乗ると車は走り出す。

ただ一人残された希美は、それを見送り続いて倒れた仁の事を見た。暫し仁の事を睨むように見ていたが、俯くと車の後を追う様に彼女も倉庫街を後にする。

残されたのは倒れたS・B・C・Tの隊員達と、動けない仁を抱きしめる亜矢だけであつた。

その後、応援にやってきた警察によりS・B・C・Tの隊員達は全員病院へと送られていった。今回の戦闘で実働部隊は壊滅的打撃を受けた。再び作戦行動に出れるようになるには時間が掛かるだろう。

一方仁達は彼らと共に一応病院へと送られたが、2人は然して問題なしと診断されその日の内に退院となった。雄成の策により痺れ薬を打たれた仁だったが、あれから数分後には回復していたのだ。

病院を出て直ぐ白上教授に連絡し、その日はそのまま仁の家へと向かった。病院を出た時には既に日は沈んでおり、大学は閉まっていた。

何よりも、昼間の戦闘で2人は疲れていた。

仁の部屋へと向かう道中、2人は無言だった。

仁は自分の血液……遺伝子を雄成がどう悪用するのか不安で仕方なかった。

亜矢は、普通の人間ではなくなくなってしまった仁にどう接していいか分からなかった。

互いに無言のまま、2人は仁の部屋へと帰った。暗い部屋の電気をつけ、部屋に入ると仁は真っ直ぐに台所に向かい湯を沸かしてコーヒーを淹れた。このまま何も会話が

無いのは彼だつて辛いが、何も無く会話を始められる自信が今は無かつたのだ。

湯が沸き、コーヒーを2人分淹れると仁はマグカップを二つ持ち、片方を先に椅子に座っている亜矢に渡した。

「亜矢さん、はい」

「ありがとうございます」

「砂糖とミルクは要る？」

「お願いできる？」

「ん」

亜矢はともかく、甘党の真矢は甘味を欲した。仁は台所からコーヒー用のミルクとスティックシュガー4本を持ってきた。

「ありがと、仁君。……ちよつと仁くん、砂糖多すぎです」

「ん、そう？ 真矢さんだったらこれ位必要だと思つて。寧ろ少ないくらいかと思つただけぞ」

「そうよ亜矢。これでも抑えてる方なのよ？……それでもこれは多いつて。精々2本で十分でしょ」

亜矢に何と言われようが、真矢はスティックシュガーを4本入れようとする。それを亜矢が妨害し、自分で自分の動きを制止するという一人漫才が仁の前で繰り広げられ

た。

その光景が何だか可笑しくて、仁は思わず笑ってしまった。

「ぷふ、ははっ……」

「あ、仁君笑った。……やつと肩の力を抜いてくれましたね」

「え？ あ、うん……」

「良かった。何だかんだ言って、ちよつと心配だったんです。何と言うか、仁君がどこか遠くへ行っちゃったような気がして」

仁がただの人間ではなくなつた。その事で仁を避けようなどと言う気は亜矢と真矢には毛頭なかつたが、何処がどう変わったのかイマイチ分からず距離感が掴めなかつたのだ。外見には何の変化も無いので、今まで普通に出来ていたやり取りが出来なくなつてしまうのではという不安がつき纏っていた。

それがいま解消され、亜矢は心の底から安堵していた。

「ん、大丈夫。おれは、何処にも行かないから」

だがそれはそれとして……いやならばこそか？ 仁にも亜矢に対して思う事はあつた。

「だからこれからは、亜矢さんも離れていかないで欲しいな。次からは権藤さんからの連絡を俺にも知らせてね」

流石に仁にも、今回の一件で宗吾からの連絡が届かないように細工されている事に気付いたらしい。今後は再び宗吾からの連絡を自分にも届くようにしてくれと釘を刺した。

「うっ……あ、はい、ゴメンなさい。……最近仁君の調子がおかしかったから、少し休ませた方が良くかと思つて」

「その気持ちは嬉しいけどね。俺だつて亜矢さんが心配なんだから」

「はい」

皮肉な事だが、新人類として覚醒した事で最近の不安の種であつた仁の不調は解消された。なので騒動が起こつた事を仁に隠して休ませる理由がない。次からは仁も再び亜矢と共に現場に駆け付ける事になる。

最もS・B・C・T・は壊滅的打撃を受けたので、暫くの間宗吾からの連絡は無いだろうが。

と、そこで突然2人の腹から同時に空腹を知らせる音が鳴つた。2人は互いに顔を見合わせると、同時に笑つた。

「そろそろお腹空いたね」

「何か作りますか」

「ん、いいや。亜矢さんも今日は疲れたでしょ？ ちょっとコンビニ行つて適当に

買って来るよ」

「私も行きますよ」

「いいからいいから。直ぐに買ってくるから、亜矢さんは待つてよ」

仁はそう言つて部屋を出た。亜矢を氣遣つての事だが、それは理由の半分。もう半分は、仁は仁で一人で考え事をしたかつたからだ。

口ではああ言つたし、進化した体を受け入れはした。だがやはり不安がないと言えは嘘になる。ただの人間という枠から外れてしまった事に対してではない。種族的に亜矢と距離が空いてしまった事への不安だ。

これから先、自分は亜矢と同じ時間を歩んでいけるのか？

いやそれ以前の問題として、自分の存在が亜矢にとって負担にならないか？

こんな体になつてしまった自分を、何も知らない者が知つてしまえば騒ぎになるだろう。最悪、自分の所為で亜矢に迷惑が掛かるかもしれない。

そう思うと仁はどうしても辛かつた。

仁が内心のモヤモヤを抱えながら部屋を出て行くのを亜矢は黙つて見送つた。

ドアが完全に閉まるまではにこやかに仁を見送つていた亜矢だが、ドアが閉まると同時に真剣な顔になった。

「……仁くん、悩んでたね」

「みたいね。分からなくもないけど」

「どうすればいいと思う？」

【聞く必要がある？】

「……………それもそっか」

双子であり、2人で1人。彼女達が考える事の、根っこは同じであった。

亜矢は徐にキャットベクターカートリッジを取り出した。亜矢はそれを暫しじっと見つめ、小さく深呼吸する。

そして――

「――行くよ、真矢」

【うん…………】

〈CAT〉

「ただいま」

仁が戻ってきたのはそれから数分後であった。とりあえず適当に弁当とサラダ、飲み

物を買って自宅のドアを開ける。

部屋に入った仁の目に最初に飛び込んできたのは、部屋の中に佇む一体のファッジであった。何もせずただ立ち尽くしているだけのファッジに、仁は一瞬身構える。

「なッ?!……………ん?」

身構える仁だったが、直ぐに違和感に気付いた。敵意を全く感じない。目の前に居るファッジは、仁に襲い掛かる事も無く彼の事をジッと見ていた。

そして気付いた。あのファッジは猫の様な見た目をしている。

「猫……………ファッジ……………まさか——?!」

仁がそのファッジの正体に気付くと同時に、ファッジは変異を解いた。

果たしてそこには、仁の予想通り亜矢が優しい笑みを浮かべて佇んでいた。

彼女の姿を見た瞬間、仁は手に持っていたコンビニのビニール袋を落として彼女に駆け寄った。

「亜矢さん?!」

仁は亜矢に駆け寄り、彼女の肩を掴んだ。仮面ライダーに変身した者がベクターカートリッジを直挿してファッジに変異する。その先に待っているのは、仁と同じ新人類への覚醒だ。きっと亜矢も遠からず仁と同じく体に変化が起きるだろう。

だからこそ仁は、冷静さを失った。

「なんて事してるんだ!? 分かっている筈だろう、ダイナドライバーを使った人が直挿しなんてしたらどうなるかを!? 亜矢さん、人間じゃなくなるんだよ!」

狼狽える仁が強く肩を掴んだので、亜矢の肩に痛みが走る。だが亜矢は痛みに顔を顰めるよりも先に笑いのの方が込み上げてしまった。

「うふふふ……」

「笑い事じゃないよ! 何でこんな——」

亜矢はそれ以上の仁に言葉を紡がせなかった。仁に抱き着く様にして顔を近付け、キスで彼の口を塞いだ。

「ん!?!」

「ん……ちゅ」

突然のキスに仁は意表を突かれ、先程の勢いを失ってしまふ。

仁が多少なりとも落ち着いたのを見て、亜矢は唇を離して仁の目を見ながら口を開いた。

「だって……このままでと仁くん、一人ぼっちじゃないですか」

仁は世界でただ一人、新人類に覚醒した人間である。生きていく事は出来るだろうが、このままでは彼は孤独な人生を歩んでしまうかもしれない。

そしてこのままだと、仁と同じ時間を歩めないかもしれない。

亜矢と真矢はそれが嫌だった。このまま仁を一人ぼっちにして仁と離れ離れになる位なら、ただの人間である事に未練はない。それが亜矢と真矢が出した結論だ。

「私達、前に言いましたよね？　仁くんから絶対離れないって」

「それは、そうだけど………亜矢さんと真矢さんは、本当にそれでいいの？」

「良いも悪いも無いわ。そうしたいからそうしたのよ。私も亜矢も、仁君から離れたくないし、仁君に寂しい思いなんて絶対にさせないわ」

亜矢と真矢の気持ちに、仁は感情が溢れて突き動かされるままに彼女を抱きしめた。

「ごめん……ありがとう——!!」

亜矢に気を遣わせて彼女にも新人類への覚醒の扉を開かせてしまった事は正直心苦しい。だがそれ以上に嬉しかった。

自分は世界に一人ぼっちなどではない。

自分には共に歩んでくれる最愛の人がいる。

仁にはそれが嬉しくて堪らなかった。嬉しさのあまり、仁の目から涙が溢れる。

「亜矢さん——！　真矢さん——！」

「大丈夫ですよ、仁くん。私達が居ます」

「私達は仁君の傍から離れないわ」

「だから安心してください」

「私達が仁君をずっと支えるから」

仁と亜矢は暫し抱きしめ合った。自分達の存在を確かめ合い、繋ぎ止めるように。

どれ程そうしていたか、どちらからともなく少しだけ体を離して互いに見つめ合った。互いに熱の籠った目で相手を見つめている。

気付けば2人の頭から空腹の事は綺麗さっぱり無くなっていた。今は何よりも欲しいものがある。

仁と亜矢は互いに惹かれ合う様に顔を近付けた。

そして今度は相手の口を塞ぐだけの軽いキスではなく、熱く相手を求めるキスをしたのだった。

第51話：風は寒く、心は温かく

あれからは少し流れて、今は12月。

あの後亜矢は案の定新人類へと覚醒を果たした。前兆となる味覚などの感覚の変化、新陳代謝の異常を経て、突如訪れた全身の細胞が作り替わっていく感覚に亜矢も苦しんだ。だが彼女の場合はそうなる事が分かっていたし、何より仁が傍で支えてくれたので覚悟していたほどの苦痛ではなかったのは幸いか。

仁はと言うと、覚醒した事で変化した体のデータ収集を中心に行っていた。通常の間との差異、今の体で出来る事、特性などだ。

その結果分かった事は、この体は何よりも適応力に優れていると言う事だった。外部からの刺激に即座に適応する形で体を作り替え、様々な環境に順応できる。今ならエベレスト登頂は勿論、素潜りのギネス更新も夢ではないだろう。

その一方で、仁は不安に思っている事があった。ここ最近、傘木社がやたらと大人しいのだ。あの倉庫街での戦いの後、傘木社は何の騒ぎも起こしていない。S. B. C. T. が壊滅的打撃を受けた今が絶好のチャンスだというのである。

この事態を、仁は自分から採取した血液サンプルの解析やそこから新たなベクター

カートリッジの精製などに時間を費やしていると考えていた。雄成は仁がこうなる事を読み、そして望んでいる様子だった。念願の覚醒した仁の血液サンプルが手に入った事で、その調査や検証にじっくり時間を掛けているのだろう。同類と自覚しているからこそ、仁にはそれが容易に想像できた。

恐らく次に傘木社が動き出した時は、これまでにない苦しい戦いが予想される。それを思うと仁は色々と不安にならずにはいられなかった。

「仁くん？」

1人不安を抱える仁の隣を歩く亜矢が、彼の顔を覗き込みながら声を掛けてきた。仁自身は気付いていなかったが、表情が険しくなり眉間に僅かだが皺が寄っていたのだ。その事に気付いた亜矢が、何かあったのかと思いい心配してきた。

亜矢に声を掛けられ、自分の顔が険しくなっている事に気付いた仁は小さく溜め息を吐くと肩から力を抜いた。

「ん、何でもない。ただ最近殊更に寒くなって来たなって」

「そりやもう12月ですから」

12月ともなれば季節は冬真っ盛り。いい加減残暑も何処かへ行き、街は厚着をして着ぶくれた人で溢れていた。

かく言う仁と亜矢もしっかり防寒対策をしている。仁は襟の高いコートで口元近く

まで襟で隠れているし、亜矢はマフラーに手袋を身に着けている。

そして何よりも、2人はびったりと寄り添って歩いていった。夏場も距離が近い2人だったが、寒い季節になるとその距離は完全にゼロになっていた。

唐突に吹いてきた寒風に、亜矢が体を震わせた。上着をしつかり着込んでいても、風が吹けば剥き出しの顔や僅かな隙間から入ってくる風で寒くなる。震える亜矢の肩を、仁が温めるように優しく抱く。

「う〜！ 今年は夏が暑かった反動か、冬は例年以上に冷えますね？」

「ん〜、でも今は前に比べて寒さはあんまり気にならないかな」

前述した通り、新人類に覚醒した仁と亜矢は環境への適応力が格段に上がった。なので今寒くても少し経てば気にならなくなる。寧ろあまり厚着し過ぎると今度は暑くなる位だ。

その事を仁は少し寂しく、そして残念に思った。

「仁くん、寒いのと暑いのだとどっちが苦手ですか？」

仁に予想通り、直ぐに寒さに慣れた亜矢が何気なく問い掛けてきた。因みに亜矢は、夏と冬どちらが苦手かと聞かれたら夏が苦手だった。露出の低い服装を好む亜矢にとって、服の中に熱が籠りやすい夏は厳しい季節と言わざるを得なかった。

尚真矢は逆に露出の高い服装を好むので、それが封じられる冬の方が好きではない。

「ん〜？ 前から別にどっちも好きとか苦手とかは無かったけど………苦手じゃなくて好きを聞かれたら、今は冬の方が好きかな？」

「それは、どうして？」

「だって——」

徐に仁は亜矢の事を抱きしめる。勿論歩きながらであり、歩行の阻害にならない程度だが先程よりも亜矢と体を密着させた。夏であればともかく、冷える冬場であればその様子に注目する者はあまり居ない。

勿論2人の様子を羨む者には、それも十分目に付く姿であろうが。

「こうして大つびらに亜矢さんとかくつつけるから」

歩きながら器用に抱きしめてくる仁に、亜矢は頬を赤くした。仁にこうして抱き着かれる事には慣れたものだが、こうして大つびらに他の人がいる前でやられると嬉しさと同時に恥ずかしさを感じずにはいられない。

「あの、仁くん……そう言うのは、お家で……」

「ん」

亜矢が恥ずかしそうに言うのと、仁はあっさりと解放してくれた。ここが街中だからこの程度で済んでいるが、これが家の中だったら恐らく仁は彼女を解放しなかつただろう。

ある意味で、仁は亜矢に依存している。それは世界でたった2人だけの新人類と言う同族意識によるところが大きいのだろう。

亜矢の覚醒後、最早2人は完全に同棲状態となっていた。亜矢が帰るのは仁の家であり、以前の亜矢の部屋からは色々な物が仁の部屋へと移動している。近々あの部屋も完全に引き払おうと亜矢は考えていた。

今日の外出も、改めて足りない日用品の買い出しが目的だった。

先程よりはソフトに、それでも近い距離を保ちながら2人は目的のホームセンターへとやってきた。

色々と見て回り、食器や調理器具などの他に様々な日用品を見て回り、気に入ったものがあれば手に取り購入を検討する。

そんな時、亜矢の目に美容品コーナーが映った。正確には、美容品が置かれている棚の一面にある商品。

それは全て傘木社の製品であった。裏ではベクターカートリッジとファッジの製造を行っている傘木社だが、表向きは世界的製薬会社。なので一般には美容品の他に様々な医薬品を製造・販売している。

そう言えば、仁の使っている歯磨き粉やシャンプー、ボディークリームも傘木社の製品だった事を思い出す。

「……仁君、よく傘木社の製品使おうなんて思えるわよね」

「ん？」

「だって傘木社の製品よ？ 何が仕込んであるか分かったものじゃないじゃない」

実を言うと亜矢も以前は評判と確かな効果で傘木社の製品を色々と愛用していたのだが、傘木社の裏の顔を知ってからはそれらは全て処分して別の企業の製品に乗り換えている。知らず知らずの内に人体実験の実験台にされては堪らない。

だがそんな亜矢と真矢の不安に対する、仁の答えは否であった。

「俺も気になって一応調べはしたけど、結果は特に異常は無かったよ。それにイメージだけで良いものを使わないのは損でしょ？」

「それは……そうかもしれないけど……」

言いたい事は分かる。分かるのだが、生理的に納得できなかつた。例えばもし、この保湿クリームに人間の細胞を変異させる何か仕込まれているとしたら——

「……………ま、気持ちには分からなくてもないけどね」

「あ……」

仁は亜矢が手から傘木社製の保湿クリームを取り上げ、棚に戻すとその隣にある別の会社の製品を取り買い物籠に入れる。

気を遣わせてしまったか……亜矢が仁に対しちよつぱり申し訳なく思っていると、仁

は彼女の頭を軽く撫でた。

「大丈夫だよ……大丈夫。別に亜矢さんは間違つてないから」

「……はい」

仁と亜矢が束の間の平和な日常を謳歌している頃、ここ傘木社でも穏やかな面持ちで過ごす者が居た。

幾度となく仁と亜矢の前に立ち塞がってきた希美である。

彼女はこの日も、その食欲で社員食堂の食料を全て食べつくしていた。今頃は新しい食材の仕入れに食堂に勤める者達が苦勞している事だろう。

以前は、他の社員が居ないタイミングを見計らい一人で寂しく皿を重ねていた希美だったが、ここ最近は違う。

今は彼女の食事には“2人”ほど同行者がいる。1人はリリイ、そしてもう1人は彼女と共にアメリカ支社から送られてきた被検体であり、リキッドファッジでもある少年

のレックスであった。

事の発端は、先日の倉庫街での戦いの後だ。あの戦いで覚醒した仁の変身する進化したデイナに一蹴され意気消沈した希美の前に、彼女に助けられた事に恩義を感じたりリイがレックスと共に彼女を心配して近付いて来た。

心から自分の事を心配して、自分の事を見てくれるリイ。そしてそんな彼女について来て、自分が傍に居られなかった時に彼女を助けてくれた事に対する感謝をしにきたレックス。

2人の少年少女の無垢な目を見た瞬間、希美の中で何かが動いた。気付けば2人をそのまま引つ張って、何かにつけて自分に同行させたのだ。

最初こそ、リイはともかくレックスは警戒していた。彼とリイは共に幼いころから実験動物としての苦楽を共にしてきた仲だ。辛い時は支え合い、他の実験動物として連れ去られたり売られた子供達が次々と脱落していく中で生き残ってきた。

故に、レックスは時に研究員がリイに向ける邪な感情と真つ向から対峙したりもした。彼女を守るのは自分の役目だと言わんばかりに。

しかし希美は2人に特に何をしてもなく、ただ2人を傍に置いておくだけであった。と言うか、時には自分から近付き特に何もせず過ぎす時もある。

それを繰り返されている内に、レックスの方も段々と希美が自分達を害する気が全く

ない事を察した。そして彼女が味方だと分かると、レックスの方も積極的にリリイを彼女の傍へ向かわせるようになった。何故ならその方がずっと安全だからだ。

今、希美は隣に座るリリイの髪を弄っている。あまり手入れのされていないブラウンのセミロングを、希美は櫛で梳いたり三つ編みにして遊んでいた。

レックスはそんな2人を少し間を開けた所から見つつ、時折周囲に目を向ける。そうすると社内を時々研究員が通りかかるのだが、彼らは希美を見るとそそくさとその場から退散した。

以前であれば、レックスとリリイが2人だけで社内を出歩いていた場合2人には冷たい視線が向けられるのが常であった。時にはリリイに悪意を持って近付こうとする輩も居る。レックスは必死にリリイを守ろうとするが、彼らの中にある躰け様の制御装置の所為でそれもままならない。

だが希美が近くに居る限り、2人が悪意に晒される心配はなかった。幹部から落ちた身ではあるが、過去の度重なる大暴れにより彼女にちよつかいを掛けようという愚か者は居なくなっていた。彼女にも制御装置は埋め込まれているが、それを自由に使えるのは他の幹部か社長である雄成のみ。一般の研究員が自由にできる筈もなく、彼らは希美に対しては許可がある時しか大きく出る事は出来ないのだ。

まるで虎の威を借りる狐かジンベイザメなどに張り付くコバンザメの様で時々心苦

しくはなるが、多少プライドを捨てただけでリリーの身の安全が確保できるのであれば安いものであった。

「……はい、完成つと」

そんな事を考えていると、リリーの髪型のセットが終わった希美の声がレックスの耳に入った。声に反応してそちらを見ると、そこには左耳の前の髪を三つ編みにして垂らしているリリーの姿がある。普段髪型なんて弄らない、弄る余裕もないリリーの少し飾った姿に、レックスはほうつと見惚れていた。

「に、似合う……かな？ レックス？」

「あ、う、うん。よく似合ってると思う」

「ホント？ 良かった。ノゾミ、ありがとう」

久しく……と言うか、初めてのお洒落をさせてくれた希美に、リリーは花が咲くような笑みを浮かべて感謝した。その姿には、少し前の様な弱々しさが感じられない。年上で自分を守ってくれる存在が居る事で、精神的に余裕が出来たのだろう。

そんなリリーからの感謝に対し、希美は彼女の頭を軽くポンと撫でるだけで応えた。淡白な反応を返す希美に、レックスは思い切って今まで抱いてきた疑問をぶつける。

「何でノゾミは、俺達を気に掛けてくれるんだ？」

「え？」

「だってそうだろう？ 俺達、優しくされてもノゾミに何も返せないんだぞ？ ノゾミに何のメリットもない。なのに何で？」

そんな事聞かれても、希美だって困る。彼女自身、何故ここまでこの2人を気に掛けているのか分かっていないのだから。

「……何でかしらね」

最初はそれこそ、単純に同族意識からの手助けだった。生にしがみ付き、必死に生きようとするリリイの姿に自分の姿を重ね、放っておけなくなつたから助けたに過ぎない。

だがその後、打ちひしがれた彼女の事を本気で心配してくれるリリイと、リリイを助けた事に心から感謝してくれるレックスの存在に心のつつかえが取れたような気がしたのだ。

腹がはちきれんのではと言うほど物を食べても、心の空虚は埋まらなかつた……

胸の奥に染みついていてるデイナとの戦いでも、一時の潤いだけで心は満たされなかつた……

誰もが自分を蔑み、捨て置いて去っていった……

あのデイナですらも、勝負にならないと見るや自分から興味を失つた……

誰からも見向きもされず、何をしても満たされない。そんな心の隙間を、リリイと

レックスの無垢な心が埋めてくれた。

要はそれだけの事なのだ。たったそれだけだが、それが希美にとっては2人を気に掛ける十分な理由になった。

「ほんと……何でかしらね」

その事を明かす事無く、希美は再びリリーの頭を撫でた。

親の顔も覚えていないリリーだったが、姉が居ればこんな感じだったのかとくすぐったそうに笑った。

同時刻、傘木社本ビルの中にある特別区画。そこにあるベクターカートリッジの研究・開発ブースでは、仁の血液サンプルから新たなベクターカートリッジの開発が行われていた。

当初、血液サンプルさえあれば新人類の遺伝子を用いたベクターカートリッジが簡単に作れると研究員達は考えていた。だがそれは甘い考えであった。

それと言うのも、新人類となった仁の細胞は超万能細胞のそれなのだ。そしてベクターカートリッジは、精製の際に真つ新たな超万能細胞に他の生物の遺伝子情報をインプットする事で完成する。

つまり、既に超万能細胞である仁の遺伝子は既存のやり方ではベクターカートリッジに出来なかつたのだ。普通にやろうとしても仁の超万能細胞とベクターカートリッジに元々入っていた超万能細胞が反発し合つて劣化してしまう。ならばと仁の遺伝子を持つ超万能細胞をそのままベクターカートリッジに封入しても、今度は仁の遺伝子が他の遺伝子に歩み寄つてしまい何の変化も起こらないのだ。

これには研究員達も頭を悩ませた。まさか念願の新人類の遺伝子を持つ超万能細胞がここまで扱い辛い存在だとは思わなかつたのだ。

そのまま研究がなかなか進まずヤキモキしていた傘木社の主任研究員達。一向に進展しない研究に、終止符を打つたのは並行して個人的に仁の遺伝子を調べていた雄成であつた。

「何も難しく考える必要なんて無かつたんだ。彼の遺伝子情報は飽く迄もモデルにして、新たに細胞を作つてしまえばいいだけの話だつたんだよ」

何が関係しているのかは分からないが、仁の細胞を直接使用うと上手く行かないのであれば使わなければいだけの話だつた。傘木社には既に以前まで雄成が使つていたサ

ンプルーベクターカートリッジを始めとした、1から新たな遺伝子情報を持つ超万能細胞を作り出す技術がある。その技術を用いて、仁の遺伝子情報を模倣した超万能細胞を作れば……………

その発想を基に、雄成を中心として新たなベクターカートリッジ——新人類の遺伝子を持つ超万能細胞を使用したもの——が作り出される事となった。

そうして作り出された新たなベクターカートリッジ。名称はまだまだ試作品と言う事で『サンプル2』と名付けられた。色々と未知の部分が多いベクターカートリッジ故、どのような力を発揮するかは想像もつかない。

真つ先に雄成がカラミティドライバーで使用しようとしたが、それは他の研究員により止められた。サンプル1ベクターカートリッジが以前の戦闘で急速に劣化した事から、折角作り出したサンプル2ベクターカートリッジも同じ末路を辿るのではないかと危惧したのだ。

止められた雄成は最初面白くなさそうな顔をした。だがそれはそれとして、研究員達の言い分も分からなくはないのか不承不承頷き、先ずは別の人物を被検体にしてその能力を調べてみる事にした。

その白羽の矢が立ったのは、幹部の1人であるシトシンだった。何故彼が選ばれたかと言えば、瞬間的に雄成の頭に浮かんだのが彼だったからと言うだけの話だ。その瞬間

頭に浮かんだのが希美やグアニンであれば、そちらが実験台に選ばれていただろう。

「さて、それでは頼むよシトシン」

「了解です」

突然呼ばれあれよあれよという間に新型ベクターカートリッジの実験台とされた。しかしシトシンはその事に不満を抱かなかつた。

先日の戦闘でデイナにあっさりと敗北した事を彼は根に持っていた。そして敗北の理由が仁の覚醒にあると分かると、彼は雄成の研究に積極的に手を貸した。あのまま敗北したままで終わるのが我慢ならなかつたからである。

シトシンは渡されたサンプル2ベクターカートリッジを起動状態にした。

〈SAMPLE2〉

起動したベクターカートリッジを、剥き出しの腕に挿そうとするシトシン。だが一瞬彼は躊躇した。

それと言うのも、サンプル1ベクターカートリッジの時も同様に適当な人間を被検体にしたのだがその時の被検体は肉体の急激な変異に耐え切れずに死亡しているのだ。それも異常なほどの速度で分裂する細胞に身体が耐え切れずに破裂するという悲惨な末路を辿って。

今回のサンプル2でも似たような事が起こらないという保証はないので、彼でも流石

に躊躇はした。それでも、プライドが勝つたのかシトシンは剥き出しの腕にサンプル2
ベクターカートリッジを挿し込んだ。

肌押し当てられたベクターカートリッジが見る見るうちにシトシンの体の中に潜
り込んでいく。本来であればその瞬間に肉体に変化が生じる筈なのだが、完全に体
カートリッジが入っても尚シトシンの体に変化は訪れなかった。

もしや失敗か？ 不安に思う研究員達が見ている前で、突然シトシンが苦しみ始め
た。

「ぐう、あつ!? な、何だ？ 体、が——!?」

体を痙攣させその場に倒れるシトシン。それは仁が覚醒した時とそっくりであった。
シトシンのバイタルデータを表示するモニターには、彼の体に急速にファッジへの変異
とは異なる異変が起こっている事が表示されていた。

「あ、が、ああああああああつ!?」

一際大きな叫びを上げた直後、今度はスイッチが切れたかのようにシトシンは大人し
くなつた。研究員達がモニターに注目すると、先程まで激しく変動していた数値が今は
嘘のように安定していた。

「く、ひ……ひひひひひ……」

不意にシトシンの口から笑い声上がる。研究員達が注目する前で、シトシンは立ち

上がると徐にベクターリーダーを取り出し、自分の腹に向けて引き金を引いた。ベクターカートリッジを装填せずに引き金を引いたので、銃口から出るのは当然ただの銃弾だ。銃弾がシトシンの腹を貫き、貫通した銃弾と共に背中から血が噴き出す。

自分で自分の腹を銃で撃つという、一見するとただの自殺にしか見えない行動。だがシトシンの口からは狂ったような笑い声が上がった。

「ひやはははははははっ!! すげえ、これが新人類か！ 最高の気分だぜ!!」

シトシンは自分の体を何発も撃つが、銃弾により抉られた箇所は直ぐに再生した。

「シトシン、ベクターカートリッジを抜いてみてくれ。君の体にどれだけ変化が起きているかのデータがとりたい」

「ちつと惜しい気もしますが……了解です」

変異を解く要領でシトシンはベクターカートリッジを排出した。すると彼のバイタルデータにも変化が起きる。各種データは、ベクターカートリッジを装填する前と殆ど同じ値に戻っていた。

「……どうやらあのベクターカートリッジ、使用すると疑似的な新人類になれるようですね」

得られたデータを統合して、主任研究員が雄成に結論を述べる。得られたデータと結論に、雄成は満足そうだ。

「そうかそうか……あれを直挿しした状態で、変身などは出来るのかな？」

「可能不可能で言えば、可能でしょう。あれは変異と言うより能力の向上と言った方が正確に思えます。明らかに今までのベクターカートリッジとは異なりますね。とても興味深いです」

主任研究員が目を光らせ、シトシンの手の中にあるベクターカートリッジを見る。あれを量産すれば、簡単に超人集団が作れるだろう。その力があれば、傘木社が世界の覇権を手に入れる事も不可能ではない。

野心に燃える研究員を嫌に冷めた目で見つめていた。

「——まあ、あの変化はシトシンの様に改造を施されているから起こったとも考えられるがね。ともあれ、実験は成功か」

雄成は戻ってきたシトシンからサンプル2ベクターカートリッジを受け取った。ただ先程の変異の感覚が残っているのか、シトシンは陶酔したような顔をしていた。

「プロフェッサー、今度はそれを使ってデイナと再戦させてください。次は絶対に奴を倒して見せます！」

「うむ。どうせだから君用に新しくドライバーを拵えようか。折角肉体が変化するのだ。その状態で何処まで出来るのか見てみようじゃないか」

「そいつは良い！ あの女に頼る必要もない位の力で、俺がデイナを倒してやる！」

更に強くなれると知り、シトシンは歓喜する。

だが彼は気付いていなかった。雄成の彼を見る目が、これから解剖実験に使われる力エルを見るような目をしていた事に……………。

第5 2話：可能性を秘めた遺伝子

あくる日、仁と亜矢がラボに顔を出すと峰が嬉々とした顔で2人を引つ張った。

「待ってましたよ2人共！ ささ、こつちに」

「先輩？ 何ですか急に？」

「細かい事は言いつこなしですよ。ほら、早く早く」

訳が分からぬままにラボの奥へ引つ張られていく仁と亜矢。2人が連れられた先には、ラボの一面の機材を退かして新たに設置された長方形の机の様なものがあった。だが机にしては変に高さが低いし、その傍には端末が置かれていてコードで繋がっている。

仁と亜矢がそれに首を傾げていると、端末の陰から白上教授が顔を出した。

「やあ、2人共。待っていたよ」

「教授、これ何ですか？」

「まあ、簡単に言えばスキャン装置だ。この上に寝てくれればそれだけで負担なく人間のバイタルなどが診察できる」

「CTスキャンみたいなものですか？」

「そんなところだ」

仁はふむ、と唸りながら目の前の装置——スキャンベッドを眺める。

「……それで、これを私達に見せてどうするんです?」

「君達2人が新人類に覚醒して、それ以上の変化は無いだろうと分かつてはいる。だが、もし何か変化が更に起きるようであれば出来るだけ早急に対策しなければならぬ。その為には、細かなデータ収集が不可欠だ。だが頻繁に採血したりするのは肉体的にはともかく、精神的に君らには負担があるだろうからね。その負担を少しでも減らそうと思つて……」

それは恐らく、教授なりの罪滅ぼしの一つなのだろう。仁を巻き込み、彼を人ならざるものへと変えてしまい、更には亜矢までそれに巻き込んでしまった。

今後もし何か変化が起きた時、それをどうにかできるといふ保証はない。そもそも最早2人をただの人間に戻す事は不可能だ。だが、何か起きるにしても事前に知る事は出来る。

何より、傘木社は現在進行形で人体実験を繰り返し、今後仁の様な新人類やそのなり損ないを生み出す可能性がある。その時に、仁から得たデータがあればその被害者を助ける事が出来るかもしれない。

仁自身には何もしてやる事が出来なくても、文字通り彼の体を張った献身がそう言つ

た人々を救う要因になるのであれば、それを無駄にしない事が今の白上教授に出来る事であった。

亜矢にはそれはある意味で逃避に見えた。仁に対してはやらかしてしまつたから、せめて今後出るかもしれない被害者だけは何とかしようという。だが例え逃避に過ぎなかつたとしても、教授は教授なりに償おうとしている事は事実。どんな形であれ罪を償おうとしている教授を、それ以上責める事は彼女には出来なかつたしするつもりもなかつた。

「……これ、早速寝てみても?」

「頼んでも良いかい?」

「勿論」

仁はコートを近くの椅子に掛け、服を着たままスキャンベッドの上に横になる。最初は上着を脱ごうとしていたのだが、峰曰くこのベッドは衣服程度なら着たままでも問題ないとの事だ。

仁がベッドの上に横になると、教授が端末を操作して仁の体を頭の天辺から爪先まで走査していく。数秒ほど、電気的な温かさを感じていた仁だがそれもすぐに収まり教授から起きてても良いと言われた。

意外なほど素早くあっさり終わった事に、仁は軽く驚きを感じずにはいられなかつ

た。

「速いですね。もう終わったんですか？」

「ああ、バッチリだよ。どうかな、何処か体に異常は？」

「大丈夫です」

「なら良かった。これなら、君らへの負担なく異常がないかを調べる事が出来る」

そう言って白上教授が端末を操作すると、ディスプレイに今し方収集した仁の肉体のデータが表示された。仁がそれを見てみると、なるほど最初に計測した時と差異は殆どない。これほど正確に計測出来て、尚且つスピーディーなら仁と亜矢の肉体データの収集のみならず、一般の病気や怪我の診察にも応用できる。

これは様々な意味で画期的な装置だった。

「亜矢さんも、診て貰ったら？」

「そうですね、それじゃ……」

仁に代わり今度は亜矢がスキャンベッドの上に横になった。ベッドを疑いの目で見ていた彼女も、仁が勧めると大人しくベッドの上に横になりスキャンを受ける。

仁同様に数秒ほどでスキャンは完了し、仁のデータの隣に今の亜矢のバイタルデータが表示された。端末を操作する教授の後ろから、仁と並んで亜矢が表示された自分のデータを見る。こうして様々な数値で自分の体を見るという機会はそうそうないから、

ちよつと新鮮だ。

「これが私のデータ。……仁君とはやっぱり違うわね」

「同じ新人類とは言え、男と女だからね」

「ふむ………双星さんはまだ妊娠してないみたいですね」

「んんっ!？」

2人が何気なく自分達のデータを見比べていると、横から覗き込んできた峰がとんでもない事を口にする。突然の発言に、亜矢の顔は一瞬で朱に染まり顔を俯かせた。

少し前であれば、ここで仁に出来るのは峰に軽く文句を言うか黙って亜矢を撫でるなどして宥める位だった。しかし今は違う。つい最近の話だが、彼はある話を拓郎から聞いていたのだ。

「………そう言う先輩は、瀬高先輩と仲が進展したみたいですね」

「———ファッ!？」

「えっ? そうなんですか?」

今度は峰が顔を赤くする番だった。思いもよらぬ仁からの言葉に、峰は奇声を上げ言葉を詰まらせる。反論や否定をしないと事、仁の言葉は真実だと言う事だ。

「何? どう言う事仁君?」

「そそそそそ、そうです!? 何で門守君がそんな事を!？」

「何でも何も、瀬高先輩に文句言われたんですよ。『この間宮野にいきなり押し倒された。お前の母親の名前が出たんだが、アイツに何吹き込んだんだ』って」

「あの、馬鹿——!?!」

「どうやら以前、香苗が来訪した際に峰に対して何事かを吹き込むかして唆していたらしい。」

「とは言え、前々からこの2人も仲は良さそうだったし、正直お似合いだと思う。自分達と違ってなかなか一線を踏み越えようとしないう2人に、そろそろお節介するべきかと仁と亜矢が考えていた矢先にこれだ。」

「峰の出した行動が拓郎を無理矢理押し倒して勢いで想いを伝えると言ったのはあれだが、拓郎も決して満更ではない様子だったのでこれはこれで良いかと仁は小さく息を吐く。」

「亜矢は漸く2人の中が進展したことに興奮気味だった。」

「わあ! 先輩おめでとうございます!」

「う……あ、ありがとうございます。まあ正直、勢いに任せて押し倒したのは我ながらあれな気もしますが……」

「いいじゃないですか。何年かすればそれも良い思い出になりますよ」

「他人事だからと、仁は峰の後悔をあつさり流す。自分の悩みを流され、峰が軽く脱

力する。

「そんな簡単に……門守君らしいですけども……」

「まあまあ先輩。仁くんも、もうちよつとデリカシーのある言い方しましょ」

「ん……」

仁自身、ちよつとこの場で暴露するのは峰に悪いかと思わないでもなかったのだからそれ以上何かを言う事はしない。峰からの恨みの視線に仁が顔を背けると偶然にも時計が目に入る。表示されている時刻を見て、仁はある用事を思い出した。

「あ、亜矢さん。そろそろ時間だよ」

「え？ あ！ 本当だ。教授、先輩。私達、そろそろ失礼しますね」

「ん？ 何処へ？」

「権藤さんに、話がしたいって呼ばれてるんです」

つい先日の事、唐突に宗吾から連絡が来たかと思うと協力の要請ではなく会って話したいという旨の事を告げられた。一体何だろうと思いつつ、仁の方も彼とは一度じっくり情報交換の為の席が必要だと思つてはいたので、今日亜矢と共に直接会うつもりだった。

その時間が迫っていると気付き、仁と亜矢は手早く荷物を纏めてラボを後にした。トランスポゾンに2人で乗り、街中を走つて数分ほど。

2人が辿り着いたのは一軒の喫茶店だった。店内にはそんなに人が多くはない様子で、しかも4人席は四方を壁で囲われているので込み入った話をするにはちよūd良かった。

2人が店内に入ると、一足先に到着していたらしき制服姿の宗吾が手を上げて2人を呼んだ。

「待っていたよ。こつちだ」

「どうも」

「お待たせしました」

2人は宗吾に軽く挨拶をして、席に座ると取り合えず適当に飲み物を頼んだ。

店員が2人の注文を聞き離れていくと、それを待っていた宗吾が口を開いた。

「こうして会うのは久し振りだな。2人共、息災だったか？」

「お陰様で」

「権藤さんの方こそ、大丈夫ですか？ あの戦いで、怪我人も多かつた筈ですけど……」

先日の倉庫街での戦いの被害は酷いものだった。宗吾を含め部隊の隊員の大半が負傷及び殉職により戦闘不能。スコープ2号はカラミティの必殺技をまともに受け大破し、装着者だった坂木は殉職と言う散々なものだ。

特にスコープ2号の大破は大きな痛手だろう。量産型と違い1号と同じく作りが複

雑なあれは、再び使えるようになるまで時間が掛かる。

「部隊に関しては再建の目処が立った。スコープ2号の修復ももうじき終わる。心配はいらない」

「そう、ですか……」

「……それで、今回俺達を呼んだのは？」

仁が本題について問い掛けると、宗吾はまるで鉛でも飲みこんだような顔をして手元にあるコーヒーを口に運んだ。2人を待つている間にすっかり冷めたコーヒーの苦さで気を引き締めると、彼は意を決して口を開いた。

「先日の戦いで、君と傘木 雄成との会話を聞いた。………門守君、人間ではなくなっ
てしまったようだね」

「ま、ね。正確には人間から進化して新人類になっちゃったみたい」

あの時は雄成がかなり声高に話していたし、仁も自分の身に起きた変化などを隠さず口にしていた。だからあの場に居て、意識があれば2人の会話から仁が人間ではなくなってしまった事を知るのはそう難しい事ではないだろう。だから宗吾が知っ
ても別に驚きはしない。

何より、仁自身はこの事に既に自分の中で区切りを付けていた。最初から何時かこの時が来ることは予想していたし、亜矢が共に歩んでくれる。彼女が共に新人類として、

同じ時の中を歩んでくれるのであれば仁にとって恐れる事は何もなかった。

しかし宗吾にとつてはそうではなかったらしい。彼は全てを受け入れた様子の仁を前にして、彼に頭を下げた。

「君には、本当に申し訳ないと思つている。君がそんな体になつてしまつた原因の一端は、俺達の不甲斐無さにあると言つても過言ではない。謝つて済む問題ではないし、君自身が気にしている訳ではないことは百も承知だ。だがそれでも言わせてくれ。済まなかつた」

テーブルに頭を擦り付ける勢いで謝罪してくる宗吾を前に、仁は亜矢と困つたように顔を見合つてしまう。

そこに店員が仁と亜矢の注文した飲み物を持つてきた。女性の店員は、警察の制服を着た宗吾が仁と亜矢に頭を下げている様子に奇異の目を向けていた。

店員が去つていくと、亜矢が慌てて頭を上げさせた。彼の気持ちも分かるが、2人は別に謝罪を求めていないし居心地が悪い。

「頭を上げてください。私達は別に、この体になつてしまつた事を別に悔やんでいませんから」

「そぞ。なつちやつたもんはしょうがないし、この体で生きるのもきつと悪くはないと思つから」

仁はそう言っただけで出された紅茶を口に運んだ。何となく紅茶を選んでしまったが、教授や亜矢の紅茶で舌が肥えたからか何だか物足りない。決して不味い訳ではないのだが。

その一方で、宗吾は亜矢が何気なく口にした一言に思わず顔を上げた。

「ん？ 私、達……？ ちょっと待ってくれ、門司君だけじゃなくて……」

「はい。お察しの通り、私もなっちゃいました。私の場合は、自分の意志で、ですけど」
宗吾は簡単に新人類への進化のプロセスを亜矢から聞いた。まずテイナドライバーを使っただけで変身することを繰り返して、全身の細胞を変異に耐えられるように下地を作る事。そこにベクターカートリッジを直挿しして細胞に劇的な刺激を与える事。

一通りの話を聞いた宗吾は、情報を頭の中で整理するのに苦労しているのか席に体重を預け溜め息を吐きながら目頭を揉んだ。

「何と言うか……複雑な話だな。正直ついていくだけで精一杯だ」

「別に難しく考える必要はないよ。ドライバーで変身して、後で直挿しすれば進化しちゃうってだけの話だから」

「ですので、これまでファッジだった人が進化することはないので安心してください」

傘木社の影響で、もうかなりの人数が直挿しをしてファッジへと変異してしまっていた。彼らが全員新人類へと進化してしまっただけで大きな問題となってしまうが、亜矢の言葉でそれはないという事が分かり宗吾は安堵した顔になる。

しかし疑問は拭えない。そもそも雄成は何故、新人類を生み出そうとしたのだろうか？

「傘木 雄成は新人類を生み出してどうしたかったんだ？」

「それが分からないんですよね。仁くんの血を持っていつてから、大人しい理由も気になりませんし」

「大人しい理由は見当がつくよ。俺の血から採取した新人類の遺伝子を持って余してるんでしょ」

実はここ最近、仁も自分で新人類の細胞に関して色々と検証をしていた。そして、傘木社が辿り着いた様な仁の遺伝子の問題点を見つけ出した。

「つまり門守君の遺伝子からはベクターカートリッジが作れないと言う事か？」

「少なくとも、今まで程簡単じゃないのは確かだよ。でも……………雄成さんだったら作っちゃうかもね」

そう言つて仁は残つた紅茶を静かに啜る。不吉な仁の言葉に、宗吾が更に深く訊ねようとしたその時、彼の携帯から着信音が鳴つた。

「おっと、失礼……………もしもし、権藤で……………ああ北村か。どうした？……………何？ ファツジが病院を襲撃した？」

宗吾が口から零した言葉に、仁と亜矢は顔を見合わせると手元の飲み物を口に流し込

んだ。

「場所は？……分かった。今、門守君達と一緒に居るから、直ぐ現場に向かう」

携帯を切り、仁と共に席を立つと宗吾は2人を先に店からだし自分は会計を済ませに向かう。

「すみません、会計を」

「はい。え〜——」

「お釣りは結構、今緊急事態なので」

そう言つて宗吾は2000円を叩き付けるように会計に置くと仁達の後を追つて店を出た。背後から店員の呼び止める声が響くがそんなのは無視だ。

「俺達はバイクあるけど、権藤さんは？」

「心配するな。そいつが俺の愛車だ」

宗吾が指差す先には1台の灰色の車があった。移動手段があるのならいい。仁は頷くと亜矢と共にトランスポゾンに跨った。

そのまま仁は宗吾の先導でファッジが襲撃したという病院へと向かう。

3人が辿り着いたのは以前健が入院していた病院とは別の病院だった。健はまだ入院している最中だったので、病院が襲撃されたと聞き肝を冷やしたが別の病院と分かり、不謹慎かもしれないが安堵した。

病院からは自力で動ける患者や見舞いに来た人達が我先にと逃げ出している。その一方で、医師や看護師が老人や自力で動けない入院患者を連れだすのに奔走していた。数人掛りで1人の患者を運び出すと、直ぐに戻って次の患者を運び出そうとしている。患者を運び出すのには見舞いに来た人や、通報を受けて急行したのか警官の姿も見られた。

その間にもファッジは病院で暴れているのか、病院内部で時々爆発音の様なものが響く。事態は一刻を争うようだ。

「傘木社め、最近大人しいと思ったらこれか！」

「でも何で病院を？」

傘木社は目的であった仁の——新人類の遺伝子を手に入れた筈だ。それならば、何故こんな騒動を起こすのか亜矢には分からない。宗吾に至っては分かりたくもないという様子だったが、仁は傘木社が……雄成が考えている事が分かった。分かってしまった。

「……不味いな」

「何がだ？」

「連中、人体実験の被検体が欲しいのかもしれない」

「え!!」

もし仮に傘木社が新人類の遺伝子を用いたベクターカートリッジの開発に成功したのだとすれば、その実験の為の被検体を求めるのは当然の話だ。加えて、雄成が何らかの目的の達成に近付いているというのであれば、今までの様に慎重になる事はない。これまでよりもアクティブな活動に移ってもおかしくは無いだろう。

ふと病院の向こうを見れば、一台のコンテナを積んだトラックが病院から離れていくのが見えた。恐らくあれには――

「クソッ！ 濟まないが、病院内の連中は任せても良いか？」

「いいよ。あっちの方が数多そうだし、俺と亜矢さんで当たった方が良いと思うから」
「助かる、頼んだ！」

手短に感謝し、宗吾は走りながらスコープドライバーを腰に装着した。

〈Access〉

「変身ッ！」

〈In focus〉

宗吾は素早くスコープに変身すると、右腰のプレートホルダーから一枚のプレートを取り出しドライバーに装填した。

〈Jetpack Starting〉

スコープが使用したのは、背中に飛行用の装備『ジェットパック』を装着するプレー

トだった。これでスコープの機動性は格段に上がり、走る車を追跡する事も可能だ。

ただこの装備の欠点として、装甲が薄く破損しやすいと言うものがあるが……。

ジェットを噴かし、爆走と言って良い速度で走るトラックを追跡する。トラックは途中何台かの一般車両を重量に任せて押し退け、時には踏み潰してスコープから逃げ続けた。

このまま放置しては被害が広がるばかり。走らせ続けるよりとにかく足を止めた方が良く、スコープは飛行しながらガンマライフルを構えタイヤを狙って引き金を引いた。あの速度だ、タイヤをパンクさせられれば運転手はハンドル操作を誤り停車せざるを得なくなる。よしんば停車しなかったとしても、速度は大幅に低下する筈だ。

狙いを定め、スコープが撃った銃弾は逸れる事無くトラックのタイヤを撃ち抜き、パンクさせるどころか車輪そのものを粉碎した。流石にタイヤを壊されて走り続ける事は出来ず、トラックは電柱に激突した。運転席は大破し、コンテナは激突の瞬間大きく跳ねた。

中に入れられているだろう患者が心配になり、スコープはトラック後部のコンテナに取り付き力尽くでこじ開けた。

「警察です！ 大丈夫——」

コンテナ内の様子をスコープが確認しようとした矢先、内部からの銃撃がスコープを

大きく吹き飛ばした。

「ぐあっ!？」

突然の銃撃に何が何やら分からぬままトラックから吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。背中から叩き付けられたものだから、ジェットパックがダメージを受けて火花を散らし始めた。これはもう使えない。

ジェットパックを強制排除しつつ自分を銃撃した相手を待ち構えるスコープの前で、コンテナが開き中から銃撃の主が出てきた。

「お前は、アデニン!？」

コンテナから出てきたのは何とアデニンが変身するホワイトカラーズであった。コンテナの中には連れ去られた入院患者など1人も居らず、入っていたのは彼1人だ。

「何故お前が!？」

「いい感じに勘違いしてくれたな……我々は別に人体実験の被検体を求めてなどいない」

「何ッ!？」

「病院を襲撃したのは、手っ取り早く騒ぎを起こす為だ。騒ぎが起きれば仮面ライダー達が出る。特に門守 仁は絶対にな」

この時点でスコープは自分がまんまと謀られた事を知った。意味も無く病院を襲撃

する筈がないと思い込んだが故に、騙されてしまったのだ。

「まあ、デイナが病院に残ってくれるかが賭けではあったが、ルーナが一緒とは言えデイナがあそこに残ってくれたのは僥倖だったな」

「くっ!?!」

スコープは急いで踵を返そうとしたが、当然ながらホワイトカラーズがそれを許さない。動こうとした瞬間には足元にベクターリーダーの銃撃が地面に穴を穿つ。

「悪いが、プロフェッサーの邪魔をさせる訳にはいかない。お前にはここに居てもらおうぞ」

「チクシヨウ——!?!」

一方、仁と亜矢は人の流れに逆らい病院内に入ると暴れているファツジの元へと向かう。

そこそこ大きい病院なのか、院内にはまだ逃げ遅れた人が居り医師達が懸命に患者ら

を連れ出そうとしている。

その光景を横目に見て、傘木社の暴挙に亜矢が怒りを感じていると唐突に仁が足を止めた。何事かと亜矢が仁と同じ方向を見ると、そこには2人の人物……：……：グアニンとシトシンが佇んでいた。

「待つていたぞ、仮面ライダー」

「ヒヤハハハハ！ 今日がお前らの命日だ！」

相変わらず爛れた顔のグアニンに対し、矢鱈とテンションが高いシトシンに仁は違和感を感じた。まるで何かの薬をやったかのような異様な様子だ。亜矢も違和感を感じずにはいられないのか、シトシンに対して不気味なものを見る目を向ける。

「アンタ、シトシンだっけ？ 何か今日は様子が変だけどうしたの？」

「細げえことは気にすんなよ！ それよりさっさとおっ始めようぜ！」

〈F L O G L e a d i n g〉

「デイナは任せます」

〈S E A U R C H I N L e a d i n g〉

何だか不気味だが、取り合えず向こうはやる気の様なのでそれを迎え撃つべく仁と亜矢もデイナドライバーを腰に装着した。

「ヤク中の相手なんか御免なだけ……」

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

〈CAT Unite〉

「進生！」

〈Transcription〉

2人の前で一足先に変身するグアニン達。彼らに遅れて仁と亜矢も変身する。

「変身！」

〈Congrats! Birth of a new life, MINOTA

R. Open the door〉

〈Open the door〉

仁がダイナ・ミノタウロスライフに変身し、亜矢はルーナ・ユナイトに変身する。変身するなり、ダイナはルーナが以前と変わらない事に首を傾げた。

「あれ？ ルーナは何も変わらないんだ？」

自分が新人類に進化した事で、ダイナもその影響を受け進化した。同じ事がルーナにも起こると思ったのだが、そうは問屋が卸さなかつたらしい。

「本当だ。……ちよつと期待してたんだけどな。……何で変わらないんでしょうか？」

「ん〜……、考えられるとすれば、ダイナと違ってルーナはベクターカートリッジを一個

しか使つてないからとかがあるけど——」

こんな状況なのにルーナにこれと言つた変化が生じない理由についての考察を巡らせるデイナ。だがグリーンリキッドとブラックスティンガーは彼が考えを纏めるだけの時間を与えなかつた。

グリーンリキッドはベクターリーダーを銃剣モードに、ブラックスティンガーはそのままですれぞれデイナとルーナに襲い掛かつた。

「つと、考えてる場合じゃないか」

「オラアッ！」

振り下ろされたベクターリーダーをデイナは体を軽く反らす事で避け、反撃の手刀を叩き込む。ただの手刀だが、その威力はバツフローヒューマンの時と比べ大幅に向上している。グリーンリキッドが銃剣で防ぐが、デイナの手刀は銃剣を叩き折り相手の武器を奪つた。

「うおっ!? ははっ! 面白くなつてきたじゃねえか!」

一瞬呆気にとられるグリーンリキッドだったが、直ぐに気を取り直すとそのまま無手でデイナに挑んできた。それを迎え撃つデイナだったが、殴り合いの中で彼は違和感を覚えていた。

以前に比べてグリーンリキッドの筋力が上がっているのだ。前に戦つた時よりも相

手の攻撃が響く。現に今も、グリーンリキッドの飛び蹴りを両腕をクロスさせて防いだのだが、その威力に後退を余儀なくされ防いだ腕には痺れが残っていた。

明らかに前よりも強くなっている。

(本気でドーピングで強くなったのかな?)

デイナがそんな事を考えている間にも、グリーンリキッドの攻撃は止むことをしない。ずんぐりとした見た目の割に軽快に動き、特に強力な蹴りにデイナも翻弄されずにはいらなかった。

実を言うとグリーンリキッドが体から分泌する毒も以前より数段強化されているのだが、こちらは幸いなことに新人類となった事で解毒能力が上がったので大した問題にはならない。

そして毒が無力なのであれば、グリーンリキッドなど大した相手ではない。

「お前にはコイツだ」

〈SHARK + HEDGEHOG Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Congrats! Birth of a new life, KAGEWAN I. Open the door〉

デイナは進化したシャークヘッジホッグフォーム、カゲワニライフになると棘の生え

た足で蹴りつけた。

「その程度で！」

先程に比べ速度の遅い蹴りを難なく受け止めるグリーンリキッド。だが次の瞬間、蹴りを防いだ腕が何かに引っ張られバランスを崩してしまう。

「何ッ!?!」

まさかの事態に反応が遅れるグリーンリキッドは、そのままダイナの足に振り回され引き倒される。

グリーンリキッドを引っ張ったのはダイナの足だ。と言っても彼は足でグリーンリキッドを掴んだのではなく、足の棘についた返して引っ掛けたのである。

本来、ハリネズミの棘には返しなどついていない。

だが進化したダイナは、ハリネズミの形質を発現させる際にヤマアラシの特性を自分で反映させ、棘に返しを付けたのだ。

倒れたグリーンリキッドを解放した仁だが、彼の攻撃はそれで終わりではなかった。ここで一気に勝負を付けようと、倒れたグリーンリキッドに無慈悲な一撃を放った。

〈ATP Burst〉

「ハッ!!」

「ぐおあっ?!」

解放され立ち上がった直後に襲ったデイナのノックアウトクラッシュ。それも進化した事によって強化されたそれを受け、グリーンリキッドは大きく蹴り飛ばされた。蹴り飛ばされた先にはルーナに追い詰められていたダークステインガーも居る。

「がはっ?!」

「シトシン!?!」

「何だ、お前? ルーナ相手に、随分苦戦……してるじゃねえかよ?」

「仁くん!」

「亜矢さん、何だか今日は調子良いね?」

「まあね! 何て言うか、前より亜矢と息が合い易いのよ」

どうやらルーナの外見は変化が無くても、中身は進化の影響を受けているらしい。見た目が変わらないからと油断して、ダークステインガーは痛い目に遭ったようだ。

幹部2人を追い詰めたデイナとルーナ。最早彼らにとって、ベクターリーダーで変身するグアニン達など敵ではなかった。

このまま追い詰めようと近づくデイナとルーナだったが、その前にグリーンリキッド達の後ろから歩いてきた雄成が姿を現した。

「ッ! 雄成さん……」

「ふむ……実に興味深いね。まさか、2人目が出るとは……」

どうやら雄成は、離れた所から2人の戦いを見ていたらしい。そして戦い方の変化、そして今し方のデйна達の会話から、亜矢も新人類に進化した事を察したようだ。

一番気付かれない相手に気付かれてしまった事に、デйнаは内心で己の迂闊さを悔いた。

「2人共、下がりました。シトシン、ベクターカートリッジを」

雄成はカラミティドライバーを腰に装着しながらシトシンに手を向ける。シトシンは変身を解くと、さらに体からサンプル2ベクターカートリッジを取り出し雄成に渡した。

その光景にデйнаが軽く目を見開く。

「ベクターカートリッジを直挿しした状態で変身した? ……あのベクターカートリッジ ……なるほど——」

デйнаはそのベクターカートリッジが、仁の遺伝子を使って作られたものである事に気付いた。あのベクターカートリッジが新人類の遺伝子を内包したもので、アレを使うとファッジには変異せず肉体が強化される程度だと気付いたので。

〈SAMPLE2 + ORGANISM Experiment〉

「さあ、私の研究成果を見せよう」

〈Biological disaster warning issued〉

「変……身」

〈Biohazard〉

雄成が新たに作り出したベクターカートリッジ、サンプル2ベクターカートリッジで変身する。

その姿はサンプルベクターカートリッジで変身したものと比べて少し変わっていた。

装甲と単眼の色が燈色に変化し、単眼には重なる様に上を向いたCの様な角が追加されている。両腕のリスクブレードは見た所なくなっている様だが、代わりに首元に装甲と同色のストールが追加されていた。

パツと見た感じ、攻撃力はハザード1だった頃に比べて低いように見える、これがカラミティのハザード2形態だ。

「何よ、前より大人しい見た目じゃない。あのカタターが無いならー」

ルーナは素早くリップレッサッシュョットを抜くと、カラミティに向けて何発も発砲した。ダークステインガーが咄嗟にカラミティを守ろうとしたが、カラミティはそれを片手で制すとストールを翻す。

長めのマフラーの様なストールが伸びてカラミティの前で翻ると、ルーナの銃弾を全て受け止めた。驚いたことに銃弾はカラミティのストールを貫通する事なく、全て受け

止められてしまった。

「えっ!？」

「……………ふうん」

その結果に驚くルーナに対し、デイナは何かを確かめるようにカラミティの接近すると両腕のカッターで斬りかかる。こちらにも依然と異なり、細かな鱗が表面で動く事でチエーンソーの様に相手を切り裂く強化が為されている。

そのカッターがカラミティのストールに受け止められる。本来であればあのストール程度の薄い布などあっさり切り裂けるはずなのに、カラミティは薄いストール一枚でデイナの斬撃を火花を散らしながら受け止めていた。

「……………収縮自在なんだね」

「気付くのが早いね、流石だ」

高い防御力の秘訣は伸縮性の高さにある。カラミティのストール『完全硬質化ストール』は、伸縮性に優れ伸ばす事も縮める事も自由自在だった。その伸縮性の高さを活かし、銃弾程度であれば衝撃を吸収する事で防ぐ事が出来るし斬撃に関しては限界まで縮める事で硬度と耐久性を高めて斬撃を受け止め止める事が出来るのだ。

そして伸縮自在と言う事は、攻撃にも転用できると言う事。

「そらあー」

カラミティはストールを掴み、鞭のように振るうとストールが伸び弧を描いてダイナに襲い掛かる。ダイナは咄嗟に防御するが、柔軟でありながら硬度も高いというある種矛盾したストールによる一撃に強かに引つ叩かれ吹き飛ばされる。

「ぐうつ!?!」

「仁くん!?!」

「余所見している暇はないぞ!」

吹き飛ばされたダイナにルーナが気を取られた瞬間、カラミティのストールがルーナの首に巻き付き、振り回して壁に叩き付けられる。

「うあ、つ!?!」

「くつ、ただのストールにしか見えないのに……」

厄介なのはあのストールの特性だ。伸縮自在でカラミティの意のままに動き、ただの布の様に柔軟に動くのに打突部は鋼鉄よりも固い。その特性の所為で、攻撃が読みづらく反撃も防御も儘ならないのである。

ダイナは両腕のカッターで反撃しようとするが切れないストールに受け止められてしまつては意味がない。攻撃を防がれた挙句、全身を簧巻きにされ右に左に振り回され叩き付けられてしまう。

「ぐ、あ——!?!」

「ふむ、君から作ったベクターカートリッジを使っているのだが……どうやら想像以上の力を秘めていたらしい。これはますます、君から直に細胞を採取したいねえ」

「く……。悪いけど、何に使われるか分かったものじゃないから遠慮させてもらうよ」

〈Congrats! Birth of a new life, MINOTAU R. Open the door〉

この形態はカラミティに対して有効ではない。デイナは使いやすいミノタウロスライフに戻し、しかし残りの体力を考えこの一撃で勝負を決めに掛かった。

「こいつで……」

〈ATP Burst〉

「良かろう、受けて立つよ」

〈ATP Full blast〉

同時に放たれるデイナとカラミティの必殺技。以前の倉庫街の時の様に拮抗するかと思われたが、カラミティの方が地力が上がっているのか徐々にデイナが押されていく。

そして遂に均衡が崩れ、デイナのノックアウトクラッシュを破ったカラミティのデッドエンドクラッシュがデイナに炸裂した。

「ぐああああああつ?!」

蹴り飛ばされたデイナは壁を突き抜け病院の外に放り出され、地面に叩きつけられるとそこで限界が来たのか変身が解除されてしまった。

「仁くん!?!……このおっ!!」

〈ATP Burst〉

仁を傷付けられた事で真矢が激昂し、カラミティに向けて駆けながらノックアウトクラッシュを発動した。当然カラミティはそれを迎え撃つ。怒りに任せた一撃など、読みやすいというかのように悠々と構えカウンターのデッドエンドクラッシュを放つのだが――

〈ATP Full blast〉

「フーン!」

「そこおっ!」

カラミティの動きはルーナには見えていた。ただでさえ思考と反射を融合させ驚異的な動きを見せるルーナ・ユナイトだったが、亜矢が新人類に進化した事でそれらの能力が飛躍的に向上。悠長に構えて放つ必殺技程度なら、身構えていれば簡単に見切れる程になっていた。

放たれたデッドエンドクラッシュを、ルーナは紙一重で避け自身のノックアウトクラッシュをカラミティに叩き込む。狙うは変身の要であるベルトだ。あれを破壊でき

れば、強制的に変身を解除させる事が出来る。

「フンッ！」

「ぐうっ?!」

ルーナのノックアウトクラッシュがカラミティドライバーに直撃し、カラミティは数歩後ろに後退る。大事なドライバーに必殺技を喰らったカラミティが恐る恐るドライバーを見るが、外見では損傷したようには見られない。

見られないが、しかしドライバーからは火花が散っていた。損傷箇所は無くとも、内部には何らかの不具合を発生させた可能性が高い。

「……………この借りはいずれ返させてもらうよ」

カラミティはそう捨て台詞を残し、その場を撤退した。他の幹部達もその場を退き、後にはルーナと倒れる仁だけが残されていた。

「や、やったの? ……そうみたいね。それより仁君は!」

ルーナは敵が退いたと見るや変身を解除し倒れた仁に駆け寄る。仁は意識を失っているが、気絶しているだけでそれ以上に大きな怪我をしている様子が見られなかった。顔色も悪くはないし、呼吸も安定している。

一先ず大丈夫そうだと安堵し、亜矢は仁を抱えると外に居るだろう医者の方へと連れて行くのだった。

一方、撤退した雄成は戻るなりカラミティドライバーの点検を行った。大事な大事なドライバー、彼の悲願を達成するのに必要なドライバーだ。万が一にも損傷しているなどと言う事があれば、即修理しなくては。

そう思っていた雄成だが、ドライバーはルーナの必殺技を喰らった割には損傷は軽微だった。この程度なら普通の戦闘の後と大差ないだろう。

だが必殺技の直撃を受けたというのに何故？

「——ん？」

その答えはサンプル2ベクターカートリッジにあった。よく見てみると、サンプル2ベクターカートリッジに僅かながら変化が生じていたのだ。

「そうか……………そう言う事だったのか——！」

雄成はそこで仁の細胞から作り上げたベクターカートリッジの能力に気付いた。そしてその能力に歓喜の声を上げた。

「門守君！ やはり君は素晴らしいよ！ ははははははははははっ!!」
誰も居ない研究室の中で、雄成の狂ったような笑い声が響き渡るのだった。

第53話：欲するもの

傘木社が……雄成が仁の血液から新たなベクターカートリッジを作り上げた。恐らく彼はこれを機に、一気に何かを起こすつもりなのだろう。

そう身構えていた仁だったが、その予想に反してあれから雄成は再び大人しくなった。S・B・C・Tの再編成ももうじき終わり、また動き辛くなるだろうと言うのに、だ。いや、カラミティ一人に全滅させられたからもうS・B・C・Tは敵ではないと考えているのだろう。そうであれば、ここ最近の大人しさも説明がつく。何時でも潰せる相手など、警戒しなくても怖くはない。

後考えられるのは、先日の戦闘でルーナが最後にドライバーに叩き込んだ一撃がカラミティドライバーに何らかの影響を及ぼしたと言うものだ。破損したのかどうかは知らないが、とにかく今雄成は動くつもりがないらしい。

大人しくしてくれているのなら、それはそれで構わない。仁の方から傘木社に仕掛ける事は出来ないのだから、向こうが大人しくしてくれているなら今は英気を養う時と仁も再び平和を謳歌させてもらう事にした。

どうせ事が起きればこんな風に平和に過ごしている暇も無いのだ。もしもと言う事

がないようにはするが、そうなった時に後悔しない為に今を全力で楽しまなくては。

その仁は、この日は珍しく1人で過ごしていた。12月も終わりに近付き、世間はクリスマスに湧きたってきている。

かく言う仁も、今年はクリスマスを楽しみにしていた。例年であれば、特にこれと言った事も無くただの風物詩としてしか感じなかったクリスマスだ。だが今年はずう。今年、亜矢と真矢と言う最愛の女性達と共に過ごすクリスマスだ。今までクリスマスで浮かれるカッパルの気持ちがイマイチ分からなかった仁だったが、今年は彼ら彼女らの気持ちがよく分かる。今から楽しみで仕方ない。

そう、仁はクリスマスを楽しみにしていた。このクリスマスで、仁は亜矢にプロポーズをしようと考えていたのだ。

大学卒業後、仁は院生となる。そしてほぼ確実に大学からの推薦でアメリカのマサチューセッツ工科大学に留学する。その時、亜矢が自分について来てくれるかは分からない。慣れない環境で彼女に無理をさせる位なら、彼女には日本に残っていてもらうしかない。寂しいが、それは強要出来なかった。

だが、共にアメリカに来れないなら来れないで、将来を約束してもらいたかったのだ。我ながら随分と独占欲が強い気もしくはないが、これだけは譲れない。

今はその為の指輪を買ったところだ。彼女の指のサイズはコッソリ調べてあり、恐ら

くはぴったりだろう。飾り気のないシンプルな指輪が入った小箱を、仁は店を出てから一度見た。陽光に照らされキラリと輝く指輪を見て、仁の顔に笑みが浮かぶ。これを渡して想いを伝えた時、果たして彼女はどんな反応を見せてくれるだろうか。その時を想うと頬が緩むのを抑えられなかった。

一方亜矢はと言うと、彼女は彼女で特にする事も無かったので街中をぶらぶらと彷徨っていた。この時期、普通の大学生であれば卒論や就活に追われているのだろうが彼女に関しては例外だった。卒論は既にある程度纏まりつつあり、後は発表に備えて整えるだけ。

そして就活に関しても、彼女は難しく考えてはいなかった。亜矢は卒業後、仁と共にアメリカに向かうつもりだったからだ。その為の資金は溜めてあるし、向こうでの生活に馴染めるように英語の勉強にも力を入れている。向こうではバイトをしながら仁を支えていくつもりだ。

「それにしても、仁君どうしたんだろう？ 今日はいきなり1人になりたいだなんて」

「(仁くんだって、偶には1人で過ごしたい時とかあるでしょ？ 寂しい気がしなくもないけど、縛り付けるのは良くないって)」

今この瞬間、仁が亜矢にプロポーズする為の指輪を買っているなど夢にも思っていない亜矢は、街中の様子を眺めながら脳内で真矢と会話する。新人類になつて色々な能力が飛躍的に向上したからか、今まで以上に脳内で真矢とどっぷり会話しながらも危なげなく街中を歩けていた。時折目の前から人が来るが、彼女は真矢と会話しながらそれらを自然と回避していく。

亜矢は改めて平和な街を見渡す。クリスマススムード一色の街中だ。去年までは時に浮かれつつあるカッブルなどを少し羨ましく思いながら、彼ら彼女らの幸せを願いつつ自分はただ雰囲気を楽しむだけだった。

だが今年には仁が傍に居てくれる。去年までは、ちよつと放っておけない同年代で異性の友達と言うだけだった仁。だが今年には、クリスマスという特別な日を共に過ごす。それを思うと亜矢は頬が熱くなるのを感じた。

「仁君とのクリスマス……楽しみだね、亜矢！」

「(うん……本当に、楽しみ！)」

ニヤケる口元をマフラーで隠し周りから変な目で見られない様にする。

そう言えば、と亜矢は先日のを思い出す。

倉庫街での一件の後、傘木社が大人しくなったのを見て仁は遂に亜矢の両親のもとを訪れる事を決意した。平和な時間が続く内に、挨拶を済ませてしまおうとしたのだ。

あれは今思い出しても気恥ずかしく、そして微笑ましかった。

らしくなく緊張しているのか動きや表情の硬くなった仁に対し、亜矢の父は娘が彼氏を連れてきたと聞き必要以上に身構えていた。愛娘に近づく男と仁の事を父が警戒するのだが、それも真矢を失った事による喪失感の裏返しであると気付いた仁は、努めて真摯に自分が亜矢を愛し大事にすることをつらつらと語っていった。

あれは今思い出しても気恥ずかしくて仕方ない。自分を大事に思つて、将来必ず幸せにしようとしてくれていた事は伝わるのだが、それはそれとして想いが純粹すぎて聞くだけで顔が熱くなった。それは聞かされる亜矢の両親も同じだったのか、最初から仁に対して好意的だった母は勿論、仁を警戒していた父も最初の勢いは何処へ行ったのか顔を赤くして俯く始末。

終いには父の方が仁の亜矢を想う心を前に折れ、彼の話を中断させるといふ結果になった。

今思い出しても恥ずかしくはあるが、仁の想いを確認できたし両親にも仁の事を受け入れてもらえたので良かったとは思ふ。

とりあえずこれで後顧の憂いは無くなった。あとは仁と結ばれるのみ。

【楽しみだね】

「(うん)」

亜矢と真矢は、仁がプロポーズしてくれる時を待っていた。愛の告白は亜矢の方が先だったので、プロポーズはじっくり待つ事にしたのだ。それ位は彼を男として立ててやらなければ。

不意に、亜矢の腹が空腹を訴えた。時計を見れば時刻は昼食時。亜矢は適当な店に入り昼食を摂る事を決めた。

決めたのだが、奇妙な事に行く店行く店がどれも昼時だと言うのに臨時休業していた。どうしたのかと首を傾げていると、一軒の店の入り口に張り紙があるのを見つけた。

「また休業？ 何だろ？」

張り紙には端的に言えば、食材が切れたので本日臨時休業と書かれていた。それを見て亜矢は首を傾げる。

「食材が切れたって……何で？」

【そんな大人数が一気に入ったのかしら？】

2人が今見ているのは、こぢんまりとした定食屋の前だ。そんな所に、店の食材が切

れる程の人数が来るだろうか？

よしんば来たとしても、それが昼時になる前に居なくなると言う事があるだろうか？
そして最も気になるのは、まさか他の店も食材切れで臨時休業しているのではないか
と言う事だった。普通に考えればそんな事あり得ないのだが、ここまで一気に臨時休業
している店ばかりだとふとそんな事も考えてしまう。

「——考え過ぎ、かな？」

【どうかしら？ それよりお腹空いたわ】

「う〜ん……………あー！」

空腹を抱えたままなのはよろしくない。どうしたものかと辺りを見渡すと、まだ営業
している喫茶店を見つけた。喫茶店ならパスタかサンドイッチくらいはあるだろう。
それで軽く昼食にすればいいと、亜矢は喜び勇んで喫茶店へと入る。

店内は意外と空いていた。外の他の店が軒並み臨時休業しているので、客が雪崩れ込
んでいるかと思つたがそんな事は無かつたようで安心する。

とりあえず適当な席について注文しようとする亜矢だったのだが、そこで思いもよら
ぬ人物と遭遇した。

「ん？」

「なっ!?! あ、あんたは!?!」

そこに居たのは希美だった。テーブル席の一つに座り、大盛りのナポリタンを頬張っている。

向かいの席には、身なりを整えたりリイとレックスの姿があるのだが、今の真矢の目に入っているのは希美だけだった。

まさかこんな所で堂々と希美が食事をしているとは思っていなかった。真矢は場所も考えずその場を飛び退き身構えようとする。が、それは寸でのところで亜矢に止められた。

「真矢、ストップ!？」

「ッ!——(何で止めるの!)」

「分からない? ここでききなり戦い始めたら、何も知らない客も被害を受けるわ。気持ちは分かるけどまずは落ち着いて!」

亜矢の言葉で、真矢は落ち着きを取り戻す。だが警戒は緩めず、希美をジッと睨む。すると彼女の前にリイが出て、希美を庇う様に立ち塞がった。

「ノ、ノゾミを……苛めないで……!」

「え? あ、えと……!」

突然前に出てきた事もそうだが、何よりもこんな少女が希美を守ろうとしている事に驚き真矢は目を白黒させる。

こんな少女が傘木社の関係者と思えないのもそうだが、そんな少女と希美が一緒に居る理由とか、希美を庇う理由がイマイチ分からなかった。

真矢が困惑していると、希美はリリーの袖を引っ張り真矢から遠ざけた。

「こつちおいで」

「で、でも……」

「大丈夫よ。こんな所で騒ぎ起こす程、その女も馬鹿じゃないでしょ」

希美は真矢に向って「ね？」と首を傾げる。自分よりもよほど理性的な思考を見せる希美に、何だか真矢は負けた気分になった。

このままでお腹の虫が収まらないが、ここで騒ぎを起こす訳にはいかないのでとりあえず亜矢に任せて自分は内側に引っ込んだ。代わりに表に出た亜矢は、中で真矢が騒ぐのを聞き流しつつ希美に話し掛けた。

「……こんな所で何を？」

「何って、お昼ご飯に決まってるでしょ。あ、もしかしてアンタも？ だったら残念ね。たつた今この店の食材も底を尽きたわ」

そう言つて希美はフオークに巻いたナポリタンの最後の一口——ただしその量は普通の5倍に見える——を頬張った。

「はあっ!? 最後!? あー、もしかしてこの辺のお店が軒並み休業してるのって!?」

「……もしかしてこの近くのお店、全部回ったんですか？」

「この子達もよく食べるからね」

希美はこんな事を言っているが、言うほどレックスとリリイは食べない。確かに常人に比べれば、2人もその体を正常に維持する為多くのカロリーを欲する。だがそれは普通よりやや大食いと言う程度だ。近場の店を臨時休業に追い込んだ、その最大の原因はやはり希美である。

「———と言うか、この子達は？」

ここで漸く亜矢もリリイ達に興味を持った。いや、亜矢の方は最初から希美と行動を共にしているらしき2人に興味はあった。あったのだが、希美の存在自体がインパクトあり過ぎて2人に意識を向けている余裕が無かっただけだ。

「……友達よ」

亜矢からの問い掛けに、希美は端的に答えそれ以上は何も言わない。端的過ぎて亜矢は逆に訝しまずにはいられなかつたが、リリイはその答えだけで十分に満足だったのか笑みを浮かべて希美に擦り寄る。

その光景に亜矢はますます困惑して動きを止めずにはいられなかつた。これがあの希美だろうか？ 幾度となく敵対してきた彼女とは、まるで印象が異なる。一体どういう事なのか？

「……………あんた、二重人格だったりしないわよね?」

もしや希美にももう一つの人格があるのだろうかと疑い、思わず表に出て訊ねてしま
う真矢。希美はその問い掛けに若干ムツとなった。言いたい事は分からなくもないが、
それをストレートに言われるのは気分がいいものではない。

「悪かったわね、普段は凶暴で。そういうアンタはどうなのよ?」

「うえ? 私?」

「アンタ、ちよこちよこ雰囲気変わってるけど、アンタの方こそ二重人格だったりするん
じゃないの?」

さてこれはどう答えるべきだろうか。亜矢が二重人格者であり、真矢と言う人格が居
る事は大つぴらにはしていない。だがそれは奇異なものを見る目で見られたり、敬遠さ
れる事を避ける為だ。つまり逆に言ってしまうえば、敵である希美に真矢の存在が知られ
ても、亜矢にとってデメリットは存在しない。

だが同時にメリットもこれと言って存在しなかった。わざわざ教えてやる必要がな
いのに、真矢の存在を明かすのは――

「――漸く気付いた? ええそうよ。亜矢は一人じゃないの。私、真矢が何時も一
緒なんだから」

「ちよ、真矢!」

亜矢が悩んでいる隙に、真矢が表に出て名乗りを上げた。まさか本当に二重人格だとは思ってはいなかったのか、希美は亜矢とは雰囲気が違う真矢の存在に目を瞬かせる。

「え?……嘘、本当に? 冗談のつもりだったのに……」

「お生憎様、私はちゃくんと存在してるわ。亜矢の中にね。それで? この子たちは本当に何なの?」

傘木社の仮面ライダーであり、体を改造された希美に普通の友達がいるとは想像できない。しかも歳が近いならともかく、2人はまだ未成年にしか見えなかった。どう好意的に見ても真つ当な関係とは思えない。

絶対に何か裏がある。

「あんたもしかして……この子達誑かして実験台にするつもりじゃ——」

年若い少年少女が悪意に晒されるのを防ごうとする真矢だったが、次の瞬間レックスが立ち上がり声を荒げた。

「ノゾミを馬鹿にするなツ!」

〈MICROORGANISMS〉

「えっ!?!」

ベクターカートリッジを取り出し起動状態にするレックスに、真矢は言葉を失った。2人が実験台にされるかもと危惧はしたが、既に2人がファッジにさせられているとは

知らなかったのだ。

店の中でレックスはリキッドファッジに変異しようとする。彼とリレイにとつての恩人である希美を、侮辱されて怒りを抱いたのだ。そのまま感情に任せて変異しようとするレックスだったが、それは希美の一声で止められた。

「レックス、ストップ」

「ノゾミ……でも！」

「いいから」

「レックス……」

希美だけでなく、リレイにまで宥められてはレックスとしてもこれ以上の行動には移れない。彼は真矢を一睨みすると、ベクターカートリッジを仕舞い席に座り直した。

【……真矢、代わって】

「(……うん)。……失礼しました。それで、しつこいようですが何故ここに？ また仁くん？」

仁に再戦を挑むつもりであるのなら、場所を変えて自分が相手をするつもりで訊ねる亜矢だったが、希美にはそんなつもりは毛頭ない。

今日は何時も本社の中でしか動けないレックスとリレイの2人を気晴らしに外に連れ出してやっただけ。そのついでに自分も昼食を済ませてしまおうとしただけで、他意

は無かった。

寧ろ最近は仁に対して執着する気が失せてきていた。最早相手にされない程力の差がついてしまつて心が折れたのか、それとも彼女にとつても心の拠り所となる2人が居るから仁に執着する理由が無くなつたのかは希美自身にも分からない。だが少なくとも、必要も無しに仁と戦う気が無くなつたのは事実である。

それを希美は正直に伝えた。

「もういいわよ……あの男は。なんか最近、アイツと戦おうつて気にならないし」

「そう……なんですか？」

何と言うか、希美の雰囲気依然在と違い過ぎて亜矢には別人のように見えた。これがあのスパイダーファツジだった希美なのだろうか？ 健を実験台にしたりした人物と同一人物にはとても見えない。本人は否定したが、本当にもう一つの人格が生まれたのではないかと勘繰つてしまう。

亜矢が希美の事を不思議そうに見ていると、満腹になつて満足したのかそれとも亜矢に注目されるのが居心地悪いのか、希美は席を立ちレックス達と共に喫茶店を後にする。

「それじゃ、私達は帰るわ。デйна……門守 仁に宜しくね」

会計に代金を払い店を出る希美に、レックスが再び亜矢を一睨みしてついでいき最後

にリリイが亜矢に頭を下げて店を出て行く。

後に見せに残された亜矢は、暫し3人が出て行った扉を見ていたが店員に声を掛けられて我に返った。

「あの～……お客様？」

「あ！ は、はい？」

「え、誠に申し訳ないのですが、先程のお客様の注文で食材が底を尽きてしまいました……お飲み物だけでしたらお出し出来ませんが、如何いたしますか？」

そう言えば希美もそんな事を言っていた。ここには昼食の為に買ったのだが、飲み物以外出せないと言うのであれば仕方が無い。

亜矢は渋々店を出て、他の店もやっていないのを見ると、肩を落とし仕方なく近くのコンビニで適当な物を買って昼食を済ませる事にした。

周囲を見渡して、コンビニを見つけそこに向かう亜矢。

流石にコンビニの商品までは手を出していないと分かり、ちよつと安堵して店に入ろうとした。

瞬間、亜矢の体に布の様なもの巻き付き振り回すと壁に叩き付けられた。

「うあ、っ!! う、っ?!」

突然の事に反応が遅れ、一瞬意識が飛びかける亜矢だったが新人類に覚醒し肉体が頑

丈になっていた事が幸いした。辛うじて意識を手放す事無く、布が離れると立ち上がって襲撃者を見た。

「くっ!? 誰ですッ!」

立ち上がり周囲を見る。周りには突然の事に困惑した様子の一般人たちが居るが、その中をかき分けるようにして悠々と歩く人影があった。雄成が変身するカラミティ・ハザード2だ。

「あなたはッ!」

「ふむ……ギャラリーが邪魔だな」

カラミティは亜矢の驚きを無視し、ストールを振り回す。先端だけ鋼鉄以上に硬くなったストールが伸び、周囲の物を片っ端から破壊していく。人々は破壊を振り撒くカラミティを見て、自分達も巻き込まれては堪らないと我先に逃げ出す。が、カラミティの破壊は彼らが逃げる速度を上回っており中には崩落する建物の下敷きになる者も少なくはなかった。

「止めてください!! 何でこんな事を!」

「君は歩く時に踏み潰すアリのをいちいち気にする性質かね?」

無関係な人々を巻き込んだことを全く悪びれないカラミティに、亜矢は怒りと同時に悍ましさを感じた。

このままこいつの好きにさせてはいけない。仁と連絡を取っている暇はないが仕方ないと、亜矢は1人で戦う事を決意する。

「これ以上はさせません！」

〈CAT Unite〉

「変身！」

〈Open the door〉

亜矢はルーナ・ユナイトに変身すると、まずはカラミティに対し牽制射撃をしながら逃げ遅れた人の救助に回る。瓦礫の下敷きになった人を、カラミティに攻撃しながら何とか助け出し、まだ無事な人に託して1人でも多く助ける。

「大丈夫ですか？ さ、早く逃げて！」

「は、はい!？」

「あ、足が——!？」

「しつかり……この人をお願いします！」

1人懸命に救助活動を行うルーナだったが、カラミティはお構いなしにルーナに攻撃を仕掛けてくる。ストールを鞭かヌンチャクのように扱い、救助の方に意識を割いて注意が散漫になっているルーナを強かに打ち据える。

「うあつ!? く、ううつ?!」

「余所見をしていていいのかね？ 今日君一人なんだろう！」

「くっ！……邪魔すんじゃないわよ!!」

まだ逃げ遅れた人は居るが、これ以上は逆に戦闘に巻き込んでしまう。ルーナは止む無く救助を中断し、カラミティとの戦闘に注力した。

「テヤアアアッ！」

両手に持った銃剣で斬りかかるルーナだが、カラミティのストールはその程度では切れない。デイナですら駄目だったのに、彼よりパワーで劣る彼女に出来る訳が無かった。

だがルーナにはデイナにはない速さがある。防御の為に自分の視界をカラミティがストールで隠した瞬間、ルーナは素早く背後に回り至近距離から銃撃を加えた。

「むっ!？」

「まだまだっ！」

その後もルーナは動きを止める事無く、持ち前の反射神経と思考速度でカラミティの周囲を動き回り攻撃し続けた。背後からの銃撃、横からの蹴り、距離を取つての精密射撃、正面に回つての斬撃。

その動きにカラミティはついていく事が出来ないのか、されるがままであった。反撃のつもりなのかストールを振り回すが、ルーナの動きを捉える事は出来ない。ルーナは

内心でこのまま勝てるのではと、僅かながら希望を抱く。

だがその希望は儂いものだった。突然ストールがルーナの足を引つ掛け、勢いのままに転倒させられる。

「うわっ!?!」

ストールはルーナの足を引つ掛けただけで終わらず、縦横無尽に巻き付くと彼女の身動きを封じた。

「ぐ、くう——!?!」

「勝てるかも、と思っただろう? 残念だったねえ」

「あ、あんた……態と攻撃を受けてたの!?!」

「研究とは時に待つ事も大事だよ。君も大学生なら分かるだろう」

実際の所、ルーナの攻撃はカラミティに有効とは言い難かった。塵も積もれば山になるとは言うが、塵が積もって山になるには時間が掛かる。塵も積もれば山になる

それどころか、カラミティは仁の遺伝子を用いて変身している。新人類の遺伝子を用いて変身すると言う事は、回復力にも優れていると言う事だ。ルーナに攻撃されても、ダメージを受けた端から彼は回復していた。これでは意味がない。

カラミティに捉えられ、絶体絶命となったルーナ。

そこに騒ぎを聞きつけた仁が漸く到着した。

「亜矢さん！ 変身！」

〈Congrats! Birth of a new life, GRIFFIN.
Open the door〉

仁は速度優先でデイナ・グリフィンライフに変身すると飛翔して一気にカラミティに接近。飛び蹴りを喰らわせルーナを強引に引き剥がした。

「危なかつた、亜矢さん真矢さん。大丈夫？」

「はい………勿論！」

ルーナの救出に成功したデイナは、ハイブリッドアームズを大剣モードで構える。ルーナもその隣でライフルモードのリプレッサージュットIIを向けると、カラミティはデイナに蹴られた箇所を埃を払う様に手で叩きながら立ち上がった。

「ふむ、これで役者が揃ったか………」

「今度は何の用？ まさか俺の血が足りないとか言うんじゃないよね？」

「当たらずとも遠からずだね。更なる研究の為に、より多くのサンプルが必要になったんだよ。出来れば……君ら両方のね」

つまり今のカラミティの狙いはデイナとルーナの両方と言う事か。自分一人ならともかく、ルーナまで狙うと堂々と宣言したカラミティにデイナは仮面の奥で奥歯を噛み締めた。

「……させないよ」

これ以上ルーナを傷付けさせるものかと、デイナは大剣でカラミティに斬りかかる。カラミティはそれを両手で持ったストूलで防ぐが、そうするとルーナに無防備な胴体を晒す事になるデイナの陰から狙うルーナの狙撃が、カラミティの胴体に突き刺さった。

「むう——！」

衝撃に数歩後退るカラミティをデイナがさらに追撃する。デイナはとにかくカラミティに攻撃を続け、ルーナから意識を反らし続けた。そうすれば彼女を守る事に繋がるし、彼女がカラミティを攻撃する隙も作れる。

2人のコンビネーションにカラミティが徐々に押されているように見えた。

が、次の瞬間カラミティは一瞬の隙を見てストूलをデイナの腕に巻き付けた。普段に比べて攻撃がやや大振りになってしまったのだ。

「ぐっ!?!」

まるで万力で締め付けられるかのような圧迫感を腕に感じるデイナ。だがこれはある意味で好都合。自分が引っ張っている限り、カラミティも綱引き状態でその場から動けなくなる。

デイナは空いてる片手でライフルモードにしたハイブリッドアームズを持ち銃口を

向け引き金を引こうとした。

だがそれよりも早くに、ストロールが巻き付いた腕が灼熱の痛みを訴え引き金を引く所の話ではなくなってしまった。

「ぐっ!?! あ、ああああああああつ?!」

「仁くん!?!」

ルーナはデイナを助けようとカラミティを狙撃しようとするが、突然の激痛に踏ん張りが利かなくなつたデイナをカラミティが引き寄せ盾にした。これでは彼女には撃つ事が出来ない。

「うっ!?!」

「2人で挑んだのが間違いだったね!」

撃つ事が出来ないルーナに向けて、カラミティはデイナを放り投げる。投げ飛ばされたデイナを受け止めようとして、ルーナは思わず武器を手放してしまった。

するとそれを待つていたかのように、カラミティがデイナを押し退けルーナに接近すると今度は彼女にストロールを巻き付けた。それも全身を、だ

「あつ!?!」

しまったと思つた時にはもう遅い。デイナと同様、ルーナも突如として体を焼かれる痛みに悲鳴を上げた。

「ぐっ!?!」

上空からのノックアウトクラッシュに、呻き声を上げながら下がるカラミティを見ながらデイナは倒れたルーナを抱き上げる。

「亜矢さん、大丈夫?」

「な、何とか……でも、あれは一体何を?」

ただの熱とは違う痛み。一体何をされたのか分からず困惑するルーナだったが、デイナには今の何が何となく分かった。

「多分、食作用みたいなものだよ」

「食作用?」

「白血球などが病原菌を食べるあれだ。或いはモウセンゴケを思い浮かべてくれればいい」

デイナの言葉を詳しく説明したのはカラミティだった。

伸縮自在で硬さも変えられるこのストールの能力はそれだけではない。本当に厄介なのは、締め付けた相手を「食す」事ができる点だった。ストールが密着した相手の部位を徐々に溶かし、そして吸収する事が出来る。そうして相手の遺伝子情報を奪い取る事が出来るのが、カラミティ・ハザード2の真の能力だった。

つまり今、カラミティは仁と亜矢、2人の新人類の遺伝子を自らに取り込んだことに

なる。

「ふふふ……双星 亜矢君……だったね？ 君の遺伝子で門守 仁君の遺伝子が喜んでるよ。君達は良い相性をしている様だ」

遺伝子には確かに相性の良し悪しはある。それはフェロモンと言う形で現れ、相性のいい遺伝子を持つ異性の体臭は心地良く感じるのだ。

だがカラミティの言葉には何だか別の意味合いが含まれているように感じられて、デ INA はそれが不気味で仕方なかった。

訝しむデ INA が睨む前で、カラミティは踵を返してその場を立ち去って行った。

「それでは、今日はこれで失礼するよ。研究が進んだら君らにも見せに来てあげるから、楽しみにして居たまえ」

そう言つてカラミティは変身したまま、ビルの上を飛び石のようにして離れていった。ビルの上を飛び跳ねて離れていくカラミティの後姿を、変身解除した仁が同じく変身解除した亜矢を支えながら見送った。

第54話：遺伝の法則

リリイとレックスの2人を連れて街へと出ていた希美は、本社ビルに戻るなり周りを保安警察の隊員に取り囲まれた。ファッジにはなっていないが、上から下まで完全武装でライフルを突き付けてくる。

「……何よ？　ちよつと外出てただけでしょ？」

自分達に銃口を向けてくる隊員達を睨みつつ、さりげなく背後のリリイ達を庇うように手を広げる。怯えるリリイは自分の陰に隠し、隊員達に敵意を向けるレックスを手で制しながら周りを見渡していると隊員達をかき分けてアデニンが出てきた。

「勝手にその2人を連れだして、何をやっているはこちらのセリフだ」

アデニンが呆れながら希美に告げた。

元幹部と言う事で希美は本社ビルから外に出る事に対してはこれと言って制約はない。が、リリイとレックスに関しては話が別だった。この2人はただの実験動物として、拉致された挙句アメリカ支社で数々の実験に使われた。この日本で2人を知る者も2人を探す者も居ないだろう事は分かっているのだが、それでも2人が何らかのトラブルの元となる可能性は否定できない。故に2人に関しては外出に著しく制限を掛けて

おいたのだ。

それを完全に無視して、2人を外に連れ出して歩き回った。ともすれば会社に大きな不利益を齎しかねない行動をした希美を、アデニン達が咎めるのは当然の流れであった。

「その2人に外出許可は出していない」

「私が出したわ」

「お前にそんな権限はない」

希美は一步も引かずアデニンと対峙し、リリイとレックスを庇い続ける。

その時、隊員の1人がリリイに手を伸ばした。無理矢理にでも連れて行こうと言うのだろう。

「ヒッ——!?!」

ボディーマーにフルフェイスのヘルメットの人物が銃を持って自分に手を伸ばしてきている事に気付いたリリイが小さく悲鳴を上げた。それに気付いたレックスが咄嗟に彼女を守ろうとリリイに手を伸ばす隊員飛び掛かろうとするが、別の隊員が持つ鍬げ様の制御装置のスイッチを入れた瞬間彼の体に電流が走りその場に倒れた。

「うあ、あああああ??!」

「レックス!?!」

「ッ!？」

電流に身体を内側から焼かれ苦しみ倒れるレックスにリリイが近付く。倒れたレックスにリリイが触れるが、そうすると彼に流れている電流がリリイにも流れ痛みで手を引つ込めざるを得なかった。

触れたものに触れられない事と、苦しむレックスに慌てふためき涙を流すリリイ。その間にも先程の隊員はリリイに手を伸ばし彼女の腕を掴もうとしていた。

それを希美が防いだ。希美は隊員の腕を掴み捻り上げると銃を奪い蹴り飛ばす。そして奪った銃を、レックスの制御装置を操作している隊員に向けた。

「希美……」

「動くな！」

「銃を捨てろ！」

「だったらそれスイッチ切りなさいよ」

周りから銃口を向けられながら、希美は怯む事無く装置を持った隊員に銃口を向け引き金に指を掛ける。固唾を飲んでその様子をリリイが見守っていた。

「お前、この状況分かってるのか？」

「勿論……」

「仮に……でお前が先に引き金を引いたら、お前だけでなく全員お陀仏だぞ？」

脅しをかけるアデニンだったが、希美はそれを鼻で笑った。出来る筈が無いのだ。痛めつけるだけならばともかく、勝手な処分は許されていない。これが明確に研究員などに死人が出たとかなら鎮圧の名目で射殺も許可されるだろうが、希美はともかくリリイとレックスはそこまでの事はしていない。つまりここで勝手に2人を処分したりすれば、罰せられるのはアデニン達の方なのである。

希美はそれが分かっているのです、ここまで強気に出ているのだ。

アデニンも彼女の言わんとしていいる事が分かるので、観念するように溜め息を吐くと目線で部下に指示を出し装置を止めさせた。途端にレックスは脱力し、その場で意識を失う。

「レックス！ レックス、しっかりして……」

気絶したレックスを抱き上げ声を掛けるリリイ。希美は奪い取った銃を乱暴に床に放ると、気絶したレックスを運ぼうと彼の方を見た。

瞬間、アデニンは懐から希美用の制御装置を取り出しスイッチを入れた。レックスに仕掛けられたものよりも強力な電流が希美の全身を貫いた。

「あがあああああああつ?!」

「ノゾミ?!」

今度は希美が装置で苦しめられている事に、リリイが彼女の方を振り返るが保安警察

の隊員がそれ以上の行動を許さなかった。リリイは2人の隊員に取り押さえられ、レックス共々その場から連れて行かれる。

「嫌っ！ 放してッ!? ノゾミ、ノゾミッ!」

叫びながら手を伸ばすリリイだが、その手が希美に届く事なく彼女はレックス共々その場から連れ出された。

後に残されたのは、制御装置で苦しめられる希美とそれを見下すアデニン、それと数人の隊員達だけである。

「うぐうううつつ!? あがが、があああ!? ぎ、ぎいいいつ?!」

驚くべきことに、希美は全身を常人ならショック死するほどの電流で焼かれているにも拘らず連れて行かれたリリイとレックスを追おうと言う事を利かない手足を動かしていた。とは言え手足を動かしているだけでその場からは全く移動できておらず、傍から見ている分には滑稽でしかない光景である。

だがその執念は恐ろしいものがあつた。こんな状態になつても尚、彼女は諦めていないのだ。

その姿は、まるで仁達の様ですらあつた。

アデニンは床を這いつくばる希美を眺めていたが、唐突に装置のスイッチを切つた。電流から解放された事で、希美は苦痛から解放されその場で何度も大きく息をした。

「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ——」

幾分か呼吸した希美は、再び立ち上がりリリイ達の後を追おうとした。が、それはその場に残った隊員達により阻止される。背後から何人も飛び付き、彼女を床に押え付けた。

「うぐつ?! く、うう……。放し、なさいよ——?!」

必死に抵抗する希美だったが、先程の電流でその力は既に削がれている。

アデニンは押え付けられた希美に近付き、しやがんで顔を近付けると髪を掴んで顔だけ持ち上げた。

「うあ、つ?!」

「変わったな……お前も」

「は、はあ?」

髪を掴まれて持ち上げられる痛みに顔を顰めながら、アデニンの言葉に希美は怪訝そうな顔をする。彼女が怪訝そうな顔をした事で自分が何を言ったのかを思い出し、手を離すと立ち上がり部下達に指示を出した。

「そいつは部屋に連れて行っておけ。処分については追って指示を出す。それまでは鍵を掛けて出られない様にしろ」

「ハッ!」

希美はそのまま引き摺られるようにして部屋へと連れて行かれる。電撃で著しく体力を奪われ朦朧とする意識の中、彼女が考えるのはアデニン達への怒りや恨みではなく、連れて行かれたレックスとリリーの安否であった。

「——う〜ん……」

あれから一晩経ち、仁は大学のラボで一人考え込んでいた。

それと言うのも、雄成が口にしたこの言葉がどうにも気になって仕方ないのだ。

『ふふふ……双星 亜矢君……だったね？ 君の遺伝子で門守 仁君の遺伝子が喜んでいるよ。君達は良い相性をしている様だ』

この言葉、そのまま捉えるなら単に仁と亜矢が遺伝子的にも相性が良いと言うだけの話である。だが果たして雄成が態々そんな事を教えるだろうか？ あれが彼なりのユーモアであると言えるばそれまで——それにしただって変態的で趣味が悪いが——だが、仁にはとてもそうは思えなかったのだ。

「俺と亜矢さんの遺伝子で……あの人何をする気なんだ？」

「もしかして、私達のクローンを作ろうとしてるとかでしょうか？」

悩む仁に、紅茶の入ったカップを亜矢が差し出してきた。仁はカップを受け取り、適温に調整された紅茶で一息つくくと亜矢の言葉を否定した。

「ふう……それはないと思う」

「どうしてですか？」

「俺の見立てだと、新人類の遺伝子を手に入れた事で雄成さんがやろうとしてる事は大きく前進した筈。何かをやり遂げようとするまで、多分もうあと一歩か二歩つてところまで来てるんだと思う。勿論その一歩は簡単じゃないんだろうけど、でもここに来て時間が掛かってまごつくような事を雄成さんがするとは思えない」

クローン技術は現代においても完全な技術ではない。生み出されたクローンはオリジナルに比べて寿命が著しく短かったり、何らかの異常を抱えていたりと問題は多かった。

この状況でそんな博打のような事に雄成が手を出すとは思えないのだ。それをするくらいなら、ベクターカートリッジの制作の方がずっと簡単だ。

「……もしかして、私と仁君の遺伝子を掛け合わせて新しい新人類を作ろうとしてるか？」

真矢が何気なく呟いた言葉は、仁も一応考えはした。だが何らかの器具を用いて遺伝子を摂取したならともかく、雄成はライダーの能力を使って遺伝子を吸収したに過ぎない。これでは新たに生み出す事など――

「……………ッ！ あの人、もしかして…………」

「何？ 何か分かったの？」

ここで仁は気付いた。そもそもカラミティ・ハザード2に何故遺伝子吸収などと言う能力があるのか。

恐らくそれは、他の生物の遺伝子を取り込むことで自身を強化する為だ。超万能細胞はどんな遺伝子とも馴染み、どんな形にも変化する。それはつまり、遺伝子を取り込めば取り込むほど強化されていくと言う事。

ただの超万能細胞であればその度合いは1つの遺伝子を取り込むのが精一杯だったのだろう。だが、仁の中で進化し洗練された新たな超万能細胞はその能力が上がった。いや、雄成がベクターカートリッジに加工するに当たって上げられたと言うべきだろう。

サンプル2ベクターカートリッジに使われている遺伝子は、仁の物であって仁ではない。新たに得た能力で、仁と亜矢の遺伝子を取り込み今後どう変異していくのか。

カラミティの今後の変異に仁が不穏なものを感じていると、峰が慌てた様子で2人

に近付いて来た。彼女がこんな風に近付いて来た時は、十中八九ファツジが暴れている時だ。

「門守君！ 双星さん！ 大変ですよ！」

ドタバタと近付いてくる峰に、内心またかと思いつつ仁は亜矢と顔を見合わせ肩を竦めた。何と言うか、もう峰の言う「大変」にも慣れてしまった。

無論その大変の内容は、場合によつては多くの無関係な人々が巻き込まれた本当に非常事態なものである事は分かっている。分かっているのだが、何と言うか感覚が麻痺してしまつたのだ。

これではいけないと、仁は頭を振って気持ちを切り替えた。

「どうしたんです？ 今度は何処にファツジが出たんですか？」

「そんな落ち着いてる場合じゃありませんよ！ 警視庁です！ 警視庁が襲撃されてるんです！」

峰が慌てているのだから、街中にファツジが出現して暴れているのだらうと思つていたがどうやら予想の斜め上な事になっているらしい。

しかし警視庁……恐らくはS. B. C. T. を完全に叩き潰す為に行動を起こしたのだらう。雄成の計画はそれだけ佳境に入りつつあると言う事だ。

だが同時に、これも仁と亜矢を誘き出す為のアクションであると言う可能性も捨てき

れなかった。何も考えずに警視庁に向ったら、傘木社に待ち伏せを受けてしまう可能性も無くはない。

仁はその可能性を考えチラリと亜矢の事を見ると、彼女は目に覚悟を宿しながら頷き返してきた。彼女もその可能性は考えているし、その場合も覚悟の上なのだろう。

「……行くかうか」

「はいー」

まあどの道2人に行かないと言う選択肢はなかった。傘木社だって警視庁を襲撃すればS・B・C・Tによる反撃がある事は分かっている筈。それを承知の上で襲撃したとすれば、連中は迎撃を下せる自信があると言う事だ。

放置する訳にはいかないだろう。

仁と亜矢は手早く準備を整え、トランスポゾンで警視庁へと急いで向かった。

近付くにつれ、街の喧騒とは違う騒動の音が聞こえてきた。2人がバイクを走らせるほうに向けて逃げるように走る人の姿も見えてくる。次第に乗り捨てられた車と、破壊痕の様なものも目立つようになってきた。それらが見える頃には、もう無数の銃声が聞こえる位になっていた。

「変身！」

仁と亜矢は警視庁に到着する直前、デイナ・ミノタウロスライフとルーナ・ユナイト

に変身した。

2人が到着した時、そこは戦場ではなく惨劇の場であった。

警視庁の建物の前に倒れている無数の警察官。奇襲だったのだろう。その多くは制服を着た警察官だった。S. B. C. T. の出動準備が整うまでの間、決死の思いで迎え撃つてくれていたのだ。

その彼らの奮闘を、襲撃者——仮面ライダーカラミティは嘲笑うかのようにS. B. C. T. の隊員達を血祭りにあげていた。

「フーン！」

「ぐああああつ?!」

「ハッ！」

「ぐふ、ああ……」

カラミティはたった1人で、迫り来るライトスコップ達をストールで打ち倒している。ある者は全身がバラバラになるほど締め付けられ、ある者は胸を貫かれ、ある者は振り回されて全身を叩き付けられる。

次々と倒れていく隊員達を見て、宗吾が変身しているスコップ1号はこれ以上被害を出すまいとカラミティに挑む。

「うおおおおおっ！」

ボルテックスブレードでカラミティに斬りかかるが、カラミティはそれをストールも使わず片手で刃を掴んで受け止めた。

宗吾はそれを待つていた。

「そう来るだろう事は予測済みだ！」

「ん？」

片手が塞がってしまえば、ストールによる防御は使えない。いや仮に使えたとしても、これからスコープ1号が行う事を防ぐことは叶わなかっただろう。

スコープ1号はカラミティに攻撃を仕掛ける直前、ライオットバトンを精製していた。高圧電流を相手に流すトンファード。触れただけで相手を痺れさせる。しかもこの至近距離、外す道理が無い。

「らあっー！」

放電状態にしたライオットバトンを、思いつきりカラミティに叩き付けた。放電部位がカラミティの腹部に押し当てられ、強烈な電流がカラミティに流れる。

「ぐおおおおっ?!」

自身の中を電流が流れていく感覚に、流石のカラミティも堪えるのか苦悶の悲鳴を上げた。

それを遠目から見ているダイナとルーナ。

「やった、効いてる！」

「……………いや、駄目だ」

あれは有効打だろうと拳を握るルーナだが、デイナはそうは思わなかった。それを証明するかのように、カラミティは唐突に悲鳴を止めた。

「おお……と、思ったかね？」

「何ッ!？」

「フン！」

「ぐあっ?!」

全く聞いていないかのようなカラミティの様子に、スコープ1号が驚き呆気にとられてみると裏拳で殴り飛ばされる。その衝撃でライオットボタンは何処かへ飛んで行ってしまった。

「な、何故? どうやって電撃を防いだ!？」

「ストールだよ」

「門守君!!? それに双星さんも!」

「やあ待っていたよ2人共。……気付いたかね?」

「遠目に見てれば気付くよ」

デイナが見ている先で、カラミティはライオットボタンが振るわれる直前にストール

を地面と密着させていた。あれがアースの役割を果たし、電流はストールを通じて地面へと流れていくのでカラミティには殆どダメージが無かったのだ。

「……それで？ 今日は何でまた警視庁に？」

「何、カラミティが君らの遺伝子のお陰で更に強くなつたからね。その性能を見ようと何時ものように彼らに相手をしてもらつただけさ」

つまり彼にとつて、S・B・C・Tは体の良い巻き藁でしかないと言う訳だ。自分達が射的の的ではないと言われ、スコープ1号が仮面の奥で奥歯を噛み締める。

「俺達が……ただの的だと言いたいのか!？」

「その通りさ。いやしかし、君らは本当に扱いやすいよ」

「何!？」

激昂するスコープ1号を前にしても、カラミティは悠然とした態度を崩さない。それどころかまるで見下しているようにすら見える。いや、実際見下しているのだろう。彼にとつて、自分に追従できる頭脳を持つ仁以外は全て有象無象でしかないのだ。

「考えても見たまえ。自衛隊に匹敵する装備を持つ組織が、必要とは言え警察の中でそんな簡単に作られると思うかい？」

「それは……まさか——!？」

最早S・B・C・Tの装備は自衛隊のそれを上回っている。戦車や戦闘機の類な

どこそ存在しないが、歩兵レベルの装備は自衛隊の部隊など比べ物にもならない。仮に同数のS・B・C・T・と自衛隊が戦闘を行えば、勝つのはS・B・C・T・の方だろう。

そんな部隊が、警察組織の中で作られるなど普通はあり得ない。殊更に軍備云々に五月蠅い政治屋共が許さないだろう。それがこうして存在しているのは、実際の被害が洒落にならないのもそうだが何よりも外部からの横槍で反対意見が抑えられ発足を促されたからだ。

「フッフ、そうさ。私が関係各所に働きかけたんだよ。あの頃は仮面ライダーも居なかったから、テストの相手が居なくて困っていたからね」

つまりはそう言う事だ。雄成は、作り出したファツジの能力を実戦で測る為の敵としてS・B・C・T・を作らせたのだ。

「き、さ、まあああああつ!?!」

「ツ!?! 権藤さん、待って!」

辛抱できなくなったスコーパー1号がボルテックスブレードを振り上げてカラミティに突撃していく。ルーナが制止するが、彼女の言葉も届いていない。

「ふざけるな!?! 貴様の下らん発明の為に、一体何人の部下が死んだと思ってる!?! 部下だけじゃない! 無関係な市民も、俺の妻と娘も貴様が作ったファツジに殺されたん

だぞ!？」

怒りに任せてボルテックスブレードを振るうスコープ1号だが、カラミティは彼の攻撃をストールも使わず片手で捌いていく。それが腹立たしくて、スコープ1号は更に苛烈に攻撃した。足元に落ちていた部下のガンマソードを攻撃の合間に拾うと、それを使つて二刀流となつた。

「貴様がツ!! 貴様らがあつ!!」

「……………ハッ!」

「ぐうつ!」

暫くスコープ1号に付き合うように攻撃を防いでいたカラミティだが、一瞬の間隙を突き掌底をスコープ1号の胸板に叩き込み吹き飛ばした。吹き飛ばされたスコープ1号は停めてあるパトカーに激突して凹ませ、そこで限界が来たのか変身が解除された。

凹んだパトカーに座るように凭れ掛かる宗吾を、ルーナが心配して駆け寄る。

「く、そ——!？」

「権藤さん、大丈夫ですか?」

「あ、ああ……」

まだ宗吾の意識はあるらしい。流石のタフネスだ。だがあれでは戦闘どころか退避も儘ならない。彼とルーナを守るように、デイナがカラミティの前に立ち塞がった。

既にスコープ1号からは興味を失ったのか、カラミティは、ダイナに意識を向けてい
る。

「そう言えば、君らにも感謝をしないとね」

「ん？」

「君のお陰で私の研究は捗り、計画は大きく前進したんだよ」

「別にアンタの為じゃないよ」

「計画って、一体何なんですか!?!」

宗吾を助けに来た他の隊員に任せ、ルーナがダイナの隣に並び立つ。彼女は分からな
かった。カラミティが、雄成が何故ここまで人命を軽視して超万能細胞やファッジの実
験をするのか。

「知つての通り、新人類に覚醒する為には超万能細胞をただ人体に注入すればいいと言
う話ではない。それは何故か、分かるかね？」

「何故って……」

「白上から聞いてはいるだろうが、超万能細胞は他の細胞に伝播し全身を超万能細胞に
置き換える。全身を超万能細胞で満たされた人間なら、それは新人類と言えるだろう。
だが話はそう簡単ではない。何故だか分かるかね？」

まるで大学の講義を受けている様な感覚に、ルーナは場違いにも真剣に考えてしま

う。だが言われてみれば、最初に超万能細胞に関して聞かされた時に新人類が生まれる可能性を白上教授から聞かされた。

その言葉を信じるなら、そもそもベクターカートリッジやデйнаドライバーは新人類に必要な筈だ。一体どう言う事か？

その答えを口にしたのはカラミティではなくデйнаであった。

「超万能細胞は、劣性遺伝だから……でしよ？」

「え!？」

「ほほお、そこまで調べていたか。流石だ」

「ちよつと待つてくださいい仁くん、劣性遺伝って!？」

「そうだよ、亜矢さん。超万能細胞はただ人の体に入れてだけじゃ駄目なんだ」

劣性遺伝とは、端的に言えば遺伝し辛い遺伝形質の事だ。血液型のO型など、他の遺伝形質があるとそちらに優先されて表に出ない形質で、発現する為には男女が互いに同じ劣性遺伝を持つ必要がある。勿論全く表に出ない訳ではなく、例えばA型の血液でも実際にはA型とO型から生まれたAO型の血液型であれば、相手が同様にO型の形質を持つBO型などであれば低確率だがO型の血液型となる可能性がある。

超万能細胞の遺伝子も同じ、いやそれ以上に遺伝形質としては弱いのだ。

「試しに、超万能細胞を植え付けた超人の男女2人に子を何度も作らせてみたが、結果は

全てただの人間だった。どうやら全身が超万能細胞になっても、ただの人間だった頃の遺伝子は健在らしい。どうも遺伝子そのものが変わるんじゃないやなく、遺伝子に超万能細胞の情報が連結されただけの様だ。だから子を成してもただの人間しか産まれない」

「何て、事を——!?!」

「悪魔めツ!」

カラミティの口から語られる実験の内容は正に悪魔の所業と言つても過言ではなかつた。人を人とも思わぬ実験。生命の神秘とも言える子孫を残す行為すら冒瀆するかのような行為に、ルーナと宗吾は生理的嫌悪感を感じずにはいられない。

「デイナは先程から黙っているが、その拳を見れば彼も少なくとも悪感情を抱いている事は察する事が出来るだろう。自らの知的好奇心を満たす為ならば、己の身を犠牲にする事も厭わぬ彼だがそれでも最低限の分別はあった。」

もうこれ以上、彼らを野放しにする訳にはいかない。

「雄成さん……俺とアンタは同類だ、そこは認めるよ。だけど……俺はアンタみたいにはならない」

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「ほう? ではどうするのかね?」

「決まってるでしょ……ここで止める。ゲノムチェンジ」

Amazing! Revelation of the legend, DRAGON. Open the door

デイナを選んだのは絶滅した恐竜の遺伝子であるケツアルコアトルスとスピノサウルスのベクターカートリッジ。嘗てこの地球上に存在し、そして今は虚構の存在となつたそれが現代に蘇り、そして生み出されるのは正に伝説の存在。

その名はドラゴン……デイナ・ドラゴンライフ。史上最強の空想の生物が今、遺伝子と科学の力を借りて現実に姿を現した。

現実に姿を現した伝説を前に、カラミティは委縮するどころか興奮した様子でデイナと相對していた。

「ほほおー！ それはそれは……とても興味深い。是非ともデータを取らせてほしいものだ！」

デイナ・ドラゴンライフに向かい、カラミティはストールを翻して接近する。ストールを掴んで振り回し、先端が硬質化したそれを一気に伸ばしてデイナを貫こうとした。

デイナはそれを、以前までと異なりマントの様になった翼を翻す事で防いだ。こちらのマントも見た目に反して相当に硬いのか、布状の物同士がぶつかり合ったとは思えない音を立ててストールを弾いた。

カラミティはその後ストールをヌンチャクのように振り回し、縦横無尽にデイナを攻

め立てる。以前よりも格段に戦闘力が上がったカラミティは、太古の生物の力を伝説の領域にまで引き上げたデイナの力を以てしても圧倒できるものではなく、それどころかこの形態だからここまで食い下がる事が出来ていると言つても過言ではなかった。

今のカラミティはそれほど強くなつていた。

「くう……ん」

しかしデイナもやられてばかりではない。振り回されたストールを逆に掴むと、自分の腕に巻き付けてストールによる攻撃を塞いだ。

「ツッ・駄目です仁くん！ そんな事したら——!？」

あのストールには触れた生物を分解して吸収する力がある。デイナドライバーで変身するライダーにとって天敵の様な能力だ。そのストールに腕を巻き付けるなど、ワニの口に腕を突っ込むも同然の行為。あまりにも無謀過ぎた。

案の定、ストールを巻き付けた部分からは肉が溶けるような音と共に煙が上がり始めた。デイナの遺伝子が溶かされ吸収されているのだ。それを見てルーナはリプレックスーショットIIを抜きカラミティに向けた。

だがこれが危険な行為である事はデイナ自身がよく理解している。理解した上での行動だった。彼はこの状況から、逆転の秘策を考え付いていた。

「ぐ、つうっ!?……はっ、そんなに食いたいなら、好きなだけ食わせてあげるよ」

〈ATP Burst〉

腕を焼かれながら、デイナはレセプタースロットルを引いた。すると進化した事で更に出力を増したATPが瞬く間に産生され、デイナの意思でスツールを巻き付けた腕に流れていく。

「ッ!?! しまった!?!」

ここで漸くカラミティはデイナの目的に気付いた。彼は態と腕を巻き付け、自分とカラミティの間に物理的な繋がりを作り出したのだ。スツールを通じて強制的にエネルギーを送り込んで、カラミティをショートかパンクさせる為に。

「くっ!?!」

強制的にエネルギーが流された事で早くもスツールからは嫌な煙が上がり、逆流の様にエネルギーが流し込まれたカラミティは体が内側から弾けるのではという錯覚に陥った。これ以上は不味いと、デイナを振り払うべく何度も殴り付ける。

だが、デイナは決してカラミティからは離れなかった。どれだけ殴られ、装甲が凹み欠けたりしようとも、エネルギーを流し込み続けた。

そして遂に、カラミティの方に限界がやって来る。

「ぐ、あああああつ!?!」

カラミティの叫びと共に、スツールが弾け大きく吹き飛ばされた。デイナも同様に吹

き飛ばされるが、こうなる事が分かっていたデイナは直ぐに体勢を立て直す。

「こいつで、終わらせる」

〈ATP Burst〉

そこでさらに追い打ちとして、カラミティに向けノックアウトクラッシュを放った。既に腕を焼かれた上に殴られまくり、更には爆発にまで巻き込まれデイナは満身創痍と言った様子だがそれでも技を放った。

エネルギーを集束した飛び蹴りがカラミティに向け飛んでいく。

「ふふ、待っていたよそれをー」

その瞬間、カラミティは素早く立ち上がるとサンプル2ベクターカートリッジをドライバーから引き抜き掲げた。ちょうどデイナのノックアウトクラッシュの射線線に入るように……。

「なっ!?!」

まさかベクターカートリッジを盾にするような真似をするとはデイナも思っておらず、そのまま技を放ってしまった。飛び蹴りはベクターカートリッジに直撃し、最初はそのままカートリッジを破壊してしまうかと思った。

だが、次の瞬間、デイナですら全く予想もしていなかった事が起こった。

何とベクターカートリッジがデイナのノックアウトクラッシュのエネルギーを吸収

したのだ。

「えっ!?!」

かなりの出力のエネルギーを集束していた筈なのだが、サンプル2ベクターカートリッジは全てのエネルギーを吸収してしまった。エネルギーを吸収されつくし、デيناは勢いを失うとその場に落下し背中を地面に打ち付けてしまう。

「ぐっ!?! な、何が……?」

「ふふ、ふふふふふ……」

混乱するデيناに構わず、カラミティは手の中のベクターカートリッジを見つめる。カートリッジに内包された超万能細胞。その色が、燈から赤に変化した。

「ははっ! はっはっはっはっはっ! 素晴らしい! 君の遺伝子はなんて素晴らしいんだ、門守 仁君!」

〈ADVANCE〉

仁の遺伝子から作られたサンプル2ベクターカートリッジ。仁の遺伝子をそのまま使わず、遺伝子情報をモデルに1から超万能細胞を加工する事で作り上げたそれは、精製の過程で思わぬ能力を獲得していた。

適応能力を更に進化させた、吸収能力だ。外部からの刺激を吸収し、それにより更に進化する事が出来る。カラミティが同じハザード2でありながら短期間でここまで強

化された最大の原因だ。

以前の戦いで、ルーナのノックアウトクラッシュを受けた際、サンプル2ベクターカートリッジはそのエネルギーを吸収していた。雄成はその事に気付き、今こうして同様にテイナのノックアウトクラッシュのエネルギーを吸収したのだ。

あの時とは比べ物にならない芳醇なエネルギー。それはベクターカートリッジに内包された超万能細胞の更なる進化を促した。

〈ADVANCE + ORGANISM Experiment. Biologi
cal disaster warning issued〉

「さあ、見たまえ……更に進化したカラミティを!!」

〈Biohazard〉

第55話：あまりにも苦すぎる味

〈ADVANCE + ORGANISM Experiment. Biologi
cal disaster warning issued〉

「さあ、見たまえ……更に進化したカラミティを!!」

〈Biohazard〉

カラミティの姿が光に包まれる。ダイナ達はそれをただ見ている事しか出来なかつた。

光のシリンダーの中で、薄らと浮かび上がるカラミティの姿がハッキリとした形を成していく。そしてカラミティが内側から破り、その姿を太陽の下に晒した。

「カラミティ……ハザード3」

誰が呟いたか、そんな言葉が辺りに響く。

装甲と複眼の色は赤に変色し、首周りからはストールが消えていた。複眼には左右斜め上に向かいCの字が二つに増えているが、これまでの中で姿としては最もシンプルだ。正直、何かが強くなったという印象はあまりない。

だがダイナは背筋に冷や汗が流れるのを感じずにはいられなかった。ハザード2に

なった時も、同様に攻撃力が下がった様に見えてとんでもない能力をもっていたのだ。あの姿も、きつと見た目以上に危険な能力を持っているに違いない。

そもそも特殊な能力が無くても、パワーなど基礎能力がデイナを大きく上回っている可能性はあった。

「くっ!?!」

みすみす進化を許してしまった事に、ルーナが歯噛みしながら発砲する。銃弾が何発もカラミティの装甲やアンダースーツに命中するが、カラミティを傷付ける事無く全て弾かれてしまった。案の定防御力が圧倒的に上がっている。

ならばとデイナが殴り掛かった。銃弾が通用しない相手に格闘が何処まで通用するかという問題はあるが、ドラゴンライフとなったデイナの一撃は銃弾をも上回る。大きなダメージにはならなくとも、多少は通用する筈だ。

しかし、次の瞬間デイナに伝わったのはカラミティを殴った感触ではなく水か何かに手をつ込んだような手応えの無さだった。

「えっ!?!」

その光景にデイナは目を見開いた。デイナの手はカラミティに弾かれるどころか、肘までカラミティの胸板に突き刺さっているのだ。にも拘らず、デイナは何の手応えを感じる事も無く、そしてカラミティも全く堪えた様子を見せない。

「あれはあのファッジと同じ!」

その光景を見てルーナは以前遭遇したファッジを思い出した。先日スコープ1号と共に突入した工場内で遭遇したリキッドファッジ。あいつもあんな風に体を液化化させる能力を持っていた筈だ。

だがデイナはそのファッジとは大学で一瞬遭遇しただけで殆ど知らない。だからカラミティの新たに獲得した能力に驚き、僅かながら動きを止めてしまう。

それが悪手だった。カラミティの体に潜り込んでいる腕が唐突に激痛を訴えたのだ。

「ぐあああああああ?! ぐううううつ!」

これはストールで消化吸収されている時と同じ現象だ。カラミティは体を液化化させ、液化化した体で包んだ相手をそのまま消化吸収できるらしい。

これはリキッドファッジも持つていない能力だ。リキッドファッジに出来る事は飽く迄も体の液化化のみ。それ以上の事は出来ない。これはリキッドファッジの完全上位互換の能力と言えよう。

デイナは慌てて腕を引き抜こうとしたが、突き刺した時は殆ど手応えが無かったのに引き抜こうとすると腕が全く動かない。

思わずもう片方の手でカラミティの顔を殴ってしまったが、その手も水に手を突っ込んだかのような感触と共に顔に突き刺さり先の腕と同様消化吸収され始める。

「ぐうあああ、ああああああああつ?!」

「仁くん!」

「双星さん、これを!」

「デイナを助けようとするルーナだったが、慎司がそれを引き留め何かを渡してきた。彼が渡したのは先程カラミティの攻撃で吹き飛ばされたライオットバトンだった。先日の戦闘でリキッドファッジの弱点を見ている慎司は、カラミティが液化化能力を持つているのを見てこれを回収してきたのだ。」

「あの能力にはこれが有効な筈です!」

「そっか、ありがとう!」

慎司からライオットバトンを受け取ったルーナは、電撃を纏ったトンファアーを手にカラミティに向って行く。彼女が向かった時にはカラミティは全身を液化化させ、デイナを飲み込むように彼の全身の殆どを飲み込んでいた。

「あぐ……あ、ああ……」

全身を焼かれ消化吸収される痛みに、デイナはもう立つ事も出来ないのかその場に蹲り呻き声しか上げない。

そのデイナに覆い被さるように包み込んでいるカラミティの、唯一形を保っている頭にルーナはトンファアーを叩き込んだ。

「仁君から離れろ、この変態ッ！」

バットをフルスイングするようにトンファーを振るい、カラミティの頭を殴り飛ばす。ルーナの接近に気付いたカラミティは、デイナから離れようとするが、僅かに間に合わず電撃を纏うトンファーがカラミティを殴り飛ばした。

「ッ！」

殴り飛ばされたカラミティは空中で形を戻しながら飛んでいき、体勢を立て直すと危なげなく着地した。着地した際、その体からはルーナの一撃の影響が僅かに放電を纏っていた。

「ぐ、うう……」

「仁君、大丈夫!? しっかり!」

カラミティから解放されたデイナの様子は酷いものだった。背中の翼になるマントは溶けて殆どなくなっており、全身の装甲もボロボロだ。

それでも新人類となった体は直ぐに彼の体を癒したのか、見た目はボロボロだがすぐ立ち上がれるくらいにはなった。

「あ、ありがとう、真矢さん……今回はヤバかった」

「気にしないで。それよりあいつ……」

デイナを助け起こしながら、ルーナは殴り飛ばしたカラミティを見る。カラミティ

は、全くダメージを感じさせない佇まいで肩や首を回していた。

「効いてない!? 電撃を地面に流す時間は無かったのに!」

「多分、電気の刺激も吸収されたんだ」

「そんな——!?!」

電撃すら吸収されてダメージにならないとなると、もうどんな攻撃をすればいいのかルーナには分からなかった。受けた全ての刺激を吸収して無力化してしまう様な奴を、一体どうやって倒せばいいと言うのか。

先程デイナはハザード2のカラミティに対し、ストールの吸収能力に対し過剰なエネルギーを流し込む事でダメージを与えていた。だが恐らく今のカラミティに同じことをやっても全て吸収されてしまうだろう。ハザード3に進化して、ただ特殊能力が変化しただけなどと言う事はない筈だ。基本的なスペックも軒並み上昇しているに違いない。当然、吸収できるキャパシティも増えている。現実的ではない。

この時、デイナの脳裏には逃走も一つの案として浮かんでいた。流石にこの状況は彼でも勝ち目が見えない。一度退いて、作戦を練ってから再び挑むのも一つの手だ。

しかしここで逃げれば、それは宗吾達を見捨てることになる。デイナとしてもそれとても心苦しく、選択肢としての優先度は最下位であった。

逃げると言う選択肢が無いのであれば、後は戦うしかない。だが肝心の戦い方が思い

付かない。

この状況で彼にとつての最善は――

「――亜矢さん、真矢さん、よく聞いて」

「何、仁君？」

「権藤さん達を連れてこの場を離れて。時間は俺が稼ぐから」

ルーナはデイナの発案に絶句した。彼一人残して逃げるなど、そんなの出来る訳がない。

「嫌です?! 絶対に嫌です?!」

「でも、言いたくないけど今の俺達じゃあの人に勝てない。だったら逃げるしかない」

「それなら仁君も一緒に逃げればいいじゃない!?!……そうですよ! 何も仁くんだけがここに残る必要なんて……」

「いや、そうするとあの人は俺達を追い掛けてくる。正直、権藤さんや他の警察の人達を守りながらあの人から逃げきる自信はない。それなら、誰か一人が残つてあの人を足止めをする以外ない」

「それなら私が残ります! 仁くんよりまだ余裕がありますから大丈夫です!」

ルーナはまだ大してダメージを受けていない。対してデイナは先程の戦闘で大きく傷つけられた。足止めをすると言うのなら、体力的に余裕がある方が残った方が良く

決まっている。

しかしテイナは首を縦には振らなかった。彼は頑なにルーナを先に撤退させようとした。

「いや、逆だよ。俺が抜かれた後、雄成さんが追撃するかもしれないし逃げた先に伏兵が居るかもしれない。その時、権藤さん達を守る為に体力に余裕のある方がついていった方が良い」

「それは……でも……」

なるほどそれは確かに筋が通っているように聞こえる。だがルーナにはそれは詭弁に聞こえた。大体この場に部下が一人も居ないのに、カラミティが部下を逃げ道を塞ぐように配置しているだろうか。

渋るルーナの姿に、テイナは苦笑すると彼女の頭を優しく撫でた。

「あ——」

「大丈夫。皆が逃げきれたら、俺もすぐに逃げるから。約束する」

仮面越しに真摯な目で見つめてくるテイナに、ルーナも何も言えなくなってしまう。何より彼女は、仁の頑固さを知っていた。故に、この程度で彼が意見を曲げない事もよく分かつている。この状況で彼を動かすなら、感情ではなく理論で彼を説かねばならない。だが生憎と彼女に、そこまでの知恵は無かった。

悩んだ末に、ルーナは渋々首を縦に振った。

「約束……約束ですよ……絶対、絶対に逃げてね！」

「ん、分かつてる。さ、早く逃げて」

促されてルーナはデイナから離れると、宗吾達に事情を説明し撤退を開始した。宗吾は当然渋ったが、戦力をズタボロにされた上に警視庁内にはまだ避難が済んでいない警官達が居る事もあつて首を縦に振らざるを得なかった。

生き残りを無事な車両に詰め、大急ぎでその場を離れていくS・B・C・T.と警官達。ルーナも彼らの護衛の為についていき、その場にはデイナとカラミティだけが残された。

デイナは彼らが逃げる間に、カラミティが彼らに襲い掛からない様にと立ち塞がるが、不思議と生き残りが逃けている間、カラミティはその場で微動だにしなかった。

彼が口を開いたのは、最後の車両と思われるものが警視庁から離れて行った時だった。

「——さて、これで邪魔者は居なくなつたね」

「……やつぱり、目的は俺だつたんだね」

「それも勿論あるが、S・B・C・T.をそろそろ始末しようと思つていたのも事実だよ。もうテストは必要ないからね」

ルーナには黙っていたが、デイナにはカラムティの狙いが最初から自分にあると分かっていた。分かっている、この事に關しては伏せていたのだ。明かせば彼女は絶対に自分だけ逃げる事に首を縦には振らないから。

「あれだけ俺の血を持っていったのに、まだ足りないの？」

「血だけでは分からない事が多いんだよ。やはり研究の為には、丸ごとのサンプルが必要不可欠だ」

今日警視庁を襲撃した最大の理由はそれだった。最早不要となったS・B・C・T.を始末すると同時に、彼らを助けに来たデイナ——仁を確保し研究サンプルにする。一石二鳥の作戦だ。

「……はあ」

デイナは溜め息を吐いた。ルーナに、亜矢と真矢に嘘をついてしまった事を悔いているのだ。彼には最初から逃げる気はなかった。逃げられると思っていなかったし、逃がしてくれるとも思っていない。

もしここで逃げたりすれば、彼は全力で追いかけてくるし逃げきれたとしても傘木社の全てを使って追跡してくるだろう。そうなれば、亜矢にも無用な危険が及ぶ。

「亜矢さん、真矢さん……ゴメンね」

2人に謝罪しながら、家に隠すように置いてある亜矢へのプロポーズの為の指輪を思

い浮かべた。

(結局……無駄になっちゃったな)

恐らく自分は助からない。ここで負けて、雄成に連れて行かれ、モルモットとして細胞の一片まで使われる。亜矢に会う事も、プロポーズする事も叶わないだろう。

だからせめて彼は願った。彼女達の今後の人生に少しでも多くの幸がある事を。自分と居る以上の幸せを彼女が見つ付けてくれることを願って、デイナはカラミティとの戦いに臨んだ。

「——あああああああああつ！」

らしくなく雄叫びを上げながら突撃するデイナを、カラミティは正面から迎え撃つた。

そして——

気付けば空には分厚い雲がかかり、冬場の冷たい雨が降り出していた。夏の雨と違い

勢いはないものの、夏場とは比べ物にならない冷たさを持ち濡れた者の体温を気温も相まって急速に奪う。

「はあ……はあ……」

その雨に濡れながら、デイナはカラミティと対峙していた。ドラゴンライフ自慢の装甲は見るも無残にボロボロで、手に持ったハイブリッドアームズも半ばから折れている。

一方のカラミティは全くの無傷。嫌味なほどにピカピカな装甲が、降りしきる雨を弾いてキラキラと輝いている。

「はあ……くつ。あああああつー」

勝負は明らかかな状況で、デイナは半壊したハイブリッドアームズで斬りかかった。足取りはフラフラで、振り上げていると言うより振り回されている感じだがそれでも彼は構わず突撃した。

決死の覚悟で突撃してくるデイナを前に、カラミティはゆらりと動く。静と動の様な対極の動きをする2人が接敵した瞬間、カラミティの右腕が形を失った。

赤い液状の不定形な右腕が、一瞬で深紅の刃になり目にも留まらぬ速さで振るわれる。それと同時にハイブリッドアームズを振り下ろすデイナ。

「フツ……」

カラミティが右腕を一閃すると、デイナのハイブリッドアームズが粉碎される。デイナはバラバラになり柄だけになった武器を手に呆然と立ち尽くし、無防備となったデイナにカラミティはトドメとなる一撃を放った。

「これで、終わりだ」

〈ATP Full blast〉

「く、うう——!?!」

〈ATP Burst〉

勝ち目はないと察しつつ、せめて抵抗だけはとデイナも必殺技を発動させ、カラミティのデッドエンドクラッシュと正面からぶつかり合う。

だが今までが一応は拮抗出来ていたのに対し、今回は違った。

デイナのノックアウトクラッシュは、カラミティのデッドエンドクラッシュを前に儼く打ち破られデイナはカラミティの必殺技を諸に喰らってしまった。

「あ——」

その瞬間、一瞬全てが制止したようにデイナは感じた。痛みも何も無く、降りしきる雨の音すらなくなった無音の世界。

だがそれは刹那の出来事。体感する時間が元に戻った瞬間、デイナは強烈な速度で蹴り飛ばされ警視庁の壁に激突した。

「がはっ?!」

デイナが壁に叩き付けられ、崩れ落ちる壁面と共に地面に落下し倒れる。今まで根性で変身を維持してきたが、ここが彼の限界だった。遺伝子に直接ダメージを与えるカラミティのデッドエンドクラッシュが、デイナの細胞を破壊し変身解除に追い込んだ。

「ぐ、う……」

力無く地面に倒れ冷たい雨に晒される仁に、カラミティがゆっくりと近付いていく。全身を破壊しつくされた仁に、もう抵抗する術はない。今の彼に出来る事は、亜矢の無事を祈る事だけであった。

意識が朦朧とする中、仁は自分に近づくカラミティの姿を見つめる。ダメージの影響もあり視界もぼやけているが、それでもカラミティの深紅の鎧は良く見えた。

その鎧の表面で、一発の銃弾が弾けた。

「——え?」

「ん?」

一瞬、逃げ遅れた警察官が仁を助ける為に発砲したのかと思つたが、銃弾の飛んできた方を見て仁は目を見開いた。視界はぼやけているが、あの姿は見間違えない。

そこに居たのは、カラミティにリプレッサーショットIIを向けるルーナだった。

「あ、亜矢さん……どうして——!?!」

「どうして……仁くんを置いていける訳がないじゃないですか」

ルーナは途中まで宗吾達と共に逃げていたが、やはり仁の事を見捨てる事は出来なかった。それに加えて一向に待ち伏せなどが無かった事も決断を促した。宗吾達に危険が及ぶ可能性が低いなら、仁を助けに向かいたい。

勿論宗吾達は垂矢を説得した。仁の心意気、決断、覚悟を踏み躪るのは良くないと。確かに、ここに来てルーナが戻ったらそれは仁の覚悟を無意味にする行為に他ならぬ。それはルーナだつてわかっている。

それでも、彼女の中で仁を一人置き去りにすると言う選択肢は早々に消えた。やはり彼を見捨てる事は出来ない。彼をみすみす死なせるような事になれば、自分は一生後悔する事になる。そんな思いをするくらいなら、仁と共に運命を共にした方がずっとマシだった。

尤も、彼女には仁を犠牲にする気などさらさら無かったが——
「次は君が相手かね？」

カラミティがルーナに手を向け首を傾げる。その様はまるで相手をダンスに誘っているかのようだ。

だが、それに対するルーナの答えは、彼にとつても仁にとつても予想外の物であった。ルーナは突如、二丁のリップレッサージュを落とし変身を解除したのだ。

「えっ?」

「何?」

困惑する仁とカラミティの前で、雨に濡れながら亜矢は両手を上げた。誰がどう見ても降参のポーズである。

「何のつもりかな?」

「……………私を……………私を連れて行ってください」

「え、亜矢さん——!」

まさかの言葉に仁が立ち上がり亜矢に近付こうとするが、カラミティに敗北したダメージで体と言う事を利かない。

カラミティはと言うと、亜矢からの提案に顎に手を当てて思索していた。

「ふむ……………」

「あなたの目的は、新人類のサンプルですよ? 私も仁くんと同じ新人類です。サンプルとしては不足はない筈です」

「待つて……………亜矢さん、待つて……………」

這いずりながら亜矢に近付く仁だったが、その背をカラミティが踏みつけた。動きを封じられた仁には、2人のやり取りを見ているしか出来ない。

「ぐうっ!」

「確かに、君の言う通り私は新人類のサンプルを欲している。だから君が望むなら、君を連れていく事も吝かではない。しかしね、サンプルは多い方が良いのも事実。君を連れて行くとして、門守 仁君も連れて行けば私には得だ。それが出来るだけの力もある。君の提案に私が乗る、メリットが無いとは思わんかね？」

実際、カラミティはどうせなら二人一緒に連れて行こうと考えていた。そうすれば最大の邪魔者である仮面ライダーの始末とサンプルの確保が同時に行える。一石二鳥だ。

このままでは交渉は決裂、亜矢は仁共々連れて行かれてしまう。それを察し、仁は彼女に今からでも逃げるように促そうとした。

だが亜矢はまたしても予想外の行動に出た。先程落としたリプレッサーショットIIを両方拾い上げると、一方の銃口を自分の頭に、もう一方の銃口を仁に向けた。

「むっー！」

「——私の案を飲んでいただけにならないなら、ここで私も仁くんも死にます」

勿論これはブラフだ。亜矢にも真矢にも、仁を殺す事など出来ない。事実、自分に向けている方はともかく、仁に向けている銃口は震えていた。寒さからではない、仁に銃口を向けている嫌悪からだ。

それはカラミティからも見えており、彼もまた亜矢の言葉が嘘である事を見抜いていた。

見抜いていたのだが――

「ふ、はははははは！ 良かろう、気に入った。君の提案に乗ろうじゃないか」

カラミティは楽しそうに笑うと、仁の上から足を退かし亜矢に近付き銃を受け取った。

「……約束よ、仁くんは見逃すって」

「勿論だとも。さあ、行こうか」

そう言つてカラミティは亜矢の背に手をやり、エスコートするようにその場からの移動を促した。

カラミティと共に離れて行く亜矢に向け、仁は必死に手を伸ばす。

「亜矢さん――！ 真矢さん――！」

ボロボロで這いずりながら、必死になつて手を伸ばす。亜矢は一度振り返ると、自分に手を伸ばしてくる仁に向け笑みを向けた。

普段なら見惚れるような亜矢の笑顔。だが今は、彼女を濡らす雨が頬を流れていきまゝで泣きながら笑っているように見えた。

「大丈夫です……仁くんは、私が守りますから」

亜矢はそう言うと、カラミティに連れられその場から離れて行く。

どんどん離れて小さくなっていく亜矢の後姿に、仁は力の入らない体で奥歯を噛み締

め地面を殴り、己の無力さ、不甲斐なさを悔やんだ。

「ぐうう、うううううううう——!?!」

雨か涙か分からず、亜矢の後姿が滲む。苦すぎる敗北の味を噛み締めながら、仁は意識を静かに手放すのだった。

第56話：生命の力

保安警察に鎮圧され、本社ビル内に設けられている自室に放り込まれた希美は先の身勝手な行動もあり軟禁状態となっていた。

「……………ちっ」

やる事も無く自室のベッドの上で横になる彼女が考えるのは、引き離されたりリイとレックスの2人の事ばかり。特にリイは、必要に応じて解毒剤を飲まないと体に不調を来す。会社にとつては一応大事な研究対象（こういう見方を彼女がされること自体希美は腹立たしい）をみすみす死なせるような事は無いだろうから、そこら辺の管理はしっかりとってくれると信じたい。

とは言え心配は心配だ。特にリイは女の子。下つ端研究員や保安警察の馬鹿が手を出さないと限らない。

希美は思い切つて外出をしようと、ベッドから起き上がるとドアを乱暴にノックした。するとすぐにドアの外で監視の為に待機している保安警察の隊員から返事が来る。

『何だ？』

「外を歩きたいわ」

『お前の外出は許可されていない』

高圧的な言葉に希美は舌打ちした。少し前までは、へりくだるとまでは言わずとも、何処か一步引いた対応をしていた彼らだがここにきて一気に調子に乗り出した。希美に付け入る隙があると分かって、そう簡単に暴れたりはしないと思っているのだろう。実際その通りだった。自分が下手な事をして、あの2人が人質になるような事があれば困る。

我ながら随分と甘くなったものだともうが、不思議とそれを悪い事とは思えなかった。

だがそれはそれとして、あの2人の事が心配なので様子を見る為に外出はしたい。しかしこいつらの様子だと、普通に出せと言っても聞いてはくれないだろう。

ならば……………

「ドライバー……………」

『何?』

「私のドライバー……………アンタ達に預けるわ。それでいいでしょ? そうすれば私は戦えない訳だし……………」

歯向かう手段がないと分かれば、連中も少しは警戒を解くだろう。何かあった時に2人を守れなくなるが、その時はその時だ。

ドアの向こうからはなかなか返答が来ない。恐らくアデニン辺りに許可を取っているのだろう。

程なくしてドアが開いた。

「許可が下りた。ドライバーを……」

希美は言われるままにブレイドドライバーを差し出す。2人居る保安警察の隊員の片方がそれを受け取り何処かへと去っていき、残った方は顎をしゃくって希美に出ると促した。

正直むかつく事この上ない態度だが、ここで反抗的な姿を見せれば今度こそ必要な時以外は部屋から出られない。苛立つ心を律しつつ、希美は2人が居るだろう区画へ向けて歩き出す。勿論その後ろには、監視目的の隊員がっていた。

足早に研究区画内を歩く希美が向かうのは、実験動物として拉致された人達が入られる独房がある場所だ。会社内でのあの2人の扱いを考えれば、入れられるのはあそこしかない。

果たして希美は直ぐに2人を見つける事が出来た。案の定、2人はここに入れられていたのだ。同じ独房ではなく、隣接した独房に1人ずつ入れられている。

「ノゾミ！」

2人は希美が近付くと、安堵した顔で扉に飛び付いた。制御装置で苦しめられている

のが2人が最後に見た希美の姿だったので、あの後どうなったのか心配していたのだ。会社内で唯一本気で心から自分の事を心配してくれる2人に、希美は束の間穏やかな顔になる。それは2人が思っていたほど辛そうでない事への安心感もあるのだろう。

「2人共、大丈夫そうね」

「私達は大丈夫。でも、ノゾミは……」

「安心しなさい。私も平気よ」

「ゴメン、ノゾミ。俺が余計なことをしたから……」

「何言ってるの。あそこで動かなかつたら男が廃るつてもんよ。咄嗟にリリイを守ろうとするなんて、カッコ良かったわよ」

独房の扉は格子状になっている為、腕一本なら格子の隙間から出せる。2人は格子の隙間から希美に向けて手を伸ばし、希美は伸ばされた2人の手を優しく掴んでいる。

「私は大丈夫よ。だから2人も、連中のくそつたれな実験とかに負けないで。ほとぼりが冷めたら、また3人で出掛けましょ」

そう言つて希美は独房に近付き、格子越しに2人を優しく抱きしめた。希美の体温の温もりに、2人は独房に入れられていると言うのに安堵の表情を浮かべる。リリイなどは、目に薄らと涙を浮かべている。希美はそれを指でそつと拭つてやり、改めて2人を格子越しに抱きしめた。

そして、2人以外には聞こえない位小さい声で2人に話し掛けた。

「何時か……2人をここから出してあげるから。だからそれまで待ってて」

「ツ!?!」

小声で告げられた言葉にハツとなりそうだった2人を、希美はギュツと抱き締める事で抑えた。そして2人から少し離れ、口元に人差し指を置く。

希美の意図を察し、小さく頷いて答える2人。

ここで漸く静かになった3人の様子を訝しんだ隊員が声を掛けてくる。

「おい、何をしている?」

「別に。もう用事は済んだから、私は戻るわ。それじゃあね、2人共」

希美は2人に手を振りその場を離れて行く。

今この瞬間、希美は決意した。もう会社に付き合っていない。いや、付き合う理由がない。

彼女が欲しかったのは、自分を1人の人間として認めてくれる場所なのだ。それがようやく分かった。そしてそれは、傘木社に存在しない。

それがあるのは、彼女にとってリリイとレックス、2人の傍だ。だが傘木社に居る限りそれは邪魔される。

ならば離れてしまえ。例えば会社から追われる事になろうとも、このまま飼い犬で終わ

るよりはその方がずっといい。

問題はどうかやって、逃げ出すかと言う事。ブレイドライバーは何処かへ持っていていかれてしまった。

(まあ……何処に持っていかれたのかは大体予想がつくけどね)

元を辿れば彼女も保安警察の上司と言う立場に居たのだ。だからああいったものが何処に運ばれて保管されるかも予想出来る。

後はどうやってそれを取りに行くかだが――

「――ん？」

そんな事を考えていると、前方から雄成に連れられてずぶ濡れの亜矢が歩いてくるのが見えた。手には手錠を掛けられ、背後には保安警察の隊員が2人警戒するようについている。

希美が亜矢の事を凝視していると、向こうも希美に気付いたのか少し驚いた顔になった。

「アンタ……何でここに？」

思わず亜矢と彼女の前を歩く雄成を見比べながら問い掛けると、雄成が上機嫌で答えた。

「彼女は私の研究に手を貸してくれることになったんだよ。新人類のサンプルとして、

ね」

満足そうな雄成の言葉に、亜矢は顔を軽く伏せ小さく頷いた。

それだけで希美は察した。亜矢は仁の為に、己の身を差し出したのだと。

以前の希美だったら、何を馬鹿な事をと鼻で笑ったかもしれない。だが今はとても笑う気にはなれなかった。何故なら彼女も、リリイとレックスの為なら体を張れる自信があつたから。

「そつか……そつかあ……」

気付けば自分も彼女達と同じ側に立っていた。その事に気付き、希美は小さく笑みを浮かべると亜矢の隣を通り過ぎていく。

その際に、希美は亜矢の肩を軽く叩いた。

「え……」

肩を叩かれ、亜矢が振り返ると希美は後ろ手に手を振りながら無言で歩き去っていった。正直今の肩を叩いた事に、何の意味があるのかは分からない。

だが不思議と、嫌な感じはしなかった。今なら彼女とも仲良くやれそうな、そんな気がする。

「さ、っ、つちだ」

もう少し干渉に耽っていたかったが、雄成がそれを許してくれなかった。亜矢は雄成

に促されるままに、彼の後についていく。

そうして亜矢が連れて行かれたのは、実験室ではなく社長室だった。地上70階に位置するそこは、窓の外に絶景が広がる。こんな時でも無ければ、窓辺に寄つて景色を眺めたいものだ。

勿論仁と共に、だが……。

雨に濡れてずぶ濡れのままここに連れて来られた亜矢には、雄成の指示で取り合えずタオルが掛けられ温かい飲み物が出された。ここは謂わば敵地だと言うのにこの歓待ぶりに、僅かながら亜矢も困惑してしまう。

「そう警戒しないでくれ。私は君に感謝しているんだよ?」

「と、言いますと?」

「君が来てくれるから、私の研究と計画は大きく進むと言う事さ。安心してくれ、悪いようにはしないよ。勿論、門守 仁君に対してもね」

そうは言われても、信じられるものではない。彼は以前（偽物だったが）データを渡した香苗を始末しようとしていた。同じようにこちらを油断させて、自分だけが得をするような事をしてこないとは限らない。

だから亜矢は慎重に行動した。この体は大抵の毒を受け付けないと言う事は分かっているが、念には念の為出された飲み物もまずは軽く舌で舐める程度に留める。もし何

か仕込まれていたら、体が何かしらの反応をする筈だ。

しかしそれは杞憂だったようで、出された飲み物には何も異常はない様子だった。体は濡れて低下した体温を補う方向で既に動いているので温かい飲み物など必要無かったが、気持ちを落ち着ける為に亜矢は飲み物に口を付けた。

その時、社長室のドアがノックされた。雄成が許可を出すとドアが開かれ、アデニンが中に入ってくる。

「プロフェッサー、失礼します。例の件でお話が……」

「ふむ、分かった。濟まないが少し席を外させてもらおうよ」

雄成はアデニンと共に一度社長室を離れた。離れたとは言っても、部屋のすぐ外に出ただけだ。

「それで、首尾は？」

「既に先方に話は付けているので、直ぐにでも動いてくれる筈です」

「そうか。S. B. C. T. にも今まで世話になったが、もう敵対組織は不要だ。手筈通りに頼むよ」

「はい」

適当に指示を出し、雄成は社長室へと戻る。部屋に戻ると、亜矢は先程と同じ場所に座りジツとしていた。

「すまないね待たせてしまつて。さ、それではそろそろ移動しようか。何、ここに居る間は極力不自由はさせないから安心してくれたまえ」

亜矢は雄成に促され、社長室を後にして研究区画の個室へと案内される。

案内される最中、亜矢は時折胸元を抑えていた。雄成はそれを単に仁を心配してざわつく心を鎮める為の行動だと考えていた。

だがそれは間違いであつた。彼がその行動の意味を知るのは、もう少し後の事である。

一方、警視庁を襲撃され大打撃を受けた警察組織は混乱から立ち直る為に奔走していった。

特にS・B・C・Tはカラミティの攻撃によりまたしても実働部隊の半数以上を失つてしまい、組織的行動が難しくなつてしまつている。この状態で傘木社が何らかの行動を起こしたら、とてもではないが対処できない。

「よ……つと、ふう。隊長、とりあえず使えそうな機材の移動は完了しました」

「ご苦労。とは言え、改めて酷いもんだな」

「全くです。生き残ったのは我々のみ。実働部隊は壊滅で、警視庁に居た警官も多くが……」

今宗吾達が居るのは、無事な部屋に機材を詰め込んだ即席の指令室だ。カラミティの攻撃は激しく、警視庁の建物内部にも少なくない被害が出ていた。特にS・B・C・T・本部は徹底的に攻撃を受けており、重要なデータの中にはいくつかは失われてしまったものもある。

「悲観するのは後だ。今は出来る事をやる」

「出来る事って……」

「今回、奴は馬鹿な事に変身せずにここにやって来た。監視カメラには傘木 雄成がやってきてカラミティに変身して暴れる様子が残っている筈だ。それを証拠に、傘木社に強制捜査を行う」

不可解だが、何故か雄成は変身せずに警視庁まで足を運び、変身してから暴れた。そこにどんな意図があったのかは分からないが、証拠を残してくれたのなら都合。宗吾は雄成が正体を晒した映像を使い、傘木社に本格的な攻勢に出るつもりだった。上層部もここまで動かぬ証拠があるのなら、傘木社を無視は出来まい。

問題は戦力だ。装備はともかく、先の戦闘で失われた人命は多い。両手で足りる程度の人数しか生き残りはいないのだ。これで傘木社に仕掛けるのは無謀である。

「戦力はどうしますか？」

「最悪、機動隊員などからかき集めるしかないだろうな」

「人、寄越してくれませんか？」

「最悪は生き残りだけで仕掛けるしかないが……」

宗吾と慎司、茜が話し合っていると、仮設指令室の扉が開かれた。3人が扉を見ると、そこにはS. B. C. T. の総指揮官である昭俊が数人の部下と共に入室して来ていた。

「ッ！ 氷室指揮官！ ご無事でしたか、連絡が付かなかったので心配していました！」
「何、少し手が離せなくてね」

「いえ、ご無事で何よりです。それより、今は少しでも戦力を集めて傘木社への強制捜査に向かいたいと考えています。何とか戦力を集める事は出来ませんか？」

上層部にも顔が良く昭俊であればもしかすると戦力を揃えてくれるかもしれない。その期待を胸に宗吾が昭俊に訊ねるが、昭俊から帰ってきたのは予想外の言葉であった。

「いや、もうその必要は無い」

「は？」

「聞こえなかつたかね？ 傘木社へは今後干渉する必要は無いと言つたんだ」

そんな事を言われても納得できる訳が無かつた。警察組織に多大な損害を与えた傘木社は最早一刻も早く止めねばならない危険な組織となつている。何よりも、追い詰めるに足るだけの証拠があるのだ。これを使わない手はない。

「何故です!? 連中は今回、重要なミスを犯しました。これを基に連中を追い詰めれば——!?」

昭俊に詰め寄る宗吾だったが、それは昭俊の部下が取り押さえた。両脇を押さえられ、宗吾は身動きが取れなくなる。

「離セツ!? くそ、何故ですか指揮官!？」

「——まさか」

激昂する相互に対し、茜は何かに感付いた。慎司が何をと問う前に、茜はそつと宗吾達から距離を取る。

「何故、か……簡単だよ権藤隊長。今後の我々の行動方針が変わつたからだ」

「変わった？」

「そう、今後は傘木社を追い詰めるのではなく、傘木社を支援する形だね」

信じられない事を口にする昭俊に、宗吾と慎司は言葉を失つた。今まで傘木社と戦つ

てきた、傘木社と戦う為の組織が今度は連中を支援する。一体何の冗談だと叫ぼうとした相互だが、先の戦闘で雄成が口にした言葉を思い出す。

「S. B. C. T. の結成には、傘木社の関与があつた………指揮官、アンタまさかツ!?」

「気付くのが遅かつたな。そもそもスコープシステムだつて、傘木社からの技術提供があつて完成したのだよ」

つまり宗吾は今までずっと、傘木社の掌の上で踊らされていたと言う事なのだ。その事実、宗吾は足から力が抜けその場に崩れ落ちる。

「俺は……俺は今まで、何の為に——!?」

信じていた者に裏切られ、足場を失い涙を流す宗吾を昭俊は冷たく見下ろした。

「今後、S. B. C. T. の部隊は私が直接指示を出す。残つた者にはそう伝えろ」

「は、はい!?!」

昭俊に言われ、茜は慄きながら返事を返した。一方慎司は、宗吾と昭俊を交互に見るだけで何も言わない。最後にはどうすればいいかと、茜に視線で問う始末。

何しろここで否と言うのは簡単だが、状況はどう考えても多勢に無勢。それもライトスコープすらない状況では、1人で出来る事など高が知れていた。

頼りない、情けないと思うかもしれないが、愚かではないのだ。愚か者は後先考えず

行動して馬鹿な判断を下す。それに比べれば、慎司はずっと賢い選択をしたと言えるだろう。

「差し当たってまずするべきは、門守 仁の確保だな。直ぐに部隊を向かわせろ」
「ハッ！」

昭俊は連れてきた部下にそう指示を出すと、宗吾達を部屋に残して去っていった。

後に残された宗吾は、その場で一人涙を流し慎司は立ち尽くし、茜は何処かへと連絡を取っていた。

カラミティに敗北し、目の前で亜矢を連れて行かれた仁はそのまま警視庁の前で雨に打たれながら気を失っていた。あれから一向に連絡を寄越さない事に胸騒ぎを感じた峰が教授と共に警視庁に向かい、倒れている仁を発見すると慌てて彼を教授の車に乗せ病院へと運んだ。

眠り続ける仁は、しかし傷は直ぐに塞がっていった。流石の回復力。だがそれでも意

識を取り戻さないのは、それだけのダメージを受けたのかそれとも別の要因があるのか、峰達には分からなかった。

ただ現場には亜矢の分のディナドライバーとユニオンキャット、キャットベクターカートリッジが放置されていた。この状況から、仁が敗北し亜矢が連れ去られたのだろうと言う事は想像する事が出来た。

控えめに言っても由々しき事態である。

「双星さん、大丈夫でしょうか？ 傘木社でどんな目に遭うか……」

「……少なくとも、今すぐ命を奪われるような事は絶対に無いだろう。こんな言い方はしたくないが、彼女は世界で2人しか居ない新人類の片割れ、数少ないサンプルだ。それを無駄にするような事を雄成がするとは思えない」

「でもそれ、生きてさえいればどんな目にも遭うかもしれないって事ですよね？」

白上教授は口を噤んだ。生かされたとしても、死んだほうがマシと思えるような状況など幾らでもある。特に実験動物、サンプルとしての在り方など……

「出来る事なら今すぐ双星君を助けに行きたいが……S. B. C. T. も大きく被害を受けたそうだし、門守君もこれでは……」

「門守君……」

傷一つない体で眠り続ける仁を、峰が心配そうに見つめた。敗北した挙句、目の前で

亜矢を連れ去られた彼の心が受けたダメージは如何程だろうか。目覚めないのも精神的なダメージから来るのだとすれば、彼が受けた苦しみは相当な物の筈だ。

事実それは間違っていない。仁は確かにあの時、離れて行く亜矢の後姿に彼の心は張り裂けそうなほどの痛みを感じた。意識を失う直前まで嘆き、己の無力さを呪いもした。

何より、彼の肉体はカラミテイのデッドエンドクラッシュにより多大なダメージを受けていた。細胞破壊能力を持つデッドエンドクラッシュにより、仁の超万能細胞は大半が死滅し一時は生命の危機にすら陥ったほどだ。

肉体的にも、精神的にも、限界近くまでポロポロになったと言っても過言ではない。しかし彼は決して折れていなかった。心身共に、既に次の戦いの備えて準備していた。

細胞は命に関わる部位の修復を最優先とし、元通りに回復させるのが容易な細胞を分解してエネルギーに変換する。自食作用オートファジーにより仁は眠りながら己の体を回復させ、少しでも万全な状態へとコンディションを持っていくとしていた。

その一方で脳細胞は大量のエンドルフィンを産生し、亜矢を連れ去られた事による精神的ストレスを急速に緩和させていく。お陰で仁は、心安らかに眠り回復に努める事が出来ていた。

全ては、復讐の為だった。

人としての仁は、最愛の女性を取り戻す為に……。生命としての仁は、世界でたった1人の同族の異性を取り戻し、己の遺伝子を後世に繋ぐ為に……。

それは、生存本能だった。

神が全ての生命に与えた、最初にして最後の武器。人類が、人類を作り出す遺伝子が、過去に何度も起こった生命の大量絶滅を生き延び地球の覇者として君臨する力の源となつた本能。

カンブリア紀に大量に産まれた生命の一種であるハルキゲニアから続く、何億年にも渡つて蓄積されてきた生命の力。

神秘がこの世で唯一形になつたと言つても過言ではない生命の力の前に、敗北はあり得ない。

しかし、その生命の力を発揮する為には亜矢の存在が必要不可欠であると仁の生命は理解していた。だからこそ取り返す。その為に備える。嘆いている暇など、一瞬たりとも存在しない。

今、仁の中で驚異的な超回復が行われていたが、その事に気付く者は誰も居なかつた。

仁が病院に運ばれてからどれ程時間が経ったか、突然峰の携帯から着信音があった。
「ん？ 誰だろ？」

峰が携帯を取り出すと、どうやらメールが来ていたようだ。送り主は茜だった。

「北村さんから？」

一体どうしたのかと、峰は何気なくメールを開いた。最初は仁を心配しての内容か、それとも傘木社への今後の対応を話し合う為の予定の擦り合わせかと思った。

だがメールの内容を読み進める内、次第に峰の目は驚愕に見開かれていく。尋常ではないその様子に、白上教授がどうしたのかと問い掛けようとした時、峰は慌てて立ち上がり窓の下を見た。

「ッ！ ヤバい、教授！ 急いで門守君を連れてここを出しましょう！」

「どうしたんだ？ 一体何が？」

「S. B. C. T. が敵に回りました、今の連中は傘木社の手下で、門守君を狙ってます！」

峰が見たのは、病院のフロントから突入してくるライトスコープ達の姿だった。彼らは力尽くで仁を確保し、傘木社へと連れて行くつもりなのだ。

「ここには居られない。しかし逃げるにしてもどうすれば……。」

「宮野君、こっちだ！」

「えっ!？」

仁を背負って病室から出ようとする峰を、白上教授は引き留め窓辺へと近付いていく。手には仁の携帯が握られていた。

「あ、そうか! トランススポゾン!」

確かにあれなら、人を3人くらいは余裕で乗せて飛ぶ事もできる。

教授がアプリでトランススポゾンと呼び出すと、飛行モードのトランススポゾンが窓の外にやってきて滞空してくれた。教授は窓から出てトランススポゾンに跨ると、峰から仁を受け取り次に峰を後ろに乗せる。仁は教授と峰に挟まれる形だ。

3人が窓から出てトランススポゾンに乗ると同時に、病室までやって来たライトスコップ達が病室の扉を蹴破って入ってきた。

「ッ!? 待てッ!」

「宮野君、しつかり掴まっていってくれ!」

「はい!」

ライトスコップの制止の言葉を無視して、教授はトランススポゾンを運転し病院から離れて行く。病院からはライトスコップ達が発砲しているが、仁を殺さずに確保しろと言う命令が出ているので攻撃は散発的で余裕で回避できた。

教授はそのまま病院から離れ、トランススポゾンで地面に降ろすと大学へと向かって走

らせる。秘密のラボなら、まだしばらくは隠れる時間はある筈だ。

希望を信じてトランススポゾンを走らせる白上教授と峰に挟まれ、仁は未だ目を覚ます事無く眠り続けていた。

第57話：本当の居場所

「……………よう」

あの後再び放り込まれた自室の中で、希美は遂に動く事を決意した。

時間はそろそろ昼時。とすればそろそろ――

『食事だ』

そらきた。ドアがノックされ、保安警察の隊員が声を掛けてきた。希美は体を起き上がらせ、椅子に座るとドアが開き次々と料理が運ばれてくる。

希美はそれを何時も通り次々と平らげ、片付けられていく皿を横目でチラチラと見ていた。

そうして全てを食べ終え、食後に水を一口飲む。食事を運んできた係の者は仕事は終わったとカートを押して離れて行き、警備をしている隊員は再びドアを閉めて監視の任務に戻ろうとした。

この瞬間を待っていた。食事を終えた直後なら気が緩んでいるだろうと彼らが油断したのを見て、希美はドアが閉められる直前に隊員2人を室内に引き摺り込んだ。

「うおっ!?!」

「なっ?!」

「フン!!」

「ぐっ?!」

突然の行動に反応が遅れた2人を、希美は首を掴んで床に叩き付ける事で気絶させた。殺しはしない。殺すと隠蔽装置が起動して、同時に異常の通知が保安警察の本部に行き他の隊員がすっ飛んでくる。

隊員2人を無力化すると、希美は一度ドアの外を見て誰にも見られていない事を確認する。この辺は人通りが少ないので今のが見られる可能性は低いが、警戒はしておいて損はない。

問題が無いのを確認すると、希美はドアを閉め無力化した隊員達から装備を剥ぎ取り、下着だけにした隊員達は適当なもので縛り上げておいた。これで彼らが目を覚ましてもすぐに事が発覚する事は無いだろう。口にも布で猿轡を嚙ませているので、声が外に漏れる心配もない。

希美は隊員から剥ぎ取った装備を自分で着込む。この装備は上から下まで、完全に覆い隠す装備——隊員の中には裏取引で刑務所などから引つ張り出した囚人なども居る為——だ。これで希美は一見すると保安警察の隊員にしか見えない。

保安警察の隊員に成りすました希美は何食わぬ顔で本社ビル内を進む。本当は直ぐ

にでもリリイとレックスを解放しに向かいたいが、先ずはブレイドライバーを取り返さなくては。騒ぎを起こせばまず間違いなく戦闘になる。その時に、ヘテロに変身できないと最悪2人の命が危ない。

ブレイドライバーは直ぐに見つかった。本社ビル内にある、保安警察の隊員の装備保管庫。ここに無造作に置かれているのを見つけた。

正直もう少し丁寧な扱えと言う気もしなかったが、お陰ですんなり取り返す事が出来たのでそれは良しとする。

ブレイドライバーを隠し持って、研究区画内を進む。時折研究員や他の隊員とすれ違いうが、彼らは変装した希美に特に不信感を抱く事も無く時には軽く会釈して通り過ぎて行った。

今のところ順調だ。

と、その時――

(ん? あれは、双星 亜矢?)

とある研究室の前を通りかかった時、希美は亜矢の姿を見つけた。ここに来た時とは違って、服装は手術患者が着るような薄手のものを着ている。お陰で彼女の豊満な肢体が強調されていた。

「う、うう……ああ……!?!」

亜矢は椅子の様な機械に手足を固定され、苦痛に顔を歪めている。声を必死に抑えようとしている様だが、顔には脂汗が浮かび抑えきれない苦痛が小さな叫びとなつて時々口から零れていた。

あの装置は確か、被検体の生体情報などを隔々まで計測する機械だった筈だ。通電する事で遺伝子情報からバイタルまで様々な情報を採取するので、機械に繋がれた被検体は感電に苦しむことになる。

希美も幹部時代は被検体があれば固定されて情報を採取される様を見ていたし、何ならデイナに負けて再改造された後の希美も使われた。

彼女が知る限り、あれに繋がれて情報を採取される被検体は皆その苦痛に叫び声を上げていた。それほどの電流が流されるのだ、あの装置は。希美もその例に漏れず、どうなるかを知っていた為機械に繋がれる際は抵抗したし、その苦痛に悲鳴を上げた。

にも拘らず、亜矢はあれだけの悲鳴で抑えている。本当はもつと苦痛を感じているだろうに。

それは亜矢がそれだけ苦痛に強いのか、それとも心が強いのか……………。

「あ、ぐっ?!……………く、あ、ぐうっ?!」

(ゴメン……………今は、待ってて)

時々聞こえてくる亜矢の悲鳴に心を痛めつつ、その場を後にした。今向かうべきは

リイとレックスの所だ。まずはあの2人を助け出す。

だがそのついでに、亜矢も助けてやろうと希美は決める。どうせ騒ぎを起こすのだ。連れて行くのが2人でも3人でも大して違いはない。

希美はそのまま誰に警戒される事も無く、独房エリアに辿り着いた。

だが以前2人が入れられていた独房は今ほもぬけの殻となっていた。何らかの実験か、試験の為に移動させられたのだ。

急いで希美はその場を離れ、2人が連れて行かれそうな場所を探し回る。まず真っ先に訓練ブースに向かったが、ここに2人はいなかった。他にも様々な場所を見て回りが、相変わらず2人は見つからない。

(何処? 2人は今何処に!?)

次第に焦りが希美の心に広がる中、気付けば希美は先程亜矢を見つけた場所まで戻ってきていた。焦りと共に2人を探している希美は、そこで漸く2人の姿を見つけた。

「ッ! 見つけた!」

2人は亜矢が繋がれていた機械がある部屋と、ガラス1枚で隔たれた部屋のベッドに固定されていた。2人の傍には、何やらアンブルを幾つか乗せたトレーを持った研究員の姿がある。

2人を使って何かの実験をするつもりだ。それを見た瞬間、希美は冷静さを失い研究

室内に突撃した。

「え!? な、何だ一体!?!」

「五月蠅い、退けッ!?!」

希美は立ち塞がる研究員達を薙ぎ倒し、2人が固定されているベッドに近付く。最初リリイ達はフルフェイスヘルメットで顔を隠した保安警察の隊員が近付いて来たと見て怯えた様子を見せたが、希美がヘルメットを外して素顔を見せると安堵の表情を浮かべる。

「ノゾミ!」

「2人共、お待たせ」

「信じてたよ、来てくれるって」

「いい子ね。さ、さっさとこんな所からはオサラバするわよ」

2人はベルトでベッドに固定されている。まずはこれを外さなければ。

金具を外すのはまだるっこしいので、手取り早くナイフでベルトを切断して2人を解放しようとする希美だったが、流石に騒ぎを聞きつけて妨害に来る者が居た。

アデニンとシトシン、グアニンの3人だ。彼らの登場に、希美は舌打ちしつつ2人の解放を中断し腰にブレイドライバーを装着した。

「あら、意外とお早い登場だったわね?」

「お前の部屋を監視している奴らから連絡が無くなった。おかしいと思ってカメラで確認したらお前の部屋の前に誰も居なかったからな。どう言う状況かは直ぐに分かったよ」

「何を考えてるんです」

「裏切るのか、負け犬？」

徐々に包囲を狭めてくる3人を前に、希美は警戒しながら一步も引き下がらない。ここで下がればリリースとレックスが人質に取られる。

「私、ここ辞めるの。一身上の都合で辞めさせてもらおうと思って」

「その2人をどうするつもりだ？」

「退職金代わりに貰っていいこうと思ってね」

〈CROCODILE〉〈TURTL〉

3人を軽く挑発しながら、ヘテロに変身しようとする。正直な話、あの3人を相手に負ける気は全くしなかった。最早ベクターリーダーで変身する奴程度ではヘテロ相手にスペック不足というのも理由の一つだが、何と言うか今は気分がすつきりしている。とても清々しく、普段戦う時の様なべつたりとした気持ちは何処にもない。

今ならデイナにも勝てる気がする希美だったが、アデニン達を取り出した物を見て彼女の表情は凍り付いた。

「仕方が無い……まあ、実戦テストの相手としては丁度良いか」

「ふう……」

「へへっ」

「ッ!? アンタ達、それ——!?」

アデニン達を取り出した物、それは雄成がカラミティに変身する時に使用する物と同じ、カラミティドライバーだった。

「へへ、ビビったか？」

「アンタ達……それ使えるの？」

「心配するな。プロフェッサーが使用する物より性能は落としてある。我が社製のデイトドライバーだな」

「廉価版とは言え、侮らない方が良いでしょう」

3人は廉価版カラミティドライバーを腰に装着すると、それぞれ二つのベクターカトリッジを取り出し装填した。

〈SQUID + SHELLFISH Origin regression〉

〈FLOG + MOUSE Input〉

〈SEA ARCHIN + SPIDER Input〉

「変身！」

〈The l a r g e s t p r e d a t o r o f t h e a n c i e n t s e a . R e b o r n o r i g i n , C A M E R O C E R A S 〉

アデニンは、白いアンダースーツに灰色の装甲を持つ、尖った頭部の『仮面ライダーステイク』。

〈P r e c i o u s s a c r i f i c e f o r d e v e l o p m e n t . D e d i c a t e l i f e 〉

グアニンは、全身黒一色の中で複眼だけが赤く光る『仮面ライダーストリングス』。

シトシンは、緑のアンダースーツに茶色い装甲の、片手がネズミの顔を模した籠手になっっている『仮面ライダーサクリス』。

新たに誕生した傘木社製の仮面ライダー3人を前に、希美は思わず生唾を飲んだ。これは流石に旗色が厳しい。

しかしここで退く訳にはいかない。ここで逃げれば彼女は再び空虚な日々を送る事になってしまう。仮に自分1人でここから逃げ出したとしても、待っているのは満たされる事のない飢える日々。そんなのは真つ平御免だった。

〈H O R S E S H O E × C R O C C O D I L E × T U R T L E M i x i n g G e n e t i c i n f o r m a t i o n 〉

「今の私を、簡単に止められるなんて思わない事ね。変身！」

〈Create, Capture, Out of Control. Brake
the chain〉

「アンタ達じゃ、私は満たされない!」

希美がヘテロに変身すると同時に、3人の仮面ライダーはヘテロに襲い掛かる。

まず最初に仕掛けたのはステイクだった。右腕に無数の触手を束ねてドリルを形成し、それで攻撃を仕掛けてきた。

いきなり嫌な攻撃をされたらヘテロは舌打ちした。外部からの攻撃に強いヘテロだが、ドリルの様なこちらの装甲を削ってくる攻撃は苦手だ。この装甲は飽く迄も衝撃等に強いのであって、接触した状態で継続ダメージを与えてくるドリルやチェーンソーの様な攻撃は苦手としていた。

ヘテロは突き出されてきたドリルを相手の腕を弾く事で軌道を反らし回避に成功し、お返しに胸板を拳で殴り付けた。今までなら、ウォーターベッドか何かを殴り付けたような手応えの無さを感じる筈のだが、今はその逆で鋼鉄の壁を殴り付けたかのような衝撃を感じた。

「ッ!?! 硬い!?!」

「今までと同じと思わない方が良い」

「それは俺らもだぜ!」

ステイクの予想外の硬さにヘテロが驚愕していると、横合いからサクリスが飛び掛かってくる。ネズミの頭を模した籠手で殴り掛かって来たのをヘテロは咄嗟に左腕で防ごうとしてしまうが、殴られる瞬間籠手の口が開き鋭い前歯で喰らい付いてきた。

「ぎっ!?! この、離れろ!?!」

サクリスの顔面を殴り、強制的に引き剥がす事には成功したが今度はストリングスが掛かってくる。グローブの様な籠手で覆われた両手を構え、それで殴り掛かってきた。ヘテロを殴る瞬間、グローブからは剣山の様に棘が伸びた。しかもよく見ると何らかの液体で濡れている。確証はないが、蜘蛛の能力を持っている事を考えれば、あの滴る液体は毒液の類だろう。

あんなものまともに喰らう訳にはいかないと、ヘテロは殴られる前にストリングスの攻撃の隙間を突くように蹴りを放った。

「ぐっ!?!」

蹴り飛ばされ、機材を薙ぎ倒しながら倒れるストリングス。

その姿を見ながらチラリと隣の部屋を見ると、巻き込まれないようにか亜矢が研究員により連れ出されていた。情報採取装置で体力を大分奪われたからか、ぐったりとした様子で研究員2人に両脇を抱えられ引き摺られるように連れ出されている。

仕方が無いとは言え面倒な事になった。こいつらが来るのがもう少し遅ければ、リ

リイ達を解放した上で亜矢も助ける事が出来たと言うのに。

「——?!? あいつらは?」

ふと気付けば、ステイクとサクリスの姿が無い。ストリングスの相手と、亜矢に氣を取られていた一瞬の間に姿を消された。そう言えばアイツらが使っている遺伝子の内、片方はどちらも周囲の色に溶け込む擬態能力を持っていた事を思い出し、ヘテロは己のミスに内心で呻き声を上げた。

2人は一体何処に? 警戒していると、出し抜けに背中を強烈な蹴りが襲った。

「あぐっ?!」

「へへ、何処見てんだよー」

やったのは姿を消していたサクリスだ。カエル由来の脚力で蹴りを放ったのだ。

蹴り飛ばされ機材を薙ぎ倒すヘテロは、即座に立ち上がり迎撃の構えを取った。だが今度は体勢を立て直したストリングスが、両手の籠手から無数の棘を飛ばして攻撃してきたのに気付き咄嗟に防御してしまう。

「ツッ!? しま——」

反応が間に合わなかったからとは言え、防御を選んだのは失敗だった。毒を含んだ棘は殆どは装甲やアンダースーツに弾かれたが、僅かながら突き刺さった奴もある。

突き刺さった針からは神経毒が注入され、痛みと痺れがヘテロの体に広がった。

ヘテロの装甲もデйна達と同じく生体装甲。防げるダメージに対しては痛痒を感じないが、キャパシティを超えたダメージは変身者にダイレクトにダメージとなつて届く。胸板を抉られる想像を絶する痛みに、ヘテロの悲痛な悲鳴が響き渡つた。

このままでは希美が殺されてしまう。リリイとレックスは拘束されながら、ステイク達にこれ以上は止めるよう懇願した。

しかし彼らにヘテロを許すつもりは毛頭なかった。彼女は会社に対し、明確に反逆の意思を示したのだ。しかも以前ならともかく、今は新たなドライバーも完成しヘテロには存在価値はない。

彼らは彼女をここで処分するつもりだった。

「う、あ、っ?! あ、あ、っ?! ぐ、が、あああああっ?!」

ステイクは動けないヘテロに回転するドリルを何度も叩き込んだ。高速回転するドリルが振るわれる度に、ヘテロの装甲は火花を上げてガリガリと削られていく。

その際にストリングスの糸も切断されるが、毒はまだ残っているし後ろからサクリスが押え付けているのでヘテロは逃げる事が出来ない。

次第にヘテロの足が体重を支えられなくなり膝がぐくぐくと揺れても、サクリスはそんな彼女の様子を仮面の奥から楽しそうに眺め解放する様子が無い。

「あ、ぐ……あ、うあ……あああ、う、ぐう……ぎ、い……」

次第に悲鳴も小さくなり、サクリスの腕に掛かる負担が増えた。もうヘテロには、自力で立つ力も無くなったのだ。

「あん？ どうしたよ負け犬？ 反応が悪いぜ」

「……シトシン、放してやれ」

「え？ つたく」

ステイクの言葉に、サクリスは渋々ヘテロを解放する。サクリスが手を離すと、ヘテロはその場に崩れ落ちた。

「ぐ、う……」

「ノゾミツ!？」

力無く倒れるヘテロの姿に、必死に顔を上げて彼女の姿を見ていたリリイが悲鳴のような声を上げる。

ヘテロは、変身こそ解除されていないがそれでも酷い有様だった。自慢の装甲は大幅に削り取られ、アンダースーツも切り裂かれ血が流れている。

サクリスは倒れたヘテロの頭を掴んで持ち上げ、無理矢理顔を上げさせた。

「う、あ……ぐう……」

「しかし、お前も馬鹿な奴だよなあ？ あんなモルモットの為に命張るなんてよ」

「う、く……ふ、フフフ……」

「あん?」

勝ち誇った様子のサクリスだったが、不意にヘテロの口から小さいながらも笑い声が零れる。一見すると気でも狂ったのかと思うが、そうではない。

単純にヘテロはまだ諦めていないだけだった。

「馬鹿よね……アンタ、さ」

「何だと?」

「……! シトシン、離れる!」

「え?」

〈HORSESHOE Burst〉

ヘテロの意図に気付いたステイクが警告するが時既に遅く、サクリスはヘテロのトーンインパクトを喰らい吹き飛ばされた。ステイクはそれに巻き込まれ、揃って仲良くひっくり返る。

「ぐおあつ?!」

「ぐふっ!」

「アデニン、シトシン!」

トーンインパクトはヘテロが持つ複数の必殺技の中で威力こそ低いが、技の速度は最も早い。こういう時に不意打ちで使うには最適だった。

ステイクとサクリスが吹き飛ばされ、ストリングスはそちらに意識を割いてしまう。それが彼の運命を分けた。

「ぜい、はあ……くっ!」

〈HORSESHOE × TURTLE × CROCODILE Mixing
Burst〉

「グアニッツ!」

「え、あつ!」

「あああああああつ!!」

ステイク達の方に意識を割き、隙を晒したストリングスにヘテロはインクリュード・シュートを放つ。ステイクの警告により自分が狙われている事に気付いたストリングスは、咄嗟にレセプタースロットルを引き、デッドエンドアタックを発動させた。

「くそっ!」

〈ATP Full blast〉

放たれるヘテロの連続キックに、ストリングスは両手で防御の構えを取った。ただしその際、両手のグローブからは無数の棘が伸び正面から見ると針の山のように見える有様になっていた。これに突っ込めば自分が穴だらけになってしまう。

しかしヘテロは構わず突き進み、針の山を連続キックで伐採し始めた。棘一本一本の

強度はそこまでもないのか、蹴り一発で複数本が纏めてへし折れる。

だが棘は折れた端から次々生え、ストリングスの体を覆い隠す。ヘテロはそれを打ち破り本体に攻撃を仕掛けようとする。正に攻めと守りの物量戦であった。

「あああああああつ！　らあああああああつ！！」

「ぐっ!?　く、ううう——！！」

ストリングスは耐えた。嘗て制御できていなかったとは言えテイナのケツアルスピノフォームすら打ち倒したヘテロの最強技を前に、引き下がる事無く持ち堪えてみせたのだ。

しかし軍配はヘテロの方になる。放たれ続ける連続キックに、棘の再生と防御が追いつかなくなったのだ。次第に棘の数が少なくなり、遂には防御を弾かれ本体に何度も強烈なキックが突き刺さり食い破る。

「だあああああつ！」

「ぐっ?!　がつ!?　あ、があ、あああああつ?!」

防御を抜かれ、何度も蹴りを叩き込まれたストリングスは壁際まで蹴り飛ばされ爆発四散。木端微塵に拭き飛び、後には壊れた機材とストリングスの装甲の欠片などが散らばっていた。

「はあ、はあ、はあ……あと2人——！」

口が弱ったのを見ると、再び形を取り戻し動かなくなった彼女の首を掴んで持ち上げた。

「うあ……ぐ、あ……」

もうダメージを受けすぎて、指一本動かす体力も残ってはいなかった。小さく呻き声を上げながら、ヘテロはどうとう変身が解除されてしまう。

元の姿に戻った希美に対し、カラミティはトドメを差しにかかる。右腕を液化化させ、鋭い一本の刃に変化させた。

カラミティはその刃の切っ先を希美の心臓に向けた。

次に何が起ころるか、そんな子供でも分かる。

「止めてッ!? お願ひ、止めて止めて止めて止めて止めて——!?!?」

「くそ、くそおおっ!? 止めろおおおっ!」

リリイとレックスが暴れるが、拘束されている2人にはどうにもできない。

「さらばだ。今まで、ご苦労だったね」

カラミティの刃は容赦なく、希美の胸部を串刺しにした。ズブリと濡れた衣服が破れるような音が響き、希美の口から大量の血が溢れ出る。

「んぶっ、んぶえっ?!」

希美を刺したカラミティは、彼女の首から手を離し右腕を振るい刃を引き抜くと同時

に彼女を床に叩き付けた。

ゴミの様に扱われたと言うのに、希美はピクリとも動かない。彼女が倒れた所には、夥しい血が流れ血溜まりが広がっていく。

希美が死んだ……その光景は、リリイとレックスにそれを理解させるに十分なものとなっていた。

「ああ……あ、ああ、あああああああつ!? ああああああああつ!??!?!」
「クソがああああああああツ?!?!」

何も出来ず、目の前で希美を殺されリリイとレックスの慟哭が響き渡る。

カラミティは涙と叫びを上げる2人をチラリと見て、離れた所から邪魔にならない様にと見ていたアデニン達に指示を出す。

「死体は片付けておいてくれ」

「ドライバーとベクターカートリッジは回収しますか?」

「ん? 別にいらんよ。元々彼女が使う為だけに作った試作品だ。カラミティドライバーが出来た今、もう必要は無い。死体と一緒に処分したまえ」

「はっ」

アデニンは部下を呼び出し、希美の死体を処分場へと運ばせた。処分場と言っても、

焼却したりする訳ではなく本社から離れた失敗作や被検体の死体を処分するための専用の施設へと送る為の一時保管場所の様などころだ。

アデニンの部下2人は、空調が徹底されているにも拘らずヘルメット越しに臭う腐敗臭に顔を顰めながら処分場に複数あるコンテナの一つに希美の死体を放り込む。腐敗し原形を留めていないものも多数あるその中に、希美の死体も仲間入りするように放り込まれ腐肉と異臭に塗れた。

「しかし、幹部の1人だったあの女も、ここまで落ちたか」

「無駄口を叩くな。さっさと行くぞ。ヘルメット越しでも臭くてかなわねえ」

「へいへい……………ん？」

先にこの場を離れて行く相方について行こうとした隊員だったが、彼は一瞬違和感を感じ今放り込んだばかりの希美の死体を凝視した。なかなか付いて来ない相方に、先に移動しようとしていた隊員が戻ってくる。

「どうした？」

「あ、いや……………何か今、あの女の死体が動いた様な気がして…………」

「はっ。」

相方の言葉に、隊員が希美の死体を凝視するが死体は一向に動く気配を見せない。

「……………気のせいが見間違いだろ。ありや100%死んでる。死んだ人間が動く訳ない」

「そう、だな。俺の勘違いだったか……」

「ほら、早く行くぞ。サボると俺らがここの連中の仲間入りをしちまう」

「ああ」

2人は改めて踵を返して処分場を後にした。後には腐敗臭を放つコンテナに放り込まれた死体の山だけが残される。

その中に放り込まれた希美の手が、ピクリと動いた。いや、ピクリどころではない。ピクピクと痙攣し、遂にはややぎこちないながらもしつかりと動き自分の体を持ち上げたのだ。

「はあ……あ、ぐ……く、げほ、ごぼっ!? うぐっ……」

先程、カラミティの刃は確かに希美の心臓を切り裂いた。あの瞬間、彼女は確かに死んだ筈だった。

だが彼らが希美に施した強化手術は、心臓の破損すらも回復させてしまった。以前暴走したデイナにバラバラのズタズタにされた状態からも回復した彼女は、心臓を貫かれた程度では死ぬ事が出来なくなっていた。彼らは希美を強くし過ぎたのだ。

勿論、それだけが生き残れた理由ではない。最も大きかったのは行動を起こす直前に食事をとっていた事だ。あれのお陰で、最低限生命活動を取り戻せる程度に回復できるくらいにはカロリーを確保できていた。

「はあ……はあ……」

希美は鼻が曲がりそうな異臭の中、体を引き摺りコンテナから出るとそのまま搬出用エレベーターを使つて外に出た。彼女が記憶している限り、次の処分場からの搬出はただ先の筈なので、血の跡などの痕跡が発見されるまでには時間が掛かる。

朦朧とした意識で外に出ると、夜空は再び雲に覆われ冷たい雨が降ってきていた。

希美はハッキリとしない視界と意識の中、崩れ落ちそうになる体を壁で支えつつ、雨に濡れながら本社ビルから離れて行くのだった。

第58話：愛するが故に

白上教授達が仁を連れてS・B・C・Tから逃げて一晩が経った。

あれから教授達は、秘密のラボに籠りS・B・C・T……と言うよりその背後に控えている傘木社の捜索から何とか逃れる事が出来ていた。

表の研究室と繋がるドアは今、完全に塞ぎ偽装している。ドアそのものを壁のように見せ、更にその前に柵を置く事で、だ。気休めでしかないだろうが、これで直ぐに見つかる事はない。

とは言え不安は拭えなかった。

「……何時まで持ちますかね？」

「少なくとも、門守君が目覚めるまでは持ち堪えてくれるだろう。大学の理事長が、少しは誤魔化してくれる筈だ」

理事長と言う単語が出た事に、そう言えばと何気に気になつていた事を峰は訊ねた。

「そう言えば、ずっと気にはなつていたんですけどどうしてこんなラボを作る事が出来たんですか？ 流石に教授個人が勝手に動いて出来る事じゃないですよね？」

「実を言うかね……この大学の理事長は私の学生時代の先輩なんだ。学生時代は可愛

がってもらってたし、卒業後も交流があつてね。それもあつて、話が通るのは早かったよ」

まさかの教授と理事長との繋がりに、峰は目を丸くしつつ納得した様子を見せる。確かに、理事長など大学の偉い人が関係していなければこんなラボを秘密裏に作る事など出来ない。

それならS・B・C・T.からの搜索も少しは抑えてくれるだろう。

となると現状の問題はやはり仁だ。彼は未だに眠り続けている。

心配になったので先程彼をスキャンベッドに寝かせ、現在の彼の状態を隅々まで走査した。その結果、教授は仁の体が極度な栄養飢餓状態になっている事を知った。

仁の体は回復の為に自らの細胞を喰らっている。それを察した白上教授は、仁の回復を補助する為適度に栄養剤を注射した。お陰で今、仁の顔色は少し良くなってきた。

しかし栄養剤だけでは不十分だ。人間やはり口から食物を口にして栄養を摂取しなければ。

きつと仁が起きた時、彼は極度の空腹を抱えているだろうと予想し教授は拓郎に財布を渡してとにかく買えるだけの食料を買ってくるように頼んだ。あの時病院に彼はいなかったたので、ある程度自由に行動させても問題はないだろう。

恐らくそろそろ戻ってくる頃だろうが……。

「う、ん——」

その時、眠り続けていた仁が目を覚ました。最初少し身動きして呻き声の様なものを上げ、そしてゆっくりと目を開け周囲を見渡した。

「門守君！」

「良かった、目が覚めたんですね！」

「教授……先輩？　ここは……」

「ここは大学のラボだ。気分はどうかね？」

起き上がろうとする仁を教授が支えて手助けする。峰は取り合えず喉が渴いているだろうと、給湯スペースに向かい白湯をいれて持つてくる。疲れ切った体に、いきなり冷たい飲み物はあまり宜しくはない。

「門守君、これを」

「どうも」

「ゆっくりでいいですからね」

仁は渡された白湯に息を吹きかけ、ゆっくりと冷ましながら少しずつ飲んだ。カラミティに敗北してから1日程しか経っていない筈だが、まるで何日も飲まず食わずだったかのように白湯の水分が体に染み渡る。

ゆっくり飲まねばと分かっているのだが、体はとにかく水分を欲しあつと言う間に白湯を飲み干してしまった。

「ん……ん……ふはっ！ はあ……ふう」

まずは軽い水分補給で疲れ切った体の消化器官を叩き起こす。すると当然、今度は空腹が訴える声を上げた。

今までの人生で仁が聞いた事もないほどの音を立てる腹の虫に、仁は目を丸くすると口でも空腹を訴えた。

「やば……腹減った……」

「今の君の体は極度の栄養飢餓状態だからね」

「え？ あ、あく……なるほど」

「今瀬高君が食べ物買いに行ってくれてますから、戻つて来るまで大人しく待つていてくださいね」

峰は仁を支え、スキヤンベッドからソファアの上に移動させそこに彼を寝かせた。仁は峰に毛布を掛けてもらいながら、あの後の事を訊ねた。

「それで、あれからどうなりました？ 亜矢さんは……」

亜矢の事は一応聞いてみただけで、彼女が傘木社に連れて行かれてしまった事はよく覚えている。当然峰は少し言い辛そうにしながら、それでも少しずつ語り出した。

「双星さんは……今も傘木社みたいです。あの場所には彼女のドライバー一式しかありませんでした」

「そうですか……」

「それと、最悪な事にS. B. C. T. が敵に回りました。権藤さんは隊長から降ろされ、今の彼らは傘木社の手下です」

「S. B. C. T. の設立には傘木社が関わってたみたいですからね……」

一通り重要な事を聞き終え、仁はソファアに体重を預けた。

まだ体は万全ではない。亜矢の事は心配だが、だからこそ彼女を助け出す為に今は体を休めなくては。

(もう少し……もう少しだけ待ってて。亜矢さん、真矢さん……)

その頃、拓郎は両手一杯に近くのコンビニやスーパーで買い込んだ食料を持ち、雨が降りしきる中ラボに戻る道を歩いていた。ここ連日、冬にしては珍しく雨が降り続いて

おり拓郎は傘を差しながら歩いていたので、流石に両手一杯に荷物を抱えた状態では傘が安定せず拓郎は体のあちこちを濡らしていた。

「はあ……全く、何だって冬なのにこんな雨が降るんだ」

ぶつくさ天気相手に文句を言いながら、裏山の秘密の入口へと向かう。表の入り口は塞いでしまったので、ラボに入る為には裏の入り口を使うしかない。

「——ん？」

雨の所為で下がったテンションと、荷物の重さでトボトボと歩いていた拓郎だが視界の先に人影を見た。

最初それを見て拓郎は不味いと思った。ラボの入り口を無関係な人に見られる訳にはいかない。かと言ってこんな大荷物を持ちながら、あの通行人が通り過ぎていくのを待つのは不審人物に見られる可能性がある。

どうしたものかと思っていたが、その通行人を見ている内に拓郎は違和感を覚えた。歩き方が可笑しいのだ。フラフラと安定しておらず時折壁に身体を預けている。

もしや怪我人だろうかと心配しながら見ていたが、近付くにつれてその相手の姿が鮮明になり、見えてきた相手に拓郎は思わず目を見開いた。

「お、お前はッ!？」

それは希美だった。彼女の姿を見た瞬間、拓郎は盛大に危機感を感じどうするべきか

と行動に迷った。が、よくよく見ると酷い怪我をして意識も朦朧としている様子なのに気付く。

「は、え？ な、何で？」

「ぜい……はあ……あ——」

拓郎が凝視していると、希美の方も拓郎の存在に気付いたのか酷く消耗した様子で虚ろな目を拓郎に向ける。

2人は暫し見詰め合っていたのだが、不意に希美が動いた。いや、動いたと言うよりは崩れ落ちたと言った方が適切か。突然前のめりに倒れる希美に、拓郎は一瞬警戒するが倒れたまま動かなくなった希美の姿に困惑する。

「何が、どうなってるんだ？」

希美は敵だ、それは間違いない。だが、だとすればこんな所で傷だらけで彷徨っているのはおかしい事だ。何しろ今仁は戦える状態ではなく、S・B・C・Tも動けないのだから。そもそもダイナがカラミティに敗北して以降、戦闘が起こったとは聞いていない。

どうすべきかと迷う拓郎だったが、取り合えず峰達に連絡を取る事にした。荷物だけを運ぶにせよ、彼女の事も運ぶにせよ、とにかく1人ではどうにもならない。

拓郎は両手が食料で埋まっている状態で、傘を差しながら四苦八苦しつつ峰に連絡を

取るのだった。

「ぐっ、う……んん？」

気付けば体を包み込む優しい温かさの中で、希美はゆっくりと意識を覚醒させた。目を開けるとそこは病院とは違う、見知らぬ天井を中心とした景色が広がっている。視線をゆっくり左右に動かすと、様々な機材が並んでいるのが見えてやはり病院では無いのだと言う事を確信する。

見知らぬ機材が並んでいる様子に一瞬傘木社からの追手に掴まり連れ戻されたのかと思つたが、処分を決めた希美を連れ帰る訳がないと考え直す。

「目が覚めた？」

「ッ！」

突然聞きなれた声が頭上から掛けられ、希美は弾かれた様にそちらを見た。

するとそこには、拓郎が買ってきた食料を次々と口に詰め込むように入れている仁

が、食べながら希美の事を見ていた。その傍には希美を睨み付ける峰の姿も、静かに警戒した様子の白上教授と拓郎の姿もある。

仁達の姿を見て、希美は安堵しソファーに沈むように倒れ込んだ。彼女の様子には彼女が戦いに来たのではない事を確信し、水で口の中の食料を流し込み再度希美に声を掛けた。

「どうしたの、そんなボロボロの恰好で？」

一応訊ねはするが、仁には理由が大体想像ついていた。

最早不要として処分されそうになったか、単純に彼女が会社を裏切ったかだ。予想はつくので別に返答は期待していなかったが、思いの外彼女はあっさり口を開いた。

「逆らっちゃってね……会社に。それで、他の連中とぶつかり合って……無様に負けて、この有様よ。ま、後悔はないけど……いや、あるっちゃあるわね」

希美は自嘲しながらソファーから立ち上がった。まだ本調子ではないこともあって、立ち上がった次の瞬間にはふら付き倒れそうになるがそれを気力で堪えると仁の前で膝を突き頭を床に擦り付けた。まさかの土下座である。

まさかいきなり土下座をされるとは思っていなかったもので、仁は目を丸くして希美を見つめる。周りで希美の動向を警戒していた峰達も、彼女の行動には驚いたのか口をポカンと開けて絶句していた。

周囲の驚愕などお構いなしに希美は口を開いた。

「これまでの事、謝つて許してもらえるなんて微塵も思つてないわ。私の事は煮るなり焼くなり好きにしてくれていい。でも……それでも、敢えて言わせて。………力を貸して」

恥も外聞もなく、今まで敵対していた仁に頭を下げ懇願する希美。

静かながら必死さを感じさせるその姿に、仁が何かを言う前に峰が堪え切れなくなり声を上げた。

「ふざけるんじゃないわよ!! 今更何言つてんの? アンタの所為で兄さんがどんな目に遭つたか分かつてる? あと一歩間違つてたら死んでたかもしれないのよ! ううん、かもしれないじゃないわ。門守君が居なかつたら確実に死んでたわよ! それが何? 今になって頭下げれば助けてくれるだろうって? 人を馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ!」

「宮野、抑えろ」

「宮野君……」

激昂する峰を拓郎と白上教授が抑えた。このまま放つておくと、怒りに任せて希美の頭を踏んだり蹴飛ばしたりしそだった。

とは言え彼女の怒りも分からなくはない。何と言っても彼女は希美の直接の被害者

なのだ。兄は希美により昏睡状態にさせられた挙句、キメラファツジにされて死ぬ寸前だった。仁が機転を利かせてくれなかったら死んでいただろう。

それについて最近も、峰は大学に乗り込んできた希美に痛い目に遭わされている。

そんな相手を手放しに許せなどと言うのが土台無理な話なのだ。俄然、拓郎の峰を押しさえる力も弱くなってしまふ。

だが仁は違った。彼は黙って希美に近付くと、彼女の肩を掴み促すようにして頭を上げさせた。

「……自分が助かりたい、て訳じゃなさそうだね」

「ええ……助けたい子達が居るの。あの子達の為なら、私は………だから、お願い。力を貸して」

リリイとレックスの事を仁は知らない。だが2人を助けたいと言う、希美の様子に嘘は見られなかった。

嘘でないのなら、手を貸す事は仁にとって吝かではない。何より、傘木社に乗り込むと言う事は亜矢を助け出す上で必要事項。希美に手を貸すだけでそれが叶うと言うのであれば、仁にとつても願ったり叶ったりだ。

「……うん」

「ちよ、門守君!」

いとも簡単に首を縦に振った仁に、希美は目を瞬かせ峰は愕然となる。

「……自分で言うのもあれだけど、本当に良いの？ 信じられるの？」

「今のアンタは……信じてても良いって思う」

「だけど門守君ッ!？」

「それに、亜矢さんを助ける為には傘木社の事をよく知る人が一緒に居てくれた方が都合がいい。そっちも勿論手を貸してくれるんだよね？」

「え、ええ……」

「それじゃ、交渉成立って事で」

仁はそう告げると、拓郎が買ってきてくれた食料の山からオニギリを引っ張り出し希美に差し出した。

「食べなよ。アンタもカロリーー沢山必要な口でしょ？ 分かるよ、何となく」

「ありがとう……今まで、ゴメンなさい」

「ん……」

希美は仁からオニギリを受け取り、包みを開けて頬張る。

何の変哲もない、ただのコンビニのオニギリ。しかし、その味は希美が今まで食べた物とは何かが違う。そんな味がした。

その後、仁と希美は2人で拓郎が買ってきた食料を全て平らげ、更にはそれだけでは

足りなかつたので拓郎は再び買い出しに向わされるのだった。

色々と慌ただしかつた1日が終わり、翌日の事。希美は腹ごしらえが終わるなりすぐに白上教授によりスキャンベッドに寝かされた。何分昨日はあれだけポロポロの状態でここに運ばれたのだ。回復力が保証されている仁と違い、希美の体にはどんな不具合があるか分からない。

案の定不具合は直ぐに見つかった。と言うか彼女の場合、体は不具合だらけであつた。

「こいつは……酷いな」

「そんなに酷い状態なんですか？」

「うむ。相当無理矢理な改造手術を施された様だ。確かにこれなら回復は早いだろうがその分消耗も激しい。エンジンを常に全力で動かしている様なものだ。そう遠くない内に身体が限界を迎えてしまう。寧ろ良くここまで何事も無かつたものだよ」

「何とかならないんですか？　この人もドライバーで変身してる訳だし、俺みたいに直挿して覚醒すれば……」

白上教授の横から覗き込むようにして端末の表示を見た仁の問いに、教授は静かに首を横に振る。

「無理だろうな。遺伝子を薬学的に弄り過ぎだ。これでは歪み過ぎて直挿しても覚醒は難しいかもしれない。衣服のゴムを無理矢理伸ばすようなものだ、一度形が変わってしまったらもう元には戻らない。今日明日どころかと言ふ事は無いだろうが、同様に直ぐに治療する事は無理だろうな」

「早死にするって事ですか？」

「気にはしないわ。今まで好き放題やって来た、そのツケが回ってきただけの話よ」

希美はスキャンベッドの上で上半身を起き上がらせ、こちらを見る峰に向けて「ね？」と首を傾げてみせる。峰は険しい表情で顔を背けた。

目の前に居るのは憎らしい相手である筈なのに、何故だか今は恨んだり怒ったりする気が起きない。あまりにも希美の目が透き通り過ぎているのだ。憑き物が取れたと言つても良い。

自分はまだ何もしていないのに、勝手に改心している希美に峰はやるせないものを感じずにはいらなかった。

「……ま、そっちはいいわ。ただ一つだけ、直ぐにやってもらいたい事があるの」
「何？」

「制御装置……それを外してほしいの」

そう言つて希美は再びスキャンベッドの上に横になる。白上教授が端末のキーボードを叩くと、その制御装置とやらは直ぐに見つかった。

「見つけた、これが。しかし……ここは……」

走査の結果、制御装置と思しき異物は体の中の奥深くにある事が分かった。場所的には、お腹の下の奥の方。周囲には血管が多く、手術が難しい場所である。

「厳しい場所だな。雄成め、何と言う所に埋め込んだ」

「場所は関係ないわ。私なら、例え少しミスをしても簡単に死ぬことはないから。だから大雑把にやってくれても構わないわよ」

実際、心臓を切り裂かれても生きていたと言うか生き返った彼女なら、ハッキリ言つて本当に雑に装置を引っ張り出しても大丈夫だろう。何だつたら仁がデイナに変身して、手を突き刺して抜き取つても良い。流石にやる気はないが。

「お願いできる？」

希美が摘出を願つた相手は、白上教授ではなく峰だった。その意味を頼まれた峰は直ぐに理解した。

——自分が信じられなかったら手術にかまけて殺せばいい——

言外に告げられ差し出された命に対し、峰は顔を赤くすると足早に希美に近付き腕を振り上げ握り締めた拳で希美の頬をぶん殴った。鈍い殴打の音がラボの中に響き渡る。

「……人を馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ？ 私はアンタとは違うわ、命を弄ぶような事はしない」

声を震わせながら峰は希美に静かに告げた。

本当は希美の言うように、殺してやりたい程憎かった。だが、ここで感情のままに彼女を手に掛けるような事があればそれは彼女達と同類と言う事になってしまう。それだけは嫌だった。

それに、峰には殺す程の理由がない。健は生きている訳だし、怒りは抱いても殺意を抱くまでには至らなかったのである。

「——でも殴りはするのね？」

「今のはこの間、アンタにボコられたお返しよ。これでチャラにしてあげるから、ありがたく思いなさい」

「……………フフツ」

「何よっ」

「何でも……………よろしくお願いするわ」

余裕を感じさせる希美に峰は面白くなさそうに鼻を鳴らしながら、さつさと手術の為の器具を用意する。生憎と病院ではないのであまり器具は充実していないが、人の腹を掻つ捌いて異物を引っ張り出すだけなら出来る。縫合に関しても、相手が希美ならあまり心配する事は無いだろう。

ただ問題があるとすれば、ここには麻酔が無いと言う事だろうか。つまり摘出の為の手術の間、希美には腹を割かれ異物を引っ張り出される激痛に耐えてもらわなければならないのだ。

「……はい、これ」

「ん？」

徐に峰がタオルを限界まで丸めて固めた即席の猿轡を渡した。これを噛み締めて少しだが痛みを和らげると言うつもりらしい。

依然顔は険しいのに気遣ってくれる峰に、希美は思わず苦笑すると猿轡を受け取り啞えて噛み締めた。

そして、白上教授と峰の手による手術が始まった。

「——よし、これで……」

「~~~~ツツ!!?!」

白上教授が殺菌済みの使い捨てゴム手袋で掴んだ鉗子を引っ張った。瞬間、鈍いブツリと言う音と共に希美の体の中に仕込まれていた制御装置が引き抜かれる。引き抜かれる瞬間、麻酔なしで体の中を切り開かれる痛みはずっと耐え続けて猿轡を食い千切らんばかりに噛み締めていた希美が、最後の強い痛みに全身を強張らせる。

簡易な手術室と化したラボの一面は希美から流れ出た血で酷い有様だったが、その甲斐あって希美にとって最大の不安材料だった制御装置は完全に取り除かれた。これで万に一つも戦闘中に邪魔される事は無いだろう。

その代償で大分血と体力を持っていかれたが、この程度であれば安いものだ。
「ぐ、が……かはつ。はあ……はあ……」

「お疲れ様」

猿轡を口から離し、脂汗を拭いもせず大きく息をする希美に峰が見もせずに労いの言葉を掛けた。ぞんざいな扱いだったが、今の希美にはその程度で十分あった。労いに対する言葉を返す余裕は無かったが、峰の方に向け今出来る精一杯の笑みを向ける。

ともあれ、後は希美の回復を待てば準備は整ったと言って良い。S・B・C・Tが敵に回ってしまった事は残念だが、このまま放置する訳にもいかないし、希美の傷が癒え体力が回復し次第、傘木社への行動を起こさなければ。

亜矢が、取り返しのない事態になる前に……

「瀬高君、すまないがまた食料の買い出しを頼まれてくれるかい？」

「う……了解です」

「すみませんね、先輩。俺達は迂闊に外出れないんで」

「分かっているよ……でも今度は何往復すりゃいいんだ」

仁と峰が目覚めた時は、何度も何度もラボと近場のコンビニやスーパーを往復させられた。短いスパンに何度も店に訪れ、大量に食料を買い漁って行く拓郎を店員たちは奇異の目で見ていた。またあの視線に晒されるかと思うと、拓郎は今から気が重かった。

とは言え、行かない訳にはいかないので白上教授から財布を受け取ると裏口から外に出て行った。彼がラボを出て行った後、仁は清潔なタオルを峰の傷口に当て続けた。

何もする事がなくなったので、仁は適当な話題を希美に振った。

「そう言えば、志村さん？ の戦う理由って、誰を助けたいの？」

「……大した相手じゃないわ。ただの……そう、ただの友達よ」

ただの……とは言うが、その顔はとても穏やかで、だからこそ焦燥を滲ませていた。

それだけで仁は理解した。その相手は希美にとつてとても大事な人なのだろう。今までの荒れ狂った心が穏やかになる位には。

一体どんな人なのだろう。仁は希美の助けたい人に想いを馳せた。

「そっか……頑張ろうね、お互い」

仁の言葉に希美は答えない。ただ静かに頷き、そして少しでも体力を回復させる為か眠りにつこうと目を閉じた。

刹那、塞いでいる筈の表の研究室に続く扉が派手に吹き飛んだ。

「ん?」

「ッ!?!」

「嘘、気付かれたッ!?!」

仁は扉が吹き飛んだことにあまり驚いた様子を見せなかったが、希美は閉じかけていた目を開いて塞がっていない傷が痛むのも構わず上体を起こし、峰は立ち上がり警棒を手を取った。

最初、やって来たのはS・B・C・T。だと思っていた。だが扉が吹き飛んだ衝撃で舞い上がった埃と漆喰の煙の向こうから出てきたのは、あろう事かステイクに変身したアデニンであった。破壊した扉から入り込んだ彼は、仁と希美の方を見るとゆっくりと歩み寄る。

「あ、アデニン——!?!」

「もうここを嗅ぎ付けるなんてツ!?!」

「ん? 希美、お前生きて……いや、お前なら或いは生きていてもおかしくはないか」

完璧とは言い難かったが、それでもそれなりにしつかりと偽装した筈だった。もう暫くは捜査の手が入っても誤魔化せると思っていたが、ここでバレるのは予想外である。

警戒する女性2人と白上教授。しかし仁は、特に動じる事無くステイクの前に進み出た。

「今日は1人? 雄成さんは?」

「プロフェッサーはお忙しい。だからこそ、俺がここに来た」

「俺達を殺す為に?」

「他の連中はな。だが門守 仁、お前は違う」

「違う?」

訝しみ首を傾げる仁に対し、ステイクは変身を解除すると彼に手を伸ばして驚くべきことを口にした。

「俺は……いや、我々はお前を迎えに来た。俺と共に来い、門守 仁」

「なっ!?!」

「何だとツ!?!」

アデニンの言葉に仁は目をスツと細め、峰と白上教授は驚愕の声を上げた。まさかの勧誘である。

「……………どう言う事よ、アデニン？」

「言葉通りだ。門守 仁、お前が居るべきはここじゃない。我が社……………いや、プロフェツサーが作る世界だ」

アデニンは言う。これから先、雄成は世界を大きく作り変えろと。選ばれし者達が至る、進化した人類が作り出す世界。そこそが仁の居るべき場所だと、彼はそう告げた。「既にお前の愛する双星 亜矢は我らと共に居る。君もこちらに來い」

「亜矢さんの事を、保護したとでも言いたいの？」

「そうだな……………その認識で間違いはないかもしれない。確かに研究の名目で来てもらったが、我々は彼女を殺めるつもりはない。そしてお前もだ」

差し出される右手。そこに敵意は感じられない。だが仁はその手を取る事なくジツと見つめている。

この状況は非常に不味い、白上教授達はそう判断せざるを得なかった。何しろアデニンの提案は、仁にとってこれ以上ないほど甘美に聞こえている筈だからだ。

「我々と共にくれば、お前は愛する者と静かに添い遂げる事が出来る」

今の仁にとって、亜矢は愛する人であると同時に唯一の同族。拘らない訳がないし、

拒める訳がない。人の心ではどうにもできないほどの、生物としての本能があるからだ。

——仁の手が僅かに動いた。

「もう戦う必要は無いし、彼女が傷付く事もない」

止めなければと思うが、峰達に仁を説き伏せられるだけの言葉が思い浮かばない。何を言っても論破されそうな気さえする。

——仁がアデニンに向けて一歩前に踏み出す。

「共に来い、門守 仁。お前が居るべき場所はこちらにある。プロフェッサーが作る新人類の世界が、お前が居るべき場所だ。お前にはその資格がある」

「ダメ、駄目です門守君!! 双星さんは、双星さんはそんなこと望んでません!」

仁の手がアデニンに向かって伸び、差し出された手を取ろうとしている。峰が必死に声を掛けるが、仁は聞く耳持たず見向きもしない。

希美は射殺さんばかりの視線でアデニンを睨み付けている。恐らくはリリイとレックスはその世界を創る為の礎にするつもりなのだろうと予想して。

そして白上教授は、何も言わずジツと仁の事を見守り続けた。頬を冷や汗が流れ落ちてはいるが、気付いていないのか無視しているのか拭う事もしない。

3人が固唾を飲んで見守る前で、仁の手があと少してアデニンに触れそうになり——

——仁は、手の甲で差し出された手を払った。

「……………何のつもりだ？」

アデニンは払われた手を一瞥し、目だけを仁に向けて問い掛ける。視線は先程まで仁を招こうとしていた時とは打って変わり、研ぎ澄まされた刃の様に鋭い。

その視線を受ける仁の表情は、至って穏やかであった。

「悪いけど、俺が居るべき場所はそっちにはないよ」

静かな、だが明確な拒否の言葉。

アデニンは仁からの返答に、目を閉じて大きく息を吐くとカラミティドライバーを取り出した。対する仁もテイナドライバーを取り出す。

〈SQUID + SHELLFISH Origin regression〉

「いいのか？ 我々を拒絶すると言う事は、新人類と旧人類……つまり、世界の全てを敵に回すと言う事になるんだぞ？」

それは、短絡的かもしれないが同時にその通りかもしれない。見た目は普通の人間と変わりないが、仁も亜矢も体の作りは普通の人間と全く違う。その事を知れば多くの

人々が2人の事を羨み、若しくは恐れ、忌避し、利用しようとするだろう。2人が安寧を得られるのは同族である雄成が作り出そうと言う新人類の世界。だがそれすら拒絶すると言う事は、仁は亜矢を守りながら世界の全てと敵対すると言う事になる。

しかしその可能性を突き付けられても、仁の心は揺らがなかった。

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「愛する人の為に、世界を敵に回す覚悟も無しに……男は名乗れないよ」

〈Amazing! Revelation of the legend, DRAGON〉

「……交渉は、決裂か」

〈Reborn origin, CAMERONAS〉

もはや避けられぬ戦いの気配に、希美は自分も参戦しようとしたがそれは峰に止められた。まだ傷が完全に塞がっていないのに無茶をさせる訳にはいかないし、何よりあれは仁の戦いだ。彼がやらねばならない戦いを、余人に邪魔させる訳にはいかない。

「さて、検証の時間だ。変身！」

〈Open the door〉

「理解出来んな……変身」

〈Biohazard〉

仁はデイナ・ドラゴンライフに、アデニンは再びステイクに変身して対峙する。

変身するが早いのか、デイナはステイクに突撃しラボから、研究棟から押し出した。既に何度か戦場になった研究棟を、また戦いの舞台にして壊す訳にはいかない。

研究棟の外に移動したデイナは、ステイクから一旦距離を取り大剣モードのハイブリッドアームズを構える。対するステイクも、ベクターリーダーを銃剣モードにしてデイナに向けた。

デイナの大剣振り下ろしを、ステイクはベクターリーダーで防ぎ触手を束ねたドリルで反撃してきた。それをデイナは上腕を押しさえる事で防ぐ。

互いに至近距離で相手の攻撃を押しさえつつ、体を前に出そうとした事で至近距離で顔を合わせるデイナとステイク。

互いに仮面越しに相手の目を見ながら、ステイクは先程の話の続きをした。

「こんな戦いに、何の意味がある？ お前が愛する彼女は、我らと共に居るんだぞ？」

「俺は、亜矢さん達には胸を張って生きたい」

「何だっ？」

仮に仁がアデニン達についていたとして、それを亜矢が喜ぶかと言われたら答えはノーだ。亜矢は仁が間違った選択を、自分の所為でしたとなればそれをいつまでも引き摺るだろう。

それでも仁に対しては笑顔を向けてくれるかもしれない。だがそれは御機嫌取りの様な、何処か取り繕った笑顔だ。仁が本気で見たい、亜矢の心からの笑顔ではない。

何より、間違っていると分かった選択をした上で、それを誇ったり忘れて亜矢と接する自信が仁にはなかった。きつと互いに相手に対して何かを取り繕って、ギクシヤクとした関係になる。そんなのは御免だ。

「だから、俺は間違った選択をしない。例えば茨の道が待っていると、亜矢さんと真矢さんに胸を張って生きれる道だけを選択する」

「……ならば……ならば、愛する者とどんな手を使つても添い遂げたいと言う気持ちの間違つていると言うつもりか!？」

仁の答えに対し、アデニンが珍しく吠えた。燃え上がる怒りを力に変え、銃剣を振り回しデイナに斬りかかる。

「答えろ、門守 仁!? 愛する者を求める事は、その者の為に世界を変えようとする事は間違っているのか!？」

「……さあね。何が正しいかなんて俺には分からないよ。ただ今の俺がハッキリ言えるのは、俺が間違った選択をする事を亜矢さんは望んでないって事。それだけだ。だから俺は、亜矢さんと真矢さんを助け出す」

デイナが翼を広げ、ステイクに向けて大きく羽ばたく。吹き荒れる風がステイクの体

を吹き飛ばし、武器を手落とさせた。

「ぐうっ?!」

吹き飛ばされ体勢を崩したステイクに、デイナがさらに追撃を掛ける。翼を広げて上空に飛翔し、一気に降下しながら唐竹に大剣を振り下ろす。ステイクはそれをドリルで迎え撃つが、ドラゴンライフのデイナのパワーはハザード2のカラミティで互角に立ち向かえるレベルの物。通常のベクターカートリッジ二つを使っただけのステイクとはスベックからして違い過ぎる。

それだけではなく、デイナは一度カラミティに徹底的に敗北し破壊しつくされた。だが破壊された細胞は再生の際に強くなる。今のデイナは、カラミティに敗北した時よりも強い。

結果、デイナの一撃はステイクのドリルを粉碎し、ステイク自身も大きく切り裂いた。「ぐああああああつ?!」

脳天から大きく切り裂かれたステイクだが、まだ変身は解除されていない。そして闘志も失つてはいないのか、フラフラになりながらもレセプタースロットルに手を伸ばし抵抗の意思を見せる。見上げた根性、いや忠誠心か。

「させない。戦いのレポートはもう纏まつてる」

〈ATP Burst〉

ステイクがレセプタースロットルに手を掛けるよりも早くに、デイナがスロットルを引きノックアウトクラッシュを発動。放たれた錐揉みキックが、ステイクの体を穿たんと突き進む。

せめてもの抵抗に、ステイクは出せる触手を全て束ねて防ぐがそれはあつと言う間に抉り穿たれ、蹴り抜かれた。

「うぐお、がつ?!」

威力をある程度殺されたとはいえ、それでもドラゴンライフのノックアウトクラッシュは強烈だったようで、ステイクは叫びも殆ど上げられずに蹴り飛ばされた。

蹴り飛ばされた先で落下したステイクは、落下と同時に限界に達したのか爆発を起す。

膨れ上がる爆炎を、デイナは静かに見つめていたのだった。

第59話：力は相応しき者の手に

落下し、爆炎に包まれたステイクをデイナがジツと見つめていた。先程まではあまり気にしていなかったが、アデニンがカラミティドライバーを使用して仮面ライダーに変身したのは彼にとっても軽く衝撃的であった。カラミティほどの強さではないが、それでもカラミティドライバーを使用している以上以前に比べればずっと能力が色々と向上している筈だ。

それが予想出来ていたから、爆炎の中からふら付きながらもステイクが姿を現した時彼はあまり驚かなかった。恐らくはこうなるだろうと思っていたから。

「はあ……はあ……」

覚束ない足取りで爆炎の中から姿を現したステイクだが、いい加減ダメージが限界だったのか変身が解除される。いや、自分から解除したのか。彼らは戦闘不能に追い込まれると体内に仕込まれた装置が証拠隠滅の為動き肉体を消し炭になるまで燃やす。それを避ける為、彼らは敗北を察すると自分から変身を解くのだ。

今回もその例に漏れず自ら変身を解除する。今回もそれだった。

「まだ……まだ、死ねない……栄光を、新たな世界をこの手に掴む……プロフェッサー

……あの人の悲願を成就させるまでは——！！」

変身を解き、満身創痍のアデニンとデイナが顔を合わせる。デイナは暫くアデニンの事を見つめていたが、直ぐに興味を失ったかのようにそっぽを向いた。

「……雄成さんに伝えておいて。亜矢さんは直ぐに迎えに行く。それまで、亜矢さんの事を傷付けるな」

アデニンの方を見ずに告げた仁は、教授達の居るラボに戻りながら変身を解いた。その背を見送りながら、アデニンは完全な敗北に険しい顔をし、しかし今の自分出来る事は何もないとその場を離れるのだった。

アデニンを見事撃退した仁がラボに戻ると、教授と峰が彼を出迎えた。

「門守君！」

「門守君、良かった！」

「お待たせしました。もう万全です」

2人が迎えてくれた事を、仁は自分の身を案じてくれての事だと思つたがそうではなかった。2人は、アデニンの言葉に惑わされ仁が傘木社について行つてしまわなかった事を素直に喜んだのだ。あの誘いは今考えても甘美で、危なかった。仁の心が強くなければ、より暮らしやすい世界に愛しい人といられると分かり寝返つてしまつてもおかしくはない。

「よく、アイツの言葉に靡かなかったわね」

「志村さん、大丈夫？」

「心配してくれてありがと。大丈夫よ、傷はきつきより大分塞がって来たから」

希美がチラリと服を開けて傷口を見せると、手術の為に切開した部位はもう出血が止まり塞がりかけていた。改めて人間離れた回復力に、仁はともかく峰が興味深そうに希美の傷口を眺める。

「ほお………」

「ともあれ、君が味方でいてくれて良かったよ」

「ここでアイツについて行っちゃったら、亜矢さんに会わせる顔が無いですから」

4人が集まって話していると、拓郎が裏口から慌てた様子で戻ってきた。どうやらステイクの爆発は裏山から見えるか聞こえるかしたらしい。

「教授！ 皆！ 大丈夫か!？」

息を切らせながらも両手には大量の食糧が入った袋を持ちラボに入ってきた拓郎に、希美はすっ飛んでいくと食料を奪い取り次から次へと口に流し込んだ。

「あぐ、んぐ、はぐ」

「うおっ!?! あ、あの教授、何が?」

ドアは吹き飛んでいるし外では爆発があったしで、拓郎は何があったかを知らないの

で困惑を隠せない。

1人置いてきぼりで困惑した様子の拓郎に、仁達3人はつい可笑しくなって笑ってしまった。

あれから宗吾は、装備と権限を？奪され自宅謹慎が言い渡された。

最初失意のどん底にあった宗吾は、無気力にリビングでジツとしていただけだったが、仏壇に写る今は亡き家族の写真を見て心に再び火が灯った。

そうだ、こんな所で腐っている訳にはいかない。自分は無法を許さぬ警察官で、人々をフアツジの脅威から守る為に戦う事を選んだ仮面ライダーなのだ。ここで何もせずいたら、それこそ家族に顔向けできない。

宗吾は気合を入れ直すと、制服に着替え警視庁に赴き、仮設されたS・B・C・Tの本部へと向かった。スコープ1号を昭俊から奪取し、傘木社本社に仕掛ける為だ。

無謀だと言う事は分かっている。しかし彼は所詮一警察官、出来る事など高が知れて

いる。それに仁の様な優秀な頭も無かったので、考え付くのは自分の正義を信じて間違いを正す為の戦いをする事だけだった。

警視庁に着いた宗吾は、思いの外あっさりとS・B・C・Tの仮設本部へと辿り着けた。途中後処理の為に動き回っている警官達と何度もすれ違ったが、彼ら彼女らは皆宗吾が居る事に疑問を持った様子が無い。それどころか、居て当然と言う様子すら見せた。

自宅謹慎を傳達された身なのに、何故？

そんな疑問を抱きながら、宗吾は仮設本部の入り口まで辿り着いた。隠れながらコッソリ中の様子を伺うと、ここでは昭俊が自分の派閥——即ち傘木社の息が掛かった者——の部下に指示を出している。内容を聞く限り、仁を捉える為の部隊を編成しているらしい。次に向かうのは、明星大学だ。一番怪しい所だし、先程通報で大学で爆発が確認された。

このままだと仁の身が危ない。そう思った宗吾は、スコープドライバーの位置を確認した。ライトスコープと違い変身していなければ置き場所にあまり困らないスコープドライバーは、他の装備と違い昭俊のすぐ近くに置かれている。

(この位置……入ればどう考えても見つかる、か)

宗吾は悩んだ。見つからずにスコープドライバーを奪取するのは不可能に近い。そ

して室内には昭俊の部下が蔓延っている。今まで宗吾の指揮下にあつた慎司などの生き残りの部下も居るが、彼らが宗吾に従つてくれるかどうか分からないし、彼らが自分についてくれても多勢に無勢だ。

どうしたものか——

「何してるんですか、権藤隊長？」

「うおっ!？」

突然背後から声を掛けられ、宗吾は飛び上がるように驚き後ろを振り返つた。そこには数人の警察官——制服、スーツ問わず——が集まつていた。

こんな所で何をしているのかという疑問もそこに、宗吾はこの状況をどう乗り切るか頭を働かせた。ここで捕まる訳にはいけないのだ。

しかし焦る宗吾に対し、彼らの口から出てきたのは思いもよらない言葉だった。

「さあ、早く入りましょう?。」

「へ?。」

「S. B. C. T. を取り返すんですよ?。」

宗吾は目を見開き、周囲を見渡した。集まつてきた警官達は皆強い意志を宿した目で、宗吾に向けて頷いて見せた。そこで漸く気付いた。彼らは宗吾の謹慎に気付いていないのではなく、宗吾と共にS. B. C. T. を取り戻す為に集まつたのだ。

「な、何で？」

「他部署だからって、何も知らない訳じゃないんです」

「北村さんや小早川さんがコッソリあちこちに触れ回ってたつてのもあるんですがね」

「聞きましたよ。今S・B・C・Tが大変だつて事」

「俺達は市民を守る為に警察になつたんです。市民を積極的に傷付ける、傘木社の事は許せません！」

「それに仮面ライダーには俺達も助けられました。彼らを助ける為、手伝いをさせてくださいー！」

「お願いしますー！」

「お、お前ら——！——！」

彼らの熱い思いに、宗吾は年甲斐もなく目頭が熱くなるのを感じずにはいられなかつた。そして同時に嬉しく思う。自分達は決して孤独な戦いをしてきた訳ではない、自分達の戦いを見てくれる人達はこうしていたのだと言う事に。

目尻に浮かんだ涙を乱暴に拭い、気合を入れ直すと宗吾は扉の手を掛けた。

「よし、行くぞー！」

「「応ッ!!」」

一気に扉を開け、一般警官達と共に仮設本部に雪崩れ込む宗吾に、昭俊は椅子から腰

を上げ驚きを露にした。

「な、何だ君らは!? 権藤! 君には謹慎を言い渡してあつた筈だ!!」

「すみませんがね、指揮官。いや元指揮官。その命令は聞けません」

「何!?!」

「S. B. C. T. は傘木社と戦う為の組織なんだ。それが傘木社に与して、門守君達を追い詰めるなんて事、許される筈がない!」

宗吾の言葉に彼についてきた警官達が頷くのを見て、昭俊は奥歯を噛み砕かんばかりに噛み締めた。

「き、貴様ら——!?!」

「S. B. C. T. とスコープ……返してもらどうぞ」

その言葉が合図となった。

一斉に動き出す警官とS. B. C. T.。両者は決して広いとは言えない指令室内で取っ組み合いを始め、椅子や机をひっくり返す程の騒動となった。騒動は室内だけでは収まらず、何人かは部屋の外に出て殴り合いまで始める始末。

そんな中で、宗吾はスコープドライバーを昭俊から取り上げようと奮闘していた。

「ハのー!」

「させるか!」

スコップドライバーに宗吾が手を伸ばせば、昭俊がそれを妨害し宗吾を床に投げ飛ばす。

宗吾はそれを受け身を取ってやり過ぎすと、立ち上がり昭俊にタツクルを仕掛け床に押し倒しマウントを取ると何度も拳を振り下ろした。顔を狙って何度も拳を振るつたが、昭俊はそれを腕でガードしてしまふ。

決め手に欠ける攻撃に宗吾が歯噛みしていると、傘木社の息が掛かった隊員が宗吾を昭俊から引き剥がしてしまつた。

「く、そ!?! この、放せッ!?!」

暴れる宗吾だが、生身では出来る事に限りがある。特に数人掛りで取り押さえられては、彼と言えども振り払う事は容易ではない。

宗吾が取り押さえられると、それを好機と見て昭俊がスコップドライバーを手に取り腰に巻いた。昭俊がドライバーを腰に装着してしまつたのを見て、宗吾の顔から血の気が引く。

「く、しまつた——!?!」

「残念だつたね。悪いが君はもう、用済みだ」

〈Access〉

キープレートがドライバーに装填され、止めねばとは思うが取り押さえられている現

状どうする事も出来ない。昭俊が傘木社の人間であるなら、自分に歯向かった人間を始末する事に躊躇などするはずがない。この機会に警察組織の掌握すら考えるかもしれない。

それだけは阻止しなければならぬが、取り押さえられてしまっている為宗吾にはどうする事も出来なかった。

そして昭俊はそのままドライバーのハンドルを回転させ――

〈Error〉

「……………は？」

「え？」

まさかの音声に宗吾と昭俊だけでなく、周囲の物が全員固まった。それなりに長くスコープシステムを使ってきた宗吾でも、あんな音声は聞いた事がない。

昭俊は慌てて何度もハンドルを回したが、結果は全て同じ。何度回してもエラーがでるだけで一向に変身する事は叶わなかった。

「な、何故だ!?! 一体どう言う事だ!?! キープレートの登録データは書き換えられた筈なのに!?!」

キープレートには、変身者の身長体重などの生体データが登録されている。セキュリティの事を考え、登録されているデータと異なる人間には変身できない様にする為だ。

それがいつの間にか書き換えられていた事に昭俊が愕然として、指令室に新たな乱入者が現れた。慎司と茜等、旧 S・B・C・T の生き残り達だ。S・B・C・T を傘木社の私兵とするに当たり、邪魔になるからと追放された彼らの出現に昭俊は目を見開く。

「お、お前達何故?!」

「すみませんね。折角のデータですけど、権藤隊長以外にそれ似合いそうもなかったんで、勝手に書き換えちゃいました」

そう言つて茜はペロリと舌を出し軽くウインクしておどけてみせた。場違いな彼女のリアクションに、昭俊は開いた口が塞がらない。

宗吾と同じく S・B・C・T を追放された茜達だが、彼女達も諦めてはいなかったのだ。この時の為に、様々な伝手を借りてコツソリ S・B・C・T の指令室に入り込み危険を冒しながらもスコープのキープレートの設定を書き換えていたのである。

「き、き、き、き、貴様——?!」

激昂する昭俊だったが、慎司達により拘束から解放された宗吾が飛び掛かった事でそこどころではなくなつた。宗吾が飛び掛かった衝撃でスコープドライバーは外れ、2人は生身で取っ組み合いをする事になる。

互いに殴り合い、何度も上下を入れ替える2人。その時ふと宗吾は視線を昭俊の背後

に向けた。そして、そこで“あるもの”を見ると態と床の上に倒れ昭俊にマウントを取らせると、両腕で彼がそれ以上自分に近付かないように固定した。

昭俊は宗吾の顔をぶん殴ろうと奮闘するが、宗吾が腕をつつかえ棒のようにして押さえられているので届かない。それでも何とかしようと思っている——

「フンッ！」

突然昭俊は脳天に強い衝撃を受け、そのまま意識を失った。彼は気付いていなかったが、何時の間にか慎司が昭俊の後ろに回っており手に手頃なアタツシユケースを抱えていたのだ。そしてそれに気付いた宗吾が慎司と目があつた瞬間、彼は次にすべき事を即座に理解し慎司が昭俊の頭をぶん殴りやすいようにしてやった。

結果、振り下ろされたアタツシユケースは昭俊の頭をぶん殴り彼を一撃で昏倒させたのだ。

「ふう……助かったぞ、小早川」

「いえ、先日は何も出来ませんでしたからこれ位は」

律儀な部下に宗吾は笑みを漏らすと、昭俊の腰に装着されたドライバーを外し自分の腰に装着し直した。そしてキープレートを装填しハンドルを回した。

〈Access〉

「変身！」

〈In focus〉

「ぐ、うう……………ツ!？」

昭俊が意識を取り戻した時、彼の目の前には宗吾が変身したスコープ1号が佇んでいた。照明の光に照らされ、銀色の装甲がキラリと光る。

転がるようにしてスコープから離れた昭俊は、乱れた制服を直す事も無く立ち上がると懐に手を突っ込んだ。スコープはそれを最初拳銃でも出して抵抗するのかと思っていたが、そうではなかった。

昭俊が取り出したのはベクターカートリッジだったのである。

「ツ！ 貴様……………いや、持っけていてもおかしくはないのか」

「こうなたらあつ！」

〈RHINO Contamination〉

ベクターブレスでライノファッジに変異した昭俊は、そのパワーを持つてスコープにタックルを仕掛けた。スコープはライノファッジのタックルを受け止めるが、相手の突進力が強すぎて受け止めきれず壁に向かって押されていく。

そのまま壁とライノファッジに挟まれるスコープだが、壁の方がファッジの力とスコープの防御力に負けて崩れ落ちる。壁が粉碎されてもライノファッジは構わずそのまま突撃を続け、2人は壁を次々と破壊して外へと出てしまった。

「くうっ!？」

外に出た所で漸く止まったライノファアツジから、スコープは漸く離れる事が出来た。外では半壊した警視庁の壁を突き破って出てきたファアツジの姿に、待ち行く人々が悲鳴を上げて散り散りになって逃げていた。

押し出されて地面に倒れたスコープに、ライノファアツジは両手のサイの頭部を模したガントレットで殴り掛かろうと近付いていく。1本のぶつとい杭が付いたガントレット、あれで殴られたら堪ったものではない。

ライノファアツジがスコープに近付き、拳を叩き付けようと振り上げた。

その瞬間——

「今だー!」

〈Vortex・Gun Startling〉

スコープは腰のホルダーからキープレートを取り出し、ボルテックスシールドにセットしボルテックスガンを起動。至近距離からのマシンガンによる銃撃をお見舞いした。

「ぐああああああつ?!」

連射力に優れるマシンガンの銃撃を至近距離から受け、強固なライノファアツジの表皮も悲鳴を上げる。スコープを殴り付けるどころの話ではなくなつたライノファアツジはもんどりうつて倒れた。

倒れたライノファッジ相手に、スコープは一切容赦しない。彼はガンマライフルも精製し、更に激しい銃撃でライノファッジを追い詰めた。

「ぐぐぐつ!?!……調子に、乗るなあ!!」

しかし相手はこの程度で倒れはせず、ガードを固めて接近してきた。弾幕を耐えて接近してきたライノファッジに、スコープは横に転がって回避すると銃撃があまり効果的ではないと戦い方を変えた。

〈Vortex・Blade Starting〉

分厚い鉄板をも切り裂くボルテックスブレードを展開し、接近してきたライノファッジに斬りかかる。ライノファッジも両手のナックルガードで対抗し、互いにパワーとパワーでぶつかり合う。

だが軍配はスコープの方が上がった。鋭い斬撃を何度も放ちライノファッジはそれをナックルガードで受け止めるが、数回受け止めた所でスパイクが限界を迎え砕け散ってしまった。

「何ッ!?!」

「ゼヤッ!」

砕けた両手のスパイクに一瞬呆然となるライノファッジの隙をスコープは見逃さない。蹴りを放ち体勢を崩させると、立て続けに何度も斬りつけライノファッジを弱らせ

ていく。

「おおおおつー！」

「ぐあつ!? がっ?! ま、待て、ぎやつ!？」

ライノファアツジの制止も聞かずスコープは相手を滅多切りにしていく。遂には頭部の角すら切断され、ライノファアツジはその場に膝をついた。

「ぐうつ!?! うぐ、が、は……」

身動き取れなくなったライノファアツジに、スコープはトドメの必殺技を放った。

「これで、終わりだ！」

〈Recognition〉

「ハアアアアアツ!!」

放たれたエンドスマツシユが、動かないライノファアツジの胸板を穿つ。蹴り飛ばされたライノファアツジは、悲鳴を上げながら壁に叩き付けられその場で爆散した。

「ぐおあああああああつ!？」

爆散したライノファアツジは変異を維持できなくなり昭俊の姿に戻った。ベクターカートリッジが排出され倒れた昭俊の姿に、スコープは最初隠蔽処置が施され燃えるのではないかと警戒した。だがその警戒に反して、昭俊の体は一向に燃焼する様子を見せない。どうやら彼には隠蔽装置が埋め込まれてはいなかったらしい。ベクターカート

リッジが渡されていたのはもしもと言う事態の為で、彼がファッジとなって戦う事は本来であればイレギュラーな事態だったようだ。

「うぐ、ぐうう……」

「確保ッ！」

動けなくなつた昭俊を、警官が複数人で取り押さえ手錠をかける。見れば他の傘木社の息が掛かった連中も軒並み逮捕されたようで、取り押さえられたり手錠を掛けられて身動きを封じられていた。

この場での事態が終息した事に、スコープは安堵の溜め息を吐き変身を解除した。彼が変身を解除すると、慎司や茜を始めとした本来のS・B・C・Tの隊員達が集まってくる。彼らは皆、宗吾が再びS・B・C・Tの隊長として戻ってきてくれた事を喜んでいた。

「隊長！」

「お帰りなさい、隊長！」

「悪いな、お前ら。心配を掛けたようだ」

「お気になさらず」

「やっぱり俺らの隊長は権藤隊長じゃないと」

S・B・C・Tの隊員達は互いに頷き合い、宗吾こそが自分達の隊長であると豪語

する。その事に宗吾が嬉しそうに鼻っ柱を軽く擦ると、次にS・B・C・T・とは無関係だった警官達が近付いて来た。彼らは逮捕した傘木社の連中を一か所にまとめると、宗吾に近付き彼に向け敬礼をした。

「権藤隊長！」

「協力、感謝する。だが何故？」

「簡単な話です。我々も志は権藤隊長たちと同じ、ただそれだけです。我々だって市民を守る為に戦いたい。今までは指を咥えて見ているだけでしたが、もう見ているだけではいられません。先日の襲撃で、S・B・C・T・も人手不足だとか。是非、我々もお手伝いをさせてください！」

S・B・C・T・はその活動内容の関係上、非常に危険が伴う。事実、ライトスコップが開発されて以降も何人もの殉職者を出してきた。選別され訓練された者ですらそれなのだ。人間相手の対応しか想定していない普通の警察官では、簡単に命を落としてしまう可能性が非常に高い。

彼らはそれを承知の上で、宗吾達に手を貸そうとしているのだ。全ては警察官の矜持の為……不正を許さず、市民を守る。その為に命を賭けようとしているのだ。

その気高い精神と、自分達には味方が居てくれるのだと言う事実、宗吾は目頭が熱くなるのを感じた。

「くくッ、感謝する！」

宗吾は潤む目を堪えて彼らに改めて敬礼して感謝をすると、捕縛した昭俊を担いでその場を移動した。それに倣うように、他の者達も捕縛した傘木社の息の掛かった連中を引つ張つて相互について行く。

彼らを戦力として受け入れ、傘木社に仕掛けるにしても上層部の認可は必要だ。そのままでは他に居るだろう傘木社の息の掛かった上層部の人間に妨害されるのが目に見えているが、こうして傘木社の息の掛かった人間を連れて行けば話は別だ。寧ろ、このままの勢いで上層部に居る不穩分子を炙り出す。

「傘木 雄成……これ以上、お前の好きにはさせないぞ！」

その頃、明星大学のラボでも仁達が準備を整えていた。

「……志村さん、傷の具合は？」

「んぐ、んぐ……ぶはっ！ バッチリ」

希美の傷が癒え、戦いの前のエネルギーの補給も終わった。仁は満足そうに頷くと、希美だけでなく教授達と共にラボを出て愛車に跨る。普段は亜矢を乗せる後ろのシートには、今回ばかりは希美を乗せた。

「最後にもう一度聞きますけど、教授達もついてくるんですか？」

「今回ばかりはね。場所が場所だ、戦うだけでなく技術のある人間が必要になる場合もあるだろう」

「邪魔にはなりませんから、安心してください」

「その代わり戦いは任せただぞ」

これから敵の本丸に攻め込もうと言うのに、あまり緊張感が感じられない彼らの様子に仁は肩を竦めた。

勿論それは虚勢だ。彼らだって本当は不安だが、今ここで動かなければ取り返しのない事になる。仁は戦いに集中しなければならぬのだから、彼の手が届かない所を自分達がサポートするのだと湧き上がる緊張を気合で抑え込んでいた。

それが分かるので、仁はそれ以上は何も言わない。信頼する教授や先輩方についてきてくれると言うのだ。

これで残る懸念は、敵の多さだけ。本社ビルと言う事は、当然敵の数は今までの比ではない。保安警察、アデニン達幹部に雄成、更にはS・B・C・T、まで加わるのだ。

とてもではないが勝ちの目は見えない。

それでも垂矢を救う為にはいかねばならないと仁が覚悟を決めていると、唐突に仁の携帯から着信音が鳴った。こんな時に誰だと携帯を取り出すと、相手は宗吾である事を知り仁は目をパチクリとさせた。

「権藤さん？」

「何だつて？」

「もしもし？」

仁の口から零れた名前に、白上教授達が見合わせる前で仁は通話に出た。

『門守君！ 良かった、大丈夫そうだな？』

「お陰様でね。それよりどうしたの？ 何だかそっちも大変そうだけど？」

『お誘いさ。傘木社への強制捜査のな』

あの後、宗吾達は昭俊らを引つ張つて警視総監ら上層部に直談判をし傘木社への強制捜査をもぎ取った。警察上層部は完全に傘木社に支配されてはおらず、良識ある者、傘木社の意向が影響してくる事を憂いる者は存在したのだ。

その彼らに、昭俊らは十分な成果として映った。故に、宗吾らには傘木社への強制捜査が許される事となつたのである。

ただし、そこには必ず傘木社の不正の証を手に入れて来いと言う命令も付随してい

た。今回の強制捜査は前例のない程の強引なもの。それをするのなら、それに見合うだけの成果を持つてこい……そう言う事らしい。

出来なければ全員責任を取ってもらおうという脅しに近い言葉も貰ったが、宗吾は上等だと思った。今回に関しては失敗はイコール死を意味するのだから。

『そう言う訳で、我々はこれから傘木社へ突撃する。一緒に来るか?』

「……勿論。向こうで合流しよう」

その言葉を最後に通話を切ると、携帯を仕舞いながら教授達の事を見た。彼らは皆、仁と宗吾の会話内容を興味深そうに見ていた。

「……宗吾さん、S. B. C. T. 取り戻したって」

「それじゃあ——!」

「今まで通り、S. B. C. T. は味方だよ」

白上教授は安堵に胸を撫で下ろし、峰と拓郎は喜びにハイタッチした。

これで最大の懸念は消えた。宗吾達が来てくれるなら、戦力は十分。ならば、彼が考えるべきはただ一つ。

「亜矢さん、真矢さん……今行くよ」

愛する女性を救い出す。それだけを胸に、仁は傘木社本社ビルに向けてトランスポズンを走らせるのだった。

第60話：希望の一步

傘木社の本社ビルに向けて、トランスポゾン走らせる仁とそれについて行く白上教授達。他の車を追い越しながら走る仁だったが、視線の先で目立つ車両群を見つけた。

S. B. C. T. の輸送トレーラーと指揮車だ。

「門守君！」

「権藤さん、お待ちせ」

「行くぞ、傘木社に殴り込みだ！」

頼もしい味方に仁は笑みを浮かべずにはいられなかった。

と、そこで宗吾の目が仁の後ろに乗っている希美に向いた。

「ところでそつちは……？」

「どうも……」

「なっ!？」

仁の体で見え辛かった希美だが、体をずらし顔が良く見えるようにして片手を上げて挨拶した。

彼女の姿に当然宗吾は言葉を失うほど驚いた。仮面ライダーヘテロとして傘木社の

尖兵として立ち塞がってきた彼女を前に、冷静でいる事は難しい。ましてそれが仁の後ろに居るとなれば。

「か、門守君!? その女は——」

「大丈夫、今は味方だよ。志村さんも、傘木社に対しては色々と思うところがあるみたい」

「言い訳はしないわ。これが終わったら逮捕してくれても構わない。ただ、今だけは信じて」

険しい顔で自分の事を見つめてくる宗吾の目を、真つ直ぐ見つめ返す希美。

2人は暫し互いに見つめ合っていたが、運転している茜の声がそれを中断させた。

「隊長! まもなく傘木社本社ビルです!」

「分かった。総員戦闘用意!」

近づく戦場に、宗吾は顔を引つ込め指揮に集中した。仁と希美も見えてきた本社ビルに、腰にドライバーをそれぞれ装着した。

一方本社ビルの方では、迫るS・B・C・T.の車両群と仁の姿を警備の人間が見つけ慌てふためいていた。警備の人間は傘木社の裏の事情を知っている。故に、S・B・C・T.が仁と共に行動している事の意味を理解し、ただ事ではないと察したのだ。

「お、おいどうする!?!」

「とにかく報告だ！ セキュリティー、セキュリティー！ こちら本社ビル正面！ S. B. C. T. が門守 仁と共に向かってきている！」

『S. B. C. T. は味方だと聞いたが？』

「あれはどう見てもこちらに攻撃を仕掛けようとしている！ いいから早く警備を――」

警備員が報告と増援を要請している間に、仁達は本社ビルの前に到着した。

停まったトレーラーからは次々とライトスコープが降車し、本社ビル入り口にガンマカービンの銃口を向けている。指揮車からは宗吾が降り、慎司と並び立った。2人の腰にはスコープドライバーが装着されている。

「行くぞ、小早川」

「了解！」

〈Access〉

「変身！」

〈In focus〉

宗吾は銀色のスコープ1号に、慎司は銅色のスコープ2号に変身した。

S. B. C. T. が明らかに自分達に敵対する意思を見せた事に、本社ビル内の受付嬢らは狼狽えた様子を見せている。対して、警備員達は戦闘は避けられないと察し、ベ

クターカートリッジを取り出してファッジに変異した。

「くそー！」

「やるぞー！」

〈V e l o c i r a p t o r 〉

警備員達はヴェロキラプトルフアッジに変異して迎え撃とうとする。何も知らない受付嬢や一般社員達は、普段挨拶している警備員が怪物に変異した事に悲鳴を上げて物陰に隠れたり逃げている。

更には異変を早く察した保安警察の隊員もファッジに変異して奥からぞろぞろと出てきた。ビルの奥へ逃げようとしていた社員は警備員だけでなく本社の奥からも怪物が出てきた事に完全にパニックを起こしていた。

「傘木社の人だからって、ファッジの事を知ってる訳じゃないんだね」

「半分以上は一般人よ。何も知らないわ。ファッジ関連の事を知ってるのは選別された一部の研究員と重役だけよ」

「あの量産型ファッジは？」

「あれは他所から引き抜いた傭兵みたいな連中ね。金で雇われたり、非合法な方法で引き抜かれたり」

トランスポゾンから降りながら仁の質問に希美が答える。

2人がトランスポゾンから降りると同時に、スコープ1号が手を振り下ろし号令を下した。

「総員、突撃ッ!!」

忽ち響き渡る銃声。ライトスコープとヴェロキラプトルファッジの持つ銃が火を噴き、壁や柱は流れ弾で穴だらけになりガラスは粉々に碎け散る。

飛び交う銃弾を前に、仁と希美もベクターカートリッジを取り出し変身する。

〈QUETZALCOATLUS + SPINOSAURUS Reborn〉

「道案内は宜しくね」

〈HORSESHOE × CROCODILE × TURTLE Mixing

Genetic information〉

「逸れたり道間違えたりしないですよ?」

まるで長く共に戦ったかのような気安さを見せる2人だが、つい先日まで敵対していたのである。

そうなった原因は何かと問われれば、端的に言えば『愛』の一言に過ぎるだろう。互いに愛すべき人を救う為に、2人は敵対では無く手を取り合う事を選べたのだ。

「変身!」

〈Amazing! Revelation of the legend, DRA

G O N

〈Creative, Capture, Out of Control. Brake
the chain〉

仮面ライダーに変身した2人は、銃火が飛び交う中を敵のファッジを倒しながら突き進む。白上教授達は壁際など戦いに巻き込まれない所を必死になって走りデйна達の後に続く。

本社ビルからは続々と増援のヴェロキラプトルファッジが出てくるが、デйнаとヘテロの敵ではない。出てきた端から薙ぎ倒され、2人が通った後には倒されたヴェロキラプトルファッジが道標の様に転々と倒れていた。

「それで、何処まで行けば良いの？」
「もう少しよ。この先を右に！」

2人が向かっているのは、地下にある特別研究区画への直通エレベーターだ。非人道的な実験は全てそこで行われている。

因みに本社ビルには地下の研究区画とは別に、地上66階以上の階も一般社員立ち入り禁止の特別区画となっているがそこはベクターカートリッジの精製が目的の区画だ。地下に研究区画があるのはいざという時の封じ込めや隠蔽の容易さを考えての事だが、ベクターカートリッジ精製区画がビルの上の方にあるのはいざという時に屋上のヘリ

ポートから大型輸送ヘリでベクターカートリッジだけでも持ち出す為である。

デイナはヘテロと協力してヴェロキラプトルフアツジを倒しながら、目的の地下直通エレベーターへと辿り着く。そのエレベーターには普通の上と下のボタンの他に、テンキーがついていた。関係者以外使用できない様にする為のセキュリティだ。

ヘテロはこの関係者だったので、勝手知つたる慣れた手つきでテンキーを操作してエレベーターを呼び出そうとした。

ところが、彼女が何度テンキーを押してもエレベーターはうんともすんとも言わなかった。エレベーターの電源が落とされたのだ。これでは地下へ下りる事が出来ない。

「クソッ！ 一体どうしたら——」

一応地下に向かう手段は他にもあるが、他の場所はここから遠い上に内一つは下りた先で死体の山を見る事になる。できれば避けたい。

悩むヘテロだったが、彼女が結論を出すより先にデイナが動いた。彼は徐にエレベーターのドアを蹴破つたのだ。

「ちよおっ!?!」

「こつちの方が早いよ。先に下行くからね」

止める間もなくデイナはワイヤーを掴み一気に地下へと下りて行く。暗いエレベーターシャフトの中に消えて行つたデイナの姿を、ヘテロは呆れた目で見降ろした。

「やんちゃだ事……」

まあ結局はこれが一番早いかと、ヘテロも目の前にぶら下がるワイヤーに手を伸ばした。が、彼女が降りるのを妨害しようと言うのか奥からヴェロキラプトルフアツジが無数に姿を現す。

思わず舌打ちしつつ、こいつらにデイナの後を追わせる訳にはいかないと迎え撃とうとする。

そこにスコープ1号がボルテックスガンを乱射しながら割り込んだ。

「俺が相手だ！」

「アンタ……」

正直な話、ヘテロもスコープ1号も、互いに相手に対して複雑な思いを抱いている。ヘテロは今まで散々敵として立ち塞がり被害を与えてきた者としての後ろめたさ。スコープ1号は多くの部下を彼女によって亡き者にされた恨みなどだ。

お互いに複雑で、どう接すればいいか分からない。だが今は、今だけは信じるしかない。かっつた。

何よりも他ならぬ仁が2人の事を信じて背中を任せているのだ。ならば、今は突き進むしかない。

「先に行け、こいつらを片付けたら俺達も下に行く！」

「……………分かったわ。 大人数で来るなら、地下駐車場の奥のエレベーターを使うのが早いわよ。使う為には暗証番号が必要だから気を付けて」

ヘテロはスコープ1号に地下駐車場のエレベーターの暗証番号を教えると、ワイヤーを掴んで改めてエレベーターシャフトを下りて行った。

残されたスコープ1号は、つい最近まで敵だった彼女の背中を守っている事に言い様の無い思いを抱き溜め息を吐く。

「全く、何でよりにもよってあの女を頼らなけりゃなんらか」

複雑は複雑だ。あの女に何人の部下が殺されてきた事か。部下だけじゃない、罪のない人々もあの女によって被害を被った。許せる事ではない。

許せないのだが、その一方で今の状況を悪いと思っていない自分が居る事にも気付いていた。敵対してきたからこそ分かる実力者の彼女が味方になってくれた事を喜んでいるのか、それとも一応は彼女が改心してくれた事が純粹に嬉しいのか。

いずれにしても現金な事だと、仮面の奥で苦笑した。

「本当に……………全く……………」

言い様の無い居心地の悪さを紛らわすべく、ヴェロキラプトルファツジ達を次々と倒していく。本人は気付いていないが、その攻撃は先程と比べて苛烈さが増していた。

まるで八つ当たりの様に敵を倒していくスコープ1号の暴れっぷりに、気付けば部下

たちは何もする事がなくなってきたのだった。

仁達が本社ビルに襲撃を仕掛けてきた事は、当然雄成の知るところとなる。上層階の社長室で仕事をしていた雄成は、本社ビル内に響く警報と慌ててやって来た部下の報告に目を細めた。

「そうか……来たのか、彼らが。まあ、それならそれで手間が省けたがね」

満更でもなさそうな顔で席を立つと、社長室を出て行った。その手にはカラミティドライバーとベクターカートリッジが二つ握られており、ふらりと歩くその姿はまるで散歩か何かに行くかのようなようである。

雄成が動き出したとは知らず、しかし予想はしているデイナは地下の特別研究区画を進んでいた。

「それで、亜矢さんは何処に？」

「多分専用の居住区だと思うわ。私もあそこに居たから」

途中ちらほら出てくる警備のファッジを返り討ちにしつつ、逃げ惑う研究員を無視して走り抜ける。

デイナには初めての、ヘテロには見覚えのある通路を進みあと少しで亜矢が居るだろう区画に辿り着きそうになった。

その時、近くの通気口から赤い濁流が噴き出しデイナとヘテロに襲い掛かった。

「うわっ!？」

「くうっ!？」

赤い濁流に押し倒され歩みが止まる2人の前で、液体は形を持ち始めあつと言う間にハザード3のカラミティになった。

「ようこそ、門守 仁君。我が社へようこそ、歓迎するよ」

「思ってたよりも早かったな」

「あら、私には何も無しかしら？ お帰りの一言も無いの？」

「少し驚いているよ、君が生きている事にも。どうやら私が思っている以上に君の体は変質しているらしい。事が終われば君をもう一度研究し直すでしょう」

その言葉を合図に2人に襲い掛かるカラミティ。両腕を赤い刃に変形させ、2人に斬

りかかってきた。デイナはそれをハイブリッドアームズで迎え撃とうとするが、それを押し退けてヘテロが1人でテイルバスターで受け止めた。

「志村さん？」

「先行きなさい。こいつは私が何とかするから」

「出来るのかね？ 君1人で——」

「そいっただけじゃない！」

突如カラミティに襲い掛かる銃撃。銃弾はカラミティの体を突き抜けるだけでダメージとはならなかったが、それでも勢いを殺し押し返す事は出来た。

カラミティの圧力から解放され体勢を立て直したヘテロは、振り返り銃撃の主を見た。そこに居たのは、上で雑魚の相手をしている筈のスコーパー1号だった。

「あ、アンタ何してんの？」

「権藤さん、上は？」

「上は小早川達に任せてきた。何、雑魚ならあいつ等でも大丈夫だ」

〈Vortex・Blade Startling〉

ヘテロの隣に立ち、あまり役に立たないガンマライフルを捨ててボルトックスブレードを展開する。自分に並び立つスコーパー1号の姿に、ヘテロは仮面の奥でフツと笑みを浮かべると改めてデイナに先行を促した。

「さ、ここは私達が持たせるから。アンタはさっさと彼女を助けに行きなさい。待つてるわよ、あの子」

「ん……分かった。2人も気を付けて」

「あ、それと左耳の前の髪を三つ編みにしてる15歳くらいの女の子と、その子と一緒に居る男の子を見つけたら一緒に助けておいてくれる?」

「分かった。見つけたら志村さんの事伝えて助けておくよ」

その場を離れるダイナを、ハザード3のカラミティが後を追おうとした。それをヘテロとスコーパー1号が妨害する。

「行かせないわよ、社長」

「お前は俺達が相手だ!」

「ふう……やれやれ、仕方が無い。本当は門守 仁君に最初に見せたかったのだが……」

カラミティは溜め息を吐きながら新たなベクターカートリッジを取り出した。今までに見た事のない、漆黒のベクターカートリッジ。カラミティはそれを、ヘテロ達に見せつけるようにしながら起動させた。

〈NEW BONE〉

「そのベクターカートリッジは——!」

「これこそが私の研究の集大成。門守 仁君と双星 亜矢君の遺伝子から作り出した、

人類を新たな世界へ導く鍵さ」

〈NEWBONE + ORGANISM Pioneer. An incarnation of an unleashed disaster. No one can stop it anymore.〉

「さあ……進化の時だ！」

〈Biohazard〉

カラミティがレセプタースロットルを引くと、セントラルドグマから放たれた光がカラミティの体を覆い隠す。今まではその光がシリンドラーの様な柱上になったが、今度は違った。光は一気に収束すると小さな光球となったのだ。そのまま消滅してしまいそうになる光球は、しかし次の瞬間見る見るうちに膨れ上がった。いや違う、膨れ上がるのではなく分裂して増えているのだ。泡が噴き出るようにボコボコと光球が増え、一人が収まる位の大きさになった時、砂が崩れるように光球がボロボロと崩れ去る。そしてそこに、新たな姿——ハザード4へと到達したカラミティが佇んでいた。

「ハザード4……これが——！」

「くそっ!？」

外見は恐らく今までで一番豪華だろう。頭部は黄色い単眼にCの字が3つ重なった黒いバイオハザードマークになり、同色の装甲の胸には燈色のバイオハザードマークが

刻まれ、赤いアンダースーツで身を包んでいる。

そしてその背中に赤黒いマントを羽織っていた。その姿はまるで王者のようですらある。

「ちっ、そりゃ作るか。行くわよー！」

「ああー！」

ヘテロとスコープ1号は眼前に佇むカラミティ・ハザード4に、テイルバスターとポルテックスブレードで斬りかかった。まだハザード3の液化化能力を持っているなら、この攻撃は徒労に終わる可能性が高い。が、流石に2人同時に液化化した体で包む事は出来ないだろう。何より、ヘテロはともかくスコープ1号にその攻撃は殆ど意味を成さない。

ダイナが亜矢を助けに向かうまでの時間稼ぎのつもりで放った攻撃だったが、意外にもカラミティは2人の攻撃を受け止めた。てっきり何かしらの能力を用いて防ぐか何かするかと思ったのだが、予想に反して彼は何の能力も使わなかった。

その事を2人が不審に思っていると、カラミティが口を開いた。

「————タランチュラやアナコンダ……同種の中でも大型のこの2種は毒を持たない。それは何故か分かるかね？」

「はっ！」

「何をいきなり——」

「それは……単純に強いからだ」

突然のカラミティの言葉に2人が首を傾げていると、カラミティが2人の攻撃を受け止めている手に力を込めた。すると2人は、自分達の意思に反して武器が下げられていった。カラミティの強すぎるパワーに、抗う事が出来ないのだ。

「なっ!？」

「何てパワーだ!？」

「単純に力が強ければ、獲物の捕獲にも天敵の排除にも特別な能力は必要ない。その力だけで、全てを成し得るからだ」

力技で2人の武器を下げさせたカラミティは、手を離すと2人を同時に殴り飛ばした。

「うあっ!？」

「があっ!？」

強制的に距離を離され、壁に叩き付けられた2人は全身を砕かれそうな痛みにもふらつきながら立ち上がった。

何とか立ち上がった2人の前で、カラミティはマントを翻しながら両手を広げた。

「漸く……漸く……まで来れた。私の悲願まで、あと一步……誰にも邪魔はさせない」

「くつ、さてそれはどうかしら?」

「お前が何を企んでいようと、俺達がそれを許さない!」

「……ふん」

吠える2人に対し、カラミティは鼻を小さく鳴らすと再びマントを大きく翻した。

すると広がったマントから赤い粘液の様なものが零れ落ちると、それが見る見るうちに形を作っていくあつと言う間にカラミティの左右にハザード2・ハザード3のカラミティが生み出された。

「はあっ!」

「何だそれはッ!」

「君らの相手はこいつらで十分だろう」

これこそがカラミティ・ハザード4の能力だった。あのマント『オルガナイザーマント』はこれまでのカラミティの能力全てをさせる上に、あのように自らの分身を生み出す事が出来るのだ。勿論その能力はオリジナルと比べても遜色はない。実質過去のカラミティを連れてきたようなものであった。

ヘテロとスコープ1号の相手を分身に任せ、自分はダイナを追い掛けるカラミティ。その後をヘテロが追おうとするが、彼女の前にはハザード3のカラミティ分身が立ち塞がった。

「くそつ、邪魔よ!」

「こいつらを何とかしなければ先へは進めない。とは言え、このままでは……」
「隊長!」

事態の悪化を悟り焦りを感じるスコープ1号だったが、その彼の耳に突如慎司の音が響いた。まさかと思いきやそれを見ると、そこにはスコープ2号が複数人のライトスコープを引き連れてやつてきていた。

「お、お前達上はどうした!?!」

「ご安心を、もう片付けてます。部隊の半分を上に残してあるので、異常があればすぐに知らせてくれますよ」

言いながらスコープ2号はライトスコープと共に銃口を2人のカラミティに向けた。頼もしい部下達に、宗吾は仮面の奥で笑みを浮かべる。

「油断するなよ、あいつらは別格だ。おい、こいつらは俺達が相手をする。お前は門守君の方に行け!」

「いいけど、大丈夫なの?」

「俺達を舐めるな。この程度、どうとでもなる!」

その言葉を合図にしたかのように、S. B. C. T. の銃撃が2人のカラミティに襲い掛かった。ハザード2のカラミティはそれをストロールで防ぎ、ハザード3のカラミ

ティは体を液状化させて無力化する。

その隙にヘテロはカラミティ2人の間をすり抜けるようにしてダイナの後を追った。

「恩に着るわ!」

廊下を走り、ダイナとハザード4のカラミティの後を追う。果たしてカラミティにはすぐに追いついた。彼は最早自身の勝利を疑っていないのか、ふざけているのかと思うほど悠々と廊下を歩いていたので。

その背後からヘテロがテイルバスターで斬りかかる。

「何悠長に歩いてんのよ!」

テイルバスターがカラミティに振り下ろされるが、カラミティはそれを見もせず翻したマントで防いだ。攻撃が防がれたヘテロは、防がれた勢いを利用してカラミティの頭上を飛び越え彼の進行方向に立ち塞がった。

「ここから先には、行かせないわよ!」

「ふむ……まあいい。時間はたっぷりある。君の頑丈さはよく分かった事だし、ハザード4となったカラミティの能力査定に付き合ってもらおうとしよう」

「舐めるんじゃないわよ!!」

激昂してカラミティに突撃するヘテロがテイルバスターを振るうが、カラミティはマントでそれを弾きながら空きとなったヘテロの腹に拳を叩き込む。

口が掴んだのだ。

「ぜい……はあ……」

体はボロボロだが、心はまだ死んでいないヘテロがカラミティを見上げる。足を掴まれたカラミティは、そんなヘテロに対し冷たく見下ろす。

「……しつこい女は嫌われるぞ」

カラミティはヘテロの首を掴んで持ち上げ、壁に向けて投げつけた。壁に叩き付けられたヘテロは、痛みに耐えながらも立ち上がった。

「ぐ、うぐ……う」

尚も立ち上がるヘテロを見て、カラミティは指をパチンと鳴らした。すると近くの壁を突き破って、ファツジが数体姿を現した。

「私は忙しいんでね。君はこいつらの相手でもしていたまえ」

「くそ——！」

複数のファツジを差し向けられたヘテロだが、見たところこいつらは通常のファツジだ。であれば、彼女にとって大した敵ではない。

振り回すテイルバスターが次々とファツジを切り捨て、至近距離からの銃撃が1体を始末した。

「残りは……」

〈HORSESHOE Burst〉

「いっついでー！」

さらに続けて放たれたトーンインパクトが、残りのファッジを全て倒した。これで邪魔者は居なくなつた。

再度カラムィティに攻撃を仕掛けようと迫るヘテロ。だが新たに2体のファッジが彼女の前に立ち塞がる。

今度もさつさと倒してやると一瞬意気込むヘテロだったが、そのファッジをよく見て驚愕に戦意が消えて行つてしまつた。

「な、あ……あんだ達——!?!」

ヘテロの前に立ち塞がつたのは、トクシックファッジとリキッドファッジだった。

「亜矢さん！」

ヘテロ達が時間を稼いでくれている間に目的の区画に到着したデイナは、片っ端から

部屋を調べた結果亜矢を見つけることが出来た。

複数ある部屋の一つに、手術着を着せられた亜矢が閉じ込められていたのだ。

「仁くん！」

デイナがこじ開けるように扉を開けて飛び込んだのを見て、最初驚いた亜矢は次の瞬間目に涙を浮かべて彼に抱き着いた。デイナも亜矢の無事を確認すると、変身を解いて彼女を優しく抱きしめた。

「亜矢さん……良かった、無事で！」

「仁くんこそ……あれから心配してたんですよ」

「それはこっちのセリフだよ。あいつらに酷い事されなかった？」

「ちよつと大変でしたけど、仁くんが絶対に助けに来てくれるって信じてましたから」

亜矢の笑顔に、仁はもう一度彼女を優しく、しかし力強く抱きしめた。今度こそ絶対離さない、そう誓うように。

本当はもつと亜矢の温もりを感じていたかったが、ここは敵地のど真ん中。あまりゆつくりはしてられない。

「さ、ここから出よう。今度こそ、亜矢さんの事は守ってみせるから」

「はい。……あ、そうだ仁君、これ！」

仁に手を引かれ部屋を出ようとした時、徐に真矢が仁を引き留めると胸の谷間から一

つのUSBメモリーを取り出した。それは以前、雄成に奪われたダイナドライバーの基礎設計図が入った司の遺品である。

それを真矢が、よりにもよって胸の谷間から取り出した事に仁は色々な意味で驚いた。

「ま、真矢さん、これって……いやそれよりも、何でそんな所から……そもそもこれ何処で?」

「ゴメンね、驚かせちゃつて。見つけたのはここに連れて来られて最初に入れられた社長室だよ」

あの時、雄成がアデニンと呼ばれて席を外した僅かな時間で、真矢はせめてもの抵抗で雄成のデスクを調べていたのだ。そこで彼女は、引き出しの中に無造作に入れられていた遺品のUSBを見つけたのだ。

まさかこれが見つかるとは思っていなかった真矢がそれを手に取った時、雄成が部屋に戻ってくる気配を感じた彼女はそれを咄嗟に胸の谷間に押し込み何食わぬ顔で元居た場所に座り直し、そのまま地下研究所へと連れて来られた。

そしてこの部屋に入れられ、着替える事を強要された彼女はそのまま胸の谷間にUSBを挟んだまま過ごす事を余儀なくされた。下着だけはそのまま身に着ける事が許されたのは幸いだった。

「仁くんのお父さんの遺品ですし、取り戻しておいた方が良いかと思って」

「亜矢さん、真矢さん……ありがとう」

戻ってくるとは思っていなかった遺品に、仁は心から亜矢と真矢に感謝した。もうデータは見られた後だが、そんな事は関係ない。

彼女の手からUSBを受け取りそれを眺める仁は、改めて亜矢と共に部屋を出ようと
して……ふともう一度、手の中にあるUSBを見た。

「仁くん？」

突然立ち止まりUSBを眺める仁に、亜矢が首を傾げる。だが今の仁に彼女の声は届いていなかった。今、仁は頭を高速で回転させていたからだ。

「——もしかして？」

暫くUSBを眺めていた仁は、小さく呟くと亜矢の手を引き部屋を出ると研究室の二つに飛び込みパソコンにUSBを接続しデータを開いた。

突然の彼の行動に亜矢も真矢も目を白黒させる。

「じ、仁君どうしたの？」

「実は、ずっと気になってたんだ。どうして父さんはデイナドライバーの基礎設計図を、データとして残してたんだらうって。だって、これが見られちゃまずいものだって分かっているなら、残しておかずに消去しちゃえばいいのに」

「それは……新しくディナドライバーを作る時の事を考えての事じゃないんです？」

「いや、現物を教授に渡してる以上、大体のデータは教授も持つてる筈だ」

確かに、白上教授は自分で二個目のディナドライバーを作り出していた。それだけのデータを教授に渡しているのなら、司がデータを遺しておく理由はない。

それが危険を冒す形でデータを遺した。それはつまり、司にはUSBを遺す理由が何かあった筈なのだ。

仁がUSBを繋いだパソコンを操作し、データを開こうとした。するとパスワードを求められ、仁は香苗が口に使っていたパスワードを入力しようとして……その手を止めた。

「そうか……パスワード」

「仁くん？」

「パスワードだ。父さんが母さんに残したパスワードは、きつと偽のパスワードなんだよ。本当に遺したい何かを開く為のパスワードは、別にある」

「それって一体何なの？」

仁は今までの人生で一番ではないかと言うほどに頭を働かせた。

偽装のパスワードはパンドラ……これはまず間違いなく、パンドラの箱から持ってきたパスワードだろう。

では本当のパスワードは？ 考えられるとすれば、パンドラの箱に関わる何かだろう。本当に開けて欲しい相手に、何のヒントも無しのパASSWORDなど考えない。

とすれば、考えられるパスワードは恐らく希望……ホープと言ったところか。パンドラの箱の中に唯一存在する、残された希望。

——果たして本当にそれが正解だろうか？ もし雄成や、司のデータを悪用しようとした第3者が隠しデータの存在に気付いたら？ その者達が、気付けてしまえるようなパスワードは逆に危険ではないか？

「ん……ん……？」

悩む仁の横顔を心配そうに見つめていた亜矢は、何とはなしに口を開いた。

「仁くんのお父さんは、誰に何を遺したかったんでしょう？」

「——!!」

何気ない亜矢の一言。それが衝撃となって仁の脳裏に響いた。

希望……最後の希望……仁……遺伝子……父の教え……生命の歴史……進化の歩み……最初の一步……最初の、希望……

点と点が繋がり線となり、その線が1つの答えを形作っていく。仁はその答えを形にすべく、キーボードを叩きパスワードを入力した。

仁がパソコンに入力したパスワード……それは——

「——『East Africa』? 仁君、これって?」

「東アフリカ……アフリカ単一起源説で、一番最初のヒト科の祖先が誕生したとされる場所だよ」

「……あ! ミトコンドリアイブ?」

「そう。ヒトと言う種の最初の一步、長きに渡る人間の歴史の希望がここから始まったんだ」

眩きながら仁が入力し終わると、パスワードが正解であったことを示すようにデータが開かれた。

「よし」

「仁くん……やったわね!」

この時ほど、仁は自分の好奇心に感謝した事は無かった。きつと司の事を上辺だけで知る人物には絶対に辿り着く事は無かっただろう。司は生命の歩み、神秘、力強さを信じ、愛していた。それは彼の息子として彼の話を聞いていた仁が誰よりも知っている。だから気付けた。

そもそもにして、パンドラの箱から最後の希望と言う方向に思考を持っていかれる事が引つ掛けたのだ。

仁がパスワードの正解を当てられた事を亜矢と喜んでいると、何の操作もしていない

のにパソコンのディスプレイに変化が起きた。それに気付いた2人がディスプレイを見てみると、1人の男性の映像が映し出された。

それを見て仁が目を見開くと、映像の中の男性が口を開く。

『やあ。よくこのデータに気付いたね……仁』

「父さん……」

第61話：十数年越しの親孝行

パソコンのディスプレイに映し出された映像の中の男性、司はまるでテレビ電話で話でもしているように普通に仁に話し掛けてきた。亜矢はその事に困惑せずにはいられなかったが、仁はそれが自分に宛てたメッセージだと言う事にすぐ気づいた。司は分かっていたのだ。このデータとメッセージを発見できるのが、この世で仁しか居ないと。自分の息子を信じていたのだ。

実に数年ぶりに見る父の顔に、仁は胸に込み上げる物を感じながらそれを飲み込み再生される司の映像に答えた。

「——久しぶりだね、父さん」

『このデータ、見つけられるのは仁しか居ないと信じていたぞ』

「いや、結構危なかったよ。これは流石に答え捻くれ過ぎだった」

ディスプレイに映る司は所詮録画された映像でしかないもので、意味はない事だがそれでも仁は文句を口にした。例えば仮初、ごっこ遊びの様なものであっても、父と語らうのが楽しくて仕方ないのだ。

映像の中の司は、仁の答えを予想していたのか苦笑を浮かべた。

『すまないね。我ながらパンドラの箱からミトコンドリアイブは些かこじ付けが過ぎるんじゃないかと危惧はしていた。だがそれでも仁はこうして見つけてくれた。嬉しいよ、凄く』

「父さんの事はよく分かつてるつもりだから。そんな簡単な答えじゃないよなって、気付けたよ」

仁が再生される司の言葉に答えると、司は嬉しそうに笑みを浮かべた。その光景は、司が本当に仁と会話しているように亜矢には見えた。

『仁……本当によく、このデータを見つけてくれた。ありがとう……流石、私達の息子だ。誇りに思う』

「くっッ!!」

優しい笑みと共に紡がれた司の言葉。それは仁が、何よりも欲していた尊敬する父からの称賛の言葉だった。もう絶対に得られることはないと思っていたそれが、例え記録映像越しであったとしても掛けられた事に仁は感極まり柄にもなく涙ぐんでしまった。

「ん……うん。頑張ったよ……頑張った。沢山勉強したんだ。沢山……沢山……父さんみたいになん、なりたくて——!」

抑えきれず零れ落ちる涙を、隣の亜矢が優しく拭った。仁が報われた事は、彼女にとっても喜ぶべき事だった。

映像の中の司は暫く何も言わず、優しい笑みを浮かべながら仁の事を見ていた。彼が次に口を開いたのは、仁が落ち着いて話を聞けるようになってからだ。

『さて、そろそろ本題に入ろう。まずは、仁がこのデータを見ていと言ふ事は、私もこの世には居なくて、しかも雄成先生の計画が最終段階に入ろうとしていると言ふ事だね?』

「うん。雄成さんは自分でドライバーを作つて、自分なりの新人類を作ろうとしている。いや、もう作つてるかも」

『……本当にすまない。出来る事なら、私が雄成先生を止めたかったのだが、力及ばず仁に全てを託すような事になってしまった』

「気にしないで。父さんの息子だもん。親孝行くらいさせてよ」

仁がそう答えるのが分かっていたかのように、映像の中の司はもう一度謝罪の言葉を口にすると、表情を引き締め話を続けた。

『もし仁か、仁の周りの人物がDNAドライバーで変身したとして、その人物は恐らく進化の為の条件を既に満たしている。ただ超万能細胞を肉体に注入しただけの超人とは違う、本当の意味で進化した新人類にだ』

「うん、知ってる。俺も亜矢さんも、もう進化しちゃってるから」

多分これは流石の司も予想していなかっただろう。まさか自分からベクターカート

リッジを直挿しして、言われる前に進化しているなど。

そう考えると、父を出し抜けたような気になって仁はちよっぴり気分が良くなった。

『雄成先生の事だから、何らかの形で新人類を作り出すかもしれない。だが、諦めるにはまだ早い。私が設計したドライバーには、それに対抗する力がある』

「でも、デйнаでもカラミティ相手には今は手も足も出ないのが現状では？ あんまり

言いたくはありませんけど、デйнаドライバーにカラミティに対抗する力があるとは……」

『重要なのは、DNAドライバーがベクターカートリッジを二つ必要とする事だ』

司の言葉に、仁は自分のデйнаドライバーを見た。以前、希美の使うブレイドライバーが遺伝子を3つ使うのは邪道だと調べた仁だが、では何故2つだと大丈夫なのかと言う事に関しては実は答えが出ていなかった。3つでは駄目なのに、2つだと大丈夫な理由とは一体何なのか？

『答えは簡単な事だ、仁。本当に進化した種とは、一つの種から生まれ落ちた子孫が？ 栄えた物の事を言う。つまり、対応する遺伝子2つで漸く進化した種が誕生するんだ』

なるほど確かに、どんな生物でも何も無い所から生まれはしない。生まれ出る為には、進化した種を生み出す番の存在が必要不可欠なのだ。

よく『卵が先か鶏が先か』と言う話題で議論になるが、この場合重要なのは鶏の存在

と言う事になる。卵は何が産んでも良いが、鶏が産まれるのは鶏が産んだ卵。鳩だろうが鷹だろうが、それらが産んだ卵から孵った鶏は所詮突然変異種でしかなく鶏ではない。鶏と呼ばれる為には、世界に出現した鶏の番が産んだ卵でなければダメなのだ。

「つまり……デイナにはまだ進化するだけの余地がある？」

「進化って……あれでまだ不完全だったって事ですか!？」

「そう言う事だね。デイナのエヴォリユーションフォームは本当のエヴォリユーションじゃなかった。本当に進化する為には、同じ種の遺伝子が2つ必要だったんだ」

完全に盲点だった。エヴォリユーションになる組み合わせが異なる生物種同士だったから、ドライバーの能力はそれだと完全に思い込まされていた。いや、これこそが司の戦略だったのかもしれない。雄成が後々ドライバーをコピーして悪用した時、その能力を十全に使いこなせない様にする為だ。

『仁、もしお前か、お前の知る誰かが進化できるのであれば……辛いかもしれないが、進化を促してほしい。雄成先生を止めるには、それしか手が無い。辛い運命を背負わせることになるのは承知の上だが、雄成先生は止めなくてはならないんだ。だから——!？』

映像の中で司は本当に辛そうに拳を握り、爪が手の平に食い込んで血が滲み出ている。こんな事を仁に託さなければならない事が、心底辛いのだろう事は容易に想像できた。誰かに辛い運命を背負わせるか、1人の悪行を許すか。どちらかを選ばなければな

らないのなら、選ぶべきは前者しかない。

それがどれだけ残酷な事かは、司自身が分かっていたのだろう。本当であれば、彼が新人類に進化して一人で全てを背負うつもりだったのかもしれない。だがそれをするには、全てが遅すぎた。

だから託したのだ。それしか方法が無かったから。

「……大丈夫。俺は、父さんの事を恨まないよ。だから安心して」

映像の中で咽び泣く司に仁は穏やかに語り掛ける。その隣では、亜矢も頷いている。

どれ程そうしていたか、落ち着いた司は顔を上げて話を続けた。

『すまない、待たせた……。話を戻すが、DNAドライバーの使用が進化すればその影響を最も受けるベクターカートリッジが一つある。ヒューマンベクターカートリッジだ』

「……そうか、ヒューマンベクターカートリッジはドライバーの使用者の遺伝子情報の影響を受ける。つまりこれは今、俺の影響で新人類のベクターカートリッジになつてるのか」

思えば何故態々ヒューマンベクターカートリッジがあるのか、仁も不思議でならなかったがそれが新人類のベクターカートリッジを作る為であるなら納得できた。つまりデイナドライバーとは、仮面ライダーに変身するツールであると同時に新人類のベク

ターカートリッジを自然に精製できる装置でもあったのだ。

『新人類に覚醒した者がヒューマンベクターカートリッジを使用する事で、新人類のベクターカートリッジは完成する。後はそれにもう一つ、対となるヒューマンベクターカートリッジを用意すればいいだけの話だ』

そこまで司が言うのとディスプレイからは司の顔が消え、代わりにベクターカートリッジの設計図が表示された。

『仁、これがヒューマンベクターカートリッジの設計図だ。これに進化した人物のとは異なる人物の遺伝子を読み込ませる。できれば、異性の物が好ましい。相手が進化していなくても、人間であれば十分だ。ドライバーを長期使用して進化した新人類の遺伝子であれば、ただの人間の遺伝子には負けない。人間2人分の遺伝子があれば、仮面ライダーは完全な進化を遂げる事が出来る』

再び司の顔がディスプレイに映し出された。その表情は暗く、悔いるように顔を俯けていた。

『こんな事をお前に託してしまって、本当にすまないと思っている。だが頼む！ 雄成先生を止めてくれ!! こんな事を私が頼めるのは、世界でただ一人、仁しか居ないんだ………頼む』

「分かった………任せて。俺が絶対、雄成さんを止めてみせるから」

『本当にすまない、仁。香苗にも、宜しく伝えておいてくれ。……………2人共、愛している』

映像はそこで途切れ、後にはヒューマンベクターカートリッジの設計図だけが残された。仁は顔を手で覆い、背凭れに体重を預け天井を仰ぎ見た。

「仁くん……………」

「ん…………俺は大丈夫だよ。大丈夫…………」

暫しそうしていた仁は、目元の涙を拭うとUSBをパソコンから引き抜き別の研究室へと入っていった。

ここがベクターカートリッジの研究開発を行う施設であるなら、必ずあると確信している部屋がある。ベクターカートリッジの精製を行う部屋だ。主な生産は上層階で行われるのだろうが、試験目的でベクターカートリッジを精製する為の部屋が地下にも必ずある筈だった。

それは直ぐに見つかった。この騒ぎで研究員が逃げ出したのか、もぬけの殻となった研究室の中央にそれは鎮座していた。

「装置は…………よし、使える。亜矢さん、これ」

仁は亜矢に、彼女の分のデイナドライブを渡した。彼女を助け出すに当たり、きつと必要になるだろうと持ってきてきていたのだ。

ドライバーと同時に渡されたのはキャットベクターカートリッジ。だが何時も彼女が変身する際には一緒にある筈の、ユナイトキャットが渡されなかった。

真矢はそれだけで仁が何をしようとしているのかピンときた。

「やるのね、仁君？」

「うん。俺にとつては、これが一番だと思うから。でも真矢さんが嫌だつて言うなら……」

「そんな事、言う筈ないじゃない。……私達はどこまでも付き合いますよ、仁くん」

「……ありがとう」

自分を信じてくれる亜矢と真矢に、仁は優しくキスをすると装置の横の端末を操作し始めた。

一方、ハザード4のカラミティを足止めすべく奮闘しているヘテロは窮地に立たされた。……

「くうツ!? 何で……何であなた達が——!?」

ヘテロは目の前に立ち塞がる、トクシツクファツジとリキッドファツジ……リリイとレックスに苦戦を強いられていた。

「リリイ! レックス! 私よ、希美よ! 私の事が分らないの!!」

「ウグツ!? グウウウウウウツ!?」

「ガアアアアアアアツ!?」

「リリイツ!? レックス!?」

「無駄さ。この2人には超万能細胞で私に対する服従遺伝子を仕込んである。私の声以外は聞こえないよ」

必死に声をかけるが、2体のファツジは苦しそうな声を上げながらヘテロに襲い掛かってくる。ヘテロは何かティルバスターで2人の攻撃を防ぐが、実態のあるトクシツクファツジはともかく液状化できるリキッドファツジは防ぐ事が出来ず翻弄されていた。

そしてリキッドファツジに翻弄されて体勢が崩されると、そこを狙ってトクシツクファツジの尾の毒針がヘテロを襲う。

「ぐうあつ?!」

注入される猛毒の激痛がヘテロを苛む。が、強化改造された彼女の体は体を腐食され

ながらも再生をしているので死に至る事はない。至る事はないが、その苦痛は彼女から自由を容易に奪った。

「が、はあ……」

激痛に次ぐ激痛、疲労と負傷で限界を迎えたヘテロは遂に倒れて動かなくなる。そして変身が解除された彼女の首を、カラミティが掴んで持ち上げた。

「ふむ……まあ粘った方だがね、これが君の限界か」

「一、の……卑怯、者。……あの子達、を……無理矢理、従わせるなんて……」

自分の首を掴むカラミティに吐き捨て、希美はトクシツクファツジ達を見た。2体のファツジはフラフラと体を揺らし、まるで夢遊病の患者の様だ。

「ウ、ウウウウ……アアアア……」

「アアアアア……ノゾ、ミ。ノゾミイイイ……」

2人は時折、苦しそうな声を上げたり罵られるように希美の名を呼んだ。遺伝子と言う抗い様の無い鎖で繋がれていても、心は希美に手を上げる事を拒んでいるのだ。ファツジなので表情は分からないが、きつと2人の素顔は共に苦しうに涙を流しているに違いない。

人の心を捻じ曲げて戦わせるカラミティに改めて怒りを抱いたが、もう希美に抵抗するだけの力はない。カラミティが乱暴に放り捨てても、受け身一つ取れず床に叩き付け

られ転がつていった。

「がつ?! うあ、ああ……」

「さあ、もう十分だ。始末しろ。何、どうせまた生き返る」

背を向けて離れて行くカラミティと入れ違いになるように、2体のファッジが希美に近付いていく。希美がファッジ達の事を見ると、2体は彼女に近付きながら何処か抵抗するような素振りを見せた。

「ア、アアア……イ、イヤ……イヤダアアア」

「コ、コロシテ……ダレカ、コロシテ、クレエエエ」

僅かに残された心が希美を手を掛ける事を拒み、自らの死を望んでいる。そんな2人が痛々しくて、希美は涙を流した。

「おね、がい……もう……もう止めさせて……」

これ以上、2人が辛そうにしているのは見たくない。自分はどうなっても良いから、せめて2人だけは助けて欲しい。希美は心からそれを願った。

「お願い!! もう止めさせて!! 私の事は好きにしていいいから! だから——!!」

「——殺したまえ」

「ア、アアアアアアア!!」

「又ウアアアアアアア!!」

容赦のないカラミティの命令に、抗う事が出来ず手を振り上げる2体のファッジ。希美は自らに振り下ろされるそれを涙を流して見つめ――

「――ハッ!!」

それが突如横から飛び込んできた人物により弾かれた。突然の事に希美は目を見開き、カラミティも素早く振り返りその相手を目にした。

「君は……」

「デイナ?」

それは一見デイナに見えるが、しかし今までにない見た目のデイナだった。いや、デイナと言うよりはルーナに近い。ルーナよりは装甲が分厚く見え、両腕には強化された頃のルーナが付いていたアームブレードがある。だがドライバーを見ると、ユナイトキヤットやアダプトキヤットは付いておらずベクターカートリッジが2つ装填されているのが見えた。

あれは一体何なのか? その疑問の答えは、謎のライダーの後に姿を現した仁が教えてくれた。

「亜矢さん、どう?」

「大丈夫です。問題ありません!」

「は? え? あれって、双星なの?」

「そうだよ。あれは亜矢さんが変身した、『仮面ライダールーナ・キャットヒューマンフォーム』ってところかな」

元々アダプトキャットやユナイトキャットを亜矢が変身に使ったのは、使えるベクターカートリッジが無かったからだ。逆に言えば、使えるベクターカートリッジさえあるならば、ルーナだってゲノムエンジンが出来た。

ルーナは希美に襲い掛かろうとしていた2体のファッジを、素早い動きで翻弄し両腕のアームブレードで何度も斬りつける。

それを見て希美は慌てて攻撃を止めさせた。

「待って!? 待ってお願いよ!! そのファッジ達はリリイとレックスなの!」

「え!」

「服従遺伝子で無理矢理戦わされているだけなのよ、だから——!」

希美がルーナを止めようとする間も、トクシツクファッジ達はルーナに攻撃を仕掛ける。ルーナはそれを弾き、素早い身のこなしで蹴り飛ばし2人を押し返し距離を離れた。

ファッジ2体を引き下がらせたルーナは、それ以上追撃をしないどころか引き下がるとそれだけに留まらず仁の傍まで下がった。

一体何を考えているのかと希美が見ていると、ルーナはドライバーからベクターカー

トリツジを引き抜き変身を解除した。

「——うん。仁くん、どうですか?」

「……………行ける。これなら……………ありがとう、亜矢さん真矢さん」

「うん。後は任せたわよ、仁君」

亜矢と真矢から想いを託され、力強く頷き返す仁。彼は自分のデйнаドライバーを腰に装着すると、ベクターカートリツジを2つ手に持って前に出た。一つは自分が以前から使っていたヒューマンベクターカートリツジ。そしてもう一つは、たった今亜矢から受け取ったヒューマンベクターカートリツジだ。

2つのヒューマンベクターカートリツジを手に、仁は2体のファツジの前に立ちほだかる。

「……………何をするつもりだ?」

カラミティは本能的にただならぬ何かを感じた。具体的に何かは分からないが、自分にとってヤバイ何かだと言う事が分かる。

何かしなければならぬとは思うのだが、体は動かない。危険と分かっているが、仁が何をしてくれるのかを知りたがってしまったのだ。研究者の性として、未知に對しての好奇心を抑えきれなかった。

見つめるカラミティの前で、仁はベクターカートリツジ2つを起動させた。

「雄成さん……アンタは俺が止める。父さんが出来なかつた事を、俺がやり遂げてみせる。それが俺に出来る、父さんに対する親孝行だ」

〈HUMAN〉〈HUMAN〉

「同じベクターカートリッジを？」

同種のベクターカートリッジを使用する事に首を傾げるカラミティ。この後彼が仮面の奥でどんな顔をするだろうと思ひ浮かべ、仁は薄く笑みを浮かべながらカートリッジをドライバーに装填した。

〈HUMAN + HUMAN Beyond evolution〉

「さて……検証の時間だ。変身！」

〈Break down the wall of evolution. React

h the NEW GENERATION. Open the door〉

セントラルドグマから飛び出したスーパーコイルは、2つに分かれ仁の周りを囲む。白い光の螺旋の中に囚われた仁は、光量を増したスーパーコイルの光の中に消え見えなくなるが、それは本当に一瞬の事。次の瞬間には光は弾けるように消え、そこには新たな姿となったデイナが佇んでいた。

ベースはネイキッドフォームのデイナだが、顎から額に掛けては金と銀の遺伝子の様な二重らせん模様が額に向って登っていき、額で2つに分かれている。

アンダースーツは青く、新たに装着されている装甲は緑色でスツキリとしたシンプルなもの。

首には白いマフラーが2枚巻かれ、変身の際の衝撃で螺旋を描くように舞い上がった。

「そ、その姿は——!?!」

「これが、進化したデイナだよ。父さんが遺してくれた、本当の進化」

「これこそがデイナ・ニュージエネレーションフォーム。激動の時代を生き抜く、新世代のデイナだ。」

まだ拳すら交えていないが、相対しただけでカラミティは分かってしまった。あれは自分に比肩する力を持つ存在だと。

カラミティはいち早くニュージエネレーションフォームの力に気付いたが、ファツジ2体はそうではなかった。彼らが下された命令は、カラミティに敵対する存在への攻撃だ。例えばカラミティに匹敵する力を持つ存在であろうとも、立ち塞がるのであれば戦わずにはいられない。

「ガアアアアアッ!」

「シャアアアアッ!」

「ッ!?! 待つて、あの2人は!」

「分かつてる」

希美は何も知らないだろう。デイナを制止しようとしたが、デイナは短く答えるとフアツジ達の攻撃を軽く弾いてみせた。

トクシツクフアツジの爪や牙、尾による攻撃は視認するのも難しい速度だが、今のデイナには手に取るように分かる。軽く体を動かすだけで回避した。

一方で、体を液化させたリキッドフアツジが纏わり付きデイナを拘束する。デイナの全身を包むようにして纏わり付くと、一時的にだがデイナの動きが止められた。

そこにトクシツクフアツジの毒針が炸裂する。鋭い毒針がデイナの腕に突き刺さり、猛毒を彼の中に注入した。

その瞬間、デイナは新たに獲得した能力を発動させた。

（これは……複数種の神経毒とタンパク質毒の混合毒。……成分を分析……抗体及び血清を生成……完了）

デイナの進化した細胞は受けた毒を即座に分析し、それぞれに対応した抗体や血清を体内で生成しあつと言う間に無毒化させ更に毒により一時的に破壊された細胞の再生まで終わらせてしまった。この間、数秒も経つてはいない。

同時に身体に纏わり付いているリキッドフアツジへの対処も行った。全身から滑りを良くするワックスを分泌し、リキッドフアツジを滑らせて拘束から逃れたのだ。

デイナに纏わり付く事が出来なくなり、トクシツクファツジの隣に逃げるように移動し形を戻す。リキッドファツジが隣に来ると、毒が全く通用していない事に気付いたトクシツクファツジも毒針を引き抜きリキッドファツジと共にデイナから距離を取る。

その視線は明らかに困惑していた。

困惑しているのはカラミティも同様だった。

「何だ？ 何が起こっている？」

進化したデイナ・ニュージエネレーションフォームは超万能細胞を持つ新人類の能力を限界まで引き上げたものとなっている。

即ち、様々な状況への適応能力だ。

もう毒に身体が侵されれば即座にそれを無毒化し耐性を持つようになるし、体に付着した異物を落としやすくする為全身に滑りの良いワックスを分泌する能力を発現させる。状況に合わせて即座に新たな形質を作り出し、それで順次適応していく事が出来るのがこの姿の力であった。

そしてこの進化したデイナの力はそれだけではない。

「ほっ、ほっ」

手始めにデイナは2体のファツジに軽く攻撃を仕掛ける。軽くと言っても、その一撃はドラゴンライフに匹敵するか超える程の力なので、2体は一撃で吹き飛ばされ床に倒

された。

「そこか……」

今の一撃でデイナは、それぞれのファツジの体内にある制御装置を見つけ出した。目的の物を見つけた彼は、レセプタースロットルを1回引いた。

〈ATP Burst〉

「待つて、何を——!？」

「大丈夫です。……仁君を信じて」

明らかに必殺技を放とうとしているデイナを見て、希美が慌てて制止しようとするがそれを亜矢と真矢が宥めた。

デイナはATPバーストを行うと、両腕にエネルギーをチャージしてトクシツクファツジ達に接近。攻撃の射程に入ると、躊躇なくその拳をファツジ達に突き刺した。

「ガアツ?!」

「ゴアツ?!」

「ああつ?!」

揶揄でも何でもなく、デイナがファツジ達の体内に腕を突っ込んだのを見て希美が悲鳴を上げるが、彼はそれを無視してファツジ達の体内に突っ込んだ腕を引っこ抜いた。引っこ抜いた彼の手の中には、彼らに埋め込まれていた制御装置が握られている。

「デイナがそれを握り潰すと同時に、フアツジ達は倒れ元の姿に戻った。希美は慌てて倒れた2人に駆け寄る。」

「リリイ、レックス！」

希美は2人に近付いて驚いた。先程デイナに腕を突き刺されていた筈なのに、2人の身体には傷一つない。それどころか、前よりも血色が良くなっているように見える。

「大丈夫。ここちから細胞に働きかけて、傷を直ぐに回復させたから。それと、遺伝子を大分めちやめちやに弄られてるみたいだったから、それも落ち着くように調整しておいたよ」

「は？ あ、アンタ、そんな事出来るようになったの？」

「超万能細胞がある人限定だけどね。この2人は、実験の影響で全身に超万能細胞があるからここまでの事が出来ただけだよ」

「だけとは言いが、とんでもないことに変わりはない。早い話が今のデイナには、超万能細胞に対する支配権の様なものがあると言う事だ。それはつまり、フアツジは勿論ベクターカートリッジを使っているカラミティ相手にさえ、高い優位を手に入れたと言う事。」

言うまでもない事だが、この能力を十全に使いこなす為には相応の頭脳が必要だ。先程必要な形質を自身の中に発現させた時もそうだが、今のデイナは仁だから使えるので

あつて仮に他の人間がこのデイナになつても能力を遺憾なく發揮する事は難しいだらう。

「ん、んん……?」

「()は……」

そうこうしていると、リリイとレックスの2人が目を覚ました。希美は2人が目を覚ましたのを見ると、目に涙を浮かべて抱き上げた。

「リリイ、レックス! 2人共、大丈夫?」

「の、ノゾミ! ノゾミ!!」

「俺達、俺達……ゴメン!」

「いいのよ、2人が無事で……」

友に涙を流して抱きしめ合う3人を、デイナが仮面の奥から微笑ましく見ている。

だがその顔も、直ぐに引き締まった。まだ倒すべき敵がすぐそこに居るからだ。

「いやはや、これは本当に驚かされた。同じベクターカートリッジを2つ使うと言うのは盲点だったよ」

「俺も、父さんに教えてもらつて初めて気づいたけどね」

「司君に? どう言う事だい?」

「秘密」

話しながらも、デйнаとカラミティは互いに身構え相手の隙を伺っていた。カラミティの強さを知るデйнаは勿論、今のデйнаの力を警戒しているカラミティも油断なく構えていた。デйнаは希美達を巻き込まないようにゆっくりと歩きカラミティもそれに続く。

先程までの余裕など既に捨てている。それだけの相手と、今のデйнаを認めたのだ。

「ふふふつ、やはり君はとても興味深い。どうだね？ 今からでも私の元へ来ないか？」
「分かり切った事を聞くの？」

「それもそうか……」

不意に、2人が同時に足を止めた。足だけではない、動きをその物を完全に止めていた。

まるで西部劇のガンマンが抜き打ちをしようとしているシーンのような緊張感に、亜矢は勿論希美達も固唾を飲んで見守る。

そして、何処からか何かが爆発するような音が響いた瞬間――

「ハッ」

「ぬあっ！」

2人は同時に動き、正面から拳と拳をぶつけ合った。

第62話：終わり始まり

時は少し遡り、デйнаとヘテロを先に向かわせる為に分身カラミティと戦うS. B. C. T.。

寸分違わぬ能力を持つ分身のカラミティはやはり脅威であり、彼らは苦戦を余儀なくされていた。

「ぐうっ!? く、そ——!?!」

ハザード3のカラミティの殴打をスコープ1号が盾で防ぐが、自力が違い過ぎて防いでも吹き飛ばされる。衝撃が腕に伝わり、痺れる腕を押さえずにはいられなかった。

戦いながらスコープ1号はチラリとハザード2のカラミティと戦う部下達の事を見る。あちらは数で勝ってはいるものの、やはり苦戦しているのが見て取れた。カラミティが振り回すストールによりライトスコープが数人薙ぎ払われている。

「チクシヨウ……」

先行したデйна達の事も心配なのに、旗色が悪い事にスコープ1号は思わず悪態を口にした。

それが隙になった訳では無いだろうが、液状化したカラミティがスコープ1号の体を

包み込んだ。

「しま、くうっ?!」

全身を液化化したカラミティで包まれたが、スコープ1号はデйна達と違い生体装甲ではないので消化吸収される事はない。だが消化できないならばと、カラミティはスコープ1号を締め付け始めた。

「ぐ、ぐおあ……、のお——?!」

抵抗しようにも液化化しているカラミティは引き剥がせない。このままでは絞め殺されてしまう。

どうすべきかとスコープ1号が辺りを見渡していると、ガラス越しに見える近くの研究室の中に何かのボンベがあるのが見えた。

それを見てスコープ1号はカラミティに体を締め付けられながら、その部屋に飛び込むとボンベに近付きそれに向かって発砲した。

銃撃を喰らったボンベは中に可燃性のガスでも入っていたのか、派手に爆発してスコープ1号とカラミティを纏めて吹き飛ばした。

「ぐおおおっ?!」

「ッ?!」

爆発の衝撃は予想以上で、研究室は吹き飛び中の物が扉や窓ガラスを突き破り廊下に

飛び出す。その中にはスコープ1号と、爆発の衝撃で引き剥がされたカラミティも居た。

何とかカラミティを引き剥がす事は出来たが、必要以上のダメージも負ってしまった。まだ戦えはするが、このままではじり貧である。

どうしたものか……。

『隊長、聞こえますか？』

「北村か？ 今何処だ？」

『傘木社内のセキュリティールームです。白上教授達も一緒に、きやつ？』

「どうした!？」

傘木社に到着後、茜は峰や白上教授と共に戦闘の陰に隠れながらセキュリティールームに潜り込んでいた。そこでなら傘木社のビルの地図などを見ながら情報で援護できる。

しかし傘木社側もそれを黙って見過ごすような事は無く、セキュリティールームには外からやって来た保安警察の隊員が殺到していた。砂糖に群がるアリの様にヴェロキラプトルファアツジ達がセキュリティールームに入ろうとしている。

それを地上に残ったS・B・C・Tの隊員と、彼らから装備を借りた峰が押さえていた。セキュリティールームの壁一枚隔てた外では激しい銃撃戦が行われており、爆弾

でも使われているのか時折激しい爆発が部屋を揺らす。

『宮野さん、大丈夫ですか!?!』

『こっちは気にしないで、そっちは支援に集中してください! 瀬高君、情報はまだ集ま

らないの!?!』

『今アクセスしてる真つ最中だよ! くそ、流石に守りが堅いな』

どうやらあつちはあつちで大変なようだ。そんな中で、支援の状況が整った茜が現状打破の為にスコーパー号を支援する。

『隊長、そのカラミティ何とかなるかもしれません』

「本当か!」

『5番のキーププレートに新装備が登録されています。それを使えば、液化化できる相手だろうが生物であるなら倒せる筈です。ただ……』

「ただ、何だ?」

『この装備は使用する際にエネルギーのチャージが必要になります。しかしチャージしている間は実質無防備になり……』

つまり使うまでの間にカラミティにはじつとしていてもらわなければならないという事か。現状、碌にダメージも与えられていない相手を黙らせる事は非常に難しいと言わざるを得ない。

が、スコープ1号はこの時ある事を閃いた。

「それなら何とかなるかもしれない。北村、この近くに冷凍保存する為の装置が置かれた部屋はないか？」

『冷凍保存？』

「そうだ」

『それならここがいいかもしれません。サンプル保存室と言うのがここに』

スコープ1号が目的とする物に気付いた北上教授が、茜の隣で地下研究所のマップを見て目指すべき場所を指差した。北上教授に教えられた場所を、茜がスコープ1号に教え誘導する。

通信に従いスコープ1号は廊下を走った。その際カラミティには、適度に銃撃して牽制するのを忘れない。あたかも逃げているように見せる為だ。

目的のサンプル保存室は直ぐに見つかった。ドアの上に取り付けられたプレートにハッキリと書かれていたのだ。

サンプル保存室に飛び込んだカラミティは部屋の中からドアに向けてライフルの銃口を向け、カラミティが入ってくるのを待つ。だが十分な時間が経っている筈なのに、カラミティは全く部屋に入ってくる気配がない。

まさかスコープ1号を一旦後回しにし、部下達の方へ向かったのではないかと不安に

なる。だが次の瞬間、部屋の通気口が外れるとそこから液化したカラミティが流れ落ちてきた。通風ダクトの中を通ってスコープ1号の不意を突こうとしたのだ。

そつちから来るとは思っていなかったので思わずギョツとするスコープ1号だったが、“そこ”が何処だかを見ると今度は逆に仮面の奥で笑みを浮かべた。

「よく来たな！ これでも喰らえ！」

スコープ1号はまだ液化化しているカラミティのすぐ傍にあるタンクに向けて発砲した。タンクにはあつと言う間に穴が空き、中の液体が噴き出し徐々に形を戻しつつあつたカラミティに降り掛かる。

液体が触れた瞬間、液化化していたカラミティの体は見る見るうちに凍り付いていった。
「?!?!」

カラミティはスコープ1号が破壊したタンクを見上げた。それはサンプルを瞬時に冷凍保存する為に使用する液体窒素だったのだ。空気に触れれば温度差で即座に気化する液体窒素だが、量が多ければ気化せず液体のまま対象に掛かり相手を冷やす。――96℃と言う極低温の液体窒素が、カラミティの体をあつと言う間に固めていった。

カラミティが如何に強くとも、所詮は生物。極低温と言う生物にとつての活動限界を越えた低温には耐えられない。

それでもカラミティの細胞は生存の為に自身の活動を休止させ強制的に休眠状態となった。温度が上がれば再び活動できるようにだ。

もちろんそれを許すスコープ1号ではない。

「この時を待つてた」

〈Flame・Blaster Starting〉

動きを止めたカラミティにトドメを刺すべく、スコープ1号は新兵器を精製する。

現れたのは大型の火炎放射器、その名も『フレイムブラスター』。スコープ1号の上半身を包むように装着されたそれには口径の大きな砲口が付いていて、背中からは体を固定する為のアンカーが伸びている。スコープ1号はその砲口を凍り付いて動けないカラミティに向け、躊躇なく引き金を引いた。どうせあれはハザード4の能力で作りに出された人形のようなものだ。容赦などする必要はない。

「喰らえッ!!」

引き金が引かれると、砲口から熱線と見間違うほどの劫火が放たれた。火炎の温度は生物が耐えられる限界を遥かに超えた1000℃。劫火はカラミティの凍った体を忽ち溶かし、そして焼き払っていった。

尋常ではない高温がカラミティの細胞を片つ端から焼き払っていく。どんな生物であつても、1000℃という高温には耐えられない。しかもこの時、カラミティは体の

一部が液状化して表面積が広がっており熱の影響を受けやすくなっている。体の端から細胞が次々と焼き尽くされ、自慢の再生能力も意味を成さない。

それでも耐えたカラミティだが、数分ほど火炎を放射され続けカラミティは細胞の一片まで残さず焼き払われた。

カラミティが完全に焼き払われたのを見て、スコープ1号は引き金から指を離した。劫火が消えた先には、カラミティだけでなく室内の全てが焼かれ黒焦げとなった研究室の無残な姿が残されていた。

その有様に、スコープ1号は自分でやって自分で圧倒される。

「お、おお……こいつは凄いな」

想像以上の威力に唾然としてしていると、砲身から煙と火花が上がり始める。慌てて装備をパージすると、新装備のフレイムブラスタは自身の熱に耐えきれず破損してしまっ

た。

「おいおい、一発撃っただけでお釈迦になったぞ？」

『何分テストも十分に出来ていない装備でしたから。まあそれでもあのカラミティを倒せただけ上等じゃないですか』

通信機の向こうで、スコープ1号がどこか釈然としない様子の呻き声をあげている。まあ茜にも、彼の言いたいことは分かる。ぶつつけ本番で新兵器を使わせた挙句、それが一発で壊れたのだ。もしかしたら不発で終わったり、引き金を引いた瞬間暴発して吹き飛ばなんて事態を想像するのも無理はない。

「それより隊長。小早川さん達がまだ苦戦してるみたいです。早く応援に行ってあげてください」

『分かった分かった。そっちも任せたぞ』

そう言ってスコープ1号との通信が切れる。茜は軽く息を吐くと、隣で作業している拓郎と白上教授を見た。

「そちらは大丈夫そうですか？」

「もうちよつと……もうちよつとでコンピューターロックを解除できる」
「こちらは何時でも行けるよ」

白神教授たちが今やろうとしていることは、傘木社のシステムに侵入して秘匿されている極秘事項を公開する事だ。如何に傘木社が様々な方面に圧力を掛けられると言つても、所詮は企業。悪事が白日の下に晒され、世間から糾弾されれば株価の暴落などで

社会的に潰す事が出来る。そうなれば、後は真つ向勝負で勝ち目はあった。

もちろんそれを傘木社が許すわけも無く、先程から引つ切り無しに保安警察が襲撃を掛けてきていた。彼らも白上教授たちの狙いに気付いたのだろう。拓郎によるハツキングを阻止しようとしている。

それを守るのがこの場に残ったS. B. C. T. と峰の役目だ。迫りくるヴェロキラプトルファアツジの軍団を、あまり人数が多いとは言えない彼女達は死に物狂いで守っていた。

「ん、の!!」

峰はS. B. C. T. から借り受けた、予備のガンマカービンとガンマソードでヴェロキラプトルファアツジを迎え撃った。物陰に隠れながら正確に狙い、接近を許した場合、は得意の足技で捻じ伏せ最後にはガンマソードで仕留める。蹴り倒して踏み付けたヴェロキラプトルファアツジに、峰は逆手に持ったガンマソードを突き立てて倒した。

「はあ、はあ……次は! 次はどいつが相手かしら!!」

本職であるはずのS. B. C. T. 顔負けの暴れっぷりに、敵だけでなく味方も圧倒されずにはいられなかった。

一方、スコープ2号率いるS・B・C・T.のライトスコープ達は、ハザード2のカラミティを相手にかなりの苦戦を強いられていた。ハザード2のカラミティはストールを巧みに使い、ライトスコープ達の一斉射撃を防ぎ薙ぎ払いで複数人を同時に吹き飛ばす。

「ぐあああああつ!?!」

「くそつ! あのスツールが厄介だ……!」

吹き飛ばされる仲間のライトスコープに、スコープ2号は思わず歯噛みする。敵ながらあのパワーは天晴だ。何せあのスツール、巻き付ければライトスコープなら容赦なく全身の骨をバキバキにへし折る事すらできるのだから。

だが……オリジナルのスコープである2号なら締め付けられても、耐える事は出来る。パワー自慢のスコープならば。

「——だったら!」

〈Vortex・Blade Starting〉

意を決して前に出るスコープ2号。他の隊員たちの制止も聞かず飛び出したスコー

プ2号を、カラミティは容赦なくストールで絡め取った。

スコープ2号の全身にカラミティのストールが巻き付き全身を締め付ける。軋みを上げる全身に苦悶の声を上げつつ、スコープ2号は出力を最大にして堪えると床にボールテックスブレードを突き刺した。

「今だ、やれっ!!」

これでカラミティは最大の武器であるストールを封じられると同時にその場に固定された。少なくとも活動範囲は限られる。楽に倒せるからとストールで絞殺そうとしたのが仇となったのだ。

慌ててストールを外そうとするが、スコープ2号はストールを腕にも巻き付けて掴んでいるので外したくても外せない。

動きを止められたカラミティに、ライトスコープ達の銃撃が突き刺さる。

無数の銃弾がカラミティの装甲やアンダースーツに突き刺さるが、やはりカラミティは頑丈でしかも回復能力もあるので傷付けた先から回復されるので微々たるダメージしか与えられない。

それでも数で圧倒するライトスコープ。序盤にストールで吹き飛ばされた者も攻撃に参加し、四方八方からの銃撃に次第にカラミティの回復力が負け始める。いくら回復できると言っても無限ではない。回復にもエネルギーを使うので、度重なる回復が行わ

れるとエネルギーが不足してきて回復が追い付かなくなるのだ。

あと一步で倒せるかもしれない……そんな希望が見えてきた時、銃撃が唐突に止んだ。弾切れだ。

せつかくここまで追い詰めたのに、肝心なところで弾切れを起こしたことに部隊に動揺が走る。だがここで勢いを殺しては、これまでの奮闘が無駄になるとライトスコープ達はガンマソードを抜いて接近戦に切り替えようとした。

〈Recognition〉

「ハアアアアアツ!!」

そこに、ハザード3のカラミティを倒し終えたスコープ1号が文字通り飛び込んできた。ボロボロになったカラミティにエンドスマッシュを放ち、蹴り飛ばして研究室の1つに叩き込む。その際にストールが千切れ、2号はその場に残された。

「ふう……」

「隊長!」

「おう、小早川。大丈夫か?」

「はい。隊長こそ」

「まあな。しかしお前、なかなか無茶やったな?」

「他に方法がなくて……」

「誰の影響だ？」

「それは隊長です」

軽口を叩き合う2人のスコープ。1号は2号の言葉に、彼を小突きながら笑った。

その時、今し方1号のエンドスマツシュで蹴り飛ばされたカラミティがボロボロになりながらも研究室から出てきた。度重なるダメージに足取りは覚束ないが、それでもまだやる気はあるのか徐々に体を回復させながらスコープ達に向かってくる。

「小早川、やるぞー！」

「はいー！」

〈Recognition〉

迫るカラミティに向けて、スコープ1号と2号は同時にエンドスマツシュを発動。同時に放った必殺の飛び蹴りがボロボロのカラミティに炸裂した。

「ハアアアアアツ!!」

2人のスコープによるエンドスマツシュを喰らったカラミティは遂にダメージが限界を迎え、再び研究室に押し戻されるとそこで爆散。室内の機材も何もかもを巻き込んで吹き飛んだ。

爆炎に包まれ吹き飛び研究室を前に、スコープ2人は互いの勝利を称える様に拳をぶつけ合った。

デイナとカラミテイの戦いが始まった時、希美は亜矢と共にリレイとレックスの2人を連れてその場を離れていた。あのままあそこには巻き込まれてしまう。

それでも亜矢は最初仁の戦いを見届けようとしたが、デイナの戦いの邪魔になると希美と真矢の2人に諭されまだ満足に動けないリレイ達を連れて廊下を進む。

戦いの音が遠くになった頃を見計らい、2人は足を止め抱えていたリレイとレックスを床に下した。やはり無理矢理戦わされていた事は2人にとって大きな負担となつていたらしく、デイナの手で遺伝子的には安定させられたが体力は完全に戻っていないのか抱えられた状態でも慌ただしい移動は負担が大きかったようだ。

リレイもレックスも、額に汗を浮かべ辛そうに息をしている。

「大丈夫ですか？」

「しっかり——」

希美が亜矢と共に2人を気遣おうとした時、出し抜けに後ろから首を掴まれ持ち上げ

られた。

「あぐっ!? ああっ!?」

「なっ!?」

突然の事に亜矢は言葉を失った。何しろ希美の体が何も無いのに宙に浮かび上がったのだ。

何が起こったのかと状況を理解する前に、希美は乱暴に振り回されて壁に投げつけられた。

「がはっ!? ぐう……」

「ノゾミ!?」

「何が……」

3人が壁に投げつけられた希美に注目していると、希美の目の前の空間が陽炎の様に揺らぎ次の瞬間には仮面ライダーサクリスが姿を現した。

「し、シトシン——!」

「逃げられると思ったか、負け犬? テメエらもだモルモット。全員檻の中にぶち込んでやるから覚悟しとけ」

「くっ!」

新たに現れた脅威に亜矢がデイナドライバーを取り出して変身しようとするが、立ち

上がった希美がそれを制止した。

「待って！」

「え？」

「こいつは私にやらせて。いい加減負け犬負け犬って、五月蠅くて仕方ないのよ」

〈Base HORSESHOE〉

ブレイドライバーを腰に装着して立ちほだかる希美に対し、サクリスは小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「はっ！ 馬鹿か、お前？ 廉価版とは言え、カラミティドライバーで変身してる俺の方

がお前よりも強いんだぞ？ それなのにお前1人で戦うとか正気か？」

「馬鹿はアンタよシトシン。自分が実験動物だって事にも気付けないとか、育ちの悪さが出過ぎなのよ」

〈HORSESHOE × CROCODILE × TURTLE Mixing
Genetic information〉

シトシンも元はただの傘木社の社員だった。ただ彼は希美とは違い、素行は悪く評価は最低で何時リストラされてもおかしくない存在であった。そんな存在だったので上司や同僚からは出来損ないと見下される事も多く、日々ストレスを抱えて生きていた。そんな彼も、希美同様に健康診断に見せかけた遺伝子検査で適正を見出され研究サン

ルとされた経緯を持つ。

希美の場合は望まぬ実験により得た力と立場が性格を豹変させてしまったが、彼の場合はこれが素であり秘められていた凶暴性が解き放たれたのがシトシンと言う男であった。

「お前……どうやら本気で死にたいらしいな？」

「やれるもんならやってみなさいよ。私は死なないし、負けないけどね。変身！」

〈Create, Capture, Out of Control. Brake
the chain〉

ヘテロに変身した希美は、サクリスに掴み掛るとその場から引き離れた。ここに居てはリリイとレックスを巻き込む。

近くの研究室に飛び込む形で戦いの場を移すと、ヘテロは一旦サクリスから距離を取りテイルバスターを抜いた。対してサクリスもバクターリーダーを取り出すと、左手にホルスターを兼ねた短剣を持ち銃口をヘテロに向ける。

「ははあつ！」

サクリスは機材やら何やらが吹き飛ぶのも構わず銃を乱射した。ヘテロも対抗してテイルバスターの引き金を引く。連射力に優れるサクリスの銃撃が何発もヘテロに命中するが、防御力に優れるヘテロにはあまり効果がない。対してヘテロの銃弾は炸裂

弾。当たれば爆発で相手を吹き飛ばす代物だ。前の戦いではリレイ達を巻き込む危険から使えなかったが、ここでなら気にする必要はない。

放たれた炸裂弾が性格にサクリスに命中し、生じた爆発がサクリスを部屋の外に吹き飛ばした。

「がああああつ?!」

「あらどうしたの、随分と無様な声上げて? アンタの方が強いんじゃないの? もつと根性見せなさいよ」

そのまま部屋の外で今度は剣戟を繰り出す2人だが、ここでもサクリスはヘテロ相手に押されっぱなしだった。ヘテロの攻撃を防げば防御は崩されるし、逆に攻撃を仕掛ければその一撃は簡単に受け止められる。

「な、何でだ!? この間は俺らが——!?!」

「そりやアデニンとグアニンも一緒だったからでしょ。アンタ1人なんてこんなもんですよ」

実際問題、ヘテロとサクリスを比較した場合どちらが強いかと言われると数字の上では確かにサクリスの方に軍配が上がる。それにヘテロは先程のクラミティとファツジとの戦闘で消耗しているので、普通に考えれば今の状況は明らかにおかしい。

何故ヘテロはサクリスを圧倒出来ているのか?

その理由を端的に述べれば、気合の違いとしか言いようがないだろう。今のヘテロには後に退けない理由がある。守りたい者が居る。それが彼女の精神を極限まで研ぎ澄ませ、遊び感覚で戦っているサクリスを上回る戦闘力を見せているのだ。

「フーン！」

「ゴはあつ?!」

剣戟の最中、一瞬の隙を突かれて蹴り飛ばされるサクリス。ヘテロはテイルバスターを肩に担ぎ、悠々とした足取りでサクリスの前に立った。

目の前に立つヘテロを見上げるサクリス、この構図だけでどちらが上なのかは火を見るよりも明らかだろう。自分を見下ろしてくるヘテロを、サクリスが仮面の奥から忌々し気に睨み付ける。

「テメエ、何見下してやがんだ!」 負け犬のくせに!」

「私が負け犬なら、アンタは飼い犬よ。自分が利用されてる事にも気付かず、立場に胡坐をかいてるだけのアンタにはね」

「うるせえ!」

ヘテロの言葉に、サクリスは叫びながら姿を消した。周囲の色に溶け込む擬態能力により、ヘテロの目に見えないようにしたのだ。

「ははっ! 最初からこうすりゃ良かったんだ。もうお前に俺を見つける事は出来ねえ

!

勝ち誇るサクリスの声がヘテロの周りで響く。だがヘテロは全く動揺する素振りを見せず、テイルバスターを肩に担いだままりラックスして佇んでいた。

それをサクリスはハツタリと断じ、周囲を歩き回りどこから攻撃するかを吟味し最終的に背後からの攻撃を決め短剣を背後から彼女の背に突き立てようと近付いた。

瞬間、振り返ったヘテロの斬撃が正確にサクリスを切り裂いた。

「ぎゃああつ?! な、何で?! どうして俺の居場所が分かった?! 音も立ててなかったし匂い対策もしてた筈だ!」

「今更だけど、勉強の大切さを知ったわ。学ぶって何歳になっても大切よね」

ヘテロ——希美はラボに身を寄せていた時、仁に自分が使っているベクターカートリッジの生物の能力などを教えてもらっていた。

何度も戦ったから分かる事だが、仁はベクターカートリッジにインプットされている遺伝子の生物の特性を活かして戦っている。それと同じことが出来ないかと、希美は改めて彼に知識を求めたのだ。

その結果分かったことの一つとして、ワニの顎には多感覚器官がありこれで獲物を探ることが出来るという事だった。本来この器官は水中で効果を発揮する器官なので陸上では意味を成さないのだが、超万能細胞とドライバーでの変身による効果もあつてか

ヘテロは自分の周囲の空気の微細な動きを感じ取れるようになっていた。

流石に他の事に意識を奪われている時には感知能力は使えないが、相手がこちらを品定めする様に攻撃まで時間をかけてくれたのなら姿の見えない相手を見つけ出すことも可能だった。

サクリスの性格が、ヘテロに彼を見つけ出す手助けをしたのだ。

「そんなじゃ、覚悟は良いかしら？」

〈HORSESHOE × TURTLE × CROCODILE Mixing Burst〉

「んの、やろう——!？」

〈ATP Full blast〉

動きの鈍ったサクリスに、ヘテロがインクリュード・シュートを放とうとする。サクリスもそれに対抗してデッドエンドアタックを放とうとレセプタースロットルを引いた。

「ハアアアアツ!!」

「おおおらあああああ!」

放たれる連続キックと、脚力を活かした跳躍と籠手の鋭い牙による噛み付きがぶつかり合う。両者の攻撃は空中で拮抗するが、連続で攻撃を放つヘテロの必殺技がサクリス

の籠手を砕いた。それだけに留まらず、腕を弾き、最初に胸板に届いた一発で体勢を崩し、防御も何もできないサクリスを何発もの蹴りが襲った。

「ぐおっ!?! あ、が?! ぎ、あああああああつ?!」

度重なる連続キックに押し戻されるサクリス。最後の一発で蹴り飛ばされ床に叩き付けられたサクリスは、そこで限界を迎え爆発と同時に変身が解除された。

強制的に元の姿に戻されたシトシンの体内で、変身が限界を迎えたことを感知した隠蔽装置が作動し彼の体が燃え始める。

「ぐあああああつ?!」

「……………」

断末魔の叫びを上げながら、体を徐々に燃え上がらせていくシトシンの姿をヘテロは黙ってみていた。雄成に身も心も売り渡した時点でこうなる可能性は何時でもあったのだ。何よりあの男は、他の幹部に比べて頭が悪すぎた。ただ適正だけで生き残れてきたような男だ。

ただヘテロ——希美には最早、他人が苦しむ姿を見て楽しむような感性はない。なので、これ以上苦しむシトシンの姿を見ていられなくなり思わず顔を逸らし、遅れてせめて介錯してやろうとテイルバスターの銃口を向けた。

だが彼女が引き金を引くよりも前に、突き立てられた刃がシトシンの体を突いた。

「あがつ!？」

「ツ!? アンタ——!!」

シトシンの体を突いたのは仮面ライダーステイクであった。ステイクはベクターライダーのホルスター剣でシトシンの体の一部を突いていた。

体を剣で突かれて苦悶の声を上げたシトシンだったが、直後に体の燃焼が収まった。それを見てヘテロは彼が何をしたのか直ぐに気付く。

「アンタ、シトシンの隠蔽装置をツ！」

「これ以上幹部を減らされる訳にはいかないからな。あまりやりたくはないが、この際仕方がない」

ステイクの言葉にシトシンは何も言い返さない。度重なるダメージと激痛に耐えきれず意識を失ったらしい。ぐったりとしたシトシンを、ステイクは肩に担いでその場を離れる。

もちろんそれを見逃すヘテロではなく、慌てて彼の後を追うとした。

「ま、待ちなさい！」

「お前はこいつらの相手でもしている」

テイルバスターの銃口を向けて引き留めようとするヘテロに対し、ステイクが指を鳴らすと近くの壁を突き破って数体のファッジが姿を現し襲い掛かって来た。ヘテロは

そちらへの対応に追われ、ステイク達を負う事が出来ない。

「くそっ!？」

出てきたのはどれも通常フアツジばかりだったので倒すこと自体は出来たが、全て倒し終わる頃にはステイクは姿を消しており後を追う事は出来なくなっていた。

その事にヘテロは悔しそうに拳を握るが、とりあえずの危機は脱せたから良しと思いい直すと思身解いて亜矢達の所へと戻っていった。

そして、場所は戻りデイナとカラミティが戦っている場所では――

「ハッ」

「オオッ!」

デイナの放った正拳突きをカラミティが弾き、返す刃で振り下ろされた手刀をデイナが受け止め無防備となったカラミティの腹を蹴り飛ばす。蹴り飛ばされたカラミティは、マントを翼の様にして空中で体勢を整えるとそのまま軟着陸し蹴られた部分を埃を

落とすように手で払った。

「ふ、やるじゃないか。まさかここまで食いつかれるとは思っても見なかったよ」

「こつちのセリフだよ。まさかカラミティがそこまで進化してたなんてね」

「いいや、まだまだこれからさ。カラミティはまだまだ進化できる。そう……今のデイナの遺伝子を貰ってね!!」

マントを翻してカラミティが迫ってくる。デイナはそれを拳を構え迎え撃つが、カラミティは彼と真つ向から勝負はしなかった。

カラミティがマントを広げるとそこから赤い粘液が零れ落ちあつという間にハザード3のカラミティになりデイナに襲い掛かって来た。液状化して襲い掛かってくるカラミティに、しかしデイナは攻撃を返さない。されるがままに全身を液状化したカラミティ・ハザード3に覆いつくされた。

赤い粘液と化したカラミティ・ハザード3で姿が見えなくなったデイナ。だが次の瞬間、内側からその粘液が燃え上がり朽ちていった。

「なんとツ!?!」

今デイナが行ったのは、全身の筋肉を振動させて熱を作り出す「シバリング」と言う能力で、これは生物が寒冷地で一時的に熱を生み出し体温を維持する為に行う生理現象の一種だ。

本来この能力のできるのは体温の維持が精々で、周囲の物体を燃え上がらせるほどの力はない。

だが今のデイナになら、触れたものを燃焼させるだけの熱量を生み出すほどのシバリングも不可能ではなかった。

これは少し予想外だったのか、燃え尽きる自身の分身に言葉を失うカラミティ。だが今の分身は十分に役目を果たしてくれた。故に彼は止まらず、そのままデイナに攻撃を仕掛ける。

そう、背中のマントでデイナを包むと言う、デイナドライバーで変身する仮面ライダーに対する特攻とも言える攻撃を。

「貰ったぞー！ 進化したデイナの遺伝子を!!」

即座にマントの内側で食作用が始まり、デイナの消化吸収が始まった。ハザード3の段階で進化したデイナの各形態がボロボロになるほどの威力だったのだ。ハザード4となった今、嘗てのデイナがこれを喰らえば骨まで溶かされて吸収されてしまいかねない。

しかもこのマントはハザード3と違って熱にも強い。デイナのシバリングによる熱にもある程度は耐えられる。この時点でカラミティは自身の勝利を疑っていなかった。ところがその目論見は数秒ほどで崩れ去った。マントの中のデイナが全く消化でき

ないのだ。

「なん、だと？ 何故……ッ!? これは!」

最初何が起きているのか分からなかったが、曲がりなりにもカラミティ——雄成も優れた科学者。食作用を防いでいる手段には直ぐに検討がついた。

「莢膜か!」

「正解」

莢膜……それは一部の真性細菌が持つ、細胞壁の外側に位置する皮膜状の構造物の事だ。細菌が分泌したゲル状の粘質物が細胞表面にほぼ均一な厚さで層を成したもので、白血球による食作用などの免疫機構によつて排除されることを回避する役割を持っている。

デイナはこの戦いが始まってから必ず、カラミティはどこかで再び食作用による消化吸収を行つてくると読んで、戦いの最中自身の全身を莢膜で覆えるように分泌能力を作り出していたのだ。

消化吸収が出来なくなった以上、カラミティのマントがデイナに出来る事はこのまま彼を絞め殺してしまう事だった。だがそれを許すほどデイナも愚かではない。

莢膜によつて消化吸収が防がれた事にカラミティが動揺したことと生じた僅かな隙に、デイナはマントの隙間から手を伸ばしカラミティを掴むと床に思いきり叩き付け

た。

「があっ?!」

叩き付けられた衝撃でマントのコントロールが切れ、解けたマントの中から無傷のデイナが姿を現す。カラミティは自分を床に押さえつけているデイナに対し、両足で蹴りを放ち引き剥がすと全身をバネの様に使って一気に立ち上がるとまたもマントを武器として使った。ただし今度はデイナを消化吸収する為ではなく、そのまま攻撃する為に。

「ハアツー！」

「つと」

マントによる薙ぎ払いを、紙一重で回避するデイナ。デイナが避けた先には壁があつたが、それがバターを熱したナイフで切るようにあっさり切り裂かれた。ハザードーが持つていたリスクブレードの能力だ。本来であれば生体装甲に対して絶対の威力を誇るそれが、能力が強化されて無機物に対しても高い攻撃力を持つに至つたらしい。

能力がシンプルであるが故に一番厄介な攻撃だが、それくらいならデイナにも再現できる。首筋から伸びたマフラー。これをカラミティのマント同様斬撃に特化した能力を持たせ、更に自在に動くように構成し直す。

あつという間にマフラーを攻撃用に作り替えると、それでカラミティのマントに対抗

する。マフラーとマントによる攻防。その合間に行われる拳と蹴りの応酬は、さながら異次元の戦いの様であった。

「フツ」

「チエアッ!」

「シツ」

「くうっ!」

誰の介入も許さないと云わんばかりの激しい攻防を繰り返すデイナとカラミティだったが、徐々にその趨勢はデイナに傾いていく。デイナがカラミティの動きを学習し、先んじて相手の攻撃を潰す動きをし始めたのだ。

薙ぎ払われるマントに合わせてマフラーがマントの先端を弾き、そのままの勢いで動いたマフラーがカラミティの拳を絡め取って引つ張るとデイナの掌底がカラミティの顎を狙う。させるものかとカラミティが自由な方の腕で防ごうとすると、掌底に隠されたもう片方の腕がカラミティの胸板を殴りぬいた。

「ハアッ」

「ぐはあっ?!」

胸の装甲を殴り飛ばされ、カラミティが再び床に倒れる。

最早どちらが上なのかはハッキリした。今のデイナはハザード4のカラミティより

も強い。とてもではないが、カラミティに勝ち目はなかった。何をしても対応され、そして上回られる。この進化の速度はカラミティの、雄成の予想を遥かに超えていたのだ。

「ここ、これが、デイナ……」

「そうだよ。父さんが……あんたが邪魔者として切り捨てた男が残してくれた力だ」

「父さんが死んだ時、悲しんでる母さんを俺は見ているしかできなかった。ただ傍に居る事しかできなかった」

「俺と母さんから父さんを奪った、アンタを許すことはできない」

「でも同時に憎みきれてない自分がいる事にも俺は気付いてる。やっぱり心のどこかで俺は雄成さんに共感しちゃってるんだ」

「だから、この一発だ。この一発で俺はアンタとの諍いにケリをつける。立ちなよ、互いの本気の一撃での勝負だ」

デイナからの挑戦状に、カラミティは無言で応える。

痛みを訴える体に鞭打って立ち上がると、レセプタースロットルに手を掛けた。デイナもそれを待ち、レセプタースロットルを引く。

〈ATP Burst〉

〈ATP Full blast〉

互いにレセプタースロットルを引き、構えを取ると次の瞬間同時に駆け出し相手に対して飛び蹴りを放った。

「ハアアアアアッ！」

「ダアアアアアッ！」

デイナの必殺技『アポトシスファイニッシュ』がカラミティのデッドエンドクラッシュユがぶつかり合う。

両者の必殺技がぶつかり合って起こった拮抗は一瞬。次の瞬間には勝負がついた。

「アアアッ！」

「うっ!？」

勝者はデイナ。デイナの必殺技がカラミティの必殺技を打ち破り、蹴り飛ばされたカラミティは壁に埋まるレベルの威力で叩き付けられた。

「ぐおおあああああつ?! ぐ、こ、こんな……事が……」

カラミティは自力で壁から抜け出したが、そこで限界を迎えたのか変身が解除されるとその場に前のめりで倒れた。

デイナは倒れた雄成の前に、デイナは安堵したように一息つく。

これで傘木社は終わりだ。雄成が何を考えていようがこれで世は少しは平和になる。だがその想いは早くも打ち砕かれた。雄成の傍にアデニンがやって来たのだ。

「プロフェッサー、ご無事ですか？」

「ああ、アデニンか……どうかね、計画の方は？」

「ほぼ完了しております。後は……」

「そうかね……それでは、もうここには用はないな」

「逃がすと思ってるの？」

雄成とアデニンが何を考えているのかは知らないが、このまま逃がして良い事などある筈がない。デイナは早々に2人を捕えようとするが、雄成が懐から取り出したリモコンのスイッチを押す方が早かった。

雄成がリモコンのスイッチを押した瞬間、周囲から火の手が上がり地下研究所だけでなく傘木社本社ビル全体が次々と爆発を起こした。本社ビルを丸々吹き飛ばすつもりなのだ。

「これは……」

「ほら早く君の愛しい女性を連れて逃げないと、全員纏めてペシャンコになってしまうぞっ。」

「本格的に崩れるまではまだ時間が掛かる。逃げるなら早くするんだな」

ここで雄成とアデニンを捕まえてそのまま亜矢達と合流して逃げ出すことも考えはしたが、それだけの時間が残されているかと言われれば微妙なところだ。大体、あの雄

成がそんなことが出来るほど時間的余裕を残してくれるとは思えない。あの2人があ
あ言うからには、本当に亜矢達を連れて逃げるだけの時間しか残されていないのだろ
う。

悔しいが、ここはあの2人の口車に乗るしかない。デイナは一度あの2人を睨み付け
ると、踵を返して亜矢達と合流しそのまま相互達と共に本社ビルから脱出した。

何とか脱出に成功した仁達は、そのまま離れた所から崩れ落ちる傘木社を見ていた。
巨悪の根城である傘木社の崩壊。

それは一連の騒動の幕切れを現すと同時に、最後の戦いの幕開けを現しているのだっ
た。

第63話：聖夜を越えて

傘木社の崩壊……それは衝撃となつて世間を駆け抜けた。当然だろう。株価暴落とかそういう次元ではなく、本社ビルが物理的に崩壊したのだから。

だがそれ以上に人々が衝撃を受けたのは、警察によつて暴露された傘木社の裏の活動を知つた時だ。

白上教授と拓郎の手により暴かれた数々の不正のデータ、そして短い時間ながらS・B・C・Tにより集められた物的証拠により明らかとなつた、傘木社により行われていた非道な人体実験の数々。

これらにより傘木社は株価が大暴落。生き残つた重役は軒並み逮捕され、裁判にかけられることとなつた。

世界的な製薬会社である傘木社は、これにより完全に社会的に死を迎える事となるのだ。その事に身内が直接の被害者である峰などは安堵した。これで兄がこれ以上危険に晒されることは絶対に無いと。

だがその一方で、仁はまだ全てが終わっていないことを察していた。

崩壊した傘木社本社ビルを調べたが、雄成の遺体が見つからなかつたのだ。場所が地

下だったこともあり捜査は難航したが、確認できた限りでは雄成やアデニンなど傘木社の裏に深く関わっていた人間の死は確認できなかった。

つまり、彼らはまだ生きていて、そして何かを諦めていない。

それを証明する様に、あの日ビルが崩壊する寸前、屋上から大型ヘリが飛び立つのと地下駐車場から数台の大型トラックが出ていくのを何人もの人々が目撃していた。

この事からも、雄成がまだ何かをやるうとしていることは想像するに難くない。

現在、宗吾達 S・B・C・T が中心となつてヘリとトラックの行方を搜索している真つ最中だった。

一方、大きな戦いを一つ終えた仮面ライダー達は、束の間とは言え平和な日常に戻っていた。仁は亜矢を取り戻し、希美もリリイとレックスを傘木社の鎖から解き放った。

希美に関してだが、当初希美は戦いが終わった後身柄を S・B・C・T に預けようとしていた。彼女は自分がこれまで犯してきた罪を償おうとしていたのだ。

だがそれに待ったを掛けたのがリリイとレックスの2人だった。2人にとつて希美は恩人であり、血の繋がりはないが姉のような存在。その彼女が警察に捕まるというのが、2人にはどうしても納得できなかつた。

「お願い！ ノゾミは、ノゾミは許してあげて！ ノゾミが居なくなつたら私は——!？」
「頼むよ!?! ノゾミを捕まえるんなら俺達も捕まえてくれ!?! 俺達からノゾミを離さな

いでくれ!!」

「あなた達ね……そんな我儘言うんじゃないの。これは大事な事よ。私は2人と違って、幾つもの悪事に手を染めてきたの。それは償わなきゃならないんだから」

「でも……だって——!?!」

リリイ達は子供だが、決して頭は悪くない。なので希美の言いたい事も分かる。だがそれでも、自分達の恩人が一方的に逮捕されると言うのは心が納得してくれなかった。

ごねるリリイとレックスには希美は勿論、宗吾もどうするべきかと悩んだ。今回の傘木社強制捜査には希美も少なからず尽力してくれた。それだけで帳消しになるほど希美の罪は軽いものではないが、さりとて涙を流すほど希美の事を思う少年少女の気持ちを踏み躪るのも……。

「権藤さん、どうするの?」

「ん~~~~~……」

悩みに悩んだ末に、宗吾は保護観察と言う名目で希美の身柄はS・B・C・T.で預かる事にし、常に自由にといい事はしないが刑務所に送ることも見送った。週に何回かはリリイ達と共に過ごせる時間を設ける代わりに、有事の際にはS・B・C・T.と共に戦力として事態解決に尽力することを約束させた。

正直、宗吾自身もかなり甘い決断だとは思う。だが見方を変えれば希美も被害者だ。

改造により精神を歪められ戦わされた、希美をその他の犯罪者と同じように扱う事は気が引けた。

こうして希美は週の中で限られた期間だけだが、リリイとレックスの2人と共に平穩に過ごせるようになった。

因みにそのリリイ達だが、この2人は完全に傘木社により戦いを強制されていたので罪を問われる様なことにはならない。当然だ、2人は被害者なのだから。

そんな感じで諸々の事後処理を終え、仁と亜矢も平和な日常を満喫していた。

そう、あの戦いから数日経ち、今はクリスマスだ。仁は自宅で亜矢と共に穏やかなクリスマスをお過ごし。2人でクリスマスのご馳走を囲み、ケーキまで食べて満足したところでお待ちかねと言えるプレゼント交換。

「仁くん、はいこれ。……私達からのクリスマスプレゼントよ」

「ありがとう。開けてもいい?」

「勿論」

亜矢と真矢に許可を取り、受け取った紙袋を開けると中にはシルバーのアクセサリーが入っていた。シンプルな作りのプレスレットだ。

「仁くんはもうちよつと着飾ってもいいと思うんです。……きつとの方がカッコいいわよ」

「そう?……どうかな?」

言われて仁は、さっそくブレスレットを右手に着けてみた。決して大きな変化ではないが、それでも仁が少しでも着飾ると見栄えが良くなる。

「うん! よく似合ってます!」

「ありがと。それじゃ、俺からは……はいこれ」

今度は仁から亜矢へのプレゼント。渡したのは包装された小箱だ。

中身は……言うまでもない。

「これ……開けても?」

「うん、いいよ。開けてみて」

大きさと重さから、中身に薄々感づき僅かに声を震わせながら亜矢が訊ねると仁は薄く笑みを浮かべながら頷いた。

期待を胸に亜矢が包装を破くと、中には見たことのある小箱があった。震える手で小箱を開けると、中には指輪が入っていた。

「仁くん、これ——」

亜矢が顔を上げると、気付けば仁は席を立ち亜矢の傍に居た。彼は嬉しさに目を潤ませた亜矢の手を優しくとると、床に膝をつき口を開いた。

「まだ卒業前で早いかもしれないけど……亜矢さん、真矢さん。俺と結婚してほしい。

もちろん卒業してからで良いから……」

仁が緊張に顔を僅かに強張らせながらプロポーズを口にするると、亜矢の頬が朱に染まると同時に両目から歓喜の涙が零れ落ちた。嬉しくて嬉しくて、答えを口にしたものに口が思うように動いてくれず何度も頷くしかできない。

亜矢が満足に答えられないので、代わりに真矢が表に出てきて答えを口にする。こちらでも感激で言葉が上手く出てこないが、それでも亜矢よりは答えを口にするだけの精神的余裕があった。

「うん……うん！ 勿論、私も亜矢も……喜んで！」

ポロポロと涙を流しながら答える真矢に、仁は小さく笑みを浮かべると小箱から指輪を取り彼女の左手の薬指に嵌めた。サイズはぴったり、シンプルな銀の指輪が彼女の左手で輝きを放つ。

亜矢は左手薬指に嵌った指輪を愛おしそうに撫でた。

まだ亜矢の目からは涙が零れている。仁は亜矢を優しく見つめると、彼女の頬を流れる涙をそつと拭いた。

「亜矢さん、真矢さん……愛してるよ」

「私も……私達もです、仁くん。……仁君、大好き」

再び目から一筋の涙を流しながら笑みを浮かべて答える亜矢に、仁は彼女の髪を梳く

様に優しく撫でると顔を近付ける。それに応えるように亜矢も目を瞑りながら仁に顔を近付け、2人の唇が触れ合った。

2人が口付けをしている部屋の外では、夜の空から2人の仲を祝福する様に白い雪が降っていた。

一方、仁達の部屋があるのとは別のマンションの一室では、希美がリリイ、レックスの2人と和やかなクリスマスを過ごしていた。

こちらは仁達と違って（主に希美が）よく食べるので、とにかく3人でたくさん料理を用意した。

リリイとレックスにとっては人生で初めての自分の手による料理。希美にいろいろと教わりながらの料理は、大変ではあったがそれはそれで楽しかった。

時に失敗しながらの料理に、リリイもレックスも心から笑い、そんな2人の笑顔に希美も穏やかな笑みを浮かべていた。

漸く傘木社の呪縛からの解放。もう体の中には実験動物の証である制御装置も隠蔽装置もない。今の3人は自由の身だった。

心から自由を満喫し、何者に縛られることもなく互いに笑い合う。例え料理は多少不格好でも、この日の料理は傘木社の社員食堂で食べる料理の何倍も美味に感じられた。

他愛ない話で盛り上がり、笑い合い、楽しんだ3人。

そして楽しい夕食を終え、食器を片付けて一息ついた時、希美は2人に用意しておいたクリスマスプレゼントを渡した。

「ほら、2人とも。クリスマスプレゼントよ」

「ほ、ホント!!」

「ノゾミ、何時の間に!」

ある程度の自由が約束された時、希美はこの時の為に2人に向けたクリスマスプレゼントを用意していた。今まで籠の中のモルモットだった2人にも、今後は人並みの幸せを味わってもらいたい。それが、自分の心を救ってくれたことに対する希美なりの感謝の印でもあった。

「開けていい?」

「悪い理由がある?」

リリイとレックスは渡された袋を開ける。小さかった頃以来の久し振りのクリスマス

スプレゼント。2人は悦び逸る気持ちを抑えながら、中身を取り出した。

渡されたプレゼントは、リリイが星形の髪飾りでネックレスが同じく星形のネックレスであった。

決して高価なものではないが、さりとして安物ではない。しっかりとした作りのアクセサリーに、2人は互いに顔を見合わせ輝く笑みを浮かべながら希美に感謝した。

「ノゾミ、ありがとう！」

「これ、着けてみていいか？」

「良いわよ」

希美は2人に渡したアクセサリーをそれぞれに着けてやる。リリイの髪には髪飾りをつけてやり、ネックレスにはネックレスを掛けてやった。

2人は互いに希美からのプレゼントを身に着けた姿を見て、ついで希美に抱き着いた。

「ノゾミ！」

「これ、大事にするよ！」

2人は希美にギユツと抱き着き、希美は2人を優しく抱きしめた。

その顔は傘木社のライダーとして戦っていた頃からは想像もできないほどの穏やかな顔となっており、ともすれば慈愛すら感じさせるものとなっているのだった。

皆がそれぞれ平和なクリスマスを過ごし、年明けまであと僅かとなった日。

仁と亜矢、白上教授達は宗吾から警視庁に呼ばれていた。

「ん、到着つと」

「ふう……あ、警視庁直つてきてますね」

久しぶりに見た警視庁は、以前カラミティの襲撃があったころに比べると窓などが軒並み綺麗になっており復旧が進んでいるのが見て取れた。あれからそんなに長いとは言えない期間しか経っていないにも拘らずここまで復旧した事に、仁と亜矢が感心しながら見上げていると横から声を掛けられた。

「あら、お二人さん。お早い到着ね」

「ん？ あ、志村さん」

声を掛けてきたのは希美だった。手を上げながら近づいてきた彼女に、仁と亜矢も手を振り返す。

その際仁は右手を上げたのだが、亜矢が上げたのは左手だった。そしてこの時、亜矢は手袋をしていなかった。

なので手を上げた瞬間、彼女の左手薬指に嵌った指輪がキラリと光ったのが希美の目に映る事となった。

「ん？ 双星、それ……」

「え？ あつ、えと……はい」

多くは語らず、ただ仁に寄り添う亜矢と彼女の肩を抱く仁の姿に、希美も野暮なことは言わないでおいた。

「まあ、何。おめでどうって言っというてあげるわ」

「どうも……」

「あの2人は元氣？」

「ええ。傘木社から解放された事もそうだけど、細胞を安定させてくれたことが何よりも大きかったみたい。本当、ありがとう」

希美の感謝に、仁が気にするなと手を振ると駐車場に車を停めた白上教授もやってきた。

これで漸く宗吾に呼ばれた者が全員集まった事になる。それでは早速宗吾の所へ行くこうと足を警視庁に向けて踏み出した時、警視庁から慎司が出てきた。

「皆さん、今日は足を運んでくださりありがとうございます」

「気にしないでください」

「それより今日呼んだのって、やっぱり？」

「はい。傘木社残党の足取りが掴めました。詳しい事は、権藤隊長の口から。さ、こちらへ」

慎司の案内で警視庁内を進む仁達が通されたのは会議室の一つ。そこには既に宗吾が茜と共に仁達を待っていた。

仁達が会議室に入ると、宗吾は彼らに手を上げた。

「やあ、門司君に双星さん。それに白上教授に、志村 希美。よく来てくれた」

「久しぶりだね、権藤さん。元氣そうで良かったよ」

「あまり無理はしないでくださいね」

仁と亜矢の気遣いに、苦笑しながらも宗吾は彼らを椅子に促した。

全員が椅子に座つたのを見ると、宗吾は早速本題を切り出した。そう、雄成達傘木社残党の足取りを。

「皆、改めてよく来てくれた。今日皆を呼んだのは他でもない。あの日、傘木社崩壊の際に逃げ出した残党の行方が判明した」

茜が手元のノートパソコンを操作すると、前方のスクリーンに地図が表示され傘木社

があつた場所から赤い矢印が伸びていった。矢印は途中でいくつかに枝分かれしている。どうやら逃げ出したトラックはバラバラに逃げて搜索を攪乱しようとしたらしい。

「捜査はやや難航しましたが、様々な目撃情報から統合してヘリとトラックの逃走経路はこの様になります。複数のトラックは一度バラバラに移動しましたが、最終的にはここに……」

その言葉と共にスクリーン上では複数の矢印がある一転に集まっていく様子が映っていた。どうやら逃げた連中はあそこに集まったらしい。

「あそこは……富士山麓？」

「青木ヶ原樹海、か」

白上教授の言う通り、傘木社残党が向かったのは富士山麓の青木ヶ原樹海であつた。トラックやヘリはそこに集まっている。

残党が青木ヶ原樹海に集結しているところまでを仁達に知らせた宗吾は、ここで視線を希美に向け問い掛けた。

「お前、傘木社の幹部だつたんだろ？　ここに何かあるのか知らないか？」

「ちよつと待つて……あ、そうですね。確かあそこにも秘密の研究所があつた筈よ」

「ん？……その言い方、志村さんは行つたことないの？」

「……そうですね。その研究所はアデニンの管轄で、一部の研究員以外は誰も行つた事がな

いわ。私も含めてね。だから、そこで何の研究をしたかなんて事は知らないの。ごめんさいね」

「いや、いい。それより、その研究所について他に何か分かる事はないか？」

これ以上ろくな情報も出せないなんて無様を晒したくはないので、希美は真剣に考え何かなかったかと記憶を絞り出す。

そして思い出した。その研究所は浄水場に偽装されている事を。

「あ、一個思い出したことがあるわ」

「何だ？」

「そこ……に、限らないけれど、秘密の研究所は大体何かの施設に偽装されてるのよ。そこだったら確か、浄水場だった筈よ」

希美の情報を確認する為、宗吾が茜に視線で調べるよう指示を出した。即座に茜が検査を掛け、青木ヶ原樹海に浄水場が存在する事を確認した。

「ありました。確かに公には、青木ヶ原樹海に浄水場があると……」

「小早川、水道局に連絡を取れ」

「了解」

浄水場は国営の施設だ。それが一企業の隠れ蓑になっているとなれば、国の中枢にまで傘木社の手が及んでいることになる。以前であれば傘木社はその力に物を言わせて

国の機関の一つである水道局を黙らせるなりしていたのであろうが、権力が地に落ちた今であれば水道局の口を割らせることなど容易い。

案の定水道局からはすぐに返答が来た。

曰く、件の青木ケ原樹海に設けられた浄水場の建設には傘木社が多大に関わっていると。

「決まりだな。あの残党はここに逃げ込んだんだ」

「でも何でこんなところの研究所に？　ここでやつてる研究って何なんでしょうか？」

「志村さん、何か知らない？」

「ごめん、さつきも言った通りこの研究所はアデニンの管轄で、私は存在を知ってるだけでノータッチだったのよ。だからここで何をやってたかは私も知らないわ」

流石にそんな簡単にはいかないかと、室内が若干の諦めムードになった。その時、仁がある事を思い出した。

「……そう言えば、この間アデニンが俺をスカウトしに来た時気になる事を言ってたな」
「スカウト!?!」

「仁くん！　私それ初耳なんですけど!?!」

「ゴメン、凄くどうでもいい事だったから今の今まで忘れてた」

「まあまあ。こうしてここに居るんだからいいじゃないの」

まさか仁がスカウトされていたとは知らず、狼狽える宗吾と亜矢を希美が宥めた。

「でも。……はあ、まあいいわ。それで？ アデニンは何を言つてたのよ？」

「ん〜つとね、新人類の世界を作るって言つてた」

「新人類の世界を作る？ それはつまり新人類が地球の新たな覇者になつた世界を作るって事か？」

「そういう事だろうね」

「でも、どうやって？ 新人類に覚醒する為には、ドライバーで変身してからベクターカートリッジを直挿ししないとイケないですよ？ 全人類にそれをやるのは非効率的だと思ふんですけど？」

亜矢の言う通り、1人1人を新人類に覚醒させるのは非効率すぎる。それに何より気になるのは、あの時のアデニンの口ぶりだ。まるで新人類と旧人類が互いの生存を賭けた生存競争をすると言いたげな様子だった。

という事は、一度に大量の人間を新人類に覚醒させる手段が何かあるという事だろうか？ 雄成だつたら何か考え付きかねない。

しかし現時点では判断材料が少なすぎる。はつきりと言い切ることが出来ない以上、憶測だけで物事を語るのは止めた方が良好だろう。飽く迄も今は、危険を匂わせる程度に。

「少なくとも、諦めずに何かをやるうとしてることは確かなんだし油断はしない方が良く
いと思う。多分、あれから今までジツとしてたなんて事もない筈だから」

「確かに。……よし！ 北村、全部隊に召集を掛ける。準備が整い次第、青木ヶ原樹海の
傘木社秘密研究所に攻撃を仕掛ける」

「了解！」

「門司君、双星さん。それと……志村。君ら3人にも手を借りたい」

「恐らく、次が傘木社との最後の戦いになる。そう雰囲気を漂わせた言葉に、仁達も頷
いて答える。」

「ん、そろそろ決着をつけないとね」

「微力ながら、お手伝いします。……私達と仁君に任せて！」

「ま、私は今までやらかしてきたことの清算をしなきゃならないし」

「すまないな……頼むぞ」

宗吾の言葉に再び頷き合う仁達。

こうして、青木ヶ原樹海にある傘木社秘密研究所への攻撃作戦が実行されることと
なった。

その日の夜……

時刻は深夜。仁と亜矢は自宅に戻り、一つのベッドの上で身を寄せ合っていた。仲がよいのはそうだが、そもそもこのベッドは元々一人用なので一緒に寝ると必然的に身を寄せ合う形となってしまうのだ。

窓から差す月明りの光以外光源の無い部屋の中、互いの体温だけを感じる2人。2人はベッドに横になってはいたが、眠ってはいなかった。正確には、眠れないというのが正しいだろう。

漸く傘木社との戦いに決着がつく。恐らく次の戦いは、傘木社も後がないからと激しい抵抗をしてくるだろう。もしかすると、傘木社本ビルでの戦闘以上の激戦になるかもしれない。

その戦いでもし、亜矢の身に何かあつたら……そう思うと仁は不安を感じずにはいられなかった。

「亜矢さん、真矢さん」

「ん？ 何です、仁くん？」

「次の戦いだけどき………亜矢さんは——」

思い切つて、亜矢には留守番を頼もうとしていた仁。だがその言葉は、言い切る前に亜矢自身の言葉によつて遮られた。

「嫌です。絶対に……嫌です」

「……まだ全部言つてないんだけど？」

「言いたい事は分かるわよ。留守番してろつて言うんでしょ？ 嫌よ、そんなの」

明確な亜矢と真矢からの拒否に、仁は困つた様に眉間に皺を寄せる。

「でも多分、いや絶対、次の戦いは雄成さんも本気で俺達の前に立ちはだかる。もう俺達の細胞も遺伝子も必要ないんだし、排除することに何の躊躇もない筈だよ。何より、きつと雄成さんには隠し玉がある。そんな危険なところに、亜矢さんを連れて行くのは……」

「それはこつちも同じです。そんな危ないところ、仁くんに行つてほしくありません。……でも仁君は行くんでしょ？ なら私達も行くわ。私達は元々、仁君を守る為に戦う事を選んだんだから。……ここで戦わずに待つていただけだったら、私達が仮面ライダーになつた意味がありません」

「それは……でも……」

亜矢と真矢の言いたいことは分かるが、それでも仁は洩らずにはいられなかつた。

すると亜矢が身を起き上がらせ、遠慮なしに仁の上に跨つた。その程度で負担になる

事はないが、それはそれとしていきなり腹の上に跨られて体重を掛けられたら驚きはする。

一体どうしたと腹の上に跨る亜矢を見ると、そこには月明りに照らされ神秘的な美しさを放つ一糸纏わぬ亜矢の姿が浮かび上がっていた。

その美しさに、仁は改めて見惚れ思わず息をのむ。

「心配なんだつたら、仁くんが私を守ってください」

「代わりに私が仁君を守るから」

「それとも仁くんは、私達を守れる自信がありませんか？」

「私達の事、信じられない？」

仁が自分に見惚れていることに気付きながら、亜矢と真矢は仁に言葉を投げかける。それは挑発的でもあるが、信頼の現れでもあった。

仁なら絶対、自分の事を守ってくれる。自分に背中を預けてくれる。

その信頼が仁にも伝わったのか、仁は観念したように笑みを浮かべると亜矢の手を取り引き寄せた。一気に2人の顔が近付き、互いの吐息が相手に掛かるのを感じる。

「分かった、分かったよ。亜矢さんと真矢さんの事は、俺が絶対守る。今度こそ、何があっても……。だから、亜矢さんと真矢さんには俺の背中、任せたよ」

仁の答えに、亜矢は満足そうな笑みを浮かべると顔をそのまま下した。下りてきた亜

矢の顔を仁は抵抗せずに受け止め、2人の唇が重なり合った。

遂に青木ヶ原樹海の秘密研究所への攻撃が決行される日になった。

その日、希美は戦いに参加すべくたつぷり朝食を食べてカロリーを蓄えてから家を出ようとした。それを見送るリリイとレックス。

2人は当然留守番だ。2人はもう戦わなくていいし、何より2人が使っていたベクターカートリッジはあの戦いの中で破損して使えない。置いてきぼりにされることに對して、リリイは寂しそうにしレックスは不満そうにしていたが、希美の説得もあつて2人は留守番をする事に理解を示した。

ドライバーとベクターカートリッジを忘れずに持ち、仁や宗吾達と合流すべく警視庁に向かおうとする希美。家を出ようとするその背に、リリイが声を掛けてきた。

「ノゾミー！」

「ん？」

「あの……いい、いつてらっしやい」

見送りの言葉一つに随分と意を決しているなど希美は思わずキョトンとした。日本では当たり前だが、実はこういう言葉は日本特有で海外では何気ない日常での見送りの言葉は存在しない。少なくともどんな時でも使える定型文としての『いつてきます／いつてらっしやい』は存在しなかった。同じニュアンスでも、海外ではシチュエーションによって使う言葉が異なる。

「日本では、出かける人に掛ける言葉はこれなんだろう？」

「お別れじゃなくて、用事が終わったら帰ってくる人に向ける言葉だつて」

「帰ってきてくれよ、絶対」

「私達、待つてるから」

「いつてらっしやい」

恐らくは傘木社との最後の戦い、場合によつては命を投げ出すことも考えていた希美だが、考えを改めた。

自分の帰りを待つていてくれる人が居る。自分には帰れる場所がある。それを考えると、易々と命を投げ出そうなどと言う気も失せた。

「——いつてきます」

必ず帰るのだ、2人の居るところに。そう心に決め、改めて希美は家を出た。

来る戦いに向けて歩く希美の姿は、先程まではなかった覇気に満ちていた。

仁と亜矢、希美がS・B・C・T.と合流し青木ヶ原樹海に向けて出発した。

その頃、彼らの目的地である樹海の中にある浄水場に偽装した傘木社の秘密研究所では……………

「プロフェッサー、ご報告が……」

「うん？」

「S・B・C・T.が動き出したようです。まっすぐこちらに向かっていると」

本社ビルを捨ててここ、樹海の秘密研究所に逃れた雄成達だが、全ての人間がこの研究所に逃れた訳ではない。中には民間人に紛れ、最大の敵である仁やS・B・C・T.の動向を監視している者もいた。

尤も雄成はそう時間を掛けずこの研究所がバレる可能性を考えていたので、そんなに慌てはしなかった。

「そうかね。まあこちらも概ね用意は終えている。迎え撃つ用意も……計画遂行の為の用意も……」

雄成の視線の先にはだだっ広い空間が広がっており、そこには小さな羽のついた頂戴な柱の様な物——ミサイルが無数に並んでいた。

「培養は順調、後数時間で必要量に達する。時間が来た時、これを打ち上げれば……」

「世界は、変わる。……母さんの生きれる世界がやって来る」

「もうあと少しだ、後ひと踏ん張り……期待しているぞ、アデニン。いや、——」

久しく聞いていなかった本名を雄成自身の口から聞かされ、珍しくアデニンの顔に笑みが浮かぶ。アデニンは笑みを浮かべたまま、雄成に深く頭を下げた。

「任せてください、プロフェツサー………父さん」

父……そう呼ばれた雄成は、アデニンの方を見ずに口角を上げ目尻を下げる。混じり気の無い、仁達の見たことのない笑みを浮かべた雄成は、踵を返してその場から離れていった。アデニンがその後続く。

それぞれがそれぞれに想いを抱え、戦いに臨む。

超万能細胞と言うパンドラの箱を開き、ファツジと言う厄災を解き放った雄成。

そしてその箱の奥にあった、進化と言う希望を手にした仁。
両者の最後の戦いが、遂に始まろうとしていた。

第64話：破滅の不死鳥、降臨

仁達を含むS・B・C・T.の車列は東京を離れ、静岡県富士山麓まで辿り着いた。

道中は不気味なほど順調だった。てつきり最後の妨害があるのではないかと警戒していたが、そんな事はなくて正直な話拍子抜けした。だがそれもよくよく考えれば当然なのかもしれない。

今の傘木社残党は余裕がないのだ。最早道中に妨害行為をするほどの余裕もなく、近く仁達に気付けたとしても見送るしかできない。

一行はそのまま道なりに進み、途中分かれ道を経由して第1の目的地である浄水場に到着した。目的地に着くと同時にトレーラーからはわらわらとライトスコープ達が降車し施設の前に整列する。彼らの前に、まだ変身はしていないがアーマーなどを身に纏った宗吾と慎司が立つ。

宗吾は部下であるライトスコープ達を見渡すと、短く一言告げた。

「――突入！」

その一言を合図に、浄水場にライトスコープ達が次々と入っていく。彼らの後に続い

て仁達が浄水場施設内に入るが、ここも特に抵抗らしい抵抗もなくあっさり制圧できてしまった。どうやら今ここで働いている職員は全員傘木社とは無縁のただの職員らしく、S・B・C・Tが突入するとあっさり降参した。

施設の制圧は出来たのだが、ここで問題が発生した。ここはどう見ても普通の浄水場なのだ。内部を隅々まで調べたが施設自体は何の問題もないし、かと言って何処かに地下への入り口が隠されている訳でもない。

「おい、ここが秘密研究所に繋がってるんじゃないのか？」

埒が明かない状況に、宗吾が希美に問い掛けると彼女は肩を竦めて答えた。

「そう言われてもねえ。言ったでしょ？ 私もここに来たことはなくてある事しか知らなかったって。ここから研究所にどう行けばいいかなんて知らないわよ」

言いたいことは分かるがやや無責任な物言いに、宗吾がムツとなつて希美を睨む。睨まれた希美は困った顔で肩を竦めるしかできない。

「困りましたね。早く入り口を見つけないと………仁くん？」

さてどうしたものかと亜矢も考え始めたその時、亜矢は仁が近くに居ないことに気付いた。辺りを見渡すと、仁は外で浄水場の浄水を行う池を眺めていた。

よく見ると仁はある一点をじつと見つめている。

「仁くん、どうしました？」

「……………池の数が多い」

「えっ？」

突然の仁の言葉に、亜矢が首を傾げて仁の視線の先を追った。

仁の視線の先には確かに無数の池がある。だがそれは浄水場では当たり前前の光景だ。浄水場はその構造上、水を浄化する為の池や砂などを沈殿させる池があり、見渡せば規則正しく配置された無数の池を見る事になる。

だから池の数が多いのは当たり前前の事なのだが、仁がその事を知らないとは思えない。

と、いう事は――

「この池の中に、地下への入り口があるってことですか？」

「多分ね」

亜矢は慌てて宗吾達を呼び、この池のどれかが地下の研究所への入り口であると告げた。宗吾達が一斉にそれぞれの池を見下ろすが、池はどれもこれも似たようなもので違いが分からない。どれかが目立って綺麗とか汚いとかいう事もなく、見ただけではどれが地下への入り口なのか判断のしようがなかった。

そんな中で、仁は違和感のある池を見つけていた。

「――この池」

「ん？ この池がどうしたんだ？」

「この池、臭いが違う。ただの水道水だ」

仁の言葉に宗吾が仁の言う池の臭いを嗅いでみるが、彼には違いが分からなかった。どうやら仁は、意図的に自分の嗅覚を引き上げて臭いで違いを見つけたらしい。

その違いは、彼と同じ新人類の亜矢も分かるほどだった。

「……ホントだ。この池、他と違う」

「そうなのか？ となるとこの池の水を抜く必要があるのか」

職員に何かを知っている者が居ないかと訊ねに行こうとする宗吾に対し、仁は問題の池の周りをゆつくり見渡す。そして彼は、池の近くにメンテナンス用のハッチの様な物を見つけた。仁はすぐに察した。あのハッチには水を抜いて地下に続く階段かエレベーターを出現させるスイッチの様な物が隠されていると。

ハッチを開けようとしたが、ハッチには鍵が掛かっており開けようがなかった。

「小早川、職員を問い質せ。あのハッチの鍵を——」

「いや、多分ただの職員は何も知らないよ。鍵は傘木社の人間が管理してた筈だ」

もし何かの間違いで、何も知らない職員が研究所に続く入り口を見つけてしまったら面倒な事になる。傘木社だったらその場合、容赦なく目撃者を始末しそうだが、それでも無用なリスクは負わないようにするだろう。

そうなるとハッチを開ける事が少し厳しくなる。鍵がないのでは開けられない。

ピッキングでもして開けるかと宗吾が考え始めた時、徐に仁がデイナに変身してハッチの取っ手に手を掛けた。

〈Open the door〉

「え、ちよ、仁くん!?!」

「フーン!」

彼が何をするつもりなのかに気付いた亜矢が彼を宥めようとするが、彼はお構いなしに取っ手を引つ張りハッチ諸共引き千切った。

あまりの力技に、亜矢だけでなく宗吾や希美も啞然となる。

「……………この方が早いよ」

「門守君、随分と過激なことやるんだな」

「仁君、ワイルド…………ヤダちよつとドキツとしちゃった」

「そうだった…………いざとなったらこう言うことする男だったわ」

そう言えば傘木社に乗り込んだ時、エレベーターが止められていると分かるとドアをぶっ壊してワイヤーを伝って地下に降りたことを希美は思い出した。知的に行動する男だと思っていたが、どうやら時と場合によつては思い切りのいい行動を見せるらしいという事を知った。

それはそれとして、デイナが引き千切ったハッチの中には案の定入り口を出現させるためと思われるスイッチがあった。恐らくは入り口を出現させるのと隠す為と思われるスイッチが一つずつあるだけと言う非常にシンプルなもの。余程鍵の管理に自信があるのか、それとも万が一外部者にバレても始末すればいいからと考えているからかが気になる場所である。

とりあえず、変身を解いた仁は適当に点灯している方のスイッチを押した。確証がある訳ではなく、ただ何となくだ。別に外れたからこの辺りが吹き飛ぶ訳でもないのだし。

果たして、変化はすぐに訪れた。見る見るうちに目の前の池の水が引いていき、完全に排水されると池の底がせり上がってきた。池の底は仁達の頭上、ビルにして約2階ほどの高さで止まると、一部が左右にスライドした。そこが地下へのエレベーターの入り口らしい。

「……行こう」

仁を先頭に、亜矢、希美とS・B・C・T.の隊員、白上教授らが隠しエレベーターの中に入った。エレベーターの中は思っていた以上に綺麗で、水が漏っていたりした形跡はない。

内部を見渡すとまたしてもスイッチを見つけた。考えるまでもなく、地下へと下りる

為のものだ。階数表記がないところを見ると直通のようだ。

全員がエレベーターに乗ったのを確認して、仁がスイッチを押すと扉が閉まり次いで僅かな振動と共にエレベーターが下に向かうのが感じられた。

研究所はかなり下の方にあるのか、下がり始めてからなかなか目的地に着かない。何事もなく下りているだけなのだが、亜矢には何だかこれから向かう先が地獄の入り口のように思えて段々と緊張してきた。知らず、生唾をぐくりと飲み込む。

仁はそんな亜矢の姿に気付くと、彼女の肩にそつと手を乗せる。肩に置かれた手に気付き亜矢が仁の方を見ると、彼は優しい笑みを浮かべながら力強く頷いて見せた。それを見て亜矢は自身の中に浮かんできた不安が霧散していくのを感じた。

そうだ、自分には仁が居る。彼が居るなら大丈夫だと、そんな根拠のない確信に、亜矢の顔に笑みが浮かぶ。

そんな光景に気付いた希美が分かりやすく肩を竦めた。こんな時までイチヤツについて何しているんだといった心境だ。

その時、一際大きな振動と共にエレベーターの動きが止まった。どうやら目的地に着いたらしい。エレベーターのドアがゆっくりと開く。

その際仁は亜矢を引っ張ってドアの向こうから死角となる場所に移動した。もしドアの向こうで待ち伏せされていたら一溜りもない。

しかし彼の心配は杞憂だった。ドアが開いた瞬間に攻撃されることはなかった。

が、待ち伏せはしつかりされていた。ドアの向こうには広いエレベーターホールに雄成とアデニン、シトシンの3人が佇んでいた。

待ち伏せされていたことに身構える宗吾達だったが、お供の保安警察が居ないのを見ると仁がエレベーターから出て雄成の前に姿を曝した。亜矢が引き留めるのもお構いなしだ。

「よく来たね、諸君。待っていたよ」

仁が前に出ると、雄成がいつもの余裕を感じさせる様子で拍手と共に仁達を迎えた。まるでパーティー参加者を歓迎しているような感じだ。

いや……彼にとってはこれもパーティーの様な物なのかもしれない。

「雄成さん。一体何を企んでるの？ 世界征服、とかそんなチープなものじゃないんでしょ？」

もうまだるっこしく腹の探り合いをするのも飽きた。仁はストレートに雄成に何を企んでいるのかを訊ねた。

本社ビルどころか会社の信用そのものを失い、今の彼らは後ろ盾を失い文字通り後がない状況だ。畳みかけるなら今である。

「ふむ……そうだね。君らはここまで頑張った。ご褒美にそろそろ私の目的を話してあ

げようじゃないか」

思いの外雄成はあっさり口を割るようだ。その事に宗吾達は少し意外そうに眼を見開いていたが、仁は違った。ここであっさり話すという雄成に何かを感じたのか、手だけでまだエレベーターの中に残っている者達に出てくるように合図した。

それを見てまず亜矢がエレベーターから出て、続いて希美が、そして宗吾達S・B・C・T. が後に続いた。

全員がエレベーターから出てくるのを待ち、雄成は自身の計画を仁達に話し始めた。「もう、アデニンからある程度話は聞いただろう？ 私は新人類の為の新たな世界を作ろうとしている」

「どうやって？」

「実はここにはね……レトロウイルスを搭載したミスイルが無数にある」

「み、ミスイル!？」

ミスイルと言う単語に亜矢を始め、S・B・C・T. の隊員達がざわついた。動揺する彼らに対し、仁はそれだけで雄成がやろうとしている事に気付いた。

「なるほど、ね。……そのレトロウイルスは新人類の遺伝子を持つ超万能細胞を持って、それを世界各地にばら撒いて新人類を一気に増やそうって……そういう事なんだね」

「流石に察しが良いね、その通りだ」

レトロウイルスは、端的に言ってしまうえばエイズの原因となるウイルスと同じ種類のウイルスである。通常のウイルスが他の細胞に感染するとその細胞の遺伝子を使って自身を増やすのに対し、レトロウイルスは自分の遺伝子を他の細胞の遺伝子に転写して変質させる。

雄成はその性質を利用して、新人類の遺伝子を一気に拡散させようとしているのである。

だがそれにはある問題があった。

「……それで？ そのウイルス、感染した人の生存率はどれくらいなの？」

「え？ どういう意味ですか仁くん？」

「考えてごらんよ亜矢さん。事前に仮面ライダーで変身して下地を作ってた俺らでも、覚醒する時はあれだけ辛かったんだよ？ それがもし、何の準備もなしにいきなり変異し始めたらどうなると思う？」

「ッ!？」

なるほど確かに仁の言う通りだ。自分たちでさえあれだけ辛かったのだ。それが何の前段階もなしにいきなり覚醒したらどうなるかなど考えたくもない。

「雄成！ どうなんだ？ そのレトロウイルスは、人体にどれだけの影響がある!？」

雄成の作り出した新人類の遺伝子を持つ超万能細胞のレトロウイルスの危険性に気付いた白上教授が、峰に押さええられながら問い詰める。すると雄成は肩で笑いながら、明後日の方を見て答えた。

「まあ………実験した限りでは今のところ生存確率は20から30%と言ったところだったね」

それはつまり全人類の2、3割しか生き残る事は出来ないという事だ。そのあまりにも高い致死率に、誰もが言葉を失った。

「あれ？でも何人かは新人類に覚醒したんですよね？その人達は今どうしてるんですか？」

「そうだ、雄成の実験の結果が正しいのなら、現時点で仁と亜矢以外に新人類に覚醒した者が何人かいる筈だ。」

もしかすると自分たち以外の新人類が居るかもしれない……その期待を胸に亜矢が訊ねると、雄成はさも当然の様に答えた。

「ああ、彼らならちよūd良かったから、新人類ベースのファッジの実験に使ったよ。体を弄り過ぎてもう元に戻れなくなっちゃったがね」

「そんな……」

「酷い——!？」

人を人とも思わない扱いをする雄成に、誰もが顔を顰め言葉を失った。ただし仁は、顔色一つ変えず雄成の顔をじつと見つめている。

「雄成、お前は……お前は人間を、何だと思ってるんだ!？」

そんな中で大きな声を上げたのは白上教授だ。袂を分かったが、嘗ては同志だった。同じ志の元、超万能細胞の研究を共にした相手がこんな悪魔の所業をする事に、白上教授は昔を思い出し叫ばずにはいられなかつた。

それに対し雄成は、今までになく冷めた顔で――

「――脆く壊れやすい、脆弱な生き物だ」

と答えた。

「だからこそ、私が強くしてやろうというのだ! 将来、来る困難を乗り越えられるように!!」

雄成が叫ぶと同時に、彼らの背後から無数のファッジが現れた。だがそれは今までに見たことのないファッジだった。

黒い表皮に、鋭い牙と鉤爪。長い尾に、先端にはナイフの様な刃がついている。細い頭部には額の辺りに一本の角が生えていて、凶暴な光を宿す両目が赤く光っていた。

「な、何だあのファッジは!？」

「キメラファッジ?」

「いや、違う……遺伝子そのものを弄られてる。あれは……さつき言つてたレトロウイルスの被検体だった人達だね？」

仁の見抜いた通り、それらは皆雄成によりレトロウイルスの被検体となり、新人類への覚醒を果たせたにも拘わらずそのまま実験に使用された憐れな者達の末路——その名も、『ヌーベルファツジ』だった。

ヌーベルファツジが出てくると、それと入れ違うように雄成は奥へと引つ込んでいく。

「待て、雄成!？」

「生憎と私は忙しい。後は任せたぞ、アデニン……いや、いさお勇夫」

「はい……父さん」

雄成が口にした勇夫と言う名に反応し、返事を返すアデニン改め勇夫。その2人のやり取りに仁も言葉を失う。

「親子?」

「勇夫……馬鹿な!?! 雄成に息子がいたと言う話など聞いたこともない!?!」

「知ってましたか、志村さん?」

「んな訳ないじゃない、初耳よ!」

「あともう少しだ、勇夫。もうすぐ2人で、恵里に会えるぞ」

白上教授の驚きを無視して勇夫と話した雄成は、そのまま研究所の奥へと引っ込んでいく。後に残された勇夫の顔には、今までに見た事のないギラついた笑みが浮いていた。

「会える、もう直ぐ……母さんに会えるんだ！」

〈SQUID + SHELLFISH Origin regression〉

「へへっ、俺は新世界とやらの興味はねえが……俺をコケにしたテメエらは生かしちゃおかねえ」

〈FLOG + MOUSE Input〉

勇夫とシトシンがカラミテイドライバーを腰に装着し、ベクターカートリッジを装填した。それを見て仁もダイナドライバーを装着し、それに続いて亜矢達も前に出て横並びになりドライバーを装着した。

「雄成さん……あんたは俺達が止めてやる」

〈HUMAN + HUMAN Beyond evolution〉

「もうこれ以上誰も悲しませません！……私達が守る！」

〈CAT Unite〉

「あの子達の為にもね」

〈HORSESHOE × CROCODILE × TURTLE Mixing

Genetic information

「俺の家族の様な者を、増やして堪るか！」

「行きます！」

〈Access〉

睨み合う仁達と勇夫達。それに呼応するようにライトスコープとヌーベルファッジが前に出ようとする。

そして――

「変身」

〈The largest predator of the ancient sea

a. Reborn origin, CAMEROCERAS〉

〈Precious sacrifice for development. De

dicatate life〉

「変身！」

〈Break down the wall of evolution. Reac

h the NEW GENERATION. Open the door〉

〈Open the door〉

〈Create, Capture, Out of Control. Brake

the chain

〈In focus〉

仁達と勇夫達が一斉に変身し、仮面ライダーが姿を現すと同時にライトスコープが発砲しヌーベルファッジが突撃してきた。

忽ち激しい戦闘が行われる。ライトスコープに対してヌーベルファッジは数は少ないが、今までのファッジに比べて攻撃力も防御力も、速度も何もかも今までのファッジを大きく上回っていた。複数人で当たって漸く何とか対応できると言った感じだ。

周りが激しい戦闘を始めたのを合図に、デйна達も一気に前に出た。

「門守君、あの仮面ライダー達は俺達に任せろ！」

「あんた達2人は社長を止めに行きなさい」

「分かった」

「ありがとうございます！」

ステイクの相手を2人のスコープが、サクリスの相手をヘテロが請け負い、デйнаとルーナに雄成の後を追わせた。ニュージェネレーションフォームとなったデйнаであれば、ハザード4のカラミティであつても勝つ事はできるが相手は雄成、どんな隠し玉を持っているか分からない。もしもと言う時の事を考え、彼を最も効率的にサポートできるだろうルーナの存在は必要だった。

「させると思うのかよ！」

「プロフェッサー……父さんの邪魔はさせない」

雄成の後を追うデイナとルーナの前に、ステイクとサクリスが立ちはだかろうとする。だがそれを、先に読んでいたヘテロとスコープ1号が遮った。

「アンタの相手は私よ！」

「門守君達の邪魔はさせない！ 小早川！ 雑魚共は任せた！」

「了解！」

ステイクをスコープ1号が、サクリスをヘテロが妨害したことで、デイナとルーナの2人は先へと進むことが出来た。

道中、エレベーターホールに出てきたのとは別のヌーベルファツジや、保安警察の隊員が変異したヴェロキラプトルファツジが2人の行く手を遮ろうとするがそいつらは一瞬で倒されていく。最早障害にはなる事もなく、蹴散らされるがままであった。

妨害を蹴散らしながら2人が雄成の後を追っていき、辿り着いたのは幾つものシリンダーが並んだ広い空間だった。シリンダーの殆どは中に液体が満たされているだけだが、中にはベクターカートリッジが浮いているものもある。ここはこの研究所でベクターカートリッジを作り出している部屋らしい。

その部屋の奥、コンソールなどが置かれた少し開けた場所に雄成は居た。

「デイン達に背を向けてコンソールを操作していた雄成は、2人が背後に来たのを感じ取ると最後にエンターキーを押して椅子を回して2人と向き合った。

「……残念だったね。今、最後の調整が終わった」

「え!？」

「レトロウイルスの培養は完了し、ミサイルの発射体制は整った。時間が来れば全てのミサイルは世界各地に向け発射され、世界中の人間を感染させ新人類への進化を促すことになる」

「間に合わなかった……一瞬亜矢の頭に絶望が広がりそうになるが、真矢はまだ諦めておらず希望を失わなかった。

「まだ発射まで時間はあるってことは、今なら止める余地があるって事でしょー!」

「間違いではない。止められるのなら、ね?」

〈NEWBONE + ORGANISM Pioneer. An incarnation of unleashed disaster. No one can stop it anymore.〉

止めようとするルーナに対し、雄成はカラミティドライバーを装着しベクターカートリッジを装填する。そしていざ変身しようとした雄成だったが、そこで黙っていたデインが話し掛けた。

「ねえ、雄成さん。あんた、本当は何がしたいの？」

「何？」

「全人類を強制的に進化させて、雄成さんは一体何がしたいの？ 新人類ならもうここに居る。新人類が見たいなら、俺達を狙えばいいだけの話だ。なのに雄成さんは、世界中の人間を進化させようとしている。アデニン……あんたの息子だつていう勇夫の言葉を信じるなら、あんたは新人類が支配する世界に作り替えようとしている。それは何故？」

「何度も言うが、仁と雄成は同類だ。故に仁は雄成の考えを概ね理解しているし、そこにどんな狙いがあるかは大体理解しているのだが、そこだけがどうしてもわからなかった。世界を新人類が支配するものに作り替える事には、単純な知識欲が絡んでいるとは思えないのだ。」

それを見抜いた仁に、雄成は今までに見せたことのない暗い笑みを浮かべた。

「ふ、ふっ、はははっ……そこまで気付いてしまうか。流石私と白上が認めた男だよ君は」
雄成は手元のコンソールを操作し、近くのモニターに一つの映像を映し出した。その映像に映っているのは、何かのカプセルに入った妙齢の女性である。冷凍保存でもされているのか、血色はないに等しく毛髪も薄くすら凍っているように見えた。

2人がモニターに映る凍った女性を見ると、雄成がその女性を見ながら愛おしそうに

言った。

「恵里……私の妻だ。もう十年以上も前に死んだがね」

「十年以上も前に、死んだ？」

「……超万能細胞を使って蘇らせるつもり？」

確かに超万能細胞には、驚異的な再生力がある。希美にもその能力の一部が突出した形で備わっている為、心臓を破壊されても蘇生する事が出来た。だがそれは希美の様に無茶苦茶な改造をした結果得られた副産物の様なもので、仁や亜矢が同じ目に遭えば死は免れない。この恵里に至っては、改造前に死んでいるのだから蘇る確率は絶望的だろう。

それでも雄成はやるつもりだった。

「ああ、そうだと。新人類に覚醒させ適切に治療を施せば、恵里は再び蘇る。私が蘇らせる——！」

「……雄成さん。あんたが世界を変えようとしてるのは、新人類に進化した奥さんが生きて行きやすい世界を作る為だったって事？」

デイナの予想は概ね当たっていた。出来るかどうかはともかくとして、本当に雄成の妻である恵里が新人類に覚醒して蘇った場合、その後の彼女に待っているのは人間とは違う時間を生きる孤独な人生。例えば雄成も一緒に覚醒したとしても、悪意を持つ者は2

人を貴重なサンプルとして狙い続けるだろう。

仁はその困難を受け入れ、それら全てと戦う覚悟で世界を変える事無く新人類として亜矢と共に生きる事を決めた。それに対して、雄成は真逆の選択をしたのだ。

即ち、世界を新人類に生き易い世界に変え脅威を取り除くと言う選択を。

「そんな!?! いくら何でもそんなの!?! 多くの人を犠牲にするやり方が正しい訳ありません! それに数少ない進化できる人たちだって、そんなこと望んでいる人は居ませんよ!」

「そうだ、誰も望んではない! だからこそ変えねばならんだ! そうでなければ、恵里の死が無駄になってしまう!!」

必死に雄成を否定するルーナだったが、雄成は揺るがない。彼は意地でも世界を新しいものに作り替えるつもりだった。

今の彼を止めるには、力尽くでやるしか方法はない。

「させないよ、そんな事」

「あなたは私達が止めます!」

「別に理解されようなどとは思っていないさ。止めなければ力尽くで来るがいい。それが、生存競争と言うものだ……変身!」

〈Biohazard〉

ハザード4のカラミティに変身した雄成は、まず最初にマントからハザード3のカラミティを生み出しそれをルーナに差し向けた。邪魔はさせないと言うつもりだろう。

だがそれをデイナが許す筈もなく、マフラーを伸ばすとそれを液化化する前のハザード3カラミティに巻き付け自分の方に引つ張った。

「お前が厄介なんだよ。つて事で、さっさと潰させてもらおう」

〈A T P B u r s t 〉

デイナのアポトーシスフイニツシユは、攻撃を直撃させた相手の遺伝子を瞬間的に支配できる能力を持つ。リリイとレックスの2人の傷を瞬時に癒せたのもこの為だ。

瞬時に相手の細胞を癒す事が出来るのなら、逆に瞬時に相手の細胞——ただし超万能細胞に限る——を瞬時に死滅させることも可能だった。

結果、デイナのアポトーシスフイニツシユで蹴り飛ばされたハザード3カラミティは液化化しつつあった細胞も一気に死滅して朽ちてしまった。

今までデイナ相手にも圧倒的強さを誇ったハザード3カラミティが瞬殺された事に、カラミティは仮面の奥で歯を噛みしめる。だが何時までも悔しがつている余裕はなかった。

何故ならデイナがハザード3カラミティを始末している間に、ルーナが接近していたからだ。

「ハアッ！」

ルーナは銃剣でカラミティに攻撃を仕掛け、カラミティはそれを腕で防ぐ。元のスペックに差があるのでルーナの攻撃はあっさり防がれてしまうが、彼女は尚もカラミティの周囲を動き回り次々と攻撃を加えていく。

流星のカラミティもそれには反応が追いつかず、焦れた彼はマントを薙ぎ払ってルーナを引き剥がそうとした。

「くっ!？」

「それを待ってたわ！」

切断能力を持たせ周囲を薙ぎ払うカラミティ。振り回されたマントはあらゆるものを切断し、近くにあったシリンドラーも切り裂き内部の溶液が零れ落ちる。ルーナはそれを見て素早い身のこなしでカラミティから離れると、天井に向けて発砲した。

彼女が撃つたのは天井に張り巡らされたケーブル。この天井は上に板がなく、照明の間をむき出しのケーブルが行き交っていた。

ルーナはそれを銃で撃ち切断したのだ。

切断されたケーブルは支えを失い床に落下してくる。そのケーブルはどうやら電力ケーブルだったようで、切断面からは電気がスパークを起こして火花が散っていた。

それが溶液で濡れた床に落下してくる。零れ落ちた溶液に触れているのは、度重なる

ルーナの攻撃で足止めをされていたカラミティただ一人。

そのカラミティが触れている溶液に、ケーブルの切断面が触れた。

「ぐおああああああ!?!」

瞬間、強烈な電流が溶液を伝ってカラミティを脳天まで貫いた。以前カラミティはエレクトルとなったデイナの放電を吸収したことがあったが、今回の電流はそんなレベルではない。何の為かは分からないが、施設の何かを維持する為の膨大な電力が襲い掛かったのだ。その威力はハザード4とは言えカラミティでも受け止めきれぬ許容量を超えていた。

とは言え、カラミティもこの程度で倒れるほど柔ではない。

「くうっ!」

デイナも大概だが、カラミティだって耐性を付ける速度は負けてはいない。電撃に対して耐性を持ち、それどころか吸収して自らに電撃を纏いながらルーナに反撃を仕掛ける。

電撃を纏って放たれた拳を、ルーナは腕をクロスさせて防ぐ。打撃の衝撃は何とか受け止められたが、それ以上にカラミティが纏った電撃がルーナを苦しめる。

「うあああつ?! い、つう……この!」

「亜矢さん、大丈夫?」

「はいー……反撃はここからよー」

電撃に痺れ後ろに殴り飛ばされたルーナだったが、即座に体勢を立て直すと隣にやって来たデイナと共に再びカラミティに立ち向かう。

迫る2人の仮面ライダーの前に、カラミティはマントを体の前に広げる事で2人から自分の姿を隠す。その程度で防げる訳がないとそのままマントを蹴る2人だったが、足裏から返って来たのは鋼鉄の壁を蹴ったかのような硬い感触だった。

「硬ッ!?!」

「マズイ!」

硬さに驚くルーナに対し、デイナは次に起こる事に即座に気付きその場から離れようとした。だが一步遅く、マントの陰から出てきたカラミティの回し蹴りに2人纏めて蹴り飛ばされた。

「ぐっ!?!」

「きやあつ!?!」

「ふふっ……」

蹴り飛ばされ機材に叩き付けられたデイナとルーナ。デイナは痛みを堪えて立ち上がる。拳を握り締めて再びカラミティに挑みかかる。飛び掛かりながらの回し蹴りに、しかしカラミティはまたしてもマントを用いてデイナの攻撃を防いだ。

その時のマントの動きは、明らかにカラミティが動くよりも先に動いているようにルーナには見えた。マントがただの装飾ではなく、カラミティの体の一部であるという証拠だ。つまりカラミティには、自在に動かせる腕が増えた状態なのである。

「く、はっ」

「ぬ、おおー！」

「ぐっ……」

自在に動くマントがダイナの攻撃を防ぎ、自由な両手が攻撃を防がれ無防備となったダイナに突き刺さる。幸いな事にダイナは自身の体を防御に特化したものに変化させた為、カラミティの攻撃の衝撃は殆ど無力化されたのでダメージはないに等しい。しかしこれではカラミティに有効打を与える事が出来ない。

そして今のダイナにはあまり時間がなかった。このままカラミティの相手に気を取られていては、ミサイルの発射を阻止する事が出来ない。

その焦りが僅かに滲み出ていたのか、ダイナの動きが一瞬鈍った。

「そこだー！」

「あ——」

カラミティはその隙を見逃さず、ダイナの両手を蹴り上げ防御を崩すと無防備な彼の腹にマントを巻き付け硬さと鋭さを増した腕を突き刺そうとした。

「仁くん!!」

鋭い一撃がデイナを貫こうとした瞬間、横から飛んできたルーナがカラミティの腕を蹴り飛ばし軌道を変えさせた。カラミティの一撃はデイナの背後の機材を粉碎するに留め、デイナ自身には掠った程度のダメージしか与えられなかった。

今度はカラミティが隙を晒した。デイナはお返しとばかりにマフラーを硬化化させカラミティに叩き付ける事で押し返し距離を離させる。

「ぐおっ!!」

「ありがとう亜矢さん、助かったよ」

「まだまだ、これからよ!」

2人は体勢を立て直すと、同時に駆け出しカラミティに殴りかかる。何度同じ事をしても無駄と、カラミティは再びマントで2人の攻撃を防ぎ反撃を繰り出そうとした。

だがカラミティが反撃を繰り出す前に、デイナがマントの縁を掴んで乗り越えると今正に反撃を放とうとしていたカラミティを殴りつけた。

「ぐあっ!!? 何ッ!!?」

「私を忘れないでよね!」

「ぶっふっ?!」

デイナの反応に驚いていると、今度はルーナからの攻撃だ。デイナの攻撃に気を取ら

れている隙に、別方向から迫るルーナに気付くのが遅れた。

下方からの突き上げるような蹴りにカラミティの体勢が崩される。

そこからはデйнаとルーナのターンだった。

「はっ」

「ヤッ！」

「ふっ」

「セイツ！」

入れ違い互い違いに、時には手を取り合い、そして時には互いを足場にして変則的な攻撃を繰り出すデйнаとルーナにカラミティは防戦一方となる。マントを使つての防御も、デйнаの先読みにより潰され意味がない。

「ぐうっ!? く、おのれえ……」

「これで決める。亜矢さん、真矢さん」

「はい！………任せて！」

〈ATP Burst〉

「させるか——！」

〈ATP Full blast〉

デйнаとルーナがカラミティに向けてアポトシスファイニッシュとノックアウトク

ラッシュを放つと、遅れてカラミティもデッドエンドクラッシュを放った。

「はああああああつ!!」

「ぜあああああつ!!」

2人の攻撃とカラミティの一撃がぶつかり合い、火花を散らす。その火花は近くのシンダーを破壊し、床をひっくり返すほどの衝撃となる。

「ぐぐ、ぐぐぐううつ!」

2人を相手に拮抗してみせるカラミティだったが、彼の執念がなせる一撃もそこが限界だった。

押し負けたカラミティが2人の攻撃を喰らい、そのまま壁に向けて蹴り飛ばされる。

「ハアアアツ!!」

「ぐああああああつ?!」

カラミティが壁に叩き付けられるまで蹴りを止めなかった2人により、カラミティは壁を突き破り隣の部屋の部屋に押し出された。どこはどうやらベクターカートリッジの倉庫だったらしく、壁には一面に敷き詰めるようにベクターカートリッジが設置されている。

攻撃を終えた2人はそのままカラミティを足場に飛び退ると、改めて辺りを見渡しそこにある無数のベクターカートリッジに目を奪われた。

「ベクターカートリッジがこんなに……」

「商売道具にでもするつもりだったのかな。何にしても、もう終わりだけだね」

「デイナの視線の先で、カラミティが何とか立ち上がるがその腰にあるカラミティドライバーが火花を上げて吹き飛んだ。今の2人の一撃で耐久力の限界を迎えたらしい。ドライバーがなくなつたので、必然的に雄成も元の姿に戻る。流石に自分に隠蔽装置を仕込んだりはしていないのか、変身が強制的に解除されたからと言つて体が燃えるようなことにはなっていない。」

「勝負ありだね、雄成さん。ミサイル、止めてもらおうよ」

「あとは勇夫達を倒し、ヌーベルファツジや保安警察を倒してしまえば彼に戦力は無くなる。これ以上戦えなくなれば、雄成も凶行を諦めざるを得ない筈だった。」

「しかし雄成から返ってきたのは、降伏を示す言葉ではなく小さな笑い声であった。」

「ふ、ふ、ふ、ふ……勝負ありだと？ 違うな、違うよ門守 仁君。それは間違いだ」

「雄成は足を引きずりながらどこかへと向かう。彼が向かう先をデイナが視線で追うと、そこにあるのは一つのコンソールだった。周囲にベクターカートリッジが保管されている中で、そのコンソールだけがぼつんと寂しく置かれている。」

「生命の中に諦めると言う言葉はない。諦めないから生命は、人類はここまでこれなのだ。生きようと、未来を掴もうと足掻くのは全ての生物に共通した行動だよ」

コンソールに辿り着いた雄成は、しがみ付く様にしてキーボードを叩く。何をするつもりなのかは分からないが、このまま放置していい事があるとも思えないのでルーナはリプレッサーショットIIを雄成に向けて手を上げるよう警告した。

「待つてください！ 一体何をするつもりなんですか？ 大人しく手を上げて——」
「私はまだ諦めない!!」

ルーナの警告を遮るようにして、雄成はキーボードを叩くのを止めると懐から銃の様なものを取り出し2人に向けた。一瞬ベクターリーダーかと思ったが、よく見るとそれは違った。彼の手の中にあつたのは、拳銃のような形をした注射器だ。装填されているシリンドラーの中には、薄緑色の液体が満たされている。

その中身が何なのか、デイナにはすぐに分かった。

「あれ、まさかレトロウイルス?」

「ッ!? 自分に使つて新人類に進化するつもりですか!？」

止める間もなく雄成は自分に注射器を使い、中のレトロウイルスが入った溶液を自身に注入した。瞬間、雄成の目は血走り、体を押さえて苦しみだした。

「うぐうっ!? おお、おおおおッ!? ぐうっ!」

苦しみながらも雄成は再びコンソールと向き合い、キーボードに何かを入力した。すると突然周囲のベクターカートリッジが一斉に起動状態になり、天井へと吸い上げられ

るように移動していく。

〈DOG〉〈CAT〉〈HAWK〉〈WHALE〉〈SPIDER〉〈RAT〉〈SQUID〉
 〈SEA URCHIN〉〈LION〉〈MANTIS〉〈PIRANHA〉〈RINO〉〈S
 NAKE〉〈HEDGEGHOG〉〈SHARK〉〈T—REX〉〈TRICERATOPS〉

天井へと移動したベクターカートリッジはどこへ運ばれるのかとデイナが行く先を追っていたら、それは天井に沿って部屋の中央の間上へと移動していくのが分かった。

そう、雄成の間上へと――

「ッ!? 駄目だ雄成さん!」

彼が何をするつもりなのかに気付いたデイナが制止の声を上げるが、雄成はその場から動かない。

そして次の瞬間、雄成の頭上から次々と起動状態のベクターカートリッジが降り注ぎ直挿しと言う形で次々と雄成の体の中へと入っていく。

「うぐううううおおおおおおおOoooooooooAaaaaaaa
 !!?!」

「じ、仁君あれどうなるの!」

「無茶だ雄成さん! 1人の人間の中にそんなに沢山の遺伝子を入れたって、体がパン

クするだけだ!？」

「ごぼああがあああああががががぎぎぎぎぎぎいががあああああ——!!!」

デイナの言葉を肯定する様に、ベクターカートリッジが入るにつれて雄成の体が膨れ上がり元の姿を失っていく。

そして遂に、その時が来た。

「くっ、目を瞑って!」

「え?」

デイナは咄嗟にマフラーを使ってルーナの視界を遮る。彼がマフラーを広げた直後、限界まで膨れ上がった雄成の体が、風船のように弾けて部屋の中に夥しい血をまき散らした。後に残ったのは、残り少ない血を噴き出す醜い肉塊だけ。

マフラーが下ろされそれを目にしたルーナは、凄惨な光景に胃の奥から何かが入り込んでくるのを感じずにはいられなかった。

「うっ!?! じ、仁くん……あれは?」

「いくら何でも無茶にも程があるよ。体が急激な変化に耐えられなくて破裂しちゃったんだ」

「そこまでして……」

「負けたくは、無かったんだろぅね」

その執念は大したものだが、同時に憐れでもあった。きつと普段の、正常な判断力を持った雄成であればこんなことはするまい。追い詰められたが故の、誤った判断が彼を殺したのだ。

「デイナは、敵だと言うのに道を、判断を違えた彼を見て何だか物悲しくなった。こんな結末など……」

「と、とりあえず戻りましょう。権藤さん達の事も心配ですし、ミサイルも止めないと」「ん……そうだね」

落ち込むデイナを見て、ルーナが彼を元気づけようと話し掛ける。実際、まだミサイル発射が止まったわけではないので時間にはあまり余裕はない。ここで落ち込んでいる暇はデイナにはなかった。

踵を返し、先程の部屋に戻り何かできる事はないか探そうとするデイナだったが、その彼の耳に奇妙な声が聞こえてきた。

「——ギャア」

「——ん？」

「仁くん？……どうかしたの？」

「いや、今何か聞こえたような……」

一瞬だったので確証はないが、それでも何か聞こえたときデイナは振り返った。

その瞬間、再び同じ声が今度は先程よりも大きく聞こえてきた。

「——オギャア！」

「ツ！ やっぱり！」

「私にも聞こえました！……でも、今のつて……赤ん坊の、泣き声？」

今度はルーナの耳にも聞こえた。それは確かに赤ん坊の泣き声だ。だがこんなところで、一体どこから？

その答えは、先程雄成が居た場所を見てすぐに分かった。

「オギャア!!」

「え？」

「あれつて……何で、あんなところに？」

赤ん坊が居る場所は、先程雄成が弾けて残った肉塊の中。ぐちゃぐちゃのミンチの中から這い出るように歯も生えていない赤ん坊が出てきた。

あまりにも異様な光景に2人が言葉を失っていると、赤ん坊を見ていたデイナがある事に気付いた。

「あれ？」

「どうしたんです？」

「あの赤ん坊……さつきよりも大きくなってるようなの？」

「え?」

2人が見ている前で、赤ん坊は一回り大きくなっていた。いや、一回りどころではない。赤ん坊が一泣きする度に大きさはどんどん増していき、赤ん坊から幼児。幼児から少年、青年、成人へとどんどん成長していく。さらに成長するにつれてその顔立ちは先程の雄成に近くなっていき、それだけでなく何も身に着けていなかった体がデйна達仮面ライダーの装甲の様な甲殻で覆われていく。

そして遂に――

「お。お。お。お。……はああああああ……」

そこには顔以外を甲殻で覆われた雄成の姿があった。白い体の上に黒い甲殻を身に纏ったその姿は、人間でも仮面ライダーでも、ファッジですらない。

その雄成の姿を見て、デйнаは震える声で呟いた。

「超越、したのか?」

「超越?」

「そうとしか言えない。今の雄成さんは、この地球上の全ての生物の遺伝子を一度に内包した状態だ。でも本来、そんな事出来る訳がない。遺伝子同士が競合して、無駄が増えてその無駄が体を破壊する……その筈なのに……」

それは偏に、雄成が自身に打ち込んだレトロウイルスの効果だった。レトロウイルス

により体が変異しきる前に一斉に様々な遺伝子が流れ込んだことで、雄成の体は急激に変化を始めた。細胞の大部分はその変異に耐えきれず異常分裂の末に生命活動を終えてしまった。

だがその中でごく僅かに、その変異に耐えきった細胞があった。変異と遺伝子の流入が奇跡的に絡み合い、滅びる事無く強靱な遺伝子を持つ細胞として生まれ変わったのだ。

そしてその細胞を基に、雄成はここに再び誕生した。それは正しく、自身を燃やしてその灰の中から雛として蘇る不死鳥の様。

それを現すかのように、再び立ち上がった雄成はその背に鳥の様な翼を広げた。

舞い散る羽根を見て、デイナがポツリと呟く。

「あれは、そう……言うなれば、超越生命体……」

「人間とも、ファツジとも、新人類とも違う新たな生命、ですか？」

「……うん」

「——うおおおおおおおつ！！！！」

全ての遺伝子を従え蘇った、その名も超越生命体・雄成。

それは正しく。パンドラの箱から飛び出た災厄の全てを内包した、世界に災いをまき散らす悪夢のような存在の誕生であった。

担
対して、挑むデイナはパンドラの箱の奥に残されていた希望を掴み生まれた新時代の
担
手。

世界の命運を賭けた、希望と災厄の戦いが今始まろうとしていた。

第65話：生存競争

時は少し遡り――

「ハアッ！」

「オラアッ！」

ヘテロはサクリスと戦いながら、研究所の奥へと戦いの場所を移していた。素早く動く上に姿を消すサクリスの相手をしていると自然と動いてしまったというのものもあるが、最大の理由は別にあつた。

それは彼女が扱う武器だ。テイルバスターはそれ自体が大きい上に、銃撃モードでは攻撃範囲の大きい炸裂弾を使用している。周りに味方が入り乱れる乱戦状態で使えば敵だけでなく味方まで巻き込んでしまう。故に戦いの場所を変える必要があつたのだ。ヘテロとサクリスはテイルバスターと銃剣モードのベクターリーダーで切り結び合う。

「そうら、よー！」

「ぐうっ!？」

戦いの中で、ヘテロはサクリスに違和感を覚えていた。以前本社ビルで戦った時より

も明らかに強くなっている。戦い方は完全に力任せなのだが、その力が以前とは比べ物にならないくらい上がっているのだ。今の一撃だって、以前なら十分に防げるはずの一撃だった。

救いなのはサクリスには技術もへったくれもない事だろうか。完全にサクリスのスペック頼みの戦いで、力を活かしきれているとは言い難い。

「いつつ……シトシン、アンタあの後体弄った？」

ライダーシステムの方に手を加えたことも考えたが、雄成がやるならライダーシステムの改造より人体改造の方が可能性が高かった。シトシンは既に多少なりとも手を加えられているし。

「へへ、気付いたか？ そうさ、あの後お前を徹底的にぶちのめす為にプロフェッサーに再改造してもらったのさ。つつつてもやったのは例のレトロウイルスの試作品を打っただけだな」

「……って事はアンタ、今新人類になってるの!？」

「そう言う事だ！ 不完全なお前とは違う、正しい新人類だ！」

シトシンが本当の新人類かどうかは別として、厄介な事になったのは変わりが無いとヘテロは仮面の奥で苦虫を噛み潰したような顔をした。

今のシトシンは言ってしまうえば廉価版の仁みたいなものだ。仁であれなのだから、促

成栽培の様な感じで体を作り替えられたとはいえ今のシトシン——サクリスはかなり危険な相手と言えた。

どう攻略したものかとヘテロが悩んでいると、サクリスがベクターリーダーで斬りかかって来る。それをヘテロはテイルバスターで受け止める。

「無駄あつ！」

しかしサクリスは先程よりも更に力を込めて銃剣を振るつた。その結果、テイルバスターは弾き飛ばされヘテロの手から離れていき、離れた所へと落ちた。

無防備となったヘテロの胴体を、サクリスは腰の付け根から生えたネズミの尾で薙ぎ払った。

「ぐうっ!？」

「逃がすかよー！」

殴り飛ばされ壁に叩き付けられるヘテロに、サクリスは脚力を活かして一瞬で接近すると一番柔らかい腹に銃剣を突き刺し壁に磔にした。

「があっ?!」

「へへへっ！」

〈ATP Full blast〉

「死ねよ！」

右手のネズミの頭を横した籠手の口が開き、ヘテロの左肩に食らいつく。万力を遙かに超える力と鋭い牙がヘテロの右肩の装甲を噛み砕きその下の肉を食い千切る。

「あああああああつ?!」

「フーン！」

「ぎあつ?!」

左肩を大きく抉り取られ悲鳴を上げるヘテロに構わずサクリスは彼女の腹に刺さった銃剣を引き抜く。曲がりなりにも自分を支えていたものが無くなり、その場に崩れ落ちそうになったヘテロだがサクリスは彼女が倒れる事を許さない。

尻尾で倒れそうになった彼女を掴むと床と壁に叩き付け、そのまま遠くに放り投げた。

「がはっ?! あぐ、うう………」

左肩を食い千切られた上にあっちこっちに体を叩き付けられ、ヘテロは満身創痍となった。防御力が自慢のヘテロだったが、耐えられるダメージにも限界はある。今のサクリスの攻撃力はヘテロの防御力を上回っていた。

「く……うぐつ?! うう……ああ………」

ヘテロは右腕だけを使って何とか立ち上がる。左肩を食い千切られたからか、左腕が全く動かない。出血も酷く、意識が朦朧としてきた。ちよつとでも気を抜くと意識が飛

「はっはっはっはっはっ！」

血を吐きながら悲鳴を上げるヘテロの姿が面白いのかサクリスが高笑いする。そのままサクリスはヘテロの腹に銃撃し続け、銃弾が撃ち込まれる度に彼女の口からは悲鳴と血が同時に吐き出された。

目を覆いたくなるような光景。サクリスが銃撃を止めた時には、ヘテロは悲鳴一つ上げず首を掴まれて吊り下げられるだけとなっていた。

「んん？　死んだか？」

まだ変身は解除されていないが、サクリスが銃のグリップで彼女の頭を小突いても何の反応も返ってこない。口元と肩、腹の傷口からは夥しい血が零れ落ち足元には血の海が広がっていた。

何の反応もしないことにサクリスはつまらなそうに溜め息を吐き明後日の方に目を向けた。

「ちっ、つまらねえ。頑丈なだけ取り柄だった筈なのにもう壊れたのか」

ヘテロを貶すサクリスだったが、彼は気付いていなかった。自由に動く彼女の右手がそつとサクリスの左腰のホルスターに伸びている事に。

そして――

「あ……」

「ん?」

「アンタって、本当に……馬鹿よね」

一瞬の隙をついてサクリスの腰からホルスター剣を引き抜くと、それを先程のお返しとばかりにサクリスの脇腹に突き刺した。ホルスター剣はどちらかと言うと取り回しに優れている。この至近距離でも、サクリスの防御力なら貫いて脇腹を貫くことも可能だった。

「ぐあああつ?!」

脇腹を貫かれた事に、サクリスは怯みベクターリーダーを落とすヘテロの首からも手を離れた。解放されたヘテロはそのままサクリスを押し返し、ブレイドライバーに手を伸ばした。

〈HORSESHOE Burst〉

「んのおつ!!」

「がああつ?!」

押し返され体勢を崩しながらも、脇腹に刺さったホルスター剣を引き抜こうとするサクリスにトーンインパクトが突き刺さる。胸部装甲を大きく傷つけられ、壁に叩き付けられたサクリスはそれでも尚気合でホルスター剣を引き抜くとレセプターズロットルを引いた。

「デ、デメエツ!？」

〈ATP Full blast〉

生み出されたエネルギーがホルスター剣に集まり、サクリスが剣を振るうと光の斬撃となつてヘテロに飛んだ。

迫る光の刃。ヘテロはそれを避ける事無く、次の必殺技で受け止めた。

〈TURBLE Burst〉

「くっ!!」

光の刃とシエルブレイカーがぶつかり合う。受け止めているヘテロの甲羅が徐々にひび割れ始めたが、完全に砕ける前にヘテロが軸をずらして攻撃の軌道を逸らし明後日の方へと受け流した。

「何ッ!？」

「まだまだ——!」

〈CROCODILE Burst〉

続いて放たれたバイトクラッシュ。両足をワニの口のように開きサクリスを噛み砕こうと迫る。サクリスはそれを落としたベクターリーダーを拾い上げて放つ銃撃で迎え撃つが、銃弾よりもヘテロの両足の方が強いのか弾かれた。

そしてそのままサクリスに迫ったヘテロは、両足でサクリスを挟み締め付けながら何

度も床に叩き付けた。

「あがつ!? ぎあつ!? ぐ、あ、止め——?!」

制止の声も聞かず何度も床に叩き付け、最後に放り投げる。放り投げられたサクリスはヘテロに負けないほどの満身創痕となりながら、このまま負けてなるものかと立ち上がった。

「テメエ……殺す! 絶対、殺す! あのカキ共もだ! 死んだお前を見せつけて男のカキの前で女のカキを弄んでから殺してやる!!」

〈ATP Full blast〉

怒りに任せて殺意を口走るサクリスだったが、彼は言っただけでいいけないことを言っただけで済んだ。今のヘテロの前でリリイとレックスを害する事を口にする。それはヘテロの脳内のリミッターを外す事に繋がった。端的に言えば、今のサクリスの一言でヘテロもキレた。

「——させるかクズがあああつ!!」

〈HORSESHOE × TURTLE × CROCODILE Mixing Burst〉

サクリスがデッドエンドアタックを放つよりも早くに、ヘテロがインクリュード・シユートを放つ。ワンテンポ遅れてサクリスが放ったデッドエンドアタックと、ヘテロ

の必殺技がぶつかり合う。

勝負は一瞬で決した。ただの飛び蹴りのデッドエンドアタックに対し、インクリュード・シユートは連続蹴り。何度も放たれる蹴りがサクリスの飛び蹴りを正面から砕き、その勢いを殺さず続いて放たれる蹴りが次々とサクリスの体に突き刺さる。

「うぐお、がああああああああつ?!」

「ああああああああああつ!!」

ヘテロの連続蹴りは廊下の端に届くまで続いた。その間サクリスは徹底的に蹴られ続け、両足、両腕、腰から胸部装甲まで体の全てを粉々に砕かれた。その威力はサクリスの中に存在する超万能細胞の回復力を上回り、蹴りと同時に放たれたエネルギーがサクリスの細胞を全て焼き尽くす。

「あああああああああああつ!!」

トドメの一発を叩き込むと同時に、サクリスは壁に叩き付けられる。必殺技を放ち終えたヘテロが床に着地すると、それに合わせたようにサクリスが前のめりに倒れた。その全身からは明らかに危険な火花が上がっている。

「はあ、はあ、はあ……」

「そ、そんな……馬鹿な。俺、俺が……あんな奴に、負ける? 死ぬのか? 俺が?」

「そう言う事よ。安心しなさい。そう遠くない内に私もアンタと同じところに行つてあ

げるから。向こうであつたら、今度は素手でぶん殴つてやるから楽しみにしてなさい」
「くそおとおおつ!!」 あああああああああつ!!?」

断末魔の叫びを上げながら爆散するサクリス。彼が木端微塵に吹き飛んだ後には、残骸以外何も残っていない。あれでは再生は絶対にしないだろう。

「はあ、はあ……………。ざまあ……………見、ろ」

サクリスを倒した事を確認すると、ヘテロはその場に崩れ落ち同時に変身が解除される。

本当はこのままスコープ達の援護に向かいたかったが、生憎ともう指一本動かさない。残念だがここまでだ。

「ごめん、皆……………。後は、任せた……………」

せめて仲間たちの勝利を願いつつ、倒れた希美はそのまま意識をゆっくりと手放していった。

エレベーターホール近くでは依然としてS・B・C・Tとステイク率いるヌーベルファツジとヴェロキラプトルフアツジの混成軍団との戦いが行われていた。

ライトスコープとヴェロキラプトルフアツジが行う銃撃戦の中を突っ切つて接近してくるヌーベルファツジ。迫るヌーベルファツジが爪や牙、尾で攻撃してくるのをライトスコープ達は互いにカバーし合いながら迎え撃つ。

「ぬあああああつ！」

「くうううつ！」

その戦いの間を縫うようにしながら、スコープ1号とステイクが激しい戦闘を行っていた。

スコープ1号の振り下ろすボルテックスブレードを、ステイクはホルスター剣で受け止める。

鏢競り合いになりどちらも足を踏ん張り退く気配を見せない。

至近距離で睨み合いになる中、スコープ1号はどうしても気になっていた事を口にした。

「一つ聞かせろ」

「何だ？」

「お前は本当に傘木 雄成と血縁関係があるのか？」

傘木社と敵対するに当たって、S・B・C・Tは当然雄成の身辺調査も行った。役所などで確認できる範囲ではあるが、調べた限りでは雄成には既に死亡した妻は居ても子供は存在しなかったのだ。

では、雄成の事を父と言う勇夫は一体何者なのか？

その問い掛けにサクリスは鼻を鳴らして答えた。

「ふん、そんな事か。簡単な話だ。俺は死んだ直後の母さんの腹の中から取り出されたんだ」

「何？ だがそれなら何かしら届け出が出てる筈じゃ……」

「出てる筈がない。医者は俺も母さんと共に死んだと判断したんだからな」

雄成の妻・恵里が死亡した時お腹の中には既に子供がいた。だが医者 of 診断では、母体の死亡と共にお腹の中の子供も帰らぬ人となる筈だったのだ。しかし雄成は諦める事をせず、恵里の死後身内で葬儀の為と遺体を引き取り、そして自分で遺体の腹を切開するとお腹の中の我が子を取り出した。

もう15年前の話だ。

「ちよつと待て、お前の今の姿と噛み合わないぞ。お前は どう見ても15歳じゃ………ッ！ まさか!？」

「そう、そのまさかだ。俺は、父さんと白上教授が見つけた超万能細胞のプロトタイプ、

その最初の被検体となったんだ」

遺体から取り出された時、勇夫は確かにまだ生きていた。だがそのままでは確実に死に行く儚い命だった。それを雄成は、低い可能性に賭けて超万能細胞のプロトタイプを注入することで生き永らえさせたのだ。

そこで雄成は希望を見出した。これを改良していけば、死んだ妻をも蘇らせる事が出来る。

それから雄成は表向きは白上教授と共に普通に超万能細胞の理論を固めるべく研究を進める傍ら、超万能細胞を死者蘇生に使えるよう独自に研究を重ね続けた。ファッジの技術はその副産物である。

だがそれも次第に限界が来た。資金と被検体の問題だ。

小さな研究室では出来る事に限界がある。それを察した雄成は司を引き込もうとして断られ、邪魔になると判断して始末すると白上教授とも袂を分かった。

その後は知つての通り、独自の企業傘木社を作り出し、巨大企業にまで成長させその資金と権力を使って超万能細胞の研究を続けていたのである。

「俺はその父さんのサポートをする為に調整を施された。成長を促進され、徹底した教育を受けた」

話しながらステーキはボルテックスブレードを弾くと、左手にドリルを作り出しそれ

でスコーパー1号の胸を突いた。スコーパー1号は胸部装甲を抉られ火花を散らしながら後ろに倒れる。

「うぐあつ!？」

倒れたスコーパー1号の腹を、ステイクは踏み付けドリルの先端を首元に突きつける。
「ぐうつ!？」 お、お前はそれでいいのか？ 人生を自分の父親に好きなように使われて。自分の思うように生きたいとは思わないのか!」

踏み付けられ武器を向けられ、絶体絶命の状況に追い込まれながらもスコーパー1号は語り掛ける事を止めなかった。彼からすればステイク——勇夫も雄成の被害者であり、父により人生を歪められた悲しい男に見えた。

しかしそれは第3者から見た客観的な考えに過ぎない。当の本人は違う考えを持っていた。

「俺は構わない。俺だって、母さんに会いたいんだ。お前に分かるか？ 生まれた時には母が死んでいて、一度も抱かれることなく見ていしかできないこの寂しさが」

「そ、それは……」

「俺はこの体にもらった事を父さんに感謝している。これで俺は、母さんを自分の手で蘇らせることが出来る。鳥の雛の様にただ口を開けて待っているだけではない、自分の力で求めるものを手に掴むことが出来るんだ。こんなに素晴らしい事があるか？」

それはもしかすると、雄成によつて都合よく刷り込まれた考えかもしれない。成長を促進され教育される過程で、都合よく動く様に洗脳された結果の可能性も大いにあった。

だがそれでも、勇夫は母を求めていた。求める母が手に入るならば、例え洗脳されていたとしても勇夫は満足だった。偽りであつても、そこにある使命感と先に待つ幸福は本物であるのだから。

「だから俺は世界を変える。父さんと共に世界を変え、母さんの温もりを手に入れる」
〈ATP Full blast〉

ステイクはスコーパー1号にトドメを刺すべく、レセプタースロットルを引き左手のドリルを突き刺そうと後ろに引いた。

「その為の障害は………消えろ！」

そして放たれるデッドエンドアタック。高速回転するドリルがスコーパー1号の首を抉ろうと迫つていった。

「———だとしてもだ！」

しかしそれを甘んじて受けるほど、スコーパー1号も諦めはよくはない。放たれた刺突に対し、彼はボルテックスシールドを斜めに構えて滑らせるようにして刺突を受け流した。

「何ッ!？」

必殺の一撃として放った刺突を受け流され、流石の彼も動揺し思考が一瞬停止する。そこにスコープ1号は畳みかけた。ガンマライフルの銃口を突き付け、至近距離からの銃撃を叩き込んだ。

「ぐあああああああつ?!」

ステイクの体は柔軟性と硬質さを併せ持った防御力に優れたライダーだが、それでもこの至近距離からの銃撃は無力化しきれぬものではない。しかも今ガンマライフルに装填されている銃弾は、度重なる戦闘のデータを使って新たに製作された最新鋭の物。ステイクが相手であつても十分な効果があつた。

堪らずステイクは足をどかし、スコープ1号から距離を取る。

自由の身になったスコープ1号は立ち上がると、シールドからキープレートを引き抜き裏返して再びシールドに装填した。

〈Vortex・Gun Starting〉

刀身が引つ込み代わりに銃身が伸びた盾を構え、ライフルと合わせて3つの銃口をステイクに向ける。銃口を向けられたステイクは反撃しようとはくターライダーを向けるが、彼が引き金を引くよりも早くにスコープ1号の3つの銃口が火を噴いた。

苛烈な弾幕がステイクに襲い掛かる。ステイクも銃撃を返すが、彼の銃撃はスコープ

1号の銃弾の嵐を前にかき消され押し流された。

「うぐつ?!」ぐ、お、あああああああつ?!」

無数の銃弾がステイクの装甲もアンダースーツも抉っていく。決して油断できる相手ではないのでスコープ1号はステイクを撃ち続けた。ステイクがベクターリーダーを落とし、その場に膝をついてもまだ撃ち続けた。

スコープ1号が銃撃を止めたのは、ガンマライフルもボルテックスガンも弾切れを起こした時だった。その時にはステイクは見る影もなく、全身がボロボロの状態で膝をついていた。それでも倒れないのは、執念によるものか。

「俺は……俺は、手に入れるんだ。父さんの、思い描く……栄光を。……母さんの、温もりを……」

「……母の愛を求める事に罪はない。だがな……」

〈Recognition〉

「ぐ、ぐう——!」

〈ATP Full blast〉

エンドクラッシュを発動するスコープ1号に対し、ステイクも迎え撃つべくデッドエンドアタックを発動した。

「……だからと言って何をしても許される訳じゃない。お前らは踏み越えてはならない

一線を越えた。それだけの話だ」

「~~~~~!!? あああああああつ!!」

正論に言い返すことが出来ず叫びながら技を放つステイクに、合わせるようにスコーパー1号が飛び蹴りを放った。

同時に放たれた飛び蹴り、しかしそれがどちらに軍配が上がるかは一目瞭然だ。ステイクの飛び蹴りには見るからに勢いがなく、大した威力が出る様には思えない。

案の定ステイクのデッドエンドアタックはスコーパー1号のエンドスマッシュと拮抗する事も出来ず、正面から蹴り碎かれて叩き付けられた。

「ぐ、うあ、ああ……」

ステイクは前のめりに倒れながら変身解除され、傷だらけの姿で床に倒れた。

倒れた勇夫を、スコーパー1号はあまり負担を掛けないように仰向けに寝かせた。

「か、母さん……母さん。一度で、一度でいいから……母さんに、抱きしめて、もらいたかった……」

勇夫には隠蔽装置が仕込まれていなかったらしく、変身解除に追い込まれたにも拘わらず体が燃え上がらない。

倒れた勇夫は、その場にいない母に向け手を伸ばし、そして力尽きたのかゆつくりと手を下ろしそのまま動かなくなった。

思えば勇夫も憐れな男だ。父により生き方を決められ、十分に人として学ぶべきことも学ぶことが出来ず罪だけを重ねて妄執を抱きながら死んでいった。

もつと他の生き方があつただろうに……………。

「……………はあ」

今更考えても仕方がない。スコープ1号は色々な思いが籠った溜め息を吐き、未だ戦闘を続けている部下の方に向かっていった。

そして時は戻り、超越生命体・雄成と対峙したデйнаとルーナ。

2人が見ている前で、雄成は変異した自分の新たな体を一通り見渡した後、顔を上げて2人の事を見た。

次の瞬間、雄成の姿が掻き消えたと思つたらルーナが殴り飛ばされ壁に叩き付けられた。

「あぐっ?!」

「ツ！ 亜矢さん！」

全く姿を捉える事が出来なかった事に驚きながらも、頭は冷静に雄成の危険性とすぐ近くに居る事に反撃を考え上段回し蹴りをお見舞いした。雄成は自分の顔を狙って飛んでくる回し蹴りを体を逸らすことで回避し、視線が外れた事で本来なら見る事が出来ない腹を狙った拳による連撃を空気の流れで感知し躲した。

立て続けに攻撃が躲された事……特に蹴りの後に放った拳が躲された事に息を飲みつつ、二度目の回避で完全に体勢が崩れた雄成にマフラーを伸ばし殴り飛ばす。

雄成が遠くに離れたのを見て、デイナは壁に叩き付けられたルーナの元へ駆け寄った。

「亜矢さん、大丈夫？」

「げほっ!? げほっ、げほげほっ!? ごほっ!? な、何が？」

「とんでもない瞬発力だ。今の雄成さんは地球上の全ての生物の能力を持つてると言ってもいいのかもしれない」

全ての生物の遺伝子を超越し、取り込んだ今の雄成を相手にすることは即ち何十億年と続いた地球の生物史と戦う事に等しい。

そんな奴が相手になったという事に、ルーナは仮面の奥で顔を青くせずにはいられなかった。

「亜矢さん、頼みがあるんだ」

「え？」

「すぐに白上教授達に、ミサイルの発射システムにアクセスして止めるように言っ
てほしい。その間に俺は雄成さんを倒すから」

カラミティを相手に勝利を収める事が出来たデイナだが、今の雄成はカラミティなど
比べ物にならない強さを有している。きつと、方向性は違えど能力的にはデイナと同等
かそれ以上かもしれない。それでもデイナに負けるつもりはなかったが、勝つ為には余
計な事を考えず戦う事に集中しなければならなかった。デイナの全能力を使わなけれ
ば、勝てる見込みがないほどの相手なのだ。

故に、ルーナに白上教授達の事を任せなければならなかった。

ルーナ——亜矢はそれを言われた時、一瞬反発しようとした。あんなのを相手に1人
で戦うなど無茶だと。相手が強いから、自分を傷つけないように遠ざけようと言うのか
と詰め寄ろうとした。

が、真矢がそれに待ったを掛けた。仁は自分達の事を信じてくれている。信じてくれ
ているからこそ、安心してミサイルの事を託し雄成との戦いに集中できるのだと。

そう言われては、亜矢としても領かない訳にはいかなかった。

「うん……分かりました。教授達には必ずこの事を伝えて、ミサイルを止めてもらいま

す。だから仁くんも、頑張ってください」

「ん………任せて」

2人は顔を近づけ、額をコツンとぶつけ合わせた。今キスする余裕はないから、これが代わりのスキンシップ。

最愛の相手との触れ合いを終わらせると、ルーナは先程開けた穴から出ていきデイナはこちらに歩いてくる雄成と改めて対峙した。

デイナに近づきながら、雄成はむき出しの顔に複眼と甲殻を作り出し顔を仮面の様に覆った。その姿は最早仮面ライダーである。

どちらも無言で相手に近づいていく。拳も握らない自然体でゆっくり歩き、正面から相対するその様子は戦おうとしているようには見えない。この後互いに気安く手を上げて挨拶しても違和感のない雰囲気である。

互いに相手に近づき、もう手を伸ばせば相手に触れられるという距離まで近づいた。

瞬間

「ッ！」

互いに目にも留まらぬ速度で拳を振り抜き、相手の顔を殴りつけた。

モンハナシャコと言うシャコの仲間は、目にも留まらぬ速度のパンチを繰り出せることとで有名だ。今2人が再現したのは、互いにそのモンハナシャコのパンチである。

モデルとなったそれを大きく上回る速度で互いに相手を殴り合った2人は、脳を揺さぶられながらもそのまま次の一手を出し合った。

「く、はっ」

デイナは手からクモの糸を出し、雄成の動きを絡め取ろうとした。まずは相手の動きを止めなければならぬ。

体に粘性・伸縮性の高い糸が付着し動きを止められる雄成だったが、彼は即座に脱皮をすることで拘束を逃れてしまう。

そしてお返しとばかりに電気ウナギの発電器官を作り出し、強烈な放電をデイナに向けて飛ばした。

雄成の細胞の動きを感じ取り放電が飛んでくると察したデイナは、ハイギョの能力を使って全身に粘膜を分泌。さらにその粘膜には絶縁性のある脂肪分を含ませることで、放電によるダメージを部屋の床に逃すことで防いだ。

自在に能力を生み出し対応する戦い方では一進一退、否、互いに頭が回る為即座に対応できてしまうから千日手となってしまう。これでは勝負がつかない。

「雄成さん、こんな戦いはつまらない。拳と拳で勝負しない？」

「……いいだろう」

このまま勝負のつかない戦いを続ける訳にはいかない。デイナは一か八か、雄成を肉

弾戦による戦いに誘った。雄成の側には戦い方を変える事に対するメリツトがないので乗って来るかは賭けだったが、思いの外あっさり雄成は誘いに乗って来た。

それは恐らく、肉弾戦でも負けない・勝てると言う自信の表れだろう。

そして実際、その雄成の自信は正しかった。

互いに拳を握り、拳と拳をぶつけ合うデイナと雄成。最初拮抗し互角かと思われたが、それは一瞬の事で雄成のパワーがデイナのそれを上回ったのか押し負けたデイナが拳ごと殴り飛ばされた。

「うぐあっ!？」

雄成の本気を出したパワーは凄まじく、今の一撃でデイナの右腕は骨まで砕かれた。だらりとぶら下がる右腕を見て、デイナは激痛とは違う意味で顔を顰めた。

「——億を超える年月の積み重なった生物史と地球上の全生物の力は流石って事か」

「諦めるかね?」

「まさか」

デイナは即座に右腕の修復を行った。高速で骨・筋組織・神経を修復しているので、粉碎された時と同じかそれ以上の激痛に襲われるが構っている暇はない。

「いぎつ、ぐ、くうううう——! くつ、はあ……はあ……」

物の数秒で粉碎された右腕を治し、構えを取るデイナ。

雄成と対峙しながら、デイナは自分の体を作り直した。筋肉はより柔軟で強靱に、鎧はより軽く強固に。反応速度・思考速度も可能な限り底上げを図った。

肉体の再構築を数秒で終わらせ、デイナは雄成に飛び掛かる。振り下ろされた拳を受け止めた雄成は、先程のそれを超える威力に一撃で防御に使った腕を粉碎された。先程のお返しだ。

「く、やるじゃないか。ならここからは本気で行くか」

粉碎され消失した腕を雄成は即座に再生させた。トカゲなんかは自切した尻尾を再生させる事が出来るが、雄成の再生速度はトカゲなんかのそれを遥かに上回る。

つまり、雄成を倒したければあの回復速度を上回るダメージを与えなければならないのだ。

幸いな事に、デイナにはそれが可能だった。今の雄成は全身を超万能細胞で構築されている。つまり、デイナのアポトーシス・フィニッシュであれば全ての細胞の活動を停止させ死に追いやる事も可能だった。

問題は雄成がそれを絶対に許さないだろうという事だが……………。

「やるしかないか……………」

驚異的な瞬発力で一気に雄成に接近し、高速でパンチを繰り出すデイナ。雄成はそれをスウエーで回避し、身を低くすると水面蹴りでデイナの足を狙った。当たれば足を払

われるどころか引き千切られるだろう一撃を、デイナは軽くジャンプする事で躲し落下の勢いを乗せて拳を叩き付ける。床を抉るほどの一撃だが、雄成は紙一重で回避してしまふ。

そしてデイナが床に突き刺さった拳を引き抜くより早く、彼の顔面を狙って放たれたアツパーカットが直撃した。

「うぐっ?!」

顔を潰されるのではと言う一撃だったが、デイナはデイナで全力で顔を放たれたアツパーと同じ方向に向けて上げていたので見た目ほどにダメージはない。

そしてアツパーカットを放った直後で隙を晒す雄成を睨むと、がら空きの腹に正拳突きを叩き込んだ。

「ごぼっ?!」

内臓を潰されるほどの一撃を受けて尚、雄成は倒れる事無く即座に反撃を繰り出す。潰された内臓を修復しながら放たれたフックは、デイナの左肩を粉碎し血を噴き出させた。

「ぐ、あああああっ!」

反撃を受けながらも、デイナは攻撃を止めない。自分の左肩を殴った雄成の手を掴み、殆ど腕の力だけで後ろに叩き付け更にはその反動を利用して今度は前に叩き付け

る。

互いにダメージで血を流しながら相手を攻撃し続ける2人。譲れないものがあるからこそ、2人は一歩も退くことはなかった。

「——君と私は、本当にそっくりだ」

戦いの最中、雄成が静かに語り掛けてくる。

「まるで鏡合わせ。お互いの姿を見て初めて本当の自分が見えてくる」

「もし何か違っていれば、私と君は逆の立場だったのかもしれない。そう思えるほどに似ているな」

雄成の拳がダイナの胸板に直撃し、胸部装甲が弾け血が噴き出す。ダメージに思わずたたらを踏むダイナだが、そこを踏ん張り握った拳を雄成の顔面に叩き込んだ。雄成の複眼の片方が潰れ、ダイナの手を赤く染め上げる。

「そうかもしれない。俺もそう思うから」

「だからこそ俺は雄成さんを否定する。俺は俺だ、雄成さんじゃない。雄成さんの様にはならない」

「俺は俺の生きる世界の為に、あんたを倒す」

「やってみたまえ！」

互いの拳が相手の頬を殴りつける。クロスカウンターの形になった2人は、吹き飛ば

されそうになるのを堪え拳を相手の頬に突きつけ合った。

その時、地下研究所全体にアナウンスが響き渡った。

『全職員に告げます。ミサイル発射まであと5分を切りました。危険区画に居る職員は直ちに退避してください。繰り返します——』

「ッ!？」

耳に入つて来たアナウンスに、デイナは咄嗟に雄成から距離を取った。もうそんな時間が経っていたとは。タイムリミットが5分を切ってしまった。ミサイルの事はルーナと白上教授達に任せはしたが、やはり動揺は隠せない。

「ふふつ、もう直ぐだ。もう直ぐ、また恵里に会える——!」

「くっ」

とにかく今は雄成を倒す。話はそれからだ。

デイナが雄成に向けて駆け、飛び蹴りを放った。蹴りが雄成に直撃するかと思われた次の瞬間、横から飛び込んできた何者かがそれを妨害した。

「ぐっ!?! ん、なっ!?!」

雄成への攻撃を妨害した者、それは雄成だった。雄成が2人いる。

「何時の間に分裂……いや、さっきの抜け殻か」

デイナはその2人の雄成のタネに気付いた。片方は先程動きを拘束しようとして糸

を絡ませた時に雄成が脱ぎ捨てた抜け殻だ。その抜け殻の中に戦いの中で飛び散った血液や細胞片が集まりもう1人の雄成を形作ったのだ。

事実上2人の雄成との戦い。分身の強さは恐らく本物と大差ないだろうが、本物を倒せば分身も動かなくなる筈だ。

とりあえずどちらか一方を確実に倒す他ない。

デイナはマフラーの一本の構成を変換し、極限まで硬質化させ首元から外し手に持った。即席の剣である。

それを見てか、雄成達は手から血を流すとそれを硬質化させた。ヘモグロビンを血小板で固め、硬質化したそれは常識では考えられないほどの硬度を誇る。立派に剣として使用できるレベルだ。

迫る2人の雄成が振り下ろす血液の剣を、デイナがマフラーの剣で迎え撃つ。剣の強度は五分五分と言ったところ。となると勝負の決め手は一瞬の判断と技術に掛かっている。

素早く互い違いに動き回り、デイナに斬撃を繰り返す雄成達。デイナはそれを紙一重で避け、時に最低限のダメージで抑えつつこちらも小さいながら相手にダメージを蓄積させていく。

だが戦いで勝敗を分ける要因の一つは数だ。デイナが1人なのに対して、雄成は実質

2人。その差は覆しようがない。

「あつ!？」

一瞬の隙を突かれてデйнаの剣が弾き飛ばされた。衝撃で無防備となる無手のデйна。

そこに雄成が畳み掛ける。小細工など必要ないと言わんばかりに真正面から2人の雄成が迫り剣を振り下ろしてきた。

剣が振るわれる直前、デйнаは雄成の腕を掴み剣が振るわれるのを防いだ。

ならばと2人の雄成は互い違いに剣を振り回しデйнаを切り裂こうとした。対するデйнаはそれを相手の腕や刀身を拳や蹴りで弾き、時には身を軽く逸らすことで回避する。

上、右、左、正面、左右同時、上と横から、下からと思わせて胴を薙ぐと同時に顔面を突いてくる。

縦横無尽に振るわれる2本の剣を、デйнаは最小限の動きで受け流す。今、デйнаの動体視力は極限まで高まっており、雄成の動きもそれに合わせて高速化している、彼らの戦いは最早常人の目で追う事は出来ない。

激しい斬撃の嵐。その中で佇むデйнаは、嵐の中で僅かに風が凧いでいるところを見つけた。

「そこだ」

1秒にも満たない刹那の隙。その隙を見抜いたデイナは、片方の雄成をアツパーカットで真上に殴り飛ばすと僅かに生まれた余裕を活かしもう片方の雄成が剣を振るう前に蹴り飛ばす。そして最初に上に殴り飛ばした雄成の方に向けてジャンプしながらレセプタースロットルを引いた。

〈ATP Burst〉

「ハアアアツ!!」

「ぬあああああつ?!」

拳にエネルギーを収束させてのアポトシスフィニッシュが雄成の腹に突き刺さる。そのまま勢いを殺さず、床に沈めるくらいに勢いで叩き付けると次に起こるだろう爆発に巻きこまれないよう即座に距離を取った。

直後、床に叩き付けた雄成が爆発四散。こちらが本物であつてくれれば、これで勝敗は決するが――

「残念だったね」

「……しごとく」

そうは問屋が卸してくれなかった。デイナが今倒したのは分身の方。残った方が本物だった。

本物が分かった事自体は良かったが、状況はあんまり芳しくない。実を言うとそろそろデイナの体力が限界に達しそうなのだ。

様々な能力を生み出すことが出来るのがデイナの利点だが、欠点を上げるとすれば能力を生み出す際にどうしても体力——カロリーを持っていかれる事だった。

この戦いの前、事前にしっかりと食事でカロリーを蓄えてきたのだが、雄成の相手は想像していた以上に体力を使う。持って後2〜3分、ミサイル発射まで僅かに足りない。

体力が尽きる前に、雄成と決着をつける！

「一か八か、やるしかないか」

この土壇場で、デイナは賭けに出た。意図的に脳内のリミッターを全て外し、押さええていた力を全て解放した。

勿論それは相応のリスクを伴う。脳が体に掛けているリミッターは、人間が自分自分の体を破壊しないようにする為の安全装置。それを外すという事は、強大な力の代償に自分の命を削る事に等しい。

それを承知の上で、デイナは遺伝子に働きかけ自らのリミッターを全て解除した。

「雄成さん……勝負だ」

その言葉と同時にデイナは動き出す。先程とは比べ物にならないほどの速度、それは適応能力でどうにかできる範疇を越えていた。

雄成もその速度に反応しきる事が出来ず、接近を許すどころか強烈な一撃をあつかりと貫つてしまった。

「ぬぐあああああつ?!」

「ぐ、がはっ!?!」

デイナの一撃は雄成を大きく吹き飛ばすほどの威力があつたが、その反動はデイナ自身にも襲い掛かる。殴つた衝撃が強すぎて自分の腕が破壊されてしまった。ニュージエネレーションフォームの強化された肉体は、自分の肉体を容易く破壊するほど強力だったのだ。

(や、やばい……これは時間を掛けられない)

体力が続かないとかそういう次元ではなく短期決戦の必要に駆られたデイナだったが、雄成はそんな事情など知る由もなく攻撃を仕掛けてくる。

「ぐ、うう……まだ、まだだ! この程度で、私はッ!!」

背中からクモの足を生やし、先端にはカマキリの鎌を作り出した雄成はデイナに接近し四方八方から彼を切りつけた。逃げ場のない斬撃は、今のデイナには手に取るように分かつたので回避は容易だった。が、その回避の動きすら彼の体を破壊していく。身を逸らし、鎌を拳で弾くだけで全身の筋肉が悲鳴を上げる。

「ぐう、か、くく——!?!」

もう体力がどうか肉体の限界とかを考えている場合じゃない。デイナはすぐに修復する事を考え雄成を殴り飛ばすと、リミッターを元に戻しレセプタースロットルを引いた。

「はあ、はあ、くっ!!」

〈ATP Burst〉

「ぐう、ああああああっ!!」

これで最後になると、デイナがアポトシスファイニッシュを発動し飛び上がると雄成も受けて立つと右足にエネルギーを収束させて飛び上がった。

「ハアアアアアアアッ!!」

「オオオオオオオオツ!!」

2人の飛び蹴りが空中でぶつかり合うと、瞬間激しい炎を上げて爆発した。拮抗する余裕もないほどのエネルギー。2人の攻撃のぶつかり合いは、部屋の壁を全て吹き飛ばし他の部屋と繋げるほどの威力があった。

「がはっ!?!」

「うぐうっ!?!」

互いの攻撃で吹き飛ばされる2人。共に満身創痍で立ち上がる事もままならない様子だがそれでも雄成は立ち上がった。そして取り落としていた剣を拾うと、足を引きず

りながらデイナに近付いていく。

一方のデイナはと言うと、こちらは先程の無理が祟ったのか立ち上がる事が出来ない。足が動かないのだ。

立てないデイナに、雄成が死刑執行人の様に近付いていく。迫る雄成を見ながら、デイナは必死に自らの体を鼓舞した。

(動け、動けよ俺の体！)

雄成がデイナの目の前に立った。手にした剣を逆手に持ち、ゆっくりと持ち上げる。

(動け、動け！ 動け動け動け動け動け、動け!!)

そして振り上げられた剣が、デイナに勢いよく振り下ろされた。

「動けええええええええええ!!」

自分の体に自分で命令を下す。その瞬間、デイナの手が振り下ろされた雄成の剣を掴み取った。

「何ッ?!」

まさか手で掴まれるとは思っていなかったのか、動揺して動きを止めてしまう雄成。

そこからの出来事は一瞬だった。デイナは掴んだ剣を握り潰すと、立ち上がると同時に拳を雄成の胸に突き刺し心臓を鷲掴む。そしてその状態でレセプタースロットルを引き、生み出したエネルギーを直接雄成の心臓に送り込んだ。

「ウツ?! ぐおあああああああつ?!」

「うううううあああああああああつ!」

限界までエネルギーを雄成の体の中に流し込みながら、遺伝子操作を行い雄成の生命活動を停止させる。雄成の方も必死にそれに抗うが、体内に直接エネルギーを流し込まれてはどうしようもない。

デイナが雄成の体内にエネルギーを流し込んで数秒ほど。唐突に雄成の声が止まった。死んだのだ。デイナの決死の行動が、遂に雄成を倒したのである。

動かなくなつた雄成から、デイナは突き刺した右手をゆつくりと引き抜く。

デイナが手を引き抜くと、物言わぬ軀となつた雄成がゆつくりと倒れた。

それをデイナは静かに見下ろしていた。

最終話：海原を越えて未来へ

倒れた雄成を、デイナは静かに見下ろしていた。仮面に隠れて見えないが、その佇まいはどこか寂しそうだ。

もし運命が何か違っていたら、自分と雄成が逆の立場になつていたかもしれない。

もし運命が何か違っていたら、自分は雄成の味方をしていたかもしれない。

もし運命が何か違っていたら、仮面ライダーが必要ない世界だったら、自分は雄成の下で学んだり働いていたかもしれない。

そう思ってしまうくらい、デイナは雄成の事を気に入っていた。敵対し全力で止めはしたが、彼は雄成の事を憎みも恨みもしていなかった。

だからこそ、こんな結末に寂しさを感じずにはいられなかったのだ。

「ぐ、うう……」

倒したと思つた雄成の口から僅かに呻き声が上がった。あれだけの攻撃を喰らつて尚、彼はまだ生きていたのだ。

だがデイナは警戒しない。もう雄成にはろくな戦闘力も残っていないことが分かっているからだ。例え意識を取り戻したとしても、彼は数分とせず完全に死ぬ。そうした

から……。

「私は……負けた、のか……」

「そうだね」

「そう、か。……はあ……これで終わりか。恵里、すまんね。出来るなら、もう一度……君の笑顔が見たかったが」

心からの悔恨を感じさせる言葉。だがその内容に反して、その口調はどこか穏やかだった。

「デイナはその事に違和感を覚える。」

「——あんまり悔しそうじゃないね？」

「ふふふ……私が死に、恵里に会えないとしても……恵里の死は絶対に無駄にはしないからだよ」

「ミサイルの事？ あれなら今頃教授たちが止めてる筈……」

「果たしてそうかな？」

『ミサイル発射まで、残り2分。ミサイル発射まで、残り2分』

唐突に耳に入ったアナウンスにデイナがハッと上を見上げる。まだカウントダウンが止まっていないと言う事は——

「精々、頑張りましたまよ……よ」

その言葉を最後に、雄成は今度こそ息絶えた。細胞が活動を停止したからか、体がロボロと崩れていく。

朽ちる雄成の姿を一瞥し、デイナは踵を返して元来た道を戻る。その最中に嗅覚を強化し、今亜矢がどこに居るのかを探した。彼女が今いるところに、教授達が居る筈だからだ。

果たして彼女達はすぐに見つかった。指揮所のような部屋があり、そこに亜矢を始め白上教授や峰達、そして茜までもが集まり必死にキーボードを叩いていた。

デイナが入ると、全員が一斉に振り向き一瞬警戒の目を向けたが、それがデイナであると分かると安堵の表情を浮かべた。

「仁くん……勝ったのね!」

「勿論。それで、今どういう状況?」

亜矢の笑顔に仮面の奥で僅かに笑みを浮かべつつ、全員に状況を訊ねた。

それに答えたのは拓郎である。

「殆どのミサイルの発射はこっちで止められた。だが一発、一番でかいミサイルだけはここからの操作を一切受け付けないんだ!」

「多分、このミサイルだけシステムが切り離されてるんです。操作するにはミサイルに付いてる操作盤を操作するしかありません!」

「でも残り2分を切ってるんですよ!? 時間が無さすぎる!」

「だがこのままだと、ミサイルが発射されてウィルスがばら撒かれる事に……」

絶望的な状況に顔を青くする白上教授達。だがデイナは諦めてはいなかった。

「そのミサイル、どういう軌道?」

「二度成層圏を越え、赤道上空まで上がり再び大気圏に突入。赤道上空で分解し地球全土にウィルスをばら撒くつもりらしい」

つまりこのミサイルは一度、宇宙空間近くにまで上がるといふ事だ。それならばまだやりようはあった。

「なら、成層圏を越えて熱圏に入ったところでミサイルを破壊すればいい。そうすればオゾン層に遮られる前の強烈な紫外線でウィルスが死滅する」

「そうか、その手が……いや駄目だ。どの道時間が無さすぎる。今からでは迎撃ミサイルを上げる余裕もそれを要請する時間もない」

「そんなの必要ないです。俺が直接やりますから」

「仁くんっ!」

つまりデイナは、打ち上がるミサイルに取り付き目的の高度に達したところでミサイルを破壊すると言っているのだ。迎撃ミサイルが上げられない以上、確かにそれしか手はない。それに今のデイナであれば、ほぼ真空の低気圧や有害な紫外線に適応した体に

することも可能だ。この状況で世界を救う為に、彼以上の適任は居ない。

しかしそれは同時に、ミサイルの爆発と大気圏への再突入の熱との戦いでもある。先程雄成との戦いでほぼ全力を出し切ったデイナに、果たして生き残る事が出来るか。

「危険すぎる!？」 雄成との戦いで君は既に限界なんじゃないのか？ 例えミサイルを破壊できたとしても、生きて戻れる保証が無いぞ!？」

「でも他に手はないでしょう？ それに時間も無い。議論してる暇はありませんよ」

意見を曲げる気はないのか、デイナは踵を返して部屋を出てミサイルの元へ向かおうとする。

その彼の背に、亜矢が声を掛けた。

「仁くんー!」

「ん?」

「……………待つてます、私達。……………信じてるから、仁君が帰ってくること」

周りが反対する中、亜矢と真矢は逆にデイナの事を送り出した。現時点で世界を救えるのが、彼だけだと彼女も理解しているからだ。

そして同時に、信じていた。彼はきつとこの逆境でも生き残り、そして帰ってきてくれると。

「ん、ありがと。……………行ってくるね」

「はい、いつてらっしゃい」

亜矢と真矢に送り出され、デイナはミサイルの格納庫へと向かう。発射体制に入ったミサイル、その中でも一際大きい奴は、発射が中断された他のミサイルとは別に動いており既にサイロの中へ入っている。

『発射まで、残り20秒』

デイナは大型ミサイルに近付くと、それについている梯子を見つけた。メンテナンスか、直接の操作の為の操作盤へと続く奴だろう。彼は迷うことなくそれに手をかけ、上へと登っていく。

『8、7、6——』

尚もカウントダウンは続き、あと少しと言うところでデイナは片手で梯子を掴みながらもう片方の手をミサイルの装甲に突き刺した。

そして——

『2、1、0。発射』

無機質な音声と共にミサイルが発射される。開いたサイロから轟音と爆炎と共に大型ミサイルが飛び立ち、天へと消えていく。

場違いにも思えるほどの清々しい青空に、デイナはミサイルに取り付き昇っていく。その加速にデイナも僅かに顔を顰める。

「う、くう……」

地上が見る見るうちに離れていき、更には空気が薄くなってきたのか息苦しくなってくる。それをダイナは自分の遺伝子を弄る事で対処し、有害な紫外線への耐性も身に付けた。

生憎と高度計はないので今の正確な高度は分からない。だが見える景色と空気の感触で今が大体どのくらいの高度なのかは予想できる。目的の高度まで、あと少し……。

「——そろそろか」

目的の高度に近付いたことで、ダイナも仕上げの準備に取り掛かる。振り落とされないうようミサイルの表面に張り付きながら移動しつつ、自分の体を更に変異させる。マフラーを推進機の様に変化させると、そこから周囲の水素を燃料とした炎が噴き出し加速させ、ダイナをミサイルの前へと運んだ。

それと同時に目的の高度に到達。ダイナは振り返りミサイルを正面から見据えると、レセプタースロットルに手を掛けた。

「さて、検証の時間だ」

〈ATP Burst〉

世界を救う為の最後の آپトーシスファイニッシュ。これで止められなければ世界は救えない。否、絶対に救ってみせる。

超万能細胞が、この技術が、ただ危険なだけのものではないと証明する為に。

「ハアアアアアアツ!!」

ミサイルに向けてアポトローシスフィンニッシュを放つデイナが、ミサイルの弾頭に接近する。

そして………ミサイルとデイナが衝突し、次の瞬間大気圏で大きな爆発が起きた。

その爆発を、地上に出た亜矢が見ていた。もう遠く、肉眼では殆ど捉える事は出来ない。だがそれでも、進化した亜矢の目には辛うじて爆発するミサイルの姿が見えていた。

同じく地上に出た白上教授達は、ミサイルに攻撃を仕掛けたデイナを必死に探していた。

「門守君は、門守君は見えるか!」

「どこだよ、門守——!?!」

「くそ、爆炎が邪魔で見えねえ!」

「門守君………?でしよ?」

周りが姿の見えないデイナに最悪の状況を思い浮かべ焦る中、亜矢は1人落ち着いていた。泣きも喚きもせず、ただジッとデイナが飛んで行った空の彼方を見つめている。

「亜矢………気付いてる?」

「うん……分かるよ、真矢」

【やっぱり、仁君は凄いな】

「当然だよ。だって、仁くんだもん。私達が大好きな」

徐に亜矢が空の一点を指さした。その行動に全員が彼女に注目し、ついで彼女が指さす先を見る。

最初、目を凝らしてもそこには何も見えなかった。だが次第にそこに何かが見えてくる。

点にしか見えなかったそれは、段々と大きくなりこちらへと向かってきているのが分かった。まさかと思ひ手に双眼鏡を持っている者たちがそれを見た時、その正体に歓喜の声を上げた。

「あれは——！——！」

「門守！」

飛んできていたのはデイナだった。あの爆発の中、デイナは生き延び、そして帰って来たのだ。

デイナはマフラーを被膜の様に使つて空中を滑空して飛んできている。彼の目にも亜矢の姿が見えたのか、高度を下げ、着陸の体制を整えている。

そして空中で体勢を変え、亜矢の前に着地した。その体は全身ポロポロでよくここま

でこれたと感心するほどだが、しかし弱さは微塵も感じられなかった。

亜矢の前に降り立ったティナは、一息つくると変身を解除した。元の姿に戻った仁も全身ボロボロだが、その顔には穏やかな笑みが浮かんでいる。

「———ただいま」

「おかえりなさい。……お疲れ様、仁君」

亜矢と真矢からの出迎えに、仁はこれで全てが終わったことを実感。そこで緊張の糸が切れたのか、それとも単純に体力に限界が来たのかその場に倒れそうになった。

崩れ落ちる仁の体に白上教授達が慌てるが、倒れる前に亜矢が彼の体を支えた。

「おっと、大丈夫ですか？」

「ん……ちよつと、疲れた」

「じゃ、帰ろつか？」

「そうだね。とりあえず、ぐっすり眠りたい」

「付き合いますよ。……ずうつとね」

「ありがと……」

亜矢に支えられ、仁は安らかな顔で意識をゆっくり手放した。流石に部屋まで我慢できなかつたらしい。

自分の腕の中で子供の様に眠る仁を、亜矢は優しく見つめ、彼を労う意味でもそつと

頭を撫でるのだった。

それから数か月後、成田空港――

あの戦いの後、仁は一週間眠り続けていた。雄成との戦いで全力を出し過ぎ、体がかなり限界に近付いていたのだ。そこにさらにミサイルの破壊までもが加わり、実はあと一歩でかなり危ういところだった。

目を覚ました時には年が明けていたと知り、仁が軽く面食らったのは言うまでもない。

あの戦いを最後に、傘木社は完全に崩壊。世界各地にある支社も続々と解体され、この地球上から傘木社は完全に消え去った。

それでも傘木社が残したものは大きかった。特にベクターカートリッジの技術や現物は管理する傘木社が消えたことで世界各地に散らばり、様々な問題の原因となつてい

るらしい。

その対処でS・B・C・T・はてんでこ舞い。日本の警察組織の一部だと言うのに、海を越えた海外での活動まで余儀なくされていた。

話によると近々、警察組織から独立し国連の下部組織になる事にもなるとかならないとか。

だがそんな話は、最早仁達にはあまり関係のない話。

大学を無事卒業した仁は博士課程に進み、そのままアメリカのマサチューセツツへの留学が決まった。同じく亜矢は彼についてアメリカに行くことを決めていた。

因みに、今の亜矢の苗字は双星ではなく門守となっている。そう、卒業後2人は直ぐに結婚し、籍を入れていたのだ。

その事を2人を知る者、仲間や友人たちは盛大に祝った。

そして今、2人はアメリカに旅立つ為の飛行機を待っていた。その場には2人を見送るべく、白上教授達も集まっている。

「もうそろそろですか。2人とも、忘れ物はありませんか？」

「大丈夫ですよ宮野先輩。私の方も仁くんの方も、必要なものは全部揃ってます。事前に確認しましたから」

最初仁は必要最低限の荷物だけしか用意していなかったのだが、それは流石に少なすぎると亜矢がいろいろと買い揃えた経緯を持つ。

その話を聞いた峰達は、流石仁だと呆れると同時に関心していた。

「頑張るんだぞ、門守君。君なら、アメリカでもきつと上手くやれるだろう」

「はい、教授も大学の方頑張ってください」

「……ありがとう。本当に、君には色々と助けられた。言葉だけではどれだけ重ねても足りないが、それでも言わせてくれ。本当にありがとう」

「俺がやりたくてやった事ですから」

「私事です。お気になさらず」

そうは言うが、それでも仁と亜矢に対する感謝を抑えきれないのか白上教授は2人に頭を下げる。

そこでロビーにアナウンスが流れる。アメリカ行きの飛行機が間もなく飛び立つ準備が出来るとのことだ。それを聞き、仁と亜矢は荷物を持って搭乗口へと向かう。

「それじゃ、俺達も行ってきます」

「ああ、気をつけてな」

「先輩達も。……式の日が決まったら教えてくださいね。仁君と一度帰国しますから」

「ちよ、真矢さん!!? もう!」

真矢の言葉に峰と拓郎が顔を赤くする中、仁と亜矢は微笑み合いながら白上教授達に手を振り搭乗口へから飛行機に乗る。

座席に隣り合って座った2人が窓の外を見ると、ロビーの窓から白上教授達が2人の事を見ている。2人が飛行機の窓から手を振ると、それが見えたのか峰が手を振り返してきた。

その直後、アナウンスと共に飛行機が飛び立つ。僅かに感じるGと共に浮遊する感触を感じ、そして窓の外の景色が一気に流れていき空の上へと上がっていく。

飛び立って数分後、飛行も安定しシートベルトが外せるようになってから。

2人はアメリカに渡ってから生活に思いを馳せ、どんな生活になるかを楽しみにしながら空の旅を楽しんだ。

その時、仁の方を見ていた真矢が窓の外にあるものを見つけた。

「あ、仁君あれ!」

「ん?」

真矢が指さす先に目を向けた仁が見たのは、海の上に浮かぶ巨大な都市。船とかそういう次元ではなく、大海原のど真ん中に一つの都市が浮かんでいるのだ。

仁はそれが何なのかすぐに分かった。

「あれは……確か日本が主導で開発してるっていう噂のメガフロートに造られた都市だね。確か名前は……海都かいとだったかな?」

「あ! 前にニュースでやってましたね。完成間近だつて聞いてましたけど……」

見る限りでは、街は完成しているように見える。普通なら不可能だが、今の2人の目には街の中を行き交う人々の姿を見る事が出来た。既に人々の営みは行われているようだ。街には工事の人だけでなく、普通の格好をした人が出歩いている。

不意に仁はその中の1人と目が合ったような気がした。まっすぐ空を見上げている、1人の女性。

(まさかね……)

自分たち以外にそんな事が出来る者はいない。精々あれは空を飛ぶ飛行機を何気なく見ているだけだろう。そう思い仁は窓から視線を逸らした。

仁と亜矢を乗せた飛行機はそのままアメリカに向けて空の彼方へと消えていく。

ただでさえ距離の関係で小さく見える飛行機が、更に小さくなっていく。

その飛んでいく飛行機を、海都からじっと見つめている女性が居た。

大海原の様に深い青色の髪と瞳の女性。その女性は飛行機が見えなくなると、ズボンのポケットから1枚の硬貨を取り出した。青い宝石で作ったようなコイン。縁には金の輪が嵌り、中央には太陽と海を抽象的にした様な絵柄が描かれている。

女性は硬貨を親指で弾き、落ちてきたそれを片手で掴む。握った手を開くと、そこには先程と違い地図の絵柄が描かれた面が上になっていた。

上になっている絵柄に女性は小さく笑みを浮かべると、硬貨に軽くキスをしてそれを

ズボンのポケットにしまった。

お互いを知らない仁と女性。2人が互いの事を知るのは、今から少し未来の話。

そう、仮面ライダーと言う縁が2人を引き合わせるの、まだ少し先の話。

今はただ、互いに何も知ることなく、訪れた平和を享受するだけであった。

仮面ライダーが必要とされる、その時まで……………。

特別編『Next game at sea』

第1話：時は流れて

その日、世界に名立たる傘木社が崩壊した。

人知れず行われていた悪事は暴かれ、多くの罪なき人々の犠牲で甘い汁を啜っていた者達は軒並み逮捕された。

そして全ての責任者である社長の雄成は、仁こと仮面ライダーダイナとの戦いで命を落とした。

纏める者が居なくなった会社は静かに瓦解していく。

しかし全てが丸く収まったわけではない。

日本での騒動が海外に伝わるまでは若干時間が掛かる。捜査の手ともなれば尚更だ。日本の傘木社の重役全員が逮捕されその事が海外に伝わる頃には、海外支社の重役は全員姿を消していた。

尤も海外の警察も決して無能ばかりではない。逃げ出した重役の痕跡を辿り、いくらかは発見し逮捕する事が出来た。

それでもやはり全てを逮捕することは叶わず、多くの重役や裏に関わっていた科学者

なんかはそのまま雲隠れしてしまった。

逃げた科学者の多くは忠誠心ではなく自分の知的好奇心を満たす為に傘木社に居たので、傘木社が崩壊してからは隠れながら新しい潜伏先で傘木社で得られた技術を基にした研究に明け暮れていた。

だが………：科学者や重役の中には心から雄成に忠誠を誓っていた者もいた。

彼らは捕まる前に逃げ出した後、只管待ち続けていた。

そう………：彼らから会社と雄成を奪った元凶である、仁に復讐する時を——

「ジョン、準備は終わった」

「門守 仁の行先が分かったぞ。やるなら今だ」

「よし………行くぞ。雄成社長の敵討ちだ」

雄成との戦いが終わってから、早くも2年が経った。仁は院生となり、マサチューセツツ工科大学へと留学。亜矢はそんな仁を支えるべく共にアメリカへと渡った。

この2年間、2人は戦いに巻き込まれることもなく、アメリカでの日々を平和に過ごしていた。

そんな2人は現在、日本に向かう大型の客船の一室に居た。

船の名前は『アルカディア・オブ・ザ・オーシャン』。一留学生は勿論、一般市民でもそう簡単には乗れない豪華客船だ。

勿論この客船のチケットは仁が手に入れたものではない。これは白上教授から2人への“お祝い”の品だった。

と言うのも――

「……………寝ちゃった？」

「はい。……………2人ともぐっすりよ」

今、2人が覗き込んでいるベッドの上には2人の赤ん坊が居る。

言わずもがな、仁と亜矢の間に生まれた双子の赤ん坊だ。仁がアメリカに留学し研究に携わる傍ら、妊娠した亜矢が産んだのである。

仁は安らかな寝息を立てる我が子達の頭を優しく撫でた。すると子供達は、眠っているにもかかわらず仁に撫でられると気持ち良さそうに身動きした。

その愛らしい仕草に、亜矢だけでなく仁も頬を緩めずにはいられない。

「……………正直、不安だったんだ」

「え？」

「俺が子供達をちゃんと愛せるのかって。自分で言うのもなんだけど、俺って変人じゃん？ 他人と価値観違うから、子供達の事をちゃんと見れるのか不安だったんだけど……実際に生まれてくれたら、こんなに愛しく思えるなんて……」

「仁くん……」

それはきつと、生物としての本能によるものだけではないだろう。種の保存の為の繁殖の結果生まれたと言う理由だけでなく、愛する女性との間に生まれてくれた愛の証のような自分の子供が、純粋に愛おしいだけの話なのだ。

自分にこんなにも普通の人間らしい感性がある事に驚きつつも、仁はそれを教えてくれた2人の子供と、何よりも子供達を生んでくれた亜矢に感謝した。

「本当に、ありがとう。亜矢さん、真矢さん。この子供達を生んでくれて……」

仁が亜矢の事をぎゅっと抱きしめる。抱きしめられた亜矢は、仁の胸板に頬擦りする様に身を委ねた。

「仁くんが、私達を心から愛してくれたからですよ。お礼を言うならこっちだって……。……ふふっ、仁君もすっかりお父さんね」

「ん、そうだね。この子供達のお父さんで……亜矢さんと真矢さんの旦那さんだ」

「仁くん（君）……」

抱きしめた亜矢に仁がそつと顔を近付ける。彼が何をしようとしているかを察した亜矢は、頬を赤らめながらもそれを受け入れるように顔を上げ目を閉じた。

2人の赤ん坊が安らかに眠る横で、仁と亜矢は静かに触れ合う程度のキスをして互いの温もりを感じ合う。

その時、部屋の扉がノックされた。突然のノックに2人は弾かれるように顔を話して扉の方を見るが、同時に異音に眠りを妨げられたからか赤ん坊の片方が僅かにぐずり出す。

「ん、んん〜……」

「ああ、愛衣めい。よしよし、大丈夫よ大丈夫」

「……本当ゆっしに雄司は神経太いなあ。愛衣はすぐ起きたのに。……誰だろ？」

亜矢がぐずり出した女の子の赤ん坊——愛衣を優しく抱き上げてあやす中、仁はもう1人の赤ん坊——男の子の雄司が全く起きる気配がない事に少し感心しながら、扉をノックしてきた相手に応待すべくそちらへ向かった。

「はい？ あ……」

「やあ、久し振りだね門守君」

扉の向こうに居たのは白上教授だった。彼は今回、久し振りに2人と話がかつた事もあってこの豪華客船の旅をプレゼントすると同時に自分も客船に乗客として乗り

込んだのだ。

実に2年振りに再会した恩師の姿に、仁は小さく笑みを浮かべる。が、すぐに何かに気付き時計を見た。

「あ、もう時間でした?」

実は仁は、この船で白上教授と会う予定をしていたのだ。だが仁はそれをすっかり忘れ、亜矢と子供達と共に居る事に時間を使ってしまったのである。

その事に気付いた仁は白上教授に申し訳なさそうに頭を下げた。

「何、気にしないでくれ。こちらこそ悪かったね、家族の団欒を邪魔してしまったように」

頭を下げる仁に、白上教授は部屋の中を覗き込みながら答えた。視線の先ではぐずる愛衣を亜矢があやしている。落ち着いてきたのか、愛衣は泣き止みつつあった。

もうすっかりお母さんな亜矢に、そんな彼女と娘を見つめる仁の目はお父さんだ。

2人の様子に白上教授も見ていて微笑ましくなり思わず笑みを浮かべる。

「はい、ふた、ああ違った。亜矢君、少し門守君を借りても良いかね?」

「はい、大丈夫です」

「それじゃあ門守君。ちよつとそこらを歩こうじゃないか」

「はい」

仁は白上教授と共に部屋を出て、船室エリアから歩いていく。

この船は豪華客船と言うだけあって、乗客を満足させる施設が充実している。最上階のデッキにはプールがあるし、レストランは勿論スポーツジムやカジノもある。

2人が向かう先にあるのはカジノだ。

カジノエリアに向かう道中で、白上教授は仁に話し掛ける。

「いやはや、安心したよ。2人とも、アメリカで上手くやれているようで」

「ええ、まあ」

「それに、産まれた2人の子供も元気そうじゃないか」

「生まれたばかりの頃は色々大変でしたけどね。流石に子育てまでは父さんも教えてくれませんでしたから」

実際妊娠時から苦労した。悪阻に始まり、定期的な陣痛で苦しむ亜矢に対し少しでも負担を少なくしてやるしか出来ないことに歯噛みし、出産後は2人の子供を亜矢と共に頭を捻りながら育てる。

どちらも亜矢は勿論仁にとっても初めての事で、しかも自分がその必要に駆られるとは思っていないかった為事前学習もしていなかった。故に、仁は慌てて子育て——特に赤ん坊——に関する知識を掻き集め、頭に詰め込んだ。

その甲斐もあって、今では仁も亜矢も雄司と愛衣の2人を問題なく育てられるように

なっていた。

仁と亜矢が四苦八苦しながらも子育てに精を出す様子を思い浮かべて笑みを零す。あの2人、特に仁がこんな人間的で穏やかな日常を送れている事が嬉しいのだ。

だがその中にはどうしても目を逸らす訳にはいかない部分がある。気は進まないが、大事な事なので白上教授は仁にそれを訊ねた。

「ところで……あの子達は……」

表情を見ただけで白上教授の言おうとしている事を察し、全てを言われる前に先に答えを口にした。

「ええ。あの子達……雄司と愛衣の2人は間違いなく、俺と亜矢さんの子供ですよ」

それは別に亜矢の不倫を疑つての言葉ではない。言葉通りだ。雄司と愛衣の2人は仁と亜矢……即ち、新人類2人の間に生まれた新人類の遺伝子を受け継いだある意味純粋な新人類である。

後天的に遺伝子を変異した2人とは違う、最初から新人類として生まれた子供達なのだ。

覆しようのない事実には、白上教授の表情が暗くなる。

「そう、か……。となると、あの子達はこれから先、苦勞するだろうな。いや、あの子達だけでなく君達家族が、か」

何かの拍子にその事が周囲に知れ渡れば、爪弾きに会う恐れもある。よしんばそうならなかったとしても、仁の子供達は愛する者と添い遂げる事が出来ない。

何より、新人類の遺伝子を悪用しようとする科学者やそれを有する組織に狙われる恐れがある。

そう、雲隠れした傘木社残党の様な……………

「大丈夫ですよ」

だが仁はその白上教授の不安を一刀両断した。

「俺と亜矢さん、真矢さん……………2人じゃなくて3人の子供が、弱い訳ありません。強い子に育ちます。それに何より、俺が守りますから」

自信満々に告げる仁に、白上教授は一瞬呆気にとられそして次の瞬間笑みと共に息を吐いた。そうだった、彼はそういう男だった。仁は世の人が言う理不尽に平然と立ち向かう。2年前、アデニンが仁を勧誘した時も、彼は正面からそれを拒否しその際に言い放った。例えば世界と戦う事になると今の世界を変える事無く亜矢を愛し守ると。

その彼なら、子供達だって当然守る。

「そうか。……………ならもう何も言わないよ。だが何かあつた時は遠慮なく言うんだよ。私や瀬高君達、それに権藤さん達 S. B. C. T. も君の味方だ。君たちは決して孤独じゃない。その事を忘れてはいけないよ」

「はい」

仁は頬を緩め方から力を抜いた。自分達はこの世界にちゃんと居場所があると実感し安堵したのだ。

そんな話をしていると、2人はカジノエリアに着いた。

煌びやかなカジノエリアにはスロットなどを始めとした様々なカジノゲームに興じる人々の姿がある。豪華客船のゲームだが、ドレスコードはないので私服姿の客も多い。

仁は勿論、白上教授も別にギャンブルに興味はないので特にゲームをする事は無く、カジノエリアをぶらぶらと歩きながら他の人がやっているゲームを何気なく眺める。

そんな中で、一際客が集まっている場所があった。やっているのはどうやらルーレットらしいが、先程から妙に盛り上がっている。

ちよつと気になったので2人は客が集まっているテーブルに近付き、どんなゲームが行われているのかを眺める。

ゲームをしているのは1人の男性で、ディーラーを務めているのは女性だ。

見ると女性は随分と特徴的な恰好をしていた。上は胸元が開き気味でノースリーブのYシャツとジャケット、下がタイツとタイトスカートと言う、ディーラーとしてはなかなか個性的な女性だ。深い青色のポニーテールにした髪と同色の瞳が印象的だっ

た。

ちょうど今ゲームが始まったところらしく、ディーラーが回るルーレットにボールを放り込むところだ。テーブル上にはチップが賭けられていて、挑戦者の男性が祈るようにボールの動きを見ている。

回るルーレットの上をボールが転がり、一つのポケットに落ちた。男性が賭けたのは別のポケットだ。

その瞬間周囲からは落胆の声が上がリ、挑戦者の男性は悔しそうに唸り声を上げる。どうやら男性は負けが続いているらしく、手元のチップの枚数が少なく表情が険しい。

ここで男性は勝負に出た。残り少ないチップの全てを一つの数字に賭けた。ストリートベットと言う奴だ。赤の30に賭けている。

それを見て女性ディーラーは薄く笑みを浮かべ、ルーレットを回しボールを放り込んだ。だ。

瞬間、仁の右眉がピクリと動いた。

(ん——?)

仁の感じた違和感を他所に、ボールはルーレット上を転がる。

そしてボールが落ちた。落ちた場所は………赤の30。男性がチップを全て賭け

たのと同じ場所だ。

その瞬間、周囲の見物人が沸いた。起死回生を狙ってオールインして大当たりしたのだ。このルーレットはゼロが二つあるアメリカンルーレット、ストレートベットの配当は36倍だ。男性のここまでの負けがどの程度かは分からないが、今ので大分巻き返せただけである。

当然男性はまさかの勝ちに両手の拳を握り頭上に突き上げた。その男性に女性ディーラーは笑顔を向け拍手している。

「……凄いな」

「うむ。あれが俗に言うジャックポットと言う奴か」

「いや、俺が驚いたのはあのディーラーの方です」

常人では全く気付けない事だが、新人類に覚醒した仁の動体視力はある事に気付いていた。

「あのディーラー、投げるタイミングと投げる瞬間の僅かな指の動きでボールが入るポケットを操作してます」

「何？」

よくディーラーはルーレットやボールの動きを操作していると言われるが、少なくとも正式なカジノでそれはあり得ない。ルーレットの回転はともかく、ボールの動き自体

を操作するなど出来る訳がないからだ。

だがあのディーラーは明らかにボールの動きだけを調整し、入るポケットを操作した。

分からないのは何故そんな事をしたのかだ。あれで挑戦者を負けさせて賭け金を奪り取ろうとしているのであれば悪質なイカサマとして指摘する事もできるのだが、現実には挑戦者は勝っている。

一体あのディーラーは何がしたかったのか？

「……もしかしてゲームを盛り上げる為？」

「そんなことするかね？」

「でもそうとしか考えられないですよ。見た限り先に投げた時は小細工なしでボール投げてましたけど、次に投げた時は明らかにボールの回転とタイミングを合わせてました」

察するにあのディーラーは、挑戦者がひどく負け過ぎない程度にゲームを調整していたのだろう。あの男性、あのまま負けした場合負けを巻き返そうとさらに資金を消費する可能性があった。そんな勢いの様なものを感じる。

本来であればイカサマでゲームを調整するなど許されることではないだろうが、男性の大負けを防ぐと同時にゲームが盛り上がるのであれば一石二鳥だ。少なくとも

ディーラーはそう考えたのかもしれない。

悪質でないのなら、態々指摘するのも野暮と言うものかもしれない。仁はこの事を黙っておくことに決め、テーブルから離れようとする。

その際ディーラーと目が合った。ディーラーは仁と目が合うと、彼に軽くウインクした。

ディーラーからのウインクに、仁は興味ないと言うように肩を竦めその場を離れた。いい加減そろそろ亜矢と子供達の顔が見たい。

「教授、そろそろ部屋に戻りませんか？ 愛衣もそろそろ泣き止んでいるでしょうし」「そうだね。私も君達の子供達をちゃんと見てみたい」

2人は部屋に向かうべくカジノエリアから出て船室エリアへ向かった。

その瞬間、轟音と共に船を振動が襲った。

第2話：2年越しの悪意

時は少し遡り、船室エリアの仁と亜矢の部屋。

子供達を置いていく訳にはいかないので1人残った亜矢は、漸く泣き止んだ愛衣を雄司の隣に寝かせた。

「ふう……やつと泣き止んだね」

【愛衣はなかなか気難しく育ちそうね】

「分からないわよ？　もしかしたら破天荒に育つかもしれないし」

実際仁と亜矢が手を焼かされているのは愛衣の方が多かった。雄司は夜泣きも殆どしないのに対し、愛衣は事ある毎に泣く。泣くのは赤ん坊なりのコミュニケーションなので泣かないのはそれはそれで困るのだが、愛衣に手を焼かされているのは確かであった。

とは言え別に煩わしいとは思っていない。そんな手を焼かされるところもまた可愛くて仕方がないのだ。亜矢は安らかに眠る愛衣の頬を優しく撫でた。赤ん坊特有の柔らかく滑らかな肌の感触に撫でる亜矢の頬が緩む。

「ふふっ……可愛い。私達と仁くんの赤ちゃん……」

「ねえ亜矢？ 雄司って仁君に似てると思わない？」

真矢の言葉に、亜矢はふむと考えこむ。先程述べたように雄司は殆ど手を焼かさな
い。ちよつとしたことではまるで動揺せず、愛衣が泣いて漸く異変に気付くという事も
ザラだった。

初めて見るものを前にするとジツと見つめて目を離さないし、大人しくせして好奇
心が旺盛なところなど仁そっくりだ。そう考えると確かに雄司は仁に似ている子なの
だろう。

となると、消去法で愛衣は亜矢もしくは真矢に似たと言う事になる。

「愛衣は私と真矢、どっちに似てるのかな？」

「さあね。案外、裏表が激しいどっちにも似た子になるかもよ？」

亜矢と真矢が我が子談義に耽りながら仁が帰つて来るのを待つっていると、不意に雄司
が目覚ましそのままぐずり出した。

「うう、あああ！ あああ！」

「ああ、今度は雄司？ はいはい、大丈夫よ。どうしたの？ お腹空いた？」

それともオムツの交換かと抱き上げた亜矢は気付いた。雄司の泣き方が何かを求め
ているものではない事に。子供たちの事はよく見ているので、大雑把にだが泣き方で何
を求めているかは少しだが分かる。

そう言えば忘れがちだがこの子達も新人類だ。もしかして、何か異変に気付いたから泣き出したのかと亜矢が雄司をあやしなから予想した直後、轟音と共に部屋が大きく揺れた。

「きゃあつ!？」

突然の揺れによろけた亜矢は危うく倒れそうになるが、腕の中に居る雄司を守る為にと踏ん張り倒れる事だけは防いだ。

揺れは直ぐに収まったが、今ので雄司だけでなく愛衣も泣き出した。亜矢は愛衣も泣き止ませようと、両手にそれぞれ雄司と愛衣を抱き上げ優しく声を掛けてあやした。

「大丈夫、大丈夫よ2人とも。怖かった、怖かったねえ。でももう大丈夫だから。もう直ぐお父さんも帰って来るから、ね？」

子供達をあやす事に意識を向けていたから、彼女は気付けなかった。

彼女がいる部屋の窓の外に、異形が登ってきていることに。

亜矢が異形の存在に気付いたのは、そいつが窓をぶち割って入ってきた時だった。

仁と白上教授は、揺れが収まった直後に一度亜矢と合流すべく船室エリアへと急いだ。あの揺れは事故ではない。事故であればあんな轟音はならないし、何らかのアナウンスがあるはずだった。

それが無いという事は、船の方もどんな異常が起こったのか把握していないという事だ。

何より、今仁はやたらと胸騒ぎがしていた。何か良くない事が起こる。

突然の事に右往左往する乗客とそれを宥めようとする船員の間を抜けて部屋へと戻っていく。その勢いは凄まじく、仁は白上教授を置き去りにして部屋へと辿り着いてしまった。

「亜矢さん！ 雄司！ 愛衣！……ッ!?」

蹴破る勢いで部屋に入った仁の目に入ったのは、無残に割られた窓と荒らされた室内だった。ベッドは切り裂かれ、亜矢と2人の子供達の姿はない。

その光景に僅かな間呆然となっていた仁だが、すぐに気を取り直すと割られた窓に近付き身を乗り出して外を見た。

太陽に照らされた船の外壁には、何かが爪か何かを引っ掛けたような跡がついていた。その相手と亜矢達の姿は見当たらなかった。

やられた……仁は悔しさに拳を握り締める。敵の狙いは亜矢と子供達だったのだ。

「門守君、これは——!?」

遅れてやって来た白上教授も、部屋の惨状に絶句した。

「——亜矢さん達は、連れ去られたみたいです。敵は恐らく傘木社の残党、狙いは……亜矢さんと子供達ですね」

〈DOG + WHALE Evolution〉

教授に状況を説明しながら、仁は腰にデイナドライバーを装着しベクターカートリッジを装填する。傘木社が絡んでいるなら、敵にはファツジが間違いない筈。それから亜矢達を探す事も考え、先に変身しておいた方が良い。

「変身」

〈Congrats! Birth of a new life, CETUS.
Open the door〉

実に2年ぶりとなる、仮面ライダーデイナ・ケートスライフに変身した仁は、部屋に残った亜矢と子供達の匂いを覚えそれを頼りに2人が連れていかれた所を目指して部屋を出た。

だが部屋を出た時、デイナと白上教授は違和感に気付いた。途中から変に静かなのだ。この客船に乗客数を考えると、そんなに早く混乱が収まるとは思えない。

警戒しながら2人は亜矢達の匂いを追って船の中を進む。

そうして辿り着いたのは、最上階の屋外プールだった。

2人がそこに辿り着くと、そろそろとアントファアツジが姿を現す。2年前の戦いは終盤に出てくる雑魚は大体ヴェロキラプトルファアツジでアントファアツジは逆に珍しくなっていたが、あれは日本だけの事だったのかもしれない。海外支社には恐竜ベクターカートリッジは海外支社にはあまり出回っていなかったようだ。

とは言え油断はしない。自分達家族を狙う為だけに客船に襲撃を仕掛けてくるような連中だ。何か仕掛けてくるかもしれない。

〈BUFFALO + HUMAN Evolution〉

「ゲノムチェンジ」

〈Congrats! Birth of a new life, MINOTAU
R. Open the door〉

最も扱いやすいミノタウロスライフにゲノムチェンジし、立ち塞がるアントファアツジ達に突撃した。アントファアツジ達は迫るデイナに向けて一斉射撃をしてくるが、ミノタウロスライフのデイナにはその程度の銃撃通用しない。

銃撃を物ともせず迫るデイナは、攻撃の圏内に入った瞬間一気に攻勢に出た。

「ふ、は、やっ」

デイナが拳を振るう度に、アントファアツジが次々と吹き飛ばされる。中にはプールに落ちたり、柵を越えて下のデッキに落ちる奴もいた。

雄成との戦いを終えてから2年。その間全く戦う事もなくブランクを経ての戦闘だが、デイナの戦闘技術には微塵の翳りも見られなかった。

正拳突きがアントファアツジの胸板を穿ち、回し蹴りが薙ぎ払い、手刀が武器を奪った。アントファアツジ達が瞬く間に殲滅され、屋外プールのあるデッキに立つのはデイナと離れた所に居る白上教授だけとなった。

そこに、新たに姿を現す者たちが居た。数人の男女と、そいつらに連れられてきた亜矢と2人の子供達だ。

「ッ！ 亜矢さん！ 雄司、愛衣！」

「仁くん!？」

子供達が居るからとほぼ無抵抗で囚われた亜矢は、後ろ手に縛られて屈強な男に無理やり立たされている。子供達2人はその隣に居る男と女がそれぞれ1人ずつ抱いているが、先程から静かだ。眠っているのか眠らされているのかは分からないが、亜矢の様子から命に係わるような事にはなっていないだろう事は伺える。

すぐさま3人を助けたいが、彼女達はいま人質だ。迂闊な動きは逆に彼女達を危険に晒す。

何より、デイナの前に立ち塞がる男がそれを許さないだろう。

「待っていたぞ、門守 仁」

「あんた、誰？ 傘木社の関係者？」

「我々は傘木社アメリカ支社に所属していた。俺の名はジョン・タイラー」

「デイナの前に立ち塞がる男——ジョンは、片手にベクターカートリッジを取り出した。もう片方の手にはベクターリーダーが握られている。

「俺達の目的はただ一つ……雄成社長を亡き者にした仮面ライダーデイナ、お前に対する復讐だ」

「へえ……雄成さんの敵討ちって事？ 意外だね。まさかアメリカ支社にそういう事をしようとする人が居るなんて」

「お前は知らないかもしれないが、我々にとって傘木社は必要な居場所だった。世間に居場所のなくなった我々にとって、例え人道に反していても受け入れてくれる場所は大事な存在だった。それを貴様は奪った……断じて許さん」

そう言えば以前、メガネウラファツジに変身するソニック兄弟も傘木社以外に居場所がないようなことを言っていたと亜矢に聞いた。こいつらもその類なのだろう。自分に非はなくても世間から爪弾きにされ、傘木社のような場所の他に居場所がなくなつた。雄成がそういう連中を集めたのは、実験に都合がいいからと言うのもあるのだろう

が結果的に彼らにはそれが救いとなったのだろう。

例え一歩間違えれば命を落とすような、使い捨てとしての運命であろうと……………

「——悪いけど、あんたらが助けられたんだろうと雄成さんがやろうとした事は間違いだよ」

それに、例え彼らの側に正当性があるうと完全に無関係の子供達まで巻き込むのは許せない。

「返せ……亜矢さんと子供達を——！」

怒りを滲ませ威嚇するデイナだったが、ジョンも後ろの連中も動じない。分かっているのだ、亜矢達を人質に取っている限りデイナには何もできないと。

「家族を傷つけられたくなければ、分かっているだろう？ 変身を解除しろ」

「……………」

奥歯が軋むほど歯を食いしばりながら、デイナは変身を解除した。こいつらは本気でやりかねない。迂闊な事をすれば、亜矢か子供達が傷付けられかねない。

己む無くデイナは変身を解除し、デイナドライバーをデツキの端に放り投げた。これで仁は無防備だ。

仁が無言で両手を上げると、ジョンはニヤリと笑みを浮かべ仁の足をベクターリダーで撃ち抜いた。

「ッ!？」

「仁君!？」

足を撃ち抜かれ倒れた仁にジョンは近付くと、倒れた彼を踏みつけ更に無事な手足を一発ずつ撃つて動けなくした。

「うっ!?! あ、ぐっ?!」

「止めて、止めなさいよこの卑怯者!?! 復讐したいなら正々堂々やったらどうなの!!」

「居場所を奪われた我々の怒りはこんなものでは済まない。それに、他人事ではないぞ。門守 仁にとって大切な人物であるお前も、お前の子供達も復讐の対象だ」

ただ殺すだけでは腹の虫が収まらない。仁には彼らが感じた以上の絶望を味合わせなければ。その為には、彼自身を傷つけるだけでなく彼が大切になっている亜矢達もただでは済まさない。

「この子供達は純粋な新人類ですからねえ? 研究材料としてはちようどいい」

「お前はそれ以外にも使い道があるなあ。お前ほどいい女だったら、なあ?」

雄司の方を抱いている男がジョンに続いて告げ、更に亜矢を捕えている男が下卑た笑みを浮かべながら彼女に顔を近付け頬を舐めた。その不快感に亜矢が顔を顰め、仁は怒りに身を任せ手足に穴が開いているにもかかわらずジョンの足を押し退けようとした。が、ジョンも体を弄っているのか足に力を籠め仁を再び押さえつけた。

「ぐっ!？」

「お前への実験は一番最後だ。お前は家族が蹂躪される様をじっと見ている」

ジョンは仲間に指示を出して、亜矢と子供達をその場から連れ出す。下に向かうようなので、ここに乗り込むのに使った船にでも乗せるのだろう。

家族が連れていかれるのを、仁は何もできず見ているしかできない。

そして次は仁の番だ。ジョンが仁の腕を部下だろうアントファツジに縛らせ、後ろからベクターリーダーを突き付け歩かせようとする。

その時だ。頭上からヘリのローター音が聞こえてきた。

「……ヘリ?」

「何だ?」

仁とジョンが頭上を見上げると、そこにはヘリが一機船の上を飛んでいた。よく見るとそのヘリには、日本の警察のマークが描かれている。

「警察?……まさか!」

仁はそのヘリが何なのかに気付き、顔に喜色を浮かべる。

その期待に応えるように、開かれたヘリの扉から2人の見知った人物が飛び降りてきた。

「変身!」

〈Access, In focus〉

〈Create, Capture, Out of Control. Brake
the chain〉

ヘリから飛び降りた2人——宗吾と希美は、飛び降りながらスコープとヘテロに変身してデツキの上に着地。それぞれ武器を抜くとその銃口を仁を取り押さえているアン
トファアツジに向けた。

「貴様ら動くな！ シージャックの現行犯で全員逮捕する！」

言うが早いか、スコープは仁を取り押さえているアントファアツジをガンマライフルで
撃ち抜き倒すと彼を解放し、ジョンが仁を押さえようとするとそれよりも早くにヘテロ
が接近しジョンをタックルでプールに突き落とす。

「おっとー！」

「ぐっ!？」

プールに突き落とされたジョンを無視して、ヘテロは仁の手を縛っているバンドを切
断し彼を解放する。

「権藤さん、志村さん？ どうして?」

「あの連中は前からマークしててね。行方を追っていたのだが、そこに白上教授から
の連絡もあつてこうしてやってきたんだ」

「そう言う事。にしてもどうしたのよ？ アンタらしくもない」

「亜矢さんと、子供達が人質に取られたんだ。亜矢さん達を傷付けさせない為には、下手な事が出来なくて……」

ここで漸く2人は仁が一方的にボロボロにされている理由を知った。なるほど、今の仁にとつて亜矢と子供達は弱点だ。それを押さえられては、彼も満足に動くことはできないだろう。

「……なら、まずはアンタの嫁を助けないとね」

「そうだな。その為に、まずは……」

スコープの視線の先では、プールから上がるジョンと亜矢達を何処かへと連れて行つたらしき屈強な男と愛衣を捕まえていた女がやって来た。

「おいおい、S. B. C. T. が来るなんて聞いてないぞ？」

「別にいいじゃないさ。あいつら程度、この新型ベクターカートリッジを使えば一捻りさね」

2人はスコープとヘテロに対峙すると、それぞれベクターカートリッジを取り出し起動状態にした。

〈KONG〉

〈SNAKE〉

起動状態のベクターカートリッジを、2人はそのまま直挿してファッジに変異した。男はコングファッジ、女はスネークファッジだ。

現れたファッジの前に、スコープとヘテロが仁の前に立ち塞がる。

「門守君、君は傷を癒す事に専念するんだ」

「雑魚は私達に任せなさい」

言うが早いか、2人は一気に前に出てファッジとぶつかり合った。

スコープはコングファッジにガンマライフルのストックで殴り掛かる。パワー自慢のスコープの一撃を、しかしコングファッジは片手で受け止めた。流石ゴリラの能力を持つファッジだけあって、そのパワーはスコープにも引けを取らない。それどころか、押し返して筆り取るとデツキの端に向け放り投げた。

「チッ！ やるな」

「おおおおおっ！」

パワー対決に臨むスコープとコングファッジに対し、ヘテロとスネークファッジは変則的な戦いを繰り広げていた。

トリッキーな動きでヘテロを翻弄するスネークファッジに対し、ヘテロは体を捻りスネークファッジの動きに柔軟性で対抗した。

「つたく、くねくねと掴みづらい動きするわね」

「アンタの事は聞いてるよ。本社でモルモットやった挙句に裏切ったんだってね！」
「会社には私の居場所がなかったからね」

テイルバスターを振り回しスネークファツジを切り裂こうとするが、スネークファツジは柔軟性と瞬発力に優れているのか全く捉える事が出来ない。

そして一瞬の間隙についてヘテロを組み伏せると、首筋に噛み付き毒を注入した。

「うぐあっ?! っ、んのおっ!!」

毒は人間の肉体を破壊するタンパク質毒だが、驚異的回復力を持つヘテロには効果が薄い。体が破壊されるのと同じ速度で体が回復する。

が、回復に体力が回されている為、動くことが出来ない。スネークファツジの方も毒で彼女が殺せないと分かると、このまま絞め殺してしまおうと蛇の尾の様な左腕を彼女の首に巻き付け締め上げる。

それをコングファツジを振り払ったスコープが援護して引き剥がした。

「こいつ、離れろ!」

「うあっ!?!」

「おい志村、大丈夫か?」

「何とか、ッ! 権藤後ろ!!」

ヘテロを助けたスコープだが、その背後にはコングファツジが迫っていた。気付いた

ヘテロが警告したが少し遅かった。

「おらあつー！」

「ぐおつ?!」

「あ、っ?!」

スコープが殴り飛ばされると、それに巻き込まれヘテロも吹き飛ばされる。吹き飛ばされ倒れた2人を、仁と白上教授が助け起こした。

「2人とも、大丈夫？」

「いかな、一先ず退こう。一度退いて体勢を立て直すんだ」

「くそ、久々の出番だつてのに……」

「ゴメン、毒が足にきたつぽい。手を貸して」

変身を解除した希美を白上教授とスコープが左右から肩を貸し、仁はスコープが落としたガンマライフルで牽制しながら引き下がった。

その後をコングファッジとスネークファッジが追うのを、ジョンは鼻で笑いながら見ているのだった。

第3話：受け継がれる母は強し

プールデッキから逃げた仁達の後ろを、2体のファッジがしつこく追いかけてくる。途中までは希美を白上教授とスコープが支えて走り、仁がガンマライフルで牽制していたのだが次第に距離が詰まって来たので仁とスコープの役割を入れ替え、今は仁と白上教授が希美を支えていた。

「……うっふ。もういい、大丈夫」

途中、毒が効力を失ったのか希美がある程度回復したので自力で走り始める。が、状況はあまり好転したとは言えなかった。彼女は以前消耗しており、仁もまだ完全とは言えない。何より、後ろから追跡されている状態では下手に迎え撃とうとすれば逆に窮地に陥ってしまう。

状況を挽回する為には、体勢を立て直す為に一度落ち着く必要がある。

ここで4人はレストランに逃げ込んだ。別に狙った訳ではなく、逃げている間にレストランに入ってしまったと言うだけである。

そこで突然白上教授は希美を仁に押し付けた。

「門守君、皆。今すぐ適当なところに隠れるんだ」

「え？」

「連中は私が引き付ける！」

白上教授は一方的に告げると3人を厨房に続く扉の奥に押し込み、自分はそのままレストランの奥へと逃げて行つた。その直後、レストランに入つてきたファツジ達は逃げていく白上教授を仁達から遅れて走っているのかと思ひそのまま彼を追いかけて行つた。教授が4人の中で一番高齢だから勘違いしたらしい。

ファツジ達がレストランから出ていくまで、厨房に続く扉の奥で息を潜めていた仁達は外が静かになつたところで漸く息を吐いた。

「はあ……行つたか」

「くそ、大したことない連中だと思つてたんだがな……」

「人質とつてる分アドバンテージは向こうにあるわ。こんな言い方したくはないけど、荷物抱えてる方が苦勞するのは仕方ない事よ」

希美の言葉に仁と変身を解いた宗吾はムツとした顔で希美の事を見た。だが彼女の言いたいことは分かる。何を隠そう、仁が追い詰められたのが亜矢達を人質に取られたからなのだ。あれが無ければ、あの程度の連中仁1人でも何とかなつた。

それを思うと改めて亜矢達を先に狙つた連中の狡猾さと卑劣さに、仁も怒りを抱かずにはいられなかつた。

「ん？ おい志村何してる!？」

先程の顛末を仁が悔やんでいると、突然宗吾が声を荒げた。何事かと仁がそちらを見ると、希美が厨房の冷蔵庫を漁って中の食料を物色していた。

「見逃してよ。私アンタ達と違ってカロリー沢山必要なんだからさ。さっきの毒でカロリー大分消費しちゃって、これ以上お腹減ったら動けなくなっちゃうんだから」

希美はそう言いながら冷蔵庫から、ボイルされたロブスターを取り出し二つに割って殻毎身を食べ始めた。それを横目で見ながら、仁は宗吾に援軍は来るのかを訊ねた。

「そう言えば権藤さん？ 他のS. B. C. T. の人達はどうしたの？ 小早川さんとか」

「あいふらふあね——」

「口の中に物入れたまま喋るな」

「んく……ぶっ」

宗吾に先んじて仁の疑問に答えようとした希美だったが、口の中がロブスターで一杯だったので何を言っているのか分からない。即座にその事を宗吾に指摘されると、彼女は身だけを飲み込み口の中に残っていた殻をシンクに吐き捨てた。行儀の悪い行為に宗吾が渋い顔をするが、口の中が空になった希美は構わず言葉を再開した。

「ん、失礼。それでえっと、援軍だけど、少なくともS. B. C. T. は今手一杯よ」

「え、そうなの？」

「ああ。門守君は海都って知ってるか？」

「勿論。日本主導で太平洋上に造った海上都市でしょ？」

日本を発つ際、飛行機の窓から見たのを覚えていて。今は完全に街として機能して、多くの人が生活していると聞いたことがあった。

確か特徴としては、日本で唯一のカジノ街としての一面があり、海外からは日本のラスベガスと言われているのかなんとか。

カジノ以外にも海洋研究の為の研究施設も充実しており、仁も一度は訪れてみたいと思っていた。

「そう、その海都だ。今そこでな、ちよつと面倒が起こってるんだ」

「面倒？」

「特殊生物災害よ。小早川や他のS・B・C・Tは殆どそっちに回されて、こっちにまで人を送る余裕はないんだって」

つまり援軍は期待できないという事か。傘本社が崩壊しベクターカートリッジの技術が解放されてしまった影響で、様々な犯罪組織などがベクターカートリッジを使った犯罪に手を染めるようになってしまった。S・B・C・Tはその対処に引つ張りダコになつてしまい、人手が全く足りないと言う状況なのだ。

現在国連の下部組織となる事で人員の増加を画策しているそうだが、話が難航しているのか人員の増加すらかなかなか進んでいないらしい。

一応今回は多数の乗客が巻き込まれたという事で、海保などが乗客の救助の為に来てくれるそうだが……

「連中は俺達で何とかしないとイケないって事か……」

「どうする？ 人質になつてるのは門守の嫁家族だけじゃないわ。何も知らない乗客もどこかに集められてるのよ。その状態でどうやって連中を倒す？」

仁に対しては亜矢達が弱点となるが、宗吾にとっては他の乗客達が弱点となる。人質を取られている現状、迂闊な事をすれば他の乗客に危害が及ぶかもしれない。

だがそれは仁の口から否定された。

「いや……他の乗客はもう大丈夫かも」

「何故だ？」

「連中の目当ては俺と亜矢さん達。亜矢さん達を捕らえてる今、連中の目的はほぼ達成したも同然。それどころか、最低限の勝ちを押さえようと船から離れる事を考えてるか」

連中が最終的にやりたい事は、自分達から雄成を奪った仁に肉体的精神的苦痛を与える事。それを最も効率よく与える事が出来る彼の家族を捕えた以上、奴らは最低限の勝

利条件は満たしているのだ。

後は雲隠れして、仁に甚振った亜矢や子供達の姿を送ればいい。それだけで仁には耐えがたい苦痛を与えられる。

だとするなら多少手荒な事をしてもなんとかなるかもしれないが、同時に時間との勝負でもあった。

「権藤さん。上から客船に取り付く小型船とか見なかった？」

「……………あった、あったぞ。船の後部に小型の船が確かにあった」

「最初そつちが気になったけど、プールの傍でアンタが足蹴にされてるの見てそつちに目標変えたんだけどね」

だとすれば、目指すべきは後方か。急がなければ、亜矢と子供達を乗せて連中が逃げてしまう。そうなつてはお終いだ。

仁はレストランから慎重に出て、周囲に敵の姿がない事を確認した。白上教授は上手く囿としてここから離れてくれたらしい。無事だと良いが……………

「よし……………行こう」

「志村、何時までも食べてるんじゃない」

「ちよ、待つて」

息を潜めながらレストランから出て、船の後部へと向かう。連中の居場所に関して

は、仁が亜矢の匂いを迎れるので心配いらぬ。

問題は道中と、向かった先で連中がまた亜矢を人質に取った場合だ。

だが実を言うと、再び人質に取られることに關しては仁はあまり心配していなかった。

それと言うのも、2人の間に子供が生まれた時の一番に香苗が姿を現し孫に顔を綻ばせながら2人に釘を刺したのだ。

今後、この子達を狙つて不屈きな輩が出るかもしれない。その時に備えて最低限自衛の手段は用意しておけと。

香苗はそう言つて亜矢にいろいろと教えていたのだ。

なので恐らく、今頃は――

その頃、船の後部に連れていかれた亜矢は子供達と共に適当な船室に放り込まれていた。依然として両手は後ろ手に縛られて、他には赤ん坊が居るだけだから扉の前には

見張りすらいない。

そこに白上教授が放り込まれた。仁達が体勢を整える為の時間稼ぎとして囮となつた彼は、逃げ回りはしたが敢え無く捕まってしまったのだ。

捕まる際に多少暴行されたのか、口の端を切つた状態で部屋に放り込まれた白上教授に亜矢が声を掛ける。

「教授、大丈夫ですか!？」

「ぐ……あ、ああ、亜矢君か。大丈夫、見た目ほど酷くはないよ」

亜矢同様、白上教授も後ろ手に縛られていた。なので体を起き上がらせるのに苦労したが、横たわつたままではいられないので何とか体を起き上がらせた。

体を起き上がらせた白上教授は改めて室内を見渡す。見た感じ普通の客室の中に、縛られた亜矢と白上教授。ベッドの上には双子が寝かされている。流星の連中も生後1年も経っていない赤子をそこまで乱暴に扱いはしないらしい。

まあその理由は、乱暴に扱つて死なれでもしたら仁に対する復讐として不十分だからだろうが。

しかしこのままではいずれ死ぬより酷い事になる可能性がある。そうならない為には、仁達が助けてくれるのを待つだけでなく自分でこの状況を打開しなくては。

そして亜矢は、香苗から色々を入れ知恵をされていた。

「ん、しょ……」

徐に亜矢は正座の体勢になると、体をできるだけ反らせて後ろ手に縛られた手を足に持つて行つた。見えない状態ながら指先だけで靴の踵に触れると踵の一部がズレ、そこから小さいナイフが一本出てきた。亜矢はそのナイフの柄を指先で掴んで引つ張り出すと、両手を縛っているバンドを切断し自由になつた。

「ふう〜……」

「あ、亜矢君!？」

「しー、教授さん。今外には見張りは居ませんけど、念の為声押さえてください」

真矢は白上教授の手を縛っているバンドをナイフで切断し、自由にするとナイフを靴の中に戻しベッドに寝かされている子供達の方へ向かつた。真矢が覗き込むと、子供達はどちらも彼女に無邪気な笑顔を向ける。

こんな状況だというのに無邪気な笑みを向けているのは、母親を前にして安心している証拠だろう。その我が子の様に、安堵も相まって真矢も釣られて笑みを浮かべてしまふ。

「良かった……大丈夫そうね」

「ところで真矢君? さっきのナイフは?」

「あれですか? 義母さんに教わつたんです」

雄司と愛衣が生まれて少しして、アメリカに居る仁と亜矢の元を香苗が訪れた。名目
は出産祝いと生まれた孫の顔が見たいというものであったが、それと同じくらい重要な
事を伝えるに來たのだ。

曰く、今後亜矢は特に傘木社の残党に狙われる可能性が高いから四六時中、仁と一緒
に居られないならもしもと言う時の事を考え色々備えておけというものであった。

靴に仕込んだナイフもその一つ。靴に仕込める程度のナイフであれば空港などでの
金属探知でも靴に使われている金具で誤魔化せるので、いざ変身もできず武器もない状
況で拘束された時に逃れるのに使える。

使う時が来なければいいと思いつつ、こうして役に立ってしまったのだから香苗には
感謝しかない。

「なるほど、香苗さんにか」

「そう言う事です。さ、逃げるなら今の内です。今なら部屋の周りに誰も居ませんから」
感覚を研ぎ澄ませた亜矢は、部屋の外に見張りが居ないことを察知すると今の内に逃
げようと我が子達を抱き上げる。

2人の我が子は自分を抱き上げようとする母親に笑顔で手を伸ばしてくるので、亜矢
は子供達に微笑み返して安心させながら抱き上げた。

「教授。すみませんが、雄司をお願いしてもいいですか？」

「勿論だとも」

亜矢は白上教授に雄司を預け、自分は愛衣を抱えて部屋を出る。雄司は母親から離されたにも拘らず、まるで不安を感じた様子もなく寧ろ白上教授の事を興味深そうに見つめ大人しくしている。これが愛衣だったら亜矢から離されたら不安に泣き出すだろう。薄くドアを開けて、念の為安全を視認すると亜矢は慎重に外に出て仁と合流すべくその場を離れて行った。

ジョン達傘木社の残党が亜矢に逃げられたことを知ったのは、その数分後であった。

「ジョン！ あの女が逃げました！」

「……流石にあの門守 仁のパートナーか。一筋縄ではいかん」

「だから手足の一本は折っておいた方が良いと言ったんです。情報によればあの家族は全員が新人類、死なない程度なら問題ない」

「そうだな……ニツク、直ぐに連れ戻してくれ。最悪一人くらいは死んでも構わん」

ニツクと呼ばれた男は、ジョンの言葉に頷くと拳銃を取り出しその場を離れた。

その後ろ姿を見送ったジョンは、そろそろ自分の出番かとベクターリーダーと“二個のベクターカートリッジを取り出しそれを眺めるのだった。

亜矢を目指して進む仁達は、船内が俄かに騒がしくなってきた事に気付いた。

「あれ？ 何か騒がしくない？」

「見つかったか？」

「いや……多分亜矢さんが逃げ出したんだ」

騒動の原因に仁はいち早く気付いた。それと言うのも、先程から感じる亜矢の匂いが強くなってきた。恐らく亜矢の方も仁が近付いていることに気付いている筈だ。

逸る気持ちを抑えて、仁が船内を進んでいくと目前に突然数人のアントファツジが姿を現した。亜矢より先にこっちが見つかってしまった事に仁が舌打ちをすると、宗吾と希美が彼を押し退けて前に出た。

「こいつらは俺が引き付ける」

〈Access〉

「門守、アンタはさつきと嫁の所に行きなさい」

〈HORSESHOE × CROCODILE × TURTLE Mixing

Genetic information〉

「……ゴメン、ありがとう」

変身してアントフアツジ達を蹴散らすスコープ達を残し、仁は匂いを頼りに亜矢の元へ向かう。

アントフアツジの相手を引き受けたスコープとヘテロの前に、再びコングファツジとスネークファツジが現れたのはそんなときの事だった。

「騒がしいと思ったら……」

「またお前たちかい。全く、しぶとい連中だよ」

「また、はこつちのセリフだ。貴様ら全員、逮捕してやる！」

「さっきのお返しよ。お前、私を満たしなさい」

後方で戦鬨の音が激しくなったことに、仁は敵の幹部が出てきたことを察した。亜矢が居なくなつたことに、連中も本格的に動き出したらしい。

これ以上時間を掛けると連中もなりふり構わなくなるかもしれない。そうなれば亜

矢と子供達の身が危なくなる。

仁が心に焦りを滲ませながら船内を進んでいくと、不意に広いところに出た。見渡すとスロットやルーレットの台がある。カジノエリアだ。

カジノに入ったと同時に、亜矢と子供達、ついでに教授の匂いが強くなった。

匂いのする方を見ると、そこには仁が入って来たのとほぼ同時にカジノに辿り着いた亜矢達の姿があった。

仁の姿を見て、亜矢の顔に笑みが浮かぶ。

「仁くん!」

「亜矢さん……………ッ!」

一見無傷に見える亜矢と子供達の姿に仁も笑みを浮かべそうになるが、彼女達から死角になるところに首謀者の1人が銃を構えていることに気付き表情を強張らせた。銃口は亜矢達の方に向いている。恐らく多少傷付けるか、最悪1人死んでもいいくらいに考えているのかもしれない。

それを見た瞬間、仁は頭で考えるよりも先に動いていた。男が向ける銃口と亜矢達の間に分身の体を滑り込ませたのだ。

「え……………ッ!?! 仁君駄目ッ!」

仁の動きに、漸く亜矢も自分達が狙われていることに気付いた。が、彼女がその存在

に気付いた時には男は手にした銃の引き金を引く寸前であつた。

せめて家族は守ろうと両手を広げて銃口の前に無防備な体を晒す仁。
その仁の耳に、金属が弾かれる小さく甲高い音が響いた。

第4話：Good luck

「——ん？ あれ？」

銃弾が自身の体を穿つ痛みに備えていた仁は、一向に痛みが来ないどころか銃声もないことにゆつくり目を開け首を傾げた。亜矢達を見ても何が起こったのか分かっていない顔をしているところを見るに、自分が撃たれたことに気付いていない訳ではないようだ。事実ちよつと確認してみたが、撃たれた様子はない。

「え？ 何？ 不発？」

銃声すらしなかった事に不発を疑いニツクの事を見れば、彼も何が起こったのか分かっていない様子で信じられないといった顔で仁の事を見ている。

「な、何？ 一体何故……ッ!? これはっ!？」

ニツクは自分が今撃とうとした拳銃を凝視して目を見開く。何だと仁が目を見開いてニツクが持つ拳銃を見ると、不発に終わった理由が何なのか分かった。

撃鉄が異物を挟んで弾が出なかったのだ。さらによくよく見てみると、その挟んでい
るものはこのカジノで使われているコインである事が分かった。撃鉄が金属のコインを挟んだから、仁は撃たれずに済んだのだ。

ここで問題になるのは、何故撃鉄がコインを挟んだかという事。仁は勿論、亜矢も白上教授もそんな事はやっていないし出来ない。2人の子供など言わずもがなだ。

では一体誰が？

「ジャックポット……」

その時、カジノに女性の声が響いた。全員の視線が一斉に声のした方に向く。

するとそこには、先程仁と白上教授がカジノで見た女性ディーラーが居た。先程と同じ格好で優雅に歩いてくるその姿は、カジノではあるがこの場では誰よりも浮いていた。

「あんた……」

「仁くん、知り合いですか？」

「知り合いつてほどじゃないけど……」

「何ですか貴女は！ 一体何者ですか!!」

〈ARCHER FISH〉

困惑する仁達に対し、ニックは得体の知れぬディーラーに警戒心を向けていた。断言はできないが、このディーラーが発砲の邪魔をしたのだろう事は雰囲気で察する事が出来た。つまり、ニックにとつての敵という事だ。

使い物にならない拳銃を捨て、ベクターカートリッジを直挿してアーチャーフィッ

シユファアツジに変異するニツクだったがディーラーは全く動じない。それどころかニツクの事を無視して仁の方に目を向けた。

「大丈夫？ 仮面ライダーデйна？」

「え？ あ、うん……」

ディーラーが自分の事を見てデйнаと言ってきた事に一瞬面食らったが、仁は自分がデйнаである事に関してそこまで驚くことはなかった。それに何より、自分達の事を助けてくれたのは紛れもない事実だ。ならば、味方かどうかは分からないが少なくとも敵ではないと判断してもいいだろう。

「今の、君？」

「そうね。間に合うか賭けだったけど、大当たりしてくれたみたい」

「ありがとう、助かったよ。でもここは危ないから、早いところ逃げた方が良いよ」

助けてくれたことには素直に感謝するが、ここから先は逆に邪魔になる。申し訳ないが、彼女にはここで避難してもらいたい。

そう思つて告げたのだが、彼女は逃げるどころかクスクスと笑つて手に大きな羅針盤の様なものを取り出した。

「心配してくれてありがとう。でも逃げるのはもうちよつと後かな？ 行き先はまだ変

わってないし」

「え？」

ディーラーの言葉の意味が分からず首を傾げる仁だったが、彼女は構わずその羅針盤——中央に羅針盤があり右にレバー、左にコインか何かを入れるスロットがある——を腰に当てた。すると羅針盤からベルトが伸び、彼女の腰に巻き付いて装着された。

それは見た目こそ全く違うが、仁達仮面ライダーが装着するベルトを彷彿とさせた。彼女が腰にベルトを装着したのを見て、仁達だけでなくニツクも驚き目を見開く。

「はっ?」

「何っ!?!」

「Place your bets please」

女性は流暢に英語で告げると、一枚のコインを取り出した。縁が金色の青いコインだ。

仁はそのコインとよく似た物を見た覚えがあつた。

「あれは……」

仁が注目する前で、女性は右手の親指で弾いたコインを左手で掴みそのままスロットに入れた。

〈Bet your life〉

「させませんよー」

ベルトから音声が鳴り、女性はレバーを下ろす。詳細は不明だが、この後何が起ころかは容易に想像できるその行動に、アーチャーフィツシュファツジはそれを妨害しようと殴り掛かる。

が、女性がレバーを下ろすとその瞬間彼女の前に大きなルーレットが現れファツジを弾き返した。

「うーっ?!」

ファツジを弾き飛ばしながらルーレットは周り、ルーレットの回転と逆回りでボールがルーレット上を転がる。

女性はそのルーレットを指さしながら、仁達にとつても馴染みのあるフレーズを口にした。

「変身ー!」

〈Fever!〉

変身の言葉と共にボールはルーレット上の「0」のポケットに入った。するとルーレットは回転しながら向きを変え女性の頭上に移動し、そのまま回転しながら下に下りる。

回転するルーレットに潰されるかと思われた女性だが、そうはならず女性の体はルー

レットを通過していく。ルーレットが通過する最中、女性の体は大海原の様な青い水の流れに包まれその姿を仮面の戦士に変えた。

それは一言で言えば人間の足を持った人魚であった。青い仮面に黄色い複眼。変身しても尚大きさを主張する胸元は申し訳程度の面積の銀色の鎧に覆われ、腰から下は白い前開きのスカートで覆われている。

「デイナやルーナは勿論、スコープなんかとも全く違うがそれを見た者は誰もがこの名を口にするだろう。」

「仮面、ライダー?」

「イエス! 私には仮面ライダー……仮面ライダーテテユス」

女性が変身した仮面ライダーは自らをテテユスと名乗った。テテユスは変身を終えると、右手の人差し指を一本立てて口元に持っていき指先で口元に触れた。

「チップー一枚で、大逆転よ!」

「ふざけるな!!」

決め台詞の様なものを口にしたテテユスに、アーチャーフィッシュファッジは拳を握って殴り掛かる。突き出されて拳をテテユスは平手で弾き、流れるような動きでファッジの背後に回り背中を蹴り飛ばす。

「くっ!」

掴み所のない動きで攻撃を受け流し反撃してくるテテユスに、アーチャーフィッシュフアツジは翻弄される。何をしても攻撃を無力化され倍以上の反撃を喰らうのだ。

このまま普通に攻撃しても埒が明かないと察したアーチャーフィッシュフアツジは、戦い方を変え特殊能力の水流ジェットカッターで迎え撃った。見たところテテユスは飛び道具の類を持っていない。遠距離戦は不利であった。

「ふんっ！」

「つとー！くつ！」

案の定遠距離から攻撃を受けては打つ手がないのか、テテユスは防戦一方になる。これは不味いと仁も変身しようとしたが、アーチャーフィッシュフアツジはしつちやかめつちやかに水流ジェットカッターを放つので余波から亜矢達を守る為にその余裕がない。

仁が四苦八苦している間にテテユスは状況を打開する行動に移っていた。

「ん……チップの残りは6枚。うん、1枚ベット」

〈Bet〉

テテユスは右腰のケースから白いチップを1枚取り出すと、それをベルトのスロットに入れレバーを下ろした。

〈Good luck〉

再びテテユスの前に現れたルーレット。回るルーレットとボールを見ながら、テテユスはルーレットを指さした。

「黒の35」

テテユスが宣言すると、ボールが彼女の宣言通りのポケットに入った。

〈B I N G O ! A b i l i t y a c t i v a t i o n ! D e e p d i v i n
g. 〉

音声が鳴るとルーレットがベルトに吸い込まれていく。テテユスはルーレットが吸い込まれると、アーチャーフィッシュフアツジに飛び掛かり体を捻りながら蹴りを叩き込む。

アーチャーフィッシュフアツジはそれを防ぎ、力任せに振り払い体制の崩れたテテユスの足を掴み壁に向け放り投げた。

放り投げられたテテユスは完全に無防備だ。叩き付けられ動きが止まったところを水流ジェットカッターで切り裂いてやる。

アーチャーフィッシュフアツジはそれに備えて口中に水を溜めるが、それは無駄に終わってしまう。

壁に叩き付けられそうになったテテユスは、叩き付けられるどころか波紋と飛沫を作り壁の中に文字通り潜り込んでしまったのだ。

「はあっ!？」

「消えた!？」

「いや、壁に潜った?」

アーチャーフィッシュシュフアツジのみならず仁と亜矢も驚き注目する前で、テテユスは思いもよらぬところから登場した。

何とアーチャーフィッシュシュフアツジの足元から水飛沫を上げながら飛び出し、がら空きとなつているフアツジの背に蹴りを叩き込んだのだ。

「うぐおっ!？ 何、後ろ!？」

「フフツ!」

「ええい、舐めるな!!」

蹴りを喰らい体勢を崩されたアーチャーフィッシュシュフアツジは、背後にいるテテユスに再び水中ジェットカッターをお見舞いする。しかしその一撃はバク転しながら避けられたテテユスがそのまま今度は床に飛沫を上げて潜り込んだことで回避された。

しかしアーチャーフィッシュシュフアツジは諦めない。今度は逃がさないと、そのままテテユスが潜り込んだ床を水流ジェットカッターで徹底的に切り裂き炙り出そうとした。

だがアーチャーフィッシュシュフアツジが切り裂いたところには誰も居ない。

テテユスの姿が見えないことに狼狽していると、彼女はまたしてもアーチャーフィッシュ

シユファアツジの足元から背後に飛び出しその背を蹴り飛ばした。

「それ！」

「うわあつ!？」

「……………物体の中に潜り込んで自由に移動できるのか？」

テテユスの動きはそうとしか思えない。壁や床など、様々なものに水飛沫を上げながら飛び込み、そして相手の死角から飛び出し攻撃を仕掛ける。その動きにアーチャーフィツシユファアツジは完全に翻弄されていた。

「く、くそ……………」

「……が、賭け時かな？」

度重なるテテユスの攻撃に、ボロボロとなるアーチャーフィツシユファアツジ。ここが決め時と思ったのか、テテユスは右腰のケースを取り外し直接ベルトのスロット部分に取り付けレバーを下ろした。

〈A l l i n ! 〉

ベルトから音声が鳴ると、テテユスの前にルーレットが現れると同時に足元にルーレットテーブルが描かれる。アーチャーフィツシユファアツジは足元の変化に戸惑いつつ、ここは不味いと離れようと動く。

だがテテユスはそれを許さなかった。

「黒の20、オールイン!」

テテユスが宣言すると、頭上からエネルギーのチップが5枚振ってきてアーチャーフィツシュフアツジはその中に閉じ込められる。身動きが取れないアーチャーフィツシュフアツジが脱出しようと四苦八苦している間に、ルーレットは止まりボールがポケットに入った。

ボールが入ったのは、彼女が宣言した通り黒の20。

〈Fever!〉

「くそ!? こんな、こんなあ!」

「ハッ!」

何をしてしても出る事が出来ない束縛に、絶望の声を上げるアーチャーフィツシュフアツジに向け、テテユスはトドメの一撃を叩き込んだ。

「はあああああつ!!」

「ヒツ!? うわあああああああつ!」

テテユスの放った必殺技『ジャックポットフィニッシュ』がアーチャーフィツシュフアツジに炸裂し、蹴り飛ばされたアーチャーフィツシュフアツジは爆発四散。後には衝撃で碎けたベクターカートリッジと、気を失って倒れるニックだけが残されていた。

「……隠蔽装置を抜いてたのか」

燃え上がらないのを見て何気なく呟くと、仁は改めてテテユスの事を見た。

テテユスの方はと言うと、倒れたニツクに向け恭しく頭を下げていた。

「またの挑戦、お待ちしてます」

彼女なりの勝利宣言を告げると、テテユスは仁の方を見る。仁は、改めて自分達を助けてくれたテテユスに感謝する為数歩彼女に近付いた。

「ありがと。お陰で助かったよ」

「良いの良いの。こっちも好きでやったことだし——」

その時どこからか携帯の着信音が鳴る。仁達が辺りを見渡していると、テテユスは携帯を取り出しそれに出た。彼女の物だったらしい。

「はいはい、なぐに海羽ちゃん？」

『瑠璃姉え大丈夫？ 今ネットで瑠璃姉えがバイトで乗った客船がシージャックされたって聞いたんだけど？』

「大丈夫大丈夫、何も心配いらないわよ。ただ臨時のバイト代はパーになっちゃったけどね」

テテユスはその後も携帯の向こうの相手と二言三言言葉を交わすと、携帯を切り仕舞った。

「そう言う訳だから、そろそろ失礼するわ。後は頑張つてね、仮面ライダーデイナー」

仁に別れを告げ、テテユスは窓に向け駆けていく。空いた窓から飛び出した彼女の後を追って仁が窓に近付き下を見ると、テテユスは海に飛び込みそのまま海中に消えて行ってしまった。

「仮面ライダーテテユス……か」

自分の知らない、新たな仮面ライダー。仁は何となくだが、彼女には再び会えるような気配を感じつつ亜矢達の所に戻り改めてこの場を離れようとした。

「さ、今の内に行こう。子供達を安全な場所に……」

移動しようとするのを見渡した瞬間、あちこちからアントファアツジが現れ仁達を包囲した。仁と亜矢が身構える前で、アントファアツジの方位が一部割れるとそこからジョンが姿を現した。

手にベクターリーダーを持っていてる事に仁は警戒を強くした。

「人質は逃げ出すわ、訳分らん奴が邪魔してくるわ……どうしてこうも上手くないかないもんか」

「悪事なんてそんなもんだよ。特にやる事がデカければでかいほどね」

仁は亜矢の分のデイナドライブを渡しつつ、腰にデイナドライブを装着した。今更ベクターリーダーで変身した奴に負ける気はない。

対するジョンは、仁の考えが予想出来たのか鼻を鳴らした。

「お前の考えていることは分かる。今更ベクターリーダーで、なんて考えてるんだろ？」
「ん？」

「だが残念だったな。こいつは俺が改良した奴で、お前が知るベクターリーダーとは別物だ。その力を今見せてやる」

ジョンは起動させたベクターカートリッジをベクターリーダーに装填した。

〈T—R E X , l e a d i n g〉

恐竜ベクターカートリッジを使うようだが、それだけなら以前のベクターカートリッジでも多分出来た。だがあれほど自身があるという事は、それ以外に何かあるという事。仁はベクターカートリッジを取り出しながら警戒を強くする。

するとジョンは仁も少し予想外の行動に出た。装填したベクターカートリッジを抜き取り、別のベクターカートリッジを装填したのだ。

〈B R A C H I O S A U R , l e a d i n g〉

「ツ！ ベクターリーダーで二つのベクターカートリッジを？」

「そう言う事だ……進生！」

〈D o u b l e T r a n s c r i p t i o n〉

ジョンが引き金を引き変身したのは、白と黒で彩られた戦士。ティラノサウルスの頭部を象った仮面に装甲の分厚い四肢。見ただけで力強さを感じさせる『モノクロファン

グ』がそこに居た。

まさかベクターリーダーで遺伝子二つを使用するとは思っていなかったので少し面食らった仁だが、しかし特に危機感を感じはしなかった。あの程度、雄成が変身した力ラミテイにも及ばない。

この場で唯一の危機感を感じるとすれば、それは白上教授と子供達が巻き込まれないかくらいだ。

〈HUMAN + HUMAN Beyond evolution〉

「悪いけど、その程度で負けるほど俺は弱くないよ」

「どうかな?」

「すぐに分かるよ。……変身!」

Break down the wall of evolution. React
h the NEW GENERATION. Open the door

仁は仮面ライダーデイナ・ニュージェネレーションフォームに変身した。嘗て優勢と互角に戦った最強のデイナ。復讐心に駆られ、付け焼刃の力で挑もうとしている奴に負けるわけがない。

デイナがモノクロファングと戦い始めた時、同様に亜矢も自分の戦いを始めていた。そう、愛する家族を守る為の戦いをだ。

「教授、この子達を頼みます」

「ああ、任せてくれ」

亜矢が雄司だけでなく愛衣も白上教授に預ける。亜矢から引き離された愛衣が見知らぬ人間である白上教授に抱かれた事でぐずり出すが、雄司が手を伸ばし触れたことで落ち着きを取り戻す。まだ赤ん坊ながら既に双子の面倒が見れる雄司に将来の頼もしさを感じ笑みを浮かべつつ、自分も変身した。

〈CAT Unite〉

「変身！」

〈Open the door〉

ルーナに変身すると、セントラルドグマから放たれたスーパーコイルがアントファツジ達を薙ぎ倒す。お陰で包囲に穴が開いた。

その隙に白上教授が2人の子供を連れてその場から離れる。アントファツジ達が体勢を立て直す頃には、白上教授と子供達は安全なところに退避していた。

これで心置きなく戦える。

デイナと同じく、ルーナも愛する家族を守る為に戦いに身を投じるのだった。

デイナとルーナが家族を守る為の戦いを始めた頃、スコープとヘテロは挑んできたファツジを相手にしていた。

「おらあつー！」

「なんのー！」

コングファツジが自慢の膂力でスコープに殴り掛かるが、スコープは左腕の盾でそれを受け止める。先程の戦いでは間が悪かったりで痛い目に遭わされたが、正面から戦えばスコープが負ける道理はない。

拳の一撃をスコープは盾で受け止めるだけでなく受け流し、無防備になった胴体に逆に拳を突き刺す。ただでさえパワー自慢のスコープの一撃に加え、コングファツジのパワータイプであるが故の重厚な体重と攻撃の勢いが合わさり大ダメージとなった。

「うぐおあつ?!」

スコープに殴り飛ばされ壁に叩き付けられたコングファツジは、痛みに喘ぎながら立ち上がり再び拳を握って殴り掛かって来た。

それを今度は盾ではなく掌で受け止めた。正面からの力比べは、直ぐにスコープに軍

配が上がった

「な、にいつ!？」

「……他人に文句があるならなあ——」

コングファツジの拳をスコープは押し返し、更には捻る事で体勢を無理やり崩させた。

それにはスコープの怒りも混じっていた。

分かりたくはないが、彼らの憤りもスコープには分からないでもない。唯一の居場所を突然奪われたのだ。その戸惑いとその後待ち受ける苦労は想像するしかないが、新しい居場所を見つけるのには相当な苦労が待ち受けているだろう事は想像できる。

だがしかし、それでもスコープは彼らの主張を認める事は出来なかった。認める訳にはいかないのだ。

「——他人に迷惑を掛けないやり方でやれ!!」

振り下ろされたスコープの拳がコングファツジを地に沈める。ギリギリ意識を保ったコングファツジが立ち上がるが、その瞬間には既にスコープはガンマライフルを至近距離で構えていた。

「ッ! ま、待て——」

これは不味いと制止の声を上げるが、スコープは聞き耳持たず引き金を引いた。

「がああああああつ!!」

至近距離から放たれた銃弾がコングファツジの表皮を抉る。忽ちボロボロになっていくコングファツジを、スコープは追い打ちをかけるようにボルテックスブレードで滅多切りにしてさらに追い詰める。

「ま、待つて!!? ちよ、こうさツ?!」

慌てて降参しようとするが、スコープは彼に逃げる事を許さなかった。この手の輩は降参したと思わせて不意を打つことも厭わない。残酷かもしれないが、戦いは非情なのだ。

徹底的に攻撃され続けた事で立つだけで精一杯の状態のコングファツジに対し、スコープはトドメの一撃を放つ。

〈Recognition〉

「たあああああつ!!」

スコープのエンドクラツシュは、立つだけで精一杯なコングファツジに炸裂し再び壁に叩き付ける。ただでさえ銃撃と斬撃でズタボロだったコングファツジは、それで限界に達して倒れながら爆散した。

爆炎が晴れると、そこにはコングファツジに変異していた男が倒れており、まだ意識があるのか砕けたバクターカートリッジに手を伸ばしていた。

スコープはその男を取り押さえると、持っていた手錠を掛けて逮捕するのだった。

一方、ヘテロの方もスネークファッジに対し先程の戦いの雪辱を晴らしていた。

「はああつ!」

「うあああつ?!」

ヘテロの振るうテイルバスターが変則的な動きをするスネークファッジを捉える。先程はその動きに翻弄された挙句一瞬の隙を突かれて噛み付かれ毒を注入されたが、よく見ればその動きを見切る事は可能だった。

一度見切れてしまえば、恐れる必要のある相手ではない。特に仮面ライダーとして戦い、この2年間手が足りないS・B・C・T.にくつついてファッジによる犯罪鎮圧に駆り出され続けていた彼女にとっては。

「くそ、何でだい!?! さつきと動きが違うじゃないのさ!?!」

「……今なら昔、門守が言つてた事の意味が分かるわ。単純なスペックに頼り過ぎなのよ」

スネークファッジの動きは確かに蛇の様にしなやかで不規則だが、それはぱつと見だ。よく見れば動きには一定のパターンに近いものがあるし、何より速さが足りない。

捉えるのはそう難しい事ではなく、動きを先読みして攻撃する事も可能だった。

ヘテロから距離を取ろうと一度後方に飛んだスネークファツジだったがそれは悪手だ。空中ではスネークファツジの持つ蛇の能力が何一つ活かせない。寧ろ的だ。

着地する寸前のスネークファツジを、ヘテロはテイルバスターで狙い炸裂弾をお見舞いした。

「ぎゃあっ?!」

元々然して防御力の高くないスネークファツジは、今の一撃で劇は一步手前まで追い詰められた。

そこにヘテロは容赦なく畳み掛ける。

「こいつで終わりよ」

〈HORSESHOE × TURTLE × CROCODILE Mixing Burst〉

放たれたインクリュード・シユート。迫る連続蹴りを、スネークファツジは避ける事も出来ず喰らってしまう。

「うぐああああああああっ?!」

数発蹴られただけで爆発を起こし、変異が解け意識を失ったスネークファツジだった女。衝撃で意識を失った彼女の傍に、砕けたベクターカートリッジが落ちてくる。

スネークファツジ撃破を確認し、ヘテロは肩を解すように回した。
「……ちそうさまでした、と」

そしてデイナとモノクロファングの戦い。

この戦いは終始デイナが優勢であった。

「よっ、ほっ」

デイナが振るう拳はモノクロファツジに大ダメージとなり、防御を一撃で崩し後ろに下からせる。

「くっ!? だがしかし!」

劣勢であるにもかかわらず、モノクロファングは諦めずデイナに挑みかかる。ベクターリーダーを抜き、銃口をデイナに向けて連射した。何発もの銃弾がデイナに迫る。

しかしデイナは、迫る銃弾に対し回避どころか防御もしなかった。全身にワックスを分泌し、それによって銃弾を滑らせ銃撃によるダメージを無効化した。

銃弾が全く通用しない事に戦き後退るモノクロフアング。相手が精神的に怯んで攻勢が弱まったのを見ると、そのワックスを利用して床の上を滑走。素早く近づきベクターリーダーを弾き飛ばすとそのままの勢いで腹に拳を叩き込んだ。

「うーっはあつ?!」

殴り飛ばされたモノクロフアングがスロット台に叩き付けられると、潰されたスロット台からコインが滝の様に吐き出された。普段であれば大当たりという事で客も見た者も大騒ぎする光景だろうが、今この時では空しいだけだ。

「っ、これが……これが、デイナ……」

スロット台から体を起き上がらせながら、モノクロフアングは改めて自分が誰と戦っているのかを認識し後悔した。

この2年間、デイナが戦ったという話は聞かなかつた。そしてデイナに変身する仁は1年しか戦いを経験していない。1年だけ戦った者が、2年のブランクを経て満足に戦えるとは思っていないなかつたのだ。

しかしそれは大きな間違いだった。仮面ライダーは健在だ。

そもそもニューージェネレーションフォームとなつたデイナ、そしてそれに変身する仁は進化した人類である。全ての能力が人間を超える彼は、種を残す能力の一環として全盛期の状態を出来る限り保とうとするように体が出来ているのだ。だから寿命が長く

若い姿を保てるし、こうした生きる為に必要な経験は頭も体もなかなか忘れない。多少の鈍りを感じても、それは直ぐに補正されて2年前と遜色ない能力を発揮する事が可能だった。

モノクロファングが挑んだのはそういう相手なのだ。決して安易な気持ちで計画した訳ではないが、さりとしてジョン程度の男が挑んではいけない相手だったのである。

だが今更後悔しても遅い。後悔とは『後に悔いる』と書く。もう、引き返す事は出来ないのだから。

「これで終わりだよ」

〈ATP Burst〉

「くそ、くそおおおつ!!」

〈Full blast〉

デイナのアポトシスファイニッシュに、モノクロファングもジェネリック・ブレイカーで対抗する。が、そもそも地力が違うので僅かな拮抗の後にジェネリック・ブレイカーが打ち破られ蹴り飛ばされた。

「があああああつ?!」

「……レポートは、纏まったな」

蹴り飛ばされ空中で爆発したモノクロファングは、元の姿に戻り床に叩き付けられ

る。その衝撃で意識を失ったジョンの手から、バクターリーダーが零れ落ちた。

それと時を同じくして、ルーナの方も敵を倒し終えていた。

「ハッ！ ヤッ！ セイツ！」

銃剣、銃撃、そして蹴り。素早く多彩な攻撃を繰り出せるルーナを前に、アントファアツジでは相手にならない。次々と打倒され、彼女の奥に居る白上教授と彼に守られている2人の赤ん坊に近付くことすらできなかつた。

〈ATP Burst〉

「ハアアアアッ!!」

周囲に集まっていたアントファアツジ達をノックアウトクラッシュの回し蹴りで一掃したルーナは、それでも仕損じた奴がいなかを警戒して構えを解かず周囲を見渡す。

離れた所からその様子を見ていた白上教授に抱っこされた子供達は、そんな母の活躍に興奮した様子だった。

「お〜！ お〜！」

「きやつきやつ！」

幼いながらに母が自分達を守って悪党を薙ぎ倒したことが分かるのか、声援を送るように騒ぐ2人の赤ん坊。愛する我が子の声に、ルーナも思わず肩から力が抜け仮面の奥で笑みを浮かべてしまった。

【無邪気ね〜】

「無事の証拠でしょ」

【でも将来が心配だわ】

「大丈夫よ。私達と仁くんの子だもの。きっと、大丈夫」

ルーナが変身を解くと、同じく変身を解いた仁がジョンを担いでやって来た。仁は亜矢がアントファアツジ達を倒し終えたのを見ると、ジョンをその場に置き亜矢と子供達と無事を確かめ合つた。

こうして日本に向かう豪華客船内での戦いは収束を迎える。首謀者は全員逮捕され、人質となつた乗員・乗客は全員救助されるのだつた。

客船での事件後、無事日本に到着した仁達。彼らが今回日本行き客船に乗つたのは、亜矢の出産祝いに客船での船旅をプレゼントされたからと言うだけではなかつた。日本について数日後、仁達家族はある一組のカップルの結婚式に出席していたのだ。

「先輩、ご結婚おめでとうございます」

「おめでとうございます!」

「おう」

「ありがとう。門守君、亜矢さん」

結婚したのは拓郎と峰。本格的交際を始めてから約2年、漸く2人も結婚に踏み切ったのだ。

そこには仁と亜矢が一足先に結婚した事に加え、更には子供まで作ってしまった事が関わっているのは間違いなかった。

ウエディングドレス姿の峰が仁と亜矢に抱かれた2人の子供に笑顔で手を近付けて振ると、2人も興味深そうに峰の事を見て手を伸ばしてくる。赤ん坊特有の可愛さに、峰は早くも魅了されていた。

「はあく、可愛い子供達ですねぇ。私達もいずれこんな子供達が出来るのかな?」 拓郎くくん?」

「ん!! んまあ、そうだな……」

早くも子供を強請られ、顔を赤くする拓郎。学生時代は意識していなかったが、彼は存外初心な方なのかもしれない。尤もそれは峰も同様か。自分で言って恥ずかしくなったのか、遅れて峰も顔を赤くするくらいだ。

「……ところで、見た事もない仮面ライダーが出たって?」

「ん、そうですね。テテユスって名乗ってました。デйнаドライバーとは全然違うシステムで変身するみたいです」

「結局あの後、あの人の事は何も分からなかったんですよね」

事件後宗吾にあの女ディーラーについて何か分かる事はないかと訊ねてみたが、臨時で雇われたディーラーであるということ以外は何も分からなかった。再会する事も叶わず、彼女がどういった人物なのかを知る事すら出来ない。

だが仁はあまり残念そうにしてはいなかった。普段であれば興味の対象を逃がしてしまっただけだから、もっと悔いるものかと思っていた亜矢は意外に思わずにはいられない。

「仁くん、随分落ち着いてますけど良かったんですか?」

「ん? うん、まあ大丈夫だと思っようよ」

そうやって仁が取り出したのは一枚のコイン。以前香苗が、お土産にと持ってきてくれた緑のコインだった。

「あ、それ……」

「……勘だけど、また会える気がするんだ。いや、きっと会える」

そうやって仁は手の中のコインを光に翳した。

その先に未来を見据えるように。

太平洋上・日本国所有商業特区『海都』

夜の闇に支配された洋上で、誘蛾灯の様に強い光を放ち続ける日本のラスベガスと呼ばれる都市、海都。

その明るい街の中で、まるで魚が人型になったような無数の怪人が人々に襲い掛かっている。魚の怪人はその爪と牙で、逃げ遅れた人に次々と襲い掛かっていた。

その怪人達に、自分から近付いていく者が居る。大海原の様な青い髪をポニーテールにした、同色の瞳を持つ女性だ。

女性は手に羅針盤の様なものを持っている。その羅針盤が差す場所に、怪人達がいるた。

怪人達は女性に気付くと、殺意に目をぎらつかせながらじりじりとにじり寄る。しかし女性は全く臆することなく、その羅針盤をそのまま腰に装着して一枚のコインを取り出し指で弾いた。

「Place your bets please。」

咄くと同時に左手でコインをキャッチし、ベルトに装填した。

〈Bet your life〉

「変身！」

〈Fever!〉

女性——「大梅おおめ 瑠璃るり」の変身した仮面ライダーテテユスが、襲い掛かる怪人達を次々と薙ぎ倒していく。

それは仁達も知らない仮面ライダーの物語。

だがいずれ彼らは再び出会う。仮面ライダーの宿命として……………